津南町文化財調査報告　第 59 輯

堂　平　遺　跡

DOUDAIRA　SITE

本文編

2011

新 潟 県 中 魚 沼 郡

津 南 町 教 育 委 員 会

第 43 号住居跡出土土器　小川忠博撮影

火焔型土器と王冠型土器　小川忠博撮影

図版 2

第 45 号住居跡出土土器　　小川忠博撮影

大木８ａ式土器と大木８ｂ式土器　　小川忠博撮影

第 13 号住居跡 -P1

第 13 号住居跡 -P1 出土土器

小川忠博撮影

図版 4

環状列石

L11-P27

第 11 号住居跡

第 11 号住居跡の炉跡

図版 6

第 30 号住居跡の石組炉

第 48 号住居跡の複式炉

第 59 号住居跡（火災住居跡）

第 23 号住居跡の複式炉

図版 8

第 15 号住居跡の複式炉

第 32 号住居跡の埋設土器

序　　文

「日本列島改造論」という大きな国策論を唱え実行したのが田中角栄ですが、その指示において全国各地で大規模開発が展開され始めたのが 1970 年代です。今から凡そ 40 年前ということになります。

その先駆的開発が東京都郊外の多摩ニュータウンであったと聞きます。当時は、各自治体に文化財を専門的に保護活用する専門職員は居らず、開発に対して各大学の考古学研究室が夏休み返上で対応していたということです。津南町においても「苗場パイロット事業」という耕地拡大開墾事業に伴い「沖ノ原遺跡」が慶応大学考古学研究室の援助を頂き昭和 1971・72 年に亘り調査が実施されました。今でいう「確認調査」です。沖ノ原遺跡の範囲や性格を把握し、その結果、全国で始めての「縄文時代中期の環状集落」の全体像を認識いたしました。その成果はセンセーショナルに報道され、多くの考古学ファンが全国から見学に来たことを覚えています。また、図書室で手にした小学館発行の『古代史発掘』の表紙カバーが沖ノ原遺跡の発掘風景であったことに驚いたことを鮮明に記憶しています。

その後、「苗場パイロット事業」は事業見直しを経て、平成 3 年に新たに「苗場再編事業」として大規模な圃場整備事業を展開しました。町では新潟県教育庁文化行政課の指導を受け、平成 6 年に文化財保護と活用に専念いただく文化財専門員を配置し、行政的に埋蔵文化財保護を対応すべき整備を図り、多くの遺跡発掘調査をこれまでに展開してきました。

その基本に据えられた埋蔵文化財保護の指針は 1965 年に日本住宅公団との覚書『日本住宅公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書』であるといわれています。ここに発掘調査を教育委員会に委託すること、委託する場合の委託費の範囲（発掘作業費・報告書作成費・雑費）などが細かく記載されています。この覚書以降、新幹線・高速道路・国道バイパス・圃場整備事業・ゴルフ場建設などの大規模開発が進められ、その経費は 1973 年の 42 億から 25 年後の 1998 年にピークを迎え 1321 億を数えました。それに伴い 1965 年に全国で 6 人であった専門職員は 1975 年に約 10 倍の 590 人となり、2000 年には 7111 人を数え、行政内部に文化財保護体制が整備されました。

現在は、「掘る埋蔵文化財行政」から「活用する埋蔵文化財行政」へ転換が行われ、地域作りの先導役としての役割が求められてきています。個性ある歴史文化の認識から地域ブランドの確立が生まれている昨今です。

ここに上程される『堂平遺跡発掘報告書』は、小規模な文化財保護体制の中で、新たなる発掘調査や普及啓発活動の合間で進めたことにより 14 年もの歳月を掛けて刊行するものであります。その地道な作業途上で堂平遺跡出土の火焔型土器と王冠型土器が国重要文化財に指定されたことは、関係者の自信を再確認する機会を得、さらなる原動力になった瞬間でありました。

この記録報告書では、堂平遺跡で展開した歴史事象を地域史に還元し、その学問的意義を総括させていただきました。その内容が、今後の地域郷土学習の一助となれば幸いです。最後に発掘調査にご協力いただきました北陸農政局苗場事業所ならびに堂平集落、ご尽力を賜った十日町地域シルバー人材センター津南事務所の皆様に衷心から感謝申し上げます。

平成 23 年 3 月

津南町教育委員会
教育長職務代理者
教育次長
本　山　佐　利

例　　言

1．本報告書は、新潟県中魚沼郡津南町に所在する堂平遺跡周辺に国営農地再編整備事業が計画されたことから事前に実施した遺跡調査の報告書である。

2．本書で報告する遺跡の所在地は、以下の通りである。

堂平遺跡　新潟県中魚沼郡津南町大字中深見丁 157 番地外

3．遺跡確認調査は、新潟県教育庁文化行政課から指導を頂き、津南町教育委員会が北陸農政局苗場開拓建設事業所および津南町役場農政課の協力を得て実施した。

4．遺跡発掘調査期間は、平成８年５月７日～平成８年９月６日である。

5．遺跡発掘調査の組織は、以下の通りである。

＜遺跡発掘調査（平成８年度）＞

調査主体者	津南町教育委員会　教育長　村山　繁
調 査 指 導	小林達雄（國學院大學文学部教授）
調査担当者	佐藤雅一（津南町教育委員会社会教育課主任文化財専門員）
主任調査員	長澤展生（國學院大學文学部史学科卒）
調　査　員	星　宏之（國學院大學文学部史学科卒）　古谷雅彦（國學院大學文学部史学科卒）
	成田健太郎（國學院大學文学部史学科卒）　堅木宜弘（國學院大學文学部史学科卒）
	宮田千里（國學院大學文学部史学科卒）
調査補助員	山田和子、小林明美、田中まちこ、村山和子、小林亜希
調査作業員	十日町地域シルバー人材センター津南事務所・中里事務所
安全・衛生管理	小野寺守堅（旧塩沢重機）
事　務　局	津南町教育委員会社会教育課
	課長　大平健太郎　　参事　八重沢良成
	主任　藤ノ木サチ　　非常勤職員　森口好美

6．遺物の取り上げ、および遺構の航空測量は株式会社こうそくに依頼した。

7．遺構計測写真は、計測写真工房　首藤浩通に依頼した。

8．自然科学分析と土器底部圧痕分析は、それぞれ以下の方々に依頼した。

年代測定・炭素・窒素同位体分析・・・・國木田大・吉田邦夫（東京大学）

動物遺体・・・・・・・・・・・・・・・・植月　学（山梨県立博物館）

樹種・種実同定・・・・・・・・・・・・株式会社　パリノ・サーヴェイ

焼骨・・・・・・・・・・・・・・・・・・株式会社　パリノ・サーヴェイ

土器底部圧痕・・・・・・・・・・・・・松永篤知（名古屋大学大学院）

9．整理作業は、平成９年～ 16 年度にかけて長澤展生と古谷雅彦が調査所見をまとめる等の基礎的整理を行った。平成 17 年度～平成 21 年度にかけて、佐藤雅一と協議のもと、遺構・土器・土製品の整理作業を阿部昭典が、石器・石製品を倉石広太が担当した。また（株）みくに考古学研究所（旧塩沢重機）発掘調査支援部の阿部陽子・南雲カネ・小林明美・高橋浩美・山田和子（後３名小林明美・高橋浩美・

山田和子は平成 19 年度より現津南町教育委員会臨時職員)、津南町教育委員会臨時職員の島田美恵・中沢君江・尾池みどりの協力を得た。

10. 遺物の実測は、土器・土製品は阿部陽子・小林明美・高橋浩美・山田和子が中心に実測・拓本を行い、トレースを川又亜希子が担当した、復元完形個体の一部は、アイシン精機、吾妻考古学研究所、株式会社アースネット、株式会社アルカ、株式会社こうそく、シン技術コンサル、大成エンジニアリング、リメックスに依頼した。石器・石製品の実測図は株式会社アルカに依頼し、一部の礫石器は倉石広太・中島将太が作図した。

11. 遺物写真は、破片資料は阿部昭典が、完形個体は山際哲章が撮影を行い、土器の集合写真と展開写真は小川忠博に依頼した。石器の写真は、山際哲章が撮影した。

12. 本報告書の作図・執筆分担は、以下の通りである。

〔本文編〕

第Ⅰ章・第Ⅲ章第１節・第３節、第Ⅵ章第１節・第７節 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 佐藤雅一

第Ⅱ章・第Ⅲ章第２節・第４節・第５節、第Ⅳ章第１節・第３節・第４節１・２、第Ⅴ章、第Ⅵ章２・４～６節 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 阿部昭典

第Ⅳ章第２節・第４節３・４ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 倉石広太

第Ⅵ章第３節 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 佐藤信之

〔図版編〕

第１図～第 423 図（遺構図版・出土土器・土製品）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 阿部昭典

第 424 図～第 460 図（出土石器・石製品） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 倉石広太

13. 報告書の編集作業はアルケーリサーチに依頼し、デジタルデータでの編集を行った。

14. 試掘調査・発掘調査に関する記録および出土遺物は、津南町教育委員会が保管している。

15. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の機関・個人からご協力頂いた。

（敬称略・五十音順、機関名は順不同）

安斎正人・安孫子昭二・石井　寛・石坂圭介・石原正敏・榎本剛治・大野淳也・長田友也・角張淳一・笠井洋祐・金子拓男・櫛原功一・児玉大成・小林達雄・小林正史・品田高志・菅沼　亘・菅原哲文・鈴木徳雄・関根慎二・大工原豊・高木公輔・高田和徳・高橋　毅・建石　徹・田中耕作・谷口康浩・谷藤保彦・塚本師也・辻本崇夫・寺内隆夫・寺崎裕助・富樫秀之・成田滋彦・平吹　靖・藤波啓容・古澤妥史・増子正三・山口逸弘・山本暉久・綿田弘実・渡邊裕之

北陸農政局苗場開拓建設事務所、株式会社みくに考古学研究所、十日町地域シルバー人材センター津南町事務所、株式会社こうそく、有限会社アルケーリサーチ、オフィスＲ＆Ｐ

凡　　例

１．遺構の名称及び略号は以下のものがある。

竪穴住居跡：J，住　　炉跡：RO，炉　　長方形柱穴列：長　　配石遺構：H

埋設土器：MP，埋　　フラスコ状土坑：FP　　土坑：P

2．遺構図の縮尺は原則として以下の通りである。

竪穴住居跡・長方形柱穴列・・・・・・１：６０　　炉跡・・・・・　１：３０

埋設土器・フラスコ状土坑・土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１：４０

3．遺物実測図・拓影図の縮尺は原則として以下の通りである。

土器・・・・１：３（破片）、１：４（完形）、１：５、１：６　　土製品・・・・１：２

石器・・・・２：３、１：２、１：３、１：４、１：５　　石製品・・・・２：３、１：２、１：３

4．遺物番号は土器・土製品・石器・石製品でそれぞれ遺跡内での通し番号を付している。

5．遺物の注記番号は、原則として以下のような配列で記している。

例１：遺跡名（DD）―大グリッド（―小グリッド）―遺物番号―層位

例２：遺跡名（DD）―遺構番号―遺物番号

6．実測図中のスクリーントーンは、以下のものを表現している。

遺構図：①　・・・・焼土　　②　・・・・攪乱

遺物図：土　器：①　・・・漆

土製品：①　・・・破損面　　②　・・・分割塊の表面

石　器：①　・・・磨痕・研磨痕・使用痕光沢

7．実測図中の表記については特記するものとして、以下のものがある。

覆土・・・・・覆土出土、および遺構内のドットデータ無しの遺物。

8．遺構図内の観察表表記については以下のものがある。

土説説明：①しまり・粘性　　◎・・・あり　○・・・ややあり　×・・・なし

②地山・炭化物・焼土粒　☆・・・多量　◎・・・ふつう　○・・・少量　△・・・微量

9．図版は、本文編と図版編にあり、それぞれに第１図から番号を付している。文章中では、図版編の図は「図版第○図」と表記して区別している。

目　　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1
第Ⅱ章　堂平遺跡の周辺環境
　第1節　地理的環境 …… 2
　第2節　歴史的環境 …… 4
第Ⅲ章　発掘調査の概要
　第1節　遺跡の概要 …… 6
　第2節　確認調査の成果 …… 6
　第3節　発掘調査の方法と経過 …… 11
　第4節　基本土層 …… 12
　第5節　検出遺構と出土遺物の概要 …… 13
第Ⅳ章　縄文時代の検出遺構と出土遺物
　第1節　土器の分類 …… 14
　第2節　石器の分類 …… 33
　第3節　検出遺構
　　1．堂平遺跡の集落構造 …… 44
　　2．竪穴住居跡 …… 46
　　3．長方形柱穴列 …… 77
　　4．環状列石 …… 79
　　5．埋設土器 …… 82
　　6．土坑（フラスコ状土坑・土坑） …… 86
　　7．遺物集中区（廃棄場） …… 121
　第4節　出土遺物
　　1．土　器 …… 126
　　2．土製品 …… 237
　　3．石　器 …… 247
　　4．石製品 …… 282
第Ⅴ章　その他の時代の遺物 …… 292
註釈 …… 293
第Ⅵ章　まとめ
　第1節　馬高系土器変遷の素描 …… 301
　第2節　堂平遺跡遺構出土の沖ノ原式土器の編年的検討 …… 336
　第3節　津南町における周辺石材環境と石器組成の変遷 …… 348
　第4節　炉形態の変遷および複式炉構築法と使用痕跡 …… 367
　第5節　堂平遺跡の環状列石の構築方法と時期 …… 375
　第6節　縄文時代中期中葉から後葉の葬制について　–主に甕被葬と焼人骨から– …… 384
　第7節　総　括 …… 389
付　編
　1．堂平遺跡出土資料の ^{14}C 年代測定と炭素・窒素同位体分析 …… 393
　2．堂平遺跡から出土した動物遺体 …… 402
　3．堂平遺跡から出土した炭化材・植物遺体の同定 …… 404
　4．L11-P27 出土の焼骨の分析 …… 410
　5．堂平遺跡出土縄文土器底部の「敷物圧痕」について …… 415

挿図目次

第 1 図　遺跡位置図 …… 2
第 2 図　津南町の河岸段丘 …… 3
第 3 図　段丘俯瞰図および遺跡位置 …… 3
第 4 図　周辺の縄文時代中期前葉～後期中葉の遺跡‥ 5
第 5 図　試掘トレンチ位置図 …… 7
第 6 図　試掘調査出土遺物（1） …… 8
第 7 図　試掘調査出土遺物（2） …… 9
第 8 図　試掘調査出土遺物（3） …… 10
第 9 図　調査区とグリッド配置図…… 11
第 10 図　基本土層図 …… 12
第 11 図　土器分類図（1） …… 15
第 12 図　土器分類図（2） …… 16
第 13 図　土器分類図（3） …… 18
第 14 図　土器分類図（4） …… 20
第 15 図　土器分類図（5） …… 21
第 16 図　土器分類図（6） …… 22
第 17 図　土器分類図（7） …… 24
第 18 図　土器分類図（8） …… 25
第 19 図　土器分類図（9） …… 27
第 20 図　土器分類図（10）…… 29
第 21 図　石器 …… 33
第 22 図　計測部位 …… 34
第 23 図　石器の分類と部位の名称（1） …… 35
第 24 図　石器の分類と部位の名称（2） …… 37
第 25 図　石材分類表 …… 39
第 26 図　周辺地域の石材分布図 …… 41
第 27 図　石製品 …… 42
第 28 図　石製品の分類と部位の名称 …… 43
第 29 図　堂平遺跡の時期別集落変遷図 …… 45
第 30 図　住居跡と炉跡の規模グラフ…… 46
第 31 図　住居跡形態分類図 …… 47
第 32 図　住居跡の計測部位および凡例 …… 48
第 33 図　炉跡形態分類図 …… 48
第 34 図　長方形柱穴列分類図 …… 77
第 35 図　長方形柱穴列の計測部位 …… 77
第 36 図　環状列石の土地造成想定図および
　　列石模式図 …… 79
第 37 図　環状列石内の土坑出土遺物 …… 80
第 38 図　環状列石内の遺物分布図 …… 81
第 39 図　埋設土器の形態分類図 …… 82
第 40 図　フラスコ状土坑分布図…… 87
第 41 図　フラスコ状土坑の底径グラフおよび
　　断面形態模式図 …… 89
第 42 図　土坑形態模式図 …… 103
第 43 図　土坑の長幅比と土坑主軸方向グラフ…… 103
第 44 図　墓坑と推定される土坑分布図…… 104
第 45 図　土器出土状況微細図 …… 121
第 46 図　遺物集中区の土器出土分布図 …… 122
第 47 図　遺物集中区の石器出土分布図 …… 123
第 48 図　遺跡内時期別土器分布図（1） …… 124
第 49 図　遺跡内時期別土器分布図（2） …… 125
第 50 図　堂平遺跡出土の土器器種・器形分類図（1）‥ 127
第 51 図　堂平遺跡出土の土器器種・器形分類図（2）‥ 128
第 52 図　堂平遺跡出土の土器器種・器形分類図（3）‥ 130
第 53 図　土器の計測部位と容量計測方法 …… 131
第 54 図　容量と大きさグラフ（系統と器種） …… 131
第 55 図　道尻手遺跡の土偶分類図 …… 238
第 56 図　中期土偶の製作手法模式図 …… 239
第 57 図　計測部位 …… 240
第 58 図　遺存状態模式図 …… 240
第 59 図　堂平遺跡の三角形土版分類図 …… 241
第 60 図　道尻手遺跡の三角形土版分類図 …… 241
第 61 図　ミニチュア土器分類図…… 242
第 62 図　計測部位 …… 243
第 63 図　耳飾の大きさグラフ…… 243
第 64 図　計測部位 …… 244
第 65 図　漆付着土器片 …… 245
第 66 図　焼成破裂土器片 …… 245
第 67 図　焼成粘土塊 …… 246
第 68 図　石鏃（1）…… 247
第 69 図　石鏃（2）…… 248
第 70 図　石鏃（3）…… 249
第 71 図　石鏃（4）…… 250
第 72 図　石槍（1）…… 251
第 73 図　石槍（2）…… 252
第 74 図　石錐分類図 …… 253
第 75 図　石錐（1）…… 254
第 76 図　石錐（2）…… 255
第 77 図　ピエス・エスキーユ（1）…… 256
第 78 図　ピエス・エスキーユ（2）…… 257
第 79 図　石匙（1）…… 258
第 80 図　石匙（2）…… 259
第 81 図　三脚石器 …… 260
第 82 図　板状石器 …… 261
第 83 図　打製石斧（1）…… 263
第 84 図　打製石斧（2）…… 264
第 85 図　打製石斧（3）…… 265
第 86 図　不定形石器分類図（Ⅰ類）…… 266
第 87 図　不定形石器分類図（Ⅱ・Ⅲ類）…… 267
第 88 図　不定形石器の刃部形態 …… 267
第 89 図　不定形石器 …… 268
第 90 図　磨製石斧分類図 …… 269
第 91 図　磨製石斧（1）…… 270
第 92 図　磨製石斧（2）…… 271
第 93 図　磨製石斧（3）…… 272
第 94 図　磨石類（1）…… 273
第 95 図　磨石類（2）…… 274
第 96 図　磨石類（3）…… 275
第 97 図　石錘 …… 276
第 98 図　砥石（1）…… 277
第 99 図　砥石（2）…… 278
第 100 図　石皿（1）…… 279
第 101 図　石皿（2）…… 280
第 102 図　石棒類 …… 282
第 103 図　垂飾 …… 282

第 104 図　軽石製石製品 …… 283
第 105 図　線刻礫 …… 283
第 106 図　火炎土器の編年細別模式図 …… 303
第 107 図　岩野原遺跡の火焔型・王冠型土器の変遷…… 304
第 108 図　廣野耕造の馬高式土器編年試案 …… 306
第 109 図　004T-P4 出土資料 …… 307
第 110 図　原遺跡 004T-P4 出土資料較正年代値 …… 307
第 111 図　半隆起線断面模式図 …… 308
第 112 図　火焔型土器の鶏頭冠状突起・胴部区画文
　　変遷模式図 …… 309
第 113 図　痕跡器官 …… 310
第 114 図　モデルチェンジした土器…… 310
第 115 図　火炎土器から三十稲場式までの文様の系譜‥ 311
第 116 図　堂平遺跡出土の火焔系土器 …… 312
第 117 図　火焔類型土器の変遷 …… 313
第 118 図　福島県の類例 …… 313
第 119 図　福島県の大木８ａ式・８ｂ式段階の土器様相 314
第 120 図　新潟県内で確認される頸部橋状把手
　　連結区画隆帯 …… 315
第 121 図　トンボ眼鏡状突起と胴部横位区画…… 315
第 122 図　２種の逆U字状文 …… 316
第 123 図　胴部下位施文域の縦位パネル …… 316
第 124 図　施文手法の変化 …… 316
第 125 図　西会津地方石生前遺跡出土土器 …… 317
第 126 図　袋状突起の変化モデル …… 317
第 127 図　袋状突起とW字状文様 …… 317
第 128 図　馬高遺跡出土の王冠類型土器 …… 318
第 129 図　笹山遺跡出土の火焔類型・王冠類型土器…… 318
第 130 図　道尻手遺跡出土の火焔類型・王冠類型土器　318
第 131 図　清水上遺跡出土の王冠類型土器 …… 318
第 132 図　原遺跡出土の火焔類型土器 …… 318
第 133 図　横位胴部区画を持たない一群 …… 319
第 134 図　道尻手遺跡出土の王冠類型土器 …… 322
第 135 図　玉抱き三叉文と剣先文の変化 …… 323
第 136 図　Ｈ２- ３区遺物集中区 …… 325
第 137 図　馬高系土器などの変遷 …… 327
第 138 図　大木８ｂ式期　中相～新相段階の集成…… 329
第 139 図　岩野原遺跡最下層土器群とその類例…… 330
第 140 図　蕨手文モチーフ …… 331
第 141 図　野首遺跡出土土器 …… 331
第 142 図　馬高式土器構成概念図 …… 332
第 143 図　堂平遺跡遺構出土土器集成図（１）…… 337
第 144 図　堂平遺跡遺構出土土器集成図（２）…… 339
第 145 図　堂平遺跡遺構出土土器集成図（３）…… 341
第 146 図　堂平遺跡遺構出土土器集成図（４）…… 342
第 147 図　堂平遺跡遺構出土土器集成図（５）…… 345
第 148 図　遺跡周辺図および周辺石材環境 …… 348
第 149 図　遺跡継続時期グラフ …… 348
第 150 図　調査地点位置図（１）…… 351
第 151 図　調査位置図（２）…… 353
第 152 図　現地調査（１）…… 354
第 153 図　現地調査（２）…… 355
第 154 図　現地調査（３）…… 356
第 155 図　十日町市清津清峰遺跡出土外皮を有する
　　頁岩製剥片 …… 356
第 156 図　津南町における主な遺跡の石器組成…… 358
第 157 図　堂平遺跡と道尻手遺跡の石器組成グラフ…… 359
第 158 図　堂平遺跡出土の珪質頁岩製石器 …… 361
第 159 図　道尻手遺跡出土の珪質頁岩製石器 …… 361
第 160 図　堂平遺跡時期別石器の様相 …… 363
第 161 図　堂平遺跡の炉形態変遷図 …… 368
第 162 図　複式炉の被熱範囲 …… 372
第 163 図　関東甲信越の主要環状列石分布図 …… 375
第 164 図　新潟県内の環状列石 …… 377
第 165 図　信濃川上流域の中期末葉から後期初頭に見られる
　　北関東・北信地域の要素 …… 379
第 166 図　その他の配石遺構 …… 382
第 167 図　堂平遺跡の埋葬遺構と周辺地域の類例…… 385

表目次

第 1 表　試掘調査出土遺物観察表（1）…… 6
第 2 表　試掘調査出土遺物観察表（2）…… 10
第 3 表　各調査区調査工程表 …… 12
第 4 表　検出遺構と出土遺物数 …… 13
第 5 表　土器分類対比表 …… 31
第 6 表　石器石材組成表 …… 41
第 7 表　住居跡一覧 …… 49
第 8 表　炉跡一覧 …… 49
第 9 表　長方形柱穴列一覧 …… 77
第 10 表　埋設土器一覧 …… 82
第 11 表　フラスコ状土坑一覧 …… 88
第 12 表　土坑一覧表 …… 105
第 13 表　土器器種・器形の時期別変遷表 …… 130
第 14 表　出土土器観察表 …… 153
第 15 表　出土土器観察表 …… 154
第 16 表　出土土器観察表 …… 155
第 17 表　出土土器観察表 …… 156
第 18 表　出土土器観察表 …… 157
第 19 表　出土土器観察表 …… 158
第 20 表　出土土器観察表 …… 159
第 21 表　出土土器観察表 …… 160
第 22 表　出土土器観察表 …… 161
第 23 表　出土土器観察表 …… 162
第 24 表　出土土器観察表 …… 163
第 25 表　出土土器観察表 …… 164
第 26 表　出土土器観察表 …… 165
第 27 表　出土土器観察表 …… 166
第 28 表　出土土器観察表 …… 167
第 29 表　出土土器観察表 …… 168
第 30 表　出土土器観察表 …… 169
第 31 表　出土土器観察表 …… 170
第 32 表　出土土器観察表 …… 171
第 33 表　出土土器観察表 …… 172
第 34 表　出土土器観察表 …… 173
第 35 表　出土土器観察表 …… 174
第 36 表　出土土器観察表 …… 175

第 37 表　出土土器観察表 …… 176
第 38 表　出土土器観察表 …… 177
第 39 表　出土土器観察表 …… 178
第 40 表　出土土器観察表 …… 179
第 41 表　出土土器観察表 …… 180
第 42 表　出土土器観察表 …… 181
第 43 表　出土土器観察表 …… 182
第 44 表　出土土器観察表 …… 183
第 45 表　出土土器観察表 …… 184
第 46 表　出土土器観察表 …… 185
第 47 表　出土土器観察表 …… 186
第 48 表　出土土器観察表 …… 187
第 49 表　出土土器観察表 …… 188
第 50 表　出土土器観察表 …… 189
第 51 表　出土土器観察表 …… 190
第 52 表　出土土器観察表 …… 191
第 53 表　出土土器観察表 …… 192
第 54 表　出土土器観察表 …… 193
第 55 表　出土土器観察表 …… 194
第 56 表　出土土器観察表 …… 195
第 57 表　出土土器観察表 …… 196
第 58 表　出土土器観察表 …… 197
第 59 表　出土土器観察表 …… 198
第 60 表　出土土器観察表 …… 199
第 61 表　出土土器観察表 …… 200
第 62 表　出土土器観察表 …… 201
第 63 表　出土土器観察表 …… 202
第 64 表　出土土器観察表 …… 203
第 65 表　出土土器観察表 …… 204
第 66 表　出土土器観察表 …… 205
第 67 表　出土土器観察表 …… 206
第 68 表　出土土器観察表 …… 207
第 69 表　出土土器観察表 …… 208
第 70 表　出土土器観察表 …… 209
第 71 表　出土土器観察表 …… 210
第 72 表　出土土器観察表 …… 211
第 73 表　出土土器観察表 …… 212
第 74 表　出土土器観察表 …… 213
第 75 表　出土土器観察表 …… 214
第 76 表　出土土器観察表 …… 215
第 77 表　出土土器観察表 …… 216
第 78 表　出土土器観察表 …… 217
第 79 表　出土土器観察表 …… 218
第 80 表　出土土器観察表 …… 219
第 81 表　出土土器観察表 …… 220
第 82 表　出土土器観察表 …… 221
第 83 表　出土土器観察表 …… 222
第 84 表　出土土器観察表 …… 223
第 85 表　出土土器観察表 …… 224
第 86 表　出土土器観察表 …… 225
第 87 表　出土土器観察表 …… 226
第 88 表　出土土器観察表 …… 227
第 89 表　出土土器観察表 …… 228
第 90 表　出土土器観察表 …… 229
第 91 表　出土土器観察表 …… 230
第 92 表　出土土器観察表 …… 231
第 93 表　出土土器観察表 …… 232
第 94 表　出土土器観察表 …… 233
第 95 表　出土土器観察表 …… 234
第 96 表　出土土器観察表 …… 235
第 97 表　出土土器観察表 …… 236
第 98 表　出土土偶観察表 …… 237
第 99 表　三角形土版観察表 …… 240
第 100 表　ミニチュア土器観察表 …… 242
第 101 表　耳飾観察表 …… 243
第 102 表　不明な土製品観察表 …… 244
第 103 表　土製円盤観察表 …… 244
第 104 表　漆付着土器片・焼成破裂土器片・
焼成粘土塊など …… 246
第 105 表　出土石器観察表 …… 284
第 106 表　出土石器観察表 …… 285
第 107 表　出土石器観察表 …… 286
第 108 表　出土石器観察表 …… 287
第 109 表　出土石器観察表 …… 288
第 110 表　出土石器観察表 …… 289
第 111 表　出土石器観察表 …… 290
第 112 表　出土石製品観察表 …… 291
第 113 表　古墳時代以降出土遺物観察表 …… 292
第 114 表　馬高系土器の変遷要素 …… 330
第 115 表　複式炉の炉石数と推定重量一覧 …… 369

第Ⅰ章　調査に至る経緯

甲武信岳に源を発する千曲川は、旅情豊かな小諸の谷を下り、善光寺平で犀川と合流し、水嵩を増しながら流れを大きく北に向け、飯山盆地から市河谷の地峡を抜け、新潟県に入ると信濃川と改名する。その信濃川の入り口が津南町である。この信濃川は、蛇行しながら津南段丘を侵食し、十日町盆地を貫流し、穀倉地帯の蒲原平野を潤して日本海に注ぐ日本一の大河である。

信濃川が形成した津南河岸段丘は、地理の教科書で取り上げられる典型的な階段状の地形であり、その歴史は古く約30万年前まで遡るものであり、その景観は圧巻である。この河岸段丘の特徴は、平坦面が階段状に形成されるものであり、津南段丘は9段の平坦な段丘面が確認される。

本来、傾斜地面積が多い中山間地域の属する津南町であるが、この段丘面形成を背景に傾斜地面積の占有率が低い特異な土地柄である。この平坦面が多い特性を生かし、昭和47年以降、国営による開墾農地造成や水田整備事業が継続的に北陸農政局によって進められてきている。

周知されていた堂平遺跡ではあるが、その詳細な遺跡範囲や堆積土層、そして遺跡形成時期を把握する目的で平成7年秋に確認調査を入れることにより、その詳細な遺跡情報を得ることができた。その情報を基に発掘調査計画が立案され、津南町教育委員会が主体となる記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。平成8年3月21日付け､教社第1042号により｢埋蔵文化財調査の通知について(北陸農政局苗場開拓建設事業所長：8苗開事第124号）を新潟県教育委員会教育長宛に進達した。その後、平成8年5月7日付け、教社第102号により「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を文化庁長官に提出した。

発掘調査体制は、津南町教育委員会（教育長　村山繁）が主体となり、調査担当者に佐藤雅一（津南町教育委員会社会教育課文化財専門員）が当たった。主任調査員に長沢展生（國學院大學卒）が委嘱され、調査員に古谷雅彦（前・三鷹市遺跡調査会調査員)・堅木宜弘・成田健太郎・星宏之（國學院大學卒）が従事した。このように主任調査員1名・調査員4名の体制を整備し、調査補助員は塩沢重機株式会社発掘調査支援部から派遣いただいた。また十日町地域シルバー人材センター津南事務所の有志から作業員の任に当たっていただいた。

発掘調査は、平成8年5月7日に開始され、9月6日に終了し、延べ123日の調査期間で8,960㎡の記録保存を実施した。その実情は、朝日の昇る時から沈むまで、極めて厳しい環境の中で調査員が精神力に支えられながら進めた記録調査であった。

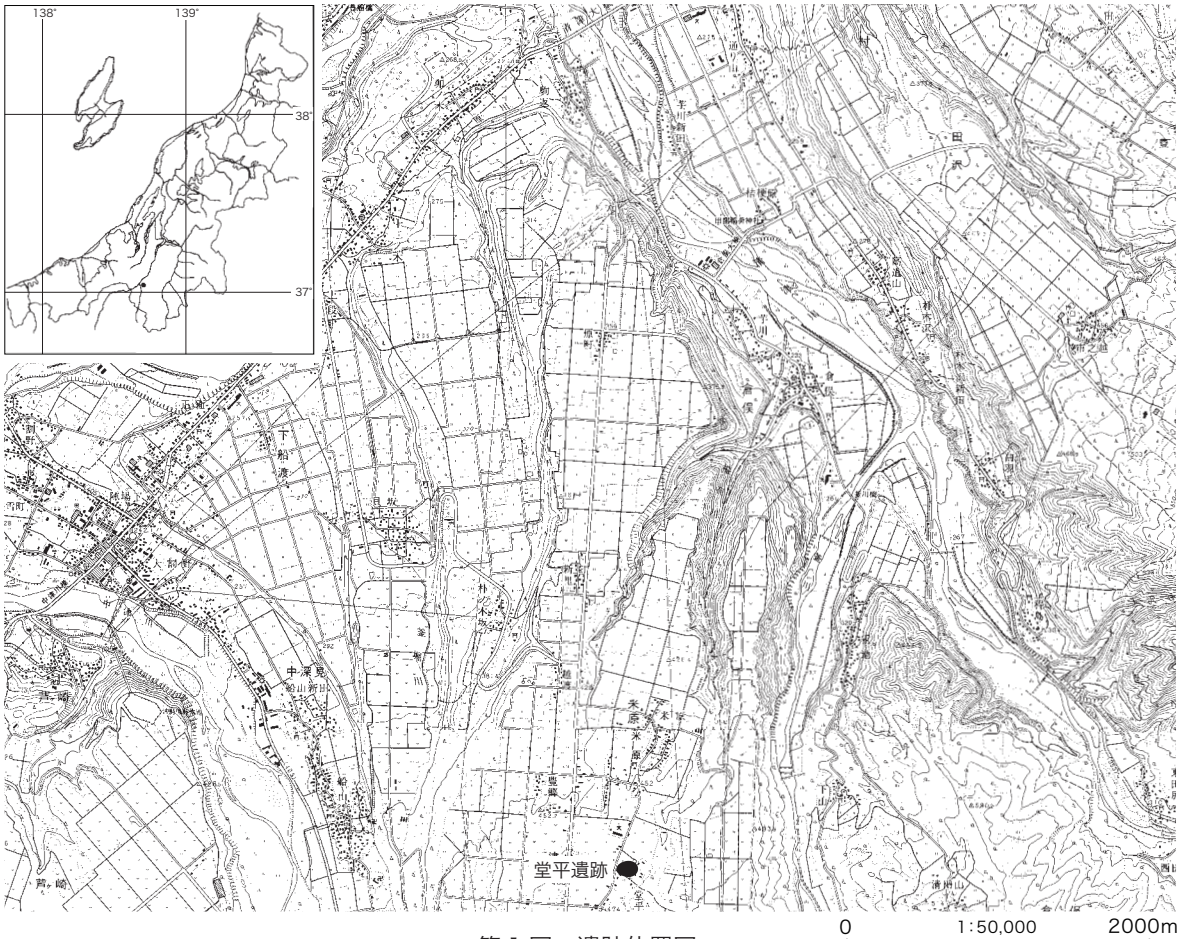
発掘調査終了後の10月30日付けで､教社第555号により「終了報告」を提出し､教社第566号で「遺物発見届」を十日町警察署に提出した。その後、平成11年3月9日付け、教生第677-17で遺物保管証を提出し、同4月9日付け、会51号で「文化財認定」を受けた。

第Ⅱ章　堂平遺跡の周辺環境

第１節　地理的環境

本遺跡は、中魚沼郡津南町大字中深見丁 157 番地外に所在する（第１図）。津南町は、新潟県中越地方の最南端にあり、長野県境に接する有数の豪雪地帯である。町域は南北約 24km、東西約 11km で面積が 171.4km^2 である。また日本最長の信濃川が町の北側を南西から北東に貫き、支流である志久見川、中津川、清津川が右岸側（南側）から合流する。

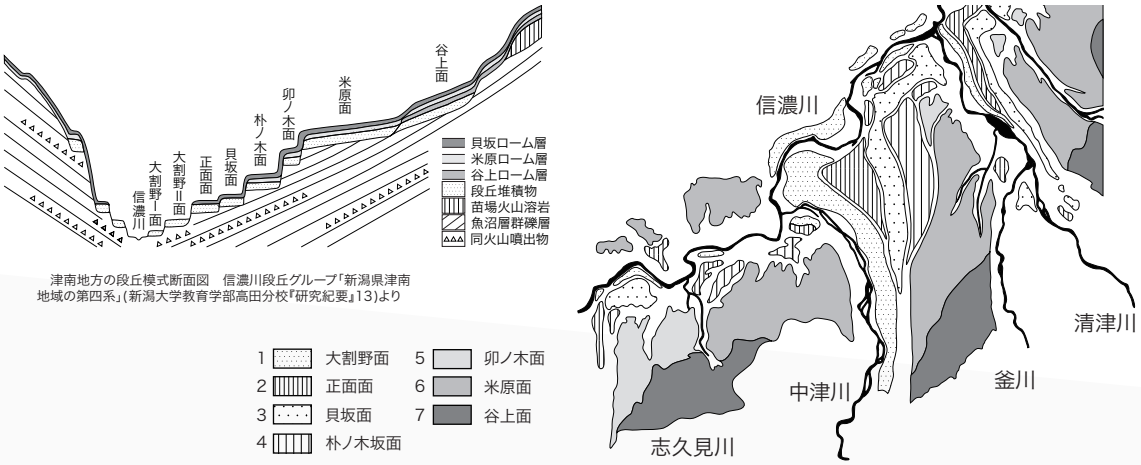
この信濃川右岸には河岸段丘が発達し、特に中津川と清津川の間に河岸段丘が最もよく発達している。これに対して信濃川左岸は扇状地形を呈し、河岸段丘の発達は顕著ではない。河岸段丘は、現在のところ８面（９面）確認されており（註１）、高位段丘から、谷上面・米原Ⅰ面・米原Ⅱ面・卯ノ木面・朴ノ木面・貝坂面・正面面の７段の更新世の段丘と、大割野Ⅱ面・Ⅰ面の２段の完新世の段丘から構成されている（第２図・第３図）。完新世以降に離水した大割野Ⅰ・Ⅱ面、約３万年前の正面面、６～ 10 万年前の貝坂面、15 ～ 17 万年前の朴ノ木・卯ノ木面、17 万～ 25 万年前の米原Ⅱ・Ⅰ面、約 40 万年前の谷上面となる（註２）。本遺跡が位置する米原Ⅱ面は、上から二段目の高位段丘である。本遺跡の近くまで米原Ⅰ面の段丘境が南方に迫り、東側の段丘崖に沿って美穂付近に端を発する稲荷川が北流し、この河川左岸の北東方向に延びる台地上（標高約 470m 前後）に本遺跡は位置する。



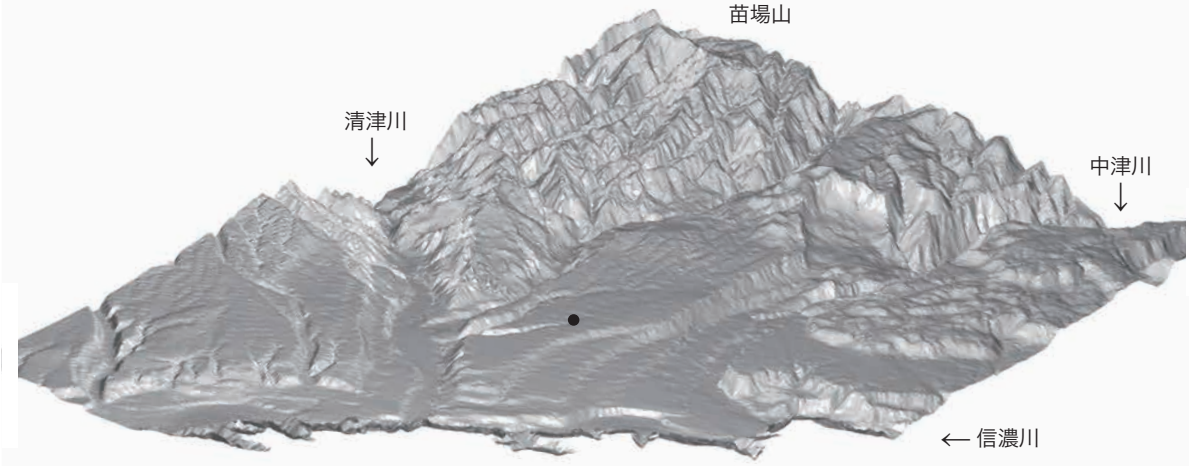
第１図　遺跡位置図

信濃川は、全長約 367km とされており、長野県南佐久郡の山岳部（甲武信岳）を源流として、千曲川が中部高地のなかを北上し、新潟県域へと流れ込んで信濃川へと名前を変えて、新潟平野から日本海へと注ぎ込む。信濃川には魚野川など幾つかの河川が合流しているが、遺跡周辺では、志久見川・中津川・清津川などの河川が右岸側から合流する。また魚沼丘陵を挟んで、東側に魚野川が並走して川口町内で合流する。志久見川は長野県境を北流し、釜川や天代川・北野川などの支流が合流している。中津川は全長約 35km の河川であり、信州秋山郷の最奥切明に源流が求められる。中津川は北流して大割野で信濃川と合流するが、中流から下流にかけての左岸には岩盤が露出する絶壁が広がる。一方、清津川は群馬県境に源流が求められる全長約 43km の河川である。その支流には釜川などがあり、釜川上流には柱状摂理の発達した絶壁が聳え立つ「田代の七ッ釜」がある。この七ツ釜は、堂平遺跡から直線距離約３km のところにあり、遺跡出土の大形石棒に使われた石材もこの周辺から搬入された可能性が高い。

遺跡周辺の景観は、遺跡から眺望できる山は南側に苗場山があり、特に西側から北側は遠方の山が眺望することが可能である。南側の苗場山は標高約 2,145m を測る。また信濃川左岸にあたる北側には、山伏山（標高約 903m）、烏帽子山（標高約 546m）、氷山（標高約 674m）などの東頸城丘陵が連なり、近景の山並みが西から北側を囲む。



第２図　津南町の河岸段丘



第３図　段丘俯瞰図および遺跡位置

第２節　歴史的環境

津南町とその周辺地域には、学史的に著名な本ノ木遺跡（註３）や壬遺跡（註４）などをはじめとして、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が密集する地域である。遺跡の多くは、本遺跡が立地する信濃川右岸の河岸段丘（津南段丘）に集中しており、堂平遺跡とほぼ同時期の環状集落を形成する道尻手遺跡（註５）が存在している。本遺跡が立地する米原Ⅱ面の西側には、中期前葉の住居跡が検出されている午肥原遺跡（註６）や城林遺跡（註７）が立地する。本遺跡の造営時期である中期から後期の遺跡の分布について、時期ごとに概観しておきたい。時期区分については、後述する本遺跡での時期区分を用いる。周辺遺跡一覧表は、土器のみが出土した場合が○、住居跡が検出された場合を◎で表記する（第４図）。

大木７ｂ式並行期は 13 遺跡で、道尻手遺跡（2）、堂尻遺跡（註８）（3）、城林遺跡（12）、午肥原遺跡（13）、で住居跡が検出されている。調査面積にもよるが、ほとんどの遺跡は小規模遺跡で、数軒の住居跡が検出される程度で、ほぼ中期前葉の間で完結する。一方、この時期になると信濃川流域や魚野川流域では五丁歩遺跡（註９）や清水上遺跡（註 10）のように環状集落が形成される。津南町内でも道尻手遺跡で環状集落が造営されるが、堂平遺跡ではまだ集落の造営は認められない。

大木８ａ式並行期は 13 遺跡で、堂平遺跡（1）、道尻手遺跡（2）、沖ノ原遺跡（23）、森上遺跡（註 11）（25）などで住居跡が検出され、集落遺跡の多くは環状集落を形成している。新たに、堂平遺跡で環状集落が造営され、4km 圏内に三ヶ所の環状集落がほぼ同時に造営されていたと考えられる。堂平遺跡の真西直線距離約 3km の高位段丘上には沖ノ原遺跡（註 12）、北北西の貝坂段丘には道尻手遺跡が存在する。

大木８ｂ式並行期は 16 遺跡で、遺跡数・住居跡数ともに最大になる時期である。堂平遺跡（1）、道尻手遺跡（2）、下モ原Ⅱ遺跡（註 13）（10）、中津川左岸の沖ノ原遺跡（23）、清津川右岸の森上遺跡（25）からも住居跡が検出されている。このなかで環状集落を形成する遺跡は、前段階と同様に堂平遺跡、道尻手遺跡、沖ノ原遺跡が挙げられる。

中期末葉の沖ノ原式期は 11 遺跡とやや減少するものの、堂平遺跡（1）、道尻手遺跡（2）、沖ノ原遺跡（23）の三ヶ所で引き続き環状集落が造営される。住居跡が検出された遺跡は、道尻手遺跡、堂平遺跡、上正面かみ遺跡（註 14）（16）、中津川左岸の高位段丘に位置する沖ノ原遺跡、清津川右岸の森上遺跡（25）が挙げられる。当該期にはすでに複式炉が成立しているが、津南地域よりも西側の千曲川流域では複式炉は現在までのところ確認されていない。また沖ノ原Ⅱ式期になると、反里口遺跡（註 15）（17）、信濃川左岸の八反田遺跡（註 16）、清津川右岸の布場遺跡（註 17）（27）、などで集落が造営されるようになる。

後期になると、三十稲場式期が８遺跡、南三十稲場式期の遺跡は６遺跡、加曽利 B1 式並行期が２遺跡と減少傾向を示す。三十稲場式期は、前段階まで環状集落を形成していた堂平遺跡（1）や道尻手遺跡（2）でも集落が継続するが、沖ノ原遺跡（23）は廃絶する。南三十稲場式期には、安定的に道尻手遺跡と堂平遺跡で比較的大規模な集落が造営され、道下遺跡（註 18）（7）や下モ原Ⅲ遺跡（註 19）（11）でも小規模集落が形成される。また道尻手遺跡と堂平遺跡で大規模配石遺構が造営され、前者は配石墓群的性格が強く、後者は環状列石である。加曽利 B1 式並行期で堂平遺跡と道尻手遺跡は廃絶し、周辺地域でも集落の存在は不明慮である。

以上のように、本遺跡の周辺には、大規模集落である道尻手遺跡や沖ノ原遺跡が時期を同じくして存在しており、周辺の小規模集落も合わせてその関係性は検討する必要があるだろう。

No	遺跡名	中期				後期			No	遺跡名	中期				後期		
		前葉	中葉	後葉	末葉	初頭	前葉	中葉			前葉	中葉	後葉	末葉	初頭	前葉	中葉
1	堂平遺跡		◎	◎	◎	◎	◎	○	15	屋敷田遺跡		○	○				
2	道尻手遺跡	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	16	上正面かみ遺跡				◎			
3	堂尻遺跡	◎							17	反里口遺跡	○	○	○	○	◎		
4	正面中島遺跡		○	○					18	笹沢遺跡						○	
5	寺田上Ａ遺跡		○			○			19	卯ノ木平遺跡					○		
6	貝坂桐ノ木平Ａ遺跡			○					20	卯ノ木山田沢遺跡	○				○		
7	道下遺跡						◎		21	越那Ａ遺跡	○	○	○				
8	居尻Ａ遺跡			○					22	芋川原遺跡	○	○	○	○	○		
9	堤ノ上遺跡			○					23	沖ノ原遺跡		◎	◎	◎			
10	下モ原Ⅱ遺跡			◎					24	寺尾遺跡	○	○	○	○			
11	下モ原Ⅲ遺跡	○	○	○			◎		25	森上遺跡	○	○	◎	◎			
12	城林遺跡	◎							26	下原遺跡	○	○	○	○			
13	午肥原遺跡	◎							27	布場遺跡			○	○	○	○	
14	堂屋敷遺跡	○															

第４図　周辺の縄文時代中期前葉～後期中葉の遺跡

第Ⅲ章 発掘調査の概要

第１節 遺跡の概要

堂平遺跡（どうだいらいせき）は、新潟県中魚沼郡津南町大字中深見丁 157 番地外に所在する。本遺跡は、河岸段丘の高位段丘に分類される米原Ⅱ面に立地する（標高約 470m）。本遺跡は、昭和 47 年 12 月に水道工事のときに、炉跡と土器片が出土したことで確認され、縄文時代中期後半期の遺跡とされた（註 20）。その後、国営農地再編整備事業苗場地区事業計画に基づく区画整備工事に伴って、米原工区の試掘調査が平成７年 11 月 13 日～ 25 日にかけて行われ、翌平成８年５月７日～９月６日にかけて堂平遺跡の発掘調査が実施された。

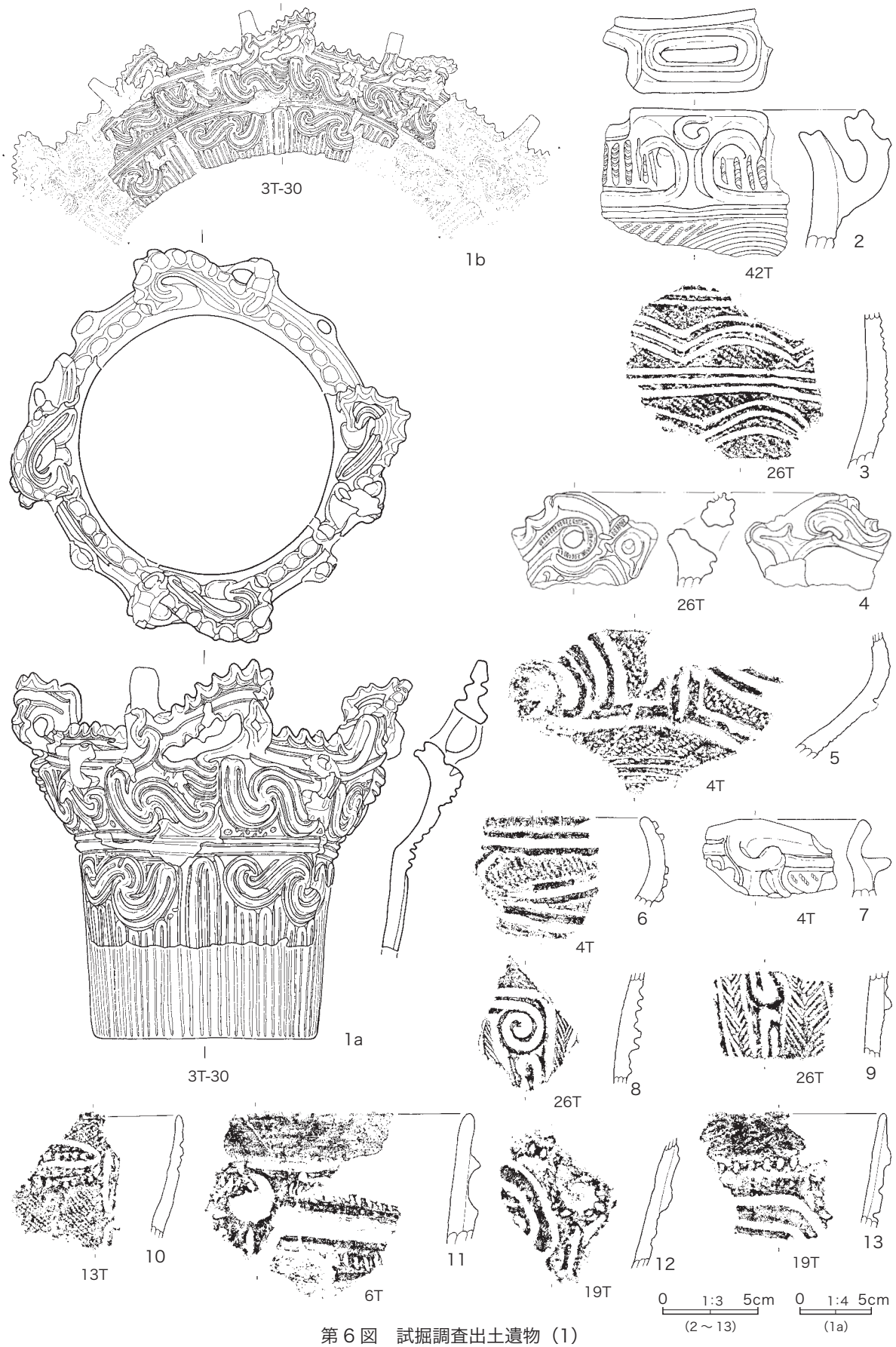
第２節　確認調査の成果

平成７年 11 月 13 日～ 16 日まで実施した確認調査によって、住居跡３軒とともにコンテナ 10 箱分の遺物が出土した。この試掘調査によって、遺跡範囲や包蔵地の様子（形成時代や時期、厚さ、包含遺物の内容）、遺構の密度が詳細に把握された。試掘トレンチは 1T ～ 26T を設定し（第５図）、試掘トレンチからは縄文時代中期中葉から後期中葉にかけての資料が出土した（第１表～第３表・第６図～第８図）。地点によって出土遺物に時期差があるものの、縄文時代中期後半期～後期前半期の大規模な集落遺跡であることが判明した。試掘調査の結果を受けて、調査範囲を 1T ～ 18T、21T ～ 26T に設定した。また 19T と 20T は後期前半期の遺物が多量に出土したが、盛土保存のため調査対象から除外した。

No	地点	分類	大きさ（cm）					部位	主な文様	縄文	胎土	色調	炭化物		備考
			口径	底径	器高	口高	容量（ℓ）						表	裏	
1	3T	第Ⅰ群第１ｄ１類	18	—	—	—	—	口縁～胴部	鶏頭冠把手，基隆帯，半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
2	42T	第Ⅰ群第１ａ４類	—	—	—	—	—	口縁部	中空把手，有節沈線文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3	26T	第Ⅰ群第１ａ５類	—	—	—	—	—	胴部	弧状沈線文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
4	26T	第Ⅰ群第１ｄ類	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起	—	砂粒、小礫	橙	○	—	
5	4T	第Ⅰ群第２ａ１類	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
6	4T	第Ⅰ群第２ａ１類	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（未）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
7	4T	第Ⅰ群第２ａ１類	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
8	26T	第Ⅰ群第２ｂ類	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文，矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
9	26T	第Ⅰ群第２ｂ類	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文，矢羽根状沈線文	—	砂粒	明黄褐	—	○	
10	13T	第Ⅰ群第３ａ２類	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	LR	小礫	にぶい黄橙	○	○	
11	6T	第Ⅰ群第３ａ３類	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻懸垂文，横線文＋刻目	—	砂粒，小礫	浅黄橙	○	—	
12	19T	第Ⅰ群第3ａ4−1類	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文，コ字文	—	小礫	淡黄	○	—	
13	19T	第Ⅰ群第３ａ４類	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯，沈線（3.5mm）	LR	小礫	褐灰	○	○	
14	13T	第Ⅰ群第３ａ３類	—	—	—	—	—	口縁部	隆沈線＋刻目	—	小礫，雲母	にぶい黄橙	—	—	
15	4T	第Ⅰ群第３ａ７類	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手，刻目隆帯	R	小礫	浅黄橙	○	○	
16	4T	第Ⅰ群第３ｄ類	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻懸垂文（隆沈）	RL	砂粒，石英	橙	—	○	
17	17T	第Ⅰ群第３ｃ３類	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（磨）	LRL	砂粒，雲母	浅黄	○	—	
18	17T	第Ⅰ群第４ｊ類	—	—	—	—	—	口縁部	胴部懸垂文（磨）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	赤彩
19	19T	第Ⅱ群第１ａ２類	—	—	—	—	—	胴部	刺突文	—	砂粒多	橙	—	—	
20	19T	第Ⅱ群第１ａ２類	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
21	19T	第Ⅱ群第１ｂ類	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手，刺突文	—	砂粒	橙	○	○	
22	19T	第Ⅱ群第１ａ類	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手，C 字状文	—	砂粒、小礫	橙	○	○	
23	28T	第Ⅱ群第２ａ類	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横線文，胴部懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
24	24T	第Ⅱ群第８類	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線＋刺突文	—	赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
25	19T	第Ⅱ群第２ａ類	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横線文，胴部懸垂文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
26	19T	第Ⅱ群第２ａ類	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
27	28T	第Ⅱ群第２ｂ類	23	—	—	—	—	口縁～胴部	胴部三角形区画文	R	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
28	19T	第Ⅱ群第２ｂ類	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横線文	—	砂粒	橙	○	—	
29	19T	第Ⅱ群第２ｂ類	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横線文	—	砂粒	橙	—	—	
30a	19T	第Ⅱ群第２ｂ類	—	—	—	—	—	胴部	隆帯区画＋刺突，胴部懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
30b	19T	第Ⅱ群第２ｂ類	—	—	—	—	—	胴部	隆帯区画＋刺突，胴部懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
31	19T	第Ⅱ群第２ｂ類	—	—	—	—	—	胴部	隆帯区画＋刺突，胴部懸垂文	LR	小礫	にぶい黄橙	○	○	
32	19T	第Ⅱ群第２ａ類	—	—	—	—	—	胴部	胴部沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
33	28T	第Ⅱ群第２ｂ類	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
34	19T	第Ⅱ群第３類	—	—	—	—	—	胴部	横線文	—	砂粒	褐灰	○	—	
35	18T	第Ⅱ群第３類	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
36	28T	第Ⅱ群第２ａ２類	—	—	—	—	—	胴部	集合沈線文	—	砂粒	灰白	○	○	
37	19T	第Ⅱ群第２ｃ類	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯＋刻，8 字状貼付文	LR	砂粒	褐灰	○	○	
38	17T	第Ⅱ群第６ｃ類	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列	—	砂粒	橙	—	—	

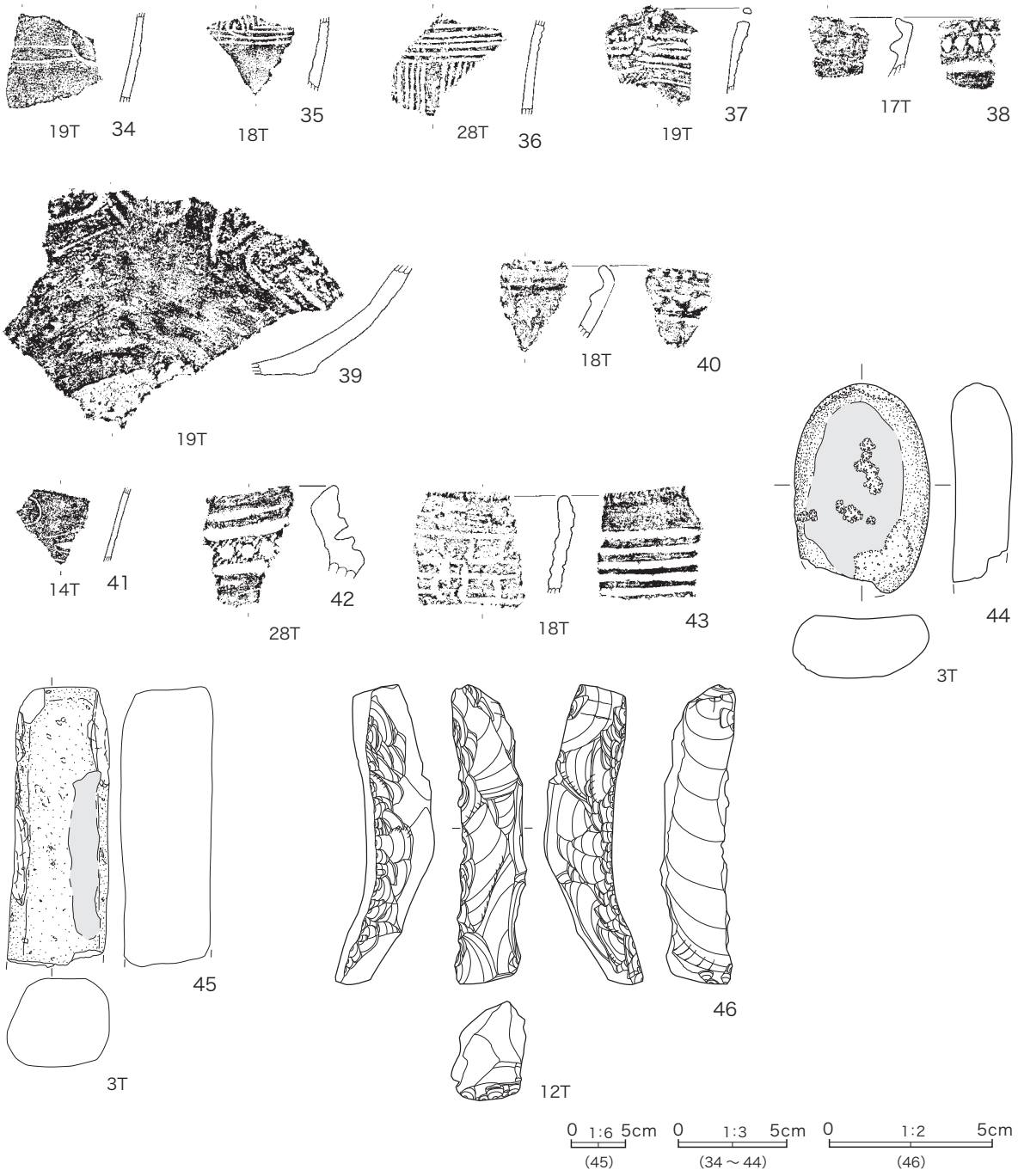
第１表　試掘調査出土遺物観察表（１）

第５図　試掘トレンチ位置図



第 6 図　試掘調査出土遺物（1）

第７図　試掘調査出土遺物（2）



第８図　試掘調査出土遺物（3）

No	地点	分類	大きさ（cm）					部位	主な文様	縄文	胎土	色調	炭化物		備考
			口径	底径	器高	口高	容量（ℓ）						表	裏	
39	19T	第Ⅱ群第２ｂ類	—	—	—	—	—	底部	幾何学文，沈線（3mm）	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
40	18T	第Ⅱ群第３類	—	—	—	—	—	口縁部	横線文，口唇刻目	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
41	14T	第Ⅱ群第２ｃ類	—	—	—	—	—	胴部	幾何学文，沈線（0.5mm）	LR	砂粒	黒褐	○	○	
42	28T	第Ⅱ群第６ａ類	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列	LR	小礫	明黄褐	—	—	
43	18T	第Ⅱ群第３ａ類	—	—	—	—	—	口縁部	単位文、横線文	—	石粒	黒褐	—	—	

No	地点	器種	細別	石材	残存部位	素材	計測数値				備考
							長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	
44	3T	石皿類	C1	安山岩	略完形	—	(9.8)	6.3	2.9	220.0	端部欠損
45	3T	石棒類	—	安山岩（ヒン岩）	—	柱状礫素材	(26.4)	9.3	8.3	3200.0	無頭石棒
46	12T	不明	—	珪質頁岩Ｂ	完形	縦長剥片	9.2	2.3	3.1	48.2	掻器

第２表　試掘調査出土遺物観察表（２）

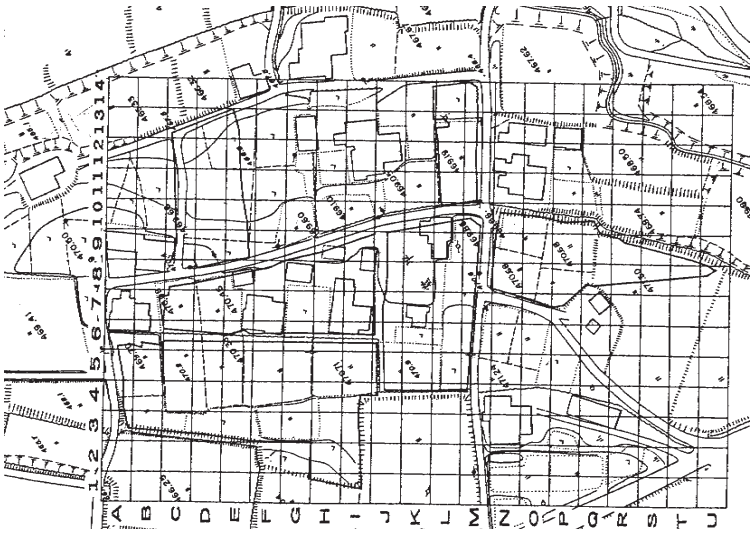
第３節　発掘調査の方法と経過

面積約 8,960 ㎡を測る調査区は、水田、農機具小屋、宅地に分かれており、部分的に大きく地形が改変されていた。このような地形改変に伴い遺跡は既に壊滅的に破壊されていると判断されていた経緯があるが、平成７年に実施した遺跡確認調査の結果、少なからず遺物包含層の分布や、部分的な遺構分布が確認されていた。調査は、３班体制を基本として調査区を定めて対応した。調査区は、任意に設定したグリット法（10 m ×10 m）を採用した（第９図）。地区名称は、便宜的にＡ地区～Ｆ地区に呼び分け、作業進捗などの管理で使用した。その進捗は、第４表に示したとおりである。４月 22 日から約 1.8 mもの残雪の除雪作業を経て、表土剥ぎ作業、プレハブ休憩小屋や仮設トイレの設置、機材搬入などを５月５日までに完了させた。発掘作業は５月６日から着手した。これら準備に第１週から第２週の期間を費やした。第３週から本格的な発掘調査に着手し、第 18 週までの期間を基本作業期間としてＡ地区（広いことからＡⅠ地区とＡⅡ地区に分離して対応した）とＢ地区で調査を進めた。Ａ Ⅰ地区は､用地着手の都合上、第７・12・14・17・18 週に作業ができず、基本作業期間を超えて、第 19 週目で完了した。また、面積が狭いＣ地区は６月 17 日から着手して、23 日には完了した。調査は、14 週目に入った７月 22 日を折り返し日とし、新たにＤ地区からＦ地区に調査のメスが入り込んだ。最終的に８月 26 日から９月６日までの期間にＡ Ⅰ地区とＦ地区に分かれて、作業を進めてすべてを完了した。

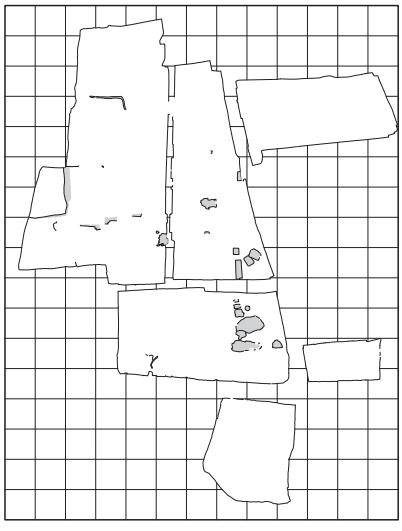
上記の発掘作業には、一部の表土発掘、遺構確認、遺構発掘に伴い遺構記録作業や出土遺物記録と収納作業が継続されていた。その中で重要な竪穴建物跡に限り、その進捗を第３表に示した。その作業進捗は、ほぼ地区毎と重複する。凡そ、１号竪穴建物跡から 15 号竪穴建物跡を単位とし、14 週から 15 週を折り返しとして新たに 19 号竪穴建物跡から 59 号竪穴建物跡に調査が移動した。16 号竪穴建物跡から 18 号竪穴建物跡は、その過渡期に当たる 12 週後半に主体的に作業が進められた。第 17 週の８月中旬に降り続いた雨により、Ｊ８区～ J10 区ならびにＫ８区～ K10 区が水没し、作業効率を下げることとなった。９月６日に航空測量と航空写真撮影を実施して、のべ 123 日に亘る堂平遺跡の発掘調査は完了した。

1	6	11	16	21
2	7	12	17	22
3	8	13	18	23
4	9	14	19	24
5	10	15	20	25

２．小グリッド

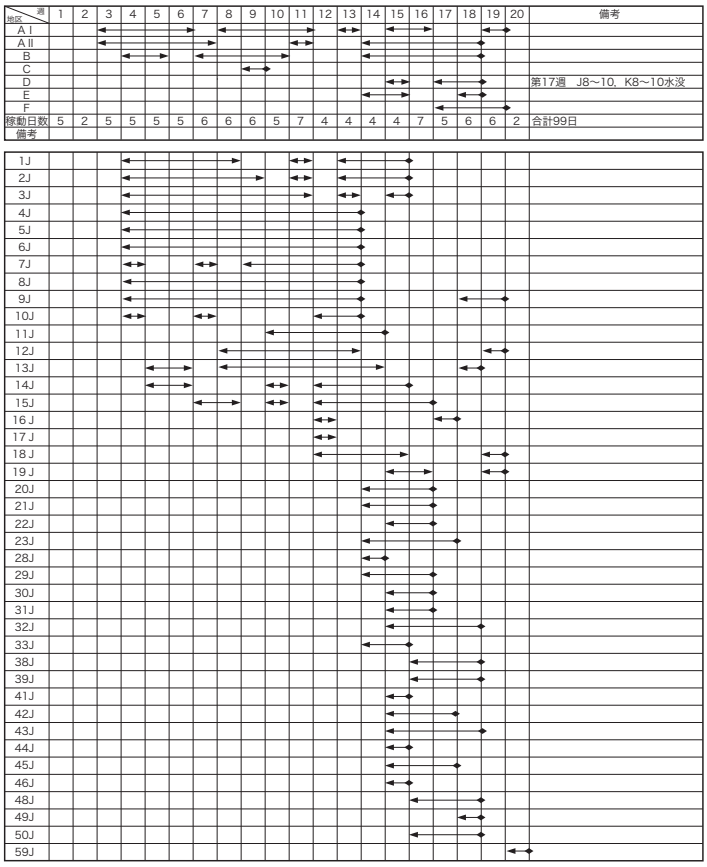


１．グリッド設定図



３．撹乱範囲

第９図　調査区とグリッド配置図



地区	グリット
AⅠ	A3～6,B3～6,C3～6,D3～6,E3～6,F2～6,G2～6
AⅡ	H1～6,I1～6,J4～6
B	B7,C6～8,D6～8,E6～8,F6～8,G6～9,H6～9,I6～9
C	C8～13,D8～13,E8～13
D	J4～9,K4～10,L4～10,M4～10
E	L10～13,M11～13
F	N8～10,O7～10,P7～10,Q8～10

週	日付	週	日付
1	4/22～28	11	7/1～7
2	4/29～5/5	12	7/8～14
3	5/6～12	13	7/15～21
4	5/13～19	14	7/22～28
5	5/20～26	15	7/29～8/4
6	5/27～6/2	16	8/5～11
7	6/3～9	17	8/12～18
8	6/10～16	18	8/19～25
9	6/17～23	19	8/26～9/1
10	6/24～30	20	9/2～9/6

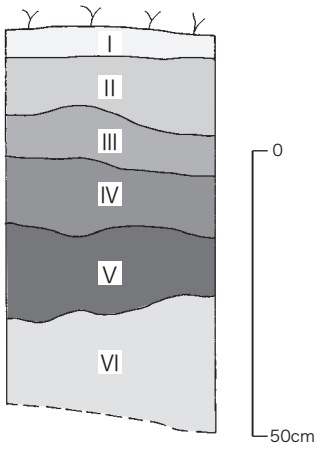
第３表　各調査区調査工程表

第４節　基本土層

本遺跡は、前述のように確認面（Ⅲ～Ⅳ層）までがほぼ削平されており、現代の住宅の基礎工事などによって部分的に深いところまで攪乱が顕著であった。遺跡が立地する地区の基本的な土層堆積を把握するために、堆積が比較的安定している調査区東側のC13グリッド・D13グリッドの東壁に基本土層を設定した。しかし、本遺跡の出土遺物に関しては、ほぼ遺構覆土からの出土であるため、出土遺物に基本土層の層位名を付したものは存在しない。

＜土層説明＞

Ⅰ層：表土層　盛土である。
Ⅱ層：暗褐色土層　しまりなし、粘性弱い。
Ⅲ層：暗黄褐色土層　しまりなし、粘性弱い。漸移層である。
Ⅳ層：暗黄褐色土層　しまりなし、粘性弱い。漸移層である。
Ⅴ層：明褐色土層　しまり有り、粘性やや強い。ローム層である。
　　白色粒子を含む。
Ⅵ層：黄褐色土層　しまり有り、粘性ややなし。ハードローム層。



第 10 図　基本土層図

第５節　検出遺構と出土遺物の概要

本遺跡の発掘調査では、縄文時代の遺構・遺物が主体的に検出された。検出遺構の種類と数量は、竪穴住居跡 62 軒（炉跡６基含む）、炉跡 13 基、長方形柱穴列３棟、環状列石１基、埋設土器 20 基、フラスコ状土坑 86 基、土坑約 1650 基、遺物集中部（廃棄場）２ヶ所が検出されている（第４表）。これらの帰属時期は、出土遺物から縄文時代中期中葉から後期中葉にかけてのもので、住居跡はほとんどが中期中葉～末葉に帰属する。調査区内の上層の黒色土が水田造成や耕作・住宅建設によって削平されており、これらによって上層の遺構がすでに破壊されていた可能性が高い。長方形柱穴列は全て調査終了後の整理作業で、柱穴配列から認識したものである。

また出土遺物は、土器がコンテナ約 500 箱分出土しており、うち完形復元できた個体は 110 点である。これらの帰属時期は、縄文時代中期中葉～後期中葉にかけてのもので、このうち 4248 点を図化報告する。土製品は総数 136 点と少ない。その内訳は、土偶 10 点、三角形土版 29 点、耳飾９点、ミニチュア土器 35 点、土製円盤 50 点、不明の土製品３点がある（第４表）。

石器は、総数 11773 点が出土している。帰属時期は、出土土器からほとんどが縄文時代中期中葉～後期中葉の土器であると考えられる。一部は、他の時期の石器も存在していた可能性がある。石器の器種の内訳は、石鏃 103 点、石槍 13 点、石錐 80 点、石匙８点、板状石器６点、三脚石器 11 点、打製石斧 575 点、不定形石器 448 点、磨製石斧 105 点、磨石類 509 点、石錘４点、砥石 29 点、石皿 194 点、などがある。石製品は、石棒類 68 点、類石棒１点、臼形石製品２点、三角形石製品２点、垂飾品６点、線刻礫２点、軽石製石製品３点などである（第４表）。

この他では、酸化鉄、炭化材、炭化種子、動物遺体、人骨片が検出されている。特に、第 59 号住居跡の火災住居跡からは多量の炭化材が検出されている。また L11-P27 からは焼人骨と見られる骨片が出土している。

これらの遺物は、上層が削平されていることもあり、多くは竪穴住居跡や土坑内から出土している。特に大規模な廃棄帯は確認されていないが、調査時に「第 14 号住居跡」と番号を付した遺物集中区は、廃棄場として認識を改めた。一方、縄文時代以外の遺物としては、古墳時代から現代のものと推測される陶磁器片などが出土している。

遺　構	数　量	報告数	備　考
住居跡	62 軒	62 軒	
炉跡	13 基	13 基	
長方形柱穴列	３棟	３棟	
環状列石	１基	１基	
埋設土器	20 基	９基	
フラスコ状土坑	86 基	73 基	
土　坑	1650 基	89 基	
廃棄場	２ヶ所	１ヶ所	

遺物種	数　量	報告数	備　考
土　器	約 500 箱	4248 点	
土製品	136 点	111 点	
石　器	11773 点	357 点	
石製品	86 点	26 点	
動物遺体	14 点	14 点	
人骨	１ヶ所	１ヶ所	
炭化種子	多数	29 点	
炭化材	多量	14 点	

第４表　検出遺構と出土遺物数

第Ⅳ章　縄文時代の検出遺構と出土遺物

第１節　土器の分類

１．堂平遺跡出土土器の分類

本遺跡からは、縄文時代中期中葉から後期中葉にかけての土器が出土している。これらの分類基準は、道尻手遺跡の報告書（註21）における分類を基に幾つか修正を加えて設定し、さらに各群内を細分した。

基本的には、第Ⅰ群が中期で、第Ⅱ群が後期であるが、中期に含まれる一部に後期に下るものもある。

＜第Ⅰ群　中期の土器群＞

第１類　中期中葉（大木８ａ式並行期）の土器群（第11図）

ａ類　大木８ａ式土器（註22）と考えられるもの（第11図1～3）。

ａ１類：口縁部に楕円区画を有し、胴部にＹ字状懸垂文を有するもの。これらは大木７ｂ式的要素であるが､口縁部楕円区画内の文様等から大木８ａ式でも古段階に位置づけられる（316）。

ａ２類：口縁部に圧痕隆帯が横位にめぐり、口唇部に小波状の突起や中空突起を有する。大木７ｂ式的も有するが、中空突起等の存在から大木８ａ式の古段階に位置づけられる（114・116・317）。

ａ３類：口縁部文様帯が狭く、頸部が地文のみか対向状の弧線文を描くもので、胴部にクランク状の文様をもつ（929・932・3494・3683）。クランク状文の端部が開放するものは比較的古いと考えられる。これらは大木８ａ式中段階に位置づけられると考えられる。

ａ４類：口縁部に文様帯を有し、区画を跨ぐように橋状把手が付される（938・1010）。頸部には波状文、胴部にはクランク状文やＳ字状文などが描かれる。大木８ａ式新段階に位置付けられる。

ａ５類：キャリパー形を呈し、口縁部や頸部の横帯区画内に波状文を描き、胴部にはクランク文などの直線的な文様で、端部が渦巻文になるものが多い。沈線は、半截竹管による平行沈線で描出され、地文に撚糸文を施すものが多くなる（227・236・235・241・678・933・1007・1009・1014・1149・1214・1299・2139・2244・3498・3680）。大木８ａ式新段階に位置付けられる。

ａ６類：口縁部文様帯に隆帯文が施され、隆帯と器面の接着部が未調整になるもの（244・1020）。大木８ｂ式土器にも未調整隆帯が見られることから、次段階に下る可能性もある。

ａ７類：口縁部に半隆起線文や交互刺突文を施すもので、北関東の三原田式土器（註23）に類似する（1227a・3491）。

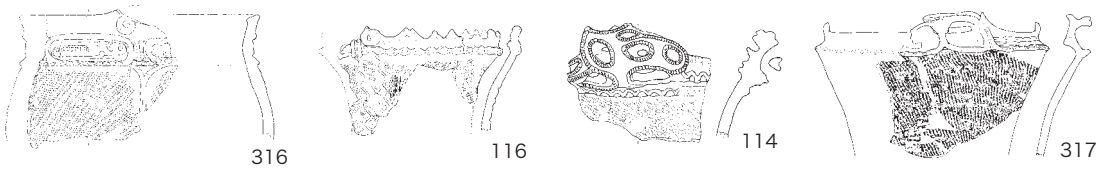
ｂ類　焼町類型（註24）に類似するもの。半隆起線文や基隆帯により渦巻文などの曲線的文様や胴部縦位懸垂文、眼鏡状突起や環状突起が特徴的である（第12図1）。

ｂ１類：口縁部から胴部にかけて、半隆起線文により文様を施すもの（61・122・128・1222・2209）。

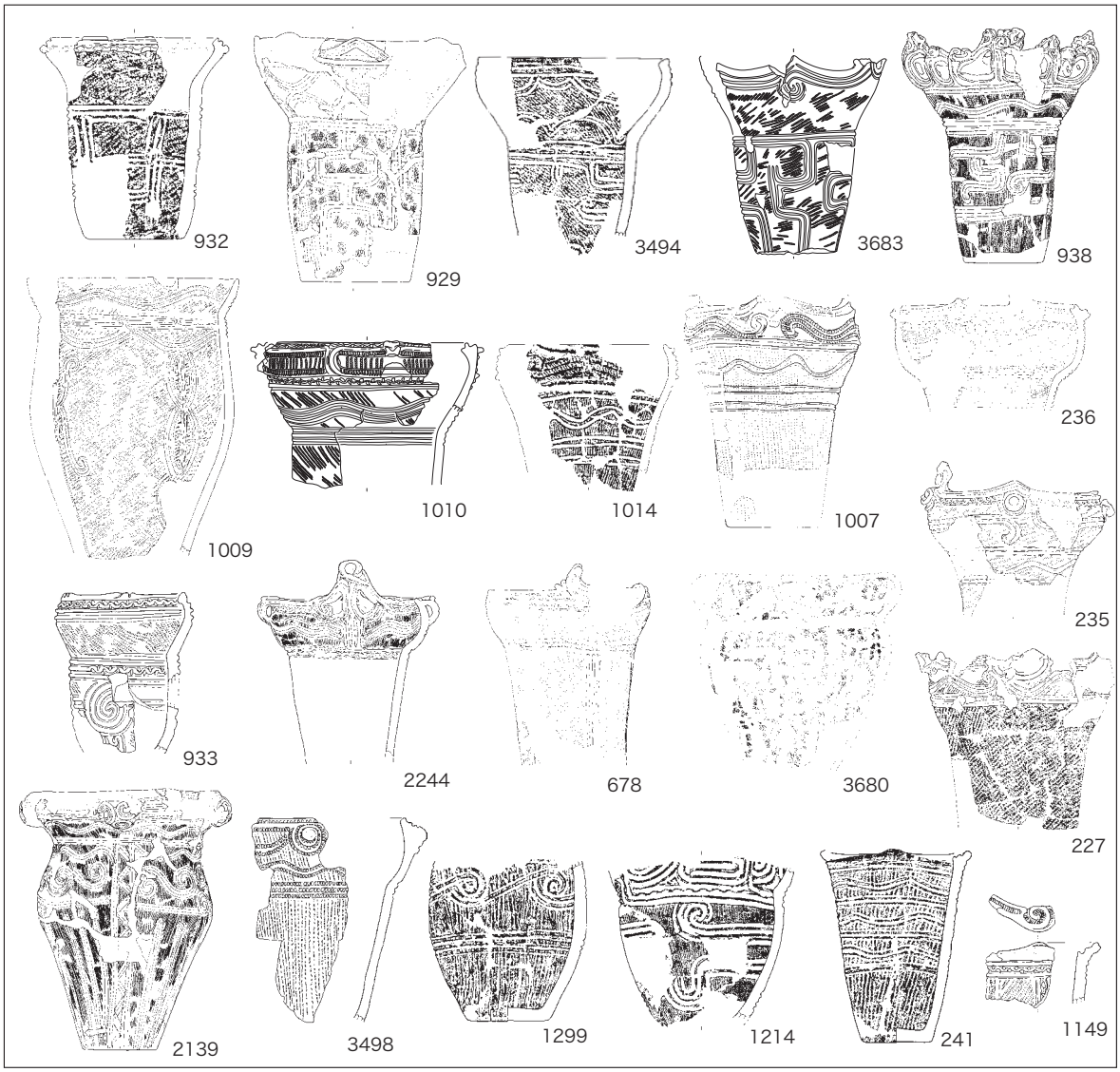
ｂ２類：胴部区画を有し、上下に文様が分かれるもの（292・1219・3703）。

ｂ３類：胴部区画を有し、胴部が地文縄文になるもの（1169）。

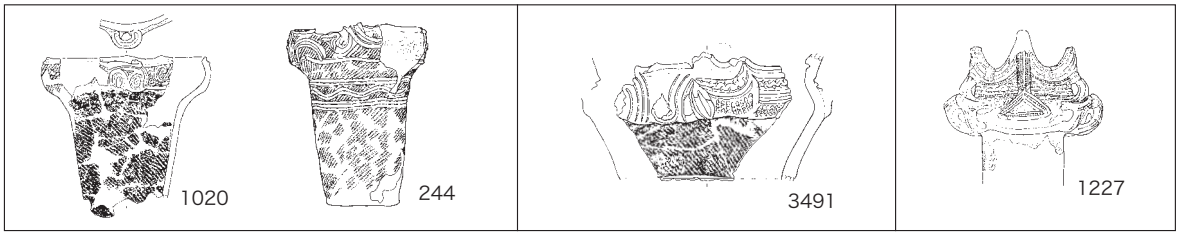
ｃ類　焼町類型に類似するもので、半隆起線文・基隆帯により文様を描き、４単位の３段把手を特徴的に有するもの（第12図2）。大木８ａ式の後半期に位置づけられる。



1．第Ⅰ群第１ａ１類・第１ａ２類

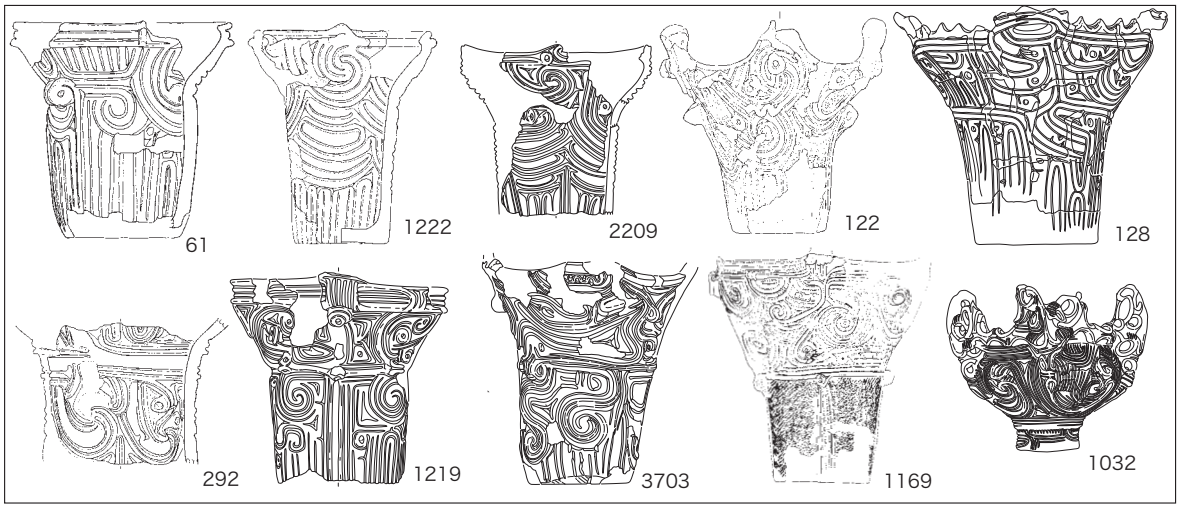


2．第Ⅰ群第１ａ３類・第１ａ４類・第１ａ５類

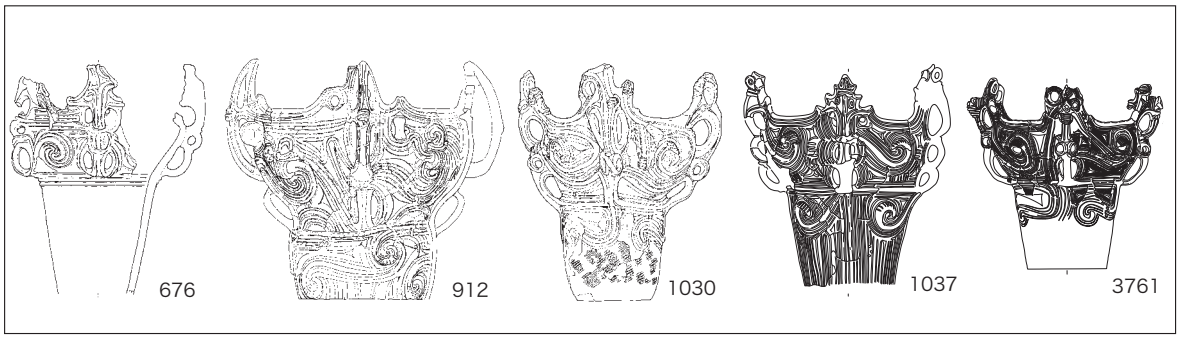


3．第Ⅰ群第１ａ６類・第１ａ７類

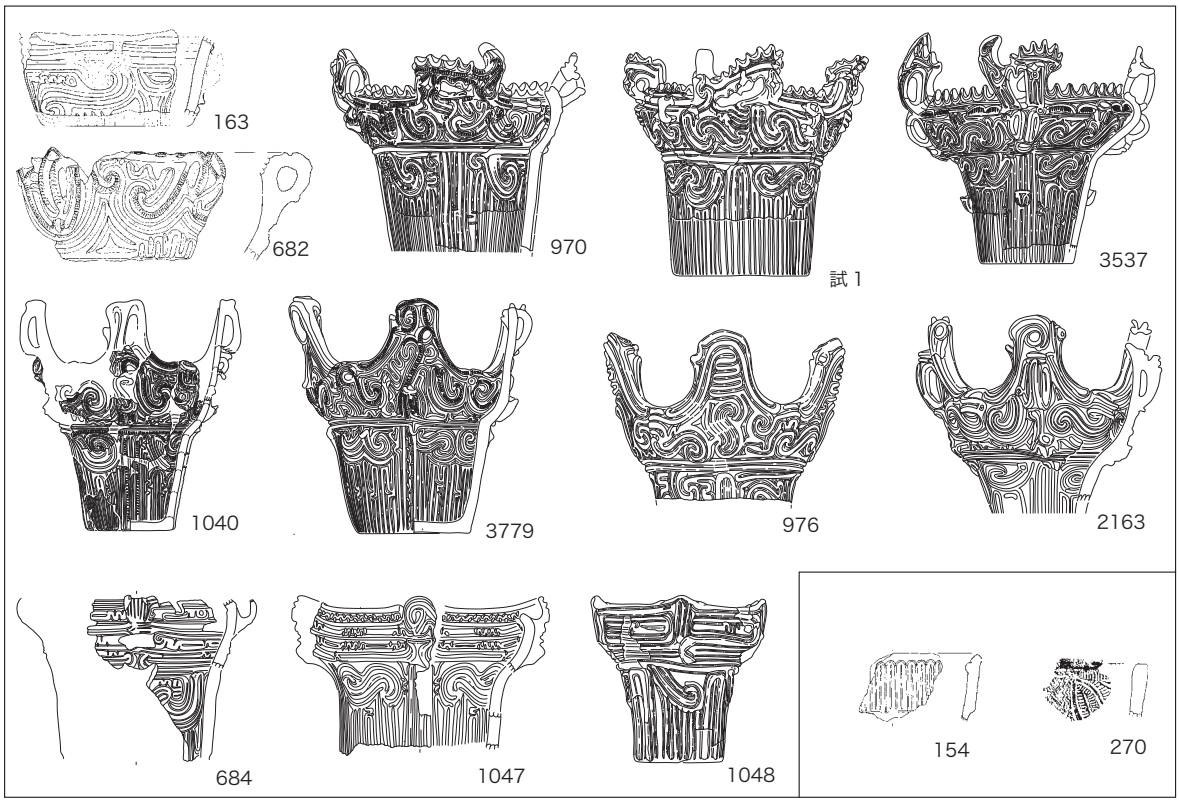
第 11 図　土器分類図（1）



1．第Ⅰ群第１ｂ１類・第１ｂ２類・第１ｂ３類



2．第Ⅰ群第１ｃ類



3．第Ⅰ群第１ｄ１類・第１ｄ２類・第１ｄ３類・第１ｅ類・第１ｆ類

第 12 図　土器分類図（2）

d類　火焔型土器や王冠型土器（註25）である。ほぼ大木８ａ式期に並行するが、一部は、大木８ｂ式古段階に並行するものがある（第12図3）。

ｄ１類：火焔型土器で、４単位の鶏頭冠把手を有するもの（第12図3）。

ｄ１－１類：鉢形で、胴部文様が４単位にならないもの（163a）。

ｄ１－２類：深鉢形で、胴部が比較的広がるもので、基隆帯に刻目を持つものが多い（682・970・試1）。

ｄ１－３類：深鉢形で、胴部が窄まるもの（3537）。

ｄ２類：王冠型土器で、４単位の波状突起を有するもの（第12図3）。

ｄ２－１類：鉢形で、胴部文様が４単位にならないもの。

ｄ２－２類：深鉢形で、胴部が比較的広がるもので、基隆帯に刻目を持つものが多い（1040・3779）。

ｄ２－３類：深鉢形で、胴部が窄まるもの（976・2163）。

ｄ３類：「王冠型式土器２」（註26）や「Ａ４型式」（註27）と呼称され、前二者のような大柄な突起を持たず、４単位の袋状突起を有する無冠型の土器である（第12図684・1047・1048）。口縁部の袋状突起間には横位の半隆起線文が特徴的に施される。

ｅ類　北陸系の天神原式土器（註28）で、半隆起線文や懸垂文が斜め方向に垂下し、区画内に細沈線を充填するもの。蓮華文を持つものもある（第12図154）。

ｆ類　勝坂式土器（註29）で、キャタピラ文や有節沈線文を多用するもの（第12図270）。

第２類　中期後葉（大木８ｂ式並行期）の土器群（第13図）

ａ類　大木８ｂ式系統（註30）の一群で、キャリパー形などを呈するもの。口縁部・頸部・胴部の三帯構成もしくは口縁部・胴部の二帯構成のものがあり、頸部が無文帯になるものがある（第13図1～3）。

ａ１類：口縁部と胴部に地文縄文を施すもの（1592・2161・2308・3263・3556）。大木８ｂ式の古段階に位置づけられる。

ａ２類：口縁部文様帯の隆帯文間に沈線を充填し、胴部は地文縄文に平行沈線や単沈線により渦巻文などの懸垂文を描くもの（441・837・1590・3572・3580）。大木８ｂ式古段階～中段階に位置づけられる。

ａ３類：頸部無文帯を持たず、口縁部は無文になって中空把手がめぐるもの（2310・3585・3594）。

ａ４類：二帯構成で、外反する口縁の口唇部に渦巻文を施すものがある（984・1680・3592・3593）。

ｂ類　胴部の腕骨文等の胴部懸垂文の間に矢羽根状沈線文を充填するもの（第13図4）。大木８ｂ式中段階に位置づけられる。

ｂ１類：口縁部・頸部・胴部の三帯構成のもの（1656・2309）。

ｂ２類：口縁部・胴部の二帯構成のもの（990・1707）。

ｃ類　双頭渦巻文を特徴とし、地文に縦位半隆起線文、条線文、縄文、矢羽根状沈線文を施すもの（第13図5）。いわゆる栃倉式（註31）と呼称される一群で、大木８ｂ式新段階に位置づけられる。

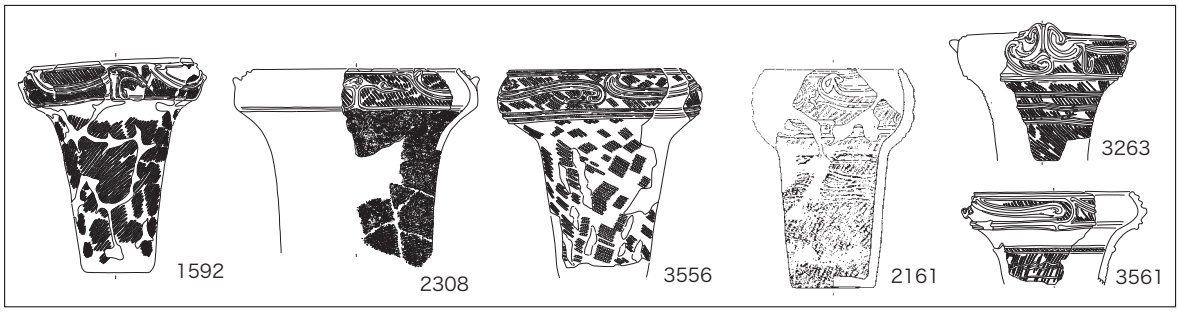
ｃ１類：口縁部がやや内屈するもの（367・581・1987）。

ｃ２類：口縁部が外反するもの（379・448）。

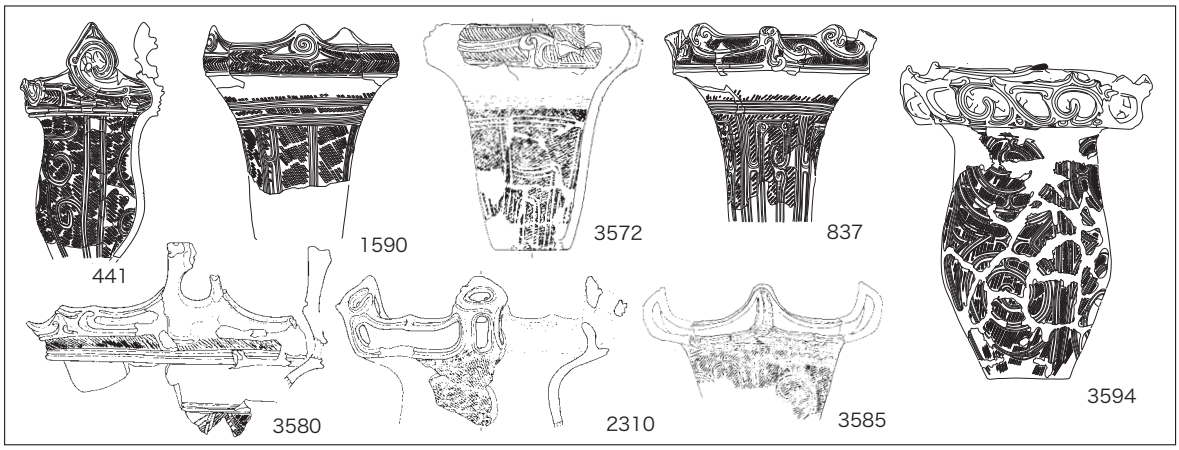
ｃ３類：キャリパー形を呈し、口縁部文様帯に細い沈線を充填するもの（2018）。

ｃ４類：半截竹管状の施文具等で胴部全面に刺突文を施すもの（452・1764）。

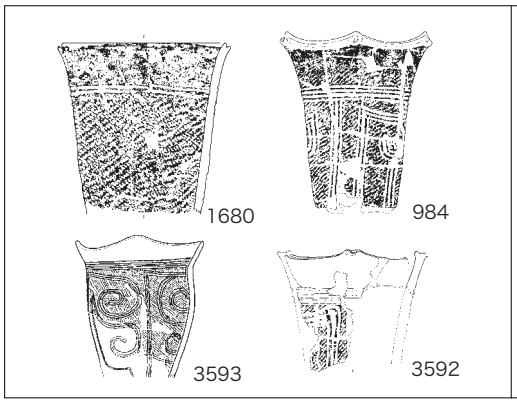
ｃ５類：双頭渦巻文や渦巻文の間の空間に弧状沈線文を施すもの（463・1904）。



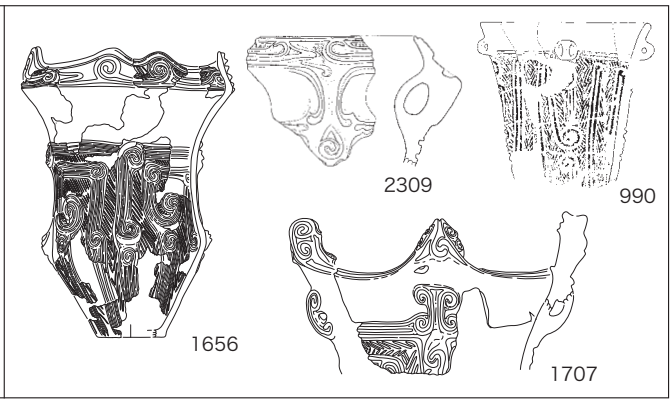
1．第Ⅰ群第２ａ１類



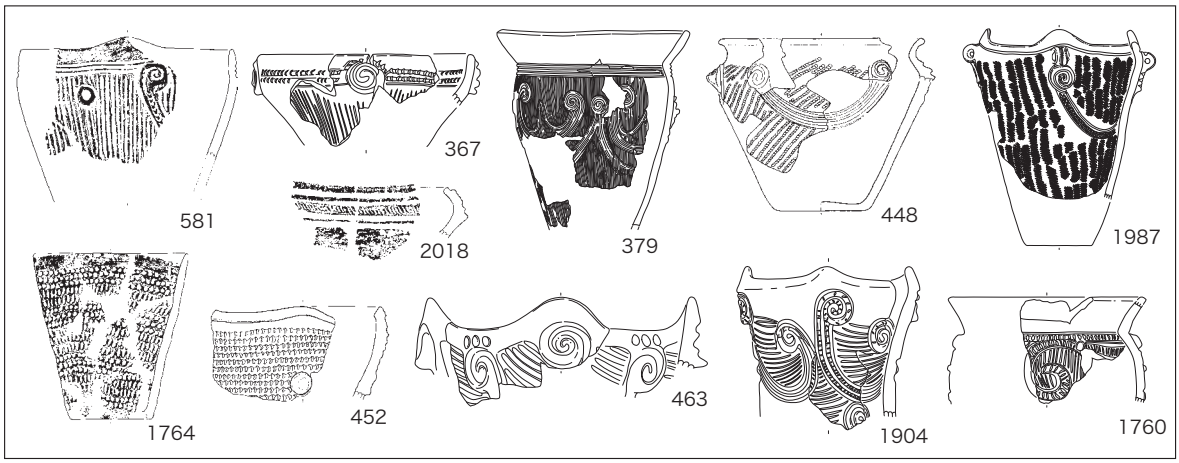
2．第Ⅰ群第２ａ２類・２ａ３類



3．第Ⅰ群第２ａ４類



4．第Ⅰ群第２ｂ１類・第２ｂ２類



5．第Ⅰ群第２ｃ１類～第２ｃ５類

第 13 図　土器分類図（3）

第３類　中期末葉（沖ノ原式期）の土器群（第 14 図～第 17 図）

a類 「沖ノ原式土器」（註 32）である。胴部にはくびれがなく、バケツ状もしくは砲弾状を呈する。

a１類：口縁部に二本か三本の刻目隆帯がめぐり、その間に渦巻文を有するもの。渦巻文よりハ字状や縦位懸垂文が垂下するものがある（第 14 図１）。いわゆる「沖ノ原類型」（註 33）で、多くは沖ノ原Ⅰ式にあたる（註 34）。

a１－１類：口縁部に二本か三本の刻目隆帯がめぐり、渦巻文や棒状貼付文が付される（501・1597・1613）。

a１－２類：口縁部に二本か三本の刻目隆帯がめぐり、隆帯間に縦位か斜位の沈線を充填するもの（848・1619・1839・1852・2003・2154）。

a１－３類：口縁部に二本か三本の隆帯がめぐり、刻みや刺突が隆帯の側面に施されるもの（1370・1615・1617・2124・2232）。

a１－４類：口縁部に数条の沈線がめぐり、沈線間の空間に刻目を施すもの（3257）。

a１－５類：胴部に半隆起線文により冂状の区画を重ねて、間に渦巻文を施すもの（1117・1118）。

a１－６類：口縁部に三本の刻目隆帯がめぐり、胴部には大木９式的な隆帯による大柄な渦巻文を描くもの（1121・1125）。

a２類：口縁部に横位沈線区画や横長楕円文などの横線文を描く一群。胴部には懸垂文が垂下する（第 14 図２）。これらは沖ノ原Ⅰ式に帰属する。

a２－１類：沈線もしくは刺突を伴う沈線で文様を描くもの（514・857・858・862・1616・1623・2006・2632）。

a２－２類：横位の楕円文を胴部下半付近まで多段に描くもの（1844）。

a２－３類：文様を隆沈線で描き、文様間に瘤状の突起を有するもの（1371・1632・3082）。

a３類：口縁部に渦巻懸垂文とその間に隆沈線や沈線による横長楕円文や乙字状文を施すもの。胴部は縦位懸垂文が垂下し、懸垂文により胴部が明確に区画される（第 15 図１）。沖ノ原Ⅰ式に属する。

a３－１類：平口縁のもの（807・855・863・864・865・1379・1618・2537・2704・3960）。

a３－２類：波状口縁のもの（519・852・866・1383・2005）。

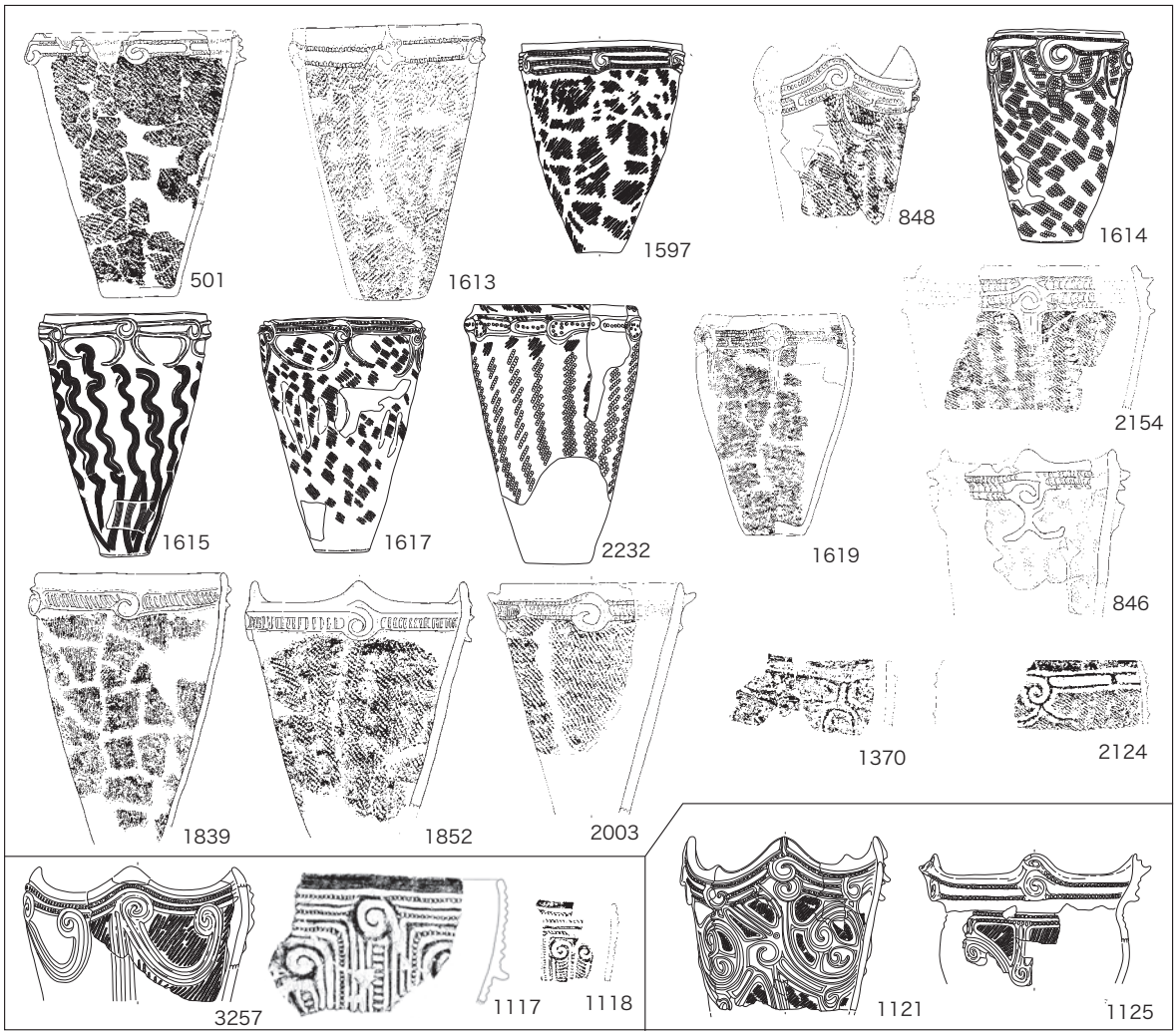
a４類：口縁部に一本の隆帯区画がめぐり、隆帯から渦巻懸垂文などが垂下するもの。口縁部の懸垂文間には沈線による弧線文やコ字状文、乙字状文が描かれる。胴部には沈線による懸垂文が垂下し、端部が底部まで伸びずに閉じるか途切れる（第 15 図２）。沖ノ原Ⅱ式（註 35）に属する。

a４－１類：懸垂文間に沈線によるコ字状文や乙字状文を施すもので、口縁部は平口縁（343・599・758・904・1252・1386・1395・1398・1600・3980）と波状口縁（907・1420・1734・2574）がある。

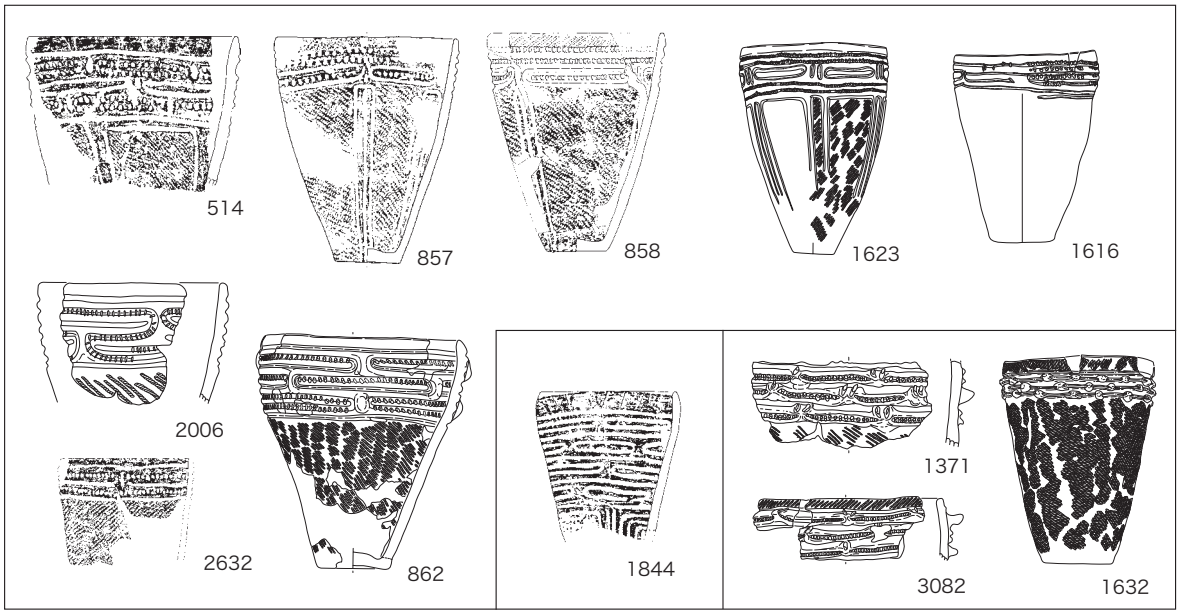
a４－２類：懸垂文間に沈線による弧線文を三本ほど重ねるもの（1423・1425・1995・3272・3985）。

a４－３類：渦巻懸垂文の周囲に円形の沈線文を多重にめぐらせて、胴部懸垂文を持たないもの（1430・1433）。

a４－４類：方形の沈線文が多重にめぐり、胴部懸垂文を持たないもの。

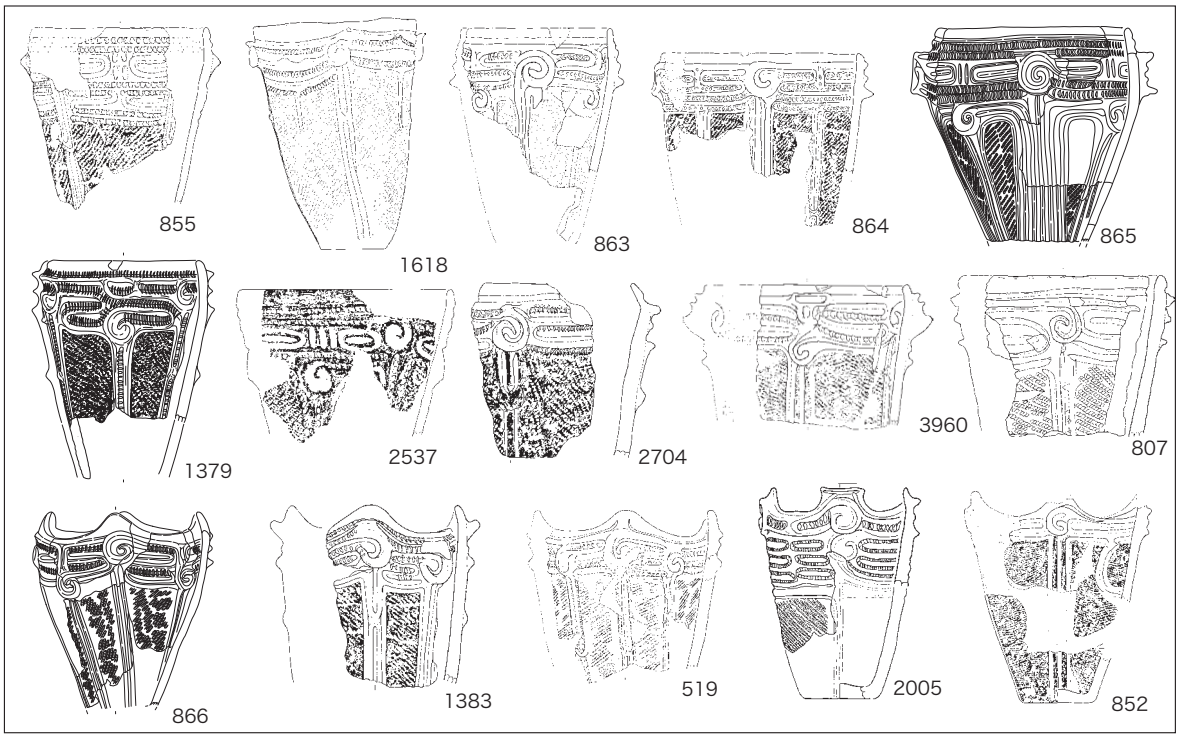


1．第Ⅰ群第３ａ１類

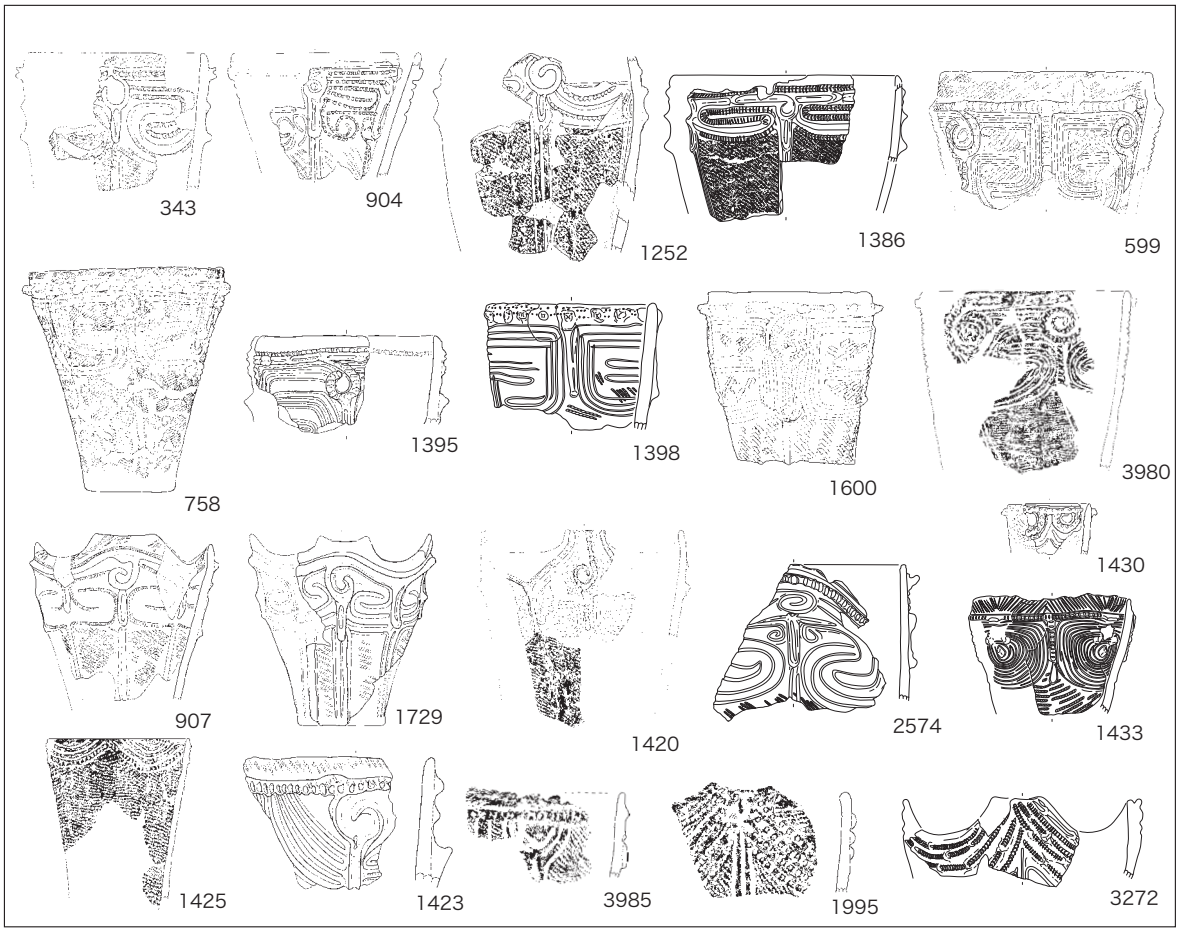


2．第Ⅰ群第３ａ２類

第 14 図　土器分類図（4）

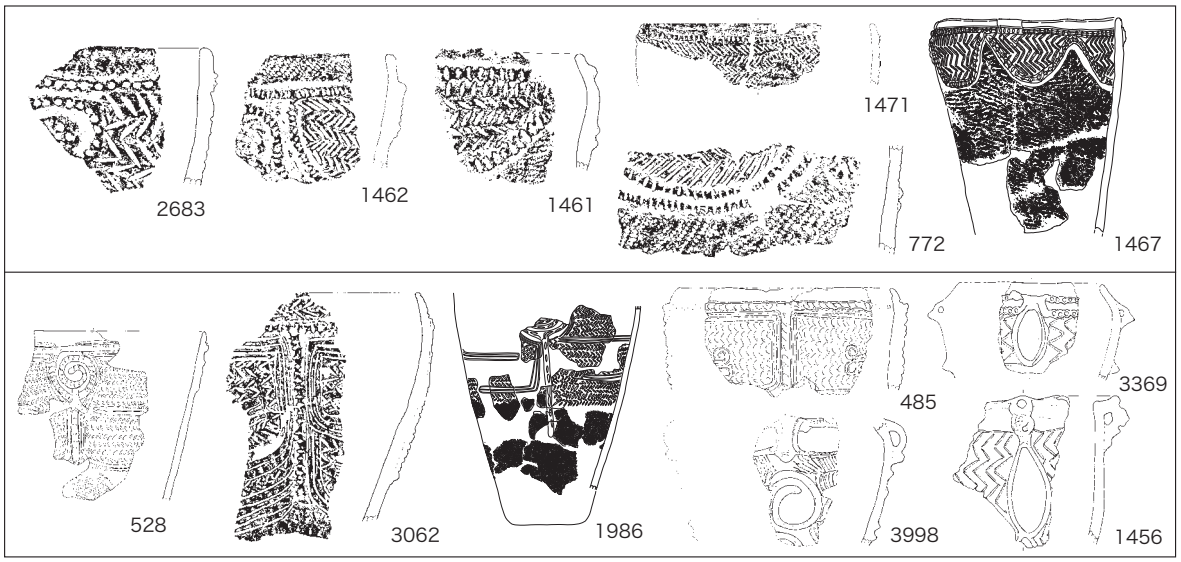


1．第Ⅰ群第３ａ３類

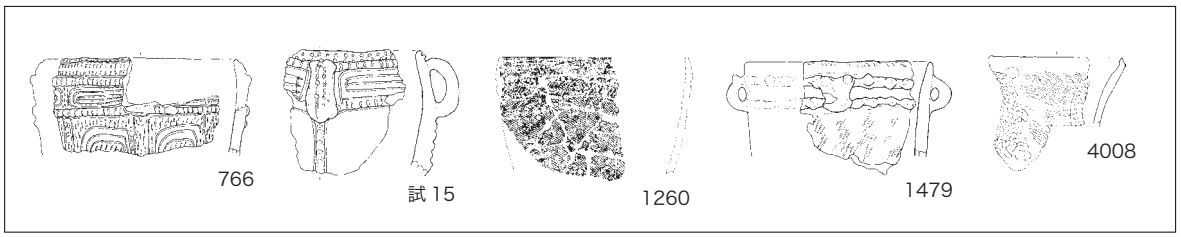


2．第Ⅰ群第３ａ４類

第 15 図　土器分類図（5）



1．第Ⅰ群第３ａ５類・第３ａ６類



2．第Ⅰ群第３ａ７類・第３ａ８類

第 16 図　土器分類図（6）

ａ５類：口縁部に一本の隆帯区画がめぐり、その下部は波状隆帯によって区画して、区画内に横ハ字文を充填するもの(第16図1上段)。胴部下半の懸垂文は持たない。沖ノ原Ⅱ式後半にあたる。

ａ５－１類：波状隆帯の波頂部に渦巻文が付されるもの（772・1462・2683)。

ａ５－２類：波状隆帯の波頂部に渦巻文等を持たないもの（1461・1467・1471)。

ａ６類：口縁部に隆帯区画が一本めぐり、胴部上半の区画内に横ハ字文を充填するもの（第16図1下段)。胴部下半には縦位懸垂文を持たない。沖ノ原Ⅱ式後半に属する。

ａ６－１類：口縁部隆帯区画下の胴部上半を三本一単位のコ字状沈線文により区画し、区画内に横ハ字文を充填するもの（485・528・1986・3062)。

ａ６－２類：口縁部隆帯区画下の胴部上半の区画内に横ハ字文を充填するもので、橋状把手や８字状懸垂文が特徴的である（1456・3369・3998)。

ａ７類：口縁部に二本の隆帯がめぐり、橋状把手や瘤状突起などが付されるもの（第16図2：試15･766･1260･1479)。隆帯間に横長の沈線文や横ハ字文が充填される。沖ノ原Ⅱ式に属する。

ａ８類：口縁部に楕円区画を描き、区画内に刺突文を充填するもの（第16図2：4008)。

ａ９類：口縁部上端を沈線によって区画して、胴部に縄文・条線文等の地文を施す一群で、胴部に沈線によってＪ字状文や逆Ｕ字状文を連続的に描くものもある（第17図1：1090・1141・1846・1984・2968)。沖ノ原Ⅰ式に属する。

ａ10類：口縁部に一本の隆帯区画がめぐり、胴部は地文のみになるもの（第17図2：586・1485・3389)。隆帯上の加飾は、刻目や指頭・骨状の施文具で圧痕されるものがある。沖ノ原Ⅱ式にあたる。

a11類：口縁部の端部を数単位で内側に窪ませるもの（第17図2：789）

b類　大木9式土器・大木10式土器（註36）に類似するもの（第17図3）。

b1類：隆沈線による渦巻文や縦位懸垂文を描くもので、隆帯間の縄文は充填される（538・886・1123・1128・1129・1171・2701）。4単位の波状口縁が特徴的である。大木9式古段階に比定される。

b2類：胴部に逆U字状文を連続的に描くもので、沈線区画内に縄文が充填される（1853）。大木9式新段階に比定される。

b3類：口縁部に内屈して区画され、その下に略方形の沈線文を描くもの。変容しているが、大木10式新段階の資料と考えられる（4022）。

c類　加曽利EⅢ式、Ⅳ式土器（註37）である（第17図4）。

c1類：加曽利EⅡ式土器。口縁部には渦巻文や横位楕円文などを描き、胴部には縦位磨消懸垂文や蛇行沈線文を施すもの（352・888・1132・1499・2015・4030）。

c2類：口縁部に無文帯を有し、微隆起線文により胴部上半に渦巻文、胴部に∩字状文を描くもの（759）。加曽利EⅣ古段階の資料と考えられる。

c3類：加曽利EⅣ式土器。口縁部に無文帯を有し、沈線文や微隆起線文により∩字状文などを描出するもの（776・783・4055）。

c4類：釣手が付く深鉢（3329）。

d類　連弧文系土器（註38）に類似するもの（第17図5：2007）。

e類　唐草文系土器（註39）に類似するもの（第17図5：1107・4057）。

f類　曽利Ⅲ式土器（註40）に類似するもの（第17図5：893）。

g類　串田新式土器（註41）に類似するもの。

h類　両耳壺（註42）（第17図5：1862）。

i類　有溝小把手土器（註43）。文様が沈線で施され、赤彩が施されるものがある（第17図5：2801）。

j類　瓢箪形注口土器（註44）。微隆起線文により渦巻文が描かれ、赤彩が施される（第17図5：1575）。

第4類　有孔鍔付土器（註45）（第17図5：4082）

第5類　粗製の深鉢形土器（第18図1）

a類　胴部がやや開き気味に立ち上がるもの。口唇部に入字状の突起を有するものもある（2166・2207）。

b類　胴部が膨らみ、頸部が括れて口縁部がやや内湾するもの（913・1073・4067・4077）。

c類　キャリパー形を呈し、胴部が直線的に立ちあがるもの（1070・4064）。

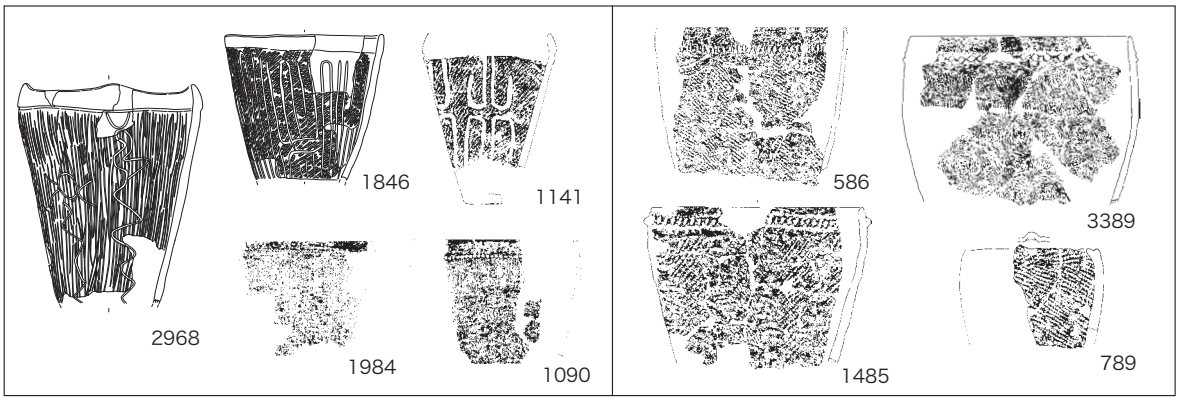
d類　胴部がやや外反気味に立ち上がるもの（2152）。

e類　胴部がやや膨らみ、口縁部が外反するもの（2123）。

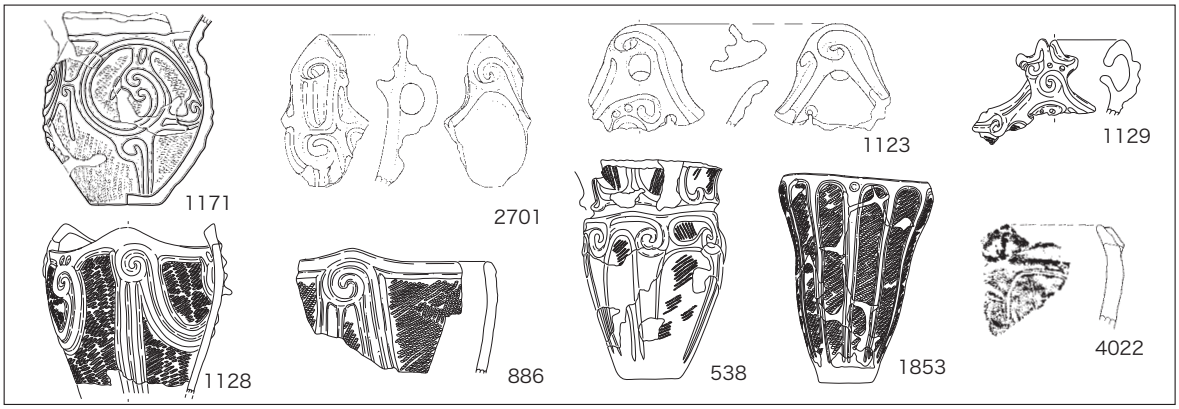
f類　胴部がやや外反気味に立ち上がるもので、口縁がやや内湾して口唇部が無文部になるもの（996・1697）。

g類　胴部がやや膨らみ、口縁部がやや内湾するもの（1297・1627・1629・1631）。

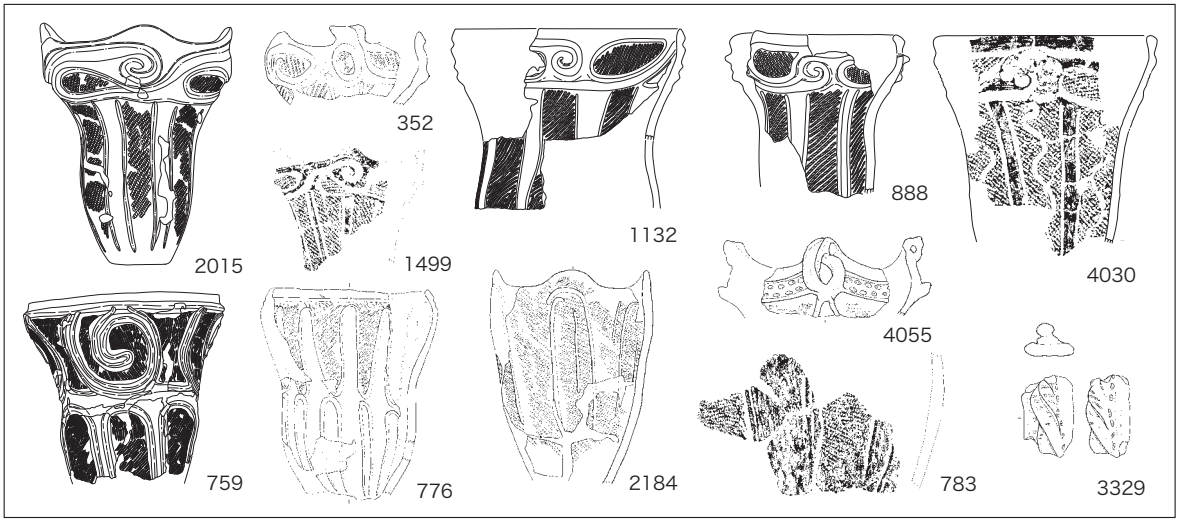
第6類　中期の浅鉢形土器（第18図2）



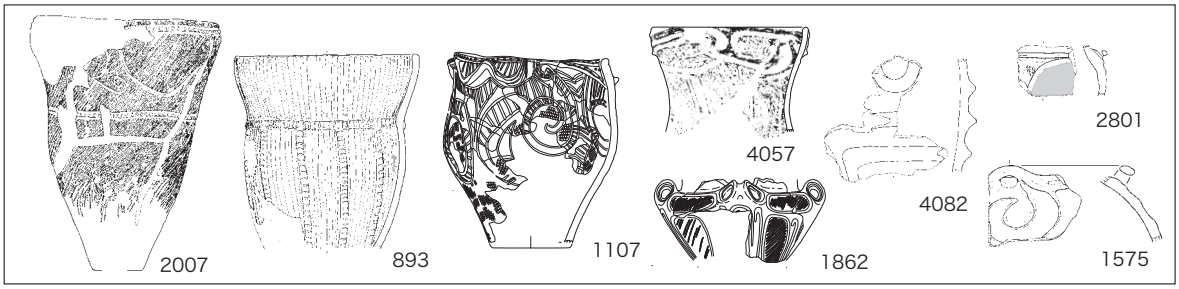
1．第Ⅰ群第３ａ９類　　2．第Ⅰ群第３ａ10類・第３ａ11類



3．第Ⅰ群第３ｂ類

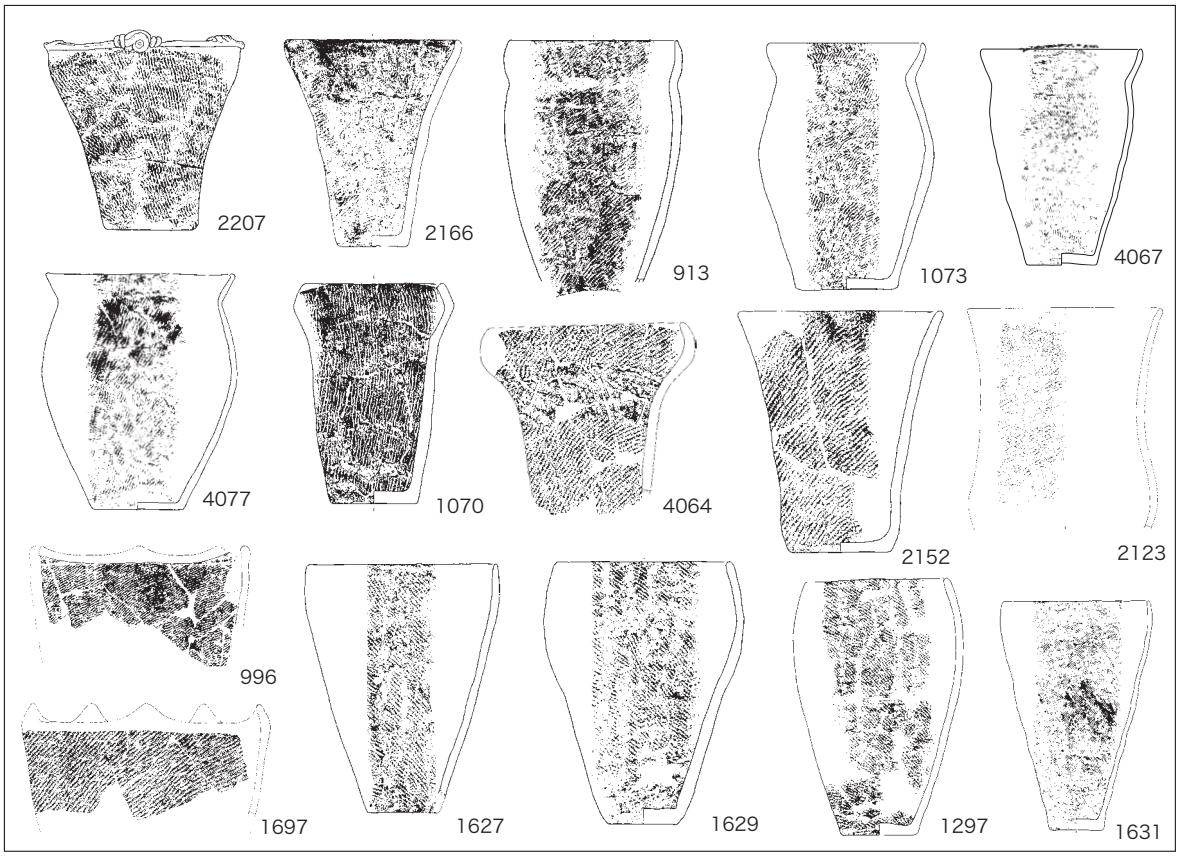


4．第Ⅰ群第３ｃ類

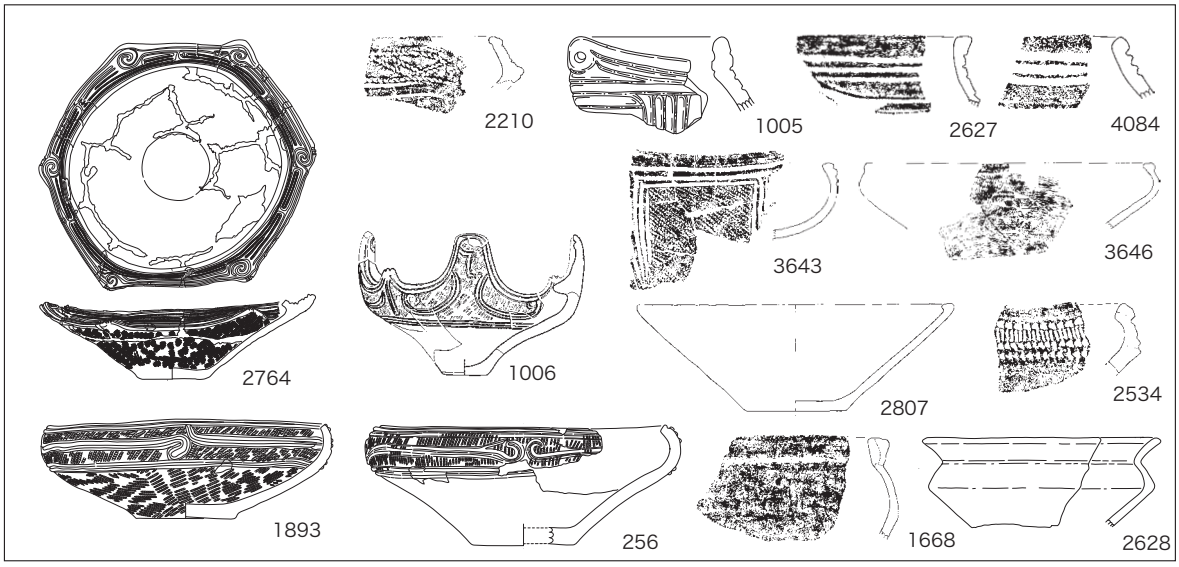


5．第Ⅰ群第３ｄ類～第３ｇ類・第３ｈ類・第３ｉ類・第３ｊ類・第４類

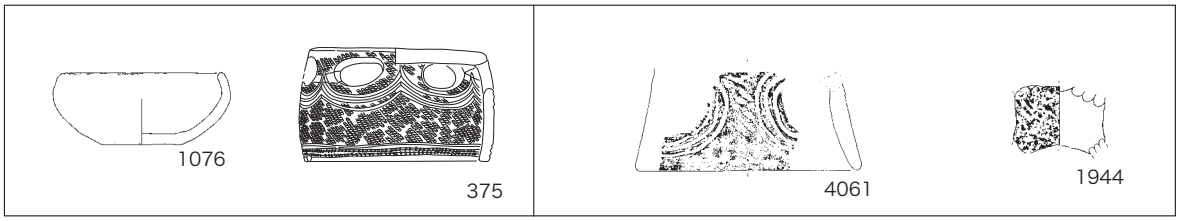
第 17 図　土器分類図（7）



1．第Ⅰ群第５ａ類～第５ｇ類



2．第Ⅰ群第６ａ類～第６ｅ類



3．第Ⅰ群第７ａ類～第７ｃ類

第 18 図　土器分類図（8）

a類　北陸系の浅鉢で、ソロバン玉形を呈する（註46）。口縁部に文様帯を有し、横方向の半隆起線文を施すもの。赤彩されるものがある（1005・2627・4084）。

b類　北陸系の浅鉢で、口縁部がキャリパー形に内湾して、口唇部が肥厚するもの（3643・3646）。

c類　東北系の浅鉢（註47）で、口縁部が波状になり、渦巻文を施すもの。

c 1類：大木8 a式期の浅鉢である（1006・2210・2764）。

c 2類：大木8 b式期の浅鉢で、胴部が無文もしくは地文縄文になり、口縁部に隆帯による文様を施すもの（256・1893）。

d類　関東系の浅鉢（註48）で、胴部が無文になるもの。胴部が膨らんで、口縁部が外反するか垂直になるもの。赤彩されるものがある（1668・2534・2628）。

e類　胴部が直線的に立ち上がるもので、口唇部が折り返し口縁になるもの（2807）。

第7類　中期のその他（第18図3）

a類　鉢形を呈する土器（1076）。

b類　台形土器（註49）（375）。

c類　台付土器をまとめたもの（1944・4061）。

<第Ⅱ群 後期初頭～中葉の土器群>

第1類　後期初頭（三十稲場式期）の土器群

a類　三十稲場式土器（註50）で、胴部が膨らみ頸部が括れて口縁部が外反する一群。口縁部の4単位の橋状把手と胴部刺突文が特徴である（第19図1）。

a 1類：胴部に瘤状の貼付文（突瘤文）が付されるもので最古段階に位置づけられる（1524・3370・4090）。

a 2類：胴部に刺突文を施すもの。三十稲場式古段階に比定される（588・1528・2774・2818）。

a 3類：胴部に刺突文を施すもので、胴部に沈線や隆帯により懸垂文などの文様を有する（1531・2391a・2391c・2971・3478・4099）。三十稲場式新段階に比定される。

a 4類：頸部の隆帯区画は不明瞭で、胴部に細かな刺突文を施すもの（3477）。

a 5類：胴部が無文になるものや縄文を施すもの（2390・4096）。

b類　称名寺Ⅱ式土器（註51）と考えられるもの（第19図2：1582・2407・3400・3473a・b）。

c類　気屋式土器（註52）の影響と考えられるもの（第19図3：2786）。

d類　口縁部に隆帯区画がめぐり、胴部が膨らんで口縁部が外反する粗製的土器群（第19図3：2789・3144）。

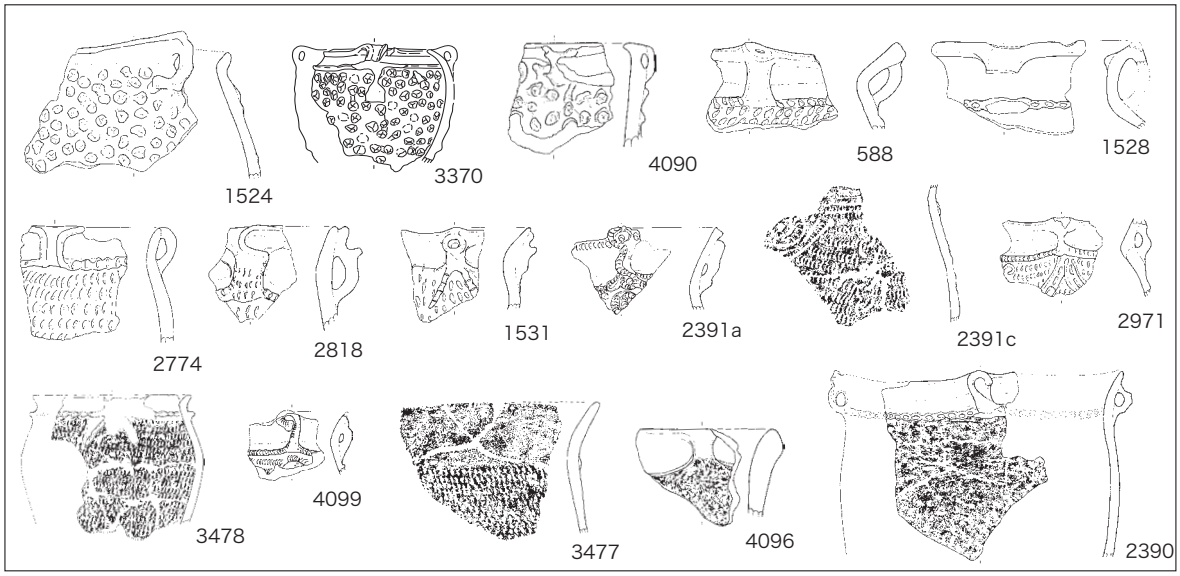
第2類　後期前葉（南三十稲場式期）の土器群（第19図4・5、第20図1）

a類　南三十稲場式土器（註53）で、口縁部に幅狭な文様帯を有し、胴部に文様を施すもの（第19図4）。

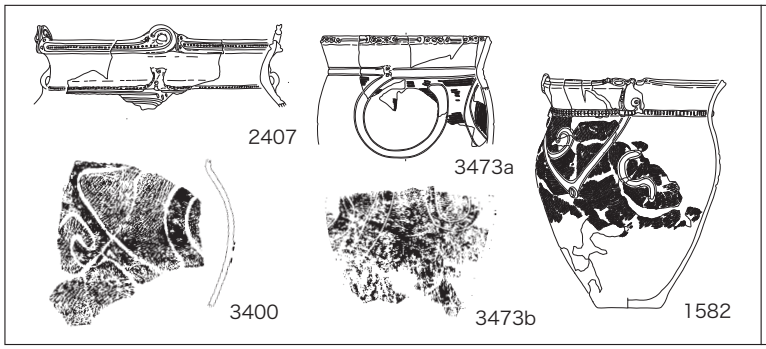
a 1類：胴部に三本一組の沈線で三角形や米字状区画などの磨消縄文を施すもの（655・1595・3031・3419・4123）。口縁部には渦巻文・円文・同心円文・横線文・刻目文などを施す。

a 2類：細沈線を縦位の沈線帯などで集合沈線文を施すもの（1547・3036）。

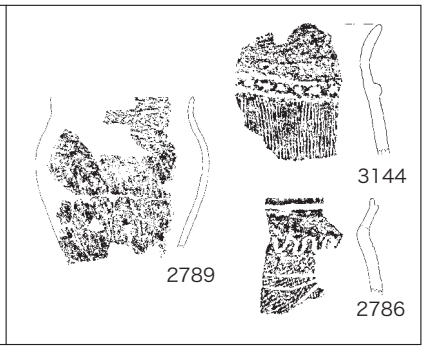
a 3類：頸部を横位の沈線帯などで区画するもの（4126）。



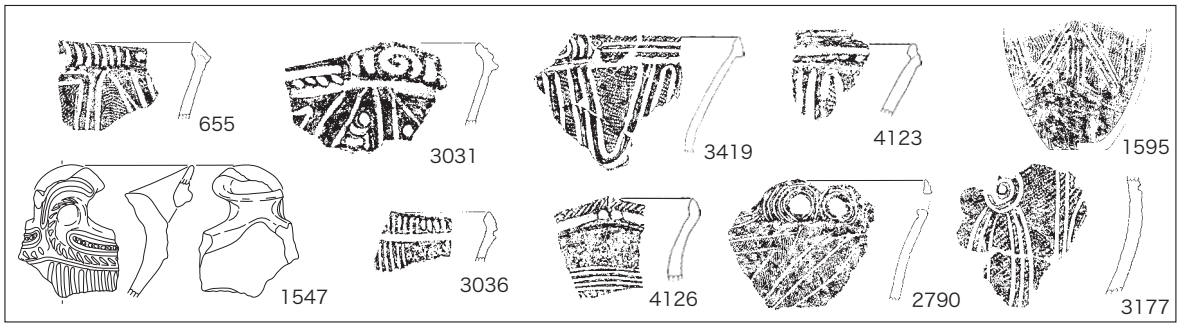
1．第Ⅱ群第１ａ類



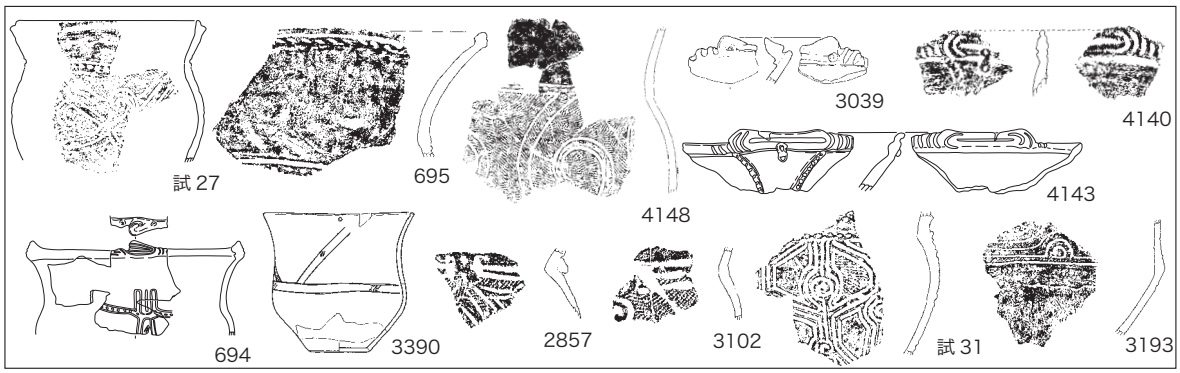
2．第Ⅱ群第１ｂ類



3．第Ⅱ群第１ｃ類・第１ｄ類



4．第Ⅱ群第２ａ類



5．第Ⅱ群第２ｂ類

第 19 図　土器分類図（9）

a 4類：二本一組の沈線によって三角形などの幾何学的な磨消縄文を描くもの（2790）。

b類　金魚鉢形を呈し、頸部に無文帯を有する一群で、「十三本塚類型」（註 54）と呼称されるもの（第19図5）。

b 1類：口縁部の文様帯を有し、横線文・渦巻文・同心円文・刻目文を描くもの（試27・695・4148）。

b 2類：口縁部の表裏に文様を有するもの（694・3039・4140・4143）。

b 3類：口縁部の内面に文様を有するもの（3390）。

c類　朝顔形を呈し、口縁部に一本〜三本の隆帯がめぐり、胴部には三角形区画など幾何学的な磨消縄文を描く一群。黒色によく研磨された薄い土器である（第20図1）。

c 1類口縁部に隆帯がめぐらないもの（1552・3452）。

c 2類口縁部に隆帯が一本〜三本めぐるもの（1555・2672・2767・2993・2994）。

c 3類口縁部に数条の弧線文を描くもの（1553）。

c 4類口縁部に横位の多条沈線文がめぐり、口唇部に刻みを伴うもの（2997）。

第3類　後期中葉（三仏生式期（註 55））の加曽利Ｂ 1式並行期の土器群（第20図2）

a類　口縁部が無文もしくは数条の横位沈線文がめぐり、内面に横位沈線文や刺突列が施されるもの（3195・3211 〜 3213・3216・4210）。

b類　口縁部に帯縄文が横位にめぐるもの（3200・4221）。

c類　口唇部に 8 字状や耳状の突起を有し、口縁部に横位沈線と突起下に「の」字状文などの区切文が施される（4197・4198・4200）。

第4類　後期前半期の粗製土器（第20図3：2433・2436）

第5類　後期前半期の鉢形土器（第20図5：2425）

第6類　後期前半期の浅鉢形土器（第20図4）

a類　口縁部に文様帯を持つもの（1574）。称名寺Ⅱ式〜堀之内 1 式古段階。

b類　口縁部内面に渦巻文や横線などの沈線文がめぐるもの（3183･4233）。堀之内 2 式に帰属する。

c類　口縁部内面に横位の沈線帯がめぐるもの。加曽利Ｂ 1式に並行する。

第7類　後期前半期の注口土器（第20図6）

a類　無文で、微隆起線文や幅広の沈線で文様を描く一群（899・2174・3141）。

b類　磨消縄文で文様を描く一群（2427・4248）。

c類　多条沈線文で文様を描く薄手の一群（3019・3020）。

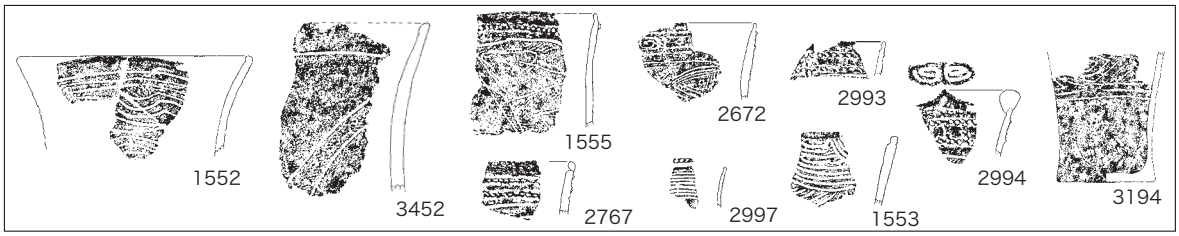
第8類　蓋形土器（第20図7）

a類　列状の瘤状突起などで装飾され、頂部に摘みが付くもの。

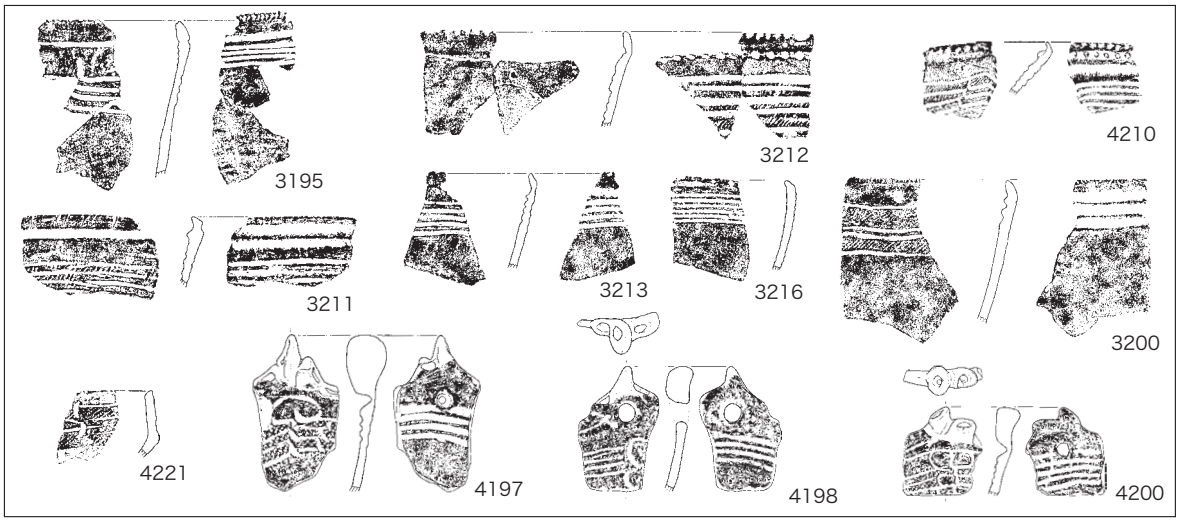
b類　刺突文を前面もしくは区画内に施すもので、頂部に摘みが付くもの（2428・2429・2431・2848・4236）。

c類　無文地に加飾隆帯を貼り付けるもの（1572・1573）。

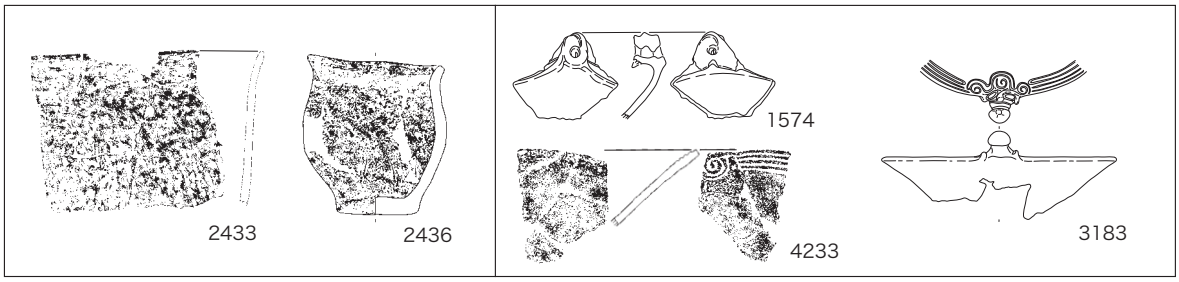
d類　沈線文や磨消縄文で文様を描き、橋状把手が二対付くもの（2070・2071・3210）。



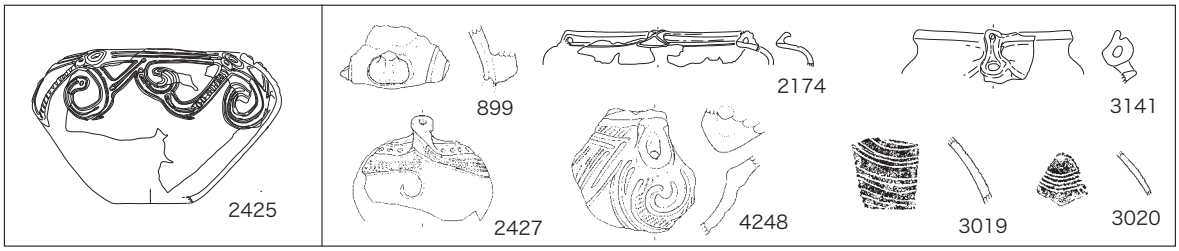
1．第Ⅱ群第２ｃ類



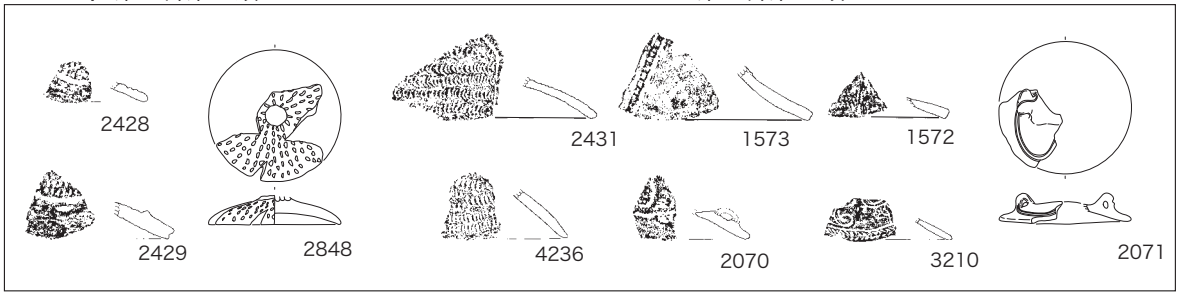
2．第Ⅱ群第３類



3．第Ⅱ群第４類　　4．第Ⅱ群第６類



5．第Ⅱ群第５類　　6．第Ⅱ群第７類



7．第Ⅱ群第８類

第 20 図　土器分類図（10）

2．時期対比

本遺跡の各分類を対比すると第５表のようになり、道尻手遺跡の編年案（註 56）をもとに、近年の土器編年の成果を加味して整理した。第Ⅰ群は中期で、第Ⅰ群第１類が１期、第Ⅱ群第２類が２期、第Ⅱ群第３類が３期、第Ⅱ群は後期で、第Ⅲ群第１類は４期、第Ⅲ群第２類は５期、第Ⅲ群第３類が６期とし、さらに各期は２～３期に細分される。従来の土器編年との対応関係は次のようにまとめられる。

１期は大木８ａ式並行期であり、馬高式期前半・中頃（註 57）にあたる。従来の研究では、大木８ａ式土器は二細分（註 58)、三細分（註 59）がある。隣接する福島県では二細分（註 60）もしくは三細分（註 61）されているが、新潟県の大木式土器は地域的変容が強いため、単純に他地域の編年に対比できるものではない。この時期には、曲隆線文系の土器群に火焔型土器や王冠型土器、焼町類型などが存在し、これらの共伴関係について検討が必要ではあるが、ここでは大木８ａ式並行期を三段階に細分しておきたい。

１ａ期は大木８ａ式並行期古段階で、第Ⅰ群第１ａ１類と第１ａ２類が伴う。文様は、Ｙ字状懸垂文や横位楕円区画を持つなど大木７ｂ式的要素が残るのが特色である（註 62)。遺構出土資料は、本遺跡の第９号住居跡と第 13D 号住居跡でまとまって出土しているが、一括性はそれほど高いとは言えない。

１ｂ期は大木８ａ式並行期中段階で、前段階との区分が明瞭ではないが、本段階は第Ⅰ群第１ａ３類に加えて第１ｂ類や第１ｄ類が伴う。この時期の特徴は、口縁部文様帯が狭く、圧痕隆帯やＳ字状突起・鶏頭冠状突起などが付され、頸部の対向弧線文などである。遺構出土資料は良好な事例に乏しい、津南町道尻手遺跡第 15A 号住居跡出土資料の一部（註 63)、が本段階にあたると想定される。この段階には、火焔型土器が明確に伴うが、火焔型土器の出現過程に関しては検討を要する問題である。

１ｃ期は大木８ａ式並行期新段階で、第Ⅰ群第１ａ４類～第１ａ７類に加えて、第１ｂ類～第１ｄ類が伴う。この段階の特色は、頸部・胴部の横帯区画内の波状文であり、胴部渦巻文や地文に撚糸文が多くなる傾向が見られる。加えて、胴部が寸胴な火焔型土器や王冠型土器、三段環状把手を持つ第Ⅰ群第１ｃ類などが伴う。遺構出土資料は、南魚沼市原遺跡 004T-P4 覆土出土土器（註 64)、本遺跡の第 11 号住居跡の炉跡を中心とする資料が良好な出土事例であり、第 30 号、第 42 号、第 43 号、第 45 号住居跡でも比較的まとまって出土している。

２期は大木８ｂ式並行期であり、馬高式後半・最終末（註 65）と後半期は栃倉式（註 66）にあたる。従来の研究では、二細分（註 67）または三細分（註 68）され、道尻手遺跡の考察でも三細分される。

２ａ期は大木８ｂ式並行期古段階で、馬高式後半（註 69）にあたる。本段階には第Ⅰ群第２ａ類に加えて、火焔型土器などの第１ｄ類が伴う。大木８ｂ式土器の文様は、口縁部などの剣先文が特徴的であるが、全体的に隆帯は低く接地部分が未調整のものも見られる。加えて、火焔型・王冠型土器などの曲隆線文土器群が伴い、胴部が窄まる器形になる。この段階の遺構出土資料は、道尻手遺跡第 30 号住居跡出土資料や十日町市森上遺跡１号住居跡出土資料（註 70)、堂平遺跡 O9-P29、等があげられる。

２ｂ期は大木８ｂ式並行期中段階で、第Ⅰ群第２ｂ類が伴う。これに前段階まで認められた火焔型土器・王冠型土器（第１ｄ類）などの隆帯文土器群が伴うかどうか見解が分かれるところである（註 71）が、中期前葉以来の多系統土器構成が本段階を前後して収斂していく傾向がある。文様は、口縁部隆帯文の渦巻状突起や胴部の腕骨文などの縦位懸垂文や矢羽状沈線文を特徴とし、隆帯表現が目立つようになる。

この段階の遺構出土資料は、南魚沼市万條寺林遺跡第４号住居跡出土資料（註 72）や十日町市笹山遺跡 AB 区５号炉出土資料・JP 区 11 号炉出土資料（註 73)、十日町市幅上遺跡第１号住居跡出土資料（註 74）があげられる。

２ｃ期は大木８ｂ式並行期新段階で、栃倉式（註 75）にあたる。本段階には、第Ⅰ群第２ｃ類・第２ｄ類・第２ｅ類が伴う。文様は、胴部の双頭渦巻文や眼鏡状突起・縦位の半隆起線文を特徴とし、全面刺突文の土器群（第Ⅰ群第２ｃ４類）や隆帯文間に弧状・横位の沈線文を充填する「郷土式」（註 76）に類似する土器群(第Ⅰ群第２ｃ５類)が伴う。この時期の良好な遺構出土資料は乏しいが、道尻手遺跡第９号住居跡や、原遺跡第 11 号住居跡、長岡市中道遺跡 16 号住居跡（註 77、長岡市栃倉遺跡第９号住居跡（註 78)、本遺跡の第 18 号住居跡、H7-P6 で比較的まとまって出土している。現状では、大木８ｂ式期の最新段階に位置づけられるが、大木９式古段階に下る可能性も残される。

３期は沖ノ原式期で、大きくⅠ式とⅡ式に二分され、さらに各期は二段階もしくは三段階に細分される（註 79)。沖ノ原Ⅰ式を３ａ期、沖ノ原Ⅱ式を３ｂ期とする。３ｂ期の後半は、後期に含まれると考えられるが、関東系の称名寺Ⅰ式との共伴資料が乏しいため、現状では明確な線引きは難しい。

３ａ期には、第３ａ１類・３ａ２類・３ａ３類・３ａ９類が伴い、在地的な土器群を主体として、これに大木９式や加曽利ＥⅢ式、曽利式、連弧文土器などが伴い、深鉢以外の器種は非在地系で占められる。遺構出土資料は、津南町沖ノ原遺跡第１号住居跡床面出土資料（註 80）や南魚沼市五丁歩遺跡第１号住居跡出土資料(註 81)、十日町市笹山遺跡 AB 区 42 号炉・炉体土器、万條寺林遺跡第 36 号住居跡出土資料、本遺跡 13 住 P1 出土資料、等がある。この他にも本遺跡では第 38 号住居跡、第 50 号住居跡、H8-P7、I1-P1、I8-P6、K8-P31、出土資料でまとまる。少なくとも二段階に細分されると考えられる。

３ｂ期には、第３ａ４類・３ａ５類・３ａ６類・３ａ７類・３ａ 10 類・３ａ 11 類が帰属し、沖ノ原Ⅱ式は、

時期			堂平分類	道尻手	遺構出土資料
堂平		型式			
1期	a	大木８ａ式並行期（古）	第Ⅰ群第１ａ１類，第１ａ２類，第１ｂ類 第１ｄ類，第１ｅ類	Ⅳ期	清水上３住、16 住、堂平９住、13D 住
	b	〃　（中）	第Ⅰ群第１ａ３類，第１ｂ類，第１ｄ類		道尻手 15A 住
	c	〃　（新）	第Ⅰ群第１ａ４類，第１ａ５類，第１ａ６類 第１ｂ類，第１ｃ類，第１ｄ類		原 004 Ｔ -P4、堂平 11 住、30 住、45 住
2期	a	大木８ｂ式並行期（古）	第Ⅰ群第２ａ１類，第２ａ２類，第２ａ３類 第２ａ４類，第１ｄ類	Ⅴ期	森上１住、道尻手 30 住、堂平 O9-P29
	b	〃　（中）	第Ⅰ群第２ａ２類，第２ａ３類，第２ａ４類 第Ⅰ群第２ｂ類		万條寺林４住、栃倉２住、幅上１住、笹山 JP 区 11 炉、 AB 区５炉
	c	〃　（新）	第Ⅰ群第２ｃ類		栃倉９住、原 11 住、中道 16 住、道尻手９住 堂平 18 住、H7-P6、
3期	a	沖ノ原Ⅰ式期	第Ⅰ群第３ａ１類～第３ａ３類，第３ａ９類 第３ｂ１類，第３ｂ２類，第３ｃ１類，第３ｄ～３ｆ類	Ⅵ期	沖ノ原１住、笹山 AB 区 42 炉、万條寺林 36 住、五丁歩１住 堂平 38 住、50 住、K8-P31、13 住 -P1、H8-P7、I1-P1
	b	沖ノ原Ⅱ式期	第Ⅰ群第３ａ４類，第３ａ５類，第３ａ６類 第３ａ７類，第３ａ 10 類，第３ｃ 11 類，第３ｃ２類，第３ｃ３類		道尻手 21 住・炉、20 住、10 炉、E3-P42 堂平 32 住、59 住
4期	a	三十稲場式期（古）	第Ⅱ群第１ａ１類，第１ａ２類，第１ｄ類	Ⅶ期	城之腰 R24-P30、北野 SK126、アチヤ平 SK446 大樽 DY63
	b	〃　（新）	第Ⅱ群第１ａ３類，第１ａ４類，第１ｂ類，第１ｄ類		堂平 I6-P1
5期	a	南三十稲場式期（古）	第Ⅱ群第２ａ１類，第２ｂ１類	Ⅷ期	
	b	〃　（新）	第Ⅱ群第２ａ２類～第２ａ４類，第２ｂ２類 第２ｂ３類，第２ｃ類		原 17 住
6期		三仏生式期	第Ⅱ群第３ａ類～第３ｃ類	Ⅸ期	堂平 N7-P1

第５表　土器分類対比表

口縁部にめぐる一帯の隆帯区画と有尾渦巻状懸垂文を特徴とする。この段階には加曽利ＥⅣ式が伴うが、大木 10 式は少なくなる傾向がある。遺構出土資料は、道尻手遺跡第 21 号住居跡炉内出土資料、本遺跡第 32 号住居跡の合口埋甕を中心とする出土資料、第 59 号住居跡の炉体土器・埋甕、など比較的良好な出土事例がある。これに加えて、３ｂ期の中でも比較的新しい段階に位置づけられる資料は、胴部懸垂文の消失と区画内への横ハ字文の充填を特徴とする。さらに、口縁部の蓋受け状隆帯や橋状把手を持つ土器群も散見され、次段階の三十稲場式土器の出現と関連するものと考えられる。遺構出土資料は、道尻手遺跡第 20 号住居跡の埋甕・炉内、第 10 号炉内、E3-P42 出土資料があり、第 10 号炉跡などでは称名寺Ⅰ式土器との伴出が認められる。本段階の変遷は、津南町八反田遺跡（註 82）における住居跡の切り合い関係（8住・9住・12 住）からも明らかである。

４期は三十稲場式期であり、二細分（註 83）や三細分（註 84）が提唱されているが、古い段階の様相が明瞭ではないことから、従来の二期区分を用いる。

４ａ期は、第Ⅱ群第１ａ１類・第１ａ２類・第１ｂ類が対比され、文様は胴部の花弁状刺突文を特徴とし、内面屈曲部に蓋受状の隆帯を持つものもある。瘤状貼付文や「く」字状に外反しない口縁部形態は、より古い段階の要素として認識される。遺構出土資料は、４ａ期は小千谷市城之腰遺跡 R24-P30（註 85）、阿賀町北野遺跡 SK126（註 86）等があり、これに称名寺Ⅱ式土器が伴う。また村上市アチヤ平遺跡 SK446（註 87）や山形県の米沢市大樽遺跡 DY63（註 88）では、大木 10 式直後段階の土器群と三十稲場式土器が伴出する事例があり、三十稲場式土器の成立期に関してはまだ不確定な部分がある。

４ｂ期は、第Ⅱ類第１ａ３類・第１ａ４類の土器群で、文様は胴部に沈線文と刺突文を施すもの、細かい胴部刺突文が施すものがある。また阿賀野川以北で認められる平面形が方形状になる口縁部形態は、本地域では明確ではなく、明らかな様相の違いが認められる。遺構出土資料は非常に乏しく、本遺跡 I6-P1 から良好な出土事例が確認される。

５期は南三十稲場式期であり、近年、柏崎市や奥三面遺跡群において三期区分が提唱されている（註 89）が、本地域はやや土器様相が異なるため対比は難しいことから二期区分とする。

５ａ期は、第Ⅲ群第２ａ１類・第２ｂ１類・第２ｂ２類などが対比され、口縁部文様帯と磨消縄文による胴部三角形区画や米字状区画文などの文様を描くもので、太い沈線と地文縄文を施す。しかし、この時期の遺構出土資料は良好なものが確認できない。

５ｂ期は、第Ⅲ群第２ａ３類・第２ｂ３類・第２ｃ類が対比される。この時期は器壁厚が薄くなる傾向があり、文様は沈線が細線化するとともに多条化し、地文が無文化の傾向を示す。加えて、堀之内２式土器や「石神類型」（註 90）とされる一群も確認される。

この段階の遺構出土資料は、原遺跡第 17 号住居跡覆土出土資料（註 91）があり、従来より南三十稲場式新段階として理解されている。

６期は、加曽利Ｂ１式並行期であり、三仏生式に含めるかどうか見解が分かれるところであるが、三仏生式の古い段階に位置づけるのが妥当であろう。この段階は第Ⅲ群第３類が対比され、遺構出土資料は本遺跡 N7-P1 土坑出土資料などがあげられる。

本報告書の事実記載は、以上のような時期細別に従って記述したい。

第２節　石器の分類

１．概　要（第 21 図）

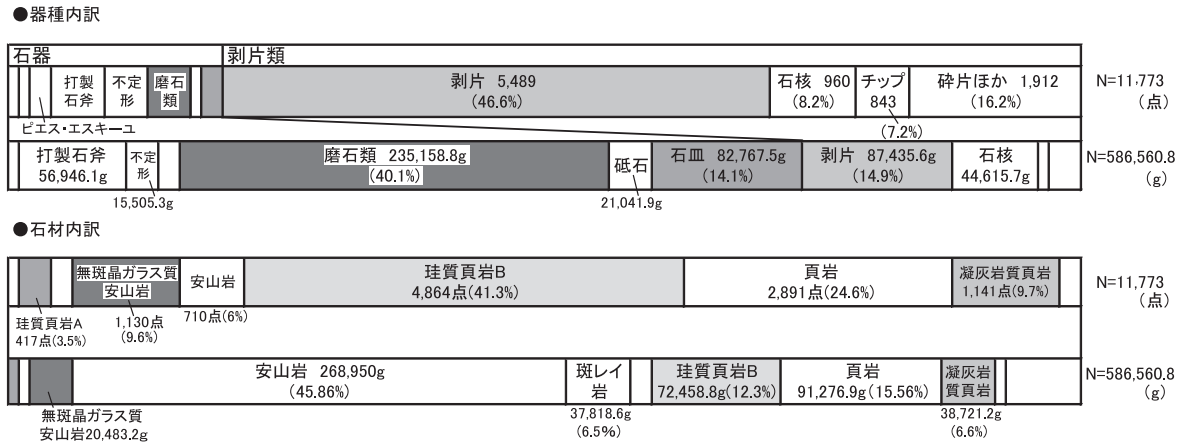
ここでは、本報告の遺構記載や本遺跡出土の石器内容を把握する上で必要と考えられる石器の器種や部位、加工、使用石材などの分類内容と用語についてまとめる。なお、各器種に関する詳細な分析内容とこれに必要な細別内容は第Ⅳ章第４節３項の石器各説に記載した。

本報告では、出土した石製遺物（広義の石器）の区分として、狭義の石器（いわゆる「ツール」）およびその製作途中である未成品・未製品を石器、用途不明の石製遺物を石製品、剥片・チップ・砕片、残核など石器・石製品以外の石製遺物を剥片類と呼称する。

本遺跡からは、狭義の石器 2,374 点、未成品・未製品 166 点、剥片類 9,234 点が出土した。これらは、出土土器の内容から縄文時代中期中葉から後期前葉までの時期のものが大半を占めると考えられる。

器種の内訳では、打製石斧（575 点）と磨石類（509 点）で全体の 45.6% 占めるが、縄文時代中期の石器組成としてはやや低い比率といえる。一方、ピエス・エスキーユ（245 点）、石鏃（103 点）、石錐（80 点）などの小形剥片石器の数量が当該期の組成としては高い比率（18%）を示す。これらの主要石材である珪質頁岩が剥片・砕片などの状態での出土が多数みられる点からも遺跡内における小形剥片石器製作が活発であったことが伺える。このほか、一定数の出土が見られる器種では磨製石斧（105 点）があげられる。

使用石材では多数を占める蛇紋岩のほか、一定数の在地石材が用いられており、蛇紋岩製磨製石斧の流通を見ていく上で興味深い。また、三脚石器（11 点）、板状石器（６点）、石錘（４点）が極めて少ない出土数であり、縄文時代中期から後期における魚沼地域での石器組成の特徴を示すものと考えられる。



１．石器石材組成表

剥片石器										礫核石器						小計	未成品 / 未製品		合計
石鏃	石錐	石槍	ピエス・エスキーユ	石匙	三脚石器	板状石器	打製石斧	不定形石器	不明	磨製石斧	磨石類	石錘	砥石	石皿	研磨痕を有する石器		石鏃未成品	磨製石斧未製品	
103	80	13	245	8	11	6	575	488	3	105	509	4	29	194	1	2,374	163	3	2,540
4.3%	3.4%	0.5%	10.3%	0.3%	0.5%	0.3%	24.2%	20.6%	0.1%	4.4%	21.4%	0.2%	1.2%	8.2%	0.1%	100.0%	-	-	-

２．石器組成表

第 21 図　石器

2．石器の用語について（第 22 図）

本報告で使用する石器・剥片類・石製品の記載に使用される用語の内容は以下の通りである。

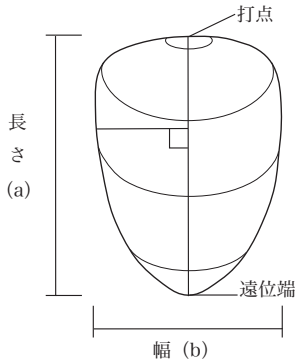
素　材　剥片石器は主要剥離面の打点から遠位端の長さ（a）に対し、これに直交する最大幅（b）が大きいものを横長剥片、小さいものを縦長剥片とした。また、器体の両面に自然面を残すものについては礫素材、分割面を有するものを分割礫素材とした。

剥　片　素材剥片の大きさは、おおよそ次のような目安で分けた。

大型剥片 ...10cm 以上のもの　　中型剥片 ...10cm 未満のもの

小型剥片 ... 3～6 cm 程度のもの

このほか、調整剥片と考えられるものをチップとし、製作時の弾けによると思われるものを砕片と呼称した。



第 22 図　計測部位

二次加工　二次加工の剥離の大きさは、おおよそ次のような目安で分けた。

大型の剥離 ... 1 cm 以上のもの　中型の剥離 ... 6 mm 程度

小型の剥離 ... 2～3 mm 程度　　細かな剥離 ... 1 mm 程度

使用痕・整形痕　器種によって内容は異なるが、以下のように定義した（註 92）。なお、使用痕の観察は肉眼観察によって行った。

磨　痕… 石材に含まれる鉱物の斑晶が平坦に摩滅し、その摩滅範囲に一定の広がりがある痕跡。あるいは、一定の方向性をもつ線状痕を伴う磨耗痕を指す。さらに、敲打によって平坦面を形成された後に磨面が残されたものも磨面とした。なお、磨痕と同様に対象物との摩擦によって生じる痕跡に、以下に述べる研磨痕や擦り切り痕、などがある。

研磨痕… 研磨工具と加工対象物との摩擦によって生じた磨耗痕を指し、研磨工具と加工対象物の加工面には相互の形状の痕跡が残される性質を持つ点で前記の磨痕とは区別される。研磨工具の研磨痕には溝や明瞭な擦痕、刃先痕などの加工対象物との接触によって生じた痕跡を残し、加工対象物の研磨痕には砥面の形状が転移した結果、稜によって区分される作業面が残される特徴を持つ。

敲打痕… 敲打によって、器面が潰れた痕跡を指す。凹凸状に荒れたもの、面的となるものを含む。

凹　痕… 敲打痕の重複によって、明瞭な凹状または浅い凹状となるものを指す。なお、磨石類で凹痕とした場合は、表裏面または側面に残された敲打痕跡、すなわち痘痕状に表面が荒れた状態のものも含む。

（刃部）　使用痕光沢 ... 磨製石斧や打製石斧などの刃部にみられる線状痕を伴う磨耗光沢を指す。

使用痕表現　本報告に使用した石器・石製品の表現・トーンは以下のとおり。

... 磨 痕　　... 敲打痕

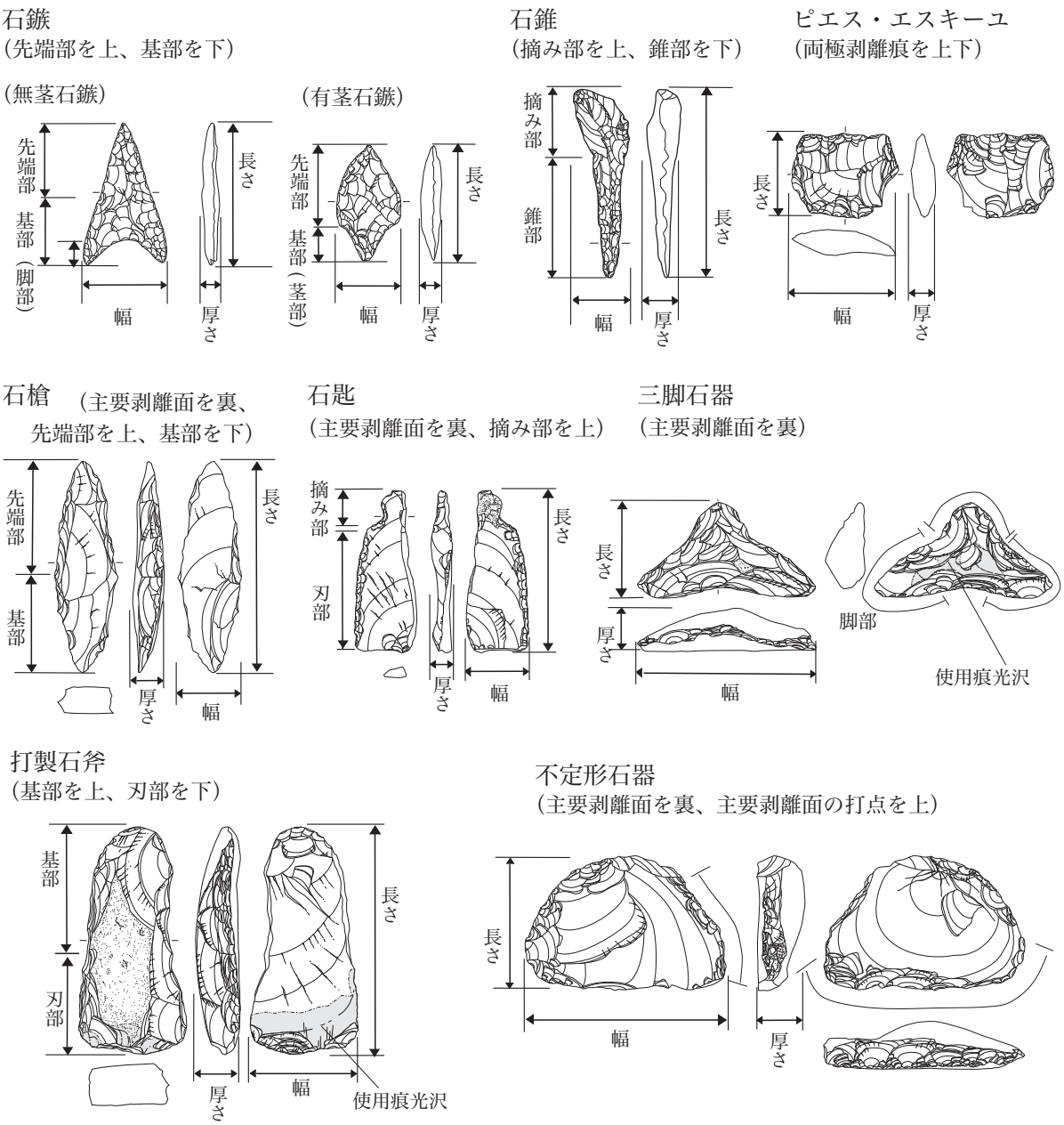
... 研磨痕　　... 使用痕光沢

3．器種分類（第 23・24 図）

石器・石製品の器種分類は、県内または町内の遺跡との比較を考慮し、一部の器種を除き新潟県埋蔵文化財調査事業団・津南町教育委員会の分類内容（註 93）に倣って行った。

1）石　鏃　両側縁を小型剥離の連続によって成形され、両側縁の辺が先端部で交差する尖頭部を持つ鏃形の小形剥片石器を石鏃とした。また、調整が全周して平面形状・側面形状が左右対称となる石鏃完成品を石鏃とし、形状や調整が不十分なものを石鏃未成品とした（註 94）。石鏃の基部形状は、装着方法や製作方法でも異なる「無茎石鏃」「有茎石鏃」があり、後者の方が時期的に後続する形態と考えられる。

2）石　槍　両側縁を大型・小型の連続する剥離によって成形され、両側縁の辺が先端部で交差することで槍形を呈する中形の剥片石器を石槍とした。基部形状により二種に大別される。



第 23 図　石器の分類と部位の名称（1）

3）石　錐　錐部を有する小形・中形の剥片石器を石錐とした。錐部断面形は三角ないし四角形となるように作出され、錐部平面形は棒状またはＶ字状を呈するものがみられる。加工形状は様々なバリエーションを持つことから、結果的に尖頭状の機能部を持つ石器のうち、石鏃、石槍、三脚石器以外を本類とした。

4）ピエス・エスキーユ　両極剥離によって小形の剥片状となった２個１対（または４個２対）の鋭い刃部を有する剥片石器をピエス・エスキーユとした（註 95）。

5）石　匙　素材の両側縁にノッチ状の抉りを作出することで、つまみ状とする突起を一端に持つ剥片刃器を石匙とした。

6）三脚石器・板状石器　両面調整によって三角形または三脚形に成形された剥片石器を三脚石器とし、片面からの周縁調整によって平面形が三角形、円形、不整形をなす板状の剥片石器を板状石器とした（註 96）。三脚石器・板状石器ともに、特定の形状に成形された打製の石製品とする見解もあるが、ここでは三辺の刃部を有する石器という意味から石器の中に含めた。

7）打製石斧　大形の剥片または礫を素材として、表裏面もしくは側面からの直接加撃による大形、中形の剥離によって斧形に成形された剥片石器を打製石斧とした。本器種は二次加工が不十分とみえる資料についても、長軸端部（刃部）に長軸と直交する使用痕光沢が観察されるものが見られる。このため、二次加工が不十分なものでも使用痕が見られることで製品と判別可能なものや、側縁加工が左右非対称なものでも刃部使用が可能とみられる完成品を打製石斧として分類した（註 97）。

8）不定形石器　上記（1）～（7）の定形剥片石器以外に剥片・分割礫を素材とする不定形な刃器類を不定形石器とした（註 98）。

9）磨製石斧　研磨成形を最終調整とする斧形の磨製石器を磨製石斧とした。器体の大きさから、機能の違いが想定される大小に大別され、６cm 以下のものを「小形磨製石斧」（註 99）とした。本遺跡からは、敲打成形の工程まで（作業途中）の未製品、破損資料を刃部や基部に再研磨された痕跡が観察される再生品、破損資料を素材として敲石に転用された転用品など磨製石斧のライフヒストリーを示す資料が確認されている。

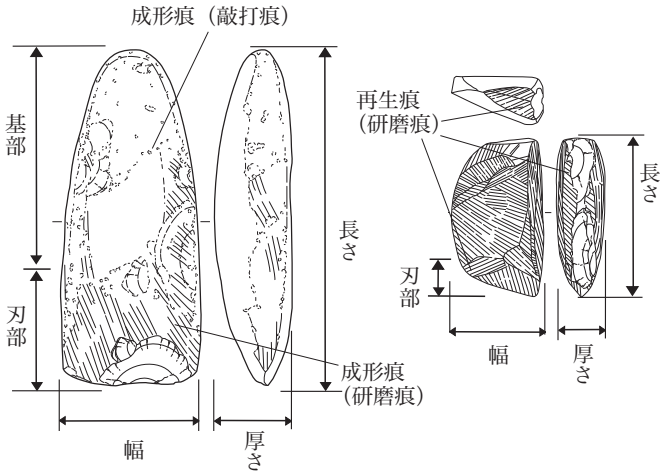
10）磨石類　自然礫または石核、転用石器を素材として、磨痕・凹痕・敲打痕が観察される中形の礫核石器を磨石類とした。使用痕が複合するものが多いため、それぞれの最終使用痕跡による器種名とはせず、一括して磨石類としている。なお、大きさで石皿類との区別が困難なものは使用面が凸面となるものを磨石類、平坦または凹面となるものを石皿類とした。

11）石　錘　素材となる円礫の両端に２個１対（４個２対）の抉り（糸掛部）を有する礫石器を石錘とした。抉り（糸掛部）作出が敲打による「礫石錘」、擦切りによる「切目石錘」がみられる。

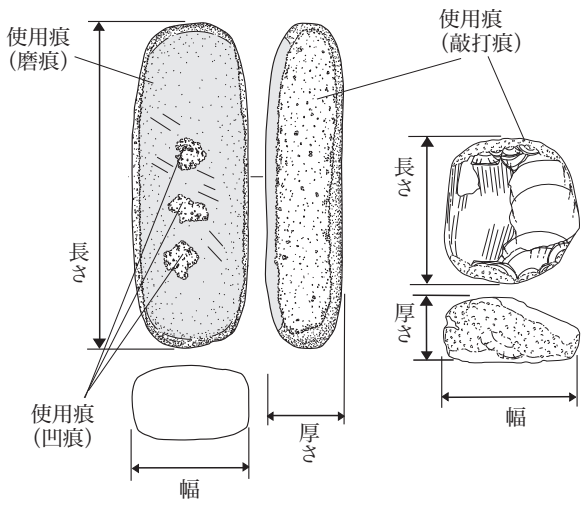
12）砥　石　自然礫あるいは分割礫を素材として、素材表面となる自然面や破断面に、溝状・帯状・平面状などの研磨痕（砥面）が観察される礫石器を砥石とした。

13）石皿類　扁平礫や板状礫などの自然礫を素材として、磨痕・凹痕・敲打痕が観察される大形の礫核石器を石皿類とした。なお、大きさで磨石類との区別が困難なものは使用面が凹面または平坦面となるものを石皿類凸面となるものを磨石類とした。

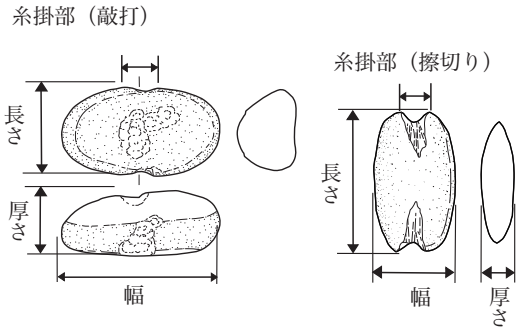
磨製石斧
（基部を上、刃部を下）



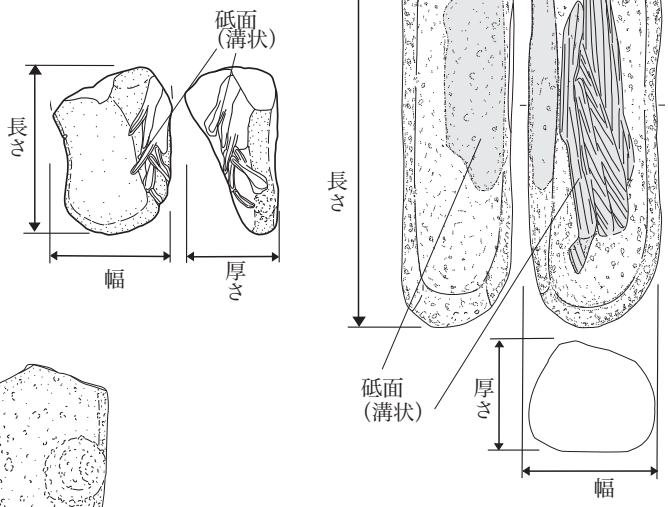
磨石類
（長軸を上下）



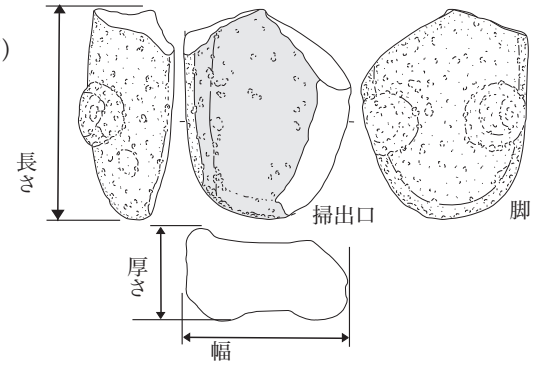
石　錘
（糸掛部を上下）



砥　石
（長軸を上下）



石皿類
（長軸を上下）



第 24 図　石器の分類と部位の名称（2）

４．石器石材

津南町教育委員会では、在地の石材環境の解明を目的として継続的な石材調査を行っている（註 100)。堂平遺跡報告書作成にあたり、剥片石器の岩石肉眼鑑定および露頭調査をパリノ・サーヴェイ株式会社・石岡智武氏に委託して共同実施した。このことによって、堂平遺跡の石材名は、道尻手遺跡の報告や県内で一般に使用された石材内容に加え、石岡智武氏の石材肉眼鑑定した結果に倣ったものになっている。

今回の肉眼鑑定のご指導により、道尻手遺跡の報告や県内で一般に使用されている石材名称と若干の齟齬が生じたことによる混乱を防ぐため、堂平遺跡出土の主な石材内容と露頭調査成果を整理して報告する。なお、以下の文章の中で岩石学的な見解は五十嵐俊雄（2006）（註 101）に依拠して記載した（註 102)。

１）岩石名と石材名称

ａ．火成岩

マグマが冷えて固まった岩石で、冷却して固結する場（主に深さ）によって岩石組織が変化し、火山岩・半深成岩・深成岩に区分される。さらに岩石に含まれる SiO2 含有量によって酸性岩・中性岩・超塩基性岩に分けられる（第 25 図１)。火山岩は、急激に冷やされることによって、火山ガラスを含む細粒の石基をもつ岩石であり、深成岩はマグマがゆっくりと大きな結晶の集合体となった火成岩である。出土石器としては、火山岩では、流紋岩・黒曜石・安山岩など、深成岩では斑レイ岩、変成岩では蛇紋岩などが利用される。

流紋岩　風化表面は白～灰白色を呈し、石英・長石等の斑晶を含む。産地については、守門山系の破間川中流域支流など前期中新世の地質に産出することが知られる。また、本遺跡周辺では、湯沢町七谷切に珪酸分の強い流紋岩の路頭が見つかっているとの報告がある（註 103)。

黒曜石　半透明な黒色を呈するガラス質の流紋岩を指す。本遺跡出土の黒曜石は、蛍光Ｘ線分析による原産地推定の結果、信州産（霧が峰系、和田峠系）と報告されている（註 104)。

安山岩　風化表面は、灰色～暗灰色を呈し、内面は黒色を呈する。石材肉眼鑑定の結果、岩石に含まれる斑晶や輝石の特徴から①無斑晶ガラス質安山岩、②無斑晶質安山岩、③輝石安山岩、④石英含有輝石安山岩、⑤多孔質安山岩などに区分される。分類ではこれらの識別が困難であったため、本報告では、剥片石器に多用される上記１・２の安山岩（黒色で緻密・ガラス質の安山岩）を無斑晶ガラス質安山岩とし、上記３・４・５（礫石器に多用される粗粒の安山岩）を安山岩とした。①は、風化表面が象肌状組織で孔隙が多い特徴から、志久見川で採取されたものに類似した特徴が認められる（註 105)。②～⑤は、中津川、志久見川での採取が可能な石材である。

ｂ．堆積岩

堆積岩は産状や成因の違いから、砕屑性堆積岩・化学的堆積岩・火山砕屑岩に区分される。

砕屑性堆積岩は、岩石や地層に由来する岩石片や鉱物片が流水などの機械的営力で運搬され、集積した堆積物が固化した岩石であり、構成される粒形と構成比によって区分される。

化学的堆積岩は、化学作用で水溶液から沈殿堆積した岩石および生物の遺体が集積してできた有機的堆積岩である。本遺跡の石器石材では珪質頁岩・チャートが確認され、新第三系中新統として分布する珪質岩を珪質頁岩、先新第三紀の非砕屑性珪質岩をチャートと呼称している。

頁　岩　本報告では、炭質物非結晶の属性作用や粘土鉱物の影響、表面の風化などにより、凝灰岩質頁岩と頁岩の二つに細分した。①凝灰岩質頁岩：風化表面が白色～灰白色を呈し、粒度のやや粗い。②頁岩：非晶質炭質物を多く含むことで黒色化した頁岩で、表面は黒褐色～褐色～灰色、内面は黒褐色を呈する。

①は従来、凝灰岩としたもの。②は道尻手遺跡の報告では頁岩と分類され、一般に黒色頁岩と呼ばれるものに近似する。これらの頁岩類は、七谷層相当層の分布する河川で見られ、遺跡周辺では清津川・釜川付近、魚野川などで採取可能である。

珪質頁岩　珪化が認められる頁岩（概ね85%以上のシリカを含むもの）を指す。本報告では、津南町内で採取可能なもの（在地石材）と、それ以外（非在地石材）に細分し、以下の特徴を持つ。①珪質頁岩A（非在地の珪質頁岩）：表面が黄土色を呈し、珪酸分がより多いために風化の影響の弱いもの。②珪質頁岩B（在地の珪質頁岩）：炭質物を含むことにより黒味が強く、表面は黒褐色～褐色～灰色、内面は黒褐色を呈するもの。

①は強い油脂光沢をもち、俗に山形産と言われるもので、遺跡周辺には存在しえないものである。また、②は、道尻手遺跡の報告では頁岩と分類された。七谷層相当層に分布し、今回の露頭調査では、清津川支流砥沢川において確認することができた（第26図）。

c．変質岩

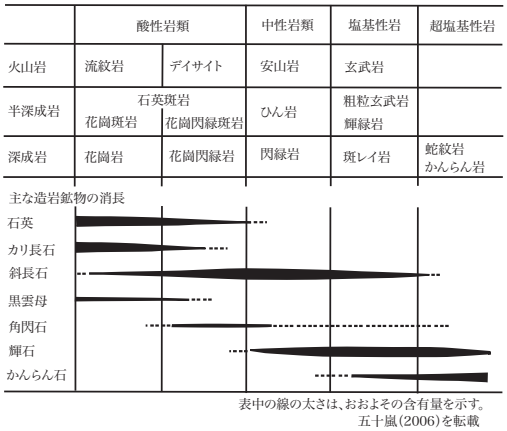
主に熱水作用により岩石中に熱水変質鉱物を生ずる変質作用を受けた岩石を変質岩と呼ぶ。珪化作用を受けて石英細脈を伴う堅硬な変質岩となり、原岩である流紋岩の組織が判別できるものを珪化流紋岩と呼ぶ。また、珪化作用を受けて石英細脈を伴う堅硬な変質岩となり、原岩の組織が消失しているものを珪化岩と呼ぶ（第25図2）。

珪化岩　珪化流紋岩の一部との区別が困難なものが含まれる。色調の違いから、①黄褐色を呈するもの、②白色・褐色が混在したもの、がみられる。①は従来、鉄石英（黄玉）と呼称されたが、本報告では珪化岩（黄玉）とした。②は従来、玉髄と呼称されたものである。

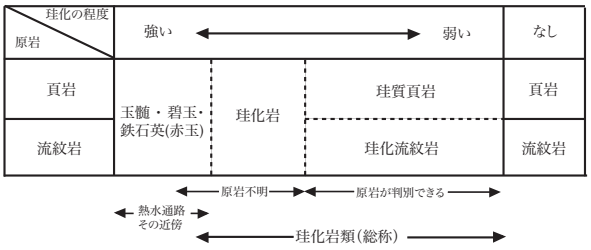
d．鉱　物（シリカ鉱物）

玉　髄（カルセドニ）　石英の超顕微鏡的微晶の網目状集合体で、白色でほぼ均質なものを指す。

碧玉・赤玉　塊状緻密な玉髄で、主に酸化鉄を不純物として含む。緑色種を碧玉、赤色種を赤玉（鉄石英）と呼称する。



1．火成岩の分類



2．珪化作用でできた岩石の分類

第25図　石材分類表

2）在地石材と非在地石材

前項でまとめた露頭調査成果から得られた「在地の石材」（註 106）の情報を基に獲得手段の異なる石材の分離を主眼として「在地石材」「非在地石材」に区分してみたい。

両者の区分にあたり、「在地の石材」の中で石器素材として利用可能な石材が確認できたもの、可能性はあるもの、周辺の地形環境から存在しえないものに分けて構築した。

この中で問題となるのが二つ目の「可能性はある」もの、つまり、石材は確認できるが（大きさや質の点で）石器素材とならない、または出土石材とは異なる質感のものしか見つかっていない石材の扱いについてである。出土石器では、流紋岩・珪化岩・玉髄・赤玉・蛇紋岩などが相当し、これらは遺跡周辺に採取できる「可能性はある」石材である一方、遺跡からやや離れた地域に「利用可能な石材」の存在が確実に知られているという共通点を持つ。たとえば、蛇紋岩は遺跡から約 80km 北西に蛇紋岩の原産地である「姫川」周辺が位置するが、地質環境の面からは、遺跡周辺となる新潟県と群馬県の県境付近で採取の「可能性はある」石材となる。また、流紋岩・珪化岩・玉髄・赤玉についても、遺跡から約 50km 圏内の破間川周辺（第 26 図④）では石器素材として利用可能な石材が確認される以外に、遺跡周辺となる湯沢町七谷切に流紋岩の路頭が確認されることから在地石材であることの否定が困難な石材といえる。

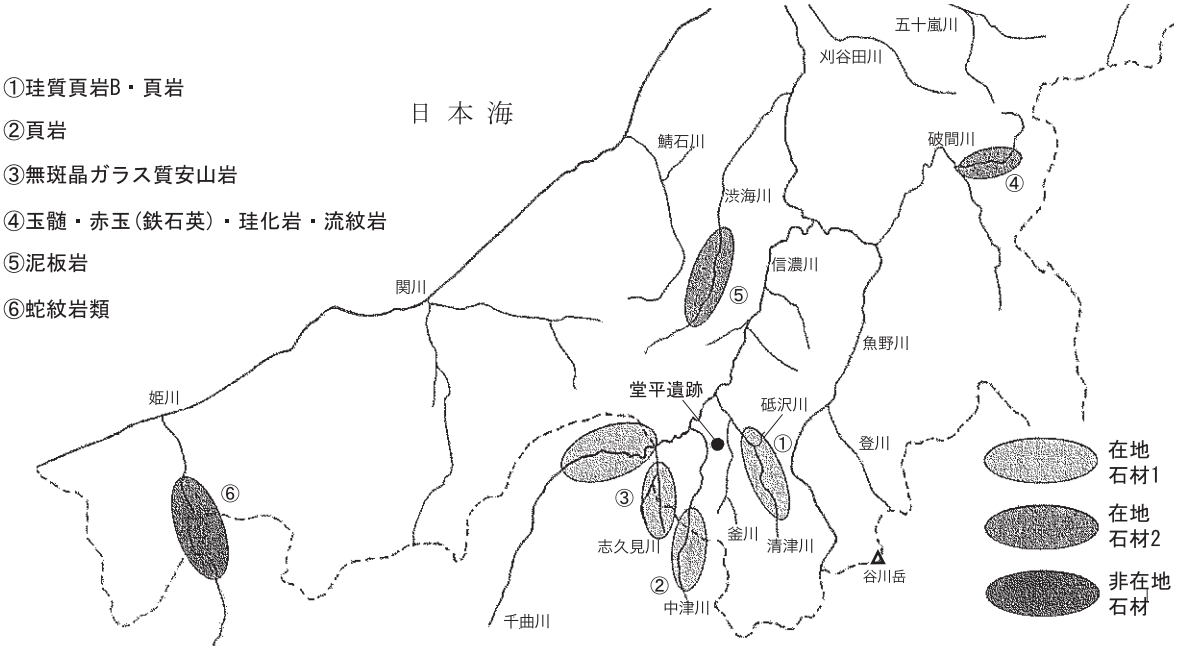
これら石材の共通点として、津南町内の縄文遺跡では常に希少石材であり、遺跡時期によって出土数に多寡がみられるといった特徴があげられる(註 107)。これは「石器素材として利用可能な石材が(遺跡周辺に)確認できる」：無斑晶ガラス質安山岩・安山岩・斑レイ岩・頁岩・凝灰岩質頁岩・珪質頁岩（B）が津南町内の縄文遺跡で一般的に見られる点で差異があり、「在地石材」とは異なる選択性を持つ石材といえる。

ここで、「利用可能な石材」の存否以外に現象面：遺跡内に持ち込まれた際の様態の差異についてみておきたい。出土遺物にみられる流紋岩・珪化岩・玉髄・赤玉は、原石や分割礫・剥片などの素材段階のものを多く含み、石器の様態という点では「石器素材として利用可能な石材が（遺跡周辺に）確認できる」石材との差異はない。これに対し、蛇紋岩は原石や分割礫・剥片などの素材段階がなくすべて製品以降の様態を示す。少なくとも遺跡出土の蛇紋岩の原産地は、遺跡と製作遺跡の延長上にあると推測され、遺跡周辺に蛇紋岩の製作遺跡の存在が認められない本地域にあって、これら蛇紋岩が在地石材とする可能性は極めて低いものと考える。

これらから、堂平遺跡での「非在地石材」は周辺の地形環境から存在しえない石材のほか、上記蛇紋岩のようなものが当てはまる。また、「在地石材」は、石器素材として利用可能な石材が在地の石材環境下に確認でき、町内の各遺跡で安定した石材利用が認められる石材（「在地石材１」）、在地の石材環境下での存非を考えずとも、在地からやや離れた環境下で確実に採取可能なもので、且つ出土石器の様態から製品状態で遺跡内に搬入された形跡が薄い石材（「在地石材２」）の二者に区分して捉えることができよう。

写真左）砥沢川河床

写真右）砥沢川採集の珪質頁岩 B



第 26 図　周辺地域の石材分布図

			石器																未成品未製品		剥片類					合計
			剥片石器										礫核石器													
			石鏃	石錐	石槍	エスキーユ・ピエス	石匙	三脚石器	板状石器	打製石斧	不定形石器	不明	磨製石斧	磨石類	石錘	砥石	石皿	研磨痕を有する石器	石鏃未成品	磨製石斧未製品	剥片	石核	チップ	原石	砕片・ほか	
非在地石材	黒曜石	(点)	10	1	0	2	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	2	0	28	10	3	10	2	71
		(g)	8.8	2.9	0.0	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0	7.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.0	0.0	69.5	60.4	1.2	126.0	2.5	285.5
	珪質頁岩(A)	(点)	15	7	0	18	0	0	0	0	45	0	0	0	0	0	0	0	28	0	225	50	11	0	18	417
		(g)	30.3	65.3	0.0	174.4	0.0	0.0	0.0	0.0	842.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	211.1	0.0	1241.0	782.2	12.2	0.0	60.8	3419.5
	蛇紋岩	(点)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	64	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	68
		(g)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5136.4	292.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	42.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5471.7
在地石材2	流紋岩	(点)	3	1	0	4	0	0	0	1	3	0	1	0	0	0	0	0	5	0	46	19	0	0	7	90
		(g)	3.0	6.0	0.0	40.8	0.0	0.0	0.0	96.5	29.3	0.0	142.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	27.8	0.0	509.5	354.4	0.0	0.0	34.0	1243.8
	チャート	(点)	7	2	0	3	0	0	0	0	2	0	2	1	0	0	0	0	6	0	16	8	2	10	2	61
		(g)	7.6	3.5	0.0	24.6	0.0	0.0	0.0	0.0	5.1	0.0	23.4	5.3	0.0	0.0	0.0	0.0	24.4	0.0	115.5	113.8	1.4	233.3	124.7	682.6
	珪化岩	(点)	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	3	0	0	0	9
		(g)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	14.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	54.2	39.7	0.0	0.0	0.0	108.4
	玉髄	(点)	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	7	0	2	3	21
		(g)	0.0	0.0	0.0	14.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	81.8	152.8	0.0	97.1	17.8	363.7
	赤玉	(点)	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	24	10	0	1	4	44
		(g)	3.0	0.0	0.0	7.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.9	0.0	214.4	219.5	0.0	93.0	19.4	570.7
在地石材1	無斑晶ガラス質安山岩	(点)	16	8	3	17	0	0	0	20	21	1	0	2	0	0	0	0	16	0	672	96	69	0	189	1,130
		(g)	35.8	83.7	138.5	255.7	0.0	0.0	0.0	2100.9	615.4	45.7	0.0	223.7	0.0	0.0	0.0	0.0	97.6	0.0	11187.6	3936.1	243.2	0.0	1519.4	20483.2
	安山岩	(点)	0	0	2	0	0	2	1	14	14	0	0	420	0	4	166	0	1	0	43	1	1	–	41	710
		(g)	0.0	0.0	42.8	0.0	0.0	76.2	32.6	1517.7	1745.7	0.0	0.0	204893.1	0.0	9976.2	48328.0	0.0	11.4	0.0	1235.0	133.1	2.4	–	955.9	268950.0
	玄武岩	(点)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	–	0	7
		(g)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2345.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	–	0.0	2345.0
	デイサイト	(点)	0	1	0	0	0	0	1	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	28	3	0	0	5	44
		(g)	0.0	8.4	0.0	0.0	0.0	0.0	28.3	0.0	411.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	680.9	87.8	0.0	0.0	87.6	1304.8
	花崗岩	(点)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	–	0	4
		(g)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2472.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		0.0	2472.5
	閃緑岩	(点)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20	0	1	2	0	0	0	0	0	0	–	0	23
		(g)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8033.5	0.0	115.2	2130.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		0.0	10278.7
	斑レイ岩	(点)	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	18	23	0	6	10	0	0	1	6	0	4	–	0	70
		(g)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	310.0	0.0	0.0	4304.4	7773.3	0.0	9045.0	14804.8	0.0	0.0	1398.6	169.7	0.0	12.8		0.0	37818.6
	珪質頁岩(B)	(点)	37	32	1	145	2	1	0	19	159	1	0	1	0	0	0	0	75	0	2838	582	176	1	794	4,864
		(g)	80.7	435.4	62.5	1874.0	13.3	59.4	0.0	1962.7	3403.0	160.6	0.0	40.1	0.0	0.0	0.0	0.0	513.8	0.0	36648.2	22188.7	284.9	37.1	4694.4	72458.8
	頁岩	(点)	7	22	4	41	6	6	3	403	165	1	2	7	3	2	0	1	18	0	964	87	487	5	657	2,891
		(g)	9.0	450.6	217.0	853.6	309.2	249.6	114.2	38762.0	6320.2	252.7	619.9	1671.9	61.2	43.1	0.0	95.8	79.7	0.0	23400.8	7446.0	3290.5	225.7	6804.3	91276.9
	凝灰岩質頁岩	(点)	7	6	3	10	0	2	1	115	51	0	3	3	0	0	1	0	9	0	565	84	90	1	190	1,141
		(g)	10.9	139.4	83.4	163.8	0.0	59.8	38.7	12091.8	1819.7	0.0	474.9	727.5	0.0	0.0	24.8	0.0	53.5	0.0	11574.1	9101.2	401.1	29.5	1927.2	38721.2
	砂岩	(点)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13	2	0	0	0	0	0	0	–	0	15
		(g)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1637.0	3120.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		0.0	4757.3
その他		(点)	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	10	6	0	2	13	0	0	0	21	0	0	0	0	54
		(g)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	104.5	243.5	0.0	986.5	4290.0	0.0	168.0	14359.6	0.0	0.0	0.0	253.4	0.0	0.0	0.0	0.0	20405.5
不明		(点)	0	0	0	2	0	0	0	0	17	0	5	13	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	39
		(g)	0.0	0.0	0.0	18.8	0.0	0.0	0.0	0.0	47.2	0.0	573.4	2390.5	55.1	57.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3142.4
合計		(点)	103	80	13	245	8	11	6	575	488	3	105	509	4	29	194	1	162	3	5489	960	843	30	1912	11,773
		(g)	189.0	1195.1	544.1	3430.8	322.5	445.0	213.8	56946.1	15505.3	459.0	12261.5	235158.8	116.3	21041.9	82767.5	95.8	1036.2	1441.5	87435.6	44615.7	4249.7	841.7	16248.0	586560.8

第 6 表　石器石材組成表

5．石製品の概要

ここでは、呪術具や装身具などの利器としての目的以外に用いられたと考えられるものを石製品として分類した。器種の内訳では石棒類が 68 点と出土石製品の大半を占め、垂飾 6 点、軽石製石製品 3 点が次ぐ内容となる。

出土数の最も多い石棒類は、破片資料が 62 点を占めるなど破砕状態での出土が極めて多い。被熱痕跡や炉石への転用例がみられる点から、二次利用時に破砕状態となったことが一因と考えられる。素材では、安山岩（またはヒン岩）の柱状礫が 63 点を占め、稜上にのみ敲打成形を施すものや部分的に擦痕がみられるものなど、変形度合いの低い石棒類が本遺跡の特徴といえる（註 108）。なお、全面研磨成形された石棒類は 4 点のみ確認されたが、このうち 2 点が非在地石材である緑泥片岩を使用石材とする（註 109）。

他の器種での使用石材についてみると、垂飾や軽石製石製品などに非在地石材の利用が認められた。これらは製品段階のほか、軽石製石製品（図版第 458 図 4）や板状石製品（図版第 460 図 18）、ヒスイ製品（図版第 460 図 23）などの状況から半製品段階での搬入もあったことが推測される。

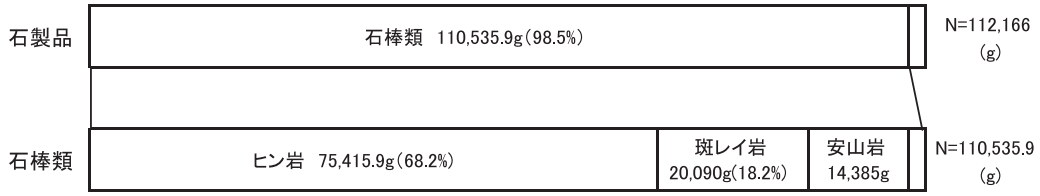
この他の石製品では、類石棒・臼形石製品・三角形石製品・線刻礫など、町内遺跡では稀有な資料が少数ではあるが検出された。三角形土製品の素材が石製の材質に置換されたように形態的な相似性を持つ三角形石製品や、板状石器の側縁加工が研磨成形に置換したと思われる三脚形石製品など石製品以外のものとの関連で捉えるべき器種が含まれる。また、2 点が出土した線刻礫のうち図版第 459 図 13 は磨製石斧を転用利用した資料であり、他器種とのつながりを持った資料が散見される。

以下、第 28 図に石製品の分類内容と計測部位・部位の名称について記載する。

	石棒類	垂飾	軽石製石製品	線刻礫	臼形石製品	類石棒	板状石製品	ヒスイ製品	三角形石製品	三脚形石製品	合計
点数（点）	68	6	3	2	2	1	1	1	1	1	86
	79.1%	7.0%	3.5%	2.3%	2.3%	1.2%	1.2%	1.2%	1.2%	1.2%	
重量（g）	110,535.9	161.03	26.6	420	630	219.7	7.8	130	27.8	6.9	112,166
	98.5%	0.1%	0.0%	0.4%	0.6%	0.2%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	

	ヒン岩	斑レイ岩	軽石	安山岩	緑泥片岩	頁岩	ヒスイ	閃緑岩	滑石	その他	合計
点数（点）	61	4	3	6	2	1	4	1	1	3	86
重量（g）	75,635.6	20,260.0	26.6	15,265.0	645.0	6.9	248.3	27.8	3.9	46.7	112,166

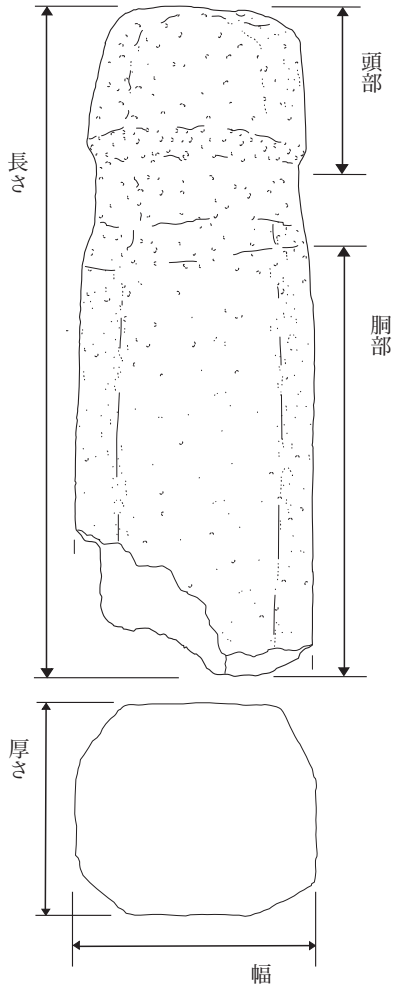
1．石製品組成表

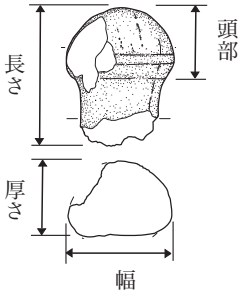


2．石製品重量比

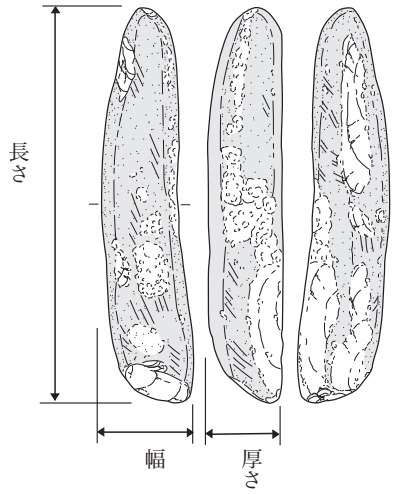
第 27 図　石製品

石棒
（長軸を上下、頭部を上、胴部を下）

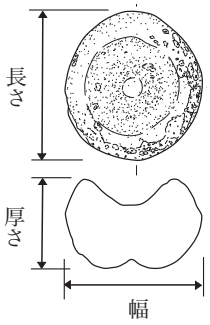




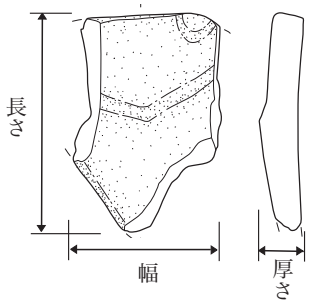
類石棒
（長軸を上下）



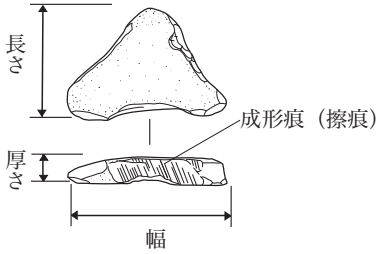
臼形石製品
（長軸を上下）



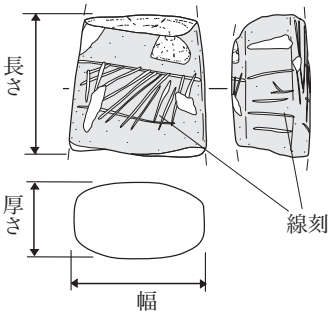
三角形石製品

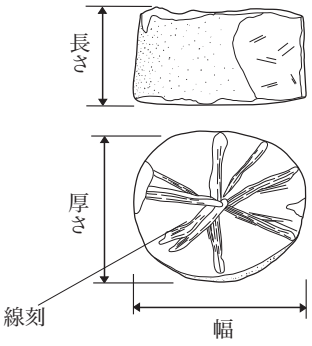


三脚形石製品

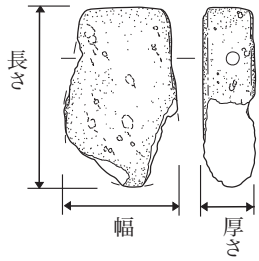


線刻礫

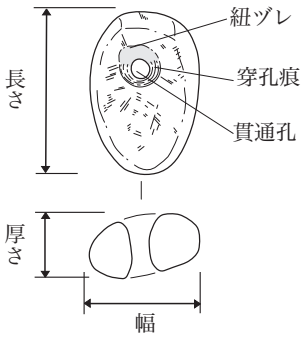




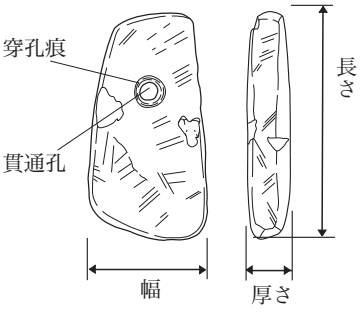
軽石製石製品
（長軸を上下）



垂　飾



玉　斧



第 28 図　石製品の分類と部位の名称

第３節　検 出 遺 構

１．堂平遺跡の集落構造

本遺跡は、縄文時代中期中葉～後期中葉（１期～６期）の遺構が検出された大規模集落遺跡である。しかし、調査区内は水田造成や住宅建設に伴う破壊が及んでおり、確認面より上層の黒色土の大部分が削平されていた。このことから、黒色土中に形成された遺構の多くは削平された可能性が高く、本遺跡から検出された遺構は削平から間逃れた一部であると想定される。

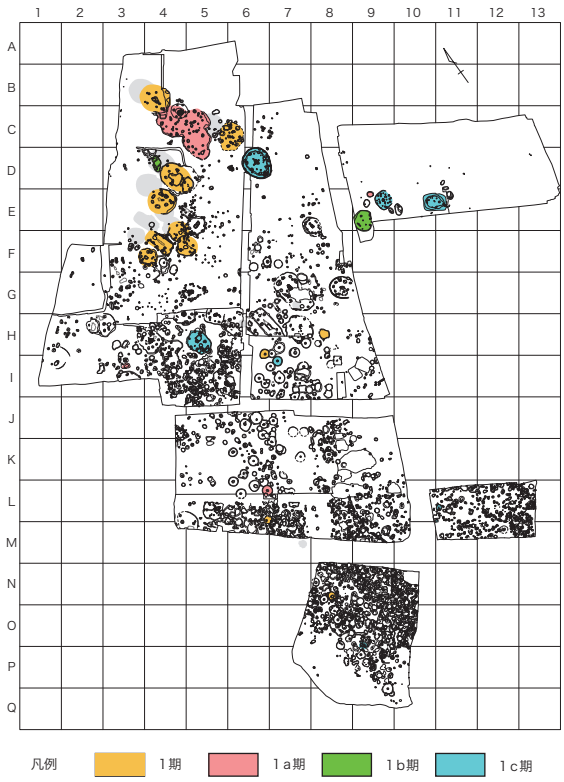
本遺跡からは、住居跡が 62 軒検出されており、ＢグリッドからＯグリッドにかけて弧状に分布する。時期別では、１期（大木８ａ式並行期）は、16 軒の住居跡が検出され、調査区の北側に集中的に分布している（第 29 図１）。多くは円形や楕円形を呈する卵形住居跡であり、長方形住居跡も１軒確認される。入口（主軸）方向は南から南東方向にまとまり、入口方向が集中する区域が中央広場であると考えられる。次に、フラスコ状土坑は８基が広場の周囲に疎らに弧状分布し、住居跡とは異なる分布傾向が見られる。明確な墓域は確認できないが、土坑墓が調査区内に散在する。１ａ期～１ｂ期までの住居跡は、広場の北側に群集するとともに重複関係が認められる。この傾向は、道尻手遺跡の同時期の住居跡にも認められ、この時期の住居構築の規制のようなものを示している可能性がある。一方、１ｃ期には、４軒の住居跡が西から北側に疎らに分布するようになる。また土坑墓２基が中央広場から検出されており、両方とも浅鉢が逆位で出土している。さらに、H3、I3 グリッドなどに遺物集中域が確認され、１期～２期にかけての廃棄場であると考えられる。

２期（大木８ｂ式並行期）は、住居跡の分布域がより南側に移り、広場の西側からも住居跡が検出されている（第 29 図２）。住居形態の多くは、卵形住居跡であるが、長方形住居跡も２軒確認されている。入口方向は広場への求心性を持つものと持たないものがある。フラスコ状土坑は前段階同様に弧状に分布するが、26 基と非常に多くなる。また土坑墓は疎らに分布するが、明確な墓域は認められない。２ａ期～２ｂ期の住居跡はそれほど明確ではないが、２ｃ期になると５軒がＥ～H-5～８グリッドにまとまる。

３期（沖ノ原Ⅰ～Ⅱ式期）の住居跡は 14 軒（炉跡も含む）検出されており、分布がより南側に移る傾向がある（第 29 図３）。フラスコ状土坑は 11 基ほど確認されているが、分布は前段階よりも広場側へと移るとともに調査区内に分散する傾向も見られる。また墓域も明確ではない。３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）は、住居跡５軒が等間隔に分布し、複式炉を持つ住居跡に加えて長方形住居跡２軒が組成する。この時期の入口方向もある程度広場への求心性を示す。３ｂ期（沖ノ原Ⅱ式期）は、４軒の住居跡が疎らに分布し、前段階同様に入口方向も広場への求心性が認められる。しかし、この段階の長方形住居跡とフラスコ状土坑は検出されておらず、変化が窺われる。

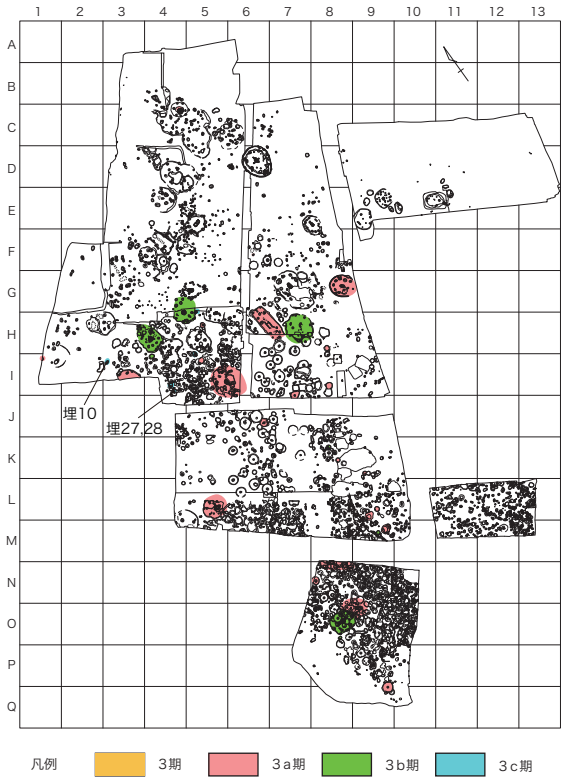
後期になると、明確な住居跡は４期（三十稲場式期）の１軒のみで、この時期の集落構造ははっきりとしない（第 29 図４）。これは当該期の住居床面が、黒色土中に構築される傾向と関連しており、上層削平が大きく影響していると考えられる。環状列石の北西側には、３棟の長方形柱穴列がまとまって確認されており、４期～６期（三十稲場式期～加曽利Ｂ１式並行期）に構築されたと推測される。環状列石は、４期～５期にかけて造営されたと考えられ、中期末葉までの広場の範囲に構築されることから、空間認識が踏襲されていたことが推測される。このように中期末葉までの環状集落の広場に、後期前半期の環状列石が構築されるのが本地域の特色である。また環状列石の内側を中心に、５期～６期の土坑墓が分布するが、道尻手遺跡などで見られるような配石墓は確認されていない。

これ以降の遺物や遺構が検出されていないため、６期をもって集落造営は途絶えると考えられる。

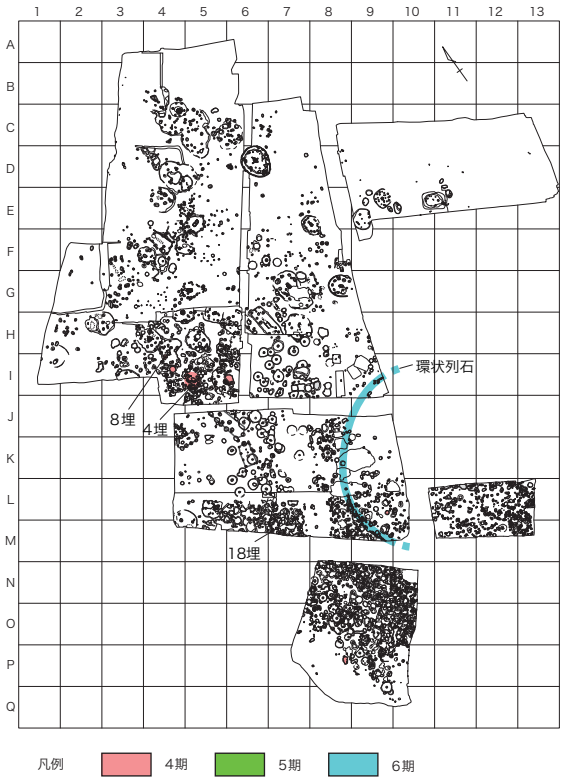


1．1期（大木8a式並行期）

2．2期（大木8b式並行期）



3．3期（沖ノ原Ⅰ～Ⅱ式期）



4．4～6期（三十稲場式期～加曽利B1式並行期）

第 29 図　堂平遺跡の時期別集落変遷図

2．竪穴住居跡

1）概　要

本遺跡からは、竪穴住居跡 62 軒、炉跡（焼土跡含む）13 基が検出された。これらの竪穴住居跡は、ほとんどが現場段階で認識されたものである。住居番号は、第 1 号住居跡から第 62 号住居跡まで番号を付して、14・24・44 番は欠番となる。また石組炉のみが検出され、住居跡に伴うものと考えられるものは、住居番号を付した。屋外の焼土跡は、必ずしも住居跡に伴うものと言い切れないものの、炉跡に含めて番号を付して報告する。

2）属　性

a．住居形態（第 31 図）

本遺跡から検出された住居跡は、縄文時代中期中葉から後期前葉のものである。平面形や主柱配列、炉跡の形態などから、1～4 類に分類される。

Ⅰ類：　平面形が円形や楕円形､卵形を呈するいわゆる｢卵形住居跡｣(註 110)である。主柱は 5 本主柱・6 本主柱・7 本主柱があり、床面には「ベッド状遺構」を伴うものが多い。炉跡は、1 基が床面のほぼ中心に位置する。

1 a 類：炉跡が、地床炉である（2 住・6 住・7 住・8 住・12 住)。

1 b 類：炉跡が、方形や長方形の石組炉をもつ（3 住・4 住・11 住・20 住・21 住・30 住・31 住)。

1 c 類：炉跡が、複式炉を有する（1 住・18 住・23 住・39 住・45 住・48 住・50 住)。

Ⅱ類：　平面形が五角形を呈し、主柱は明確なものに 5 本主柱がある。炉跡は主体部のほぼ中心か、入口寄りに位置する（15 住・32 住・55 住・59 住)。

Ⅲ類：　平面形が長方形を呈しする「長方形住居跡」である。主柱は 6 本主柱か 8 本主柱で、主軸中心線上の外側に小形柱穴が付属する。主柱穴は周溝上もしくはこれに接して配列する。炉跡は主軸線上に複数配列するのが特色である。

3 a 類：炉跡は、すべて地床炉で、主軸線上に複数配列する（5 住・10 住)。

3 b 類：炉跡は、二側縁石組炉と地床炉で、主軸線上に配列する（27 住・38 住・47 住・60 住)。

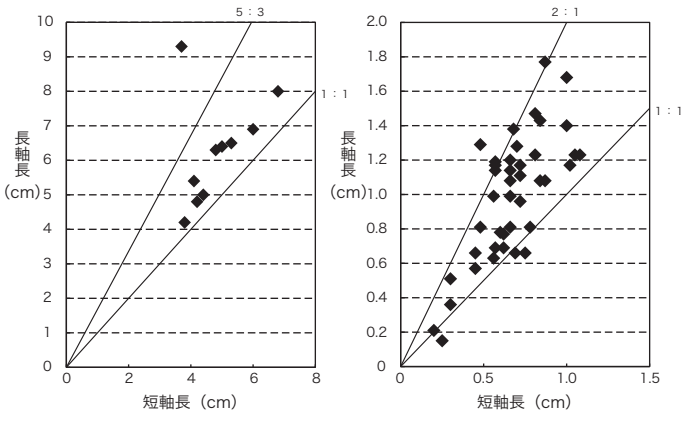
3 c 類：炉跡は、コ字状の石組炉と地床炉で、主軸線上に配列する（52 住・61 住)。

Ⅳ類：　平面形が不明のもの（64 住)。

b．規　模（第 30 図・第 32 図 a)

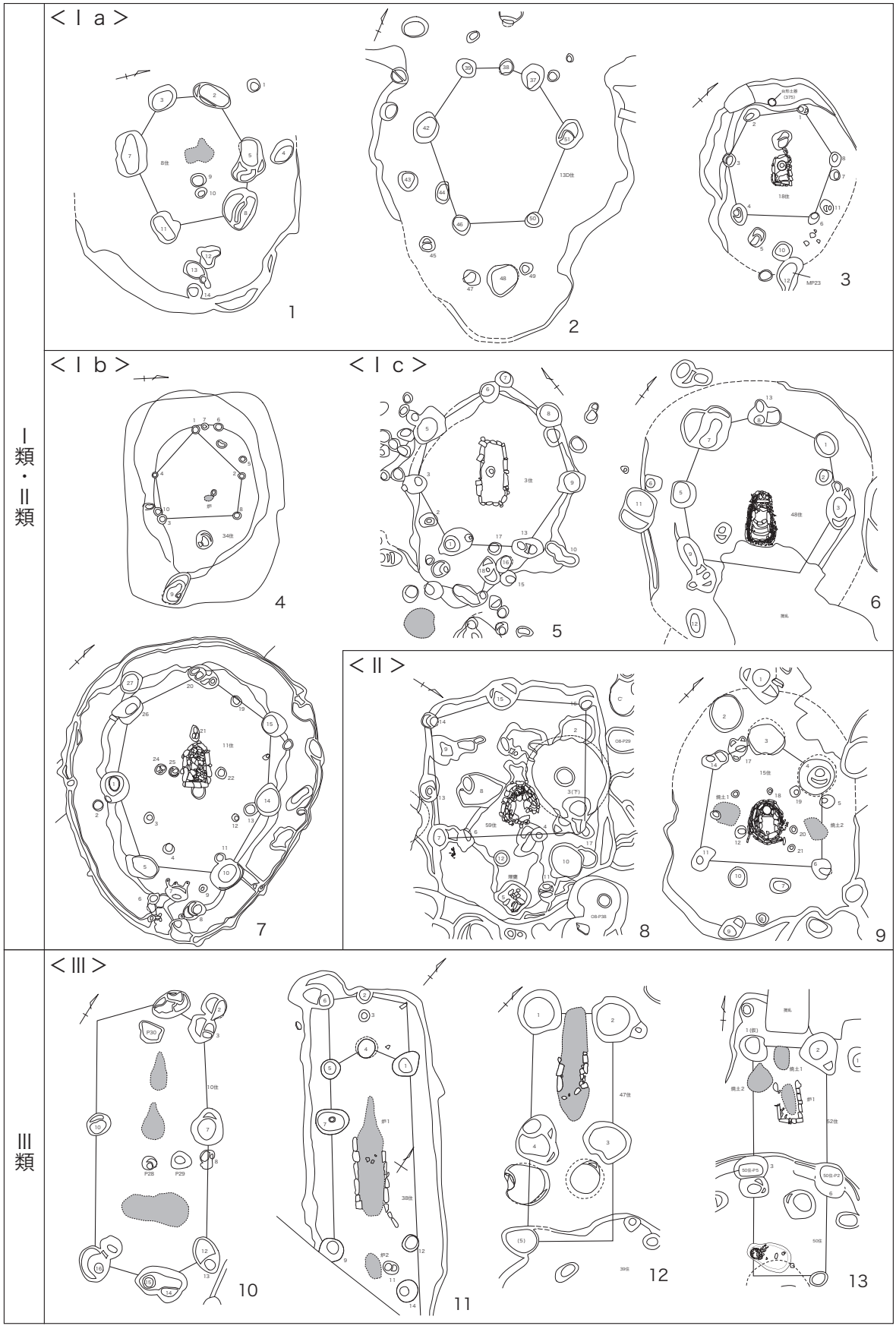
竪穴住居跡の規模は、主軸とこれに直交する軸の最大長を長軸長・短軸長として計測した。また床面積の計測は、床面の範囲を周溝内の空間として計測した（第 32 図 a)。

規模は、長軸長が 4.2m ～ 9.3m で、短軸長が3.7m～6.8mである(第30図1)。床面積は 13 ㎡～ 37.7 ㎡である。

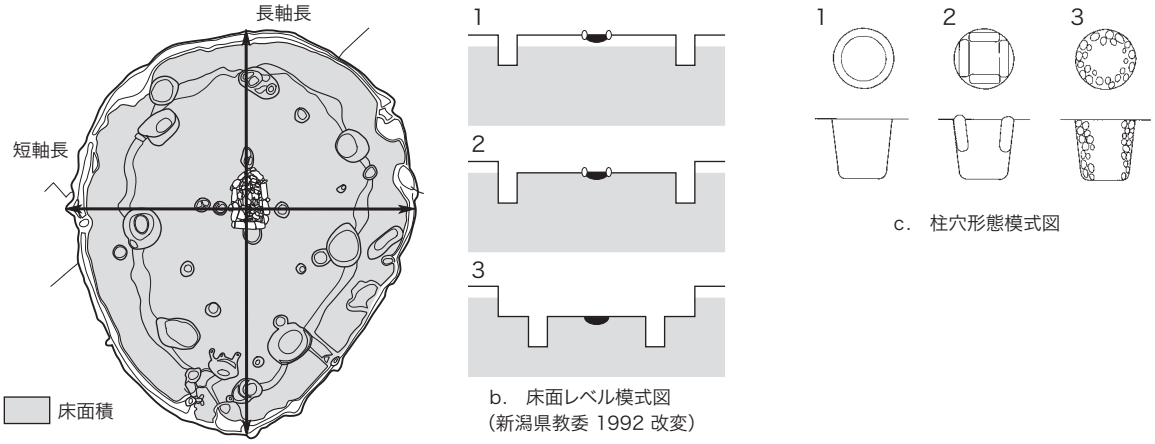


1．住居跡　　2．炉跡

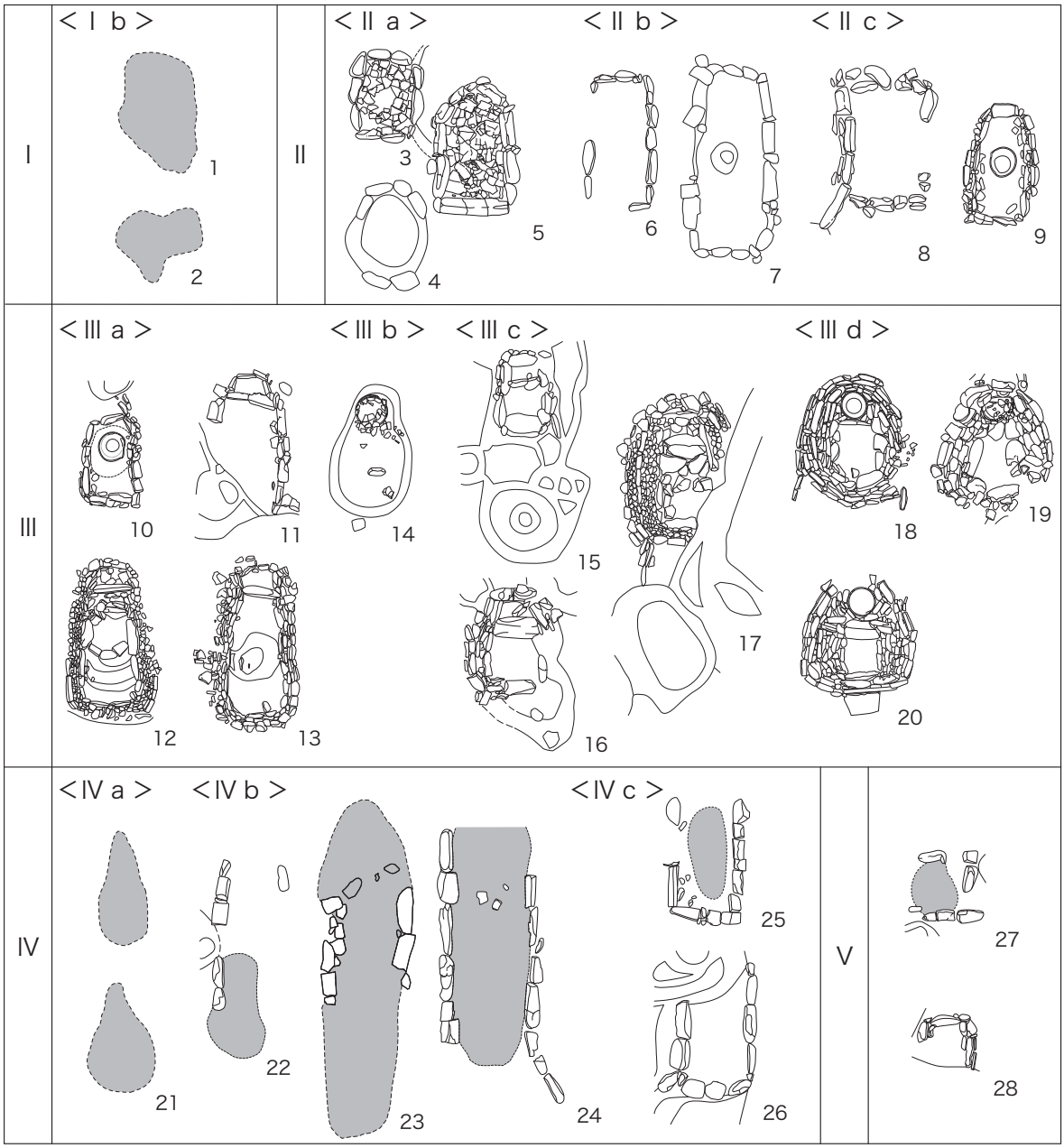
第 30 図　住居跡と炉跡の規模グラフ



第 31 図　住居跡形態分類図



第 32 図　住居跡の計測部位および凡例



第 33 図　炉跡形態分類図

No	グリッド	住居形態	炉形態	時期	規模			床	ベッド	主軸方向	主柱		周溝	備考
					長軸長 (m)	短軸長 (m)	面積 (㎡)				数	形態		
1	G 4・G 5	Ⅰ類	Ⅲａ類	2ｃ期	(6.2)	(4.3)	—	—	—	S-98° -E	7	1類	—	
2	F 4・F 5	—	Ⅰ類	1～2期	—	—	—	3	—	—	—	1類	—	
3	E 4・E 5・F 4・F 5	Ⅰｃ類	Ⅱｂ類	2期	—	—	15.7+α	3	有	S-40° -W	7	1類	—	
4	F 3・F 4	Ⅰ類	Ⅱａ類	1期	—	—	—	3	—	S-51° -E	5？	1類		
5	F 4	Ⅱ類	Ⅳａ類	1ａ期	—	—	—	2	—	S-56° -E	—	1類	有	
6	E 4・E 5・F 4・F 5	不明	Ⅰ類	1期	—	—	—	3	—	—	—	1類	—	
7	E 4・E 5	不明	Ⅰ類	1期	—	—	—	3	—	—	—	1類	—	
8	E 4	Ⅰａ類	Ⅰ類	1期	(7)	5.7	31	3	—	S-82° -E	6	1類	—	
9	D 4	Ⅰａ類	不明	1ａ期	—	—	—	3	—	S-23° -E	6	1類	—	D4-P4・D5-P1 と重複。
10	F 3・G 3	Ⅱ類	Ⅳａ類	2期	—	—	—	2	—	S-31° -E	6	1類	—	
11	D 6・D 7	Ⅰｃ類	Ⅱａ類	1ｃ期	8	6.8	37.7	3	有	S-40° -E	7	1類	有	
12	C 5・C 6・D 5・D 6	不明	Ⅰ類	1期	—	—	—	2	—	—	7	1類	—	
13 A	B 4・C 4・C 5	不明	不明	—	—	—	—	3	—	—	5？	1類	—	13 住 -P1 と重複。
13 B	C 4	不明	不明	1期	—	—	—	3	—	—	6	1類	—	
13 C	C 5	Ⅰ類	不明	1期	—	—	—	3	—	S-62° -E	6	1類	—	
13 D	C 4・C 5・D 5	Ⅰａ類	不明	1ａ期	8.4	6.9		3	—	S-24° -E	6	1類	—	
13 E	B 4・C 4	Ⅰｂ類	不明	—	—	—	—	3	—	S-45° -E	5	1類	—	
15	H 3・H 4	Ⅰｄ類	Ⅲｄ類	3ｂ期	6.5	5.1	23	3	—	S-44° -E	4	1類	—	
17	F 6	不明	Ⅰ類	1～2期	—	—	—	—	—	—	—	1類	—	
18	E 7・E 8・F 7・F 8	Ⅰａ類	Ⅲａ類	2ｃ期	4.8	4.2	15	3	有	S-46° -E	6	1類	—	奥壁部から台形土器が出土。
19 A・B	H 2・H 3	—	Ⅰ類	1～2期	—	—	—	3	—	—	—	1類	—	
20 A	G 6・H 6・他	—	Ⅱｂ類	2ａ期	—	—	—	c	—	S-67° -E	—	1類	—	
20 C	H 5・H 6	Ⅱ類	Ⅰ類	2期	—	—	—	3	—	S-54° -E	—	1類	—	
21	H 5・H 6・I 5・I 6	Ⅰ類	Ⅲａ類	2ｃ期	—	—	—	—	—	S-21° -E	—	1類	—	
23	I 5・I 6	Ⅰｄ類	Ⅲｃ類	3ａ期	—	—	—	3	—	S-63° -E	—	1類	—	
25	I 5・J 5	—	不明	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	
26	I 4	—	Ⅴ類	4期?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
27	I 4	—	Ⅳｂ類	—	—	—	—	—	—	S-80° -E	—	1類	—	
28	H 4・I 4	—	Ⅱｂ類	3ｂ期	—	—	—	3	—	N-12° -W	—	1類	—	
29	H 5・I 5	—	1	4～5期	—	—	—	2	—	—	—	1類	—	
30	H 5	Ⅰ類	Ⅱａ類	1ｃ期	6.3	4.8	19.4	3	—	S-57° -E	5	1類	—	
31	G 5・H 5	Ⅰ類	Ⅱｃ類	2ｃ期	—	—	—	3	有	S-65° -E	—	1類	—	
32	H 4・H 5・G 4・G 5	Ⅰｄ類	Ⅲｄ類	3ｂ期	—	—	—	3	—	S-4° -E	—	1類	—	入口部に埋設土器２点（合口）。
33	I 3	Ⅰ類	—	3期	—	—	—	3	—	—	—	—	—	
34	G 5・H 5	—	Ⅱｃ類?	2ｃ期?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
36	H 1・H 2・I 1・I 2	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	
37	G 7・G 8	Ⅱ類	Ⅰ類	2ｃ～3ａ期	—	—	—	2	—	—	—	1類	—	
38	G 6・H 6・H 7	Ⅱ類	Ⅳｂ類	3ａ期	(9.3)	3.7	34	3	—	S-41° -E	—	1類	—	
39	H 7	Ⅰ類	Ⅲ類	3ｂ期	—	—	—	3	—	S-26° -E	—	1類	—	
41	D 8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1類	—	
42	E 9	Ⅰ類	Ⅱａ類	1期	4.2	3.8	15	3	—	—	—	1類	—	
43	E 9	Ⅰ類	Ⅰ類	1期	5	4.4		3	—	—	5	1類	—	
45	E10・E11	Ⅰｂ類	Ⅰ類	1ｃ期	5.4	4.1	13	3	—	S-54° -E	5	1類	—	
47	G 7・H 7	Ⅱ類	Ⅳｂ類	—	—	—	—	2	—	S-42° -E	—	1類	—	
48	G 7	Ⅰｃ類	Ⅲｃ類	2ｃ期	6.9	6	33	3	有	S-36° -E	7	1類	有	
49	G 7	Ⅰ類	Ⅰ類	—	—	—	—	3	—	—	—	1類	有	
50	G 8	Ⅰｃ類	Ⅲｂ類	3ａ期	(6.5)	5.3	27	3	—	S-83° -E	7	1類	有	
51	H 6	—	Ⅰ類	1～2期	—	—	—	3	—	—	—	1類	—	
52	F 8・G 8	Ⅱ類	Ⅳｃ類	—	—	—	—	2	—	N-8° -E	—	1類	—	
54	J 4・J 5・K 4・K 5	—	—	2ｃ～3ａ期	—	—	—	3	—	—	—	1類	有	第２号長方形柱穴列と重複する。
55	L 5	Ⅰｄ類	Ⅲｃ類	3ａ期	—	—	—	3	—	S-87° -E	—	1類	—	
56	L 4・L 5・M 4・M 5	—	Ⅰ類	—	—	—	—	—	—	—	—	1類	—	
59	O 8・O 9	Ⅰｄ類	Ⅲｄ類	3ｂ期	6.4	5	19	3	—	N-52° -E	5	1類	—	火災住居跡。
60	O 9・P 9	Ⅱ類	Ⅳｂ類	2期	—	—	—	2	—	N-10° -W	—	1類	—	
61	M 8・N 8	Ⅱ類	Ⅳｃ類	3ａ期	—	—	—	2	—	S-88° -E	—	1類	—	
64	H 1・H 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	1類	—	

第７表　住居跡一覧

No	グリッド	形態	時期	規模		構築面	主軸方向	出土遺物	備考
				長軸長（m）	短軸長（m）				
62 号住居跡	O9	Ⅲｃ類	3ａ期	0.78	0.6	2	S-88° - E	土器（1291 ～ 1297）	
34 号住居跡	G5,H5	Ⅲａ類？	3～4期	—	0.5	2	S-57° - E	土器（811 ～ 814）	
第１号炉跡	G8	Ⅱ類	1～3期	1.14	0.57	2	S-82° - E	—	
第２号炉跡	H5,I5	Ⅲａ類	3～4期	—	—	2	—	土器（1300 ～ 1303）	
第３号炉跡	G8	Ⅰ類	—	1.2	0.66	2	N-38° -W	土器（1298）	
第４号炉跡	I7	Ⅰ類	—	1.38	0.68	2	N-54° -W	—	
第５号炉跡	I4	Ⅲｄ類	3期	—	—	2	—	—	
第６号炉跡	M7	Ⅰ類	—	0.81	0.48	2	N-9° -W	—	
第７号炉跡	L9	Ⅰ類	—	1.19	0.57	2	N-35° -W	—	
第８号炉跡	I4	Ⅰ類	—	1.29	0.48	2	N-42° -E	—	
第９号炉跡	N8	Ⅰ類	—	0.66	0.45	2	—	—	
第 10 号炉跡	N9	Ⅰ類	—	0.36	0.3	2	—	—	
第 11 号炉跡	N9	Ⅰ類	—	0.51	0.3	2	—	—	
第 12 号炉跡	N9	Ⅰ類	—	0.69	0.62	2	—	—	
第 13 号炉跡	N9,N10	Ⅰ類	—	0.99	0.66	2	—	—	
第 14 号炉跡	N10	Ⅰ類	—	1.17	0.57	2	N-57° -W	—	
第 15 号炉跡	O10	Ⅰ類	—	0.57	0.45	2	—	—	
第 16 号炉跡	O10	Ⅰ類	—	0.69	0.57	2	N-8° -W	—	
第 17 号炉跡	P9	Ⅰ類	—	0.77	0.62	2	N-8° -W	—	

第８表　炉跡一覧

c．床 面（第 32 図b）

床面の深さは、地山面を基準にして便宜的に 3 つに区分した。床面の深さは、確認面から 0.2m ～ 0.3m ほどの範囲にある。黒色土の大部分が撹乱によって削平されていることもあり、黒色土中より住居跡の床面は検出されていない。

d．柱 穴（第 32 図c）

柱穴については、主柱穴として認定できたものは本数を示した。また、柱穴の深さや大きさ、形態についても図版編の遺構図中に示す。

e．炉形態（第 33 図）

住居形態も考慮してⅠ～Ⅴ類に区分した。

Ⅰ類：地床炉（7住・8住）

Ⅱ類：長方形石組炉：方形のものと長方形のものがある。

Ⅱa類：方形の石組炉で、一列縁石がめぐるもの。内部に土器片が敷かれるものがある。

Ⅱb類：長方形石組炉で、縁石が1～2列めぐるもの。内部に土器片を敷設するものや炉体土器を設置するものがある（3住・20 A住）。

Ⅱc類：長方形の石組炉で、縁石が二列配列して、縁石間に小礫を充填するもの（28 住・31 住）。

Ⅲ類：複式炉：「沖ノ原型複式炉」（註 111）で、魚沼地域に特徴的な組み方である。

Ⅲa類：長方形石組炉の一端に小形石組炉が付属するもの。縁石は内外に 2 列めぐり、縁石間に小礫が充填される（1住・18 住・21 住・48 住）。

Ⅲb類：地床炉で、一端に炉体土器、石組部に土器片が敷かれるもの（50 住）。

Ⅲc類：石組複式炉で、土器埋設部に相当する部分と石組部から構成され、裾石もしくは前庭部が付属するもの。石組は縁石間に小礫を充填するもの（23 住・55 住・62 住）。

Ⅲd類：楕円形や卵形を呈するもので、土器埋設部と石組部から構成され、石組部に偏平礫や小円礫を充するもの（15 住・32 住・59 住）。

Ⅳ類：列状の焼土跡が配列するもの：長方形住居跡に伴う特徴的な炉形態である。

Ⅳa類：長さは 1m 前後と細長く、地床炉が列状に並ぶ（10 住）。

Ⅳb類：長さは 1m 前後と細長く、「二側縁石組炉」（註 112）が配される（27 住・38 住・47 住）。

Ⅳc類：長さが 1m 前後と細長く、コ字状の石組炉が配される（52 住・61 住）。

Ⅴ類：方形の石組炉：炉体土器を有するものもある（26 住・34 住）。

f．出土遺物と時期比定

遺構から出土土器は、①炉体土器、②床面埋設土器、③炉内土器敷、④床面直上、⑤覆土（下層･上層）、⑥床面下・柱穴内・炉掘り形内、などに区分される。その他、土製品や石器・石製品は、概ね④～⑥の出土状況を示している。これらは住居構築時、居住期間、廃絶時、廃絶後の廃棄、など時間差が存在する。

また上屋構造の問題、廃絶後の状態、二次堆積などの問題があり、単純に造営時期を決定できるものではない。しかし、遺構の時期比定については①～④の資料を優先し、これらの遺物がない場合には⑤・⑥の資料を含めて造営時期を推定した。

g．重複関係

他の遺構と重複するものについて、切り合い関係を示した。また「拡張」や「建替え」、「反復」などの区分は、明確に区分することは難しいが、可能性の高いものについて示した。

3）竪穴住居跡各説

第1号住居跡（図版第4図～第7図）

位　置：G4・G5 グリッドに位置する。

形　態：竪穴の立ち上がりは明確ではないが、複式炉を中心に柄鏡状に柱穴が楕円状に配列している。このことから、柄鏡形住居跡との関係性も指摘されてはいるが（註113）、楕円形にめぐる主柱穴と入口施設に関連する支柱とに分離され、卵形住居跡であると推測される（1ｃ類）。ほぼ中心には祖形的な複式炉を有している。入口部分には小土坑が配列しており、入口部施設の痕跡であると考えられる。

覆　土：ほとんど確認されていない。

床　面：炉跡と入口部の間の空間に硬化面が検出されているが、それ以外の部分では硬化面は確認されていない。

柱　穴：7基（P1a、P2・P6・P11・P15・P17・P19）が主柱穴と推定される。

炉　跡：平面形は、先端部がやや丸くなる長方形を呈し石組部内の西端部が偏平礫によって区画される複式炉である。規模は、約1.47m×0.81mである。二列の縁石間に偏平礫が同じ向きで組まれている。石組部の中央部はやや窪んでおり、焼土面が形成されている。

時　期：2ｃ期（栃倉式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第174図1～23）、石器（図版第424図1～3）、などが出土している。1は炉内出土の土器片である。ほとんどが小破片で、2ｃ期の土器片が主体ではあるが、1期や3ａ期の土器片も含まれる。石器は、打製石斧1点、磨製石斧1点、不定形石器1点、磨石類2点、石皿4点などが出土している。

第2号住居跡（図版第8図・第9図）

位　置：F4・F5 グリッドに位置している。

形　態：竪穴の立ち上がりは南側と西側で確認されるものの、全体的に明確ではない。竪穴のほぼ中央部で地床炉が確認され、その周囲に柱穴配列は不明瞭である。

覆　土：ほとんど確認されなかった。

床　面：西側半分側で硬化面が確認されているが、東側は削平のために検出されていない。

柱　穴：配列は明確ではないが、P7・P15・P16・P19・P22が主柱穴の可能性がある。主柱穴は径約0.4m～0.6mの円形や楕円形を呈し、深さは0.24m～0.51mである。

炉　跡：地床炉で、平面形が径約1.1m×0.8mの不整楕円形を呈する。

時　期：1～2期（大木8ａ式並行期～大木8ｂ式並行期）

出土遺物：本遺構からは、少量の土器片（図版第174図24～26）、が出土しており、時期も1期～2ｂ期に帰属するものがある。

第3号住居跡（図版第10図～第13図）

位　置：E4・E5・F4・F5 グリッドに位置している。

形　態：主柱に沿って立ち上がりが見られるが、これは竪穴の立ち上がりではなく、ベッド状遺構の立ち上がりと考えられる。これらから、卵形住居跡と考えられる。長方形の石組炉が床面の中央部にある。

覆　土：確認されていない。

床　面：主柱穴の配列に沿って、ベッド状遺構がめぐると考えられる。周囲が僅かに高くなっている。またＰ９周辺の床面には白色粘土が見られ、床面に貼り付けられた可能性がある。

柱　穴：７本主柱と考えられ、ベッド状遺構の立ち上がりに沿って巡っている（Ｐ１・Ｐ３・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ 13)。柱穴は径約 0.6m ～ 1m の円形や楕円形を呈する。柱穴の深さは約 0.42m 前後である。

炉　跡：長方形石組炉で、縁石は偏平礫が一列めぐり、炉床面は被熱により全面が赤化している。縁石の一部も被熱による赤化が認められる。ほぼ中央には炉体土器（図版第 175 図 54）が埋設される。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期)。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 174 図 27 ～第 175 図 54)、石器（図版第 424 図４～７)、土製品（図版第 417 図 10・第 421 図 104）などが出土している。出土土器は全て破片資料であり、１期～２ｂ期の土器が出土している。炉形態や出土土器から２ｂ期の住居跡と考えられる。石器は、石鏃２点（４・５）や石錐１点（６)、不定形石器５点、磨石類２点などが出土している。土製品は土偶片１点と三角形の土器片である（10・104)。

第４号住居跡（図版第 14 図～第 16 図)

位　置：F3・F4 グリッドに位置している。

形　態：主柱に沿って立ち上がりが確認されるが、これらは竪穴の立ち上がりではなく、ベッド状遺構の立ち上がりの可能性がある。形態的特色から、卵形住居跡であると考えられる。石組炉は床面中央部にある。

覆　土：約 0.25m の厚さの覆土が確認されており、全体的に褐色土が堆積する。

床　面：硬化面や竪穴の立ち上がりが明瞭ではなく、床面の範囲は明確ではない。

柱　穴：配列はやや不明瞭であるが、５本主柱と推測される（Ｐ２・Ｐ５・Ｐ８・Ｐ９・Ｐ 12)。

炉　跡：石組炉で、窪みの縁に沿って縁石がめぐるが、東西両側では炉石がない。炉石が抜き取られた可能性があるが、住居廃絶時か埋没後の撹乱によるものかは明らかではない。炉床面には炭化材堆積層が確認される。

時　期：１期（大木８ａ式並行期)。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 176 図 55 ａ～ 61)、石器（図版第 424 図８～ 10）などが出土している。土器は破片資料がほとんどで、床面の南東側に偏る。石器は打製石斧１点（８）や不定形石器１点（10）などがある。

第５号住居跡（図版第 17 図・第 18 図)

位　置：F4 グリッドに位置している。

形　態：直線的な溝と主柱が配列し、床面に地床炉が列状に配列する。これらの特徴から長方形住居跡であると考えられる。主柱は、直線的な溝に沿って配列するが、配列は明確ではない。

覆　土：ほとんど確認されていない。

床　面：明確な床面は確認されていないが、焼土形成面が当時の床面であったと推定される。

柱　穴：Ｐ３・Ｐ５・Ｐ７・Ｐ 11・Ｐ 13 が想定され、６本主柱と考えられるが、西側の柱穴配列は不明瞭である。

炉　跡：主軸線上に２基の焼土跡が列状に配列する。焼土跡には石組は伴わず、抜き取りの痕跡は確認

されていない。焼土の大きさは径約 0.75m×0.8m と径約 2.1m×0.72m であり、東側の焼土跡の方が細長い。

時　期：１ａ期（大木８ａ式並行期古段階）。

出土遺物:本遺構からは、土器（図版第 176 図 62 ～ 76)、石器（図版第 424 図 11 ～ 13)、などが出土している。土器は破片資料で、時期的には１期のものが多く、東側にまとまる。石器は、打製石斧２点、不定形石器７点（11 ～ 13)、砥石１点、磨石類３点などがある。

第６号住居跡（図版第 19 図）

位　置：E4・E5、F4・F5 グリッドに位置している。

形　態：他の遺構との重複が激しいため全体の範囲や形態は明瞭ではない。西側で弧状の立ち上がりが認められ、円形プランの住居形態であると推定される。主柱配列は明確ではなく、床面にほぼ円形の地床炉がある。

覆　土：暗褐色～黄褐色の覆土が僅かに確認されているが、明確ではない。

床　面：明確な硬化面は確認されておらず、覆土との区分は明瞭ではない。炉跡に伴う焼土形成面が床面であると推定される。

柱　穴：床面上には柱穴状の土坑が幾つか認められるが、配列は不明である。

炉　跡：径約 0.8m×0.8m の不整円形の地床炉である。

時　期：１期（大木８ａ式並行期)。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 177 図 77 ～ 87)、石器（図版第 425 図 14・15)、土製品（図版第 419 図 47)などが出土している。土器は全て破片資料で、１期でまとまる。石器は磨製石斧の刃部片(14)や磨石類（15）である。またＰ２からは完形のミニチュア土器１点が出土している。

第７号住居跡（図版第 20 図）

位　置：E4・E5 グリッドに位置している。

形　態：竪穴の立ち上がりは南西側で認められるのみで、全体の範囲や形態は明瞭ではないが、卵形の住居跡であると推定される。床面には不整楕円形の地床炉が確認される。

覆　土：確認できなかった。

床　面：明確な床面は確認されていない。

柱　穴：柱穴配列は明瞭ではないが、Ｐ 20・Ｐ 26・Ｐ 34・Ｐ４0・Ｐ４1 などが想定される。

炉　跡：径約 1.14m×0.75m の不整楕円形の地床炉である。

時　期：１期（大木８ａ式並行期)。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 177 図 88 ～ 90）などが出土しており、１期の資料が多い。

第８号住居跡（図版第 21 図～第 23 図）

位　置：D4・E4 グリッドに位置している。

形　態：竪穴の立ち上がりが東側で確認されるが、西側は不明瞭である。主柱配列などから 7.0m～5.7m 規模の卵形住居跡であると推測される。主柱は６本主柱で、床面のほぼ中央に不整形の地床炉を有する。

覆　土：厚さ約 0.3m 前後の覆土が確認され、１～ 10 層に分層される。

床　面：東側半部で床面が確認されたが、西側半部は硬化面が検出されなかった。

柱　穴：６本主柱であり、東側の入口部と想定される部分に３基の柱穴状の土坑がある。主柱の平面形は長径が 0.8m ～ 1.15m で、平面形が楕円形を呈する。深さは 0.5m 前後である。

炉　跡：床面のほぼ中央部にある径約 0.72m×0.6m の不整形の範囲から炭化物が多量に検出された。このことから地床炉として認識した。上層が攪乱などによって削平された可能性がある。

時　期：１期（大木８ａ式並行期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 177 図 97 ～第 178 図 113）、石器（図版第 425 図 16）、などが出土している。出土土器は小破片のみであるが、１期の資料を中心とする。石器は打製石斧１点（16）などと少ない。

第９号住居跡（図版第 24 図～第 27 図）

位　置：D4・D5・E4・E5 グリッドに位置している。

形　態：他遺構との重複のためか東側の立ち上がりが明確ではないが、柱穴配列などから卵形住居跡の可能性がある。また床面のほぼ中央部で３基ほどの浅い土坑（墓坑の可能性がある）と重複する。

覆　土：確認されていない。

床　面：明瞭な硬化面は確認されなかった。

柱　穴：６本主柱で亀甲形に配列する。主柱穴の規模は、径 0.5m 前後で、深さ約 0.59m ～ 1.0m の範囲で平均 0.8m である。

炉　跡：検出されていないが、重複する土坑 D4-P4 によって破壊された可能性がある。

時　期：１ａ期（大木８ａ式並行期古段階）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 178 図 114 ～第 183 図 179）、石器（図版第 425 図 17 ～ 21）、土製品（図版第 421 図 98・100・117）などが出土している。土器は１ａ期～１ｂ期を主体として２ｂ期や２ｃ期に帰属するものも含まれる。122・128 はほぼ完形に復元できた個体である。石器は、石鏃１点や石錐１点（17）、板状石器２点、打製石斧４点（18 ～ 20）、石皿片２点（21）、磨石類５点などがある。土製品は、三角形の土製円盤２点（98・100）である。

第 10 号住居跡（図版第 28 図～第 31 図）

位　置：F3・G3 グリッドに位置している。

形　態：調査段階では、東側の隅丸方形状の立ち上がりを住居跡としていた。しかし、整理作業において図面上で長方形状の柱穴配列と焼土跡３基が列状に配列することから、ややずれた場所に６本主柱の長方形住居跡の存在を認識し、第 10 号住居跡を改めて設定した。

覆　土：確認出来なかった。

床　面：明確な硬化面は検出できなかった。

柱　穴：５本の主柱穴と主軸線上に２基の柱穴を有していると考えられる。

炉　跡：３基の地床炉が検出されている。焼土跡は、炉跡１が径約 0.99m×0.42m、炉跡２は径約 0.96m × 0.6m、炉跡３は径約 1.74m×0.9m の規模を有する。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 183 図 180 ～第 185 図 225）、石器（図版第 425 図 22 ～ 28）、などが出土している。土器は、１期を主体とするが、ほとんどが破片資料である。石器は、石鏃２点（22・

23)、石錐１点（24)、打製石斧２点（25)、不定形石器１点、磨石類７点（26 ～ 28)、石皿４点などがある。

第 11 号住居跡（図版第 32 図～第 35 図）

位　置：D6・D7 グリッドに位置している。

形　態：平面形が径約 8.0m×6.8m の卵形を呈し、主柱配列に沿って外側が約 0.1m 高くなるベッド状遺構を有する。これらの特徴から、卵形住居跡であると考えられる。ベッド状遺構は、幅約 0.9m 前後でめぐるが奥壁部はやや狭くなる。入口部には小柱穴が配列する。

覆　土：７層の堆積が確認され、全体的に竪穴両端に地山土が多く堆積する傾向が認められる。

床　面：炉跡周辺では、明瞭な硬化面が確認される。また竪穴と主柱間に幅約 0.6m ～ 0.9m でベッド状遺構がめぐる。

柱　穴：７本主柱であり、ベッド状遺構の内側に沿って卵形に配列する。主柱穴は径約 0.6m ～ 0.9m の円形や楕円形を呈し、深さは 0.6m ～ 0.9m にまとまる。

炉　跡：奥壁側が尖る舟形を呈する石組炉である。縁石は、偏平礫が１列めぐり、偏平礫の間には小礫が配される。内部には土器片が内外面を表にして敷き詰められている。炉の奥壁側には礫が埋設されて、床上に突出している。また炉の両側には小柱穴が検出されている。

時　期：１ｃ期（大木８ａ式並行期新段階)。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 185 図 226 ～第 189 図 275)、石器（図版第 426 図 29 ～ 34)、土製品（図版第 417 図１・第 419 図 40・第 421 図 102・103）などが出土している。炉内には約 10 個体の土器片が敷き詰められていた（226 ～ 234・236)。覆土中からも１ｃ期～２ａ期の土器がまとまっている。石器は、石鏃１点、打製石斧２点、不定形石器５点（29)、磨製石斧２点（30・31)、磨石類 10 点（32 ～ 34)、砥石１点、石皿６点などがある。土製品は覆土から土偶頭部１点（１)、ミニチュア土器１点（40)、三角形の土器片２点（102・103）である。

第 12 号住居跡（図版第 36 図）

位　置：C5・C6、D5・D6 グリッドに位置している。

形　態：竪穴の立ち上がりは確認されていないが、地床炉を中心に柱穴７基（Ｐ１・Ｐ７・Ｐ 11・Ｐ 14・Ｐ 20・Ｐ 21・Ｐ 22）が円形に配列することから、竪穴住居跡であると考えられる。

覆　土：確認面から薄い覆土が確認され、黒色土層には多量の炭化物が含まれていた。

床　面：硬化面が確認された。

柱　穴：Ｐ１・Ｐ７a・Ｐ 11a・Ｐ 14・Ｐ 20 ～Ｐ 22 が主柱穴であると推定され、６本主柱ないしは７本主柱と考えられる。

炉　跡：径約 0.65m×0.65m の不整形な地床炉がある。

時　期：１期（大木８ａ式並行期)。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 189 図 276 ～ 284)、石器（図版第 426 図 35)、が出土している。出土土器には１期～２期の資料が見られる。石器は石鏃１点（35）のみである。

第 13A 号住居跡（図版第 37 図・第 38 図）

位　置：B4・C4・C5 グリッドに位置している。

形　態：楕円形の範囲に柱穴が配列するが、形態や範囲など明確ではない。中央部には大形のフラスコ

状土坑（13 住Ｐ 1）が重複しており、土坑の底面から上層にかけて 3 a 期の完形土器などが 22 個体出土している。

覆　土：一部で薄い褐色土の堆積が確認されている。

床　面：明確な硬化面は検出されていない。

柱　穴：7 基の柱穴（Ｐ 2・Ｐ 3・Ｐ 5・Ｐ 6・Ｐ 7・Ｐ 8・Ｐ 9）が亀甲状に配列している。柱穴の平面形は、径約 0.3m ～ 0.6m ほどの円形を呈する。

炉　跡：検出されていないが、フラスコ状土坑の構築によって破壊された可能性がある。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

第 13B 号住居跡（図版第 37 図～第 39 図）

位　置：C4 グリッドに位置している。

形　態：第 13A 号住居跡の南側に位置し、半円状に竪穴の立ち上がりが認められるが、炉跡は検出されていない。また床面からは、長さ約 65cm の柱状礫が出土している。

覆　土：確認面から約 0.2m の覆土が確認されており、褐色～暗褐色土が堆積する。

床　面：硬化面が確認されているが、13A 号住居跡と重複する北側の床面の広がりは不明である。

柱　穴：床面には、Ｐ 12・Ｐ 14・Ｐ 15・Ｐ 16・Ｐ 23・Ｐ 22 など柱穴状の土坑が見られるが、主柱配列は明瞭ではない。

炉　跡：炉跡らしきものは検出されていない。

時　期：１期（大木 8 a 式並行期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 190 図 285 ～ 303）、石器（図版第 426 図 37）、などが出土している。土器は、１ a 期～１ c 期の破片資料が見られるが、明確に竪穴住居の造営時期を示す資料は確認されていない。

第 13C 号住居跡（図版第 40 図・第 41 図）

位　置：C5 グリッドに位置している。

形　態：東側に竪穴の立ち上がりが確認されるものの、竪穴の平面形や範囲は明確ではない。

覆　土：一部に上層からの撹乱が見られるが、約 0.25m の堆積が確認されている。覆土は、褐色～暗褐色土によって構成される。

床　面：東側で床面と立ち上がりが確認されているが、西側の床面の広がりは明確ではない。

柱　穴：６本主柱（Ｐ 5・Ｐ 6・Ｐ 25・Ｐ 29・Ｐ 31・Ｐ 33）であると推定される。主柱の平面形は、円形や楕円形を呈し、規模は長径約 0.5m ～ 0.8m で、深さは約 0.3m 前後にまとまる。

炉　跡：検出されていない。

時　期：１期（大木 8 a 式並行期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 191 図 304 ～ 315）、土製品（図版第 421 図 105）が僅かに出土している。土器は覆土から 1 期の破片資料が見られるが、住居造営時期を示す資料に乏しい。土製品は、三角形の土製円盤 1 点（105）である。

第 13D 号住居跡（図版第 42 図・第 43 図）

位　置：C4・C5・D5 グリッドに位置している。

形　態:竪穴の立ち上がりは東側と南側･西側では検出されるが、北側は第 13C 号住居跡と重複しており、立ち上がりは確認されていない。平面形は卵形を呈する住居跡であり、6 基の主柱穴に 2 本の小柱穴が付属すると考えられる。2基の小柱穴の間には、径約 0.85m×0.78m の浅い土坑が確認される。

覆　土：確認されていない。

床　面：明瞭な硬化面は確認されていないが、床面の範囲は竪穴の広がりから明瞭である。

柱　穴：6本主柱（P 37・P 39・P 42・P 46・P 50・P 51）と考えられ、これに入口側に2基の支柱（P 47・P 49）が付属すると考えられる。

炉　跡：主柱配列のほぼ中央にあると推定されるが、検出されていない。

時　期：1 a期（大木8 a式並行期古段階)。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 191 図 316 ～第 192 図 341)、石器（図版第 427 図 38 ～ 40)、土製品（図版第 422 図 122）などが出土している。土器は、1 a期を中心とする良好な資料であり、覆土中にドーナツ状の分布を示し、特にP 48 上面からまとまって出土しているようである。石器は不定形石器2点（38・39)、石皿1点（40）などが出土している。土製品は、焼成粘土塊1点（122）である。

第 13E 号住居跡（図版第 44 図)

位　置：B4・C4 グリッドに位置している。

形　態：東側と南側で竪穴の立ち上がりが確認されるが、北側から西側が明確ではないが、5本主柱の卵形住居跡であると考えられる。入口側には小土坑（P 5・P 6）があり、偏平礫が伴う。炉跡は検出されていないが、ほぼ中央から検出された楕円形の土坑によって切られている可能性がある。

覆　土：確認されていない。

床　面：明確な硬化面は確認されていない。

柱　穴:5本主柱（P 1・P 3・P 4・P 7・P 8）であると想定される。柱穴の規模は、径約 0.35m ～ 0.55m の円形を呈し、深さは約 0.35m ～ 0.93m である。

炉　跡：検出されていない。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

第 15 号住居跡（図版第 45 図～第 48 図)

位　置：H3・H4 グリッドに位置している。

形　態：東側から南東側で浅い竪穴の立ち上がりが確認され、全体の平面形は径約 6.5m ～ 5.1m の楕円形もしくは隅丸方形を呈すると推定される。ほぼ中央部に複式炉とその両側に2基の焼土跡がある。床面には柱穴状の土坑とともに、北側で2基のフラスコ状土坑（15 住P 3とP 4）の重複が確認される。

覆　土：ほとんど確認されていない。

床　面：硬化面が確認され、特に複式炉の両脇にある焼土付近は硬化が顕著である。

柱　穴：4本か5本主柱（P 3・P 4・P 6・P 11・P 14）と考えられ、P 7・P 10 も上屋と関わる柱穴の可能性がある。主柱配列が予想されるP 3・P 4はフラスコ状土坑であり、主柱との重複関係が想定される。主柱穴は、直径 0.5m 前後のほぼ円形を呈し、深さは約 0.51m ～ 0.68m の範囲にまとまる。

炉　跡：ダルマ形を呈する複式炉で、約 1.17m×1.02m の規模を持つ。炉体土器（342）は深鉢の上半部を正位で埋設する。炉石は 15cm 前後の偏平礫（円礫・亜角礫）を長軸方向に配するのが特色であり、一部に割れ面を表に向けて積んだものも見られる。炉石の多くは被熱により赤化し、石組部底面には礫が敷かれず、地山面が強く赤化している。

時　期：３ｂ期（沖ノ原Ⅱ式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 193 図 342 ～ 353）、石器（図版第 427 図 41 ～ 47）、土製品（図版第 417 図 5、第 418 図 21、第 419 図 41・49・57、第 420 図 71、第 423 図 129）などが出土している。出土土器は床面から覆土にかけて分布し、特に主軸線上にまとまりがある。土器は３ａ期～３ｂ期を主体とし、西側では１期～２期にかけての遺物集中区と重複する。342 は複式炉の炉体土器で、深鉢の胴部上半部が使用される。343 は炉内出土資料である。石器は、石鏃２点（41･42）、三脚石器２点（43･44）、打製石斧１点（45）、磨石類２点（46・47）などがあり、東側の壁際からは安山岩製の柱状円礫が検出されている。土製品は多く出土し、土偶胴部１点（5）、三角形土版１点（21）、ミニチュア土器３点（41・49・57）、菱形土製品１点（71）、焼成粘土塊１点（130）があり、41 の内面には漆状の付着物が見られる。

第 17 号住居跡（図版第 49 図）

位　置：F6 グリッドに位置している。

形　態：長楕円形の焼土跡と柱穴４基が認められるのみで、床面範囲や平面形は明確ではない。北東側には大形の円形土坑２基が重複する。

覆　土：確認されていない。

床　面：明確な硬化面は確認されていないが、焼土跡形成面が床面であったと推定される。

柱　穴：主柱穴の可能性がある土坑が４基（Ｐ１～Ｐ４）確認される。４基の土坑は方形に配列するものの、全体的な配列は明確ではない。

炉　跡：焼土跡２基が確認され、それぞれ径約 1.1m×0.7m の長楕円形のものと、径約 1.2m×0.6m の不整形のものである。

時　期：１期～２期（大木８ａ式並行期～大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 194 図 354 ～ 373）、石器（図版第 428 図 48 ～ 50）が出土している。土器は１期～２ｃ期にかけての破片資料である。石器は、石錐１点（48）、打製石斧１点（49）、不定形石器１点（50）などである。

第 18 号住居跡（図版第 50 図～第 53 図）

位　置：E7・E8・F7・F8 グリッドに位置している。

形　態：西側と北側で竪穴の立ち上がりが検出され、ベッド状遺構がＬ字状に確認される。平面形は卵形を呈し、中央部に祖形的な複式炉を持つ。６本主柱と推定され、ベッド状遺構の内側に沿って配列する。

覆　土：上層が大分削平されており、褐色～暗褐色を呈する２層の堆積が確認される。

床　面：炉跡周辺で硬化面が確認され、比較的残りが良い西側でベッド状遺構がＬ字状に検出されている。

柱　穴：６本主柱と考えられる（Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４・Ｐ 11・Ｐ８）。柱穴は、径約 0.5m 前後の円形もしくは楕円形を呈し、深さは約 0.4m ～ 0.5m の範囲にまとまる。

炉　跡：祖形的な複式炉で、約 0.99m×0.56m の規模を呈するが、北西側の石組が土坑によって破壊されている。石組部は、偏平な円礫や亜角礫を縁石として、その外側に小形円礫などを二重に配する。炉石や炉床面には被熱による赤化が見られる。炉跡の中央部には深鉢底部が炉体土器（374）として埋設される。

時　期：２ｃ期（栃倉式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 195 図 374 ～第 196 図 415）、石器（図版第 428 図 51 ～ 55）、土製品（図版第 422 図 116・第 423 図 128）などが出土している。土器の多くは覆土からの出土で、竪穴西側にまとまる傾向がある。374 は複式炉の炉体土器で、375 の台形土器は奥壁部床面出土である。375 は接合資料で、脚部が奥壁側のベッド状遺構の上から、台部は西側床面から出土している。石器は、石鏃１点、石錐１点（51）、三脚石器１点（52）、磨石類２点、棒状の砥石１点（54）、石皿片３点（55）などが出土している。54 は台形土器脇の床面から出土している。土製品は焼成粘土塊１点（128）のみである。

第 19A・B 号住居跡（図版第 54 図・第 55 図）

位　置：H2・H3 グリッドに位置している。

形　態：４基の焼土跡と２つの竪穴の立ち上がりが確認され、何軒かの住居跡が重複していると考えられる。平面形や柱穴配列などが明瞭でないことから、便宜的に２軒の住居跡として認識した。

覆　土：８層の覆土が確認され、黒色土や褐色土・暗褐色土の堆積が見られる。

床　面：床面は２ヶ所で確認されるが、明確な硬化面は認められない。

柱　穴：この範囲にＰ１～Ｐ９が分布するが、主柱配列は明確ではない。

炉　跡：焼土跡４基が検出され、焼土１は約径 1.0m×0.8m、焼土２は径約 1.4m×0.8m、焼土３は径約 0.65m×0.35m、焼土跡４は径約 0.3m×0.2m で、いずれも不整な円形や楕円形を呈する。

時　期：１期～２期（大木８ａ式並行期～大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 197 図 416 ～ 437）、石器（図版第 429 図 56 ～ 58）、などが出土している。出土土器は 19A 号住居跡覆土上層に集中し、時期的には１期を中心として２期・４期の破片資料も見られる。石器は、不定形石器１点（56）、磨石類２点（57・58）などがある。

第 20A 号住居跡（図版第 56 図）

位　置：G5・G6・H5・H6 グリッドに位置している。

形　態：床面の範囲や立ち上がりは明確ではなく、長方形の石組炉を中心に周囲に３基ほどの柱穴状の土坑が確認される。炉形態から卵形住居跡であると想定される。

覆　土：確認されていない。

床　面：明確な硬化面は確認されていないが、石組炉構築面が床面であったと推定される。

柱　穴：長方形石組炉の周囲に３基の柱穴（Ｐ３・Ｐ７・Ｐ８）が検出されているが、本住居跡に伴う主柱穴かどうかは明確ではない。柱穴の規模は、径約 0.5m ～ 0.6m の円形である。

炉　跡：長方形の石組炉で、規模は約 1.14m×0.66m である。縁石は、偏平円礫や亜角礫を横長に配列する。炉石は全て安山岩であり、被熱による赤化が認められる。石組炉の内側はやや窪んでおり、ほぼ全体に炭化物と焼土が確認される。

時　期：２ａ期（大木８ｂ式並行期古段階）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 198 図 438 ～ 441）、石器（図版第 430 図 66・67）、土製品（図版第 418 図 18）などが出土している。出土土器は２ａ期のもので、完形に近い 441 が炉跡の南側から出土している。石器は石錐１点（65）、打製石斧１点（66）などがある。土製品は、三角形土版１点（18）である。

第 20C 号住居跡（図版第 57 図）

位　置：H5・H6 グリッドに位置している。

形　態：第 31 号住居跡の東側から検出され、竪穴の立ち上がりが南側で確認されるのみの形態が不明瞭な住居跡である。楕円形の焼土跡を中心に、周囲に６基の柱穴が亀甲状に配列する。炉形態と柱穴配列から長方形住居跡であると推定される。

覆　土：確認されていない。

床　面：硬化面は明確ではないが、焼土跡形成面が当時の床面であると推定される。

柱　穴：６基（Ｐ２・Ｐ７・Ｐ９・Ｐ 10・Ｐ 11・Ｐ 12）が確認されているが、全てが本住居跡に伴う　主柱穴かどうかは明確ではない。柱穴は、径約 0.3m ～ 0.6m の円形や楕円形を呈し、深度は主柱穴が約 0.4m ～ 0.5m 前後で、両端の小柱穴は約 0.3m である。

炉　跡：地床炉で、径約 1.15m×0.6m の楕円形を呈する。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 198 図 442 ～第 199 図 460）、石器（図版第 429 図 59 ～ 65）など、炉跡の東側にまとまって出土している。土器は床面から覆土にかけて出土し、２ｂ期～３ｂ期の資料が認められる。石器は、打製石斧３点（59 ～ 61）、磨製石斧１点（62）、磨石類２点（63・64）などがある。

第 21 号住居跡（図版第 58 図～第 61 図）

位　置：H5・H6・I5・I6 グリッドに位置している。

形　態：他の遺構や倒木痕との重複により、床面の範囲や形態は明瞭ではない。主柱穴や一部にベッド状遺構や周溝が確認される。祖形的な複式炉を有し、形態的には卵形住居跡であると想定される。

覆　土：確認されていない。

床　面：他の多くの遺構が重複しており、明確な床面は確認できなかった。

柱　穴：Ｐ７・Ｐ９・Ｐ 11・Ｐ 14・Ｐ 15・Ｐ 16 などが本住居跡に伴う可能性があるが、柱穴配列は明確ではない。

炉　跡：祖形的な複式炉で、南側がＰ 13 などによって破壊されている。現存の規模は、径約 1.28m×0.7m である。長方形の石組に台形状の小形の石組が付属し、縁石は偏平円礫・亜角礫・板状角礫を１列～２列で配される。石組部内側の中央部はやや窪み、そこを中心に炉床が赤化している。

時　期：２ｃ期（栃倉式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 200 図 461 ～第 201 図 500）、石器（図版第 430 図 68・69）、などが覆土を中心に出土している。出土土器には２ｃ期～５期の破片資料が含まれる。石器は、打製石斧６点（68・69）、不定形石器３点、磨製石斧２点、磨石類４点、石皿２点がある。

第 23 号住居跡（図版第 62 図～第 65 図）

位　置：I5・I6 グリッドに位置している。

形　態：竪穴の立ち上がりが北側と西側で一部確認されるが、床面範囲や柱穴配列は明確ではない。床面のほぼ中央部に複式炉が伴い、周囲に主柱穴状の土坑が配列する。複式炉の東側は４ｂ期（三十稲場式期新段階）の大形土坑が重複し、一部を壊している。

覆　土：確認されていない。

床　面：完掘した状況が床面であると考えられるが、明瞭な硬化面は検出されず、床面の範囲やベッド状遺構の有無などは明らかではない。

柱　穴：Ｐ 10・Ｐ 16・Ｐ 17・Ｐ 19 ～Ｐ 23 が主柱穴の可能性が考えられるが、配列は明瞭ではない。これらの柱穴の平面形が円形を呈し、径約 0.6m で、深さ約 0.5m 前後の規模にまとまる。

炉　跡：径約 1.68m×1.0m の楕円形を呈する複式炉で、東側には裾石が付属する。北東側が I6-P1（三十稲場式期新段階）によって破壊されているため、全体の形状は明確ではないが、前庭部を持つ可能性がある。複式炉は石組複式炉で、偏平礫による縁石を三列めぐらせて、その間に小形円礫が充填する手法をとる。これらの炉石の多くは被熱による赤化が認められる。石組部は比較的大形の偏平円礫や板状角礫が使用され、また底面には板状礫が敷かれる部分がある。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 202 図 501 ～第 205 図 556）、石器（図版第 430 図 70 ～ 73）、土製品（図版 419 図 60、第 420 図 66）などが出土している。出土土器は完形個体がないものの、３ａ期を主体とする破片資料が比較的まとまる。石器は、石鏃３点（70・71）、打製石斧６点、不定形石器４点、磨製石斧２点（73）磨石類８点、石皿２点などがある。土製品はミニチュア土器１点（60）と耳飾１点（66）である。

第 25 号住居跡（図版第 65 図）

位　置：I5・J5 グリッドに位置している。

形　態：床面範囲や柱穴配列などは明確ではなく、石組炉１基が検出されていることからその周辺を含めて住居跡として認識した。

床　面：明確な床面は確認されていないが、石組炉構築面が床面であると推定される。

柱　穴：不明である。

炉　跡：くの字状に残る石組炉で、西側は撹乱などによって破壊されたと考えられるが、複式炉や方形石組炉の可能性がある。

時　期：不明。

出土遺物：本遺構の範囲からは、土器（図版第 205 図 557 ～ 577）、石器（図版第 430 図 74 ～ 81）、土製品（図版第 419 図 42）などが出土している。出土土器は床面から上層にかけて分布し、１期～３ａ期の破片資料が含まれる。石器は、石鏃２点（74・75）、石槍１点（77）、打製石斧２点（78・79）、不定形石器１点（80）、磨製石斧１点（81）などがある。土製品は、ミニチュア土器１点（42）がある。

第 26 号住居跡（図版第 67 図・第 68 図）

位　置：I5 グリッドに位置している。

形　態：炉跡のみ検出され、床面範囲や柱穴配列などは明確ではない。

床　面：明確な硬化面は確認されてないが、石組炉構築面が床面であると推定される。

柱　穴：炉跡の周囲に柱穴状の遺構が多数めぐるが、本住居跡に伴う柱穴配列は明確ではない。

炉　跡：方形を呈する石組炉で、東側の縁石が欠損しており、内側には焼土跡が形成される。石組炉の規模は径約 0.63m×0.65m である。

時　期：４ａ期（三十稲場式期古段階）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 206 図 578 ～ 588）、石器（図版第 431 図 82 ～ 86）、土製品（図版第 418 図 27、第 421 図 88・108）などが出土している。出土土器は、１期～４期までの破片資料で、時期的にまとまりが見られない。石器は石匙１点（81）、打製石斧２点（82・83）、磨石類２点（84・85）などがある。土製品は、三角形土製品１点（27）、土製円盤１点（88）と三角形の土製円盤１点（108）である。

第 27 号住居跡（図版第 67 図・第 68 図）

位　置：I4 グリッドに位置している。

形　態：複数の遺構が重複する区域であることから、床面範囲や竪穴が確認されていないが、炉形態と柱穴配列から長方形住居跡と考えられる。また東側では第 26 号住居跡と重複し、南側では第２号炉跡（図版第 116 図）などが隣接する。

床　面：明確ではない。

柱　穴：７基（Ｐ１・Ｐ 12・Ｐ 13・Ｐ 15 ～Ｐ 18）の柱穴が確認されるが、他の遺構との重複のためか北東側では主柱穴が確認できていない。主柱穴はほぼ円形を呈し、規模は径約 0.4m ～ 0.7m、深さ約 0.3m ～ 0.7m である。

炉　跡：長さ約 1.1m に縁石が南側に１列並び、対になる北側には縁石が１つ残るのみである。抜き取られた痕跡は明確ではないが、 同様なものが片側にも並んでいた可能性は高い。またこの炉跡に伴う焼土範囲は、石組炉からやや東側に偏って確認されている。

時　期：不明。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 207 図 589 ～ 606）、石器（図版第 431 図 87 ～第 432 図 96）、土製品（図版第 419 図 37・第 22 図 112）などが出土している。出土土器は２ｂ期から３ｂ期の土器までの資料が見られるが、造営時期を示すような土器は認められない。石器は、打製石斧５点（86 ～ 90）、磨製石斧１点（91）、磨石類２点（92・93）などである。土製品は、口縁部に円孔がめぐるミニチュア土器（37）である。

第 28 号住居跡（図版第 69 図～第 72 図）

位　置：H4・I4 グリッドに位置している。

形　態：一部他の遺構が重複するが、ほぼ長方形の平面形が確認される。東側と西側で竪穴の立ち上がりが検出され、北側と南側は他の遺構との重複によって不明瞭になる。立ち上がりに沿って主柱穴が配列することから、竪穴壁面ではなく、ベッド状遺構の可能性もある。床面のほぼ中央部には方形の石組炉を有し、石組炉の西南側には４期（三十稲場式期）の８号埋設土器（1589）が重複する。

覆　土：確認されていない。

床　面：明確な硬化面は確認されていないが、石組炉構築面が当時の床面であると考えられる。床面の

範囲は不明瞭であるが、北東側の突出部は他の遺構が重複している可能性がある。

柱　穴：明確な主柱穴は、４基（Ｐ８・Ｐ 10・Ｐ 14・Ｐ 17）確認されるが、他の遺構との重複により主柱配列は不明である。主柱穴の平面形は、楕円形や不整円形を呈し、径 0.8m 前後の規模を有する。柱穴深度は約 0.05m ～ 0.37m の範囲と全体的に浅い。

炉　跡：方形石組炉は、径約 1.4m×1.0m の規模を有し、北側の角に約 0.45m の裾石が付属する。縁石は基本的に一列ずつ配されるが、二重にめぐる部分も見られる。炉石には安山岩の偏平円礫や亜角礫が使用される。炉床面には、三角形状の焼土範囲があり、炉石にも薄く赤化が見られる。

時　期：３ｂ期（沖ノ原Ⅱ式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 208 図 607 ～第 209 図 643）、石器（図版第 432 図 97 ～第 433 図 100）、土製品（図版第 418 図 28）などが出土している。出土土器は１ｃ期～５ｂ期にかけての破片資料で、特に３ａ期～３ｂ期でまとまる。石器は、石鏃１点、打製石斧９点、不定形石器２点（97）、磨製石斧１点、磨石類３点（98・99）、脚付石皿１点（100）などである。土製品は、三角形土版１点（28）がある。

第 29 号住居跡（図版第 73 図）

位　置：H5・I5 グリッドに位置している。

形　態：床面の範囲や柱穴などの形態は不明であり、炉跡の一部が検出されている。

床　面：明確な床面は確認されていないが、焼土跡形成面が当時の床面であると推定される。

炉　跡：石組炉であるが、ほとんどが破壊されて残っていない。石組は複式炉の一部であると考えられ、南東側にも焼土跡が延びている。

時　期：４～５期（三十稲場式期～南三十稲場式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 210 図 644 ～ 664）、石器（図版第 433 図 101 ～ 110）、などが出土している。本住居跡の範囲には１ａ期～５ｂ期の土器が分布しているが、後期前葉（５期）で比較的まとまる。石器は、石槍１点（101）、石錐１点（102）、打製石斧６点（103 ～ 108）、磨製石斧１点（109）、敲石１点（110）などがある。

第 30 号住居跡（図版第 74 図～第 77 図）

位　置：H5 グリッドに位置している。

形　態：竪穴は浅いが、平面形は径約 6.3m×4.8m の楕円形を呈する。柱穴配列は明確ではないが、５本主柱であると考えられる。炉跡は土器敷きの長方形石組炉であり、床面のほぼ中央に位置している。この竪穴の範囲は、ベッド状遺構の立ち上がりの可能性があるが、明確ではない。また入口部の円形土坑（Ｐ 17）からは、南三十稲場式土器が出土していることから後期前葉の所産と判断される。

覆　土：確認面より深さ約 0.3m の覆土が確認され、褐色土や暗褐色土が堆積していた。

床　面：完掘した面が床面であると考えられるが、柱穴配列の外側にベッド状遺構が存在する可能性もある。

柱　穴：５本主柱（Ｐ３・Ｐ９・Ｐ 13・Ｐ 18・Ｐ 20）であると考えられる。柱穴の平面形は、円形や楕円形を呈し、長径約 0.5m ～ 0.8m の規模を有し、深さは 0.5m 前後である。

炉　跡：径約 0.81m×0.66m の方形石組炉であり、縁石が一列めぐる。縁石は、円礫と亜縁礫（安山岩）が配され、被熱によって表面が赤化している。内部には、土器片（665・678・684）が器面を表にして

敷き詰められる。この中央部に円形の土器片が空白になる部分があり、黒色土が赤化している。

時　期：１ｃ期（大木８ａ式並行期新段階）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 211 図 665 ～第 213 図 707）、石器（図版第 434 図 111 ～ 120）、土製品２点（図版第 418 図 19・25）などが出土している。覆土からは、１ｃ期を中心として２ｂ期～５ｂ期の土器が出土している。また 665・678・684 は方形石組炉の床面に敷かれていた土器片である。後期前葉の土器は入口部に重複する土坑 30 住Ｐ 17 の範囲から出土する傾向がある。石器は、石鏃２点（111･112）、打製石斧１点（115）、三脚石器１点（114）、磨製石斧２点（117･118）、磨石類６点（119･120）、石皿１点などである。土製品は、三角形土版２点（19・25）がある。

第 31 号住居跡（図版第 78 図～第 81 図）

位　置：G5・H5 グリッドに位置している。

形　態：竪穴の立ち上がりは南側と東側で確認されるが、 そのほかは攪乱が酷く立ち上がりは確認できなかった。柱穴は４基確認されるものの、配列は明確ではない。炉跡は長方形石組炉であるが、縁石間に小礫を充填する配石手法は複式炉と類似する。

覆　土：確認できなかった。

床　面：複式炉構築面がほぼ床面であると考えられるが、床面範囲は明確ではない。西側の床面では僅かに段差が認められ、ベッド状遺構の痕跡であると考えられる。

柱　穴：主柱穴は４基（Ｐ１・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ８）確認され、五角形に配列すると推測される。

炉　跡：長方形の石組炉で、約 1.08m×0.66m の規模を有する。縁石は偏平礫が二列めぐって、その間に小礫が充填される。主軸両端には比較的大きな偏平礫が配置される。炉石は、円礫や亜角礫（ほぼ安山岩）で、被熱により表面が赤化するものが多い。石組炉の中央部には、炉体土器が伴い、その周囲の炉床面は赤化が見られている。

時　期：２ｃ期（栃倉式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 214 図 708 ～第 215 図 757）、石器（図版第 435 図 121 ～ 126）などが出土している。土器（708）は炉体土器で、口縁部と底部が欠損する。その他は覆土出土で、２ｃ期～３ａ期を主体とする破片資料である。石器は、石鏃１点（121）、打製石斧６点（122 ～ 126）、不定形石器６点である。

第 32 号住居跡（図版第 82 図～第 84 図）

位　置：G4・G5・H4・H5 グリッドに位置している。

形　態：住居跡北側の約半分が攪乱によって削平されている。南側では、隅丸方形の竪穴の立ち上がりが確認される。炉跡はダルマ形の複式炉である。主柱穴は２基確認される。南側の土坑Ｐ１からは、完形に近い２個体（758・759）が合口で埋設され、上部には蓋状の石皿（130）が付帯する。

覆　土：確認面より約 0.25m の覆土が確認され、黄褐色土や褐色土・暗褐色土から構成され、一部に赤土を含む 13 層からなる。

床　面：床面は明確であるが、硬化面は確認できなかった。

柱　穴：Ｐ２とＰ９が主柱穴であると想定されるが、柱穴は楕円形を呈し、規模は径約 0.3m と 0.66m、深さ約 0.42m と 0.18m とばらつきがある。また入口の突出部には２基の柱穴があり、これらも上屋

構造などに関連する柱穴であると考えられる。

炉　跡：前庭部を持たない複式炉で、径約 1.23m×1.05m の規模を有する。複式炉の平面形はダルマ形を呈し、土器埋設部には 1 基の炉体土器（760）が設置される。北側の一部が攪乱により破壊され、南側には台形状の板状角礫が付属する。石組部の底面には礫が敷かれず、地山面が赤化している。石組部の両端には大形礫が配され、側壁は約 35 度の角度で偏平礫が積み上げられる。これらの石組は、偏平円礫や板状礫・分割礫を長軸方向で積み上げるように組まれる。構成礫の多くは、被熱により赤化している。

時　期：３ｂ期（沖ノ原Ⅱ式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 216 図 758 ～第 218 図 790）、石器（図版第 435 図 127 ～第 436 図 133）、土製品（図版第 421 図 87）・石製品（図版第 458 図 3）などが出土している。出土土器の多くは覆土から出土しており、土器 760 は複式炉の炉体土器で、口縁部を欠損する深鉢である。また土器 758・759 は入口部Ｐ 1 の埋設土器で、口縁を合わせた合口埋甕で縦位に埋設され、在地的な沖ノ原Ⅱ式と関東系の加曽利ＥⅣ式土器が使用される。石器は、打製石斧 4 点（127 ～ 129）、不定形石器 3 点、磨製石斧 1 点（130）、磨石類 2 点（131・132）、砥石 1 点、石皿 1 点（133）などがある。石皿 130 は、Ｐ 1 埋甕の上に蓋状に置かれていたものである。土製品は、土製円盤 1 点である（87）。

第 33 号住居跡（図版第 85 図・第 86 図）

位　置：I3 グリッドに位置している。

形　態：I3 グリッドの調査区際から半円状の竪穴が検出されたもので、炉跡や柱穴は確認されていない。

覆　土：覆土に上層からの攪乱が及んでいたために、確認できなかった。

床　面：完掘した状況が床面であると推測される。

柱　穴：床面よりＰ 1 のみが検出されたが、主柱配列は不明である。

時　期：３期（沖ノ原式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 219 図 791 ～ 810）、石器（図版第 436 図 134 ～第 437 図 138）、などが出土している。出土土器は２期～３ａ期の破片資料で、床面から覆土にかけて分布する。石器は、石錐 1 点（134）、打製石斧 3 点（135・136）、不定形石器 1 点、磨石類 2 点（137）、石皿片 3 点（138）、などがある。

第 34 号住居跡（図版第 116 図）

位　置：G5・H5 グリッドに位置している。

形　態：第 32 号住居跡に削平を受けており、炉跡の一部と柱穴の一部のみが検出された。

柱　穴：主柱穴は 3 基のみが検出されているが、５本主柱になる可能性がある。これらの柱穴は、平面形が円形や楕円形を呈し、径 0.6m 前後の規模を持つ。

炉　跡：約 0.5m×0.45m の規模を有する石組炉で、コ字状に炉石が残る。炉石は、偏平礫を配するもので、被熱による赤化が認められる。

時　期:出土遺物からは不明であるが、石組炉の形態や第 32 号住居跡から切られている点を考慮すれば、２ｃ期～３ｂ期の間に構築されたものと推定される。

出土遺物：本遺構からは、土器片（図版第 219 図 811 ～ 814）などが僅かに出土している。

第 36 号住居跡（図版第 49 図）

位　置：H1・H2・I1・I2 グリッドに位置している。

形　態：東側は倒木痕、西側は削平を受けており、床面範囲や住居形態は不明である。

覆　土：確認されていない。

床　面：倒木痕や削平によって残りが悪いが、幅約 5m ほどの床面が確認される。

出土遺物：土器の底部のみが出土している（図版第 220 図 815）。

第 37 号住居跡（図版第 87 図）

位　置：G7・G8 グリッドに位置している。

形　態：焼土跡３基と柱穴 11 基ほどが確認され、東側には約 2.8m の直線的な竪穴の立ち上がりが検出されている。全てが同一の住居跡に伴うとは言い切れないが、形態的には長方形住居跡の可能性が高い。

床　面：明確な硬化面は確認されていないが、焼土跡形成面が床面であると考えられる。

柱　穴：３基（Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４）の柱穴が列状に配列することから、本住居跡に伴う主柱穴の可能性がある。柱穴の平面形は楕円形を呈し、径約 0.45m ～ 0.7m である。

炉　跡：焼土跡の平面形は楕円形や不整形を呈し、焼土１が約 1.2m×0.85m、焼土２が径約 1.0m×0.85m、焼土３が径約 0.65m×0.42m の規模を有する。

時　期：２ｃ期～３ａ期（栃倉式期～沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：炉跡周辺からは、土器（図版第 220 図 816 ～ 839）、石器（図版第 437 図 139）、などが出土する。出土土器は１ａ期～３ａ期までの破片資料で、焼土１直上からは深鉢底部（832）が伏せた状態で出土し、Ｐ８出土土器（837）は底部を欠損する完形に近い深鉢である。石器は、磨製石斧１点（139）である。

第 38 号住居跡（図版第 88 図～第 91 図）

位　置：G6・H6・H7 グリッドに位置している。

形　態：平面形が長方形を呈し、南側は攪乱により削平されており、現状では長軸長約 9.2m、幅約 3.6 の規模を有する。主柱穴は７基ほど確認されるが、Ｐ７と対応する柱穴がないなどやや配列は明瞭である。ほぼ中央部の主軸線上には、二側縁石組炉があり、石組炉には細長い焼土跡が伴い、南側にも小規模な焼土跡がある。形態的な特色から、長方形住居跡であると考えられる。

覆　土：厚さ約 0.3m の覆土が確認され、暗褐色土や暗黄褐色土・黄褐色土など９層の堆積が認められる。

床　面：焼土跡形成面が床面であると推測され、部分的に硬化面が確認されている。

柱　穴：９基の柱穴（Ｐ１～Ｐ５・Ｐ７・Ｐ９・Ｐ 12・Ｐ 14）が確認されている。しかし、通常は２本１組で配列するが、対になる場所に柱穴が確認されない部分がある。主柱規模は、径約 0.5m ～ 0.85m、深さは約 0.35m ～ 0.6m の範囲である。

炉　跡：炉跡１は、直線的な二列の縁石が並列し、径約 1.9m×0.9m の規模を有する。縁石の内側には３m ほどの細長い焼土跡が形成され、主軸線上に伸びる。炉石には 30cm ～ 40cm ほどの円礫や亜角礫安山岩）が配され、表面が被熱により赤化や破砕している。また主軸上の端部に２基の小土坑を有する。炉跡２は、径約 0.66m×0.4m の楕円形を呈する焼土跡である。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 221 図 840 ～第 225 図 899）、石器（図版第 437 図 140）、土製品（図

版第 419 図 59)、石製品(図版第 458 図 5)などが出土している。出土土器は、比較的完形に近いものが多く、床面～覆土にかけて分布し、炉跡を挟んで二ヶ所に土器の集中部が認められる（図版第 90 図)。石器は、打製石斧 1 点、不定形石器 3 点、磨石類 5 点（137)、石皿 2 点、炉石に使用された石棒片（5）があるが、土器に比べて石器の出土量が非常に少ない。土製品は、ミニチュア土器の底部片である（59)。

第 39 号住居跡（図版第 92 図・第 93 図)

位　置：H7・H8 グリッドに位置している。

形　態：南側が削平されており、残存した部分は直径約 6.5m の半円状を呈する。柱穴配列は明確ではないが、５本主柱の可能性がある。中央部には複式炉があるが、遺存状態は良くない。

覆　土：確認面より約 0.2m の覆土が確認され、暗褐色土など 6 層の堆積が見られる。

床　面：明確な硬化面は確認されていないが、複式炉構築面が床面であると考えられる。フラスコ状土坑の上部には地山土が堆積しており、調査者はフラスコ状土坑の堆積土の上に貼床を施したものと見ている。

柱　穴：５本主柱（Ｐ２・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６）と推定されるが、南側に対応する主柱穴が検出されていない。

炉　跡：複式炉であり、土器埋設部の南側に石組部と考えられる礫が配列するものの、大部分が破壊されていて原型を留めていない。炉体土器 900 の中からは多量の炭化材が検出された。

時　期：３ｂ期（沖ノ原Ⅱ式期)。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 226 図 900 ～ 911)、石器（図版第 437 図 141・142)、土製品（図版第 417 図 8）などが出土している。これらは炉跡周辺の床面近くに分布し、３ａ期～３ｂ期の資料でまとまる。土器 900 は複式炉の炉体土器であり、土器も壊れた石組部の中に包含されていた。石器は、石皿片 2 点（141・142）であり、石皿 139 は壊れた複式炉の中から出土している。土製品は、土偶右脚部である。

第 41 号住居跡（図版第 94 図)

位　置：D8 グリッドに位置している。

形　態：炉跡や竪穴の立ち上がりは確認されていないが、床の硬化面が半円状に確認されたことから住居跡として認定した。また４基の柱穴が確認されたが、柱穴配置は不明である。

覆　土：確認されていない。

床　面：半円状に硬化面が確認された。

柱　穴：範囲内に４基の柱穴状の土坑が確認された。柱穴は径約 0.2m ～ 0.35m の円形を呈する。

時　期：出土遺物がないため、造営時期は不明である。

第 42 号住居跡（図版第 95 図)

位　置：E9 グリッドに位置している。

形　態：竪穴の浅い立ち上がりが確認され、径約 4.2m×3.8m の隅丸方形を呈する。内側からは多くの柱穴状の小土坑が検出されたが、主柱穴はＰ２・Ｐ５・Ｐ８・Ｐ 14・Ｐ 20 の５本主柱と推測され、中央に土器敷き炉が伴う。

覆　土：確認されていない。

床　面：明確な硬化面は確認されていないが、ほぼ完掘した面が床面であると考えられる。

柱　穴：主柱穴はＰ２・Ｐ５・Ｐ８・Ｐ 14・Ｐ 20 の５本主柱と推測されるが、確証はない。

炉　跡：径約 0.6m×0.54m の規模を有する土器敷炉である（図版第 95 図下段）。石組は伴わず、調査者の所見によると廃絶時に抜き取られた可能性が指摘されている。また炉内の土器片は、間層を挟んで二重に敷かれていることから、炉跡を再利用したと推測している。

時　期：１ｃ期（大木８ａ式並行期新段階）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 227 図 912 ～第 228 図 928）、石器（図版第 437 図 143）などが出土し、土器 912・913 は炉内に敷かれていた土器で両方とも底部を欠損する。その他の土器は床面から覆土中にかけて出土している。

第 43 号住居跡（図版第 96 図）

位　置：E9 グリッドに位置している。

形　態：E9 グリッドの西南端に位置し、一部調査区外に及ぶ。平面形が径約 5.0m×4.2m のやや不整な楕円形を呈する卵形住居跡で、ほぼ中央部に地床炉を持つ。床面からは 10 基の柱穴が確認されるが、５本主柱であると推測される。しかし、主柱配列と竪穴平面形がずれるなど不確定な部分も残る。

覆　土：確認されていない。

床　面：明瞭な床面が確認できた。

柱　穴：５本主柱（Ｐ１・Ｐ６・Ｐ 10・Ｐ 11・Ｐ 12）と推測される。柱穴の規模は、径約 0.2m ～ 0.4m の円形や楕円形を呈し、深さは約 0.2m ～ 0.6m である。

炉　跡：床面のほぼ中央部に地床炉（Ｐ５）が位置する。地床炉は径約 0.25m の円形を呈し、炉床面は被熱によって赤化して硬くなる。

時　期：１ｃ期（大木８ａ式並行期新段階）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 229 図 929 ～第 235 図 1006）、石器（図版第 437 図 144 ～ 147）、土製品（図版第 418 図 15･29、第 421 図 99）などが出土する。覆土中層から比較的土器がまとまって出土し、ほぼ完形が６個体存在する。これらは竪穴中央部にまとまって分布し、１ｂ期～１ｃ期の資料が主体となる。石器は、打製石斧２点（144・145）、不定形石器２点などがある。土製品は、三角形土版の破片１点（29）と三角形の土製円盤１点（99）である。

第 45 号住居跡（図版第 97 図・第 98 図）

位　置：E10・E11 グリッドに位置している。

形　態：平面形は径約 5.4m×4.1m の楕円形を呈する。竪穴壁面はなだらかに立ち上がり、深さ約 0.6m を測る。５本主柱と考えられ、床面の中央部に地床炉を有し、入口部に楕円形の土坑（Ｐ９）を伴っている。また埋没後に覆土を掘り込んで３ａ期の埋甕（1597）が構築されている。

覆　土：確認面より深さ約 0.5m の覆土が確認され、２層がレンズ状に堆積する。

床　面：明確な硬化面は確認できなかった。主柱穴の外側はなだらかに立ち上がり、床に段差が見られる。いわゆるベッド状遺構の一種とも考えられるが、通常の事例と比べて約 0.25m の段差は異質である。

柱　穴：５本主柱（Ｐ１～Ｐ４・Ｐ８）と推測されるが、柱穴配列はやや不明瞭である。柱穴は径約 0.25m の円形を呈し、深さは約 0.1m 程度と浅く、小規模な柱穴である。

炉　跡：床面のほぼ中央部に小規模な地床炉が形成される。

時　期：１ｃ期（大木８ａ式並行期新段階）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 236 図 1007 ～第 243 図 1076）、石器（図版第 438 図 148 ～ 151）、土製品（図版第 418 図 12・第 420 図 73）、石製品（図版第 458 図 7）などが出土している。覆土中より、１ｃ期を中心とする完形に近い 10 個体（1007、1008、1030、1032、1037、1040、1048、1069、1070、1073）を含めて比較的多くの土器がまとまる。これらの土器は竪穴の中央部にまとまる傾向がある。石器は、打製石斧１点（148）、不定形石器２点（149・150）磨石１点（151）などがある。土製品は、三角形土版１点（12）と土製円盤１点（73）がある。

第 47 号住居跡（図版第 99 図）

位　置：G6・G7・H7 グリッドに位置している。

形　態:柱穴配列と炉跡の形態から、長方形住居跡であると考えられる。竪穴の立ち上がりは確認できず、南東側は第 39 号住居跡と重複しており、全体像は明確ではない。

覆　土：確認されていない。

床　面：明確な硬化面は確認されなかった。

柱　穴：５基（Ｐ１～Ｐ５）の柱穴が確認され、６本主柱であると推測される。柱穴は約 1.0m ～ 1.2m のやや大形の円形や楕円形を呈し、深さは約 0.5m ～ 0.6m を測る。

炉　跡：長さ約 0.7m の縁石が両側縁に平行に配列する。その間には長さ約 3.0m の細長い焼土跡が形成される。炉石は偏平円礫（安山岩）を配し、被熱により一部表面が赤化したりや剥落するものがある。

時　期：不明。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 243 図 1077 ～ 1084）、石器（図版第 438 図 152）、などが出土している。出土土器は僅かで、住居跡の時期を比定するのは難しい。石器は打製石斧１点（152）のみである。また有頭石棒らしきものが炉跡脇から出土しているが、調査後に紛失したと思われる。

第 48 号住居跡（図版第 100 図・第 101 図）

位　置：G7 グリッドに位置している。

形　態：径約 6.9m×6.0m の卵形を呈し、７本主柱の卵形住居跡と考えられる。床面の一部にはベッド状遺構が確認され、床面中央部には祖形的な複式炉を持つ。竪穴は北側と西側で確認されるが、現代の攪乱や他の遺構との重複によって平面形はやや不明瞭である。

覆　土：確認されなかった。

床　面：明確な硬化面が確認されていないが、炉跡が形成された面が床面であると考えられる。床面の一部にはベッド状遺構があり、10cm ほどの段差が確認される。

柱　穴：７本主柱（Ｐ１・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ９）と推定され、Ｐ９に対応する東側の主柱穴は　撹乱中に位置し、すでに破壊されたものと推測される。柱穴の規模は径約 0.6m ～ 1.0m の楕円形を呈し、深さは約 0.2m ～ 0.4m を測る。

炉　跡：祖形的な複式炉はコケシ形を呈し、約 1.43m×0.84m の規模を有する（図版第 101 図上段）。炉石の組み方は、二列の縁石をめぐらせて内側に小礫を充填する手法をとる。石組部の内側には、石組円形にまわる部分が存在し、炉体土器の代わりとも考えられる。また炉跡の覆土中には破砕礫が多く包含されていた。

時　期：２ｃ期（栃倉式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 244 図 1085 ～ 1101）、石器（図版第 438 図 153 ～ 158）、などが出土している。覆土中に２ｃ期～３ａ期の土器片が疎らに分布している。石器は、石鏃２点（153・154）、石匙１点（156）、板状石器１点（155）、磨製石斧１点、石皿片１点（158）などがある。

第 49 号住居跡（図版第 94 図）

位　置：G7・G8 グリッドに位置している。

形　態：東側と南側で竪穴の立ち上がりが確認され、南側では周溝が検出されている。しかし、北側は攪乱により不明瞭で、西側でも確認されず、全体の形状は明確ではない。南側の溝に隣接して径約 0.96m × 0.84m の不整形な焼土跡が検出されているが、本住居跡に伴うかどうか不明である。

覆　土：確認されていない。

床　面：硬化面などは確認されていないが、完掘した面が床面の可能性がある。

柱　穴：Ｐ２とＰ３が確認されるが、配列などは明確ではない。

炉　跡：径約 0.96m×0.84m の不整円形を呈する地床炉である。

時　期：不明。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 245 図 1102 ～ 1106）、石器（図版第 438 図 159）、などが出土し、土器は破片のみで希薄である。石器は、打製石斧１点（159）のみである。

第 50 号住居跡（図版第 102 図～第 105 図）

位　置：G8 グリッドに位置している。

形　態：東側は現代の攪乱によって破壊されているが、径約 6.5m×5.3m の楕円形を呈すると推定される。炉跡を中心に７基の柱穴が確認されるが、Ｐ１とＰ３に対応する東側では配列は見られず、フラスコ状土坑（50 住Ｐ 11）や現代の攪乱によって破壊された可能性がある。壁際には周溝がめぐり、北西側と北側で一部途切れている。北側に第 52 号住居跡（長方形住居跡）の主柱穴２基（Ｐ２・Ｐ５）が重複している。

覆　土：確認されていない。

床　面：明瞭な硬化面は確認されていないが、炉構築面が当時の床面であると考えられる。

柱　穴：炉跡の周囲に７基の柱穴がめぐり、東側の配列は確認されていないが、９本主柱の可能性が高い。主柱穴の規模は、径約 0.4m ～ 0.8m の楕円形を呈し、深さは約 0.35m 前後である。

炉　跡：径約 1.17m×0.72m の縦長の楕円形を呈する複式炉である。しかし、調査時に石組は検出されておらず、炉体土器に土器敷部が付属する比較的簡素なものである。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 245 図 1107 ～第 250 図 1157）、石器（図版第 439 図 160 ～ 162）、土製品（図版第 419 図 54）などで、覆土中からは３ａ期を主体とする多量の遺物が出土している。1107 は複式炉の炉体土器で、1152 は炉跡の石組部に敷かれていた土器片である。その他の土器は覆土出土で、竪穴の中央部よりにまとまって分布する。石器は、打製石斧１点、不定形石器２点（160・161）、磨製石斧１点（162）、磨石類１点などがある。土製品は、皿形のミニチュア土器１点（54）である。

第 51 号住居跡（図版第 106 図）

位　置：H6 グリッドに位置している。

形　態：第 38 号住居跡の西側に隣接し、南東側が攪乱で遺存しておらず住居形態は不明である。西側に直線的な竪穴の立ち上がりが確認され、主柱と考えられるＰ２とＰ４が配列する。

覆　土：確認されていない。

床　面：硬化面は確認されておらず、床面は明確ではない。

柱　穴：Ｐ２とＰ４が主柱であると考えられるが、その他の配列は明確ではない。

炉　跡：楕円形の焼土跡が第 38 号住居跡との際から検出されており、本住居跡に伴う可能性がある。

時　期：１～２期（大木８ａ式並行期～大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：本遺構からは、土器片（図版第 251 図 1158 ～ 1162）が数点出土したのみである。

第 52 号住居跡（図版第 107 図）

位　置：F8・G8 グリッドに位置している。

形　態：コ字状の石組炉と焼土跡１、焼土跡２とともに４基の主柱穴が長方形に配列していることから、長方形住居であると考えられる。南東側でＬ字状の立ち上がりが確認されるが、南側では第 50 号住居跡と重複しており、全体の範囲は明確ではない。

覆　土：確認されていない。

床　面：硬化面は明確ではないが、炉跡と焼土形成面が床面であると考えられる。

柱　穴：４基（Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４）の柱穴が確認されるが、他の主柱が検出されていないため配列は不明である。主柱穴は、径約 0.8m ～ 0.9m の楕円形を呈し、深さは約 0.52m ～ 0.63m である。

炉　跡：コ字状の石組炉と２基に焼土跡が検出されている。コ字状石組炉は径約 1.14m×0.66m、焼土跡１は径約 0.6m×0.4m、焼土跡２は径約 0.66m×0.6m の不整楕円形を呈する。

時　期：不明。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 251 図 1163 ～ 1168）、石器（図版第 439 図 163 ～ 165）、石製品（図版第 458 図 8）などが出土している。出土土器は僅かな破片資料のみである。石器は、打製石斧２点（163）と磨製石斧１点（164）などがある。石製品は、炉石に使用されていた石棒である。

第 54 号住居跡（図版第 108 図）

位　置：J4・J5・K4・K5 グリッドに位置している。

形　態：調査区の端から三角形の柱穴と周溝が検出されており、全体の形態は明確ではない。東側は、第２号長方形柱穴列が重複している。またＰ８からは第 24 号埋設土器が検出されている。

覆　土：確認されていない。

床　面：明確な硬化面は確認されていない。

柱　穴：不明。

炉　跡：検出されていない。

時　期：２ｃ～３ａ期（栃倉式～沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 251 図 1169 ～第 251 図 1197）などが出土している。1171 は埋設土器で、重複関係にあると考えられる。

第 55 号住居跡（図版第 109 図）

位　置：L5 グリッドに位置している。

形　態：炉跡を中心に西側と南側で竪穴の立ち上がりが確認される。北西側は L5 - P18（図版第 159 図）が重複し、北側と東側は遺存していない。主柱配列や床面の範囲も明確ではない。

覆　土：確認されていない。

床　面：明瞭な床面は検出されていないが、溝と柱穴に囲まれた部分が床面であると推定される。

柱　穴：L5 - P8・Ｐ 12・Ｐ 15、55 住Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５のいずれかが主柱であると考えられる。これらの柱穴の規模は、径約 0.3m ～ 0.55m ほどの円形や楕円形を呈し、深さは約 0.18m ～ 0.36m と全体的に浅い。

炉　跡：径約 1.08m×0.87m のダルマ形を呈する石組複式炉で、前庭部の有無は不明である。石組には安山岩が使用され、境石には径約 40cm の偏平円礫、石組部の左右壁面には偏平円礫や亜角礫を配する。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 253 図 1198 ～ 1213）、石器（図版第 440 図 166）、などが出土している。土器 1198 は複式炉内出土の破片資料である。石器は磨石類１点（166）などがある。

第 56 号住居跡（図版第 106 図）

位　置：L4・L5・M4・M5 グリッドに位置している。

形　態：調査区の端部で検出され、焼土の北東側に弧状の竪穴の立ち上がりが確認される。しかし、柱穴配列や全体の形態は不明である。

覆　土：確認されていない。

床　面：明確な床面は確認されていないが、焼土形成面が床面であると考えられる。

柱　穴：柱穴状の土坑が４基確認できるが、配列などは明確ではない。

炉　跡：径約 1.5m×0.7m の隅丸方形状の焼土跡が検出されている。南側は調査区外に続いている。

時　期：不明。

出土遺物：土坑から土器片（図版第 253 図 1214 ～ 1218）などが僅かに出土している。

第 59 号住居跡（図版第 110 図～第 112 図）

位　置：O8・O9 グリッドに位置している。

形　態：床面上に多量の炭化材と焼土層が厚く堆積していることから火災住居跡であると考えられる。部材の形状をとどめる炭化材も見られ、炭化材の上に焼土が堆積する。この焼土は地山土が赤化したもので、これらから土葺屋根の葺土であると推定される。住居跡は径約 6.4m×5.0m の五角形を呈し、壁際に沿って主柱穴が配列する。他の事例を考慮すれば、この立ち上がりの外側に床面が広がっていた可能性もある。これは焼土層が一部外側に及ぶ部分が確認されることからも可能性が窺われる。複式炉は床面のほぼ中央に位置し、入口部分のＰ５からは埋設土器１基（1254）が確認されている。床は他の土坑との重複により平坦ではなく、炉跡北西側にはフラスコ状土坑Ｐ３（２期）が重複する。

覆　土：炭化材や焼土・地山土が約 0.2m の厚さで堆積している。炭化材が床面上に分布しその上に焼土と地山土が混ざる層が堆積する。これらは屋根に葺かれた土が火災によって焼けたものと考えられる。

床　面：床面は他の土坑との重複により平坦ではないが、残存部分では硬化面が確認されている。

柱　穴：Ｐ７・Ｐ 14・Ｐ 15・Ｐ 16 が主柱の５本主柱であると考えられるが、北側はＰ 17 が主柱と想

定されるが、フラスコ状土坑などとの重複もあり、不明である。これらは径約 0.4m ～ 0.7m ほどの円形や楕円形を呈し、深さは約 0.25m 前後と比較的浅い。

炉　跡：径約 1.23m×1.08m のダルマ形を呈する複式炉であり、北東側の一部に攪乱が加わる。炉体土器１基を有し、石組部底面には礫は敷かずに、その周囲に比較的大形の偏平円礫を配する。その上の壁面には中形の偏平円礫や亜角礫（ほぼ全て安山岩）を横長に配する。

時　期：３ｂ期（沖ノ原Ⅱ式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 256 図 1252 ～第 257 図 1274）、石器（図版第 440 図 168）、、石製品（図版第 458 図 9）などが出土している。土器 1252 は複式炉の炉体土器で、1254 は入口部の床面埋設土器で、いずれも正位で埋設されていた。1253 や 1255・1256 はこれに伴う土器片である。その他は覆土（屋根の葺土など）からの出土であり、これらの覆土出土土器には２ｂ期や３ａ期などの古い時期の土器片も混じっており、もともと屋根に葺いた土などに含まれていた可能性がある。石器は、板状の両極石器（168）のみである。

第 60 号住居跡（図版第 113 図）

位　置：O9・P9 グリッドに位置している。

形　態：他の土坑などと重複が激しく、柱穴配列などはやや不明瞭ではあるが、約 9.0m×3.0m ほどの規模で、６本主柱の長方形住居跡であると考えられる。

覆　土：確認できていない。

床　面：他の遺構の重複が顕著であるが、部分的に硬化面が確認されている。

柱　穴：６本主柱（P9 - Ｐ 18・Ｐ 21・O9 - Ｐ 34、60 住Ｐ３・Ｐ４・Ｐ８）と推定される。

炉　跡：約 3.16m×0.84m の細長い焼土跡で、東側には偏平な縁石が直線的に配列する。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 257 図 1275 ～ 1287）、石器（図版第 440 図 169）、などが出土している。土器は２ｃ期などが僅かに見られ、石器は磨石１点（169）である。

第 61 号住居跡（図版第 114 図）

位　置：M8・N8 グリッドに位置している。

形　態：調査区の壁際から検出され、また他の土坑と多数重複することから、平面形は不明である。炉形態と柱穴配列から長方形住居跡であると考えられる。

覆　土：確認されていない。

床　面：他の遺構との重複が激しく明確ではないが、焼土跡形成面が床面であったと推定される。

柱　穴：Ｐ１～Ｐ５が主柱穴と支柱穴であると推測され、調査区外にこれと対になる主柱穴があると考えられる。主柱穴は、径約 0.6m ～ 0.8m の楕円形を呈し、深さ約 0.2m ～ 0.8m ほどとばらつきがある。

炉　跡：径約 1.2m×0.84m のコ字状を呈する石組炉である。しかし、南西側が土坑で切られているため、全体像は明確ではない。縁石には安山岩の偏平円礫・亜角礫が使用され、炉内部は焼土化する。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 257 図 1288 ～ 1290）、石器（図版第 440 図 170・171）、などが僅かに出土している。石器は打製石斧１点（170）、石皿片１点（171）などである。

第 62 号住居跡（図版第 116 図）

位　置：N8・N9・O8・O9 グリッドに位置している。

形　態：他の遺構との重複が激しく、炉跡のみが検出された。

覆　土：確認されていない。

床　面：不明。

炉　跡：径約 0.75m×0.57m の長方形を呈する石組複式炉である。炉体土器はなく、東側に前庭部と考えられる浅い土坑が伴う。複式炉は、内側に径約 25cm ～ 35cm ほどの偏平円礫（安山岩）を長方形に配し、その周囲に小形礫を 1 列めぐらせている。炉床面には礫は配されていない。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：本遺構からは、土器（図版第 258 図 1291 ～ 1297）が僅かに出土し、３ａ期の資料が見られる。

第 64 号住居跡（図版第 115 図）

位　置：H1、H2 グリッドに位置している。

形　態：５基の柱穴が五角形に配列するもので、住居跡と考えられる。

覆　土：確認されていない。

床　面：硬化面は確認されていない。

柱　穴：５基（Ｐ２・Ｐ３・Ｐ６～Ｐ８）の柱穴が確認される。柱穴は径約 0.6m ～ 0.85m の円形や楕円形を呈し、深さは約 0.3m ～ 0.4m 前後にまとまる。

炉　跡：確認されていない。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

第１号炉跡（図版第 116 図）

位　置：G8 グリッドに位置する。

形　態：径約 1.1m×0.6m の楕円形に焼土跡が広がり、西端部に弧状に石組が配列する。炉石は、15cm ～ 25cm の偏平円礫が配される。

時　期：１～３期（大木８ａ式並行期～沖ノ原式期）。

出土遺物：なし。

第２号炉跡（図版第 116 図）

位　置：I5 グリッドに位置する。

形　態：石組炉であり、径約 1.4m×0.9m の浅い掘り込み（I5-Ｐ１）によって西側の大部分が破壊されている。残存する石組形態から、複式炉であった可能性も考えられる。

時　期：３～４期（沖ノ原式期～三十稲場式期）。

出土遺物:土器片（図版第 258 図 1300 ～ 1303）が土坑内から出土しているが､炉跡との関係は不明である。

第３号炉跡（図版第 117 図）

位　置：G8 グリッドに位置している。

形　態：径約 1.4m×0.9m の楕円形を呈する地床炉であり、中央部に炉体土器（1298）を伴う。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）

出土遺物：1298 は炉体土器で、焼土跡のほぼ中央部から出土している。

第４号炉跡（図版第 117 図）

位　置：I7 グリッドに位置している。

形　態：径約 1.38m×0.96m の楕円形を呈する地床炉である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

第５号炉跡（図版第 117 図）

位　置：I4 グリッドの第 27 号住居跡の南西側に位置している。

形　態：径約 1.65m×0.6m の不整形に焼土が広がり、炉体土器と石組の一部が検出されている。石組炉は大部分が土坑（27 住P 11）により破壊されているが、複式炉であると考えられる。

時　期：３期（沖ノ原式期）。

出土遺物：炉体に使用された土器が出土している。

第６号炉跡（図版第 117 図）

位　置：M7 グリッドに位置している。

形　態：径約 0.81m×0.48m の楕円形を呈する地床炉である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

第７号炉跡（図版第 117 図）

位　置：L9 グリッドに位置している。

形　態：径約 1.19m×0.57m の長楕円形を呈する地床炉である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

第８号炉跡（図版第 117 図）

位　置：I4 グリッドの第 27 号住居跡の南西側に位置している。

形　態：長さ約 1.29m、幅約 0.48m の細長く不整形な地床炉である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

第９号炉跡（図版第 117 図）

位　置：N8 グリッドに位置している。

形　態：N8 - P23 内に形成され、径約 0.66m×0.45m の楕円形を呈する地床炉である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

第 10 号炉跡（図版第 118 図）

位　置：N9 グリッドに位置している。

形　態：径約 0.36m×0.3m の不整楕円形を呈する地床炉であり、東側が土坑で切られている。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

第 11 号炉跡（図版第 118 図）

位　置：N9 グリッドに位置している。

形　態：径約 0.51m×0.3m の楕円形を呈する地床炉である。東側に礫が３つ配列する。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

第 12 号炉跡（図版第 118 図）

位　置：N9 グリッドに位置している。

形　態：径約 0.69m×0.62m の不整形を呈し、周囲を土坑によって切られている。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

第 13 号炉跡（図版第 118 図）

位　置：N9・N10 グリッドに位置している。

形　態：周囲を土坑によって切られて、長さ約１m の不整形を呈する地床炉である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

第 14 号炉跡（図版第 118 図）

位　置：N10 グリッドに位置している。

形　態：径約 1.17m×0.57m の長楕円形を呈する地床炉である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

第 15 号炉跡（図版第 118 図）

位　置：O10 グリッドに位置する。

形　態:径約 0.57m×0.45m の不整隅丸方形を呈する地床炉であり、周囲を土坑によって削平されている。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

第 16 号炉跡（図版第 118 図）

位　置：O10 グリッドに位置する。

形　態：径約 0.69m×0.57m の楕円形を呈する地床炉である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

第 17 号炉跡（図版第 118 図）

位　置：P9 グリッドに位置する。

形　態：径約 0.77m×0.62m の楕円形を呈する地床炉である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

3．長方形柱穴列

1）長方形柱穴列の認定方法

この種の遺構は「掘立柱建物跡」などと呼称されており、港北ニュータウンにおける調査で初めてその存在が指摘されて（註 114）以降、新潟県内でも事例が増加している。この種の遺構は、竪穴住居跡と異なり、柱穴同士が同一遺構であるという確証がないため配列を認定する作業はより困難である。このことから、重複があまり見られない配列が明確な事例からパターン化して、柱穴が規則正しく配列するものを結んだ。加えて、柱穴の深度・覆土・出土遺物・規模などから共通するものを検討した。しかし、本遺跡では重複が激しいことと、時期比定できる出土遺物が少なかったことや、個々の土坑覆土について堆積状況を記録していなかったため、ほとんど認定することができなかった。その結果、明瞭な事例は3基のみで、その他は重複が激しいため、明瞭な配列を認識することはできなかった（第9表）。

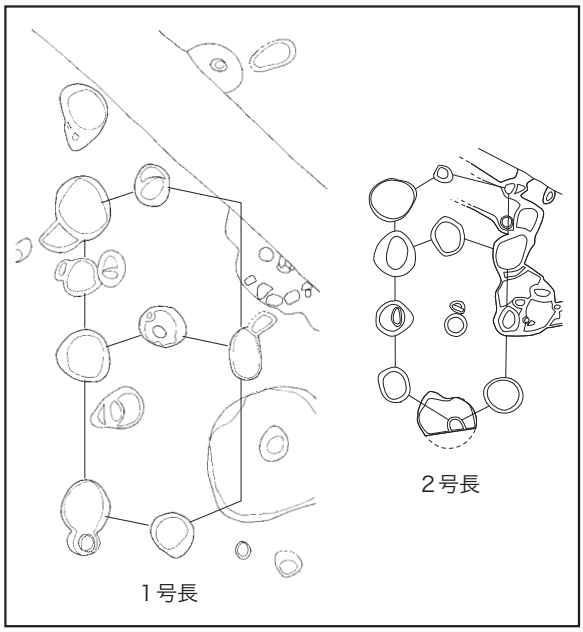
2）形態分類

本遺跡から検出された明確な事例は少ないことから、道尻手遺跡での周辺遺跡を含めた分類をやや改変して、柱穴配列の組み合わせをパターン化した。

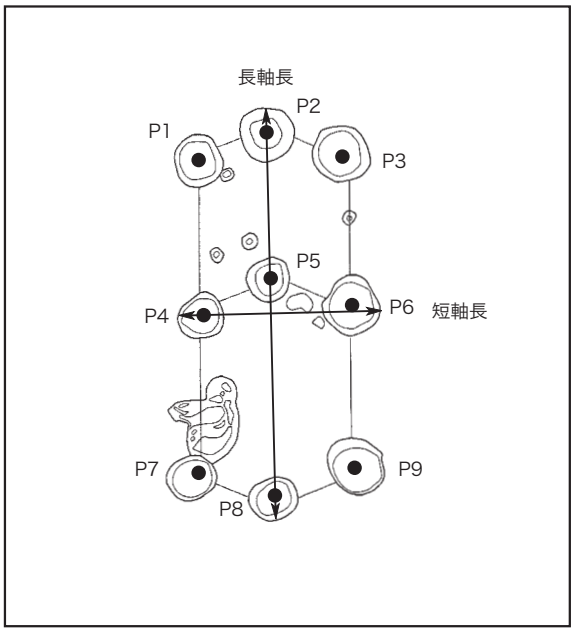
Ⅰ類：1辺が2本柱の形態。

Ⅰa類：柱穴配列が方形を呈し、4本主柱の形態。

Ⅰb類：柱穴配列が亀甲形を呈し、6本主柱の形態。



第 34 図　長方形柱穴列分類図



第 35 図　長方形柱穴列の計測部位

番号	グリッド	形態	時期	規模		主軸方向	炉跡	柱穴数	周溝	備考
				長軸長（m）	短軸長（m）					
1	J5,J6,K6	Ⅱc類	3期以降	10.1	4	N-10° -W	無	12	無	
2	J4,J5,K4,K5	Ⅲc類	4期	4.4	2.3	N-81° -W	無	12	無	54住と重複。
3	K6	Ⅲc類	不明	5.4	2.4	N-17° -E	無	12	無	

第9表　長方形柱穴列一覧

Ⅰｃ類：柱穴配列が亀甲形を呈し、６本主柱に加えて中心に柱穴を有する形態。

Ⅱ類：１辺が３本柱の形態。

Ⅱａ類：柱穴配列が長方形を呈し、６本主柱の形態。

Ⅱｂ類：柱穴配列が亀甲形を呈し、８本主柱の形態。

Ⅱｃ類：柱穴配列が亀甲形を呈し、９本主柱の形態。

Ⅲ類：１辺が４本柱の形態。

Ⅲａ類：柱穴配列が長方形を呈し、８本主柱の形態。

Ⅲｂ類：柱穴配列が亀甲形を呈し、10 本主柱の形態。

Ⅲｃ類：柱穴配列が亀甲形を呈し、12 本主柱の形態。

Ⅲｄ類：柱穴配列が亀甲形を呈し、13 本主柱の形態。

３）計測方法

規模については、柱痕が不明であることから、便宜的に柱穴間の両端の最長部を計測した（第 35 図）。

＜各　説＞

第１号長方形柱穴列（図版第 119 図）

位　置：J5・J6・K6 グリッドに位置している。

形　態：部分的に柱穴が配列するもので、Ⅱｃ類であると推測される。現状の規模は、長軸長約 10m×幅 4.4m で大形である。柱穴配列は片側に３本ないしは４本が配列し、東側は１基のみが認められる。主軸線上の一端に１基、中心に２基配列する。畦畔部分や他遺構と重複しているため柱穴配列は明確ではない。主軸方向は N-10° -W である。

時　期：３期以降。

出土遺物：本遺構からは柱穴に伴って３期などに属する土器片が出土している（図版第 258 図 1304 ～ 1314）。

第２号長方形柱穴列（図版第 120 図）

位　置：J4・J5・K4・K5 グリッドに位置している。

形　態：本遺構は第 54 号住居跡と重複関係にある。形態的にはⅢｃ類に分類され、両側に４基ずつ柱穴が配列し、主軸線上に４基の柱穴が配列する。規模は、長軸長約 5.6m×3.0m で、柱穴間の幅は狭く約 1.4m である。主軸方向は N-81° -W である。

時　期：１期～４期（大木８ａ式並行期～三十稲場式）。

出土遺物：柱穴に伴って１期～４期に属する土器片が出土している（図版第 259 図 1315 ～ 1338）。

第３号長方形柱穴列（図版第 120 図）

位　置：K6 グリッドに位置している。

形　態：長軸長約 8.9m×3.3m の長方形に柱穴が配列するもので、14 基の柱穴が確認される。主軸は N-17° -E で、主軸線上にも４基の柱穴が配列する。

時　期：不明。

出土遺物：不明。

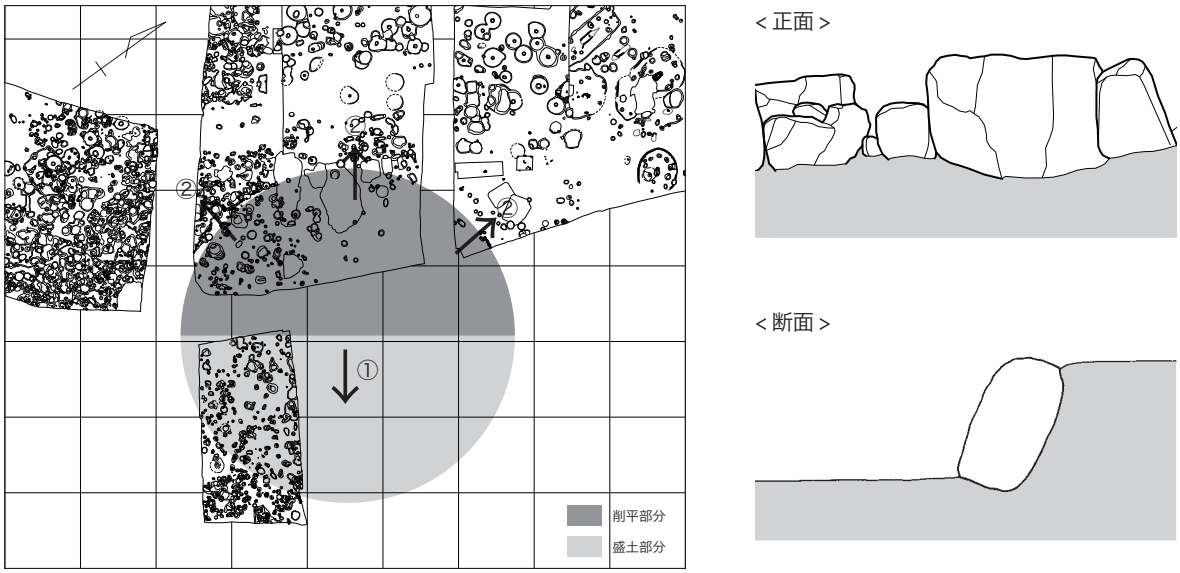
4．環状列石

本遺跡から検出された環状列石（註 115）は、I9 ～ M9 グリッドにかけて分布する（図版第 121 図）。これらは弧状にめぐる列石が部分的に検出されたものであり、列石は二ヶ所に離れて分布し、その間の J8・J9・K8・K9 グリッドは現代の攪乱によって破壊されている。また東側の L11 ～ L13、M11 ～ M13 グリッドからは配石遺構が検出されていないが、撹乱によって破壊された可能性とともに、緩やかな斜面の谷側にあたることから元々列石が構築されなかった場合も考えられる（註 116）。これらの列石遺構を便宜的に、L8・L9・M9 グリッドのものを列石 A、I9 グリッドのものを列石 B と呼称する。

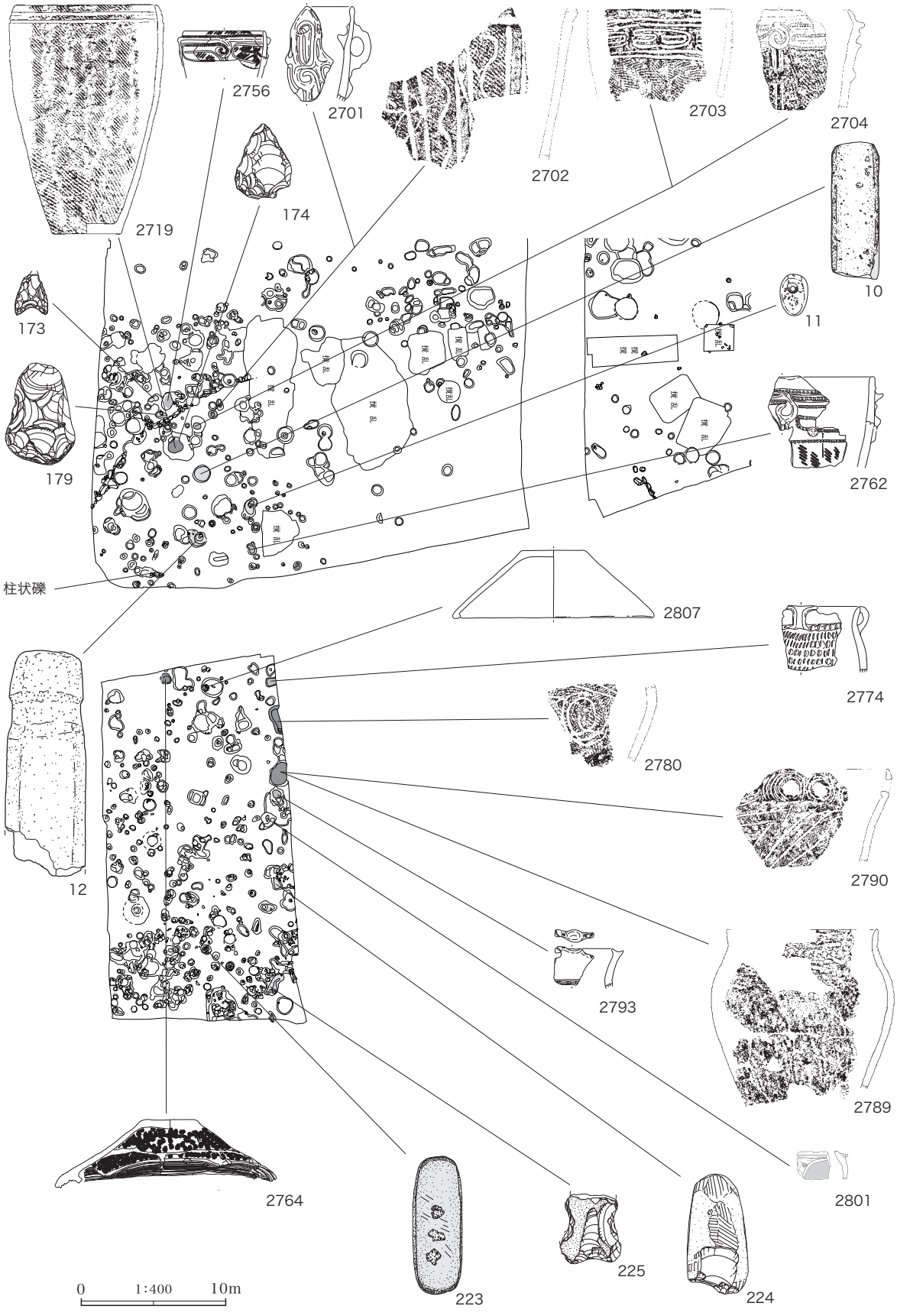
列石 A は、約 14.4m の弧状に配石が配列する（図版第 122 図）。列石は約 55 個の亜角礫から構成され、使用石材は全て安山岩の亜角礫である。列石は礫長軸を列の軸に向けて配列しており、配石を地山の壁面に立てて並べていることから、緩やかや斜面地を塵取り状に削平して構築されている可能性が高い（第 36 図）。このことは現在までに調査された環状列石の事例からも蓋然性が高い（註 117）。環状の西側約半分の土を掘削した排土の行方であるが、①斜面谷側もしくは、②周囲に盛土した可能性が想定される（第 36 図左）。しかし、上層が残っていないため、あくまで推定に過ぎない。

列石 B は、約 2.7m の列状に配石が検出されており、調査区外へと続く可能性がある（図版第 124 図）。列石は 8 個の亜角礫から構成され、石材は安山岩である。これらの列石は、礫長軸を列の軸に向けて配列し、礫の長辺を立てて配されるものが多い。

環状列石は、中期中葉～末葉（1 期～ 3 期）に形成された環状集落の中央広場に構築されていることが明らかである。環状列石の内部空間は、円形や楕円形などの比較的浅い土坑が分布しており（図版第 122 図・第 123 図）、一部は墓坑の可能性がある。土坑のうち、L12 - P1 と P11 からは、 1 期（大木 8 a 式並行期）の完形の浅鉢が出土しており、この時期の墓坑であると考えられる。また後期初頭～前葉（4 期～ 5 期）の遺物が出土する墓坑も多く、内部の遺構に時期幅が見られる。L9-P28 からは偏平礫とともに垂飾品（図版第 459 図 11）が出土し、L9-P36 からは石棒片が検出されている。M10-P16 と L10-P8 には、それぞれ立石（無頭石棒）と有頭の大形石棒（図版第 459 図 12）が埋設されていた。大形石棒は長さ約 62cm で、形態からは 3 ～ 5 期と推定される。この他に、焼土跡が 1 ヶ所検出されており、住居跡に伴う可能性も



第 36 図　環状列石の土地造成想定図および列石模式図



第 37 図　環状列石内の土坑出土遺物

第 38 図　環状列石内の遺物分布図

ある。列石周辺の遺構配置は、撹乱により明確ではないが、列石下に伴う遺構は確認されていない。

出土遺物は、土坑内や遺構外から出土しているが、全体的に分布は疎らである（第37図・第38図）。土器の帰属時期は、１ｃ期～６期（大木８ａ式並行期新段階～加曽利Ｂ１式並行期）と時間幅があるが（図版第260図1342～第273図1577)、沖ノ原Ⅱ式土器が主体となる。これらの遺物は、必ずしも環状列石の構築時期を示すとは限らないが、列石内側の墓坑等の構築時期を考慮すると、中期終末から前葉にかけて造営されたと推定される

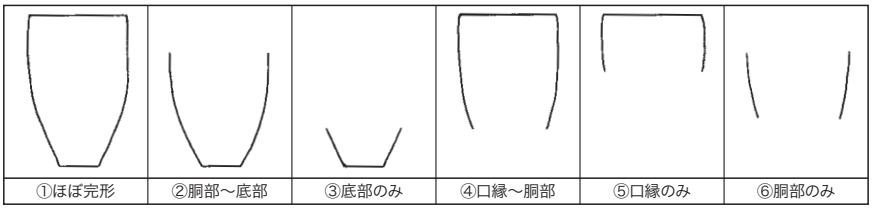
５．埋設土器

本遺跡からは、住居跡に伴わない埋設土器が20基検出されているが、現場での記録や調査所見がほとんど残っていないため詳細な報告が不可能な状態にある（第10表)。これらは竪穴住居跡や炉跡に伴う埋設土器以外で、単独で検出されたものないしは重複関係が明確なものを対象とする。しかし、これらの一部も元々は竪穴住居跡に伴っていた埋甕や炉体土器が、その後の攪乱によって単独で検出された可能性も考慮される。埋設土器の種類としては､(１)炉跡に伴う炉体土器や､(２)住居跡床面のいわゆる「埋甕」､(３）屋外の埋葬施設、などが想定される。また土器の遺存度については第39図のように分類する。

(１）炉体土器の残存：調査区全体で包含層の遺存度が悪かったこともあり、炉跡が壊れた残存部分と考えられるもの。これらは土器内部に焼土や炭化物を含み､底部付近または胴下半部を使用する場合が多い。

(２）住居跡床面に埋設された「埋甕」：本地域の場合、中期末葉～後期初頭の住居跡の入口部などの床面に埋設土器を伴う事例が見られる。この特色として、上に偏平礫が蓋状に付属する点である。底部を欠いた倒立の土器が多いようである。

(３）埋葬施設：埋設状態で土坑内に完全に埋められているもの。立石が伴うものもある。



第39図　埋設土器の形態分類図

No	グリッド	時期	土坑規模			覆土	土器器種	埋設状態	遺存部位	付帯物	備　考
			長軸長（m）	短軸長（m）	深さ（m）						
1	不明	不明	—	—	—	—	深鉢（1578・1579）	正位	3・3	—	30号住居跡脇出土。
2	I5	3期～4期	—	—	—	—	深鉢（1580）	正位	3	—	23号住居跡床面出土。
3	I5	不明	—	—	—	—	深鉢（1581）	不明	6	—	23号住居跡床面出土。
4	I5	4期	—	—	0.57	—	深鉢（1582）	不明	4	—	
5	H4	不明	—	—	—	—	深鉢（1588）	正位	3	—	
8	I4	4期	0.81	0.63	0.3	—	深鉢（1589）	正位	3	—	28号住居跡床面と重複。
9	H3	2期	0.4	0.3	0.15	—	深鉢（1590）	正位	4	偏平礫	
10	I3	3ａ期	0.72	0.48	0.5	—	深鉢（1593）	逆位	5	—	
15	E10	3ａ期	—	—	—	—	深鉢（1597）	正位	1	—	45号住居跡にの覆土中。
16	E10	2ａ期	—	—	—	—	深鉢（1592）	正位	1	—	45号住居跡に隣接。
17	L7	中期	—	—	—	—	深鉢（1594）	正位	3	—	
18	L7	5期	—	—	—	—	深鉢（1595）	正位	2	—	
20	M7	3ｂ期	—	—	—	—	深鉢（1596）	正位	2	—	
21	M7	中期	—	—	—	—	深鉢（1598）	正位	3	—	
27	I4	3ｂ期	—	—	—	—	深鉢（1599・1600）	逆位	3・4	—	埋設土器が密集。
28	I4	3ｂ期	—	—	—	—	深鉢（1602）	正位	2	—	埋設土器が密集。
29	I4	3期～4期	0.9	0.77	—	—	深鉢（1601・1603）	正位	6	—	埋設土器が密集。
30	I4	3期	—	—	—	—	深鉢（1604）	正位	3	—	
32	不明	3期	—	—	—	—	深鉢（1606・1607）	—	3・2	—	
37	不明	中期	—	—	—	—	深鉢（1609）	正位	3	—	
38	H7	不明	0.45	0.36	0.2	—	深鉢（1610）	正位	6	—	H7-P10（F）と重複。

第10表　埋設土器一覧

＜埋設土器各説＞

第１号埋設土器

形　態：浅い土坑に深鉢（図版第 273 図 1578）の底部が埋設されたもので、土器の周囲からは炭化物や焼土は検出されていない。

時　期：不明。

第２号埋設土器

形　態：土坑に深鉢（図版第 273 図 1580）の底部が埋設されたものである。

時　期：不明。

第３号埋設土器

形　態：土坑内に深鉢（図版第 273 図 1581）の底部を使用したものである。覆土中には炭化物や焼土は検出されていない。

時　期：不明。

第４号埋設土器（図版第 125 図）

形　態：土坑が重複する区域から検出され、深鉢を正位で埋設したものである。深鉢（図版第 273 図 1582）の口縁部から胴部を使用される。埋設土器の下部から打製石斧２点が出土しており、意図的に埋められたと考えられ、形態的特色から埋葬施設の可能性が考えられる。この他に土器片が出土している（図版第 273 図 1583 ～ 1587）。

時　期：４ｂ期（三十稲場式期新段階）。

第５号埋設土器

形　態：土坑内に深鉢（図版第 273 図 1588）の底部を埋設したもので、覆土中や周囲からは炭化物や焼土は検出されていない。

時　期：不明。

第８号埋設土器（図版第 125 図）

形　態：楕円形の土坑に深鉢が正位で埋設されており、深鉢（図版第 274 図 1589）の底部を使用したものである。土器周囲の土が赤化し、土器内部の覆土に炭化材が混じる。このことから本遺構は炉に伴う炉体土器であったと考えられる。炉内には板状の礫が含まれる。

時　期：４期（三十稲場式期）。

第９号埋設土器（図版第 125 図）

形　態：径約 0.4m×0.3m の小形土坑に深鉢が正位で埋設されたもので、底部を欠損するキャリパー形の深鉢（図版第 274 図 1590）が使用される。土器の上には板状の偏平礫が付帯する。覆土や周囲からは焼土や炭化物は検出されていないことから、埋葬施設の可能性が高い。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）。

第 10 号埋設土器（図版第 125 図）

形　態：ほぼ円形の柱穴状の土坑に、深鉢の口縁部が埋設されており、深鉢（図版第 275 図 1593）の口縁部を使用している。また土器の周囲や覆土からは焼土や炭化物は検出されていない。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

第 15 号埋設土器

形　態：第 45 号住居跡（1 c 期）の覆土中から検出されたもので、正位で深鉢（図版第 275 図 1597）が埋設されていた。本住居跡の覆土が埋没した後に、上層を掘り込んで構築されたと考えられる。覆土中からは焼土や炭化物の出土がないことから、埋葬施設等の可能性がある。

時　期：3 a 期（沖ノ原 I 式期）。

第 16 号埋設土器

形　態：楕円形の土坑の中心部に深鉢が正位で埋設され、ほぼ完形の深鉢（図版第 274 図 1592）が使用されていた。この周囲からは焼土や炭化物の出土がないことから、埋葬施設の可能性もある。

時　期：2 a 期（大木 8 b 式並行期古段階）。

第 17 号埋設土器

形　態：土坑に深鉢（図版第 275 図 1594）の底部が正位で埋設されており、土器の周囲や覆土からは焼土や炭化物は検出されていない。

時　期：中期。

第 18 号埋設土器（図版第 126 図）

形　態：複数の土坑が重複する区域に位置し、深鉢の胴下半部が正位で埋設されていた。深鉢（図版第 275 図 1595）の胴下半部を使用する。土器の周囲や覆土からは焼土や炭化物は検出されていない。

時　期：5 期（南三十稲場式期）。

第 20 号埋設土器

形　態：土坑内に深鉢（図版第 275 図 1596）の胴部から底部が埋設されたものである。土器の周囲や覆土からは焼土や炭化物は検出されていない。

時　期：3 b 期（沖ノ原Ⅱ式期）。

第 27 号埋設土器（図版第 126 図）

形　態：第 28 号埋設土器と並列して検出され、本遺構は深鉢（図版第 276 図 1600）の胴上半部を正位で埋設したものである。土器周囲や覆土からは焼土や炭化物は検出されていないことから、埋葬施設ないしは住居跡床面に埋設されたものであると考えられる。第 29 号埋設土器と同時期に埋設された可能性が高い。

時　期：3 b 期（沖ノ原Ⅱ式期）。

第 28 号埋設土器（図版第 126 図）

形　態：第 27 号埋設土器に並列して埋設され、ほぼ完形の深鉢（図版第 276 図 1602）を正位で使用している。本埋設土器は、第 27 号埋設土器と同時に埋設された遺構であると考えられる。

時　期：3 b 期（沖ノ原Ⅱ式期）。

第 29 号埋設土器（図版第 126 図）

形　態：不整形な土坑に深鉢（図版第 276 図 1601）の胴部が埋設されたもので、土器内部には焼土と炭化物が堆積することから炉体土器の可能性が高い。使用された深鉢も二次的な被熱によって弱くなっている。

時　期：3 期～4 期（沖ノ原式期～三十稲場式期）。

第 30 号埋設土器

形　態：土坑内に深鉢（図版第 276 図 1604）の底部を正位で埋設したもので、土器の周囲や覆土からは焼土や炭化物は検出されていない。

時　期：３期（沖ノ原式期）。

第 32 号埋設土器

形　態：土坑内に、深鉢（図版第 276 図 1607）を正位で埋設したもので、内部により小形の深鉢（1606）が出土した。土器の周囲や覆土には炭化物が多量に含まれるが、焼土は確認されていない。このことから、炉跡の炉体土器の可能性が高い。

時　期：３期（沖ノ原式期）。

第 37 号埋設土器

形　態：土坑内に深鉢（図版第 276 図 1609）の底部を正位で埋設したもので、土器の周囲や覆土からは焼土や炭化物は検出されていない。

時　期：中期。

第 38 号埋設土器（図版第 126 図）

形　態：フラスコ状土坑（H7-P10）の端部に重複して深鉢が埋設されたもので、土坑内には焼土や炭化物は伴わない。深鉢（図版第 276 図 1610）の胴部が使用され、ほとんど復元できないほどぼろぼろになっていた。

時　期：不明。

6．土　坑〔フラスコ状土坑・土坑〕

本遺跡からは、約 1650 基の土坑が検出されている。「土坑」は、明確に竪穴住居跡や長方形柱穴列などの建物跡に伴う柱穴、埋設土器、を除いたものを対象とする。これらの土坑は、平面形や断面形から幾つかに分類可能であり、（1）フラスコ状土坑、（2）墓坑、（3）廃棄坑、（4）建物の柱穴の可能性のあるもの、などが想定される。

（1）フラスコ状土坑：上面径よりも底面径が広くなり、断面形がフラスコ状になるもの。断面形は壁面の崩落などにより変形しているものも多い。底面中央部には浅い小土坑を有するものがある。覆土は、壁面崩落土と思われる地山土がブロック状に堆積している。また完形土器が数個体出土するものや墓坑に転用される事例も確認される。

（2）墓坑：典型的なものとしては、平面形が円形や楕円形を呈するもので、掘り込みが浅く、覆土には地山ブロックと粒子を多く含む埋土である。墓坑の認定基準については幾つかの案が示されているが（註 118)、本遺跡では人骨がほとんど遺存していないため、認定はそう簡単ではない。本遺跡では、①土坑形態、②覆土の堆積状況、③浅鉢などの出土から「甕被葬」と想定されるもの、④対の耳飾や垂飾品の出土状況から意図的に埋められたと推測されるもの、⑤上部に立石などの配石を伴うもの、を墓坑と認定する。しかしながら、覆土が記録されている土坑は僅かであり、多くは①、③、④の条件から認定を行っている。

（3）陥穴状土坑：深く細長い溝状の土坑や方形・円形など幾つかの形態が確認されている（註 119)。

（4）建物跡の柱穴：配列が明確ではなく、単独で検出されているもの。実際は竪穴住居跡や長方形柱穴列などの一部を構成していた可能性もあるが、明確ではない。平面規模は 1m 以下で、長径に比べて深度が深くなる。平地式建物跡や高床式建物跡の場合は、上部構造の高さに比例してより深くなると推定される。また覆土の土層断面から柱痕が確認される場合もある。

（5）その他：性格不明の土坑。廃棄坑、埋納土坑、土の採掘取坑などが想定される。本遺跡の場合、土器片が多く出土する大形の土坑があり、廃棄坑の可能性が想定される。また周辺遺跡では、「L ピット」（註 120）といった土坑が認識されており、これらを含めた解明が望まれる。

1）フラスコ状土坑（図版第 127 図～第 149 図）

本遺跡から検出されたフラスコ状土坑は 86 基で、規模や底面の小土坑の有無など形態的に多様性がある（第 11 表)。大形と小形の区分は便宜的なもので、県内の報告書における基準も一定ではない（註 121)。従って、ここでは、道尻手遺跡での形態分類を踏まえて以下のように分類する。

ａ．形態分類（第 41 図）

Ⅰ類：底径が 1m 未満の小形のもの。

Ⅰａ類：底面が平坦なもの。

Ⅰｂ類：底面中央部に小土坑を有するもの。

Ⅱ類：底面長径 1 m ～ 1.5m 未満の中形のもの。

Ⅱａ類：底面が平坦なもの。

Ⅱｂ類：底面中央部に小土坑を有するもの。

Ⅲ類：底面長径 1.5m ～ 2.5m 未満の大形のもの。

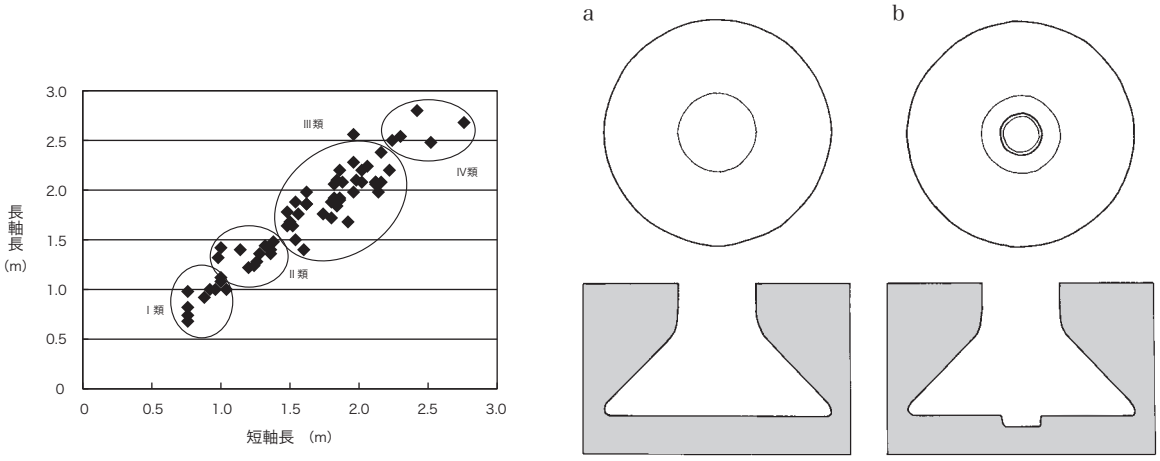
Ⅲａ類：底面が平坦なもの。

Ⅲｂ類：底面中央部に小土坑を有するもの。

第 40 図　フラスコ状土坑分布図

No	グリッド	時　期	形態	上　面		底　面		深度（m）	底面土坑	出土遺物	重複関係	備　考
				長軸（m）	短軸（m）	長軸（m）	短軸（m）					
13住P１	C4	３ａ期	Ⅱｂ	1.2	0.96	1.4	1.36	1.06	有	土器（1611 ～ 1631）	13A住	完形個体22個が底面～上層にかけて出土。
4住Ｐ１	F4	３ａ期	Ⅲｂ	2.12	1.72	2.1	1.98	0.92	有	土器（1632 ～ 1646）、石器（187 ～ 191）	—	完形個体１点が中層より出土。
5住P4	F4	１期	Ⅰａ	1	0.84	0.68	0.76	0.64	無	土器（1647 ～ 1653）		
F6-P4	F6	不明	Ⅱａ	1.56	1.24	1.04	0.96	—	無	—	—	
F6-P6	F6	２ｂ期	Ⅲａ	1.88	1.88	2.08	1.88	0.58	無	土器（1654 ～ 1670）	—	
F6-P7	F6	２ｂ期	Ⅲｂ	2.06	1.76	2.06	1.82	1.04（1.6）	有	土器（1671 ～ 1703）、土製品（36・58）	—	
F6-P8	F6	不明	Ⅱａ	1.8	1.68	1.36	1.44	—	無	土器（1704 ～ 1706）	—	
F7-P4	F7	２ｂ期	Ⅲａ	1.96	1.88	1.9	1.86	0.44	無	土器（1707）	—	
G3-P1	G3	不明	Ⅰａ	0.84	0.72	0.74	0.76	0.4	無	—	—	
G5-P1	G5	不明	Ⅰａ	0.82	0.72	0.82	0.76	0.76	無	—	—	
G6-P7	G6	２期	Ⅲａ	1.8	—	2	—	0.84	無	土器（1716 ～ 1722）	—	下底面に大形円礫
50住-P11	G8	１～２期	Ⅲｂ	—	—	1.86	1.62	0.6（0.76）	有	土器（1723 ～ 1726）、土製品（48・119）	—	
15住-P3	H3	３期	Ⅰａ	0.92	0.84	0.92	0.88	0.52	無	土器（1729）	15住	
15住-P4	H4	２期	Ⅱｂ	0.9	0.9	1.08	1	0.34（0.52）	有	土器（1727・1728）	→15住	
H5-P3	H5	３ａ期	Ⅱｂ	1.08	1	1.24	1.24	0.8（1.24）	有	土器（1730 ～ 1741）	—	
30住-P2	H5	不明	Ⅱａ	1.32	1.06	1.28	1.26	0.4	無	—	30住	
H6-P1	H6	１期	Ⅲｂ	2.56	2.2	2.28	1.96	0.14（0.24）	有	土器（1742）	—	
H6-P4	H6	不明	Ⅱｂ	0.84	0.96	1.12	1.04	0.62（0.76）	有	—	—	
H7-P1	H7	１～２期	Ⅲｂ	1.96	—	1.64	1.52	0.36	有	土器（1743 ～ 1745）	→H7-P2	
H7-P2	H7	２ｃ期	Ⅲｂ	2.84	2.68	2.38	2.16	0.33（0.5）	有	土器（1746 ～ 1755）、石器（192 ～ 194）	H7-P1 →	
H7-P6	H7	２ｃ期	Ⅲｂ	2.56	2.32	2.08	2.16	0.34（0.56）	有	土器（1756 ～ 1778）、石器（195・196）	—	
H7-P8	H7	２ｂ期	Ⅲｂ	2.36	2.28	2.06	2.12	0.4	有	土器（1779 ～ 1786）	H7-P10	
H7-P10	H7	２ｂ期	—	—	—	—	—	0.4（0.54）	無	土器（1787 ～ 1803）、土製品（13）	H7-P8	
H7-P12	H7	不明	Ⅱａ	0.72	0.72	1	0.96	0.48	無	—	—	
H7-P13	H7	１期	Ⅰａ	1.12	1.06	0.98	0.76	0.48	無	土器（1804 ～ 1812）	—	
H8-P1	H8	１期	Ⅳｂ	2.54	2.2	2.56	1.96	0.64	無	土器（1813 ～ 1826）、土製品（61・62）	—	中層より耳飾２点が出土。
H8-P3	H8	２期	—	1.6	1.44	—	—	—	無	土器（1827 ～ 1838）	—	
H8-P7	H8	３ａ期	Ⅱａ	1.44	1.08	1.4	1.14	0.3	無	土器（1839 ～ 1851）	—	
I1-P1	I1	３ａ期	Ⅰａ	0.72	—	0.6	—	0.6	無	土器（1852・1853）	—	
I5-P2	I5	３ａ期	Ⅱａ	—	1.34	1.36	1.28	1	無	土器（1854 ～ 1870）	—	
I5-P9	I5	不明	Ⅱａ	—	1	1	0.96	0.68	無	—	—	
I6-P3	I6	２期	Ⅲｂ	2.24	2	2.1	1.84	0.36	有	土器（1871・1872）	→I6-P6	
I6-P6	I6	３期	Ⅲｂ	2.08	—	1.88	1.8	0.32	有	土器（1873 ～ 1883）、石器（197）	I6-P3 →	
I7-P1	I7	１ｃ期	Ⅲｂ	2.38	2.36	2.08	2.12	0.48	有	土器（1884 ～ 1895）	→I7-P2	
I7-P2	I7	２ｃ期	Ⅲｂ	2.12	2.1	1.92	1.86	0.35	有	土器（1896 ～ 1910）、石器（198・199）	I7-P1 →	
I7-P6	I7	２期	Ⅳｂ	2.7	2.46	2.54	2.3	0.22（0.36）	有	土器（1911 ～ 1921）	—	
I7-P9	I7	２期	Ⅰｂ	0.76	—	0.65	—	—	有	土器（1922 ～ 1924）	—	
I7-P11	I7	不明	Ⅱｂ	1.62	1.54	1.48	1.38	0.16（0.25）	有	土器（1925・1926）	—	
I7-P14	I7	２ｂ期	Ⅱｂ	2.66	—	2.26	—	0.42（0.54）	有	土器（1927 ～ 1940）	—	
I7-P19	I7	２ｃ～３ａ期	Ⅲｂ	1.96	—	1.78	—	0.28（0.4）	有	土器（1941 ～ 1944）、土製品（69）	—	※J7-Ｐ１と同じ土坑。
I8-P6	I8	３ａ期	Ⅲａ	1.56	1.5	1.4	1.6	0.46	無	土器（1945 ～ 1959）	I8-P10	
16J-P1	I9	１期	—	1.0	0.98	0.88	0.92	—	無	土器（1960）	—	
J5-P17	J5	２期～３ａ期	—	1.28	—	—	—	—	有	土器（1961 ～ 1971）	—	フラスコではない可能性
J6-P2	J6	２ｃ期	Ⅳｂ	3.12	2.84	2.8	2.42	0.26（0.56）	有	土器（1972 ～ 1976）	—	
J6-P14	J6	不明	Ⅲａ	3.28	—	2.48	—	0.45	無	石器（216）	—	覆土内から川原石が比較的多く出土した。
J6-P20	J6	不明	Ⅳｂ	3.26	2.84	2.68	2.76	0.96（1.22）	有	土器（1977・1978）	—	
J6-P26	J6	２期	Ⅳｂ	2.26	2.24	2.08	2.12	0.2（0.35）	有	土器（1979・1980）	—	
J6-P27	J6	３ａ期	Ⅲｂ	2.14	1.96	1.72	1.8	0.2（0.36）	有	土器（1981 ～ 1985）	—	
J7-P5	J7	２ｃ期	Ⅲｂ	2.12	2.04	1.84	1.84	0.35（0.56）	有	土器（1986 ～ 1991）	—	
J7-P9	J7	不明	Ⅲｂ	2.36	2.1	2.2	1.86	0.64（0.76）	有	土器（1995）	—	
J7-P14	J7	不明	Ⅱａ	1.12	—	110	—	—	無	土器（1996）	—	
K6-P11	K6	不明	Ⅲｂ	2.46	2.42	1.98	2.14	0.4（0.88）	有	—	—	
K6-P23	K6	不明	Ⅲｂ	2.22	1.76	1.76	1.56	0.06（0.11）	有	土器（1997）	—	
K6-P25	K6	不明	Ⅲｂ	2.2	1.94	1.98	1.62	0.08（0.16）	有	—	—	
K7-P4	K7	３ｂ期	Ⅱｂ	1.8	1.12	1.42	1	0.58（0.7）	有	土器（1998・1999）	—	
K7-P5	K7	３ｂ期	Ⅲａ	1.74	1.66	1.64	1.48	—	無	土器（2000 ～ 2002）	—	
K7-P10	K7	不明	Ⅲｂ	2.4	—	2.1	—	—	有	—	—	
K8-P31	K8	３ａ期	Ⅱｂ	0.9	0.84	1	0.92	0.56（0.65）	有	土器（2003 ～ 2015）、石器（200・201）	—	
L6-P1	L6	２ｂ期	Ⅲｂ	2.38	2.22	2.08	2.02	0.18（0.32）	有	土器（2018 ～ 2025）、石器（202）	—	
L6-P2	L6	２期	Ⅲｂ	2.42	2.3	2.2	2.02	0.68	有	土器（2026 ～ 2028）	—	
L6-P3	L6	不明	Ⅳｂ	2.74	2.48	2.5	2.24	0.2（0.44）	有	土器（2029）	—	
L6-P4	L6	１ａ期	Ⅲｂ	2.48	2.4	2.2	2.22	0.52（0.68）	有	土器（2030 ～ 2033）	—	
L6-P12	L6	１期	Ⅲｂ	2.08	—	1.82	—	0.52	有	土器（2034～2040）、石器（203）、土製品（78・82）	—	
L6-P26	L6	不明	Ⅲａ	2.08	—	1.86	—	0.14	無	—	—	
L7-P5	L7	不明	Ⅱｂ	1.2	0.96	1	1.04	0.48（0.64）	有	土器（2041 ～ 2044）、石器（222）	—	
L12-P12	L12	３ｂ期～４期	Ⅰａ	0.78	0.72	0.66	0.64	0.68	無	土器（2045 ～ 2047）	—	
L13-P13	L13	３ａ期	Ⅰａ	0.68	0.96	0.62	—	0.88	無	土器（2048）	—	
M11-P25	M12	不明	—	—	—	—	—	—	無	土器（2049 ～ 2071）	—	
M12-P8	M12	不明	Ⅱａ	0.74	0.72	1.36	1.36	1.02	無	—	—	
M12-P26	M12	不明	Ⅲｂ	0.88	—	1.92	1.82	0.92	有	—	—	
N8-P1	N8	３ａ期	Ⅲｂ	1.92	1.68	1.78	1.48	0.8（0.95）	有	土器（2072 ～ 2079）	—	
N8-P29A	N8	１期	Ⅲｂ	—	—	1.86	1.62	0.7（0.8）	有	土器（2081 ～ 2087）、石器（204・205）	—	
N8-P43	N8	不明	Ⅲｂ	—	—	1.76	1.74	0.72（0.85）	有	土器（2088 ～ 2094）	—	
N9-P29	N9	３期	Ⅲａ	1.86	—	1.5	1.54	1.3	無	土器（2095 ～ 2098）	—	
N10-P43	N10	不明	Ⅱａ	—	—	1.2	1.04	—	無	土器（2100 ～ 2105）	—	
O8-P38	O8	不明	Ⅲｂ	1.58	1.5	1.32	0.98	1.1（1.2）	有	—	—	
O8-P39	O8	２期	Ⅲｂ	1.72	1.26	1.68	1.5	0.74（0.82）	有	土器（2106・2107）	—	
59住P3	O8	２期	Ⅲｂ	2.12	1.76	2.24	2.06	0.72（0.84）	有	土製品（63・64）、土器（2108 ～ 2111）	→59住	
O9-P2	O9	２期	Ⅱｂ	1.08	0.96	1.44	1.32	0.88（1.06）	有	土器（2112 ～ 2123）、土製品（63・64）	—	中層より耳飾出土。墓への転用の可能性。
O9-P17	O9	不明	Ⅲａ	1.28	1.04	1.52	1.12	—	無	土器（2125 ～ 2133）	—	
O9-P24	O9	１ｃ期	Ⅲｂ	—	—	1.88	1.54	1.12（1.24）	有	土器（2134 ～ 2142）	—	
O9-P25	O9	２ｃ期	Ⅲｂ	—	—	—	—	1（1.15）	有	土器（2143 ～ 2153）	—	
O9-P29	O9	２ａ期	Ⅲａ	—	—	1.44	0.3	0.7	無	土器（2161 ～ 2165）	—	
O9-P51	O9	不明	Ⅱａ	—	—	1.22	1.2	1	無	—	—	
P9-P5	P9	不明	Ⅲｂ	1.88	1.5	1.98	1.96	0.88（1.08）	有	土器（2166）	—	
P9-P26	P9	２期	Ⅲａ	1.76	1.64	1.68	1.92	1.2	無	土器（2175 ～ 2180）	—	
Q9-P2	Q9	３ａ期	Ⅳｂ	2.68	2.64	2.48	2.52	0.88（1.06）	有	土器（2181 ～ 2194）	—	

第 11 表　フラスコ状土坑一覧



1．土坑の底径グラフ　　2．断面形態模式図

第 41 図　フラスコ状土坑の底径グラフおよび断面形態模式図

Ⅳ類：底面長径 2.5m 以上の超大形のもの。

Ⅳ a 類：底面が平坦なもの。

Ⅳ b 類：底面中央部に小土坑を有するもの。

b．規　模

フラスコ状土坑の規模は、現状で計測可能な数値を記載する。この種の土坑は、開口部が狭いため上部の壁面が崩落する場合が多く、埋没時にはすでに原形を留めていない可能性が高い。加えて、確認面まで掘り下げた状態では、実際の深度よりは浅い数値となる。本遺跡の場合は、住宅造成などで上層が大きく削平されている部分があり、底面から数 10cm 程度が残存するものも多い。

＜フラスコ状土坑各説＞

13 住 -P1（図版第 127 図）

形　態：本土坑は、第 13A 号住居跡と重複関係にあるが、住居跡床面を掘り込んで構築されている。規模は、上面径 1.2m×0.96m、底面径約 1.4m×1.36m、深さ約 1.06m のフラスコ状を呈する大形の土坑である。底面のほぼ中心部には径約 0.36m の小土坑を伴う。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：土器 21 個体（図版第 277 図 1611 ～第 283 図 1631）、が出土しており、全て３ａ期の資料である。そのうち 19 個体が完形で、底面から中層にかけて折り重なるように出土している。土器の多くは潰れた状態ではなく、内側に覆土が詰まった状態で出土しており、横倒しで２個体が口縁部を合わせた状態で検出されたものもある。これらの出土状況は特異な例で、単に貯蔵物を入れた状態で埋没したとは考えにくい。

４住 -P1（図版第 127 図）

形　態：第４号住居跡の南東側に隣接するが、両者の重複関係はない。土坑規模は、上面径約 2.12m×1.72m、底面径約 2.1m×1.98m、深さ約 0.92m の大形の土坑であるが、開口部の大部分が崩落したものと見られる。底面のほぼ中心部には径約 0.36m の浅い小土坑を伴う。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：覆土からは、土器（図版第 284 図 1632 ～ 1646）、石器（図版第 441 図 187 ～ 191）が出土している。

そのうち、完形土器１点（1632）が中層から横倒しの状態で検出されている。石器は、打製石斧２点（188）と磨石３点（189 ～ 191）、などである。

５住 -P4（図版第 129 図）

形　態：規模は、上面径約 1.0m×0.84m、底面径約 0.68m×0.76m、深さ約 0.64m の小形の土坑で、部分的にフラスコ状を呈する。

時　期：１期（大木８ａ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、１期の土器（図版第 285 図 1647 ～ 1653）が出土しており、全て破片資料である。

F6-P6（図版第 128 図）

形　態：規模は、上面径約 1.88m×1.88m、底面径約 2.08m×1.88m、深さ約 0.58m のやや底面が広くなる大形土坑である。上層は削平されており、土坑底面付近のみが残されている。

時　期：２ｂ期（大木８ｂ式並行期中段階）。

出土遺物：覆土からは、土器（図版第 285 図 1654 ～第 286 図 1670）が出土している。１期～３ｂ期の資料を含むが、２ｂ期が主体を占める。土器 1656 は復元個体で、土坑覆土中層と下層で接合関係が認められる。

F6-P7（図版第 128 図）

形　態：規模は、上面径約 2.06m×1.76m、底面径約 2.06m×1.82m、深さ約 1.04m のフラスコ状を呈する大形の土坑である。底面のほぼ中心部には径約 0.7m、深さ約 0.56m の土坑を伴う。また開口部の壁面の大部分は、埋没過程で崩落した可能性が高い。

時　期：２ｂ期（大木８ｂ式並行期中段階）。

出土遺物：覆土からは、土器（図版第 286 図 1671 ～第 288 図 1703）、土製品（図版第 419 図 36・58）、が出土している。土器は全て破片資料で、１期～３ａ期にかけての土器が含まれるが、２ｂ期に廃絶・埋没し始めたと考えられる。土製品は、36・58 ともにミニチュア土器である。

F6-P8

形　態:規模は、上面径約 1.8m×1.68m、底面径約 1.36m×1.44m のほぼ円形を呈する大形土坑であり、フラスコ状土坑と認識される。

時　期：不明。

出土遺物：覆土中より、少量の土器片（図版第 287 図 1704 ～ 1706）が出土している。

F7-P4（図版第 128 図）

形　態：土坑規模は、上面径約 1.96m×1.88m で、底面径約 1.9m×1.86m で、平面形がほぼ円形を呈するが、底面から深さ約 0.44m だけが遺存する。

時　期：２ｂ期（大木８ｂ式並行期中段階）。

出土遺物：覆土から、少量の土器片（図版第 288 図 1707）が出土するのみであるが、本土坑の造営時期は２ｂ期の可能性がある。

G3-P1（図版第 129 図）

形　態：土坑は、上面径約 0.84m×0.72m、底面径約 0.74m×0.76m、深さ約 0.4m の規模を呈し、フラスコ状を呈する小形土坑である。覆土は、１～６層の炭化物を含む褐色土が堆積している。

時　期：不明。

出土遺物：覆土中から少量の土器片（図版第 288 図 1708 ～ 1715）が出土しており、時期的に２期～３ｂ

期の資料が含まれる。

G5-P1（図版第 130 図）

形　態：規模は、上面径約 0.82m×0.72m、底面径約 0.82m×0.76m、深さ約 0.76m のフラスコ状を呈する小形土坑である。覆土は、褐色～明褐色土が 4 層堆積している。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

G6-P7（図版第 129 図）

形　態：調査区外に半分以上が含まれており、規模は明確ではない。現状での規模は、上面径約 1.8m、底面径約 2.0m、深さ約 0.84m のフラスコ状を呈する大形土坑である。底面からは小土坑は検出されていない。覆土には、黒褐色土、褐色土、明褐色土、黄褐色土が堆積し、多量の円礫が包含されている。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 288 図 1716 ～ 1722）が出土している。

50 住 -P11（図版第 129 図）

形　態：第 50 号住居跡（３ａ期）と重複しており、出土遺物から本土坑が埋没した後に第 50 号住居跡が構築されたと考えられる。土坑規模は、底面径約 1.86m×1.62m、深さ約 0.6m のフラスコ状を呈する大形土坑である。底面のほぼ中心部には、径約 0.5m、深さ約 0.16m の浅い小形土坑を伴う。

時　期：１～２期（大木８ａ式並行期～大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 289 図 1723 ～ 1726、図版第 422 図 119）、土製品（図版第 418 図 48）が出土している。土製品は２ｂ期のミニチュア土器１点（48）である。

15 住 -P3（図版第 130 図）

形　態：本土坑は、第 15 号住居跡の北側で重複しているが、新旧関係は不明である。規模は、上面径約 0.92m×0.84m、底面径約 0.92m×0.88m、深さ約 0.52m のフラスコ状を呈する小形土坑である。覆土は、黒褐色～暗黄褐色土が堆積している。

時　期：３期（沖ノ原式期）。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 289 図 1729）が出土しているが、土坑の造営時期を示すかどうかは不明である。

15 住 -P4（図版第 130 図）

形　態：本土坑は、第 15 号住居跡の北側で重複しており、フラスコ状土坑埋没後に竪穴住居が構築されている。土坑規模は、上面径約 0.9m×0.9m、底面径約 1.08m×1.0m、のほぼ円形を呈し、断面形がフラスコ状を呈する深さ約 0.34m の小形土坑である。底面のほぼ中心部には、径約 0.6m の小土坑が確認されるが、本土坑に伴うものかどうか不明である。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 289 図 1727・1728、図版第 422 図 115）が出土している。小形土器 115 は内面に赤色顔料とともに漆状の付着物が確認される。

H5-P3（図版第 130 図）

形　態：本土坑は、第 30 号住居跡の東側に近接する。土坑規模は、上面径約 1.08m×1.0m、底面径約 1.24m×1.24m のほぼ円形を呈し、断面形は深さ約 0.8m のフラスコ状を呈する中形土坑である。土坑底面のほぼ中心部には、径約 0.44m、深さ約 0.45m の土坑を伴う。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：覆土からは、破片資料ではあるが３ａ期の土器（図版第 289 図 1730 ～ 1741）が出土している。

30 住 -P2（図版第 131 図）

形　態：第 30 号住居跡と重複しており、新旧関係は明確ではないが、土坑埋没後に竪穴住居が構築された可能性が高い。土坑規模は、上面径約 1.32m×1.06m、底面径約 1.28m×1.26m のほぼ円形を呈し、断面形が深さ約 0.4m のフラスコ状の中形土坑である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

H6-P1（図版第 131 図）

形　態：南東側が H7-P1 と重複する大形のフラスコ状土坑で、規模は上面径約 2.56m×2.2m、底面径約 2.28m×1.96m の不整円形を呈する。土坑の深さは約 0.14m と遺存状態は悪い。底面のほぼ中心部には、径約 0.48m、深さ約 0.1m の小形土坑を伴う。

時　期：１期（大木８ａ式並行期）。

出土遺物：浅い覆土からは、少量の土器片（図版第 290 図 1742）が出土している。

H6-P4（図版第 131 図）

形　態：規模は、上面径約 0.84m×0.96m、底面径約 1.12m×1.04m の不整形な円形を呈し、断面形は深さ約 0.62m のフラスコ状を呈する中形土坑である。底面のほぼ中心部には径約 0.26m、深さ約 0.14m の小形土坑を伴う。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

H7-P1（図版第 132 図）

形　態：本土坑は H7-P2 に隣接する中形のフラスコ状土坑である。規模は、上面径約 1.96m、底面径約 1.64m×1.52m のほぼ円形を呈し、深さ約 0.36m と底面のみが僅かに遺存している。底面のほぼ中心部には、径約 0.4m の小形土坑を伴う。

時　期：１～２期（大木８ａ式並行期～大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 290 図 1743 ～ 1745）が出土している。

H7-P2（図版第 132 図）

形　態：本土坑は、H7-P1 に隣接する大形のフラスコ状土坑である。規模は、上面径約 2.84m×2.68m、底面径約 2.38m×2.16m のほぼ円形を呈する。上部は削平されて、深さ約 0.33m のみが残る。底面のほぼ中心部には、径約 0.52m、深さ約 0.17m の小形土坑を伴う。

時　期：２ｃ期（栃倉式期）。

出土遺物：覆土からは、土器（図版第 290 図 1746 ～ 1755）、石器（図版第 442 図 192 ～ 194）が出土しており、土器は破片資料ではあるが、２ｃ期の資料でまとまる。石器は、石錐（192）、などがある。

H7-P6（図版第 132 図）

形　態：土坑は、上面径約 2.56m×2.32m、底面径約 2.08m×2.16m の円形を呈し、上部は削平されているが、底面付近の覆土に２ｃ期の破片資料がまとまる。また底面のほぼ中心部には径約 0.72m の土坑を伴う。

時　期：２ｃ期（栃倉式期）。

出土遺物：覆土からは、土器（図版第 290 図 1756 ～第 291 図 1778）、石器（図版第 442 図 196・196）が出土している。土器は、H7-P2 と同様に２ｃ期の資料でまとまる。石器は、打製石斧１点（195）、磨製石斧１点（196）、などがある。

H7-P8（図版第 133 図）

形　態：本土坑は、H7-P10 と一部重複する大形土坑の底面である。土坑の規模は、上面径約 2.36m×2.28m、底面径約 2.06m×2.12m の円形を呈する。底面のほぼ中心部には、径約 0.4m の土坑を伴う。

時　期：２ｂ期（大木８ｂ式並行期中段階）。

出土遺物：覆土からは、２ｂ期を中心とする土器破片（図版第 290 図 1779 ～第 291 図 1786）が出土している。

H7-P10（図版第 133 図）

形　態：本土坑は、H7-P8 と第 38 号埋設土器と重複する大形土坑の底部である。さらに、第 39 号住居跡とも重複関係にあり、本土坑が埋没した後に住居が構築されたと考えられる。土坑規模は、半分のみが調査されているため不明である。底面中心部には小土坑が伴う。

時　期：２ｂ期（大木８ｂ式並行期中段階）。

出土遺物：覆土からは、土器（図版第 292 図 1787 ～ 1803）、土製品（図版第 418 図 13）が出土している。土器は破片資料のみであるが、２ｂ～２ｃ期の資料が見られる。土製品は、三角形土版の欠損品である（13）。

H7-P12（図版第 133 図）

形　態：土坑規模は、上面径約 0.72m×0.72m、底面径約 1.0m×0.96m、深さ約 0.48m で、やや底面が広くなる小形土坑である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

H7-P13（図版第 133 図）

形　態：土坑規模は、上面径約 1.12m×1.06m、底面径約 0.98m×0.76m、深さ約 0.48m で、ほぼ円筒状を呈する小形土坑である。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 293 図 1804 ～ 1812）が出土している。

H8-P1（図版第 134 図）

形　態：土坑の平面形は、上面径約 2.54m×2.2m、底面径約 2.56m×1.96m の不整な円形を呈し、断面はフラスコ状を呈する大形土坑であるが、上部は削平されて深さ約 0.64m のみが確認される。

時　期：１期（大木８ａ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 293 図 1813 ～ 1826）、土製品（図版第 420 図 61・62）が出土している。土器は破片資料のみであるが、１期の土器片が主体を占める。土製品は、耳飾２点（61・62）であり、貯蔵穴が埋没過程で埋葬施設に転用された可能性が高い。

H8-P7（図版第 134 図）

形　態：土坑の平面形は、上面径約 1.44m×1.08m、底面径約 1.4m×1.14m のほぼ円形を呈し、断面形は円筒状を呈する中形土坑であるが、上部は削平されて底面まで深さ約 0.3m のみが確認される。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：覆土からは、完形に近い土器（図版第 294 図 1839 ～ 1851）が比較的まとまって出土している。土器は３ａ期の資料であり、土坑内での接合関係が認められる（図版第 134 図下段）。また土器片 1848 が、第 50 号住居跡覆土出土土器と接合している。

I1-P1（図版第 134 図）

形　態：Ｉグリッドの調査区際から検出された土坑で、約半分が調査されている。平面形は、上面径約 0.72m、底面径約 0.6m、深さ約 0.6m の円筒状を呈する小形土坑である。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：土坑内からは、３ａ期の完形土器２点（図版第 295 図 1852・1853）が出土している。

I5-P2（図版第 135 図）

形　態：土坑の平面形は、上面径約 1.34m、底面径約 1.36m×1.28m の円形を呈する中形土坑である。他の土坑と重複しているため平面形および断面形は不明瞭であるが、最も低い底面がフラスコ状土坑底面であると考えられる。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：覆土からは、３ａ期を中心とする資料（図版第 295 図 1854 ～第 297 図 1870）がまとまって出土している。比較的完形に近い３ａ期の深鉢（1854・1856）とともに両耳壺２個体（1861・1862）などがある。

I5-P9（図版第 135 図）

形　態：土坑の平面形は、上面径約 1.0m、底面径約 1.0m×0.96m の円形を呈し、断面形はフラスコ状を呈する中形土坑である。土坑南側は、他の土坑との重複により削平されている。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

I6-P3（図版第 135 図）

形　態：本土坑は、平面形が上面径約 2.24m×2.0m、底面径約 2.1m×1.84m のほぼ円形を呈する大形土坑である。また I6-P6（フラスコ状土坑）と南側で重複し、上部は削平されて深さ約 0.16m のみが残る。底面のほぼ中心部には、径約 0.5m、深さ約 0.2m の土坑を伴う。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、２期の深鉢の中空把手（図版第 297 図 1871・1872）などが出土している。

I6-P6（図版第 135 図）

形　態：本土坑は、平面形が上面径約 2.08m、底面径約 1.88m×1.8m の円形を呈する大形土坑である。また I6-P3（フラスコ状土坑）、I6-P13 と重複し、上部は削平されて深さ約 0.18m のみが確認される。底面のほぼ中心部には径約 0.44m、深さ約 0.14m の土坑を伴う。

時　期：３期（沖ノ原式期）。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 297 図 1873 ～ 1883）と石器（図版第 442 図 197）が出土している。土器は破片資料のみで、２期～４期と時期幅が広くまとまりが見られない。

I7-P1（図版第 136 図）

形　態：本土坑は、I7-P2 に隣接し、平面形は上面径約 2.38m×2.36m、底面径約 2.08m×2.12m の円形を呈する大形土坑である。土坑上部は、削平されて深さ約 0.32m のみが確認される。底面のほぼ中心部には径約 0.52m、深さ約 0.16m の土坑を伴う。

時　期：１ｃ期（大木８ａ式並行期新段階）。

出土遺物：覆土からは、土器（図版第 297 図 1884 ～第 298 図 1895）が出土している。ほとんどが１ｃ期を主体とする破片資料であるが、ほぼ完形の浅鉢１点（1893）が含まれる。

I7-P2（図版第 136 図）

形　態：本土坑は、I7-P1 に隣接し、平面形は上面径約 2.12m×2.1m、底面径約 1.92m×1.86m の円形を呈する大形土坑である。上部は削平されて、深さ約 0.23m のみが確認される。底面のほぼ中心部には径約 0.42m、深さ約 0.12m の土坑を伴う。

時　期：２ｃ期（栃倉式期）。

出土遺物：土器片（図版第 298 図 1896 ～第 299 図 1910）、石器（図版第 443 図 198・199）が出土している。土器は破片資料ではあるが、２ｃ期の土器片がまとまる。石器は、磨製石斧１点（198）と磨石１点（199）、などがある。

I7-P6（図版第 136 図）

形　態：土坑の平面形は、上面径約 2.7m×2.46m、底面径約 2.54m×2.3m のほぼ円形を呈する大形土坑である。上部は削平されて、深さ約 0.22m のみが確認される。底面のほぼ中心部には径約 0.45m、深さ約 0.14m の土坑を伴う。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 299 図 1911 ～ 1921）が僅かに出土している。

I7-P11（図版第 137 図）

形　態：土坑の平面形は、上面径約 1.62m×1.54m、底面径約 1.48m×1.38m のほぼ円形を呈する中形土坑である。上部は遺存状況が悪く、深さ約 0.16m のみが確認される。底面のほぼ中心部には、径約 0.56m、深さ約 0.09m の浅い土坑を伴う。

時　期：不明。

出土遺物：覆土から、僅かに土器片（図版第 299 図 1925・1926）が出土するのみである。

I7-P14（図版第 13 図）

形　態：本土坑は、I7-P16 との重複によって南西側の一部が削平される。平面形は、上面径約 2.66m、底面径約 2.26m のほぼ円形を呈すると考えられる大形土坑である。上部は削平されて、深さ約 0.42m のみが確認される。底面のほぼ中心部には径約 0.6m、深さ約 0.12m の浅い土坑を伴う。

時　期：２ｂ期（大木８ｂ式並行期中段階）。

出土遺物：覆土からは、２ｂ期～２ｃ期の土器片（図版第 299 図 1927 ～第 300 図 1940）が出土している。

I7-P19（J7 - P1）（図版第 137 図）

形　態：本土坑は一部調査区外に及ぶが、平面形は上面径約 1.96m、底面径約 1.78m の不整円形を呈する中形土坑である。上部は削平されて、深さ約 0.28m のみが確認される。底面のほぼ中心部には径約 0.4m、深さ約 0.12m の浅い土坑を伴う。

時　期：２ｃ期～３ａ期（栃倉式期～沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：覆土からは、２ｃ期～３ａ期の土器片（図版第 300 図 1941 ～ 1944）が出土している。

I8-P6（図版第 138 図）

形　態：本土坑は、I8-P10（墓坑）と重複している。平面形は、上面径約 1.56m×1.5m、底面径約 1.4m×1.6m の円形を呈する大形土坑で、やや底面が広くなる。上部は削平されて深さ約 0.64m のみが確認される。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：覆土からは、完形に近い３ａ期の土器（図版第 300 図 1945 ～第 301 図 1959）が出土している。1945・1946・1950 など一部土坑内での接合関係が認められる（図版第 138 図）。

16 住 -P1

形　態：土坑の平面形は、上面径約 1.0m×0.98m、底面径約 0.88m×0.92m の円形を呈する小形土坑であり、現場段階でフラスコ状土坑として認識された。

時　期：１期（大木８ａ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 302 図 1960）が僅かに出土している。

J5-P17

形　態:本土坑は、一部未調査区に及んでおり、土坑の規模や平面形は不明瞭であるが、上面径約 1.28m の円形を呈すると推測される。底面には径約 0.36m の土坑を伴う。

時　期：２期～３ｂ期（大木８ｂ式期～沖ノ原Ⅱ式期）。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 302 図 1961 ～ 1971）が出土しているが、２期～３ｂ期にかけての破片資料であり、時期的なまとまりは認められない。

J6-P2（図版第 138 図）

形　態：土坑の平面形は、上面径約 3.12m×2.84m、底面径約 2.8m×2.42m の円形を呈する大形土坑である。上部は削平されているが、厚さ約 0.3m の覆土が遺存しており、暗褐色土と黄褐色土の堆積が認められる。底面のほぼ中心部には、径約 0.72m、深さ約 0.3m の土坑を伴う。また第１号長方形柱穴列の主柱配列範囲に位置し、一部柱穴が重複している可能性がある。

時　期：２ｃ期（栃倉式期）。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 302 図 1972 ～ 1976）とともに大形の円礫や破砕礫が数点出土している。土器 1976 は、土坑覆土内での接合関係が認められる（図版第 138 図）。

J6-P14（図版第 138 図）

形　態：本土坑は、北側が調査区外に及んでいることから全体の半分ほどが調査されている。平面形は、上面径約 3.28m、底面径約 2.48m の半円形を呈する大形土坑である。上部は削平されて深さ約 0.45m のみが確認されるが、内部からは大形の円礫が多量に検出されている。

時　期：不明。

出土遺物：覆土中から石器１点（図版第 445 図 216）が出土している。

J6-P20（図版第 139 図）

形　態:本土坑は、J6-P2 に隣接し、南側で J6-P27 と一部重複する。平面形は、上面径約 3.26m×2.84m、底面径約 2.68m×2.76m の円形を呈する大形土坑である。上部は削平されて、厚さ約 0.96m の覆土が確認されており、底面に黒色土が堆積し、その上層に黄褐色土と暗黄褐色土が逆レンズ状に堆積する。土坑底面には、径約 0.6m、深さ約 0.3m の土坑が伴い、内部からは径 0.4m の円礫が出土している。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 302 図 1977・1978）が出土している。

J6-P26（図版第 139 図）

形　態:本土坑は、J6-P25 や P28 と重複している。平面形は、上面径約 2.26m×2.24m、底面径約 2.08m

× 2.12m の円形を呈する大形土坑である。上部は削平されて、深さ約 0.2m のみが確認される。底面のほぼ中心部には径約 0.54m、深さ約 0.15m の土坑を伴う。

時　期：２期期（大木８ｂ式期並行期）。

出土遺物：覆土中から２期の土器片（図版第 302 図 1979・1980）が僅かに出土している。

J6-P27（図版第 139 図）

形　態：本土坑は、J6-P20（フラスコ状土坑）や J6-P25 などと一部重複し、平面形は上面径約 2.14m 1.96m、底面径約 1.72m×1.8m の不整円形を呈する大形土坑である。上部は削平されて、深さ約 0.2m のみが確認される。底面のほぼ中心部には径約 0.48m、深さ約 0.16m の土坑を伴う。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：覆土からは、３ａ期の土器片（図版第 303 図 1981 ～ 1985）が僅かに出土している。

J7-P5（図版第 140 図）

形　態：本土坑は J6-P29 と J7-P6 と重複し、平面形は上面径約 2.12m×2.04m、底面径約 1.84m×1.84m の隅丸方形に近い円形を呈する大形土坑である。上部は削平されて、深さ約 0.35m のみが確認される。底面のほぼ中心部には、径約 0.52m、深さ約 0.21m の土坑を伴う。

時　期：２ｃ期（栃倉式期）。

出土遺物：覆土からは、土器（図版第 303 図 1986 ～第 303 図 1991）が出土している。出土土器は、２ｃ期～３ｂ期にかけての破片資料であるが、遺物分布から３ｂ期の土坑であると考えられる。

J7-P9A（図版第 140 図）

形　態：本土坑は J7-P9B と J7-P8、K6-P27 と重複している。平面形は、上面径約 2.36m×2.1m、底面径約 2.2m×1.86m の不整楕円形を呈する大形土坑である。上部は削平されて、深さ約 0.64m のみが確認される。底面のほぼ中心部には、径約 0.58m、深さ約 0.12m の土坑を伴う。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、３ｂ期の土器片（図版第 304 図 1995）が僅かに出土している。

K6-P11（図版第 141 図）

形　態：土坑の平面形は、上面径約 2.46m×2.42m、底面径約 1.98m×2.14m の円形を呈する大形土坑である。上部は削平されて、深さ約 0.4m のみが確認される。底面のほぼ中心部には径約 0.4m、深さ約 0.48m の比較的深い土坑を伴う。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

K6-P23（図版第 141 図）

形　態：土坑の平面形は、上面径約 2.22m×1.76m、底面径約 1.76m×1.56m の不整楕円形を呈する大形土坑である。上部は削平を受けて、深さ僅かに約 0.06m のみが確認される。底面のほぼ中心部には、径約 0.52m、深さ約 0.05m の土坑を伴う。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 304 図 1997）が出土している。

K6-P25（図版第 141 図）

形　態：土坑の平面形は、上面径約 2.2m×1.94m、底面径約 1.98m×1.62m の楕円形を呈する大形土坑

である。上部は削平されて、深さ約 0.08m のみが確認される。底面のほぼ中心部には、径約 0.76m、深さ約 0.08m の浅い土坑を伴う。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

K7-P4（図版第 142 図）

形　態：本土坑は北側に浅い土坑 K7-P12 と重複し、平面形は上面径約 1.8m×1.12m、底面径約 1.42m × 1.0m の不整楕円形を呈する大形土坑である。上部は削平されて、底面までの深さ約 0.58m が確認される。底面のほぼ中心部には、径約 0.44m、深さ約 0.12m の浅い土坑を伴う。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 304 図 1998・1999）が出土している。

K7-P5（図版第 142 図）

形　態：本土坑は、P5A・P5B・P5C の 3 基のフラスコ状土坑が重複していると考えられる。平面形は、上面径約 1.74m×1.66m、底面径約 1.64m×1.48m の円形を呈する中形土坑である。

時　期：３ｂ期。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 304 図 2000 ～ 2002）が出土している。

K8-P31（図版第 142 図）

形　態：土坑の平面形は、上面径約 0.9m×0.84m、底面径約 1.0m×0.92m の円形を呈し、深さ約 0.56m のフラスコ状を呈する小形土坑である。底面のほぼ中心部には径約 0.22m、深さ約 0.09m の浅い土坑を伴う。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：土坑底面付近より、完形土器２個体を含む３ａ期の資料（図版第 304 図 2003 ～第 306 図 2015）と石器（図版第 443 図 200・201）が出土している。出土土器は、沖ノ原Ⅰ式とともに連弧文土器と加曽利ＥⅢ式が伴出する良好な資料である。石器は、打製石斧２点などである。

L6-P1（図版第 143 図）

形　態：土坑の平面形は、上面径約 2.38m×2.22m、底面径約 2.08m×2.02m の円形を呈する大形土坑である。上部は削平を受けて深さ約 0.18m のみが確認される。底面のほぼ中心部には、径約 0.68m、深さ約 0.14m の土坑を伴う。

時　期：２ｂ期（大木８ｂ式並行期中段階）。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 306 図 2018 ～ 2025）と石器（図版第 443 図 202）が出土している。土器は破片資料であるが、２ｂ期のものが多い。石器は、砥石１点（202）などである。

L6-P2（図版第 143 図）

形　態：本土坑は南西側が削平を受けており、約半分側が検出されている。平面形は、上面径約 2.42m × 2.3m、底面径約 2.2m×2.02m の円形を呈すると推測される。断面形は、フラスコ状を呈する大形土坑で、底面のほぼ中心部には径約 0.5m の土坑を伴う。覆土は、黄褐色土や明褐色土、暗褐色などが交互に堆積し、底面直上には暗褐色土の堆積が認められる。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、２期の土器片（図版第 307 図 2026 ～ 2028）が僅かに出土している。

L6-P3（図版第 143 図）

形　態:本土坑の東側は、L6-P26（フラスコ状土坑）との重複によって範囲が不明瞭になっている。平面形は、上面径約 2.74m×2.48m、底面径約 2.5m×2.24m のほぼ円形を呈する大形土坑である。上部は削平を受けて深さ約 0.2m のみが確認される。底面のほぼ中心には、径約 0.96m、深さ約 0.22m の浅い土坑を伴う。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からの出土遺物は希薄で、６期の土器片（図版第 307 図 2029）のみである。

L6-P4（図版第 144 図）

形　態:本土坑は南西側に L6-P27 が重複する。平面形は、上面径約 2.48m×2.4m、底面径約 2.2m×2.22m の円形を呈する大形土坑である。上部は削平を受けて、深さ約 0.52m のみが確認される。底面のほぼ中心部には径約 0.6m、深さ約 0.16m の浅い土坑を伴う。

時　期：１ａ期（大木８ａ式並行期古段階）。

出土遺物：覆土から、土器片（図版第 307 図 2030 ～ 2033）が出土している。

L6-P12（図版第 144 図）

形　態：本土坑は L7-P19・P20 や M6-P9 など土坑が重複する区域にあるため、土坑の全体形状は不明瞭である。平面形は、上面径約 2.08m、底面径約 1.86m の不整円形を呈する大形土坑である。また底面には、径約 0.48m の土坑が認められるが、本土坑に伴うものかは明確ではない。

時　期：１期（大木８ａ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、土器（図版第 307 図 2034 ～ 2040）、石器（図版第 443 図 203）、土製品（図版第 420 図 78・82）が出土している。土器は、１期～２ｃ期の破片資料である。石器は打製石斧１点（203）などである。土製品は、土製円盤２点（78・82）である。

L6-P26

形　態：本土坑は L6-P3・P4・P28 と重複しているが、上面径 2.08m、底面径約 1.86m の円形を呈する大形土坑であると推測される。さらに、上部も削平を受けて深さ約 0.14m のみが検出される程度である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

L7-P5（図版第 144 図）

形　態：土坑の平面形は、上面径約 1.2m×0.96m、底面径約 1.0m×1.04m の円形を呈する中形土坑である。上部は削平を受けて、深さ約 0.48m のみが残る。底面のほぼ中心部には径約 0.32m、深さ約 0.16m の浅い土坑を伴う。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、３期の土器片（図版第 308 図 2041 ～ 2044）が少量出土している。

M12-P8（図版第 145 図）

形　態：土坑の平面形は、上面径約 0.74m×0.72m、底面径約 1.36m×1.36m の円形を呈し、断面形はフラスコ状を呈する中形土坑である。深さ約 1.02m が残存しているが、覆土に関する記録は残っていない。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

M12-P26（図版第 145 図）

形　態：本土坑は、半部側を断ち割り調査によって記録している。平面形は、上面径約 0.88m、底面径約 1.92m×1.82m の円形を呈し、断面形はフラスコ状を呈する大形土坑である。土坑内には暗褐色土・褐色土を主体として、一部に黄褐色土や明褐色土を含む 14 層の堆積が確認され、埋没途中での壁面の崩落は少なかったと推測される。また底面のほぼ中心部には、径約 0.5m、深さ約 0.16m の浅い土坑を伴う。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

N8-P1（図版第 145 図）

形　態：本土坑は西側の一部が調査区外に及んでいる。平面形は、上面径約 1.92m×1.68m、底面径約 1.78m×1.48m の円形を呈する大形土坑である。断面形はフラスコ状に近いが、壁面が崩落したためか開口部は広くなっている。また底面のほぼ中心部には径約 0.6m、深さ約 0.15m の浅い土坑を伴う。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：覆土からは、３ａ期の土器片（図版第 309 図 2072 ～ 2079）が少量出土している。

N8-P29A（図版第 146 図）

形　態:本土坑は、土坑が多数重複する区域にあたり、N8-P43（フラスコ状土坑）と一部重複する。平面形は、底面径約 1.86m×1.62m のほぼ円形を呈する大形土坑で、断面形はフラスコ状に近いものの、壁面の崩落によるためか開口部が広がる。また底面のほぼ中心部には径約 0.82m、深さ約 0.15m の浅い土坑が伴う。

時　期：１期（大木８ａ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、１期の土器片（図版第 309 図 2081 ～ 2087）が少量と打製石斧２点（図版第 443 図 204・205）などが出土している。

N8-P43（図版第 146 図）

形　態：本土坑は、N8-P29A（フラスコ状土坑）と一部重複する。平面形は、底面径約 1.76m×1.74m の円形を呈し、断面形はフラスコ状に近いものの、壁面の崩落によるためか開口部が広がる。また底面のほぼ中心部には、径約 0.5m、深さ約 0.13m の浅い土坑を伴う。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 309 図 2088 ～第 310 図 2094）が出土しており、時期的なまとまりは認められない。また 2094 は赤彩された無文の壺形土器である。

N9-P29（図版第 146 図）

形　態：土坑の平面形は、上面径約 1.86m、底面径約 1.54m×1.5m の円形を呈し、断面形はやや開口部が広いフラスコ状を呈する。上部の壁面が崩落したためと考えられる。

時　期：３期（沖ノ原式期）。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 310 図 2095 ～ 2098）が出土している。土器は３ａ期～３ｂ期の破片資料である。

O8-P38（図版第 147 図）

形　態：本土坑は、第 59 号住居跡・第 62 号住居跡と重複する位置に存在し、O9-P32 とも重複するため、形態はやや不明瞭である。平面形は、上面径約 1.58m×1.5m、底面径約 1.32m×0.98m の円形を呈すると考えられる。また底面のほぼ中心部には、径約 0.38m、深さ約 0.1m の浅い土坑を伴う。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

O8-P39（図版第 147 図）

形　態：本土坑は O9-P29 と重複しており、形態がやや不明瞭である。平面形は、上面径約 1.72m×1.26m、底面径約 1.68m×1.5m のほぼ円形の中形土坑である。断面形は、一部フラスコ状を呈するが、東側は重複によって残っていない。また底面の中心部付近には、径約 0.45m、深さ約 0.08m の浅い土坑を伴う。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：覆土から、２期の土器片（図版第 310 図 2106・2107）が僅かに出土している。

59 住 -P3（図版第 147 図）

形　態：本土坑は、第 59 号住居跡と重複しており、両遺構の出土遺物から土坑埋没後に竪穴住居が構築されたと推定される。平面形は、上面径約 2.12m×1.76m、底面径約 2.24m×2.06m のほぼ円形を呈する大形土坑である。上層は第 59 号住居構築によって削平を受けているものの、断面形はフラスコ状を呈する。底面のほぼ中心部には径約 0.52m、深さ約 0.12m の浅い土坑を伴う。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：覆土から、少量ではあるが２期の土器片（図版第 310 図 2108 ～ 2111）が出土している。

O9-P2（図版第 148 図）

形　態：本土坑は、遺構が密集する区域の第 59 号住居跡の東側に隣接し、O9-P16・P53 等と重複する。平面形は、上面径約 1.08m×0.96m、底面径約 1.44m×1.32m のほぼ円形を呈し、断面形は深さ約 0.88m のフラスコ状を呈する。底面のほぼ中心部には径約 0.48m、深さ約 0.18m の浅い土坑を伴う。覆土中層より耳飾２点が深鉢の内部から出土しており、フラスコ状土坑の埋没過程で埋葬施設に転用された可能性がある。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 310 図 2112 ～第 311 図 2123）、土製品（図版第 420 図 63・64）が出土している。土製品は、耳飾２点（63・64）で、土器 2123 の中から検出されている。

O9-P24（図版第 148 図）

形　態：本土坑は O9-P25（フラスコ状土坑）と重複しており、平面形は明瞭ではない。平面形は、底面径約 1.88m×1.54m の円形になると推測され、断面形は残存部分でフラスコ状を呈する。また底面のほぼ中心部には径約 0.48m、深さ約 0.12m の浅い土坑を伴う。

時　期：１ｃ期（大木８ａ式並行期新段階）。

出土遺物：覆土からは、完形土器など少量の土器片（図版第 311 図 2134 ～第 313 図 2142）が出土しており、１ｃ期を主体として、２ａ期から２ｂ期までの資料が認められる。

O9-P25（図版第 148 図）

形　態：本土坑は、O9-P24（フラスコ状土坑）との重複により形態が不明瞭であるが、径約 1.3m 前後の円形を呈すると推測される。また断面形は、残存する壁面でフラスコ状を呈する。底面のほぼ中心部には、径約 0.36m、深さ約 0.15m の浅い土坑を伴う。

時　期：２ｃ期（栃倉式期）。

出土遺物：覆土から、１期～２ｃ期の土器片（図版第 313 図 2143 ～ 2153）が出土している。

O9-P29（図版第 147 図）

形　態：本土坑は、第 59 号住居跡の南側に隣接し、O8-P39（フラスコ状土坑）と重複しているが、両者の新旧関係は不明である。土坑底面は、径約 1.44m×1.3m の円形になると推測される。

時　期：２ａ期（大木８ｂ式並行期古段階）。

出土遺物：覆土からは、２ａ期などの土器（図版第 315 図 2161 ～ 2165）が出土している。

O9-P32（図版第 147 図）

形　態:本土坑は､O8-P39（フラスコ状土坑）と重複し､また第 62 号住居跡と重複関係にある。新旧関係は、本土坑埋没後に竪穴住居跡が構築された可能性が高い。西側が土坑との重複のため不明瞭になっているが、土坑底面は径 1.0m 前後の円形を呈すると推測される。

時　期：不明。

出土遺物：覆土上層から、３ａ期の土器（図版第 314 図 2154 ～ 2160）がまとまって出土しているが、すべて上層に分布することから、第 62 号住居跡廃絶後の竪穴に伴う土器の可能性が高い。

O9-P51（図版第 148 図）

形　態：本土坑は、O9-P43 と重複により確認面での平面形は不明瞭である。土坑底面は、径約 1.22m×1.2m の円形を呈する中形のフラスコ状土坑である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

P9-P5（図版第 149 図）

形　態：本土坑は、上面径約 1.88m×1.5m、底面径約 1.98m×1.96m の円形を呈する大形土坑である。また底面のほぼ中心部には、径約 0.5m、深さ約 0.2m の浅い土坑が伴う。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、無文の完形土器１点（図版第 315 図 2166）が出土している。

P9-P26（図版第 149 図）

形　態：本土坑は、上面径約 1.76m×1.64m、底面径約 1.68m×1.92m の円形を呈する大形土坑である。底面の南側に土坑があるが、フラスコ状土坑に伴うものかは明確ではない。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 316 図 2175 ～ 2180）が出土している。

Q9-P2（図版第 149 図）

形　態：本土坑は、上面径約 2.68m×2.64m、底面径約 2.48m×2.52m の円形を呈する大形土坑である。底面のほぼ中心部には、径約 0.46m、深さ約 0.18m の浅い土坑が伴う。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：覆土からは、２ａ期～３ａ期の土器（図版第 316 図 2181 ～ 2194）が出土している。

2）土　坑（図版第 150 図～第 172 図）

ここではフラスコ状土坑以外の土坑をまとめて報告する。また検出された土坑は、重複などにより形態が不明瞭なものも多く、平面形や断面形において多様性が認められる（第 42 図）。今回、すべての土坑を図化して報告することは不可能であるため、出土遺物や平面形・断面形、遺物の出土状況等から、墓坑や廃棄坑と推定されるものを中心として報告する。これらの長幅比は２：１～１：１の間に収まり（第 43 図１）、長軸長 0.8m ～ 2.0m に集中が見られる。土坑主軸方向は特定方向にまとまりは認められなかった（第 43 図２）。

< 土坑各説 >

C5-P3（図版第 150 図）

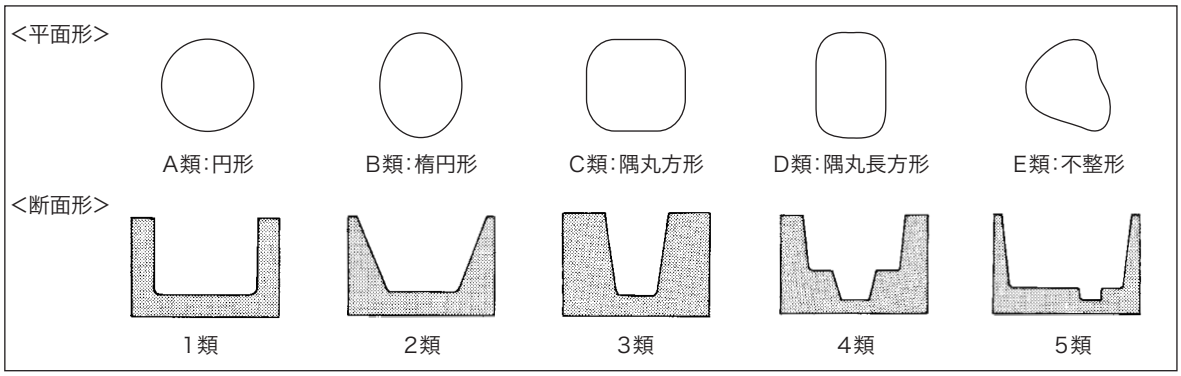
形　態：本土坑は、上面径約 1.76m×1.02m、底面径約 1.62m×0.84m、深さ約 0.12m の不整楕円形を呈する浅い土坑で、主軸方向は、N-68° -W である。覆土は、褐色土や暗褐色土が堆積し、墓坑の可能性がある。

時　期：不明。

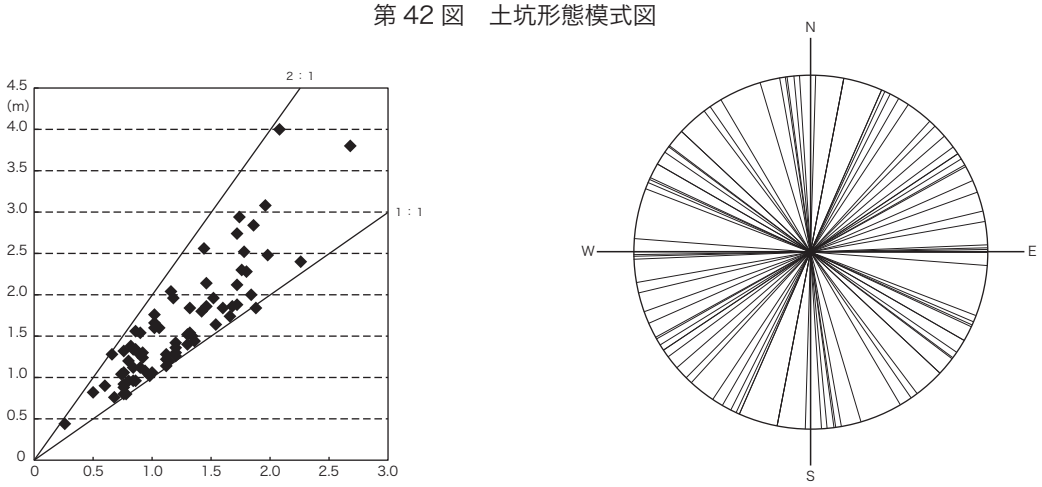
出土遺物：なし。

D4-P1（図版第 150 図）

形　態：本土坑は、少なくとも２つの土坑が重複するため平面形が不明瞭であるが、隅丸長方形を呈する土坑であると推定される。上面径約 4.0m×2.08m、底面径約 3.8m×1.52m、深さ約 0.2m の規模を有し、



第 42 図　土坑形態模式図



1．土坑の長幅比グラフ　　2．土坑主軸方向グラフ

第 43 図　土坑の長幅比と土坑主軸方向グラフ

第 44 図　墓坑と推定される土坑分布図

No	位置	形態	時期	上面		底面		深度（m）	出土遺物	備考
				長軸（m）	短軸（m）	長軸（m）	短軸（m）			
C5-P3	C5	B1	不明	1.76	1.02	1.62	0.84	0.12	—	
D4-P1	D4	—	1 a 期	4	2.08	3.8	1.52	0.2	土器（2195 ～ 2205）	
D4-P3	D4	—	不明	—	2.08	—	1.78	0.38	—	
D4-P4	D4	C1	不明	3.08	1.96	2.88	1.6	0.22	—	墓坑の可能性がある。
D4-P5	D4	C1	不明	3.8	2.68	3.36	2.4	0.2	—	上面に炭化物が堆積していた。
D5-P1	D5	B5	1 a 期	0.96	0.8	0.68	0.58	0.24	土器（2206・2207）	埋甕の可能性。
D5-P5	D5	B2	不明	1.32	0.76	0.74	0.5	0.44	—	
E4-P1	E4	A1	不明	1.26	1.2	1.12	1.08	0.1	—	
E9-P1	E9	B1	1 期	1.54	1.32	1.34	1.06	0.4	土器（2212 ～ 2216）	墓坑の可能性がある。
E9-P2	E9	B2	不明	1.8	1.42	1.66	1.28	0.24	土器（2217 ～ 2218）	墓坑の可能性がある。
E10-P1	E10	B1	不明	2.74	1.72	2.6	1.52	0.44	土器（2220 ～ 2229）	墓坑の可能性がある。
F4-P2	F4	B1	不明	2.3	1.76	2.16	1.58	0.1	土器（2230）、石器（189）	墓坑の可能性がある。
F5-P11	F5	C2	不明	0.76	0.68	0.62	0.58	0.14	—	
F6-P1	F6	E1	3 a 期	0.44	0.26	0.32	0.14	0.1	土器（2232）	墓坑の可能性がある。
F6-P8	F6	A1	不明	1.74	1.66	1.36	1.4	0.6	—	墓坑の可能性がある。
G4-P9	G4	A1	不明	0.96	0.84	0.9	0.92	0.4	土器（2246・2247）	
G7-P2	G7	B1	不明	2.52	1.78	1.78	1.5	0.48	—	墓坑の可能性がある。
H3-P5	H3	A1	1 ～ 2 期	1.4	1.3	1.18	1.04	0.24	—	墓坑の可能性がある。
H3-P6	H3	D1	3 期	1.98	1.18	1.5	0.86	0.44	土器（2274 ～ 2300）	墓坑の可能性がある。
H3-P10	H3	—	不明	—	—	—	—	0.18	—	墓坑の可能性がある。
H3-P9	H3	C1	不明	2.38	1.8	2.08	1.64	0.3	—	墓坑の可能性がある。
H4-P1A	H4	A1	2 期	—	1.32	—	1.24	0.3	土器（2304 ～ 2314）	墓坑の可能性がある。
I3-P12	I3	B2	2 期～	1.96	1.18	1.12	0.58	0.44	土器（2353 ～ 2359）、土製品（31）	
I4-P14	I4	B1	3 b 期	1.28	1.12	1.0	0.86	0.25	土器（2370・2371）	墓坑の可能性がある。
I4-P12	I4	A1	4 期～	1.96	1.52	1.36	1.36	0.64	土器（2366 ～ 2369）	墓坑の可能性がある。
I6-P1	I6	D1	4 b 期	2.94	1.74	1.78	1.36	0.96	土器（2390 ～ 2438）	土器片が比較的多く出土。
I7-P8	I7	B1	不明	1.6	1.02	1.34	0.76	0.32	土器（2451 ～ 2453）	墓坑の可能性がある。
I7-P22	I7	C2	不明	1.86	1.68	1.42	1.38	0.17	土器（2461・2462）	墓坑の可能性がある。
I8-P3	I8	B1	5 期～	2.12	1.72	1.82	1.26	0.38	土器（2464 ～ 2471）	墓坑の可能性がある。
J5-P15	J5	B1	5 期～	2.14	1.46	1.24	1.14	0.68	土器（2483 ～ 2487）	墓坑の可能性がある。
J8-P22	J8	D1	不明	1.38	0.82	1.1	0.54	0.36	—	墓坑の可能性がある。
K7-P2	K7	B2	2 c 期	1.12	0.84	0.6	0.62	0.33	土器（2524 ～ 2531）、石器（218 ～ 221）	
K8-P4	K8	B1	4 期～	1.34	0.86	1.16	0.66	0.4	土器（2538 ～ 2542）	墓坑の可能性がある。
K9-P3	K9	A5	3 期～	1.02	1.0	0.84	0.85—	0.4	土器（2568・2569）	墓坑の可能性がある。
L5-P18	L5	D5	不明	2.84	1.86	2.52	1.7	0.24	—	墓坑の可能性がある。
L6-P14	L6	B1	不明	—	—	1.04	0.8	0.28	—	墓坑の可能性がある。
L6-P15	L6	B1	3 b 期	1.88	1.72	1.46	1.08	0.16	土器（2615 ～ 2618）	墓坑の可能性がある。
L6-P17	L6	B1	3 a 期	1.24	0.92	1.04	0.78	0.36	土器（2619 ～ 2621）	墓坑の可能性がある。
L8-P8	L8	A4	不明	1.08	0.94	0.84	0.74	0.72（0.83）	—	
L9-P2	L9	A4	不明	1.14	1.12	0.94	0.92	0.32（0.4）	—	
L9-P26	L9	C2	3 a 期	2.24	1.88	1.08	1.06	0.76	土器（2708 ～ 2727）、石器（174）	
L9-P28	L9	E1	不明	1.56	0.86	1.1	0.66	0.42	石製品（11）	墓坑と考えられる。
L9-P32	L9	B1	不明	1.52	1.3	1.32	0.9	0.56	—	墓坑の可能性がある。
L9-P33	L9	B1	5 期～	1.54	0.9	1.04	0.72	0.36	土器（2732 ～ 2734）	墓坑の可能性がある。
L9-P35	L9	A1	4 期～	1.02	0.98	0.8	0.72	0.36	土器（2735・2736）	墓坑の可能性がある。
L9-P36	L9	A1	3 期	1.22	1.12	1.06	1	0.3	土器（2737 ～ 2746）	墓坑の可能性がある。
L9-P42	L9	E1	不明	1.06	1	0.86	0.8	0.64	—	
L9-P54	L9	D1	不明	0.82	0.5	0.74	0.42	0.6	—	墓坑の可能性がある。
L10-P7	L10	B1	不明	1.3	0.88	0.98	0.32	0.96	—	
L10-P8	L10	A1	不明	0.8	0.78	0.44	0.5	0.32	石製品（12）	大形石棒が樹立して検出された。
L11-P1	L11	A1	1 c 期	0.8	0.76	0.52	0.44	0.18	土器（2764）	浅鉢が逆位で出土、墓坑と考えられる。
L11-P14	L11	D1	5 期～	2.02	—	1.56	—	0.38	土器（2779 ～ 2781）、土製品（90）	墓坑の可能性がある。
L11-P17	L11	B1	5 期	1.86	1.46	1.6	1.2	0.77	土器（2782 ～ 2791）	墓坑の可能性がある。
L11-P18b	L11	—	4 期～	2.56	1.44	2.4	1.04	0.06	土器（2792 ～ 2796）	
L11-P26	L11	B1	不明	1.06	0.76	0.7	0.52	0.34	土器（2805・2806）	墓坑の可能性がある。
L11-P27	L11	B1	1 c 期	1.5	1.34	1.34	1.08	0.52	土器（2807）	底面付近より焼骨、逆位の浅鉢が出土している。
L11-P30	L11	B1	不明	1.42	1.2	0.94	0.64	0.48	—	墓坑の可能性がある。
L11-P42	L11	D4	不明	1.2	0.92	0.46	0.58	0.6	土器（2830）	墓坑の可能性がある。
L11-P55	L11	A1	不明	1.52	1.4	1.2	0.92	0.6	—	墓坑の可能性がある。
L11-P53	L11	D1	不明	1.6	1.06	1.48	0.82	0.36	—	墓坑の可能性がある。
L12-P17	L12	—	4 期～	1.74	—	1.5	—	—	土器（2852 ～ 2854）	墓坑の可能性がある。
L12-P35	L12	D1	5 期	1.34	0.84	1.1	0.52	0.44	土器（2874 ～ 2883）	墓坑の可能性がある。
L12-P55	L12	B1	不明	1.12	0.72	0.84	0.58	0.9	—	
L13-P15	L13	A1	不明	1.2	1.14	1.04	0.96	0.24	—	墓坑の可能性がある。
L13-P22	L13	E1	5 期	—	—	2.12	1.8	0.38	土器（2942 ～ 2951）	墓坑の可能性がある。
M6-P1	M6	A2	不明	1.84	1.6	1.56	1.3	0.28	—	墓坑の可能性がある。
M6-P4	M6	E4	2 c 期	—	—	—	—	0.8（1.16）	土器（2963 ～ 2982）	フラスコ状土坑の可能性。
M6-P7	M6	E1	5 b 期	—	—	—	—	0.66（1.14）	土器（2988 ～ 3030）、土製品（106・107）	フラスコ状土坑の可能性。
M9-P2	M9	D5	不明	0.92	0.76	0.78	0.64	0.18	—	墓坑の可能性がある。
M9-P8	M9	A1	3 a 期	2.48	1.98	1.28	1.38	0.82	土器（3081 ～ 3092）、土製品（113）	数基が重複している可能性。
M9-P11	M9	A1	3 b 期	0.96	0.86	0.8	0.72	0.36	土器（3093 ～ 3097）	墓坑の可能性がある。
M9-P12	M9	A1	不明	1.36	1.2	0.98	0.96	0.84	土器（3098 ～ 3102）	墓坑の可能性がある。
M9-P19	M9	—	不明	—	—	—	—	0.52	土器（3108 ～ 3112）	墓坑の可能性がある。
M9-P21	M9	D4	不明	1.44	1.36	0.74	0.84	0.5	—	墓坑の可能性がある。
M10-P16	M10	A1	不明	0.64	—	0.48	—	0.24	土器（3128）	柱状円礫が樹立した状態で検出された。
M11-P2	M11	D1	不明	1.2	0.8	1.02	0.64	0.35	—	墓坑の可能性がある。
M13-P15	M13	A1	5 b 期～	1.58	—	1.02	0.86	0.52	土器（3171～3173）、土製品（92）	墓坑の可能性がある。
N7-P1	N7	A1	6 期	—	1.26	1	0.98	0.4	土器（3195 ～ 3210）	
N8-P2	N8	B1	6 期	1.2	—	0.96	0.88	0.4	土器（3211 ～ 3219）	
N8-P36	N8	E1	6 期	1.66	1.02	1.4	0.68	0.45	土器（3252 ～ 3255）	墓坑の可能性がある。
N9-P55	N9	E1	不明	1.64	1.54	1.52	1.16	0.42	土器（3321）、石器（230）	墓坑の可能性がある。
O8-P27	O8	B1	不明	0.88	0.76	0.76	0.66	0.47	—	
O8-P30	O8	A5	不明	2	1.84	1.8	1.78	0.24（0.36）	土器（3388）	墓坑の可能性がある。
O8-P31	O8	B1	3 b 期	0.9	0.6	0.78	0.48	0.12	土器（3389）	墓坑の可能性がある。
O8-P32	O8	B1	5 b 期	1.28	0.66	1.16	0.54	0.22	土器（3390）	土坑底面から鉢が逆位で出土しており、墓坑と考えられる。
O8-P33	O8	A5	不明	2.4	2.26	2.28	2.08	0.19	—	墓坑の可能性がある。
O9-P21	O9	B1	不明	1.12	0.9	0.84	0.46	0.21	土器（3412）	墓坑の可能性がある。
O10-P3A	O10	A1	3 a 期～	1.3	1.2	1.04	1.06	0.66	土器（3434・3435）	墓坑の可能性がある。
P8-P6	P8	D1	4 期	2.04	1.16	1.88	0.96	0.15	土器（3473 ～ 3475）	墓坑の可能性がある。

第 12 表　土坑一覧表

主軸方向がN-7°-Eである。これらの形態から墓坑の可能性が想定される。

時　期：1a期（大木8a式並行期古段階）。

出土遺物：覆土からは、1a期の土器（図版第317図2195～2205）が出土している。

D4-P3（図版第150図）

形　態：調査区の端から約半分が検出されたもので、上面径約2.08m、底面径約1.78mの半円状を呈しており、円形か楕円形の土坑であると推定され、墓坑の可能性がある。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

D4-P4A・B（図版第151図）

形　態：本土坑は、第9号住居跡の床面中央部からT字状の土坑が検出され、これらは隅丸長方形の土坑が2基重複しているものと考えられる。そのうちD4-P4Aは、上面径約3.08m×1.96m、底面径約2.88m×1.6m、深さ約0.28mの規模を有し、主軸はN-57°-Eである。これらは第9号住居跡が埋没した後に構築されたもので、墓坑の可能性がある。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

D4-P5（図版第151図）

形　態：本土坑は、第9号住居跡の床面南側から検出されたもので、墓坑の可能性がある。平面形は、上面径約3.8m×2.68m、底面径約3.36m×2.4m、深さ約0.2mのやや不整な卵形を呈し、主軸はN-59°-Eである。覆土中には、径約2.8mの範囲に炭化物が堆積する。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

D5-P1（図版第152図）

形　態：本土坑は、ほぼ完形の土器2個体（図版第317図2206・2207）が出土しており、埋設された可能性がある。上面径約0.96m×0.8m、底面径約0.68m×0.58m、深さ約0.24mの楕円形を呈し、主軸はN-60°-Wである。

時　期：1a期（大木8a式並行期古段階）。

出土遺物：覆土からは、完形土器2点（図版第317図2206・2207）が出土している。

D5-P5（図版第152図）

形　態：本土坑は、上面径約1.32m×0.76m、底面径約0.74m×0.5m、深さ約0.44mの長楕円形を呈、主軸方向はN-41°-Eである。形態的特色から墓坑の可能性がある。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

E4-P1（図版第152図）

形　態：本土坑は、上面径約1.26m×1.2m、底面径1.12m×1.08m、深さ約0.1mのほぼ円形を呈する浅い土坑で、墓坑の可能性がある。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

E9-P1（図版第 152 図）

形　態：本土坑は、第 42 号住居跡の北側に隣接する楕円形を呈する土坑で、墓坑の可能性が高い。上面径約 1.54m×1.32m、底面径約 1.34m×1.06m、深さ約 0.4m の楕円形を呈し、主軸は N-59° -W である。

時　期：1 期（大木 8 a 式並行期）。

出土遺物：覆土からは、1 期の土器片（図版第 318 図 2212 ～ 2216）が僅かに出土している。

E9-P2（図版第 153 図）

形　態:本土坑は、第 42 号住居跡と第 43 号住居跡の間に位置する楕円形の土坑で、墓坑の可能性がある。上面径約 1.8m×1.42m、底面径約 1.66m×1.28m、深さ約 0.24m の規模を有し、主軸は N-33° -E である。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 318 図 2216 ～ 2218）が僅かに出土している。

E10-P1（図版第 153 図）

形　態:本土坑は、楕円形を呈する大形土坑で、墓坑の可能性がある。平面形は、上面径約 2.74m×1.72m、底面径約 2.6m×1.52m、深さ約 0.44m の長楕円形を呈し、主軸は N-23° -E である。底面の東側が一段低くなっており、そこから立石状の自然礫が検出されている。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 318 図 2220 ～ 2229）が出土している。

F4-P2（図版第 153 図）

形　態：本土坑は、楕円形を呈する浅い土坑で、墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 2.3m×1.76m、底面径約 2.16m×1.58m、深さ約 0.1m の楕円形を呈し、主軸は N-62° -E である。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 318 図 2230）が僅かに出土している。

F5-P11（図版第 153 図）

形　態：本土坑は、平面形が不整形な円形を呈する小形土坑である。規模は、上面径約 0.76m×0.68m、底面径約 0.62m×0.58m、深さ約 0.14m の浅い土坑である。覆土は、褐色土が堆積するが、1 層を中心として焼土粒が含まれる。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

F6-P1（図版第 154 図）

形　態:本土坑は、平面形が不整形な長楕円形を呈する土坑で、上面径約 0.44m×0.26m、底面径約 0.32m × 0.14m、深さ約 0.1m の小形土坑である。内部からは深鉢の大形破片（2232）が出土し、F6-P7 出土の 1672 と接合関係にある。

時　期：3 a 期（沖ノ原 I 式期）。

出土遺物：土坑からは、大形の深鉢 1 点（図版第 319 図 2232）が出土しており、F6-P7 出土土器（図版第 287 図 1672）と約 10m の距離で接合している。

F6-P8（図版第 154 図）

形　態：本土坑は、上面径約 1.74m×1.66m、底面径約 1.36m×1.4m、深さ約 0.6m の円形を呈する土坑である。墓坑の可能性ともに、フラスコ状土坑であることも想定される。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

G4-P9（図版第 154 図）

形　態：本土坑は、上面径約 0.96m×0.84m、底面径約 0.9m×0.92m、深さ約 0.4m の円形を呈する土坑である。壁面が一部抉れる部分があることから、墓坑というよりはフラスコ状土坑の可能性がある。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 320 図 2246・2247）が僅かに出土している。

G7-P2（図版第 155 図）

形　態：本土坑は、G7-P3 と重複する浅い土坑であり、両土坑とも墓坑の可能性が考えられる。規模は、上面径約 2.52m×1.78m、底面径約 1.78m×1.5m、深さ約 0.48m の楕円形を呈し、主軸は N-47° -W である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

H3-P5（図版第 155 図）

形　態：本土坑は、H3-P10 と重複するが、両土坑とも円形を呈する浅い土坑で、墓坑の可能性もある。規模は、上面径約 1.4m×1.3m、底面径約 1.18m×1.04m、深さ約 0.24m の円形を呈する。

時　期：１期～２期（大木８ａ式並行期～大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、１期～２期の土器片（図版第 321 図 2266 ～ 2273）が出土している。

H3-P6（図版第 156 図）

形　態:本土坑は、隅丸長方形を呈する土坑で、墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.98m×1.18m、底面径 1.5m×0.86m、深さ約 0.44m で、主軸は N-69° -E である。

時　期：３期（沖ノ原式期）以降。

出土遺物:覆土からは、1 期～３ｂ期の土器(図版第 321 図 2274 ～第 322 図 2300)が比較的多く出土している。

H3-P9（図版第 155 図）

形　態：本土坑は、やや不整形な隅丸方形もしくは楕円形を呈すると考えられ、墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 2.38m×1.8m、底面径約 2.08m×1.64m、深さ約 0.3m を測る。主軸は N-63° -E である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

H3-P10（図版第 155 図）

形　態:本土坑は、H3-P5 との重複により平面形は明確ではないが、墓坑の可能性のある浅い土坑である。規模は、上面径約 1.5m、底面径約 1.26m、深さ約 0.18m である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

H4-P1A（図版第 156 図）

形　態：本土坑は、南西側に H4-P11 が重複しているため全体形状は明確ではないが、ほぼ円形を呈する土坑であると推定される。規模は、上面径約 1.32m、底面径約 1.24m、深さ約 0.3m を測る。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）。

出土遺物：覆土からは、２期の土器片（図版第 322 図 2304 ～第 323 図 2314）がまとまって出土している。

I3-P12（図版第 156 図）

形　態:本土坑は、やや不整形な楕円形を呈する浅い土坑で、墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.96m × 1.18m、底面径約 1.12m×0.58m、深さ約 0.44m を呈し、主軸は N-76° -W である。

時　期：２期（大木８ｂ式並行期）以降。

出土遺物：覆土からは、２期の土器片（図版第 325 図 2353 ～ 2359）、とともに三角形土製品１点（図版第 418 図 31）が出土している。

I4-P12（図版第 156 図）

形　態：本土坑は、平面形が上面径約 1.96m×1.52m、底面径約 1.36m×1.36m のほぼ円形を呈し、深さ約 0.64m を測る。形態的に、墓坑もしくはフラスコ状土坑の可能性がある。

時　期：４期（三十稲場式期）以降。

出土遺物：覆土からは、４期の土器片（図版第 325 図 2366 ～ 2369）が僅かに出土している。

I4-P14（図版第 157 図）

形　態：本土坑は、上面径約 1.28m×1.12m、底面径約 1.0m×0.86m、深さ約 0.25m のやや不整形な円形を呈する土坑である。形態的に、墓坑の可能性もある。主軸は N-80° -W である。

時　期：３ｂ期（沖ノ原Ⅱ式期）以降。

出土遺物：覆土からは、２ｂ期や３ｂ期の土器片（図版第 325 図 2370・2371）が出土している。

I6-P1（図版第 157 図）

形　態：本土坑は、第 23 号住居跡（３ａ期）を切り込んで構築されている。規模は、上面径約 2.94m×1.74m、底面径約 1.78m×1.36m、深さ約 0.96m の不整隅丸方形を呈する土坑である。覆土は、褐色土や暗褐色土などが 22 層にわたって堆積し、下層からは多量の中形礫が検出されている。土坑内には、多くの遺物が包含されていることから、廃棄坑の可能性が想定される。主軸方向は、N-2° -E 前後である。

時　期：４ｂ期（三十稲場式期新段階）。

出土遺物：覆土からは、土器（図版第 326 図 2390 ～第 329 図 2438）、石器が多量に出土している。出土土器は、４ｂ期を主体とする良好な資料である。

I7-P8（図版第 157 図）

形　態：平面形は、上面径約 1.6m×1.02m、底面径約 1.34m×0.76m、深さ約 0.32m の楕円形を呈する浅い土坑である。主軸は N-76° -E で、形態的に墓坑であると考えられる。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 329 図 2451 ～ 2453）が僅かに出土している。

I7-P22（図版第 158 図）

形　態：本土坑は、I8-P3 の西側に隣接し、両土坑とも墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.86m×1.68m、底面径約 1.42m×1.38m、深さ約 0.17m の隅丸方形を呈し、主軸は N-24° -E である。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 330 図 2461・2462）が出土している。

I8-P3（図版第 158 図）

形　態：本土坑は、I7-P22 の東側に隣接し、楕円形を呈する浅い土坑で、墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 2.12m×1.72m、底面径約 1.82m×1.26m、深さ約 0.38m で、主軸方向は、N-26° -E である。

時　期：５期（南三十稲場式期）以降。

出土遺物：覆土からは、５期の土器片（図版第 330 図 2464 ～ 2471）が出土している。

J5-P15（図版第 158 図）

形　態：本土坑は、やや不整形な楕円形を呈する土坑であり、墓坑の可能性がある。上面径約 2.14m×1.46m、底面径約 1.24m×1.14m、深さ約 0.68m で、主軸は N-68° -W である。

時　期：５期（南三十稲場式期）以降。

出土遺物：覆土からは、５期の土器片（図版第 331 図 2483 ～ 2487）が出土している。

J8-P22（図版第 158 図）

形　態:本土坑は、環状列石の範囲に近接して分布し、撹乱が下層まで及んでいる区域に位置する。規模は、上面径約 1.38m×0.82m、底面径約 1.1m×0.54m、深さ約 0.36m の隅丸長方形を呈する土坑で、主軸方向は、N-89° -W である。これらの形態的特色から、墓坑である可能性が高い。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

K7-P2（図版第 159 図）

形　態:本土坑は、楕円形を呈する土坑で、上面径約 1.12m×0.84m、底面径約 0.6m×0.62m、深さ約 0.33m の規模を有し、主軸方向は N-66° -W である。

時　期：２ｃ期（栃倉式期）。

出土遺物:覆土からは、土器片（図版第 332 図 2524 ～ 2531）、石器（図版第 445 図 218 ～ 221）が出土している。出土土器は破片資料であるが、２ｃ期でまとまる。出土石器は、石鏃１点（218）、磨石１点（219）、石皿２点（220・221）、などがある。

K8-P4（図版第 159 図）

形　態：本土坑は、楕円形を呈する土坑で、墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.34m×0.86m、底面径約 1.16m×0.66m、深さ約 0.4m の規模を有し、主軸方向は N-60° -E である。

時　期：４期（三十稲場式期）以降。

出土遺物：覆土からは、４期の土器片（図版第 333 図 2538 ～ 2542）が出土している。

K9-P3（図版第 159 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、K9-P4 と一部重複する。規模は、上面径約 1.02m × 1.0m、底面径約 0.84m×0.85m、深さ約 0.4m の円形を呈し、墓坑の可能性も考慮される。

時　期：３期（沖ノ原式期）以降。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 333 図 2568・2569）が僅かに出土している。

K9-P4（図版第 159 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、K9-P3 と一部重複する。規模は、上面径約 0.9m、底面径約 0.84m、深さ約 0.4m のほぼ円形を呈すると考えられ、墓坑の可能性もある。覆土中には、大形礫が５点ほど堆積していた。

時　期：３ｂ期～４期（沖ノ原Ⅱ式期～三十稲場式期）。

出土遺物：覆土からは、３ｂ期～４期の土器片（図版第 334 図 2571・2572）が僅かに出土している。

L5-P18（図版第 159 図）

形　態：本土坑は、第 55 号住居跡（３ａ期）の床面と重複するが、新旧関係は不明である。規模は、上面径約 2.84m×1.86m、底面径約 2.52m×1.7m、深さ約 0.42m を呈する隅丸方形の浅い土坑であり、墓坑の可能性が高い。また主軸方向は、N-52° -W である。

時　期：不明。

出土遺物：土器片（図版第 332 図 2526 ～ 2531）が出土している。

L6-P14（図版第 160 図）

形　態：本土坑は、L6-P15 などと一部重複するが、楕円形を呈すると考えられる。底面径は、約 1.04m × 0.8m、深さ約 0.28m の浅い土坑であり、墓坑の可能性がある。主軸方向は N-46° -W である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

L6-P15（図版第 160 図）

形　態：本土坑は、L6-P14 などと一部重複するが、卵形を呈する土坑であると考えられる。規模は、上面が径約 1.88m×1.72m、底面径は約 1.46m×1.08m、深さ約 0.16m の浅い土坑であり、墓坑の可能性がある。主軸方向は、N-57° -E である。

時　期：３ｂ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：覆土からは、３ｂ期の土器片（図版第 335 図 2615 ～ 2618）が僅かに出土している。

L6-P17（図版第 160 図）

形　態：本土坑は、上面径約 1.24m×0.92m、底面径約 1.04m×0.78m、深さ約 0.36m の楕円形を呈する土坑であり、墓坑の可能性がある。主軸方向は N-66° -W である。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：覆土からは、３ａ期の土器片（図版第 335 図 2619 ～ 2621）が出土している。

L8-P8（図版第 160 図）

形　態：本土坑は、上面径約 1.08m×0.94m、底面径約 0.84m×0.74m、深さ約 0.72m の円形を呈する土坑で、底面に小土坑がある。小形のフラスコ状土坑の可能性もあるが、明確ではない。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

L9-P2（図版第 160 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置している。規模は、上面径約 1.14m×1.12m、底面径約 0.94m

× 0.92m、深さ約 0.32m のほぼ円形を呈する土坑で、底面に小形の土坑がある。小形のフラスコ状土坑の可能性もあるが、明確ではない。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

L9-P26（図版第 161 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、墓坑の可能性もある。規模は、上面径約 2.24m×1.88m、底面径約 1.08m×1.06m、深さ約 0.76m の不整形な隅丸方形を呈し、北側の壁面がなだらかに立ち上がる。主軸方向は、N-3° -W である。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：覆土からは、土器（図版第 339 図 2708 ～第 340 図 2727）、石器（図版第 441 図 174）が出土している。出土土器は比較的多く、３ａ期の資料が主体を占める。石器は、石鏃１点（174）などである。

L9-P28（図版第 161 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、墓坑の可能性が高い。規模は、上面径約 1.56m×0.86m、底面径約 1.1m×0.66m、深さ約 0.42m のやや不整形な長楕円形を呈する。主軸方向は、N-28° -W である。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、石製品１点（図版第 461 図 11）が出土しており、硬質の緑色岩製の垂飾品で、副葬品であると考えられる。また底面より径約 0.5m の偏平礫が検出されている。また土器が出土していないため、構築時期は明確ではない。

L9-P32（図版第 161 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、墓坑の可能性もある。規模は、上面径約 1.52m×1.3m、底面径約 1.32m×0.9m、深さ約 0.56m のやや不整な楕円形を呈する。主軸方向は、N-12° -W である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

L9-P33（図版第 161 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、形態などから墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.54m×0.9m、底面径約 1.04m×0.72m、深さ約 0.36m の楕円形を呈する土坑である。主軸方向は、N-8° -E である

時　期：５期（南三十稲場式期）。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 340 図 2732 ～ 2734）が僅かに出土している。

L9-P35（図版第 162 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、形態的に墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.02m × 0.98m、底面径約 0.8m×0.72m、深さ約 0.36m のほぼ円形を呈する浅い土坑である。

時　期：４期（三十稲場式期）。

出土遺物：覆土からは、土器（図版第 340 図 2735 ～ 2736）が僅かに出土している。

L9-P36（図版第 162 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、形態的に墓坑の可能性がある。規模は、上面径約

1.22m×1.12m、底面径約 1.06m×1.0m、深さ約 0.3m のほぼ円形を呈する浅い土坑である。主軸方向は、N-8° -E である。

時　期：３期（沖ノ原式期）。

出土遺物：覆土からは、３期の少量の土器片（図版第 340 図 2737 ～ 2746）と、石棒片１点（図版 461 図 23）が出土している。

L9-P42（図版第 162 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、形態的にも墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.06m×1.0m、底面径約 0.86m×0.8m、深さ約 0.64m の不整形な円形を呈する土坑である。主軸方向は、N-67° -W である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

L9-P54（図版第 162 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、形態的にも墓坑の可能性が高い。規模は、上面径約 0.82m×0.5m、底面径約 0.74m×0.42m、深さ約 0.6m の隅丸長方形を呈する。主軸方向は、N-42° -E である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

L10-P7（図版第 163 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置している。上面径約 1.3m×0.88m、底面径約 0.98m×0.32m、深さ約 0.96m の長楕円形を呈する土坑である。主軸方向は、N-29° -E である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

L10-P8（図版第 163 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、土坑内に大形石棒が樹立されている。土坑規模は、上面径約 0.8m×0.78m、底面径約 0.44m×0.5m、深さ約 0.32m の楕円形を呈する土坑である。この石棒の時期は別として、環状列石造営時に立てられた可能性がある。

時　期：出土土器がないため時期は明確ではないが、石棒の形態から中期終末～後期初頭と推測される。

出土遺物：大形石棒（図版第 459 図 12）は、長さ約 62cm× 幅約 22cm の安山岩製の有頭石棒である。

L11-P1（図版第 163 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、小形の墓坑であると考えられる。規模は、上面径約 0.8m×0.76m、底面径約 0.52m×0.44m、深さ約 0.18m の円形を呈する小形土坑で、ほぼ中央部から完形の浅鉢１点が逆位で出土しており、「甕被葬」の一種であると考えられる。

時　期：１ｃ期（大木８ａ式並行期新段階）。

出土遺物：土坑覆土から、浅鉢１点（図版 341 図第 2764）が出土している。

L11-P14（図版第 163 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、墓坑の可能性が高い。土坑の一部が調査区外に及

んでいるため、全体形状は明確ではないが、長軸長は上面径約 2.02m、底面径約 1.56m、深さ約 0.38m の長楕円形を呈する土坑であると推測される。主軸方向は、N-68° -W である。

時　期：５期（南三十稲場式期）。

出土遺物：覆土からは、少量の土器片（図版第 342 図 2779 ～ 2781）と土製円盤１点（図版第 421 図 90）が出土している。

L11-P17（図版第 164 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、形態的にも墓坑の可能性が高い。規模は、上面径約 1.86m×1.46m、底面径約 1.6m×1.2m、深さ約 0.77m の楕円形を呈する土坑である。主軸方向は、N-30° -W である。

時　期：５期（南三十稲場式期）。

出土遺物：覆土からは、５期の土器片（図版第 342 図 2782 ～ 2791）が出土している。

L11-P18b（図版第 164 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、形態的にも墓坑の可能性がある。しかし、L11-P18A や P20 との重複によって平面形が不明瞭になっている。規模は、上面径約 2.56m×1.44m、底面径約 2.4m×1.04m、深さ約 0.06m の長楕円形を呈する浅い土坑である。主軸方向は、N-86° -W である。

時　期：４期（三十稲場式期）。

出土遺物：覆土からは、４期の土器片（図版第 343 図 2792 ～ 2796）が僅かに出土している。

L11-P26（図版第 164 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、墓坑の可能性がある。上面径約 1.06m×0.76m、底面径約 0.7m×0.52m、深さ約 0.34m の楕円形を呈する小形土坑である。主軸方向は、N-11° -E である。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 343 図 2805・2806）が僅かに出土している。

L11-P27（図版第 164 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、覆土の堆積状況から墓坑であると考えられる。規模は、上面径約 1.5m×1.34m、底面径約 1.34m×1.08m、深さ約 0.52m の楕円形を呈し、主軸方向は、N-30° -E である。土坑底面付近からは、ほぼ完形の浅鉢（図版第 343 図 2807）が逆位で出土しており、甕被葬の一種であると考えられる。また土坑の中央部からは、人骨に同定される焼骨と炭化材が検出されており、火葬人骨が埋葬されたものと推測される。

時　期：１ｃ期（大木８ａ式並行期新段階）。

出土遺物：土坑底面付近から、浅鉢１点（図版第 343 図 2807）と焼人骨片、炭化材（付編参照）が出土している。

L11-P30（図版第 165 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.42m×1.2m、底面径約 0.94m×0.64m、深さ約 0.48m の不整形な楕円形を呈する土坑であり、底面の東側が一段低くなる。主軸方向は、N-60° -E である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

L11-P42（図版第 165 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.2m×0.92m、底面径約 0.46m×0.58m、深さ約 0.6m の楕円形を呈し、中央部の底面が一段低くなる。主軸方向は、N-58° -E である。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、３ａ期の土器片（図版第 344 図 2830）が僅かに出土している。

L11-P53（図版第 166 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、墓坑の可能性がある。北東側に他の土坑の重複が見られるが、隅丸長方形を呈する土坑であると考えられ、規模は上面径約 1.6m×1.06m、底面径約 1.48m × 0.82m、深さ約 0.36m であり、主軸方向は、N-53° -W である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

L11-P55（図版第 165 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、墓坑の可能性がある。上面径約 1.52m×1.4m、底面径約 1.2m×0.92m、深さ約 0.6m の不整円形を呈する土坑であり、主軸方向は、N-11° -E である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

L12-P17（図版第 166 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置し、墓坑の可能性がある。しかし、一部が調査区外に含まれ、L12-P16 と L12-P18 などの土坑が重複するため平面形は不明瞭である。規模は、上面径約 1.74m、底面径約 1.5m の不整形な円形を呈する浅い土坑である。

時　期：４期（三十稲場式期）。

出土遺物：覆土からは、４期の土器片（図版第 345 図 2852 ～ 2854）が僅かに出土している。

L12-P35（図版第 166 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、形態的に墓坑の可能性が高い。規模は、上面径約 1.34m × 0.84m、底面径約 1.1m×0.52m、深さ約 0.44m の隅丸長方形を呈する。主軸方向は N-45° -E である。

時　期：５期（南三十稲場式期）。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 345 図 2874 ～ 2883）が出土している。

L12-P55（図版第 166 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、やや底面が広くなる円筒状を呈しており、フラスコ状土坑の可能性もある。規模は、上面径約 1.12m×0.72m、底面径約 0.84m×0.58m、深さ約 0.9m である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

L13-P15（図版第 167 図）

形　態：本土坑は、環状列石の範囲付近に位置しており、形態的に墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.2m×1.14m、底面径約 1.04m×0.96m、深さ約 0.24m の楕円形を呈する浅い土坑である。主軸方向は、N-34° -W である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

L13-P22（図版第 167 図）

形　態：本土坑は、環状列石の範囲付近に位置し、形態的に墓坑の可能性もあるが不明である。深さ約 0.38m の浅い大形土坑で、覆土中からは大量の礫が出土している。主軸方向は、N-53° -W である。

時　期：５期（南三十稲場式期）。

出土遺物：覆土からは、５期の土器片（図版第 347 図 2942 ～ 2951）が少量出土している。

M6-P1（図版第 167 図）

形　態：土坑規模は、上面径約 1.84m×1.6m、底面径約 1.56m×1.3m、深さ約 0.3m の隅丸方形を呈する大形土坑である。主軸方向は、N-88° -E である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

M6-P4（図版第 168 図）

形　態：本土坑は、土坑密集区域に位置し、東側で M6-P7 と重複している。重複により上面・底面ともに規模は不明であるが、深さ約 0.8m の不整円形を呈する大形土坑であり、フラスコ状土坑の可能性もある。

時　期：２ｃ期（栃倉式期）。

出土遺物：覆土からは、２ｃ期～５期の土器片（図版第 348 図 2963 ～ 2982）が出土している。

M6-P7（図版第 168 図）

形　態：本土坑は、土坑密集区域に位置し、東側で M6-P4 と重複している。規模は、上面・底面ともに重複により不明であるが、深さ約 0.66m の不整円形を呈する大形土坑であり、フラスコ状土坑の可能性が高い。

時　期：５ｂ期（南三十稲場式期新段階）。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 349 図 2988 ～第 350 図 3030）が出土している。

M9-P2（図版第 168 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、形態的に墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 0.92m ×0.76m、底面径約 0.78m×0.64m、深さ約 0.18m の隅丸方形を呈する浅い小形土坑である。主軸方向は、N-5° -W である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

M9-P8（図版第 169 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、幾つかの土坑が重複している可能性がある。形態的に、墓坑の可能性とともにフラスコ状土坑の可能性もある。規模は、上面径約 2.48m×1.98m、底面径約

1.28m×1.38m、深さ約 0.82m のほぼ円形を呈する大形土坑である

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：覆土からは、３ａ期の土器片（図版第 352 図 3081 ～ 3092）が出土している。

M9-P11（図版第 169 図）

形　態：本土坑は、環状列石の列石に接する位置にあり、形態的に墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 0.96m×0.86m、底面径約 0.8m×0.72m、深さ約 0.36m のほぼ円形を呈する小形土坑である。

時　期：３ｂ期（沖ノ原Ⅱ式期）。

出土遺物：覆土からは、３ｂ期の土器片（図版第 352 図 3093 ～ 3097）が出土している。

M9-P12（図版第 169 図）

形　態:本土坑は、環状列石に近接した位置にあり、形態的に墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.36m × 1.2m、底面径約 0.98m×0.96m、深さ約 0.84m の円形を呈する。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 352 図 3098 ～ 3102）が出土している。

M9-P19（図版第 170 図）

形　態：本土坑は、環状列石の外側に近接して位置し、M9-P27 と重複するとともに一部調査区外に及んでいる。このため平面形は不明であるが、深さ約 0.52m の円形もしくは楕円形を呈する土坑であると推測される。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 353 図 3108 ～ 3112）が僅かに出土している。

M9-P21（図版第 170 図）

形　態：本土坑は、環状列石の外側に近接して位置しており、形態的に墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.44m×1.36m、底面径約 0.74m×0.84m、深さ約 0.5m の不整円形を呈する浅い土坑である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

M9-P27（図版第 170 図）

形　態：本土坑は、環状列石の外側に近接して位置している。M9-P19 と重複するとともに一部調査区外に及んでいる。平面形は不明であるが、深さ約 0.56m の円形もしくは楕円形を呈する土坑であると推測される。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 353 図 3114）が僅かに出土している。

M10-P16（図版第 169 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、柱状円礫が立石状に樹立される。柱状礫は、長さ約 0.5m× 幅約 0.18m の安山岩の自然礫である。土坑規模は、上面径約 0.64m、底面径約 0.48m、深さ約 0.24m の円形を呈する土坑であり、柱状礫の根元には褐色土・暗褐色土の堆積が認められる。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 353 図 3128）が僅かに出土している。

M11-P2（図版第 170 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、形態的に墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.2m × 0.8m、底面径約 1.02m×0.64m、深さ約 0.35m のやや不整な楕円形を呈する土坑である。主軸方向は、N-70° -E である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

M13-P15（図版第 170 図）

形　態：本土坑は、環状列石の内側に位置しており、形態的に墓坑の可能性もある。規模は、上面径約 1.58、底面径約 1.02m×0.86m、深さ約 0.52m の楕円形を呈する土坑である。主軸方向は、N-10° -W である。

時　期：５ｂ期（南三十稲場式期新段階）。

出土遺物：覆土からは、５ｂ期の土器片（図版第 355 図 3171 ～ 3173）と土製円盤３点（図版第 421 図 91・93・95）が出土している。

N7-P1（図版第 171 図）

形　態：本土坑は、調査区西端に位置する円形の土坑である。規模は、上面径約 1.26m、底面径約 1.0m × 0.98m、深さ約 0.4m の円筒状の土坑である。

時　期：６期（加曽利Ｂ１式並行期）。

出土遺物：覆土からは、６期の土器片（図版第 356 図 3195 ～ 3210）がまとまって出土している。

N8-P2（図版第 171 図）

形　態：本土坑は、調査区西端に位置し、一部が調査区外へと及んでいる。規模は、上面径約 1.2m、底面径約 0.96m×0.88m、深さ約 0.4m の円形もしくは楕円形を呈する土坑である。

時　期：６期（加曽利Ｂ１式並行期）。

出土遺物：覆土からは、６期の土器片（図版第 357 図 3211 ～ 3219）がまとまって出土している。

N8-P36（図版第 171 図）

形　態：本土坑は、不整な隅丸長方形を呈する土坑であり、墓坑の可能性が高い。規模は、上面径約 1.66m × 1.02m、底面径約 1.4m×0.68m、深さ約 0.45m で、主軸方向は、N-80° -E である。

時　期：６期（加曽利Ｂ１式並行期）。

出土遺物：覆土からは、土器片（図版第 358 図 3252 ～ 3255）が僅かに出土している。

N8-P37（図版第 171 図）

形　態：本土坑は N7-P1 に隣接し、形態的に墓坑の可能性もある。規模は、上面径約 1.6m×0.96m、底面径約 1.42m×0.76m、深さ約 0.32m の不整形な楕円形を呈する土坑である。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、３ｂ期の土器片（図版第 359 図 3256）が僅かに出土している。

N9-P55（図版第 171 図）

形　態：本土坑は、やや不整形な隅丸長方形を呈する土坑であり、墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.64m×1.54m、底面径約 1.52m×1.16m、深さ約 0.42m で、底面から円礫２点が検出されている。

主軸方向は、N-90° -E である。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、少数の土器片（図版第 362 図 3321）と石器（図版第 446 図 230）が出土している。

O8-P27（図版第 172 図）

形　態：本土坑は、円筒状を呈する小形土坑である。規模は、上面径約 0.88m×0.76m、底面径約 0.76m × 0.66m、深さ約 0.47m の土坑で、主軸方向は、N-30° -E である。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

O8-P30（図版第 172 図）

形　態：本土坑は、円形を呈する浅い土坑であり、墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 2.0m×1.84m、底面径約 1.8m×1.78m、深さ約 0.24m の土坑である。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、 1 期の土器片（図版第 364 図 3388）が少数出土している。

O8-P31（図版第 172 図）

形　態：本土坑は、第 59 号住居跡（３ｂ期）の南西側に隣接する長楕円形を呈する小形土坑であり、墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 0.9m×0.6m、底面径約 0.78m×0.48m、深さ約 0.12m で、主軸方向は、N-66° -W である。

時　期：３ｂ期（沖ノ原Ⅱ式期）。

出土遺物：覆土からは、やや大形の土器片（図版第 365 図 3389）が出土している。

O8-P32（図版第 172 図）

形　態：本土坑は、遺跡の南西端に位置する長楕円形を呈する土坑であり、形態的特色や土器の出土状況から墓坑であると考えられる。規模は、上面径約 1.28m×0.66m、底面径約 1.16m×0.54m、深さ約 0.22m で、主軸方向は N-84° -W である。土坑底面の西端からは、ほぼ完形の土器（3390）が逆位で出土しており、「甕被葬」に用いられた土器であると推定される。

時　期：５ｂ期（南三十稲場式新段階）。

出土遺物：土坑底面から、完形土器 1 点（図版第 365 図 3390）が逆位で出土している。

O8-P33（図版第 173 図）

形　態：本土坑は、遺跡の南西端に位置するやや不整な円形を呈する大形土坑であり、墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 2.4m×2.26m、底面径約 2.28m×2.08m、深さ約 0.19m を呈する。

時　期：不明。

出土遺物：なし。

O9-P21（図版第 173 図）

形　態：本土坑は、楕円形を呈する小形の土坑であり、形態的に墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.12m×0.9m、底面径約 0.84m×0.46m、深さ約 0.21m を呈し、主軸方向は、N-87° -E である。

時　期：不明。

出土遺物：覆土からは、４期の土器片（図版第 366 図 3412）が僅かに出土している。

O10-P3A（図版第 173 図）

形　態：本土坑は、円形を呈する土坑であり、形態的に墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 1.3m×1.2m、底面径約 1.04m×1.06m、深さ約 0.66m を呈する。

時　期：３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）。

出土遺物：覆土からは、３ａ期の土器片（図版第 367 図 3434・3435）が出土している。

P8-P6（図版第 173 図）

形　態：本土坑は、隅丸長方形を呈する浅い土坑であり、墓坑の可能性がある。規模は、上面径約 2.04m × 1.16m、底面径約 1.88m×0.96m、深さ約 0.15m で、主軸方向は、N-33° -E である。

時　期：４期（三十稲場式期）。

出土遺物：覆土からは、４ｂ期の大形の土器片（図版第 369 図 3473 ～ 3475）などが出土している。

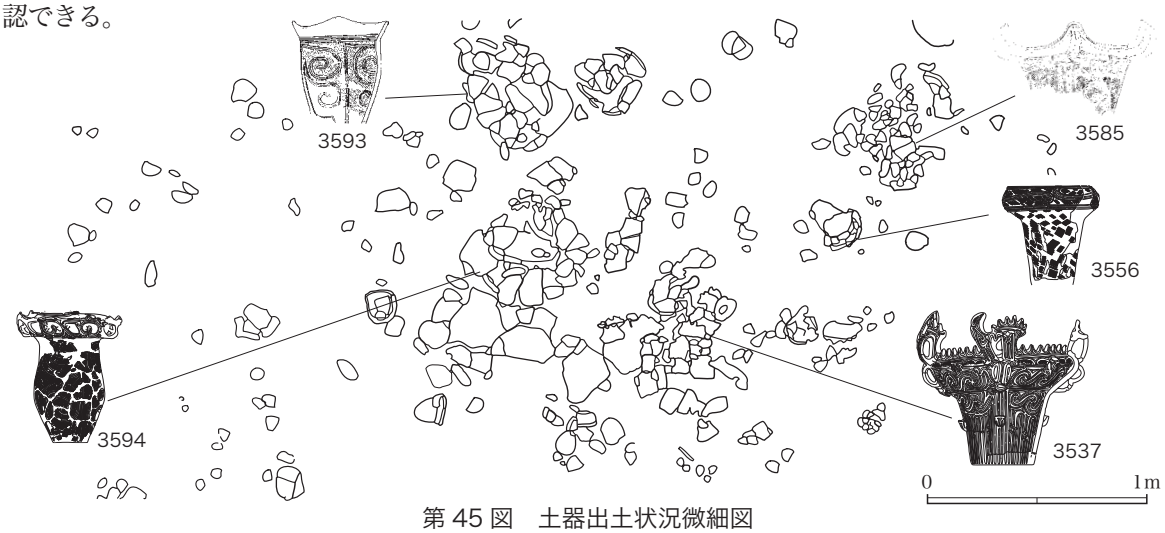
7. 遺物集中区（廃棄場）

本遺跡の H2・H3 グリッドの径約 10m（仮）の範囲に遺物集中域が確認され、調査当初は遺物集中域を住居跡として認識し、「第 14 号住居跡」と「第 15 号住居跡」と呼称して発掘調査が進められた。しかし、第 14 号住居跡に関しては、土器集中部の下部から竪穴住居跡やそれにかかわる炉跡・柱穴が検出されなかったため、整理段階で「廃棄場」として認識を改めた（註 122）。また第 15 号住居跡は、調査が進んだ段階で、ややずれた場所から３ｂ期の住居跡が検出されたものの、当初設定した範囲は第 14 号住居跡から連続する廃棄場であると考えられ、整理段階で第 15 号住居跡の範囲から出土する遺物と分離した。

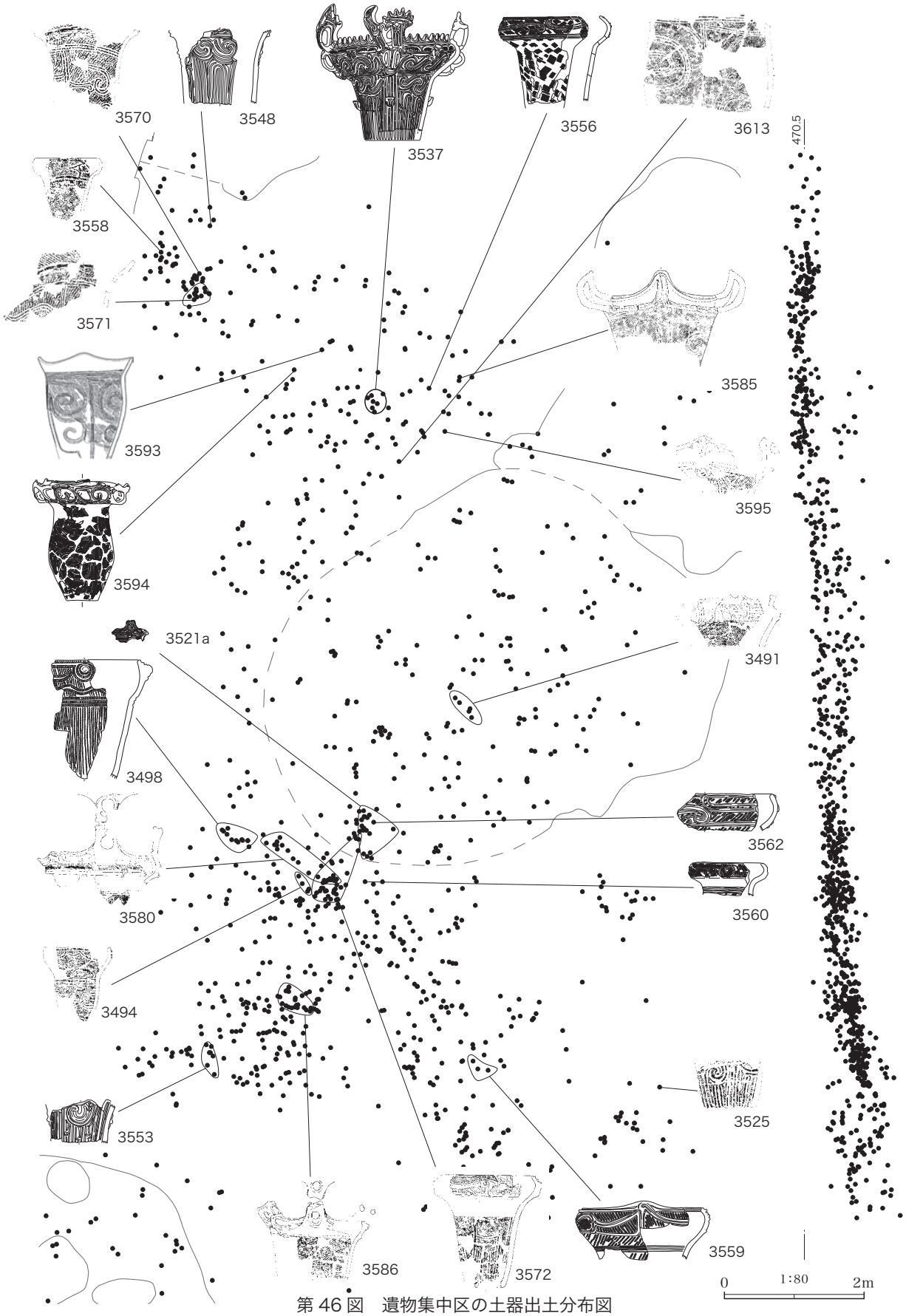
これらの遺物集中区は、比較的集落の縁辺部に近い場所に位置しており、道尻手遺跡などの廃棄場の在り方に類似している。また希薄ながら E10 グリッド、E11 グリッドにも１期を中心とする遺物の集中域が見られ、これらも集落縁辺部に形成された廃棄場の可能性がある。

出土土器は、ほとんどが１期～２期（大木８ａ式～大木８ｂ式並行期）の資料であり、完形に近いものが多く、完形復元できた資料は５個体ある（図版第 370 図～第 383 図）。特に、第 15 号住居跡の東側の遺物集中区から出土した火焔型土器 3537 は国指定文化財に指定されており、その周囲からは大木８ｂ式土器 3556 や 3585・3593・3594 などが出土している（第 45 図）。いずれも大木８ｂ式でも古段階に位置付けられる資料であり、火焔型土器との共伴関係についても検討が必要であろう。また第 15 号住居跡の北西側にも遺物集中域があり、２期の資料がまとまって出土している（第 46 図）。石器は、打製石斧や磨製石斧、磨石などが出土している（図版第 447 図 235 ～ 246、第 448 図 247 ～ 256）。特に分布の集中などは見られなかった（第 47 図）。

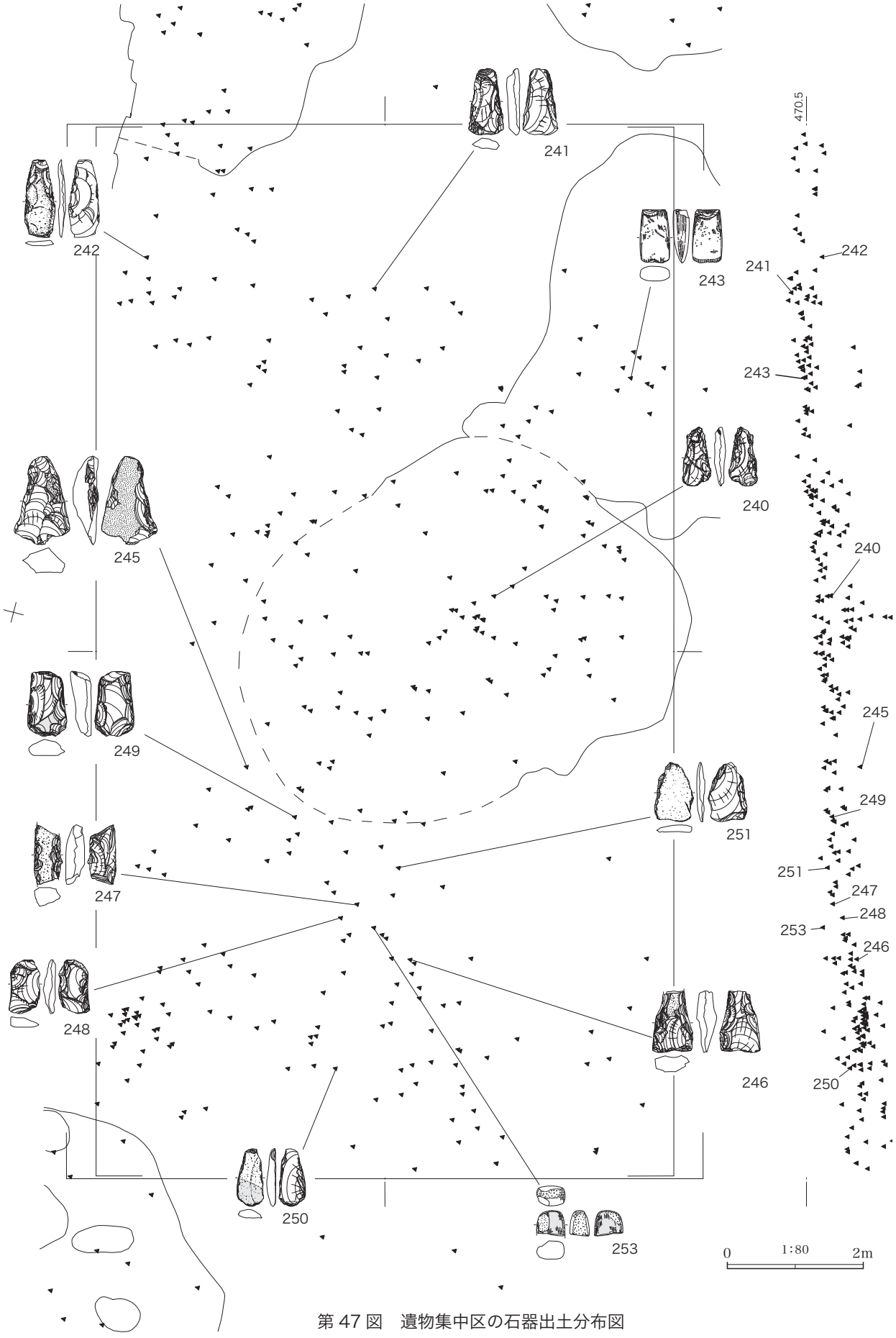
また調査区内の大部分は撹乱によって上層が削平されているため、遺跡内での分布傾向に意味があるかどうか問題がある。遺跡内における出土土器の分布は、時期別にみると第 487 図・第 49 図のような変化が認められる。１期～２期では H2 ～ H4 グリッドの遺物集中区に遺物のまとまりが見られ、３期以降は希薄になる。３期になると、分布が南西側へと移り、広場に相当する区域や N ～ Q グリッドでも遺物の分布するようになる。一方、後期になると、中央部の G ～ I グリッドと南西側の N ～ Q グリッドに分布が限定されるようになる。時期的に、使用・廃棄域が変化していると考えられ、遺構分布からも追認できる。



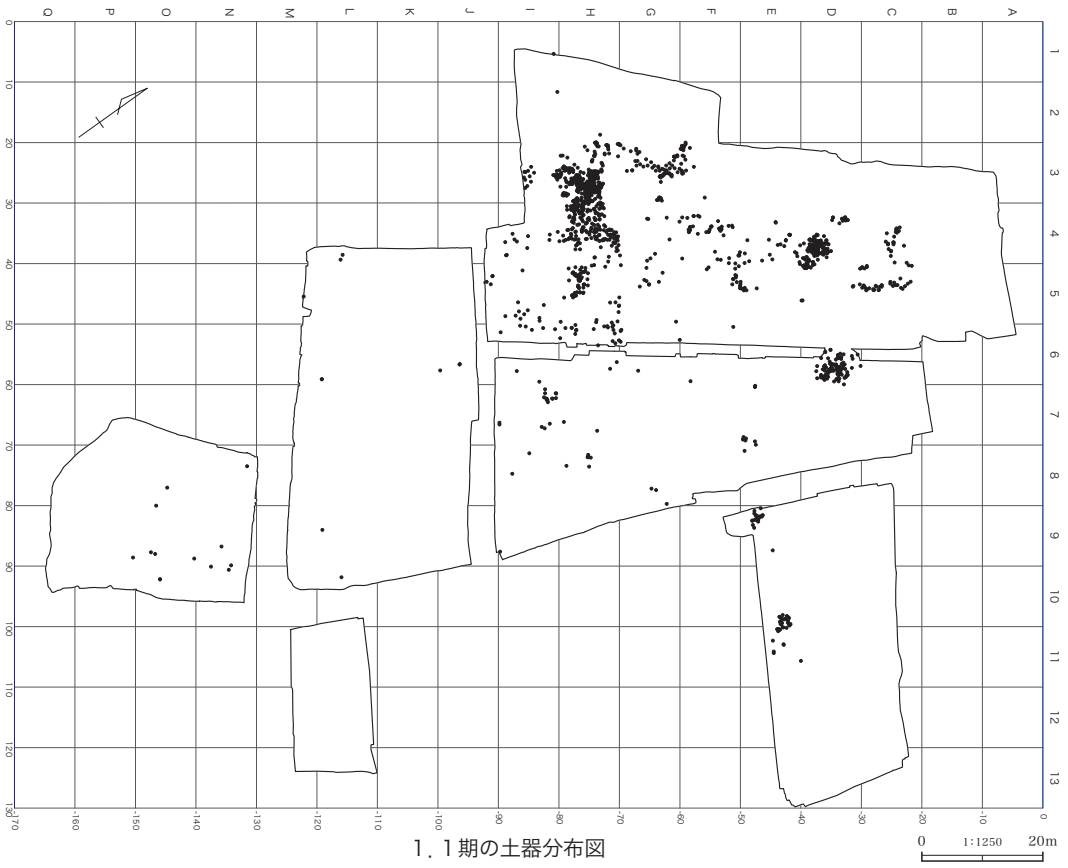
第 45 図　土器出土状況微細図



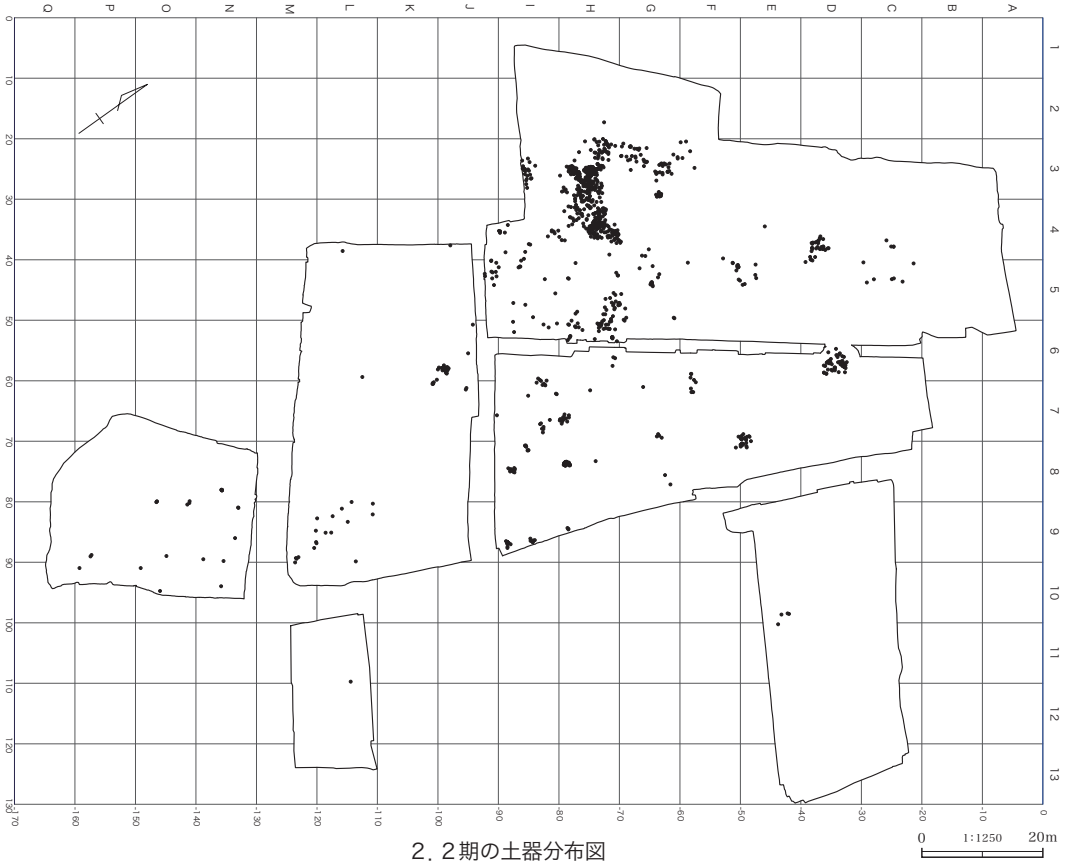
第 46 図　遺物集中区の土器出土分布図



第 47 図　遺物集中区の石器出土分布図

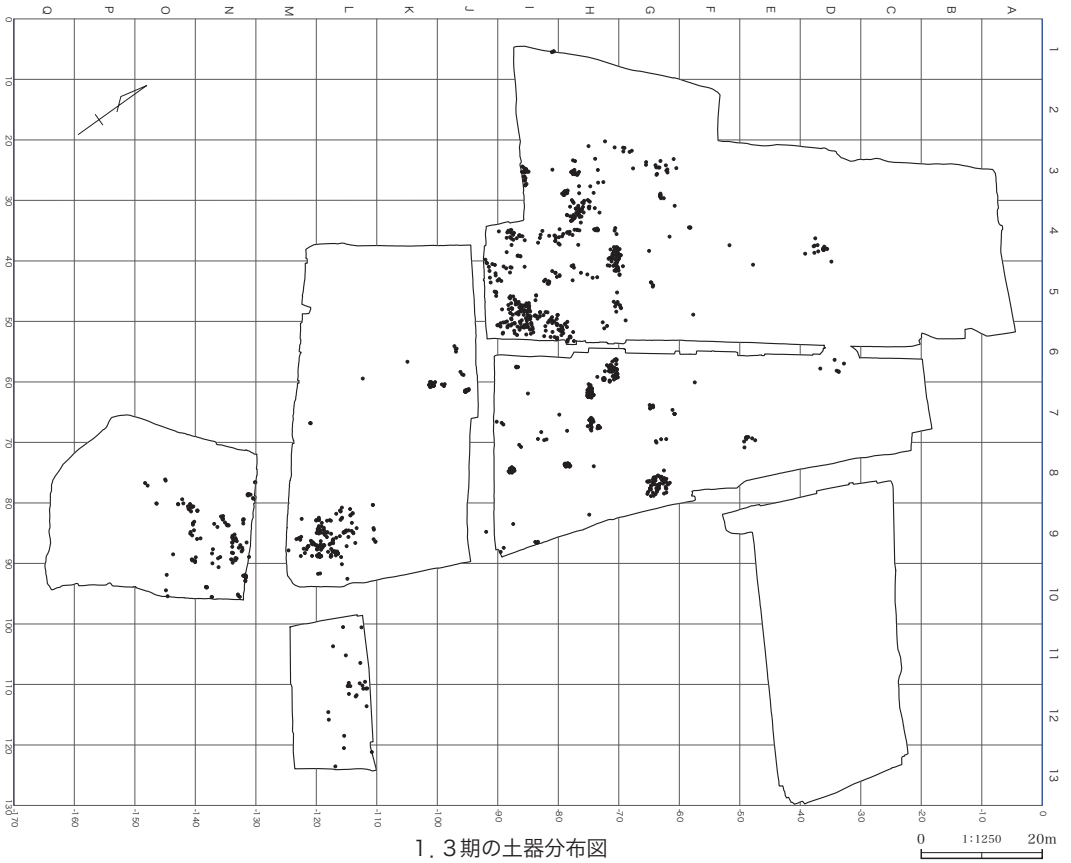


1．1期の土器分布図

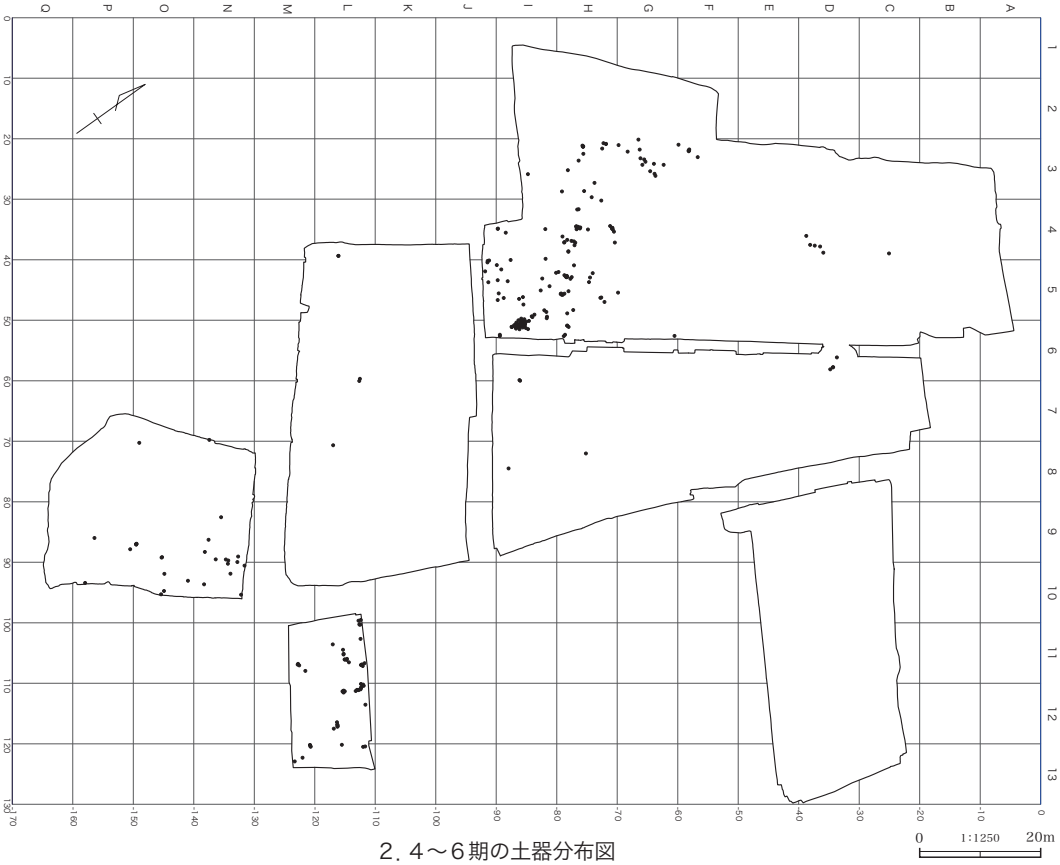


2．2期の土器分布図

第 48 図　遺跡内時期別土器分布図（1）



1. 3期の土器分布図



2. 4～6期の土器分布図

第 49 図　遺跡内時期別土器分布図（2）

第４節　出土遺物

１．土　器

１）出土土器の概要

本遺跡の出土土器は、縄文時代中期中葉から後期中葉にかけての資料期が出土している。土器各説では、遺構出土土器と遺構外出土のいわゆる包含層出土土器に区分し、器形や容量・地文・胎土・色調・スス・コゲなどの諸属性については観察表に記載し、ここでは詳細な説明は行わない。遺構出土土器は、住居跡～環状列石以外の土坑出土土器に関しては一括性の高いものや特殊なものに限定して記述し、その他は省略する。包含層出土土器に関しては、第Ⅳ章第１節での分類の順番に沿って概略的に説明する。

２）属性について

ａ．時　期

出土土器の帰属時期は、第Ⅳ章第１節で示した、土器分類と時期区分に対比し、明瞭なものは時期を記載した。不明瞭なものは、「中期」、「後期」の大別時期とし、もしくは「不明」とした。

ｂ．器種と器形分類

本遺跡出土の土器器種（註 123）については、深鉢･鉢･浅鉢に加えて、有孔鍔付土器、瓢箪形注口土器、有孔小把手土器、両耳壺、注口土器、台付鉢、台形土器、蓋形土器などに区分した。また各器種には器形のバリエーションがあり、器種ごとに分類した。

＜中期の土器群＞

（１）深　鉢（第 50 図）

Ａ類：　胴部に括れを持たず、やや外傾しながら立ち上がるもので、口縁部が直線的なＡ１類（1）とやや内湾するＡ２類がある（2）。

Ｂ類：　胴部に括れを持たず、胴部がやや膨らみをもつもの（3）。

Ｃ類：　胴部が外傾しながら立ち上がり、口縁部がやや外反するもの。胴部に括れを持たないもので、口唇部が肥厚しないＣ１類（4）と肥厚するＣ２類（5）、胴部が膨らむＣ３類（6）がある。

Ｄ類：　胴部が膨らみ、口縁部がやや外反するもの（7）。

Ｅ類：　胴部が膨らみ、頸部が屈曲して口縁部が外反するもの（8）。

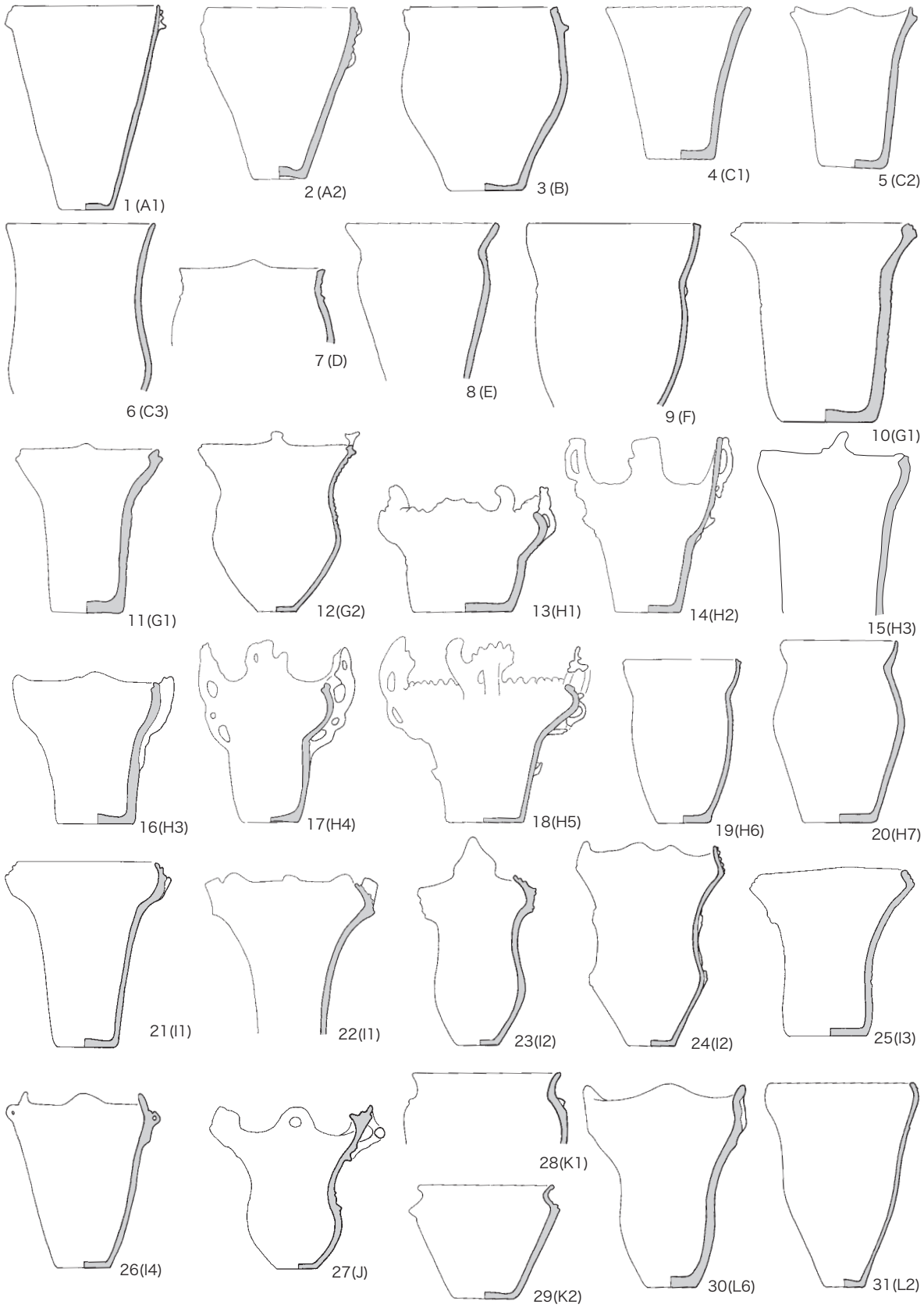
Ｆ類：　胴部が膨らみ、頸部が屈曲して口縁部がやや内湾しながら立ち上がるもの（9）。

Ｇ類：　口縁部が外反して口縁部が内屈するもので、胴部が直線的に立ち上がるＧ１類（10・11）、胴部が直線的に立ちあがるものとやや膨らむＧ２類がある（12）。

Ｈ類：　口縁部が緩やかに内湾してキャリパー形を呈するもので、平口縁と波状口縁がある。胴部がやや外傾しながら直線的に立ち上がり、胴部が短胴のＨ１類（13）、長胴のもので口縁部が緩やかに内湾するＨ２類（14）、やや内湾するＨ３類（15・16）、内湾が強いＨ４類（17）、頸部が強く外傾して内湾するＨ５類（18）。また胴部が膨らむもので、口縁部の内湾が強いＨ６類（19）、内湾が弱いＨ７類（20）がある。

Ⅰ類：　頸部で外傾して口縁部が強く内湾するキャリパー形を呈するもの。平縁で大柄な把手が付属するものが多く、胴部が直線的に立ちあがるⅠ１類（21・22）とやや膨らむⅠ２類（23・24）

＜縄文中期・深鉢＞



第 50 図　堂平遺跡出土の土器器種・器形分類図（1）

がある。さらに、胴部が直線的に立ち上がり、頸部から外傾して口縁部がく字状に屈曲するⅠ３類(25)、胴部がやや膨らみ、口縁部が内湾するなど緩やかな屈曲をもつⅠ４類がある(26)。

J類： 胴部が膨らみ、頸部が括れて口縁部がやや内湾する器形で、波状口縁が多い（27)。

K類： 胴部が膨らみ、口縁部が外反するもので、胴部が長いＫ１類（28）とＫ２類（29）がある。

L類： 胴部がやや膨らみ、口縁部がキャリパー状に内湾するもので平口縁と緩やかな波状口縁がある。屈曲が強いＬ１類（30）とＬ２類（31）がある。

（2）壺形土器：有孔鍔付土器、有溝小把手土器、瓢箪形注口土器など（第51図）

A類： 平縁で、口縁部に貫通孔と鍔がめぐり、胴部が膨らむもので、有孔鍔付土器である（1)。

B類： 平縁で、胴部が膨らみ口縁部が窄まる鉢状の器形を呈するもの。有溝小把手土器である（2)。

C類： 平縁で、胴部が二段に膨らむ瓢箪形を呈し、両側面に梯子状把手を持つ瓢箪形注口土器である（3)。

D類： 平縁で、胴部が膨らみ、二対の把手が付属するもので、両耳壺である（4)。

（3）浅　鉢（第51図）

A類： 口縁部が「く」の字状に内屈するもの（5)。北陸系浅鉢に多い。

B類： 口縁部が内湾して、やや口唇部が肥厚するもの（6)。

C類： 外傾しながら直線的に伸びて、折り返し口縁のもの（7)。

D類： 口縁部がやや内湾するもの。４単位の大柄な突起が付くものがある（8・9)。

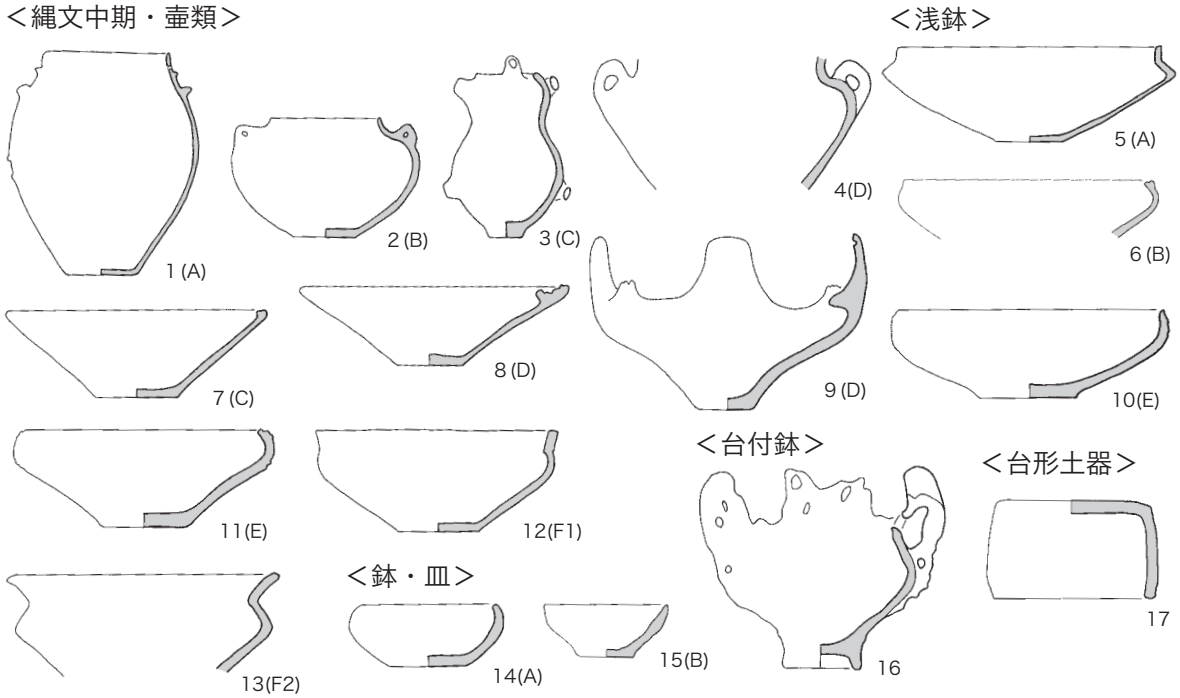
E類： 口縁部がキャリパー状に内湾するもの（10・11)。

F類： 胴部が膨らんで、頸部で「く」の字状に外反する関東系の浅鉢である。口縁部がほぼ直上に立ち上がるＦ１類（12）と、外傾するＦ２類（13）がある。

（4）鉢・皿（第51図）

A類： 鉢形を呈し、口縁部がやや内湾するもの（14)。

B類： 鉢形を呈し、口縁部が直線的に立ち上がるもの（15)。



第51図　堂平遺跡出土の土器器種・器形分類図（2）

（5）台付鉢：(第 51 図 16)。

（6）台形土器：(第 51 図 17)。

（7）釣手土器

＜後期の土器群＞

（1）深　鉢（第 52 図）

A類：　胴部が膨らんで、口縁部が内湾するもの（1）。

B類：　胴部が膨らんで、口縁部が外反するもの。外反が強いＢ１類（2）、外反が緩やかなＢ２類（3）があり、Ｂ１類には内面に蓋受け状の張出部を持つものもある。

C類：　緩やかに胴部が膨らんで、口縁部が外反するもの。屈曲が緩やかなＣ１類（4）とやや屈曲が強いＣ２類（5）がある。

D類：　胴部が緩やかに膨らんで、口縁部が外反するもの。先端部が内屈して文様を施すＤ１類（6）、やや屈曲するＤ２類（7）がある。

E類：　胴部が強く膨らんで、口縁部が外反する比較的短胴のもの。口縁部が内屈して文様を施すＥ１類（8）と、内屈せずに外反するＥ２類（9）がある。

F類：　口縁部が外反して朝顔形を呈するもの（10)。

G類：　口縁部やや内湾するもの（11）で内面に文様を施すものが多い。

（2）浅　鉢（第 52 図）

A類：　口縁部が内屈して、口縁部文様帯を有するもので、注口部を持つもの（12)。

B類：　底部から口縁部にかけて外傾しながら立ち上がり、やや口縁部が外反するもの（13)。

C類：　底部から口縁部にかけて外傾しながら立ち上がり、直線的もしくはやや内湾するもの（14)。

（3）鉢：胴部が膨らんで、口縁部が内湾するもの（15)。

（4）注口土器：完形復元できた資料はなく、細かな器形は不明である（16)。

（5）蓋形土器（第 52 図）

A類：　中央部に摘み状の把手を有するもので、貫通孔をもつものともたないものがある（17・18)。

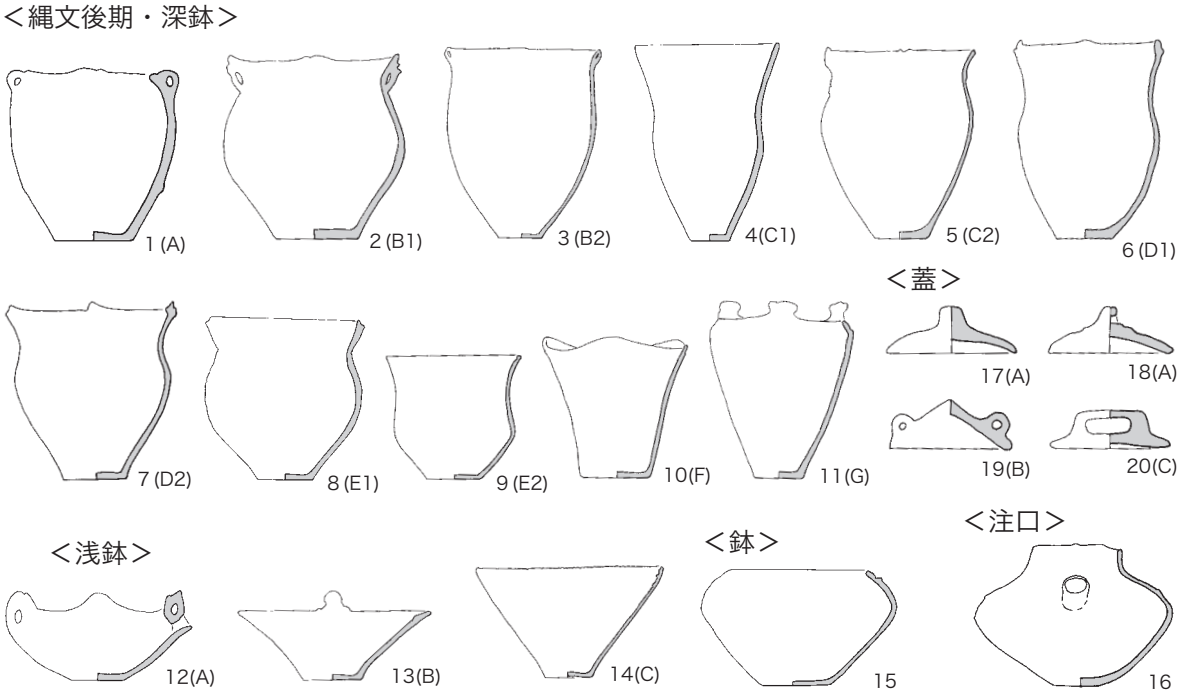
B類：　側面に１対の橋状把手を有するもの（19)。

C類：　大柄な橋状把手が１つ付くもの（20)。

ｃ．土器器種・器形の時期別一覧表（第 13 表）

本遺跡出土土器について、器種ごとの器形分類が出現する時期を一覧表で示した（第 13 表)。時期的なおおまかな傾向を示していると考えられる。

１ａ期は、深鉢D類、Ｇ１・Ｇ２類、Ｈ１・Ｈ６・Ｈ７類が存在し、口縁部がキャリパー状になるものやく字状に屈曲するものが見られる（第 13 表)。壺形はＡ類の有孔鍔付土器がある。浅鉢は、Ａ・Ｂ・Ｃ・D類の各種が存在する。１ｂ期は、深鉢Ｇ１・Ｇ２類、Ｈ１・Ｈ２・Ｈ６・Ｈ７類があり、前段階と同様な傾向を示すと考えられる（第 13 表)。壺形はＡ類の有孔鍔付土器がある。浅鉢は、Ａ・Ｂ・Ｃ・D類の各種が存在する。１ｃ期は、深鉢Ｇ１・Ｇ２類、Ｈ２・Ｈ３・Ｈ４・Ｈ６・Ｈ７類があり、前段階に比べてキャリパー形の口縁部が主体となる傾向を示す（第 13 表)。壺形はＡ類の有孔鍔付土器が存在すると考えられる。浅鉢は、前段階までのＣ・D類に加えてキャリパー形の口縁を持つＥ類や関東系のＦ１・Ｆ２類が出現する。この他に台付鉢も加わる。

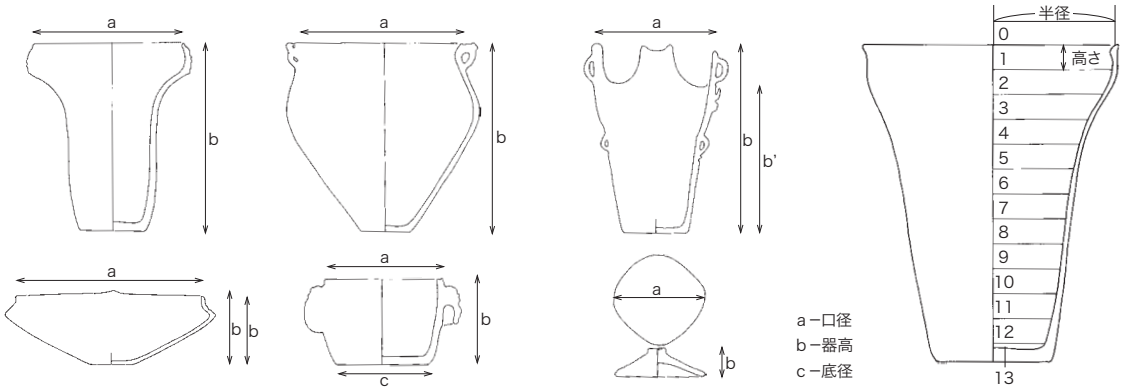


第 52 図　堂平遺跡出土の土器器種・器形分類図（3）

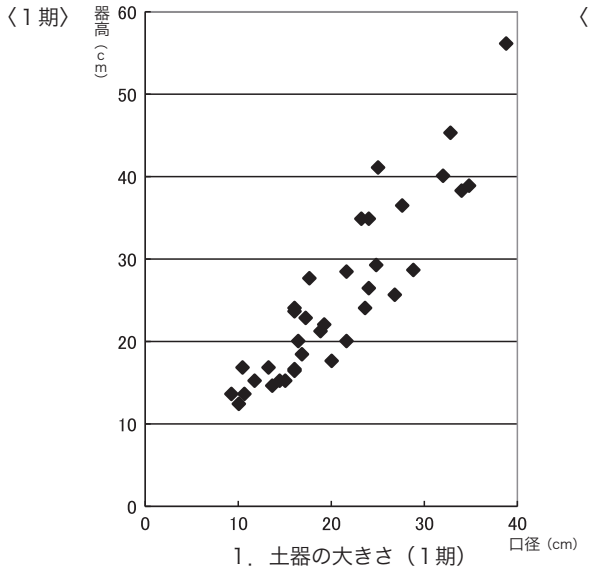
縄文時代中期																																												
時期	深鉢																									壺類				浅鉢							鉢・皿		台付	台形	釣手			
	A1	A2	B	C1	C2	C3	D	E	F	G1	G2	H1	H2	H3	H4	H5	H6	H7	I1	I2	I3	I4	J	K1	K2	L1	L2	A	B	C	D	A	B	C	D	E	F1	F2	A	B					
1a期							○			○	○	○					△	△										○				○	○	○	○										
1b期										○	○	○	○				○	○										○				○	○	○	○										
1c期										○	○		○	○	○		○	○										○						○	○	○	○	○			○				
2a期				○	○	○							○			○			○	○															○	○	○								
2b期				○	○	○													○	○															○										
2c期								○													○	○			○										△						○				
3a期	○	○	○						○														○	○		○			○		○														
3b期	○	○																								○			○	○	○														○

縄文時代後期																					
時期	深鉢											浅鉢			鉢	注口	蓋				
	A	B1	B2	C1	C2	D1	D2	E1	E2	F	G	A	B	C			A	B	C	D	
4a期	○	○	○	○	○							○					○	○	○	○	
4b期		○	○		○							○					○	○	○	○	
5a期						○		○				○			○	○					
5b期						○	○		○	○			○		○	○					
6期										△	○			○		○					

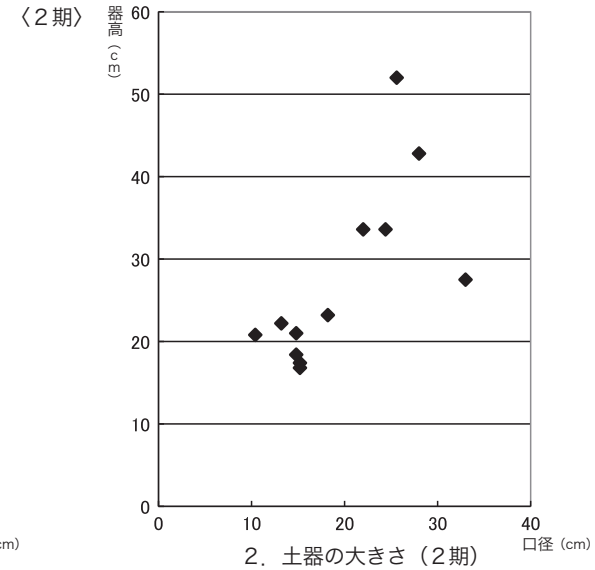
第 13 表　土器器種・器形の時期別変遷表



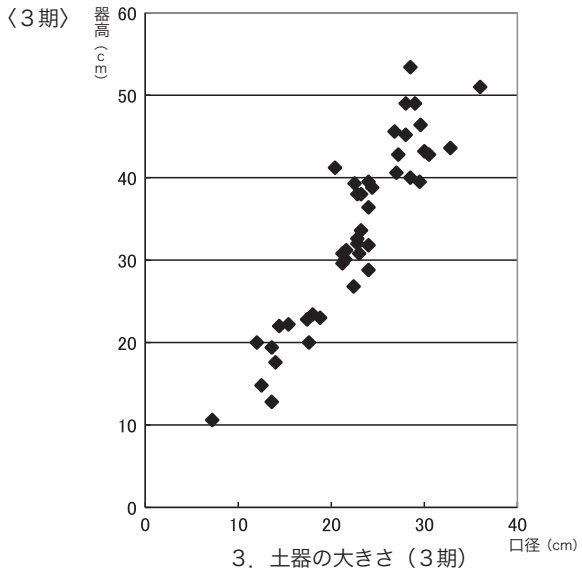
第 53 図　土器の計測部位と容量計測方法



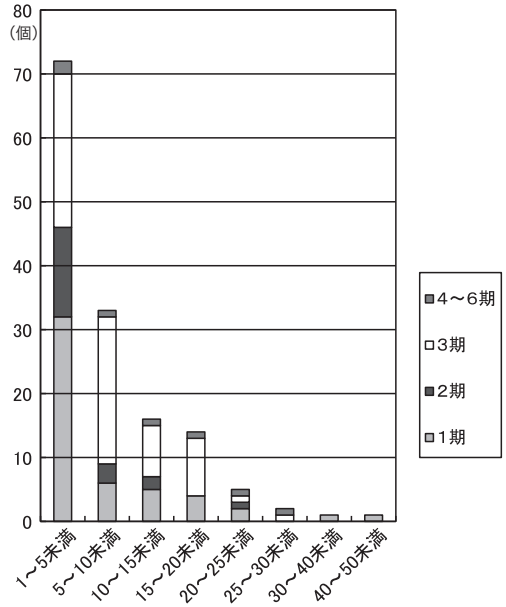
1．土器の大きさ（1期）



2．土器の大きさ（2期）



3．土器の大きさ（3期）



4．土器容量（1～6期）

第 54 図　容量と大きさグラフ

２ａ期は、深鉢Ｈ２・Ｈ５類に加えて、口縁部が外反するＣ１・Ｃ２・Ｃ３類、キャリパー形のＩ１・Ｉ２類が加わる。壺形は、有孔鍔付土器が存在するかどうかは明確ではない。浅鉢は、Ｅ１類にＦ１・Ｆ２類が存在すると考えられる。２ｂ期の深鉢は、口縁部が外反するＣ１・Ｃ２・Ｃ３類、キャリパー形のＩ１・Ｉ２類があり、屈曲がやや強くなる傾向がある。また系統の収斂現象に伴って器形も収斂する傾向を示している。浅鉢はＥ１類が存在する。２ｃ期は、深鉢Ｅ類・Ｉ３・Ｉ４類とＫ２類があり、キャリパー形の器形が緩やかになるものや口縁部がく字状に屈曲するものへと変化する。浅鉢は明確ではないが、Ｅ１類が存在する可能性がある。また台形土器も確認される。

３ａ期は、深鉢はＡ１・Ａ２類が主体となり、これにＢ類、Ｆ類、Ｊ類、Ｋ１・Ｌ１類などの異系統の土器器形が加わる。キャリパー形の口縁部は、特に在地系の土器では無くなり、大木系や加曽利Ｅ式系ではキャリパー形が継続する傾向がある。壺形では有溝小把手土器と両耳壺があり、浅鉢の存在は不明瞭である。３ｂ期は前段階と同様に、深鉢はＡ１・Ａ２類が主体であり、加曽利Ｅ式系のＬ２などがあるが、キャリパー形を呈するものがより減少する傾向を示す。壺形は瓢箪形注口土器と有溝小把手土器、両耳壺がある。これに釣手付の深鉢が伴う。

一方、後期（４期）になると、キャリパー形土器は無くなり、胴部が膨らみ、口縁部が外反する器形が主体的になる。

４ａ期は、深鉢Ａ類、Ｂ１類、Ｂ２類、Ｃ１類、Ｃ２類のように胴部が膨らんで口縁部が外反するものを主体とし、在地の三十稲場式土器の器形Ａ類・Ｂ類は蓋を持つなど特殊である。そのなかでもＡ類はより古く位置づけられると考えられる。浅鉢は、注口付浅鉢Ａ類が存在し、本遺跡では不明瞭であるが、瓢箪形注口土器から変容した注口土器が伴うと考えられる。４ｂ期は、深鉢Ｂ１類・Ｂ２類、Ｃ２類があり、この段階も注口付浅鉢Ａ類が存在すると推測される。

５ａ期の深鉢は、三十稲場式土器の器形が消滅し、Ｄ１類やＥ１類といった口縁部が内屈する器形が主流になる。浅鉢は明瞭ではないが、この段階には注口土器が普及すると考えられる。５ｂ期は、Ｄ２類やＥ２類のように口縁部の屈曲がないものへと変化し、Ｄ１類やＥ１類の屈曲が弱くなって内外面に文様を施すものがある。浅鉢はＢ類のように内面に文様を施すものになる。注口土器も普及すると考えられる。

６期は、深鉢Ｇ類が主体となり、前段階までのＦ類も残存する可能性がある。これに浅鉢Ｃ類、注口土器などが加わる。

ｄ．土器の大きさ・容量計測と時期別の傾向

本報告では、土器の大きさは第 53 図のような基準で行い、完形もしくは図上で容量が推定可能なものを対象とした。容量に関しては、道尻手遺跡と同様な計算式をもとに算出した（註 124）。計測可能な資料はほぼ全てが縄文中期の１期～３期に帰属し、縄文後期４期～６期は、計測可能な完形土器はほとんど無かったので傾向は不明である。これらのデータをもとに１期～３期の時期別の変化を概観する。

１期は、器高 12cm ～ 30cm、口径 10cm ～ 28cm の範囲にまとまる傾向があり、それよりも大形のものも存在する（第 54 図１）。容量は、１ℓ ～５ℓ の資料が大半を占め、次第に容量が大きくなるにつれて減少する（第 54 図４）。２期は、計測可能な資料が少なく、器高 20cm 前後、口径 10cm ～ 15cm の範囲に一つのまとまりが見られる（第 54 図２）。容量は、１ℓ ～５ℓ のものが最も多い。３期は、器高 15cm ～ 50cm、口径 12cm ～ 32cm の範囲に広がり、３つほどの大きさのまとまりが認められる（第

54図3)。1期や2期に比べて、大形の深鉢が増加する傾向にあり、容量も同様に1ℓ～10ℓの範囲にまとまり、10ℓ～20ℓの土器も一定量確認される。

ｅ．文様と縄文原体

文様は、特徴的なものについて記載し、基本的に従来までの名称を踏襲し、適宜、適当な説明を記載した。また縄文原体は、ＲＬ・ＬＲなどを表記し、風化などにより不明瞭なものは「不明」と記載した。

ｆ．胎土および色調

胎土中に含まれる主な含有物は、①砂粒、②小礫（2mm以上)、③雲母、④石英、⑤粘土粒（赤色･橙色･白色)、⑥その他、がある。さらに、道尻手遺跡（註125）で確認されたように、明らかに土器片を混入する資料が確認される。また胎土中に白色粒子を多量に含み、風化して軽く脆い胎土も特徴的に見られる。例えば、1・2期は砂粒を主体とするのに対して、3期になると在地土器には砂粒ではなく小礫を含むようになる。4期～5期にかけては多量に砂粒を含むようになるなど、時期や系統によって胎土の特徴や変化が見られる。

一方、胎土の色調は、炭化物の付着や風化などにより部位ごとに色調が異なる場合があり、実際の色調を示すと考えられる部分を観察して記載した。また色調は、『新版標準土色帖』（註126）に基づく。

ｇ．スス・コゲについて

主に、器面の内外面に残る炭化物（スス・コゲ）の有無についてのみ記載した。これらは煮沸による使用痕跡であると推定される。詳細については、小林正史氏による分析（註127）があるが、本報告では時間の都合上詳細な分析を行っていない。

ｈ．その他

その他の属性に関しては、備考に特筆する。例えば、底部圧痕については、①網代圧痕文、②簾状圧痕文、③葉脈状の圧痕文などが確認される。本遺跡の一部の資料に関して、松永氏が分析報告を行っている（付編参照)。また器面塗布の赤色顔料については、ほとんどが肉眼観察ではベンガラであると推定されるが、「赤彩」と記載するにとどめる。また粘土帯の幅が明瞭なものは、一部であるが備考に記載した。補修孔については、時期によらず確認されており、これも備考欄に記載した。土器の接合関係については、土器図版完成後に接合したものについては、接合する土器の遺物番号を記載し、同一個体と推定できるものについて、「同一個体」と記載した。さらに、土器器面に認められる焼成時の破裂痕や二次焼成による脆弱化、なども備考欄に記載する。

3）出土土器各説

本遺跡の出土土器については、観察表に各属性に関する所見を記載して省略し、本文では詳述しない。ここでは竪穴住居跡から環状列石出土土器と土坑では一括性の高い資料や特筆すべき資料を中心に概説したい。

ａ．遺構出土土器（図版第174図～第369図）

（1）竪穴住居跡出土土器（図版第174図～第258図）

第1号住居跡出土土器（図版第174図1～23)：本住居跡からは、1期から3ａ期を中心に破片資料が出土している。多くは、2ｃ期に帰属するもので、2～8のような栃倉式に比定される破片資料が見られる。

9～14のように胴部に条線文を施すものも２ｃ期に伴うと考えられる。

第２号住居跡出土土器（図版第174図24～26）：本住居跡からの出土資料は僅かで、時期的なまとまりも認められない。24は炉内出土の無文の土器片であり、25は１期の焼町類型、26は２ｂ期の資料である。

第３号住居跡出土土器（図版第174図27～第175図54）：本住居跡からは、１期～２ｂ期の破片資料が出土している。30～38は半隆起線文を施す１期の土器群である。39～52は２ａ期から２ｂ期の資料で、地文縄文に平行沈線文を施すもの（40～45）や胴部懸垂文間に矢羽根状沈線文を充填するもの（48～52）などがある。53・54は縄文のみの資料であり、54は底部に網代圧痕文が見られる。

第４号住居跡出土土器（図版第176図55～61）：本住居跡からは、１期の資料が少量ながら出土しており、半隆起線文の土器片や完形復元できた資料61などがある。

第５号住居跡出土土器（図版第176図62～76）：本住居跡からは、１期の資料が少量出土している。62は口縁部に文様帯を有し、環状突起や三角形状の突起を有する。胴部は地文縄文のみとなる。63は口縁部に圧痕隆帯がめぐり、65は胴部に大柄な渦巻状懸垂文を施す。66～75は半隆起線文を施す資料であり、69は口縁部が無文部になる。

第６号住居跡出土土器（図版第177図77～87）：本住居跡からは、１期の資料が僅かに出土している。ほとんどが小破片で、胴部に縦位の懸垂文が垂下する資料（77・78）、胴部に平行沈線文を描く資料（80）、半隆起線文の資料（81～86）、などがある。

第７号住居跡出土土器（図版第177図88～90）：本住居跡からは、１期の資料が僅かに出土している。いずれも半隆起線文の土器で、88は口縁部に基隆帯と半隆起線文により渦巻文を描き、胴部区画内に刺突文を充填する。

第８号住居跡出土土器（図版第177図91～第178図113）：本住居跡からは、１期の資料が少量出土している。これらは、地文縄文に平行沈線により懸垂文を描く資料（91～94）、基隆帯・半隆起線文によって文様を施す資料（95～104・106～108）、などがある。112は口唇部に圧痕を施す粗製土器で、113は北陸系浅鉢の胴部資料であると考えられる。

第９号住居跡出土土器（図版第178図114～第183図179）：本住居跡からは、１ａ期の資料がまとまって出土している。114～119は大木８ａ式土器で、口縁部の圧痕隆帯や蛇行沈線文など大木７ｂ式的要素を残している。122～167は基隆帯や半隆起線文の土器群で、焼町類型的な資料（122～150）、蓮華文を描く資料（153～161）、火焔型土器や王冠型土器（163～167）である。特に128は口縁部に、鶏頭冠状把手に類似する４単位の弧状把手が付属し、その間に鋸歯状突起がめぐっている。本資料の突起頂部や内面に有節沈線がめぐるなど火焔型土器のそれとは異なる。163は古手の火焔型土器の胴部資料で、鉢形を呈すると考えられる。また164～167はやや新しい様相を呈している。168～173は２ｂ期～２ｃ期の資料であり、胴部懸垂文間に矢羽根状沈線文が充填される。この他に、177は口縁部に縄文側面圧痕文を施す東北系の浅鉢である。

第10号住居跡出土土器（図版第183図180～第185図225）：本住居跡からは、１期の資料を中心として後期前半期（4期･5期）の資料が出土するなど出土資料の時期幅が広い。182～190は大木８ａ式土器で、比較的新しい様相を呈している。191～201は基隆帯・半隆起線文による一群で、199・200は王冠型

土器である。203 ～ 213 は２ａ期～２ｃ期の資料である。214 ～ 218 は４期の三十稲場式土器で、橋状把手や花弁状刺突文などが見られる。219 ～ 224 は５期の南三十稲場式土器である。

第 11 号住居跡出土土器（図版第 185 図 226 ～第 189 図 275）：本住居跡からは、石組炉内出土土器を中心として１ｃ期の資料がまとまる良好な一括資料である。226 ～ 245 は１ｃ期の資料で、口縁部に波状沈線文がめぐる一群（227・228・236・241・242）や地文に撚糸文を施すもの（232 ～ 234・236 ～ 243）、などがある。235 は口縁部に交互刺突文や平行沈線文による横Ｓ字文がめぐり、４単位の環状貼付文が付される。244 は口縁部に未調整隆帯による曲線的文様を描くものの、胴部上端の横帯区画内に波状文を施し、245 は口縁部区画内に沈線文を充填するなど大木８ｂ式的要素が認められる。246 ～ 256 は２ａ期から２ｂ期の資料で、248 は口縁部の無文帯に環状やＣ字状の隆帯を組み合わせた中空把手が付される。256 は浅鉢で口縁部に隆帯文がめぐる。257 ～ 269 は１期の基隆帯・半隆起線文の土器で、そのうち火焔型土器（268）や王冠型土器（269）は、隆帯上に刻目が見られず、胴部がやや寸胴気味である。270 は本遺跡でも珍しい勝坂式土器で、抽象文？が認められる。272 は半隆起線文間に有節沈線を施すものである。275 は口唇部に沈線がめぐる北陸系の浅鉢である。

第 12 号住居跡出土土器（図版第 189 図 276 ～ 284）：本住居跡からは、１期から２期の資料が僅かに出土しており、時期的なまとまりは認められない。276・277 は２期の資料で、279 ～ 284 は１期の焼町類型である。

第 13 Ｂ号住居跡出土土器（図版第 190 図 285 ～ 303）：本住居跡からは、１期の資料が少量出土している。285 ～ 290 は大木８ａ式土器で、285 は口縁部に圧痕隆帯がめぐることから１ａ期、287 ～ 290 は地文に撚糸文を施すことから１ｃ期のものと考えられる。291 ～ 301 は焼町類型で、そのなかでも 292 は無文部を多く残す資料で、比較的古手であると考えられる。

第 13 Ｃ号住居跡出土土器（図版第 191 図 304 ～ 315）：本住居跡からは、１期の資料が少量出土している。304 ～ 308・310 は大木８ａ式土器で、平行沈線により文様が描かれる。309 は口縁部文様帯に橋状把手が付属し、区画内には有節沈線文が施される。311 ～ 315 は半隆起線文による文様が描かれる一群である。

第 13 Ｄ号住居跡出土土器（図版第 191 図 316 ～第 192 図 341）：本住居跡からは、１ａ期の資料が比較的まとまって出土している。316 ～ 320 は大木８ａ式土器であるが、胴部のＹ字状懸垂文や口縁部の楕円区画文、圧痕隆帯など前段階の特色を残している。322・323・325 ～ 330 は焼町類型で、基隆帯や半隆起線文で装飾される。この他、口縁部に隆帯が巡るもの（333・334）や地文だけの胴部から底部資料（336 ～ 341）が出土している。

第 15 号住居跡出土土器（図版第 193 図 342 ～ 353）：本住居跡からは、３ａ～３ｂ期の資料が比較的まとまって出土している。342 は複式炉の炉体土器で、深鉢の胴部上半部が逆位で埋設されていたものである。口縁部に隆帯が１本めぐり、そこから２本の渦巻状懸垂文が対照的に垂下している。343 ～ 347 は口縁部に１本の隆帯区画がめぐり、そこから有尾渦巻文や棒状懸垂文が垂下し、懸垂文間に１本か。２本１組で入組コ字文を描く一群で、沈線文に刺突文が伴うものが多い。348・349 は３ａ期の資料で、350・351 は横ハ字文の一群でやや新しいものと理解される。352・353 は加曽利ＥⅢ式の破片資料である。

第 17 号住居跡出土土器（図版第 194 図 354 ～ 373）：本住居跡からは、1 期～ 2 期の資料が出土しているが、時期的なまとまりは認められない。354 ～ 356・369・370・373 は大木式系土器で、354・369・370 は 1 期、355・356・373 は 2 期、の資料である。360 ～ 366・371・372 は、基隆帯・半隆起線文により渦巻文などを描く一群である。367 は 2 c 期で、口縁部横位の沈線区画に刺突列がめぐり、4 単位の渦巻状突起が付される。

第 18 号住居跡出土土器（図版第 195 図 374 ～第 196 図 415）：本住居跡からは、2 c 期の資料が比較的まとまって出土している。374 は複式炉の炉体土器で、胴部下半が正位で埋設されていた。表面が炉内での燃焼のためか脆弱になっている。375 は床面上から台部と脚部が 2.6 m離れて出土している。台部は中央部以外に黒色付着物が認められる。376 ～ 386・397 ～ 402 は 2 c 期の栃倉式に比定され、特に 379 は大形破片で、胴部に双頭渦巻文が垂下し、間に乗線文を充填する。397 ～ 400 は、胴部に刺突文を充填するもので、栃倉式に伴うものである。388 ～ 396 は 2 a ～ 2 b 期の資料でやや時期差が認められる。このほか僅かに 1 期や 3 a 期の資料がある。

第 19 A・B 号住居跡出土土器（図版第 197 図 416 ～ 437）：本住居跡からは、1 期～ 2 期の資料が少量出土している。416 ～ 424 は、基隆帯・半隆起線文により装飾する一群で、418 は胴部に大木 8 a 式土器の文様が施される。425 ～ 433 は 2 期の大木 8 b 式土器で、429 は剣先状・C 字状などの隆帯で作出される中空把手である。434 は北陸系の浅鉢で、435 ～ 437 は後期初頭の資料で、435 は三十稲場式土器の胴部片である。

第 20 A 号住居跡出土土器（図版第 198 図 438 ～ 441）：1 期～ 2 期の資料が少量出土している。特に 441 は長方形石組炉の近くから出土した遺存率の高い土器で、2 a 期に比定される。本資料は、口縁部に 1 単位の三角形状の中空把手を有し、口縁部の隆帯文に連結する。胴部は平行沈線文により縦位懸垂文に大柄な渦巻文が付加される。

第 20 C 号住居跡出土土器（図版第 198 図 442 ～第 199 図 460）：本住居跡からは、2 b 期～ 2 c 期を主体として、3 b 期までの資料が出土している。442 ～ 447 は胴部懸垂文間に矢羽根状沈線文を施すもので、448 は胴部に 3 単位の双頭渦巻文を施す。450・451・452 は 2 c 期の資料で、452 は半截竹管状工具により刺突文を全面に施す。449 は火焔型土器の口縁部で、鋸歯状突起や袋状突起を有する。453 ～ 455 は 3 b 期の資料で、口縁部に弧状隆帯が施される。457 ～ 459 は地文のみの粗製土器で、460 は無文の浅鉢である。

第 21 号住居跡出土土器（図版第 200 図 461 ～第 201 図 500）：本住居跡からは、2 期～ 5 期の資料が出土しており、時期的なまとまりは認められない。463 ～ 474 はほぼ 2 c 期に比定され、双頭渦巻文や眼鏡状突起などが付される。463 は、双頭渦巻文の間に斜行する幅広の沈線文が充填される。468 は胴部に横位と縦位に平行沈線で区画し、その間にペン先状の刺突列を加える。475 ～ 479 は 3 a 期で、口縁部に刻目隆帯がめぐる。480 ～ 489 は 3 b 期の資料で、口縁部に横位の隆帯区画がめぐり、懸垂文間に入組コ字文などが描かれる。この他、王冠型土器や火焔型土器（490・491）、後期初頭～前葉の破片資料（492 ～ 494・496・497）、地文のみの粗製土器（495・498 ～ 500）がある。

第 23 号住居跡出土土器（図版第 202 図 501 ～第 205 図 556）：本住居跡からは、3 a 期を主体として 2 a

期～５期の破片資料も出土している。501 ～ 509 は、口縁部に渦巻文が付く横位の刻目隆帯などがめぐる一群であり、503 や 509 ではハ字状の懸垂文が渦巻文より垂下する。508 は口縁部が二重口縁になるものでやや沖ノ原式とは異なる。510 ～ 517 は口縁部に横位楕円文や乙字状文などを施す一群で、沈線内もしくは沈線間に刺突列を施す。518 ～ 520・526 は、口縁部に隆沈線による渦巻懸垂文とその間に乙字状文などを施す。胴部には、縦位懸垂文を描き、胴部区画が明確なもの。518 と 526 は同一個体の可能性がある。522・523 は、口縁部横位の隆帯区画がめぐり、棒状懸垂文や有尾渦巻文が垂下する。527 ～ 531 は、横ハ字文を区画内に充填する一群である。532 ～ 537 は、３ａ期に伴う一群で、口縁部を横位に区画して、胴部にU字状や逆U字状などの沈線文を描く。538･539 は大木９式古段階の土器で、540 ～ 545 は加曽利ＥⅢ式、546 は雨垂れ状の刺突文を施す。547 ～ 552 は後期前葉の資料で、553 は蓋形土器である。

第 25 号住居跡出土土器（図版第 205 図 557 ～ 577）：本住居跡からは、１期～３ａ期の資料が少量出土しており、まとまりが見られない。557 ～ 561 は基隆帯･半隆起線文により曲線的な文様を描く一群である。562 ～ 572 は大木８ｂ式土器もしくは栃倉式土器で、矢羽根状沈線文を充填するものや胴部全面に刺突文を施すものがある。574 ～ 576 は口縁部を横位に沈線と刺突列で区画する点で共通し、胴部に５本や８本単位の条線文を施すものや縄文地に懸垂文を描くものがある。577 は両耳壺の胴部と推定される。

第 26 号住居跡出土土器（図版第 206 図 578 ～ 588）：本住居跡からは、１期～３ｂ期の資料が少量出土しており、まとまりは見られない。578・579 は基隆帯・半隆起線文により渦巻文を描く一群である。580 はＸ字状の把手を持ち、581 は胴部の縦位半隆起線文に双頭渦巻文が懸垂し、環状貼付文が付される。582 は弧状区画内に横ハ字文が充填されるもので、583 ～ 585 は加曽利ＥⅣ式土器である。586・587 は口縁部に横位の隆帯区画を有するもので、587 はやや外反することから４期に位置付けられる。588 は三十稲場式で、橋状把手と胴部に花弁状刺突文が施される。

第 27 号住居跡出土土器（図版第 207 図 589 ～ 606）：本住居跡からは、１期～３ｂ期の資料が少量出土しており、やや３ｂ期でまとまる。598 ～ 606 は３ｂ期の沖ノ原Ⅱ式に比定され、599 は口縁部にめぐる横位の隆帯区画から棒状懸垂文や有尾渦巻文が垂下し、入組コ字文を描く。また側面からの加熱によるスス酸化（註 128）が認められる。604 ～ 606 は口縁部に１本の隆帯区画がめぐり、胴部に縄文を施すものや無文になるものがある。

第 28 号住居跡出土土器（図版第 208 図 607 ～第 209 図 643）：本住居跡からは、１期～５期の資料が出土しており、時期的なまとまりは認められない。609 ～ 616 は１期の基隆帯や半隆起線文の一群であり、611 のような３段の環状把手を持つ土器も見られる。617 ～ 623 は２期の資料で、624 ～ 628 は３ａ期の沖ノ原Ⅰ式土器、629 ～ 632 は沖ノ原Ⅱ式土器である。この他にも後期の三十稲場式土器（634）や南三十稲場式土器（635 ～ 643）が出土している。

第 29 号住居跡出土土器（図版第 210 図 644 ～ 664）：本住居跡からは、１期～５期の資料が出土しており、時期的なまとまりは見られない。しかし、炉内を中心に三十稲場式土器（644・647 ～ 651・653）や南三十稲場式土器（654 ～ 659）が出土している。この他に、P3 では 662 や 664 など２ｃ期の資料がまとまる。

第30号住居跡出土土器（図版第211図665～第213図707）：本住居跡からは、１ｃ期の資料が比較的まとまっ

て出土している。665・678・684は長方形石組炉内に敷かれていた土器で、665と678は大木８ａ式新段階の土器で、口縁部上端と頸部に横位の交互刺突文がめぐる点で共通している。665は平行沈線による波状文がめぐり、678は胴部に縦位の懸垂文をもつ。また666～674も、同じ時期の資料と考えられ、横位の交互刺突文や有節沈線文、対弧状の沈線文が見られる。675～677・679・680は基隆帯と半隆起線文の一群で、676など三段の環状把手を有するものが目立つ。681～685は、火焔型・王冠型土器などで、681～683は基隆帯上に刻目を施す。684は鶏頭冠や王冠などを持たず袋状突起を４単位配する土器で、口縁部には横位の半隆起線文などで装飾するのが特色である。また覆土からは、２ｂ期～５期の資料も多く出土しており（686～707)、特に５期の土器はＰ17に伴う可能性がある。

第31号住居跡出土土器（図版第214図708～第215図757)：本住居跡からは、２ｂ期～３ａ期の資料が比較的まとまって出土している。708は炉体土器で胴部のみであるが、類例がない。胴部には弧状隆帯とワラビ手状懸垂文が垂下し、縄文ＲＬが充填される。712・719・720は２ｂ期の資料で、区画内に矢羽根状沈線文が充填される。713～718・721～726は２ｃ期の栃倉式で、隆帯間の斜位・横位の沈線文が充填されるものや渦巻状の懸垂文が垂下する。727・728は口縁部に二段の渦巻文を有し、３ａ期のものと考えられる。729～731は２ｃ期の刺突文土器であり、733～739は縄文のみや条線文を施す粗製的土器である。この他に、１期～５期の資料も散見される。752は関東系の浅鉢である。

第32号住居跡出土土器（図版第216図758～第218図790)：758と759は床面入口部に合口で埋設された２個体である。758は完形の沖ノ原Ⅱ式土器で、口縁部に１本の隆帯がめぐって瘤状突起と背割り状の沈線が交互に施される。隆帯からは有尾渦巻状懸垂文が垂下し、その下部に縦位の懸垂文が垂れる。胴部上半の懸垂文間には三本一組の沈線により入組みコ字文を描く。759は加曽利Ｅ式系の深鉢で、胴部上半に微隆起線により大柄な渦巻文を描き、胴部下半部には微隆起線により逆Ｕ字状文を施す。加曽利ＥⅣ式古段階に比定されると考えられる。760は複式炉の炉体土器に使用された土器で胴部に撚糸Ｌを施す。この他に、覆土から沖ノ原Ⅰ式からⅡ式の破片資料（762～773）や加曽利ＥⅣ式土器（774～784）とともに口縁部に１本の隆帯がめぐるのみのもの（785～788）と口唇部が内屈する縄文のみの粗製的深鉢（789)、瓢箪形注口土器の破片（790）などが出土している。

第33号住居跡出土土器（図版第219図791～810)：覆土からは、１期～３ａ期の破片資料が出土しており、時期的なまとまりは認められない。791～801は大木８ｂ式土器で、791は口縁部文様帯に地文ＲＬ上に剣先状隆帯文が付される。801は口縁部に横位の縄文側面圧痕を施す稀な事例である。802～804は火焔型土器と王冠型土器の破片資料である。806～810は沖ノ原Ⅰ式、Ⅱ式土器である。

第34号住居跡出土土器（図版第219図811～814)：覆土からは、破片資料が僅かに出土しているが、時期が明確な資料は少ない。814は条線文の土器で、条線は５本１組で縦位に施される。

第36号住居跡出土土器（図版第220図815)：覆土から、破片資料が僅かに出土しており、時期が明確な資料は少ない。815は底部のみの破片資料で、底部には網代圧痕文が残る。

第37号住居跡出土土器(図版第220図816～839)：覆土からは、１ａ期～３ａ期の破片資料が出土しており、時期的には２ｃ期～３ａ期でまとまる傾向がある。837は、Ｐ８出土の底部を欠損する良好な土器であり、口縁部の文様帯には横展開の剣先状隆帯文がめぐり渦巻状突起が付される。その間には矢羽根状などの

沈線文が充填される。胴部は横位と縦位に平行沈線によって区画し、間に鍵の手状の懸垂文を描く。

第 38 号住居跡出土土器（図版第 221 図 840 ～第 225 図 899）：長方形住居跡の一箇所にまとまって３ａ期の土器がまとまって出土している。840 ～ 874 は沖ノ原Ⅰ式で、口縁部に２本から３本の刻目隆帯がめぐり渦巻状懸垂文が付属するもの（840 ～ 852）や口縁部に横位の楕円文や乙字文・横位沈線文を描いて刺突文を施す一群（853 ～ 859・862）、また口縁部の横線文に渦巻状懸垂文が付属して胴部下半を明確に区画する一群（861･863 ～ 871）、栃倉式に比定される一群（876 ～ 883）、大木９式古段階の土器群（884 ～ 886）、加曽利ＥⅢ式（887 ～ 892）、曽利Ⅲ式（893）、瓢箪形系の注口土器（899）、など複数の系統の土器が出土している。これらはすべて同時期とは言いえないが、３ａ期の共伴関係について検討が必要である。これとともに僅かに１期の半隆起線文の土器片や浅鉢片も見られる（896 ～ 898）。

第 39 号住居跡出土土器（図版第 226 図 900 ～ 911）：900 は炉体土器で、覆土からは沖ノ原Ⅰ式・Ⅱ式の破片資料が出土している（901 ～ 911）。900 は口縁部を欠損して一部に隆帯が残る。901 は沈線で横位の沈線文や渦巻文を描くやや変容した土器で、902・903 は口縁部に１本の隆帯が横位にめぐって渦巻状懸垂文が垂下し間に、コ字や乙字状の沈線文を描く一群である。904 や 907 は、口縁部に一本の隆帯が横位にめぐり、有尾渦巻文が垂下する一群で、間に乙字文や入組コ字文を描き、沈線内に刺突文を施す。909 は、胴部に二本一組の縦位懸垂文を描くもので、910 は口縁部に横線文を施して胴部は無文になる。

第 42 号住居跡出土土器（図版第 227 図 912 ～第 228 図 928）：912 と 913 は炉内に敷かれた土器で、いずれも底部を欠損する大形の深鉢である。912 は基隆帯と半隆起線文で曲線文を描き、４単位の３段環状把手を有するものである。913 は対照的に地文のみの粗製的な土器である。914 ～ 916・919 ～ 925 は１期の半隆起線文の一群、924 は台付鉢で胎土は非常に脆い。918 は大木８ａ式の胴部破片、928 は浅鉢の口縁部である。

第 43 号住居跡出土土器（図版第 229 図 929 ～第 235 図 1006）：929 ～ 944 は大木８ａ式土器で、中段階から新段階まで時期幅が見られる。929 と 932 は口縁部文様帯が狭く、口縁部の圧痕隆帯や頸部対弧状文など古い要素が見られる。933・935 ～ 937 は有節沈線文や交互刺突文などが特徴的で、935 は横Ｓ字状把手を有する。939 ～ 943 は地文縄文に平行沈線や単沈線でクランク状文などを施す。943 ～ 944 は地文に撚糸文を施す一群で、938 は口縁部に横Ｓ字状把手と橋状把手が巡らされ、頸部には平行沈線による波状文、胴部は下半部が横位に区画されて、上半部に端部が渦を巻いて閉じるクランク文が描かれる。945 ～ 968 は半隆起線文による焼町類型で、環状突起や眼鏡状突起や玉抱三叉文が特徴的に施される。969 ～ 974 は火焔型土器で、975・976 は王冠型土器である。全体的に、基隆帯に刻目を施すものが多く、970 は寸胴形で口縁部と胴部の括れは少ない。976 は刻目を持たないが、寸胴形の王冠型土器である。979 ～ 992 は大木８ｂ式土器で、983 は口縁部の橋状把手を境に左右で文様が大きく異なる。993 ～ 1001 は地文縄文のみの土器群で、996 は口縁の無文部が肥厚して磨かれる２期に伴う特徴的な土器である。999 ～ 1001 は底部に網代圧痕文が見られ、1000 は片側に粘土を貼り付けている。1002 は口縁部に圧痕隆帯がめぐる無文の土器で、1003 は台付土器の台部、1005 は北陸系浅鉢の口縁部で内面に黒色付着物が見られる。1006 は大木系の浅鉢で、４単位の大波状口縁と波底部に三又の小突起が付される。全体的に１期を主体とするが古段階から新段階まで時期幅が認められる。

第 45 号住居跡出土土器（図版第 236 図 1007 ～第 243 図 1076）：1007 ～ 1029 は大木８ａ式土器で、口縁部や頸部の波状文などの特徴から新段階でまとまると考えられる。地文は 1007 や 1014 が撚糸文であるが、他は縄文ＲＬ・ＬＲである。沈線文は、平行沈線によるものが多いが、1007・1008・1013・1014・1015 など単沈線のものも見られる。1020 は口縁部に眼鏡状の突起と未調製隆帯による隆帯文が描かれ、器形からも大木８ｂ式的要素が強い。1030 ～ 1039 は、半隆起線文の一群で、1030 や 1032・1037 など４単位の三段環状把手を有するものが目立つ。1039ａ～ 1039ｉは爪形文を施す懸垂文や胴部の縦位爪形文など類例のない特徴的な土器である。1040 から 2046 は王冠型土器、1047・1048 は４単位の袋状突起を持つ無冠型である。1040 は把手を欠損するが、基隆帯に刻目を有し、寸胴形の胴部である。1041 ～ 1045 は王冠型土器の把手で、懸垂文や橋状把手・袋状突起などの付き方は多様である。1047・1048 ともに口縁部の袋状突起間に横位の半隆起線文を施す点で共通しているが、1047 は交互刺突文を多用するなどの違いがある。口縁部の袋状突起と胴部の縦位懸垂文は、1047 が一致しているのに対して、1048 は 90 度ずれる。1054 は台付鉢の台部で、蓮華文が施される。1055 は口縁部に未調整隆帯による隆帯文が描かれ、やや厚手であることから浅鉢の可能性がある。1056 ～ 1068 は大木８ｂ式土器で、1066 ～ 1068 は胴部懸垂文間に矢羽根状沈線文を充填する。1069 ～ 1074 は粗製土器で、キャリパー形の深鉢が多い。1075・1076 は浅鉢と鉢状の土器である。全体として、２期の資料も混じるものの、１ｃ期でまとまる良好な遺構出土資料である。

第 47 号住居跡出土土器（図版第 243 図 1077 ～ 1084）：覆土やＰ１・Ｐ２より１～２期の破片資料が僅かに出土しているが、時期的なまとまりは認められない。

第 48 号住居跡出土土器（図版第 244 図 1085 ～ 1101）：覆土などから２ｂ期から３ａ期の資料が少量出土している。1086 は栃倉式土器である。1090 はこれに伴う粗製土器で口縁部に横位に刺突列がめぐり、胴部に６～８本単位の条線文が施される。1091 は沖ノ原Ⅰ式土器と考えられるが、栃倉式的要素も窺われる。1092・1093 は沖ノ原Ⅰ式～Ⅱ式土器、1094 は大木９式古段階の土器、1095・1096 は沖ノ原Ⅰ式に伴う粗製的土器の胴部資料である。この他 1097・1099 ～ 1101 など１期の破片資料も確認される。

第 49 号住居跡出土土器（図版第 245 図 1102 ～ 1106）：覆土やＰ４より１～２期の破片資料が僅かに出土しているが、時期的なまとまりは認められない。

第 50 号住居跡出土土器（図版第 245 図 1107 ～第 250 図 1157）：本住居跡からは、炉内をはじめ床面から覆土にかけて、３ａ期の資料がまとまって出土している。1107 は炉内に敷かれていた土器で、唐草文系土器に類似する。1108 ～ 1120 は沖ノ原Ⅰ式土器で、口縁部に渦巻文と１～３本の刻目隆帯がめぐるもの (1108・1109・1116)、渦巻文と刻目隆帯間に沈線文が充填されるもの（1110 ～ 1115）、冂状区画を重ねて地文を持たないもの（1117・1118）、などがある。1121・1124・1126・1125 は沖ノ原Ⅰ式と大木９式土器の折衷土器と理解される一群で、口縁部が沖ノ原Ⅰ式に類似し、胴部は大木９式的な隆沈線により大柄な渦巻文を描く。1123・1127 ～ 1130 は大木９式古段階の土器で、縦位の渦巻状懸垂文や大柄な渦巻文を隆沈線で描く。1131・1132 は加曽利ＥⅢ式土器で、口縁部に楕円区画や渦巻文、胴部の縦位磨消懸垂文が施される。1136 や 1137 は隆帯間に矢羽根状沈線文を描くなど唐草文土器との類似性が見られる。1138 ～ 1147 は口縁部に無文部を持つ点や胴部のＪ字状やＵ字状の沈線文が特徴的で、沖ノ原

Ⅰ式に伴う粗製的な土器である。この他に1期や2期の資料（1148～1151）や縄文のみの深鉢（1152・1154～1156）も出土している。3a期でまとまるが、在地の沖ノ原Ⅰ式土器と異系統の大木式や加曽利E式土器との共伴関係について検討が必要である。

第51号住居跡出土土器（図版第251図1158～1162）：覆土から1期の破片資料が僅かに出土している。

第52号住居跡出土土器（図版第251図1163～1168）：覆土から1期～2期の破片資料が僅かに出土しているが、時期的なまとまりは見られない。

第54号住居跡出土土器（図版第251図1169～第252図1197）：本住居跡の範囲から、1期から3a期の資料が少量出土しており、時期的なまとまりは認められない。1169は口縁部に基隆帯と半隆起線文により渦巻文が描かれる土器で、胴部は地文RLに縦位懸垂文が垂下する。1171は24号埋設土器で、大木9式土器の胴部が使用される。1172～1179は2c期の栃倉式を中心とする破片資料、1180～1184は沖ノ原Ⅰ式土器である。

第55号住居跡出土土器（図版第253図1198～1213）：複式炉内などから少量ではあるが、3a期などの破片資料が出土している。1198～1202は炉内から出土したもので、1198は大木9式古段階の土器で隆沈線による区画文のなかに縄文RLが充填される。1198は口縁部に渦巻文と刻目隆帯が横位にめぐる。この他にも、5期の破片資料（1204･1205）や2b～2c期の破片資料（1206～1208）なども散見される。

第56号住居跡出土土器（図版第253図1214～1218）：住居跡の範囲より1期～5期の破片資料が僅かに出土しており、時期的なまとまりはない。1214は大木8a式土器で、撚糸Rを地文として端部が渦巻状になるクランク文が平行沈線で描出される。1218は磨消縄文による三角形区画文で、内面調整や磨きが丁寧でないことから注口土器の胴部破片であると考えられる。

第58号住居跡出土土器（図版第254図1219～第255図1251）：住居跡の範囲より1期～5期の資料が多く出土しており、比較的1期の資料が多い。1219～1220・1222は半隆起線文の焼町類型、1221・1223～1225は、火焔型土器などの口縁部と胴部資料、1227は北関東系の三原田式に類似している。1219は口縁部・頸部・胴部の三帯に区分され、口縁部と頸部に橋状把手が付加される。口縁部文様帯には横位の半隆起線文、頸部･胴部には渦巻状の懸垂文が描かれる。1222は、口縁部に狭い文様帯を有し、胴部は区画を持たないものの上位に渦巻文、中位に弧状半隆起線文、下位に縦位半隆起線文が施される。1227は、口縁部の片側に1単位の山形突起と両側にやや小さな山形突起を持つ。山形突起の下部には三角形の突起とこれを橋状把手が連結する。口縁部には横位の半隆起線文に交互刺突文や有節沈線が加えられる。その下部に渦巻状突起を戴く8単位の橋状把手がめぐる。胴部はほとんど残っていないが、残存部分では縄文RLが施されるのみである。1229は胴部に羽状縄文が施される。1230は1期の粗製土器である。1232～1241は沖ノ原Ⅰ式・Ⅱ式土器、1242～1244は称名寺Ⅱ式土器、1245～1251は南三十稲場式土器であり、1251は注口土器の胴部破片と推定される。

第59号住居跡出土土器（図版第256図1252～第257図1274）：本住居跡は、火災住居跡であるため床面上に炭化材と焼土層が堆積しており、床面下に埋設された土器と覆土に包含された破片資料に分けられる。1252と1253は複式炉の炉体土器で、沖ノ原Ⅱ式の前半段階の深鉢である。口縁部と底部を欠き、表面は被熱により非常に脆弱である。文様は、有尾渦巻文が付されて、その下部に3本の沈線が縦

位に垂下する。口縁部の弧状沈線文に刺突文が付加される。1254 は入口部の埋設土器で、口縁部をやや欠損する。文様は、横位沈線文に刺突文が加えられ、胴部には両端部が閉じる縦位懸垂文が垂下する。1255・1256 も埋設土器とともに出土しており、1255 は波状口縁に横位の隆帯区画がめぐり、波底部から棒状懸垂文が垂下する。その下に入組コ字文と胴部の縦位懸垂文が垂下する。覆土出土資料は、３ｂ期の沖ノ原Ⅱ式土器（1257・1260）や沖ノ原Ⅰ式土器（1259・1261 ～ 1267）、火焔型土器（1269）、２ａ期～２ｃ期の破片資料（1270 ～ 1273）も含まれる。焼土層と炭化材に埋没した炉体土器と埋設土器は良好な共伴資料と考えられる。

第 60 号住居跡出土土器（図版第 257 図 1275 ～ 1287）：覆土からは、２ｃ期を中心とする破片資料が僅かに出土している。1275 ～ 1277・1279 ～ 1281 は栃倉式である。1275 の口縁部横位区画は上下で平行沈線文が一段ずれて連結している。

第 61 号住居跡出土土器（図版第 257 図 1288 ～ 1290）：覆土中より１期や３ｂ期の破片資料が僅かに出土しているが、時期的なまとまりは認められない。

第 62 号住居跡出土土器（図版第 258 図 1291 ～ 1297）：本住居跡からは、３ａ期の資料が少量出土している。1291 は瘤状突起を挟んで両側に横位の楕円区画文と上下に横位沈線文を描く。1292 は２本の刻目隆帯の間に縦位の短沈線を充填する。1297 は縄文ＬＲの粗製土器で、これも３ａ期に帰属すると考えられる。

炉跡出土土器：３号炉の炉体土器 1298 が出土している。２号炉とその周辺からは 1300 ～ 1303 が出土しているが、この炉跡に伴う土器というよりは、炉跡を破壊した I5-P1 に伴う土器の可能性が高い。

（２）長方形柱穴列出土土器（図版第 259 図）

第１号長方形柱穴列出土土器（図版第 259 図 1304 ～ 1314）：本遺構を構成する柱穴からは、２期～３期の土器片が僅かに出土しており、時期的なまとまりは認められない。また、これらの出土土器が構築時期を示す資料とは言いがたい。

第２号長方形柱穴列出土土器（図版第 259 図 1315 ～ 1338）：本遺構を構成する柱穴からは、１期～４期の土器片が僅かに出土しており、時期的なまとまりは認められない。これらも本遺構の構築時期を示すとは言い切れないものの、４期に構築された可能性が考えられる。

（３）環状列石周辺出土土器（図版第 260 図～第 272 図）

環状列石の内側からは、比較的多くの遺物が出土している。時期的には、１期～２期の出土資料は極めて僅かであり、破片資料が少量出土している（1339 ～ 1355）。３ａ期になると、出土量が急激に増加し、特に L9 と M9 グリッドから集中的に出土している。沖ノ原Ⅰ式土器は 1356 ～ 1369・1371 ～ 1373・1375 ～ 1384・1482、沖ノ原Ⅱ式土器は 1385 ～ 1481・1483 ～ 1488 がある。1489 ～ 1493 は大木９式土器の古段階、1494 ～ 1512・1518 は加曽利ＥⅢ式土器、1513 ～ 1515・1517 は加曽利ＥⅣ式土器である。1519 は両耳壺の把手部分で、1520・1521 は非常に焼きが良好で、瓢箪形注口土器の胴部資料と推定される。

一方、４期～５期（三十稲場式期～南三十稲場式期）の資料も少量ながら確認される。1523 ～ 1527 は三十稲場式土器の古手で、胴部を瘤状突起で埋める。1529 ～ 1539 は三十稲場式土器で、内側に蓋受け状の隆帯がめぐるもの（1529）やハ字状の懸垂文を有するもの（1531）などがある。1541 ～ 1543 は

称名寺Ⅱ式土器、1544 ～ 1570 は南三十稲場式土器である。1571 ～ 1573 は三十稲場式の蓋形土器、1574 は称名寺Ⅱ式の注口付浅鉢、1575・1576 は瓢箪形注口土器で、1575 は把手とＪ字状懸垂文に赤彩が残る。1577 も注口付浅鉢の可能性がある。

（4）埋設土器（図版第 273 図～第 276 図）

埋設土器に使用された土器の部位は、①完形もしくはほぼ完形（1582・1592・1597・1602）、②底部を欠損するもの（1590・1600）、③口縁部を欠損するもの（1596・1607）、④胴部下半もしくは底部のみのもの（1578 ～ 1580・1588・1589・1594・1595・1598・1599・1603 ～ 1606・1608・1609）があり、底部のみものが多い。２期から５期に分けて時期ごとにまとめておきたい。

２期は、９号埋設土器（1590）と 16 号埋設土器（1592）がある。1590 は口縁部文様帯に剣先文が付属する渦巻文を沈線で描き､間に矢羽根状沈線文を充填する。また平行沈線により頸部を横位に区画して、胴部には縦位の懸垂文が垂下する。1592 は口縁部文様帯に縄文ＲＬを横方向に回転させて施し、４単位の剣先状隆帯文を付す。胴部は地文縄文のみで、縄文ＲＬが縦回転で施される。

３期は、10 号埋設土器（1593）、15 号埋設土器（1597）、20 号埋設土器（1596）、27 号埋設土器（1600）、第 28 号埋設土器（1602）、29 号埋設土器（1603）、30 号埋設土器（1604）がある。1593 は口縁部のみで横位の沈線区画とその下部に渦巻文状文が確認される。1596 は沖ノ原Ⅱ式で、口縁部に細沈線により方形区画を何重にも描くもので胴部に懸垂文は伴わない。1597 は、口縁部に６単位の渦巻文と３本の刻目隆帯がめぐる沖ノ原Ⅰ式土器で、胴部は縄文ＲＬを施す。1600 は沖ノ原Ⅱ式で、口縁部の隆帯区画から有尾渦巻文が垂下し、両側に入組コ字文が４本から５本単位で描かれる。胴部には縦位の懸垂文が描かれ、縄文Ｌが沈線描出後に施される。1602 は口縁部に刻目を持つ隆帯がめぐり、その上部が欠損する。1603・1604 は縦位の懸垂文が一部で確認される。その他の底部のみの埋設土器は、胎土などから３期に帰属する可能性が高い。

４期は、４号埋設土器（1582）、８号埋設土器（1589）がある。1582 は、頸部に刻目を有する隆帯区画がめぐり、口縁部に狭い文様帯をもつ。頸部無文帯には口縁部からＪ字状の懸垂文が垂下する。胴部には磨消縄文による三角形区画とＳ字文・Ｊ字文を描き、一部に環状貼付文を貼り付ける。称名寺Ⅱ式もしくは堀之内１式古段階の資料と考えられる。1583 ～ 1587 は３ｂ期の破片資料で、1582 とともに出土しているが、混入したものと理解される。1589 は三十稲場式土器の胴部下半で、花弁状刺突文を全面に施して、底部に網代痕を残す。

５期は、18 号埋設土器（1595）のみで、胴部下半に米字状の磨消縄文を描き、底部に近い部分は無文部となる。

（5）フラスコ状土坑出土土器（図版第 277 図～第 316 図）

フラスコ状土坑出土土器に関して、良好な出土資料を中心に記述し、その他は観察表で補完したい。

13J-P1 出土土器（図版第 277 図 1611 ～第 283 図 1631）：本土坑からは、３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）に帰属する 19 個体の完形土器と２個体の破片資料が出土している。全て沖ノ原Ⅰ式土器で異系統の土器は含まれていない。1611 ～ 1615・1617 は口縁部に２本の刻目隆帯をめぐらせて渦巻文を貼り付けるもので、渦巻文に刻目が施されないのが通常である。1611 ～ 1613 は胴部が地文縄文のみで、1614 や 1615・1617

は渦巻文よりハ字状などの懸垂文が垂下し、特に 1614 はハ字状懸垂文同士が連結する。これらは 1611 ～ 1613 とは口縁部横位隆帯への加飾も異なる。1614 は部分的に刻目が施されない部分があり、1615 は刻目を持たず、1617 は隆帯上が無文になり隆帯間に刺突列が加えられる。1616 は口縁部に横位の楕円文や沈線文を数条描くがやや粗雑である。沈線に加えられる刺突文も土器の半分側にのみ施される。1618 は口縁部に横位の隆帯が１本めぐり、４単位の渦巻文が付される。その下部には横位の沈線文と縦位の懸垂文が垂下する。横位の沈線文のみに刺突文が付加される。また 1618 の口縁部には補修孔が２つ認められる。1619 は、口縁部に刻目隆帯が横位に数条めぐり、隆帯間にも刺突文が加えられる。これに渦巻文とその下に懸垂文が垂下する。本資料は上から見ると非常に横に潰れて楕円形を呈する。1620 は破片資料で、口縁部に２本の隆帯がめぐって瘤状突起が付されて隆帯間に刺突列が付加される。1622 は、底部と胴上半部を欠損し、沈線による胴部懸垂文が見られる。本資料の器面の所々に表面が剥離した部分が認められ、これらは焼成時の破裂痕であると考えられる。1623 は、口縁部に横位の楕円文とその上下に２本ずつ沈線文がめぐり､刺突文が付加される。楕円区画間には縦位の平行短沈線文が配列する。胴部は沈線文により冂状に区画され、縄文ＲＬが充填される。1621・1624 ～ 1631 は地文縄文のみや無文の粗製土器である。これらはフラスコ状土坑の底面から上層にかけて折り重なるように横位や斜位で堆積しており、土器の中に土壌が入り込んで潰れない状態で出土している。これらに時間差がないとは言いがたいが、ほぼ同時期の土器群と理解される。

４J-P1 出土土器（図版第 284 図 1632 ～ 1646）：土坑覆土中層より完形土器 1632 が出土している。1632 は沖ノ原Ⅰ式土器で、口縁部に横位の隆沈線がめぐり、瘤状突起が付される。この他にも、1633 ～ 1638 のような沖ノ原Ⅰ式の破片資料が出土しているが共伴関係は明瞭ではない。1639 は大木８ｂ式の胴部資料で平行沈線による胴部文様が描かれる。1640 ～ 1643 は半隆起線文による焼町類型で、その他は条線文や縄文のみの資料である。

F6-P6 出土土器（図版第 285 図 1654 ～第 286 図 1670）：土坑覆土より、２ｂ期（大木８ｂ式並行期中段階）の資料がまとまって出土している。1656 は完形復元された深鉢で、口縁部文様帯と頸部無文帯・胴部文様帯の三帯に区分される。口縁部は２つの波状口縁が４単位あり、渦巻状隆帯文と矢羽根状沈線文が充填される。胴部には腕骨状の懸垂文が垂下し、その間に端部が渦を巻く懸垂文が配されて、間に矢羽根状沈線文が充填される。1657 は口縁部資料で､口縁部文様帯には渦巻状隆帯文と細沈線文が充填される。1658 はＸ字状把手と腕骨状懸垂文や縦位懸垂文・剣先状文・矢羽根状沈線文が施される。1659・1660 も同じ一群の胴部資料である。この他に、栃倉式土器（1654・1661・1662）、環状突起や半隆起線文の一群（1664・1665）、王冠型土器の把手（1666）、関東系の浅鉢（1668）、沖ノ原Ⅱ式土器（1669）、有溝小把手土器（1640）などの破片資料が出土している。

F6-P7 出土土器（図版第 286 図 1671 ～第 288 図 1703）：本土坑からは、２ｂ期から３ａ期の資料が一定量出土している。1671 ～ 1675 は沖ノ原Ⅰ式土器で、1671 は口縁部に３本の刻目隆帯と渦巻状懸垂文を持つ波状口縁の深鉢である。1672 は口縁部に２本の横位隆帯がめぐり、渦巻状懸垂文が変形して区画文になって区画内に刺突列が施される。1676 は加曽利ＥⅢ式土器で、口縁部の楕円区画と胴部の縦位磨消懸垂文が見られる。また２期の資料も多く出土しており、口縁部隆帯文の土器（1679）、二帯構成の土

器（1680）、地文縄文に胴部縦位懸垂文の胴部資料（1681 ～ 1684）、２ｂ期の渦巻状隆帯文や胴部縦位懸垂文と矢羽根状沈線文を描く一群（1685 ～ 1689）、２ｃ期の栃倉式の破片資料（1689 ～ 1694）、これに伴う地文縄文のみの資料（1697 ～ 1702）、などが出土している。

H7-P2出土土器（図版第290図1746～1755）：土坑内から２ｃ期から３ａ期の破片資料が少量出土している。1746・1747 は口縁部に刻目隆帯がめぐり、1746 は二段の渦巻文が付く。1748・1751・1752 は２ｃ期の破片資料で、渦巻文や渦巻状懸垂文が付き、1752 は懸垂文に沿って刺突列と斜行沈線文が描かれる。1753・1754 は口縁部が無文になって、胴部全面に半截竹管状工具により刺突文を施す。

H7-P6 出土土器（図版第 290 図 1756 ～第 291 図 1778）：土坑内からは、２ｃ期～３ａ期の破片資料が出土している。1756 は大木９式土器の古段階である。1757 ～ 1763 は２ｃ期の破片資料で、平行沈線や隆帯がめぐり、横位や縦位の沈線文を充填する。1760 は頸部で屈曲して外反して無文部となり、胴部は刻目隆帯による渦巻文とその間に縦位沈線文が充填される。1764 ～ 1771 は胴部前面に、半截竹管状工具による２つ単位の刺突文や棒状工具による１単位の刺突文が施される一群である。1764 は、横方向の刺突文が２～３列で横位に４段めぐり、その間に縦方向の刺突文を２～３列ずつ施す。この他に３ａ期・３ｂ期の破片資料（1772･1773）や粗製的土器（1774 ～ 1777）、２ｂ期の口縁部資料などが出土している（1779 ～ 1782）。1779・1780 は口縁部文様帯に中空突起が付されて剣先状の隆帯文や矢羽根状沈線文が充填される。

H8-P7 出土土器（図版第 294 図 1839 ～ 1851）：土坑内からは、３ａ期の資料がまとまって出土している。1839 ～ 1842 は口縁部に２～３本の横位隆帯がめぐり、刻目を施すものが多い。1839・1841 は渦巻文が付き、1840 は円形文が付されて円形文の下にクランク状の沈線文が垂下する。1839 は口縁部隆帯間に斜位の沈線文が充填され、胴部は地文条線文が施される。1843・1844 は横位沈線文や楕円文が多段で描かれて、1843 は沈線間に刻目が付加される。1846 は沖ノ原Ⅰ式土器に伴うもので、縦位懸垂文や逆Ｕ字状文を描く。1845 は胴部懸垂文である。1847 は大木９式土器の口縁部で渦巻文が欠損して２本の刻目隆帯が残る。1848 は小破片であるが、50 号住居跡出土の破片と接合している。1851 は南三十稲場式土器の胴部破片である。

I1-P1 出土土器（図版第 295 図 1852・1853）：土坑内からは、３ａ期の土器が２個体出土している。1852 は沖ノ原Ⅰ式土器で、口縁部に横位の隆帯が２本めぐり、４単位の渦巻状懸垂文が付加される。隆帯間には縦位の沈線文が充填され、胴部は地文縄文ＬＲのみである。1853 は胴部に逆U字状懸垂文がめぐり、無文部がよく磨きが加えられる。懸垂文の端部は底部まで届かずに、充填される縄文も懸垂文の範囲までで底部付近は無文部になる。

I5-P2出土土器（図版第295図1854～第297図1870）：土坑内からは、３ａ期～３ｂ期の資料が比較的まとまって出土している。1854 は、口縁部に１本の横位隆帯がめぐり、その上下の横位沈線文に刺突列が付加され、沖ノ原Ⅱ式の範疇で捉えられる。1856 は口縁部に２本の横位隆帯がめぐり、上下を棒状懸垂文が連結し、胴部は縄文ＬＲのみとなる。1855・1857 は沖ノ原Ⅱ式土器の口縁部で、1857 は内面に蓋受け状の隆帯がめぐっている。1858 は胴部縦位懸垂文が垂下する土器、1859 は口縁部に３本の横位沈線文がめぐる土器、1860 は加曽利ＥⅢ式の胴部磨消懸垂文である。1861・1862 は両耳壺であり、1861 は隆帯

により頸部を横位に区画して、胴部には幅広の縦位無文帯が垂下する。1862 は胴部上端に横位楕円区画と眼鏡状突起があり、胴部には逆U字状懸垂文とワラビ手状懸垂文が描かれる。1865 は口縁部を刺突列で横位に区画して胴部に撚糸Rを施す粗製土器である。その他に1期・2期・4期の破片資料も出土している。

I7-P1 出土土器（図版第 297 図 1884 ～第 298 図 1895）：土坑内からは、破片資料のみであるが1ｃ期の資料がまとまって出土している。1884 はX字状把手と渦巻状懸垂文から栃倉式と考えられる。1885 は口縁部に横位のワラビ手状隆帯が付属する。1886 ～ 1891 は大木８ａ式土器で、半截竹管状工具による平行沈線により波状文やクランク状文などを描く。1887・1888 は撚糸文を施す。1892 は火焔型土器の口縁部で基隆帯に刻目が加えられる。1893 は完形の浅鉢で、口縁部を横位隆帯で区画して、区画内には端部が屈曲する隆帯文がめぐる。1894 は浅鉢の胴部資料で胴部には撚糸Lが施される。

I7-P2 出土土器（図版第 298 図 1896 ～第 299 図 1910）：土坑内からは、２ｃ期の資料が破片ながらまとまって出土している。1896 ～ 1906 は栃倉式で、1896 は口縁部の屈曲部に２本の低い刻目隆帯が横位にめぐる。1897 は口縁部区画に縦位の沈線文が充填され、1898 ～ 1900 は胴部の双頭渦巻懸垂文や縦位の半隆起線文・条線文が施される。1901 は口縁部に横位の沈線区画内に縦位の沈線文を充填し、その下部に渦巻状懸垂文が垂下し、内面には１本の沈線がめぐる珍しい資料である。1902 ～ 1905 は、双頭渦巻懸垂文の空間に横位もしくは弧状の沈線文を充填する一群である。1906 は胴部刺突文の土器、1907 は平行沈線による胴部縦位懸垂文の土器、1908 ～ 1910 は口縁部が肥厚する無文部で胴部が条線文になる一群である。

I8-P6 出土土器（図版第 300 図 1945 ～第 301 図 1959）：土坑内からは、３ａ期の土器群がまとまって出土している。1945 は口縁部に１本の隆帯区画がめぐり、その下に乙字状文や横位の沈線文が展開し、上下両側の沈線に刺突文が加えられる。これに渦巻状懸垂文が上下にずれながら付属し、渦巻文の下から胴部に縦位懸垂文が垂下する。1946 は口縁部に横位の隆帯が３本めぐり渦巻文が８単位付されると考えられる。隆帯上には刻目は伴わず、隆帯間に刺突文を施す。胴部は縦位懸垂文により、冂字状に区画される。1947 は口縁部に１本の横位隆帯がめぐり、隆帯上には瘤状突起間に同方向の背割状沈線文が加えられる。隆帯の上下には刺突列がめぐり、胴部は冂字状に区画されて、瘤状突起と背割状の沈線文が施される。1950 ～ 1953 は口縁部に横位の楕円区画や沈線文を描く一群である。1950 は楕円区画間に瘤状突起を配し、沈線に沿って刺突文が付加される。1951 は箆状の刻目が沈線に沿って施される。1955 は大木９式的要素も見られるが、異質な土器である。波状口縁に隆帯が横位にめぐり、渦巻文から縦位の懸垂文が垂下して胴部でU字状に連結する。1956 は大木９式土器の胴部資料である。1957 は有溝小把手土器の胴部破片で、赤彩が内外に認められる。1958・1959 は地文縄文のみの粗製土器である。

K8-P31 出土土器（図版第 304 図 2003 ～第 306 図 2017）：本土坑からは、３ａ期の土器がまとまって出土している。2003・2004 は同一個体の可能性があるが、口縁部に２本の刻目隆帯が横位にめぐり、４単位の渦巻文とその間に棒状懸垂文が付属する。隆帯間には縦位の短沈線文が充填される。2005 は台形状を呈する波状口縁で、口縁部の隆帯は 2003 に類似するが、隆帯上への刻目がない点や渦巻文の下にもう一つの渦巻文が垂下するなどの違いがある。また隆帯下部には横位の楕円文などが３段めぐり、胴部は縦位懸垂文により区画される。2006・2008・2009 は口縁部に乙字状文や横線文を描き、刺突文が

付加される部分もある。2007 は連弧文土器にであり、本地域では非常に珍しい。本資料の口縁部と胴部には、刺突列を伴う横位沈線区画を有し、胴部上半には波状文が崩れたような沈線文が見られる。2011 は縦位の微隆起線文と雨垂れ状刺突文が見られる。2012 ～ 2015 は加曽利ＥⅢ式土器で、2015 はほぼ完形である。本資料は波状の口縁部に渦巻文が横方向に展開して楕円区画を作出し、胴部には縦位の磨消懸垂文が垂下する。2016 は有溝小把手土器の胴部破片で、内面に赤彩痕が残る。

O9-P2 出土土器（図版第 310 図 2112 ～第 311 図 2123）：土坑内からは、２期の資料が破片資料で出土している。2123 は地文縄文ＲＬのみの２期の深鉢であるが、その内部からは耳飾２点が検出されている。2112 と 2113 は地文縄文に縦位・横位に単沈線による区画文や蛇行沈線文が描かれる。2114 ～ 2118 は、Ｘ字状把手や胴部横位区画、腕骨状懸垂文、矢羽根状沈線文を特徴とする一群である。この他にも１期の資料や粗製的な土器が出土している（2119 ～ 2122）。

O9-P24 出土土器（図版第 311 図 2134 ～第 313 図 2142）：土坑内からは、１ｃ期を中心とする資料が比較的まとまって出土している。2134 と 2139 は大木８ａ式新段階の土器で、地文に撚糸を施す。2139 はほぼ完形に近く、口縁部には渦巻状文と円形文を組み合わせた中空突起が４単位付属して、間に横方向の半隆起線文を施す。頸部には平行沈線による波状文、胴部は縦位懸垂文と最大径の部分で横位に上下に区分される。縦位懸垂文は平行沈線文間に鋸歯状沈線文が垂下して三角形区画になる。胴部上半部には横Ｓ字文や波状文、胴部下半部には縦位の懸垂文を描く。2140 と 2141 は火焔型土器の鶏頭冠状把手で、2141 の一部には刻目が施される。

O9-P32 出土土器（図版第 314 図 2154 ～ 2160）：土坑内からは、３ａ期の資料がまとまって出土している。2154 は口縁部に３本の横位隆帯がめぐり、４単位の渦巻文が付されると考えられる。口縁部の隆帯は、上と下に刻目が加えられ、隆帯間には縦位の沈線文が充填される。2155 ～ 2156 は口縁部に横位の沈線文や楕円区画を施す一群であり、棒状工具や箆状工具による刺突文が付加される。2157 ～ 2159 は地文縄文のみの土器で、2157 は無文部を残して縄文ＬＲが縦方向に施され、2158 はＲＬ、ＬＲ、Ｌの３種類の原体が施されている。2160 は加曽利ＥⅢ式土器の胴部資料で、縦位の磨消懸垂文と蛇行沈線文が垂下する。

O9-P29 出土土器（図版第 315 図 2161 ～ 2165）：土坑内からは、少ないながら２ａ期の土器が出土している。2161・2162 は大木８ｂ式土器で、2161 は口縁部に未調整隆帯による隆帯文が描かれる。胴部上半部は、平行沈線により横位に区画して、区画内に波状文を描く。2163 は王冠型土器で、底部を欠損する。胴部は口縁部よりもスマートになり、２ａ期の特色を有している。把手には貫通孔を有し、その下には橋状把手が付属し、口縁部には波底部に横位の橋状把手や基隆帯によりＪ字状・横Ｓ字状文が描かれる。

（６）土坑出土土器（図版第 315 図～第 367 図）

これらの土坑は、柱穴、廃棄坑、墓坑などが含まれており、土坑からまとまって出土した資料や墓坑に伴う土器、特筆する必要がある資料を中心に概略的に説明したい。

F6-P1 出土土器（図版第 319 図 2232）：本土坑からは、３ａ期の土器 2232 が出土している。本資料は、F6-P7 出土の 1672 と同一個体である。口縁部には２本の横位隆帯がめぐり、渦巻文が変形して楕円区画を作出している。区画内には刺突列が充填される。縄文ＬＲが口縁部には横回転で、胴部には縦回転で無文部を残して施される。

H4-P1 出土土器（図版第 322 図 2304 ～第 323 図 2314）：土坑内からは、１ｃ期～２ｂ期の資料が比較的多く出土している。2304・2307 は１ｃ期の口縁部資料で、2304 は中空把手が破損しているが、頸部には地文撚糸Ｌに波状文が平行沈線で描かれる。2307 は剣先状の突起が１単位付き、そこから渦巻文が垂下する。口縁部には二段に波状沈線文が平行沈線で描かれて部分的に渦巻文が付加される。2305 は口縁部と胴部の二帯構成で、口縁部文様帯には交互に弧状隆帯文が上下に付される。2308 ～ 2311 は大木８ｂ式土器で、2308 は口縁部と頸部・胴部の３帯構成で、頸部は沈線で区画されていないものの無文部として胴部とは区分されている。口縁部は縄文ＲＬを横回転で施して剣先状の隆帯文をめぐらせる。2309 は口縁部と頸部・胴部の三帯構成をとり、口縁部と胴部は橋状把手により連結する。口縁部文様帯は、縄文ＲＬを地文として剣先状の隆帯文がめぐる。2310 は口縁部が上下で隆帯によって区画されて、４単位の箱型中空突起が付される。頸部から胴部は縄文ＬＲが施されるのみである。2311 は口縁部を欠損する胴部資料であるが、沈線により胴部を横位と縦位に区画して渦巻状の懸垂文などが垂下する。胴部懸垂文は底面に数 cm 程度及んでおり、これは施文時に土器を手に持って描出したためと推測される。この他に 2313・2314 のように沖ノ原Ⅰ式やⅡ式の土器片が含まれる。

I6-P1 出土土器（図版第 326 図 2390 ～第 329 図 2438）：本土坑からは、４ｂ期～５ａ期の資料が破片ながらまとまって出土している。2390 ～ 2401 三十稲場式土器で、2402 ～ 2406 はこれに伴う口縁部隆帯文の土器、2407 ～ 2420 は称名寺Ⅱ式土器（一部に堀之内１式を含む）、2421 ～ 2423 は南三十稲場式土器、2425・2426 はこれに伴う鉢形土器、2427 は注口土器と考えられる。これとともに蓋形土器（2428 ～ 2431）、粗製土器（2432 ～ 2436）、などが出土している。2390 は頸部に鎖状隆帯が横位にめぐり、４単位の橋状把手が付属し、胴部は無文部になる。2391 は頸部にめぐる隆帯に爪形の刺突が加えられ、橋状把手にも爪形文を持つワラビ手状の隆帯と環状貼付文が付加される。胴部には爪形刺突文を全面に施し、橋状把手下には同心円文、連鎖状の沈線文が垂下する。2392 ～ 2398 は頸部に隆帯区画、胴部に刺突文を施す一群で、胴部刺突文も多様である。2399・2400 は胴部が地文縄文になる土器で、2401 は器形が三十稲場式土器であるが全面無文の土器である。2407 は口縁部と頸部、胴部の３帯構成で、口縁部にはＣ字状の突起に環状貼付文が付され、口縁部区画内には刺突列がめぐる。頸部には鎖状隆帯がめぐり、橋状把手が付属する。胴部は沈線により文様を描く。この他にも、2408 ～ 2414 のように口縁部文様帯や橋状把手を持つ土器などがある。2424 は内面に蓋受け状の隆帯がめぐる土器であるが、環状貼付文と方形区画の隆帯が認められるものの、表面の風化がひどい。2425 と 2426 は 5a 期の鉢形土器で､胴上半部に三角形区画とＪ字状の隆帯が連結して展開する｡隆帯上には背割状の沈線と両端に刺突文、刻目が加えられる。2427 は注口土器の背面部分と考えられ、環状突起状の橋状把手が付属する。2428 ～ 2431 は、蓋形土器で、三十稲場式土器の深鉢に付くものと注口土器に付くものが認められる。2432 ～ 2436 は無文や地文縄文の粗製土器である。2437 は変形横ハ字文と懸垂文をもつもので、2438 は１期の浅鉢底部であり、胴部には撚糸Ｌが施文されて、底部には繊維状の圧痕が見られる。

L11-P1 出土土器（図版第 341 図 2764）：土坑から逆位で出土した完形の浅鉢であり、埋葬に使用されたと推定される。口唇部に帯状の文様帯を有し、６単位の渦巻文とこれを連結するように横方向の沈線文および有節沈線文が展開する。胴部内面は無文で、表面は縄文ＲＬが施される。内外面には特にススやコゲの付着は認められない。また赤彩も認められない。

L11-P17 出土土器（図版第 342 図 2782 ～第 343 図 2791）：墓坑と推定される覆土中より土器が比較的多く出土しているが、時期的なまとまりは乏しい。2782・2783 は変形横ハ字文を胴部に描く一群である。2784・2785・2787 は三十稲場式土器の胴部片で、花弁状刺突文が施される。2786 は頸部に横位の蛇行沈線文を描くもので、気屋式土器との関連性が考えられる。2788 はく字状に内屈する口縁部で、太い沈線が横位にめぐる。2789 は胴部が膨らんで、口縁部がやや外反する粗製的な土器で、口縁部に圧痕隆帯文がめぐる。2790 は南三十稲場式土器でも新段階に位置付けられる資料である。

L11-P27 出土土器（図版第 343 図 2807）：土坑から逆位で出土した完形の浅鉢であり、埋葬に使用されたと推定される。胴部は無文で赤彩も確認できない。口唇部が内屈する折り返し口縁になる。この特色から 1 期の土器であると考えられるが、類例に乏しい。

N7-P1 出土土器（図版第 356 図 3195 ～ 3210）：本土坑からは 6 期（加曽利 B1 式並行期）を中心とする資料が出土している。3195・3200 は口縁部がやや内屈して内面にも横位の沈線が 3 ～ 5 本めぐるもので、3195 は外面にも横位の沈線文がめぐる。3200 は帯状縄文が 2 帯めぐる。3196 は口唇部に刻目を施して外面に帯状縄文がめぐり、3197 は内面に 2 本の横位沈線文がめぐる。3198・3199 は薄手の土器で、横位の多条沈線文や連鎖状文が描かれる。3201 は内面に横位の沈線文がめぐり、3202 は口縁部に耳状突起が付属する。3205 ～ 3208 は底部資料で、底面には網代圧痕文が見られる。3209 は皿形もしくは浅鉢の口縁部資料で、3210 は注口土器に伴う蓋形土器と考えられる。

N8-P2 出土土器（図版第 357 図 3211 ～ 3219）：本土坑からは 6 期（加曽利 B1 式並行期）を中心とする資料が出土している。3201 ～ 3214 は内外面に横位の多条沈線文や帯状縄文を描く一群であり、口唇部に刻目を入れるものもある。3212 の内外面には光沢のある黒色付着物が認められるが、スス・コゲの類か塗彩されたものか判別はできない。3215 は帯状縄文の土器で、3216 は横位の多条沈線文を描いて部分的にクランク状になる。3219 は台付土器の台部で、3218・3219 は底部資料で網代圧痕文を持つ。

N10-P30 出土土器（図版第 364 図 3368 ～ 3372）：3368 は沖ノ原Ⅱ式土器の口縁部資料で、台形状の口縁部に渦巻状懸垂文が垂下する。3369 は口縁部が内屈し、2 本の横位隆帯がめぐって橋状把手が付く。その下部に楕円状懸垂文が垂下して胴部に変形横ハ字文が描かれる。隆帯上の刺突文は管状の工具による。3390 は口縁部が内屈する小形の土器で、口縁部に 2 本の隆帯が横位にめぐって橋状把手が付属する。胴部には全面に瘤状突起が貼り付けられる。3371 は変形横ハ字文の胴部資料であり、3372 は注口土器の把手部分であり、三角形の沈線を 3 重にめぐらせる。本土坑出土土器は、時期的なまとまりは乏しいが、3369 と 3370 は器形などに類似点があり、並行関係も検討の余地があると考えられる。

O8-P32 出土土器（図版第 365 図 3390）：土坑内から 5 b 期の深鉢 3390 が逆位で出土している。いわゆる甕被葬であると考えられる。口縁部上端には貫通孔が 1 つあり、内面に 1 本の沈線がめぐる。胴部上半部には磨消縄文帯により三角形区画を描く。

P8-P6 出土土器（図版第 369 図 3473）：本土坑より 4 b 期～ 5 a 期の大形土器片 3473 が出土している。埋葬に関連する可能性もあるが、明確ではない。3473 の口縁部文様帯には、5 単位の環状貼付文が配列してその両側に横位沈線が伸びる。頸部は無文になり、2 本の沈線による横位頸部区画には 8 字状貼付文が付される。胴部には弧状もしくはC字状の磨消懸垂文が垂下する。

（7）遺物集中区出土土器（図版第 370 図～第 382 図）

遺物集中区からは、1 期と 2 期の土器が出土しており、特に 1 c 期～ 2 b 期が主体となる。3487 ～ 3491 は口縁部に中空把手や有節沈線文を施す一群で、3492 ～ 3495 は頸部に弧状沈線文や隆帯文を描き、3496 ～ 3500 は口縁部文様帯に波状の隆帯文、沈線文、有節沈線文を描く一群である。3498 ～ 3532 は地文に撚糸文を施す。3501 ～ 3505 は胴部資料で、平行沈線文による区画文やクランク文、波状文、懸垂文を描く。3506 ～ 3520 は基隆帯・半隆起線文、環状突起などを特徴とする一群である。3533 ～ 3536・3538 ～ 3541 は鶏頭冠状把手や鋸歯状突起・袋状突起の部分である。3537 は、底部や把手を欠損するが、比較的残りの良好な火焔型土器である。 4 単位の鶏頭冠状把手と口縁部の鋸歯状突起・櫛状文、4 単位の眼鏡状突起とその間に横 S 字状文が基隆帯・半隆起線文で描かれる。胴部には眼鏡状突起下に逆 U 字状懸垂文と真中に袋状突起が付属する。上半部には横方向に連結する S 字状文、下半部には縦位の半隆起線文と部分的に交互刺突文が加えられる。3542 ～ 3545 は王冠型土器の突起部分である。3546 ～ 3555 は火焔型土器や王冠型土器の胴部資料である。半截工具による半隆起線文描出後に半隆起線間を棒状工具でなぞるものも多く認められる。

3556 ～ 3568・3571 は、大木 8 b 式土器で、口縁部から胴部にかけて地文縄文を施す資料で、胴部に区画を持たないもの（3556 ～ 3558）、頸部と胴部を区画して無文帯を持つもの（3560・3561・3565・3566）がある。3572 ～ 3580・3583・3584 は口縁文様帯の渦巻状・剣先状隆帯文間に斜行もしくは矢羽根状の沈線を充填するものである。3585・3586 は口縁部に隆帯や橋状把手や箱型の中空把手が付属する文様帯を有するが、器形自体はキャリパー形ではなく、3587 などの外反する器形との共通性が高い。3587 ～ 3593 は口縁部が外反する器形を呈し、口唇部に沈線や隆帯による渦巻文が施されるものが多い。3592 は、胴部懸垂文の屈曲部の沈線の一部が突起状に盛り上がる例で、道尻手遺跡出土資料にも認められる。3594 は口縁部文様帯に横 S 字状の中空突起を巡らせるもので、胴部は縦位懸垂文によって 4 分割してその間に二段の大柄な渦巻文を描く。3699 ～ 3621 は胴部資料で、横位区画や胴部の懸垂文が描かれ、平行沈線文と単沈線による施文の二種が認められる。これらの平行沈線文の幅は 3 mm ～ 6 mm と大きさに多様性がある。3622 ～ 3631 は胴部懸垂文の間に矢羽根状沈線文を充填する資料であり、3632 ～ 3634 は栃倉式で 3634 は半截竹管状工具による刺突文が胴部全体に施される。3635 ～ 3638 は沖ノ原 I 式・II 式で、3639 は加曽利 E IV式土器である。3640 ～ 3642 は地文縄文のみの粗製的な深鉢で、3643 ～ 3647 は浅鉢である。

b．包含層出土土器（図版第 383 図～第 416 図）

（1）縄文時代中期（1 期～ 3 期）の土器群（図版第 383 図～第 410 図）

①1 期（大木 8 a 式並行期）の土器群（図版第 383 図～第 394 図）

3648 ～ 3694 は第 I 群第 1 a 類の大木 8 a 式土器である。3648・3649 は、口縁部に狭い楕円区画を有し、隆帯上に圧痕文を施す大木 7 b 式的要素を残す一群である。3650 ～ 3672 は、口縁部に文様帯を有し、口縁部に中空把手や橋状把手、渦巻状突起などが付されるもので、口縁部に縦位や横位の有節沈線文、交互刺突文、などが施される。3673 ～ 3675・3578・3580 ～ 3682 は口縁部に連続する弧線文や波状文、横 S 字文を描くもので、胴部にはクランク状の文様などが見られる。3685 は口縁部に有節沈線文や交互刺突文がめぐり、そこに縦位の S 字状突起が付され、胴部は地文のみが施される。3696 ～ 3762 は第 I 群第 1 b 類の焼町類型にあたる一群である。3695 ～ 3750 は、全体的に半隆起線文により曲線的な文様

が描かれるもので、3753 ～ 3756 は区画内に細沈線を充填する北陸系の一群である。焼町類型は、基隆帯による渦巻状の懸垂文と半隆起線文によって文様が描かれ、環状突起や眼鏡状突起・楕円状区画文などが付される。半隆起線文の幅は3mm ～6mm と幅がある。3758 は口縁部に三段の把手が付される土器である。3756・3758 ～ 3761 の口縁部は、基隆帯や半隆起線文による装飾されるが、胴部に地文縄文を施す一群である。特に 3757・3761 は口縁部に 4 単位の三段環状把手を有し、3761 の胴部には縄文ＲＬに渦巻状懸垂文とその間に三叉文を施す。また口縁部には大柄な渦巻状隆帯文が展開して、その間に三叉文による区画内に北陸的要素である細沈線文が充填される。3674 ～ 3556 は第Ⅰ群第１ｄ類で、3674 ～ 3769 は火焔型土器、3771 ～ 3781 は王冠型土器、3783・3784 は無冠の土器である。3785 ～ 3795 は火焔型土器などの胴部資料である。これらの半隆起線文は、半截竹管状工具による描線後に間を棒状工具などでなぞるものが多い。また 3787・3795 の底部には網代圧痕文を持つ。

②２期（大木８ｂ式並行期）の土器群（図版第 394 図～第 399 図）

3796 ～ 3888 は第Ⅰ群第２ａ類・第２ｂ類の大木８ｂ式土器である。そのなかで 3796 ～ 3807 は口縁部に地文縄文を施すもので、3808 ～ 3830 は口縁部に矢羽状沈線文を充填するもので、3832 ～ 3838 は口縁部が外反するものである。3796 ～ 3807 は口縁部文様帯に剣先状などの隆帯文を施し、隆帯接地部が未調整になるものがある（3798・3801・3803・3805）。3808 ～ 3814・3821・3823・3827 は、口縁部の隆帯文に伴う渦巻文が突起状に突出するもので、新しい要素であると考えられる。3815・3821・3826 は、剣先状の隆帯文やＳ字状文などを組み合わせた中空突起が付属し、3816・3819 は口縁部にＸ字状の把手を持つものである。3839 ～ 3858 は、胴部に横位区画・縦位区画を単沈線や平行沈線文で描き、その間に波状文や弧線文、蛇行沈線文、渦巻状文を加える。3859 ～ 3888 は、隆帯や平行沈線文で胴部と頸部を横位に区画し、胴部を縦位に区画して矢羽根状沈線文を充填する一群である。胴部には腕骨状懸垂文やＸ字状把手、眼鏡状突起が付される。胴部の平行沈線文は、幅約4mm ～5mm のものが多い。

3889 ～ 3918 は第Ⅰ群第２ｃ類の栃倉式土器で、胴部の懸垂文間には縦位の半隆起線文や縄文、条線文、横位の弧線文、胴部全体に半截竹管状工具によって刺突を加えるものがある。これらの半截竹管状工具による刺突文は、幅約 5mm のものが多い。

③３期（沖ノ原Ⅰ式期～沖ノ原Ⅱ式期）の土器群（図版第 399 図～第 407 図）

3919 ～ 4012 は第Ⅰ群第３ａ類の沖ノ原式土器である。3919 ～ 3941 は基本的に口縁部に２～３本の隆帯が横位にめぐる一群で、ほぼ沖ノ原Ⅰ式にあたる。これらの隆帯上には刻目を加えるものが多いが、渦巻文上には加飾は及ばない。3928 ～ 3934・3936 は、口縁部の隆帯間に縦位の沈線文や円形の刺突文を施す。3942 ～ 3958 は、口縁部に横位の沈線文や隆沈線文で入組コ字文や乙字状文を描く一群で、沈線内や沈線間に円形やヘラ状の刺突文を加える。3958 は横位の沈線間に瘤状の突起を付す。3959 ～ 3967 は口縁部に横位の沈線文や隆沈線文を描き、その間に渦巻状の懸垂文が付される一群で、これらは沖ノ原Ⅰ式と考えられる。胴部の地文は沈線文施文後に施される。3970 ～ 4007 は口縁部に横位の隆帯が一本めぐる一群で、隆帯下部に入組コ字文などの沈線文を描くものである。これらの沈線文には、刺突文を加えるものがあるが、比較的古い要素である。これらの胴部の地文も沈線文施文後に施される。3985 ～ 3991 は口縁部の隆帯区画下に弧状の沈線文や弧状の隆帯区画が付されるものである。3988 ～ 4001・4003 ～ 4006 は口縁部隆帯下の入組コ字文の間に横ハ字文を充填するもので、4006 の胴部もこれらの土器群に伴う典型的な懸垂文である。3995・3998 は口縁部に二帯の隆帯がめぐり、橋状把手が付されるもので、沖ノ原Ⅱ式でも最終段階に位置付けられると考えられる。胴部の横ハ字文も変容する

のもこの段階の特色である。また 3995 の隆帯上の円形刺突文は、管状工具による。4008 は口縁部の楕円区画内に横ハ字文を充填する稀な資料である。4009 ～ 4012 は３ａ期の粗製的な土器で口縁部にめぐる沈線区画に刺突列が加えられる。胴部は地文縄文のものと、縦位の条線文が施されるものがある。条線文は７～９本単位の櫛歯状工具で施される。

4013 ～ 4021 は、第Ⅰ群第３ｂ類の大木９式古段階の土器で、口縁部に渦巻状の隆帯文が描かれる。4023 ～ 4051 は、加曽利ＥⅢ式土器で、口縁部の横位の渦巻文や楕円区画が描かれ、胴部には縦位の磨消懸垂文や蛇行沈線文が垂下する。4052 ～ 4054 は加曽利ＥⅣ式土器で、4057 は胴部の縦位磨消懸垂文間に矢羽根状沈線文が施されるものである。4058 は第Ⅰ群第３ｃ類の加曽利ＥⅣ式土器の釣手部分である。4061 は台付土器の台部である。4062 は有溝小把手土器の胴部である。4063・4064・4066 ～ 4075・4077 は地文縄文のみの粗製的な土器である。4082 は有孔鍔付土器の胴部で赤彩が認められる。4083 は有溝小把手土器である。4084 ～ 4089 は浅鉢である。

（２）縄文時代後期（４期～６期）の土器群（図版第 411 図～第 416 図）

①４期（三十稲場式期）の土器群（図版第 411 図・第 416 図）

4090 ～ 4112 は、第Ⅱ群第１ａ類の三十稲場式土器で、胴部に瘤状突起が付されるもの（4090 ～ 4092・4095）、縄文施文のもの（4096・4113）、花弁状刺突文などを施すもの（4098 ～ 4112）がある。このなかで 4099 は新段階に位置づけられる。4116・4117 は第Ⅱ群第 1b 類の称名寺式土器である。

②５期（南三十稲場式期）の土器群（図版第 411 図～第 414 図・第 416 図）

4118 ～ 4136 は第Ⅱ群第２ａ類の南三十稲場式土器のなかでも胴部全面に懸垂文を描く一群である。口縁部文様は。の字状や渦巻文を中心に（）字状もしくは同心円状の文様が描かれ、その両側に横位沈線と上下の刻目を施すものが多い。胴部文様は、三角形区画や米字状などの幾何学文などがある。4124 ～ 4127、4131・4132・4136 など多条彩沈線文や器壁厚が薄手になるもの、頸部を横位に区分するものは新段階に位置付けられる。4137・4139 ～ 4158 は、頸部に無文部を持ついわゆる「小仙塚類型」（註 129）である。口縁部文様は、前者と同様での字状や渦巻文に同心円状文、横位沈線文・刻目文などがあるが、次第に両面に施されるもの（4140・4143）、内面に文様を施すもの（4144・4145）へと変化する。これらの頸部無文帯には、新しい段階の要素としてＹ字状やＶ字状の懸垂文、８字状貼付文が付されるものがある。胴部文様は、大柄な渦巻文などの曲線的な文様が多く、磨消縄文になるもの、縄文地文や無文に沈線文を施すものがある。4159 ～ 4184 は第Ⅱ群第２ｃ類の浅顔形の深鉢で、薄手の黒色系の器面を特徴とする。口縁部は、横位隆帯を持たないもの（4159 ～ 4162）、１本から２本めぐるもの（4163 ～ 4166・4168）があり、その下部に三角形区画などの幾何学文が磨消縄文で描かれる。また８字状貼付文や口唇部内面の窪みも特徴である。4180 ～ 4184 は多条細沈線文や連鎖状文を描くもので、「石神類型」（註 130）と呼称される一群であり、６期に下る可能性もある。

③６期（加曽利Ｂ１式並行期）の土器群（図版第 414 図～第 416 図）

4185 ～ 4225 は、第Ⅱ群第３類の加曽利Ｂ１式土器であり、薄手ではないが黒色の器面である。口縁部には横位の帯縄文との字状やクランク状の区切文を施し、内面には円形刺突列や横位多条沈線帯が特徴的に見られる。4222 ～ 4225 の口縁部には８字状の突起や耳状突起が付される。4230 は丸底の小形土器で、連鎖状の文様が施される。4232・4233 は浅鉢で、内面に多条沈線文や渦巻文が描かれる。4235 ～ 4237 は蓋形土器で、鎖状隆帯や花弁状刺突文などが施される。4238 ～ 4248 は注口土器で、内面の磨きを加えないものが多い。

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1	174	1号住居跡	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2	174	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	横位沈線区画（平沈）	—	砂粒	橙	○	—	
3	174	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
4	174	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
5	174	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	横位沈線区画	—	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	○	○	
6	174	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
7	174	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
8	174	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横位沈線文（平沈）＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	粘土帯幅：16㎜
9	174	〃	2期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部条線文	—	砂粒、小礫（3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
10	174	〃	2期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
11	174	〃	2期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
12	174	〃	2期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位条線文	—	砂粒、石英	浅黄橙	○	○	
13	174	〃	2期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位条線文	—	砂粒	灰白	—	○	
14	174	〃	2期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位条線文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
15	174	〃	2期	第Ⅰ群第2c4類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
16	174	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	橙	○	—	
17	174	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	環状突起、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
18	174	〃	2a期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻先文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
19	174	〃	3a期	第Ⅰ群第3a2類	深鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
20	174	〃	3b期	第Ⅰ群第3a4類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線文＋刺突列	L	砂粒、小礫（3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
21	174	〃	3期	第Ⅰ群第3a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線文、胴部縦位懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
22	174	〃	—	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	一部に網代痕。
23	174	〃	—	—	不明	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
24	174	2号住居跡	—	—	深鉢	—	—	13.6	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	明黄褐	○	○	
25	174	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	H2	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文・基隆帯による渦巻文	—	砂粒	橙	○	—	
26	174	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	X字状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
27	174	3号住居跡	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	—	
28	174	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、隆帯	RL	砂粒	橙	—	—	
29	174	〃	1期	第Ⅰ群第1a4類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	弧線文（平）	RL	砂粒	明赤褐	—	—	
30	174	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
31	174	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	橙	—	—	
32	175	3号住居跡	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文・基隆帯による渦巻文	—	砂粒	にぶい橙	○	—	
33	175	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯、刺突文	—	砂粒、雲母	明赤褐	—	○	
34	175	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒、小礫（5㎜）	明赤褐	—	—	
35	175	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
36	175	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、小礫（3㎜）	橙	—	○	
37	175	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
38	175	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
39	175	〃	2期	第Ⅰ群第2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯による渦巻文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
40	175	〃	2期	第Ⅰ群第2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	頸部	胴部横位沈線区画（平）	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
41	175	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	頸部	胴部横位沈線区画（平）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
42	175	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
43	175	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
44	175	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横位沈線区画文（平）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
45	175	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横位沈線区画文（平）	RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
46	175	〃	2期	第Ⅰ群第2b2類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部渦巻文	—	砂粒	灰白	—	—	
47	175	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
48	175	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
49	175	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文、矢羽根状沈線文	—	砂粒	灰白	○	—	
50	175	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文、胴部縦位懸垂文、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（3.5㎜）	にぶい黄橙	—	—	
51	175	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
52	175	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
53	175	〃	2b期	第Ⅰ群第5e類	深鉢	C3	24	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	

第14表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
54	175	〃	中期	—	深鉢	—	—	10.6	—	—	—	胴部～底部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
55	176	4号住居跡	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	10.8	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文、渦巻文	RL	砂粒	橙	○	—	
56	176	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒	橙	○	—	
57	176	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒	明黄褐	○	○	
58	176	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒、白色粘土粒	橙	—	○	
59	176	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
60	176	〃	1期	第Ⅰ群第1d類	深鉢	—	—	9	—	—	—	胴部～底部	半隆起線文、基隆帯＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
61	176	〃	1期	第Ⅰ群第1b2類	深鉢	G1	16	8.2	16.8	16.6	1.3	口縁部～底部	半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	○	○	
62	176	5号住居跡	1期	第Ⅰ群第1c類	深鉢	G1	17.2	9.2	25.6	22.8	2.6	口縁部～底部	環状突起、三角状突起	RL	砂粒、橙色粘土粒	橙	—	○	
63	176	〃	1期	第Ⅰ群第1a1類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、環状突起	LR	砂粒	橙	—	○	
64	176	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部圧痕	—	砂粒、雲母	にぶい黄橙	○	—	
65	176	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯による渦巻文、逆Ｕ字状懸垂文	RL	砂粒	にぶい橙	○	○	地文→隆帯
66	176	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい橙	○	○	
67	176	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	橙	○	—	
68	176	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	
69	176	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	頸部横位沈線区画（平）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
70	176	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
71	176	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	黄橙	—	○	
72	176	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
73	176	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯、環状突起	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
74	176	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
75	176	〃	1期	第Ⅰ群第6a類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒、雲母、石英	橙	—	—	
76	176	〃	中期	—	深鉢	—	—	6.4	—	—	—	胴部～底部	—	撚 LR	砂粒	橙	△	○	網代圧痕
77	177	6号住居跡・炉内	1期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯による縦位懸垂文	RL	砂粒、雲母	橙	—	—	
78	177	〃	1期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯による縦位懸垂文	RL	砂粒、雲母	橙	—	—	
79	177	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
80	177	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（平）	RL	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
81	177	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	LR	砂粒	橙	—	—	
82	177	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	横位楕円区画文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
83	177	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯＋刻目	—	砂粒	橙	—	○	
84	177	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
85	177	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	
86	177	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
87	177	〃	—	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
88	177	7号住居跡	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文・基隆帯による渦巻文、刺突文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
89	177	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢		—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯、環状突起	—	砂粒、白色粒子	明黄褐	—	○	
90	177	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい橙	—	—	
91	177	8号住居跡	1期	第Ⅰ群第1a2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横位沈線区画文	LR	砂粒、白色粒子	橙	—	○	
92	177	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
93	177	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文、平行沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
94	177	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	—	○	
95	177	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起、口縁部区画	—	砂粒	にぶい橙	—	○	
96	177	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	G1	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文・基隆帯による渦巻文、橋状把手	—	砂粒	灰黄褐	—	○	
97	178	8号住居跡	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯、環状突起	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
98	178	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	三角形区画文	—	砂粒	橙	—	○	
99	178	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
100	178	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	橙	—	—	
101	178	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒、橙色粒子	灰黄褐	○	—	
102	178	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒、白色粒子	明黄褐色	○	○	
103	178	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	褐灰	—	—	
104	178	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	褐灰	—	—	
105	178	〃	1期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位懸垂文、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（4㎜）	灰白	—	—	
106	178	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、赤褐色粒子	橙	—	—	
107	178	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、楕円区画文＋刺突文充填	—	砂粒	橙	○	○	

第15表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
108	178	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、有節沈線文、玉抱三叉文	—	砂粒	にぶい橙	—	—	
109	178	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起	—	砂粒	にぶい橙	○	—	
110	178	〃	1期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒	褐	○	—	
111	178	〃	1期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	L	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
112	178	〃	1期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	14.4	—	—	—	—	口縁部	口唇部圧痕	RL	砂粒	橙	○	○	
113	178	〃	1期	第Ⅰ群第6a類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒、石英	褐灰	—	—	
114	178	9号住居跡	1期	第Ⅰ群第1a2類	深鉢	G1	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起＋刻目、圧痕隆帯、縄文側面圧痕	RL	砂粒、小礫（5㎜）	橙	○	○	
115	178	〃	1期	第Ⅰ群第1a2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起＋刻目	—	砂粒	橙	○	○	
116	178	〃	1期	第Ⅰ群第1a2類	深鉢	G1	19	—	—	—	—	口縁部	圧痕隆帯、環状突起、蛇行沈線文、鋸歯状口縁	RL	砂粒	橙	○	○	
117	178	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文	RL	砂粒、雲母	橙	○	○	
118	178	〃	1期	第Ⅰ群第1a2類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画＋半隆起線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	補修孔（6㎜）
119	179	9号住居跡	1期	第Ⅰ群第1a2類	深鉢	G1	16.4	9.4	20	20	2.1	口縁部～底部	横位刻目隆帯	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
120	179	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、結節縄文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
121	179	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	蛇行沈線文	RL	砂粒	橙	—	○	
122	179	〃	1期	第Ⅰ群第1b1類	深鉢	H3	20	8.8	22	17.6	1.4	完形	半隆起線文・基隆帯による渦巻文・胴部懸垂文、環状突起	—	砂粒	浅黄橙	○	○	補修孔、網代圧痕
123	179	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文・基隆帯による渦巻文	—	砂粒	橙	—	—	
124	179	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
125	179	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
126	179	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
127	179	〃	1期	第Ⅰ群第1b2類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯による渦巻文、環状突起	—	砂粒、赤褐色粒子	浅黄橙	—	—	
128	180	9号住居跡	1期	第Ⅰ群第1b1類	深鉢	G1	28.8	15.6	31.4	28.6	8.5	口縁部～底部	半隆起線文、円形文、把手、鋸歯状突起＋有節沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
129	181	9号住居跡	1期	第Ⅰ群第1b1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	把手	鋸歯状突起、有節沈線文	—	砂粒	橙	—	—	128と同一個体。
130	181	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	把手	環状突起	—	砂粒	橙	○	—	
131	181	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	粘土帯幅：25㎜
132	181	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	橋状把手、半隆起線文	—	砂粒、赤褐色粒子	灰黄褐	○	—	
133	181	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	橋状把手、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	—	
134	181	〃	1期	第Ⅰ群第1b2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、環状突起、三叉文	—	砂粒	橙	○	○	
135	181	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒、赤褐色粒子	灰黄褐	○	—	
136	181	〃	1期	第Ⅰ群第1b2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	橋状把手、半隆起線文・基隆帯による渦巻文	—	砂粒、赤褐色粒子	浅黄橙	—	—	
137	181	〃	1期	第Ⅰ群第1b2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、環状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
138	181	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、楕円区画文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
139	181	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、楕円区画文	—	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	○	—	
140	181	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、有節沈線文	—	砂粒	明黄褐	—	○	
141	181	〃	1期	第Ⅰ群第1b2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、三叉文	—	砂粒	褐灰	○	○	13B住292と接合。
142	181	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒、赤褐色粒子	浅黄橙	—	—	
143	181	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、赤褐色粒子	浅黄橙	—	—	
144	181	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、逆U字状文	—	砂粒、赤褐色粒子	浅黄橙	○	—	
145	181	〃	1期	第Ⅰ群第1b2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、三叉文	—	砂粒、赤褐色粒子	浅黄橙	—	—	
146	182	9号住居跡	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、三叉文	—	砂粒、赤褐色粒子	浅黄橙	—	—	
147	182	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文による渦巻文、三叉文	—	砂粒、赤褐色粒子	灰黄褐	○	—	粘土帯幅：20㎜前後。
148	182	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、隆帯＋刺突列	—	砂粒、小礫（5㎜）	にぶい黄橙	○	—	
149	182	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
150	182	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯＋刻目	—	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	○	
151	182	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	連続弧線文	—	砂粒	橙	○	○	
152	182	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯＋爪形文、半隆起線文	—	砂粒	明黄褐	○	○	
153	182	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、蓮華文	—	砂粒	橙	—	○	
154	182	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、蓮華文	—	砂粒	橙	—	—	
155	182	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、蓮華文	—	砂粒	橙	○	○	
156	182	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文＋爪形文、蓮華文	—	砂粒	橙	○	○	
157	182	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	蛇行沈線文、蓮華文	—	砂粒	橙	—	○	
158	182	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文＋爪形文、蓮華文	—	砂粒	橙	○	○	
159	182	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文＋爪形文、蓮華文	—	砂粒	橙	—	○	
160	182	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	蓮華文	—	砂粒	橙	○	○	
161	182	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	蓮華文	—	砂粒	橙	○	○	

第16表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
162	182	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d1-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状突起	—	砂粒	明赤褐	—	—	
163	182	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d1-1 類	深鉢	—	—	9.6	—	—	—	胴部～底部	橋状把手（欠）、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、石英	明赤褐	—	○	
164	182	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	突起	橋状把手、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
165	182	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	突起	橋状把手（欠）、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
166	182	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯、袋状突起	—	砂粒、小礫（4 ㎜）	明赤褐	—	○	
167	182	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、基隆帯	—	砂粒、雲母	橙	○	—	
168	183	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文、剣先文、矢羽根状沈線文	—	砂粒、粘土塊（11 ㎜）	浅黄橙	—	—	
169	183	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文、腕骨文、矢羽根状沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
170	183	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文、矢羽根状沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
171	183	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文、懸垂文、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	—	—	
172	183	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文、矢羽根状沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
173	183	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位沈線文、弧状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	—	—	
174	183	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状の無文帯	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
175	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 5a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起	RL	砂粒	橙	—	○	
176	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、赤褐色粒子	橙	—	—	
177	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 6c1 類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
178	183	〃	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	11.2	—	—	—	底部	—	RL	砂粒	橙	—	—	網代圧痕
179	183	〃	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	7.2	—	—	—	胴部～底部	—	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	○	底部剥離。
180	183	10 号住居跡	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
181	183	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
182	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	S 字状突起	—	砂粒、赤褐色粒子	橙	○	○	
183	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—		—	—	—	—	口縁部	渦巻状突起、有節沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
184	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線文、有節沈線文	撚 l	砂粒、赤褐色粒子	橙	—	—	
185	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線による横帯区画、波状沈線文（平）	LR	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	○	○	
186	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
187	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
188	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線による方形区画文	LR	砂粒	明赤褐	—	—	
189	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文による懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	破断面にオコゲ付着。
190	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文（平）	撚	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	○	
191	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文、三叉文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
192	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒	橙	—	—	補修孔（6 ㎜）
193	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
194	183	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
195	184	10 号住居跡	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	9.2	—	—	—	胴部～底部	半隆起線文、基隆帯、渦巻文、環状突起	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
196	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
197	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
198	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	14.2	—	—	—	胴部～底部	半隆起線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	網代圧痕。
199	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、橋状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
200	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、基隆帯、橋状把手	—	砂粒、小礫（7 ㎜）	明赤褐	—	—	
201	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、袋状突起	—	砂粒	明赤褐	○	○	
202	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	突起	W 字状隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
203	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部剣先文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
204	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文	LR	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
205	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画（隆）、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
206	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位渦巻状懸垂文（隆）、矢羽状沈線文	—	砂粒、小礫（3 ～ 5 ㎜）	褐灰	—	○	
207	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
208	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文、矢羽状沈線文、蛇行沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
209	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文、矢羽状沈線文	—	砂粒、小礫（3 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
210	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文、矢羽状沈線文	—	砂粒、小礫（3 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
211	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽状沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
212	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、刺突列、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
213	184	〃	1 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	双頭渦巻文	RL	砂粒	橙	—	○	
214	185	10 号住居跡	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手＋環状突起、刻目隆帯、刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	○	○	
215	185	〃	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯（管状刺突文）、花弁状刺突文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	

第 17 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
216	185	〃	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、花弁状刺突文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
217	185	〃	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
218	185	〃	4a 期	第Ⅱ群第 8c 類	蓋	—	—	—	—	—	—	蓋	刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
219	185	〃	4a 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線文、円形刺突列	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
220	185	〃	5 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	EI	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目	—	砂粒	明黄褐	—	○	
221	185	〃	5 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部縦位懸垂文（単）	LR	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
222	185	〃	5 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	凹文、胴部沈線区画文	LR	砂粒	明黄褐	○	—	
223	185	〃	5 期	第Ⅰ群第 2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋刻目	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	明黄褐	—	—	
224	185	〃	5 期	第Ⅰ群第 2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
225	185	〃	不明	—	深鉢	—	—	13.2	—	—	—	底部	—	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
226	185	11 号住居跡	1c 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	18	—	—	—	胴部～底部	胴部縦位懸垂文（平）、胴部渦巻懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
227	186	11 号住居跡	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H3	22.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部波状沈線文（平）、突起（欠）	RLR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
228	186	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	H6	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横帯沈線区画（単）＋波状沈線文（単）、胴部横位沈線区画	RL	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	○	○	
229	186	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（単）	RL	砂粒	橙	○	—	
230	186	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
231	186	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
232	186	〃	1c 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	H6	35.2	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	撚	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
233	186	〃	1c 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	撚	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
234	186	〃	1c 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	撚	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
235	186	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H3	17.6	—	—	—	—	口縁部～胴部	環状突起、交互刺突文、頸部横位沈線区画（平）、波状沈線文（平）	RL	砂粒	橙	○	○	
236	187	11 号住居跡	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H3	25.2	—	—	—	—	口縁部～胴部	頸部横位沈線区画（平）、波状沈線文（平）	撚 R	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
237	187	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（未調整）	撚 R	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
238	187	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（未調整）	撚 R	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
239	187	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（未調整）	撚 R	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
240	187	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手（欠）、口縁部隆帯文	撚 R	砂粒	浅黄橙	—	○	
241	187	〃	1c 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	C2	11.7	5.2	15.4	—	0.6	口縁部～底部	胴部横位沈線区画（平）＋波状沈線文（平）	撚 L	砂粒、小礫（3 ～ 6 ㎜）	橙	○	○	
243	187	〃	1c 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部波状沈線文（単）、橋状把手＋Ｓ字文＋渦巻文（隆）	撚 R	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
244	187	〃	1c 期	第Ⅰ群第 5c 類	深鉢	H	26	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文	撚 R	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	○	—	
245	187	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a6 類	深鉢	I1	16	9.2	23.3	—	2.4	口縁部～底部	口縁部弧状隆帯文、胴部横位沈線区画（平）＋波状沈線文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
246	188	11 号住居跡	1c 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	I1	16.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	刻目隆帯、区画内充填沈線文	RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
247	188	〃	1c 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部剣先状隆帯文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
248	188	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
249	188	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	C	19.2	—	—	—	—	口縁部～胴部	中空突起＋Ｃ字状文、胴部縦位懸垂文（平）、胴部渦巻状懸垂文（平）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
250	188	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい橙	○	○	
251	188	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（単）、胴部横位沈線区画（単）、胴部渦巻状懸垂文（単）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
252	188	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	—	—	6.8	—	—	—	胴部～底部	胴部縦位懸垂文（単）、胴部渦巻状懸垂文（単）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
252	188	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	—	—	8.4	—	—	—	胴部～底部	胴部横位沈線区画	RL	砂粒	にぶい黄橙			
253	188	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）、口唇部渦巻文	RL	砂粒	にぶい橙	○	—	
254	188	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい橙	—	○	
255	188	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画、胴部縦位懸垂文（平）、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい橙	○	—	
256	188	〃	2a 期	第Ⅰ群第 5c2 類	浅鉢	D2	24.4	8.8	10.2	—	2.5	口縁部～底部	口縁部渦巻状隆帯文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
257	188	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい橙	—	—	
258	188	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文、環状突起	—	砂粒	明赤褐	○	○	
258	188	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、有節沈線文	—	砂粒	にぶい橙	—	○	
259	188	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	橋状把手、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
261	188	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
262	188	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（3 ～ 6 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
263	188	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
264	188	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
265	188	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	

第 18 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
266	188	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、円形文	—	砂粒、小礫（2～8㎜）	明赤褐	—	○	
267	188	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	突起	鋸歯状突起、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
268	189	11号住居跡	1期	第Ⅰ群第1d1-2類	深鉢	H3	19	—	—	—	—	口縁部～胴部	鋸歯状突起、眼鏡状突起、袋状突起、半隆起線文、基隆帯	—	砂粒、小礫（1～2㎜）	橙	—	○	
269	189	〃	1期	第Ⅰ群第1d2-2類	深鉢	H2	21	—	—	—	—	口縁部～胴部	袋状突起、半隆起線文、基隆帯	—	砂粒、小礫（4㎜）	橙	—	○	
270	189	〃	1期	第Ⅰ群第1f類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	蛇行沈線文、抽象文、キャタピラ文	RL	砂粒	明赤褐	○	○	
271	189	〃	1期	第Ⅰ群第1d類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
272	189	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部～底部	半隆起線文＋有節沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
273	189	〃	1期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部～底部	蛇行沈線文	—	砂粒、小礫（3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
274	189	〃	1期	第Ⅰ群第5g類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒、橙色粒子	にぶい橙	○	○	
275	189	〃	1期	第Ⅰ群第6b類	浅鉢	B	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文	—	砂粒、雲母	橙	—	—	
276	189	12号住居跡	2期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、矢羽状沈線文	—	砂粒、小礫（3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
277	189	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
278	189	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画＋刻目	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
279	189	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
280	189	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
281	189	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
282	189	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
283	189	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	—	
284	189	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
285	190	13B号住居跡	1a期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	G	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
286	190	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	LR	砂粒、赤褐色粒子	浅黄橙	—	—	
287	190	〃	1c期	第Ⅰ群第5c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	撚L	砂粒、小礫（3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
288	190	〃	1c期	第Ⅰ群第5c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	貼付文	撚L	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
289	190	〃	1c期	第Ⅰ群第5c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	撚L	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
290	190	〃	1c期	第Ⅰ群第5c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	貼付文	撚L	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
291	190	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文、三叉文	—	砂粒	橙	—	○	
292	190	〃	1期	第Ⅰ群第1b2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
293	190	〃	1期	第Ⅰ群第1a3類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	頸部弧線文（単）	—	砂粒	明赤褐	○	○	
294	190	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	—	砂粒、小礫（3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
295	190	〃	1期	第Ⅰ群第1b2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
296	190	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（3㎜）	明赤褐	○	—	
297	190	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位懸垂文（単）、三角形区画＋刺突文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
298	190	〃	1期	第Ⅰ群第1b2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部～底部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
299	190	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、小礫（3㎜）	橙	—	—	
300	190	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
301	190	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯文、半隆起線文	RL	砂粒	橙	○	○	
302	190	〃	1期	第Ⅰ群第1b3類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
303	190	〃	1期	第Ⅰ群第5c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
304	191	13C号住居跡	1期	第Ⅰ群第5c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	波状沈線文（平）	RL	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
305	191	〃	1期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画文（平）、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	明赤褐	—	○	
306	191	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画文（平）、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
307	191	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
308	191	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部逆Ｕ字状懸垂文（平）	RL	砂粒	明黄褐	—	—	
309	191	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、半隆起線文、有節沈線文	—	砂粒、小礫（3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
310	191	〃	1期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
311	191	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
312	191	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒	橙	○	○	
313	191	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、胴部縦位懸垂文（隆）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
314	191	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	
315	191	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
316	191	13D号住居跡	1期	第Ⅰ群第1a1類	深鉢	D	26.6	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、環状突起、胴部Ｙ字状懸垂文、圧痕隆帯文、蛇行沈線文	RL	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄褐	○	—	
317	191	〃	1期	第Ⅰ群第1a2類	深鉢	G1	23.8	—	—	—	—	口縁部	入字状突起、橋状把手、口縁部横位圧痕隆帯	RL	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄褐	○	○	
318	191	〃	1期	第Ⅰ群第1a2類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位刻目隆帯＋楕円区画文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	

第19表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
319	191	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a2 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位圧痕隆帯	RL	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	—	—	
320	191	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯＋爪形文	—	砂粒	明赤褐	○	—	
321	191	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	入字状突起、楕円区画文＋刺突文	—	砂粒、白色粒子	明赤褐	○	○	
322	191	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	○	—	
323	191	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
324	191	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	11.2	—	—	—	胴部～底部	胴部縦位懸垂文（単）	RL	砂粒、橙色粒子	にぶい黄褐	—	—	網代圧痕。
325	192	13D 号住居跡	1 期	第Ⅰ群第 1b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部～底部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
326	192	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部～底部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
327	192	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文＋爪形文	—	砂粒	橙	—	○	
328	192	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
329	192	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、赤褐色粒子	浅黄橙	—	—	網代圧痕。
330	192	〃	1～2a 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	網代圧痕。
331	192	〃	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	○	—	
332	192	〃	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
333	192	〃	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画	RL	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	○	
334	192	〃	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、C 字状貼付文	RL	砂粒、赤褐色粒子	橙	○	○	
335	192	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）	RL	砂粒、石英、小礫（3 ㎜）	明赤褐	—	○	
336	192	〃	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	13.2	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	橙	○	—	網代圧痕。
337	192	〃	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	13.6	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	橙	—	○	網代圧痕。
338	192	〃	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	撚 L	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
339	192	〃	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	12.8	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	橙	—	○	網代圧痕。
340	192	〃	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	13.2	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	網代圧痕。
341	192	〃	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	8.6	—	—	—	胴部～底部	—	RL	砂粒、小礫（5 ㎜）	明赤褐	○	○	網代圧痕。地文横回転。
342	193	15 号住居跡・炉体	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	18.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、棒状懸垂文	RL	小礫（2～5 ㎜）	橙	○	○	
343	193	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	18	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部隆帯区画＋刺突、入組コ字文＋刺突、有尾渦巻文	LR	小礫（2～5 ㎜）	浅黄橙	○	—	
344	193	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	16.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部隆帯区画、乙字文＋刺突、有尾渦巻文、胴部懸垂文	RL	小礫（2～5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
345	193	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部隆帯区画＋刺突、入組コ字文＋刺突、有尾渦巻文	—	砂粒、小礫（2～5 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
346	193	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a3-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部隆帯区画、入組コ字文＋刺突、有尾渦巻文	—	砂粒、小礫（2～5 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
347	193	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a3-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、棒状懸垂文、入組コ字文	L	砂粒	橙	—	—	
348	193	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、短沈線文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
349	193	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-3 類	深鉢	A3	—	—	—	—	—	口縁部	隆沈線文＋瘤状突起	LR	小礫（4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
350	193	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
351	193	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
352	193	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	14	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部楕円区画、胴部磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2～5 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
353	193	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	—	—	
354	194	17 号住居跡	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	波状沈線文（平）	撚 R	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
355	194	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
356	194	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
357	194	〃	2 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部区画（刺突列）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
358	194	〃	2 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部沈線区画＋刺突列、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
359	194	〃	2 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	A3	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
360	194	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	—	
361	194	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	橙	○	—	
362	194	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
363	194	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、三叉文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰黄褐	—	—	
364	194	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
365	194	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
366	194	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
367	194	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	I3	21.2	—	—	—	—	口縁部～胴部	渦巻状突起、口縁部区画（刺突列）、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
368	194	〃	中期	—	深鉢	—	—	14	—	—	—	底部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	網代圧痕。
369	194	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部沈線区画＋刺突列、隆帯	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
370	194	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部下半～底部	胴部懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	—	—	網代圧痕。
371	194	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	10.8	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、三叉文、刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
372	194	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、赤褐色粒子	橙	—	○	

第 20 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
373	194	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	7.4	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	—	—	
374	195	18号住居跡	2期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	11.2	—	—	—	胴部下半～底部	—	RL	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	—	
375	195	〃	2c期	第Ⅰ群第7b類	台形	—	18.4	18.8	11.6	11.6	—	完形	弧状沈線文、下端横位沈線区画＋刺突列	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
376	195	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	7.2	—	—	—	胴部～底部	胴部縦位沈線文、ワラビ手状懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	○	
377	195	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	—	砂粒、小礫（3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
378	195	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋刻目	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
379	195	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	E	28	—	—	—	9.5	口縁部～胴部下半	胴部横位沈線区画（平）、双頭渦巻文（隆）、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
380	195	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
381	195	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状懸垂文（隆）、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
382	195	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状突起、刺突列、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
383	195	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画＋刻目	—	砂粒、小礫（3㎜）	にぶい黄褐	○	—	
384	195	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄褐	○	○	
385	195	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状懸垂文（隆）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
386	196	18号住居跡	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部半隆起線文＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
387	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	弧状懸垂文（隆）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
388	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部弧状沈線文（平）、刺突列	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
389	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
390	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2a4類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	口唇部に空洞。
391	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2a4類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文、胴部横位沈線区画（平）	—	砂粒、小礫（3㎜）	にぶい黄褐	○	○	
392	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、腕骨文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
393	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、剣先文	RL	砂粒	橙	—	○	
394	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽状沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
395	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	LR	砂粒	明黄褐	—	—	
396	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横帯沈線区画＋波状文（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
397	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2c4類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（単）、横位刺突列	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
398	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2c4類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刺突文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
399	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2c4類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突文（半竹）	—	砂粒	明黄褐	—	○	
400	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2c4類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突文（半竹）	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
401	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（単）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
402	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突列（縦）、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
403	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
404	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
405	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
406	196	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯区画＋渦巻状懸垂文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
407	196	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画＋刻目	—	砂粒、小礫（3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
408	196	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、交互刺突文	RL	砂粒	明赤褐	○	○	
409	196	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	—	
410	196	〃	3期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
411	196	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線文	RL	砂粒、小礫（3㎜）	にぶい黄褐	○	—	
412	196	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
413	196	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
414	196	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒、小礫（3㎜）	橙	—	○	
415	196	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
416	197	19A・B号住居跡	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部無文帯、弧状沈線文（平）	RL	砂粒	明赤褐	○	—	
417	197	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	波状沈線文（平）、突起（欠）	RL	砂粒	明赤褐	○	—	
418	197	〃	1期	第Ⅰ群第1b3類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	半隆起線文、クランク文（平）	LR	砂粒、白色粒子、小礫（4㎜）	明赤褐	—	○	
419	197	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯・半隆起線文	—	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
420	197	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文、三叉文	—	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
421	197	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
422	197	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、三叉文	RL	砂粒	赤褐	—	○	
423	197	〃	1期	第Ⅰ群第1d類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
424	197	〃	1期	第Ⅰ群第1d1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯・半隆起線文、把手	—	砂粒	橙	—	—	
425	197	〃	2期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	

第21表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
426	197	〃	2期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	Ⅰ	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	明赤褐	—	—	
427	197	〃	2期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	頸部	頸部横位区画（平）、波状沈線文（平）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	○	
428	197	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	Ⅰ	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（欠）、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
429	197	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	突起	空中突起＋C字状隆帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
430	197	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）、波状沈線文（単）	RL	砂粒	橙	○	—	
431	197	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、弧線沈線文（平）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
432	197	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、弧線沈線文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
433	197	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽状沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
434	197	〃	1a期	第Ⅰ群第6a類	浅鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、刻目	RL	砂粒、雲母	にぶい黄橙	—	—	
435	197	〃	4期	第Ⅱ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	○	
436	197	〃	4期	第Ⅱ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部縦位沈線文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
437	197	〃	4期	第Ⅱ群第1b類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄褐	○	—	
438	198	20A号住居跡	1期	第Ⅱ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	○	網代圧痕。
439	198	〃	1期	第Ⅱ群第1d類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	粘土帯22㎜
440	198	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（平）、沈線端部に瘤状突起	RL	砂粒	橙	—	○	
441	198	〃	2a期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I2	10.4	—	25	—	1.2	口縁部～底部	中空突起、渦巻隆帯文、充填沈線文、胴部渦巻懸垂文	LR	砂粒	灰白	○	○	
442	198	20C号住居跡	2b期	第Ⅰ群第2b2類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位沈線区画（平）、渦巻懸垂文（平）	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
443	198	〃	2b期	第Ⅰ群第2b2類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
444	198	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、腕骨文、矢羽状沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
445	198	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
446	198	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文、矢羽状沈線文	—	砂粒	明黄褐	—	○	
447	198	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
448	198	〃	2期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	K2	20.4	—	—	—	—	口縁部～胴下半	双頭渦巻文（隆）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
449	199	20C号住居跡	1～2a期	第Ⅰ群第2d1類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状突起、半隆起線文、袋状突起、交互刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
450	199	〃	2c期	第Ⅰ群第2c1類	深鉢	I4	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
451	199	〃	2c期	第Ⅰ群第2c1類	深鉢	I4	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（隆沈）＋刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
452	199	〃	2c期	第Ⅰ群第2c4類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	刺突文、円形貼付文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
453	199	〃	3b期	第Ⅰ群第3a4類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	弧状沈線文、瘤状突起、胴部懸垂文（沈）	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	○	
454	199	〃	3b期	第Ⅰ群第3a4-2類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、弧状隆帯文、弧線文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	浅黄橙	—	—	
455	199	〃	3b期	第Ⅰ群第3a4-2類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	弧状隆帯文、胴部懸垂文	L	砂粒、小礫（4㎜）	灰黄褐	○	—	
456	199	〃	3b期	第Ⅰ群第3a10類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部刻目隆帯文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	○	○	
457	199	〃	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
458	199	〃	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	A	40	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	RL	砂粒、小礫（4㎜）	浅黄橙	—	—	
459	199	〃	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	12.8	—	—	—	底部	条線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	明黄褐	—	○	網代圧痕。
460	199	〃	中期	第Ⅰ群第6類	浅鉢	D1	40	9.6	16	—	8.1	口縁部～底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
461	200	21号住居跡	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
462	200	〃	2期	第Ⅰ群第2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位懸垂文（平）、矢羽根沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
463	200	〃	2c期	第Ⅰ群第2c5類	深鉢	—	19.8	—	—	—	—	口縁部	双頭渦巻文、横位弧状沈線文	—	砂粒	褐灰	○	—	
464	200	〃	2c期	第Ⅰ群第2c1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	双頭渦巻文	RL	砂粒	明黄褐	○	—	
465	200	〃	2c期	第Ⅰ群第2c1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刺突文、渦巻文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	○	—	
466	200	〃	2c期	第Ⅰ群第2c1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋刺突列、条線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄褐	—	—	
467	200	〃	2c期	第Ⅰ群第2c1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
468	200	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	K2	14	—	—	—	—	口縁部	頸部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
469	200	〃	2c期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文、矢羽状沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	—	—	
470	200	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
471	200	〃	2c期	第Ⅰ群第2c5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文、横位弧状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
472	200	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文、矢羽状沈線文	—	砂粒、小礫（2～9㎜）	明黄褐	—	—	
473	200	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部剣先文	RL	砂粒	明黄褐	○	—	
474	200	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）	RL	砂粒	明赤褐	○	○	
475	200	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	—	—	
476	200	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
477	200	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	明黄褐	—	—	
478	200	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、沈線文	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
479	200	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	RL	砂粒	浅黄橙	—	—	

第22表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
480	200	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、沈線区画文	—	砂粒	橙	—	—	
481	200	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
482	200	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文	L	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
483	200	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、沈線文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
484	200	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文、沈線＋刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
485	201	21 号住居跡	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	21.6	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、棒状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	砂粒、赤褐色粒子	浅黄橙	○	○	
486	201	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、渦巻状懸垂文	RL	砂粒	灰白	—	—	
487	201	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、渦巻状懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	—	—	
488	201	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	○	○	
489	201	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	—	
490	201	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、環状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
491	201	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	把手	鶏頭冠状把手	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
492	201	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部区画＋刺突列、条線文	撚 L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
493	201	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
494	201	〃	4b 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画＋刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
495	201	〃	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
496	201	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画（単）、J 字状懸垂文	RL	砂粒	灰黄褐	—	—	
497	201	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画（単）	RL	砂粒	明黄褐	○	—	
498	201	〃	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	—	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
499	201	〃	3 期	第Ⅰ群第 3a11 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部一部内屈	L	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
500	201	〃	中期	第Ⅰ群第 5e 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	○	—	
501	202	23 号住居跡	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	A1	30	11	43.2	—	14.7	口縁部～底部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	LR	小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	○	—	
502	202	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A2	14	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、渦巻状懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	○	—	
503	202	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	25.2	—	—	—	—	口縁部～胴部	隆帯側面刺突文、渦巻状懸垂文＋ハ字状懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
504	202	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、充填沈線文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
505	202	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
506	202	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	26.8	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	RL	小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	—	—	
507	202	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、縦位懸垂文（単）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
508	202	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A'	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
509	202	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画（RL）、渦巻状懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
510	203	23 号住居跡	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横長楕円文、刺突文、縦位短沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明褐	○	—	
511	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横長楕円文、横線文、刺突文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
512	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横長楕円文、刺突文、縦位短沈線文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
513	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横長楕円文、横線文、縦位短沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
514	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	15.6	—	—	—	—	口縁部～胴部	横長楕円文、刺突文、縦位短沈線文、胴部縦位懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
515	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A3	—	—	—	—	—	口縁部	横長楕円文、刺突文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
516	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横長楕円文、刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	—	
517	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横長楕円文、横線文、縦位短沈線文	—	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
518	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	14.8	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、胴部縦位懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
519	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-2 類	深鉢	A1	20	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部隆帯区画、渦巻状懸垂文、隆沈線文＋刻目、胴部縦位懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
520	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文、胴部縦位懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
521	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文、沈線＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
522	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	隆沈線文、横位沈線文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
523	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
524	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	胴部区画＋刺突文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
525	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部区画	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明褐	○	—	
526	203	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	—	—	7.8	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	○	
527	203	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文、横ハ字文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
528	203	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部隆帯区画、有尾渦巻文、入組コ字文、横ハ字文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 7 ㎜）	橙	○	○	
529	203	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	波状隆帯区画、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
530	203	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	波状隆帯区画、横ハ字文	L	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
531	203	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部隆帯区画、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	

第 23 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
532	204	23 号住居跡	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部沈線区画＋刺突文、胴部沈線文（磨消縄文含む）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
533	204	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部沈線区画＋刺突文、縦位縦位懸垂文（単）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	○	
534	204	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（単）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
535	204	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部沈線区画＋刺突文、胴部縦位懸垂文（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
536	204	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	逆Ｕ字状・Ｕ字状懸垂文（単）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
537	204	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刺突列	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
538	204	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	J	—	4.4	—	—	—	胴部～底部	隆沈線文、渦巻状懸垂文、逆Ｕ字状文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
539	204	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
540	204	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画、胴部磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
541	204	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画、胴部磨消懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
542	204	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
543	204	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
544	204	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
545	204	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
546	204	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	雨垂れ状刺突文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
547	204	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
548	204	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	E2	—	—	—	—	—	口縁部	Ｃ字状文、弧状沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
549	204	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	Ｃ字状文＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
550	204	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文、刺突列	—	砂粒	明褐	○	—	
551	204	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部隆沈線文（表面磨耗）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
552	204	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
553	204	〃	4b 期	第Ⅱ群第 8 類	蓋	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画内刺突列	—	砂粒	灰白	—	—	
554	205	23 号住居跡	1 ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文、眼鏡状突起	—	砂粒	橙	○	○	
555	205	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
556	205	〃	2 期	第Ⅰ群第 5f 類	深鉢	—	24.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	RL	砂粒	橙	○	○	
557	205	25 号住居跡	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文、刺突列	—	砂粒	橙	○	—	
558	205	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、区画内充填刺突文	—	砂粒	橙	—	—	
559	205	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、三叉文	—	砂粒	橙	—	—	
560	205	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	粘土帯約 20 ㎜
561	205	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、白色粒子	明赤褐	—	○	
562	205	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（未調整）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
563	205	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	褐灰	—	—	
564	205	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
565	205	〃	4b 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
566	205	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	Ｘ字状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
567	205	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、胴部渦巻状懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
568	205	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文（平）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
569	205	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
570	205	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
571	205	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（単）、横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
572	205	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画（刺）、胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
573	205	〃	3 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画＋刻目、横位沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
574	205	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画（刺）、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
575	205	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画（刺）、条線文（8 本）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
576	205	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画（刺）、胴部縦位懸垂文（単）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
577	205	〃	3 期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部隆帯区画文	—	砂粒	明赤褐	—	—	
578	206	26 号住居跡	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、赤褐色粒子、小礫（2 ㎜）	明赤褐	—	—	
579	206	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
580	206	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	Ｘ字状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
581	206	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c1 類	深鉢	—	26.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	双頭渦巻文（隆）、環状貼付文、口縁部区画（平）、縦位半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
582	206	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	波状隆帯文＋刻目、横ハ字文	LR	砂粒、赤褐色粒、小礫（3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	

第 24 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
583	206	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	微隆起線による逆U字文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
584	206	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
585	206	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
586	206	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	28.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	LR	小礫（2～5㎜）	にぶい黄褐	○	○	
587	206	〃	4a 期	第Ⅱ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕	L	小礫（2～6㎜）	にぶい黄橙	○	—	
588	206	〃	4a 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手＋環状貼付文、頸部隆帯区画、花弁状刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
589	207	27 号住居跡	3b 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆）、雨垂状沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
590	207	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
591	207	〃	1～2 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
592	207	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部区画（磨消縄文）＋刺突列	LR	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
593	207	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部波状沈線文（隆）	撚 L	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
594	207	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯＋爪形文、半隆起線文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
595	207	〃	1 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	8.5	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（平）	LR	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
596	207	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
597	207	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文（隆）	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	○	○	
598	207	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、棒状懸垂文、沈線区画文	LR	小礫（2㎜）	にぶい黄褐	○	○	
599	207	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	21.2	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、棒状懸垂文、入組コ字文	LR	小礫（2～5㎜）	にぶい黄褐	○	○	
600	207	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	縦位懸垂文（単）	LR	小礫（2～5㎜）	橙	—	○	
601	207	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	L	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	—	—	
602	207	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
603	207	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	波状隆帯区画＋刻目、横ハ字文	LR	砂粒、白色粘土粒	橙	—	—	
604	207	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	—	小礫（2～5㎜）	橙	—	—	
605	207	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	14.4	11	22.4	22	2.2	口縁部～底部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
606	207	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	26.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	—	小礫（2～3㎜）	にぶい黄褐	○	—	
607	208	28 号住居跡	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
608	208	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
609	208	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
610	208	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起	—	砂粒	明赤褐	—	—	
611	208	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	三段環状把手	—	砂粒	明赤褐	—	—	
612	208	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、半隆起線文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
613	208	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	明赤褐	○	—	
614	208	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
615	208	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部懸垂文（隆）、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
616	208	〃	1～2a 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
617	208	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（一部未調整隆帯）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
618	208	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部区画（平）、矢羽状沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
619	208	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、矢羽根状沈線文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
620	208	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	明赤褐	○	○	
621	208	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、縦位半隆起線文、刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
622	208	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、刺突列	撚 r	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
623	208	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	○	
624	208	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、縦位短沈線文	RL	砂粒、雲母、小礫（2～3㎜）	浅黄橙	—	—	
625	208	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、縦位短沈線文、渦巻状懸垂文	RL	砂粒、雲母、小礫（2～3㎜）	浅黄橙	—	—	
626	209	28 号住居跡	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横長楕円文、横線文、刺突文（管）、胴部縦位懸垂文	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
627	209	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横長楕円文、横線文、胴部縦位懸垂文	RL	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	—	—	
628	209	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	コ字文＋刺突文	LR	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
629	209	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、乙字文＋刺突文（管）、有尾渦巻状懸垂文	LR	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	—	
630	209	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、乙字文＋刺突文（管）、胴部懸垂文	LR	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	○	○	
631	209	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、コ字文、刺突文、有尾渦巻文	LR	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	○	○	
632	209	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文	LR	砂粒、小礫（2～3㎜）	浅黄橙	○	—	
633	209	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、変形横ハ字文	—	砂粒	橙	—	○	

第 25 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
634	209	〃	4b 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、花弁状刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
635	209	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横線文、刻目文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
636	209	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	D2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部縦位懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
637	209	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	D2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部斜位懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
638	209	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	D	—	—	—	—	—	胴部	胴部斜位懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
639	209	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	D	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文＋蛇行懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
640	209	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	8 字状貼付文、頸部横位沈線区画	—	砂粒、石英、小礫（3 ㎜）	明黄褐	—	—	
641	209	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	頸部	胴部横位沈線区画（単）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
642	209	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（磨消縄文）	LR	砂粒	橙	—	—	
643	209	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	7	—	—	—	底部	胴部U字状文（沈）	—	砂粒	橙	—	—	
644	210	29 号住居跡	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
645	210	〃	3 期？	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、充填沈線文	—	砂粒、小礫（3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
646	210	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a6 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（未調整）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
647	210	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
648	210	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（3 ㎜）	橙	—	—	
649	210	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
650	210	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	—	○	
651	210	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画＋刻目、胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
652	210	〃	4 期	第Ⅱ群第 1c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	波状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
653	210	〃	4 期	第Ⅱ群第 8 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	沈線区画＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
654	210	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文、刻目文、胴部縦位懸垂文（沈）＋刺突列	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
655	210	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横線文、刻目文、胴部米字状懸垂文（磨消）	LR	砂粒	橙	○	—	
656	210	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a3 類	深鉢	D2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部環状貼付文、頸部横位沈線区画	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
657	210	〃	後期	—	深鉢	—	—	5.3	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	—	網代圧痕。内面赤彩。
658	210	〃	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	9.7	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
659	210	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部沈線区画＋刺突列	撚 L	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	○	○	
660	210	〃	1 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部弧状区画文＋縦位沈線文（平）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
661	210	〃	1 期	第Ⅱ群第 1d3 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
662	210	〃	2c 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、双頭渦巻文＋刺突文、条線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	—	
663	210	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、棒状懸垂文、横ハ字文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
664	210	〃	2 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	A1	30.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	条線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	—	
665	211	30 号住居跡	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、交互刺突文、胴部横位沈線区画（平）、波状沈線文（平）	RL	砂粒	橙	○	—	
666	211	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）＋交互刺突文	RL	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
667	211	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、対向弧線文（平）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
668	211	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	波状沈線文（有節）	撚 L	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
669	211	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、対向弧線文（平）	RL	砂粒、赤褐色粒子	浅黄橙	—	—	
670	211	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、波状沈線文（平、有節）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
671	211	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）、胴部渦巻状懸垂文（平）	RL	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
672	211	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部波状沈線文（平）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）、赤褐色粒子	浅黄橙	—	—	
673	211	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）	撚 l	砂粒	橙	○	○	
674	211	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、頸部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
675	211	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	—	
676	211	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1c 類	深鉢	G1	24.8	10.8	36	29.2	5.8	口縁部～底部	三段環状把手、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
677	212	30 号住居跡	1c 期	第Ⅰ群第 1c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	三段環状把手	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
678	212	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H3	16.4	—	—	—	2.7	口縁部～底部	突起、交互刺突文、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
679	212	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	網代圧痕。
680	212	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	半隆起線文、胴部渦巻状懸垂文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
681	212	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	突起	橋状把手、眼鏡状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
682	212	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
683	212	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	橋状把手、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
684	212	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d3 類	深鉢	H3	24	—	—	—	—	口縁部～胴部下半部	袋状突起、基隆帯、横線文（半隆）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	

第 26 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
685	212	〃	1期	第Ⅰ群第1d類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、胴部横S字文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	—	
686	213	30号住居跡	2b期	第Ⅰ群第2d類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄褐	—	—	
687	213	〃	3b期	第Ⅰ群第3a6-1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	コ字状区画文、横ハ字文	—	砂粒、小礫（2㎜）	明赤褐	—	—	
688	213	〃	3b期	第Ⅰ群第3a10類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画、条線文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	浅黄橙	—	—	
689	213	〃	5期	第Ⅱ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（磨消）＋三角形区画文（磨消）	LR	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	—	
690	213	〃	3b期	第Ⅰ群第3a5-2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文（鎖）	RL	小礫（2～3㎜）	灰白	○	○	
691	213	〃	3b期	第Ⅰ群第3a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画	LR	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
692	213	〃	3b期	第Ⅰ群第3b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部沈線区画（単）	LR	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	—	
693	213	〃	5期	第Ⅱ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（磨消）＋幾何学文（磨消）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
694	213	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	D2	32	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部突起、胴部横位沈線区画＋刺突列	—	砂粒	明黄褐	○	—	
695	213	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目、胴部横位沈線区画（単）	—	砂粒	明黄褐	○	—	
696	213	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	D2	—	—	—	—	—	口縁部	表裏の口縁部横位沈線文＋弧線文、頸部懸垂文（隆）	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
697	213	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部円孔、横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
698	213	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋円形刺突列（管）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
699	213	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	E2	27.9	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	○	—	補修孔（5㎜）
700	213	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
701	213	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（磨消）	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	—	
702	213	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
703	213	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
704	213	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）、刺突列	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
705	213	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	○	○	
706	213	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文	LR	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄褐	○	○	
707	213	〃	1c期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部懸垂文（単沈）	撚ｒ	砂粒、赤褐色粒子	橙	○	○	
708	214	31号住居跡	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状隆帯文、胴部渦巻状懸垂文	RL	砂粒、小礫（2㎜）	黄橙	—	—	隆→縄充填
709	214	〃	1期	第Ⅰ群第1a類？	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	方形区画文（平）	RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
710	214	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画（単）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
711	214	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆沈）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
712	214	〃	2b期	第Ⅰ群第2b1類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部渦巻状隆帯文、矢羽根状沈線文、胴部横位沈線区画（平）	—	砂粒	橙	○	○	
713	214	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、胴部縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	浅黄橙	—	—	
714	214	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位沈線区画（隆）、刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
715	214	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
716	214	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
717	214	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯区画＋刻目、区画内充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
718	214	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
719	214	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
720	214	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
721	214	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆＋刻目）、横線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
722	214	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（平）、横線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
723	214	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文（沈）	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
724	214	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文（平）	—	砂粒	灰黄褐	○	—	
725	214	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部区画（平）、渦巻状懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
726	214	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
727	214	〃	3a期	第Ⅰ群第3b1類	深鉢	J	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部二段渦巻状突起、刻目隆帯	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	明赤褐	○	—	
728	214	〃	3a期	第Ⅰ群第3b1類	深鉢	J	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部二段渦巻状突起、隆帯文	—	砂粒、小礫（2～5㎜）	橙	○	—	
729	215	31号住居跡	2c期	第Ⅰ群第2c4類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
730	215	〃	2c期	第Ⅰ群第2c4類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文（半竹）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
731	215	〃	2c期	第Ⅰ群第2c4類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	胴部刺突文	—	砂粒	橙	—	—	
732	215	〃	3a期	第Ⅰ群第3a類	深鉢	—	—	5.7	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（隆）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	—	
733	215	〃	2期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	条線文（5）	—	砂粒	橙	○	—	
734	215	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画（刺）、胴部縦位懸垂文（沈）、条線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄褐	○	○	
735	215	〃	中期	—	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	—	—	
736	215	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
737	215	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	橙	○	—	
738	215	〃	2期	第Ⅰ群第5類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	

第27表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
739	215	〃	2 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
740	215	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	クランク文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
741	215	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
742	215	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	環状突起、半隆起線文	—	砂粒、石英	明赤褐	—	—	
743	215	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、円形区画＋刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	明赤褐	—	○	
744	215	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
745	215	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
746	215	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	明赤褐	—	○	
747	215	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
748	215	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
749	215	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
750	215	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	木目状撚糸文	撚 L	砂粒	橙	—	○	
751	215	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文（5）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	—	—	
752	215	〃	1c 期	第Ⅰ群第 6d 類	浅鉢	E2	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	—	砂粒	明赤褐	—	—	一部に赤彩残る。
753	215	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位沈線区画	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	—	
754	215	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部斜位磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
755	215	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻文（沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
756	215	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
757	215	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）	L	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	粘土帯約 20 ㎜
758	216	32 号住居跡	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	A1	24	11	29.2	28.8	5.7	完形	口縁部横位隆帯区画＋瘤状突起、有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文、胴部縦位懸垂文	L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
759	216	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c2 類	深鉢	L2	32	—	—	—	14.8	口縁部～底部	微隆起線による渦巻文・逆Ｕ字文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
760	217	32 号住居跡	3 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	7.8	—	—	—	胴部～底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
761	217	〃	3 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
762	217	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
763	217	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）、刺突文	L	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
764	217	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）、刺突文	L	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	褐灰	—	—	
765	217	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
766	217	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a7 類	深鉢	A1	14.4	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、楕円区画文、胴部逆Ｕ字状文、胴部刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
767	217	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	9.2	—	—	—	胴部～底部	棒状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
768	217	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（1 ～ 4 ㎜）	明黄褐	—	—	
769	217	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、横ハ字文	—	小礫（1 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
770	217	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 6 ㎜）	浅黄橙	○	—	
771	217	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
772	217	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5-1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	波状隆帯区画、横ハ字文	LR	小礫（2 ～ 6 ㎜）	橙	—	—	
773	217	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（隆）	L	小礫（2 ～ 6 ㎜）	明黄褐	○	—	
774	217	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
775	217	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、逆Ｕ字文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
776	218	32 号住居跡	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	19.6	—	—	—	5.4	口縁部～底部	口縁部横位沈線区画、波状文、逆Ｕ字文	RL	砂粒、白色粘土粒子	浅黄橙	○	○	
777	218	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位微隆起線区画、逆Ｕ字文	LR	砂粒、赤褐色粒子	橙	○	○	※ 778 と同一個体。
778	218	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位微隆起線区画、逆Ｕ字文	LR	砂粒、赤褐色粒子	橙	○	○	※ 777 と同一個体。
779	218	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部Ｕ字状・逆Ｕ字状懸垂文（沈）	RL	砂粒	褐灰	○	—	
780	218	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（微隆）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	○	
781	218	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
782	218	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	皿状突起、逆Ｕ字状沈線文、刺突列	RL	砂粒	橙	—	—	
783	218	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文（微隆）	LR	砂粒、小礫（1 ～ 8 ㎜）	橙	○	○	
784	218	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画（微隆）	RL	砂粒、小礫（3 ～ 8 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
785	218	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画	—	砂粒、小礫（1 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
786	218	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画	LR	砂粒、小礫（3 ㎜）	褐灰	○	○	
787	218	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
788	218	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、棒状懸垂文	L	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
789	218	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a11 類	深鉢	A2	12	—	—	—	—	口縁部	口唇部部分的に内屈	LR	砂粒、小礫（2 ～ 6 ㎜）	橙	○	○	
790	218	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3j 類	甕単	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（微隆）	—	砂粒	浅黄橙	—	—	赤彩。

第 28 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
791	219	33号住居跡	2期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	I1	16	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文、剝先状文、胴部横位沈線区画（単）	RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
792	219	〃	2期	第Ⅰ群第2a4類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文、胴部横位沈線区画（平）	—	砂粒	橙	○	—	
793	219	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻文（平）	RL	砂粒、赤褐色粒子	橙	—	○	
794	219	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
795	219	〃	2期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
796	219	〃	2期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	頸部	頸部剝先文	—	砂粒	橙	○	—	
797	219	〃	2期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画、剝先状文、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2～5㎜）	橙	○	—	
798	219	〃	2期	第Ⅰ群第2c5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文（隆）	—	砂粒、小礫（2～6㎜）	浅黄橙	—	—	
799	219	〃	2期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆）、区画内充填沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	—	
800	219	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文（隆）	撚L	砂粒	橙	○	—	
801	219	〃	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	縄文側面圧痕文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
802	219	〃	1期	第Ⅰ群第1d類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、胴部渦巻文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	—	○	
803	219	〃	1期	第Ⅰ群第1d類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、環状突起	—	砂粒	橙	—	—	
804	219	〃	1期	第Ⅰ群第1d2-2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起、半隆起線文、有節沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
805	219	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-2類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文、充填沈線文	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
806	219	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-2類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
807	219	〃	3a期	第Ⅰ群第3a3-1類	深鉢	A1	15	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状懸垂文、入組コ字文（1）、胴部懸垂文（沈）	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	○	○	
808	219	〃	3b期	第Ⅰ群第3a4類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文	—	小礫（1～3㎜）	浅黄橙	—	—	
809	219	〃	3b期	第Ⅰ群第3a4類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
810	219	〃	3b期	第Ⅰ群第3a類	深鉢	A1	24.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部刻目隆帯文	LR	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	○	—	
811	219	34号住居跡	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	橙	—	○	
812	219	〃	中期	—	深鉢	—	—	10.8	—	—	—	底部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
813	219	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	蛇行沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
814	219	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文（5）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
815	220	36号住居跡	中期	—	深鉢	—	—	12.4	—	—	—	底部	—	RL	砂粒、雲母	橙	—	—	網代圧痕。
816	220	37号住居跡	1a期	第Ⅰ群第1a2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	RL	砂粒、赤褐色粒子	橙	○	—	
817	220	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	橙	○	○	
818	220	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
819	220	〃	2期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
820	220	〃	2期	第Ⅰ群第2a4類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
821	220	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文、渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
822	220	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部沈線区画＋充填沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	浅黄橙	○	—	
823	220	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文＋刻目	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
824	220	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文、縦位半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
825	220	〃	2c期	第Ⅰ群第2c5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文、横位弧状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
826	220	〃	2c期	第Ⅰ群第2c5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽根状沈線文、刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
827	220	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
828	220	〃	?	第Ⅰ群第3a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（単沈）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	○	○	
829	220	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-2類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	—	—	
830	220	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-2類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	褐灰	—	—	
831	220	〃	3a期	第Ⅰ群第3b1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
832	220	〃	3a期	第Ⅰ群第3a類	深鉢	—	—	10.4	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（隆）	RL	砂粒、小礫（2～5㎜）	にぶい黄橙	—	○	
833	220	〃	2c期	第Ⅰ群第2c4類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文（半竹）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
834	220	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（単沈）	RL	砂粒、小礫（1～3㎜）	橙	—	—	
835	220	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画（刺）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
836	220	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画（刺）	—	砂粒、小礫（1～3㎜）	橙	○	○	
837	220	〃	2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I1	22	—	—	—	4.1	口縁部～胴部	口縁部剝先状隆帯文＋渦巻状突起、胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
838	220	〃	2c期	第Ⅰ群第2c5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
839	220	〃	3a期	第Ⅰ群第3a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	○	○	
840	221	38号住居跡	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文、渦巻状懸垂文	LR	砂粒、小礫（2～5㎜）	にぶい黄橙	—	—	
841	221	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文、渦巻状懸垂文＋ノ字状懸垂文	LR	砂粒、小礫（2～5㎜）	灰白	—	—	
842	221	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文、渦巻状懸垂文	LR	砂粒、小礫（1～3㎜）	灰黄褐	—	—	

第29表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
843	221	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文、渦巻状懸垂文	—	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
844	221	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文、渦巻状懸垂文	RL	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
845	221	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文、渦巻状懸垂文	—	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	褐灰	—	○	
846	221	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部刻目隆帯文、渦巻文＋ハ字状懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	○	○	
847	221	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部刻目隆帯文、渦巻状懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	—	—	
848	221	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	21	—	—	—	4.7	口縁部～胴部	口縁部刻目隆帯文、渦巻状懸垂文＋ノ字状懸垂文	LR	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
849	222	38 号住居跡	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部刻目隆帯文、渦巻状懸垂文	RL	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
850	222	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文、渦巻状懸垂文	RL	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
851	222	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文、胴部弧状懸垂文（沈）	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	※焼成時のハジケ痕。
852	222	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	A1	17.6	7.6	22.8	20	2.2	口縁部	口縁部渦巻状懸垂文、胴部縦位懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
853	222	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	24	—	—	—	—	口縁部～胴部	横位楕円文、横線文、縦位短沈線文、曲流条線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
854	222	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	5.6	—	—	—	胴部～底部	横位楕円文、横線文、縦位短沈線文、胴部懸垂文	RL	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
855	222	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	17.4	—	—	—	2.4	口縁部～胴部	横位楕円文、横線文＋刺突文、縦位短沈線文、胴部懸垂文	RL	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
856	222	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横位楕円文、横線文＋刺突文	RL	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
857	222	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	18	6.4	23.4	—	2.9	口縁部～底部	横位楕円文、横線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
858	222	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	17.4	6	22.8	—	2.4	口縁部～底部	横位楕円文、横線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
859	222	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横位楕円文、横線文＋刺突文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	○	○	
860	223	38 号住居跡	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
861	223	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文、横位楕円文、横線文＋刺突文	RL	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
862	223	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-3 類	深鉢	A2	22.4	8	26.8	—	5.1	口縁部～底部	横位楕円文、横線文＋刺突文、瘤状突起	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
863	223	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	14.8	—	—	—	2.4	口縁部～胴部	渦巻状懸垂文、横位楕円文、横線文＋刺突文、瘤状突起	RL	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	明赤褐	○	○	
864	223	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	24.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	渦巻状懸垂文、横位楕円文、横線文＋刺突文、瘤状突起	RL	小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	○	○	
865	223	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A2	19.2	—	—	—	4.3	口縁部～胴部	渦巻状懸垂文、横位楕円文、横線文＋刺突文、縦位短沈線文、胴部縦位懸垂文	RLR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
866	223	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-2 類	深鉢	A2	20.8	—	—	—	4.3	口縁部～胴部	渦巻状懸垂文、横位楕円文、横線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
867	223	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文、横線文＋刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	—	
868	223	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文、横線文＋刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	—	
869	223	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文、横線文＋刺突文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	—	
870	223	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文	RLR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
871	224	38 号住居跡	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	—	—	9.2	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
872	224	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
873	224	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部Ｕ字状文（沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
874	224	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
875	224	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	26.8	—	—	—	—	口縁部	口縁部沈線区画（単）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
876	224	〃	3a 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画＋充填沈線文、双頭渦巻文、横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
877	224	〃	3a 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状隆帯懸垂文＋渦巻状懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	隆帯→縄文充填。
878	224	〃	3a 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状隆帯懸垂文、縦位沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	877 と同一個体。
879	224	〃	3a 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	双頭渦巻文、横位弧状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
880	224	〃	3a 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状隆帯文、横位弧状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
881	224	〃	3a 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
882	224	〃	3a 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文（半竹）	—	砂粒	橙	—	○	
883	224	〃	3a 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部沈線区画、胴部刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
884	224	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆沈）、胴部懸垂文（隆沈）	LR	砂粒、雲母	にぶい黄橙	○	○	884 と接合。
885	224	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状懸垂文（隆沈）	LR	砂粒、雲母	にぶい黄橙	○	—	885 と接合。
886	224	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状懸垂文（隆沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
887	225	38 号住居跡	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画、渦巻状懸垂文、胴部磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（1 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
888	225	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	16	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部楕円区画、渦巻状懸垂文、胴部磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
889	225	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画	RL	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
890	225	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画、胴部磨消懸垂文	LR	砂粒	灰白	—	○	
891	225	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
892	225	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
893	225	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3f 類	深鉢	F	22.4	—	—	—	6.2	口縁部～胴部	胴部横位隆帯区画＋刻目、胴部縦位懸垂文＋刻目、縦位沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
894	225	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	RL	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	

第 30 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
895	225	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
896	225	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、交互刺突文、有節沈線文	—	砂粒、雲母（少）	明赤褐	—	—	
897	225	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	○	—	
898	225	〃	1 期	第Ⅰ群第 6b 類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	円形文（隆）	—	砂粒	灰白	—	—	
899	225	〃	4 期	第Ⅱ群第 7a 類	注口	—	—	—	—	—	—	胴部	把手、弧状沈線文	—	砂粒	灰白	○	—	一部に赤彩残る。
900	226	39 号住居跡	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	9.6	—	—	—	胴部～底部	口縁部隆帯区画	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	※二次焼成により脆弱。
901	226	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、渦巻状懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
902	226	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	18	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画＋渦巻文、乙字状沈線文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	○	
903	226	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	14.8	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画＋渦巻文、入組コ字文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 6 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
904	226	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	15.2	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画＋有尾渦巻文、入組コ字文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	○	○	
905	226	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	—	○	
906	226	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	有尾渦巻状懸垂文、沈線＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
907	226	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	19.6	—	—	—	3.1	口縁部～胴部	口縁部隆帯区画＋有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
908	226	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	9.5	—	—	—	胴部～底部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
909	226	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部～底部	胴部縦位懸垂文（沈）	L	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
910	226	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	14	6.8	17.6	—	1.1	口縁部～底部	口縁部横線文（沈）	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
911	226	〃	3 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	A1	20	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
912	227	42 号住居跡	1c 期	第Ⅰ群第 1c 類	深鉢	H4	38.4	—	—	—	40.9	口縁部～胴部	三段環状把手、基隆帯、半隆起線文、	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
913	228	42 号住居跡・炉	1 期	第Ⅰ群第 5b 類	深鉢	H5	25.2	—	—	—	11.6	口縁部～胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
914	228	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、白色粒子	橙	—	○	
915	228	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、白色粒子	橙	—	○	
916	228	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、白色粒子	橙	—	○	
917	228	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
918	228	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文（平）	LR	砂粒	橙	—	○	
919	228	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	撚 L	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
920	228	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
921	228	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（1 ～ 2 ㎜）	橙	—	○	
922	228	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
923	228	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
924	228	〃	1 期	第Ⅰ群第 1c 類	台付	—	17.6	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、把手	—	砂粒、白色粒子	橙	—	○	
925	228	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	把手、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
926	228	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻懸垂文（隆）、条線文	—	砂粒、雲母、石英	にぶい黄橙	—	—	
927	228	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部付近	—	L	砂粒	橙	—	○	
928	228	〃	1 期	第Ⅰ群第 6b 類	浅鉢	B	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、雲母	浅黄橙	—	—	内外に赤彩痕。
929	229	43 号住居跡	1 期	第Ⅰ群第 1a3 類	深鉢	G1	32	17.2	40.4	40	13.3	口縁部～底部	口縁部隆帯文、頸部対向弧線文（平）、胴部横位沈線区画（平）、胴部懸垂文（平）	RL	砂粒	明赤褐	○	○	
930	229	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、隆帯文＋刻目	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
931	229	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線文	—	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	明赤褐	—	○	
932	229	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a2 類	深鉢	G1	13.2	8	16.8	—	0.96	口縁部～底部	圧痕隆帯、胴部区画（平）、胴部懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	—	○	
933	229	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	G1	9.4	—	—	—	0.86	口縁部～底部	交互刺突文、胴部区画（平）、胴部渦巻懸垂文（平）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
934	229	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位懸垂文（平）、弧状懸垂文（平）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
935	229	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	横 S 字状突起、有節沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
936	229	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	交互刺突文、胴部区画（平）、波状文（平）	RL	砂粒	橙	—	○	
937	230	43 号住居跡	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線文、交互刺突文、横線文（平）	RL	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	明赤褐	—	—	
938	230	〃	1a 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H3	17.6	10.4	32	27.6	3.9	口縁部～底部	橋状把手、胴部区画（平）、波状沈線文（平）、クランク文（平）	撚 L	砂粒	灰白	○	○	
939	230	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部区画（平）、クランク文（平）	RL	砂粒	橙	—	—	
940	230	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部区画（平）、クランク文（平）	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
941	230	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部区画（隆）、クランク文（単）	LR	砂粒、小礫（1 ～ 2 ㎜）	橙	—	○	
942	230	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部区画（平）、クランク文（平）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
943	230	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	蕨手状懸垂文（平）	撚 L	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
944	230	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部区画（平）、縦位懸垂文（平）	撚 L	砂粒	橙	—	—	
945	231	43 号住居跡	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	G1	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
946	231	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b1 類	深鉢	G1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	

第 31 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
947	231	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
948	231	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b1 類	深鉢	G1	14.4	8.4	15.2	15.2	1.1	口縁部～底部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 6 ㎜）	橙	○	○	
949	231	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
950	231	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、眼鏡状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	—	951 と同一個体。
951	231	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、眼鏡状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	950 と同一個体。
952	231	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起	—	砂粒、小礫（1 ～ 2 ㎜）	橙	○	—	
953	231	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	—	
954	231	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
955	231	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
956	231	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
957	231	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
958	231	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	
959	232	43 号住居跡	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
960	232	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
961	232	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
962	232	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
963	232	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
964	232	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による円形文	—	砂粒	橙	—	○	
965	232	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文もよる渦巻文、三叉文	—	砂粒（多）	にぶい黄橙	—	—	
966	232	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
967	232	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、刺突列（半竹）	—	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
968	232	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	LR	砂粒（少）	橙	○	—	
969	232	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空把手、基隆帯＋刻目	—	砂粒	明赤褐	—	○	
970	232	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d1-2 類	深鉢	H3	17.6	—	—	—	—	口縁部～胴部	鶏頭冠状把手、鋸歯状突起、袋状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
971	232	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
972	233	43 号住居跡	1 期	第Ⅰ群第 1d1-2 類	深鉢	H5	—	—	—	—	—	口縁部	鶏頭冠状把手、鋸歯状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
973	233	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
974	233	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d1-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
975	233	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
976	233	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	H1	19.2	—	—	—	—	口縁部～胴部	把手、基隆帯、半隆起線文、S 字状隆帯文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
977	233	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	12.6	—	—	—	底部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
978	233	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部剣先隆帯文（未調整）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
979	233	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
980	233	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	—	砂粒	橙	○	○	981 と同一個体。
981	233	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	—	砂粒	橙	○	○	980 と同一個体。
982	233	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	明赤褐	○	—	
983	234	43 号住居跡	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	I1	40	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（一部未調整）、X 字状把手	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
984	234	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C2	14	—	—	—	1	口縁部～底部	口唇部渦巻文、胴部区画（平）、縦位懸垂文（平）、胴部懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
985	234	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	○	—	
986	234	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位沈線区画（単）、胴部縦位懸垂文（単）	LR	砂粒（少）	橙	○	○	
987	234	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）	RL	砂粒	橙	○	○	
988	234	〃	2a ～ b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	明赤褐	—	○	
989	234	〃	2a ～ b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
990	234	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	C2	16.8	—	—	—	1.9	口縁部～胴部	胴部横位沈線区画（平）＋眼鏡状突起、縦位懸垂文（平）、腕骨文（平）、矢羽状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
991	234	〃	2a ～ b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（平）	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
992	234	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
993	234	〃	2 期	第Ⅰ群第 5c 類	深鉢	H3	24.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
994	234	〃	2 期	第Ⅰ群第 5c 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	○	—	
995	234	〃	2 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
996	235	43 号住居跡	2 期	第Ⅰ群第 5f 類	深鉢	A1	32	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
997	235	〃	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
998	235	〃	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	—	撚 L	砂粒、小礫（5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	

第 32 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
999	235	〃	中期	第Ⅰ群第５類	深鉢	—	—	13	—	—	—	底部	—	—	砂粒、雲母、橙色粒子	橙	—	—	網代圧痕。
1000	235	〃	中期	—	深鉢	—	—	12.8	—	—	—	底部	—	RL	砂粒	明褐	○	○	網代圧痕。
1001	235	〃	中期	—	深鉢	—	—	14	—	—	—	底部	—	RL	砂粒	浅黄橙	—	—	網代圧痕。
1002	235	〃	中期	—	深鉢	—	—	6.2	—	—	—	口縁部～底部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1003	235	〃	中期	第Ⅰ群第7c類	台付	—	—	—	—	—	—	台部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1004	235	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	蛇行隆帯文、沈線＋刺突文	—	砂粒	橙	—	○	
1005	235	〃	1a～b期	第Ⅰ群第6a類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、入字状突起	RL	砂粒、雲母	橙	—	—	
1006	235	〃	1c期	第Ⅰ群第6c1類	浅鉢	C3	26.4	5.6	18.4	11.6	2.2	口縁部～底部	弧状沈線文（平）	RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
1007	236	45号住居跡	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	H3	16	10	25.2	24	2.8	口縁部～底部	口縁部横位Ｓ字文（隆＋有沈）、頸部波状沈線文（単）、胴部横位沈線区画（単）	撚Ｌ	砂粒	にぶい黄橙	○	○	※1014と同一個体。
1008	236	〃	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	H6	23.2	11	34.8	—	8.4	口縁部～底部	口縁部波状沈線文（単）、胴部横位沈線区画（単）	RL	砂粒	明黄褐	○	○	
1009	236	〃	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	H7	27.6	—	—	—	14.2	口縁部～底部	波状沈線文（平）、胴部区画（平）、胴部懸垂文（平）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	○	—	
1010	236	〃	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	H3	20	—	—	—	—	口縁部～胴部	橋状把手、交互刺突文、有節沈線文、胴部横位沈線区画（平）＋波状沈線文（平）	LR	砂粒	橙	○	○	
1011	236	〃	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	G1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画＋刺突列	LR	砂粒	橙	—	○	
1012	236	〃	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文＋刺突列、渦巻状突起、平行沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	明赤褐	○	○	
1013	236	〃	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	H3	12	—	—	—	—	口縁部～胴部	剣先状突起、波状沈線文（単）、胴部横位沈線区画（単）、胴部縦位懸垂文（単）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1014	236	〃	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	H3	12.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部Ｓ字文（隆＋有沈）、頸部波状沈線文（単）、胴部横位沈線区画（単）	撚Ｌ	砂粒	にぶい黄橙	○	○	※1007と同一個体。
1015	237	45号住居跡	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部波状沈線文（単）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	○	—	
1016	237	〃	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	H4	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、弧状沈線文（平）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	—	
1017	237	〃	1c期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	交互刺突文、クランク文（平）	LR	砂粒	明赤褐	—	○	
1018	237	〃	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線文、波状沈線文（有）	RL	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	—	○	
1019	237	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、波状沈線文	—	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	○	—	
1020	237	〃	1c期	第Ⅰ群第1a6類	深鉢	I1	20	—	—	—	2.8	口縁部～胴部	眼鏡状突起、口縁部渦巻隆帯文（未）	LR	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
1021	237	〃	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部区画（平）、弧状沈線文（平）	LR	砂粒、小礫（2～3㎜）	灰黄	○	○	
1022	237	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	LR	砂粒	明赤褐	○	○	
1023	237	〃	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、波状沈線文（平）	LR	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1024	237	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	G1	12.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部楕円区画文	RL	砂粒	橙	○	○	
1025	237	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	9	—	—	—	胴部～底部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	LR	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	○	
1026	237	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	—	○	
1027	237	〃	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文＋弧状沈線文（平）	RL	砂粒	橙	○	○	
1028	237	〃	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（単）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	—	○	
1029	237	〃	1c期	第Ⅰ群第1a5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（平）	LR	砂粒	橙	○	—	
1030	238	45号住居跡	1c期	第Ⅰ群第1c類	深鉢	H4	21.6	11.2	37	28.4	4.9	口縁部～底部	三段環状把手、基隆帯、半隆起線文、橋状把手、胴部横Ｓ字状文	RL	砂粒（少）、白色粒子	明褐	○	○	
1031	238	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	G1	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯・半隆起線文による曲線文	—	砂粒、小礫（1～3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1032	238	〃	1c期	第Ⅰ群第1c類	深鉢	—	15	8	21.6	15.2	1.9	口縁部～底部	三段環状把手、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1033	238	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
1034	238	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	○	—	
1035	238	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（1～2㎜）	橙	—	—	網代圧痕。
1036	238	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	網代圧痕。粘土23mm。
1037	239	45号住居跡	1c期	第Ⅰ群第1c類	深鉢	H3	32	—	—	—	14	口縁部～底部	三段環状把手、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1038	240	45号住居跡	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	環状把手、眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	灰白	—	—	
1039	240	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	11.7	—	—	—	口縁部～胴部、底部	眼鏡状突起、環状突起、基隆帯＋爪形文、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	網代圧痕文。
1040	240	〃	1期	第Ⅰ群第1d2類	深鉢	H2	26.8	13.2	40	25.6	6	口縁部～底部	袋状突起、眼鏡状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
1041	241	〃	1期	第Ⅰ群第1d2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
1042	241	〃	1期	第Ⅰ群第1d2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、基隆帯、半隆起線文、W字状文	—	砂粒	橙	—	○	
1043	241	〃	1期	第Ⅰ群第1d2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	明褐	○	○	
1044	241	〃	1期	第Ⅰ群第1d類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1045	241	〃	1期	第Ⅰ群第1d2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
1046	241	〃	1期	第Ⅰ群第1d類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
1047	241	〃	1期	第Ⅰ群第1d3類	深鉢	H3	20.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	袋状突起、横線文（半）、交互刺突文、胴部横Ｓ字文（基）	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	明赤褐	○	○	

第33表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1048	241	〃	1期	第Ⅰ群第1d3類	深鉢	H3	16	8.8	17.2	16.4	1.2	口縁部～底部	袋状突起、横線文（半）、渦巻懸垂文（基）、逆U字状懸垂文（基）	—	砂粒	明赤褐	○	—	
1049	241	〃	1期	第Ⅰ群第1d類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による胴部渦巻懸垂文	—	砂粒、橙色粒子	橙	—	—	
1050	241	〃	1期	第Ⅰ群第1d類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文もよる胴部懸垂文	—	砂粒、小礫（2～5㎜）	橙	—	○	
1051	242	45号住居跡	1期	第Ⅰ群第1d類	深鉢	—	—	14.1	—	—	—	底部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	—	○	
1052	242	〃	1期	第Ⅰ群第1d類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	粘土帯30～33㎜。
1053	242	〃	1期	第Ⅰ群第1e類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	連続弧線文	—	砂粒、白色粒子	橙	—	—	
1054	242	〃	1期	第Ⅰ群第1e類	台付	—	—	—	—	—	—	台部	半隆起線文、蓮華文	—	砂粒、白色粒子	橙	—	—	
1055	242	〃	1期	第Ⅰ群第6c2類	浅鉢	D2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（未調）	RL	砂粒	橙	—	—	
1056	242	〃	1期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	11.6	—	—	—	胴部～底部	胴部横位沈線区画（単）、胴部縦位懸垂文（単）＋蛇行沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1057	242	〃	1期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（未調）	—	砂粒	明赤褐	○	○	
1058	242	〃	1期	第Ⅰ群第2a3類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
1059	242	〃	1期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1060	242	〃	1期	第Ⅰ群第2a3類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	—	—	
1061	242	〃	1期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文（隆）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1062	242	〃	1期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文、胴部縦位懸垂文（平）	不明	砂粒、小礫（2～3㎜）	明赤褐	○	○	
1063	242	〃	1期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文（隆）	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1064	242	〃	1期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	I	21.6	—	—	—	—	口縁部	口縁部剣先状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
1065	242	〃	1期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部剣先状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1066	242	〃	1期	第Ⅰ群第2b2類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄褐	○	—	
1067	242	〃	1期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	灰白	—	—	
1068	242	〃	1期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
1069	243	45号住居跡	1期	第Ⅰ群第5a類	深鉢	A1	10.6	5.2	14	13.6	0.45	口縁部～底部	—	L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1070	243	〃	1期	第Ⅰ群第5c類	深鉢	I1	10.4	6.4	16.8	—	0.74	口縁部～底部	—	撚R	砂粒	にぶい黄橙	○	○	網代圧痕。
1071	243	〃	1期	第Ⅰ群第5b類	深鉢	H6	32	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	LR	砂粒、小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1072	243	〃	1期	第Ⅰ群第5c類	深鉢	I1	14.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部隆帯区画（未調）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1073	243	〃	1期	第Ⅰ群第5b類	深鉢	H7	25	16.4	41	—	23.3	口縁部～底部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1074	243	〃	1期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	16.8	—	—	—	底部	—	RL	砂粒、小礫（2～5㎜）	にぶい黄橙	○	○	網代圧痕。
1075	243	〃	1期	第Ⅰ群第6類	浅鉢	—	—	8.1	—	—	—	底部	—	—	砂粒	橙	—	—	
1076	243	〃	1期	第Ⅰ群第7a類	鉢	—	12	6	5.4	—	0.43	完形	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1077	243	47号住居跡	1a期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	G1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、鋸歯状隆帯、刺突列	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	○	○	
1078	243	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	—	—	
1079	243	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	—	—	
1080	243	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽根状沈線文	—	砂粒	黄橙	—	○	
1081	243	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部区画（刺）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1082	243	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線文（単）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1083	243	〃	2期	第Ⅰ群第5f類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（単）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1084	243	〃	2期	第Ⅰ群第5f類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1085	244	48号住居跡	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1086	244	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	縦位半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1087	244	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1088	244	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	C1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位沈線区画（平）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1089	244	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1090	244	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	A2	33	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位沈線区画＋刺突列、条線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	○	—	
1091	244	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-2類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、区画内充填沈線文	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	浅黄橙	—	—	
1092	244	〃	3a期	第Ⅰ群第3a類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（隆）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	—	○	
1093	244	〃	3b期	第Ⅰ群第3a10類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1094	244	〃	3a期	第Ⅰ群第3b1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文	RLR	砂粒	淡黄	—	○	
1095	244	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部蛇行沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1096	244	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒	黄褐	○	—	
1097	244	〃	1期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	三角形隆帯区画＋爪形文、半隆起線文	—	砂粒、白色粘土粒子	橙	—	—	
1098	244	〃	3期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（単）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	灰白	—	—	
1099	244	〃	1期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	網代圧痕。
1100	244	〃	1期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、圧痕隆帯文	—	砂粒	橙	—	○	
1101	244	〃	1期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（圧痕隆帯）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	浅黄橙	○	—	

第34表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1102	245	49号住居跡	1期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1103	245	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状隆帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1104	245	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1105	245	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1106	245	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1107	245	50号住居跡	3a期	第Ⅰ群第3e類	深鉢	B	23	12	30.8	—	8.6	口縁部～底部	口縁部波状隆帯文、渦巻文＋短沈線	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1108	245	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	28.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1109	245	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	36.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1110	245	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-2類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、区画内充填沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1111	246	50号住居跡	3a期	第Ⅰ群第3a1-2類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、区画内充填沈線文	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	—	—	
1112	246	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-2類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、区画内充填沈線文	—	砂粒、小礫（2～6㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1113	246	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-2類	深鉢	A1	40.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、区画内充填沈線文	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1114	246	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-2類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、区画内充填沈線文、条線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	—	○	
1115	246	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-2類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、区画内充填沈線文	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	—	○	
1116	246	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	黄橙	○	—	
1117	246	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-5類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	隆沈線文＋刻目、渦巻状懸垂文	—	砂粒、石英	橙	○	○	
1118	246	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-5類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文（沈）＋刻目、渦巻状懸垂文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1119	246	〃	3a期	第Ⅰ群第3a2-1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位・縦位沈線区画、横線文	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1120	246	〃	3a期	第Ⅰ群第3a2類	深鉢	—	—	5.4	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（隆）	RL	砂粒、小礫（2～5㎜）	橙	—	—	
1121	247	50号住居跡	3a期	第Ⅰ群第3a1-6類	深鉢	A1	29	—	—	—	—	口縁部～胴部	隆沈線文＋刻目、渦巻状懸垂文、胴部渦巻状懸垂文（隆沈線）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1122	247	〃	3a期	第Ⅰ群第3b1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1123	247	〃	3a期	第Ⅰ群第3b1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文、刺突文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1124	247	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-6類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1125	247	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-6類	深鉢	J	30.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	隆沈線文＋刻目、渦巻状懸垂文、渦巻文（隆沈線）	RL	小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1126	247	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-6類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	—	粘土帯：2～2.4cm
1127	247	〃	3a期	第Ⅰ群第3b1類	深鉢	J	—	—	—	—	—	口縁部	隆沈線文＋刻目、渦巻状懸垂文、胴部渦巻状懸垂文（隆沈線）	LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
1128	248	50号住居跡	3a期	第Ⅰ群第3b1類	深鉢	A2	15.6	—	—	—	—	口縁部～胴部	胴部双頭渦巻文（隆沈線）＋縦位懸垂文（隆沈線）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1129	248	〃	3a期	第Ⅰ群第3b1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、渦巻隆帯文	LR	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1130	248	〃	3a期	第Ⅰ群第3b1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	隆沈線文	RL	砂粒、小礫（2～5㎜）	浅黄橙	—	—	粘土帯：2cm。
1131	248	〃	3a期	第Ⅰ群第3c1類	深鉢	L2	13	—	—	—	—	口縁部～胴部	横位楕円区画文、胴部磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	○	○	
1132	248	〃	3a期	第Ⅰ群第3c1類	深鉢	L1	34.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	横位楕円区画文、渦巻文、胴部磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	明黄橙	○	—	
1133	248	〃	3a期	第Ⅰ群第3b1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	隆沈線文	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄褐	—	—	
1134	248	〃	3a期	第Ⅰ群第3b2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部逆U字文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1135	248	〃	3a期	第Ⅰ群第3類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部沈線区画	RL	砂粒	橙	○	○	
1136	248	〃	3a期	第Ⅰ群第3類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆）、区画内充填沈線文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	—	○	
1137	249	50号住居跡	3a期	第Ⅰ群第3e類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1138	249	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部懸垂文（沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1139	249	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	波状沈線文、逆U字文（沈）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1140	249	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列、蛇行懸垂文、条線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	浅黄橙	—	—	
1141	249	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	A2	15.4	6	22.2	22.2	2	口縁部～底部	J字状懸垂文（沈）、逆U字文（沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1142	249	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部懸垂文（沈）	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	○	○	
1143	249	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画（刺突列）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1144	249	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位区画（刺突列）	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	○	○	
1145	249	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位区画（刺突列）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1146	249	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画（刺突列）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1147	249	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画（刺突列）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1148	250	50号住居跡	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆）、蛇行沈線文	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1149	250	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、胴部縦位懸垂文（平）、有節沈線文	RL	砂粒	橙	○	—	
1150	250	〃	1期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	21.2	—	—	—	—	口縁部	頸部横位区画（平）、交互刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1151	250	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	頸部横位区画（平・隆）	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
1152	250	〃	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	A1	29	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	—	粘土帯：2cm
1153	250	〃	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	9	—	—	—	底部	蛇行沈線文	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	—	○	
1154	250	〃	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	A1	15	6	19	—	1.5	口縁部～底部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1155	250	〃	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	9.2	—	—	—	底部	—	RL	砂粒、小礫（2～5㎜）	にぶい黄橙	○	○	底部網代圧痕。

第35表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1156	250	〃	中期	第Ⅰ群第５類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒、小礫（２～５㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1157	250	〃	中期	第Ⅰ群第５類	深鉢	—	—	8.8	—	—	—	胴部～底部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1158	251	51号住居跡	１期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、円形文	—	砂粒	橙	—	○	
1159	251	〃	１期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
1160	251	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）	RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
1161	251	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、結節縄文	RL	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
1162	251	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線文	—	砂粒、小礫（２～５㎜）	橙	—	—	
1163	251	52号住居跡	２期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画文（平）	—	砂粒、小礫（２㎜）	明黄褐	○	○	
1164	251	〃	２期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒、小礫（２～３㎜）	浅黄橙	—	—	
1165	251	〃	２期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	頸部	胴部横位沈線区画（平）、渦巻状懸垂文	—	砂粒、小礫（２㎜）	橙	—	—	
1166	251	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	LR	砂粒、赤褐色粒子	浅黄橙	—	○	
1167	251	〃	1a期	第Ⅰ群第1a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画＋圧痕	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1168	251	〃	１期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1169	251	54号住居跡	１期	第Ⅰ群第1b3類	深鉢	G1	34.8	16	40	38.8	17.5	口縁部～底部	突起（欠）、基隆帯・半隆起線文による渦巻文、環状突起、胴部逆Ｕ字状懸垂文（隆）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1170	251	〃	１期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	楕円区画文＋刺突文、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
1171	252	54号住居跡	3a期	第Ⅰ群第3b1類	深鉢	J	—	5.6	—	—	—	頸部～底部	胴部渦巻状懸垂文（隆沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1172	252	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線＋刺突文、条線文	—	砂粒	橙	○	—	
1173	252	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、胴部横位隆帯区画＋刻目	—	砂粒、小礫（２～３㎜）	浅黄橙	○	○	
1174	252	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画＋刻目、胴部渦巻状懸垂文（隆）	RL	砂粒	橙	○	○	
1175	252	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1176	252	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	5.4	—	—	—	底部	横位沈線区画、刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1177	252	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	双頭渦巻文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1178	252	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	双頭渦巻文（隆）、腕骨文（隆）	—	砂粒	橙	—	—	
1179	252	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
1180	252	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文	—	砂粒、小礫（２～３㎜）	浅黄橙	—	—	
1181	252	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	灰白	○	—	
1182	252	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	小礫（１～２㎜）	橙	○	—	
1183	252	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部沈線区画＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1184	252	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、充填沈線文	—	砂粒、小礫（２～３㎜）	橙	○	—	
1185	252	〃	3a期	第Ⅰ群第3a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆沈）	RL	小礫（１～２㎜）	橙	○	—	
1186	252	〃	3a期	第Ⅰ群第3b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆沈）	RL	砂粒、小礫（２～３㎜）	橙	○	—	
1187	252	〃	不明	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部隆帯文	—	砂粒	橙	—	○	
1188	252	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋刺突列	—	砂粒	灰白	—	—	
1189	252	〃	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋刺突列	RL	砂粒、小礫（２～３㎜）	橙	—	○	
1190	252	〃	中期	第Ⅰ群第５類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒、小礫（２～３㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1191	252	〃	中期	第Ⅰ群第５類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
1192	252	〃	中期	第Ⅰ群第５類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒	橙	○	—	
1193	252	〃	中期	第Ⅰ群第５類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1194	252	〃	中期	第Ⅰ群第５類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	小礫（２㎜）	橙	—	—	
1195	252	〃	２期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1196	252	〃	1c期	第Ⅰ群第1a6類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状隆帯文（未）	RL	砂粒、小礫（３㎜）	明黄褐	○	—	
1197	252	〃	２期	第Ⅰ群第2a4類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	橙	—	○	
1198	253	55号住居跡	3a期	第Ⅰ群第3b1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状隆帯文	RL	砂粒、小礫（２～３㎜）	橙	○	—	
1199	253	〃	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文（隆）	—	砂粒	橙	○	○	
1200	253	〃	２期	第Ⅰ群第５類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒	橙	—	—	
1201	253	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突文、条線文	—	砂粒、小礫（２～４㎜）	橙	—	—	
1202	253	〃	3a期	第Ⅰ群第3a2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線文＋刺突文	RL	砂粒	橙	○	—	
1203	253	〃	3a期	第Ⅰ群第3a2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文	—	砂粒、小礫（２㎜）	橙	○	○	
1204	253	〃	5b期	第Ⅱ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文帯、隆帯文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	補修孔
1205	253	〃	5b期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	内面横線文	—	砂粒、赤褐色粒子	明黄褐	—	—	
1206	253	〃	2c期	第Ⅰ群第2c4類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	刺突文	—	砂粒	橙	○	—	
1207	253	〃	2c期	第Ⅰ群第2c4類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突文	—	砂粒、小礫（２㎜）	橙	—	—	
1208	253	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、剣先状懸垂文、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（２～４㎜）	にぶい黄橙	—	—	

第 36 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1209	253	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
1210	253	〃	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	L	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1211	253	〃	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	LR	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
1212	253	〃	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
1213	253	〃	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1214	253	56 号住居跡	1c 期	第Ⅰ群第 1a3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文、クランク文（平）、交互刺突文	撚 R	砂粒	橙	○	○	
1215	253	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1216	253	〃	4b 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文	—	砂粒	灰白	○	—	
1217	253	〃	後期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1218	253	〃	5b 期	第Ⅱ群第 7b 類	注口	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	RL	砂粒	灰白	—	—	
1219	254	58 号住居跡	1 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	G1	19.2	—	—	—	3.2	口縁部～胴部	橋状把手、環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1220	254	〃	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1221	254	〃	1 期	第Ⅰ群第 2d3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
1222	254	〃	1 期	第Ⅰ群第 2b1 類	深鉢	G1	12.8	—	—	—	0.75	口縁部～底部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
1223	254	〃	1 期	第Ⅰ群第 2d1 類	深鉢	H3	12	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1224	254	〃	1 期	第Ⅰ群第 2d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	—	○	
1225	254	〃	1 期	第Ⅰ群第 2d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	—	○	
1226	254	〃	1 期	第Ⅰ群第 2d 類	深鉢	—	—	6.9	—	—	—	底部	基隆帯、半隆起線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1227	254	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a7 類	深鉢	H4	12.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	橋状把手、環状突起、三角形突起、交互刺突文、有節沈線文	RL	砂粒、赤褐色粒子	赤褐	○	○	
1228	254	〃	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	楕円区画文、刺突文	—	砂粒、赤褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1229	255	58 号住居跡	1 期	第Ⅰ群第 1a1 類	深鉢	—	—	16.4	—	—	—	底部	胴部懸垂文（隆）、羽状縄文	RL・LR	砂粒	橙	○	○	
1230	255	〃	1 期	第Ⅰ群第 5a 類	深鉢	H	9.2	6.8	13.6	13.6	0.52	口縁部～底部	平行沈線文、貼付文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	網代圧痕。
1231	255	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	波状沈線文（単）、胴部縦位懸垂文（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1232	255	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、充填沈線文	LR	砂粒	橙	○	—	
1233	255	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆）、横線文＋刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰白	○	○	
1234	255	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1235	255	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a3-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	隆沈線＋刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
1236	255	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、横線文＋刺突文	—	砂粒	灰白	○	—	
1237	255	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、横線文＋刺突文	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1238	255	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	○	—	
1239	255	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文、横ハ字文	—	砂粒	灰白	—	○	
1240	255	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	縦位短沈線文	—	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1241	255	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1242	255	〃	4 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線文、刺突列	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	○	—	
1243	255	〃	4 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、横線文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
1244	255	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部		—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1245	255	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	D2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部縦位懸垂文（磨消）	LR	砂粒	明黄褐	○	○	
1246	255	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	帯縄文（磨消）	LR	砂粒	灰黄褐	—	—	
1247	255	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（磨消）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1248	255	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状文（磨消）	RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
1249	255	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1250	255	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	内面横位沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
1251	255	〃	5b 期	第Ⅱ群第 7c 類	注口	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部同心円文（沈）	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
1252	256	59 号住居跡	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	胴部	有尾渦巻状懸垂文、乙字状文＋刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1253	256	〃	不明	—	深鉢	—	—	7.6	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	明黄褐	—	—	
1254	256	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	9.6	—	—	5.7	口縁部～底部	横線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	○	—	
1255	256	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画、棒状懸垂文、入組コ字文＋刺突、胴部縦位懸垂文（沈）	L	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
1256	256	〃	中期	—	深鉢	—	—	15.2	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	灰白	—	—	
1257	256	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文、弧線文＋刺突文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1258	256	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1258	256	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、充填沈線文、渦巻状懸垂文（隆）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1259	256	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a7 類	深鉢	A1	28.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	横位楕円区画（隆）、横ハ字文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	○	○	

第 37 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1261	256	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文（隆）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1262	256	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1263	257	59 号住居跡	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1264	257	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	A3	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1265	257	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1266	257	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	横線文（沈）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1267	257	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1268	257	〃	3 期	第Ⅰ群第 3e 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽根状沈線文（平）、胴部縦位懸垂文（隆）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	—	○	
1269	257	〃	1-2a 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	頸部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
1270	257	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	頸部	頸部無文帯、未調整隆帯	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1271	257	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	—	○	
1272	257	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
1273	257	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	冂状区画文（沈）	—	砂粒	明黄褐	—	—	
1274	257	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	—	—	
1275	257	60 号住居跡	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	1276 と同一個体。
1276	257	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	1277 と同一個体。
1277	257	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	横線文（平）＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1278	257	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文	RL	砂粒	灰白	—	—	
1279	257	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部沈線文	LR	砂粒	淡黄	—	—	
1280	257	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（隆）	RL	砂粒	灰黄褐	○	—	
1281	257	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
1282	257	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	橙	—	—	
1283	257	〃	3 期	不明	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1284	257	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	撚	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1285	257	〃	2 期	第Ⅰ群第 5f 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒	橙	○	—	
1286	257	〃	不明	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1287	257	〃	不明	—	深鉢	—	—	11.2	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	網代圧痕。
1288	257	61 号住居跡	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	L	小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	—	—	
1289	257	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯文＋縄文	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
1290	257	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1c 類	深鉢	—	—	7	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（平）	撚 R	砂粒	橙	—	—	
1291	258	62 号住居跡	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文・横長楕円文＋刺突列、瘤状突起	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
1292	258	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
1293	258	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒	橙	—	—	
1294	258	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1295	258	〃	3 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒	橙	—	—	
1296	258	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	LR	砂粒	橙	—	○	
1297	258	〃	3 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	A2	28.5	15	53.4	53.4	24.4	口縁部～底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1298	258	炉跡	中期	—	深鉢	—	—	10.4	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	○	—	
1299	258	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1c 類	深鉢	—	—	6.4	—	—	—	胴部～底部	連結渦巻文（平）、胴部横位沈線区画（平）	撚 R	砂粒	明赤褐	○	○	
1300	258	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a7 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、横ハ字文、橋状把手	LR	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1301	258	〃	中期	—	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	—	—	
1302	258	〃	中期	—	深鉢	A1	10.8	7.2	12.2	12.2	0.54	口縁部～底部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1303	258		後期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1304	259	1 号長方形柱穴列	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状隆帯文	RL	砂粒	橙	—	○	
1305	259	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1306	259	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1307	259	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1308	259	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	—	○	
1309	259	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1310	259	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	撚 R	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
1311	259	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒、小礫（5 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1312	259	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1313	259	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒、雲母	明黄褐	—	—	
1314	259	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3ai 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	橋状把手	—	砂粒、白色粘土粒子	橙	—	—	

第 38 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1315	259	2号長方形柱穴列	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部隆帯区画、花弁状刺突文	—	砂粒	灰白	—	—	
1316	259	〃	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	—	
1317	259	〃	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
1318	259	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状突起、胴部横位沈線区画（平）、刺突列	LR	砂粒	橙	—	—	
1319	259	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、橙色粒子	橙	○	—	
1320	259	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	楕円区画文＋刺突文	—	砂粒、赤褐色粒子	橙	—	—	
1321	259	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	—	
1322	259	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、環状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1323	259	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、赤褐色粒子	橙	—	○	
1324	259	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（平）	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	—	○	
1325	259	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	○	—	
1326	259	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
1327	259	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1328	259	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文（沈）	—	小礫（1～2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1329	259	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1330	259	〃	3～4 期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	蛇行沈線文、条線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1331	259	〃	中期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	LR	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄褐	○	—	
1332	259	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
1333	259	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1334	259	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	橙	—	—	
1335	259	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1336	259	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	—	—	
1337	259	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部に繊維痕。
1338	259	〃	2a 期	第Ⅰ群第 6d 類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	橙	—	—	

第 39 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1339	260	I6	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	横位楕円区画（隆）、渦巻状文（沈）	—	赤褐色粒子	灰白	—	—	
1340	260	M9 - 12G	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、隆帯文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1341	260	L9 - 14G - 1H	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、円形文	—	砂粒	赤褐	—	—	
1342	260	L9 - 24G	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	赤褐	—	○	
1343	260	M9 - 22G	1 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	粘土帯（2.2cm 前後）
1344	260	M9 - 6G	1 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
1345	260	L9 - 18G	1 期	第Ⅰ群第 1e 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、交互刺突文	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
1346	260	L9 - 13G	1 期	第Ⅰ群第 1e 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、細沈線文	—	砂粒、石英	橙	—	○	
1347	260	M9	1 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部～頸部	基隆帯、半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1348	260	L9 - 10G	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部～頸部	口縁部隆帯文（未）、波状沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1349	260	L9 - 15G - 1H	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	浅鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	RL	砂粒	明黄褐	—	—	内外に赤彩
1350	260	L9 - 18G - 1H	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯渦巻文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	○	—	
1351	260	L9 - 24G - 1H	2 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1352	260	L9 - 13G	2 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C1	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1353	260	L9 - 14G - 1H	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位懸垂文（隆）、矢羽状沈線文	—	砂粒	黄橙	—	—	
1354	260	16J	2c 期	第Ⅰ群第 2c1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部区画（平）	RL	砂粒	黄橙	—	—	
1355	260	16J	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	A1	15.2	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部区画、縦位懸垂文（平）、刺突列	—	砂粒、小礫（3 ㎜）	黄橙	○	○	
1356	260	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	23.6	—	—	—	—	口縁部～胴部上半	刻目隆帯、渦巻状懸垂文（隆）、胴部懸垂文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	—	
1357	260	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部上半	刻目隆帯、渦巻状懸垂文（隆）	RLR	小礫（2 ～ 6 ㎜）	浅黄橙	—	—	
1358	261	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文（隆）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1359	261	L9 - 10G - 1H	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文＋側面刺突文、渦巻状懸垂文（隆）、ハ字状懸垂文（隆）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
1360	261	M9 - 11G - 1H	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1361	261	M9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文、渦巻状懸垂文（隆）、ハ字状懸垂文（隆）	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰白	—	○	
1362	261	M9 - 11G - 1H	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文、渦巻状懸垂文（隆）、刺突列、ハ字状懸垂文（隆）	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰白	—	○	
1363	261	L9 - 11G	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文、渦巻状懸垂文（隆）、刺突列	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	—	○	
1364	261	L9 - 12G	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文、渦巻状懸垂文（隆）、刺突列（管）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
1365	261	M9 - 12G	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	15	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文、充填沈線文	LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
1366	261	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文、渦巻状懸垂文（隆）、充填沈線文	—	小礫（2 ～ 7 ㎜）	灰白	—	—	
1367	261	M9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部上半	刻目隆帯、渦巻状懸垂文（隆）、充填沈線文	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1368	261	M9 - 6G+M9-P11	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	LR	小礫（2 ～ 6 ㎜）	浅黄橙	—	—	
1369	262	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文＋ハ字状懸垂文、充填沈線文	RL	砂粒、小礫（1 ～ 3 ㎜）	灰白	—	○	
1370	262	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文、条線文（6）	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1371	262	L9 - 10G - 1H	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	隆沈線文＋刺突文（棒）、瘤状突起	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	—	粘土帯（4.0cm 前後）
1372	262	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突列	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
1373	262	L9 - 8G	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文、瘤状突起	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
1374	262	M9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	懸垂文（隆）	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1375	262	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	横線文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ㎜）	灰黄褐	—	—	
1376	262	L9 - 15G - 1H	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	蕨手状懸垂文（隆）、横線文、刺突列	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1377	262	L9 - 18G-1H	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻条懸垂文、横線文＋刺突列（棒）、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
1378	262	L9 - 14G - 1H	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文、横線文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐	○	○	
1379	262	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	15.2	—	—	—	—	口縁部～胴部	渦巻状懸垂文、横線文＋刺突列（筺）、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	○	
1380	262	M9-12G	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	15	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文、横線文＋刺突列（筺）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1381	262	L9 - 20G - 1H	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	12.8	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文、横線文＋刺突列（管）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	—	
1382	262	L9-1G	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	有尾渦巻状懸垂文、横線文＋刺突列（筺）	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
1383	262	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	渦巻状懸垂文、横線文＋刺突列（筺）、胴部縦位懸垂文（隆沈）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
1384	263	M10 - 2G	3b 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文、横線文＋刺突列（管）、胴部縦位懸垂文（隆沈）	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1385	263	M9 - 5G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、横線文＋刺突列（筺）、胴部懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1386	263	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	28.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、乙字文＋刺突列（筺）	—	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1387	263	M10 - 2G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、乙字文＋刺突列（棒）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	

第 40 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1388	263	L9 - 13G - 1H	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、横線文＋刺突列（棒）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	○	○	
1389	263	M10 - 7G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	18.4	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文＋刺突列	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1390	263	L9 - 15G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	入組コ字文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1391	263	M9 - 22G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、渦巻状懸垂文、入組コ字文	—	小礫（2 ㎜）	灰黄褐	—	—	
1392	263	L9 - 25G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、棒状懸垂文、入組コ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1393	263	L9 - 12G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、渦巻状懸垂文、乙字文	—	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1394	263	L9 ＋ M10 - 2G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	19.6	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、棒状懸垂文、渦巻文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
1395	263	L10 - 3G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	13.6	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文、沈線＋刺突文（棒）	—	小礫（2 ㎜）	灰白	○	—	
1396	263	L9 - 20G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、棒状懸垂文、横線文	L	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1397	263	16J	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文＋刻目、入組コ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	—	
1398	263	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	12.4	—	—	—	—	口縁部	瘤状突起列、棒状懸垂文、入組コ字文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
1399	263	L9 - 18G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	22.4	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、渦巻状懸垂文、入組コ字文＋刺突列	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
1400	263	L9 - 25G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、横線文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	○	
1401	263	M9 - 23G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、刺突列（棒）、入組コ字文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1402	264	L9 - 20G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、棒状懸垂文、入組コ字文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
1403	264	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、棒状懸垂文、入組コ字文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1404	264	L9 - 20G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、渦巻懸垂文、沈線＋刺突文（棒）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	—	
1405	264	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部隆帯区画、棒状懸垂文、入組コ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	○	—	
1406	264	M9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、刺突列（棒）、入組コ字文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1407	264	16J	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1408	264	M9 - 11G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1409	264	L9 - 25G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文	RL	小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	○	○	
1410	264	L9 - 23G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、棒状懸垂文、入組コ字文	R	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
1411	264	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文	R	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
1412	264	L9 - 23G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、棒状懸垂文（隆）、入組コ字文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1413	264	M9 - 22G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、棒状懸垂文、入組コ字文＋刺突（棒）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1414	264	L9 - 14G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、棒状懸垂文、沈線文＋刺突（棒）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	—	—	
1415	264	M9 - 16G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻懸垂文、沈線＋刺突文（棒）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐	○	—	
1416	264	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、沈線文＋刺突（棒）	—	小礫（2 ㎜）	灰黄褐	○	—	
1417	265	L9 - 14G-1H	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、棒状懸垂文、沈線文＋刺突（管）	L	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1418	265	M9-11G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文＋刺突（棒）	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1419	265	L9-13G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	有尾渦巻懸垂文、入組コ字文＋刺突（棒）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
1420	265	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、棒状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	LR	小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	○	—	
1421	265	M9-17G-1H	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	29.2	—	—	—	—	口縁部	弧状隆帯文、弧状沈線文	—	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1422	265	L9-22G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	弧状隆帯文、弧状沈線文、胴部懸垂文（沈）	L	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1423	265	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、弧状沈線文	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	○	—	
1424	265	M9-15G+16G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	弧状隆帯文、弧状沈線文	—	小礫（2 ㎜）	褐	○	○	
1425	265	L9-	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	20	—	—	—	5.3	口縁部～胴部	弧状隆帯文、弧状沈線文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1426	265	L9-18G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	弧状沈線文、刺突（棒）	—	小礫（2 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1427	265	L9-25G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、弧状隆帯文、弧状沈線文	—	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1428	265	L9-18G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻隆帯文、弧状沈線文、胴部縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1429	265	16 J	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-3 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻隆帯文、弧状沈線文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1430	265	L9-10G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、弧状隆帯文、弧状沈線文	—	小礫（1 ㎜）	浅黄橙	—	—	
1431	265	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	W字状貼付文、弧状沈線文＋刺突（棒）	—	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1432	265	L9-20G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、弧状沈線文＋刺突（棒）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
1433	266	L10 - 4G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、棒状懸垂文、弧状沈線文、橋状把手（欠）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
1434	266	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
1435	266	L10-9G+M10-6G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1436	266	M9-16G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、渦巻状懸垂文、沈線文	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1437	266	L9-12G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、渦巻状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1438	266	L10-10G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1439	266	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、渦巻状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ㎜）	灰黄褐	○	○	

第 41 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1440	266	L10-3G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、入組コ字文、横ハ字文	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	○	※ 1441 と同一個体。
1441	266	L9-20G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A3	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、入組コ字文、横ハ字文	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	○	※ 1440 と同一個体。
1442	266	L10-9G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1443	266	M10-7G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1444	266	L9-19G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、渦巻状懸垂文、入組コ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1445	266	M10-3G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1446	266	M9-12G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ㎜）	橙	—	○	
1447	266	L9-25G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1448	266	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部隆帯区画、入組コ字文、横ハ字文、胴部縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1449	266	L9-22G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1450	266	L9-23G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1451	266	L9-20G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	有尾渦巻状懸垂文、胴部横位沈線区画、横ハ字文	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1452	266	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1453	266	M9-16G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文、胴部横位沈線区画	—	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1454	267	M10-9G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	○	
1455	267	L10-9G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文、沈線区画、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄橙	—	—	
1456	267	L10-9G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手＋８字状貼付文、８字状懸垂文、横ハ字文	—	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1457	267	L9-24G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明赤褐	—	○	
1458	267	L10-2G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、沈線区画、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明赤褐	—	○	
1459	267	L10-9G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部隆帯区画、変形横ハ字文	—	小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	—	
1460	267	L9-25G	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、渦巻状懸垂文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1461	267	L10-4G	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、弧状隆帯区画、横ハ字文	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	○	—	
1462	267	M10-6G	3b 期	第Ⅰ群第 3a5-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	弧状隆帯区画、渦巻状懸垂文、横ハ字文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1463	267	J9	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	弧状隆帯区画、渦巻状懸垂文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	○	—	
1464	267	J9	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、弧状隆帯区画、渦巻状懸垂文、横ハ字文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	○	
1465	267	L9-170	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、渦巻状懸垂文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
1466	267	L9-15 G -1H	3b 期	第Ⅰ群第 3a5-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部隆帯区画、渦巻状懸垂文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1467	267	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a5-2 類	深鉢	A1	23.2	—	—	—	8.2	口縁部～胴部	口縁部隆帯区画、弧状隆帯区画、横ハ字文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	—	
1468	267	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部隆帯区画、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1469	267	M9-21G	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、横ハ字文	RL	小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
1470	267	L9-25G	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、横ハ字文	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	—	
1471	268	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a5-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、弧状隆帯区画、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1472	268	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a5-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文、蛇行沈線文	—	小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
1473	268	L10-2G	3b 期	第Ⅰ群第 3a7 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、横長方形区画、横ハ字文	—	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1474	268	L9-23G	3b 期	第Ⅰ群第 3a7 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯、横長方形区画、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1475	268	L9-23G	3b 期	第Ⅰ群第 3a7 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、横長方形区画、横ハ字文	L	小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
1476	268	L10-2G	3b 期	第Ⅰ群第 3a7 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、横長方形区画、横ハ字文	—	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1477	268	L9-23G	3b 期	第Ⅰ群第 3a7 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、横ハ字文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	—	
1478	268	L10-2G	3b 期	第Ⅰ群第 3a7 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、横ハ字文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1479	268	L10-5G	3b 期	第Ⅰ群第 3a7 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯区画＋瘤状突起、橋状把手	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1480	268	L11-25G	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画＋刺突（管）、内面蓋受け状隆帯	—	小礫（2 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1481	268	L10-10G	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画	L	小礫（1 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1482	268	L12	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部沈線区画＋刺突列	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1483	268	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a11 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部の内屈	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
1484	268	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画（鎖）	LR	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1485	268	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画（刻）	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	—	
1486	268	L9-25G	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画（刺）、刺突列	LR	小礫（1 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1487	268	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画	LR	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1488	268	L9	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1489	269	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	J	—	—	—	—	—	口縁部	中空把手、渦巻状懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	○	
1490	269	L9-23G	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	J	—	—	—	—	—	口縁部	中空把手、渦巻状懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	○	—	補修孔。
1491	269	L9-5G	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	○	○	
1492	269	M10-2G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆沈）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	○	○	
1493	269	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	J	—	—	—	—	—	口縁部	中空把手、渦巻状懸垂文、弧線文	—	砂粒	灰黄褐	○	—	

第 42 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1494	269	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、胴部磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	—	
1495	269	M9-11G-1H	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、胴部磨消懸垂文	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
1496	269	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、口縁部渦巻文、胴部磨消懸垂文	RL	砂粒	明黄橙	○	○	
1497	269	M9-16G-1H	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	RL	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	○	—	
1498	269	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
1499	269	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、口縁部渦巻文、胴部磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1500	270	M9-15G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	—	
1501	270	L9-16G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1502	270	M9-16G-1H	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部楕円区画文	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
1503	270	M9-17G-1H	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文、口縁部楕円区画文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1504	270	L9-16G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	逆Ｕ字文、ワラビ手状懸垂文（沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1505	270	M9-15G-1H	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
1506	270	M9-11G-1H	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰白	—	—	
1507	270	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
1508	270	M9-9G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	—	—	
1509	270	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	RL	砂粒	灰白	—	—	
1510	270	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文、蛇行沈線文	L	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	○	—	
1511	270	M10-2G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文、条線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1512	270	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文、条線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
1513	270	L9-24G	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部区画（微）	LR	砂粒	明黄褐	—	—	
1514	270	M9-23G	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	逆Ｕ字状磨消懸垂文	RL	砂粒	灰白	—	○	
1515	270	L10-2G	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列、逆Ｕ字状磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰白	○	○	
1516	270	M9-22G	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	胴部	逆Ｕ字文、ワラビ手状懸垂文（沈）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	○	
1517	270	L9-20G+L10-2G	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	胴部	Ｈ字状磨消懸垂文	RL	砂粒	明褐	○	○	
1518	270	L9	3a 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	K1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1519	271	L9-15G	3a 期	第Ⅰ群第 3h 類	両耳	—	—	—	—	—	—	胴部	把手、逆Ｕ字状懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
1520	271	Ｌ 9-24 G -1H	3b 期	第Ⅰ群第 3j 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文による渦巻文	—	砂粒	褐灰	—	—	赤彩。
1521	271	Ｌ 9-24 G -1H	3b 期	第Ⅰ群第 3j 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	微隆起線文による渦巻文	—	砂粒	褐灰	—	—	赤彩。
1522	271	Ｌ 9-23 G	中期	第Ⅰ群第 7c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	台部	円孔、下端部沈線区画	—	砂粒	橙	—	—	
1523	271	L10-4G	4a 期	第Ⅱ群第 1a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	頸部隆帯区画、瘤状貼付文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1524	271	L10-14G	4a 期	第Ⅱ群第 1a1 類	深鉢	B1	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、瘤状貼付文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1525	271	L10-9G	4a 期	第Ⅱ群第 1a1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、瘤状貼付文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1526	271	L10-9G	4a 期	第Ⅱ群第 1a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	瘤状貼付文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1527	271	L10-9G	4a 期	第Ⅱ群第 1a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	瘤状貼付文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1528	271	L10-16G	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手（欠）、頸部隆帯区画（鎖）、内面に蓋受状の隆帯	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1529	271	L12	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	棒状貼付文、頸部隆帯区画、刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1530	271	L9-23G	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、頸部隆帯区画（鎖）、花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰白	—	—	
1531	271	L10-9G	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手＋環状突起、頸部隆帯区画＋刻目、ハ字状懸垂文、花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1532	271	16 J	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形刺突文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1533	271	L12	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	頸部隆帯区画（鎖）、花弁状刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1534	271	L9-23G	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	頸部隆帯区画＋刻目、花弁状刺突文	—	砂粒、雲母	にぶい黄褐	○	○	
1535	271	L9-24G	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
1536	271	L11	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1537	271	L11	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒	橙	○	○	
1538	271	L12	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
1539	271	L9-15 G -1H	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形刺突文	—	砂粒	橙	○	—	
1540	271	L10-9G	4a 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列（管）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1541	271	16J	4a 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文、凹文、頸部懸垂文（隆）	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1542	271	L9-24G	4a 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆）、横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1543	271	L12	4a 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	頸部隆帯区画（磨）	LR	砂粒	橙	○	○	
1544	271	L9-10G-1H	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文、刻目、三角形区画文（磨）	LR	砂粒	橙	○	—	
1545	271	L13-7G	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	対弧状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1546	271	L9-23G	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	D2	—	—	—	—	—	口縁部	環状把手、対弧状沈線文	—	砂粒	橙	—	—	

第 43 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1547	272	L10-4G	5b 期	第Ⅱ群第 2a3 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	環状把手､口縁部横位楕円区画文＋刺突文､胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
1548	272	L8	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横線文（沈）、刻目	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
1549	272	L10-4G	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文（沈）、ハ字状刺突文	—	砂粒	橙	○	—	
1550	272	L11	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刺突列	—	砂粒	褐	○	—	
1551	272	L10-4G	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横線文（沈）、頸部懸垂文（隆）	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
1552	272	L10-9G	5b 期	第Ⅱ群第 2c1 類	深鉢	F	17.6	—	—	—	—	口縁部	横位帯縄文（磨）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1553	272	L10-10G	5b 期	第Ⅱ群第 2c1 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	多条沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1554	272	L9	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画＋刻目	—	砂粒	明褐	—	—	
1555	272	M9-2G	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、胴部三角形区画文（磨）	縄文	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1556	272	L10-4G	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（磨）	縄文	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
1557	272	L12	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	—	
1558	272	L2	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	—	—	
1559	272	M9-12G	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	米字状沈線文（磨）	LR	砂粒	橙	—	—	
1560	272	L9-12G	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	菱形文（磨）	LR	砂粒、雲母	にぶい黄橙	○	—	
1561	272	L11	後期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
1562	272	L11	5b 期	第Ⅱ群第 2c6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横位多条沈線文	—	砂粒	褐灰	○	○	
1563	272	L12	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	三角形区画文（磨）	LR	砂粒	褐灰	○	○	
1564	272	L9-22G	5b 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（磨）	LR	砂粒	橙	—	—	
1565	272	L12-12G	5b 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横位楕円区画文（磨）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1566	272	L10-10G	5b 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨）	LR	砂粒	橙	○	—	
1567	272	L9-24G	5b 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	楕円区画文（磨）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1568	272	M9-8G	5b 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1569	272	L8	5b 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	多条沈線文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
1570	272	L9-1G	5b 期	第Ⅱ群第 7c 類	注口	—	—	—	—	—	—	胴部	多条沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1571	272	L12	4a 期	第Ⅱ群第 8b 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	花弁状刺突文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1572	272	L12	4a 期	第Ⅱ群第 8 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	砂粒	橙	○	○	
1573	272	L10-3G	4a 期	第Ⅱ群第 8c 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	隆帯文＋刻目	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1574	272	L10-2G	4a 期	第Ⅱ群第 6a 類	浅鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	C 字状突起	—	砂粒	橙	○	—	
1575	272	K9	4a 期	第Ⅰ群第 3j 類	甕	—	—	—	—	—	—	胴部	把手、J 字状懸垂文（微隆）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	赤彩。
1576	272	M9-22G	4a 期	第Ⅰ群第 3j 類	甕	—	—	—	—	—	—	胴部	把手	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
1577	272	M9-17G-1H	5 期	第Ⅱ群第 7b 類	注口	—	—	—	—	—	—	注口部	横位隆帯区画	RL	砂粒	浅黄橙	—	—	赤彩。
1578	273	MP1	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	9.6	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	○	
1579	273	MP1	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	8.8	—	—	—	底部	—	—	砂粒	橙	—	—	
1580	273	MP2	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	11.2	—	—	—	胴部下半～底部	—	—	小礫（2 ～ 5㎜）	橙	○	○	
1581	273	MP3	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	L	砂粒、小礫（2 ～ 5㎜）	明黄褐	—	○	
1582	273	MP4	4 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	C2	26.8	9.6	35.2	34.8	13.4	口縁部～底部	頸部隆帯区画（刻隆）、環状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1583	273	MP4	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画	RL	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	○	
1584	273	MP4	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1585	273	MP4	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文	—	橙色粘土粒	浅黄橙	—	—	
1586	273	MP4	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文（刻隆）、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3㎜）	褐灰	○	—	
1587	273	MP4	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	雨垂状刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1588	273	MP5	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3㎜）	浅黄橙	○	○	
1589	274	MP8	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	6.4	—	—	—	底部	花弁状刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	網代圧痕。
1590	274	MP9-P7	2a 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	—	25.6	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部渦巻文＋剣先文、充填沈線文、胴部区画（平）、縦位懸垂文（平）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1591	274	MP9-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	胴部	渦巻懸垂文、刻目隆帯、充填沈線文	—	小礫（2 ～ 3㎜）	褐灰	○	—	内面剥落。
1592	274	MP16	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	24.4	10	33.6	—	5.7	口縁部～底部	口縁部隆帯文＋剣先文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1593	275	MP10	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	24.4	—	—	—	—	口縁部	口縁部区画（沈）、渦巻文（沈）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1594	275	MP17	中期	—	深鉢	—	—	11.6	—	—	—	底部	—	LR	小礫（2 ～ 3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1595	275	MP18	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	8.4	—	—	—	胴部～底部	米字状懸垂文（沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1596	275	MP20	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-4 類	深鉢	A1	—	6.8	—	—	—	胴部～底部	棒状懸垂文、方形区画文	LR	小礫（2 ～ 4㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1597	275	MP15	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	32.8	8.8	44	43.6	18.6	口縁部～底部	刻目隆帯、渦巻懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1598	276	MP21	中期	—	深鉢	—	—	9.6	—	—	—	底部	—	縄文	小礫（2 ～ 5㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1599	276	MP27	中期	—	深鉢	—	—	7.2	—	—	—	底部	—	RL	小礫（2 ～ 4㎜）	橙	○	○	

第 44 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1600	276	MP27	中期	第Ⅰ群第3a4-1類	深鉢	A1	20	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文、胴部縦位懸垂文（沈）	L	小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1601	276	MP29	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	LR	小礫（2～3㎜）	明赤褐	○	—	
1602	276	MP28	3b期	第Ⅰ群第3a10類	深鉢	A1	—	10.4	—	—	3.8	口縁部～底部	口縁部隆帯区画	LR	小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1603	276	MP29	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	7.2	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文	RL	小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1604	276	MP30	3b期	第Ⅰ群第3a4類	深鉢	—	—	15.6	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2～4㎜）	橙	—	○	
1605	276	MP30	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	4.4	—	—	—	底部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1606	276	MP32	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	L	小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1607	276	MP32	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	6.4	—	—	—	胴部～底部	条線文	RL	小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1608	276	MP34	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	12	—	—	—	底部	—	RL	小礫（2～3㎜）	黄橙	—	—	
1609	276	MP37	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	9.2	—	—	—	底部	—	—	小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1610	276	H7-P9	中期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	小礫（2～4㎜）	浅黄橙	—	—	
1611	277	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	28	9.6	50.4	49	17.7	口縁部～底部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	RL	小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	○	復元後に大破。
1612	277	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	24.4	8.3	38.8	—	9.3	口縁部～底部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	RL	小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1613	278	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	22.8	9.2	38	—	7.5	口縁部～底部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	RL	小礫（2～3㎜）	灰白	—	—	
1614	278	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	22.5	9.6	39.3	—	9.4	口縁部～底部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、ハ字状懸垂文	LR	小礫（1～7㎜）	浅黄橙	—	—	
1615	279	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a2-1類	深鉢	A1	27.2	8	42.8	—	12.3	口縁部～底部	横位隆帯文、渦巻状懸垂文、ハ字状懸垂文、蛇行条線文	—	小礫（2～3㎜）	灰白	—	—	
1616	279	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	21.2	9.2	29.6	—	5.6	口縁部～底部	横線文＋刺突文（半分側のみ）	—	小礫（2～3㎜）	灰白	—	—	
1617	280	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a1-1類	深鉢	A1	29.6	10	46.4	—	17.5	口縁部～底部	横位隆帯文、渦巻状懸垂文＋ハ字状懸垂文	LR	小礫（1～3㎜）	灰白	—	—	
1618	280	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a3-1類	深鉢	A1	23.2	9.6	33.6	—	7.5	口縁部～底部	渦巻状懸垂文、横線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文	RL	小礫（2～3㎜）	浅黄橙	—	—	補修孔。
1619	281	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a1-3類	深鉢	A2	28	11.2	45.2	—	19.7	口縁部～底部	渦巻状懸垂文、刻目隆帯、充填沈線文	LR	小礫（2～3㎜）	浅黄橙	—	—	口縁部楕円状。
1620	281	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a2-3類	深鉢	A1	13.6	—	—	—	—	口縁部～底部	横線文＋刺突文	L	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1621	281	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第5g類	深鉢	A1	24	8.4	31.8	—	6.3	口縁部～底部	—	縄文	小礫（1～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1622	281	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～底部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	表面焼成時のハジケ。
1623	281	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a2-1類	深鉢	A1	24	6.8	36.4	—	9	口縁部～底部	横線文＋刺突文、平行単沈線、胴部縦位懸垂文	RL	小礫（2～3㎜）	浅黄橙	—	—	
1624	282	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a2-1類	深鉢	A1	30.5	—	42.8	—	9.6	口縁部～底部	—	RL	小礫（1～5㎜）	浅黄橙	○	○	口縁部楕円状。
1625	282	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第5g類	深鉢	A1	20.4	8.4	41.2	—	16.7	口縁部～底部	—	—	小礫（1～3㎜）	灰白	—	—	網代圧痕。
1626	282	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第5g類	深鉢	A1	27	—	40.6	—	17	口縁部～底部	—	LR	小礫（1～5㎜）	灰白	—	—	
1627	282	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第5g類	深鉢	A1	29.5	11	39.5	—	15.1	口縁部～底部	—	LR	小礫（1～3㎜）	浅黄橙	—	—	
1628	283	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第5g類	深鉢	A2	21.5	9.3	30.1	—	11.6	口縁部～底部	—	LR	小礫（1～3㎜）	浅黄橙	—	—	
1629	283	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第5g類	深鉢	A1	24	9.5	39.5	—	14.7	口縁部～底部	—	LR	小礫（1～3㎜）	灰白	—	—	
1630	283	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第5g類	深鉢	A1	28.5	13.5	42	40	16.5	口縁部～底部	—	L	小礫（1～5㎜）	灰白	—	—	補修孔。
1631	283	13J-P1	3a期	第Ⅰ群第5g類	深鉢	A1	29	10.4	49	—	?	口縁部～底部	—	L	小礫（1～3㎜）	灰白	—	—	
1632	284	4J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a2-3類	深鉢	A1	22.8	10.4	32	—	6.7	口縁部～底部	隆沈線＋瘤状突起	L	小礫（1～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1633	284	4J-P1	3b期	第Ⅰ群第3a4類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	有尾渦巻状懸垂文、横線文＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	1636と接合。
1634	284	4J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a2類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、横線文＋刺突文	RLR	砂粒、小礫（1～3㎜）	浅黄橙	○	—	
1635	284	4J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋瘤状突起	LR	砂粒、小礫（1～2㎜）	褐灰	—	—	
1636	284	4J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（沈）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	1633と接合。
1637	284	4J-P1	3a期	第Ⅰ群第3c1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	—	砂粒、小礫（1～3㎜）	浅黄橙	○	—	
1638	284	4J-P1	3a期	第Ⅰ群第3a9類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（沈）	RL	砂粒	灰黄褐	○	—	
1639	284	4J-P1	2期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	LR	砂粒、橙色粘土粒	浅黄橙	—	○	
1640	284	4J-P1	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
1641	284	4J-P1	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1642	284	4J-P1	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
1643	284	4J-P1	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	赤褐色粒子、雲母	にぶい黄橙	○	—	
1644	284	4J-P1	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒、石英	浅黄橙	—	○	
1645	284	4J-P1	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	LR・RL	砂粒、雲母（極少）	にぶい黄橙	—	○	
1646	284	4J-P1	中期	—	深鉢	—	—	12.8	—	—	—	底部	—	LR	小礫（1～3㎜）	浅黄橙	—	○	
1647	285	5J-P4	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起	—	橙色粒子	橙	—	○	
1648	285	5J-P4	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	楕円区画文（隆）＋刺突文、半隆起線文	—	橙色粒子	灰黄褐	○	○	
1649	285	5J-P4	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、小礫（1～2㎜）	橙	○	—	
1650	285	5J-P4	1期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部押圧	RL	砂粒	明黄褐	○	○	
1651	285	5J-P4	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒	明赤褐	○	—	
1652	285	5J-P4	1期	第Ⅰ群第5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	

第45表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1653	285	5J-P4	1a 期	第Ⅰ群第 6a 類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	RL	砂粒、雲母	灰白	—	—	
1654	285	F6-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画＋刻目、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1655	285	F6-P6	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1656	285	F6-P6	2b 期	第Ⅰ群第 2b1 類	深鉢	I2	28	10.4	45.6	42.8	14.6	口縁部～底部	口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文、腕骨文（隆）、剣先文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1657	285	F6-P6	2b 期	第Ⅰ群第 2b1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画、渦巻状隆帯文、充填沈線文、頸部横位区画（平）	—	砂粒、小礫（1 ～ 2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1658	285	F6-P6	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	C1	—	—	—	—	—	口縁部	X 字状把手、腕骨文（隆）、剣先文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
1659	285	F6-P6	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
1660	285	F6-P6	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	8	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	○	
1661	285	F6-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	平行沈線文	—	砂粒、小礫（1 ～ 2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1662	285	F6-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	頸部横位区画（平）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	○	—	
1663	286	F6-P6	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆）	RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
1664	286	F6-P6	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	橋状把手（欠）、胴部縦位懸垂文（隆）＋爪形文、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1665	286	F6-P6	1 期	第Ⅰ群第 1d2-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒	橙	—	○	
1666	286	F6-P6	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、環状突起、有節沈線文	—	橙色粘土粒	浅黄橙	—	○	
1667	286	F6-P6	2 期	第Ⅰ群第 5e 類	深鉢	C3	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒	橙	—	—	
1668	286	F6-P6	2a 期	第Ⅰ群第 6d 類	深鉢	E2	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	明赤褐	—	—	内外に赤彩痕。
1669	286	F6-P6	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部隆帯区画、弧状沈線文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	—	
1670	286	F6-P6	3 期	第Ⅰ群第 4i 類	有溝	—	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	橋状把手、隆帯文	—	砂粒（少）	橙	—	—	内外に赤彩痕。
1671	286	F6-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A2	16	—	—	—	—	口縁部～胴部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	RL	砂粒、赤色粒子	灰黄褐	○	—	
1672	286	F6-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	A1	32.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部隆帯文、刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1673	286	F6-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状隆帯文、刻目	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	褐灰	—	—	
1674	286	F6-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文	—	小礫（2 ㎜）	褐灰	○	—	
1675	286	F6-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文、瘤状突起	LR	小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1676	286	F6-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、胴部磨消懸垂文	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
1677	286	F6-P7	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	I2	—	—	—	—	—	口縁部	波状文（平）	RL	砂粒	橙	—	—	
1678	286	F6-P7	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1679	286	F6-P7	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文、刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1680	287	F6-P7	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C2	12	—	—	—	—	胴部	頸部横位区画（単）	RL	砂粒	橙	○	○	
1681	287	F6-P7	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	頸部横位区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	LR	砂粒	灰白	○	—	
1682	287	F6-P7	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1683	287	F6-P7	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1684	287	F6-P7	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	○	—	
1685	287	F6-P7	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆）	—	砂粒	橙	—	—	
1686	287	F6-P7	2b 期	第Ⅰ群第 2bb 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部渦巻状懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1687	287	F6-P7	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
1688	287	F6-P7	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、腕骨文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
1689	287	F6-P7	2c 期	第Ⅰ群第 2c1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1690	287	F6-P7	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突文（半竹）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1691	287	F6-P7	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文（隆沈）	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
1692	287	F6-P7	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文（隆）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1693	287	F6-P7	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状懸垂文（隆）、横位沈線文	—	小礫（2 ㎜）	明褐	—	○	
1694	287	F6-P7	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
1695	287	F6-P7	1 期	第Ⅰ群第 1d3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	横線文（半隆）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1696	287	F6-P7	1 期	第Ⅰ群第 1d3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文（半隆）	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
1697	287	F6-P7	2 期	第Ⅰ群第 5f 類	深鉢	A1	34.4	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1698	287	F6-P7	2 期	第Ⅰ群第 5c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒	橙	○	—	
1699	287	F6-P7	2 期	第Ⅰ群第 5d 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1700	287	F6-P7	2 期	第Ⅰ群第 5c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1701	287	F6-P7	2 期	第Ⅰ群第 5e 類	深鉢	C3	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1702	288	F6-P7	2 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	—	24.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	条線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄橙	○	○	
1703	288	F6-P7	中期	第Ⅰ群第 7a 類	鉢	—	10	4.2	4.5	—	0.12	口縁部～底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1704	288	F6-P8	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画、充填沈線文	—	砂粒	黄橙	○	○	
1705	288	F6-P8	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	—	○	

第 46 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1706	288	F6-P8	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突列、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1707	288	F7-P4	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	X字状把手、頸部横位区画（隆）、腕骨文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
1708	288	G3-P2	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画＋刺突文、Y字状懸垂文（隆）、入組コ字文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1709	288	G3-P2	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	黄橙	—	—	
1710	288	G3-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1711	288	G3-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文（隆）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1712	288	G3-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、胴部磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1713	288	G3-P2	2 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C1	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部渦巻文（沈）	RL	砂粒	灰黄褐	—	○	
1714	288	G3-P2	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯区画文	RL	砂粒	橙	○	○	
1715	288	G3-P2	1c ～ 2a	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、胴部縦位懸垂文（基）、胴部渦巻文（隆）	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1716	288	G6-P7	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	刺突列	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	○	
1717	288	G6-P7	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1718	288	G6-P7	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画（平）、波状沈線文（平）	RL	砂粒	褐	○	○	
1719	288	G6-P7	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（半）	RL	砂粒	灰黄褐	—	○	
1720	288	G6-P7	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（半）	RL	砂粒	灰白	○	—	
1721	288	G6-P7	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒	橙	○	—	
1722	288	G6-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a0 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
1723	289	50J-P11	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	頸部横位区画（平）、縦位懸垂文（平）	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1724	289	50J-P11	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	剣先状文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
1725	289	50J-P11	1c 期	第Ⅰ群第 1c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状把手、コイル状文	—	砂粒	橙	—	—	
1726	289	50J-P11	3 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
1727	289	15J-P4	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（半）	LR	砂粒	橙	—	○	
1728	289	15J-P4	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
1729	289	15J-P3	3a 期	第Ⅰ群第 3a-2 類	深鉢	A1	13.6	6.4	14.6	12.8	0.77	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文（隆）、充填沈線文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1730	289	H5-P3	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆）、横位隆帯文、刺突列	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	—	
1731	289	H5-P3	3a 期	第Ⅰ群第 3a-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯（二段）	LR	小礫（1 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
1732	289	H5-P3	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文	RL	小礫（2 ～ 5 ㎜）	灰黄褐	—	—	
1733	289	H5-P3	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文、横線文	—	小礫（1 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1734	289	H5-P3	3a 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A3	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（1 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1735	289	H5-P3	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆）、横線文＋刺突列	LR	小礫（2 ㎜）	灰白	○	○	
1736	289	H5-P3	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刺突文、横位沈線文	—	小礫（1 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1737	289	H5-P3	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文（隆）、刺突列、胴部縦位懸垂文（沈）	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1738	289	H5-P3	3 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	9.6	—	—	—	胴部～底部	—	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1739	289	H5-P3	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆）、刻目隆帯	—	小礫（1 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1740	289	H5-P3	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆沈）	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1741	289	H5-P3	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状楕円区画文、胴部磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1742	290	H6-P1	1c 期	第Ⅰ群第 1c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、環状突起	—	砂粒、橙色粒子	浅黄橙	○	—	
1743	290	H7-P1	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク状文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1744	290	H7-P1	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	RL	砂粒	橙	—	—	
1745	290	H7-P1	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
1746	290	H7-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	二段渦巻状懸垂文（隆）、刻目隆帯	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1747	290	H7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	—	
1748	290	H7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆）、横線文＋刺突列	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1749	290	H7-P2	2 期	第Ⅰ群第 2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部平行沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1750	290	H7-P2	2 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	RL	砂粒	褐	—	—	
1751	290	H7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刻目隆帯	—	小礫（1 ～ 5 ㎜）	明黄褐	○	—	
1752	290	H7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、斜状沈線文、刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1753	290	H7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	刺突文（半竹）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1754	290	H7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刺突文（半竹）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1755	290	H7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	条線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1756	290	H7-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文（隆）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1757	290	H7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻文（隆）、刻目隆帯、斜位沈線文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	

第 47 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1758	290	H7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画、縦位沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1759	290	H7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆）、条線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	灰黄褐	—	—	
1760	290	H7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	K2	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	胴部渦巻状懸垂文（刻隆）、条線文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
1761	290	H7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、条線文	—	砂粒	黄橙	—	○	
1762	290	H7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、弧状沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
1763	290	H7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	円形貼付文、横線文	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
1764	291	H7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	15.2	8	16.8	16.8	1.6	口縁部	刺突列（単）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1765	291	H7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列（半竹）	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
1766	291	H7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突列	—	砂粒	灰白	—	—	
1767	291	H7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突列（半竹）	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
1768	291	H7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列（半竹）	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
1769	291	H7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列（単）	—	砂粒、小礫（2㎜）	褐	○	○	
1770	291	H7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1771	291	H7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突列（単）	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	—	○	
1772	291	H7-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆沈）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	黄橙	○	—	
1773	291	H7-P6	3b 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	U字状文（沈）	—	砂粒	灰白	○	—	
1774	291	H7-P6	2 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	RL	砂粒	橙	○	○	
1775	291	H7-P6	2 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1776	291	H7-P6	2 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部区画（刺）、条線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	○	—	
1777	291	H7-P6	2 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1778	291	H7-P6	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、石英	明赤褐	○	○	
1779	291	H7-P8	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	中空把手、口縁部区画＋矢羽根状沈線文・縦位沈線文	—	砂粒	橙	○	○	1780 と接合。
1780	291	H7-P8	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	中空把手、口縁部区画＋矢羽根状沈線文・縦位沈線文	—	砂粒	橙	○	○	1779 と接合。
1781	291	H7-P8	2 期	第Ⅰ群第 2 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（欠）、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1782	291	H7-P8	2 期	第Ⅰ群第 2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部区画文（単）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1783	292	H7-P8	2a 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	—	—	
1784	292	H7-P8	2a 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（単）、蛇行沈線文（単）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1785	292	H7-P8	2 期	第Ⅰ群第 2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	褐	—	—	赤彩。
1786	292	H7-P8	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	明赤褐	—	—	赤彩。
1787	292	H7-P10	2 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画、口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1788	292	H7-P10	2 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	頸部横位沈線区画（平）、口唇部横位沈線文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
1789	292	H7-P10	2 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
1790	292	H7-P10	2 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部渦巻状沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1791	292	H7-P10	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画	LR	砂粒	明褐	○	—	
1792	292	H7-P10	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	双頭渦巻文（隆）	RL	砂粒	灰黄褐	○	○	
1793	292	H7-P10	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	褐	○	○	
1794	292	H7-P10	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	X字状把手、口縁部横位区画（隆）	—	砂粒	橙	—	○	
1795	292	H7-P10	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1796	292	H7-P10	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1797	292	H7-P10	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	双頭渦巻文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、橙色粒子	橙	—	○	
1798	292	H7-P10	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
1799	292	H7-P10	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	淡黄	—	—	
1800	292	H7-P10	中期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒、小礫（2㎜）	褐	○	—	
1801	292	H7-P10	中期	第Ⅰ群第 6d 類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	明赤褐	—	—	赤彩。
1802	292	H7-P10	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1803	292	H7-P10	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	淡黄	○	—	
1804	293	H7-P13	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、有節沈線文	LR	砂粒	橙	○	○	
1805	293	H7-P13	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1806	293	H7-P13	3 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	—	砂粒	黄橙	○	—	
1807	293	H7-P13	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（単）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1808	293	H7-P13	3 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文、刺突文	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄褐	○	—	
1809	293	H7-P13	3 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文	LR	小礫（2㎜）	明黄褐	—	○	
1810	293	H7-P13	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	○	
1811	293	H7-P13	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	

第 48 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1812	293	H7-P13	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1813	293	H8-P1	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部縦位懸垂文（半）、交互刺突文、有節沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
1814	293	H8-P1	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、石英	明赤褐	○	○	
1815	293	H8-P1	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3㎜）	橙	—	—	
1816	293	H8-P1	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、橙色粒子	灰白	—	—	
1817	293	H8-P1	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	○	
1818	293	H8-P1	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	○	
1819	293	H8-P1	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	—	砂粒、小礫（2㎜）	明赤褐	—	○	
1820	293	H8-P1	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、刺突列	—	砂粒	灰黄褐	○	—	
1821	293	H8-P1	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	半隆起線文	—	砂粒、赤色粒子	橙	—	—	内面赤彩。
1822	293	H8-P1	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
1823	293	H8-P1	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	○	
1824	293	H8-P1	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆）、刻目隆帯	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1825	293	H8-P1	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、横線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	灰黄褐	—	○	
1826	293	H8-P1	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、石英	橙	○	○	
1827	293	H8-P3	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
1828	293	H8-P3	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
1829	293	H8-P3	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1830	293	H8-P3	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
1831	293	H8-P3	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
1832	293	H8-P3	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1833	293	H8-P3	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文	—	小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1834	293	H8-P3	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文	LR	砂粒	橙	—	○	
1835	293	H8-P3	1a 期	第Ⅰ群第 1a2 類	深鉢	G1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、横位沈線文	—	砂粒、橙色粘土粒	橙	—	○	
1836	293	H8-P3	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（沈）	—	赤色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1837	293	H8-P3	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、白色粒子	橙	—	○	
1838	293	H8-P3	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	網代圧痕文
1839	294	H8-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	28.4	—	—	—	13.3	口縁部～胴部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、充填沈線文、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1840	294	H8-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	19.6	—	—	—	—	口縁部～胴部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、ハ字状懸垂文（沈）	RL	小礫（2 ～ 4㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1841	294	H8-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	RL	小礫（2 ～ 4㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1842	294	H8-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	LRL	小礫（2 ～ 4㎜）	橙	○	—	
1843	294	H8-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文（沈）、刺突文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1844	294	H8-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	胴部多段横位楕円文、胴部方形区画文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1845	294	H8-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	13.2	—	—	—	1.4	胴部	逆Ｕ字文（沈）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3㎜）	橙	○	○	
1846	294	H8-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	20	—	—	—	3.8	口縁部～胴部	逆Ｕ字文（沈）	RL	砂粒	橙	○	○	
1847	294	H8-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	J	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1848	294	H8-P7	中期	—	深鉢	—	21	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1849	294	H8-P7	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1850	294	H8-P7	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	LRL	小礫（2 ～ 4㎜）	橙	○	○	
1851	294	H8-P7	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（磨消）	L	砂粒	橙	—	○	
1852	295	I1-P1	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	21.6	8	32.4	31.2	4.3	口縁部～胴部	刻目隆帯、口縁部渦巻文、充填沈線文	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
1853	295	I1-P1	3a 期	第Ⅰ群第 3b2 類	深鉢	L2	21.2	8	32	30.8	5.8	口縁部～底部	逆Ｕ字文（沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1854	295	I5-P2	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	A1	20	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部隆帯区画、刺突列	L	小礫（2 ～ 4㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1855	295	I5-P2	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、棒状懸垂文、沈線文＋刺突列	—	小礫（2 ～ 4㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1856	295	I5-P2	3 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	A1	22.8	12	32.6	—	8.1	口縁部	口縁部隆帯文	LR	小礫（2 ～ 4㎜）	浅黄橙	○	○	
1857	295	I5-P2	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A3	16	—	—	—	—	口縁部	弧状隆帯文、弧線文、蓋受状隆帯	—	小礫（2 ～ 4㎜）	明黄褐	○	○	
1858	295	I5-P2	3 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 10㎜）	浅黄橙	—	—	
1859	296	I5-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部沈線区画	LR	小礫（2 ～ 3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1860	296	I5-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文（沈）	RL	小礫（2 ～ 4㎜）	浅黄橙	—	—	
1861	296	I5-P2	3b 期	第Ⅰ群第 3h 類	両	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文（微）、頸部隆帯区画	LR	砂粒	明赤褐	○	—	
1862	296	I5-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3h 類	両	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、横位楕円区画文、逆Ｕ字文（沈）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1863	296	I5-P2	3 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線文、刺突文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1864	296	I5-P2	1a 期	第Ⅰ群第 1e 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	蓮華文	—	砂粒	橙	—	—	
1865	296	I5-P2	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部隆帯区画＋刺突文	R	小礫（2 ～ 4㎜）	にぶい黄橙	○	—	

第 49 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1866	296	I5-P2	1 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状突起、袋状突起、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	明赤褐	○	○	
1867	296	I5-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
1868	297	I5-P2	4 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1869	297	I5-P2	4 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	—	
1870	297	I5-P2	4 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	—	隆帯＋刺突文、爪形刺突文	—	砂粒、褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1871	297	I6-P3	4 期	第Ⅱ群第 8b 類	蓋	—	—	—	—	—	—	把手	剣先状把手、ワラビ手状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1872	297	I6-P3	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	把手	剣先状把手、ワラビ手状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1873	297	I6-P2+P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	○	
1874	297	I6-P6	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	灰白	—	○	
1875	297	I6-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文＋刺突文	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	○	○	
1876	297	I6-P6	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1877	297	I6-P6	3 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯＋刻目、刺突文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	明黄褐	—	—	
1878	297	I6-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	—	
1879	297	I6-P6	4 期	第Ⅱ群第 8b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	頸部横位隆帯区画（隆）、環状貼付文、刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1880	297	I6-P6	4 期	第Ⅱ群第 8b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1881	297	I6-P6	—	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	網代圧痕文
1882	297	I6-P6	後期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	○	
1883	297	I6-P6	1c-2a	第Ⅰ群第 6c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	明赤褐	—	—	
1884	297	I7-P1	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	X 字状把手、腕骨文（隆）、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
1885	297	I7-P1	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状隆帯	RL	砂粒、褐色粒子	にぶい黄橙	—	—	
1886	297	I7-P1	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	頸部	懸垂文（平）、頸部横位隆帯区画	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1887	297	I7-P1	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、波状文（平）	撚 R	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	明赤褐	○	—	
1888	298	I7-P1	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	波状沈線文（平）	撚 R	砂粒	橙	○	○	
1889	298	I7-P1	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	交互刺突文、胴部クランク状懸垂文（平）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1890	298	I7-P1	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部クランク状懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	○	—	
1891	298	I7-P1	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	○	—	
1892	298	I7-P1	1c 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、基隆帯＋刻目・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
1893	298	I7-P1	1c-2a	第Ⅰ群第 6c1 類	浅鉢	D1	24	8.4	8.4	8	2	口縁部～底部	口縁部隆帯文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1894a	298	I7-P1	1c 期	第Ⅰ群第 6c1 類	浅鉢	D1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部隆帯文（未調整）	撚 L	砂粒	明褐	—	—	
1894b	298	I7-P1	1c 期	第Ⅰ群第 6c1 類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部隆帯文（未調整）	撚 L	砂粒	明褐	—	—	
1895	298	I7-P1	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	黄褐	○	○	
1896	298	I7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、胴部横位区画（沈＋刺）	—	砂粒	明褐	○	○	
1897	298	I7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位楕円区画（沈）＋充填縦位沈線文	—	砂粒	明褐	○	—	
1898	298	I7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	双頭渦巻状懸垂文（隆）、充填沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
1899	298	I7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
1900	298	I7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位楕円区画（沈）＋充填縦位沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
1901	298	I7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位楕円区画（沈）＋充填縦位沈線文、渦巻状懸垂文	—	砂粒	橙	—	○	
1902	298	I7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文、横位沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
1903	298	I7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	U 字状懸垂文（隆）、横位沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
1904	298	I7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	U 字状懸垂文（隆）、横位沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
1905	298	I7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	I3	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文（隆）、横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1906	298	I7-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	刺突列、胴部刺突文（半竹）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1907	298	I7-P2	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	—	—	粘土帯：2.2cm
1908	299	I7-P2	2 期	第Ⅰ群第 5f 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1909	299	I7-P2	2 期	第Ⅰ群第 5f 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	褐	○	○	
1910	299	I7-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位刺突列、条線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
1911	299	I7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突列	RL	砂粒	黄橙	—	—	
1912	299	I7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	○	
1913	299	I7-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位刺突列、条線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1914	299	I7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1915	299	I7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	雨垂状刺突文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
1916	299	I7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刺突文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
1917	299	I7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1918	299	I7-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位刺突列、条線文	—	砂粒	橙	—	—	

第 50 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1919	299	I7-P6	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突列	—	砂粒	黄橙	—	—	
1920	299	I7-P6	1-2a 期	第Ⅰ群第 2d1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	把手	把手＋渦巻状沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	黄橙	—	—	
1921	299	I7-P6	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
1922	299	I7-P9	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状隆帯文、縦位半隆起線文、刺突列	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
1923	299	I7-P9	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	不明	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1924	299	I7-P9	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文	L	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
1925	299	I7-P11	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3㎜）	にぶい黄橙	—	○	
1926	299	I7-P11	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	LR	砂粒	橙	—	—	
1927	299	I7-P14	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
1928	299	I7-P14	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部区画、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1929	299	I7-P14	2 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部区画、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1930	299	I7-P14	2 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部渦巻状沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1931	300	I7-P14	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	双頭渦巻状懸垂文（隆）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1932a	300	I7-P14	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	C1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1932b	300	I7-P14	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1933	300	I7-P14	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
1934	300	I7-P14	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	剣先状懸垂文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
1935	300	I7-P14	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	—	—	
1936	300	I7-P14	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
1937	300	I7-P14	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1938	300	I7-P14	2 期	第Ⅰ群第 5c 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒、小礫（2㎜）	灰黄褐	○	○	
1939	300	I7-P14	5 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横線文	—	砂粒	橙	—	—	
1940	300	I7-P14	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1941	300	I7-P19	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画（刻目）、渦巻懸垂文、条線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	○	○	
1942	300	I7-P19	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	有尾渦巻状懸垂文、横線文＋刺突文、胴部懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1943	300	I7-P19	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	I3	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文、双頭渦巻状懸垂文（隆）、胴部縦位半隆起線文、刺突列	—	砂粒、赤色粒子	灰黄褐	—	○	
1944	300	I7-P19	3a 期	第Ⅰ群第 7c 類	台付	—	—	—	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒	橙	—	○	
1945	300	I8-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	16.4	—	—	—	3.8	口縁部～胴部	渦巻状懸垂文（隆）、乙字状文＋刺突列、胴部懸垂文		小礫（2 ～ 3㎜）	灰白	○	○	
1946	300	I8-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	15.6	—	—	—	2.6	口縁部～胴部	口縁部隆帯文＋刺突列、渦巻状懸垂文、胴部区画（沈）	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1947	300	I8-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	隆沈線文＋瘤状突起、刺突列、胴部区画（沈）	R	砂粒	灰黄褐	—	—	
1948	300	I8-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文＋刺突列、渦巻状懸垂文、	—	小礫（2 ～ 3㎜）	灰黄褐	○	—	
1949	300	I8-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文、刺突文	—	砂粒	橙	—	—	
1950	301	I8-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	21.6	—	—	—	6.9	口縁部～胴部	横線文＋刺突文、瘤状突起	LR	小礫（2 ～ 3㎜）	浅黄橙	○	○	
1951	301	I8-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刻目	RL	小礫（2 ～ 3㎜）	浅黄橙	○	○	
1952	301	I8-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文	LR	小礫（2 ～ 3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1953	301	I8-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文	—	小礫（2 ～ 3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1954	301	I8-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2 ～ 5㎜）	浅黄橙	—	—	
1955a	301	I8-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆）	LR	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1955b	301	I8-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆）	LR	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1956	301	I8-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）	LR	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	○	
1957	301	I8-P6	3a 期	第Ⅰ群第 3i 類	有溝	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線文	—	砂粒、石英	灰黄褐	—	—	内外面に赤彩。
1958	301	I8-P6	3a 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	A1	22.4	—	—	—	5.3	口縁部～胴部	—	LR	砂粒、小礫（2 ～ 10㎜）	灰白	—	—	
1959	301	I8-P6	3 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	LR	小礫（2 ～ 3㎜）	浅黄橙	—	○	
1960	302	16J-P1	1b 期	第Ⅰ群第 1a3 類	深鉢	G1	—	—	—	—	—	口縁部	弧線文（平）、胴部横位区画（平）	RL	砂粒	橙	○	—	
1961	302	J5-P17	2 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部剣先状隆帯文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1962	302	J5-P17	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	C1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1963	302	J5-P17	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋刺突列、胴部縦位懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1964	302	J5-P17	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1965	302	J5-P17	3a 期	第Ⅰ群第 3f 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	斜位沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
1966	302	J5-P17	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1967	302	J5-P17	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	

第 51 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
1968	302	J5-P17	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画（刻目）	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1969	302	J5-P17	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	沈線間に隆帯＋刻目	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1970	302	J5-P17	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部隆帯区画（刻目）	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	—	
1971	302	J5-P17	1c-2a 期	第Ⅰ群第 6d 類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	明赤褐	—	—	赤彩。
1972	302	J6-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、渦巻状懸垂文（隆）、縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
1973	302	J6-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、渦巻状沈線文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
1974	302	J6-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状沈線文	RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
1975	302	J6-P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	I3	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文	RL	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	—	—	
1976	302	J6-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位沈線区画、蛇行懸垂文（沈）、十字状懸垂文（沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1977	302	J6-P20	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	砂粒	灰白	○	—	
1978	302	J6-P20	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	7.2	4.4	10.6	10.6	0.22	完形	口縁部横位沈線区画、蛇行懸垂文（沈）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1979	302	J6-P26	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	把手、剣先状文、双頭渦巻文、平行沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1980	302	J6-P26	1c-2a 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	把手	鶏頭冠状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
1981	303	J6-P27	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状懸垂文（隆）	—	砂粒、赤色粒子	浅黄橙	—	—	
1982	303	J6-P27	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部沈線区画、胴部懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1983	303	J6-P27	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（沈）	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
1984	303	J6-P27	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A3	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部沈線区画＋刺突列、条線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
1985	303	J6-P27	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	突起	環状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1986	303	J7-P5	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	11.2	—	—	15	胴部～底部	渦巻状懸垂文（隆）、入組コ字文、横ハ字文	撚 R	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1987	303	J7-P5	2c 期	第Ⅰ群第 2c1 類	深鉢	A2	22	10	33.6	31.2	6.8	口縁部～胴部	双頭渦巻状懸垂文（隆）、眼鏡状突起	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
1988	304	J7-P5	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
1989	304	J7-P5	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文、突起	LR	砂粒、橙色粘土粒	浅黄橙	○	○	
1990	304	J7-P5	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位半隆起線文、刺突列	—	砂粒	橙	○	○	
1991	304	J7-P5	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状隆帯文＋ペン先状刺突列	LR	砂粒	橙	○	—	
1992	304	J7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	頸部横位沈線区画文（平）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	褐	○	○	
1993	304	J7-P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突文（竹管）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1994	304	J7-P6	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
1995	304	J7-P9	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	弧線文（隆沈）＋刺突列、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
1996	304	J7-P14	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
1997	304	K6-P23	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	明赤褐	—	○	
1998	304	K7-P4	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画（圧隆）	—	砂粒、橙色粘土粒	橙	—	—	
1999	304	K7-P4	4 期	第Ⅱ群第 1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	磨消縄文帯	RL	砂粒	灰白	—	—	
2000	304	K7-P5	3b 期	第Ⅰ群第 3a5-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、波状隆帯文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2001	304	K7-P5	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画（刻目）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
2002	304	K7-P5	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画（平）、波状沈線文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2003	304	K8-P31	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	18	—	—	—	2.5	口縁部～胴部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、充填沈線文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2004	304	K8-P31	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、充填沈線文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2005	304	K8-P31	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	A1	13.6	7.6	22	19.4	1.5	口縁部～胴部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、充填沈線文、楕円区画＋刺突文、胴部縦位懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2006	304	K8-P31+P34	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	18.4	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突列	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2007	305	K8-P31	3a 期	第Ⅰ群第 3d 類	深鉢	L2	36	9.6	51	51	25.7	口縁部～底部	平行沈線文＋刺突文、波状沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2008	306	K8-P31	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突列	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2009	306	K8-P31	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突列	RL	小礫（1 ～ 2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2010	306	K8-P31	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻懸垂文（隆）、横線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 5 ㎜）	灰黄褐	○	○	
2011	306	K8-P31	3b 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	胴部	雨垂状刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2012	306	K8-P31	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、口縁部渦巻文	—	砂粒	橙	—	○	
2013	306	K8-P31	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2014	306	K8-P31	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、口縁部渦巻文	RL	砂粒	明赤褐	○	○	補修孔。
2015	306	K8-P31	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	18.8	5.6	24.8	23	2.6	口縁部～底部	口縁部楕円区画文、口縁部渦巻文、胴部磨消懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2016	306	K8-P31	3a 期	第Ⅰ群第 3i 類	有溝	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（沈）	—	砂粒	灰黄褐	—	—	赤彩。
2017	306	K8-P31	中期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	A1	14	—	—	—	—	口縁部	—	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2018	306	L6-P1	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部区画＋細沈線文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
2019	306	L6-P1	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	把手	把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	

第 52 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2020	306	L6-P1	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、腕骨文（隆）、胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2021	306	L6-P1	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、腕骨文（隆）、胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
2022	306	L6-P1	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文（隆＋沈）	LR	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	—	
2023	306	L6-P1	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画文（平）、胴部縦位懸垂文（平）	—	砂粒	灰白	—	○	
2024	306	L6-P1	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	灰白～橙	—	○	
2025	306	L6-P1	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	撚 L	砂粒	浅黄橙	○	—	
2026	307	L6-P2	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部剣先状隆帯文、中空突起、充填沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
2027	307	L6-P2	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2028	307	L6-P2	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、条線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2029	307	L6-P3	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	8 字状突起	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2030	307	L6-P4	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	E	22.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位区画（沈）、蛇行沈線文、円形文	撚 L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	※ 2039 と接合。
2031	307	L6-P4	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位区画＋刺突列	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2032	307	L6-P4	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部渦巻状懸垂文（隆）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2033	307	L6-P4	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2034	307	L6-P12	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク文（平）	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	にぶい黄褐	○	—	
2035	307	L6-P12	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	—	○	
2036	307	L6-P12	1c 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒、橙色粘土粒	にぶい黄橙	○	○	
2037	307	L6-P12	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	隆帯による渦巻文、刺突文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2038	307	L6-P12	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文（隆）、剣先状懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文、条線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
2039	307	L6-P12	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	E	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	撚 L	砂粒	にぶい黄橙	○	—	※ 2030 と接合。
2040	307	L6-P12	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横線文＋凹文、胴部三角形区画文（磨）	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	—	
2041	308	L7-P5	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文	—	小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2042	308	L7-P5	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	逆Ｕ字状文（沈）	RL	小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2043	308	L7-P5	3a 期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部楕円区画文	LR	砂粒、小礫（2～5㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2044	308	L7-P5	5 期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横位沈線区画	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2045	308	L12-P12	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	爪形刺突文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2046	308	L12-P12	4 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画（圧隆）	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2047	308	L12-P12	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横線文、円孔	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2048	308	L13-P13	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	—	砂粒、雲母	浅黄橙	○	○	
2049	308	M11-P25	4a 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	A1	13.2	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	○	○	
2050	308	M11-P25	4a 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2051	308	M11-P25	4a 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2052	308	M11-P25	4a 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
2053	308	M11-P25	4a 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒	褐	○	○	
2054	308	M11-P25	4a 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2055	308	M11-P25	4a 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	—	—	
2056	308	M11-P25	4a 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	花弁状刺突文	—	砂粒	灰黄褐	○	—	
2057	308	M11-P25	4a 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2058	308	M11-P25	5a 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画（刻目）、棒状懸垂文、横ハ字文	—	小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2059	308	M11-P25	4 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画（圧隆）	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
2060	308	M11-P25	4 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画（圧隆）	—	小礫（2～4㎜）	浅黄橙	—	○	
2061	308	M11-P25	4 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画（圧隆）	撚 L	小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2062	308	M11-P25	4a 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部沈線文	—	小礫（2～4㎜）	橙	○	—	
2063	308	M11-P25	4a 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消縄文	RL	砂粒	灰黄褐	○	○	
2064	308	M11-P25	3b 期	第Ⅰ群第 3b3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	横位沈線区画	撚 L	砂粒	灰白	—	—	
2065	308	M11-P25	4a 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消縄文	L	砂粒、小礫（2㎜）	灰白	—	—	
2066	308	M11-P25	4a 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	LR	砂粒、小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2067	308	M11-P25	4a 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	C 字状突起	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2068	308	M11-P25	3a 期	第Ⅰ群第 3i 類	有溝	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	赤彩。
2069	308	M11-P25	後期	—	深鉢	—	—	5.7	—	—	—	底部	—	—	小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	底部に平行沈線状文。
2070	308	M11-P25	5 期	第Ⅱ群第 8d 類	蓋	—	—	—	—	—	—	蓋	橋状把手、沈線区画＋刺突文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	

第 53 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2071	308	M11-P25		第Ⅱ群第 8d 類	蓋	—	13.2	—	—	—	—	蓋	橋状把手、沈線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
2072	309	N8-P1	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文	RL	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄褐	—	—	
2073	309	N8-P1	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部渦巻状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2074	309	N8-P1	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	S 字状渦巻懸垂文、刻目隆帯	RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2075	309	N8-P1	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	J	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆沈）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
2076	309	N8-P1	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄橙	—	○	
2077	309	N8-P1	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、口縁部楕円区画文、胴部磨消懸垂文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
2078	309	N8-P1	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄褐	—	○	
2079	309	N8-P1	3a 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2080	309	N8-P1+N8-P2	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	灰白	—	—	網代圧痕文。
2081	309	N8-P29A	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
2082	309	N8-P29A	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	コイル状突起、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
2083	309	N8-P29A+P29	1c 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部		—	砂粒	明赤褐	○	○	
2084	309	N8-P29	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（平）	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	粘土帯：2.3cm 前後
2085	309	N8-P29	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文	RL	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
2086	309	N8-P29	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	胴部	波状文（平）、有節沈線文	撚 L	砂粒、橙色粒子	にぶい黄橙	○	—	
2087	309	N8-P29	1c 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	○	
2088	309	N8-P43	1 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、環状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	橙	—	○	
2089	309	N8-P43	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
2090	309	N8-P43	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、弧線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2091	309	N8-P43	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
2092	309	N8-P43	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	12.6	—	—	—	口縁部	刺突列、条線文（5）	—	砂粒	褐	○	○	
2093	309	N8-P43	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	—	—	16	—	—	—	胴部	横線文、帯縄文	L	砂粒	褐	○	○	漆の付着？
2094	309	N8-P43	後期	—	深鉢	—	—	6.4	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	浅黄橙	—	—	赤彩。
2095	310	N9-P29	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	横線文、横位楕円文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
2096	310	N9-P29	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文、横位楕円文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
2097	310	N9-P29	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画＋刻目、横ハ字文	L	小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2098	310	N9-P29	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画＋刻目	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰黄褐	○	—	
2099	310	N8-P43	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	灰白	—	—	網代圧痕文。
2100	310	N10-P43	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横位楕円文＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2101	310	N10-P43	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画＋刻目	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	—	
2102	310	N10-P43	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	U 字状懸垂文（沈）	RL	砂粒	橙	○	○	
2103	310	N10-P43	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰黄褐	—	○	
2104	310	N10-P43	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	条線文（7）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2105	310	N10-P43	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
2106	310	O8-P39	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2107	310	O8-P39	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
2108	310	59J-P3	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2109	310	59J-P3	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、胴部渦巻文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2110	310	59J-P3	1c-2a 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
2111	310	59J-P3	1c-2a 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	—	5.2	—	—	—	—	胴部	橋状把手	—	砂粒	褐	○	○	
2112	310	O9-P2	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C1	20.4	—	—	—	—	口縁部	胴部横位沈線区画（単）、胴部縦位懸垂文（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2113	310	O9-P2	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（単）、蛇行沈線文（単）	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
2114	310	O9-P2	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	C1	—	—	—	—	—	口縁部	X 字状把手、胴部横位沈線区画（平）、渦巻状懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
2115	310	O9-P2	2b 期	第Ⅰ群第 2b1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	X 字状把手、剣先状隆帯文	—	砂粒	橙	○	○	
2116	310	O9-P2	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	C1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位沈線区画（平）、渦巻状懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2117	310	O9-P2	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
2118	310	O9-P2	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、渦巻状懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
2119	310	O9-P2	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文、弧状沈線文（平）	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2120	310	O9-P2	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文、三叉文	—	砂粒	明赤褐	—	—	
2121	310	O9-P2	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2122	310	O9-P2	中期	第Ⅰ群第 5f 類	深鉢	A1	14.8	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒	橙	—	—	
2123	311	O9-P2	中期	第Ⅰ群第 5e 類	深鉢	C3	27.6	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	

第 54 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2124	311	O9-P17	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	A1	33	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文、渦巻状懸垂文＋ハ字状懸垂文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	—	
2125	311	O9-P17	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文＋側面刺突文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2126	311	O9-P17	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文、短沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄褐	—	—	
2127	311	O9-P17	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
2128	311	O9-P17	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、充填刺突文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
2129	311	O9-P17	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、横ハ字文	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	○	
2130	311	O9-P17	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画（圧隆）	RL	小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	○	○	
2131	311	O9-P17	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文＋刺突列	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2132	311	O9-P17	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文＋刺突列	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2133	311	O9-P17	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	曲流条線文	LR	小礫（2 ～ 6 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2134	311	O9-P24	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、波状文（平）	撚 L	砂粒	明黄褐	○	○	
2135	311	O9-P24	1c 期	第Ⅰ群第 1a6 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部剣先状隆帯文（未）	RL	砂粒	明赤褐	—	—	
2136	311	O9-P24	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画（平）、頸部縦位懸垂文（平）	—	砂粒（少）	橙	○	—	
2137	311	O9-P24	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	7	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2138	311	O9-P24	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）、波状文（単）	RL	砂粒、橙色粘土粒	明黄褐	○	○	
2139	312	O9-P24	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H6	38.8	15.2	56	56	38	口縁部～底部	眼鏡状突起、半隆起線文、波状文（平）、横 S 字文（平）、胴部縦位懸垂文（平）	撚 L	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2140	313	O9-P24	1c-2a 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	把手	鶏頭冠状把手	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	赤褐	○	—	
2141	313	O9-P24	1c 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	把手	鶏頭冠状把手＋刻目	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2142	313	O9-P24	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	○	網代圧痕文。
2143	313	O9-P25	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2144	313	O9-P25	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2145	313	O9-P25	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	網代圧痕文。
2146	313	O9-P25	2a 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部剣先状隆帯文（未）、波状文（平）	RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2147	313	O9-P25	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	X 字状把手、口縁部区画＋充填沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
2148	313	O9-P25	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	○	
2149	313	O9-P25	2c 期	第Ⅰ群第 2c1 類	深鉢	I3	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆）、口縁部横位沈線区画（平）、半隆起線文	—	砂粒		—	—	
2150	313	O9-P25	2c 期	第Ⅰ群第 2c1 類	深鉢	A1	—	12.8	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、渦巻状懸垂文（隆）、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
2151	313	O9-P25	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	A1	12.8	—	—	—	—	口縁部	縦位刺突列、蛇行沈線文	撚 L	砂粒	橙	○	○	
2152	313	O9-P25	2 期	第Ⅰ群第 5d 類	深鉢	C2	14.8	7.6	18.4	18.4	1.4	口縁部～底部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2153	313	O9-P25	2 期	第Ⅰ群第 5d 類	深鉢	C2	15.2	7.2	17.4	17.4	1.3	口縁部～底部	—	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2154	314	O9-P32	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A2	32.8	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、渦巻状懸垂文、充填沈線文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2155	314	O9-P32	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	○	
2156a	314	O9-P32	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文、棒状突起	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2156b	314	O9-P32	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2157	314	O9-P32	3a 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	—	LR	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2158	314	O9-P32	3a 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	—	LR,RL,L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2159	314	O9-P32	3a 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	—	—	9.2	—	—	—	胴部～底部	—	RL	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	明黄褐	—	—	網代圧痕文。
2160	314	O9-P32	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文、蛇行沈線文	LR	砂粒	橙	—	—	
2161	315	O9-P29	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	H3	13.2	8	22.2	22.2	1.8	口縁部～底部	眼鏡状突起、口縁部隆帯文（未調）、胴部横位区画文（平）、波状文（平）	RL	砂粒	橙	○	○	
2162	315	O9-P29	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（未）	RL	砂粒	明赤褐	○	○	
2163	315	O9-P29	2a 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	H3	18.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	眼鏡状突起、袋状突起、横 S 字文、半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
2164	315	O9-P29	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	G1	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文による渦巻文、三叉文	—	砂粒	橙	—	○	
2165	315	O9-P29	3b 期	第Ⅰ群第 3a6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文、横帯区画文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2166	315	P9-P5	中期	第Ⅰ群第 5d 類	深鉢	C1	16.8	6.8	21	21	1.7	口縁部～底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2167	315	P9-P25	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2168	315	P9-P25	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2169	315	P9-P25	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	剣先状懸垂文（隆）	RL	砂粒	橙	—	○	
2170	315	P9-P25	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2171	315	P9-P25	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	刻目隆帯、充填沈線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
2172	315	P9-P25	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
2173	315	P9-P25	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位平行沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2174	315	P9-P25	4 期	第Ⅱ群第 7a 類	鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、横位沈線文	—	白色粘土粒	橙	—	—	赤彩。

第 55 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文　様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2175	316	P9-P26	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	撚 1	砂粒	橙	—	○	
2176	316	P9-P26	2a 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部剣先状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
2177	316	P9-P26	3a 期	第Ⅰ群第 3c-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2178	316	P9-P26	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	頸部横位区画文（平）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2179	316	P9-P26	3b 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部沈線区画（単）	LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
2180	316	P9-P26	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	刺突列	RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2181	316	Q9-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文、横線文＋刺突列	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	—	○	
2182	316	Q9-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文（隆）、弧状沈線文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	灰白	—	—	
2183	316	Q9-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状懸垂文（隆）	—	小礫（2 ㎜）	橙	○	—	
2184	316	Q9-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3b 類	深鉢	A1	22.8	—	—	—	8	口縁部～胴部	逆Ｕ字文（沈）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2185	316	Q9-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	逆Ｕ字文（沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2186	316	Q9-P2	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（平）	LR	砂粒、橙色粘土粒	にぶい黄橙	—	—	
2187	316	Q9-P2	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	RL	砂粒	橙	—	—	
2188	316	Q9-P2	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部～底部	口縁部隆帯文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2189	316	Q9-P2	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2190	316	Q9-P2	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
2191	316	Q9-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2192	316	Q9-P2	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部沈線区画＋刺突列、胴部縦位懸垂文（沈）	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
2193	316	Q9-P2	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	A1	20.4	10.8	35.6	—	6.5	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2194	316	Q9-P2	2a 期	第Ⅰ群第 6c2 類	浅鉢	D2	28.8	—	—	—	—	口縁部	口縁部剣先状隆帯文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	

第 56 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2195	317	D4 - P1	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	G1	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、楕円区画文＋渦巻状懸垂文、基隆帯、半隆起線文、三叉文	—	砂粒、赤色粘土粒（多）	にぶい黄橙	○	○	
2196	317	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位楕円区画文、環状突起、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
2197	317	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	小礫	にぶい黄橙	—	—	
2198	317	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	9.5	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（平）	—	砂粒	橙	—	—	
2199	317	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、胴部横位隆帯区画文、半隆起線文	RL	砂粒	橙	○	○	
2200	317	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画文、眼鏡状突起、腕骨文、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2201	317	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2202	317	〃	1 期	第Ⅰ群第 5e 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部圧痕文	RL	砂粒、小礫（少）	橙	—	—	
2203	317	〃	1 期	第Ⅰ群第 5e 類	深鉢	E	26.2	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	—	砂粒、橙色粘土粒（多）	にぶい黄橙	○	○	
2204	317	〃	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	8.4	—	—	—	胴部～底部	—	撚 R	小礫	にぶい黄橙	○	○	底部網代圧痕文。
2205	317	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（少）	橙	—	○	
2206	317	D5 - P1	1 期	第Ⅰ群第 5a 類	深鉢	A2	10	6.8	12.4	12.4	1.8	口縁部～底部	—	—	砂粒	橙	○	○	
2207	317	〃	1 期	第Ⅰ群第 5a 類	深鉢	A2	23.6	11.2	26	24	4.8	口縁部～底部	環状突起、貼付文	撚 L			—	—	底部網代圧痕文。
2208	318	E6 - P3	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	LR	砂粒	橙	—	○	
2209	318	E7 - P1	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	G1	23.2	—	—	—	4.5	口縁部～胴部	環状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	赤褐	○	○	
2210	318	E8 - P3	1a 期	第Ⅰ群第 6c1 類	浅鉢	C4	—	—	—	—	—	口縁部	縄文側面圧痕文、突起	L 側	砂粒	褐灰	—	—	
2211	318	E8 - P6	1a 期	第Ⅰ群第 e 類	深鉢	C1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画文（平）	RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2212	318	E9 - P1	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画文（単）、胴部クランク文（単）	LR	砂粒	明赤褐	—	○	
2213	318	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文	RL	砂粒	橙	—	—	
2214	318	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	赤褐	○	—	
2215	318	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	明黄褐	○	—	
2216	318	E9 - P2	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	把手	半隆起線文	—	砂粒	明赤	○	○	
2217	318	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文	RL	砂粒	橙	○	—	
2218	318	〃	不明	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	楕円区画文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2219	318	E9 - P3	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	赤褐	—	—	粘土帯約 1.5cm。
2220	318	E10 - P1	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、赤褐色粒子	赤褐	○	○	
2221	318	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、環状貼付文、把手状貼付文	—	砂粒	橙	—	—	
2222	318	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、小礫（少）	橙	—	—	
2223	318	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、有節沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2224	318	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2225	318	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2226	318	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2227	318	〃	中期	—	深鉢	—	—	9.9	—	—	—	底部	—	RL	砂粒、小礫（少）	浅黄橙	○	—	底部網代圧痕文。
2228	318	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画（鎖）	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
2229	318	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画（鎖）	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
2230	318	F4 - P2	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	橙色粘土粒（少）	浅黄橙	—	—	
2231	318	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	H6	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文、玉抱三叉文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2232	319	F6 - P1	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	A1	26.8	11	45.6	45.6	14.7	口縁部～底部	口縁部隆帯文、刺突列	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2233	319	F6 - P5	1 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、雲母（少）	にぶい黄褐	○	—	
2234	319	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2235	319	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文＋剣先状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2236	319	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2237	319	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部剣状懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2238	319	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c1 類	深鉢	I4	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位沈線区画＋刺突列、条線文（半竹）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2239	319	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、条線文	—	砂粒	橙	○	○	
2240	319	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻懸垂文（隆沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2241	319	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）＋刺突列	RL	砂粒、小礫	浅黄橙	—	—	
2242	320	F8 - P3	1 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫	橙	○	○	
2243	320	F8 - P4	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆）	RL	砂粒	明黄褐	—	△	
2244	320	G3 - P2	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H3	12	—	—	—	1	口縁部	中空突起、橋状把手、波状沈線文（平）、交互刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2245	320	G4 - P7	中期	—	深鉢	—	—	12.8	—	—	—	底部	—	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部網代圧痕文（２種）。
2246	320	G4 - P9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒、粘土粒（少）	にぶい黄橙	○	○	

第 57 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2247	320	G4 - P9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒、赤色粒子（少）	にぶい黄橙	○	—	
2248	320	G4 - P8	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	平行沈線文	RL	砂粒、小礫（6 ㎜）	明赤褐	—	—	
2249	320	〃	1 期	第Ⅰ群第 1e 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	ワラビ手状懸垂文＋矢羽根状沈線文、半隆起線文、三叉文	—	砂粒	橙	—	○	
2250	320	G5 - P1	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	有節沈線文、交互刺突文	—	砂粒、雲母（少）	橙	—	—	
2251	320	G6 - P9	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻文＋有節沈線文、胴部沈線区画（平）、波状文（平）	撚 L	砂粒	赤褐	○	—	
2252	320	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文、玉抱三叉文	—	砂粒、雲母（中）	にぶい黄褐	○	○	
2253	320	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起	—	砂粒	橙	—	—	
2254	320	G6 - P14	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
2255	320	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2a3 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部剣先状隆帯文、渦巻状突起、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2256	320	G6 - P23	2b 期	第Ⅰ群第 2a3 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部剣先状隆帯文、渦巻状突起、充填沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2257	320	G8 - P1	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
2258	320	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
2259	320	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
2260	320	G8 - P2	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、円形文（隆・平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2261	320	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部クランク文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2262	320	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、環状貼付文	—	砂粒	橙	○	○	
2263	321	H2 - P1	中期	—	深鉢	—	—	15.6	—	—	—	底部	—	—	砂粒、赤色粒子（少）	にぶい黄橙	—	○	底部網代圧痕文。
2264	321	〃	1a 期	第Ⅰ群第 6a 類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位沈線区画	LR	砂粒、石英（少）	橙	—	—	
2265	321	H2 - P7	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、三叉文	RL	砂粒	にぶい褐	○	○	
2266	321	H3 - P5	3 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	○	
2267	321	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）＋渦巻文（平）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	—	—	
2268	321	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、赤色粒子（少）	赤褐	—	—	
2269	321	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	S 字状突起	—	砂粒、赤色粒子（少）	にぶい黄橙	○	—	
2270	321	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	
2271	321	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	I3	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋矢羽根状沈線文、胴部縦位半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2272	321	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（隆）、充填沈線文	—	砂粒、赤色粒子（少）	橙	○	—	
2273	321	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
2274	321	H3 - P6	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部方形区画（単）	LR	砂粒		—	—	
2275	321	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（欠）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2276	321	〃	2a 期	第Ⅰ群第 6c1 類	浅鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（未）	RL	砂粒	橙	—	—	内面に赤彩。
2277	321	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2278	321	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画（単）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2279	321	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）	RL、LR	砂粒	明黄褐	—	—	
2280	321	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、胴部縦位懸垂文（隆）、剣先状懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
2281	321	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、胴部縦位懸垂文（隆）、眼鏡状突起、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2282	321	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画文、弧状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2283	321	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（隆）、胴部刺突文（ペン先状）	—	砂粒	橙	—	○	
2284	321	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、石英（少）	にぶい黄橙	—	○	
2285	321	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	刺突列、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2286	321	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手（欠）、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	赤褐	○	○	
2287	321	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	H2	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	赤褐	—	○	
2288	321	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、赤色粒子（少）	橙	—	—	
2289	321	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位半隆起線文	—	砂粒	明黄褐	—	○	
2290	322	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	鶏頭冠状把手（欠）、袋状突起、鋸歯状突起、基隆帯、半隆起線文＋背面	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2291	322	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	鶏頭冠状把手、鋸歯状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
2292	322	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、コ字状沈線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2293	322	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文、コ字状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2294	322	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	沈線文＋刺突列、刺突文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2295	322	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、渦巻状懸垂文＋刻目、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	—	—	
2296	322	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、波状隆帯文＋刻目、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	—	—	
2297	322	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	LR	小礫（2 ～ 5 ㎜）	灰黄褐	—	—	

第 58 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2298	322	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状突起	—	砂粒	橙	—	—	
2299	322	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋刺突列、胴部縦位刺突列、条線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
2300	322	〃	1 期	第Ⅰ群第 5c 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒、小礫（少）	橙	○	○	
2301	322	H3 - P7	2a 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	I	28	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、剝先状沈線文（平）、充填沈線文（矢）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2302	322	H3 - P8	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	—	—	
2303	322	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文＋背面	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2304	322	H4 - P1	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、口縁部横位隆帯区画、波状隆帯文	撚 L	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2305	322	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（平）	RL	砂粒	明黄褐	—	—	
2306	322	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	14.8	8	21	21	1.8	口縁部～底部	口縁部弧状隆帯文	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	—	
2307	323	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H3	11.5	—	—	—	—	口縁部	三角状突起、渦巻状懸垂文、波状文（平）、胴部横位沈線区画（単）	RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
2308	323	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	32	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画、剝先状隆帯文	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
2309	323	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b1 類	深鉢	I2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、剝先状隆帯文、橋状把手、胴部横位隆帯区画＋剝先状文	RL	砂粒	橙	○	○	
2310	323	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a3 類	深鉢	I2	32	—	—	—	—	口縁部～胴部	箱形中空把手、口縁部横位隆帯区画	LR	砂粒、小礫（少）	橙	○	—	
2311	323	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I1	—	6.6	—	—	—	胴部～底部	胴部横位沈線区画（単）、胴部縦位懸垂文（単）、ワラビ手状文（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底面に胴部懸垂文が伸びる。
2312	323	〃	1 期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部隆帯懸垂文、横位沈線文（単）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2313	323	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文、入組コ字状沈線文＋刺突、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
2314	323	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文（隆）、刺突列	—	小礫（2 ～ 6 ㎜）	灰黄褐	○	○	
2315	324	H4 - P5	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文、胴部横位沈線区画	RL	砂粒	橙	—	—	
2316	324	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、波状文（平）	LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
2317	324	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画、胴部渦巻状懸垂文（平）	撚 L	砂粒	褐	—	○	
2318	324	〃	1 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、雲母（少）	赤褐	○	—	
2319	324	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	明黄褐	—	○	
2320	324	H4 - P18	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、剝先状隆帯文	RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2321	324	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部渦巻状懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2322	324	H5 - P1	2 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2323	324	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文	RL	小礫（2 ㎜）	灰黄褐	○	○	
2324	324	H6 - P2	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	○	
2325	324	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	胴部横位沈線区画（平）＋刻目	—	砂粒	橙	—	○	
2326	324	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2327	324	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆）、充填沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
2328	324	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	条線文	—	砂粒、小礫（少）	浅黄橙	—	○	底部網代圧痕文。
2329	324	H7 - P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文、渦巻状懸垂文	RL	砂粒	橙	△	○	
2330	324	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	○	
2331	324	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位沈線区画	—	赤色粘土粒（中）	浅黄橙	○	—	
2332	324	H7 - P11	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
2333	324	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 10 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
2334	324	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、剝先状隆帯文（一部未調整）	RL	砂粒、橙色粒子（少）	にぶい黄橙	○	—	
2335	324	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2336	324	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部刺突文（半竹）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
2337	324	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文	RL	小礫（少）	浅黄橙	—	—	
2338	324	H8 - P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文、横線文、刺突文	—	小礫（2 ～ 8 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
2339	324	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 - 3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯文＋側面刺突文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	○	—	
2340	324	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
2341	324	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 - 3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯文、刺突文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	—	—	
2342	325	H7 - P8	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	J	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文、S 字状突起、胴部横位隆帯区画	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2343	325	H9 - P8	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	△	
2344	325	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆沈）	RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2345	325	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆沈）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2346	325	I3 - P9	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、胴部刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
2347	325	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	逆 U 字状文（沈）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
2348	325	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
2349	325	I3 - P10	1a 期	第Ⅰ群第 1a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文（平）、刺突列	—	砂粒、小礫（4 ㎜）	橙	—	—	

第 59 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2350	325	I3 - P10	2 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、口縁部隆帯文、充填沈線文（矢）	—	砂粒	橙	—	—	
2351	325	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
2352	325	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	△	○	
2353	325	I3 - P12	1a 期	第Ⅰ群第 1a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画、縦位沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2354	325	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、隆帯文、弧状沈線文（平）、頸部縦位懸垂文（平）	撚 r	砂粒	橙	○	○	
2355	325	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）、交互刺突文	LR	砂粒	橙	—	○	
2356	325	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状隆帯文、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2357	325	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、刺突文	—	砂粒	橙	—	—	
2358	325	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、雲母（多）、石英	赤褐	○	○	
2359	325	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、三叉文	—	砂粒、雲母（多）、石英	赤褐	○	○	
2360	325	I4 - P3	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	赤褐	—	○	
2361	325	I4 - P7	6 期	第Ⅱ群第 3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	—	橙	—	—	
2362	325	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（磨消）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2363	325	I4 - P9	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目、胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	橙	—	—	
2364	325	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	—	—	
2365	325	I4 - P10	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文、胴部弧状沈線文（平）	—	砂粒	橙	○	○	
2366	325	I4 - P12	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
2367	325	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
2368	325	〃	4 ～ 5 期	第Ⅱ群第 5 類？	鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部渦巻状磨消縄文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	内外面に赤彩。
2369	325	〃	4 ～ 5 期	第Ⅱ群第 5 類	鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	—	砂粒、石英（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	○	—	
2370	325	I4 - P14	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
2371	325	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、棒状懸垂文、入組コ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2372	326	I4 - P17	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文、渦巻状懸垂文（隆）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2373	326	I5 - P3	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、棒状懸垂文、入組コ字文	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
2374	326	I5 - P5	5 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2375	326	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	灰黄褐	○	—	
2376	326	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、赤色粒子（少）	明黄褐	○	—	
2377	326	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3b3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消渦巻状懸垂文	L	砂粒、赤色粒子（少）	にぶい黄橙	○	—	
2378	326	〃	4 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消渦巻状懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2379	326	〃	4 期	第Ⅱ群第 1c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部波状沈線文	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2380	326	I5 - P6	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、胴部縦位懸垂文（沈）	RL	砂粒	橙	—	○	
2381	326	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部逆Ｕ字状文（沈）	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2382	326	I5 - P7	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	褐	—	—	
2383	326	I5 - P9	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横位隆帯区画＋刻目	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	明黄褐	—	—	
2384	326	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	Ｕ字状文（微）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2385	326	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2386	326	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	砂粒	橙	—	○	
2387	326	I5 - P10	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（沈）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	○	○	
2388	326	I5 - P11	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、口縁部隆帯文	RL	砂粒	赤褐	—	—	
2389	326	〃	4b 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	○	—	
2390	326	I6 - P1	4b 期	第Ⅱ群第 1a5 類	深鉢	B2	28.8	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、口縁部横位隆帯区画（鎖）、条線文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
2391	326	〃	4b 期	第Ⅱ群第 1a3 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手＋刻目、口縁部横位隆帯区画＋刻目、胴部爪形刺突文、蛇行沈線文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	—	
2392	326	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2393	326	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、胴部刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2394	326	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐	○	—	
2395	326	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部隆帯区画＋刺突、胴部刺突文（ペン先）	—	砂粒、赤色粒子（中）	橙	○	—	
2396	326	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2397	326	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画＋刺突文、環状貼付文、胴部刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	△	
2398	326	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	粘土粒	明黄褐	○	○	

第 60 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2399	326	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a5 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、口縁部横位隆帯区画（鎖）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2400	327	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a5 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画（鎖）	RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
2401	327	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a5 類	深鉢	B2	18.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
2402	327	〃	3b 期～	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文	L	小礫（2 ～ 6 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2403	327	〃	3b 期～	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刺突文	撚 L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	明黄褐	○	—	
2404	327	〃	4 期	第Ⅱ群第 1d 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刺突文、条線文	—	小礫（2 ～ 9 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2405	327	〃	3b 期～	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	—	
2406	327	〃	4 期	第Ⅱ群第 1d 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部ノ字状懸垂文＋圧痕文	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	○	—	
2407	327	〃	4b 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	C2	35.6	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画＋刺突列、橋状把手、胴部横位隆帯区画＋刺突	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2408	327	〃	4b 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刺突列、胴部横位沈線区画＋刺突列	LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
2409	327	〃	4b 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	玉抱き C 字文、口縁部横位沈線文、橋状把手、胴部横位隆帯区画＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2410	327	〃	4b 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文、胴部横位沈線区画	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2411	327	〃	4b 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2412	327	〃	4b 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文	—	砂粒（多）	赤褐	—	—	
2413	327	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位隆帯区画＋刺突文、条線文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
2414	327	〃	4 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、環状把手	LR	砂粒	橙	○	—	
2415	327	〃	4 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、環状貼付文	撚 L	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2416	327	〃	4 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位刺突列、胴部横位沈線区画	—	砂粒、雲母（少）	にぶい黄橙	○	—	
2417	327	〃	4 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
2418	327	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	○	
2419	327	〃	4b 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文＋刺突列	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2420	327	〃	4b 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文＋刺突列	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
2421	328	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻懸垂文（磨消）	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2422	328	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（磨消）	L	小礫（2 ～ 5 ㎜）	褐	○	—	
2423	328	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（磨消）	LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
2424	328	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3b3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、環状貼付文、内面蓋受状隆帯	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐	—	○	
2425	328	〃	5 期	第Ⅱ群第 5 類	鉢	A	29.6	12.8	24.4	24.4	15	口縁部～底部	J 字状懸垂文（隆）、三角形区画文（隆）	—	砂粒	橙	—	—	
2426	328	〃	5 期	第Ⅱ群第 5 類	鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画	—	砂粒	明黄褐	○	—	
2427	328	〃	5 期	第Ⅱ群第 7b 類	注口	A	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	橋状把手＋環状突起、口縁部横位沈線区画＋刺突列	撚 L	砂粒、石英（少）	にぶい黄橙	○	—	
2428	328	〃	4b 期	第Ⅱ群第 8b 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	沈線区画＋刺突文	—	砂粒	橙	○	—	
2429	328	〃	4b 期	第Ⅱ群第 8b 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	隆帯文、刺突文	—	砂粒	橙	○	—	
2430	328	〃	4b 期	第Ⅱ群第 8d 類	蓋	C	11.1	—	—	—	—	—	平行沈線文＋刺突列	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
2431	328	〃	4b 期	第Ⅱ群第 8b 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	沈線区画＋爪形刺突文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	赤褐	—	—	
2432	328	〃	4 期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	H	28	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2433	328	〃	4 期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
2434	329	〃	4 期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	LR	砂粒	橙	○	○	
2435	329	〃	4 期	第Ⅱ群第 5 類	鉢	—	10.4	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐	○	○	
2436	329	〃	4 期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	B1	9.6	5.6	12.2	12	0.54	口縁部		—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2437	329	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	—	—	7	—	—	—	胴部	棒状懸垂文＋刺突文、変形横ハ字文	—	粘土粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	○	
2438	329	〃	3 b～4 a期	第Ⅰ群第 6 類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	撚 L	砂粒	浅黄橙	○	—	底部に線状の圧痕文。
2439	329	I6 - P2	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位刺突列	R L	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2440	329	I6 - P5	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐	○	○	
2441	329	〃	1a 期	第Ⅰ群第 1a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、袋状突起、有節沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2442	329	〃	3a 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	曲流条線文（6）	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2443	329	I6 - P7	4b 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画＋刺突、胴部沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	2407 と接合。
2444	329	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（磨消）	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
2445	329	I6 - P8	4 期～ 5 期	第Ⅱ群第 7 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
2446	329	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部沈線文	—	砂粒	褐	○	○	
2447	329	I6 - P12	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	黄褐	○	—	
2448	329	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（沈）	—	砂粒	褐	○	○	
2449	329	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐	—	○	
2450	329	I7 - P5	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形刺突文	—	砂粒	褐	○	○	

第 61 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2451	329	I7 - P8	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部沈線区画（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
2452	329	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	赤褐	—	—	
2453	329	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文	RL	砂粒	橙	○	○	
2454	329	I7 - P10	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
2455	329	I7 - P16	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文（隆）、充填沈線文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2456	329	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋瘤状突起	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2457	329	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	—	
2458	329	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文＋刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
2459	329	〃	4 期	第Ⅱ群第 8c 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	把手（欠）、隆帯文＋刻目	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2460	330	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
2461	330	I7 - P22	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2462	330	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文＋刻目、入組コ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2463	330	I8 - P1	3a 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	A1	12	6.2	20	20		口縁部～底部	—	—	小礫	にぶい黄橙	○	○	
2464	330	I8 - P3	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋瘤状突起	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）、石英（少）	浅黄橙	—	○	
2465	330	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2466	330	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文、入組コ字文＋刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2467	330	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	赤褐	○	○	
2468	330	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	○	
2469	330	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2470	330	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
2471	330	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
2472	330	I8 - P4	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文、ハ字状懸垂文	LR	小礫（2 ～ 8 ㎜）	橙	—	—	
2473	330	I8 - P8	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位半隆起線文、刺突列	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2474	330	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2475	330	〃	4 期	第Ⅱ群第 1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	隆帯懸垂文＋刻目	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
2476	330	16J - P1	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨文（隆）、縦位半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2477	330	I9 - P5	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	28.8	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位刻目隆帯、渦巻状懸垂文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
2478	330	I9 - P6	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、縦位半隆起線文、矢羽状沈線文	—	鎖流	橙	○	—	
2479	330	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文、充填沈線文、ペン先状刺突列	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	○	—	
2480	330	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文、充填沈線文（矢）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2481	330	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	双頭渦巻文（隆）、縦位半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2482	331	J5 - P6	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	明黄褐	○	—	
2483	331	J5 - P15	1c 期	第Ⅰ群第 1a6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文（未調）	撚 L	砂粒	橙	○	—	
2484	331	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画（鎖）、渦巻状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐	○	○	
2485	331	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	円孔、胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	褐	○	○	
2486	331	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（沈）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	褐	○	—	
2487	331	〃	4 ～ 6 期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2488	331	J5 - P16	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	双頭渦巻文（隆）、条線文	—	砂粒	橙	○	—	
2489	331	J5 - P17	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部U字状懸垂文（隆）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2490	331	J6 - P16	2a ～ b 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文（矢）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2491	331	J6 - P18	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	円文、口縁部横位沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2492	331	J6 - P21	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（単）	RL	砂粒	赤褐	○	○	
2493	331	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	○	○	
2494	331	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯＋刻目・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	赤褐	—	○	
2495	331	J6 - P25	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2496	331	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2497	331	J7 - P2	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画（鎖）、条線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2498	331	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯＋刻目・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	赤褐	—	○	
2499	331	J7 - P4	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
2500	331	J7 - P5	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	楕円区画文（隆）、変形横ハ字文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	淡黄	—	○	
2501	331	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	○	—	

第 62 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2502	331	〃	3b 期～４期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2503	331	J7 - P9	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	K2	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	胴部横位沈線区画（単）、刺突列、胴部横位沈線文（平）＋刻目	—	砂粒	橙	○	○	
2504	331	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	C1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部沈線文、刺突列	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2505	331	J7 - P11	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位刺突列、条線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2506	331	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2507	331	J8 - P2	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋沈線＋刺突文、棒状懸垂文、入組コ字文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	○	○	
2508	331	J8 - P6	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	波状隆帯区画文、横ハ字文	R	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	○	
2509	331	J8 - P16	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2510	331	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2511	331	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	雨垂状刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2512	331	J8 - P20	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2513	331	K4 - P1	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、半隆起線文	—	砂粒	赤褐	○	○	
2514	331	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、口縁部隆帯文	RL	砂粒	橙	○	○	
2515	331	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状貼付文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
2516	331	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	縦位半隆起線文＋刺突文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2517	332	K5 - P7	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2518	332	K6 - P2	5a 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒	橙	—	○	
2519	332	K6 - P5	5a 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	L	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2520	332	K6 - P7	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文	—	砂粒	橙	—	—	
2521	332	K6 - P10	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2522	332	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、横位楕円区画（沈）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
2523	332	K6 - P13	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文＋括弧状文、胴部磨消懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2524	332	K6 - P14	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文、渦巻状懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2525	332	K6 - P31	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状突起、渦巻状懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2526	332	K7 - P2	2c 期	第Ⅰ群第 2c1 類	深鉢	I4	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	双頭渦巻状懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2527	332	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	K2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位沈線区画（単）、刺突列、胴部横位沈線文（平）＋刻目	—	砂粒	橙	○	○	
2528	332	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）、刺突列、胴部横位沈線文（平）＋刻目	—	砂粒	橙	○	○	
2529	332	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	○	
2530	332	〃	2c 期	第Ⅰ群第 5f 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	条線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2531	332	〃	中期	—	深鉢	—	11.6	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	底部網代圧痕文。
2532	332	K7 - P5	不明	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2533	332	K7 - P6	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	U 字状磨消懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2534	332	〃	1 期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	ペン先状刺突文、縦位沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2535	332	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2536	332	〃	不明	—	深鉢	—	7.2	—	—	—	—	底部	—	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	底部網代圧痕文。
2537	332	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文、横位楕円文、渦巻状懸垂文	RL	小礫（2 ～ 6 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2538	333	K8 - P4	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2539	333	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部弧状隆帯文＋刻目、弧線文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2540	333	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画文、逆U字状文（隆）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2541	333	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒	橙	—	—	
2542	333	〃	4a 類	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、胴部横位隆帯区画	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2543	333	K8 - P12	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	赤褐	—	○	
2544	333	K8 - P20	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2545	333	K8 - P24	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）、管状刺突文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	○	
2546	333	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2547	333	K8 - P25	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画文＋刻目	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2548	333	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2549	333	K8 - P29	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2550	333	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2551	333	〃	4 期	第Ⅱ群第 1 a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	爪形刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2552	333	K8 - P34	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、口縁部隆帯文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2553	333	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文、瘤状突起、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2554	333	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文、刺突文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	

第 63 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2555	333	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋管状刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐灰	○	○	
2556	333	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刺突文、横線文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2557	333	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	○	
2558	333	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部～底部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 5 ㎜）、赤色粒子	橙	—	○	
2559	333	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、胴部磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2560	333	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）、渦巻文＋横線文＋刺突文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐灰	○	○	
2561	333	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	RL	砂粒	橙	○	—	
2562	333	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状文	—	砂粒	橙	○	○	
2563	333	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	—	砂粒、小礫（2 ～ 8 ㎜）	灰黄褐	○	○	
2564	333	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文、蛇行沈線文	LR	砂粒、赤色粒子	橙	○	○	
2565	333	K9 - P1	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画、棒状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2566	333	K9 - P2	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	多条沈線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	○	○	
2567	333	〃	5 期	第Ⅱ群第 2 b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状磨消懸垂文	LR	砂粒	褐	○	○	
2568	333	K9 - P3	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
2569	333	〃	不明	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2570	334	K9 - P4	3b 期	第Ⅰ群第 3a7 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横位隆帯区画＋刻目、横ハ字文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2571	334	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
2572	334	〃	4b 期	第Ⅱ群第 8b 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	沈線区画文、刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	赤褐	—	—	
2573	334	K9 - P5	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
2574	334	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、棒状懸垂文、入組コ字文、胴部縦位懸垂文	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	○	
2575	334	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻懸垂文、口縁部刻目隆帯、胴部縦位懸垂文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2576	334	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状懸垂文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2577	334	〃	3 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文	LR、L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2578	334	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	黄褐	○	—	
2579	334	K9 - P8	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 - 2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文、充填沈線文	L R	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2580	334	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	横線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文	L R	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
2581	334	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部渦巻状隆帯文、管状刺突文、胴部懸垂文（沈）	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2582	334	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状懸垂文、横線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2583	334	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状懸垂文、横線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2584	334	K9 - P10	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
2585	334	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位区画文（微）、胴部逆Ｕ字状懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	○	補修孔。
2586	334	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻懸垂文、横ハ字文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	○	—	
2587	334	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刻目	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2588	334	K9 - P11	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	乙字状文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2589	334	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2590	334	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位刺突列、逆Ｕ字文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2591	334	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	三角形区画文（磨消）	不明	砂粒	明黄褐	○	○	
2592	334	〃	3b ～ 4 期	第Ⅰ群第 3j 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状隆帯文	—	砂粒	褐	○	—	
2593	334	L6 - P8	5b 期	第Ⅱ群第 2b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文、括弧状文	—	砂粒	灰白	○	—	
2594	334	〃	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	横位多条沈線文	—	砂粒	褐	○	○	
2595	334	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2596	334	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文	不明	砂粒、石英（中）	明黄褐	○	○	
2597	335	L6 - P9	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部括弧状文、胴部磨消懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2598	335	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部斜位懸垂文	LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
2599	335	L6 - P10	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、刺突列	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
2600	335	L6 - P11	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文、横位楕円区画文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	—	
2601	335	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文、横位楕円区画文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
2602	335	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突列	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	○	—	
2603	335	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突列	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
2604	335	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突列	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
2605	335	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	８字状突起、内面横位多条沈線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2606	335	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	—	

第 64 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2607	335	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位磨消縄文	LR	砂粒	褐	○	○	
2608	335	L6 - P13	2a 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画、口縁部隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2609	335	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2610	335	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位刺突列	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
2611	335	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（平）	RL	砂粒	明黄褐	○	—	
2612	335	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状懸垂文＋刻目、横線文＋刺突文	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2613	335	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	RLR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2614	335	L6 - P15	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2615	335	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画＋背割沈線＋縄文、入組コ字文	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2616	335	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 - 2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文、渦巻状懸垂文、充填沈線文	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2617	335	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部縦位懸垂文（隆・沈）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	○	
2618	335	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2619	335	L6 - P17	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文、横位楕円区画文、刻目	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
2620	335	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	横線文、横位楕円区画文、刺突列	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
2621	335	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文、横位楕円区画文、刺突列	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2622	335	L6 - P21	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部多段半隆起線文（半竹）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
2623	335	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋刺突列、条線文	—	砂粒	橙	—	—	
2624	335	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部渦巻状沈線文	RL	砂粒	明黄褐	○	—	
2625	336	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	C1	—	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
2626	336	〃	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	A1	7.4	3.5	7.2	7.2	0.11	口縁部～底部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2627	336	〃	1a 期	第Ⅰ群第 6a 類	浅鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文	—	砂粒、雲母（少）	橙	—	—	
2628	336	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 6d 類	浅鉢	E1	35.2	—	—	—	9.5	口縁部～胴部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	内外面に赤彩。
2629	336	L6 - P22	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2630	336	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2631	336	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2632	336	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文、横位楕円区画文＋刺突列	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2633	336	L7 - P4	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	横線文、短沈線文、刺突列	RLR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2634	336	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）	RL	砂粒	赤褐	○	○	
2635	336	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（隆）＋刺突列、条線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2636	336	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、三角状貼付文、沈線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
2637	336	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2638	336	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2639	336	〃	中期	—	深鉢	—	10	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	底部に植物繊維状圧痕。
2640	336	L7 - P9	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2641	336	L7 - P11	後期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	赤褐	—	—	
2642	336	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画、環状貼付文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	○	—	
2643	336	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	撚 R	砂粒	明黄褐	—	—	
2644	336	L7 - P12	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文、条線文	—	砂粒	橙	○	—	
2645	336	L7 - P14	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、有節沈線文、三叉文	—	砂粒、赤色粒子、雲母（少）	橙	○	—	
2646	336	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	橙	○	—	
2647	336	L7 - P18	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2648	336	〃	5a 期	第Ⅱ群第２ｂ１類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部同心円文	—	砂粒	橙	○	○	
2649	336	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画、８字状突起、刺突列	—	砂粒	赤褐	—	—	
2650	336	L7 - P21	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2651	337	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部沈線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2652	337	L7 - P27	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、横線文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2653	337	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2654	337	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2655	337	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文、横ハ字文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2656	337	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐	○	—	
2657	337	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
2658	337	L7 - P34	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文、胴部縦位懸垂文（隆）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	

第 65 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2659	337	L7 - P34	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
2660	337	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状隆帯区画文、横ハ字文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
2661	337	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状隆帯区画文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
2662	337	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
2663	337	L8-P1	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯区画	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2664	337	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
2665	337	L8-P6	1c 期	第Ⅰ群第 1c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、コイル状文	—	白色粒子（多）	明黄褐	○	—	
2666	337	〃	5a 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文	—	砂粒、赤色粒子（少）	橙	—	—	
2667	337	〃	6 期	第Ⅱ群第 6c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	内面横位沈線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2668	337	〃	不明	—	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	○	
2669	337	L8 - P9	3a 期	第Ⅰ群第 a3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
2670	337	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2671	337	L8 - P10	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文、口縁部刻目隆帯	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
2672	337	L8 - P20	5b 類	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文、胴部三角形区画文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2673	337	L8 - P22	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位楕円区画文	LRL	砂粒	橙	○	○	
2674	337	L8 - P23	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位楕円区画文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2675	337	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位楕円区画文	LR	砂粒	明黄褐	○	—	
2676	337	L8 - P27	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部磨消懸垂文	RL	砂粒、石英（少）	明黄褐	—	—	
2677	337	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状磨消懸垂文	LR	砂粒	明黄褐	—	—	
2678	337	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2679	337	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	—	砂粒	橙	—	○	
2680	337	〃	5 期	第Ⅱ群第 7b 類	注口	—	—	—	—	—	—	注口部	—	—	砂粒、赤色粒子	橙	—	—	
2681	337	L8 - P28	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2682	337	L8 - P30	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文、刻目文、胴部三角形区画文（磨消）	—	砂粒	灰白	○	—	
2683	337	L8 - P31	3b 期	第Ⅰ群第 3a5-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋円形刺突文、渦巻状懸垂文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	明黄褐	—	—	
2684	337	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	橙	—	—	
2685	338	L9 - P3	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刻目	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
2686	338	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋縄文、横線文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	—	○	
2687	338	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	横線文、刺突列	LR	小礫（2 ～ 8 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2688	338	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文、渦巻状懸垂文	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	—	
2689	338	L9 - P5	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	○	
2690	338	L9 - P17	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2691	338	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文、胴部縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	○	—	
2692	338	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文、充填沈線文、渦巻状懸垂文＋胴部縦位懸垂文（隆）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2693	338	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	○	○	
2694	338	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆・沈）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
2695	338	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2696	338	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部楕円区画文（隆沈）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
2697	338	L9 - P19	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆）	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	○	
2698	338	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）＋瘤状突起	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2699	338	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3b3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、刺突列	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2700	338	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒	明黄褐	—	○	
2701	338	L9 - P20	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	J	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状突起＋橋状把手、渦巻状懸垂文、内面渦巻懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	—	○	
2702	338	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文、蛇行沈線文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	—	
2703	339	L9 - P21	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横線文、乙字状文、瘤状突起	LR	小礫（2 ～ 7 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2704	339	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刻目、渦巻状懸垂文、胴部縦位懸垂文（沈）＋瘤状突起	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	2713 と同一個体。
2705	339	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	RL	砂粒	橙	—	—	
2706	339	〃	不明	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部楕円区画文、蛇行沈線文	撚 R	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2707	339	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆沈）	LR	小礫（2 ～ 7 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2708	339	L9 - P26	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、基隆帯・半隆起線文による渦巻状懸垂文、櫛状文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2709	339	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、交互刺突文、三叉文	—	砂粒	橙	○	—	
2710	339	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（隆）、刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	

第 66 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2711	339	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 - 1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、入組コ字文＋刺突文	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2712	339	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文、渦巻懸垂文、瘤状突起	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	○	
2713	339	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刻目、渦巻状懸垂文、胴部縦位懸垂文（沈）＋瘤状突起	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	2704 と同一個体。
2714	339	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文、横線文＋円形刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
2715	339	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状沈線文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2716	339	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2717	339	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）、赤色粒子	橙	—	○	
2718	339	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文、刻目、瘤状突起	—	小礫（2 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
2719	339	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	A1	23.2	11.2	38	38	11.2	口縁部～底部	口縁部横位沈線文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2720	340	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	明黄褐	—	—	
2721	340	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2722	340	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3b3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	撚 R	砂粒	灰白	—	—	
2723	340	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、口縁部渦巻文	RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2724	340	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2725	340	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆沈）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）、石英	橙	—	○	
2726	340	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部楕円区画文、胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	灰黄褐	—	○	
2727	340	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3i 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横位隆帯区画	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2728	340	L9 - P30	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、矢羽根状沈線文	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2729	340	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2730	340	〃	3 期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	L	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2731	340	〃	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐灰	○	—	
2732	340	L9 - P33	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文＋刺突文	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2733	340	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	L	小礫（2 ～ 5 ㎜）	灰黄褐	○	○	
2734	340	L9 - P35	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2735	340	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刺突文、刺突列	L	小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2736	340	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画、胴部刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2737	340	L9 - P36	3b 期	第Ⅰ群第 3a5-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、渦巻状懸垂文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2738	340	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋瘤状突起＋背割沈線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	—	
2739	340	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、入組コ字文＋刻目	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
2740	340	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状隆帯区画文、渦巻状懸垂文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	—	
2741	340	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2742	340	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	頸部横位隆帯区画、胴部花弁状刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	○	—	
2743	340	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	頸部横位隆帯区画、圧痕文	撚 L	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2744	340	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文、蛇行沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2745	340	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、曲流条線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	○	
2746	340	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	頸部横位隆帯区画＋刻目、胴部刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2747	340	L9 - P37	5a 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状懸垂文、横線文、胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒	橙	○	○	
2748	340	L9 - P38	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2749	340	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
2750	340	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	８字状貼付文、胴部楕円区画文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
2751	341	L9 - P39	1c 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	鶏頭冠状把手、鋸歯状突起、眼鏡状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	赤褐	—	○	
2752	341	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状懸垂文＋刺突列、条線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2753	341	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2754	341	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2755	341	L9 - P41	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
2756	341	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文＋刻目、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
2757	341	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文、口縁部楕円区画文	RL	小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	○	○	
2758	341	L9 - P44	3a 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋沈線＋刺突列、入組コ字文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	明黄褐	—	—	
2759	341	L9 - P47	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	○	○	
2760	341	L10 - P2	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	変形横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	○	—	

第 67 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2761	341	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
2762	341	L10 - P4	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文＋刺突文＋瘤状突起	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2763	341	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刻目、瘤状突起	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	○	—	
2764	341	L11 - P1	1c 期	第Ⅰ群第 5c1 類	浅鉢	C2	32.5	10.5	11.5	11.5	3.9	完形	口唇部渦巻状沈線文、口唇部横線文＋有節沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2765	342	L11 - P9	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	○	
2766	342	〃	4 期	第Ⅱ群第 8 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2767	342	L11 - P10	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刺突文、胴部磨消縄文	—	砂粒	橙	—	—	
2768	342	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯文＋刻目、環状貼付文、胴部磨消縄文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2769	342	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消縄文	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
2770	342	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消縄文	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
2771	342	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消縄文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2772	342	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消縄文	LR	砂粒	灰黄褐	○	—	
2773	342	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画		砂粒、石英（少）	にぶい黄橙	○	—	
2774	342	L11 - P11	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、胴部横位隆帯区画＋刻目、胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2775	342	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2776	342	〃	4 期	第Ⅱ群第 8 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
2777	342	L11 - P12	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2778	342	L11 - P13	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
2779	342	L11 - P14	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位刺突列	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2780	342	〃	4 期	第Ⅱ群第 1c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	2786 と同一個体。
2781	342	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部斜位磨消懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2782	342	L11 - P17	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画、変形横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐灰	○	—	
2783	342	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、変形横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
2784	342	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画、胴部爪形刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐灰	—	○	
2785	342	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	—	
2786	342	〃	4 期	第Ⅱ群第 1c 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文、頸部蛇行沈線文、胴部懸垂文（沈）	LR	砂粒	灰黄褐	○	○	2780 と同一個体。
2787	342	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
2788	342	〃	4 期	第Ⅱ群第 6a 類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2789	342	〃	4 期	第Ⅱ群第 1d 類	深鉢	B1	29.2	—	—	—	24.6	口縁部	胴部横位隆帯区画＋圧痕文	—	砂粒、小礫（2 ～ 6 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2790	343	〃	5 b 期	第Ⅱ群第 2a4 類	深鉢	D2	—	—	—	—	—	口縁部	双環状突起＋同心円文、胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
2791	343	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2792	343	L11 - P18	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文、胴部横位沈線区画＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
2793	343	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部捻転状把手、胴部横位沈線区画＋刺突文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2794	343	〃	4 期	第Ⅱ群第 1d 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状懸垂文＋刺突文、口唇部刻目文	縄文	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
2795	343	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）、雲母（少）	褐灰	○	○	
2796	343	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部沈線区画文	LR	砂粒	明黄褐	○	○	
2797	343	L11 - P19	4a 期	第Ⅰ群第 3a6 - 2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画文、斜位沈線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2798	343	L11 - P21	5a 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目文、胴部磨消懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2799	343	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部三角形区画文（磨消）	—	砂粒	明黄褐	—	○	
2800	343	L11 - P22	3 期	第Ⅰ群第 3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、渦巻状懸垂文＋刻目	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2801	343	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3i 類	有孔	—	—	—	—	—	—	胴部	鍔＋貫通孔、胴部曲線文	LR	砂粒	灰白	—	—	内外面に赤彩。
2802	343	L11 - P25	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部米字状文（磨消）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2803	343	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻懸垂文	—	砂粒	橙	—	—	
2804	343	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	—	砂粒	灰黄褐	○	—	
2805	343	L11 - P26	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	縄文	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2806	343	〃	5 期	—	浅鉢	—	—	6	—	—	—	底部	—	—	砂粒	褐灰	○	—	
2807	343	L11 - P27	1c 期	第Ⅰ群第 5e 類	浅鉢	C1	36.8	12.8	13.6	13.6	6.3	完形	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2808	343	L11 - P28	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文	—	砂粒	褐灰	○	○	
2809	343	L11 - P30	4 期	第Ⅱ群第 1c 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、条線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2810	343	L11 - P31	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2811	343	L11 - P32	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刺突文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2812	343	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6 - 1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画、変形横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	

第 68 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2813	343	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部懸垂文（隆）、胴部斜位沈線文	—	砂粒	明黄褐	○	—	
2814	343	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横帯文（磨消）	LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
2815	343	L11 - P35	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	褐灰	—	—	
2816	344	L11 - P36 ＋ P37	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部爪形刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
2817	344	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2818	344	〃	4a 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、胴部横位隆帯区画、爪形刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2819	344	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画＋刻目	—	砂粒	褐灰	○	○	
2820	344	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部同心円文、口縁部横位沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2821	344	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2822	344	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2823	344	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文、変形横ハ字文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐	○	—	
2824	344	〃	3b ～ 4 期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部刺突文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2825	344	〃	4 期	第Ⅱ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刺突文、条線文（19）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	—	
2826	344	L11 - P39	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2827	344	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	縄文	砂粒	明黄褐	○	—	
2828	344	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2829	344	L11 - P40	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部沈線区画文	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2830	344	L11 - P42	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2831	344	L11 - P44	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2832	344	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2833	344	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2834	344	L11 - P51	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2835	344	L12 - P2	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
2836	344	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部懸垂文（沈）	—	砂粒	橙	—	—	
2837	344	L12 - P6	5 b期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	多重菱形文	—	砂粒	明黄褐	○	—	
2838	344	L12 - P7	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位隆帯区画＋刻目、胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
2839	344	〃	5 期	第Ⅱ群第 5 類	鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、斜位沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2840	344	L12 - P10	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2841	344	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部逆Ｕ字状文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2842	344	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	—	砂粒	明黄褐	○	○	
2843	344	L12 - P13	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	K2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位沈線区画（平）	—	砂粒	橙	—	—	
2844	344	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	—	11.6	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	RL	砂粒	明黄褐	—	—	口縁部と内面に赤彩。
2845	344	L12 - P14	5 期	第Ⅱ群第 5 類	鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部懸垂文	—	砂粒	橙	—	—	
2846	344	L12 - P15	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	C1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文、眼鏡状突起、胴部横位沈線区画	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2847	344	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文	撚 R	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2848	344	〃	4 期	第Ⅱ群第 8b 類	蓋	A	13.2	—	—	—	—	—	刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2849	344	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
2850	344	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画	—	砂粒	橙	○	○	
2851	344	L12 - P16	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部同心円文、胴部縦位懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2852	345	L12 - P17	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2853	345	〃	4 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	曲線文＋刺突列	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2854	345	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	変形横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2855	345	L12 - P18	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部爪形刺突文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2856	345	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	変形横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
2857	345	L12 - P21	5a 期	第Ⅱ群第 2 b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	８字状突起、胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
2858	345	〃	5 期	第Ⅱ群第 2 b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
2859	345	〃	後期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2860	345	L12 - P22	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文、胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒、石英	明黄褐	—	○	
2861	345	〃	5 期	第Ⅱ群第 2 b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画＋刺突列	RL	砂粒	橙	○	○	
2862	345	L12 - P25	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2863	345	〃	3b ～ 4 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2864	345	〃	4 期	第Ⅱ群第 8 類	蓋	—	—	—	—	—	—	摘部	—	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2865	345	L12 - P29	3 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	

第 69 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2866	345	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2867	345	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2868	345	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（沈）	—	橙色粒子（多）	浅黄橙	—	○	
2869	345	L12 - P33	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状文、胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2870	345	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2871	345	L12 - P34	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、口縁部横位沈線文、胴部渦巻磨消懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2872	345	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
2873	345	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2874	345	L12 - P35	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）	LR	砂粒	橙	—	○	
2875	345	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位刻目隆帯	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2876	345	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	褐灰	○	○	
2877	345	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒、赤色粒子（少）	浅黄橙	○	—	
2878	345	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
2879	345	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文	—	砂粒	橙	—	—	
2880	345	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	L	砂粒、赤色粒子	橙	○	—	
2881	345	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部斜位懸垂文（沈）	—	砂粒	明黄褐	—	—	
2882	345	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	明黄褐	—	—	
2883	345	〃	後期	—	深鉢	—	—	9.6	—	—	—	底部	—	—	砂粒	橙	—	—	底部網代圧痕文。
2884	345	L12 - P38	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2885	345	L12 - P42	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文、横位楕円区画文＋刻目	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2886	345	〃	4a 期	第Ⅱ群第 1a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部瘤状突起	—	白色粘土粒（多）	にぶい黄橙	—	○	
2887	345	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
2888	345	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
2889	345	〃	4 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部弧状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明赤褐	○	○	
2890	345	〃	5 期	第Ⅱ群第 7 類？	注口	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画	—	砂粒		—	—	
2891	346	L12 - P42	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	10.2	—	—	—	底部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒	褐灰	○	—	底部網代圧痕文。
2892	346	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	7.1	—	—	—	底部	—	—	砂粒	灰黄褐	—	—	底部網代圧痕文。
2893	346	L12 - P48	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画、胴部爪形刺突文	—	砂粒	明黄褐	○	—	
2894	346	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	環状貼付文	LR	砂粒、赤色粒子（少）	明黄褐	○	—	
2895	346	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部同心円文	—	砂粒	褐灰	—	—	
2896	346	L12 - P49	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	明黄褐	—	—	
2897	346	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2898	346	L12 - P50	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
2899	346	〃	4 期	第Ⅱ群第 8b 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	円形刺突文	—	砂粒	灰黄褐	○	—	
2900	346	L12 - P52	5 b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部同心円文、胴部縦位多条懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
2901	346	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2 b 1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
2902	346	〃	5 期	第Ⅱ群第 2 b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画＋刺突列、胴部渦巻状懸垂文	RL	砂粒	橙	○	○	
2903	346	〃	後期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2904	346	L12 - P53	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2905	346	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2906	346	〃	5 期	第Ⅱ群第 2 b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	縄文	砂粒	明赤褐	○	○	
2907	346	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文＋刻目文、胴部縦位懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
2908	346	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
2909	346	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文	LR	砂粒	灰黄褐	○	—	
2910	346	L12 - P54	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2911	346	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒、石英	にぶい黄橙	—	○	
2912	346	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部爪形刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2913	346	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2914	346	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯文＋刻目、胴部横位磨消縄文帯	LR	砂粒	橙	○	○	
2915	346	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯文＋刻目、胴部磨消円形文	R	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2916	346	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部多条沈線区画文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
2917	346	〃	4 期	第Ⅱ群第 8c 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	鎖状隆帯文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
2918	346	L12 - P60	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画＋刺突列、環状貼付文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
2919	346	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	

第 70 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2920	346	L13 - P1	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
2921	346	L13 - P2	5a 期	第Ⅱ群第 2 b 1 類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
2922	346	〃	5 期	第Ⅱ群第 2 b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
2923	346	〃	5 期	第Ⅱ群第 2 b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
2924	346	L13 - P3	不明	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
2925	346	L13 - P4	5 期	第Ⅱ群第 2 b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画＋刺突列	—	砂粒、赤色粒子（中）	褐灰	—	—	
2926	346	L13 - P6	5 期	第Ⅱ群第 2 b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文＋矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
2927	346	〃	5 期	第Ⅱ群第 2 b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	縄文	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	—	
2928	347	L13 - P8	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰黄褐	○	○	
2929	347	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2930	347	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	明黄褐	○	—	底部網代圧痕文。
2931	347	L13 - P10	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2932	347	L13 - P12	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部爪形刺突文	—	砂粒	灰白	○	○	
2933	347	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部同心円文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2934	347	〃	5 期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	橙	—	—	底部葉脈状文。
2935	347	L13 - P14	3 期	第Ⅰ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、結節縄文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2936	347	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰黄褐	—	—	
2937	347	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯文＋刻目、胴部方形区画文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
2938	347	L13 - P17	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2939	347	L13 - P18	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	○	—	
2940	347	L13 - P20	3a 期	第Ⅰ群第 3a2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位楕円区画文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2941	347	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2942	347	L13 - P22	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
2943	347	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2944	347	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、胴部横位隆帯区画＋刻目、胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2945	347	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部同心円文、口縁部横位沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2946	347	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2947	347	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	—	—	
2948	347	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	R	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2949	347	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2950	347	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文＋三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2951	347	〃	5b ～ 6 期	第Ⅱ群第 6 類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
2952	347	L13 - P23	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部環状突起、胴部横位磨消縄文	LR	砂粒	明黄褐	—	—	
2953	347	L13 - P24	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
2954	347	L13 - P26	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部多条懸垂文＋刺突列	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2955	347	〃	5 期	第Ⅱ群第 2 b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
2956	347	M4 - P2	4 期	第Ⅱ群第 1a5 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
2957	347	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2958	347	M4 - P4	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	○	
2959	347	M4 - P3	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	橙	○	○	
2960	347	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部爪形刺突文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2961	347	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	多条沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
2962	347	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	三段環状貼付文、口縁部横位隆帯文＋刻目	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
2963	348	M6 - P4	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	交互刺突文、胴部懸垂文	撚 L	砂粒	橙	○	○	
2964	348	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋刺突列、波状文、充填沈線文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
2965	348	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部縦位懸垂文（平）、斜位沈線文、胴部横位沈線区画	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2966	348	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2967	348	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、胴部刺突文（半竹）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2968	348	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	22	—	—	—	6	口縁部～胴部	胴部蛇行沈線文（沈）、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
2969	348	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆）＋刻目、胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2970	348	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯文、胴部刺突文（半竹）	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	○	
2971	348	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a3 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、胴部横位隆帯区画＋刻目、胴部懸垂文、胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
2972	348	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2973	348	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a5 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画＋刻目	LR	砂粒	明黄褐	○	—	

第 71 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
2974	348	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	○	—	
2975	348	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a5 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画＋刻目	LR	砂粒	明黄褐	○	○	
2976	348	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	D2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部対弧状文、口縁部横位沈線文、胴部縦位多条懸垂文	—	砂粒	灰黄褐	—	○	
2977	348	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰白	—	—	
2978	348	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2979	348	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
2980	348	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画＋刺突列、胴部蛇行懸垂文（沈）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	○	—	
2981	348	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
2982	348	〃	後期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
2983	349	M6 - P5	5 期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋円形刺突列	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
2984	349	〃	5 期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	LR	砂粒	明黄褐	○	○	
2985	349	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、胴部横位隆帯区画（鎖）、胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
2986	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
2987	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部蛇行懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
2988	349	M6 - P7	3b 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	突起	皿状突起	—	砂粒、赤色粒子（少）	にぶい黄橙	○	—	
2989	349	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
2990	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文、内面磨消縄文	LR	砂粒	明黄褐	—	—	
2991	349	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	環状貼付文、胴部横位隆帯区画、胴部磨消懸垂文	LR	砂粒	橙	—	—	
2992	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯＋刺突文、胴部帯状文	—	砂粒	明黄褐	○	—	
2993	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	2 段の環状貼付文、口縁部横位隆帯文＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
2994	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刺突文、８字状突起、胴部横位磨消縄文帯	LR	砂粒	灰黄褐	○	○	
2995	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刻目、胴部横位磨消縄文帯	LR	砂粒	灰黄褐	○	○	
2996	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯文＋刻目	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
2997	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c4 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位多条沈線文、口唇部刻目文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
2998	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位磨消縄文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
2999	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	内面口唇部横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3000	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒、赤色粒子（中）	橙	—	—	
3001	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画文	—	砂粒	灰白	○	—	
3002	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	灰白	○	—	
3003	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	灰黄褐	—	—	
3004	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	灰黄褐	—	—	
3005	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
3006	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	灰黄褐	○	○	
3007	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
3008	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒	橙	—	○	
3009	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位多条懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
3010	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒	橙	—	○	
3011	349	〃	5 期	第Ⅱ群第 2 b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）＋刺突文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3012	349	〃	5 期	第Ⅱ群第 2 b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）＋刺突文	—	砂粒	明黄褐	○	—	
3013	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位多条沈線文、渦巻状懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3014	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位磨消縄文帯＋渦巻状文	LR	砂粒、赤色粒子（中）	明黄褐	—	—	
3015	349	〃	6 期	第Ⅱ群第 3 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	耳状突起、胴部懸垂文	—	砂粒	黄橙	—	—	
3016	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	綾繰状文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
3017	349	〃	6 期	第Ⅱ群第 7c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位多条沈線文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
3018	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位磨消縄文帯	LR	砂粒	橙	—	—	
3019	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 7c 類	注口	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位多条沈線文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
3020	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 7c 類	注口	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位多条沈線文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
3021	349	〃	5b 期	第Ⅱ群第 7c 類	注口	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位多条沈線文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
3022	350	M6 - P7	3b 期	第Ⅰ群第 3c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刻目		砂粒	橙	—	—	
3023	350	〃	5 ～ 6 期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3024	350	〃	5 ～ 6 期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3025	350	〃	5 ～ 6 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	明黄褐	○	—	
3026	350	〃	5 ～ 6 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄褐	—	—	
3027	350	〃	5 ～ 6 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	11.4	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	底部網代圧痕文。

第 72 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
3028	350	〃	5～6期	第Ⅱ群第2c類	深鉢	—	—	7.5	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2㎜）	明黄褐	—	—	底部網代圧痕文。
3029	350	〃	5～6期	第Ⅱ群第2c類	深鉢	—	—	7.4	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部網代圧痕文。
3030	350	〃	5～6期	第Ⅱ群第2c類	深鉢	—	—	12.6	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部網代圧痕文。
3031	350	M7 - P2	5a期	第Ⅱ群第2a1類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文＋括弧状文、口縁部横位沈線文＋刻目文、胴部米字状文＋弧状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	3032と同一個体。
3032	350	〃	5a期	第Ⅱ群第2a1類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目文、胴部三角形区画文＋弧状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	3031と同一個体。
3033	350	〃	5b期	第Ⅱ群第2a2類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部対弧状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3034	350	M7 - P3	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文（欠）	—	砂粒	橙	○	—	
3035	350	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文	RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3036	350	M7 - P4	5b期	第Ⅱ群第2a2類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目文、胴部多条懸垂文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3037	350	〃	不明	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刺突文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	—	
3038	350	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3039	350	〃	5b期	第Ⅱ群第2b2類	深鉢	E2	—	—	—	—	—	口縁部	耳状突起、内面横位沈線文、口唇部刻目文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
3040	350	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画、胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
3041	350	〃	5b期	第Ⅱ群第2b3類	深鉢	E2	—	—	—	—	—	口縁部	内面円形文＋三段環状貼付文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3042	350	〃	不明	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、小礫（2㎜）	明黄褐	○	—	
3043	350	〃	5～6期	第Ⅱ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2㎜）	明赤褐	—	—	底部網代圧痕文。
3044	350	〃	5～6期	第Ⅱ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部網代圧痕文。
3045	350	M7 - P6	中期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	—	LR	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3046	351	M7 - P6	3b期	第Ⅰ群第3a6-1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文、横ハ字文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3047	351	〃	不明	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3048	351	〃	3b期	第Ⅰ群第3a10類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文	—	小礫（2～3㎜）	にぶい黄褐	—	—	
3049	351	M7 - P10	5a期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3050	351	〃	5b期	第Ⅱ群第2b2類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刻目	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3051	351	〃	5b期	第Ⅱ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	内面横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3052	351	〃	5b期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3053	351	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2㎜）	明黄褐	—	—	
3054	351	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒	明黄褐	○	—	
3055	351	〃		第Ⅱ群第7b類	注口	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、刺突列	—	砂粒	黄褐	—	—	
3056	351	M7 - P16	5期	第Ⅱ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部多条懸垂文	—	砂粒	灰黄褐	○	—	
3057	351	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻懸垂文、刺突列	—	砂粒	橙	—	—	
3058	351	〃	2c期	第Ⅰ群第2c5類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻懸垂文＋刻目、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	明黄褐	—	—	
3059	351	〃	5a期	第Ⅱ群第2b1類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目文	—	砂粒	橙	○	○	
3060	351	〃	2c期	第Ⅰ群第2b2類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋凹文、内面横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3061	351	〃	2c期	第Ⅰ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画＋刺突文	—	砂粒	明黄褐	○	—	
3062	351	M7 - P17	3b期	第Ⅰ群第3a6-1類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、棒状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	砂粒、小礫（2～5㎜）	にぶい黄褐	○	○	
3063	351	M7 - P24	5b期	第Ⅱ群第2a2類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文、胴部縦位多条沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3064	351	〃	5a期	第Ⅱ群第2a1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	—	砂粒	橙	—	○	
3065	351	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒、小礫（2㎜）	明黄褐	○	—	
3066	351	〃	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒、赤色粒子（中）	橙	○	—	
3067	351	〃	5b期	第Ⅱ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、胴部渦巻状懸垂文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3068	351	M8 - P1	5期	第Ⅱ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3069	351	M8 - P5	5b期	第Ⅱ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文＋刻目、胴部横位隆帯文＋刻目	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3070	351	〃	5b期	第Ⅱ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
3071	351	M8 - P8	3a期	第Ⅰ群第3c1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒	橙	○	○	
3072	351	M8 - P13	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	小礫（2㎜）、白色粒子	明黄褐	—	○	
3073	351	〃	3b期	第Ⅰ群第3a4-1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文＋刻目、入組コ字文	LR	小礫（2～5㎜）	浅黄橙	○	○	
3074	351	M8 - P19	1期	第Ⅰ群第1e類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	斜位半隆起線文、細沈線文	—	砂粒	明赤褐	—	—	
3075	351	〃	5b期	第Ⅱ群第2a2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文、弧状沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	灰黄褐	—	—	
3076	351	M9 - P3	3a期	第Ⅰ群第3b1類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆沈）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
3077	351	〃	5期	第Ⅱ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	L	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
3078	351	〃	5b期	第Ⅱ群第2c類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	灰黄褐	○	○	
3079	351	M9 - P6	3b期	第Ⅰ群第3a4類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2～3㎜）	浅黄橙	—	○	

第73表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
3080	351	〃	4 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3081	352	M9 - P8	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、充填沈線文	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3082	352	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆沈線文＋瘤状突起＋刺突文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
3083	352	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画＋背割沈線文、横線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3084	352	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部沈線文、渦巻状懸垂文、横線文＋管状刺突文、胴部縦位懸垂文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
3085	352	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文、瘤状突起	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3086	352	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画	R	砂粒	浅黄橙	○	○	
3087	352	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3088	352	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	縄文	砂粒	浅黄橙	—	—	
3089	352	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	12.5	6	14.8	14.8	0.85	口縁部	口縁部横位沈線区画	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3090	352	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3091	352	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部渦巻文、口縁部楕円区画文、胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	灰黄褐	○	—	
3092	352	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文、蛇行沈線文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3093	352	M9 - P11	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、渦巻懸垂文＋刻目、胴部縦位懸垂文（沈）	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	○	
3094	352	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、胴部円形刺突文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3095	352	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	波状隆帯区画文＋刻目、横ハ字文	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3096	352	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	波状隆帯区画文＋刻目	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3097	352	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3098	352	M9 - P12	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3099	352	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3100	352	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3101	352	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	突起	口縁部懸垂文（沈）	L	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3102	352	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画、胴部渦巻状懸垂文	LR	砂粒	明赤褐	○	○	
3103	353	M9 - P14	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	弧状沈線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3104	353	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	—	—	
3105	353	M9 - P18	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3106	353	〃	4 ～ 5 期	第Ⅰ群第 6 類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
3107	353	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（沈）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3108	353	M9 - P19	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3109	353	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	撚 L	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	○	—	
3110	353	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3111	353	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3112	353	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒	明褐	○	○	
3113	353	M9 - P23	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文＋刻目、横ハ字文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	—	
3114	353	M9 - P27	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	環状突起＋胴部懸垂文、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	—	
3115	353	M10 - P7	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3116	353	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、入組コ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3117	353	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、棒状懸垂文、入組コ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	○	
3118	353	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 6 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3119	353	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻懸垂文、胴部弧状沈線文＋刺突文	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
3120	353	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	多重弧線文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3121	353	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、波状隆帯区画文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
3122	353	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、波状隆帯区画文、横ハ字文	LR	小礫（2 ～ 5 ㎜）	明黄褐	○	—	
3123	353	〃	3a 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	曲流条線文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3124	353	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部楕円区画文、胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3125	353	M10 - P11	3a 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋背割沈線文＋瘤状突起、横線文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
3126	353	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文（鎖）	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3127	353	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	
3128	353	M10 - P16	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LRL	砂粒	明黄褐	—	○	
3129	353	M11 - P3	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	灰白	—	—	
3130	353	M11 - P4	4 期	第Ⅱ群第 8b 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	花弁状刺突文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	

第 74 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
3131	353	M11 - P8	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画、横ハ字文	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3132	353	M11 - P12	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3133	353	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3134	354	M11 - P13	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部爪形刺突文	—	砂粒	橙	—	—	
3135	354	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒	灰白	—	—	
3136	354	M11 - P15	5b 期	第Ⅱ群第 2b2 類	深鉢	D2	—	—	—	—	—	胴部	口縁部渦巻文、内面対向Ｃ字文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
3137	354	M11 - P20	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3138	354	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	○	—	
3139	354	M11 - P21	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3140	354	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文	—	砂粒	橙	○	—	
3141	354	M11 - P22	4 期	第Ⅱ群第 7a 類	注口	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、注口部	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3142	354	M11 - P24	不明	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横位沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
3143	354	M11 - P26	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
3144	354	〃	4 期	第Ⅱ群第 1d 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文、条線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
3145	354	M11 - P27	4 期	第Ⅱ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部棒状懸垂文、口縁部横位隆帯区画＋刻目	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
3146	354	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部爪形刺突文	—	砂粒、赤色粒子（少）	明黄褐	—	—	
3147	354	M11 - P28	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文、胴部Ｘ字状懸垂文（磨消）	LR	砂粒	明黄褐	○	—	
3148	354	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部Ｘ字状懸垂文（磨消）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3149	354	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文	—	砂粒、赤色粒子（少）	橙	—	—	
3150	354	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文、胴部磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3151	354	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3152	354	M11 - P29	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
3153	354	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3154	354	M11 - P30	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	橙	—	—	
3155	354	M11 - P31	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
3156	354	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	灰白	—	—	
3157	354	M11 - P32	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（磨消）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3158	354	M11 - P33	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文、括弧状文	LR	砂粒	橙	○	○	
3159	354	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位区画（磨消）＋環状貼付文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
3160	354	M11 - P37	3 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	—	砂粒	灰白	○	—	
3161	354	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	磨消縄文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰黄褐	○	○	
3162	354	〃	4 期	第Ⅱ群第 8c 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	鎖状隆帯文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3163	354	M12 - P6	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状突起、渦巻状懸垂文＋刻目	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	明褐	—	—	
3164	355	M12 - P8	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文、瘤状突起	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
3165	355	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	補修孔。
3166	355	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部Ｕ字状懸垂文（沈）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3167	355	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3168	355	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3169	355	M12 - P12	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画、胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰白	—	—	
3170	355	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3171	355	M12 - P15	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位磨消縄文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3172	355	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒	橙	—	—	
3173	355	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	○	
3174	355	M12 - P16	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画＋刻目、胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	—	
3175	355	〃	4 期	第Ⅱ群第 8 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
3176	355	M12 - P19	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（隆）	RL	砂粒	明黄褐	—	○	
3177	355	M12 - P20	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部同心円文＋縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
3178	355	M12 - P22	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部縦位懸垂文（平）、胴部横位沈線区画（平）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3179	355	〃	3a 期	第Ⅰ群第 5 f 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	RL	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
3180	355	M12 - P26	3a 期	第Ⅰ群第 4 類	有孔	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻懸垂文（隆沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3181	355	M12 - P27	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3182	355	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（隆）	—	砂粒	橙	○	○	
3183	355	M13 - P1	5b 期	第Ⅱ群第 6b 類	浅鉢	B	34	—	—	—	4.1	口縁部～胴部	突起、内面横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
3184	355	M13 - P3	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	

第 75 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
3185	355	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
3186	355	〃	4 期	第Ⅱ群第 1c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位波状沈線文、条線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3187	356	M13 - P6	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻懸垂文（隆沈）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3188	356	M13 - P8	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	８字状貼付文、胴部横位隆帯文＋刻目	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
3189	356	〃	5 期	第Ⅱ群第 2 c 1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部Ｕ字状懸垂文（磨消）		砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
3190	356	〃	4 期	第Ⅱ群第 8 類	蓋	A	—	—	—	—	—	—	放射状の沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
3191	356	M13 - P15	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画＋刺突文、胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
3192	356	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3193	356	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2b3 類	深鉢	E2	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消縄文	LR	砂粒、赤色粒子	橙	○	○	
3194	356	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	F	—	10	—	—	—	胴部～底部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰白	○	○	底部網代圧痕文。
3195	356	N7-P1	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位多条沈線文、内面横位多条文、口唇部刻目文	—	砂粒、赤色粒子	赤褐	○	○	
3196	356	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文（磨消）	LR	砂粒	灰黄褐	—	—	
3197	356	〃	後期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	内面横位沈線区画	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3198	356	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位多条沈線文、連鎖状文	—	砂粒	黒褐	○	○	
3199	356	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位多条沈線文	—	砂粒	橙	—	○	
3200	356	〃	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位磨消縄文帯、内面横位沈線文、口唇部刻目文	LR	砂粒	灰白	○	○	
3201	356	〃	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	内面横位多条沈線文＋刻目	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3202	356	〃	6 期	第Ⅱ群第 3c 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	耳状突起、環状貼付文、内面横位多条沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
3203	356	〃	後期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
3204	356	〃	3 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（沈）	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	—	
3205	356	〃	5b ～ 6 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	6	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	—	—	底部網代圧痕文。
3206	356	〃	5b ～ 6 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰黄褐	—	—	底部網代圧痕文。
3207	356	〃	5b ～ 6 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	5.6	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄褐	—	—	底部網代圧痕文。
3208	356	〃	5b ～ 6 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	8	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	—	—	底部網代圧痕文。
3209	356	〃	6 期	第Ⅱ群第 6 類	皿	—	—	—	—	—	—	口縁部	内面横位沈線文＋の字状文	—	砂粒、赤色粒子	橙	—	—	
3210	356	〃	5b ～ 6 期	第Ⅱ群第 8d 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	渦巻状文（磨消）、矢羽根状沈線文	縄文	砂粒	明黄褐	—	—	
3211	357	N8-P2	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文（磨消）、内面横位沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
3212	357	〃	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	内面横位多条沈線文＋刻目、円形刺突列、口唇部刻目文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
3213	357	〃	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位多条沈線文、内面横位多条沈線文	LR	砂粒	明黄褐	○	○	
3214	357	〃	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位多条沈線文、内面横位多条沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
3215	357	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位磨消縄文帯	LR	砂粒、赤色粒子（少）	橙	○	—	
3216	357	〃	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位多条沈線文	—	砂粒、赤色粒子	橙	○	△	
3217	357	〃	5b ～ 6 期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	台部	—	—	砂粒	橙	—	—	
3218	357	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	褐灰	○	—	底部網代圧痕文。
3219	357	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部網代圧痕文。
3220	357	N8-P9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位渦巻隆帯文、充填沈線文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	—	
3221	357	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻懸垂文、充填沈線文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3222	357	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3223	357	N8-P10	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線文	—	砂粒	灰白	—	—	
3224	357	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部逆Ｕ字状懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3225	357	N8-P11	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	Ｘ字状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3226	357	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	—	
3227	357	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文＋刺突列、入組コ字文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3228	357	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	RL	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
3229	357	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
3230	357	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	横線文、横位楕円区画文＋刺突文、縦位短沈線文	RLR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3231	358	N8-P16	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画	—	砂粒	明赤褐	○	—	
3232	358	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（隆）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3233	358	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆沈）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
3234	358	N8-P18	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文、三叉文	—	砂粒	赤褐	—	○	
3235	358	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画文、波状文、有節沈線文	撚 R	砂粒	橙	○	○	
3236	358	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状懸垂文、入組コ字文＋刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3237	358	〃	3b ～ 4 期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	

第 76 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
3238	358	N8-P19	2 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口唇部横位沈線文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
3239	358	N8-P20	3b 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、曲流条線文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
3240	358	N8-P21	後期	第Ⅱ群第 4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3241	358	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3242	358	N8-P23	1a 期	第Ⅰ群第 6b 類	浅鉢	B	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3243	358	〃	5b ～ 6 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位多条沈線文	—	砂粒、赤色粒子（中）	橙	○	—	
3244	358	〃	5b ～ 6 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	8.4	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	底部網代圧痕文。
3245	358	〃	5b ～ 6 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	10.4	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	底部網代圧痕文。
3246	358	N8-P28	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	注口状突起、胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3247	358	N8-P31	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	灰白	—	○	
3248	358	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2 c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋刻目	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	—	—	
3249	358	〃	6 期	第Ⅱ群第 7 類	注口	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画文＋矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3250	358	N8-P34	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	13.2	—	—	—	底部	—	—	砂粒	灰白	—	—	底部網代圧痕文。
3251	358	〃	5b 期	第Ⅱ群第 6b 類	浅鉢	C	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位多条沈線文、内面横位多条沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
3252	358	N8-P36	4 期	第Ⅱ群第 1c 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3253	358	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3254	358	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線文	—	砂粒	赤褐	—	○	
3255	358	〃	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位多条沈線文、内面横位多条沈線文＋刺突列	—	砂粒	橙	○	○	
3256	359	N8-P37	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部逆Ｖ字状磨消懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3257	359	N8-P41	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	A2	20.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位区画＋刻目、双頭渦巻懸垂文（隆）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	○	○	
3258	359	〃	1 期	第Ⅰ群第 1f 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文＋刻目、有節沈線文	—	砂粒	明赤褐	—	—	
3259	359	N8-P42	5b 期	第Ⅱ群第 2 c 2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位多条沈線文、縦位懸垂文（刺突文）	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
3260	359	N8-P57	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	I2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部二段渦巻文、充填沈線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	3261 と同一個体の可能性。
3261	359	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆沈）、条線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	○	—	3260 と同一個体の可能性。
3262	359	N9-P3	中期	第Ⅰ群第 5 類	深鉢	—	—	8	—	—	—	底部	—	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3263	359	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	19.6	—	—	—	—	口縁部～胴部	Ｘ字状把手、環状突起、口縁部渦巻状隆帯文（未調）、胴部横位沈線区画（平）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
3264	359	N9-P5	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	LR	砂粒	灰白	○	○	
3265	359	N9-P8	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
3266	359	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3267	360	N9-P11	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	○	—	
3268	360	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3269	360	〃	1a 期	第Ⅰ群第 1a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、口縁部横位楕円区画、橋状把手	RL	砂粒	赤褐	○	○	
3270	360	N9-P12	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、刺突列、弧状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
3271	360	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3272	360	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	23.2	—	—	—	—	口縁部	口縁部横線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰白	—	—	
3273	360	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部楕円区画文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3274	360	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3275	360	N9-P13	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
3276	360	N9-P14	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3277	360	N9-P15	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	—	—	
3278	360	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、充填沈線文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3279	360	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	37.2	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状文、楕円区画文、胴部縦位磨消懸垂文、蛇行沈線文	LR	砂粒	橙	○	—	
3280	360	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文（沈）	L	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3281	360	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部隆帯文＋縄文	RL	砂粒	橙	○	—	
3282	360	N9-P19	1a 期	第Ⅰ群第 1a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、胴部懸垂文（沈）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
3283	360	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3284	360	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	—	
3285	360	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、口縁部菱形隆帯文	RL	砂粒	明赤褐	○	—	
3286	360	N9-P20	3b 期	第Ⅰ群第 3a6 - 1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3287	360	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒	橙	○	—	
3288	361	N9-P21	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	

第 77 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
3289	361	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3290	361	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	D2	—	—	—	—	—	口縁部	同心円文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
3291	361	N9-P22	3b 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋瘤状突起、横線文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	○	
3292	361	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	波状沈線文、ワラビ手状文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3293	361	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3294	361	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3295	361	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文	—	砂粒	赤褐	○	○	
3296	361	〃	中期	—	深鉢	—	—	14.4	—	—	—	底部	—	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	内面指頭圧痕文。
3297	361	N9-P24	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刺突文、棒状懸垂文、入組コ字文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3298	361	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3i 類	有溝	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位隆帯区画	—	砂粒	黒褐	—	—	
3299	361	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文、条線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3300	361	〃	3a 期	第Ⅰ群第 5g 類	深鉢	A1	16.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3301	361	N9-P28	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、入組コ字文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3302	361	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3303	361	N9-P30	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文、充填沈線文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3304	361	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3305	361	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
3306	361	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	—	
3307	361	〃	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位多条沈線文、内面横位多条沈線文	—	砂粒	褐	○	○	
3308	361	N9-P31	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文、充填沈線文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3309	361	N9-P32	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文＋刺突文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
3310	361	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3311	361	N9-P34	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画、胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	—	
3312	362	N9-P34	3 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部沈線区画文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	○	
3313	362	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手＋円形刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰白	—	—	
3314	362	N9-P35	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋円形刺突文	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
3315	362	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	—	
3316	362	N9-P36	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3317	362	N9-P37	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文＋刻目	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3318	362	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	波状隆帯区画文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	—	
3319	362	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状文	—	砂粒	橙	○	○	
3320	362	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	○	
3321	362	N9-P55	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、曲流条線文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
3322	362	N9-P56	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
3323	362	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文＋逆Ｕ字状文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
3324	362	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部同心円文、横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3325	362	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	10.8	—	—	—	胴部～底部	—	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	底部網代圧痕文。
3326	362	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	Ｕ字状懸垂文、条線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3327	362	N9-P57	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3328	362	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画（鎖）	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3329	362	N9-P58	3b 期	第Ⅰ群第 3c4 類	釣手	—	—	—	—	—	—	把手部	捻転状隆帯文、刺突列	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
3330	362	N9-P61	不明	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3331	362	N9-P69	5b ～ 6 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部網代圧痕文。
3332	362	N9-P70	3a 期	第Ⅰ群第 3a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
3333	362	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3334	363	N10-P2	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	○	
3335	363	N10-P4	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	G1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位楕円区画文＋刻目	—	砂粒、石英（少）	にぶい黄橙	○	—	
3336	363	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
3337	363	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰白	○	○	
3338	363	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部弧状隆帯文、弧状沈線文、内面蓋受状隆帯文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3339	363	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3340	363	N10-P9	3b 期	第Ⅰ群第 3a8 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	円形区画文＋横ハ字文、瘤状突起	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
3341	363	N10-P17	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文、弧状沈線文	—	砂粒、石英（中）	橙	—	○	
3342	363	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 - 2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部弧状隆帯文、弧状沈線文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	—	

第 78 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
3343	363	〃	5b 期	第Ⅱ群第２ｃ類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	LR	砂粒	灰黄褐	○	○	
3344	363	N10-P18	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 - 2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部弧状隆帯文、弧状沈線文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	—	
3345	363	N10-P21	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	沈線区画	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	—	
3346	363	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3347	363	N10-P22	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 - 1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、U字状沈線文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）、赤色粒子	浅黄橙	○	—	
3348	363	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、沈線区画、横ハ字文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
3349	363	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	棒状懸垂文、沈線区画、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
3350	363	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	波状隆帯区画文、横ハ字文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	—	
3351	363	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3352	363	〃	4 期	第Ⅱ群第８類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	条線文、刺突列	—	砂粒	褐灰	—	○	
3353	363	N10-P24	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位刻目隆帯、充填沈線文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3354	363	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、横線文、縦位短沈線文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3355	363	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3356	363	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3357	363	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文、横ハ字文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3358	363	N10-P26	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画、環状突起	—	石英、雲母	明赤褐	○	—	
3359	363	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、渦巻状沈線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3360	363	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状沈線文＋刺突文刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3361	363	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3362	363	N10-P27	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3363	364	N10-P28	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、棒状懸垂文、沈線区画文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3364	364	N10-P29	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3365	364	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻懸垂文＋刻目、渦巻文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3366	364	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位隆帯区画＋刻目	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3367	364	〃	5b 期	第Ⅱ群第２ｃ類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横位多条沈線文	—	砂粒	褐灰	—	—	
3368	364	N10-P30	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状懸垂文、弧状沈線文＋刺突文	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
3369	364	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A2	13.6	—	—	—	—	口縁部～胴部	橋状把手、口縁部横位隆帯文（鎖）、楕円区画文、変形横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3370	364	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a1 類	深鉢	A	8.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	橋状把手、胴部横位隆帯区画、胴部瘤状突起	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
3371	364	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	変形横ハ字文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
3372	364	〃	5ｂ期	第Ⅱ群第７ｂ類	注口	—	—	—	—	—	—	把手部	三角形文	LR	砂粒、赤色粒子（少）	橙	—	—	
3373	364	N10-P31	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	—	—	
3374	364	N10-P37	4 期	第Ⅱ群第 1a5 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、胴部横位隆帯区画＋刻目	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
3375	364	N10-P39	1 期	第Ⅰ群第１ａ類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	クランク状文（平）、蛇行沈線文（平）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	赤褐	—	—	
3376	364	〃	1 期	第Ⅰ群第１ａ類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部方形区画文	LR	砂粒、雲母、赤色粒子	橙	○	○	
3377	364	N10-P41	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文	LR	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄褐	—	○	
3378	364	N10-P46	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	G1	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	赤褐	○	○	
3379	364	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文（平）	—	橙色粒子	灰黄褐	○	○	
3380	364	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	○	○	
3381	364	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	波状隆帯区画文、横ハ字文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3382	364	N10-P48	5 期	第Ⅱ群第 2a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位多条沈線文	LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
3383	364	N10-P53	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文＋刻目、胴部縦位懸垂文＋刺突文	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3384	364	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状懸垂文、沈線区画文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3385	364	〃	4 期	第Ⅱ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位隆帯区画＋圧痕文	撚 L	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰白	—	—	
3386	364	N10-P54	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位隆帯区画＋圧痕文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰白	—	○	
3387	364	〃	5 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消縄文	L	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3388	364	O8-P30	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	赤褐	○	○	
3389	365	O8-P31	4 期	第Ⅱ群第 1d 類	深鉢	A2	34	—	—	—	—	口縁部～胴部	胴部横位隆帯区画＋圧痕文	撚 R	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	○	○	
3390	365	O8-P32	5b 期	第Ⅱ群第 2b3 類	深鉢	E2	22.8	8.8	22	21.6	5.1	口縁部～底部	胴部三角形区画文（磨消）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3391	365	O8-P38	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	○	
3392	365	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻懸垂文、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3393	365	O9-P3	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
3394	365	O9-P10	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3395	365	〃	4 期	第Ⅱ群第 1d 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	胴部横位隆帯区画＋刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	

第 79 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
3396	365	O9-P7	3a 期	第Ⅰ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	逆U字状文	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3397	365	O9-P12	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2～3㎜）	灰白	—	—	
3398	365	O9-P12	3b ～4 期	第Ⅰ群第 3j 類	甕	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状懸垂文	—	砂粒	灰黄褐	—	—	内外面に赤彩。
3399	365	O9-P12	不明	—	深鉢	—	6	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文	RL	砂粒、雲母（中）		—	—	
3400	365	O9-P12	4b 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄褐	○	○	
3401	366	O9-P13	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状懸垂文、刺突列、条線文	—	砂粒、赤色粒子（少）	にぶい黄橙	○	○	
3402	366	O9-P16	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、有節沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3403	366	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部縦位半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
3404	366	O9-P18	1c ～2a 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	H1	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	赤褐	○	○	
3405	366	〃	1a 期	第Ⅰ群第 1a1 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位楕円区画＋刻目	—	砂粒	橙	—	—	
3406	366	〃	1 期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、弧状沈線文（平）	RL	砂粒	明黄褐	—	—	
3407	366	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻文（平）	RL	砂粒	明黄褐	—	—	
3408	366	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文	—	小礫（2～4㎜）	浅黄橙	○	○	
3409	366	〃	1a 期	第Ⅰ群第 6b 類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	内面に赤彩。
3410	366	O9-P19	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文	LR	小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3411	366	O9-P20	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文、胴部横位区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3412	366	O9-P21	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位隆帯区画＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3413	366	O9-P26	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部弧状隆帯文	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	○	—	
3414	366	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部渦巻状懸垂文（平）	RL	橙色粘土粒（多）	にぶい黄橙	—	—	
3415	366	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3416	366	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起＋コイル状装飾、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
3417	366	O9-P27	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画（鎖）	L	小礫（2～5㎜）	にぶい黄褐	○	—	
3418	366	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、胴部磨消縄文帯	—	小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3419	366	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D2	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部弧状沈線文、口縁部横位沈線文、米字状磨消懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3420	367	O9-P29	2 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、口縁部沈線文（平）、有節沈線文	LR	砂粒	橙	—	—	
3421	367	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文（未調）、眼鏡状突起	RL	砂粒	赤褐	○	○	
3422	367	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	頸部横位沈線区画（平）、波状沈線文（平）	LR	砂粒、小礫（2～4㎜）	明黄褐	—	○	
3423	367	〃	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
3424	367	〃	1c ～2a 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状突起、眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	—	○	
3425	367	O9-P30	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、棒状懸垂文、横ハ字文	L	小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3426	367	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a10 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画（鎖）	LR	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	○	—	
3427	367	O9-P33	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（磨消）	LR	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	—	
3428	367	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	—	
3429	367	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻懸垂文（磨消）	—	砂粒	褐	○	○	
3430	367	〃	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位縄文帯、口唇部刻目文	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
3431	367	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3432	367	O9-P45	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	半隆起線文、刺突列	—	砂粒	灰黄褐	○	—	
3433	367	O9-P40	4 期	第Ⅱ群第 1d 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	浅黄橙	○	—	
3434	367	O10-P3A	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文	—	小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3435	367	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文	L	小礫（2～4㎜）	橙	—	—	
3436	367	O10-P7	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻懸垂文（磨消）	RL	砂粒、赤色粒子（中）	橙	○	○	
3437	367	O10-P9	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3438	367	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	小礫（2～3㎜）	橙	—	○	
3439	367	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文＋刻目	—	小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3440	367	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻懸垂文（隆沈）	—	砂粒、石英（中）	橙	—	—	
3441	367	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	灰黄褐	○	○	
3442	367	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	内面刺突列	—	砂粒、赤色粒子	橙	○	○	
3443	367	O10-P10	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、渦巻状懸垂文＋弧状沈線文	—	小礫（2～4㎜）	黒褐	○	○	
3444	367	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、ハ字状懸垂文	RL	小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3445	368	O10-P10	3b 期	第Ⅰ群第 3a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	波状隆帯区画文＋刻目、横ハ字文	LR	小礫（2～5㎜）	橙	○	—	
3446	368	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、棒状懸垂文、入組コ字文＋刺突列	—	小礫（2～3㎜）	橙	○	—	
3447	368	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	弧状隆帯文	—	小礫（2～5㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3448	368	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位隆帯区画（鎖）	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	

第 80 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							外	内	
3449	368	〃	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
3450	368	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目文、括弧状文	—	砂粒	明黄褐	○	○	
3451	368	O10-P11	不明	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3452	368	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、胴部三角形区画文（磨消）	RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3453	368	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線＋刻目文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3454	368	〃	3b 期	第Ⅰ群第 c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（微隆）	—	砂粒	明黄褐	○	—	
3455	368	O10-P12	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、口縁部隆帯文	RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
3456	368	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位隆帯区画＋刻目、棒状懸垂文、入組コ字文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3457	368	〃	1 期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（交互刺突文）、縦位刺突列	L	橙色粒子	にぶい黄橙	○	○	
3458	368	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文、入組コ字文、変形横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
3459	368	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文、胴部縦位多条沈線文	—	砂粒、雲母	にぶい黄橙	○	○	
3460	368	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	—	
3461	368	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	—	—	
3462	368	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	○	—	
3463	368	O10-P12	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3464	368	O10-P16	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3465	368	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部多条沈線文	L	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3466	368	O10-P19	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒	浅黄橙	—	—	
3467	368	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刺突列	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
3468	368	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	○	—	
3469	368	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	８字状貼付文、胴部横位沈線区画＋円形刺突文、胴部磨消懸垂文	L	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
3470	368	O10-P23	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	双頭渦巻文（隆）、胴部縦位半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3471	368	〃	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	○	
3472	368	O10-P24	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部刻目隆帯	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3473	369	P8-P6	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	C2	33.6	—	—	—	28	口縁部～胴部	口縁部横位沈線文、横位８字状文、胴部横位沈線区画、胴部Ｃ字状文（磨消）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3474	369	〃	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
3475	369	〃	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3476	369	P8-P5	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部二段渦巻状懸垂文、口縁部刻目隆帯	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3477	369	P9-P5	4b 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位隆帯区画＋刻目、胴部刺突文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3478	369	P9-P12	4b 期	第Ⅱ群第 1a3 類	深鉢	B1	16	—	—	—	3.1	口縁部～胴部	胴部横位隆帯区画（鎖）、ハ字状懸垂文、胴部爪形刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	赤褐	○	○	
3479	369	P9-P5	4b 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	—	—	
3480	369	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部中空突起、口縁部充填沈線文	—	砂粒	褐灰	○	—	
3481	369	P9-P12	4b 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
3482	369	P9-P28	1c 期	第Ⅰ群第 1a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文＋有節沈線文	RL	砂粒、赤色粘土粒（多）	にぶい黄橙	—	○	
3483	369	〃	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	—	
3484	369	P9-P9	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	把手部	菱形突起＋環状突起	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	赤褐	○	○	
3485	369	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状懸垂文、口縁部刻目隆帯	—	砂粒	橙	○	○	
3486	369	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	

第 81 表　出土土器観察表

包含層出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
3487	370	遺物集中区	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、横 S 字状文＋有節沈線文	—	砂粒、赤色粒子（中）	橙	○	—	
3488	370	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状文＋有節沈線文、交互刺突文、口唇部渦巻状沈線文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3489	370	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	15.2	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状突起＋有節沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
3490	370	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	把手＋有節沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
3491	370	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、交互刺突文、縦位有節沈線文、胴部横位沈線区画（平）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3492	370	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a3 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、弧状隆帯区画＋弧状沈線文（平）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3493	370	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a3 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、弧状隆帯区画＋弧状沈線文（平）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3494	370	〃	1b 期	第Ⅰ群第 1a3 類	深鉢	H3	14.4	—	—	—	1.25	口縁部～胴部	対弧状沈線文（単）、胴部横位沈線区画（単）	LR	砂粒	明赤褐	○	○	3501 と同一個体。
3495	370	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a3 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部菱形文（平）、口唇部玉抱三叉文	RL	砂粒、橙色粒子（少）	にぶい黄橙	○	○	
3496	370	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H	33.6	—	—	—	—	口縁部	口縁部波状沈線文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3497	370	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H	22.8	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（単）、口縁部波状沈線文（単）	RL	砂粒、橙色粘土粒（少）	にぶい黄橙	—	—	
3498	370	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部渦巻状突起、口縁部波状沈線文（有節）、胴部横位沈線区画（有節）	撚 R	砂粒	浅黄橙	○	○	
3499	370	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、C 字状把手、口縁部波状隆帯文	撚 L	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3500	370	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、口縁部波状沈線文（平）	撚 R	砂粒	橙	○	○	
3501	370	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部クランク文（平）	LR	砂粒	橙	—	○	3494 と同一個体。
3502	370	〃	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部クランク文（平）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
3503	371	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（平）	撚 L	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	○	—	
3504	371	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、胴部蛇行懸垂文（平）	撚 L	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	○	—	
3505	371	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、波状沈線文（平）	撚 L	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	○	
3506	371	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、基隆帯	—	砂粒、赤色粒子（少）	橙	—	○	
3507	371	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
3508	371	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空把手、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3509	371	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文、三叉文	—	砂粒、赤色粒子（少）	橙	○	○	
3510	371	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3511	371	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	変形眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	白色粘土粒（中）	橙	○	○	
3512	371	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	突起、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
3513	371	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	赤褐	—	○	
3514	371	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、白色粘土粒（多）	橙	○	○	
3515	371	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	C 字状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
3516	371	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、橙色粘土粒（多）	にぶい黄橙	—	—	
3517	371	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文、三叉文	—	砂粒、赤色粒子（少）	赤褐	—	○	
3518	371	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
3519	371	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	
3520	371	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
3521	372	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、基隆帯、半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	灰白	○	○	
3522	372	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	9.2	—	—	—	—	口縁部	基隆帯＋刻目	—	砂粒	明黄褐	○	—	
3523	372	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文＋刻目	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
3524	372	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3525	372	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	10.4	—	—	—	胴部～底部	渦巻状懸垂文＋爪形文、縦位半隆起線文＋爪形文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	明赤褐	—	○	
3526	372	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b3 類	深鉢	H7	33.6	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、弧状沈線文（平）、胴部横位隆帯区画	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3527	372	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	32.8	—	—	—	—	胴部	楕円区画文＋刺突文、半隆起線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3528	372	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	環状突起、楕円区画文＋刺突文、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	—	○	
3529	372	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	半隆起線文、突起	—	砂粒	明黄褐	—	—	
3530	372	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	橋状把手＋M字状隆帯文＋刻目	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	○	—	
3531	372	遺物集中区	1 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、基隆帯	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
3532	372	〃	1 期	第Ⅰ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	—	
3533	372	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状突起、袋状突起、楕形文、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	
3534	372	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状突起、楕形文、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
3535	372	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	把手	鶏頭冠状把手	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
3536	372	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	把手	鶏頭冠状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	

第 82 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
3537	373	〃	2a 期	第Ⅰ群第 1d1-3 類	深鉢	H5	33	15.2	37.4	27.5	11.7	口縁部～胴部	鶏頭冠状把手、鋸歯状突起、眼鏡状突起、袋状突起、櫛形文、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3538	374	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1d1-2 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	鶏頭冠状把手、鋸歯状突起、眼鏡状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3539	374	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	把手	鶏頭冠状把手	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
3540	374	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、櫛形文、鋸歯状突起（欠）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3541	374	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状突起、眼鏡状突起、袋状突起、弧状隆帯文、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
3542	374	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、袋状突起、橋状把手、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	—	
3543	374	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1d2-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
3544	374	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、赤色粒子（中）	橙	—	—	
3545	374	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、赤色粒子（少）	にぶい黄橙	○	○	
3546	374	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、赤色粒子（少）	明赤褐	○	—	
3547	374	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、胴部縦位懸垂文（隆）、胴部横位区画、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
3548	375	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横 S 字状文、基隆帯、縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
3549	375	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起＋環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	褐	○	○	
3550	375	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、縦位半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	橙	—	○	
3551	375	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	J 字状懸垂文、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
3552	375	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、基隆帯、縦位半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	
3553	375	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	J 字状懸垂文（隆）、基隆帯、縦位半隆起線文、交互刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3554	375	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯＋刻目、縦位半隆起線文	—	砂粒	橙	—	—	
3555	375	〃	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 1d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯＋刻目、縦位半隆起線文、J 字状懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3556	375	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	17.2	—	—	—	2.7	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画＋剣先状隆帯文（横 S 字状隆帯文）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3557	375	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	褐	○	○	
3558	375	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	13	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画＋剣先状隆帯文	LR	砂粒	橙	○	—	
3559	375	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	24.8	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋波状隆帯文、胴部横位沈線区画（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3560	375	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	13.6	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋渦巻状隆帯文（未調）、胴部横位沈線区画（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3561	376	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	18	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋渦巻状隆帯文、胴部横位隆帯区画＋刺突列、波状沈線文（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3562	376	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋剣先状隆帯文（未調）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
3563	376	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、口縁部横位隆帯区画＋渦巻状隆帯文	RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
3564	376	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋渦巻状隆帯文（未調）	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
3565	376	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋渦巻状隆帯文	LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
3566	376	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋渦巻状隆帯文（未調）	RL	砂粒	橙	○	○	
3567	376	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋剣先状隆帯文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3568	376	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋剣先状隆帯文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3569	376	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画、胴部横位沈線区画（単）、波状沈線文（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3570	376	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画、胴部横位沈線区画（単）、胴部縦位懸垂文（単）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3571	376	〃	2a 期	第Ⅰ群第 2a1 類	深鉢	I1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画、胴部横位沈線区画文（単）、胴部縦位懸垂文（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3572	376	〃	2a ～ 2b 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	I1	18.2	7.2	23.2	23.2	2.8	口縁部～底部	口縁部横位隆帯区画＋剣先状隆帯文、充填沈線文、胴部横位沈線区画文、縦位懸垂文（単）	RL	砂粒	橙	○	○	3575 と同一個体。
3573	377	〃	2a ～ 2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I	16.4	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋剣先状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	橙	○	○	3574 と同一個体。
3574	377	〃	2a ～ 2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋剣先状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	—	
3575	377	〃	2a ～ 2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、矢羽根状充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3576	377	〃	2a ～ 2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、二段渦巻文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3577	377	〃	2a ～ 2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋隆帯文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3578	377	〃	2a ～ 2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋隆帯文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
3579	377	〃	2a ～ 2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋隆帯文、充填沈線文	—	砂粒、赤色粒子（中）	橙	—	○	
3580	377	〃	2a ～ 2b 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	I1	23.2	—	—	—	—	口縁部	箱形中空把手、口縁部横位隆帯区画＋隆帯文、縄文＋充填沈線文、胴部横位沈線区画（平）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3581	377	〃	2a ～ 2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空把手	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	—	—	
3582	377	〃	2a ～ 2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空把手	—	砂粒	橙	○	○	

第 83 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
3583	377	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3584	377	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	36.8	—	—	—	—	口縁部	口縁部剝先状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3585	377	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a3類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画、口縁部橋状把手、胴部横位沈線区画（平）、胴部懸垂文（平）	RL	砂粒、橙色粘土粒	にぶい黄橙	○	—	
3586	378	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a3類	深鉢	C2	29.6	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画、箱形中空把手、胴部懸垂文（平）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3587	378	〃	2a期	第Ⅰ群第2a4類	深鉢	C2	20.4	—	—	—	2.5	口縁部	口唇部渦巻状沈線文	RL	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	○	○	
3588	378	〃	2a期	第Ⅰ群第2a4類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文	RL	砂粒、小礫（2～5㎜）	橙	—	—	
3589	378	〃	2b期	第Ⅰ群第2a4類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部渦巻状沈線文、胴部横位沈線区画（平）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	○	—	
3590	378	〃	2b期	第Ⅰ群第2a4類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部渦巻状沈線文、胴部横位沈線区画（平）	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3591	378	〃	2b期	第Ⅰ群第2b2類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状懸垂文（隆）、胴部横位隆帯区画	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	—	
3592	378	〃	2a期	第Ⅰ群第2a4類	深鉢	C2	12.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	口唇部渦巻沈線文、胴部横位沈線区画（平）、胴部懸垂文（平）、蛇行沈線文（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3593	378	〃	2a期	第Ⅰ群第2a4類	深鉢	E	19.6	—	—	—	3	口縁部～胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部渦巻状懸垂文（平）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3594	379	〃	2a期	第Ⅰ群第2a3類	深鉢	I2	25.6	13	52	52	22	口縁部～底部	口縁部横Ｓ字状中空把手、胴部縦位懸垂文（平）、胴部渦巻状懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3595	379	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a3類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部橋状把手、環状突起、胴部縦位懸垂文（平）	LR	砂粒、橙色粒子（中）	にぶい黄橙	○	—	
3596	379	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a3類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横Ｓ字状中空把手	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3597	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a3類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画（単）、胴部横位沈線区画文（単）、胴部縦位懸垂文（単）	RL	砂粒、橙色粘土粒	にぶい黄橙	○	—	
3598	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a4類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部渦巻沈線文、胴部横位沈線区画（平）、胴部弧状懸垂文（平）	—	砂粒	橙	—	○	
3599	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）、胴部横位沈線区画（単）	RL	砂粒	橙	—	—	
3600	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）、胴部横位沈線区画（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3601	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部横位沈線区画（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3602	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）、胴部波状沈線文（単）	RL	砂粒	明黄褐	○	—	
3603	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）、胴部縦位懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3604	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）＋波状沈線文（単）	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	—	○	
3605	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	13.2	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（平）、胴部弧状懸垂文（平）、胴部蛇行沈線文（沈）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	○	底部網代圧痕文。
3606	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	5.3	—	—	—	胴部～底部	胴部縦位懸垂文（単）、胴部蛇行沈線文（沈）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	—	○	
3607	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	8.4	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（単）、ワラビ手状懸垂文、逆Ｕ字状懸垂文（単）	RL	砂粒	浅黄橙	○	○	
3608	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	12.8	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（単）、蛇行沈線文（単）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	○	
3609	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	14	—	—	—	胴部～底部	胴部縦位懸垂文（単）、胴部弧状懸垂文（単）	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	—	○	底部網代圧痕文。
3610	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）、胴部縦位懸垂文（単）、蛇行沈線文	RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
3611	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部剝先状懸垂文（単）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
3612	380	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（単）、蛇行沈線文（単）	LR	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3613	381	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（単）、胴部大渦巻状懸垂文（単）	LR	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3614	381	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（単）、蛇行沈線文（単）	RL	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3615	381	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、蛇行沈線文（平）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	明黄褐	○	—	
3616	381	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	12.8	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（平）、蛇行沈線文（平）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	—	
3617	381	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、胴部渦巻状懸垂文（平）	—	砂粒	明赤褐	—	○	
3618	381	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（平）	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3619	381	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）、胴部弧状懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3620	381	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、胴部楕円区画文（平）	LR	砂粒、小礫（2～4㎜）	浅黄橙	○	—	
3621	381	〃	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、蛇行沈線文（平）	LR	砂粒	橙	○	○	
3622	381	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、胴部腕骨文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2～5㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3623	381	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄褐	○	○	3628と接合。
3624	381	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、胴部懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2～5㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3625	381	〃	1期	第Ⅰ群第1b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	—	
3626	381	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、胴部腕骨文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3627	381	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、胴部懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄褐	○	—	3624と接合。
3628	381	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、胴部腕骨文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	浅黄橙	—	○	
3629	381	〃	2b期	第Ⅰ群第2b類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部剝先状懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	

第84表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
3630	381	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3631	381	〃	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文（半竹）	—	砂粒	橙	—	○	
3632	382	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c2 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部縦位半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3633	382	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部弧状懸垂文（隆）、胴部縦位半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
3634	382	〃	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文（半竹）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3635	382	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯文、充填沈線文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3636	382	〃	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文、横位楕円区画文＋管状刺突文、縦位短沈線文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	○	○	
3637	382	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状懸垂文、入組コ字文	LR	小礫、赤色粒子（多）	にぶい黄橙	—	○	
3638	382	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、棒状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
3639	382	〃	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、刺突列、逆Ｕ字状磨消懸垂文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3640	382	〃	1 期	第Ⅰ群第 5b 類	深鉢	H	28.4	—	—	—	—	口縁部	—	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	補修孔。
3641	382	〃	1 期	第Ⅰ群第 5c 類	深鉢	I1	27	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3642	382	〃	1 期	第Ⅰ群第 5c 類	深鉢	I1	31.6	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画	RL	砂粒	橙	○	○	
3643	382	〃	1a 期	第Ⅰ群第 6b 類	浅鉢	B	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	LR	砂粒、雲母（中）	橙	○	—	
3644	382	〃	1 期	第Ⅰ群第 6d 類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒	赤褐	—	—	
3645	382	〃	1c 期～ 2a 期	第Ⅰ群第 6d 類	浅鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒、	赤褐	—	—	
3646	382	〃	1a 期	第Ⅰ群第 6d 類	浅鉢	E2	41.6	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	—	砂粒	赤褐	—	—	
3647	382	〃	1c 期～ 2a 期	第Ⅰ群第 6d 類	浅鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	赤褐	—	—	
3648	383	E10	1a 期	第Ⅰ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文	LR	砂粒	赤褐	—	—	
3649	383	D4-19G	1a 期	第Ⅰ群第 1a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文	RL	砂粒、赤色粒子（中）	明赤褐	—	○	
3650	383	E10-9G	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、環状突起	—	砂粒	橙	○	○	
3651	383	E10-18G	1 期	第Ⅰ群第 1a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、口縁部横位隆帯区画＋有節沈線文＋縄文側面圧痕（L）、交互刺突文	L	砂粒	赤褐	○	○	
3652	383	E10	1 期	第Ⅰ群第 1a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、口縁部横位隆帯区画＋有節沈線文＋縄文側面圧痕（L）、交互刺突文	L	砂粒	橙	○	○	
3653	383	E10-18G	1 期	第Ⅰ群第 1a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋有節沈線文、縦位有節沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
3654	383	E11-3G	1 期	第Ⅰ群第 1a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位楕円区画文＋縦位有節沈線文、交互刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3655	383	E11-23G	1 期	第Ⅰ群第 1a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位楕円区画文＋有節沈線文＋横位沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明赤褐	○	○	
3656	383	E11-3G	1 期	第Ⅰ群第 1a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋有節沈線文、縦位有節沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3657	383	—	1 期	第Ⅰ群第 1a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋縦位有節沈線文、平行沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
3658	383	H6-6G	1 期	第Ⅰ群第 1a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位楕円区画文＋縦位有節沈線文	RL	砂粒	赤褐	○	○	
3659	383	D4-24G	1 期	第Ⅰ群第 1a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、口縁部横位楕円区画文＋有節沈線文＋縦位短沈線文（平）、交互刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3660	383	—	1 期	第Ⅰ群第 1a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋縦位短沈線文	LR	砂粒	橙	○	○	
3661	383	F6	1 期	第Ⅰ群第 1a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部			砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3662	383	H6	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状突起、交互刺突文、有節沈線文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3663	383	E11-12G	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、交互刺突文、有節沈線文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
3664	383	E10-1G	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（有節）、交互刺突文、波状沈線文（有節）	撚 R	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3665	383	E10-9G	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋有節沈線文、交互刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 6 ㎜）	赤褐	○	—	
3666	383	E10-23G	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状突起＋有節沈線文	—	砂粒	明赤褐	○	—	
3667	383	E11-12G	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、隆帯＋爪形文	—	砂粒	橙	—	—	
3668	383	E11-7G	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状突起＋有節沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3669	383	表採	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	連接環状中空把手＋有節沈線文、口縁部波状沈線文（平）＋有節沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
3670	384	E10-18G	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文（有節）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
3671	384	E11-23G	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋交互刺突文＋有節沈線文、平行沈線文	撚 L	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3672	384	E9-13G	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋有節沈線文、口縁部波状沈線文（平）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	○	
3673	384	E10-11G	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H7	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（単）＋波状沈線文（単）	撚 L	砂粒	浅黄橙	○	○	
3674	384	E12-8G	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H7	—	—	—	—	—	胴部	口縁部波状沈線文（単）＋有節沈線文、胴部横位沈線区画（単）、胴部渦巻状懸垂文（単）	LR	砂粒	橙	○	○	
3675	384	E11-6G+7G	1 期	第Ⅰ群第 1a3 類	深鉢	—	13.6	8	14.6	14.6	0.8	口縁部～底部	口縁部弧状沈線文（単）、胴部横位沈線区画（単）	LR	白色粘土粒（中）	にぶい黄橙	○	○	
3676	384	E10-11G+12G	1 期	第Ⅰ群第 1a3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、口縁部縦位懸垂文（平）、胴部横位沈線区画（平）	RL	砂粒、赤色粘土粒（中）	にぶい黄橙	○	○	
3677	384	E12-8G	1 期	第Ⅰ群第 1a3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（単）＋鋸歯状沈線文（単）	LR	砂粒	明赤褐	—	—	
3678	384	I3-16G	1 期	第Ⅰ群第 1a3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）＋隆帯、弧状隆帯文＋平行沈線文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	

第 85 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
3679	384	E9-17G	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（隆）	撚 L	砂粒、赤色粘土粒（多）	橙	○	—	
3680	384	E11-9G- Ⅰ	1c 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H6	36.8	—	—	—	28.7	口縁部～胴部	胴部横位沈線区画、横Ｓ字状沈線文（平）、胴部クランク状文（平）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3681	384	H3-20G	1 期	第Ⅰ群第 1a3 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、弧状隆帯文＋平行沈線文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3682	384	E11-6G	1 期	第Ⅰ群第 1a3 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）＋交互刺突文、弧状沈線文（平）	LR	砂粒、赤色粘土粒（中）	橙	○	○	
3683	385	E12-2G+17G	1 期	第Ⅰ群第 1a3 類	深鉢	G1	19.2	—	—	—	2.1	口縁部～胴部	口縁部横位沈線区画文、同心円文、胴部横位沈線区画、胴部クランク状文	RL	橙色粘土粒（中）	にぶい黄橙	○	—	
3684	385	E10-13G	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、波状沈線文（平）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3685	385	D11	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H6	29.2	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位沈線区画＋交互刺突文＋有節沈線文、Ｓ字状突起	LR	小礫、赤色粘土粒（多）	明黄橙	○	—	
3686	385	H3	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位沈線区画（平）、波状沈線文（平）	撚 R	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3687	385	H3-20G+23G	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位沈線区画（平）、波状沈線文（平）	撚 r	砂粒、赤色粒子（少）	橙	—	○	
3688	385	E4-15G	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	7.2	—	—	—	胴部～底部	口縁部横位隆帯区画	RL	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	—	
3689	385	E4-15G	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画＋交互刺突文、横位隆帯区画＋爪形文	—	砂粒	橙	—	—	
3690	385	H3	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部クランク文（単）	LR	砂粒	橙	—	○	
3691	385	I3	1 期	第Ⅰ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、胴部クランク文（平・単）	RL	砂粒、赤色粘土粒（中）	橙	—	○	
3692	385	E11	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部クランク文（平）	撚 L	砂粒	にぶい黄橙	○	○	3694 と同一個体。
3693	385	E11	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	9.6	—	—	—	底部	胴部クランク文（隆）	撚 L	砂粒、赤色粒子（少）	橙	—	○	3693 と同一個体。
3694	385	E10	1 期	第Ⅰ群第 1a5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、胴部Ｕ字状・逆Ｕ字状懸垂文（平）	撚 R	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	明赤褐	○	—	
3695	386	E11	1 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	H	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文、三叉文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3696	386	E10-2G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、橋状把手＋刻目、口縁部横位楕円区画文	—	砂粒、橙色粒子（少）	にぶい黄橙	○	○	
3697	386	C11-1G+2G	1 期	第Ⅰ群第 2b1 類	深鉢	H3	20	—	—	—	—	口縁部～胴部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3698	386	F4-14G+4J-P1	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3699	386	E10-4G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、橋状把手（欠）、口縁部横位隆帯区画＋刻目、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	橙	○	○	
3700	386	H2-5G+I2	1 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	—	
3701	386	E11-12G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	橙	○	○	
3702	386	D10-24G+D11-4G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部三角形区画文、眼鏡状突起、環状貼付文	—	砂粒、小礫（少）	橙	—	—	
3703	386	E9-2G	1 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	G1	18.8	9.6	22	21.2	2	口縁部～底部	交互刺突文、基隆帯・半隆起線文による渦巻懸垂文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3704	386	E10-4G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、橋状把手（欠）、半隆起線文	—	砂粒	橙	○	○	
3705	386	E9-2G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	明黄褐	○	—	
3706	386	E10-2G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、コイル状突起	—	橙色粘土粒（少）	にぶい黄橙	—	—	
3707	387	E9-2G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、雲母（中）	明赤褐	○	○	
3708	387	H3	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	白色粘土粒（多）	橙	○	—	
3709	387	—	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起＋剣先状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
3710	387	G4-5G	1 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	注口状中空突起、弧状隆帯文＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3711	387	E10-13G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、赤色粒子（少）	橙	—	—	
3712	387	M12	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	明赤褐	—	○	
3713	387	E9-23G	1 期	第Ⅰ群第 2b4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、口縁部横位隆帯区画＋縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	○	
3714	387	N9	1 期	第Ⅰ群第 2d2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	橙	—	○	
3715	387	E10-19G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文、楕円区画文＋刺突文	—	砂粒、赤色粒子（少）	にぶい黄橙	○	○	
3716	387	H3	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文、三叉文	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	明赤褐	—	—	
3717	387	G7	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、三叉文	—	小礫、橙色粘土粒（少）	橙	—	○	
3718	387	N9-7G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、三叉文	—	砂粒	橙	—	○	
3719	387	E10-17G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、橋状把手、半隆起線文	—	小礫、橙色粘土粒（少）	にぶい黄橙	○	—	補修孔。
3720	387	E11-13G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯、半隆起線文	—	橙色粘土粒（多）	にぶい黄橙	—	○	
3721	387	32J	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文、三叉文	—	砂粒、白色粘土粒（中）	明赤褐	—	○	
3722	387	H2-6G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部～底部	基隆帯・半隆起線文、ワラビ手状懸垂文、円形文、三叉文	—	砂粒	橙	○	—	
3723	387	O10	1c 期	第Ⅰ群第 2d3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、半隆起線文＋刻目	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明赤褐	○	○	
3724	388	E10-1G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、基隆帯＋爪形文、突起頂部に爪形文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
3725	388	F4-25G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文、三叉文	—	砂隆	にぶい黄橙	○	—	
3726	388	H3-15G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、弧状隆帯文＋弧状沈線文（平）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
3727	388	—	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	交互刺突文、基隆帯、半隆起線文、	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3728	388	E9-4G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯＋刻目、有節沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3729	388	F3	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	

第 86 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
3730	388	H4-12G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	横位隆帯区画＋有節沈線文、弧状隆帯文＋弧状有節沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
3731	388	N9-17G	1 期	第Ⅰ群第 2d3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	横位半隆起線文、交互刺突文	—	橙色粘土粒（中）	灰黄褐	—	—	
3732	388	H4-17G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	横位半隆起線文、交互刺突文、有節沈線文	—	砂粒、赤色粒子（少）	橙	—	—	
3733	388	G6-5G	1 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、胴部横位隆帯区画	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明赤褐	○	○	
3734	388	—	1 期	第Ⅰ群第 2b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	橙	—	○	
3735	388	E10-17G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明赤褐	—	○	
3736	388	E9-12G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文、玉抱三叉文、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3737	388	E10-24G	1 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、三叉文、胴部横位隆帯区画	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3738	388	M12	1 期	第Ⅰ群第 2b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	環状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、赤色粒子（少）	明赤褐	—	○	
3739	388	H3-18G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	突起＋有節沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）		—	○	
3740	388	H3	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	円形文、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	橙	—	○	
3741	388	E9-13G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3742	388	H2	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、楕円区画文＋刺突文、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	赤褐	—	○	
3743	388	D5-5G	1 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、横位半隆起線文＋爪形文、縦位沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
3744	388	E11-17G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
3745	388	E11	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3746	388	H3	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3747	388	E11	1 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、胴部横位隆帯区画、縦位半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
3748	389	E10-12G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	赤褐	○	○	
3749	389	N10-10G	1 期	第Ⅰ群第 2d 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、胴部横位隆帯区画	—	砂粒	浅黄橙	—	○	
3750	389	E10-12G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、胴部横位隆帯区画	—	砂粒	明赤褐	○	○	
3751	389	H3-20G	1 期	第Ⅰ群第 2e 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状隆帯＋有節沈線文、半円状刺突文	—	砂粒	灰白	—	—	
3752	389	29J	1 期	第Ⅰ群第 2e 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（半隆）、縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3753	389	E11-12G	1 期	第Ⅰ群第 2e 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文、三叉文	撚 L	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	—	
3754	389	E10-9G	1 期	第Ⅰ群第 2e 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯＋爪形文、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	明赤褐	○	○	
3755	389	O8	1 期	第Ⅰ群第 2e 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	○	
3756	389	E10-17G	1 期	第Ⅰ群第 2b3 類	深鉢	H3	12	—	—	—	—	口縁部～胴部	半隆起線文による渦巻文、有節沈線文、胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	撚 L	砂粒	灰白	—	—	
3757	389	E11	1c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	H3	34.4	—	—	—	—	口縁部～胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、楕円区画文、胴部横位隆帯区画、縦位半隆起線文	—	小礫、橙色粘土粒（中）	にぶい黄橙	○	—	
3758	389	E11-5G	1c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横 S 字状文（基隆帯＋半隆起線文）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	○	
3759	389	E11-23G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、口縁部渦巻状懸垂文	RLR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3760	389	E11-5G	1c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横 S 字状文（基隆帯＋半隆起線文）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	○	
3761	390	〃	1c 期	第Ⅰ群第 1c 類	深鉢	H3	32	—	—	—	19	口縁部～胴部	三段環状把手、鼈状突起？、基隆帯・半隆起線文による渦巻状懸垂文、三叉文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3762	390	E11-8G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	16.4	—	—	—	胴部～底部	胴部横位沈線区画文、橋状把手	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3763	391	H4-13G	1 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	コイル状突起、半隆隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	—	
3764	391	E10-17G	1 期～2a 期	第Ⅰ群第 2d1 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状突起、変形眼鏡状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3765	391	E10-7G	1c 期	第Ⅰ群第 2d1-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	鶏頭冠状突起＋刻目	—	小礫、赤色粘土粒（中）	にぶい黄橙	—	—	
3766	391	H3-112	1c 期	第Ⅰ群第 2d1-2 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状突起、袋状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文＋刻目	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3767	391	O9-11G	1c 期	第Ⅰ群第 2d1-2 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	鋸歯状突起、眼鏡状突起、基隆帯＋刻目	—	砂粒	橙	○	○	
3768	391	29J	1c 期	第Ⅰ群第 2d1-2 類	深鉢	H3	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文＋刻目	—	砂粒	橙	—	—	
3769	391	P9-7-2H	1 期～ 2a 期	第Ⅰ群第 2d1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	鶏頭冠状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3770	391	E11-1G	1 期～ 2a 期	第Ⅰ群第 2d2-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3771	391	M12-21G	1c 期	第Ⅰ群第 2d2-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3772	391	E10-18G	1c 期	第Ⅰ群第 2d2-2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3773	392	E10-16G	1 期～ 2a 期	第Ⅰ群第 2d2 類	深鉢	H2	24	12.8	—	26.4	6	口縁部～底部	眼鏡状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3774	392	F6-15G+20G	1 期～ 2a 期	第Ⅰ群第 2d2 類	深鉢	H2	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、基隆帯・半隆起線文による渦巻文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3775	392	L7-10G	1 期～ 2a 期	第Ⅰ群第 2d2 類	深鉢	H2	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、胴部横位隆帯区画、胴部縦位懸垂文（隆）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	赤褐	○	—	
3776	392	E9-11G	1 期～ 2a 期	第Ⅰ群第 2d2 類	深鉢	H2	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、袋状突起、胴部横位隆帯区画、胴部横 S 字状文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	

第 87 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	スス・コゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
3777	392	E10	1期～2a期	第Ⅰ群第2d2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	—	—	
3778	392	E12	1期～2a期	第Ⅰ群第2d2類	深鉢	H2	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、袋状突起、基隆帯・半隆起線文によるＪ字状懸垂文、胴部横位隆帯区画	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
3779	392	—	1c期	第Ⅰ群第2d2-2類	深鉢	H2	21.6	12.8	27.6	20	3.4	ほぼ完形	環状突起、基隆帯＋刻目、半隆起線文、胴部縦位懸垂文＋交互刺突文、胴部横Ｓ字状文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3780	393	H6-6G	1期～2a期	第Ⅰ群第2d2類	深鉢	H2	—	—	—	—	—	口縁部	基隆帯、半隆起線文、横Ｓ字状文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄褐	○	—	
3781	393	E11-7G	1期～2a期	第Ⅰ群第2d2類	深鉢	H2	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、眼鏡状突起、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	○	
3782	393	E5-15G	1期～2a期	第Ⅰ群第2d2類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	袋状突起、胴部横位隆帯区画、基隆帯、半隆起線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
3783	393	—	1期～2a期	第Ⅰ群第2d3類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	横位半隆起線文＋交互刺突文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
3784	393	E10-18G	1c期	第Ⅰ群第2d3-2類	深鉢	H2	—	—	—	—	—	口縁部	袋状突起、眼鏡状突起、口縁部横位半隆起線文、胴部横位隆帯区画、胴部縦位懸垂文＋刻目	—	砂粒	橙	○	○	
3785	393	E9-14G	1期～2a期	第Ⅰ群第2d類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻懸垂文、胴部横位隆帯区画、胴部縦位懸垂文	—	砂粒、小礫（2㎜）	明赤褐	○	○	
3786	393	E11-23G	1期～2a期	第Ⅰ群第2d類	深鉢	I	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、縦位半隆起線文	—	砂粒	橙	○	—	
3787	393	O10-13G	1期～2a期	第Ⅰ群第2d類	深鉢	I	—	—	—	—	—	底部	基隆帯・半隆起線文による渦巻文、胴部縦位懸垂文（隆）、縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	○	○	底部網代圧痕文。
3788	393	H3	1期～2a期	第Ⅰ群第2d類	深鉢	I	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画、懸垂文、縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
3789	393	H3	1期～2a期	第Ⅰ群第2d類	深鉢	I	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、縦位半隆起線文＋交互刺突文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	—	○	
3790	393	E11-8G	1期～2a期	第Ⅰ群第2d類	深鉢	I	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画、胴部縦位懸垂文（沈）、渦巻状文（単）	—	砂粒、橙色粒子（中）	橙	—	○	
3791	393	E11-16G	1期～2a期	第Ⅰ群第2d類	深鉢	I	—	—	—	—	—	胴部	胴部逆Ｕ字状懸垂文、縦位半隆起線文	—	砂粒	橙	○	—	
3792	393	E11-13G	1期～2a期	第Ⅰ群第2d類	深鉢	I	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3793	393	E11-7G	1期～2a期	第Ⅰ群第2d類	深鉢	I	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	○	○	
3794	393	—	1期～2a期	第Ⅰ群第2d類	深鉢	I	—	—	—	—	—	胴部	基隆帯、縦位半隆起線文	—	砂粒	橙	—	○	
3795	393	E11-7G	1期～2a期	第Ⅰ群第2d類	深鉢	I	—	15.2	—	—	—	胴部～底部	基隆帯、縦位半隆起線文	—	小礫、橙色粘土粒（中）	浅黄橙	—	—	底部網代圧痕文。
3796	394	E10-22G	2a期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、横位隆帯文	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3797	394	E10-7G+22G	2a期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画（未調）、剣先状隆帯文（未調）	RL	小礫、橙色粘土粒（中）	灰白	○	—	
3798	394	F3	2a期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、横位隆帯文（未調）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3799	394	D11-19G	2a期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状隆帯文	RL	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	○	—	
3800	394	H4-13G	2a期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状隆帯文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3801	394	E9-11G	2a期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、隆帯文（未調）	LR	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
3802	394	E9-9G	2a期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、剣先状隆帯文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3803	394	D10-25G	2a期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画（未調）、剣先状隆帯文（未調）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	—	—	
3804	394	H3	2a期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、横位隆帯文	RL	砂粒		—	—	
3805	394	—	2a期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、横位隆帯文、未調整隆帯	RL	砂粒、小礫（2㎜）	明赤褐	○	○	
3806	394	D10-20G	2a期	第Ⅰ群第2a1類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画（欠）、渦巻状隆帯文（欠）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3807	394	L13	2a～2b期	第Ⅰ群第2a類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状隆帯文	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3808	394	E10-9G	2a～2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状突起＋剣先状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3809	394	H4	2a～2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状突起、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	にぶい黄褐	○	—	
3810	394	H3	2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状突起、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3811	394	J9	2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3812	394	E10-4G	2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3813	394	E11-1G	2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
3814	394	H6	2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状隆帯文、充填沈線文、口唇部渦巻状沈線文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	—	—	
3815	395	E10-9G	2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	中空突起、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3816	395	N9-17G	2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状突起、口縁部横位隆帯区画、Ｘ字状把手、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	灰白	—	—	
3817	395	F3-8G	2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、横位渦巻隆帯文、充填沈線文	—	砂粒、赤色粒子（中）	にぶい黄褐	○	—	
3818	395	H6	2c期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	二段渦巻状懸垂文、刺突列、胴部縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	—	—	
3819	395	E9-9G	2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、Ｘ字状把手、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3820	395	E10-9G	2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、剣先状隆帯文、渦巻状懸垂文、充填沈線文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
3821	395	P9	2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	Ｘ字状中空把手、口縁部横位隆帯区画、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3822	395	H6-6G	2期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、隆帯文、胴部横位沈線区画文（平）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3823	395	E10-16G	2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3824	395	G7	2b期	第Ⅰ群第2a2類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状隆帯文	LR	砂粒	橙	○	○	

第88表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
3825	395	E10-2G	2b 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	Ⅰ	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	○	—	
3826	395	表採	2b 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	双環状中空把手＋横Ｓ字状隆帯文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
3827	395	E11-23G	2b 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	Ⅰ	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	○	
3828	395	G7	2b 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	Ⅰ	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	○	—	
3829	395	H3	2b 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	Ⅰ	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
3830	395	D10-9G	2b 期	第Ⅰ群第 2a2 類	深鉢	Ⅰ	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3831	395	H4	2 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	10	—	—	—	胴部～底部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）、蛇行沈線文	RL	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
3832	396	H4-17G	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、横位隆帯文	RL	砂粒	浅黄橙	—	○	
3833	396	N10-4G	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部円孔文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3834	396	E10-9G	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文	RL	砂粒、小礫（2㎜）	明黄褐	—	—	補修孔。
3835	396	H3	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部環状貼付文、口唇部横位沈線文	LR	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	○	
3836	396	E9-2G+7G	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C2	12.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3837	396	E11-14G	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
3838	396	—	2a 期	第Ⅰ群第 2a4 類	深鉢	C2	14	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画、胴部渦巻状懸垂文（平）	RL	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3839	396	H5-22G	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）	RL	砂粒	橙	○	○	
3840	396	H4-14G	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3841	396	H4	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）、胴部渦巻状懸垂文（単）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
3842	396	H3	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単・平）、波状沈線文（単）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	○	—	
3843	396	H3-20G	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、渦巻状沈線文（平）	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	—	—	
3844	396	H3-20G	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）、波状沈線文（単）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3845	396	H3-16G	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、渦巻状沈線文（平）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	○	
3846	396	E10-13G	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（単）	LR	砂粒、小礫（2㎜）	明黄褐	○	○	
3847	396	H4	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（単）、胴部縦位懸垂文（単）、渦巻状沈線文（単）	RL	砂粒	明褐	○	○	
3848	396	H4	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒、雲母（少）	橙	○	○	
3849	396	H2-11G	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部弧状懸垂文（平）	LR	砂粒、雲母（少）	明赤褐	—	○	
3850	396	O9-21g	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画、胴部渦巻状懸垂文（平・単）	RL	砂粒	浅黄橙	○	—	
3851	396	E10-17G	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）、胴部対弧状懸垂文（平）	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3852	396	—	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平・単）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	橙	—	○	
3853	396	H5-24G	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	橙	—	—	
3854	396	H7-6G	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	褐灰	○	—	
3855	396	M9	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3856	396	J2-12G	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒、小礫（2㎜）	灰黄褐	—	○	
3857	396	H3	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、蛇行沈線文（平）	LR	白色粘土粒（多）	橙	○	—	
3858	396	E10-17G	2a～2b 期	第Ⅰ群第 2a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）	RL	砂粒、小礫（2～4㎜）	明黄褐	—	○	
3859	397	E9-4G	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位刺突列、渦巻状懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
3860	397	E9-7G	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文、胴部横位渦巻状隆帯区画文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3861	397	E9-14G	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、胴部横位沈線区画（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
3862	397	H5	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	眼鏡状突起、腕骨状縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	橙	○	○	
3863	397	E9-4G	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、腕骨文、胴部横位隆帯区画、矢羽根状沈線文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
3864	397	I4-2G	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、弧状懸垂文、胴部横位隆帯区画、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
3865	397	E10-2G	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3866	397	D10-20G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画、腕骨文、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	明褐	○	○	
3867	397	B10-10G	2b 期	第Ⅰ群第 2b2 類	深鉢	—	16.8	—	—	—	—	口縁部	口唇部横位沈線文、胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	○	○	
3868	397	G6	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	Ｘ字状把手、腕骨文、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	にぶい黄橙	—	○	
3869	397	—	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	Ｘ字状把手、腕骨文、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2～3㎜）	橙	○	○	
3870	397	O10-1G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	眼鏡状突起、腕骨文、胴部横位隆帯区画、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	浅黄橙	—	—	
3871	397	E10-9G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	腕骨状縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
3872	397	G7	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	表面赤彩。
3873	397	E5-5G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部懸垂文、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	明褐	○	—	
3874	397	K9-16G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2㎜）	明黄褐	○	—	

第 89 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
3875	397	E9-13G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、腕骨文、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
3876	397	H2-23G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文、腕骨状縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	浅黄橙	—	—	
3877	397	E10-13G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文、腕骨文、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	—	○	
3878	397	E9-23G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画（平）、胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	○	○	
3879	397	E10-9G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、腕骨状縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
3880	397	H2-12G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	剣先状懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 6 ㎜）	橙	—	—	
3881	397	H3	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、腕骨文、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	明赤褐	—	○	
3882	397	—	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文、腕骨状縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
3883	397	E10-18G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
3884	397	H3-2G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3885	397	E10	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	○	
3886	397	H5-6G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文、矢羽根状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
3887	397	H3	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	8.8	—	—	—	胴部～底部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3888	397	H3-1G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
3889	398	H5-22G	2b 期	第Ⅰ群第 2b 類	深鉢	I	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位楕円区画文、充填沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3890	398	E9-9G	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	I3	—	—	—	—	—	口縁部	把手（欠）、口縁部横位楕円区画文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3891	398	O10-1G	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	I3	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状突起、口縁部横位楕円区画文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3892	398	H5	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	I3	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位楕円区画文(平)、充填沈線文、胴部縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	黄橙	—	○	
3893	398	I6	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	I3	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位楕円区画文、充填沈線文、胴部縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3894	398	H3-4G	2c 期	第Ⅰ群第 2c3 類	深鉢	I3	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）＋刻目	—	砂粒	橙	○	○	
3895	398	E9-7G	2c 期	第Ⅰ群第 2c1 類	深鉢	I3	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆）、胴部縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
3896	398	P9-21G	2c 期	第Ⅰ群第 2c1 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部渦巻状懸垂文（沈）、胴部縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	黄橙	○	—	
3897	398	H5	2c 期	第Ⅰ群第 2c1 類	深鉢	I4	—	—	—	—	—	口縁部	渦巻状懸垂文（隆）、細沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	○	○	
3898	398	G7-11G	2c 期	第Ⅰ群第 2c1 類	深鉢	I4	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画（平）、渦巻状懸垂文（隆）、胴部斜位沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
3899	398	I9	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部弧状懸垂文（隆）＋刺突列、条線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	○	—	
3900	398	J4	2c 期	第Ⅰ群第 2c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部渦巻状懸垂文（隆）	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
3901	398	G8	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆）、胴部縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明褐	○	○	
3902	398	E9-13G	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆）、胴部縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
3903	398	E9-3G	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（隆）、胴部縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
3904	398	—	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位渦巻状懸垂文（隆）、胴部縦位半隆起線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3905	398	D3-25G	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（隆）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	隆帯の粘土が異なる。
3906	398	H6	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位半隆起線文、細沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3907	398	H5	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（隆）、弧状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3908	398	D13-2G	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻懸垂文（隆）、横位沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3909	398	N9	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻懸垂文（隆）、横位沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3910	398	J4	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	渦巻状突起＋刺突列、胴部縦位沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
3911	398	I3-13G	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	弧状懸垂文（隆）、斜位沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	—	
3912	398	H6	2c 期	第Ⅰ群第 2c5 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆）、横位沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
3913	398	P9	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3914	399	I9	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部刺突文（半竹）	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3915	399	F6-15G	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
3916	399	D11-2G	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3917	399	D5-10G	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文（半竹）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3918	399	G4-14G	2c 期	第Ⅰ群第 2c4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位半隆起線文＋刻目	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
3919	399	G7-5G	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、口縁部横位沈線区画＋刻目	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
3920	399	H6	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文＋刺突列	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3921	399	O10-8G	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3922	399	H6	2c 期	第Ⅰ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、充填沈線文、条線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3923	399	N10-3G	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-6 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
3924	399	J9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3925	399	P9-5G	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文、条線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	

第 90 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
3926	399	E4-11G	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
3927	399	H6	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	○	
3928	399	N9-17G	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、刺突列	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	—	3931 と接合。
3929	399	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3930	399	K9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、円形刺突列	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3931	399	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯、充填沈線文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	—	3928 と接合。
3932	399	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯、刺突列	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	○	
3933	400	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位渦巻状隆帯文、充填沈線文	L	小礫（2 ～ 5 ㎜）	浅黄橙	—	○	
3934	400	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文、充填沈線文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	—	
3935	400	P9-7G	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文、充填沈線文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	○	
3936	400	N10-5G	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文＋ハ字状懸垂文、充填沈線文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3937	400	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部刻目隆帯、渦巻状懸垂文＋ハ字状懸垂文	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	—	
3938	400	O10	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位渦巻状隆帯文、渦巻状懸垂文（未調）	RL	小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	—	—	
3939	400	K9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位渦巻状隆帯文	LR	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3940	400	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位渦巻状隆帯文	RL	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
3941	400	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a1-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位渦巻状隆帯文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
3942	400	O9	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位楕円区画文、横線文	RL	小礫（2 ～ 6 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
3943	400	N8-16G	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位楕円区画文、横線文、瘤状突起（欠）	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3944	400	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位楕円区画文、横線文、縦位短沈線文	—	小礫(2 ～ 4 ㎜)、石英	にぶい黄橙	—	○	
3945	400	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	横線文、乙字状文＋刺突文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
3946	400	H6	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	○	
3947	400	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3948	400	K9	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文、瘤状突起	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3949	400	H6	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文、瘤状突起	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	○	○	
3950	401	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
3951	401	H6	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文、横位楕円区画文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
3952	401	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文、瘤状突起	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3953	401	K9	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	○	
3954	401	I3-13G	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文（隆沈）＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3955	401	N10-3G	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	横線文＋刺突文、瘤状突起、胴部縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	○	
3956	401	K9	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	横線文、瘤状突起	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明褐	○	○	
3957	401	N10	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3958	401	J9	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-3 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	横線文＋刺突文	LR	小礫（2 ～ 5 ㎜）	橙	○	○	
3959	401	M6	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刻目、縦位渦巻状懸垂文（隆）＋刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3960	401	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	16.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画、乙字状文＋刺突文、渦巻状懸垂文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
3961	401	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部乙字状文、渦巻状懸垂文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3962	401	I2	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横線文＋刺突文、渦巻状懸垂文、胴部縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3963	401	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横線文＋刺突文、渦巻状懸垂文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
3964	401	O10-2G	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横線文＋刺突文、渦巻状懸垂文、胴部縦位懸垂文（沈）	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	○	
3965	401	H5	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横線文＋刺突文、渦巻状懸垂文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
3966	401	O10	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横線文＋刺突文、渦巻状懸垂文、胴部縦位懸垂文（隆）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3967	401	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a2-3 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3968	401	I2	3a 期	第Ⅰ群第 3a3-1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横線文＋刺突文、渦巻状懸垂文、胴部縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄褐	—	—	
3969	401	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3a3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）＋刺突文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	○	
3970	402	N9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刺突文、渦巻状懸垂文、乙字状文＋刺突文	RL	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰白	○	○	
3971	402	—	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋瘤状突起、入組コ字文＋刺突文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3972	402	J9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状懸垂文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰白	○	○	
3973	402	N10-7G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、入組コ字文	R	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3974	402	N9-19G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	有尾渦巻状懸垂文＋刻目、入組コ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰白	○	—	
3975	402	N10-7G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	23.6	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、棒状懸垂文、渦巻状沈線文、胴部縦位懸垂文（沈）	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	○	
3976	402	N9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、渦巻懸垂文＋刻目、入組コ字文、刺突列	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	

第 91 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
3977	402	M9-12G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、渦巻懸垂文＋刻目、入組コ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3978	402	M10-3G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、入組コ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3979	402	M10-3G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-4 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、橋状把手、瘤状突起、入組コ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
3980	402	N10	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	26	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、有尾渦巻状懸垂文＋刻目、入組コ字文、胴部縦位懸垂文（沈）	LR	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3981	402	O9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、渦巻状懸垂文＋刻目	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3982	402	N9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	弧状沈線文	L	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
3983	402	J9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4 類	深鉢	A1	16.8	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋圧痕文、胴部縦位懸垂文＋圧痕文	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
3984	402	26J	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、有尾渦巻懸垂文＋刻目、入組コ字文、胴部縦位懸垂文（沈）	L	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰白	○	○	
3985	403	I3-13G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、Ｙ字状懸垂文	LR	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
3986	403	O9	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	弧状沈線文＋瘤状突起、胴部縦位懸垂文（沈）	RL	小礫（2 ～ 5 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3987	403	—	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画（鎖）、弧状隆帯区画文＋刻目、弧状沈線文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3988	403	I2	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、渦巻状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
3989	403	O10-1G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、渦巻状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3990	403	O10-6G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、棒状懸垂文＋刻目、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
3991	403	M10-3G	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、弧状隆帯区画文＋弧状沈線文＋刺突文、胴部縦位懸垂文（沈）	L	小礫（2 ～ 7 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
3992	403	P10	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、渦巻状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
3993	403	H5	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文＋刻目、入組コ字文、横ハ字文	LR	小礫（2 ～ 4 ㎜）	明赤褐	—	○	
3994	403	H4-21G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
3995	403	N10-10G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋管状刺突文、棒状懸垂文＋刻目、変形横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
3996	403	—	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	有尾渦巻状懸垂文、入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	○	
3997	403	N10-2G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	入組コ字文、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	○	○	
3998	403	N10-10G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋橋状把手、瘤状突起、渦巻状懸垂文、変形横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄橙	○	○	
3999	403	N10-10G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯区画＋刺突文、変形横ハ字文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄橙	—	○	
4000	403	N10-10G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	変形横ハ字文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
4001	403	O10-2G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、変形横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	○	○	
4002	403	N10	3b 期	第Ⅰ群第 3a 類	深鉢	A2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、瘤状突起、刺突文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
4003	403	D10	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文＋刻目、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰白	○	—	
4004	403	O10-12G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	○	
4005	403	N10-5G	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-2 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画＋刻目、横ハ字文	—	小礫（2 ～ 5 ㎜）	灰黄褐	○	—	
4006	403	H6	3b 期	第Ⅰ群第 3a6-1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	胴部	棒状懸垂文、入組コ字文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	灰黄褐	○	—	
4007	404	—	3b 期	第Ⅰ群第 3a4-4 類	深鉢	A	—	9.6	—	—	—	胴部～底部	渦巻状懸垂文＋刻目、胴部横位沈線区画文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4008	404	29J	3b 期	第Ⅰ群第 3a8 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	楕円区画文＋刺突文、瘤状突起	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
4009	404	G7-10G	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	18.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位沈線区画＋刺突文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
4010	404	J4	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋刺突文、条線文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
4011	404	J4	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋刺突文、条線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰白	—	—	表面破裂痕。
4012	404	J4	3a 期	第Ⅰ群第 3a9 類	深鉢	A1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画＋刺突文、条線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	—	
4013	404	H6	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部Ｓ字状突起、口縁部楕円区画文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
4014	404	J4	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆沈）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	○	○	
4015	404	I2	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状突起＋橋状把手	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	灰白	○	—	
4016	404	G7	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状突起、口縁部楕円区画文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
4017	404	M12-6G	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
4018	404	J4	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状突起	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
4019	404	G7	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻隆帯文	LR	砂粒	黒褐	—	—	
4020	404	O9-2G	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状突起＋橋状把手	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
4021	404	G7	3a 期	第Ⅰ群第 3b1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（隆沈）	RL	砂粒	褐灰	—	—	
4022	404	N9-20g	3b 期	第Ⅰ群第 3b3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	三角状突起、胴部方形区画文（沈）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	—	—	
4023	405	H6	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部楕円区画文、胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	橙	○	—	

第 92 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
4024	405	N9-4G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
4025	405	O9-1G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、口縁部楕円区画文	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
4026	405	N9-8G+9G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
4027	405	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、口縁部楕円区画文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 5 ㎜）	灰黄褐	○	—	
4028	405	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、口縁部楕円区画文、胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
4029	405	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻状隆帯文、口縁部楕円区画文、胴部縦位磨消懸垂文、蛇行沈線文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	○	—	4030 と接合。
4030	405	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	32.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部渦巻状隆帯文、口縁部楕円区画文、胴部縦位磨消懸垂文、蛇行沈線文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	明褐	○	—	4029 と接合。
4031	406	N9-21G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	16.4	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文＋刻目、ワラビ手状懸垂文（沈）	RL	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
4032	406	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文、胴部逆Ｕ字状懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
4033	406	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	K1	—	—	—	—	—	口縁部	胴部逆Ｕ字状懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4034	406	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文、蛇行沈線文	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
4035	406	O9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文、蛇行沈線文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
4036	406	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文、蛇行沈線文	LR	砂粒	橙	—	—	
4037	406	G4-1G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文、ワラビ手状懸垂文	RL	砂粒、橙色粘土粒（中）	明褐	○	—	
4038	406	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4039	406	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文、蛇行沈線文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
4040	406	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	10	—	—	—	底部	胴部縦位磨消懸垂文、蛇行沈線文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	○	
4041	406	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
4042	406	J9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 6 ㎜）	明黄褐	—	○	
4043	406	N9-2G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	橙	○	○	
4044	406	N9-7G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
4045	406	O10-1G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	○	
4046	406	H4-15G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画、胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
4047	406	N9-1G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
4048	406	J9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
4049	406	E10-13G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文、渦巻状懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4050	407	N9	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文、条線文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
4051	407	N8-21G	3a 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位磨消懸垂文、条線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
4052	407	I9	3b 期	第Ⅰ群第 3c1 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯区画、刺突列、胴部逆Ｕ字状懸垂文	—	砂粒	橙	—	○	
4053	407	K9	3b 期	第Ⅰ群第 3c2 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、刺突列	LR	砂粒	灰白	—	—	
4054	407	N9-8G	3b 期	第Ⅰ群第 3c2 類	深鉢	L2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部円形隆帯文＋刺突文、胴部磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	明黄褐	○	○	
4055	407	N9-3G	3b 期	第Ⅰ群第 3c2 類	深鉢	L2	12.8	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、Ｃ字状突起、口縁部横位隆帯区画＋刺突列、胴部懸垂文	RL	砂粒	橙	○	○	
4056	407	P10-3G	3b 期	第Ⅰ群第 3c2 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	—	
4057	407	N8	3b 期	第Ⅰ群第 3e 類	深鉢	L1	23.2	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部渦巻隆帯文＋楕円区画文、胴部縦位磨消懸垂文、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
4058	407	N9	3b 期	第Ⅰ群第 3c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	釣手状把手＋捻転状隆帯文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
4059	407	K9	3b 期	第Ⅰ群第 3c3 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	雨垂れ状刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4060	407	N9-22G	3 期	第Ⅰ群第 3e 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部縦位懸垂文（隆）、矢羽根状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
4061	407	N9-22G	中期	第Ⅰ群第 7c 類	台付	—	—	22.4	—	—	—	底部	円形沈線文	L	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	浅黄橙	—	—	
4062	407	J9	3a 期	第Ⅰ群第 3i 類	有溝	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部区画文	—	砂粒	黒褐	—	—	
4063	407	E11-9G- I	1 期	第Ⅰ群第 5c 類	深鉢	H3	16.8	8.4	18.4	18.4	1.5	完形	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4064	407	G7-23G	2 期	第Ⅰ群第 5c 類	深鉢	I1	19.6	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	
4065	407	N9-18G	1 期	第Ⅰ群第 7c 類	台付	—	—	—	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
4066	407	E11	1 期	第Ⅰ群第 5b 類	深鉢	H6	24	11.6	34.8	34.8	8.2	口縁部～底部	—	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4067	408	E11	1 期	第Ⅰ群第 5b 類	深鉢	H7	32.8	14.4	45.2	45.2	18.4	口縁部～底部	—	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4068	408	M9	3 期	—	深鉢	—	—	16	—	—	—	底部	条線文	RL	砂粒、小礫（2 ～ 6 ㎜）	橙	—	—	
4069	408	O10-5G	中期	—	深鉢	—	—	15.2	—	—	—	底部	—	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	—	—	底部網代圧痕文。
4070	408	N9	1 期	第Ⅰ群第 5b 類	深鉢	H7	33.6	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	—	
4071	408	N9	中期	—	深鉢	—	—	11.2	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	底部網代圧痕文。
4072	408	—	中期	—	深鉢	—	—	14.8	—	—	—	底部	—	—	砂粒	灰白	—	—	底部網代圧痕文。
4073	409	E11-9G- I	1 期	第Ⅰ群第 5c 類	深鉢	H6	34	14.8	38.2	38.2	18.9	口縁部～底部	—	RL	砂粒、橙色粘土粒（中）	にぶい黄橙	○	—	
4074	409	E11	1 期	第Ⅰ群第 5a 類	深鉢	A1	19.2	10.4	22	22	2.9	口縁部～底部	—	RL	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	○	○	

第 93 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
4075	409	O10	1 期	第Ⅰ群第 5a 類	深鉢	H7	—	—	—	—	—	口縁部	—	撚 L	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
4076	409	15J	中期	—	深鉢	—	—	15.4	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部網代圧痕文。
4077	409	D4	1 期	第Ⅰ群第 5b 類	深鉢	H7	27.6	13.2	36.4	36.4	12.2	口縁部～底部	—	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部網代圧痕文。
4078	410	M11	中期	—	深鉢	—	—	12.6	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部網代圧痕文。
4079	410	M12	中期	—	深鉢	—	—	6.6	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部網代圧痕文。
4080	410	23J	中期	—	深鉢	—	—	12.6	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部網代圧痕文。
4081	410	E10-1G	中期	—	深鉢	—	—	9.6	—	—	—	底部	—	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	底部葉脈状圧痕文。
4082	410	J9	1 期	第Ⅰ群第 4 類	有孔	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部隆帯区画文、弧状隆帯文	—	砂粒	赤褐	○	—	赤彩。
4083	410	13J	3a 期	第Ⅰ群第 3i 類	有溝	—	—	—	—	—	—	胴部	円形沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	内外面に赤彩。
4084	410	F6-11G+12G	1a 期	第Ⅰ群第 6a 類	浅鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文（平）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
4085	410	D11-4G	1a 期	第Ⅰ群第 6a 類	浅鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文（平）	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
4086	410	E9-13G	1a 期	第Ⅰ群第 6a 類	浅鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文（平）＋刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	内面に黒色付着物。
4087	410	E10-17G	1a 期	第Ⅰ群第 6b 類	浅鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部渦巻状突起	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4088	410	D10-20G	2a 期	第Ⅰ群第 6c2 類	浅鉢	D2	20.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	口縁部横位隆帯区画文＋波状沈線文（平）	LR	砂粒	浅黄橙	○	—	
4089	410	I2	1c ～ 2a 期	第Ⅰ群第 6d 類	浅鉢	E2	42.8	—	—	—	—	口縁部～胴部	—	—	砂粒	赤褐	—	—	内外面に赤彩。
4090	411	G7-14G	4a 期	第Ⅱ群第 1a1 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、胴部瘤状突起	—	白色粘土粒	橙	○	○	
4091	411	O10-6G	4a 期	第Ⅱ群第 1a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部瘤状突起	—	白色粘土粒	橙	—	○	
4092	411	N10	4a 期	第Ⅱ群第 1a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部瘤状突起	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
4093	411	N10-10G	4a 期	第Ⅱ群第 1a1 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部瘤状突起	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
4094	411	P10-1G	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、胴部横位隆帯区画＋刻目、花弁状刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
4095	411	H4-17G	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部隆帯区画文＋圧痕文	—	小礫（2 ～ 6 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
4096	411	I5	4 期	第Ⅱ群第 1a1 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手状貼付文	LR	橙色粘土粒（中）	にぶい黄橙	○	○	
4097	411	N10	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手、胴部刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
4098	411	E10	4 期	第Ⅱ群第 1a2 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	胴部	胴部隆帯区画文＋刻目、胴部刺突文	—	小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
4099	411	L12-15G	4 期	第Ⅱ群第 1a3 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手＋刻目、胴部横位隆帯区画文＋刻目、胴部爪形刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
4100	411	N9-24G	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B2	—	—	—	—	—	口縁部	胴部刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
4101	411	N10-7G	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
4102	411	I5-12G	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	明赤褐	—	—	
4103	411	N10-3G	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	○	○	
4104	411	O9	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、橙色粒子（少）	にぶい黄褐	○	○	
4105	411	I2	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4106	411	O10-12G	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	明赤褐	—	—	
4107	411	O10-1G	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部爪形刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	明黄褐	—	—	
4108	411	N9-25G	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部管状刺突文	—	小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	—	○	
4109	411	E5-5G	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	○	
4110	411	H6	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4111	411	I2	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	○	—	
4112	411	N10-7G	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部花弁状刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
4113	411	N10	4 期	第Ⅱ群第 1a 類	深鉢	B	—	—	—	—	—	口縁部	橋状把手（欠）、胴部横位隆帯区画文＋圧痕文		砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4114	411	N9-9G	4 期	第Ⅱ群第 1d 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	胴部隆帯区画文＋刻目	LR	小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	
4115	411	P10	4 期	第Ⅱ群第 1d 類	深鉢	A	—	—	—	—	—	口縁部	口唇部刻目文、口縁部横位隆帯区画文＋刻目、条線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	橙	—	—	
4116	411	I2	4 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	C2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部 8 字状貼付文	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
4117	411	H8-4G	4 期	第Ⅱ群第 1b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、口縁部磨消状文	LR	砂粒	褐灰	—	—	
4118	411	I2-6G	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文＋括弧状文、胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	明黄褐	○	—	
4119	411	N9-13G	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部同心円文、胴部三角形区画文（磨消）	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
4120	411	H4-19G	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部同心円文	—	砂粒	浅黄橙	○	○	
4121	412	H6	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部同心円文＋横位沈線文＋刻目文、胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	明黄褐	○	—	
4122	412	N8-22G	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目文、胴部三角形区画文（磨消）	—	砂粒	にぶい黄橙	—	○	
4123	412	N9-22G	5a 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目文、胴部縦位磨消懸垂文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
4124	412	N10-8G	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目文、胴部多条沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
4125	412	N8	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目文＋環状突起	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	○	—	
4126	412	P10	5b 期	第Ⅱ群第 2a3 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目文、胴部横位沈線区画文	—	砂粒	橙	○	○	
4127	412	N10-12G	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	D1	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位沈線文、胴部多条沈線文	—	砂粒	褐灰	○	○	

第 94 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
4128	412	I2	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	D	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	—	
4129	412	L13	5 期	第Ⅱ群第 2a1 類	深鉢	D	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文（沈）	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4130	412	I2	5 期	第Ⅱ群第 2a 類	深鉢	D	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	○	—	
4131	412	N8-21G	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	D	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画、胴部多条沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
4132	412	O10-11G	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	D	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画、胴部多条沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	浅黄橙	—	—	
4133	412	I2	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	D	—	—	—	—	—	胴部	胴部磨消懸垂文（沈）	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	—	
4134	412	N8-21G	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	D	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文（沈）、縦位鎖状隆帯懸垂文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
4135	412	O10-6G	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	D	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文、胴部横位区画	—	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
4136	412	O9-22G	5b 期	第Ⅱ群第 2a2 類	深鉢	D	—	—	—	—	—	胴部	胴部縦位懸垂文	—	砂粒	灰白	○	—	
4137	412	N9-13G	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋刻目文	—	砂粒	明黄褐	○	○	
4138	412	M8-11G	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部円形文＋横位沈線文＋刻目文	LR	砂粒	浅黄橙	—	—	
4139	412	H4-20G	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部渦巻文＋横位沈線文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
4140	412	D11-15G	5a 期	第Ⅱ群第 2b2 類	深鉢	E2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋括弧状文＋刻目文、鎖状隆帯懸垂文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
4141	412	O9	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文	L	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄褐	○	—	
4142	412	H4-20G	5a 期	第Ⅱ群第 2b1 類	深鉢	E1	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部同心円文	—	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	明赤褐	—	○	
4143	412	D11	5a 期	第Ⅱ群第 2b2 類	深鉢	E2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線文＋括弧状文、Ｙ字状懸垂文＋刻目、内面横位沈線文＋括弧状文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰黄褐	○	○	
4144	413	M6-21G	5b 期	第Ⅱ群第 2b3 類	深鉢	E2	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文、内面渦巻状磨消縄文	LR	砂粒	橙	—	—	
4145	413	P10-1G	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	E2	—	—	—	—	—	口縁部	内面円孔文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
4146	413	H5-24G	5b 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	E	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状磨消懸垂文	LR	砂粒、赤色粒子（少）	橙	—	—	
4147	413	N8-21G	5b 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	E	—	—	—	—	—	胴部	胴部隆帯懸垂文＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
4148	413	E10	5a 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	E	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線区画＋刺突列、胴部渦巻状懸垂文（沈）	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	—	
4149	413	I6	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	E	—	—	—	—	—	胴部	環状貼付文、胴部横位沈線文	RL	砂粒	橙	—	—	
4150	413	G7	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	E	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状磨消懸垂文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
4151	413	P9-11G	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	E	—	—	—	—	—	底部	胴部縦位懸垂文（沈）、弧状沈線文	—	砂粒	橙	○	—	
4152	413	—	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	E	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位隆帯区画、胴部縦位懸垂文（隆）、対弧状沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
4153	413	D11-15G	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	E	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（磨消）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	淡黄	○	—	
4154	413	D11-15G	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	E	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（磨消）	LR	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	淡黄	○	—	
4155	413	P9	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	E	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（磨消）	RL	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	—	
4156	413	J9	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	E	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文（磨消）	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
4157	413	I2	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	E	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
4158	413	O10	5 期	第Ⅱ群第 2b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状懸垂文（磨消）	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4159	414	O10-6G	5b 期	第Ⅱ群第 2c1 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部楕円区画文（磨消）	L	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	灰白	○	○	
4160	414	O10-13G	5b 期	第Ⅱ群第 2c1 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部帯状縄文	LR	砂粒	灰黄褐	○	○	
4161	414	K9	5b 期	第Ⅱ群第 2c1 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4162	414	O10	5b 期	第Ⅱ群第 2c1 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位沈線区画、胴部三角形区画文	LR	砂粒	灰黄褐	○	○	
4163	414	D11-8G	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刻目、帯状縄文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	橙	—	—	
4164	414	P10-1G	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刻目、胴部磨消縄文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	○	—	
4165	414	D11-6G	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刻目、帯状縄文	LR	砂粒、赤色粒子（少）	橙	○	—	
4166	414	I7-1G	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刻目	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
4167	414	N10-10G	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	突起、口縁部横位沈線文、区切文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	
4168	414	N10-12G	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位隆帯文＋刻目、帯状縄文	LR	砂粒	褐	○	○	
4169	414	N10-12G	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯文＋刻目、帯状縄文	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
4170	414	N8-9G	5b 期	第Ⅱ群第 2c2 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位隆帯文＋刻目、８字貼付文、帯状縄文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
4171	414	I5	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	—	
4172	414	N8-13G	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線文	—	砂粒	灰黄褐	○	○	
4173	414	N8-23G	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
4174	414	H7-17G	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	内外面に赤彩。
4175	414	N8-10G	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	L	砂粒	にぶい黄褐	○	—	
4176	414	O10-13G	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	LR	砂粒	黒褐	○	○	
4177	414	N9-8G	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	LR	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
4178	414	N8-9G	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位沈線文	—	砂粒	黒褐	○	○	
4179	414	N10-10G	5b 期	第Ⅱ群第 2c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部三角形区画文（磨消）	—	砂粒、赤色粒子（少）	にぶい黄橙	○	—	
4180	414	N9-22G	5b 期	第Ⅱ群第 2c4 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	口縁部横位多条沈線文、帯状縄文	LR	砂粒	にぶい黄橙	—	○	

第 95 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
4181	414	P10	5b 期	第Ⅱ群第 2c4 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	縄文＋口縁部横位多条沈線文、帯状縄文	LR	砂粒	黒褐	○	○	
4182	414	N9-1G	5b 期	第Ⅱ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	連鎖状文	—	砂粒	黒褐	○	○	
4183	414	N8	5b 期	第Ⅱ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	連鎖状文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
4184	414	N7	5b 期	第Ⅱ群第 2c4 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	連鎖状文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
4185	414	P10	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	LR	砂粒	灰黄褐	○	○	
4186	414	N10-4G	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	帯状縄文、区切文、内面横位沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	明黄褐	○	○	
4187	414	N8-9G	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	F	—	—	—	—	—	口縁部	横位沈線文、内面横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
4188	414	N10	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位多条沈線文	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	○	
4189	414	O10-14G	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文、区切文、内面横位沈線文	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
4190	414	N8	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	内面横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
4191	414	O10	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	帯状縄文、区切文、内面横位沈線文、刺突列	LR	砂粒	にぶい黄橙	○	—	
4192	414	O9	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文、内面横位沈線文	LR	砂粒	にぶい黄褐	—	○	
4193	414	N9-9G	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	口縁部横位沈線文、内面横位沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	○	○	
4194	415	N10-4G	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位多条沈線文、区切文、内面横位沈線文	—	砂粒、小礫（2 ㎜）	橙	—	—	
4195	415	N9-13G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文、区切文、内面横位沈線文	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
4196	415	N8-8G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	８字状突起、帯状縄文、区切文、内面横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4197	415	H8-4G	6 期	第Ⅱ群第 3c 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	耳状突起、帯状縄文、区切文、内面横位沈線文	LR	砂粒	浅黄橙	○	○	
4198	415	N8-11G	6 期	第Ⅱ群第 3c 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	耳状突起、横位沈線帯、区切文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
4199	415	P10-2G	6 期	第Ⅱ群第 3c 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起（欠）、帯状縄文、楕円文	LR	砂粒	灰白	○	—	
4200	415	N10-4G	6 期	第Ⅱ群第 3c 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	８字状突起、帯状縄文、区切文、内面横位沈線文	—	砂粒	橙	○	○	
4201	415	O9-23G	6 期	第Ⅱ群第 3c 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	耳状突起	—	砂粒	橙	—	—	
4202	415	O10-4G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	帯状縄文	RL	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4203	415	N10-4G	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位多条沈線文、区切文、口唇部刻目文、内面横位沈線文	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
4204	415	N9-8G	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位多条沈線文、内面横位沈線文＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4205	415	N9-9G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位多条沈線文、区切文、口唇部刻目文、内面横位沈線文、内面刺突列	LR	砂粒	橙	○	○	
4206	415	N8-11G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	帯状縄文、区切文、内面横位沈線文	LR	砂粒	明黄褐	○	○	
4207	415	N8-11G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	帯状縄文、区切文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	明黄橙	○	—	
4208	415	N8-22G	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位多条沈線文、内面横位沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
4209	415	N8-7G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位多条沈線文、内面横位沈線文＋刻目	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
4210	415	N9-8G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	胴部帯状縄文、区切文、内面横位沈線文、内面刺突列	LR	砂粒	橙	○	—	
4211	415	N8-13G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文	RL	砂粒	灰黄褐	—	—	
4212	415	H8	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位多条沈線文、口唇部刻目文	—	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
4213	415	O10-13G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	８字状貼付文、胴部磨消縄文	LR	砂粒	にぶい黄褐	○	○	
4214	415	N9-18G	6 期	第Ⅱ群第 3a 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位多条沈線文	—	砂粒	明赤褐	○	○	
4215	415	N10-3G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位多条沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
4216	415	H5-23G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	帯状縄文	LR	砂粒	明黄橙	○	—	
4217	415	O9-23G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	帯状縄文、区切文	LR	砂粒	黒褐	○	○	
4218	415	N9-8G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位多条沈線文＋斜位沈線文	—	砂粒	明赤褐	○	—	
4219	415	O10-4G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位多条沈線文、区切文	—	砂粒	浅黄橙	○	—	
4220	415	O10-12G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部横位多条沈線文、単位文、内面横位沈線文	—	砂粒	明赤褐	—	—	
4221	415	O10-5G	6 期	第Ⅱ群第 3b 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	胴部横位多条沈線文、単位文	LR	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
4222	416	O10-6G	6 期	第Ⅱ群第 3c 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	８字状突起、内面円形文	—	砂粒	灰白	—	—	
4223	416	O10-5G	6 期	第Ⅱ群第 3c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	耳状突起、貫通孔	—	砂粒	灰白	—	—	
4224	416	L6-25G	6 期	第Ⅱ群第 3c 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	耳状突起、口縁部横位沈線文	—	砂粒	灰黄褐	○	—	
4225	416	N9-14G	6 期	第Ⅱ群第 3c 類	深鉢	G	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、の字状文、内面横位沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
4226	416	P9-14G	6 期	第Ⅱ群第 3c 類	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	環状突起、口縁部横位隆帯文＋刻目	—	砂粒	黄橙	○	○	
4227	416	D10-23G	6 期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄褐	○	○	
4228	416	N6-22G	6 期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文	—	砂粒	黒褐	—	—	
4229	416	N9-7G	6 期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状懸垂文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
4230	416	O10	6 期	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	胴部～底部	連鎖状沈線文	—	砂粒	橙	—	—	
4231	416	P9	不明	—	深鉢	—	—	—	—	—	—	口縁部	沈線区画文＋刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	○	
4232	416	N8-11G	6 期	第Ⅱ群第 6c 類	浅鉢	B	—	—	—	—	—	口縁部	内面横位沈線文＋刻目文、内面円形文＋刻目	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4233	416	M13	6 期	第Ⅱ群第 6c 類	浅鉢	B	—	—	—	—	—	口縁部	内面横位沈線文＋渦巻文	—	砂粒	明黄褐	—	—	

第 96 表　出土土器観察表

No	図版	出土地点	時期	分類	器種	器形	大きさ（cm）				容量（ℓ）	残存部位	文様	縄文	胎土	色調	ススコゲ		備考
							口径	底径	器高	口高							内	外	
4234	416	—	4 期	第Ⅱ群第 8 類	蓋	—	—	—	—	—	—	摘部	—	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
4235	416	I2	4 期	第Ⅱ群第 8c 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	鎖状隆帯文	—	砂粒、赤色粒子（中）	にぶい黄橙	—	○	
4236	416	I2	4 期	第Ⅱ群第 8b 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	爪形刺突文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	淡黄	—	○	
4237	416	N10-7G	4 期	第Ⅱ群第 8 類	蓋	—	—	—	—	—	—	—	条線文、刺突列	—	砂粒	灰黄褐	—	—	
4238	416	L6-25G	4 期	第Ⅱ群第 7a 類	注口	—	4.8	—	—	—	—	口縁部	—	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
4239	416	N8-2G	4 期	第Ⅱ群第 7c 類	注口	—	—	—	—	—	—	把手・注口部	橋状把手、注口	—	砂粒（少）	浅黄橙	—	—	赤彩。
4240	416	O10-12G	5b 期	第Ⅱ群第 7c 類	注口	—	—	—	—	—	—	把手部	橋状把手	—	砂粒	にぶい黄橙	—	—	
4241	416	M6-21G	5b 期	第Ⅱ群第 7c 類	注口	—	—	—	—	—	—	把手部	橋状把手、多条沈線文	—	砂粒	黄	—	—	
4242	416	O9-6G	5 期	第Ⅱ群第 7b 類	注口	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部渦巻状隆帯文	—	砂粒	橙	—	—	
4243	416	P10-1G	5 期	第Ⅱ群第 7c 類	注口	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部懸垂文	—	砂粒	明黄褐	—	—	
4244	416	H6	5 期	第Ⅱ群第 7b 類	注口	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状沈線文	—	砂粒	赤褐	—	—	
4245	416	H6	5 期	第Ⅱ群第 7b 類	注口	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状沈線文	—	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	にぶい黄橙	—	—	内外面に赤彩。
4246	416	N10-4G	5b 期	第Ⅱ群第 7c 類	注口	—	—	—	—	—	—	胴部	胴部弧状沈線文	—	砂粒	にぶい黄褐	—	—	
4247	416	O10-2G	5 期	第Ⅱ群第 7b 類	注口	—	—	—	—	—	—	注口部	注口	—	砂粒	赤褐	—	—	
4248	416	F2	5a 期	第Ⅱ群第 7b 類	注口	—	—	—	—	—	—	注口部	渦巻状磨消懸垂文、三角形磨消縄文	LR	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	浅黄橙	—	—	

第 97 表　出土土器観察表

２．土製品

本遺跡出土の土製品は、総数 136 点と非常に少ない。種類は、①土偶、②三角形土版（土製品）、③ミニチュア土器、④耳飾、⑤不明の土製品、いわゆる⑥土製円盤と呼称されるもので、土器片を加工したものである。加えて、土製品ではないが、⑦土器片内面に漆状の付着物を持つもの、⑧土器表面が焼成時にハジケたと考えられる「焼成破裂土器片」（註 131）、⑨焼成粘土塊、木の実状の圧痕を持つ土器片についてもここで説明する。土製品の分類に関しては、基本的に道尻手遺跡での分類（註 132）に基づくが、都合により省略または改変する。

１）土偶（図版第 417 図）

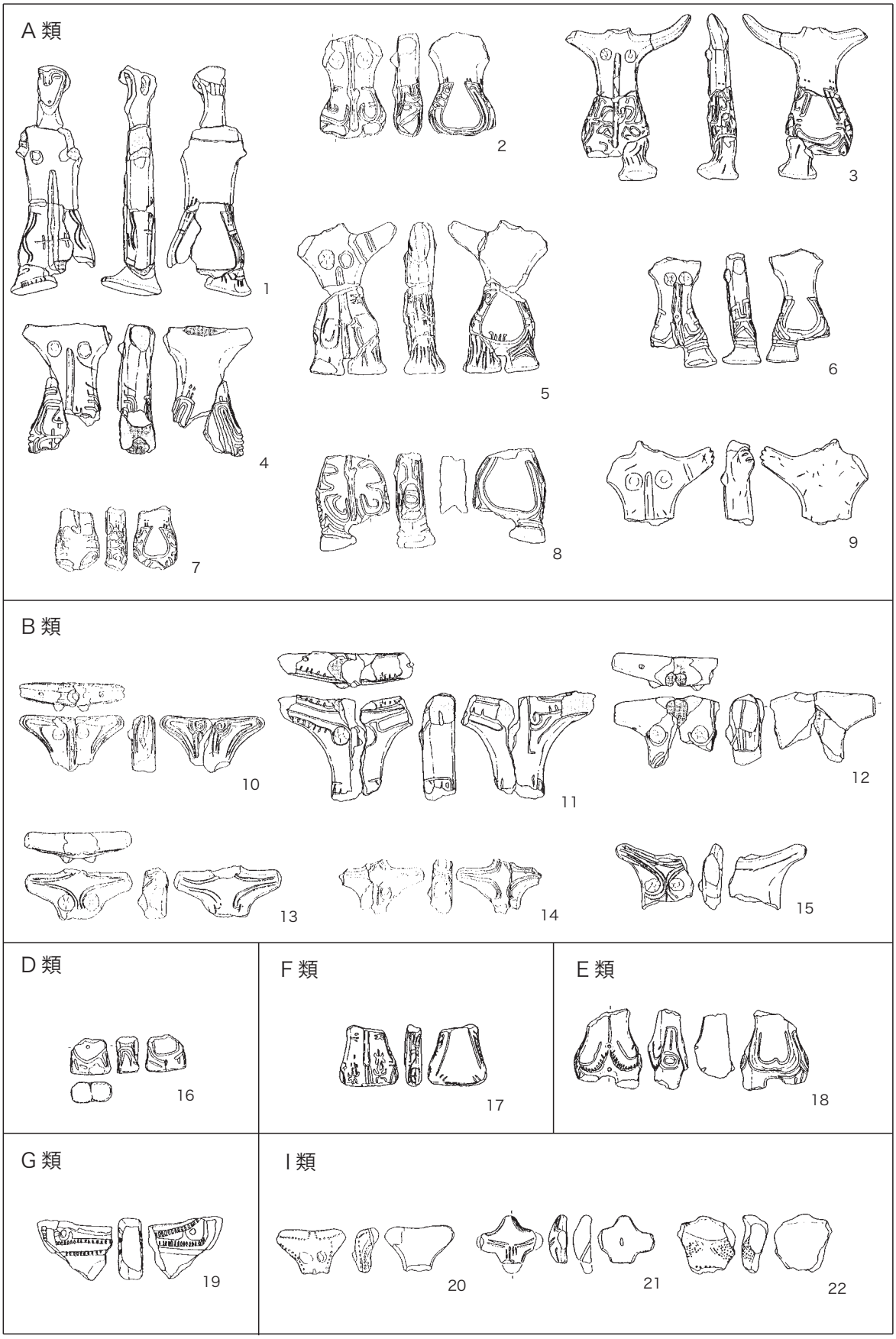
本遺跡の土偶は 10 点と少なく、ほとんどが遺構覆土出土である（第 98 表）。これは前述したように、包含層の大部分が土地造成などによって削平されているためである。土偶は全て破片資料で、完形や接合資料は確認されていない。これらは頭部や胴部、腕部、脚部などの部分的な出土であるため、全体像が不明である。従って、本遺跡で分類を行ってもあまり生産的でないと考えられることから、150 点の土偶が出土している道尻手遺跡の土偶分類に対比するとともに帰属時期を検討したい（第 55 図）。

ａ．堂平遺跡出土土偶

１は、第 11 号住居跡覆土出土の土偶頭部で、頭頂部を欠損する。顔部表現は、口を円形の穴で表現する。道尻手分類のＡ類に対比される。２は、廃棄場出土の胴部片で、頭部と腰部から下半身・左腕部を欠損する。２つの貼付文で乳房を表現し、隆線によって正中線を表現し、道尻手分類Ａ類に対比される。頸部の欠損部から、頭部がソケット状に接合されていることが分かる。３は、E10 グリッド出土の土偶胴部片で、両腕部・頭部・下半身を欠損する。貼付文により２つの乳房と正中線を表現する。欠損部からは、明確な粘土塊接合面は確認できなかった。４は、H3 グリッド出土の土偶片で、胴部の左側だけが残る。ちょうど中心軸の粘土塊接合面で欠損している。頭部もソケット状に接合する接合面が観察される。乳房は貼付文、正中線が沈線によって表現される。５は、第 15 号住居跡覆土出土の土偶腰部と推定される。表面には沈線により正中線とＬ字状の文様、背面には対弧状文を描く。欠損部から胴部が左右二つの粘土塊を合わせて作られるのが分かる。６は、J5-P6 出土の土偶右脚部で、縦位の沈線が数条描かれる。足底面に楕円形の圧痕が残る。７は、中心部で抉りを入れることで左右の脚を表現する土偶で、設置面が足のように前方に迫り出している。８は、第 39 号住居跡覆土出土の無文の土偶右脚部である。欠損部分からは、脚部がソケット状に体部に接合していると見られる部位が観察される。９は、N9-P21 出土の無文の土偶右脚部である。欠損部分から脚部がソケット状に接合している凸部が観察される。10 は、第３号住居跡出土の土偶腰部片であると推定され、縦位の沈線文が４本確認される。

No	図版	注記番号	位置	分類	部位	胎土		大きさ（ｃｍ）			文様	備考
						色調	混和材	長さ	幅	厚さ		
1	第 417 図	11J-984	11J	不明	頭部	浅黄橙	橙色粘土粒（中）、小礫	3.3	2.7	2.3	鼻（貼）、口（円形刺突）	
2	第 417 図	14J-95	14J	Ａ類	胴部・右腕	にぶい黄橙	砂粒（少）	4.35	4.9	1.6	平行沈線文、正中線（隆）、乳房状貼付文	
3	第 417 図	E10-13	E10	Ａ類	胴部	浅黄橙	砂粒、小礫（２～３㎜）	3.75	4.28	1.75	正中線（隆）、乳房状貼付文	
4	第 417 図	H3	H3	Ｂ類	胴部左半部	橙	砂粒、小礫（２㎜）	3.75	2	1.9	正中線（沈）、乳房状貼付文	背面にスス状付着物。
5	第 417 図	15J-444	15J	不明	胴部（腰）	にぶい黄橙	砂粒	3.2	4.45	2.4	正中線（沈）、対弧線文	
6	第 417 図	J5-P6	J5	Ａ類	右脚部	明黄褐	白色粒子（多）	1.6	2.85	2.45	縦位沈線文	
7	第 417 図	H7-61-P9	H7	不明	左脚部	橙	砂粒、小礫（２㎜）	3.8	3.8	2	沈線文	
8	第 417 図	39J	39J	不明	右脚部	橙	砂粒	1.95	3.05	4	—	
9	第 417 図	N9-P21	N9	不明	右脚部	浅黄橙	砂粒、小礫（２㎜）	2.9	2.4	2.7	—	
10	第 417 図	3J-P14	3J	不明	腰部	にぶい黄橙	砂粒	3.3	2.8	2.7	縦位沈線文	

第 98 表　出土土偶観察表



第 55 図　道尻手遺跡の土偶分類図

b．土偶の出土状況

本遺跡の土偶は破片で出土し、接合例はない。出土地点は遺構外の包含層が３点、住居跡覆土が３点、土坑５点であり、全て廃棄状態を示していると考えられる。これは、道尻手遺跡の中期土偶のほぼ全てが廃棄帯から出土しており、傾向が異なる。

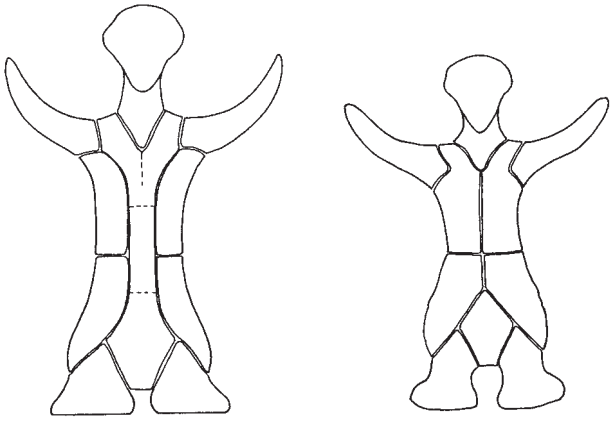
c．堂平遺跡出土土偶の位置づけ

本遺跡の出土土偶は破片資料であるため、土偶の帰属時期は明瞭ではない。これらの多くは、堂平１期から２期に帰属すると考えられるが、細かな時期比定は難しい。本地域では、明確な土偶が出現するのは、中期初頭（五領ヶ台Ⅱ式並行期）になってからで、上野遺跡（註 133）などで中空土偶の出土例が見られる。土偶が増加するのは、中期前葉（大木7b 式並行期）からで、中期後葉（大木８ｂ式並行期）まで安定的に土偶が確認できる。堂平遺跡出土土偶１～ 10 は、道尻手遺跡出土土偶の頭部形態や胴部の正中線、腕部の平行沈線文、腰部の対弧状の沈線文などに類似性が認められ、中期中葉～後葉に位置付けられると考えられる。しかし、中期末葉の沖ノ原Ⅰ式～Ⅱ式期に帰属する土偶は、今のところ分かっていない。この時期に、一度土偶が途絶える可能性が高く、東北地方南部とは様相が異なると考えられる。一方、後期前葉（南三十稲場式期）になって、信濃川流域ではハート形土偶や中部高地的な中空土偶などが再び出現するが、本遺跡からは後期に属する土偶は確認されていない。

d．土偶の製作手法

縄文時代の土偶は、幾つかの粘土塊から製作される、いわゆる「分割塊製作法」（註 134）による。本遺跡出土土偶も分割粘土塊から作られており、接合面で欠損しているものも少なくない。第 56 図は、道尻手遺跡出土の良好な接合土偶２個体を中心に粘土塊の接合手法を復元したものである。一部は、観察不可能な部分もあるが、他の土偶片の粘土塊接合面の観察結果を合わせて復元を行ったものである。本地域の中期土偶は、ソケット状の接合手法が共通して見られるものの、細部の接合手法は一様ではなく、複数の組み合わせが認められる。第 56 図１は、より多くのパーツから構成され、頭部や腕部・脚部がソケット状に接合される。特徴は胴部の中央部に心状の粘土棒を挟んで左右に粘土塊を接合する点である。これを「中心粘土棒型」と仮称しておきたい。第 56 図２は頭部や腕部・脚部のソケット状接合手法は同じであるが、中心部に心状の粘土棒を持たずに、左右の粘土塊から構成されるものである。これを「中心分割型」と仮称したい。

堂平遺跡出土の土偶については、ソケット状の接合面が観察される例が、頸部が土偶４、脚部が土偶８・９である。胴部は、土偶４・５で中心部から左右に分割される接合例があり、「中心粘土棒型」は確認できなかった。その他の土偶では、明確な接合面は認められなかった。また心棒を内部に入れた痕跡を示す例は、同時期の道尻手遺跡などで数例散見されるが、本遺跡では確認できなかった。

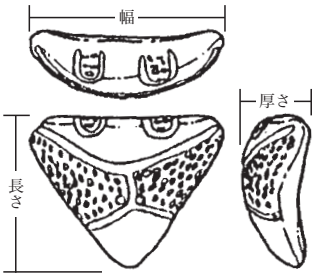


1．中心粘土棒型　　2．中心分割型

第 56 図　中期土偶の製作手法模式図

2）三角形土版（図版第 418 図～第 419 図）

本遺跡からは 29 点の三角形土版が出土している（第 99 表）。名称については「三角形土製品」や「三角形土偶」（註 135）などがあるが、本論では「三角形土版」と呼称する。大部分は欠損した状態で、第 58 図のような欠損パターンを示す。本土製品について分類を行い、道尻手遺跡の分類（註 136）への対比を行う。



第 57 図　計測部位

a．三角形土版の分類と対比（第 59 図・第 60 図）

1類：　三角形の区画を施し、区画内に刺突文を充填するもので、上端に２つの貼付文を付す（12 ～ 14）。

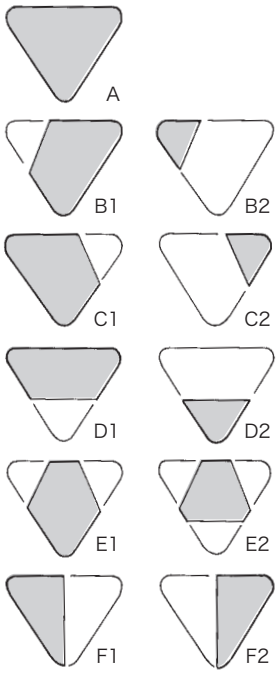
2類：　三角形の区画を施し、区画内に刺突文を充填するもので、上端に２つの円形区画を沈線や刺突で描くもの（18）。

3類：　三角形の区画を施し、区画内に刺突文を充填するもので、上端が無文になるもの（15 ～ 17）。

4類：　沈線のみで弧線などで区画するもの（23）。

5類：　胴部の輪郭に沿うか、表面に刺突文を前面に施すもの（19・21・22）。

6類：　無文のもので、下端に刺突文を持つものもある（20・24 ～ 34）。これらは、道尻手遺跡の分類に対比すると、１類が道尻手４類、３類が道尻手５類に比定できる。６類は道尻手６類に対比される（第 60 図）。これらの帰属時期は、伴出土器から縄文時代中期中葉から後葉の幅で考えられるが、詳細な検討が必要になるだろう。



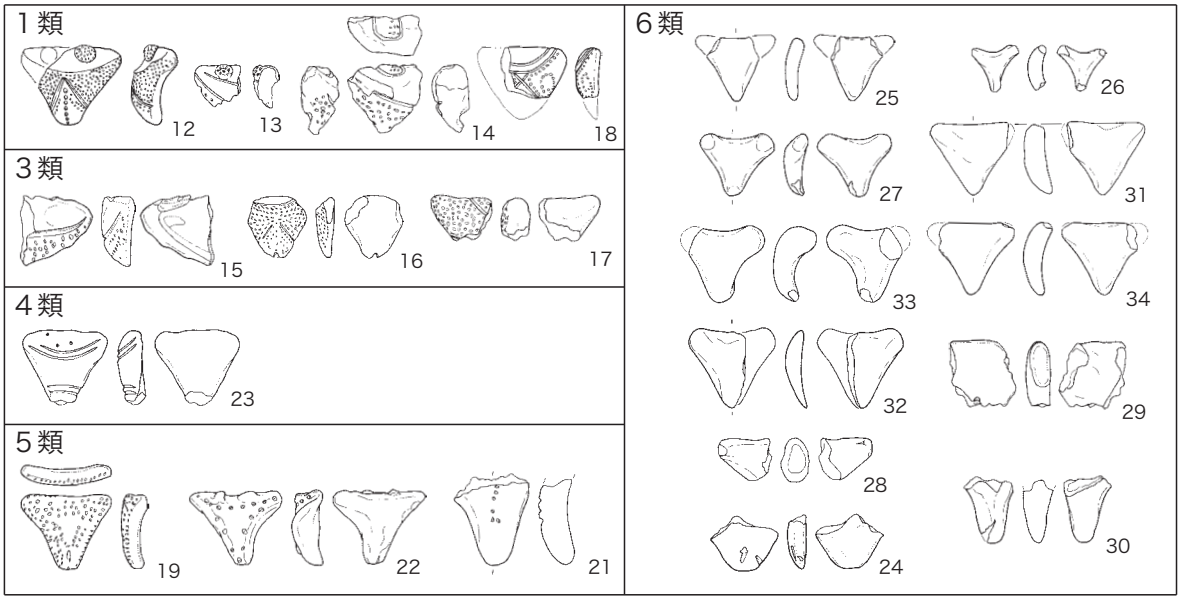
第 58 図　遺存状態模式図

b．三角形土版の特色と欠損状態

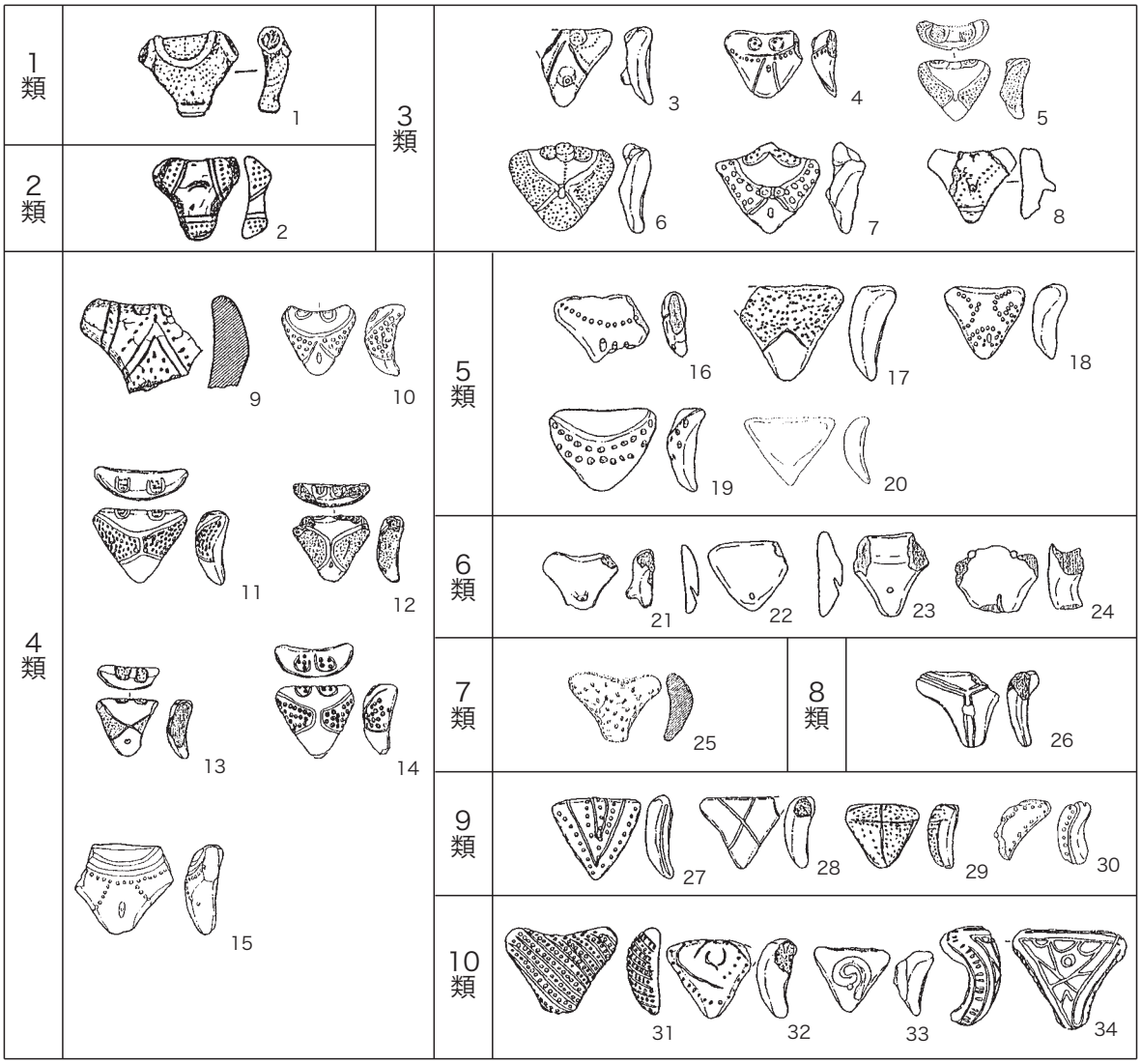
本遺跡の三角形土版は、完形もしくはほぼ完形６点、欠損品 17 点であり、遺存状態は第 58 図のように分類される。遺存状態は、Ａ型が７点、Ｂ１型が２点、Ｂ２型４点、Ｃ２型３点、、Ｄ２型４点、Ｅ１型２点、Ｆ１型１点である。これらの欠損部は、意図的に壊された可能性もあるが、欠損部からは明確ではない。その他に、赤彩などの痕跡は確認できなかった。

No	図版	注記番号	グリッド	分類	遺存部	胎土		大きさ（ｃｍ）			文様	備考
						色調	混和材	長さ	幅	厚さ		
11	第 417 図	D5	D5	不明	—	にぶい黄橙	砂粒	—	—	—	円形刺突列	
12	第 418 図	45J	45J	1 類	B1	にぶい黄橙	—	4.45	4.45	2.4	円形貼付文＋刺突文、三角形区画＋刺突文、縦位刺突列	
13	第 418 図	H7-P10	H7	1 類	B2	明黄褐	—	2.2	2.5	1.12	円形貼付文＋刺突文、三角形区画＋刺突文	
14	第 418 図	H4-4G	H4-4G	2 類	B2	褐灰	砂粒、赤色粘土粒（少）	3.4	3.8	1.9	円形区画＋刺突文、三角形区画＋刺突文	
15	第 418 図	43J	43J	3 類	C2	橙	赤色粒子（少）	3.8	3.7	1.6	三角形区画＋刺突文	
16	第 418 図	D9-14G	D9-14G	3 類	E1	浅黄橙	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	3.2	3.1	0.9	三角形区画＋刺突文	
17	第 418 図	E10-24G	E10-24G	3 類	B2	浅黄橙	砂粒、小礫（2 ㎜）	2.4	3.3	1.7	三角形区画＋刺突文	
18	第 418 図	20J-90	20J	2 類	C2	浅黄橙	砂粒	2.7	3.4	1.2	三角形区画＋刺突列、円形刺突列	
19	第 418 図	30J	30J	5 類	A	にぶい黄橙	橙色粘土粒（中）	3.8	4.6	1.4	刺突文、小孔	
20	第 418 図	N9-22G	N9-22G	6 類	D2	にぶい黄橙	砂粒、赤色粒子（中）	4.05	3.2	1.7	下部貫通孔、背面横位。縦位沈線文	
21	第 418 図	15J-3561	15J	5 類	D2	橙	砂粒	4.8	3.9	2	胴部縦位刺突列、小孔	
22	第 418 図	D10-20G	D10-20G	5 類	A	浅黄橙	砂粒、赤色粒子（少）	3.9	4.95	1.7	円形貼付文、輪郭に沿った隆帯・刺突列	
23	第 418 図	E10-21G	E10-21G	4 類	A	浅黄橙	砂粒、橙色粒子（少）	4	4.45	1.45	弧状沈線文（平）＋刺突列、下部横位沈線区画（平）	
24	第 418 図	E10-24G	E10-24G	6 類	D2	にぶい黄橙	砂粒、赤色粒子（中）	—	—	—	小孔	
25	第 418 図	30J-168	30J	6 類	E1	にぶい黄橙	白色粒子（中）、小礫（中）	3.4	2.8	1	—	
26	第 418 図	50J-P2	50J	6 類	A	橙	砂粒（少）	3.2	3.8	1.3	—	
27	第 418 図	26J	26J	6 類	A’	橙	砂粒、小礫（2 ㎜）	3.25	4.15	1.1	—	
28	第 418 図	28JA	28JA	6 類	B2	橙	砂粒、赤色粒子（少）	2.25	2.8	1.6	—	
29	第 418 図	43J	43J	6 類	C2’	橙	砂粒	3.4	3.5	1.3	—	
30	第 418 図	E11-3G	E11-3G	6 類	D2	橙	砂粒、赤色粒子（少）	3.5	2.6	1.5	—	
31	第 418 図	I3-P12	I3	6 類	A’	にぶい黄橙	砂粒	3.8	4.3	1.2	—	
32	第 418 図	E11-13G	E11-13G	6 類	F1	にぶい黄橙	砂粒、小礫（2 ㎜）	4	3.2	1.1	—	
33	第 419 図	E11-8G	E11-8G	6 類	B1	にぶい黄橙	砂粒	3.9	3.9	2.2	—	
34	第 419 図	E11-8G	E11-8G	6 類	A’	橙	砂粒、小礫（2 ㎜）	3.25	4.15	1.1	—	

第 99 表　三角形土版観察表



第 59 図　堂平遺跡の三角形土版分類図



第 60 図　道尻手遺跡の三角形土版分類図

3）ミニチュア土器（図版第 419 図）

a．分　類（第 61 図）

ミニチュア土器は、通常、「器高、口径・最大径ともに約 10cm 以内に収まるもの」（註 137）と便宜的に定義されるが、これらには少なくとも、①輪積みで製作される 10cm 前後の小形土器と、②手捏ねで製作される器高 5cm 以下のものがある。本遺跡出土のミニチュア土器は 35 点で、以下のように分類される（第 61 図・第 100 表）。

1 類：　深鉢形を呈し、口縁部に貫通孔がめぐるもの。胴部は無文が多いが、有文のものもある（35 ～ 38）。

2 類：　深鉢形を呈し、胴部に沈線や隆帯により文様を施すもの（39 ～ 45・48）。

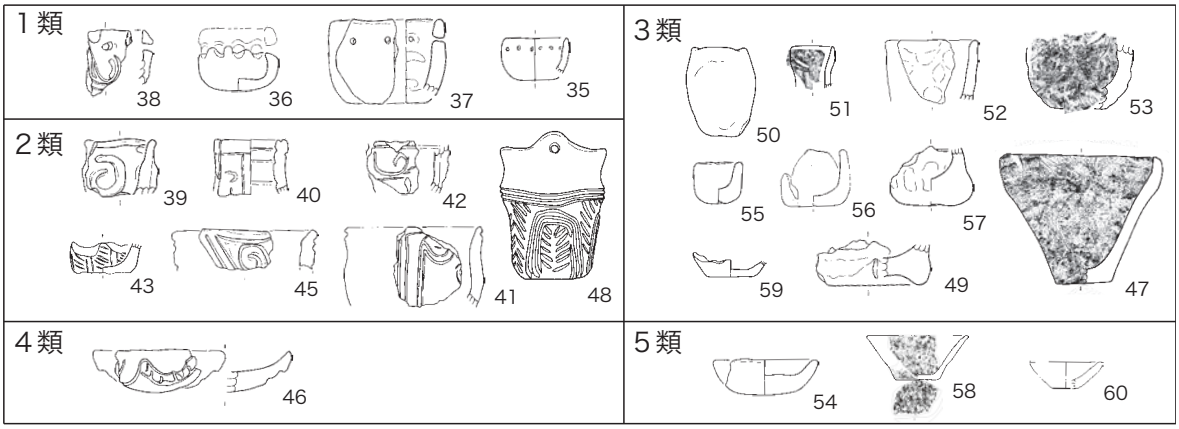
3 類：　深鉢形を呈し、胴部が無文になるもの（47・49 ～ 57）。

4 類：　鉢形もしくは皿形を呈し、有文になるもの（46）。

5 類：　鉢形もしくは皿形を呈し、無文になるもの（54・58 ～ 60）。

b．塗布物および使用痕

この種の土製品は、通常は内外面に顔料の塗布や明確な使用痕は認められないが、51 など一部の資料に顔料の塗布や使用痕が認められる。この他では、41 の内面には漆状の付着物があり、さらに 116 も漆状の付着物が認められ、これらは漆の精製や塗布時に使われた道具の可能性もある（註 138）。



第 61 図　ミニチュア土器分類図

No	図版	グリッド	分類	遺存部位	胎土		大きさ（cm）			文様	備考
					色調	混和材	器高	口径	底径		
35	第 419 図	K4	1 類	口縁部	橙	砂粒	—	3	—	円孔	
36	第 419 図	F6	1 類	胴部～底部	橙	砂粒	—	—	—	円孔	
37	第 419 図	27J	1 類	口縁部～胴部	橙	砂粒	4.4	5.4	3.9	円孔	
38	第 419 図	L13	1 類	口縁部～胴部	にぶい黄橙	砂粒	—	—	—	円孔、渦巻状懸垂文（平）	
39	第 419 図	M9	2 類	口縁部～胴部	にぶい黄橙	砂粒、小礫（少）	1.4	3.6	1.2	渦巻状懸垂文	
40	第 419 図	11J	2 類	口縁部～胴部	橙	赤色粘土粒（中）	—	2.8	—	横位沈線区画（単）、縦位懸垂文（単）	
41	第 419 図	15J	2 類	口縁部～胴部	橙	砂粒、橙色粘土粒（中）	—	6.6	—	胴部懸垂文（単）	内面に漆状の付着物。
42	第 419 図	25J	2 類	口縁部～胴部	橙	橙色粘土粒（少）	—	—	—	弧状沈線文（単）	
43	第 419 図	—	2 類	底部	橙	砂粒	—	—	—	胴部縦位懸垂文（平）、矢羽状沈線文	底部焼成時のはじけ？
44	第 419 図	L13	2 類	口縁部～胴部	にぶい黄橙	橙色粘土粒（中）	—	—	—	口縁部横位沈線区画（平）、弧状沈線文（平）	
45	第 419 図	O9	2 類	口縁部	にぶい黄橙	砂粒	—	7.2	—	—	
46	第 419 図	J3	4 類	口縁部～底部	灰黄褐	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	2.2	6.6	—	弧状沈線文＋刻目	
47	第 419 図	6J	3 類	完形	橙		6.9	7.9	2.8	—	
48	第 419 図	50J	2 類	完形	にぶい黄橙	砂粒、小礫（2 ㎜）	8	4.2	3	胴部横位隆帯区画、胴部逆U字状文、矢羽根状沈線文	
49	第 419 図	15J	3 類	底部			—	—	—	—	
50	第 419 図	H9	3 類	完形	橙	砂粒、赤色粒子（中）	4.9	2.6	1.7	—	
51	第 419 図	J6	3 類	口縁部～胴部	黒褐	砂粒	—	—	—	—	内外面に赤彩。
52	第 419 図	M9	3 類	口縁部～胴部	灰黄褐	砂粒	—	4.4	—	—	
53	第 419 図	G3	3 類	胴部	にぶい黄橙	砂粒	—	—	—	—	
54	第 419 図	50J	3 類	口縁部～底部	浅黄橙	小礫（2 ～ 3 ㎜）	1.8	5	—	—	
55	第 419 図	O10	3 類	完形	橙	砂粒	2.2	2.2	—	—	
56	第 419 図	E11	3 類	口縁部～底部	橙	小礫（2 ～ 6 ㎜）、赤色粒子（中）	4.2	4.2	12.9	—	
57	第 419 図	15J	3 類	胴部～底部	橙	砂粒、小礫（2 ㎜）	—	—	—	—	
58	第 419 図	F6	5 類	口縁部～底部	橙	砂粒、小礫（2 ㎜）	3.3	7.4	3	—	
59	第 419 図	38J	5 類	底部	にぶい黄橙	砂粒	—	—	2.4	—	
60	第 419 図	23J	5 類	口縁部～底部	にぶい黄橙	砂粒	1.4	3.4	1.2	—	

第 100 表　ミニチュア土器観察表

4）耳　飾（図版第 420 図）

a．耳飾の分類

本遺跡から出土した土製耳飾は 9 点で、そのうち 6 点がほぼ完形をとどめる（第 101 表）。これらは形態的に 4 種類に分類され、最近提示された佐藤分類（註 139）に対比したい。

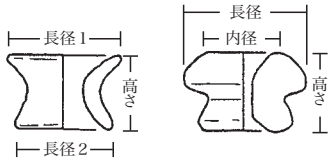
1 類：　上面と下面の径がほぼ同じ滑車形を呈し、貫通孔を持たないもの（63 ～ 65）。佐藤分類の滑車状 a 種に対比される。片側にだけ窪みを持つのが特色である。

2 類：　上面と下面の径がほぼ同じ滑車形を呈し、貫通孔を持つもので、この貫通孔に大小がある（66・68）。佐藤分類の滑車状 b 種に対比される。

3 類：　上面が下面よりも広く、漏斗状を呈するもので中空になる（61・62・69）。佐藤分類の漏斗状 a 種に対比される。61 と 62 は全面に赤彩が施される。

b．耳飾の大きさと特色

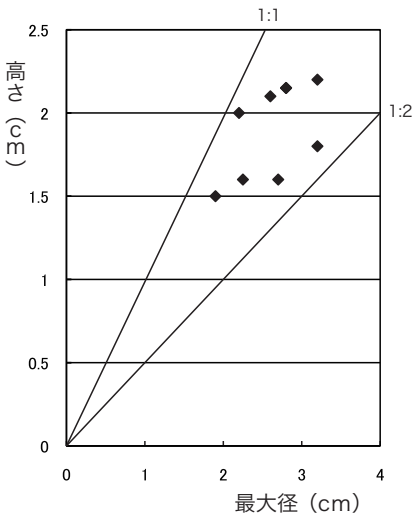
本遺跡出土の耳飾 8 点に関して、第 62 図の基準で計測し、最大径と高さの比率をグラフで示した（第 63 図）。その結果、最大径 1.9cm ～ 3.2cm の幅があり、高さは、1.5cm ～ 2.2cm の範囲に収まる。



第 62 図　計測部位

c．耳飾の出土状況

本遺跡出土の耳飾の出土状況は、遺構覆土から 7 点、遺構外は 2 点である。そのなかでも注目されるのは、フラスコ状土坑である H8-P1 と O9-P2 の覆土中より 2 点セットで出土した事例である。H8-P1 は、土坑覆土中層より耳飾 2 点がまとまって出土している（図版第 134 図）。O9-P2 は土坑覆土中層から出土した深鉢の中から耳飾 2 点が出土している（図版第 148 図）。これらは廃棄されたものというよりは、フラスコ状土坑埋没過程で墓坑として転用された事例と推定される。しかし、完形土器の中から出土するなど、単純に成人の通常埋葬に伴うものとはみなしがたい。



第 63 図　耳飾の大きさグラフ

No	図版	出土位置	分類	遺存率	胎土		大きさ (cm)				重量（g）	文様	備考
					色調	混和材	高さ	長径 1	括径	長径 2			
61	第 420 図	H8-P1	3	完形	橙	砂粒	1.8	3.2	1.7	1.95	5.5	—	内外に赤彩。
62	第 420 図	H8-P1	3	完形	橙	砂粒	2.2	3.2	1.9	2.1	7.3	—	内外に赤彩。
63	第 420 図	O9-P2	1	完形	灰白	砂粒	2.15	2.8	1.8	2.7	15.9	—	
64	第 420 図	O9-P2	1	完形	灰白	砂粒	2.15	2.8	1.75	2.8	16.2	—	
65	第 420 図	M9	1	ほぼ完形	橙	砂粒	1.6	2.25	1.65	1.95	7.4	—	
66	第 420 図	23J	2	3 分の 1	橙	砂粒	1.6	2.7	2.2	2.5	3.0	—	
67	第 420 図	51J-P2	3	完形	橙	砂粒	2.1	2.6	—	1.95	8.2	—	
68	第 420 図	—	2	4 分の 3	にぶい黄褐	砂粒	1.5	1.9	1.4	1.7	3.6	—	
69	第 420 図	J7-P1	3	2 分の 1	橙	砂粒	2	2.2	1.6	1.7	2.5	—	

第 101 表　耳飾観察表

5）その他の土製品（図版第 420 図）

その他の土製品であるが、事例が少なく明確なカテゴリーに入らないものをここで扱う（第 102 表）。

70 は窪みを有する棒状の土製品で、一端が欠損する。71 は菱形の小形の土製品である。72 は一端が偏平になる棒状の土製品で、きのこ形とも言えなくはないが、不明である。

No	図版	出土位置	分類	胎土		大きさ（cm）			文様	備考
				色調	混和材	長さ	幅	厚さ		
70	第 420 図	G3-2G	象嵌状土製品	にぶい黄橙	砂粒、小礫（2 ㎜）	6.9	3.45	1.5	象嵌状の窪み	
71	第 420 図	15J-P10	菱形土製品	明黄褐	砂粒	2.7	1.7	1		
72	第 420 図	H6	キノコ形土製品？	灰黄褐	砂粒	2.9	19	1.8		

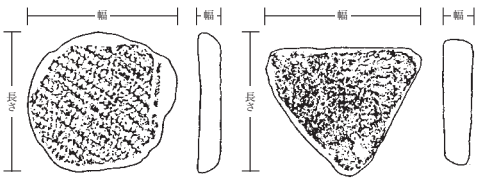
第 102 表　不明な土製品観察表

6）土製円盤（図版第 420 図～第 421 図）

本遺跡から出土した土製円盤は、50 点を数える（第 102 表）。これらの名称に関しては、「土器片加工円板」（註 140）などの名称がある。これらは土器片に加工が加えられたもので、土製品に含めているが、実際の機能・用途は明確ではない。名称を含めて、この種の遺物について再検討が必要である。

本遺跡の土製円盤は、円形を基調とするもの（A類）と三角形を基調とするもの（B類）、形態不明のもの（C類）に分類される。破断面に関しては、明確な加工痕を有するものとそうでないものがあるが、後者も平面形からこの種の遺物として認識した。

73 ～ 97 は、円形を呈するもので、98 ～ 111 は三角形を呈するものである（図版第 420 図・第 421 図）。側面の磨痕が明確なものは 73 ～ 75・78・86・99・100・102 ～ 104・106・107・108 ～ 110 があり、92 は中心部に貫通孔があり、補修孔の可能性もある。



第 64 図　計測部位

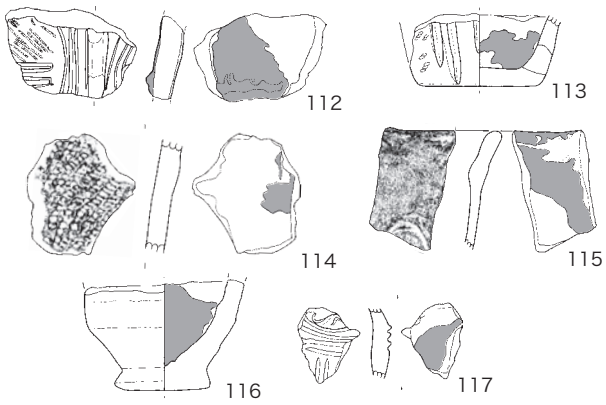
No	図版	出土位置	分類	時期	胎土		大きさ（cm）			文様	加工痕	備考
					色調	混和材	長さ	幅	厚さ			
73	第 420 図	45J	A類	2 期	橙	砂粒、小礫（2 ～ 4 ㎜）	7.1	7.2	1.6	渦巻文（平）、縄文R L	側面に磨痕。	
74	第 420 図	L9-20G	A類	2 期	灰黄褐	砂粒、小礫（2 ㎜）	4.35	4.5	1.35	胴部沈線区画（単）、波状文（単）、縄文R L	側面に磨痕。	
75	第 420 図	O10-P11	A類	2 期	にぶい黄橙	砂粒	4.75	4.75	1.05	—	側面に磨痕。	
76	第 420 図	L9-10G	A類	3 期	橙	小礫（2 ～ 3 ㎜）	2.7	2.8	1.6	横位沈線文	—	
77	第 420 図	I12-P54	A類	中期	にぶい黄橙	砂粒、小礫（2 ㎜）	4.7	4.65	1.35	縄文R L	—	
78	第 420 図	L6-P12	A類	5 期	黒褐	砂粒	3.6	3	1	磨消縄文（縄文L R）	側面に磨痕。	
79	第 420 図	I5-P3	A類	中期	にぶい黄橙	砂粒	3.2	3	1.1	縄文R L	—	
80	第 420 図	K4-P1	A類	4 期	黄褐	砂粒	4	3.1	0.75	刺突文	—	
81	第 420 図	O10-P10	A類	後期	明赤褐	砂粒	3.15	3.2	0.6	—	—	
82	第 420 図	L6-P12	A類	後期	浅黄橙	砂粒	3.9	3.45	0.95	—	—	
83	第 420 図	I5-P5	A類	4 期	にぶい黄橙	小礫（2 ～ 3 ㎜）	5.35	4.9	1.1	刺突文	—	
84	第 421 図	O10-6G	A類	5 期	にぶい黄橙	砂粒、小礫（2 ㎜）	4.8	4.65	1	三角形区画文	—	
85	第 421 図	M11-P4	A類	5 期	橙	砂粒	3.95	4.1	0.9	横位沈線文、縄文R	—	
86	第 421 図	O10-P11	A類	5 期	橙	砂粒	4.3	4.45	0.8	縦位懸垂文（沈）、縄文L R	—	
87	第 421 図	32J-132	A類	2 期	浅黄橙	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	4.6	4.65	1.15	—	側面に磨痕。	
88	第 421 図	26J-P8	A類	不明	明赤褐	砂粒	4.9	4.9	1.15	縦位懸垂文（沈）	—	
89	第 421 図	O9-6G	A類	後期	灰白	砂粒	4	4.2	1.07	縦位懸垂文（沈）	—	
90	第 421 図	L11-P14・P16	A類	中期	にぶい黄橙	砂粒	3.8	4	0.7	縦位懸垂文（沈）	—	
91	第 421 図	M12-P15	A類	5 期	橙	砂粒、小礫（2 ㎜）	3.7	3.85	0.7	渦巻状沈線文	—	
92	第 421 図	M13-P15	A類	5 期	灰黄褐	砂粒、小礫（2 ㎜）	3.7	3.4	0.7	横位沈線区画、縄文L R	補修孔有り。	
93	第 421 図	M12-P15	A類	5 期	灰黄褐	砂粒	3	2.9	1.05	縦位懸垂文（沈）	—	
94	第 421 図	N9-P5	A類	後期	褐	砂粒	2.15	2.15	0.75	—	—	
95	第 421 図	M12-P15	A類	5 期	明赤褐	砂粒	2.6	2.3	0.9	横位沈線区画	—	
96	第 421 図	M7-P6	A類	5 ～ 6 期	にぶい黄褐	砂粒	2.8	3	0.85	横位沈線区画	—	
97	第 421 図	D10-17G	A類	5 期	明赤褐	砂粒	4.8	4.6	0.85	弧状沈線文	—	
98	第 421 図	9J	B類	1 期	灰白	砂粒、雲母（少）	3.3	4.25	0.75	—	—	浅鉢片。
99	第 421 図	F9-43J	B類	中期	灰白	砂粒	4	4.65	1.2	縄文LR	側面に磨痕。	
100	第 421 図	9J	B類	1 ～ 2 期	橙	砂粒	2.9	2.63	0.95	縄文RL	側面に磨痕。	
101	第 421 図	15J	B類	中期	橙	砂粒	4.35	5.1	1.2	縄文RL	—	
102	第 421 図	11J	B類	中期	橙	砂粒	3.35	4	1.1	縄文RL	側面に磨痕。	
103	第 421 図	11J	B類	後期	橙	砂粒	2.9	3.2	0.4	縄文LR	側面に磨痕。	
104	第 421 図	3J-P10	B類	1 期	橙	砂粒	4.7	4.65	1.1	縄文LR	側面に磨痕。	浅鉢片。
105	第 421 図	13cJ	B類	中期	橙	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	3.5	3.15	1	縄文RL	—	
106	第 421 図	M6-P7	B類	後期	浅黄橙	砂粒	4.25	4.92	0.6	—	側面に磨痕。	
107	第 421 図	M6-P7	B類	5 期	橙	砂粒、小礫（2 ㎜）	3.1	2.95	0.8	横位沈線区画、縄文RL	側面に磨痕。	
108	第 421 図	26J-P7	B類	後期	橙	砂粒	3.9	4.2	0.75	—	—	
109	第 421 図	E10-23G	B類	後期	浅黄橙	砂粒	3.75	4.9	0.7	—	側面に磨痕。	
110	第 421 図	F4-P3	B類	後期	灰黄褐	砂粒	3.9	4.85	0.8	—	側面に磨痕。	
111	第 421 図	J4-P1	B類	後期	にぶい黄橙	砂粒	3.8	4.2	1.1	—	側面に磨痕。	

第 103 表　土製円盤観察表

ほとんどが中期の土器片を使用したものであり、78・81 ～ 86・89・91 ～ 97・103・106 ～ 111 が4期～５期（三十稲場式期～南三十稲場式期）の土器片を使用している。また中期末葉の沖ノ原式の肉厚な土器片や堀之内２式に見られるような薄手の土器片は確認できない。これらの用途に関しては、儀礼的なものや研磨具などの説があるが、やはりこれらは土製品を意図して製作されたというよりは、研磨具などに使用された結果の形状と想定される。

7）漆付着土器片（図版第 422 図）

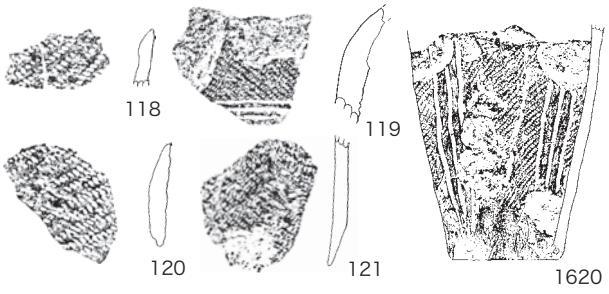
本遺跡の出土土器片の中で漆状の付着物が、塗布された状態ではなく、塊で付着する事例をまとめたものである（第 65 図・第 104 表）。いわゆる「パレット」（註 141）と言われる類であると考えられ、漆の塗布に使用された可能性がある。出土資料では、底面に帯状に付くものや土器片に部分的に付着するものなどがある。そのなかでも 116 は、第 18 号住居跡出土の小形土器で、胴上半部を欠損するが、残存する内面全体に剥がれた付着物が層を成して付着する良好な資料である。



第 65 図　漆付着土器片

8）焼成破裂土器片（図版第 422 図）

本遺跡出土の土器片のなかに、破砕した土器の表面が焼けているものが数点確認された（第 66 図・第 104 表）。これらは、土器焼成時に表面がハジケたものに形状が類似していることから、他の土器片から分離した。この種の土器片に関しては、「焼成破裂土器片」（註 142）と呼称されている。これらの特色は、剥離面まで焼成が及んで変色しており、表面が特徴的な凹凸が認められる。また第 13 号住居跡Ｐ１から完形土器に混じって胴部上半欠損した土器（1620）が出土しており、これの破砕面を観察すると同様な痕跡が確認される。このことから本資料も土器焼成時に破裂した可能性が考えられる。



第 66 図　焼成破裂土器片

これらは、焼成粘土塊とともに集落内で土器が焼成された可能性を物語っていると考えられ、単なる破片資料でも注意する必要がある。

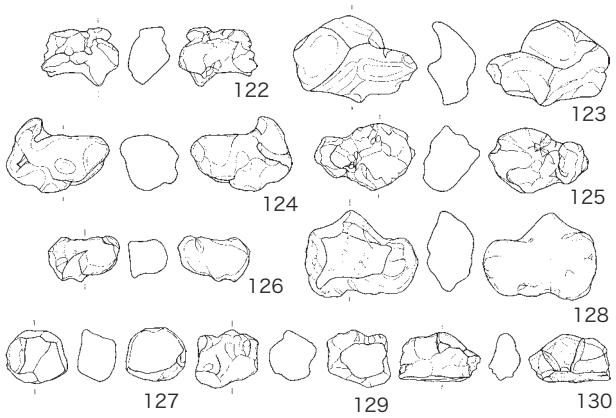
9）木の実状圧痕を持つ土器片（図版第 423 図）

本遺跡出土の土器片の中に、数点ではあるが楕円形の窪みを有する土器片が確認されている。図版第 423 図 131・132 がこれに当る。拓本によって図示したので、窪みの状態は明確に示すことができなかった。また、この窪みが実際に木の実と鑑定された訳ではないが、礫が抜け落ちたものとは明らかに異なるものである。今後、この種の土器片の事例が増加することで、その意味が明らかになる可能性があることから、ここで取り上げた。

10）焼成粘土塊（図版第 422 図～第 423 図）

本遺跡から出土した焼成粘土塊は 16 点であり、そのうち握り痕を有するものも見られる（第 67 図・第 104 表）。

縄文時代の焼成粘土塊は、山梨県考古学協会「土器から探る縄文社会」で全国的集成が行われ、少なくとも前期後半諸磯式期に出現し、中期から晩期にかけて汎日本的に認められる（註 143）。新潟県内の焼成粘土塊については、田中耕作の分類がある（註 144）。田中はA～C類に分類し、手の握り痕や木葉痕・紐痕が残るものがあるという。これらを踏まえると、本遺跡の焼成粘土塊は３類に分類される。



第 67 図　焼成粘土塊

１類：　粘土塊に明瞭な手の握り痕を残すもの（123・124・127）。

２類：　粘土塊に明瞭な痕跡がないもの（122・125・126・128・129・131・132）。

３類：　葉脈状もしくは紐状の圧痕を持つもの（130）。

No	図版	出土位置	分類	時期	遺存部位	大きさ（cm）			胎土		備考
						長さ	幅	厚さ	色調	混和材	
112	第 422 図	27 住 -P11	漆付着土器片	3b 期	胴部	4.45	6.8	1.15	橙	小礫（2～3㎜）	
113	第 422 図	L7-P4 + M9-P8	漆付着土器片	3 期	底部	3.85	8.65	8.5	にぶい黄橙	小礫（2～5㎜）	
114	第 422 図	N8-P1	漆付着土器片	中期	胴部	6.5	5.55	1.05	明赤褐	白色粘土粒（中）	
115	第 422 図	15J-P4	漆付着土器片	5 期	口縁部	6.5	4.3	0.95	橙	砂粒	
116	第 422 図	18J	漆付着土器片	2c 期	底部	5.2	8.8	8.8	橙	砂粒	
117	第 422 図	9J	漆付着土器片	1 期	胴部	4	3.2	1	橙	砂粒	
118	第 422 図	G3-8G	焼成破裂土器片	中期	胴部	3.4	5.9	0.95	灰白	橙色粘土粒（少）	
119	第 422 図	50J-P11	焼成破裂土器片	2 期	胴部	6.6	8	1.6	浅黄橙	砂粒	
120	第 422 図	15J	焼成破裂土器片	中期	胴部	7	5.9	1.1	灰白	砂粒	
121	第 422 図	N9-8-2H	焼成破裂土器片	中期	胴部	7.1	6.1	0.85	灰白	砂粒、小礫（2～3㎜）	
122	第 422 図	13JD	焼成粘土塊	—	—	3.1	3.95	2.7	橙	砂粒	
123	第 422 図	F5-2G	焼成粘土塊	—	—	4.4	6.4	2.6	にぶい黄橙	砂粒	握り痕、指紋が残る。
124	第 422 図	E9-9G	焼成粘土塊	—	—	3.95	5.2	3.3	橙	砂粒（少）	
125	第 423 図	G2	焼成粘土塊	—	—	3.45	5.25	3.65	橙	小礫（2～5㎜）	
126	第 423 図	G7	焼成粘土塊	—	—	2.5	3.7	2.3	橙	—	
127	第 423 図	H5	焼成粘土塊	—	—	2.6	3.2	2.1	橙	—	
128	第 423 図	18J	焼成粘土塊	—	—	4.7	5.85	2.55	橙	—	
129	第 423 図	F6	焼成粘土塊	—	—	2.7	3.5	2.7	橙	—	
130	第 423 図	15J	焼成粘土塊	—	—	2.6	4.2	1.7	橙	砂粒、小礫（2～3㎜）	紐状痕。
131	第 423 図	22J-P2	圧痕付土器片	中期	胴部	5.5	3.35	1.45	橙	砂粒、小礫（2～3㎜）	
132	第 423 図	19J	圧痕付土器片	中期	胴部	4.05	4	1	にぶい黄橙	砂粒	

第 104 表　漆付着土器片・焼成破裂土器片・焼成粘土塊など

3．石　器

1）石　鏃（図版第 424 図 4・5、第 425 図 22 ～ 23、第 426 図 35、第 427 図 41 ～ 42、第 430 図 70 ～ 71・74 ～ 76、第 434 図 111 ～ 112、第 435 図 121、第 438 図 153 ～ 154、第 441 図 172 ～ 174、第 444 図 207、第 445 図 217 ～ 218、第 447 図 235 ～ 236、第 449 図 257 ～ 272）

石鏃は 103 点出土し、未成品を合せると 265 点となる。未成品 162 点は、完成品の 1.6 倍の比率となり比較的高い出土数といえる。石鏃の内訳はA類(凹基無茎鏃)66 点で総数の 63% を占め、このほかB類(平基無茎鏃）17 点、C類（円基鏃）３点、D類（尖基鏃）４点、E類（有茎鏃）３点を数える。

出土石鏃の中には、B類が一定数含まれるほかにD・E類が少数だがみられる。こうした点は「縄文時代後期初頭～後期前半期に特徴的な」「形態の多様化」した状態（註 145）を示している可能性がある。

分　類（第 68 図 1）　形態分類は完成品を対象として基部形状と側縁部形状から以下のように分類した。さらにA類の基部形状は脚部の抉りの深幅比１：1.3 を境に抉りが深いもの（A１類）と浅いもの（A２類）に細分した。

A１類：凹基無茎鏃で、基部の抉りが深いもの。

　A１a：尖頭部側縁が直線的となるもの。　A１b：尖頭部側縁が緩く内湾するもの。

A２類：凹基無茎鏃で、基部の抉りが深いもの。

　A２a：尖頭部側縁が直線的となるもの。　A２b：尖頭部側縁が緩く内湾するもの。

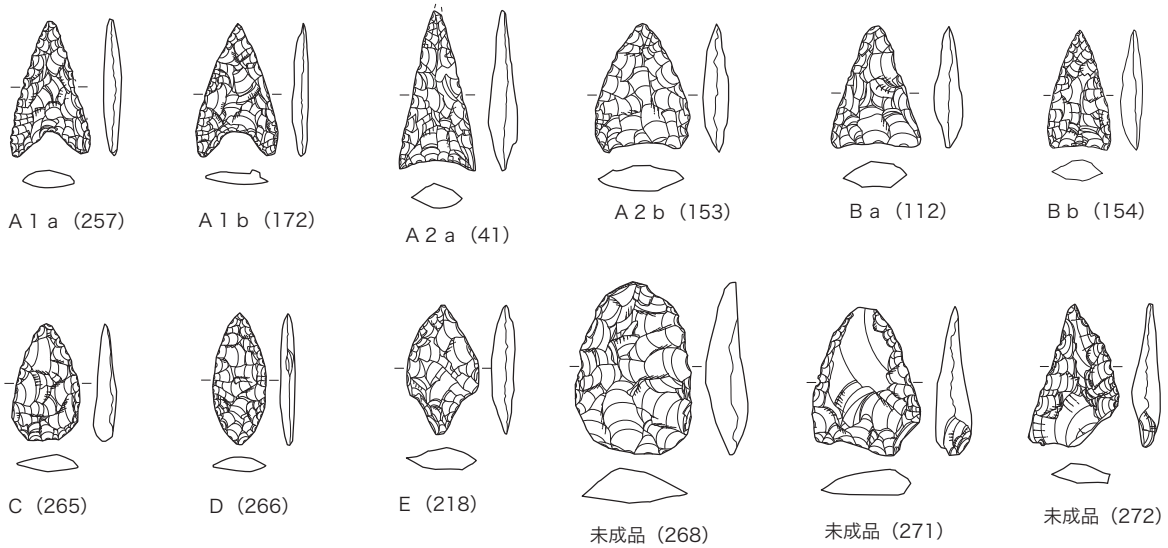
B類：平基無茎鏃

　Ba：尖頭部側縁が直線的となるもの。　Bb：尖頭部側縁が緩く内湾するもの。

C類：基部が円形をなすもの（円基鏃）

D類：基部が尖形となるもの（尖基鏃）

E類：基部に茎部をもつもの（有茎鏃）



１．石鏃分類図

第 68 図　石鏃（１）

使用石材(第69図1)　石鏃の使用石材は、在地石材とした珪質頁岩(B)が37点と高い数値を示し、次いで、非在地石材とした珪質頁岩（A）15点、無斑晶ガラス質安山岩16点、黒曜石10点となる。石鏃未成品の使用石材では、珪質頁岩（B）が石鏃未成品総数の46%（75点）を占め、次いで、珪質頁岩（A）の17.3%（28点)、頁岩の11.1%（18点）となる。石鏃未成品の数量の多い珪質頁岩・頁岩を合わせると石鏃未成品全体の74.7%を占めることになる。

一方、これと対照的なのは黒曜石である。内訳でみると、石鏃では10点（9.7%）に対して石鏃未成品はわずか2点（0.1%）の利用となる。黒曜石は、他の石材と比較しても、極端に石鏃未成品の占める数量が少ない石材といえる。以上の要因として、堂平遺跡における黒曜石製の石鏃製作が極めて限定的に行われていた、もしくは黒曜石製の石器製作が極めて製品率の高い石材といった理由が考えられる。
結論を言うと、堂平遺跡の出土資料には黒曜石製の石核や剥片、砕片、調整剥片などが極めて少ないこと、また、石鏃製作に十分な大きさの素材が見当たらないなどの理由から、堂平遺跡出土の黒曜石製石鏃の多くは主に製品・半製品段階で遺跡内に搬入されたことが想定される。

本遺跡からは、比較的多数の石鏃未成品が出土したことから、遺跡内での安定的な石鏃製作が行われたことが予想される。こうした石鏃製作は、上記の石材内容から、珪質頁岩･頁岩を主体としたものであったことが覗える。

各石材を分類別に利用傾向をみると、黒曜石・珪質頁岩（A）がＡ１・Ａ２類（凹基無茎石鏃）にやや高い利用傾向がみられるが、頁岩・珪質頁岩（B）では分類の違いによる利用の差異を見出すことはできない。したがって、石材と分類差にそれほど強い結びつきがあったとは考えられず、(A)(B)の珪質頁岩を主体とした石材選択は何らかの形態の製作に特化したものではないといえるだろう。
欠損状況（第69図2）　103点の完成品のうち、48点に欠損が認められた。欠損部位によって以下の6類に分類される。先端部欠損が最も多く、脚部欠損が次いで多くなる。

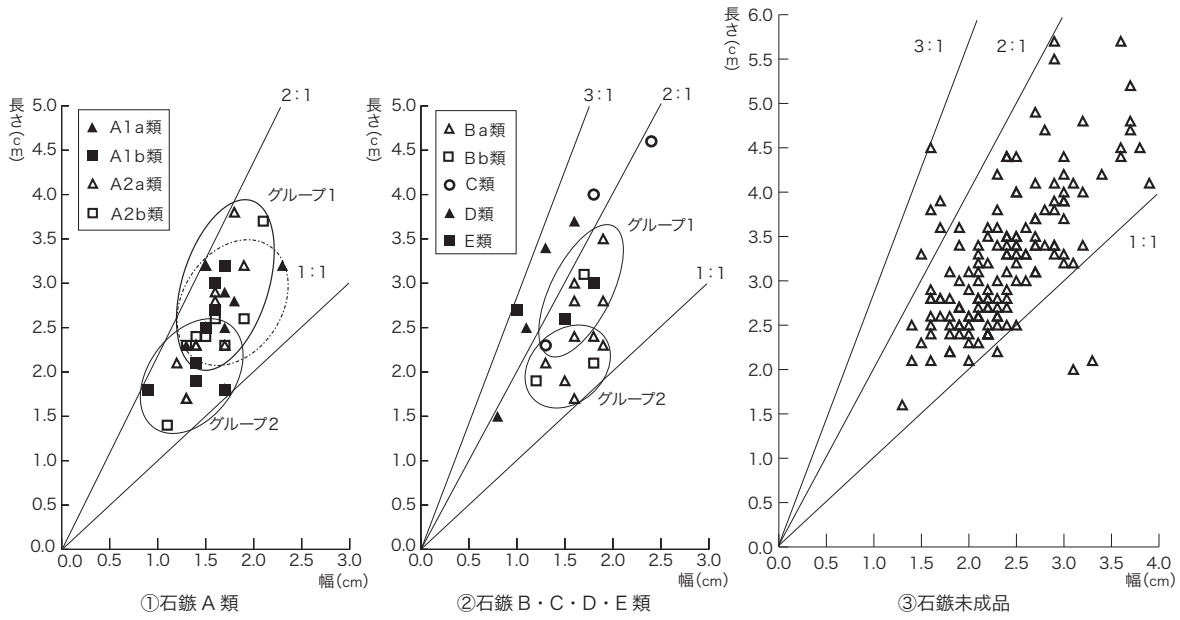
		A1a	A1b	A1	A2a	A2b	A2	Ba	Bb	B	C	D	E	不明	小計	未成品	計	未成品の形態別内訳
非在石材	黒曜石	2	2		1	4								1	10	2	12	
	珪質頁岩（A）	2	1		5	2		1				1		3	15	28	43	(A類1、C類3)
在地石材2	流紋岩	1						1						1	3	5	8	(C類1)
	鉄石英							1							1	2	3	(A2a1)
	チャート	2	3					1	1						7	6	13	
在地石材1	無斑晶ガラス質安山岩		2		3	5	1	3					1	1	16	16	32	(C類2)
	安山岩														0	1	1	
	珪質頁岩（B）	4	3		7	8		5	2	1	3	2	1	1	37	75	112	(A類2、B類2、C類4、E類1)
	頁岩	1			1	1		1				1		2	7	18	25	(B類2)
	凝灰岩質頁岩		2		3								1	1	7	9	13	
計		12	13	0	20	20	1	13	3	1	3	4	3	10	103	162	262	

1．石鏃石材組成表

	A1a	A1b	A1	A2a	A2b	A2	Ba	Bb	B	C	D	E	不明	計	未成品
完　形	5	7		12	9		9	3		3	4	3		55	155
先端欠損	3	3		5	8	1	2							22	1
先端衝撃剥離		1												1	
脚部欠損	2	2		3	2		2		1				6	18	1
先端・脚部欠損	2												1	3	1
先端部破片														0	
茎部欠損														0	
その他・不明					1								3	4	4
計	12	13	0	20	20	1	13	3	1	3	4	3	10	103	162

2．石鏃残存部位別数量表

第69図　石鏃（2）



1．石鏃長幅分布図

第 70 図　石鏃（3）

大きさ（第 70 図 1）　長幅分布図には、長幅値の測定可能な石鏃・石鏃未成品を分類ごとに示した。石鏃が長さ 1.4 ～ 4.6cm の分布に対し、石鏃未成品では長さ 1.6 ～ 5.7cm に分布し、石鏃未成品は石鏃と同等ないしそれ以上であることから、調整加工によって、身幅を減じた結果、石鏃となる様子が看て取れる。

石鏃の大きさについて、まず、無茎石鏃とそれ以外での長幅分布についてみる。A・B類（無茎石鏃）は長さ：1.4 ～ 3.6cm、幅：0.9 ～ 2.5cm、長幅比 1：1 ～ 2：1 に分布する。これに対して、C・D・E類は長さ：1.5 ～ 4.6cm、幅：1.5 ～ 4.6cm、長幅比 1.5：1 ～ 3：1 に分布がみられる。C・D・E類の石鏃は、基部に装着部分が加わることで、無茎石鏃よりも縦長の傾向が示されたものと考えられる。次に、A1b・A2a・A2b・Ba・Bb類（無茎石鏃）それぞれの長幅分布では、長幅比 1.5：1 ～ 2：1 の間に分布する（グループ 1）と、長幅比 1：1 ～ 2：1 の間に分布する（グループ 2）に区分される。これら二つのグループは長さ 2.0 ～ 2.5cm、幅 1.2 ～ 1.5cm 付近を境に長幅比率の変化が認められる。一定の長幅比率で区分される大小のグループの存在は、剥離の新旧関係から欠損後のリダクションによる変化（註 146）を推測できるものがないことから、規格の差による二種類の石鏃が存在したと考えることも可能だろう。

ここで、長幅分布に二つのグループが表出した理由について、使用時の状態を仮定して考えてみたい。石鏃は、矢柄に（または根ばさみを加えて）装着した状態で一個の道具としての機能を持ったと考えられる。このため、石鏃の基部幅は機能上、矢柄幅に規制される点を考慮して考えるみたい（註 147）。長幅分布図をみると、石鏃の幅は概ね 2cm を大きく超えるものがない点があげられる。これを矢柄装着との関係から、矢柄（または根はさみ）に装着可能な石鏃の幅限界と仮定したい。このような仮定の場合、長さ 2.5cm、幅 1.5cm 以下の小形の石鏃には矢柄による石鏃幅の規制が弱く、長さ 2.5cm、幅 1.5cm を超える大形の石鏃では幅限界による規制のため縦長志向の石鏃になると解釈することができる。加えて、装着による幅限界によって身幅が制限された場合、長軸を増すためには器厚を減じることによって石鏃の重量増

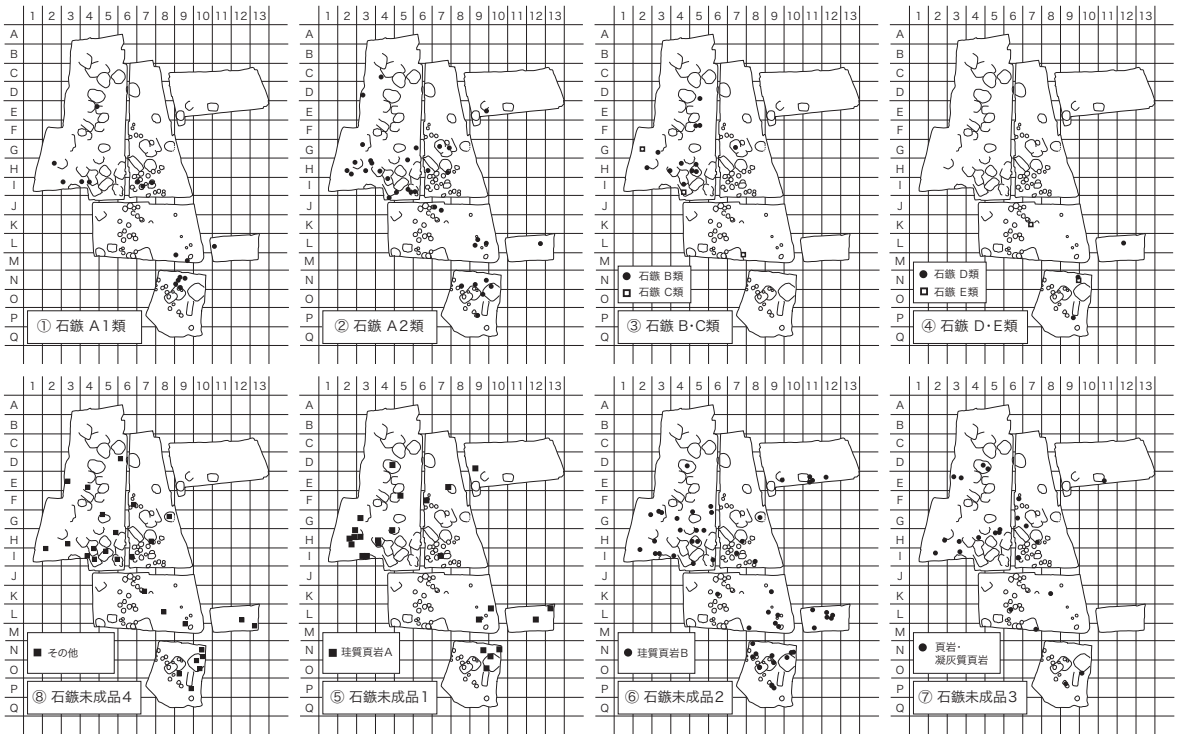
加を抑えることが可能であると予想される。

分布・時期（第71図1・2） 石鏃の出土位置の内訳は、住居跡23点、フラスコ状土坑3点、土坑15点、包含層その他から63点となる。また、石鏃未成品では、住居跡20点、フラスコ状土坑7点、土坑40点、包含層その他では95点が出土した。

出土遺物の帰属時期がまとまった遺構からは、石鏃A２類4点、石鏃未成品14点出土した。石鏃A２類では２～３期､石鏃未成品では１～３期の遺構からとなる。石材では､珪質頁岩A製の未成品が２期（大木８ｂ式並行期）以降、３ｂ期までに各期１点ずつみられる。

			石鏃（完成品）											石鏃未成品	計	出土遺構
			A1	A2	A	Ba	Bb	B	C	D	E	不明	小計			
1期（大木8a式並行）	非在地石材	黒曜石											0		0	第45号住居跡
		珪質頁岩A											0		0	
	在地石材2												0		0	
	在地石材1												0	3	3	
	小計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	
2期（大木8b式並行）	非在地石材	黒曜石											0		0	H7-P2、H7-P10、F6-P6（フラスコ状土坑）
		珪質頁岩A											0	1	1	
	在地石材2												0	1	1	
	在地石材1			1									1	3	4	
	小計		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	6	
3a期（沖ノ原Ⅰ式）	非在地石材	黒曜石		2									2		2	第23・50号住居跡、K8-P31（フラスコ状土坑）
		珪質頁岩A										1	1	1	2	
	在地石材2												0	2	2	
	在地石材1												0	2	2	
	小計		0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	3	5	8	
3b期（沖ノ原Ⅱ式）	非在地石材	黒曜石											0		0	第15号住居跡
		珪質頁岩A		1									1	1	2	
	在地石材2												0		0	
	在地石材1												0		0	
	小計		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	
計			0	4	0	0	0	0	0	0	0	1	5	14	19	

1．時期別遺構出土数量表



2．石鏃・石鏃未成品出土分布図

第71図　石鏃（4）

2）石　槍（図版第 430 図 77、第 433 図 101、第 449 図 273 ～ 275）

石槍としたものは、総数 13 点出土した。使用石材・調整などでは打製石斧に共通する点が多く、長軸の両端が尖刃となる打製石斧とみることもできる。破片資料などは他の器種に分類されている可能性も高い。分類別の内訳では、A類が２点、B類（木葉形）が８点、不明が３点となる。

分　類（第 72 図 1） 平面形状から以下のように分類した。また、B 類としたものは側縁加工によって細分した。

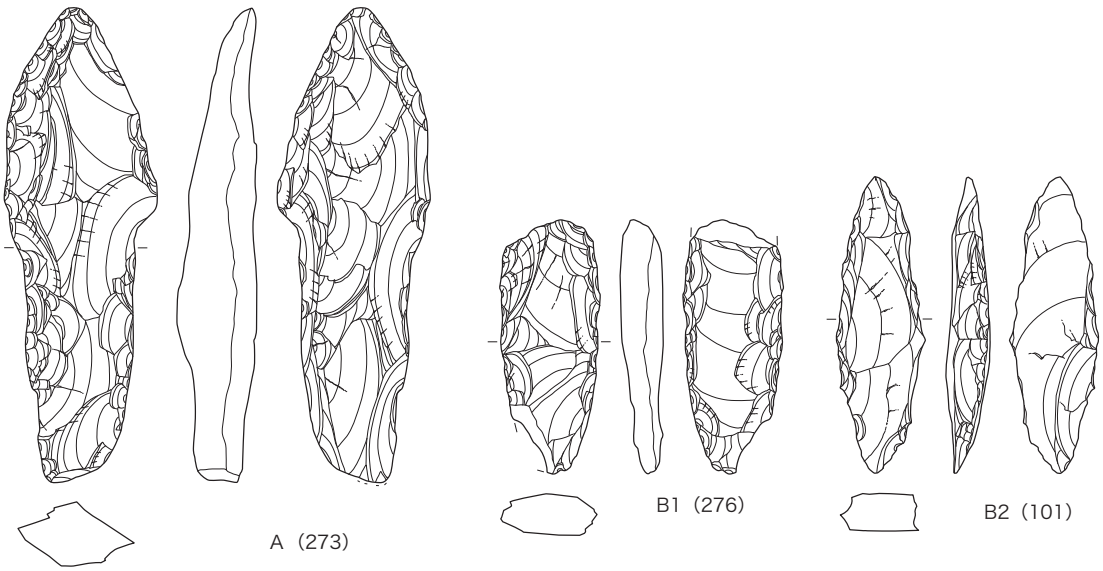
A類：幅広で舌状となる基部を持つもので、「抉入尖頭器」に類するもの（註 148）。

B類：幅狭の木葉状を呈するもの。

B１類：両側縁を両面調整によって成形されたもの。

B２類：両側縁を裏面からの片面調整によって成形されたもの。

使用石材（第 72 図 2） 石槍に使用された石材には、頁岩４点、無斑晶ガラス質安山岩３点、凝灰岩質頁岩３点などがみられる。使用石材はすべて在地石材１であり、分類別には使用石材での差異はみられない。また、本器種の使用石材は、頁岩や凝灰岩質頁岩、安山岩といった硬質とは言えない石材によって占められる。このような石材利用は、堂平遺跡出土の打製石斧や三脚石器、板状石器といった中形から大形の剥片石器全般的にみられる内容といえる。



1．石槍分類図

	A	B１	B２	不明	計
無斑晶ガラス質安山岩	1	1		1	3
安山岩		1		1	2
珪質頁岩 B		1			1
頁岩	1	2	1		4
凝灰岩質頁岩		1	1	1	3
計	2	6	2	3	13

2．石槍石材組成表

	A	B１	B２	不明	計
完形	2	4	2		8
先端部欠損					0
基部欠損		1		1	2
側縁欠損		1			1
先端部破片				2	2
計	2	6	2	3	13

3．石槍残存部位別数量表

第 72 図　石槍（１）

したがって、上記のような石材選択は、本器種の機能的な側面からの要求よりも大形の剥片素材を用いるにあたって入手の利便性が優先された結果と考えられる。そして、本器種の使用石材に珪質頁岩や無斑晶ガラス質安山岩がやや多く占めている点あたりが機能性を求めた石材選択の現われであったとみられるのではないだろうか。

素　材（第73図1） 素材となる剥片形状では、A類には横長剥片1点、不明1点となり、B類には縦長剥片2点、横長剥片3点、不明1点が利用される。分類の違いによる素材形状の差は見られない。

大きさ（第73図2）石槍は長幅比率でみると、4：1～1.5：1までのやや広い分布を示す。また、A類は長幅比4：1付近、長さ12～13cm、幅3～5cmとやや細身・大形を呈する。これに対して、B類では長さ6～9cm、幅2～5cmに分布し、両者の大きさの差は歴然である。このような大きさの差が形態差によるとは考えにくく、本遺跡ではB類の大形となるものが遺物として残されなかったためと思われる。むしろ、A類が大形品のみである点や少数の出土である点に注意したい。本遺跡では2点のみの出土だが、こうした様相は同時期の周辺遺跡でも同様なあり方を示しており、A類が一定の大きさを維持した希少遺物という点で、B類とは異なる道具であった可能性が考えられる（註149）。

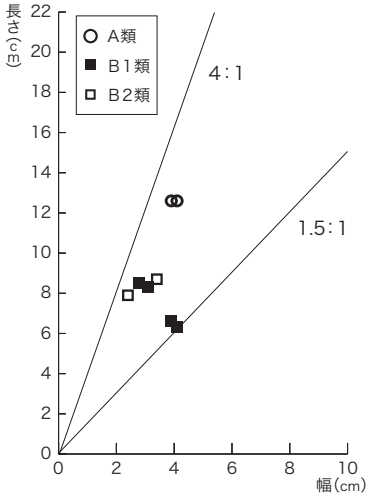
時期・分布（第73図3）出土遺物の時期が特定された遺構では、1期（大木8a式並行期）の9号住居跡からB1類が1点出土した。出土位置の内訳は、住居跡4点、包含層その他からは10点の出土となる。他の器種と同様、住居跡・住居跡周辺やピット群付近に分布がみられる。

	A	B1	B2	不明	計
縦長剥片		1	1		2
横長剥片	1	2	1	1	5
剥　片		2			2
不　明	1	1		2	4
計	2	6	2	3	13

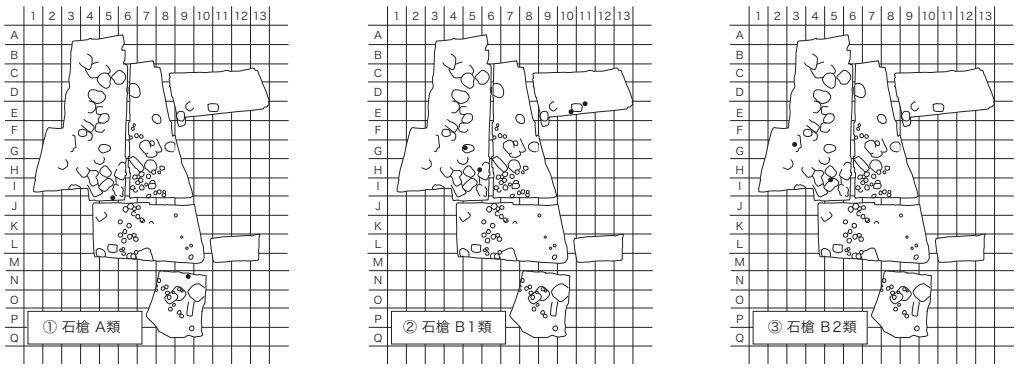
1．石槍素材別数量表

	A	B1	B2	不明	計	出土遺構
1期 （大木8a式並行）		1	0	0	1	第9号住居跡
計	0	1	0	0	1	

3．石槍時期別遺構出土数量表



2．石槍長幅分布図



4．石槍出土分布図

第73図　石槍（2）

3）石　錐（図版第 424 図 6、第 425 図 17・24、第 428 図 51、第 430 図 66、第 433 図 102、第 434 図 113、第 436 図 134、第 442 図 192、第 446 図 229、第 447 図 237、第 450 図 277 ～ 288）

石錐としたものは総数 80 点が出土した。道尻手遺跡の報告と同様に従来、不定形石器（D類：尖類部を持つもので錐部を持つもの）に分類された一部についても本類に含め数値化した。各分類の内訳は、A１類７点、A２類２点、B類 53 点、C類 11 点、D類６点、不明１点を数える。

分　類（第 74 図１）　分類は機能部の作出方法から４つに大別される。

A類：押圧剥離による両面加工が器体のほぼ全面に施されるもの。

A１類：摘みが作出されるもの。　A２類：棒状をなすもの。

B類：小型・中型剥離が器体の一部にのみ施され、機能部（錐部）が作出されるもの。

C類：中型・大型剥離による二次加工によって機能部（錐部）が作出されるもの。

C １類：片面からの二次加工によって成形されるもの。

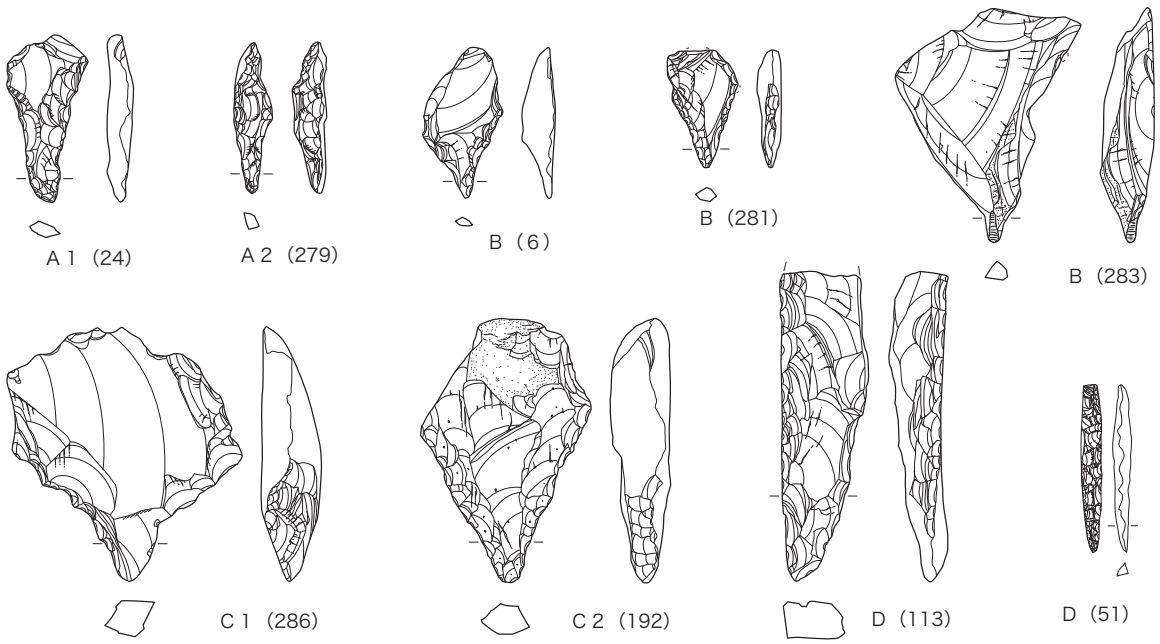
C ２類：両面からの二次加工によって成形されるもの。

D類：角柱状の剥片を素材とし、両側からの二次加工によって棒状となるもの。

使用石材（第 75 図１）　石錐に用いられる石材は、在地石材とした珪質頁岩（B）が 32 点と最も多く、頁岩 22 点、無斑晶ガラス質安山岩８点、珪質頁岩（A）７点などがこれに次ぐ。石錐には小形の剥片を素材としたA・B類の占める割合が高く、そうした点で石鏃やピエス・エスキーユとは石材の選択に類似性が高いものと考えられる。

二次加工（第 75 図３）　A・B・C類の特徴としては、素材剥片の打面側を摘み部とし、錐部を素材の縁辺に作り出すものが多くみられる。これは厚手のバルブ部分を摘み部に利用し、薄手で加工の容易な素材縁辺を錐部としたものと考えられる。

素　材（第 75 図３・４）　石錐の素材は、縦長剥片８点、横長剥片 12 点、剥片 27 点、折断剥片 10 点、角柱状の剥片８点となる。横長剥片・剥片の占める率が高いのは、先の述べたように、二次加工と素材



第 74 図　石錐分類図

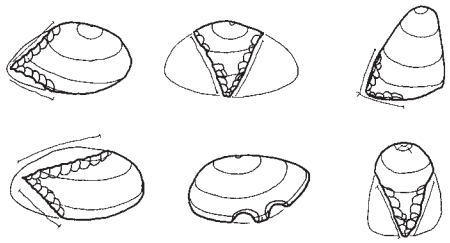
位置との関係から摘み部を大きく取るためと考えられる。このほか、二次加工が全面に及ばないB・C類では素材に関して以下の特徴が見られる。B類では石錐の片側あるいは両側の側縁には、錐部の成形と調整打面を目的と考えられる折断面が観察されるものが多く、一方、C類では素材に折断などによる打面作出はみられない。

A・B・C類の素材の大きさでは、概ねA類が小形の横長剥片・剥片、C類が中・大形の剥片、B類はその双方を素材とする。また、D類には小形・大形の素材が用いられ、折断などにより角柱状となる剥片を素材とすることで、素材自体がほぼ石錐の形状を成している。

使用痕　錐部に線状痕・光沢が観察されるものがB類のみに3点みられた。

		A1	A2	B	C1	C2	C	D	不明	計
非在地石材	黒曜石		1							1
	珪質頁岩（A）	3		4						7
在地石材2	流紋岩					1				1
	鉄石英									0
	チャート							2		2
在地石材1	無斑晶ガラス質安山岩	1	1	5		1				8
	安山岩									0
	デイサイト			1						1
	珪質頁岩（B）	3		24		2	1	1	1	32
	頁岩			14	4	1		3		22
	凝灰岩質頁岩			5		1				6
計		7	2	53	4	6	1	6	1	80

1．石錐石材組成表



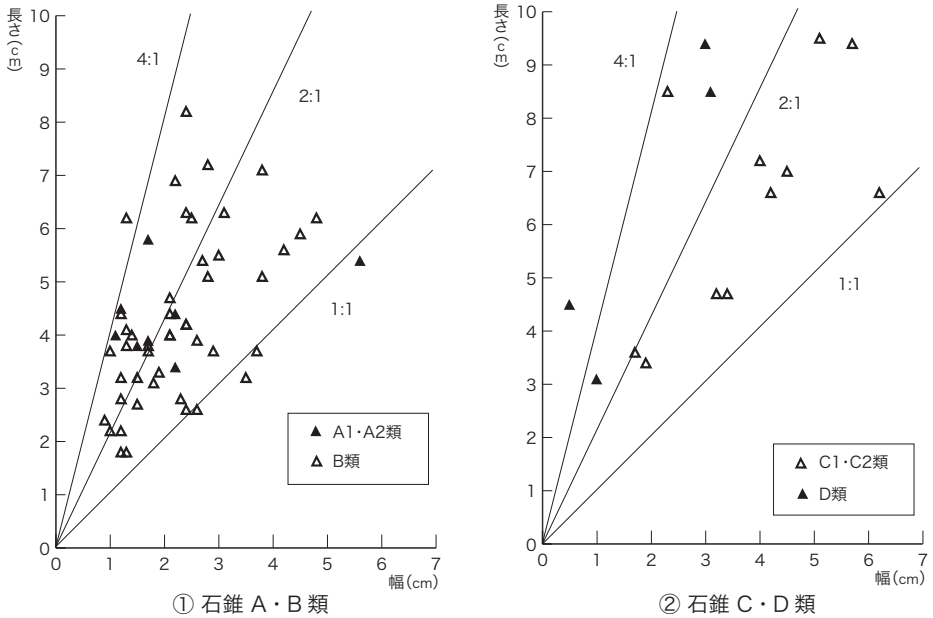
3．石錐素材模式図

	A1	A2	B	C1	C2	C	D	不明	計
縦長剥片			6		2				8
横長剥片	2		7	3					12
剥片			23	1	2	1			27
折断剥片	1		9						10
角柱状剥片			1				6		8
その他			3						3
不明	4	2	4		2			1	12
計	7	2	53	4	6	1	6	1	80

4．石錐類型別素材表

	A1	A2	B	C1	C2	C	D	不明	計
完形・略完形	7	2	45	4	6	1	4	1	70
基部・摘み部欠損			1				2		3
錐部欠損			7						7
計	7	2	53	4	6	1	6	1	80

2．石錐残存部位別数量表



① 石錐 A・B 類　② 石錐 C・D 類

5．石錐長幅分布

第 75 図　石錐（1）

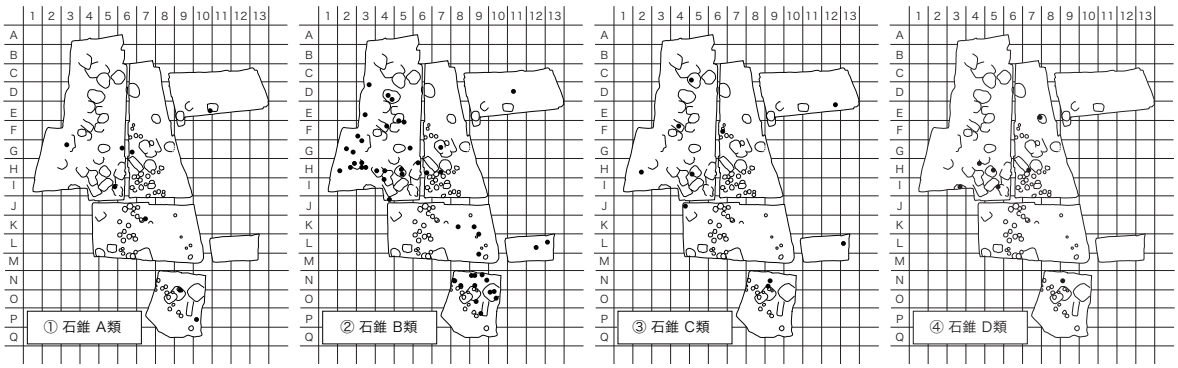
大きさ（第75図4） 分類ごとの長幅分布を示す。長幅比では、摘み部幅によって1：1～4：1付近に分布がみられる。分類別ではAからC類では長幅比の違いはなく、摘み部を持たないA2類・D類のみ4：1付近に集中がみられる。大きさの分布は、長さ：1.8～9.5cm、幅：0.5～6.2cmとなる。分類別での大きさの差は、概ねA類≦B類≦C類の関係となり、A・B類とC類は選択される素材の大きさの違い、A類とB類の差は二次加工の手数の差を表すと考えられる。器種全体では、長さ5cmを境に中形・小形のピークを持つ。また、B類とC類では長さ7cm付近を境に大形・中形のピークがみられる。

時　期（第76図1） 出土遺物の時期が特定された遺構からは7点が出土した。分類別では、1～3期にB・C類がみられ、A類は3a期にのみみられた。数量が少ないため、以上の内訳がそのまま各分類の時期を示すものとはいえないが、一定の傾向を表しているものと考えられる。

分　布（第76図2） 出土位置の内訳は、住居跡19点、フラスコ状土坑3点、土坑10点、包含層その他が48点となる。住居跡出土数は少数だが、包含層出土の多くは住居跡の周辺での分布となる。

			A1	A2	B	C1	C2	C	D	不明	小計	出土遺構
1期（大木8a式並行）	非在地	黒曜石									0	第9号住居跡
	石材	珪質頁岩A									0	
	在地石材2										0	
	在地石材1				2						2	
	小計		0	0	2	0	0	0	0	0	2	
2期（大木8b式並行）	非在地	黒曜石									0	F6-P6（フラスコ状土坑）
	石材	珪質頁岩A									0	
	在地石材2										0	
	在地石材1					1					1	
	小計		0	0	0	1	0	0	0	0	1	
2～3期（大木8b式並行～沖ノ原Ⅰ式）	非在地	黒曜石									0	H7-P2（フラスコ状土坑）
	石材	珪質頁岩A									0	
	在地石材2										0	
	在地石材1				1		1				2	
	小計		0	0	1	0	1	0	0	0	2	
3a期（沖ノ原Ⅰ式）	非在地	黒曜石		1							1	第23･38号住居跡
	石材	珪質頁岩A									0	
	在地石材2										0	
	在地石材1		1								1	
	小計		1	1	0	0	0	0	0	0	2	
計			1	1	3	1	1	0	0	0	7	

1．石錐時期別遺構出土数量表



2．石錐出土分布図

第76図　石錐（2）

4）ピエス・エスキーユ（図版第 441 図 175、第 444 図 206、第 450 図 289 ～ 294）

ピエス･エスキーユとしたものは、総数 245 点出土した。各類型の内訳はA類が 219 点、B類が 20 点、不明が 6 点を数える。

分　類（第 77 図 1）両極剥離による刃部の位置によって２つに分類される。

A類：２極１対の両極剥離痕を持つもの

B類：４極２対の両極剥離痕を持つもの

使用石材（第 77 図 2）　黒曜石や珪質頁岩、チャート、鉄石英など非在地石材や在地石材２も含め、使用される石材の種類が多い器種といえる。使用石材の中では珪質頁岩 A・B や頁岩の使用比率が高く、両石材で 204 点となり、全体の 83% を占める。

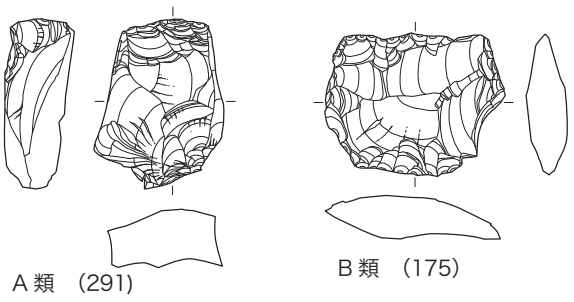
珪質頁岩の使用比率の高いことは、石鏃の石材選択とも共通する点といえる。石鏃の素材作出や調整時の両極加撃を用いるかについて観察した結果、石鏃未成品とした中に両極加撃痕がみられる資料が７点、また、本器種の一部に石鏃未成品に類似する資料が数点に観察された。

これら観察結果から、本遺跡における両極剥離による石鏃製作を否定することはできない。しかしながら、出土資料の中で、両極加撃と石鏃製作を繋ぐ素材は極めて少数に留まるものであることから、本遺跡での石鏃製作と両極剥離技術とは積極的には結びつくものではないと考える。したがって、本器種と石鏃の素材選択の類似性は、本遺跡での小形剥片石器の石材選択の特徴を現すものとしたい。

素　材　本器種の素材は、A類で剥片 94 点、折断剥片 12 点、石核 35 点、分割礫やズリなど原石に近い状態のもの３点、また、B類では石核５点、剥片７点、不明８点となる。このほか不明なものには、打製石斧破片の破断面に対して両極剥離痕が観察されるものなどがみられる。

なお、原礫に近い状態のものや石核状の素材としたものは、通常には剥片素材とは成り得ない形状のものである。また､打製石斧破片の転用などの例を考え合わせると､本器種は他の器種に使用不可能となった素材が多く含まれる可能性があると思われる。

大きさ　（第 78 図 1）類型別に長幅分布を示す。なお､数量の多いA類は分布内容に石材情報を加味した。A類は５：１～２：１の分布に対し、B類は長幅比 1.5：１～１：1.5 に分布し、B類に長幅差が少なくなる傾向が認められる。これはB類が二対の両極剥離によって身丈・身幅が減じられたことを示す。



1．ピエス・エスキーユ分類図

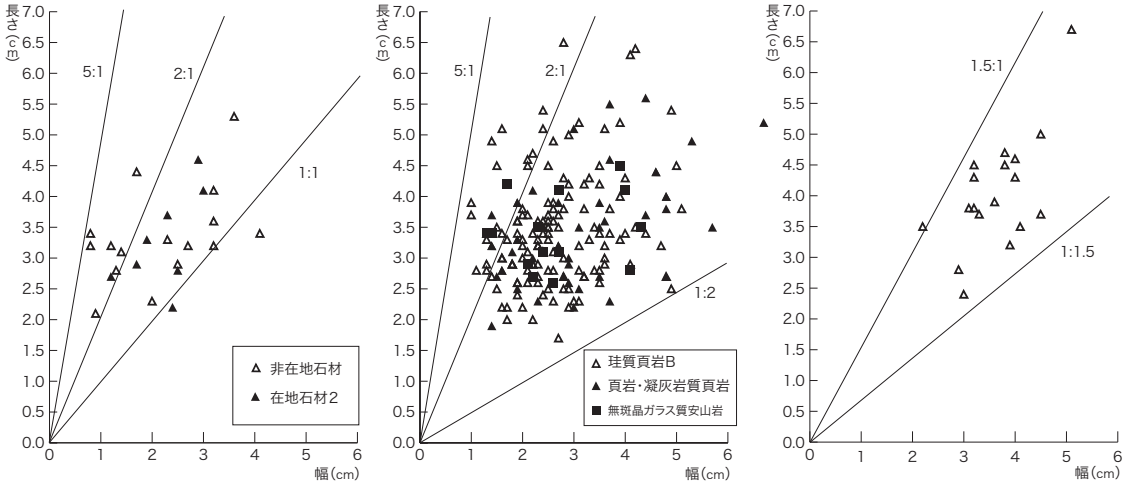
		A	B	不明	計
非在地石材	黒曜石	1		1	2
	珪質頁岩（A）	16	2		18
在地石材２	流紋岩	3	1		4
	チャート	3			3
	赤玉	2			2
	玉髄	1			1
在地石材１	無斑晶ガラス質安山岩	16	1		17
	安山岩				0
	珪質頁岩（B）	132	10	3	145
	頁岩	37	4		41
	凝灰岩質頁岩	7	2	1	10
不明		1		1	2
計		219	20	6	245

2．ピエス・エスキーユ　石材組成表

第 77 図　ピエス・エスキーユ（１）

次に、A類の各石材での長幅分布をみる。非在地石材と在地石材２では５：１～１：１の間に分布するのに対して、在地石材１を素材としたものは５：１～１：２の間の分布を示すことから、やや幅広となる傾向が覗える。特に頁岩・凝灰岩質頁岩に幅広となる傾向が高いことが看て取れる。

分布･時期(第 78 図 2･3)出土位置の内訳では､住居跡出土が 65 点､フラスコ状土坑６点､土坑出土が 37 点､包含層を含むその他が 137 点となる。出土分布では、Ａ・Ｂ類ともに分布に大きな変化はなく、住居跡や土坑の集中域付近に分布が確認された。出土遺物の帰属時期がまとまった遺構からは 11 点が出土し、Ａ類では１期・３期・３～４期、Ｂ類では１期のみが確認される。以上の内容から、本遺跡でのピエス・エスキーユは、概ね全時期に亘って使用されたものと考えられる。

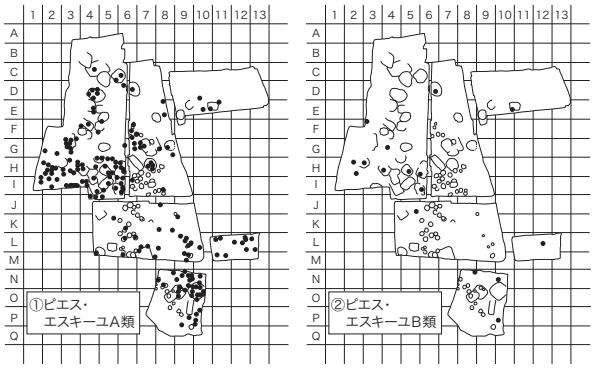


① ピエス・エスキーユＡ類（1）　② ピエス・エスキーユＡ類（2）　③ ピエス・エスキーユＢ類

1．ピエス・エスキーユ長幅分布図

			A	B	不明	計	出土遺構
1期 (大木8ａ式並行)	非在地石材	黒曜石				0	第9・11号住居跡
		珪質頁岩A				0	
	在地石材2					0	
	在地石材1		2	1		3	
	小計		2	1	0	3	
2期 (大木8ｂ式並行)	非在地石材	黒曜石				0	
		珪質頁岩A				0	
	在地石材2					0	
	在地石材1					0	
	小計		0	0	0	0	
3ａ期 (沖ノ原Ⅰ式)	非在地石材	黒曜石				0	第23・50号住居跡、K5-P2、I8-P6（フラスコ状土坑）
		珪質頁岩A				0	
	在地石材2		1			1	
	在地石材1		4		1	5	
	小計		5	0	1	6	
3ｂ期 (沖ノ原Ⅱ式)	非在地石材	黒曜石				0	第32号住居跡
		珪質頁岩A				0	
	在地石材2					0	
	在地石材1		2			2	
	小計		2	0	0	2	
3～4期 (沖ノ原～三十稲場式)	非在地石材	黒曜石				0	L12-P12
		珪質頁岩A				0	
	在地石材2					0	
	在地石材1		1			1	
	小計		1	0	0	1	
計			9	1	1	11	

2．ピエス・エスキーユ時期別遺構出土表



3．ピエス・エスキーユ出土分布図

第 78 図　ピエス・エスキーユ（2）

5）石　匙（図版第 429 図 56、第 431 図 82、第 440 図 167、第 446 図 227、第 447 図 238、第 451 図 295 ～ 296）

石匙としたものは総数８点が出土した。分類での内訳は､両面調整（Ａａ）や半両面調整（Ａｂ）によって成形されたものはなく、周縁調整のみで成形されたＢ類が３点、粗製石匙であるＣ類が５点となる。

分　類（第 79 図 1） 二次加工、加工面の違いによるＡ・Ｂ・Ｃ類に区分し、従来の縦形・横形の形態による分類を加えた。なお、縦形・横形の区別は、摘みを上に置いた場合の器形で判別した（註 150)。

Ａ類：押圧剥離によって両面または片面のほぼ全面に二次加工が施されるもの。

Ａ１類：縦形のもの。　Ａ２類：横形のもの。

Ｂ類：押圧剥離によって周縁のほぼ全周に二次加工が施されるもの。

Ｂ１類：縦形のもの。　Ｂ２類：横形のもの。

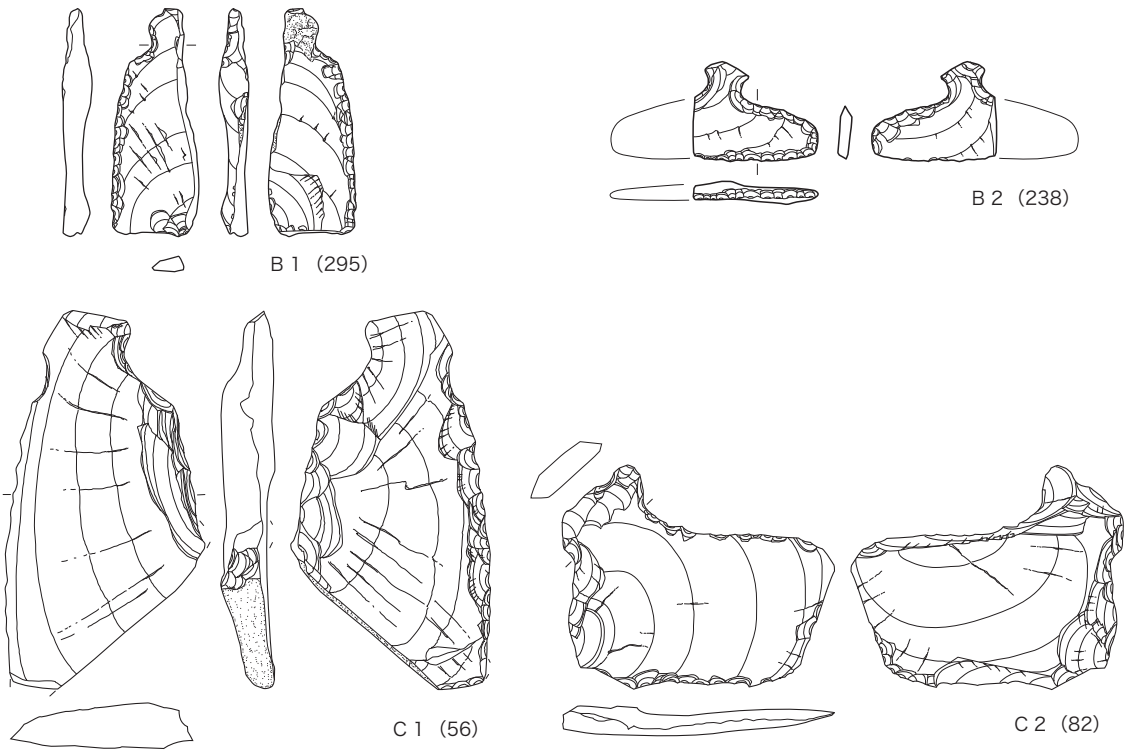
Ｃ類：粗雑な加工のもので、「粗製石匙」と呼称されるもの（註 151)。

Ｃ１類：縦形のもの。　Ｃ２類：横形のもの。

使用石材（第 80 図 1） 石匙に用いられる石材を分類別にみると、Ｂ類には珪質頁岩（Ｂ）２点、頁岩１点となり、珪質頁岩が多い。一方、Ｃ類では、５点すべてが頁岩となり、Ｂ類とはやや異なった石材組成を示す。堂平遺跡の石匙では、二次加工の異なるＢ・Ｃ両類が石材選択の面でも差異がみられる。

素　材（第 80 図 2） 素材形状の内訳では、縦長剥片が１点、横長剥片・剥片が６点、不明１点となり、大半が横長剥片・剥片を素材としたものである。

次に、こうした素材に対する摘みと刃部の位置関係についてみたい。まず、素材と刃部の位置関係で



1. 石匙分類図

第 79 図　石匙（１）

みる（註 152）。横長剥片を素材した場合は、素材の打面付近および末端に刃部が位置する、または打面付近および末端の加工が交差するものが多い。そして、縦長剥片および剥片の一部では、素材の左右両側縁または片側縁に刃部が位置する傾向がみられる。以上のように、石匙の刃部は、素材の長軸に平行する鋭い縁辺の片側あるいは両側に位置する傾向にある。したがって、石匙のつまみ位置は、縦型の場合、刃部となる長軸上の延長に位置し、横形の場合、刃部となる長軸に直交する位置に作出される。

以上のように、石匙の刃部位置は選択される素材形状によって規制され、素材と摘み部との位置関係は、第 80 図３に示すように、選択された素材を縦形・横形のどちらの石匙として製作するかで、決定されるものといえよう。

欠損状況　８点のうち、完形が６点、刃部欠損がＢ２類に２点認められた。

大きさ（第 80 図 4）　長幅分布図には、長幅値の測定可能なＢ・Ｃ類６点の分布を示した。大きさではＢ類が長軸長 6cm 以下に対し、Ｃ類では長軸長８～ 12cm を測る。Ｂ・Ｃ類は素材の大きさで異なり、両者にみられる二次加工の差異は、素材選択の違いによるものと考えることもできよう。

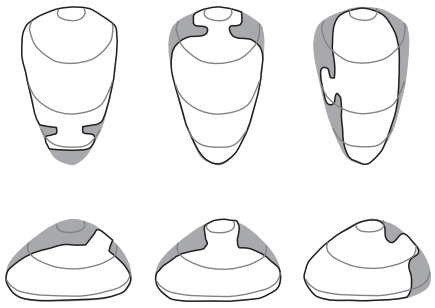
分　布（第 80 図 5）　出土位置の内訳は、住居跡出土が３点、土坑出土が２点、包含層を含むその他が３点となる。出土遺物の時期が特定された遺構からの出土はなく、時期の傾向は不明である。

		A	B１	B２	C１	C２	不明	計
在地石材１	無斑晶ガラス質安山岩							0
	安山岩							0
	珪質頁岩（B）		1	1				2
	頁岩			1	3	2		6
	凝灰岩質頁岩							0
計		0	1	2	3	2	0	8

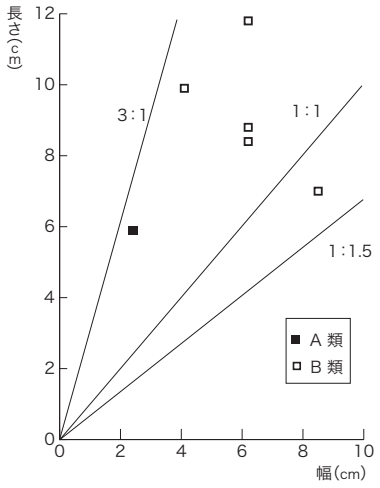
１．石匙石材組成表

	A	B１	B２	C１	C２	不明	計
縦長剥片				1			1
横長剥片・剥片		1	1	2	2		6
不明			1				1
計	0	1	2	3	2	0	8

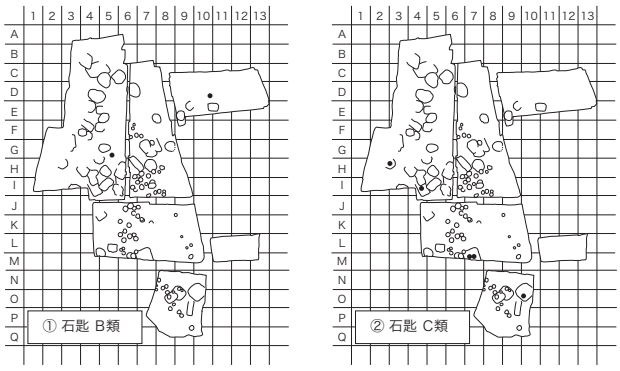
２．石匙素材数量表



３．石匙素材模式図



４．石匙長幅分布図



５．石匙出土分布図

第 80 図　石匙（２）

6）三脚石器（図版第 427 図 43 ～ 44、第 428 図 52、第 434 図 114、第 446 図 233、第 451 図 297 ～ 299）

三脚石器としたものは、総数 11 点出土した。内訳ではA類７点、B類３点を数える。このほか、三脚石器の典型とされるA類には、平面形で三辺の長さがほぼ同じとなるもの（298）と平面形で二辺の長さがほぼ同じとなるもの（52）など以下の分類とは異なる形態差がみられる。本器種は、出土石器のほぼ 5% を占め、当地域では出土数が多い部類に入る。

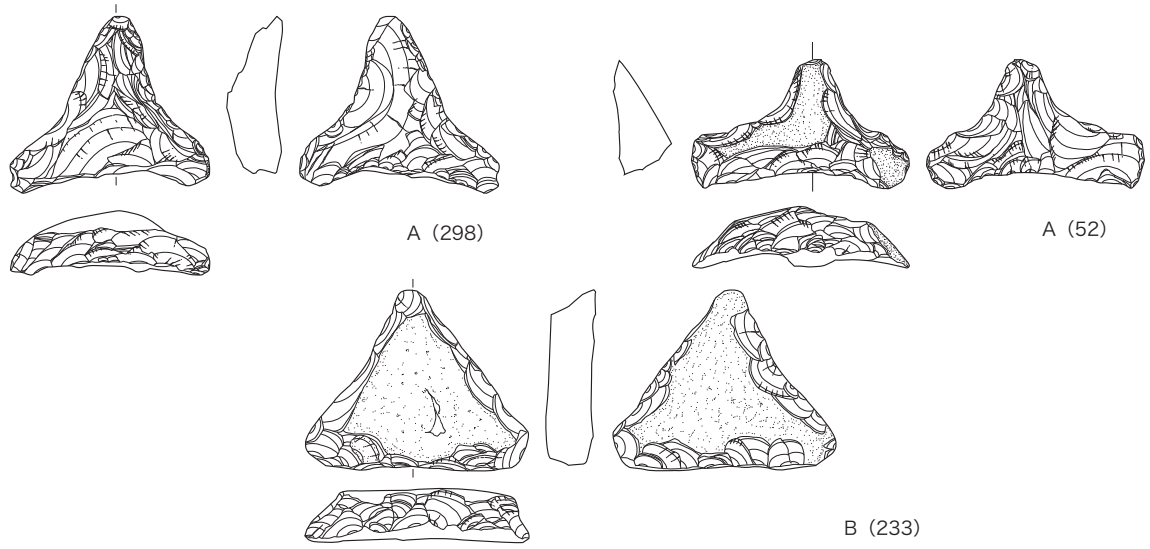
分　類（第 81 図 1）　分類は、平面および側面の形状によって２分類した。

A類：平面形が抉りの深い抉入三角形を呈し、側面形が内湾するもの。

B類：平面形が抉りの浅い抉入三角形または三角形を呈し、側面形が直線状となるもの。

使用石材（第 81 図 2）　石材は、頁岩が６点と最も多く、安山岩２点、凝灰岩質頁岩２点、珪質頁岩（B）１点が次ぐ。すべて在地石材１を用いており、細分器種による石材選択の差は見られない。

分　布（第 81 図 4）　出土位置の内訳は、住居跡出土が５点、土坑出土が１点、包含層を含むその他が５点となる。出土遺物の時期が特定された遺構からの出土はなく、時期の傾向については不明である。



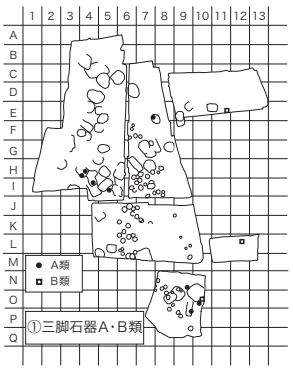
1. 三脚石器分類図

		A類	B類	不明	計
在地石材１	安山岩		2		2
	珪質頁岩（B）	1			1
	頁岩	5		1	6
	凝灰岩質頁岩	1	1		2
計		7	3	1	11

2. 三脚石器石材組成表

	A類	B類	不明	計
完　形	5	1		6
脚部欠損	2	2		4
剥　落			1	1
計	7	3	1	11

3. 三脚石器素材数量表



4. 三脚石器出土分布図

第 81 図　三脚石器

7）板状石器（図版第 438 図 156、第 451 図 300 ～ 302）

板状石器としたものは、総数６点出土した。内訳はＡ１類１点、Ａ２類３点、Ｂ類２点を数える。(註 153)

分　類（第 82 図 1） 平面形状で二大別され、さらにＡ類は側縁の抉入の有無によって細分した。

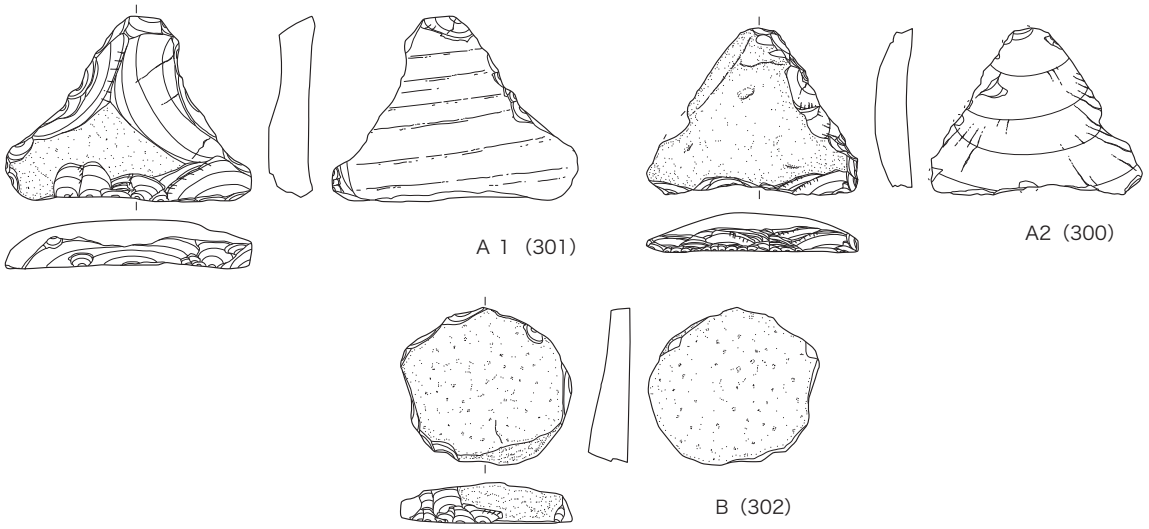
Ａ類：平面形が抉入三角形ないし三角形を呈し、側縁形が直線状のもの。

Ａ１類：平面形が抉入三角形を呈するもの。　　Ａ２類：平面形が三角形を呈するもの。

Ｂ類：平面形が楕円形を呈し、側面形が直線状となるもの。

使用石材（第 82 図 2） 石材は、頁岩が３点と最も多く、このほか安山岩、デイサイト、凝灰岩質頁岩が各１点の使用となる。すべて在地石材１を用いており、細分器種による石材選択の差は見られない。

時期・分布（第 82 図 4） 出土遺物の時期が特定された遺構からは、Ｂ類が第９号住居跡（１ａ式期）から出土がみられた。出土位置の内訳は、住居跡出土が３点、包含層を含むその他が３点となる。分布は住居跡周辺に多く、同様の分布を示す三脚石器とは分布が重ならない点で注意される。詳細は不明だが、使用時期の可能性も考えられる。



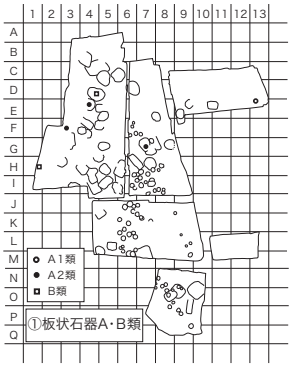
1．板状石器分類図

		Ａ１類	Ａ２類	Ｂ類	不明	計
在地石材１	無斑晶質ガラス質安山岩					0
	安山岩			1		1
	デイサイト		1			1
	珪質頁岩（Ｂ）					0
	頁岩		2	1		3
	凝灰岩質頁岩	1				1
計		1	3	2	0	6

2．三脚石器 石材組成表

	Ａ１類	Ａ２類	Ｂ類	不明	計
完　形	1	3	1		5
脚部欠損			1		1
剥　落					0
計	1	3		0	6

3．三脚石器 素材数量表



4．板状石器出土分布図

第 82 図　板状石器

8）打製石斧（図版第 424 図 1 ・ 8、第 425 図 16・18 ～ 20・25、第 427 図 45、第 428 図 49、第 429 図 59 ～ 62、第 430 図 67 ～ 69・78・79、第 431 図 83 ～ 84・87 ～ 92、第 432 図 93・97、第 433 図 103 ～ 108、第 435 図 122 ～ 128、第 436 図 135・136、第 437 図 144 ～ 145、第 438 図 148・152・159、第 439 図 163、第 440 図 170、第 441 図 176 ～ 181、第 442 図 187 ～ 188・193・195、第 443 図 200 ～ 201・203 ～ 205、第 444 図 208、第 445 図 215 ～ 216・225、第 447 図 240 ～ 242・245・246、第 448 図 247 ～ 250、第 452 図 303 ～ 312）

破片･欠損資料含め 575 点出土した。分類での内訳はA類 75 点、B類 169 点、C類 294 点、D類 10 点、不明 27 点となる。

分　類（第 83 図 1） 短冊・撥形の打製石斧（註 154）をA・B・C類、分銅形打製石斧（註 155）をD類とし、A・B・C類はさらに側縁加工によって以下のように三分類した。

A類：腹面からの急角度の剥離によって、片面または半片面加工となるもの。二次加工は、急角度の側縁加工を特徴とするが、バルブの除去などを目的とした腹面に部分的な二次加工されたものが含まれる。基部横断面は台形、半円形状となる（註 156）。

A 1類：厚手の剥片を素材とし、大型で深い剥離によって側縁加工が施されるもの。

A 2類:薄手の剥片を素材とし、浅い剥離または階段状剥離によって側縁部加工が施されるもの。

B類：表裏面からの剥離によって、両面加工となるもの。両極加撃による側縁加工がみられないと判断した両面加工の短冊・撥形打製石斧を指す。

B 1類：厚手の剥片を素材として、片面または両面に急角度の大型剥離が施されたもの。基部横断面形は菱形あるいは略三角形状を呈するものが多い。

B 2類：厚手の剥片を素材として両面に急角度の小型剥離が施されたもの。横断面形は菱形を呈するものが多い。

C類：側縁からの剥離によって側縁加工がなされるもの。両極加撃による側縁加工と判断した両面加工の短冊・撥形打製石斧を指す（註 157）。

C 1類：急角度・浅角度の大型剥離に加え、側縁からの剥離によって側縁加工がなされるもの。

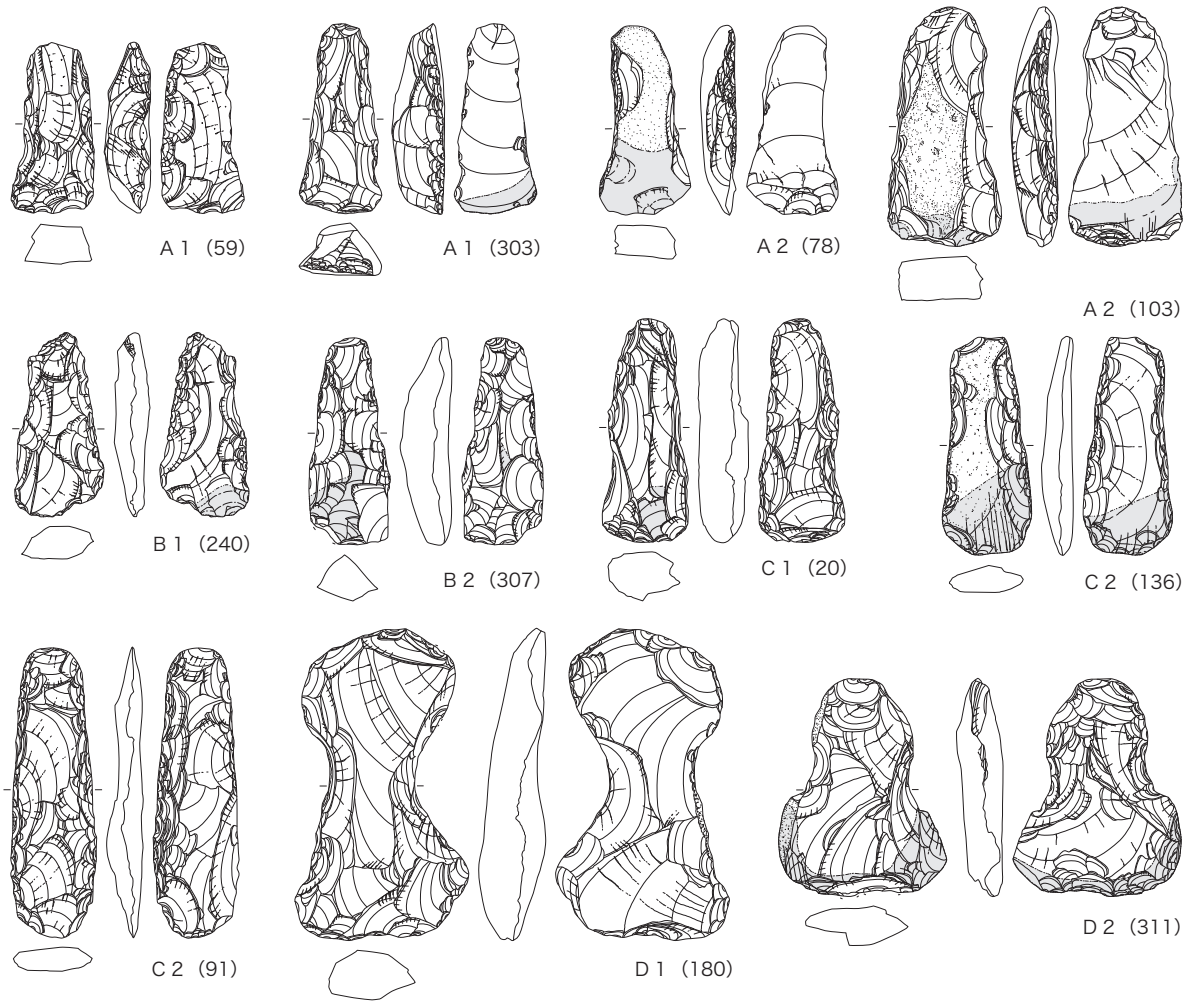
C 2類：側縁からの浅角度の剥離による側縁加工のみ二次加工とするもの。

D類：表裏面、側縁からの剥離によって分銅形を呈する打製石斧を指す。

D 1類：長軸と短軸でほぼ線対称の形態となるもの。

D 2類：上端の刃部が小さく、瓢形をなすもの。

使用石材（第 83 図 2） 頁岩が 404 点と極めて高い使用率を示し、凝灰岩質頁岩 114 点、無斑晶ガラス質安山岩 20 点、珪質頁岩（B）19 点、安山岩 14 点が次ぐ。選択された石材からは、必ずしも鋭い刃部を必要とする石器ではないことが理解される。したがって、頁岩や凝灰岩質頁岩の多用も、おそらくはその機能性よりも製作や入手の利便性による要因が大きいと考えられる。類型別の石材使用では、いずれも頁岩、凝灰岩質頁岩多数を占める。一方、無斑晶質ガラス質安山岩でみるとA 1・A 2・B 1類の使用率５～７% に対し、C類が 1.3% となる。また珪質頁岩（B）では、A 1・B 1類の使用率８～ 10% に対し、C 1・C 2類１% 台となり、A・B類とC類の使用石材に多少の差異がみられる。このことは各類型に求められる二次加工または素材の作出に石材の性質が大きく関わっていることが予想される。



1. 打製石斧分類図

		A1	A2	B1	B2	B	C1	C2	D1	D2	不明	計
在地石材2	流紋岩		1									1
	チャート											0
在地石材1	無斑晶ガラス質安山岩	1	3	3		6	2	3		2		20
	安山岩	1		2		1	1	8			1	14
	斑レイ岩					1	1					2
	珪質頁岩（B）	2	1	4	1	3	1	3	1		3	19
	頁岩	12	45	27	20	66	47	164	4	1	18	404
	凝灰岩質頁岩	3	6	13	4	18	13	50	2		5	114
不明								1				1
計		19	56	49	25	95	65	229	7	3	27	575

2. 打製石斧石材組成表

	A1	A2	B1	B2	B	C1	C2	D1	D2	不明	計
完形・略完形	11	35	32	15	47	31	88	4	3		266
基部欠損		1	3	2	4	9	15			1	35
刃部欠損	3	6	3	2	6	6	33	2		2	63
基部破片	5	5	5	4	12	10	35			4	80
胴部破片		4	3		8	4	30	1		3	53
刃部破片		4	3	2	15	5	27			8	64
側縁部欠損		1			2					1	4
不明					1		1			8	10
計	19	56	49	25	95	65	229	7	3	27	575

3. 打製石斧部位別数量表

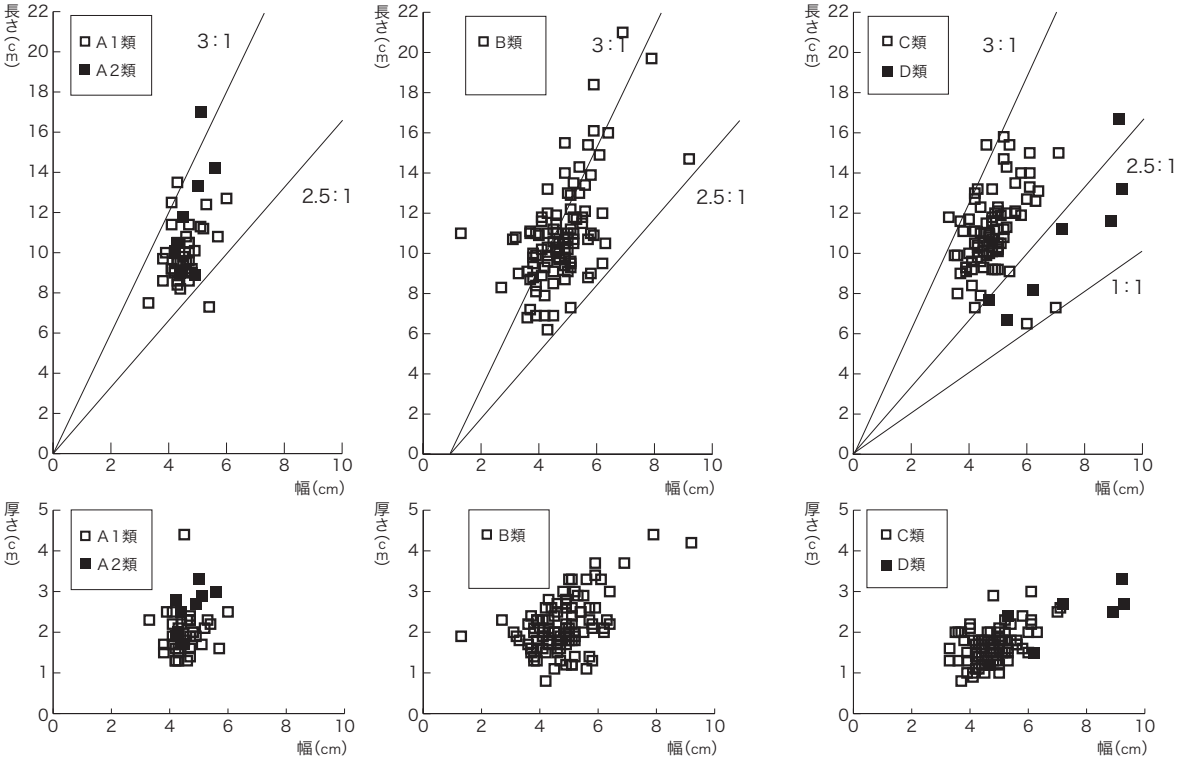
第 83 図　打製石斧（1）

欠損状況(第 83 図 3）　完形･略完形が 266 点と最も多く、基部破片 80 点、刃部欠損 63 点、刃部破片 64 点、基部欠損 34 点の順に多い。完形･略完形が多数を占めるのは、一つは、使用時の状態を保ったものを完形･略完形としたため、刃部に衝撃剥離痕を残すものなど、使用には耐えられないと考えられる状態のものも含むためと思われる。もう一つには、基部や刃部を欠損した資料を可能な限り再生利用されたためと考えられる。本遺跡からは、剥片類に分類した中に、打製石斧の刃部・側縁部の調整剥片と思われるものが多数出土しており、こうした点からも刃部再生を繰り返した使用が推測される。

分類別でも完形・略完形の多さに差異はないが、C２類の欠損率が他と比してやや高い。器厚の薄い素材選択など他と比して素材の耐久性に要因があるものと推察される。

使用痕　打製石斧の機能部となる刃部には、使用に伴って生じたと考えられる線状痕や光沢、稜上の潰れ、大小の剥離痕や微細剥離痕などが観察される。このうち、刃部にみられる製作時以降の剥離痕は資料の大半に観察されるが、刃部リダクションとの厳密な識別が困難であった。よって、ここでは、各分類にみられる線状痕を伴う使用痕光沢の有無についてみておきたい。

使用痕光沢は一般に土掘の際に見られる痕跡(註158)と考えられ、A１類６点、A２類16点、B１類３点、B２類４点、C１類５点、C２類26点、D類１点に観察された。ほぼすべての分類に対して10%前後の割合で確認されることから各類の用途自体はそれほど異なるものではないと考えられる。また、使用痕の顕在率としてはやや低い数値といえ、こうした点で、一般にいわれる「土掘具」のような特化した道具であったとは言い難い。



1．A類　長幅・幅厚分布図　　2．B類　長幅・幅厚分布図　　3．C・D類　長幅・幅厚分布図

第84図　打製石斧（２）

大きさ（第84図）　A～C類では、長幅比2.5～３：１に分布が集中し、大きさでは概ね長さ６～16cm、３～７cmの範囲に分布する。A～C各類では長幅比に差異はなく、大きさではB・C類では長さ14cmを超える資料がみられるのに対し、A類では希薄となる。また、D類は長幅比が１～2.5:１の値に分布し、A～C類に比して幅広の形態であることを示している。次に、厚幅比から各分類の素材の傾向についてみる。長さ・長幅比ともにほぼ同様の分布を示すB・C類の厚みで比較した場合、B類が厚さ１～４cmに分布するのに対し、C類では３cm以下に留まることが見て取れる。これは、B類では打製石斧の長さに比例して大きく厚みを増すのに対し、C類では長さの増減に対する厚みへの影響がそれほど大きく受けない結果を示している。B・C類での厚みの違いは、素材獲得や二次加工の差異に起因するものと思

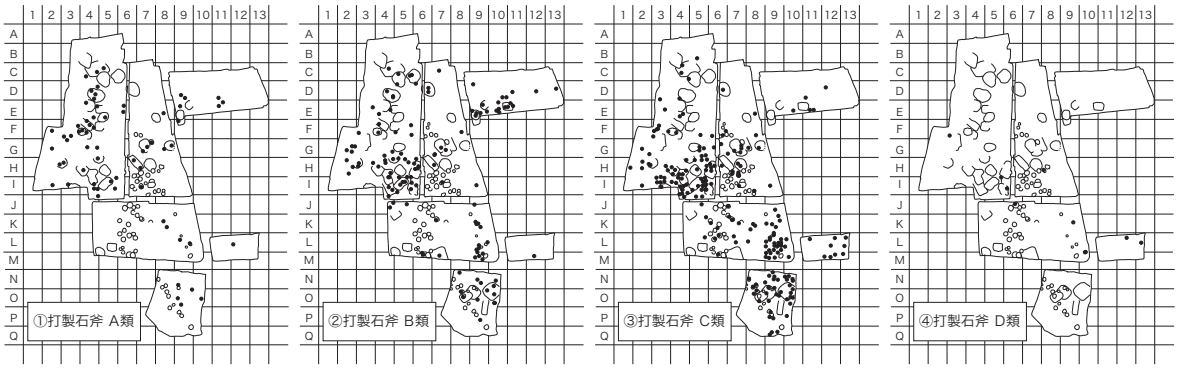
われる。すなわち、B類の二次加工が表裏面の厚みを減じる加工であるのに対して、C類の二次加工は側縁成形を中心とする。このため、C類では二次加工時において器厚を減じる効果が低く、器厚の整形を不要となるような規格性の高い素材が不可欠であったと考えられる。

時　期（第85図1） 時期の特定される遺構から出土した66点の内訳ついて図示した。同表からは、住居跡数の多い1期（大木8a式並行期）と3a期（沖ノ原I式期）に多数の出土がみられる。また、分類別では、1～3b期までの遺構からA1・D類を除くすべての分類の出土が認められた。この中で、1期にB類の比率が高く、3期にC類の比率が高い傾向がみられる。数量比でみると、1期で2点（12.5%）であったC類が3a期で13点（61.9%）、3b期で4点（28.6%）と3期を中心に高い比率を示すのに対し、1期で11点（69%）であったB類が3a期で2点（9.5%）、3b期で2点（21%）と数量比が下がる傾向となる。

分　布（第85図2） 出土分布の内訳は住居跡168点、フラスコ状土坑出土30点、土坑出土75点、包含層その他が302点となる。平面分布では、住居跡および住居跡周辺の包含層中やピット群に高い密度の分布が認められる。分類別では、A類がD～Fグリッドの住居跡付近で高い密度で分布するのに対し、C類ではG～Iグリッドの住居跡付近に高い密度となる傾向がみられる。A類が高い密度で分布するD～Fグリッドを5・9号住居跡など1期の住居跡が点在する範囲とし、C類が高い密度で分布するG～Iグリッドを15・23・32号住居など3期の住居跡が重複する範囲と考えた場合、上記の分布密度の差異は、廃棄された打製石斧の時期差となる可能性が考えられる。これを上記の遺構時期の内容に照らして考えると、C類は3a期以降に数量の占める割合が増加する類型とみることができよう。

	A1	A2	B1	B2	B	C1	C2	D1	D2	不明	計	出土遺構
1期 (大木8a式並行)		1	4	1	6		2			2	16	第9・11・43・45号住居跡、5J-P4、H8-P1（フラスコ状土坑）
1～2期 (大木8a～8b並行)						1	1				2	H7-P13
2期 (大木8b式並行)		2				1	2			5	10	H7-P6、H8-P3、I2-P2、O9-P29（フラスコ状土坑）
2～3期 (大木8b～沖ノ原)					1	1	1				3	F6-P7、H7-P2、J5-P17（フラスコ状土坑）
3a期 (沖ノ原I式)		4	2	2		4	9				21	第23・38・50号住居跡、4J-P1、I8-P6、K8-P31（フラスコ状土坑）
3b期 (沖ノ原II式)		1	1		1		4			7	14	第15・32号住居跡、K7-P4、K7-P5（フラスコ状土坑）
計	0	8	7	3	8	7	19	0	0	14	66	

1．打製石斧時期別遺構出土数量表



2．打製石斧出土分布図

第85図　打製石斧（3）

9）不定形石器（図版第 424 図 7・10・13、第 426 図 29、第 427 図 38・39、第 428 図 48・50、第 430 図 80、第 434 図 115・116、第 435 図 129、第 437 図 146・147、第 438 図 149・150・156、第 439 図 160・161、第 441 図 182、第 442 図 193・194、第 448 図 251・252、第 453 図 313 ～ 322、第 454 図 323 ～ 329）

不定形石器に分類される石器は、総数 488 点出土した。不定形石器は、二次加工あるいは微細剥離痕が認められる剥片の内、定形石器に含まれないもので、多様な石器形態や加工部位（刃部）を持つ。

分　類（第 86・87 図）分類は、以下の基準によって行った。

1　素材剥片形状による分類

Ⅰ．縦長剥片　長さ：幅＝ 1.5：1 以上、あるいは折損などによって全体形状が読み取れないながらもこれに準ずると推測されるもの

Ⅱ．剥片・横長剥片　長さ：幅 =1.5：1 未満、あるいは折損・二次加工によって全体形状が読み取れない場合は、これに準ずると推測されるもの。

Ⅲ．扁平礫・分割礫

2　加工部位による分類

a．素材剥片の末端部あるいは末端辺に二次加工または微細剥離が認められるもの。

b．素材剥片の打面部あるいはその周辺に二次加工または微細剥離が認められるもの。

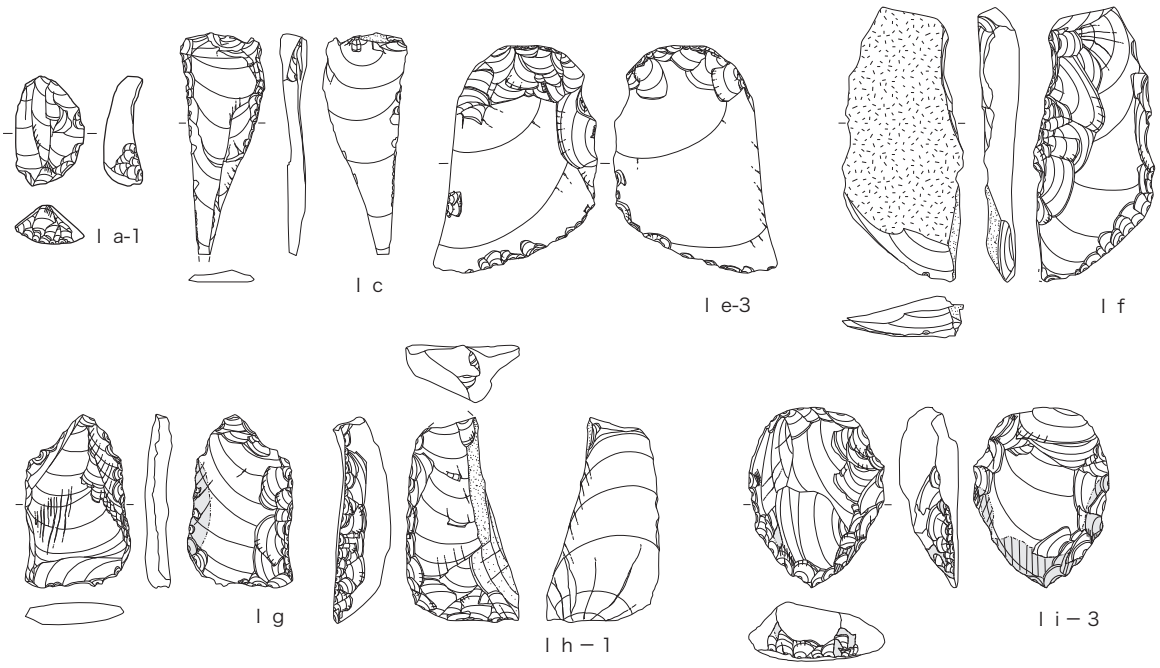
c．素材剥片の左右両側縁に二次加工または微細剥離が認められるもの。

d．素材剥片の左右の片側縁に二次加工または微細剥離が認められるもの。

e．素材剥片の打面部および末端部に二次加工または微細剥離が認められるもの。

f．素材剥片の左右両側縁および末端部に二次加工または微細剥離が認められる、あるいは両側縁の加工が末端部で交差するもの。

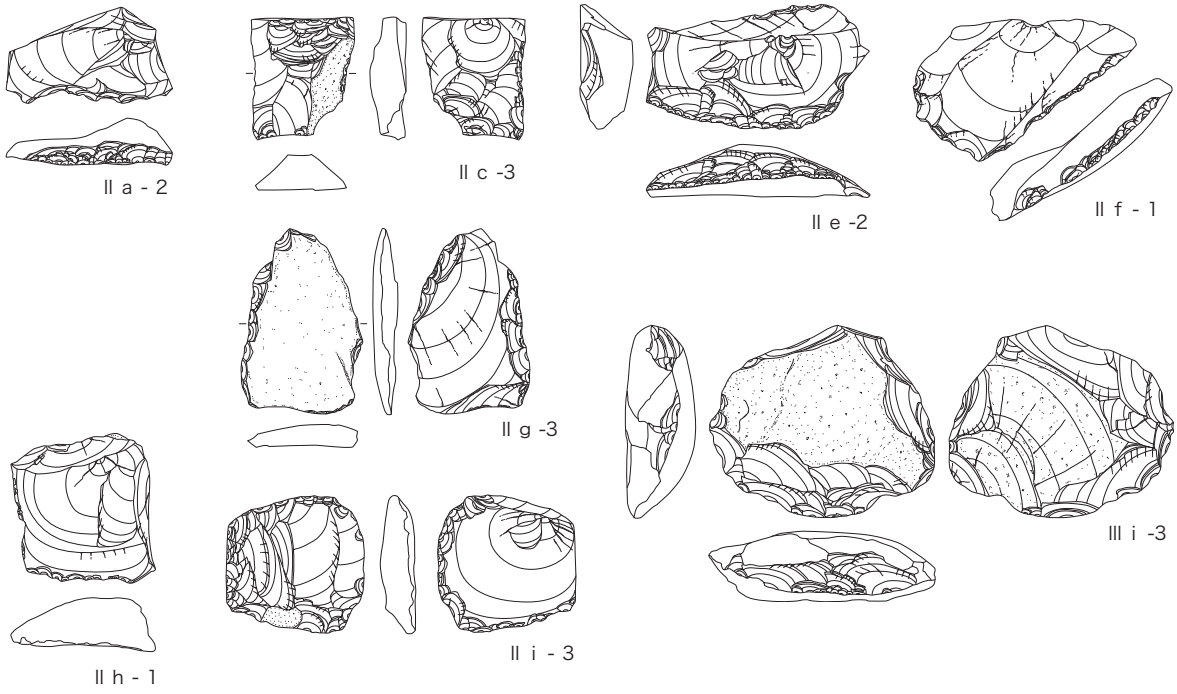
g．素材剥片の左右両側縁および打面部に二次加工または微細剥離が認められるもの。



第 86 図　不定形石器分類図（Ⅰ類）

h．素材剥片の打面部あるいは末端部と左右の片側縁に二次加工または微細剥離が認められるもの。

i．素材剥片の全周にわたって二次加工または微細剥離が認められるもの。



第 87 図　不定形石器分類図（Ⅱ・Ⅲ類）

分類	刃部形状			刃部ライン	素材	二次加工部位	細分類
A類	スクレイパー 中型・急角度・連続剥離			——	縦長	側縁と端部	A1類
					横長	片側縁と底縁	A2類
B類	スクレイパー 小型・急角度・連続剥離			外彎状	縦長	片側縁と端部	B1類
					横長	底　縁	B2類
C類	鋸歯縁石器 大型・中型・急角度・鋸歯状剥離			直線状	縦長・厚手	片側縁	C1類
					横長・厚手	底　縁	
				内彎状	縦長・厚手	片側縁	C2類
					横長・厚手	底　縁	
				外彎状	縦長・厚手	片側縁	C3類
					横長・厚手	底　縁	
	スクレイパーと鋸歯縁石器の複合形				厚手	——	C4類
D類	鋭利な尖端部をもつ石器	大型・急角度剥離		直線状	厚手	片側縁（一方の側縁は古い剥離面や切断面等を利用する）	D1類
				内彎状	厚手		
		大型・浅角度剥離		直線状	厚手	片側縁（D1類と同じ）	D2類
						両側縁	
				内彎状	厚手	片側縁（D1類と同じ）	
						両側縁	
		小型剥離		直線状	厚手	片側縁（D1類と同じ）	D3類
				内彎状		両側縁	
				直線状	薄手	両側縁	石錐
				内彎状			
E類	抉入石器（ノッチ）	大ノッチ	大型・中型・急角度剥離	内彎状	縦長・厚手	側　縁	E1類
					横長・厚手	底　縁	
			大型・中型・浅角度剥離		縦長	側　縁	
					横長	底　縁	
		小ノッチ	中型・急角度剥離	内彎状	縦長	側　縁	E2類
					横長	側縁・底縁	
			小型剥離		縦長	側　縁	
					横長	側縁・底縁	
F類	中型・小型・急角度・不連続剥離			——	縦長	側縁	F1類
				端部に丸味	縦長	側縁と端部	F2類
				——	横長	底　縁	F3類
						側　縁	
						底縁と側縁	
G類	大型・中型・浅角度剥離			直線状	縦長	側　縁	G 類
					横長	底　縁	
				外彎状	縦長	側　縁	
					横長	底　縁	
H類	無加工（使用痕的微細剥離・使用痕） 小型・浅角度剥離			外彎状	背面は自然面 横長	底　縁	H 類
I類	端部に小型・連続剥離			——	縦長・薄手	端　部	I 類
					横長・薄手		
J類	無加工（使用痕的微細剥離・使用痕）			端部に丸味	縦長	側　縁	J 類
					横長	側縁・底縁	
K類	両面加工（調整）石器 （刃部平面形は波状、側面観はジグザグ状）			外彎状	薄手		K 類

＊ゴシック以外の明朝体は、一般的傾向を表したものが多い。

第 88 図　不定形石器の刃部形態

各形態の特徴　素材形状としては、Ⅰ類（縦長剥片素材）102 点、Ⅱ類（横長剥片・剥片素材）309 点、Ⅲ類（礫素材）13 点、不明 64 点という結果が得られた。

加工部位に関しては、Ⅱａ類が最も多く 82 点、次いでⅡｈ類 63 点、Ⅱｅ類 30 点、Ⅱｄ類 29 点、Ⅱｉ類 29 点、Ⅰｃ類、Ⅰｄ類 25 点、Ⅱｆ類 24 点、Ⅱ類 24 点となる。基本的には打面部を除く側縁部や末端部に二次加工あるいは微細剥離が認められるものが多い。さらに素材別に二次加工あるいは微細剥離の部位についてみると、縦長剥片素材では側縁部や末端部に認められるものが多く、横長剥片・剥片素材では末端部とそれに対抗する側縁部に多い傾向がみられる。

使用石材　頁岩が 165 点と最も多く、次いで珪質頁岩（B）が 159 点、凝灰岩質頁岩 51 点、珪質頁岩（A）45 点、無斑晶ガラス質安山岩 21 点となる。基本的には、本地域において豊富に存在する在地石材 1 が数量の上で圧倒する傾向がみられる。ただし、珪質頁岩（A）と無斑晶ガラス質安山岩の出土数は、こうした傾向には当てはまらない。在地石材 1 とした無斑晶ガラス質安山岩は津南町道尻手遺跡では主体的な利用がみられるため石器石材として不適当な石材とは考えられないが、非在地石材の珪質頁岩（A）と数的には拮抗した内容となる。本遺跡での頁岩系石材への志向性の高さが覗える。

		Ⅰａ	Ⅰｂ	Ⅰｃ	Ⅰｄ	Ⅰｅ	Ⅰｆ	Ⅰｇ	Ⅰｈ	Ⅰｉ	Ⅰ	Ⅱａ	Ⅱｂ	Ⅱｃ	Ⅱｄ	Ⅱｅ	Ⅱｆ	Ⅱｇ	Ⅱｈ	Ⅱｉ	Ⅱ	Ⅲｉ	Ⅲ	不明	計
非在地石材	黒曜石	1										1												1	3
	珪質頁岩（A）		1	2	5	1	1		3		1	7	1		5	2	1		6	1	2			6	45
在地石材2	流紋岩	1													1									1	3
	珪化岩（黄玉）														1										1
	チャート	1																						1	2
在地石材1	無斑晶ガラス質安山岩						1					4		2	1	2				3	1		2	5	21
	安山岩			1								3				1			2		2	2	1	2	14
	デイサイト			1								1	1	1					1		1				6
	珪質頁岩（B）	3	2	10	11		6	1	6	2	2	25	4	8	8	12	5		26	8	5	1		14	159
	頁岩		1	8	8		5		4		3	34		5	11	9	11	3	18	12	7	2	3	21	165
	凝灰岩質頁岩			2	1				2	1	1	5		2	2	3	6	1	8	4	4	1	1	7	51
不明・その他				1					1		1	2				1	1		2	1	2			6	18
計		6	4	25	25	1	13	1	16	3	8	82	6	18	29	30	24	4	63	29	24	6	7	64	488

1．不定形石器石材組成表

			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	不明	計	分類	出土遺構
1期（大木8ａ式並行）	非在地石材	黒曜石					0	Ⅰｉ、Ⅱａ、Ⅱｅ、Ⅱｆ、Ⅱｈ、Ⅱｉ、Ⅲｉ	第9・11・43・45・50号住居跡、5J-P4、H8-P1（フラスコ状土坑）
		珪質頁岩A		2			2		
	在地石材2						0		
	在地石材1		3	7	1	1	12		
	小計		3	9	1	1	14		
2～3期（大木8ｂ式～沖ノ原式）	非在地石材	黒曜石					0	Ⅱｃ、Ⅱｈ	H7-P2（フラスコ状土坑）
		珪質頁岩A					0		
	在地石材2						0		
	在地石材1			2			2		
	小計		0	2	0	0	2		
3ａ期（沖ノ原Ⅰ式）	非在地石材	黒曜石					0	Ⅱａ、Ⅱｄ、Ⅱｅ、Ⅱｈ	第23・38・50号住居跡、I8-P6（フラスコ状土坑）
		珪質頁岩A					0		
	在地石材2						0		
	在地石材1			13		1	14		
	小計		0	13	0	1	14		
3ｂ期（沖ノ原Ⅱ式）	非在地石材	黒曜石					0	Ⅱｇ、Ⅱｈ、Ⅲｉ	第15・32号住居跡、15J-P3（フラスコ状土坑）
		珪質頁岩A					0		
	在地石材2						0		
	在地石材1			5			5		
	小計		0	5	0	0	5		
計			3	29	1	2	35		

2．不定形石器時期別遺構出土数量表

第 89 図　不定形石器

10）磨製石斧（図版第 424 図 2、第 425 図 14、第 426 図 30・31、第 429 図 63、第 430 図 73・81、第 432 図 94、第 434 図 117・118、第 437 図 139、第 438 図 151・157、第 439 図 162・164、第 441 図 183、第 442 図 184・185・189・196、第 443 図 198、第 444 図 212、第 445 図 222・224、第 446 図 288・230・234、第 447 図 243、第 455 図 330 ～ 342）

磨製石斧は、破片や砕片、磨石類や線刻礫などの他器種に転用されたものを含めて総数 105 点出土した。このうち、80 点がA類（定角式磨製石斧）（註 159）であり、出土した磨製石斧の大多数を占める。本遺跡からは、未製品が３点出土し、うち２点は蛇紋岩製の定角式磨製石斧破片を再生したものである（162・164）。また、同様の素材から再生した痕跡が観察できる小形磨製石斧（81）が１点確認された。破片の次利用が観察できた例はごく少数ではあるが、本遺跡の小形・中形の磨製石斧の中には、こうした再生行為によって再生産されたものが含まれることは十分に予想される。

分　類（第 90 図）　分類は、定角式磨製石斧をA類とし、それ以外をB類とした。また、A類は装着時のソケットを想定し、胴部横断面の形状によって細分した（註 160）。

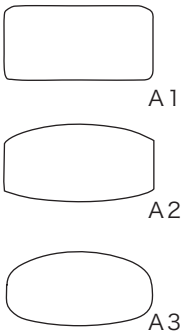
A類：定角式磨製石斧に分類されるもの。

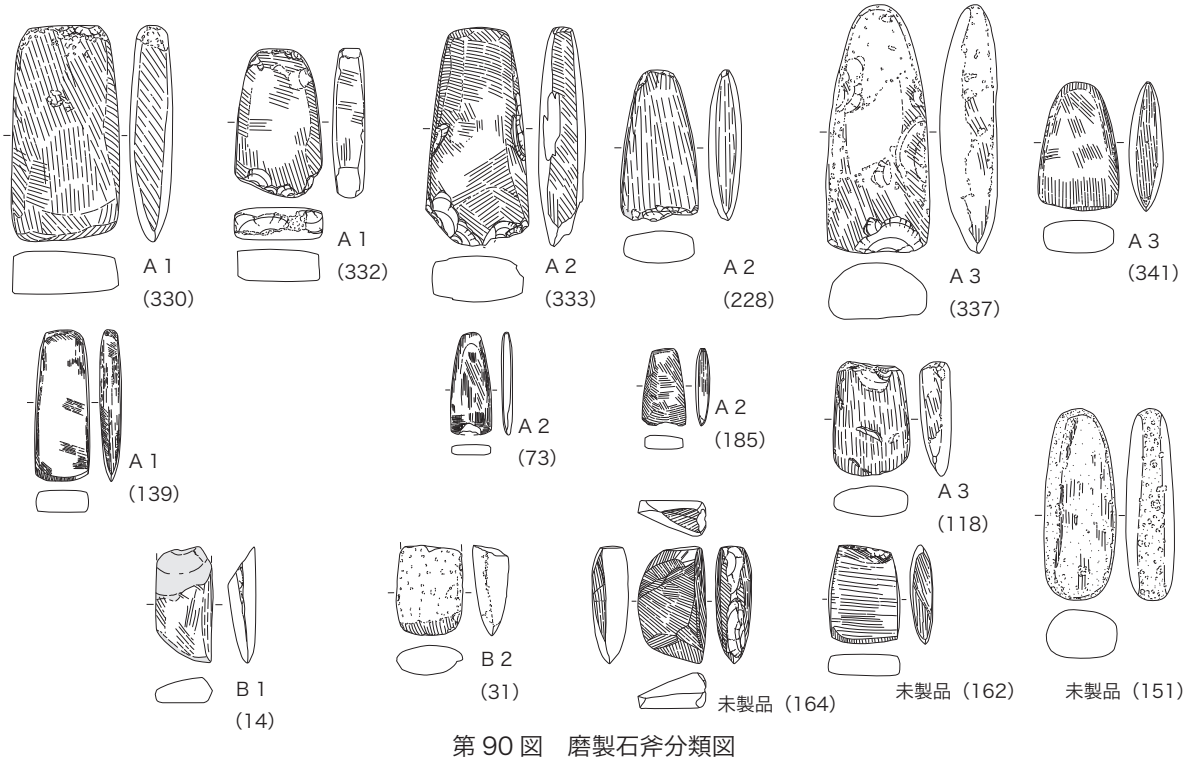
Ａ１類：表裏面と両側面の４辺が平坦に研磨されることで、横断面形が長方形となるもの。

Ａ２類：表裏面の縁辺に緩い曲面をなすことで、横断面形が隅丸方形となるもの。

Ａ３類：表裏面が曲面をなし、側面の研磨が不十分なもの。横断面形が長楕円形ないし隅丸方形となるもの。

B類：定角式磨製石斧以外のもの。





第 90 図　磨製石斧分類図

B１類：側縁に擦切痕が認められるもの（擦切石斧）（註 161）。

B２類：側面がなく、横断面が長楕円形ないしはレンズ状をなすもの（註 162）。

使用石材（第 91 図１） 蛇紋岩が 64 点と最も多く、出土総数の 61% を占める。在地石材１とした斑レイ岩の 18 点（17%）がこれに次ぐ数量となる。前述のように、本遺跡から出土する蛇紋岩製石器は、全資料に磨製石斧としての研磨面が観察され、原礫面を持つような素材の存在を推測できる資料は皆無である。こうした点から、本遺跡の蛇紋岩製磨製石斧は、搬入された製品のみで構成されると考えられる。一方、在地石材１の斑レイ岩は石棒や棒状礫、磨石類として多数の出土があり、頁岩や凝灰岩質頁岩とともに素材供給の面からは遺跡内での製作が可能な石材といえる。しかしながら、製作加工具と考えられる「多面体を呈する敲石」（註 163）が磨石類中に一定数が出土するのに比べ、未製品が極めて少ないこと、また製品自体も損耗の激しい状態であることから製品の供給が不十分であったと考えられる。これらから、遺跡内での磨製石斧製作を積極的に肯定できるものではなく、むしろ、斑レイ岩などの在地石材も（下越地域など）非在地石材圏から製品として搬入された可能を考える必要があろう（註 164）。

遺存状態（第 91 図２） 完形･略完形が 25 点最も多く、刃部欠損 19 点、胴部破片 17 点、刃部破片 13 点、基部破片 12 点が次ぐ。完形・略完形の多さは、小形磨製石斧の欠損率が低いことが要因の一つに挙げられる。すなわち、小形磨製石斧は鑿先のような使用が想定され、対象物との衝撃による破損が少ないことが予想されるためである。

次に刃部破片についてみる。完形・略完形に次ぐ出土数の刃部欠損・胴部破片（計 36 点）に比して、刃部破片 13 点は極めて低い数値といえる。これは一般に言われるように、集落から離れた場所での立木伐採作業を行った結果と考えられるが、それ以外の要因として、転用･再生による可能性を指摘したい。磨製石斧の刃部破片を小形磨製石斧へ転用した未製品に観察されるように、中・大形の磨製石斧の刃部

		A1a	A1b	A1	A2a	A2b	A2c	A2	A3a	A3b	A3c	A3	A	B1	B2	不明	計	未製品
非在地石材	蛇紋岩	5	3	2	6	12	2	9		1	1		3	1		19	64	
	透緑閃岩			1		2											3	
在地石材2	流紋岩					1											1	
	チャート												2				2	
在地石材1	斑レイ岩	1	1		3	4		3		1		1	2			2	18	1
	緑色岩							2				1			1	1	5	
	輝緑岩							1									1	
	頁岩					2											2	
	凝灰岩質頁岩					2	1										3	
	片岩															1	1	
不明						1		4									5	
計		6	4	3	9	24	3	19	0	2	1	2	7	1	1	23	105	1

1．磨製石斧石材組成表

	A1a	A1b	A1	A2a	A2b	A2c	A2	A3a	A3b	A3c	A3	A	B1	B2	不明	計	未製品
完　　形	2			2	5	2										11	1
略 完 形	1	1		2	7				1	1	1					14	
基部欠損	1						5				1		1		1	9	
刃部欠損	1	2	2	1	8	1	2		1						1	19	
側縁再生			1				1									2	
刃部・基部欠損				2	2		2									6	
刃部・側縁部欠損					1							1				2	
基部破片	1	1		2	1							1			6	12	
刃部破片							5					3		1	4	13	
胴部破片							4					2			11	17	
計	6	4	3	9	24	3	19	0	2	1	2	7	1	1	23	105	1

2．磨製石斧残存部位別数量表

第 91 図　磨製石斧（1）

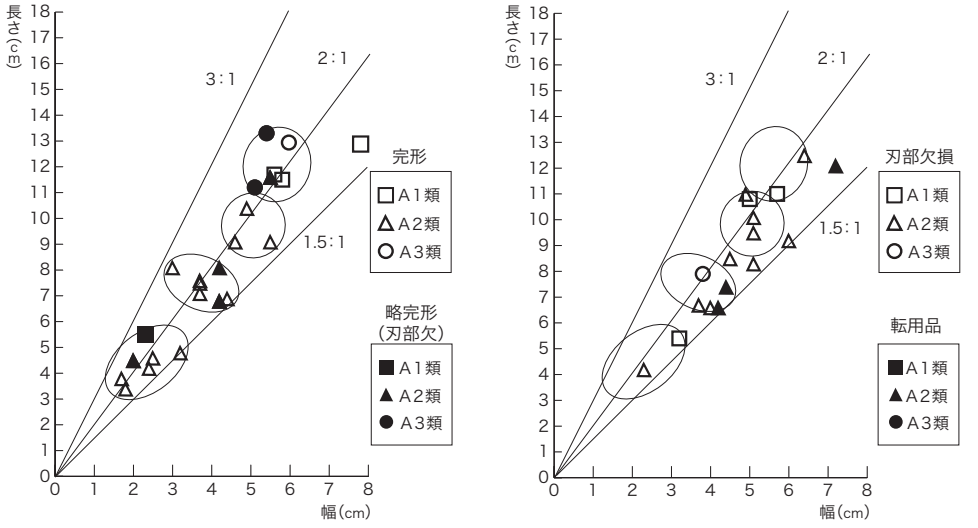
部分は、石斧の中での最大幅を持ち、器厚が薄い部分という点で小形磨製石斧への転用に適した素材であったと考えられる。

本遺跡では、これ以外にも磨製石斧を転用した例として、胴部破片を敲石に再利用したものが確認されている。あるいは、刃部や側縁に成形とみられる剥離痕が観察されるものが多く、刃部再生や器形の成形を意図した可能性が高い。このように、磨製石斧の遺存状態は使用と廃棄の関係以外の要素を多分に含むものである。すなわち、刃部が損傷・磨耗した際の処置として再生可能な場合は刃部再生され、不可能な場合には小形磨製石斧への再生産や敲石への転用、そして廃棄といった多様なライフヒストリーの結果を示しているといえよう。

大きさ（第92図1） 完形・略完形品、刃部欠損品、敲石への転用品の長幅分布を比較することで、転用や再生の多い磨製石斧の使用状態と使用不可能な状態の大きさについて触れておきたい。

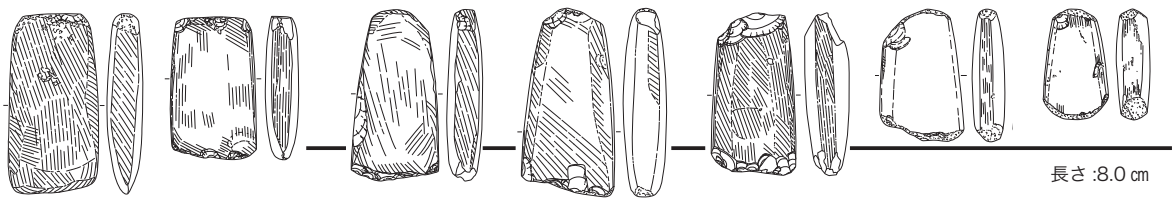
使用時の形状を残す完形･略完形品は､長幅分布に以下のような大きさのピークがみられる(第92図1)。大形：長さ11～13.5cm／幅5～6cm、中形：長さ9～11cm／幅4.5～5.5cm、中小形：長さ：6～8cm／幅：3～4.5cm、小形：3～5.5cm／幅：1.5～3.5cmとなる。これらは目的に応じて使い分けされた道具の差を示すと考えられる。この中で、大形・中形には長さ9～13.5cm／幅4.5～6cmの範囲の中に重なるように二つのピークが見られる。両者は「石斧柄」に装着された使用法が考えられることから、刃部再生により長軸幅のみ減じた結果を示す可能性がある。

次に､磨製石斧の再生限界(註165)によって転用されたと考えられる端部に敲打痕が観察される敲石と、刃部欠損資料の分布を示す。転用品は、長幅比2：1よりも1.5：1近くに分布し、大きさでは、幅4～



① 磨製石斧（完形・略完形）　② 磨製石斧（刃部欠損・転用品）

1．磨製石斧長幅分布図



製 品　刃部再生可能―再生過程？　刃部再生の限界―転用？　敲石転用

第92図　磨製石斧（2）

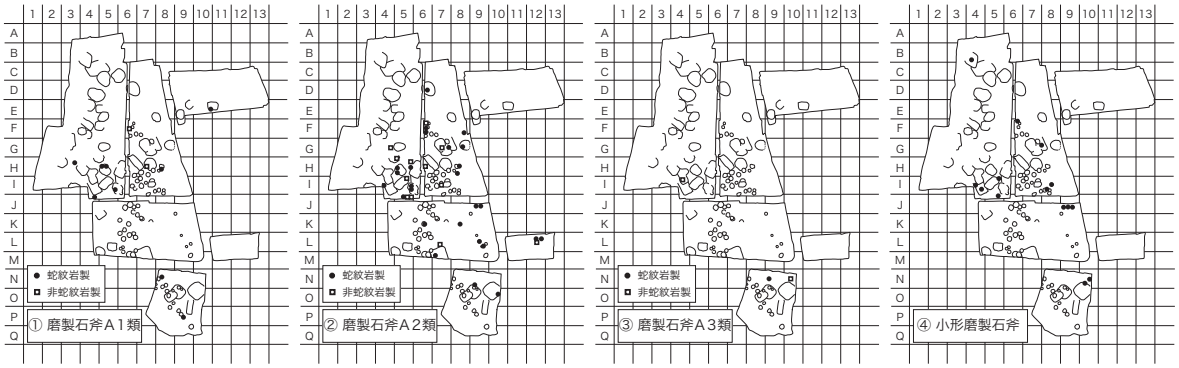
4.5cm、長さ 6.5 ～ 8.0cm となる。分布上では中小形の分布に重なるものである。これを幅５cm 前後の磨製石斧での刃部再生の可能な状態を大きく超えた状態と考えた場合、完形品の大きさとの比較から、概ね８～ 9cm が刃部再生の限界の長さとみることができる。ここで、長さ８～ 9cm 以上の磨製石斧の中で、刃部に二次加工や敲打痕が施されたもの、長さ８～ 9cm 以下で上下端、あるいは側縁に二次加工がみられるものの二次加工の意味について考えてみたい。刃部の再生限界から、前者は刃部再生に伴う成形過程の資料とみることができ、後者の場合、刃部のみの再生では使用に絶えず、器面全体を成形して小形化、または他の器種への転用を行うことが予想される（第 92 図）。

時　期（第 93 図１） 出土遺物が時期的にまとまる遺構から出土したものを第 93 図１にまとめる。11 点の磨製石斧・未製品、転用品が抽出され、２期（大木８ｂ並行期）～３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）に遺物数が多い傾向となる。蛇紋岩製磨製石斧はすべて３ａ期に属し、23 住の中形２点、小形１点、50 住の大形破片を二次利用した未製品１点、4J-P1 の転用敲石１点の計５点となる。３ａ期のみでみると蛇紋岩の使用頻度の高さが示されるが、１～３ｂ期の内容で比較すると３ａ期にのみ蛇紋岩の比率が突出し、当期の磨製石斧の石材利用を正確に示しているとは考えにくい。１～３ｂ期の平均で蛇紋岩利用を見るべき内容と判断される。

分　布（第 93 図２） 出土分布の内訳では、住居跡 41 点、フラスコ状土坑４点、土坑 17 点、包含層その他が 43 点となる。分類別では、Ａ・Ｃ・Ｄ類に住居跡からの出土数が多く、Ｅ類では土坑からの出土が多い傾向がみられる。

		大形・中形・中小形									小形									計	出土遺構
		A1	A2	A3	A	B1	B2	その他	未製品	小計	A1	A2	A3	A	B1	B2	その他	未製品	小計		
1期（大木8ａ式並行）	非在地石材									0									0	0	第 45 号住居跡
	在地石材１								1	1									0	1	
	不明									0									0	0	
	小計	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
2期（大木8ｂ式並行）	非在地石材									0									0	0	H7-P6、I7-P2、I7-P6（フラスコ状土坑）
	在地石材１	1	1					1		3									0	3	
	不明									0									0	0	
	小計	1	1	0	0	0	0	1	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
３ａ期（沖ノ原Ⅰ式）	非在地石材	1	1					1		3	1							1	2	5	第 23・50 号住居跡、4J-P1、H8-P7（フラスコ状土坑）※その他は磨石転用
	在地石材１									0									0	0	
	不明		1							1									0	1	
	小計	1	2	0	0	0	0	1	0	4	1	0	0	0	0	0	0	1	2	6	
３ｂ期（沖ノ原Ⅱ式）	非在地石材									0									0	0	第 32 号住居跡
	在地石材１		1							1									0	1	
	不明									0									0	0	
	小計	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
計		2	4	0	0	0	0	2	1	9	1	0	0	0	0	0	0	1	2	11	

１．磨製石斧　時期別遺構出土数量表



２．磨製石斧　出土分布図

第 93 図　磨製石斧（３）

11）磨石類（図版第 425 図 15・26 ～ 27、第 426 図 32 ～ 34、第 427 図 46、第 429 図 57・64 ～ 65、第 431 図 85 ～ 86、第 432 図 95 ～ 96・99、第 433 図 109 ～ 110、第 434 図 120、第 435 図 130、第 436 図 131 ～ 132、第 437 図 137・140・143、第 440 図 166・169、第 442 図 186・190 ～ 191、第 444 図 209 ～ 210、第 445 図 219・223、第 446 図 231 ～ 232、第 448 図 239、第 448 図 253・256、第 456 図 343 ～ 347）

磨石類としたものは、磨製石斧などの転用品を含め 509 点が出土した。内訳はＥ類（凹石）が 208 点と総数の約４割を占め、Ｆ類（敲＋凹）90 点、Ｄ類（磨＋敲＋凹）55 点、Ｃ類（磨＋凹）49 点が次ぐ。

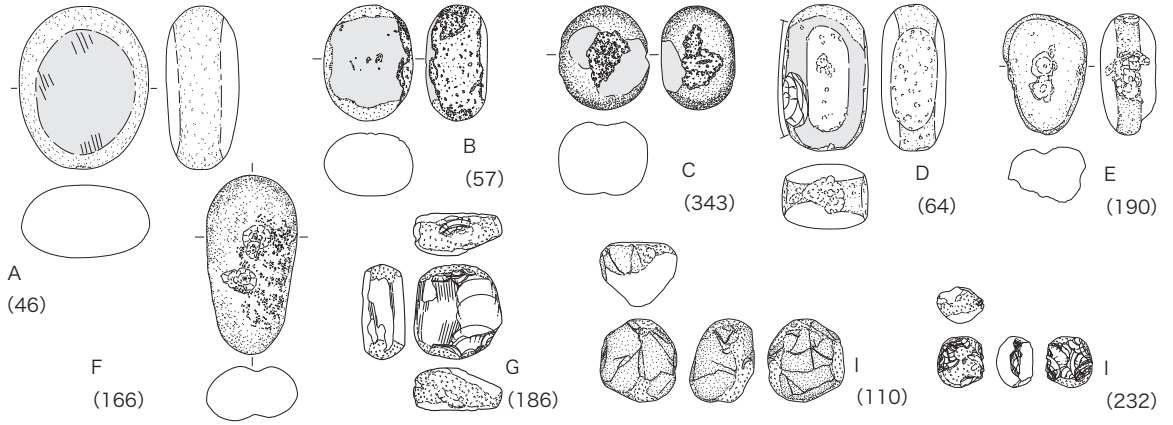
分　類（第 94 図１）分類は、磨痕･凹痕･敲打痕の使用痕の組み合わせによって行なった。なお、Ｉ類（「多面体を呈する敲石」）は、機能面のあり方が明らかに異なるものであるため、上記の使用痕の組み合わせとは区別して扱った。以下、使用面の特徴と使用痕の組み合わせ内容について記載する。

磨　痕：表裏面または側面に一定程度の広がりを持った磨痕が認められるもので、使用面は「滑らかな」ものから「ざらついた」ものまで観察される。「ざらついた」ものは敲打痕との重複と考えられ、磨痕の度合いの強いものを磨痕、擦痕がないものは敲打痕に含めた。

凹　類：表裏面または側面に残された敲打痕跡を指す。よって、明瞭な凹状となるもの、浅い凹状となるもの、痘痕状に表面が荒れた状態ものが観察される。

敲打類：側縁や端部に残された敲打痕跡を指す。凹凸状に荒れたもの、面的となるものが観察される。

使用石材（第 94 図３）　石材は、安山岩が 420 点と最も多く、次いで斑レイ岩や閃緑岩などの硬質な石



1．磨石類分類図

	使用痕跡	素材 / 部位
A類	磨痕のみのもの	—
B類	磨痕＋敲打痕のもの	—
C類	磨痕＋凹痕のもの	—
D類	磨痕＋凹痕＋敲打痕のもの	—
		—
E類	凹痕のみのもの	—
F類	凹痕＋敲打痕のもの	—
G類	敲打痕のみのもの	—
H類	磨痕	亜円礫の側縁稜部を使用面とするもの
I類	敲打痕（多面体敲石）	石核・亜角礫の稜を使用部位とするもの

2．磨石類分類表

		A	B	C	D	E	F	G	H	I	不明	計
非在地 在地２	蛇紋岩							2				2
	チャート							1				1
在地石材Ｉ	無斑晶ガラス質安山岩									2		2
	玄武岩					5	2					7
	安山岩	27	7	46	49	195	63	13			20	420
	斑レイ岩		1		1	3	7	7		2	2	23
	花崗岩			1	1	1	1					4
	閃緑岩				3	2	9	5			1	20
	ヒン岩			1			1					2
	凝灰角礫岩				1		2	1				4
	頁岩						1	5		1		7
	凝灰岩質頁岩						2			1		3
	珪質頁岩（B）									1		1
不明			1	1		2	2	5		2		13
計		27	9	49	55	208	90	39	0	9	23	509

3．磨石類石材組成表

第 94 図　磨石類（１）

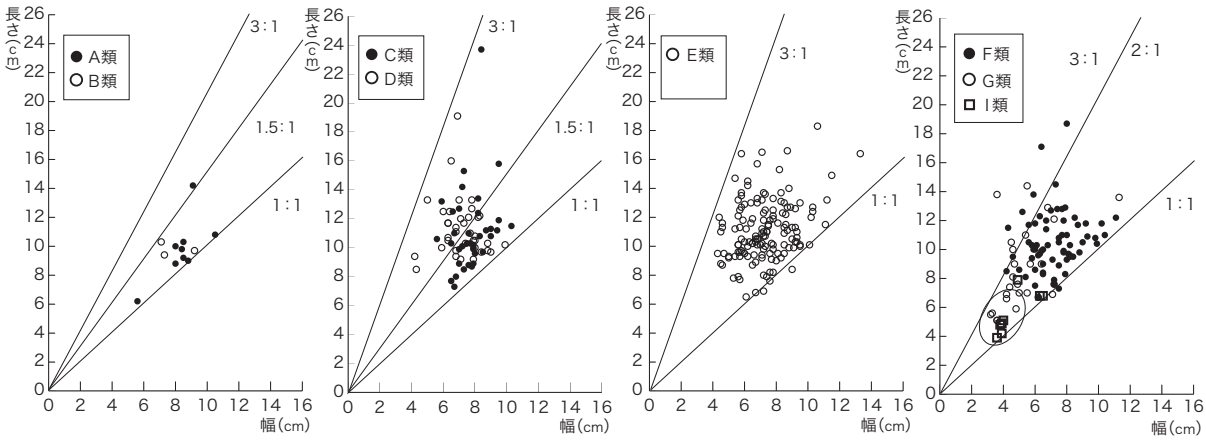
材がみられる。安山岩は遺跡周辺の河川などで最も手近に採取可能な石材であり、このような安山岩優位の石材組成は、周辺の石材環境を反映したものと推測される。

安山岩に次ぐ数量の斑レイ岩や閃緑岩は、類型別の石材比率ではF・G・I類に多い傾向がみられる。これは、F・G・I類が敲打作業を主体とする類型のためと推測され、このほかにも蛇紋岩やチャート、頁岩など、安山岩と比較して硬度の高い石材の利用頻度が比較的高い傾向がみられる。なお、非在地石材には蛇紋岩が含まれるがこれは磨製石斧の転用である。

大きさ（第95図1） 長幅比の分布から、磨石類は全体としては1：1～3：1、長さ：8～14cm、幅4～11cmに分布の集中がみられる。分布の集中は、磨石類の使用から判断すると、掌に収まるおおきさから両手で持てる程度の大きさであったことが予想される。一方、I類とG類の一部には長さ4～6cm、幅3～5cmに分布し、本器種とは異なる分布を示し、敲打整形などの細かな作業に適した大きさと考えられる。

類型別では、分布に多少の差異がみられ、これらは「敲き」「磨り」などの作業に応じた素材選択や使用の結果が現れたものと考えられる。磨痕を有する類型（A・B・C類）では長幅比1：1～2：1に対して、敲打痕のみ有する類型（E・F・G類）では長幅比1：1～3：1に分布がみられる。このことは後者が短軸長に対し、長軸が長い素材が含む傾向を示す。敲打具の素材には棒状礫が志向されたのに対し、磨面を持つものには表裏面の広い作業面を必要とした結果と考えられる。なお、D類は磨痕を有する類型でも長幅比1：1～3：1に分布が確認できる。D類は多数の使用痕が重複するものが多く、特に両側面には敲打、磨りなどの使用によって素材時と比べ身幅が減じられた結果を反映したためと推測される。

分　布（第96図2・3） 出土分布の内訳では、住居跡199点、フラスコ状土坑58点、土坑94点となる。類型別にみると、A・C・D類に住居跡からの出土数が多く、E類では土坑からの出土が多い傾向がみられる。これらの分布傾向は、A・C・D類とE類では廃棄される場所が異なることを示しものである。見方を変えると、複数の使用痕が重複するA・C・D類は、長期的に利用される道具として居住域に保管され、そのため、居住域に廃棄される傾向が高いと考えられる。このように考えた場合、単独の使用痕となるE類は、一時的な利用のため、使用場所付近に廃棄されたと考えられるのではないだろうか。



① 磨石類　A・B類　② 磨石類　C・D類　③ 磨石類　E類　④ 磨石類　F・G・I類

1．磨石類　長幅分布図

第95図　磨石類（2）

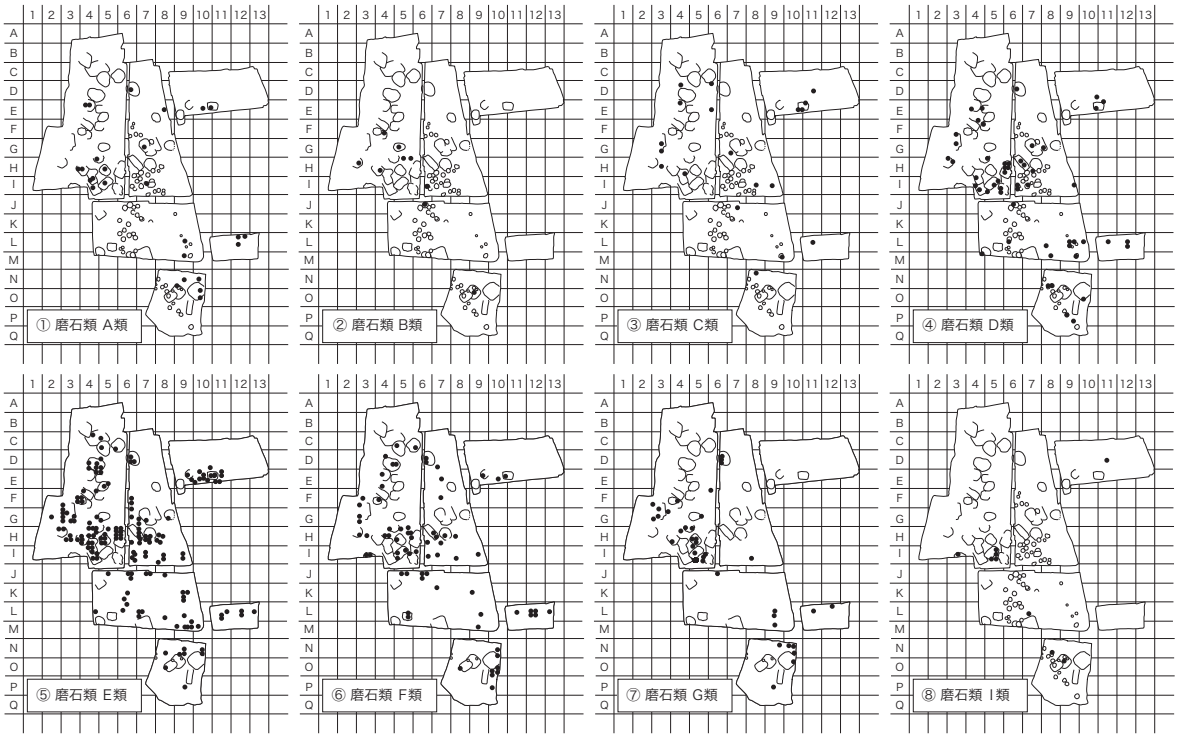
時　期（第96図1） 出土遺物が時期的にまとまる遺構からは、98点が出土した。総数では3ａ期が最も多い39点、次いで1期24点、2期18点、3ｂ期8点となる。分類別では、E類47点、F類20点、D類11点、G類10点などが多く、これらの時期別の数量差がほぼそのまま総数での各期の差となる。逆に数量の少ないA・B・C類は総数での数量の変化とは連動しない傾向がみられる。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	不明	計	出土遺構名
1期 (大木8ａ並行)	2			2	12	5	3				24	第9・11・45号住居跡、H8-P1
1～2期 (大木8ａ～8ｂ式並行)					3						3	H7-P13（フラスコ状土坑）
2期 (大木8ｂ並行)	1	1	2	2	7	3	1			1	18	5J-P4、G6-P7、H8-P3、I6-P3、I7-P2・P6・P14、J6-P26（フラスコ状土坑）
2～3期 (大木8ｂ～沖ノ原式)					2	2	1			1	6	G3-P2、J5-P17（フラスコ状土坑）
3a期 (沖ノ原Ⅰ式)			4	6	16	9	3			1	39	第23・38・50号住居跡、4J-P1、H8-P7、I5-P2、I8-P6、J6-P2（フラスコ状土坑）
3b期 (沖ノ原Ⅱ式)		1			4	1	2				8	第32号住居跡、J6-P27
3b～4期 (沖ノ原Ⅱ～三十稲場)				1	3							L6-P12
計	3	2	6	11	47	20	10	0	0	3	98	

1．磨石類時期別遺構出土数量表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	不明	小計
フラスコ状土坑	1	2	2	5	29	11	5		1	2	58
住居跡	11	4	25	28	73	32	17		3	6	199
ピット	5	1	6	14	37	20	5		4	2	94
その他	10	2	16	8	69	27	12	0	1	13	158
計	27	9	49	55	208	90	39	0	9	23	509

2．磨石類分布内訳



3．磨石類出土分布図

第96図　磨石類（3）

12）石錘（図版第 425 図 28、第 446 図 226、第 447 図 244、第 456 図 348）

石錘としたものは、総数４点出土した。分類ごとの内訳はＡ類（礫石錘）１点、Ｂ類（切目石錘）３点となる。１点のみ出土した１類は糸掛部分を上下にした場合、横長となるものである。

分　類（第 97 図１）分類は、糸掛部分の作出方法を基準に２分類した。

Ａ類：糸掛部分を敲打によって作出されたもの（礫石錘）。

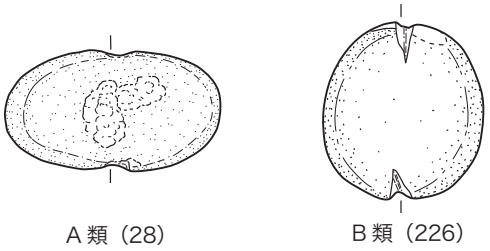
Ｂ類：糸掛部分を擦切りによって作出されたもの（切目石錘）。

使用石材（第 97 図２） 石材は頁岩が３点、不明１点であり、扁平な楕円礫を素材とする。また、２類はすべて頁岩が用いられることから、擦切りによる糸掛け部の作出に際しては軟質な素材が効果的であったことが予想される。

欠損状況　総数４点のうち、完形が３点、破片が１点となる。

大きさ（第 97 図４） 長さ：３～５cm、幅２～ 5.5 に分布し、重量はすべて 10g 以下の小形である。長幅比はＡ類で１：２付近の横長となり、Ｂ類では２：１～１：１に分布がみられる。

分　布（第 97 図５） 出土位置での分布では、住居跡１点、土坑１点、包含層その他からの出土２点となる。出土遺物の時期が特定された遺構からの出土はなかった。



Ａ類（28）　　Ｂ類（226）

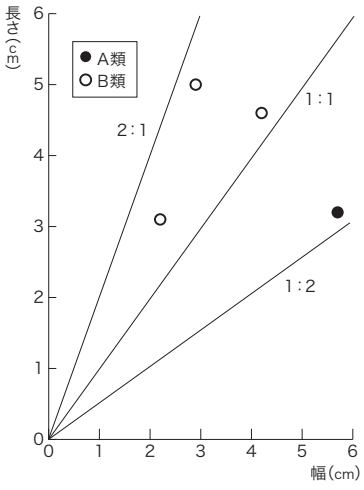
１．石錘分類図

		Ａ類	Ｂ類	不明	計
在地石材１	無斑晶質ガラス質安山岩				0
	安山岩				0
	珪質頁岩（B）				0
	頁岩		3		3
	凝灰岩質頁岩				0
不明		1			1
計		1	3	0	4

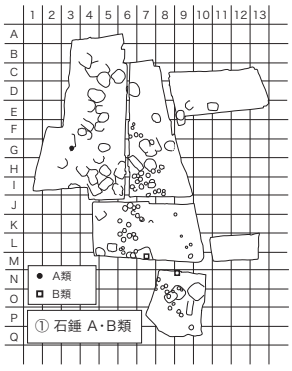
２．石錘石材組成表

	Ａ類	Ｂ類	不明	計
完　形	1	2		3
１／２破片		1		1
不　明				0
計	1	3	0	4

３．石錘残存部位数量表



４．石錘長幅分布図



５．石錘出土分布図

第 97 図　石錘

13）砥 石（図版第 426 図 37、第 428 図 54、第 429 図 58、第 432 図 98、第 439 図 165、第 443 図 202、第 444 図 211、第 456 図 349 ～ 352）

砥石としたものは、総数 29 点出土した。類型別の内訳では４類 12 点が最も多く、次いで不明５点、２類４点、１類３点、３類３点となる。

分　類（第 98 図 1） 分類は、使用面（砥面）形状による細分の組み合わせによって行なった。

１類：溝状の砥面のみ有するもの。

２類：面状の砥面のみ有するもの。

３類：溝状と面状の砥面を有するもの。

４類：帯状・面状を有するもの。

５類：側面に敲打痕または擦痕を有するもの。

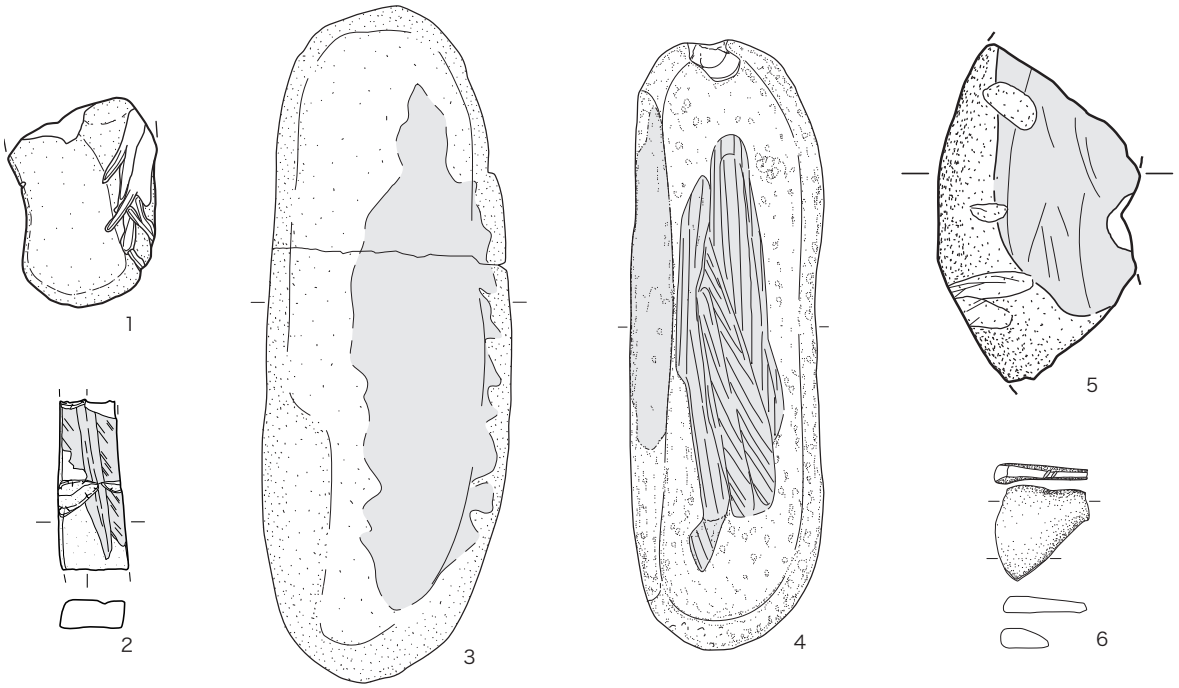
砥　面　砥石にみられる砥面は、使用面の形状として、以下のような特徴を持つ。

（1）溝状となるもの。　（2）平坦な面状となるもの。

（3）幅２～ 5cm 程度の帯状となるもの。　（4）側縁に敲打あるいは研磨面がみられるもの。

（1）は概ね、長さ：３～ 8cm、幅：0.2 ～ 1cm を測るもので、骨角器などの細長いものを研いだ痕跡と考えられる。また、（3）は使用面の長軸幅を持つ砥面であり、断面が曲面となるものが多い。刃先痕がみられることから磨製石斧などの刃部を研磨した痕跡と考えられる。（4）は小形の砥石（手持砥石）にみられるもので、横断面形がＶ字状となるものもみられる。

使用石材（第 99 図 1） 石材には、砂岩９点、斑レイ岩６点、凝灰質砂岩４点、安山岩４点、角礫凝灰岩２点などが使用され、ほとんどが他の器種ではみられない在地石材が多い。本器種に用いられる石材にはきめの細かな石材は少数であり、荒い粒子を含むものが多い。また、石材名が同じであっても他の器種で使用される細粒・緻密な石材はない



1．砥石分類図

第 98 図　砥石（1）

大きさ（第 99 図3） 完形・略完形資料８点の長幅分布から本器種の大きさを確認しておきたい。大きさでは、長さ：6.7 ～ 35.6cm、幅：4.7 ～ 18.0cm、重量では 47.5 ～ 5430g を測り、長幅比では概ね２：１のラインを境に分布が分かれる。大半が１：１～２：１付近の分布に対し、３・４類のうち長大なもの２点は４：１付近に分布がみられる。当該期の砥石では石棒を転用した砥石の存在が知られており、ここにあげた長大な砥石もそうした長軸の長さを必要とした砥石のグループに属するものと考えられる。また長幅分布からは、10cm 以下のもの、12 ～ 16cm のもの、長さ 20cm 以上のものといった三つ程度に分布のピークを認めることができる。使用時の状況を想定するならば小形のものを「手持ち砥」、大形ものを「置き砥」、小形～大形のものを中間的なものと当てはめられよう。

分　布（第 99 図5） 出土分布の内訳では、住居跡 19 点、フラスコ状土坑１点、土坑２点、包含層などからの出土が７点となる。住居跡出土が多くを占めるが、分類別での偏りはみられない。本遺跡から出土した砥石は、器面に敲打痕や凹痕が観察されるものや石皿からの転用と考えられるものなどが見られる。これらは居住範囲での使用の結果と考えることができ、出土分布と一致した内容といえるだろう。

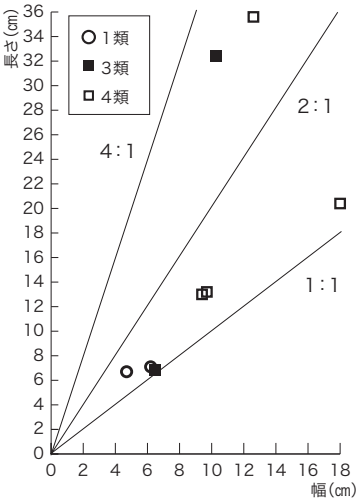
時　期（第 99 図4） 出土遺物の時期が特定された遺構からは６点が出土した。分類別では２類が３点、４類が１点、不明２点となる。出土数が少数ながら３期（沖ノ原式期）に比較的数量がまとまる傾向がみられる。

		1	2	3	4	5	不明	計
在地石材１	安山岩			1	2	1		4
	斑レイ岩		2	1	3			6
	閃緑岩				1			1
	頁岩	1					1	2
	砂岩	1	1		3	1	3	9
	凝灰質砂岩		1	1	1		1	4
	角礫凝灰岩	1			1			2
不明					1			1
計		3	4	3	12	2	5	29

１．砥石石材組成表

	1	2	3	4	5	不明	計
完形・略完形	2		2	4			8
欠損	1	1	1	1	1		5
破片		3		7	1	5	16
計	3	4	3	12	2	5	29

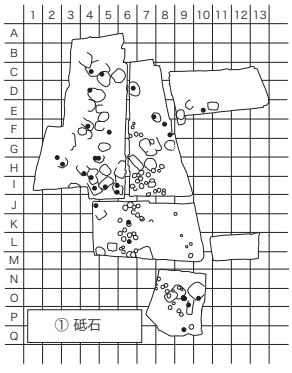
２．砥石残存部位別数量表



３．砥石長幅分布図

	1	2	3	4	5	不明	計	出土遺構
1 期（大木 8a 式並行）		1					1	第 11 住居跡
3a 期（沖ノ原Ⅰ式）		1				1	2	第 23 号住居跡
3b 期（沖ノ原Ⅱ式）		1		1		1	3	第 15･32 号住居跡
計	0	3	0	1	0	2	6	

４．砥石時期別遺構数量表



５．砥石出土分布図

第 99 図　砥石（２）

14）石皿類（図版第 424 図 3、第 426 図 34、第 427 図 40・47、第 428 図 55、第 433 図 100、第 436 図 133、第 437 図 138・141 ～ 142、第 438 図 158、第 440 図 171、第 443 図 199、第 444 図 214、第 445 図 220 ～ 221、第 448 図 254、第 457 図 353 ～ 357）

石皿類は、総数 194 点が出土した。分類内訳はA類７点（A１a：3点・A２a：1点、A２c：1点、A３a：1点、A３c：2点）、B類 11 点、C１類 12 点、C２類 104 点、C類 17 点、不明４３点となる。このうち、完形・略完形は 19 点のみとなり、破片や欠損が 175 点を占める。これ以外に器種認定できない磨面を有する砕片など本類の一部の可能性を持つ資料が確認されている。こうした破損資料が多い遺存状況のあり方は、破砕や分割を伴う廃棄行為や炉石や磨石類などへの転用といった二次利用の結果を示すと考えられる。

分　類（第 100 図 1）

A類：器体全体が成形されたもの。細分は１～３、ａ～ｃの組み合わせにより行った（註 166）。

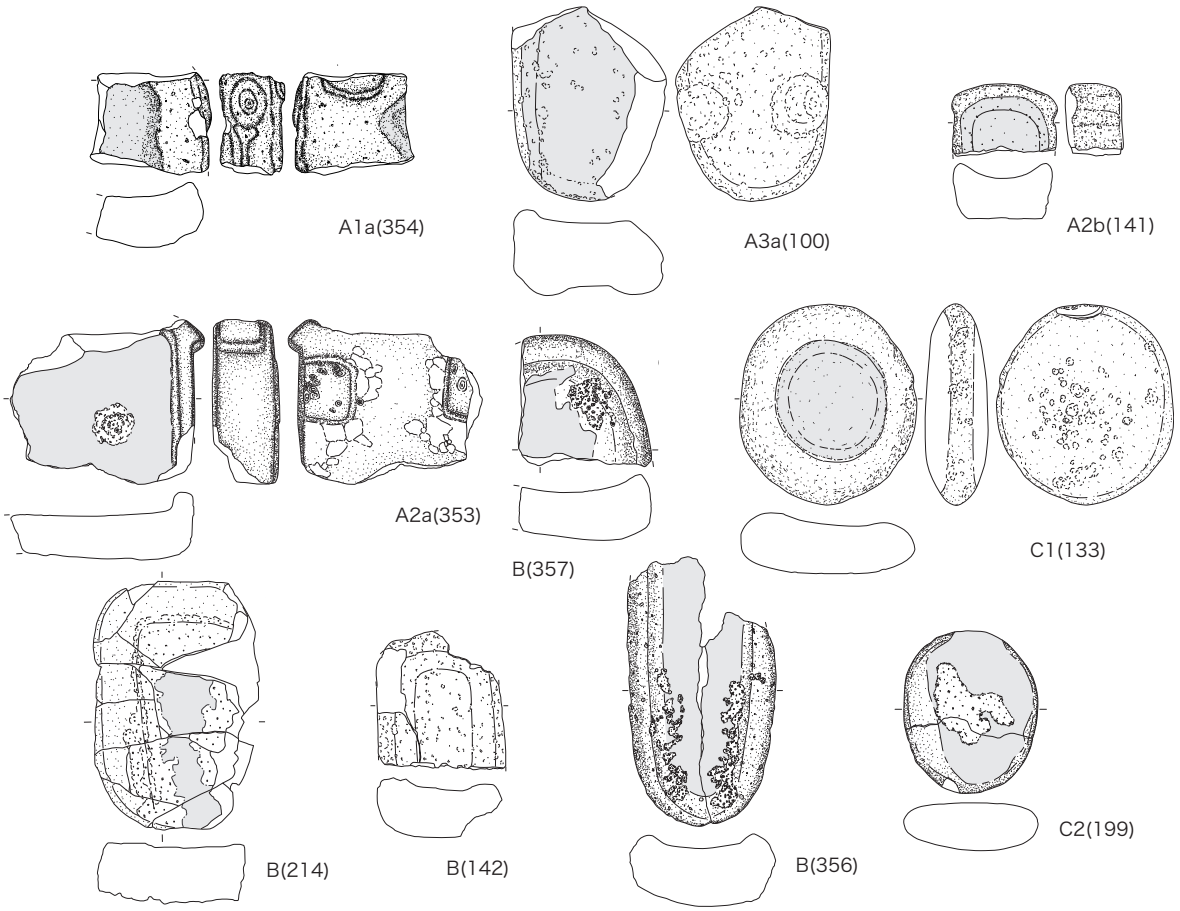
１：彫刻を持つもの。　２：突起や角を作出したもの。　３：彫刻・突起などを持たないもの。

ａ：脚を持つもの。　ｂ：脚を持たないもの。　ｃ：脚が確認できないもの。

B類：皿部（使用面）のみ成形されたもの。

C類：自然礫をそのまま使用し、加工を施さないもの。

１：使用面が緩く窪んだもの。　２：使用面が平坦なもの。



1．石皿分類図

第 100 図　石皿（1）

使用石材（第 101 図 1） 石材は、安山岩が最も多く 166 点、次いで斑レイ岩 10 点となる。安山岩の使用率が高い点で磨石類と同様な石材選択を示している。また、器体全面を成形加工されるＡ類やＢ類には、同じ石材でも、やや多孔質・軟質の安山岩を使用する傾向がみられる。

製　作（第 100 図） 本遺跡からは、Ｂ類の皿部作出途中とした資料（214）が出土した。資料は軟質の安山岩を分割した板状礫を素材とし、片面に敲打による浅い皿部が作出され、若干の研磨痕が観察されるものである。Ｂ類は、このほかにも、皿部に敲打による成形痕（目立て）が観察される資料（142、356）がみられる（註 167）。未製品（214）よりも皿部が深く作出され、成形痕以前の磨痕がわずかに残ることから、敲打痕による成形と使用による磨痕の反復によって、深い皿部が形成されるものと推測される。

残存状況（第 101 図 2） 石皿類は、人為的であるかは別として、欠損部に破断面を持つことで、分割状となる資料が多くみられる（註 168）。本器種では部位による残存状況が示せないため、使用時の形状復元可能程度の欠損品を略完形、残存率 50% 以上を欠損品、50% 以下を破片とした。完形・略完形はＣ類 19 点、不明１点のみであり、欠損品でもＢ類２点、Ｃ類 16 点、不明５点を数えるのみとなる。

時　期（第 101 図 3） 出土遺物の時期が特定された遺構からは４１点が出土した。分類別では１・２類の出土は１期のみ、３類は１～３期のすべてにみられる。遺存状況では、時期が新しくなるに従って、破片数の割合が減る傾向があり、遺構の埋没期間と破片出土数が比例する関係にあるものと思われる。

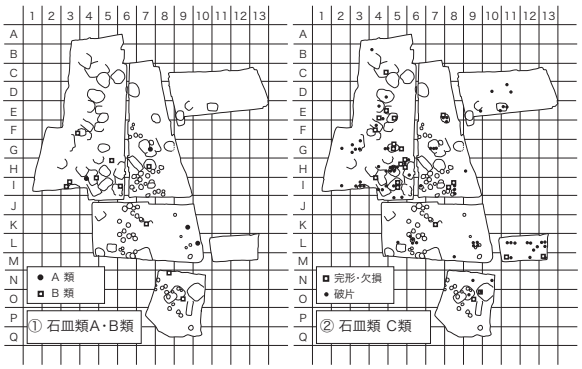
分　布（第 101 図 4） 出土分布の内訳では、住居跡 19 点、フラスコ状土坑１点、土坑２点、包含層などからの出土が７点となる。住居跡出土が多くを占めるが、分類別での偏りはみられない。また、遺存率の違いでは分布差がなく、使用･廃棄･欠損（分割）の行為に時間的な隔たりを認めることができなかった。

		Ａ	Ｂ	Ｃ１	Ｃ２	Ｃ	不明	計
在地石材１	安山岩	7	9	10	97	17	26	166
	ヒン岩		2					2
	斑レイ岩				6		4	10
	閃緑岩			1	1			2
	頁岩						1	1
	砂岩			1			1	2
不明・その他							11	11
計		7	11	12	104	17	43	194

１．石皿類 石材組成表

	Ａ	Ｂ	Ｃ１	Ｃ２	Ｃ	不明	計
完形・略完形		1	1	16		1	19
欠損		2	7	9		5	23
破片	7	8	4	79	17	37	152
計	7	11	12	104	17	43	194

２．石皿類 残存部位別数量表



４．石皿類 出土分布図

	Ａ		Ｂ		Ｃ１		Ｃ２		Ｃ		不明		計		出土遺構名
１期（大木８ａ並行）	1	(1)	1	(1)			13	(11)	1	(1)	4	(4)	20	(18)	第９・11・45 号住居跡
２期（大木８ｂ並行）							10	(8)			2	(2)	12	(10)	H7-P10、I6-P3、I7-P2・P14、J6-P26（フラスコ状土坑）
２－３期(大木８ａ－８ｂ)							2	(1)	1	(1)			3	(2)	G3-P2（フラスコ状土坑）
３ａ期（沖ノ原Ⅰ式）							3	(2)			1	(1)	4	(3)	第 23 号住居跡、H5-P3、H8-P7（フラスコ状土坑）
３ｂ期（沖ノ原Ⅱ式）					2	(2)	3	(1)					5	(3)	第 32 号住居跡
計	1	(1)	1	(1)	2	(2)	31	(23)	2	(2)	7	(7)	44	(36)	

３．石皿類 時期別遺構数量表

第 101 図　石皿（２）

15）その他の石器

ここでは、前項までに触れられなかった定形石器の分類から洩れた不明石器と磨き石、石刃状剥片について記載する。

①不明石器（第8図46、第426図36、第430図72）

不明石器としたのは3点である。46は試掘調査で出土したもの。36は第13号住居跡、72は第23号住居跡からの出土である。不明石器とした中で、46と36は同じカテゴリーに入るものと思われる。以下、本遺跡から出土した不明石器について46・36、72の順に記載する。

46と36は、両側縁に裏面からの片面調整が施されることで平面形は短冊状をなす石器である。側縁加工は、打製石斧A類に類似した剥離形態を持ち、基部の作出を意図した側縁調整と考えられる。36は下端部を欠失するが、46の下端部には片刃に成形された刃部が見られることから、二点ともに下端部に刃部（機能部）を持つ剥片石器と推測される。46の刃部形状がエンド・スクレイパー様の刃部を特徴とする点から、46・36は篦状石器や打製石斧A類に類する斧形石器と予想される。しかしながら、これまでの調査事例の中に類例がなく、2点の出土で器種を設定するのは早急と考えたため、本報告では定形石器の枠から外し報告した。

72は、第23号住居跡から出土したもので、無斑晶ガラス質安山岩の剥片を素材として四辺に両面加工を施すことにより四つの突起を有する異形の石器である。上端の突起を挟んだ左右2辺が抉入状となることから、三脚石器または粗製石匙の変異形とも考えられる。ここでは、それぞれの分類基準からは逸脱するため、不明石器として扱った。

②磨き石（第434図119）

磨き石は、1点のみ出土した。第30号住居跡から出土し、頁岩の小楕円礫を素材として側面に明瞭な線状痕と光沢を帯びた使用面を持つ。土器製作時の器面整形に使用したものと予想される。

③石刃状剥片（写真図版97）

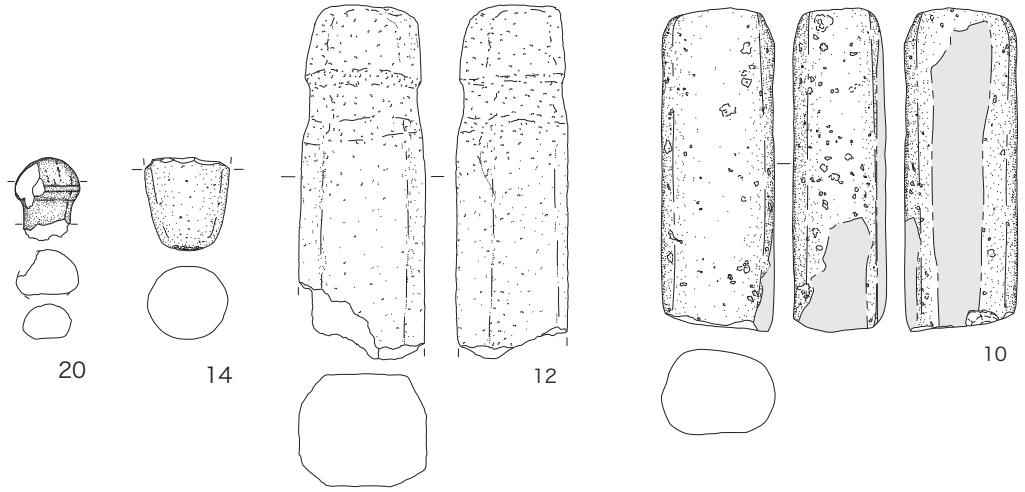
本遺跡では、石刃状剥片または石刃状剥片を素材とする石器が一定数の出土か確認されている。
素材として利用されたことによって器種として図示されたもの以外については、写真図版での報告となるが、本遺跡から出土した石刃状剥片の中で特徴的と思われるものを掲載する。

使用石材は、およそ珪質頁岩A・Bの二種に限定されており、素材として認識できるのは5～10cm以内のやや小形のものである。同素材が剥離されたと思われる石核の存在が確認できなかったことから、石刃状剥片の作出に特化した製作体制にはなかった、あるいは、遺跡内での製作ではなく、他遺跡からの搬入によって残された可能性が予想される。

4．石製品

1）石棒類（第 8 図 45、図版第 458 図 5・7・8、第 459 図 10・12・14、第 460 図 20 ～ 21）

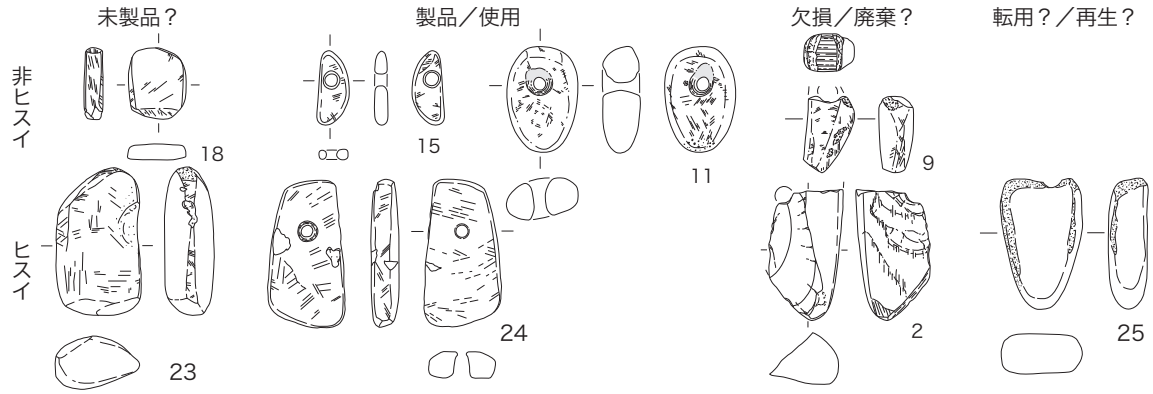
石棒類は 68 点出土し、破片資料が 62 点を数える。そのうち、頭部を持つもの（有頭石棒）が 3 点のみ確認された。大きさの内訳では、胴部径 10 ㎝以上のものが 22 点、8 ～ 10 ㎝のものが 6 点、8 ㎝以下のものが 2 点となる。また、製作面では、全面を敲打と研磨によって成形されたもの（4 点）、部分的に敲打成形や擦痕が施されるもの（64 点）がみられる。出土数では後者が圧倒的に多数を占め、変形度合いの低い石棒製作が本遺跡の特徴といえる。このほか、使用石材ではヒン岩（60 点）が最も多く、斑レイ岩（3 点）、安山岩（3 点）、緑泥片岩（2 点）が次ぐ。素材面の観察から、素材の多くは柱状礫を多用していることが伺われる。



第 102 図　石棒類

2）垂飾（図版第 458 図 2・9、第 459 図 11、第 460 図 15・24 ～ 25）

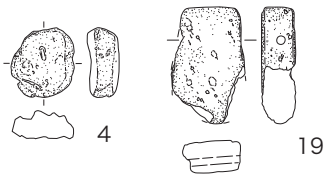
垂飾は 6 点出土し、完形資料は 3 点、欠損資料は 3 点を数える。欠損資料のうち 1 点（24）は敲き石への転用品としたが、敲打痕が欠損部分を中心に集中する点を穿孔部分の成形を目的とする再生加工と考えることも可能である。また、後述するヒスイ製品（25）や板状石製品（18）は、使用石材や加工形態から垂飾の未製品と考えられるものだが、これらの資料のあり方から、本集落内では垂飾の穿孔工程を担っていた可能性が指摘できよう。



第 103 図　垂飾

3）軽石製石製品（図版第 458 図 4、第 460 図 19）

軽石製石製品は 3 点出土し、2 点に穿孔が施される。本来、穿孔を有するものは上記の垂飾に含めるべきと考えるが、ここでは、通例に習い軽石製の石製品を一括した。形態的には、未加工のもの(4)、板状に整形され、穿孔を有するもの（19）の二者がある。

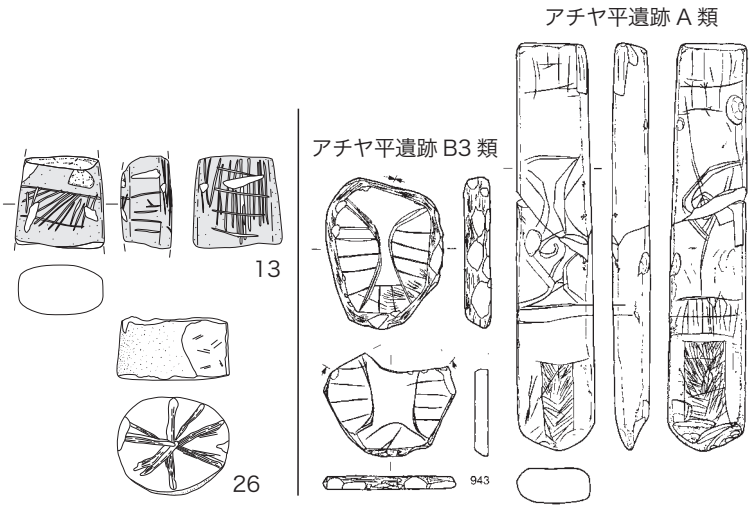


第 104 図　軽石製石製品

使用石材となる軽石は、この 3 点以外は石器や礫を含めて他器種での使用例はみられない。

4）線刻礫（図版第 459 図 13、第 460 図 26）

線刻礫は 2 点出土した。13 は磨製石斧と思われる胴部に線刻され、26 は円盤状に分割された破断面に線刻が施される。線刻礫は魚沼地域での類例は少ないため、村上市アチヤ平遺跡の分類（註 169）で比較する。13 は A 類（棒状形態で「腰ミノ状」などの特徴を持つ人体文を持つもの）に類似し、26 は弧線と直線の差があるものの、B3 類（対をなす区画の間を横位沈線で充填するもの）に類似性が求められる。このように、アチヤ平遺跡例とは文様上での類似点を持つ一方、選択石材や素材選定において明らかに異なった内容を示す。本資料がアチヤ平遺跡など阿賀北地域との深い影響関係があったことは想像に難くないものの、在地で製作された資料の可能性は極めて高いものといえよう。



第 105 図　線刻礫

5）類石棒（図版第 458 図 3）

類石棒は 1 点が出土した。棒状礫を素材として、敲打・研磨で整形されたものである。

6）臼形石製品（図版第 458 図 6、第 460 図 17）

臼形石製品は 2 点が出土した。6 は、裏面に凹痕を残し、大きさや石材選択という点で磨石類の転用の可能性が高い。一方、17 は窪みを持つ自然礫の凹面に擦痕が観察される資料であり、6 とは素材選択やライフヒストリーの面で異なるものといえる。

7）三角形石製品／三脚形石製品／板状石製品（図版第 458 図 1、第 460 図 16・18）

板状の石製品をまとめて記載する。各器種 1 点ずつ出土し、製作面では三角形石製品は全面に敲打・研磨によって整形される。一方、三脚形石製品・板状石製品はほぼ素材形状を残し、周縁や表裏面に研磨加工を施すことで整形されたものである。形態的には、三角形石製品は三角形土偶、三脚形石製品は三脚石器と相似し、土製品や石器との関係性の高さが予想される。

8）ヒスイ製品（図版第 460 図 25）

ヒスイ製品は、1 点のみ出土した。垂飾の項でも述べたように、こうしたものを垂飾の未製品とした場合、遺跡搬入時の形態（生産遺跡での搬出形態）は整形され未穿孔の状態であったことが推察される。

No.	図版	図版名	出土遺構	出土位置	器種	細別	石材名	残存部位	素材	計測値 (cm /g)				備考
										長さ	幅	厚さ	重量	
1	424	住居跡出土 (1)	第 1 号住居跡	G4-23-18-1J	打製石斧	A2	流紋岩？	完形	横長剥片	10.0	3.9	2.5	96.5	
2	424	住居跡出土 (1)	第 1 号住居跡	1J-P	磨製石斧	A2b	凝灰岩質頁岩	刃部欠損	不明	(9.5)	5.1	2.3	173.4	大形
3	424	住居跡出土 (1)	第 1 号住居跡	1J-17	石皿類	C2	安山岩	完形	扁平礫	12.1	8.4	3.1	415.7	
4	424	住居跡出土 (1)	第 3 号住居跡	F5-6-14-3J	石鏃	A1b	黒曜石	完形	不明	1.9	1.4	0.3	0.6	
5	424	住居跡出土 (1)	第 3 号住居跡	F5-6-28-3J	石鏃	A1b	珪質頁岩 B	脚部欠損	不明	2.3	1.7	0.5	13.0	
6	424	住居跡出土 (1)	第 3 号住居跡	F5-6-34-3J	石錐	B	頁岩	完形	不明	4.0	2.1	0.9	5.5	
7	424	住居跡出土 (1)	第 3 号住居跡	F5-1-34-3J	不定形石器	II h3	珪質頁岩 B	完形	剥片	5.9	3.6	1.9	31.1	
8	424	住居跡出土 (1)	第 4 号住居跡	4J-21	打製石斧	C2	凝灰岩質頁岩	完形	横長剥片	13.1	6.4	2.1	188.2	刃部使用痕
9	424	住居跡出土 (1)	第 4 号住居跡	F4-9-9-4J	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	8.8	3.3	1.3	31.1	刃部使用痕
10	424	住居跡出土 (1)	第 4 号住居跡	F4-9-12-4J	不定形石器	I f3	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	完形	縦長剥片	9.7	4.3	2.3	78.1	
11	424	住居跡出土 (1)	第 5 号住居跡	5J-26	不定形石器	I c	珪質頁岩 B	完形	縦長剥片	9.5	5.1	2.0	95.2	石錐？
12	424	住居跡出土 (1)	第 5 号住居跡	5J-P4	打製石斧	B2	頁岩	完形	縦長剥片	11.4	4.8	3.0	161.2	
13	424	住居跡出土 (1)	第 5 号住居跡	5J-39	不定形石器	I c1	珪質頁岩 B	端部欠損	縦長剥片	(7.8)	3.0	1.0	13.7	
14	425	住居跡出土 (2)	第 6 号住居跡	F4-16-1-6J	磨製石斧	B	蛇紋岩	基部欠損	不明	(4.2)	2.1	1.0	11.7	擦切り磨製石斧
15	425	住居跡出土 (2)	第 6 号住居跡	F4-16-4-6J	磨石類	D	安山岩	完形	楕円礫	10.3	8.8	4.6	545.0	
16	425	住居跡出土 (2)	第 8 号住居跡	8J-11	打製石斧	A2	頁岩	完形	横長剥片	11.4	4.7	2.4	111.3	刃部に小形剥離
17	425	住居跡出土 (2)	第 9 号住居跡	9J-135	石錐	C2	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	先端部欠損	角柱状剥片	(4.5)	2.2	1.9	15.2	
18	425	住居跡出土 (2)	第 9 号住居跡	9J-305	打製石斧	A2	頁岩	完形	横長剥片	8.6	3.8	1.5	59.1	刃部使用痕光沢
19	425	住居跡出土 (2)	第 9 号住居跡	D5-5-1-9J	打製石斧	C1	頁岩	完形	横長剥片	10.9	5.9	2.6	158.6	刃部微細剥離
20	425	住居跡出土 (2)	第 9 号住居跡	9J-275	打製石斧	C1	頁岩	完形	不明	11.9	4.6	2.7	160.6	刃部に敲打痕
21	425	住居跡出土 (2)	第 9 号住居跡	9J-726	石皿類	B	安山岩	1/4 破片	扁平礫	(12.5)	(8.6)	5.2	680.5	
22	425	住居跡出土 (2)	第 10 号住居跡	10J-119	石鏃	A2a	珪質頁岩 A	完形	不明	3.2	1.9	0.4	1.5	脚部抉の調整：連続する浅形
23	425	住居跡出土 (2)	第 10 号住居跡	G3-9-20-10J	石鏃	Ba	珪質頁岩 A	完形	横長剥片	2.1	1.3	0.3	0.9	周縁調整のみの加工
24	425	住居跡出土 (2)	第 10 号住居跡	10J-P17	石錐	B	珪質頁岩 B	完形	剥片	4.4	2.2	0.7	5.0	
25	425	住居跡出土 (2)	第 10 号住居跡	10J －P10 ①	打製石斧	A1	珪質頁岩 B	完形	横長剥片	14.2	5.6	3.0	252.7	刃部使用痕
26	425	住居跡出土 (2)	第 10 号住居跡	10J-171	磨石類	D	安山岩	完形	楕円礫	12.2	8.3	4.0	835.2	石鹸形？
27	425	住居跡出土 (2)	第 10 号住居跡	10J-41	磨石類	D	安山岩	完形	不明	11.7	6.3	4.0	454.4	石鹸形。凹→磨→凹
28	425	住居跡出土 (2)	第 10 号住居跡	G3-13-43-10J	石錘	A	砂岩	完形	楕円礫	3.2	5.7	2.4	55.1	
29	426	住居跡出土 (3)	第 11 号住居跡	11J-153	不定形石器	II h1	凝灰岩質頁岩	完形	横長剥片	4.5	7.7	2.1	57.9	
30	426	住居跡出土 (3)	第 11 号住居跡	11J-1	磨製石斧	A2a	蛇紋岩	刃・基部欠損	不明	(8.6)	5.4	2.1	184.4	刃部再生？
31	426	住居跡出土 (3)	第 11 号住居跡	11J-135	磨製石斧	B	緑色凝灰岩	刃部破片	不明	(4.8)	3.6	2.0	53.0	胴部に敲打整形痕
32	426	住居跡出土 (3)	第 11 号住居跡	11J-501	磨石類	E	安山岩	完形	亜円礫	9.9	8.8	7.2	765.9	
33	426	住居跡出土 (3)	第 11 号住居跡	11J-658	磨石類	G	安山岩	完形	楕円礫	8.1	4.6	2.9	136.9	
34	426	住居跡出土 (3)	第 11 号住居跡	11J ②	石皿類	C2	安山岩	完形	扁平礫	20.5	20.9	7.4	4455.1	
35	426	住居跡出土 (3)	第 12 号住居跡	12J-P4 ③	石鏃	A1a	黒曜石	脚部欠損	不明	2.4	1.5	0.4	0.9	
36	426	住居跡出土 (3)	第 13 号住居跡	13J	不明石器		頁岩	端部欠損	縦長剥片	(9.7)	3.6	2.4	89.6	
37	426	住居跡出土 (3)	第 13 号住居跡	13J-89	砥石	1	砂岩	端部欠損	楕円礫	(6.7)	4.7	3.7	77.9	
38	427	住居跡出土 (4)	第 13D 号住居跡	13JD-83	不定形石器	III	頁岩	完形	分割礫	7.2	4.0	3.5	95.4	
39	427	住居跡出土 (4)	第 13D 号住居跡	13JD-257	打製石斧	B	凝灰岩質頁岩	刃部欠損	横長剥片	(12.8)	7.2	3.9	374.3	
40	427	住居跡出土 (4)	第 13D 号住居跡	13JD-389	石皿類	C1	砂岩	1/3	扁平礫	(21.7)	(13.6)	6.8	2833.1	両面・側面破断面に磨痕
41	427	住居跡出土 (4)	第 15 号住居跡	15J-382	石鏃	A2a	珪質頁岩 A	完形	不明	3.2	1.5	0.6	1.9	
42	427	住居跡出土 (4)	第 15 号住居跡	15J ①	石鏃 (未成品)		珪質頁岩 A		剥片	2.7	1.9	0.5	2.5	
43	427	住居跡出土 (4)	第 15 号住居跡	15J-2044	三脚石器	A	頁岩	完形	剥片	5.3	9.7	2.4	77.2	裏面に使用痕光沢
44	427	住居跡出土 (4)	第 15 号住居跡	15J-352	三脚石器	A	珪質頁岩 B	端部欠損	不明	(4.5)	7.2	2.8	59.4	
45	427	住居跡出土 (4)	第 15 号住居跡	15J-1938	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	10.5	5.0	2.1	137.9	
46	427	住居跡出土 (4)	第 15 号住居跡	15J-1919	磨石類	A	安山岩	完形	楕円礫	10.0	8.0	4.5	528.9	
47	427	住居跡出土 (4)	第 15 号住居跡	15J-1560	石皿類	C1	安山岩	1/2 破片	扁平礫	21.2	(12.9)	5.2	1957.5	
48	428	住居跡出土 (5)	第 17 号住居跡	17J ③	不定形石器	II f3	凝灰岩質頁岩	完形	横長剥片	6.1	2.3	1.1	14.5	尖頭状
49	428	住居跡出土 (5)	第 17 号住居跡	17J ①	打製石斧	C2	頁岩	完形	縦長剥片	12.0	5.6	1.8	124.3	微細剥離
50	428	住居跡出土 (5)	第 17 号住居跡	17J ②	不定形石器	II a2	凝灰岩質頁岩	完形	横長剥片	4.0	9.0	1.8	46.5	
51	428	住居跡出土 (5)	第 18 号住居跡	18J-17	石錐	A1	チャート	完形	角柱状剥片	4.5	0.5	0.6	1.4	
52	428	住居跡出土 (5)	第 18 号住居跡	18J ①	三脚石器	A	頁岩	完形	不明	3.8	6.4	1.9	24.4	

第 105 表　出土石器観察表

No.	図版	図版名	出土遺構	出土位置	器種	細別	石材名	残存部位	素材	計測値 (cm /g)				備考
										長さ	幅	厚さ	重量	
53	428	住居跡出土 (5)	第 18 号住居跡	18J-172	磨石類	E	安山岩	完形	分割礫	8.0	7.1	4.3	264.4	
54	428	住居跡出土 (5)	第 18 号住居跡	18J-221	砥石	3	安山岩	完形	柱状礫	32.4	10.3	87.6	4480.8	
55	429	住居跡出土 (5)	第 18 号住居 (炉) 跡	18J- 炉	石皿類	C	安山岩	完形	扁平礫	36.5	20.2	7.8	7000.0	
56	429	住居跡出土 (6)	第 19 号住居跡	19J ①	石匙	C1	頁岩	完形	剥片	11.8	6.2	1.7	108.7	
57	429	住居跡出土 (6)	第 19 号住居跡	19J-11	磨石類	B	緑色凝灰岩	完形	楕円礫	9.4	7.3	5.0	504.1	石鹸形
58	429	住居跡出土 (6)	第 19 号住居跡	19J-141	砥石	5	安山岩	端部破片	不明	(2.5)	4.4	1.5	23.2	石包丁様石器
59	429	住居跡出土 (6)	第 20c 号住居跡	20J-51[20cJ]	打製石斧	A1	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	完形	横長剥片	9.1	4.4	2.5	119.0	片刃
60	429	住居跡出土 (6)	第 20c 号住居跡	20J-26[20cJ]	打製石斧	B2	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	完形	横長剥片	21.0	6.9	3.7	434.6	
61	429	住居跡出土 (6)	第 20c 号住居跡	20J-63[20cJ]	打製石斧	C1	凝灰岩質頁岩	完形	縦長剥片	18.4	5.9	3.4	298.1	微細剥離、両刃 ?/ 尖刃
62	429	住居跡出土 (6)	第 20c 号住居跡	20J-271[20cJ]	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	10.9	4.7	1.6	79.7	使用痕⇒微細剥離
63	429	住居跡出土 (6)	第 20c 号住居跡	20J-267[20cJ]	磨製石斧	A2a	斑レイ岩	完形	不明	10.4	4.9	2.2	176.8	刃部使用痕
64	429	住居跡出土 (6)	第 20c 号住居跡	20J-21[20cJ]	磨石類	D	安山岩	完形	不明	12.0	7.1	5.3	632.4	石鹸形。凹→磨
65	429	住居跡出土 (6)	第 20c 号住居跡	20J-25[20cJ]	磨石類	F	泥板岩	1/2	棒状礫	(14.1)	6.1	3.6	392.9	
66	430	住居跡出土 (7)	第 20a 号住居跡	20J ①	石錐	B	頁岩	完形	縦長剥片	6.3	3.1	1.3	16.4	剥片の素材端部に機能部
67	430	住居跡出土 (7)	第 20a 号住居跡	20J ②	打製石斧	B2	頁岩	完形	剥片	9.4	4.9	2.8	103.5	
68	430	住居跡出土 (7)	第 21 号住居跡	21J-46	打製石斧	C2	頁岩	完形	縦長剥片	11.9	5.1	1.8	119.5	使用痕→リタッチ
69	430	住居跡出土 (7)	第 21 号住居跡	21J-191	打製石斧	C1	頁岩	刃部欠損	横長剥片	(10.9)	4.5	2.5	116.8	
70	430	住居跡出土 (7)	第 23 号住居跡	23J-709	石鏃	A2b	黒曜石	完形	不明	1.4	1.1	0.3	0.3	
71	430	住居跡出土 (7)	第 23 号住居跡	23J ⑩	石鏃	A2a	黒曜石	脚部欠損	不明	2.0	1.4	0.3	0.5	
72	430	住居跡出土 (7)	第 23 号住居跡	23J ②	不明石器	Ⅱ i3	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	完形	不明	6.9	5.7	1.6	45.7	三脚石器の未成品か。
73	430	住居跡出土 (7)	第 23 号住居跡	23J-212	磨製石斧 (小形)	A2 b	蛇紋岩	略完形	不明	5.5	2.3	0.6	13.3	中小形。刃部欠
74	430	住居跡出土 (7)	第 25 号住居跡	25J-244	石鏃	A2a	珪質頁岩B	完形	不明	3.8	1.8	0.5	2.0	
75	430	住居跡出土 (7)	第 25 号住居跡	25J-204b	石鏃	A1a	黒曜石	先端・脚部欠損	不明	(2.8)	(1.4)	0.3	1.0	
76	430	住居跡出土 (7)	第 25 号住居跡	25J-190	石鏃 (未成品)		黒曜石	完形	剥片	2.1	1.4	0.4	1.0	
77	430	住居跡出土 (7)	第 25 号住居跡	25J-243	石槍	A	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	完形	横長剥片	12.6	3.9	2.0	92.0	
78	430	住居跡出土 (7)	第 25 号住居跡	25J-P8 ②	打製石斧	A2	頁岩	完形	縦長剥片	10.1	4.9	1.9	96.7	刃部使用痕
79	430	住居跡出土 (7)	第 25 号住居跡	25J-P8 ①	打製石斧	C2	凝灰岩質頁岩	完形	横長剥片	10.8	5.2	2.0	139.4	刃部使用痕。側面の折面から調整
80	430	住居跡出土 (7)	第 25 号住居跡	25J-137	不定形石器	Ⅰ e3	珪質頁岩 A	完形	横長剥片	8.1	5.8	1.8	66.6	
81	430	住居跡出土 (7)	第 25 号住居跡	25J-158	磨製石斧	A2b	蛇紋岩	略完形 (刃部欠)	不明	4.5	2.0	0.7	9.7	小形。再生品 ?
82	431	住居跡出土 (8)	第 26 号住居跡	26J	石匙	C2	頁岩	完形	横長剥片	7.0	8.5	1.0	45.0	
83	431	住居跡出土 (8)	第 26 号住居跡	26J ③	打製石斧	A2	頁岩	刃部欠損	縦長剥片	(11.9)	4.3	2.4	150.4	刃部使用痕⇒剥離
84	431	住居跡出土 (8)	第 26 号住居跡	26J ②	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	15.0	6.1	3.0	313.7	刃部使用痕 (先端両面短
85	431	住居跡出土 (8)	第 26 号住居跡	26J ④	磨石類	D	安山岩	完形	楕円礫	11.4	6.8	5.2	550.1	
86	431	住居跡出土 (8)	第 26 号住居跡	26J ⑤	磨石類	C	安山岩	完形	楕円礫	13.2	5.9	4.3	580.8	
87	431	住居跡出土 (8)	第 27 号住居跡	27J-P12 ④	打製石斧	A2	頁岩	完形	縦長剥片	12.5	4.1	2.5	134.4	刃部使用痕
88	431	住居跡出土 (8)	第 27 号住居跡	27J-35	打製石斧	A2	頁岩	完形	横長剥片	8.6	4.7	1.9	80.9	刃部敲きか。小形・微細剥離
89	431	住居跡出土 (8)	第 27 号住居跡	27J-P12 ②	打製石斧	B1	頁岩	完形	横長剥片	9.9	3.9	1.3	52.6	片刃。箆状石器か
90	431	住居跡出土 (8)	第 27 号住居跡	27J-P12 ③	打製石斧	B1	頁岩	完形	横長剥片	10.5	4.9	1.9	79.5	不明
91	431	住居跡出土 (8)	第 27 号住居跡	27J-P12 ①	打製石斧	C2	頁岩	完形	不明	15.4	4.6	2.0	135.0	小剥離
92	431	住居跡出土 (8)	第 27 号住居跡	27J-58	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	11.9	5.8	2.4	168.7	小剥離
93	432	住居跡出土 (9)	第 27 号住居跡	27J-16	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	12.3	5.0	2.0	132.9	
94	432	住居跡出土 (9)	第 27 号住居跡	27J	磨製石斧 (小形)	A2a	蛇紋岩 ?	基部欠損	不明	2.9	1.6	0.6	5.4	小形。基部再生か
95	432	住居跡出土 (9)	第 27 号住居跡	27J-1	磨石類	C	安山岩	完形	楕円礫	10.3	7.7	4.5	496.8	
96	432	住居跡出土 (9)	第 27 号住居跡	27J-2	磨石類	C	安山岩	完形	楕円礫	12.4	8.2	6.2	879.3	
97	432	住居跡出土 (9)	第 28 号住居跡	28J-113	打製石斧	C2	頁岩	完形	不明	10.6	4.7	2.0	104.0	刃部使用痕。刃部再生か
98	432	住居跡出土 (9)	第 28 号住居 (炉) 跡	28J- 石組炉 5	砥石	4	斑レイ岩	略完形	亜円礫	(20.4)	18.0	8.6	3620.0	
99	432	住居跡出土 (9)	第 28 号住居跡	28J ⑦	磨石類	A	安山岩	完形	楕円礫	14.2	9.1	7.3	1531.3	
100	433	住居跡出土 (10)	第 28 号住居跡	28J-206	石皿類	A3a	安山岩	下半部	不明	(25.9)	(20.7)	11.3	7200.0	
101	433	住居跡出土 (10)	第 29 号住居跡	29J ④	石槍	B2	頁岩	完形	横長剥片	7.9	2.4	1.1	21.1	
102	433	住居跡出土 (10)	第 29 号住居跡	29J ①	石錐	D	頁岩	基部欠損	角柱状剥片	(5.9)	2.6	1.6	25.4	
103	433	住居跡出土 (10)	第 29 号住居跡	29J-52	打製石斧	A2	頁岩	完形	横長剥片	12.7	6.0	2.5	243.7	刃部使用痕
104	433	住居跡出土 (10)	第 29 号住居跡	29J ⑤	打製石斧	B1	頁岩	完形	横長剥片	9.6	4.1	1.0	42.2	片刃 ?
105	433	住居跡出土 (10)	第 29 号住居跡	29J ②	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	7.9	4.4	1.2	49.7	刃部略欠損

第 106 表　出土石器観察表

No.	図版	図版名	出土遺構	出土位置	器種	細別	石材名	残存部位	素材	計測値 (cm /g)				備考
										長さ	幅	厚さ	重量	
106	433	住居跡出土 (10)	第 29 号住居跡	29J-2	打製石斧	C2	凝灰岩質頁岩	着柄部破片	不明	9.0	5.8	1.6	105.9	折断面に刃部再生
107	433	住居跡出土 (10)	第 29 号住居跡	29J ⑦	打製石斧	C2	凝灰岩質頁岩	刃部欠損	横長剥片	7.0	4.4	1.7	59.6	刃部折損面に刃部再生
108	433	住居跡出土 (10)	第 29 号住居跡	29J-46	打製石斧	D2	頁岩	完形	横長剥片	8.2	6.2	1.5	73.2	分銅（瓢形）
109	433	住居跡出土 (10)	第 29 号住居跡	29J-53	磨石類 (転用磨斧)	J/A2	緑色岩	完形	不明	6.6	4.2	2.5	138.4	磨製石斧を転用
110	433	住居跡出土 (10)	第 29 号住居跡	29J	磨石類	I	不明	完形	石核？	6.8	6.3	5.3	283.5	
111	434	住居跡出土 (11)	第 30 号住居跡	30J-259	石鏃	A1b	凝灰岩質頁岩	完形	不明	3.0	1.6	0.5	2.2	
112	434	住居跡出土 (11)	第 30 号住居跡	30J ⑥	石鏃	Ba	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	完形	不明	2.4	1.8	0.5	1.8	
113	434	住居跡出土 (11)	第 30 号住居跡	30J ④	石錐	D	頁岩	基部欠損	角柱状剥片	(8.2)	2.3	1.6	33.6	
114	434	住居跡出土 (11)	第 30 号住居跡	30J-P7 ①	三脚石器	A	頁岩	完形	不明	6.2	5.6	1.9	32.8	素材面にポットリット
115	434	住居跡出土 (11)	第 30 号住居跡	30J ⑦	不定形石器	II i3	頁岩	完形	横長剥片	3.6	5.7	1.4	24.9	
116	434	住居跡出土 (11)	第 30 号住居跡	30J-P3	不定形石器	I h3	珪質頁岩 B	完形	縦長剥片	5.3	3.2	1.3	19.9	
117	434	住居跡出土 (11)	第 30 号住居跡	30J-111	磨製石斧	A2	不明	刃部欠損	不明	10.1	5.1	2.6	270.8	
118	434	住居跡出土 (11)	第 30 号住居跡	30J-56	磨製石斧	A2	不明	基部欠損	不明	6.2	4.1	1.7	76.2	中形。基部に敲打痕
119	434	住居跡出土 (11)	第 30 号住居跡	30J-104	磨き石		頁岩	完形	扁平円形礫	5.6	5.5	2.0	95.8	
120	434	住居跡出土 (11)	第 30 号住居跡	30J-58	磨石類	E	安山岩	完形	扁平円形礫	9.9	9.1	4.4	532.9	
121	435	住居跡出土 (12)	第 31 号住居跡	31J-6	石鏃	A2b	黒曜石	略完形	不明	3.5	1.5	0.4	1.6	鋸歯縁。側縁部に一部欠け
122	435	住居跡出土 (12)	第 31 号住居跡	31J-49	打製石斧	C1	頁岩	完形	横長剥片	12.2	5.1	3.3	256.0	片刃。微細剥離
123	435	住居跡出土 (12)	第 31 号住居跡	31J-73	打製石斧	C1	頁岩	完形	不明	13.4	5.6	3.3	256.0	両刃。微細剥離
124	435	住居跡出土 (12)	第 31 号住居跡	31J-91	打製石斧	C1	凝灰岩質頁岩	完形	不明	16.1	5.9	3.7	366.7	両刃
125	435	住居跡出土 (12)	第 31 号住居跡	31J-24	打製石斧	C1	凝灰岩質頁岩	完形	横長剥片	8.9	4.1	1.6	67.2	両刃。微細剥離
126	435	住居跡出土 (12)	第 31 号住居跡	31J-56	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	10.6	4.5	1.8	93.8	小剥離 / 片刃？
127	435	住居跡出土 (12)	第 32 号住居跡	32J-117	打製石斧	B2	頁岩	完形	横長剥片	10.7	5.2	1.8	112.4	刃部使用痕（側面加工より古い）
128	435	住居跡出土 (12)	第 32 号住居跡	32J-167	打製石斧	C2	安山岩	刃部欠損	横長剥片	(11.5)	5.1	2.2	174.1	
129	435	住居跡出土 (12)	第 32 号住居跡	32J-165	不定形石器	II h2	頁岩	完形	剥片	5.3	5.1	1.9	43.9	微細剥離
130	435	住居跡出土 (12)	第 32 号住居跡	32J-93	磨石類 (転用磨斧)	J/A2b	斑レイ岩	完形	磨製石斧	7.4	4.4	3.1	141.4	磨製石斧（転用）
131	436	住居跡出土 (13)	第 32 号住居跡	32J-1	磨石類	F	安山岩	完形	楕円礫	8.4	6.5	3.7	289.0	
132	436	住居跡出土 (13)	第 32 号住居跡	32J ①	磨石類	G	緑色凝灰岩	完形	割礫	7.0	5.0	3.2	154.0	割礫の稜に使用痕
133	436	住居跡出土 (13)	第 32 号住居跡	32J-255	石皿類	C2	斑レイ岩	完形	楕円礫	26.7	23.6	8.4	7200.0	裏面に多孔面
134	436	住居跡出土 (13)	第 33 号住居跡	33J-2	石錐	D	頁岩	完形	角柱状剥片	9.4	3.0	2.0	48.4	素材両側縁に折断痕
135	436	住居跡出土 (13)	第 33 号住居跡	33J-61	打製石斧	C2	頁岩	刃部欠損	分割礫？	10.1	5.6	2.7	170.6	刃部再生か
136	436	住居跡出土 (13)	第 33 号住居跡	33J-65	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	11.6	4.8	1.7	101.0	刃部使用痕
137	437	住居跡出土 (14)	第 33 号住居跡	33J-113	磨石類	I	凝灰岩質頁岩	完形	亜角礫	5.1	4.0	3.8	98.9	稜上に敲打痕
138	437	住居跡出土 (14)	第 33 号住居跡	33J-237	石皿類	B	安山岩	1/4 破片	不明	(14.1)	(14.1)	8.6	1660.5	裏面に平坦な使用面
139	437	住居跡出土 (14)	第 37 号住居跡	37J ②	磨製石斧	A2b	蛇紋岩	完形	不明	8.1	3.0	1.2	59.3	
140	437	住居跡出土 (14)	第 38 号住居跡	38J-P1 ③	磨石類	D	安山岩	完形	不明	13.3	7.8	4.8	826.2	石鹸形
141	437	住居跡出土 (14)	第 39 号住居跡	39J-36	石皿類	A2 c	安山岩	上端部破片	礫	(9.6)	14.0	7.7	1396.1	成形（装飾）石皿
142	437	住居跡出土 (14)	第 39 号住居跡	39J-47	石皿類	B	安山岩	1/2 破片	礫	(18.4)	17.2	9.1	3109.0	使用面に製作痕？
143	437	住居跡出土 (14)	第 42 号住居跡	42J ①	磨石類	C	安山岩	完形	長円礫	14.2	7.2	4.9	646.6	
144	437	住居跡出土 (14)	第 43 号住居跡	F9-43J ①	打製石斧	B2	頁岩	完形	不明	10.8	3.2	1.9	67.4	片刃？
145	437	住居跡出土 (14)	第 43 号住居跡	43J- 下層①	打製石斧	B1	頁岩	完形	縦長剥片	10.4	4.3	1.1	61.6	
146	437	住居跡出土 (14)	第 43 号住居跡	F9-43J ②	不定形石器	II a1	珪質頁岩 A	完形	横長剥片	4.8	7.2	1.5	38.9	
147	437	住居跡出土 (14)	第 43 号住居跡	43J- 上層①	不定形石器	II h2	頁岩	欠損	不明	5.1	(5.6)	1.9	49.8	擦切り具
148	438	住居跡出土 (15)	第 45 号住居跡	45J ①	打製石斧	B（A2 右側縁 +B1a	頁岩	完形	不明	9.2	4.1	1.7	65.0	刃部先端欠
149	438	住居跡出土 (15)	第 45 号住居跡	45J	不定形石器	II a3	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	完形	横長剥片	4.9	8.6	1.6	69.8	微細剥離
150	438	住居跡出土 (15)	第 45 号住居跡	45J ⑨	不定形石器	II a3	頁岩	完形	横長剥片	5.3	6.2	1.0	28.1	擦切り具。使用痕光沢あり
151	438	住居跡出土 (15)	第 45 号住居跡	45J-71	磨斧 (未製品)	不明	斑レイ岩	完形	長円礫	20.3	7.7	5.1	1398.6	側面に敲打痕
152	438	住居跡出土 (15)	第 47 号住居跡	47J-P2 ①	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	10.3	5.0	2.0	102.9	刃部使用痕
153	438	住居跡出土 (15)	第 48 号住居跡	48J ④	石鏃	A2b	珪質頁岩 B	完形	不明	2.6	1.9	0.5	2.2	
154	438	住居跡出土 (15)	第 48 号住居跡	48J ⑤	石鏃	Bb	珪質頁岩 B	完形	不明	3.1	1.7	0.6	2.6	
155	438	住居跡出土 (15)	第 48 号住居跡	48J ⑥	石錐	B	珪質頁岩 B	完形	剥片	5.1	2.8	1.4	13.4	
156	438	住居跡出土 (15)	第 48 号住居跡	48J	板状石器	A2	頁岩	完形	剥片	5.7	6.4	1.4	68.3	
157	438	住居跡出土 (15)	第 48 号住居跡	48J	磨製石斧	A2b	斑レイ岩	刃部欠損	不明	5.7	6.5	1.6	68.0	

第 107 表　出土石器観察表

No.	図版	図版名	出土遺構	出土位置	器種	細別	石材名	残存部位	素材	計測値 (cm /g)				備考
										長さ	幅	厚さ	重量	
158	438	住居跡出土 (15)	第 48 号住居跡	48J	石皿類	A1c	安山岩	1/4（側縁破片	礫	(12.8)	(12.3)	8.1	1750.0	
159	438	住居跡出土 (15)	第 49 号住居跡	49J ①	打製石斧	C1	頁岩	完形	横長剥片	10.8	5.0	1.8	96.9	刃部線状痕
160	439	住居跡出土 (16)	第 50 号住居跡	50J-176	不定形石器	I h3	輝緑岩	完形	分割礫	11.6	5.4	4.1	243.5	
161	439	住居跡出土 (16)	第 50 号住居跡	50J-133	不定形石器	II h3	珪質頁岩B	完形	横長剥片	7.4	11.1	2.7	217.2	
162	439	住居跡出土 (16)	第 50 号住居跡	50J ①	磨斧 (未製品)	A2b	蛇紋岩	完形	不明	5.3	3.9	1.3	46.5	双刃
163	439	住居跡出土 (16)	第 52 号住居跡	52J	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	11.2	5.0	1.8	103.7	刃部使用痕＋小剥離 / 側縁部再生
164	439	住居跡出土 (16)	第 52 号住居跡	52J	磨斧 (未製品)	A	蛇紋岩	刃部破片	不明	6.3	3.7	2.0	63.3	再生品
165	439	住居跡出土 (16)	第 52 号住居跡	52J	砥石	4	砂岩	破片	不明	(6.3)	(6.9)	1.5	57.4	
166	440	住居跡出土 (17)	第 55 号住居跡	55J ①	磨石類	F	安山岩	完形	長円礫	14.5	7.3	5.2	751.7	両面に凹痕 (深い)。被熱
167	440	住居跡出土 (17)	第 58 号住居跡	58J ①	石匙	C1	頁岩	完形	縦長剥片	9.9	4.1	1.6	38.1	
168	440	住居跡出土 (17)	第 59 号住（炉内）跡	59J-145	ﾋﾞｽ・ｴｽﾈｰﾕ？	A	凝灰岩質頁岩	完形	扁平棒状礫	29.4	8.2	3.7	1360.0	炉出土石器
169	440	住居跡出土 (17)	第 60 号住居跡	60J-4	磨石類	D	安山岩	完形	不明	10.7	6.3	5.6	630.0	石鹸形
170	440	住居跡出土 (17)	第 61 号住居跡	61J-3	打製石斧	B	頁岩	基部再生？	横長剥片	(7.5)	5.3	1.7	79.5	刃部使用痕
171	440	住居跡出土 (17)	第 61 号住居跡	61J-1	石皿類	B	安山岩	1/4 破片	不明	(18.2)	(10.0)	5.9	1084.3	
172	441	配石出土石器	第 1H 跡	M9-18G ① [1H]	石鏃	A1b	黒曜石	完形	不明	2.7	1.6	0.3	1.0	
173	441	配石出土石器	第 1H(L9-P40) 跡	L9-P40 ① [1H]	石鏃	A2b	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	先端部欠損	不明	(2.2)	1.7	0.4	1.6	
174	441	配石出土石器	第 1H(L9-P26) 跡	L9-P26 ① [1H]	石鏃 (未成品)		珪質頁岩 B	完形	横長剥片	3.9	3.0	0.9	8.9	
175	441	配石出土石器	第 1H 跡	L11-2G[1H]	ﾋﾞｽ・ｴｽﾈｰﾕ	A	頁岩	完形	剥片素材	3.6	4.7	1.0	21.2	
176	441	配石出土石器	第 1H 跡	16J-57[1H]	打製石斧	C1	頁岩	完形	不明	11.7	5.3	2.9	157.6	
177	441	配石出土石器	第 1H 跡	L9-23G[1H]	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	14.3	5.3	1.3	130.0	
178	441	配石出土石器	第 1H 跡	M9[1H]	打製石斧	C2	頁岩	完形	縦長剥片	14.2	6.1	2.5	186.7	刃部使用痕＋小剥離
179	441	配石出土石器	第 1H(M9-P23) 跡	M9-P23[1H]	打製石斧		凝灰岩質頁岩	完形	横長剥片	10.1	7.2	3.1	251.7	敲石転用？
180	441	配石出土石器	第 1H 跡	K9[1H]	打製石斧	D1	凝灰岩質頁岩	完形	横長剥片	16.7	9.2	3.3	450.0	
181	441	配石出土石器	第 1H 跡	M10-6[1H]	打製石斧	D1	頁岩	完形	横長剥片	11.2	7.2	2.7	204.7	
182	441	配石出土石器	第 1H 跡	16J（23）[1H]	不定形石器	II e2	凝灰岩質頁岩	完形	横長剥片	5.2	10.0	2.2	80.3	擦切痕
183	441	配石出土石器	第 1H 跡	L9-359[1H]	磨製石斧	A2a	蛇紋岩	基・刃部欠損	不明	9.1	5.5	2.2	220.0	大形。再生品？
184	441	配石出土石器	第 1H 跡	J9 ① [1H]	磨製石斧	A2b	蛇紋岩	完形	不明	4.8	3.2	0.9	30.0	小形
185	441	配石出土石器	第 1H 跡	J9[1H]	磨製石斧	A2	蛇紋岩	完形	不明	4.2	2.4	0.8	13.6	小形
186	441	配石出土石器	第 1H 跡	L9[1H]	磨石類 (転用磨斧)	J/A2	輝緑岩？	完形	磨製石斧	5.8	5.4	2.6	137.5	
187	442	フラスコ状土坑 (1)	第 4J-P1 跡	4J-P1	打製石斧	A2	頁岩	完形	縦長剥片	10.5	4.7	2.3	101.5	刃部使用痕
188	442	フラスコ状土坑 (1)	第 4J-P1 跡	4J-P1 ②	打製石斧	B1	頁岩	完形	横長剥片	10.6	4.5	2.4	105.7	左側縁再生
189	442	フラスコ状土坑 (1)	第 4J-P1 跡	F4-15-18-4J-P1	磨製石斧	A2a	蛇紋岩	基部破片	不明	7.4	5.3	2.7	153.6	敲石に転用
190	442	フラスコ状土坑 (1)	第 4J-P1 跡	4J-P1 ③	磨石類	E	花崗岩	2/3	楕円礫	9.9	6.9	4.6	316.7	深い凹
191	442	フラスコ状土坑 (1)	第 4J-P1 跡	4J-P1 ④	磨石類	E	安山岩	完形	亜角礫	9.4	7.1	4.9	422.0	摩滅した凹
192	442	フラスコ状土坑 (1)	第 H7-P2 跡	H7-P2	石錐	C2	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	完形	縦長剥片	7.0	4.5	1.6	47.0	
193	442	フラスコ状土坑 (1)	第 H7-P2 跡	H7-P2 ①	打製石斧	C1	凝灰岩質頁岩	未成品？	不明	11.3	4.4	2.3	130.0	
194	442	フラスコ状土坑 (1)	第 H7-P2 跡	H7-P2 ②	不定形石器	I d3	頁岩	完形	縦長剥片	11.8	6.2	2.7	200.8	打製石斧の未成品か
195	442	フラスコ状土坑 (1)	第 H7-P6 跡	H7-118-P6	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	11.4	4.8	1.7	96.2	刃部使用痕＋小剥離
196	442	フラスコ状土坑 (1)	第 H7-P6 跡	H7-119-P6	磨製石斧	A1a?	不明	刃部欠損	不明	10.8	5.0	2.2	238.0	
197	443	フラスコ状土坑 (2)	第 I6-P6 跡	I6-53+60-P6	不定形石器	III i1	安山岩	完形	扁平礫	7.0	8.5	2.7	138.2	
198	443	フラスコ状土坑 (2)	第 I7-P2 跡	I7-P2	磨製石斧	A2b	斑レイ岩	不明	不明	8.5	3.6	2.3	92.9	刃部・側縁に二次加工
199	443	フラスコ状土坑 (2)	第 I7-P2 跡	I7-P2	石皿類	C2	安山岩	完形	扁平楕円礫	17.2	14.2	5.1	1820.0	被熱
200	443	フラスコ状土坑 (2)	第 K8-P31 跡	K8-P31	打製石斧	A2	頁岩	完形	横長剥片	12.4	5.3	2.3	162.7	刃部 : 衝撃剥離
201	443	フラスコ状土坑 (2)	第 K8-P31 跡	K8-P31	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	10.8	4.7	1.7	74.2	小剥離
202	443	フラスコ状土坑 (2)	第 L6-P1 跡	L6-P1	砥石	3	凝灰質砂岩	略完形	扁平礫	7.3	(6.2)	1.3	47.5	置砥の転用か。
203	443	フラスコ状土坑 (2)	第 L6-P12 跡	L6-P12	打製石斧	B (A2?	頁岩	完形	横長剥片	11.4	4.1	2.2	130.0	刃部使用痕
204	443	フラスコ状土坑 (2)	第 N8-P29 跡	N8-P29 ②	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	15.0	7.1	2.6	350.0	
205	443	フラスコ状土坑 (2)	第 N8-P29 跡	N8-P29 ①	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	13.2	4.8	1.7	131.4	刃部使用痕。側縁抉り。
206	444	土坑出土石器 (1)	第 22J-P2 跡	22J-P2	ﾋﾞｽ・ｴｽﾈｰﾕ	A	珪質頁岩 A	完形	不明	3.3	2.3	1.0	6.9	
207	444	土坑出土石器 (1)	第 E10-P1 跡	E10-P1 ①	石鏃 (未成品)	A1	頁岩		剥片	2.5	1.9	0.4	1.5	
208	444	土坑出土石器 (1)	第 H7-P7 跡	H7-183-P7	打製石斧	C1	頁岩	完形	横長剥片	19.7	7.9	4.4	611.1	小剥離
209	444	土坑出土石器 (1)	第 H7-P7 跡	H7-183-P7	磨石類	D	安山岩	完形	楕円礫	12.1	8.2	4.7	754.9	
210	444	土坑出土石器 (1)	第 H7-P7 跡	H7-183-P7	磨石類	E	安山岩	完形	長円礫	12.5	5.7	5.5	596.8	

第 108 表　出土石器観察表

No.	図版	図版名	出土遺構	出土位置	器種	細別	石材名	残存部位	素材	計測値 (cm /g)				備考
										長さ	幅	厚さ	重量	
211	444	土坑出土石器 (1)	第Ⅰ 8-P1 跡	I8-28-P1	砥石	不明	安山岩	完形	亜円礫	16.1	9.5	4.5	880.0	
212	444	土坑出土石器 (1)	第Ⅰ 8-P7 跡	I8-13-1-P7	磨製石斧	A2b	蛇紋岩	略完形	不明	7.1	3.7	1.8	73.2	側縁・刃・基部に二次加工
213	444	土坑出土石器 (1)	第 I8-P9 跡	I8-55-P9	不定形石器	Ⅲ	安山岩	完形	分割礫	11.6	9.2	2.0	270.0	
214	444	土坑出土石器 (1)	第 I8-21J-P1 跡	I8-21J-P1	石皿類	B	安山岩	略完形	板状礫	30.4	20.1	6.0	5300.0	皿部作出途中
215	445	土坑出土石器 (2)	第 J5-P5 跡	J5-P5 ①	打製石斧	B1	頁岩	基部欠損	横長剥片	17.1	7.4	3.8	452.8	小剥離
216	445	土坑出土石器 (2)	第 J6-P14 跡	J6-P14	打製石斧	D1	頁岩	完形	不明	13.2	9.3	2.7	238.5	
217	445	土坑出土石器 (2)	第 J7-P5 跡	J7-P5 ①	石鏃 (未成品)		珪質頁岩B	先端欠損	横長剥片	(2.5)	2.2	0.5	2.6	
218	445	土坑出土石器 (2)	第 K7-P2 跡	K7-P2 ①	石鏃	E	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	完形	不明	2.6	1.5	0.5	1.6	
219	445	土坑出土石器 (2)	第 K7-P2 跡	K7-13-P2	磨石類	F	安山岩	完形	長円礫	18.7	8.0	6.3	1420.4	
220	445	土坑出土石器 (2)	第 K7-P2 跡	K7-39-P2	石皿類	C1	閃緑岩	1/2	楕円礫	(12.2)	13.4	4.5	1130.0	被熱
221	445	土坑出土石器 (2)	第 K7-P2 跡	K7-41-P2	石皿類	A	安山岩	頭部破片	礫	(17.5)	15.3	(7.6)	2570.0	
222	445	土坑出土石器 (2)	第 L7-P5 跡	L7-P5	磨製石斧	A2b	頁岩	刃・基部欠損	不明	(10.1)	5.5	2.7	260.0	楔様に使用？
223	445	土坑出土石器 (2)	第 L12-P22 跡	L12-P22	磨石類	D	安山岩	完形	不明	19.1	6.9	4.4	1020.0	石鹸形
224	445	土坑出土石器 (2)	第 L12-P60 跡	L12-P60	磨製石斧	A2c	凝灰岩？	刃部欠損	不明	12.5	6.4	2.6	295.5	大形
225	445	土坑出土石器 (2)	第 L13-P14 跡	L13-P14	打製石斧	D1	頁岩	刃部欠損	剥片	7.3	6.3	2.4	117.7	
226	446	土坑出土石器 (3)	第 M7-P10 跡	M7-P10	石錘	B	頁岩	完形	楕円礫	4.6	4.2	1.2	34.5	
227	446	土坑出土石器 (3)	第 M7-P16 跡	M7-P16	石匙	C2	頁岩	完形	剥片	8.8	6.2	1.2	56.5	
228	446	土坑出土石器 (3)	第 M7-P24 跡	M7-P24	磨製石斧	A2b	蛇紋岩	完形	不明	8.1	4.2	1.8	93.6	
229	446	土坑出土石器 (3)	第 N9-P30 跡	N9-P30	石錘	D	珪質頁岩B	完形	不明	8.5	3.1	2.2	47.1	
230	446	土坑出土石器 (3)	第 N9-P55 跡	N9-P55-1	磨製石斧	A2a	蛇紋岩	刃部再生	不明	8.7	5.3	2.2	194.3	
231	446	土坑出土石器 (3)	第 O9-P27 跡	O9-2-P27	磨石類	B	安山岩	完形	球状礫	9.7	9.2	7.7	870.0	
232	446	土坑出土石器 (3)	第 O9-P33 跡	O9-P33	磨石類	I	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	完形	石核？	4.2	3.9	3.0	58.7	
233	446	土坑出土石器 (3)	第 O10-P10 跡	O10-P10	三脚石器	B	安山岩	完形	扁平礫	5.3	6.6	1.7	59.5	
234	446	土坑出土石器 (3)	第 P9-P5 跡	P9-P5	磨製石斧	A1 b	蛇紋岩	刃部欠損	不明	11.0	5.7	2.3	274.2	刃部に敲打痕
235	447	遺物集中出土 (1)	第 14 住 (遺物集中) 跡	14J-286	石鏃	A2b	頁岩	完形	剥片	2.6	1.6	0.4	1.1	
236	447	遺物集中出土 (1)	第 14 住 (遺物集中) 跡	14J-1346	石鏃	E	珪質頁岩B	完形	不明	3.0	1.8	0.5	2.2	
237	447	遺物集中出土 (1)	第 14 住 (遺物集中) 跡	14J-386	石錐	A1	珪質頁岩 A	完形	不明	3.9	1.7	0.7	2.6	
238	447	遺物集中出土 (1)	第 14 住 (遺物集中) 跡	14J-917	石匙	B2	頁岩	刃部欠損	横長剥片	2.7	(3.3)	6.4	4.1	
239	447	遺物集中出土 (1)	第 14 住 (遺物集中) 跡	14J-299	打製石斧	C1	頁岩	完形	不明	9.1	5.0	3.3	164.2	
240	447	遺物集中出土 (1)	第 14 住 (遺物集中) 跡	14J-1237	打製石斧	B1	頁岩	完形	横長剥片	9.8	4.7	1.9	79.6	刃部使用痕
241	447	遺物集中出土 (1)	第 14 住 (遺物集中) 跡	14J-349	打製石斧	C1	頁岩	完形	横長剥片	11.0	5.8	2.2	140.4	
242	447	遺物集中出土 (1)	第 14 住 (遺物集中) 跡	14J-546	打製石斧	B1	頁岩	完形	横長剥片	12.9	5.1	1.2	78.9	刃部小剥離
243	447	遺物集中出土 (1)	第 14 住 (遺物集中) 跡	14J-439	磨製石斧	A2	緑色凝灰岩	基部欠損	不明	8.9	5.0	2.7	228.8	
244	447	遺物集中出土 (1)	第 14 住 (遺物集中) 跡	14J ①	石錘	B	頁岩	破片	扁平礫	(3.1)	2.2	0.4	6.9	
245	447	遺物集中出土 (1)	第 15 住 (遺物集中) 跡	15J-2182	打製石斧	C1	凝灰岩質頁岩	略完形	不明	14.7	9.2	4.2	438.7	被熱のため剥落
246	447	遺物集中出土 (1)	第 15 住 (遺物集中) 跡	15J-676	打製石斧	B1	珪質頁岩B	基部欠損	不明	10.3	6.8	3.4	201.4	撥形
247	448	遺物集中出土 (2)	第 15 住 (遺物集中) 跡	15J-418	打製石斧	B2	安山岩	両端部欠損	角柱状剥片	9.9	4.8	3.2	164.7	
248	448	遺物集中出土 (2)	第 15 住 (遺物集中) 跡	15J-423	打製石斧	C2	珪質頁岩B	完形	横長剥片	9.0	5.2	2.1	100.6	刃部再生？
249	448	遺物集中出土 (2)	第 15 住 (遺物集中) 跡	15J-297	打製石斧	C2	凝灰岩質頁岩	完形	剥片	10.8	6.6	3.5	266.7	刃部再生？
250	448	遺物集中出土 (2)	第 15 住 (遺物集中) 跡	15J-550	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	9.6	4.4	1.6	66.7	
251	448	遺物集中出土 (2)	第 15 住 (遺物集中) 跡	15J-350	不定形石器	Ⅱ g3	頁岩	完形	横長剥片	9.9	6.5	1.4	86.9	打製石斧の未成品か
252	448	遺物集中出土 (2)	第 15 住 (遺物集中) 跡	15J	不定形石器	Ⅱ i3	頁岩	完形	横長剥片	6.4	7.3	2.9	155.2	
253	448	遺物集中出土 (2)	第 15 住 (遺物集中) 跡	15J-674	磨石類	B	斑レイ岩	1/2	不明	(5.7)	6.3	4.4	232.7	石鹸形
254	448	遺物集中出土 (2)	第 15 住 (遺物集中) 跡	15J-1560	石皿類	C1	安山岩	1/2 破片	扁平礫	21.2	(12.9)	5.2	1957.5	
255	448	遺物集中出土 (2)	第 22 住 (遺物集中) 跡	22J-58	打製石斧	B1	頁岩	完形	横長剥片	11.7	6.4	2.2	126.2	バルブ除去
256	448	遺物集中出土 (2)	第 22 住 (遺物集中) 跡	22J-144	磨石類	E	安山岩	完形	石皿破片？	9.6	5.6	3.6	166.6	漏斗状の凹痕
257	449	包含層出土 (1)	—	H4-13G①	石鏃	A1a	珪質頁岩B	完形	不明	2.8	1.6	0.3	1.2	鋸歯縁
258	449	包含層出土 (1)	—	I3-2 G	石鏃	A1a	凝灰岩質頁岩	略完形 (先欠)	不明	(2.5)	1.7	0.3	1.2	黒色付着物
259	449	包含層出土 (1)	—	I4-12G	石鏃	A1b	チャート	完形	不明	3.2	1.7	0.5	2.4	
260	449	包含層出土 (1)	—	N9-7G ②	石鏃	A1d(または A1a)	チャート	完形	不明	3.2	2.3	0.4	1.9	
261	449	包含層出土 (1)	—	E9-23G	石鏃	A2a	珪質頁岩 A	先端欠損	不明	(3.0)	1.7	0.4	2.2	衝撃剥離
262	449	包含層出土 (1)	—	P10G	石鏃	Ba	流紋岩	完形	不明	1.9	1.5	0.6	1.2	

第 109 表　出土石器観察表

No.	図版	図版名	出土遺構	出土位置	器種	細別	石材名	残存部位	素材	計測値 (cm /g)				備考
										長さ	幅	厚さ	重量	
263	449	包含層出土 (1)	—	H5-4G	石鏃	Ba	チャート	脚部欠損	不明	1.5	0.8	0.2	0.3	
264	449	包含層出土 (1)	—	H5-7G	石鏃	Bb	チャート	完形	不明	1.9	1.2	0.4	0.8	
265	449	包含層出土 (1)	—	G2	石鏃	C	珪質頁岩B	完形	不明	2.3	1.2	0.4	1.2	
266	449	包含層出土 (1)	—	N9-22G	石鏃	D	珪質頁岩B	完形	剥片素材	2.5	1.1	0.3	0.9	裏面に素材面あり。
267	449	包含層出土 (1)	—	L12-8G	石鏃	D	頁岩	完形	不明	3.7	1.6	0.6	3.1	
268	449	包含層出土 (1)	—	I3-2 G⑤	石鏃 (未成品)		珪質頁岩B		剥片	3.4	2.3	0.7	6.2	掻器？
269	449	包含層出土 (1)	—	G7- カクラン	石鏃 (未成品)		珪質頁岩B		剥片	3.5	2.2	0.8	5.0	
270	449	包含層出土 (1)	—	G2⑦	石鏃 (未成品)	B/ 略成品	珪質頁岩B		剥片	3.8	2.8	1.0	8.3	
271	449	包含層出土 (1)	—	F5-7G③	石鏃 (未成品)		珪質頁岩 A		剥片	3.0	2.1	1.1	3.9	
272	449	包含層出土 (1)	—	G3-6G ⑧	石鏃 (未成品)		珪質頁岩B		剥片	5.8	3.0	1.0	8.3	左側面に打面あり。
273	449	包含層出土 (1)	—	N9-17G	石槍	A	頁岩	完形	不明	12.6	4.1	2.2	85.6	
274	449	包含層出土 (1)	—	H5-24G	石槍	B1	珪質頁岩B	完形	縦長剥片	6.3	4.1	1.5	40.3	
275	449	包含層出土 (1)	—	G5-3G	石槍	B1	頁岩	脚部欠損	横長剥片	(6.6)	2.5	1.1	25.2	
276	449	包含層出土 (1)	—	G3-12G	石槍	B2	凝灰岩質頁岩	完形	縦長剥片	8.7	3.4	1.2	44.7	
277	450	包含層出土 (2)	—	G6①	石錐	A1	珪質頁岩 A	完形	不明	5.8	1.7	1.0	5.2	
278	450	包含層出土 (2)	—	P10G	石錐	A1	珪質頁岩 A	完形	不明	3.8	1.5	0.8	3.1	
279	450	包含層出土 (2)	—	G6③	石錐	A2	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	完形	不明	4.0	1.1	0.9	3.7	
280	450	包含層出土 (2)	—	H3-7G	石錐	B	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	完形	剥片	4.1	1.3	0.5	3.1	
281	450	包含層出土 (2)	—	G6	石錐	B	凝灰岩？	完形	剥片	3.1	1.8	0.7	3.7	
282	450	包含層出土 (2)	—	N9-2G	石錐	C	珪質頁岩B	完形	剥片	3.5	1.9	0.6	3.5	
283	450	包含層出土 (2)	—	L12-46	石錐	C	頁岩	完形	剥片	6.2	4.8	1.2	29.3	先端に回転穿孔痕
284	450	包含層出土 (2)	—	F5-11G	石錐	B	珪質頁岩 A	完形	剥片	7.3	3.3	2.0	42.4	
285	450	包含層出土 (2)	—	G6- カクラン	石錐	C	珪質頁岩 A	完形	剥片	3.9	2.6	1.3	9.0	
286	450	包含層出土 (2)	—	H2-14G	石錐	C2	頁岩	完形	剥片	6.6	6.2	1.5	54.5	
287	450	包含層出土 (2)	—	H4-17G	石錐	D	チャート	完形	不明	3.1	1.0	0.7	2.1	
288	450	包含層出土 (2)	—	L13-3G	石錐	不明	珪質頁岩B	完形	角柱状剥片	4.4	1.6	0.8	5.6	
289	450	包含層出土 (2)	—	G3-8G	ﾋﾟｽ・ｽﾀｰﾕ	A	珪質頁岩B	完形	不明	3.0	3.3	1.8	17.1	
290	450	包含層出土 (2)	—	L12-17G	ﾋﾟｽ・ｽﾀｰﾕ	A	鉄石英	完形	剥片	2.9	1.7	0.9	4.5	
291	450	包含層出土 (2)	—	I5-21G	ﾋﾟｽ・ｽﾀｰﾕ	A	珪質頁岩B	完形	石核	4.2	3.5	1.6	28.7	
292	450	包含層出土 (2)	—	G4-8G	ﾋﾟｽ・ｽﾀｰﾕ	B	珪質頁岩B	完形	剥片	3.6	3.1	1.1	14.6	
293	450	包含層出土 (2)	—	H2-20G	ﾋﾟｽ・ｽﾀｰﾕ	B	緑色凝灰岩	完形	石核	3.2	3.9	1.9	30.1	
294	450	包含層出土 (2)	—	H2-12G	ﾋﾟｽ・ｽﾀｰﾕ	B	珪質頁岩B	完形	剥片	2.3	3.0	1.0	7.7	
295	451	包含層出土 (3)	—	D10-24G	石匙	B1	珪質頁岩B	完形	剥片	5.9	2.4	0.8	9.0	
296	451	包含層出土 (3)	—	G5-20G	石匙	B2	珪質頁岩B	刃部欠損	不明	(3.0)	(3.0)	0.8	4.3	
297	451	包含層出土 (3)	—	O10-9G	三脚石器	A	凝灰岩質頁岩	完形	剥片	5.8	4.1	1.9	27.3	
298	451	包含層出土 (3)	—	P9-21G	三脚石器	A	凝灰岩質頁岩	完形	剥片	6.0	5.4	1.6	32.5	
299	451	包含層出土 (3)	—	E11-18G	三脚石器	B	安山岩	脚部欠損	剥片	(8.6)	6.3	3.6	160.0	
300	451	包含層出土 (3)	—	F3-8G	板状石器	A2	頁岩	完形	剥片	6.2	4.2	1.0	32.2	
301	451	包含層出土 (3)	—	E13-6G	板状石器	A1	凝灰岩質頁岩	完形	分割礫	7.3	5.4	1.3	38.7	
302	451	包含層出土 (3)	—	H1	板状石器	B	安山岩	完形	板状礫	4.8	4.7	1.2	32.6	
303	452	包含層出土 (4)	—	E6-9G	打製石斧	A1	珪質頁岩B	完形	縦長剥片	10.0	4.2	2.8	110.0	刃部使用痕 (裏面のみ)
304	452	包含層出土 (4)	—	H6- カクラン	打製石斧	A2	頁岩	完形	横長剥片	9.5	4.3	2.0	90.0	
305	452	包含層出土 (4)	—	D4-20G	打製石斧	A2	頁岩	完形	横長剥片	11.3	5.1	1.4	120.0	刃部使用痕
306	452	包含層出土 (4)	—	G4-8G	打製石斧	A1	凝灰岩質頁岩	完形	横長剥片	17.0	5.1	2.9	227.3	刃部使用痕 (裏面). 右側縁は B1a?
307	452	包含層出土 (4)	—	H6	打製石斧	B2	珪質頁岩B	完形	不明	11.0	4.3	2.8	117.4	刃部潰れ
308	452	包含層出土 (4)	—	E9-17G	打製石斧	B2	頁岩	完形	横長剥片	10.7	3.1	2.0	90.0	
309	452	包含層出土 (4)	—	E5-10G	打製石斧	A1	凝灰岩質頁岩	完形	横長剥片	8.9	4.9	2.7	130.0	刃部使用痕。右側縁再生 ?(B1a)
310	452	包含層出土 (4)	—	Q9	打製石斧	C2	頁岩	完形	横長剥片	12.7	4.2	1.7	120.0	
311	452	包含層出土 (4)	—	F3-5G	打製石斧	D1	凝灰岩質頁岩	完形	分割礫	11.6	8.9	2.5	239.4	使用痕より新しい側縁再生
312	452	包含層出土 (4)	—	DD	打製石斧	D2	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	完形	剥片	6.7	5.7	2.4	80.0	
313	453	包含層出土 (5)	—	L8-9G	不定形石器	Ⅰ a1	黒曜石	完形	縦長剥片	2.9	1.8	1.0	4.1	掻器 (RF)
314	453	包含層出土 (5)	—	I4-17G	不定形石器	Ⅰ h1	凝灰岩質頁岩	完形	縦長剥片	4.0	7.3	2.1	51.1	
315	453	包含層出土 (5)	—	I4-23G	不定形石器	Ⅰ g3	珪質頁岩B	完形	縦長剥片	5.9	3.4	0.8	20.8	使用痕光沢あり。

第 110 表　出土石器観察表

No.	図版	図版名	出土遺構	出土位置	器種	細別	石材名	残存部位	素材	計測値 (cm /g)				備考
										長さ	幅	厚さ	重量	
316	453	包含層出土 (5)	—	F3-4G	不定形石器	Ⅰ f2	珪質頁岩B	完形	縦長剥片	9.7	4.3	1.5	45.5	火ホゲ
317	453	包含層出土 (5)	—	F3-25G	不定形石器	Ⅰ i3	珪質頁岩B	完形	縦長剥片	5.9	4.5	1.9	51.2	
318	453	包含層出土 (5)	—	DD	不定形石器	Ⅰ i3	凝灰岩質頁岩	完形	剥片	6.4	4.8	2.1	51.0	研磨石器
319	453	包含層出土 (5)	—	D6-1G	不定形石器	Ⅱ e2	珪質頁岩 A	完形	横長剥片	3.4	8.1	1.8	59.3	
320	453	包含層出土 (5)	—	N9	不定形石器	Ⅱ a2	珪質頁岩B	完形	横長剥片	3.4	5.8	1.8	25.3	
321	453	包含層出土 (5)	—	I6-5G	不定形石器	Ⅱ i3	珪質頁岩B	完形	横長剥片	4.5	5.1	1.2	23.2	
322	453	包含層出土 (5)	—	E6	不定形石器	Ⅱ f3	凝灰岩質頁岩	完形	横長剥片	6.2	7.7	2.0	101.5	
323	454	包含層出土 (6)	—	E11-13G	不定形石器	Ⅱ h3	凝灰岩質頁岩	完形	横長剥片	7.6	9.2	1.6	78.5	端部に微細剥離
324	454	包含層出土 (6)	—	H4-14G	不定形石器	Ⅱ c3	珪質頁岩B	完形	両極剥片	4.4	3.6	1.2	20.5	
325	454	包含層出土 (6)	—	H4-4G	不定形石器	Ⅱ e1	珪質頁岩B	完形	横長剥片	3.8	3.8	1.0	7.3	
326	454	包含層出土 (6)	—	DD	不定形石器	Ⅱ h3	珪質頁岩 A	完形	横長剥片	4.1	8.4	1.3	47.1	
327	454	包含層出土 (6)	—	E4-20G	不定形石器	Ⅲ i3	頁岩	完形	分割礫	5.5	6.3	1.4	81.4	両面加工
328	454	包含層出土 (6)	—	D4-18G	不定形石器	Ⅲ h3	無斑晶ｶﾞﾗｽ質安山岩	完形	分割礫	5.0	6.0	2.2	77.5	
329	454	包含層出土 (6)	—	N9	不定形石器	Ⅲ i3	凝灰岩質頁岩	完形	分割礫	7.7	9.0	2.8	214.7	
330	455	包含層出土 (7)	—	J4-1G	磨製石斧	A1a	蛇紋岩	完形	不明	11.5	5.8	2.4	320.0	大形。再生品？
331	455	包含層出土 (7)	—	H3-17G	磨製石斧	A1a	蛇紋岩	略完形	不明	11.7	5.6	2.3	260.0	大形
332	455	包含層出土 (7)	—	N8-7G	磨製石斧	A1a	蛇紋岩	基欠	不明	(8.0)	4.8	2.1	160.0	楔様に使用？
333	455	包含層出土 (7)	—	H6	磨製石斧	A2b	凝灰岩質頁岩	略完形	不明	11.6	5.5	2.5	240.0	大形。刃部欠
334	455	包含層出土 (7)	—	F6②	磨製石斧	A2b	斑レイ岩	刃・基部欠損	不明	(11.3)	6.0	2.8	340.0	再生品？
335	455	包含層出土 (7)	—	DD③	磨製石斧	A2b	蛇紋岩	刃部欠損	不明	7.9	4.7	1.8	160.0	被熱。再生品？
336	455	包含層出土 (7)	—	DD①	磨製石斧	A3 c	蛇紋岩	完形	不明	13.3	5.4	3.2	370.0	大形
337	455	包含層出土 (7)	2H (⇒包含層)	N10-22	磨製石斧	A3b	斑レイ岩	略完形	不明	12.9	6.0	3.0	369.3	基・刃部に敲打痕。楔様？
338	455	包含層出土 (7)	—	G6	磨製石斧	A2b	凝灰岩 ?/ 不明	完形	不明	9.1	4.6	2.0	190.0	大形
339	455	包含層出土 (7)	—	N9-8G	磨製石斧	A3b	蛇紋岩 / 不明	刃部欠損	不明	(7.9)	3.8	2.0	100.0	中形
340	455	包含層出土 (7)	—	J5-16G	磨製石斧	A2a	斑レイ岩	完形 (基部欠	不明	3.8	1.7	0.5	10.0	中形
341	455	包含層出土 (7)	—	DD②	磨製石斧	A2c	蛇紋岩	完形	不明	6.9	4.3	1.7	90.0	中形
342	455	包含層出土 (7)	—	I4-13G	磨製石斧 (小形)	A2b	蛇紋岩	完形 (略完形	不明	3.4	1.8	0.7	100.0	小形
343	456	包含層出土 (8)	—	H4-20G	磨石類	C	安山岩	完形	円形礫	8.5	7.3	6.0	550.0	曲面に凹痕
344	456	包含層出土 (8)	—	DD	磨石類 (転用磨斧)	J/A2	斑レイ岩	完形	磨製石斧	12.1	7.2	3.9	628.6	磨製石斧を転用
345	456	包含層出土 (8)	—	N9-17G	磨石類 (転用磨斧)	J / 不明	蛇紋岩	完形	磨製石斧	6.1	3.0	1.5	40.0	中形。側縁部再生？
346	456	包含層出土 (8)	—	L12-17G	磨石類 (転用磨斧)	J /A2	蛇紋岩	完形	磨製石斧	5.5	3.2	1.7	40.0	中形磨製石斧を転用
347	456	包含層出土 (8)	—	O10-11G	磨石類 (転用磨斧)	J/A2	蛇紋岩	完形	磨製石斧	(6.6)	7.1	2.8	210.0	大形磨製石斧を転用
348	456	包含層出土 (8)	—	N9-1G	石錘	B	頁岩	完形	楕円礫	5.0	2.9	1.2	19.8	
349	456	包含層出土 (8)	—	J4	砥石	4	安山岩	完形	棒状礫	35.6	12.6	8.0	5430.0	
350	456	包含層出土 (8)	2H (⇒包含層)	O10-51	砥石	3	斑レイ岩	略完形	扁平礫	(21.8)	(10.6)	5.3	1480.0	石皿転用か。
351	456	包含層出土 (8)	2H (⇒包含層)	O9-44	砥石	4	角礫凝灰岩	1/4 破片	扁平礫	(8.8)	(5.2)	1.9	82.9	石皿転用か。
352	456	包含層出土 (8)	—	F5-14G	砥石	1	頁岩	2/3 破片	板状礫	(7.2)	2.8	1.2	38.3	泥板岩？
353	457	包含層出土 (9)	—	O9-47	石皿類	A2a	安山岩	1/4 破片	不明	(21.1)	(23.9)	5.0	3830.0	脚付
354	457	包含層出土 (9)	—	L10-3G①	石皿類	A1a	安山岩	1/5	不明	(11.8)	(14.1)	6.8	1505.0	358 と同一個体か
355	457	包含層出土 (9)	—	L10-3G②	石皿類	A1	安山岩	1/5	不明	(13.4)	(16.4)	8.1	2050.0	357 と同一個体か
356	457	包含層出土 (9)	—	DD	石皿類	B	安山岩 (ヒン岩)	1/2	棒状礫	(30.5)	20.0	8.5	7500.0	
357	457	包含層出土 (9)	—	DD	石皿類	B	安山岩	1/4	扁平礫	(18.5)	(18.2)	10.4	3570.0	

第 111 表　出土石器観察表

No.	図版	図版名	出土遺構	出土位置	器種	細別	石材名	残存部位	素材	計測値（cm/g）				備考
										長さ	幅	厚さ	重量	
石製品 01	458	住居出土石製品	第 3 号住居跡	3J-P2	三角形石製品		閃緑岩	欠損	板状礫	5.8	(3.7)	1.1	27.8	
石製品 02	458	住居出土石製品	第 26 号住居跡	26J ①	垂飾（大珠）		ヒスイ	破片	不明	5.4	3.1	2.5	40.8	
石製品 03	458	住居出土石製品	第 32 号住居跡	32J-127	類石棒		安山岩	完形	不明	15.7	3.7	3.1	219.7	
石製品 04	458	住居出土石製品	第 33 号住居跡	33J-243	軽石製石製品		軽石	完形？	不明	2.9	2.6	1.3	2.1	
石製品 05	458	住居出土石製品	第 38 号住居（炉）跡	38J- 炉	石棒類		細粒斑レイ岩	2/3?	柱状礫	(30.6)	10.4	10.5	12000.0	擦痕を有する柱状礫
石製品 06	458	住居出土石製品	第 43 号住居跡	43J- 上層	臼形石製品		安山岩	完形	球状礫	7.9	7.8	4.8	330.0	凹石の転用か
石製品 07	458	住居出土石製品	第 45 号住居跡	45J	石棒類		ヒン岩	頭部破片？	柱状礫	(5.7)	10.2	(3.7)	270.0	無頭
石製品 08	458	住居出土石製品	第 52 号住居（炉）跡	52J- 炉	石棒類		安山岩	略完形	柱状礫	48.2	11.2	13.0	11000.0	
石製品 09	458	住居出土石製品	第 59 号住居跡	59J-124	垂飾		ヒスイ	端部欠損	不明	(3.1)	1.9	1.4	14.0	
石製品 10	459	配石出土石製品	1H(44J-P36)	44J-P36[1H]	石棒類		ヒン岩	1/2?	柱状礫	(17.7)	6.2	4.7	960.0	中型
石製品 11	459	配石出土石製品	1H(L9-P28)	L9-469[1H]	垂飾		ロディン岩？	完形	楕円礫	4.3	2.9	1.7	33.9	紐ズレ
石製品 12	459	配石出土石製品	1H(L10-P8)	L10-P8[1H]	石棒類		ヒン岩	基部欠損	柱状礫	(62.4)	22.3	19.8	13000.0	有頭石棒
石製品 13	459	配石出土石製品	1H	16J[1H]	線刻礫		斑レイ岩	完形	磨製石斧	5.7	5.4	3.3	170.0	磨製石斧胴部破片を転用
石製品 14	459	配石出土石製品	1H	M9-77[1H]	石棒類		安山岩	端部破片	不明	(10.2)	9.0	8.5	1000.0	
石製品 15	460	フラスコ状土坑	I5-P2	I5-P2	垂飾		滑石	完形	不明	3.0	1.3	0.6	3.9	
石製品 16	460	土坑出土石製品	F6-P4	F6-P4	三脚形石製品		凝灰岩質頁岩	完形	板状礫	2.7	4.2	1.0	6.9	
石製品 17	460	土坑出土石製品	M7-P5	M7-P5	臼形石製品		安山岩	完形	楕円礫	8.0	7.0	4.1	300.0	自然礫？
石製品 18	460	土坑出土石製品	N9-P3	N9-P3	板状石製品		珪質凝灰岩	完形	板状礫	2.9	2.8	0.7	7.8	垂飾の未製品か
石製品 19	460	土坑出土石製品	O9-P16	O9-P16	軽石製石製品		軽石	完形	不明	7.1	(4.5)	2.1	14.5	垂飾
石製品 20	460	包含層出土石器	—	DD	石棒類		緑泥片岩	頭部破片	不明	(9.1)	(7.2)	(4.5)	360.0	有頭石棒
石製品 21	460	包含層出土石器	—	N10	石棒類		安山岩？	端部破片	柱状礫	(16.5)	15.8	(11.8)	4500.0	敲打・研磨 / 被熱
石製品 22	460	包含層出土石器	—	H2-1740	垂飾		不明	端部破片	不明	(2.1)	2.0	1.0	5.0	
石製品 23	460	包含層出土石器	—	10-1G	垂飾（玉斧）		ヒスイ	完形	不明	6.0	3.1	1.1	43.0	
石製品 24	460	包含層出土石器	—	15-1G	垂飾		ヒスイ	頭部欠損	礫	(5.3)	3.4	1.5	61.3	欠損後、敲石に転用
石製品 25	460	包含層出土石器	—	23	ヒスイ製品		ヒスイ	完形	亜円礫	7.0	4.0	2.4	130.0	垂飾の未製品か
石製品 26	460	包含層出土石器	—	F3-8G	線刻礫		安山岩	完形	分割礫	5.9	6.9	3.9	250.0	石棒の転用か？

第 112 表　出土石製品観察表

第Ⅴ章　その他の時代の遺物

本遺跡からは縄文時代以降の遺物も僅かながら出土している（図版第 423 図 133・134）。133 は現状で、高さ約 2.1cm× 最大径 10.5cm× 幅 6.35cm である。本資料は、脚部を欠損する可能性があり、古墳時代の土師器であると考えられる（註 170）。134 は現状で高さ 4.2cm× 径 9.9cm× 幅 7.5cm で、円形の貫通孔を有する。

No	図版	出土位置	分類	時期	遺存部位	大きさ（cm）			胎土		備考
						長さ	幅	厚さ	色調	混和材	
133	第 423 図	M11	古墳時代？	—	口縁部	2.1	10.5	6.35	橙	砂粒、小礫（2 ～ 3 ㎜）	
134	第 423 図	—	不明	—	—	4.2	9.9	7.5	橙	—	

第 113 表　古墳時代以降出土遺物観察表

註　釈

1）中村一明 1966「河成段丘の一つのでき方―信濃川の例 -」『第四紀研究』5

2）河岸段丘の形成年代については、以下のような研究がある。
信濃川段丘グループ 1968「新潟県津南地域の第四系 - 新潟県の第四系・そのIX」『新潟大学教育学部高田分校研究』13
活断層研究会 1991『新編日本の活断層 - 分布図と資料 -』東京大学出版会
田中真弓 2000「信濃川中流域、十日町盆地における河成段丘の変異から見た活褶曲と活断層の関係」『第四紀研究』39-5
早津顕二・新井房夫 1981「信濃川中流域におけるテフラ層と段丘形成年代」『地学雑誌』87-12
金幸隆 1999「魚沼丘陵南部の活構造と地形発達」『日本地理学会予稿集』55

3）本ノ木遺跡は、1956 年に芹沢長介、中山淳子が中心となって最初に調査を行い、その後、山内清男によって 1957 年による調査が実施された。これらは、いわゆる「本ノ木論争」である。2006 年になって、國學院大學が科学研究費による第 3 次調査が約 50 年ぶりに実施され、旧調査のトレンチの位置が把握された。同年、津南町教育委員会による第 4 次調査で、遺跡の縁辺部が調査された。次年度からの第 5 次以降は、國學院大學考古学研究室が発掘調査を継続的に進めている。

4）壬遺跡は、1979 年から 1986 年にかけて國學院大學考古学研究室が発掘調査を行い、1991 年に中里村教育委員会による発掘調査によって、縄文時代草創期を中心とする良好な資料が発見された。

5）佐藤雅一・阿部昭典・倉石広太・山本克 2005『道尻手遺跡』津南町教育委員会

6）佐藤雅一・成田健太郎 1999『午肥原遺跡・大原遺跡』津南町教育委員会

7）佐藤雅一・長澤展生 1997『午肥原地区遺跡確認試掘調査報告書』津南町教育委員会

8）佐藤雅一・岡　修司 1998『堂尻遺跡群試掘調査報告書　国営農地再編パイロット事業に伴う遺跡確認試掘調査及び発掘調査報告書　寺田上 A 遺跡　道尻手の塚　正面ヶ原 B 遺跡』津南町教育委員会

9）高橋　保・高橋保雄ほか 1992『関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡　十二木遺跡』新潟県教育委員会

10）田海義正・高橋保雄ほか 1990『関越自動車道関係発掘調査報告書　清水上遺跡』新潟県教育委員会

11）金子拓男・寺崎裕助 1974『森上遺跡発掘調査概報』中里村教育委員会

12）江坂輝弥・渡辺　誠ほか 1977『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会

13）佐藤雅一・宮田千里 1999『下モ原Ⅱ遺跡・小坂平遺跡』津南町教育委員会

14）石沢寅二 1975『苗場山麓地域国営総合農地開発事業区域内遺跡調査報告　第二地区内 (1)』津南町教育委員会

15）石沢寅二・島田靖久 1977『反里口遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会

16）渡辺　誠・齊藤基生ほか 1984『八反田遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会

17）縄文時代中期末葉を中心とする集落遺跡で、複式炉が多数検出されている。
石沢寅義・島田靖久・阿部恭平 1985『中里村史　資料編上巻原始・古代・中世』中里村史編さん委員会

18）佐藤雅一・原ひろみ 2000『道下遺跡　縄文時代編』津南町教育委員会

19）佐藤雅一・越川欣和 2002『下モ原Ⅲ遺跡』津南町教育委員会

20）小林達雄・石沢寅二 1984『津南町史　資料編上巻』津南町史編さん委員会

21）阿部昭典 2005「第Ⅳ章第 1 節土器の分類」『道尻手遺跡』津南町教育委員会

22）森　幸彦 1998「福島県内の大木 8a 式土器について」『第 11 回縄文セミナー　中期中葉から後葉の諸様相』縄文セミナーの会

23）赤山容造 1991「どのようにして三原田式土器が生まれたか」『群馬県立歴史博物館紀要』第 12 号
山口逸弘 2001「2 道訓前遺跡 I 出土の「三原田型深鉢」について」『道訓前遺跡』北橘村教育委員会

24）野村一寿 1984「塩尻市焼町遺跡第 1 号住居址出土土器とその位置付け」『中部高地の考古学Ⅲ』長野県考古学会
山口逸弘 1991「「新巻類型」と「焼町類型」の文様構成」『土曜考古』第 16 号
山口逸弘 2008「新巻・焼町系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

25）金子拓男 1981「火焔土器」『縄文文化の研究第 4 巻縄文土器Ⅱ』雄山閣
小林達雄 1988「火炎土器様式」『縄文土器大観 3 中期Ⅱ』小学館
寺崎裕助 1991「火炎土器様式について」『新潟考古学談話会会報』第 8 号
寺崎裕助 2008「火炎土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

26）佐藤雅一 2005「第Ⅵ章まとめ第 1 節魚沼地方における道尻手遺跡出土土器の編年的位置付け」『道尻手遺跡』津南町教育委員会

27）寺崎裕助 1991「火炎土器様式について」『新潟考古学談話会会報』第 8 号

寺崎裕助 2008「火炎土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーションほか

28）小島俊彰 2008「上山田・天神山式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション、など。

29）今福利恵 2008「勝坂式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション、など。

30）東北地方南部の大木 8b 式土器は、2 細分案や 3 細分案がある。
森 幸彦 1998「福島県内の大木 8a 式土器について」『第 11 回縄文セミナー　中期中葉から後葉の諸様相』縄文セミナーの会
中野幸大 2008「大木 7a 式～ 8b 式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

31）寺村光晴 1961「第Ⅲ章考察」『栃倉』栃尾市教育委員会
佐藤雅一 1999「原遺跡の研究（2）2．魚沼地方の縄文時代中期後半期土器群の検討」『新潟考古』第 10 号

32）佐藤雅一 1999「原遺跡の研究（2）2．魚沼地方の縄文時代中期後半期土器群の検討」『新潟考古』第 10 号
阿部昭典 2008「沖ノ原式土器」『総覧縄文土器』アム･プロモーション､阿部昭典 2009「沖ノ原式土器に関する編年試案」『新潟県の考古学 2』新潟県考古学会

33）佐藤雅一 1999「原遺跡の研究（2）2．魚沼地方の縄文時代中期後半期土器群の検討」『新潟考古』第 10 号

34）阿部昭典 2008「沖ノ原式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
阿部昭典 2009「沖ノ原式土器に関する編年試案」『新潟県の考古学 2』新潟県考古学会

35）註 34 文献と同じ。

36）阿部昭典 2008「第 I 章第 2 節　中期末葉から後期初頭の土器編年」『縄文時代の社会変動論』アム・プロモーション
阿部昭典 2007「新潟県下越地方の縄文中期終末から後期初頭の諸様相」『第 20 回縄文セミナー中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会
阿部昭典 2010「信濃川流域の大木 10 式土器」『三条考古学研究会機関誌』第 4 号

37）細田　勝 2008「加曽利 E 式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

38）永瀬史人 2008「連弧文土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

39）吉川金利 2008「唐草文系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

40）櫛原功一 2008「曽利式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

41）寺崎裕助 2003「新潟県における串田新式土器」『第 16 回縄文セミナー中期後半の再検討』縄文セミナーの会

42）稲村晃嗣 1994「両耳壺の研究ノート」『民族考古 - 大学院論集 -』第 2 号

43）柿沼修平 1977「加曽利 E 式土器終末の諸段階」『奈和』

44）丹野雅人 1985「注口土器小考」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』Ⅲ

45）当初、「鍔付有孔土器」などと呼称された（藤森・武藤 1963）が、後に武藤により「有孔鍔付土器」に改称される（武藤 1970）。
藤森栄一・武藤雄六 1963「中期縄文土器の貯蔵形態について - 鍔付有孔土器の意義 -」『考古学手帖』20
武藤雄六 1970「有孔鍔付土器の再検討 - 八ヶ岳南麓地方の基礎資料 -」『信濃』第 22 巻第 7 号

46）佐藤雅一 2001「信濃川流域の浅鉢形土器について」『新潟考古』第 12 号

47）県内の大木系浅鉢の研究は、高橋保（1990）や富樫秀之（1993）、斎田美穂子（2000）、佐藤雅一（2001）などがある。
高橋　保 1990「第Ⅳ章遺物 1 土器 C 分析」『関越自動車道関係発掘調査報告書　清水上遺跡』新潟県教育委員会
富樫秀之 1993「第Ⅴ章まとめ　第 1 節土器」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ　前田遺跡』朝日村教育委員会
斎田美穂子 2000「新潟県域における大木 7b 式系統の浅鉢」『北越考古学』第 11 号
佐藤雅一 2001「信濃川流域の浅鉢形土器について」『新潟考古』第 12 号

48）角田真也 2004「縄文中期の液体貯蔵具」『高崎市史研究』第 19 号、
松島栄二・山口逸弘 2006「赤彩浅鉢について」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』24、などがある。

49）台形土器は、山梨県考古学協会主催の『土器から探る縄文社会』（2002）において集成作業や研究が行われている。

50）三十稲場式土器の編年研究は、2 細分案（田中 1989・1990）と 3 細分案（石坂 2008）がある。
田中耕作 1989「三十稲場式土器様式」『縄文土器大観　第 4 巻　後期・晩期・続縄文』小学館
田中耕作 1990「三十稲場式土器研究の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』第 5 号
石坂圭介 2007「新潟県中越地方の縄文中期末から後期前葉の土器様相」『第 20 回縄文セミナー中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会
阿部昭典 2007「新潟県下越地方の縄文中期終末から後期初頭の諸様相」『同上』

51）今村啓爾 1977「称名寺式土器の研究（上）、（下）」『考古学雑誌』第 63 巻第 1・2 号
鈴木徳雄 2003「称名寺式土器研究の諸問題」『第 20 回縄文セミナー中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会

52）米澤義光 2008「気屋式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション、など。
53）南三十稲場式土器の編年は、品田高志（2001・2002）や金子優子（2002）の３細分案が提示されている。
品田高志 2001「Ⅴ総括」『十三本塚北遺跡』柏崎市教育委員会
品田高志 2002「新潟県における縄文後期前葉期の土器群」『第 15 回縄文セミナー後期前半の再検討』縄文セミナーの会
金子優子 2002「奥三面における後期前半の土器様相」第 15 回縄文セミナー後期前半の再検討』縄文セミナーの会
54）品田高志 2002「新潟県における縄文後期前葉期の土器群」『第 15 回縄文セミナー後期前半の再検討』縄文セミナーの会
55）國島　聡 1988「新潟県の縄文時代後期中葉の土器について」『新潟考古学談話会会報』第１号
56）註 21・26 文献を参照。
57）寺崎裕助 1999「第２章第２節第４項中期２．編年と地域性７～ 14」『新潟県の考古学』高志書院
58）佐藤雅一 1998「原遺跡の研究　4．004T-P4 出土土器について」『新潟考古』第９号
59）寺崎裕助 1999「第２章第２節第４項中期２．編年と地域性７～ 14」『新潟県の考古学』高志書院
60）中野幸大 2008「大木 7a 式～ 8b 式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
61）森　幸彦 1998「福島県内の大木 8a 式土器について」『第 11 回縄文セミナー　中期中葉から後葉の諸様相』縄文セミナーの会
62）阿部昭典 2007「中越地方の中期前葉の「大木系」、「東北系」土器について」『津南町シンポジウム火焔土器前夜発表資料集』津南町教育委員会
63）註５文献参照。
64）註 58 文献参照。
65）註 59 文献参照。
66）註 33 文献を参照。
67）佐藤雅一 1998「新潟県の中期中葉から後葉の様相」『第 11 回縄文セミナー中期中葉から後葉の諸様相』縄文セミナーの会
68）佐藤雅一 2005「第Ⅵ章まとめ第１節魚沼地方における道尻手遺跡出土土器の編年的位置付け」『道尻手遺跡』津南町教育委員会
69）寺崎裕助 1999「第２章第２節第４項中期２．編年と地域性７～ 14」『新潟県の考古学』高志書院
70）金子拓男・寺崎裕助 1974『森上遺跡発掘調査概報』中里村教育委員会
71）寺崎裕助（1991・1999・2008）は、大木 8b 式期を三細分して全ての段階に火焔型・王冠型土器が伴うと考えている。一方、佐藤雅一（2005）は、大木 8a 式並行期～大木 8b 式並行期古段階まで火焔型・王冠型土器が伴うと考えている。また幅上遺跡の報告書で宮内信雄（2007）は大木 8b 式並行期のなかで「火炎土器群」から「栃倉Ⅱ式」へと入れ替わると考えている。
72）池田　亨・荒木勇次 1988『万條寺林遺跡』塩沢町教育委員会
73）菅沼　亘・石原正敏 1998『笹山遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会
74）菅沼　亘・宮内信雄ほか 2007『幅上遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会
75）佐藤雅一 1999「原遺跡の研究究（2）２．魚沼地方の縄文時代中期後半期土器群の検討」『新潟考古』第 10 号
76）綿田弘実 2003「長野県千曲川流域の縄文中期後葉土器群」『第 16 回縄文セミナー中期後半の再検討』縄文セミナーの会
77）駒形敏朗・小熊博史ほか 1998『中道遺跡』長岡市教育委員会
78）藤田亮策・寺村光晴ほか 1961『栃倉』栃尾市教育委員会
79）阿部昭典 2008「沖ノ原式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
阿部昭典 2009「沖ノ原式土器に関する編年試案」『新潟県の考古学２』新潟県考古学会
80）江坂輝弥・渡辺　誠ほか 1977『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会
81）高橋　保・高橋保雄ほか 1992『関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡　十二木遺跡』新潟県教育委員会
82）渡辺　誠・齊藤基生ほか 1984『八反田遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会
83）田中耕作 1989「三十稲場式土器様式」『縄文土器大観　第４巻　後期・晩期・続縄文』小学館
田中耕作 1990「三十稲場式土器研究の現状と課題」『新潟考古学談話会会報』第５号
84）石坂圭介 2007「新潟県中越地方の縄文中期末から後期前葉の土器様相」『第 20 回縄文セミナー中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会
85）田辺早苗・國島　聡ほか 1991『関越自動車道関係発掘調査報告書　城之腰遺跡』新潟県教育委員会
86）高橋保雄・斎藤　準 2005『北野遺跡Ⅱ（上層）』新潟県埋蔵文化財調査事業団
87）富樫秀之・金内　元ほか 2002『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ　アチヤ平遺跡（上段）』朝日村教育委員会
88）菊地政信・手塚　孝 1999『大樽遺跡第２・３次発掘調査報告書』米沢市教育委員会
89）品田高志 2001「Ⅴ総括」『十三本塚北遺跡』柏崎市教育委員会

品田高志 2002「新潟県における縄文後期前葉期の土器群」『第 15 回縄文セミナー後期前半の再検討』縄文セミナーの会
金子優子 2002「奥三面における後期前半の土器様相」第 15 回縄文セミナー後期前半の再検討』縄文セミナーの会

90) 秋田かな子 1997「“石神類型” 覚え書き」『東海大学校地内遺跡調査団報告』 7

91) 長澤展生 1998「原遺跡の研究 6. 17 号住居跡および出土土器について」『新潟考古』第 9 号

92) 本書での使用痕の表記については以下の報告を参考とした。
池谷勝則 2003「礫石器の使用痕研究―磨石類を中心として」『古代』第 113 号
中島将太 2005「第 4 章 3 － 6）礫石器に残る痕跡」『下宅部遺跡Ⅰ (1)』下宅部遺跡調査団

93) 本書での器種分類にあたっては、以下の報告を参考とした。
高橋保雄 1990「出土石器の分類と分析」『関越自動車道関係発掘調査報告書　清水上遺跡』新潟県教育委員会
高橋保雄 1992「Ⅳ -4-B　石器類」『関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡・十二木遺跡』新潟県教育委員会
鈴木俊成 1996「Ⅳ - C　石器」『関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書　清水上遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査事業団
佐藤雅一・倉石広太・山本　克ほか 2005『道尻手遺跡』津南町教育委員会

94) ここでいう「完成品」は、装着痕や使用痕が残されることで実際に使用されたことが明確な［製品］と、見かけの形状が完全であっても未製品（五十嵐氏のいう［完形未製品］（五十嵐 2002））または未使用品の三者が含まれる可能性を持つ。これは「完成品」の分類に、上記［製品］の形状を加味した設定であっても、分類者の認識として完成か否かを判断しているためである。一方、後述する磨製石斧のように、全面に研磨が施された状態（特に最後に調整が加えられる部位となる刃部成形が完了したもの）から「完成」されたことが明確に判断される器種には「製品」「未製品」の語を用いた。
阿部朝衛 1979「第 5 章 Ⅰ石鏃」『峠下聖山』東北大学文学部考古学研究会
三上徹也 1990「縄文石器における「完形品」の概念について―石鏃を例とした考古学的史料批判の試的実践―」『縄文時代』第 1 号
五十嵐彰 2002「型式と層位の相克―石器と土器の場合―」『旧石器時代研究の新しい展開を目指して―旧石器研究と第四紀学』日本第四紀学会

95) 岡村道雄 1976「ピエス・エスキーユについて」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編　東出版寧楽社

96) 三脚石器・板状石器は三角形土版との形態的な類似性をもつことから、石製品に分類される器種の可能性も考えられる（八幡 1932・金子 1983）。ここでは、五丁歩遺跡出土資料の使用痕分析（澤田 1995）の結果から掻器としての機能を持つ器種との考え方もあることから、明確に石製品に分類できない器種として、剥片石器の中に分類した。
八幡一郎 1932「三脚石器」『人類学雑誌』第 47 巻 4 号
金子拓男 1983「三角形土版・三角形岩版」『縄文文化の研究』第 9 巻　雄山閣
高橋保雄 1990「第Ⅵ章 2 項 C (1) 三脚石器の分布・時期・性格について」『関越自動車道関係発掘調査報告書　清水上遺跡』新潟県教育委員会
澤田　敦 1995「五丁歩遺跡出土板状石器の使用痕分析」『研究紀要』第 1 号　新潟県埋蔵文化財調査事業団

97) 斎藤基生 1983「打製石斧研究の現状」『信濃』第 35 巻 4 号

98) 阿子島香 1984「不定形石器の視点」『文化』第 47 巻第 3・4 号

99) 山本正敏　1991「蛇紋岩製磨製石斧の製作と流通」『季刊考古学』第 35 号　雄山閣出版

100) 岡　修司ほか 1998「第 3 章 第 1 節 D 周辺の石材環境」『堂尻遺跡群試掘調査報告書』津南町教育委員会
山本　克　2000「第 1 章 第 2 節 4. 周辺の石材環境」『下モ原Ⅰ遺跡』津南町教育委員会
山本　克　2006「第 2 章 第 2 節 Ⅱ . 貝坂・桐ノ木平遺跡群とその周辺の石材環境」『貝坂・桐ノ木平遺跡群〈旧石器時代編〉』津南町教育委員会
倉石広太　2007「魚沼地域の石器石材」『第 21 回　東北日本の旧石器文化を語る会　予稿集』
魚沼地域洞窟遺跡調査団・魚沼市教育委員会 2008『黒姫洞窟第 2 期発掘調査報告書』

101) 五十嵐俊雄 2006『考古資料の岩石学』パリノ・サーヴェイ株式会社

102) 前掲註 100（山本　克　2006）参照。

103) 菅頭明日香・建石　徹・二宮修治 2006「縄文時代における新潟県内遺跡出土黒曜石資料の原産地推定」『津南学叢書第 4 輯　火焔土器の時代―その文化を探る』津南町教育委員会・信濃川火焔街道連携協議会

104) 前掲註 100 山本　克　2006 参照。

105) 前掲註 100 山本　克　2006、倉石広太　2007 参照。

106) ここでいう「在地の石材」の範囲とは、以下に述べる「在地石材 1」（佐藤 2002）と同様、現生狩猟採集民の行動モデルから

日常活動に伴う移動距離範囲で採取可能な石材採取範囲を指す。ここでは、遺跡から片道４時間程度の歩行距離（概ね遺跡から 10 ㎞圏内）を想定している。また、「 在地石材 1」を日帰りで行う採集活動の行動モデルであるのに対し、後述する「在地石材２」（佐藤 2002）は、１泊２日で行う採集活動の行動モデルと位置づけている。

佐藤雅一　2002「新潟県津南段丘における石器群研究の現状と課題―後期旧石器時代から縄文時代草創期に残された活動痕跡」『先史考古学論集』第 11 集

赤沢　威　1983『採集狩猟民の考古学』海鳴社

107) 津南町では、流紋岩・珪化岩・玉髄・赤玉は、縄文時代後期～晩期になると石材に占める割合高くなる傾向がある。

108) 長田友也 2000「石棒の製作遺跡」『月刊考古学ジャーナル』№.510　ニューサイエンス社

小熊博史 2004「長岡市馬高遺跡周辺で発見された大形石棒―柱状節理をもつ石材の利用形態」『長岡市立科学博物館研究報告』第 39 号　長岡市立科学博物館

109) 小薬一夫・小島正裕・丹野雅人「 緑泥片岩製石器の分布と伝播（覚書）―三波川系を中心として―」『神奈川考古』第 23 号　神奈川考古同人会

秋池　武 1999「関東地方点紋緑泥片岩の分布と利用について―縄文時代石棒等石材産地の検討―」『群馬県立歴史博物館紀要』第 20 号

110) 阿部昭典 1998「縄文時代の卵形住居跡」『新潟考古学談話会会報』第 19 号

阿部昭典 2005「第Ⅴ章第３節信濃川流域の縄文時代中・後期の住居形態について」『道尻手遺跡』津南町教育委員会

阿部昭典 2006「馬高式期の卵形住居跡について」『火焔土器の時代 - その文化を探る -』津南町教育委員会

111) 阿部昭典 2005「第Ⅴ章第３節信濃川流域の縄文時代中・後期の住居形態について」『道尻手遺跡』津南町教育委員会

112) 阿部昭典 2005「第Ⅴ章第３節信濃川流域の縄文時代中・後期の住居形態について」『道尻手遺跡』津南町教育委員会

113) 佐藤雅一 1997「堂平遺跡第１号住居跡について」『新潟考古』第８号

114) 石井　寛・坂上克弘 1976「縄文時代後期の長方形柱穴列」『調査研究収録』第１集

115) 環状列石の定義は、「規模が長径 30 m～ 50 mほどの規模を有し、列石が環状もしくは弧状にめぐるもの。これは環状列石が中央広場の外縁部にめぐるものであることから、直径が 30 m～ 50 mの規模を有するものであり、10 m前後のものはその範疇には含めない」（阿部 2008）。

阿部昭典 2008「第６章縄文後期集落の形成と環状列石」『縄文時代の社会変動論』アム・プロモーション

116) 数十年かけて継続的に構築するという見方があるが、この場合は斜面の谷側であるため、列石を配置しなかった可能性が高い。群馬県安中市野村遺跡の環状列石も斜面の谷側には列石はめぐっていない。

117) 群馬県安中市野村遺跡や中之条町久森遺跡の環状列石や、秋田県北秋田市伊勢堂岱遺跡、青森県青森市小牧野遺跡などで、土地造成を伴う環状列石の造営事例が報告されている。これは環状列石の場所として適切な場所を選択することから、斜面部の造成を必要としたものと推測される。

118) 縄文時代の墓坑の認定基準については、中村大の研究などがある。

中村　大 2000「土器の出土状態からみた土壙墓の認定について」『國學院大學考古学資料館紀要』第 16 輯

119) 新潟県内の陥穴状土坑については、田海正義（1999）が６形態に分類している。

田海正義 1999「第４節生業第２項狩猟」『新潟県の考古学』高志書院

120) 岩野原遺跡の後期集落では、円筒状の大形土坑に「L ピット」の遺構名称が設定されている。

駒形敏朗ほか 1981『岩野原遺跡』長岡市教育委員会

121) 県内のフラスコ状土坑の分類は、城之腰遺跡ではフラスコ状土坑は底径 150cm 以上のものをⅠ類、150cm 未満のものをⅡ類としている（田辺 1991）。五丁歩遺跡では、底径が 100cm 前後以下のものを小型、100cm 以上のものを大型として分類している（高橋 1992）。清水上遺跡では底径が 120cm 未満のものをⅠ類、120cm ～ 160cm 未満のものをⅡ類、160cm 以上のものをⅢ類としている（加藤 1996）。道尻手遺跡では、底径が 100cm 未満のものをⅠ類、100cm 以上のものをⅡ類とした（阿部 2005）。フラスコ状土坑の分類は、遺跡単位の相対的基準で分類されており、より普遍的な基準の設定も必要であろう。

田辺早苗 1991「第Ⅲ章２Ａ ４)a フラスコ状土坑」『関越自動車道関係発掘調査報告書　城之腰遺跡』新潟県教育委員会

高橋　保 1992「第Ⅳ章３遺構」『五丁歩遺跡』新潟県教育委員会

加藤正樹 1996「第Ⅳ章２A 遺構 (1)C. 土坑」『関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書　　清水上遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査事業団

阿部昭典 2005「第Ⅳ章第２節７．土坑」『道尻手遺跡』津南町教育委員会

122) 道尻手遺跡では、長さ約 80 mほどの大規模な遺物集中区が検出され、「廃棄帯」として報告した（阿部 2005）。堂平遺跡の場合、黒色土の遺存状態が悪かったことも影響してか、小規模な遺物集中区が確認さたのみである。周辺の大規模集落でも集落縁

辺部に廃棄場が確認されているが、小規模なものが多い。

阿部昭典 2005「第Ⅳ章第２節 9. 廃棄帯 1)、2) (1)(2)」『道尻手遺跡』津南町教育委員会

123) 土器の形態は、器種と器形の概念で捉える。器種は、深鉢、鉢、浅鉢、台付鉢、壺、有孔鍔付土器、注口土器、蓋、台形土器などに区分した。また器形は器種ごとに分類し、突起や波状口縁などの突出部分を除いた状態で器形の分類をした。中間的器形の存在や時期を隔てて類似する器形があるなどさらに検討が必要な部分も残される。

124) 土器容量の計算方法は、藤村東男（1981）や黒岩隆（1987）などがある。本報告書では、道尻手遺跡でも採用した、田中耕作が提示した算出方法で計算した。土器容量は、実測図から算出するため、実際の容量とは多少のずれが生じることが予想される。土器は、完形に加えて底部などを欠損しているものの図上復元可能なものを含めて計測を行った。

125) 西田泰民 2005「胎土への土器片混入について」『道尻手遺跡』津南町教育委員会

126) 小山正忠・竹原秀雄 2001『新版標準土色帖 2001 年版』農林水産省農林水産技術会議事務局・(財) 日本色彩研究所

127) 小林正史・滝沢規朗他 2007「縄文深鍋のスス・コゲからみた調理方法 - 胴下部コゲの形成過程を中心に -」『日本考古学協会発表要旨』日本考古学協会

小林正史・阿部昭典 2008「縄文深鍋のスス・コゲから見た調理方法：胴下部コゲの形成過程を中心に」『新潟考古』第 19 号

小林正史 2008「スス・コゲからみた縄文深鍋による調理方法」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

128) スス酸化とは、強い加熱を受けたことによって器面のススが酸化消失することである（小林 2008 ほか)。

小林正史 2008「スス・コゲからみた縄文深鍋による調理方法」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

129) 鈴木徳雄 1999「称名寺式関沢類型の後裔 - 堀之内 1 式期における小仙塚類型群の形成 -」『縄文土器論集』縄文セミナーの会

130) 秋田かな子 1997「“石神類型” 覚え書き」『東海大学校地内遺跡調査団報告』 7

131) 田崎博之 2007「土器焼成と生産　土器焼成失敗品から見た焼成方法と生産体制」『土器研究の新視点』大手前大学史学研究所編　六一書房

132) 佐藤雅一 2005「第Ⅳ章第 3 節 2. 土製品」『道尻手遺跡』津南町教育委員会

133) 佐藤雅一 2005「第Ⅳ章第 3 節 2. 土製品」『道尻手遺跡』津南町教育委員会

134) 小野正文 1984「土偶の製作法について」『甲斐路』第 50 号

135) この種の土製品についての名称は、「糸巻形三角形土製品」(近藤・近藤 1936) や「三角形板状土製品」(八幡 1932)、「三角形土版」(金子 1983、高橋 1992、駒形 1998)、「三角形土板」(寺崎 1996)、「三角形土偶」(菅沼 1998、佐藤 2003)、「三角形土製品」(江坂 1960、寺村 1961、薮下 1977、佐藤 2005・2006) など多様である。

八幡一郎 1932『人類学雑誌』第 47 巻第 4 号

近藤勘二郎・近藤篤三郎 1936「越後馬高遺跡と滑車形耳飾」『考古学』

江坂輝弥 1960「三脚石器と三角形土製品」『土偶』校倉書房

寺村光晴 1961「第二章遺物Ⅱ土製品」、「第三章考察Ⅱ三角形土製品と特殊な出土状態を示した土偶」『栃倉』栃尾市教育委員会

薮下　浩 1977「第４章第３節土製品」『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会

金子拓男 1983「三角形土版・三角形岩版」『縄文文化の研究 9』雄山閣

田辺早苗 1989「新潟県出土の三角土版について」『新潟考古学談話会会報』第 4 号

高橋　保 1992「第Ⅳ章 4-A2c 土製品」『関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡　十二木遺跡』新潟県教育委員会

寺崎裕助 1996「第Ⅳ章 3-B(2) 土製品」『関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書　清水上遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査事業団

駒形敏朗 1998「第２章 3(2) 土製品」『中道遺跡』長岡市教育委員会

菅沼　亘 1998「第Ⅲ章２. 遺物 B 土製品」『笹山遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会

佐藤雅一 2003「新潟県における土偶研究の視点」『新潟考古』第 14 号

佐藤雅一 2005「第Ⅳ章第３節２. 土製品」『道尻手遺跡』津南町教育委員会

佐藤雅一 2006「土偶と三角形土製品について」『火焔土器の時代 - その文化を探る -』津南町教育委員会・信濃川火焔街道連携協議会

136) 佐藤雅一 2005「第Ⅳ章第 3 節 2. 土製品」『道尻手遺跡』津南町教育委員会

137) 菅野和郎 2008「ミニチュア土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

138) 前掲註 137 文献を参照。

139) 佐藤雅一 2010「縄文時代中期の土製品耳飾について」『三条考古学研究会機関誌』第 4 号

140) 丹野雅人 2008「土器片加工円板・錘」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

141) 漆の加工用のパレットに使用されたとされる土器片がある。

142) 前掲註 131 文献参照。

143) 山梨県考古学協会編 2002『土器から探る縄文社会 2002 年度研究集会資料集』

144) 田中耕作 1991「村尻遺跡出土の「ねかせ」状態の粘土塊について」『北越考古学』第 4 号

145) 田中　靖 1991「石鏃について」『関越自動車道関係発掘調査報告書　城之腰遺跡』新潟県教育委員会

146) 三上 (1990) は、墓坑と通常遺跡から出土する石鏃の大きさの差を再生行為の度合いに起因する可能性について示唆したが、本遺跡出土石鏃の剥離面観察からは、石鏃の大小にリダクションの影響を看守することはできなかった。
三上徹也 1990「縄文石器における「完形品」の概念について―石鏃を例とした考古学的史料批判の試的実践―」『縄文時代』第 1 号

147) 装着状態で出土した石鏃をみると、石鏃基部の抉りは”逆刺”ではなく、矢柄に固定させるための仕掛けとして機能していることが伺える。こうした事例を勘案し、ここでは石鏃の基部幅＝矢柄幅と想定した。
近藤　敏 1984「14　矢柄の付いた石鏃 」『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書―人工遺物総括編』埼玉県教育委員会

148) 田中英司 1995「抉入意匠の石器文化」『物質文化』59　物質文化研究会

149) 安斎正人 2006「『御子柴文化』の新解釈―学史的再検討―」『考古学』Ⅳ

150) 中谷治宇二郎 1925「石匙に関する二三の考察」『人類学雑誌』
上野佳也 1961「有柄石七試論」『考古学研究』第 8 巻第 2 号

151) 上敷領久 1989「南関東における縄文時代中期の石匙―特に大形石匙について―」『東京考古』7　東京考古談話会
藤森栄一 1963「縄文中期における石匙の機能的変化について」『考古学雑誌』49 巻 3 号

152) 石匙の「斉一性は、唯一つ、つまみがあることに帰結する」刃器（藤森 1963、前出の註 151 参照）という特徴から、素材における刃部と摘みの位置は不定形石器と同様の視点で分類する必要があると考える。

153) 本遺跡では、平面形から「三角形」「円形」の 2 大別分類としたが、清水上遺跡ではこれに「不定形」を加え 3 大別している。

154) 大野雲外 1907「打製石斧の形式に就て」『東京人類学會雑誌』第 22 巻 250 号

155) 小薬 一夫・小島 正裕 1986「「分銅形」打製石斧の系譜（覚書）」『東京考古』4

156) 斉藤基生・高橋恭子 1974『森上遺跡調査概報』中里村教育委員会
高橋保雄 1992「Ⅳ－ 6 － C － 2 片刃打製石斧」『関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡・十二木遺跡』

157) 道尻手遺跡の B1 類（倉石 2005）、五丁歩遺跡（前記の註 156）高橋 1992 を参照）の両面加工の打製石斧に類するが、本遺跡では、久保田 (2003) の実験成果を積極的に取り入れた細分内容とした。
久保田正寿 2003「縄文時代の石器製作」『月刊考古学ジャーナル』№ 499

158) 渡辺　誠・鈴木忠司ほか 1975『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館
川口武彦 2000「打製石斧の実験考古学的研究―縄文時代中期における土堀り具の使用時間―」『古代文化』第 52 巻 第 1 号
池谷勝則 2000「打製石斧研究序説―氷遺跡出土打製石斧についてー」『東京考古』18 号

159) 全面研磨がなされた磨製石斧で、表裏面と両側縁および長辺に対し研磨成形を施すことによって、面と辺の境界に稜が形成される磨製石斧を指す。

160) ここでは石斧柄のソケットの類型（山田 1991）との対比を考慮し、A1 は「桜町タイプ」A3 は「鳥浜タイプ」または「荒屋敷タイプ」、A 2 は両者の中間に相当する。
山田昌久 1991「道具の復元」『季刊考古学』第 35 号　雄山閣
鈴木道之助 1993「磨製石斧概論」『千葉県史研究』創刊号　千葉県

161) 八幡一郎 1948「石斧における擦截手法」『日本の石器』彰考書院

162) 西井 (1994) は、関東地方における縄文時代後期～晩期の磨製石斧を「定角式」と「側面をもたず横断面形がレンズ状を呈するもの」(本報告の B2 類に類するもの) に大別し、後者が埼玉県などで類例が多いことや、乳棒状磨製石斧との関連を示唆している。
西井幸雄 1994「静岡県西部における縄文時代の磨製石斧」『転機』5 号

163) 阿部朝衛 1987「磨製石斧生産の様相」『史跡寺地遺跡』 新潟県青海町
阿部朝衛 1984「多面体を呈する敲石」『豊栄市史研究』第 2 号
阿部朝衛 1990「多面体を呈する敲石（再論）」『帝京史学』第 5 号

164) 新潟県の北部において、輝緑岩や斑レイ岩など非蛇紋岩石材を用いた磨製石斧生産を行なう遺跡が多く発見されており、縄文時代中期中葉以降、晩期に渡り生産が活発になることが知られている。これら地域で生産された磨製石斧は消費遺跡への流通の可能性も示唆される (鈴木 1998) ことから、本遺跡出土の磨製石斧もこうした流通の結果とする可能性も十分に予想

される。ただし、魚沼地域でも原遺跡（佐藤ほか 1998）や内後遺跡（長澤ほか 2006）、道尻手遺跡（佐藤・阿部・倉石ほか 2005）などで一定数の非蛇紋岩製磨製石斧が出土する遺跡のほか、晩期を主体とする正面ヶ原 A 遺跡で磨製石斧の製作工程を示す資料がみられることなど、縄文時代中期後半以降にみられる非蛇紋岩製磨製石斧の製作は蛇紋岩製磨製石斧とは対照的に広域に生産基盤を持っていた可能性も考慮する必要があろう。

鈴木俊成 1998「新潟県の蛇紋岩製磨製石斧について―縄文時代前半期の生産遺跡と消費遺跡を中心に―」『研究紀要』 2 新潟県埋蔵文化財調査事業団

鶴巻康志・田中耕作 1994「上車野 E 遺跡」『平成 5 年度新発田市遺跡範囲確認調査報告』新発田市教育委員会

高橋保雄 1999「阿賀野川以北の磨製石斧生産の様相」『新潟考古学談話会会報』第 20 号

田海義正 2000「蛇紋岩製磨製石斧の生産と流通 - 磨製石斧の生産地の形態と消費遺跡の形態 -」『新潟県埋蔵文化財センター研究紀要』 2

長澤展生・桑原　健ほか 2006『内後遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会

佐藤雅一 1999「正面ヶ原 A 遺跡」『平成 11 年度津南町発掘調査概要報告書』津南町教育委員会

165) 田中大介 2002「破損からみた磨製石斧の形態差 - 南関東西部縄文時代中・後期の資料をもとに -」『石器を学ぶ会』 第 5 号

秋田かな子 2004「縄文時代中期磨製石斧の変形例」『月刊考古学ジャーナル』№.512

166) 中森敏晴 1996「“定型” 石皿論」『考古学雑渉』

植田文雄 1997「無縁石皿考」『列島の考古学　渡辺誠先生還暦記念論集』

上条信彦 2001「縄文時代刻文付石皿の研究（一）」『信濃』第 58 巻第 11 号

上条信彦 2001「縄文時代刻文付石皿の研究（二）」『信濃』第 58 巻第 12 号会

167) 久保田正寿 2004「実験からみた敲打技法」『石器づくりの考古学』学生社

上条信彦 2007「敲打製石製品の製作技術」『考古学研究』第 54 巻 1 号

168) 平出一治 1978「縄文時代の石皿について―こわれた石皿をめぐって―」『信濃』第 30 巻第 4 号

169) 長田友也 2002「第Ⅴ章 7 石製品」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ　アチヤ平遺跡上段』朝日村教育委員会

170) 本資料については、柏崎市教育委員会の品田高志氏に鑑定をお願いした。

第Ⅵ章　まとめ

第１節　馬高系土器変遷の素描

Ａ．はじめに

信濃川流域の縄文時代中期に製作された縄文土器は、深鉢形土器を主体に鉢形土器・浅鉢形土器が組成し、稀に注口土器や台付き鉢形土器が加わる場合もある。このような器形組成を示す土器群であるが、その器面に描き出される文様構成、単位文、意匠文、充填文、地文、把手、突起などは多様である。すなわち、系統の異なる土器が組み合わさり、一つの土器様相を呈している。

信濃川流域に点在する遺跡群に残された当該期資料を概観するならば、広域的に一定量分布する土器群やある地理的範囲に局地分布する土器群など、系統の異なる土器が地理的環境と整合しながら基本的な分布を示す一方、その分布が社会的環境と大きく関連する可能性が示唆される場合もある。

縄文時代中期中葉（註１）に信濃川流域沿岸で使用された土器群を象徴する「火炎系土器」あるいは「火炎土器様式Ａ群土器（通称：火焔型土器や王冠型土器）」（註２）と呼称される一群がある。この土器群は信濃川流域を越え、日本海沿岸の頸城平野、柏崎平野、阿賀野川以北の越後平野北部などの広い地域に分布が認められる。しかしながら、信濃川のさらなる上流部である千曲川流域には、その基本的な分布は認められない（註３）。

当該期の信濃川流域に分布する土器組成の約６割は粗製土器で占められ、残りの精製土器のうち、約１割程度が「火炎土器様式Ａ群土器」である。

この約１割程度を占める象徴的な火炎土器様式を構成するＡ群土器のうち、ＡⅠ型式とされる「火焔型土器」（註４）とＡⅡ型式とされる「王冠型土器」（註５）がある。これらは類似性の高い土器である。しかしながら、火焔型土器は平縁深鉢形土器にデコレーションとして把手が４単位貼付され、その間に鋸歯状突起が連なる。一方、王冠型土器は４単位波状口縁の深鉢形土器である。小林達雄は、火焔型土器と王冠型土器は強い共通性と同時に相容れない個性的形態の主張が対立するものであり、そこに「二項対立の観念」を見ると指摘した（註６）。

この強い共通性と相容れない独自性こそが、火炎土器様式Ａ群土器の特性である。この象徴性を強く主張する約１割程度の土器群と他系統の土器群、そして粗製土器で特徴的な「相」（註７）を構成する。

筆者は、この系統の異なる土器を分類し、その中で強い共通性で括られるまとまりを「類型土器」と呼び、その類型土器などのまとまりが「土器様相」であり、中期中葉の信濃川流域に分布する土器様相を抽象化したものが「型式」と認識される『馬高式土器』（註８）と考える。当然のこととして、信濃川下流域・中流域・上流域に分布する馬高式土器を構成する類型土器の組成比に違いがある。その違いこそが縄文社会を映し出している鏡といえよう。しかしながら、馬高式土器を象徴する火焔類型土器や王冠類型土器は、流域全体に分布する象徴的な土器であり、火焔類型土器は遠隔地に搬入される土器でもある。構成比で１割程度の象徴的な土器が、広域に分布する実態の裏にこそ、「馬高文化」を形成した原動力が隠されていると思われる。

B．研究史抄

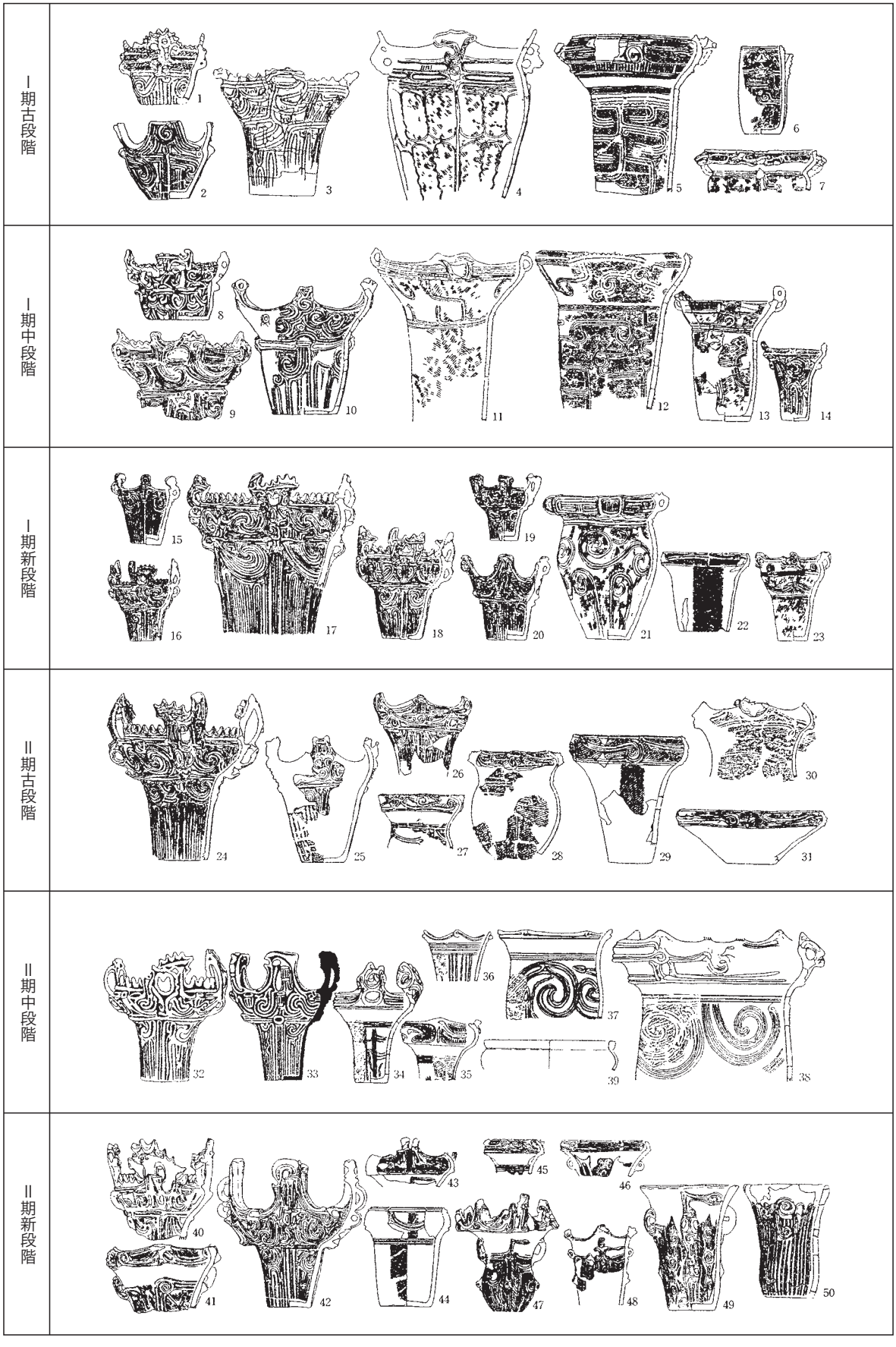
これら火焔類型土器や王冠類型土器は、火炎土器様式や馬高式を構成するものである。これらの研究史については寺崎裕助など（註9）に詳しく触れられていることから、ここでは近年の研究史を踏まえて、現段階における火焔類型土器などの編年学的研究の到達点を整理したい。

研究をリードする寺崎裕助の編年研究（註10）は、金子拓男の薫陶を受け、森上編年を基礎とした羽黒編年を拠り所とし、小林達雄・小田由美子が提唱した「火炎土器様式」の型式学的な整理と解釈を行っている。寺崎は、1999年論文において大木８ａ式並行期～８ｂ式並行期を『馬高式』の範囲とし、５期に大別した。大木８ａ式並行期を１期～３期、大木８ｂ式並行期を４期～５期に細分した。また、４期を大木８ｂ式前半古相（前田遺跡36J）、大木８ｂ式前半新相（森上遺跡1J）とし、細分される可能性を指摘した。そして、１期＝上山田・天神山１式とし、５期＝古串田新式・唐草文Ⅱに対比している。この寺崎編年（1999年）を踏み台として、一部の変更を経て、現在はⅠ期（３段階）⇒Ⅱ期（３段階）の６段階区分を提示した「火炎土器様式寺崎編年」（註11）がある（第106図）。

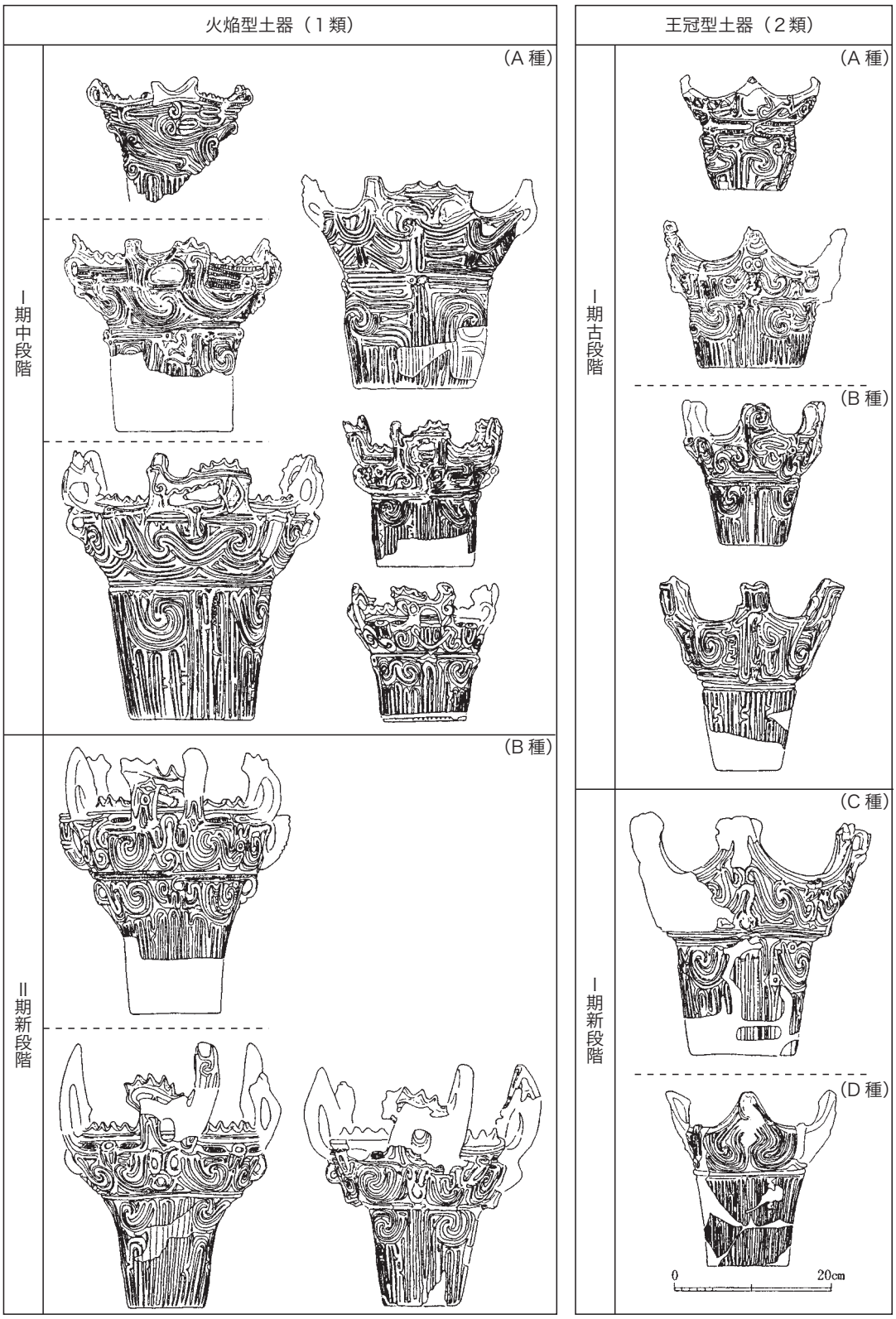
そして、Ⅰ期古段階の標識資料に清水上遺跡３号住居跡資料（２・４～７）を当て、山下遺跡（１）、堂平遺跡（３）を対比した。Ⅰ期中段階は清水上遺跡16号住居跡資料（10～14）を標識とした。そして、Ⅰ期新段階には笹山遺跡Ｄ区Ｆ～Ｋ－２・３出土土器（15～23）を配した。Ⅱ期古段階には前田遺跡36号住居跡（25～28・30）と笹山遺跡Ｄ区Ｈ・Ｉ－３（24・29・31）を対比させた。Ⅱ期中段階は森上遺跡１号住居跡資料（32・34～38）を標識として提示し、栃倉遺跡２号住居跡資料が並行することを指摘した。これらⅡ期古段階と中段階を大木８ｂ式前半期に対比した。そして、Ⅱ期新段階を大木８ｂ式後半期に対比させ、万條寺林遺跡４号住居跡炉内部および覆土資料（43～45・47・48）を標識とし、原遺跡11号住居跡資料（41・46・50）を対比させ、川内遺跡の王冠類型土器（42）を単体で並べ、その並行関係を示した。

寺崎が示した火炎土器様式は、Ⅰ期とⅡ期に大別され、Ⅰ期を３細分、Ⅱ期を３細分して、６段階に変遷する（第106図）。これらを広域交差編年に対比するならば、凡そⅠ期が大木８ａ式並行期に、Ⅱ期が大木８ｂ式並行期に対比されるという（註12）。

精力的な寺崎の火炎土器様式研究の陰に隠れた小熊博史の研究が注目される（註13）。小熊は、岩野原遺跡第１土器捨て場出土の火焔型土器12点、王冠型土器８点を資料化して、その型式学変遷を考察した（第107図）。第１土器捨て場の出土層位を勘案しながらも、型式学的検討から２大別５細別を試みた。その基本には器形と文様配置、把手変遷を重視した小林達雄や寺崎裕助による変遷観を下敷きにしながらも持論を展開し、その段階変遷に配置する具体的な所見が記述されている。古段階を３細別し、最古段階には頸部と胴部の区画を施さない資料を位置付け、中相から新相にかけて「頸部文様帯は鶏冠状把手の単位で隆線文が区画されず連続した構成」を示すとした。また、連続爪形文を取り上げ古相の特徴とした。新段階になると「鶏冠状把手・鋸歯状突起・眼鏡状突起・袋状突起・楕円刻目文が認められ、その形状や位置はほぼ共通する」とした。また、新段階になると楕円刻目文が顕著になるが、古段階では顕著でないと指摘した。さらに、王冠型土器は、火焔型土器に比べると個体差が大きいことを指摘し、４種に分類し、その分類が時間軸で整理されると理解した。その変遷過程において、古段階新相で山形



第 106 図　火炎土器の編年細別模式図（寺崎：2008）



第 107 図　岩野原遺跡の火焔型・王冠型土器の変遷（小熊：2003）

状把手の左側に僅かな抉りを加え、新段階古相で抉りの入った大振りの山形状把手が位置付けられ、新相では抉りを持たない三角形の山形状把手を持ち、胴部文様が細い隆線文を主文様とするという注目される指摘をしている。筆者にとっては重要な論考であり、今後の火焔類型土器や王冠類型土器の変遷を論究する指針となると評価したい。

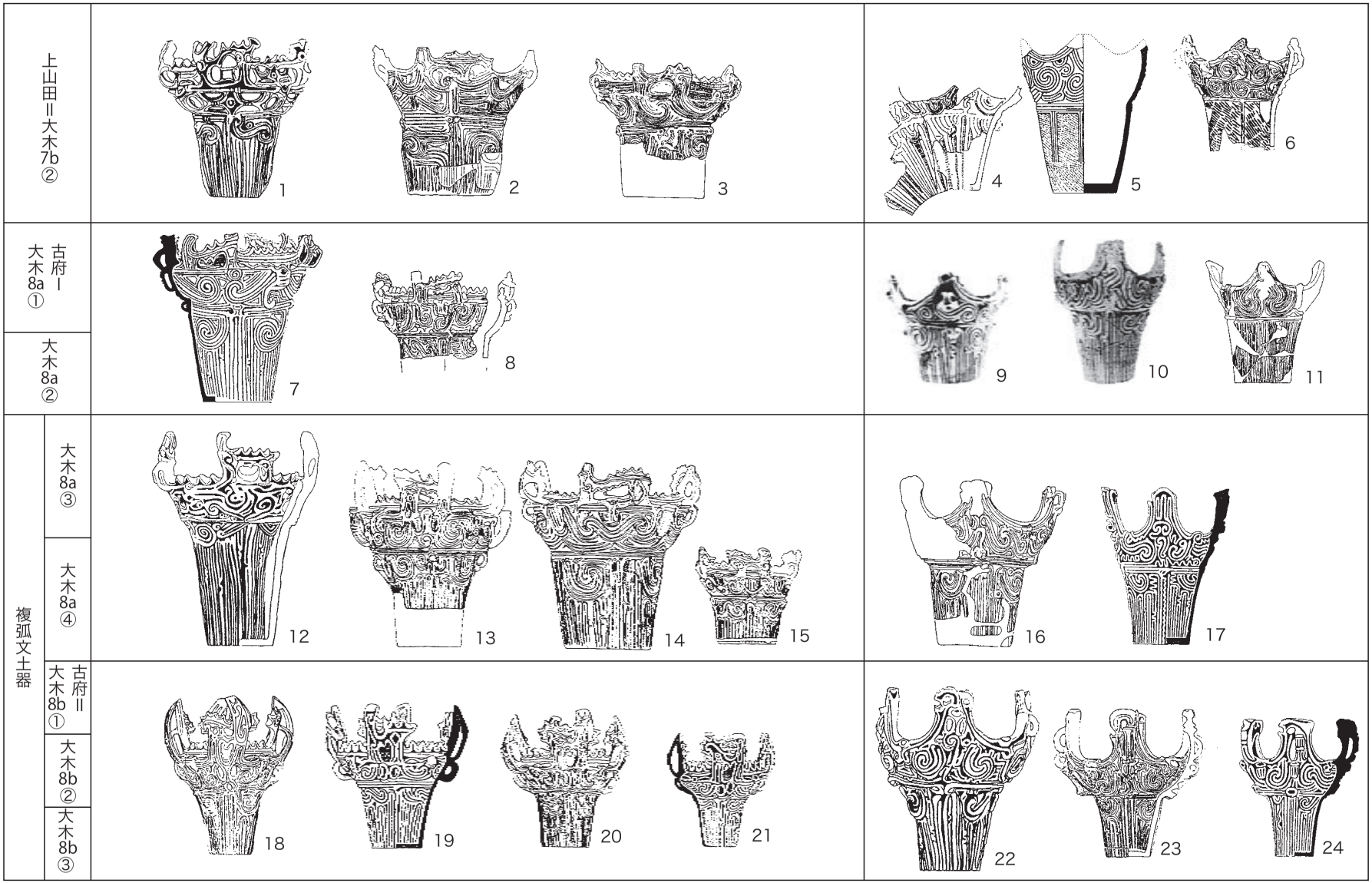
これら火焔類型土器の消長については、寺崎が指摘するように凡そ大木８ａ式～８ｂ式に並行する考古時間幅が認められており、定説化している。しかしながら、福島県の佐藤光義・長尾修は、阿玉台Ⅱ式並行期に当たる大木７ｂ式末～大木８ａ式過渡期には、すでに「火炎系土器が伴うことを実証した」と言説した（註14）。また、品田高志は王冠型土器を大木７ｂ式末～大木８ｂ式初頭までの範囲で捉へ、３段階の変遷を考察した（註15）。それは、１段階：ＡⅠ類の三角形の波状口縁を呈する資料。ＡⅡ類の把手頂部が発達して大きい。横位にジャバラ状の隆線文が施される特徴。⇒２段階（過渡期）：ＡⅢ類は把手頂部の発達は顕著でないが比較的高い。外面にはＳ字又は逆Ｓ字文、内側にはＸ字状の隆線文。⇒３段階：ＡⅤ類は把手部に眼孔状の穿孔やエグリがあたかも口を意識したかのような構図、へと変遷するとした。また、品田は「王冠型土器の範囲をＡ類に限定しようという試みは、範囲を拡大してきた研究史に逆行するとも言え、今後議論していく必要」があるとした。筆者は、品田がＡ類に限定して王冠型土器（王冠類型土器）として括る考えに賛同するものである。さらに、廣野耕造（註16）は火焔型土器と王冠型土器のみで「馬高式」が構成されると考え、小薬一夫の編年観を引き合いに出し、大木７ｂ式２期～大木８ｂ式３期に対比した（第108図）。

近年小林達雄も「五領ケ台式土器が勝坂式土器様式へと変化してゆく段になると、きっぱりと関係を絶って独自路線をとったのが火炎土器様式である。（中略）会津地域が火炎土器成立の震源地として台頭しながらも、そのまま続いて大きく発展させようとする動きまでつながらず、信濃川流域にその発展の主導権を譲り」とする火炎土器様式発生プロセスのシナリオを提示し、大木８ａ式以前の大木７ｂ式段階に発生があるかのような指摘をした（註17）。

このような研究史を踏まえ筆者がこれまで展開してきた議論を整理するならば、以下の基準となりえる定点がある。

定点１・・・道尻手遺跡15 Ａ号住居跡　　勝坂３式＝井戸尻式最新
定点２・・・原遺跡004T－P4　　勝坂終末＝井戸尻式
定点３・・・森上遺跡１号住居跡　　大木８ｂ式
定点４・・・道尻手遺跡30号住居跡　　大木８ｂ式
定点５・・・万條寺林遺跡４号住居跡　　大木８ｂ式
定点６・・・道尻手遺跡９号住居跡　　大木８ｂ式＝栃倉２式
定点７・・・原遺跡11号住居跡　　大木８ｂ式

さらに、宮内信雄の指摘（註18）を受けるならば幅上遺跡SI1資料が定点８になる。これらのうち定点３と定点５、そして定点７は、寺崎が標識とした資料でもある。また、寺崎が標識とした前田遺跡36号住居跡資料、清水上遺跡の３号住居跡資料と16号跡住居跡資料を参考に検討する必要性がある。そして、寺崎が提示した第106図５⇒12⇒21⇒（+）⇒37・38の大木類型土器の変化を大切にしたい。

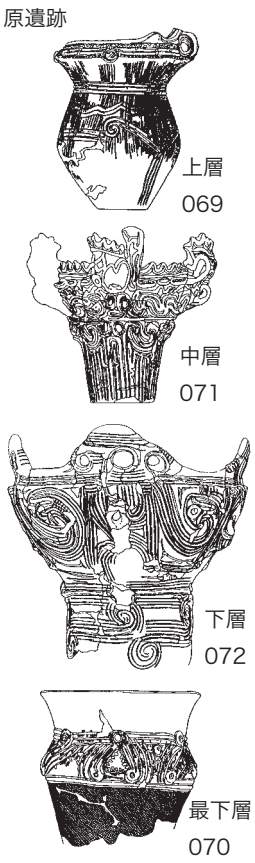


1．長者ヶ原　2・3・11・13～15・16．岩野原　4．羽黒　5・7・17・19・21・24．馬高　6．石生前　8．徳右ェ門山　9．長者ヶ平　10．吉野家　12．上稲塚　18・20．沖ノ原　22．堂尻　23．川内

第 108 図　廣野耕造の馬高式土器編年試案（廣野：1990 を基礎としてＡ・Ｂ群の主要土器で筆者が図で復元した）
（岩野原資料に限り小熊：2003 から図を引用した）

さらに、寺崎が大木８ｂ式前半期新相とした森上遺跡１号住居跡資料の検討から頸部無文部の形成（34・35・37・38）、大木８ｂ式後半期に配した万條寺林遺跡４号住居跡の頸部無文帯への文様進出（47・48）や狭小化（46）を重視したい。

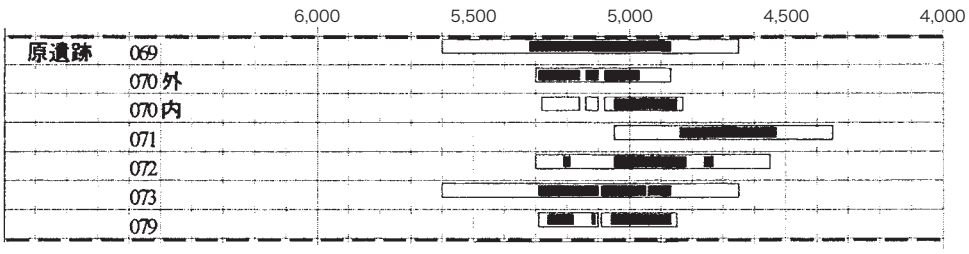
さて、定点２とした原遺跡 004T – P4 覆土出土資料を取り上げる（第 109 図）。この異なる系統の土器が同一のフラスコ状土坑（覆土確認面から深さ約 1 m）から出土した（註 19）。しかし、その出土は同一層位ではなく、上層・中層・下層、基底面に貼り付く最下層に分離される。その AMS 年代が第 110 図である。全体として凡そ 5,000 年のオーダーが示されているが、071 資料（火焔類型土器）だけやや右に測定値がズレており 4,700 年頃の年代値が読み取られ、他の資料と比べるとやや新しい年代値が求められる。その年代値の違いが層位差かといえば、そうではない。やや新しい年代値を示す資料は、中層出土の 071 資料である。



第 109 図　004T-P4 出土資料

この原遺跡 004T – P4 資料から二つの問題が浮上する。一つは考古時間における同時性の問題であり、層位の異なる出土土器の扱いである。筆者は考古時間においてフラスコ状土坑覆土形成時間を単一の時間と理解する立場に立つ。当然ながら AMS 年代によれば各資料の測定値に若干の違いがあり、070 資料においては器面表裏で年代値のズレが生じている。このような状況を踏まえても筆者は、考古時間内において、これら年代値のズレは許容範囲のうちであると理解する。したがって、これら一群は同時性のある一括資料と評価したい。もう一つは、同時性が示される一括資料が、まったく製作原理の異なる土器によって構成されている。すなわち、系統の異なる類型土器などで土器様相が組成されている実態である。この一括資料は、本地域において火焔類型（071）と焼町類型（072）が併存し、搬入土器として、中峠類型土器（069）・勝坂式土器（070）が搬入され組成される現象を示す（註 20）。このような組成は、信濃川上流域などの新潟南部地域の特徴であり、信濃川下流域ではほぼ見ることのできない組成である。ここで重要な点は、あくまでも在地土器群で類型化し、搬入される非在地土器は広域対比のためにも類型土器として分類せず、搬入土器として位置付けることであろう。

これら原遺跡 004T – P4 資料は、各土器の広域編年対比によれば関東編年の勝坂終末 = 井戸尻式に



第 110 図　原遺跡 004T-P4 出土資料較正年代値（cdlBP）

位置付けられる。すなわち、071 の火焔類型土器の編年学的位置の決定である。また、焼町類型とした 072 の胴部文様は、大木式との折衷文様と理解する。この文様の特徴である「横流れの渦巻き化」をメルクマールとして寺崎編年に対比するならば、Ⅰ期中段階の様相に類似し、清水上遺跡 16 号住居跡資料と対比することが可能である。

定点３も重要である。寺崎の第Ⅱ期中段階＝大木８ｂ式並行期の標識資料である森上遺跡１号住居跡資料である。寺崎は第Ⅱ期の時間幅すべてが大木８ｂ式並行期に重なると考え、前半と後半に分け、その前半の新相が森上遺跡１号住居跡資料であるとしている。すなわち大木８ｂ式期の４段階区分である中野幸大の大木８ｂ式土器変遷に学ぶならば、中段階の特徴として「把手はボックス状に統一され、(中略) ２本１組の隆帯に沈線を沿わせ（中略）Ｓ字状文や弧線文が繋ぎ合わさり、連続的に横位に展開する。その端部には、剣先文を持つ渦巻文が多く配される。(中略) 頸部上面が無文化」するという。第 106 図に示した森上遺跡１号住居跡資料を概観するならば、剣先渦巻き文（37）や頸部無文帯（34・35・37・38）が安定的に認められることから、寺崎が示した前半新相期は、中野の中段階に対比されると推定する。

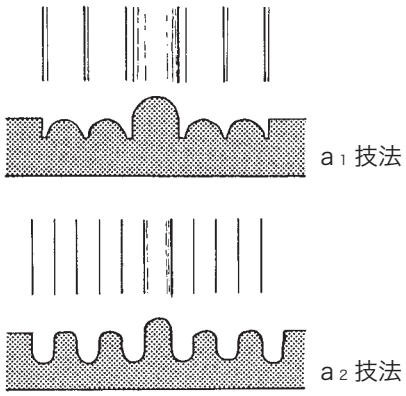
この定点２と定点３を重要な定点として、少なくとも大木８ａ式古段階＝勝坂３式＝井戸尻式＝中峠類型に対比させて「原遺跡 004T－P4 覆土資料」を配置し、そのうえで大木８ｂ式中段階に並行させて「森上遺跡１号住居跡覆土資料」を定置させたい。すなわち、これら新旧に配置した標識資料の前段階と後段階、そして、その間をどのように埋め、その段階区分の根拠を具体的に示す必要がある。型式学的研究の先進地域である東北地方の大木式土器研究に学ぶならば、中野は大木７ｂ式期を３段階、大木８ａ式期を２段階、大木８ｂ式期を３段階に区分している。それに対比するならば、定点２と定点３との間は、少なくとも２段階あると想定することができる。

このように定点の積み上げと交差検証は、必ず必要な手続きである。一方、火焔類型土器そのものの、器の形態や器面に描き出された文様の変化に応じて、区分する明確な細分根拠の提示が必要である。

以上のように、火焔類型土器研究史を踏まえるならば、その口頸部と胴部の比率を背景とした鶏頭冠状把手の変化に変遷根拠を得る一方、共伴資料との整合性を図る作業が進められている。そして、出土状況を重視した定点資料を踏まえるならば凡そ火焔類型土器は（+a）⇒原遺跡 004T－P4 ⇒（+b）⇒（+c）⇒森上遺跡１号住居跡⇒（+d）⇒（+e）の段階変遷が想定される（註 21）。大木式に対比するならば、大木８ａ式を３段階区分するうちの古相が（+a）であり、大木８ｂ式を４段階区分したうちの前半新相に森上遺跡１号住居跡が相当する。

この想定される６段階変遷を具体的に検討するには、二人の研究成果が重視される。それは、縦位区画の隆起線構成に着眼した遠藤佐（註 22）と頸部と胴部との横位区画文と胴部縦位区画に着目した中野純（註 23）の研究である。

遠藤は、火焔類型土器の胴部縦区画の施文手法を観察し、２種の施文手法があることを指摘し、その手法が時間軸で変化すると考えた（第 111 図）。遠藤がａ１技法としたものは、縦位に垂下する隆起線の左右脇を、数条の半隆起線が平行して下垂する。半隆



第 111 図　半隆起線断面模式図
（遠藤：1987）

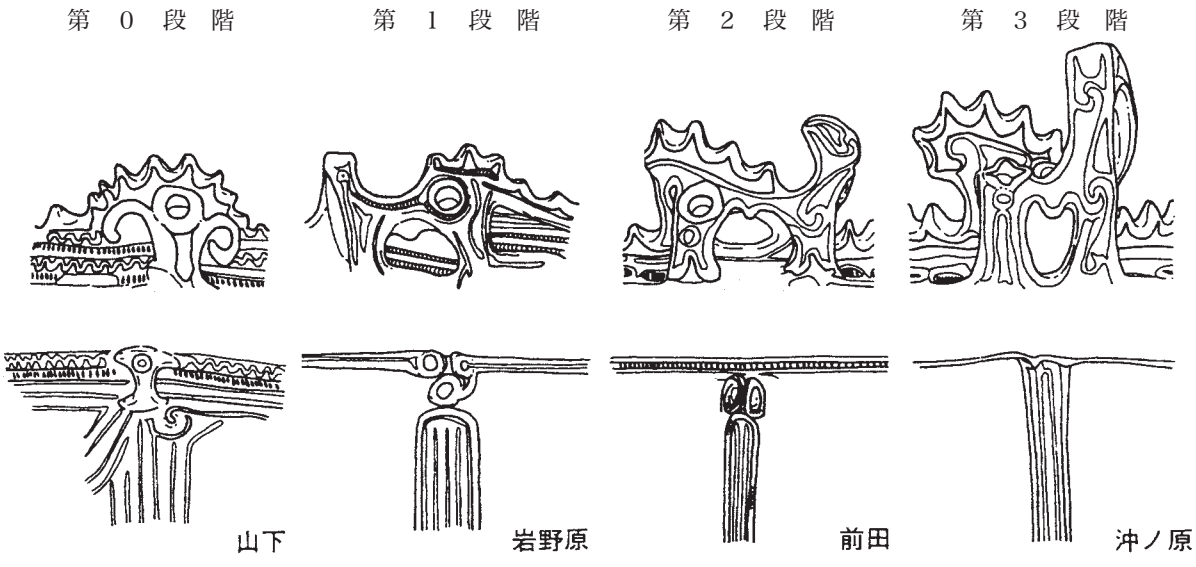
起線は器面の高さと変わらないため、視覚的に平板に映り、それだけで隆起線が浮き立つという。ａ２技法はａ１技法と同様な手法で隆起線と半隆起線を描いた後、その沈線部分を棒状工具もしくは竹管状工具（背面）を用いてなぞる。このため、沈線部分は隆起部分と幅がほぼ同じか、それ以上の幅を持つ個体もあるという。隆起線が狭小化することから、ａ２技法と比べるとやや貧弱に見え、半隆起線との区別が付きにくくなるという。これら２種の技法を 1987 年段階に流布していた羽黒編年に対比し、岩野原遺跡第１土器捨て場出土土器を標識とする「古式火焔型土器」（ａ１技法）⇒森上遺跡１号住居跡出土土器「新式火焔型土器」（ａ２技法）へ変化すると指摘した。

この重要な指摘は、その後の研究史でほとんど触れられることがなった。しかし、筆者は、遠藤の指摘は重要と理解し、改めて取り上げる。また、遠藤は岩野原遺跡出土で基隆帯手法を強く残しながら半隆起線技法ａ２技法を残す事例や、押引文を付加する事例を取り上げ「興味深い」と指摘したが、なぜ興味深いのか、さらなる記述が無いことは残念である。

中野は、新潟県内で発見された火焔類型土器を概観し、個体差が著しいために明確な基準が示されない状況と地域差が散見される点を強調しながらも、編年試論を提示した。その観点は、１．鶏頭冠状把手、２．頸部と胴部を分割する横位区画文と双環状突起・眼鏡状突起、３．胴部区画の変化に着目した。これらは「関わりが有効な要素」と指摘し、「従来論考されてきた細分案とほとんど差異のない内容」と謙遜しながらも、第 112 図を提示し、より具体的な変遷過程を説明した。

それらは萌芽期の第０段階を含み、第１段階～第３段階の４段階の変遷モデルであった。萌芽期は鶏頭冠状突起と眼鏡状突起の形態が近似すること、その眼鏡状モチーフの中央に穿孔された円形状文が施されること、そして、その円形状文は第３段階まで継承されることを指摘した。また、頸部と胴部を区画する横位区画文を跨ぐように橋状突起が配される一方、胴部懸垂文は逆Ｕ字状を呈していなかったという。

第１段階になると、「左右非対象の眼鏡状の突起が２つ連結したことが、鶏頭冠状突起の成立過程における基本的骨格であること」を指摘し、「ハート状を呈する脚部間の開口部」が眼鏡状突起連結による痕



第 112 図　火焔型土器の鶏頭冠状突起・胴部区画文変遷模式図（中野：1996）

跡であると示唆した。そして、このハート状の開口部は第３段階まで受け継がれると説明した。また、本段階の「押引文の存在」を注目している。

第２段階になると、「胴部の双環状突起は横位区画文から分離し、眼鏡状を呈している横位区画文の下位に配される」と詳説した。また、「主要文様上にキザミが施される資料が多いことも、本段階の特徴」とした。

第３段階は「火焔型土器の終末段階である」と位置付けた。「器形的に頸部と胴部の分割が強調され、文様レベルでの分割、すなわち横位区画文はやや衰退化する。同様に眼鏡状突起も器形の変化に伴って形骸化し、横位区画文と融合してＷ字状にその痕跡を残す」と持論を展開した。この眼鏡状突起の形骸化の方向性を、より具体的にモデル化して説明されていれば、より共通した変遷観が整備されたと思われ残念である。このように中野は、痕跡器官の考え方を基礎とし、その変遷過程を模索し試案を提示した。氏が指摘するように、個体差が著しい現実を踏まえながらも、その変遷を抽象化し、４段階に整理して見せたことは学史上、軽視されるものでは無く、今後の研究指針として評価するものである。

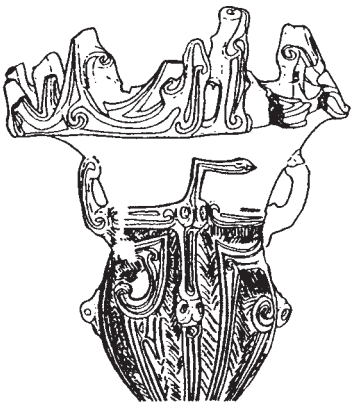
白虎図像の変化
トラがしだいに
渦巻きと化してゆく
田中琢「方格規矩四神鏡系
倭鏡分類試論」より

第 113 図　痕跡器官
（松本：2009）

近年の研究であまり触れられることのなかった遠藤・中野が示した視点を重視し、筆者なりに型式学の基本である「痕跡器官（ルーディメント）」の考え方を参考にしたい（註 24）。この痕跡器官現象は、本来機能していた形態あるいは意味を持っていた文様が、機能または意味を失いながらも形骸化して残るものである（第 113 図）。この変化が文様施文手法・器形変化と連動しながら変移するならば、その内容をより具体的に説明することができる。

馬高式土器を構成する土器群のうち、象徴的な在地土器である火焔類型土器や王冠類型土器は、大木８ａ式並行期には生まれていたという大方の見方がある一方、その誕生の可能性は大木７ｂ式新段階まで遡るとした考え方がある。よって系譜的な変遷を考慮するためには、大木７ｂ式並行期を概観しながら、その「火焔土器前夜」（註 25）に、編年構築のヒントを探ることとしたい。

また、その終焉について小田由美子は、南魚沼市塩沢町万條寺林遺跡４号住居跡資料を取り上げ、大木８ｂ式に並行期する時間幅であるが、その新しい段階にすでに火炎土器様式が終焉し、モデルチェンジした新しい土器（第 114 図）が登場するとした（註 26）。筆者は、南魚沼市原遺跡第 11 号住居跡資料を扱う中で、その資料と出土状況から小田が指摘する大木８ｂ式新相段階に火焔類型土器が消失している可能性を追認し、発言した（註 27）。



第 114 図　モデルチェンジした土器

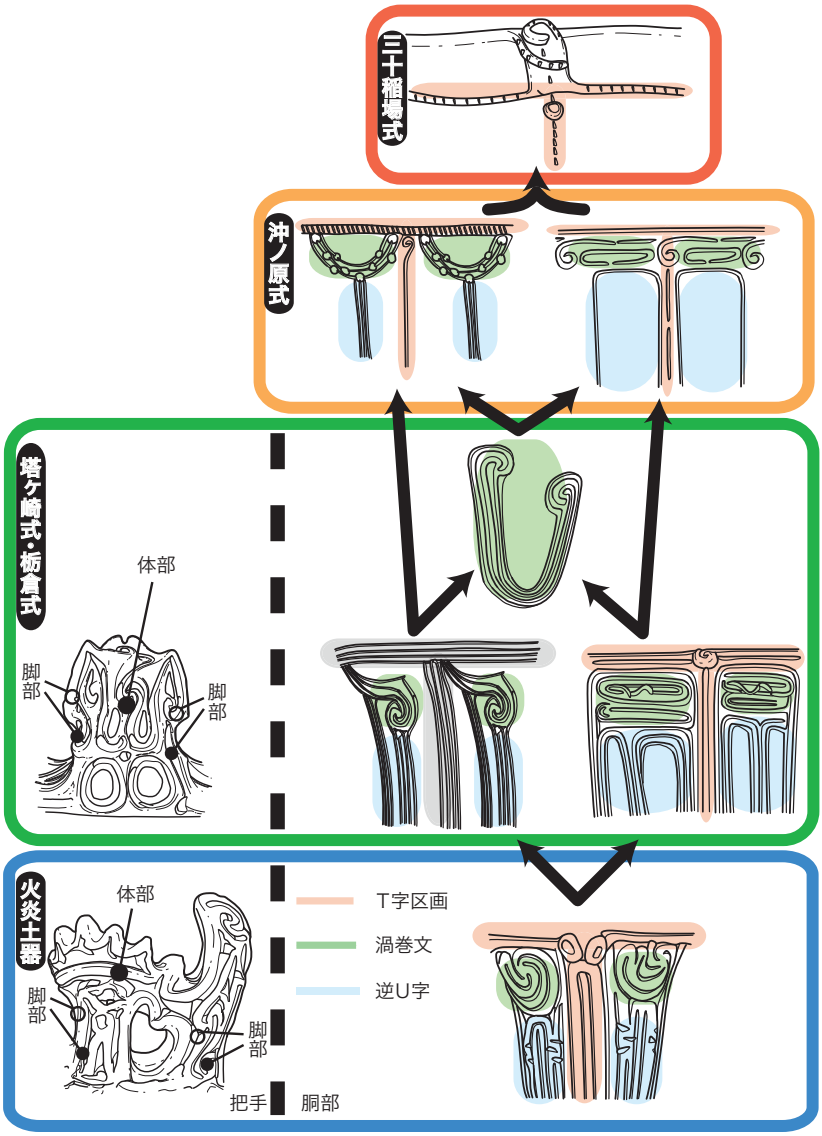
この終焉問題は、寺崎が提示したⅡ期新段階の再編成を呼び起こすものである。しかし寺崎は「ＡⅠ型式はこの段階には存在しない（小田 1991）、あるいは魚沼地方にはないといった見解（佐藤

2006）が示されているが、少なくとも信濃川中流域（寺崎 1982）や中道遺跡（長岡市教育委員会 1998）などの事例からうかがい知ることができる。魚沼地域において本段階に本様式を主張する A 群土器（小林達雄 2004）が存在しないことが事実ならば、様式内における地域差にとどまらず様式の存続にも及ぶ大きな問題である」と警鐘をならした（註 28）。

また近年宮内信雄は、小田・筆者が想定した大木８ｂ式並行期の火焔類型⇒栃倉式（栃倉Ⅱ式）の変遷を踏まえ、より具体的に「火炎土器群⇒幅上５期⇒栃倉Ⅱ式」の変遷案を提示した（註 29）。宮内によれば「幅上５期」は、火炎土器群が終焉している段階であり、さらに栃倉Ⅱ式が出現する前段階であるという。そして宮内は、火炎土器から三十稲場式までの文様の系譜を図示し説明した（第 115 図）。それらの下地には、筆者や石坂圭介が既に指摘している内容が含まれるが、研究史として触れられていないことは残念である（註 30）。

また、これら型式学的研究を背景に吉田邦夫による加速器質量分析法（AMS 法）による放射性年代測定が進められ、火焔類型土器は今から約 5,300 年から 4,800 年までの約 500 年間に使用されたという年代が示されたことは、重要な成果である（註 31）。

約 500 年間使用されたと推察される火焔類型土器は、寺崎により７段階変遷案が示されたが、現在２大別６細別段階変遷に訂正されている（註 32）。一方、小熊博史は２大別５細別段階変遷（註 33）を示した。また筆者は、火焔類型土器は「細分できるだけの明瞭な根拠がなく、変化が乏しい土器群という評価に至り、せいぜい新旧２段階あるいはその中間段階を含めて３段階程度の分類しかできない」と指摘した経緯がある（註 34）。



第 115 図　火炎土器から三十稲場式までの文様の系譜（宮内：2009）

C. 馬高系土器の編年的位置付け

馬高系土器には、火焔類型土器と王冠類型土器（第116図）がある。これらは「馬高式土器」を構成する象徴的な類型土器であり、その編年学的位置について考えてみたい。火焔類型土器と王冠類型土器は、変化に乏しい土器ではある。これらは寺崎によって６段階に分類されているが、単体資料または破片単体資料を万民が共通して分類するには限界がある。よって、共伴した大木類型土器などの細別根拠を元に編年学的に配列する手法が求められると発言した経緯がある。けれども、500年間使用され、作り続けられた象徴的な土器であることから、その馬高系土器の施文原理を考え、変化する方向性を探り、その変化を具体的な細分根拠として指摘することができるかを検討する必要性に迫られた。

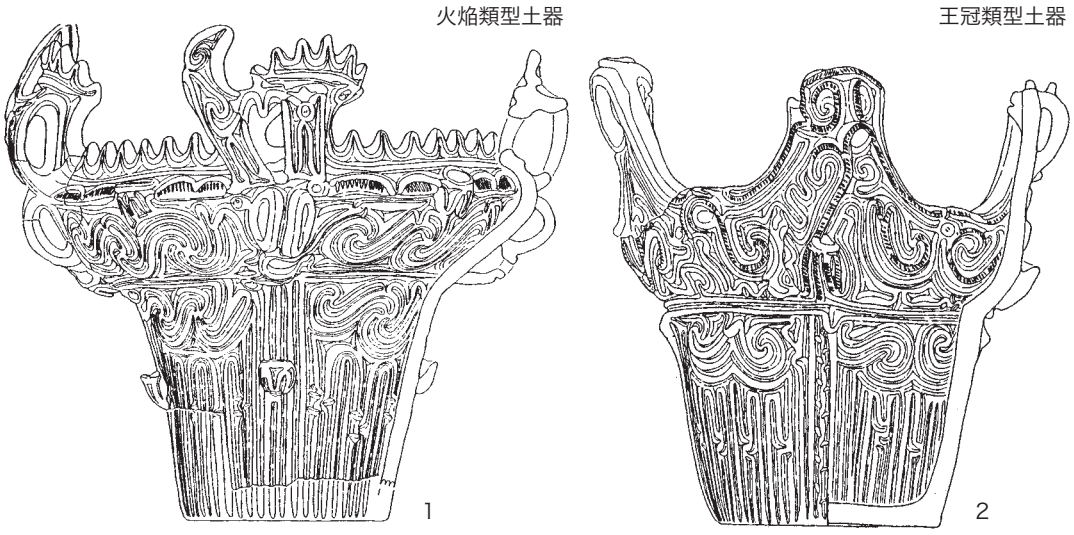
1　編年区分の指標

第117図は、凡そ２段階に変化する火焔類型土器の変遷モデルである。いままで多くの研究者が認める２段階変遷である。そこには共通性と変化の方向性を読み取ることができる。共通性は、口頸部が膨らみ、胴部が筒状を呈するキャリパー状深鉢形土器である。本来の平縁に鶏頭冠状把手が４単位配置され、その間に鋸歯状突起が貼付される。口縁部と頸部及び頸部と胴部の境界には、横位区画が施される。胴部は縦位区画が施されることにより、４単位の胴部パネルが生まれる。その胴部パネルは上部施文域と下部施文域に区分されるが、明瞭な区分線はない。胴部の下部施文域は、底部の立ち上がり端部まで施文域として使用される。

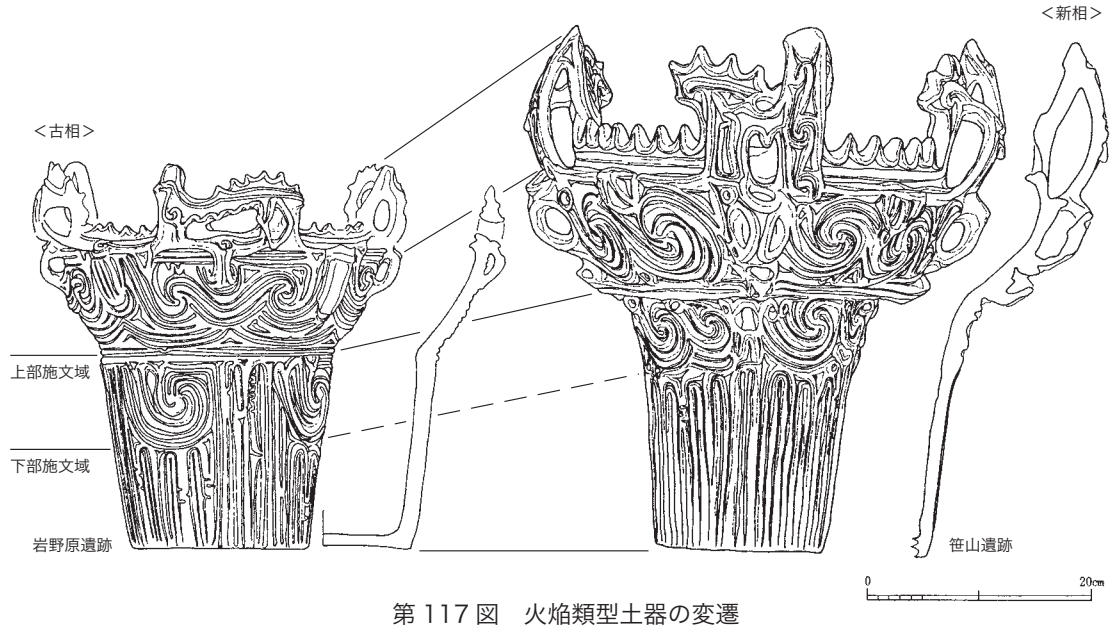
火焔類型土器の鶏頭冠状把手は横長から縦長へ変化し、その変化に伴い器高が間延びする。この変化の方向性は、多くの研究者が指摘し、定説化している点である。

問題は、この２段階大別の中を、どのような根拠で何段階に細分できるのかという点とその始まりと終わりの把握、そして、広域交差編年による同時性の提示が必要である。

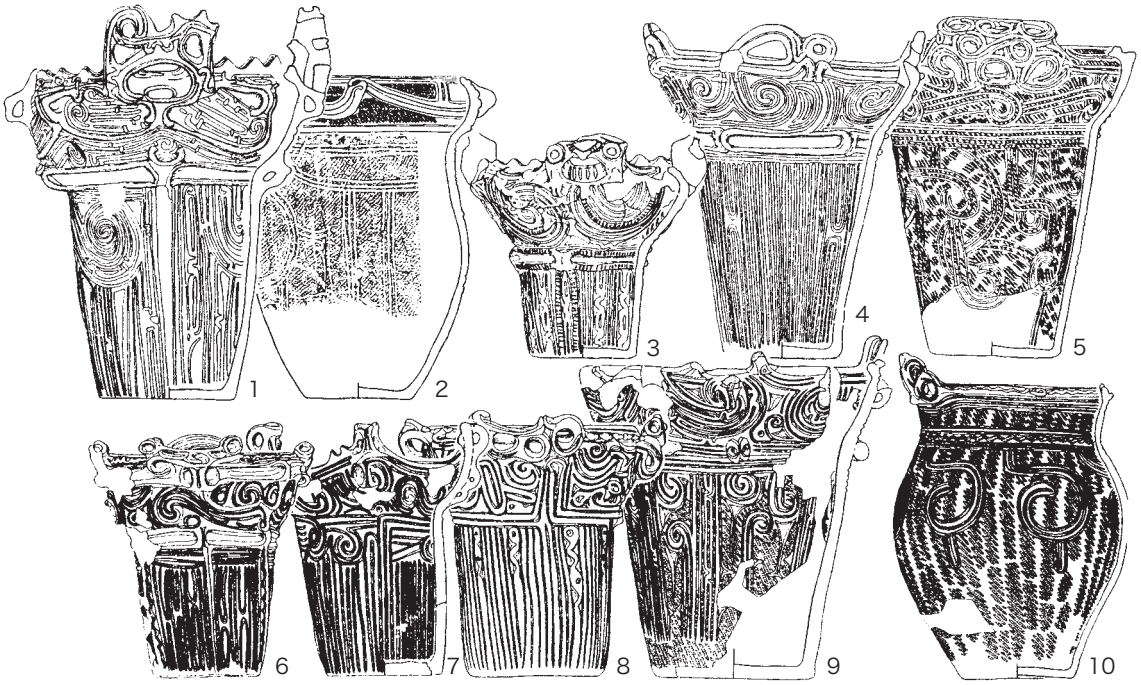
筆者は、研究史を踏まえつつ、大木７ｂ式並行期の土器群を概観した結果、三角形印刻文とそれらに関連する玉抱き三叉文の変化、そして頸部と胴部との境界区画や胴部区画に注目したい。



第116図　堂平遺跡出土の馬高系土器



第 117 図　火焔類型土器の変遷



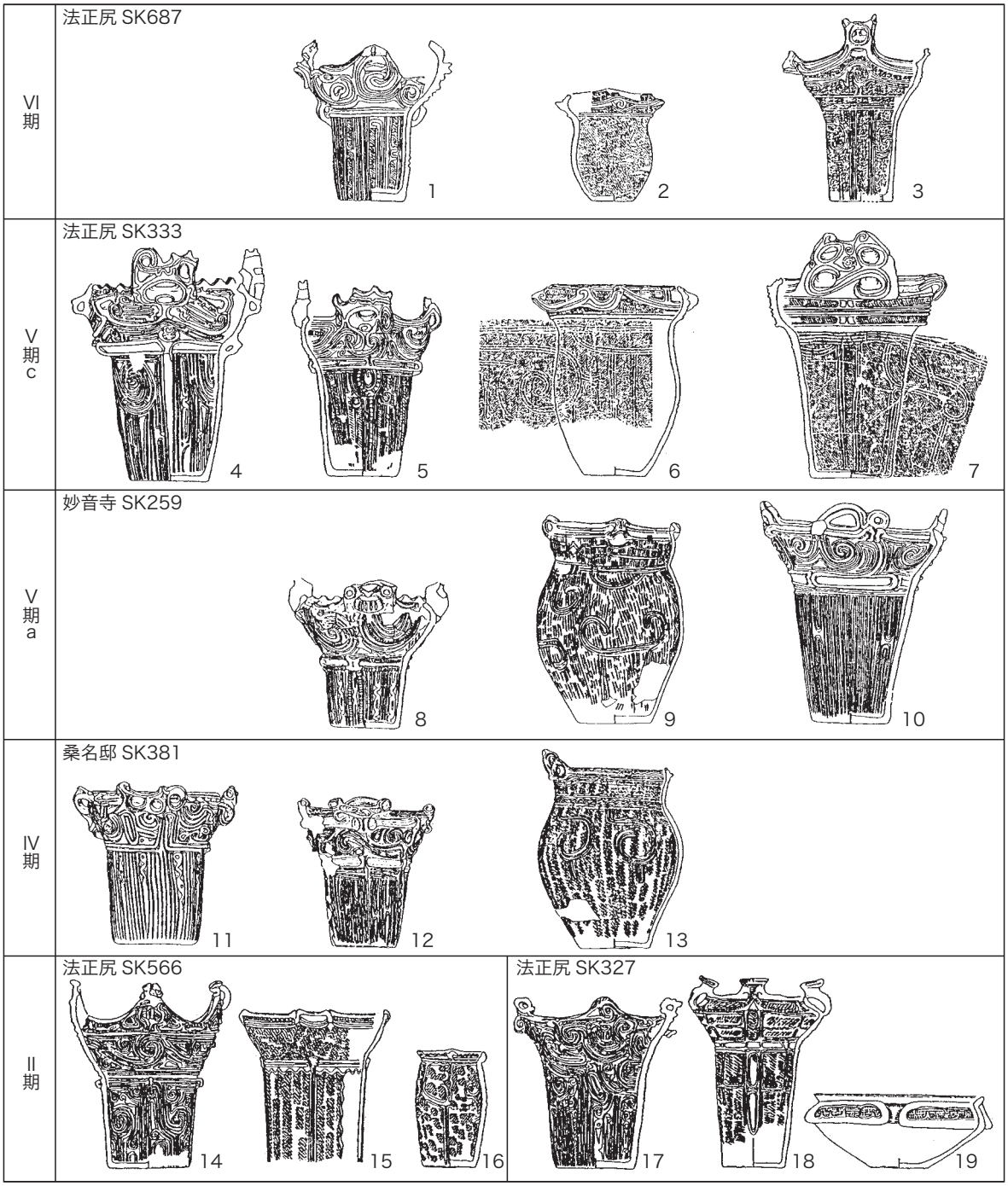
1・2．法正尻 SK333　3～5．妙音寺 SK259　6～10．桑名邸 SK381

第 118 図　福島県の類例

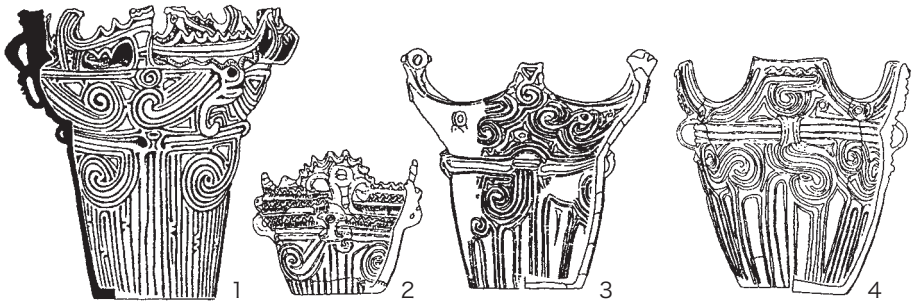
まずは、頸部と胴部の横位区画を取り上げる。前述の如くに火焔類型土器は、筒状の胴部形態を一貫する強い範型（註 35）が認められる。口頸部と胴部との境には横位区画が必ず配置される。いままで大方の研究者が、2 大別分類で古相に組み込んでいる資料群を概観するならば、頸部と胴部との横位区画（複数横位区画線あるいは無文横帯区画）が幅広い資料が散見される。この幅広い無文横帯区画は、鈴木素行（註 36）が「頸部橋状把手連結区画隆帯」と呼称して指摘するものであり、古くは中野が「横位区画文を跨ぐように橋状突起が配される」とした中野編年第 0 段階のメルクマークである（註 37）。

この「頸部橋状把手連結区画隆帯」は福島県の法正尻遺跡 SK333、妙音寺遺跡 SK259、桑名邸

SK381 などで、顕著に確認できる区画手法である（第 118 図）。この一連資料については、近年森幸彦（註 38）・中野幸大（註 39）によって、その変遷が考察されている。ここでは森の編年観に従い交差編年の軸を押さえたい（第 119 図）。森は、当該期資料を扱う中で、Ⅰ期〔大木７ｂ式後半段階（阿玉台Ⅰｂ式併行期）〕からⅥ期〔大木８ｂ式前半段階（加曽利ＥⅠ式中段階併行期）〕の６段階に区分して、その変遷と土器様相を説明した。その編年観の基軸は、遺構覆土一括出土資料を基本とし、共伴した阿玉台式土器や加曽利Ｅ式土器を用いた関東地方との交差編年を根拠としている。この森編年の特徴は、大木８ａ式の３段階区分を基本とする中で、大木８ａ式新段階がさらに３細分される６段階区分である。それらは、



第 119 図　福島県の大木８ａ式・８ｂ式段階の土器様相（森：1998 を改変）



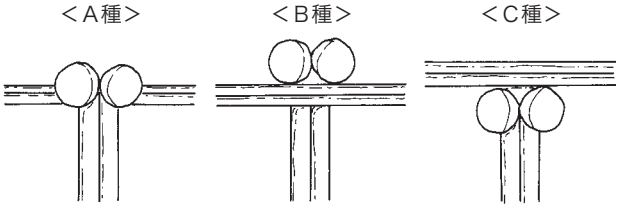
1．馬高　2・4．山下　3．清水上

第 120 図　新潟県内で確認される頸部橋状把手連結区画隆帯

＜ａ類＞：口縁部文様帯の文様表現が沈線主体のもの、＜ｂ類＞：口唇・口縁部文様帯の文様表現に隆沈線がみられるが、その両側を調整しないもの、＜ｃ類＞：口唇・口縁部文様帯の文様表現に、両側に沈線を沿わせた隆沈線がみられるもの、に分類され、ａ類⇒ｂ類⇒ｃ類へと文様表出技法が時間的推移するという考え方である。このように森が大木８ａ式土器の３段階６細分案を示しながら、中野幸大は２段階区分に留めた。この違いは、広域交差編年を組むに当たり注目される点である。

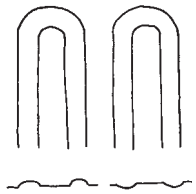
森が「馬高系土器」「火炎形土器」と表現している土器群は、Ⅱ期〔大木７ｂ式末～８ａ式過渡期（阿玉台Ⅱ式併行期）〕に対比される法正尻遺跡 SK566（第 119 図 14）で出土し、Ⅵ期〔大木８ｂ式前半段階（加曽利ＥⅠ式中段階併行期）〕に比定した法正尻遺跡 SK687（第 119 図１）まで確認されるという。その中で、鈴木が「頸部橋状把手連結区画隆帯」と表現した頸部と胴部の無文帯は、森編年Ⅱ期からⅤ－ｃ期まで継続する要素であり、少なくとも、大木８ａ式並行期全般に使用される区画手法と理解するべきである。

新潟県内の火焔類型土器群において頸部橋状把手連結区画隆帯は、確認できるが絶対量は少ない（第 120 図）。寺崎編年（2008）では、Ⅰ期中段階の王冠類型土器に認められるほか、Ⅰ期古段階に比定されている清水上遺跡第３号住居跡資料の大木８ａ式土器にも、類似の横位区画が認められる（第 106 図４）。筆者が概観するならば、ここで取り上げた頸部と胴部の横位区画は、幅広い横位区画から幅狭い横位区画へ変化する方向性がある。そして、この胴部横位区画に伴いトンボ眼鏡状突起が観察できる。このトンボ眼鏡状突起は横位区画に組み入れられる場合（Ａ種）と、その上位に貼付される場合（Ｂ種）、そして横位区画下位の縦位区画に貼り付けられる場合（Ｃ種）の３種が認められる（第 121 図）。中野は、自らが示した第０段階の橋状突起が、第１段階で双環状突起に変化し、第２段階で「横位区画文から分離したことによって再び大形化し、眼鏡状を呈するようになる。眼鏡状突起は（中略）横位区画文から独立して下位に配される」と説明し、その変遷の方向性を指摘している。しかしながら、現状では第 121 図に示すとおり、３種のトンボ眼鏡状突起（眼鏡状突起と同義語）の貼付事例があり、その詳細な時間的変遷は不詳である。しかし、中野変遷モデルを踏まえるならば、横位に組み込まれる事例をオリジンとし、その変化形として、横位区画から上位あるいは下位へ移動分離したと考えることもできる。

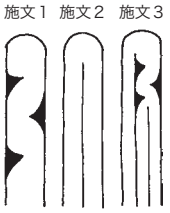


第 121 図　トンボ眼鏡状突起と胴部横位区画

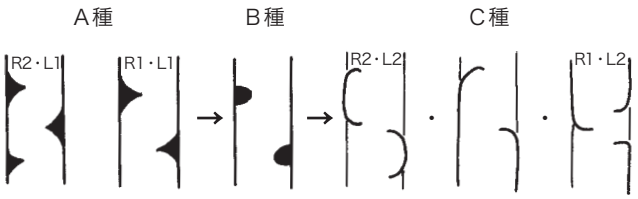
胴部区画は、縦位区画によって上位施文域と下位施文域に分離される。この比率に着眼した場合には、新潟平野北部に上位施文域が狭い



第 122 図
2種の逆Ｕ字状文



第 123 図　胴部下位
施文域の縦位パネル



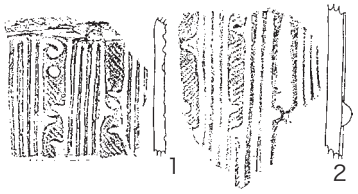
第 124 図　施文手法の変化

資料が多い傾向にある。この施文順位は、上位施文域の意匠文様が配された後、その残りの空間充填として縦位指向の文様が下位施文域に埋め込まれる。この縦位指向の文様は、逆Ｕ字状縦位文が基本である。この逆Ｕ字状縦位文は、半截工具の内皮接地のよるポジ文様とａ２手法（註 40）によるネガ文様に大別される（第 122 図）。また、ネガ表現による逆Ｕ字状縦位文で生まれるポジ面の縦位パネルの処理が重要と考える。この縦位パネルに沿うネガ面から棘状の刻みを入れる施文１と、縦位パネルを沈線で二分する施文２、施文１と施文２が融合する施文３に分類される（第 123 図）。また、施文１は併走する幅狭いネガ面間に入れる事例が多い。施文１は、三角印刻文（Ａ種）⇒棒状工具による棘状沈線・棘状突刺（Ｂ種）⇒棒状工具による横Ｕ状沈線（Ｃ種）の施文手法の違いがある（第 124 図）。これら縦位パネル文の源流には、西会津系土器群に認められる玉抱き三叉文を主体とした意匠パネル文（第 125 図）があり、その系譜上に位置すると理解したい。また、これらは福島県で確認される火焔類型土器亜種などに多く認められるものであり（第 119 図１・５・８・12）、森編年Ⅱ・Ⅳ～Ⅵ期にあたることから使用継続時間幅が広いようである。しかし、この傾向は、新潟県内に当て嵌まるものではなく、新潟県内ではより古相土器群にのみ認められる要素であり、段階的に施文手法の形骸化に伴い変化したと推察する。これらは古相⇒新相へと縦位パネルの形骸化に伴い変化したと推測したい。

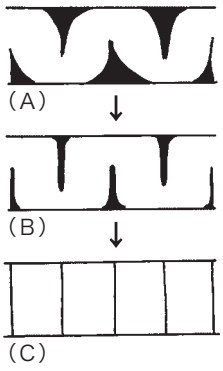
次に、袋状突起を取り上げる。この袋状突起の外壁を飾る文様に着眼したい。それは、上下交互の細長い三角印刻文よるネガ文様（Ａ）、棒状工具による上下交互の縦位沈線によるネガ文様（Ｂ）、上下交互の施文が崩れ縦位沈線による短冊状沈線文（Ｃ）の３種がある（第 126 図）。また、中野編年第３段階における眼鏡状突起の形骸化を指す「横位区画文と融合してＷ字状にその痕跡を残す」という指摘が注目される（註 41）。この「Ｗ字状」の文様を、眼鏡状突起が形骸化した（第 127 図３）と理解する考え方も一案であるが、筆者は袋状突起の形骸化あるいは袋状突起の置換現象である可能性を考えた。どちらにしてもオリジンの形があり、時間の経過を背景に変化したと理解することができる。

また、袋状突起の形態も興味深い（第 127 図）。袋状突起を真上から観察した場合、Ｄ字状の器面付される場合（１種）とＣ字状の一部が開放する状態で付される場合（２種）の２種がある。さらには、それらが形骸化して器面に文様化（３種）する場合もある。少なくとも、袋状突起⇒文様化の変化はあると判断したい。しかし、それらは変化の方向性であり、突起と文様化は同時併存していたと考える。

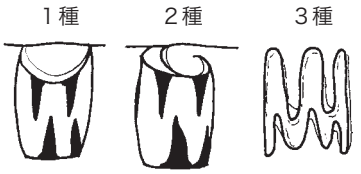
上記で指摘した袋状突起と胴部パネル文について概観したい。長岡市馬高遺跡例を第 128 図に示した。１の袋状突起はネガ文様（Ｂ）であり、胴部の施文手法は定かでないが、明瞭な鋸歯状文（R2+L1 の３点構成）を配する縦位パネル文が認められる。２の袋状突起はネガ文様（Ｃ）であり、胴部の縦位パネル文様は１の鋸歯状文に比べると施文がだらけ、波状文に変化している。この両者で観察できる変化は、古相（１）



第 125 図　西会津地方
石生前遺跡出土土器



第 126 図　袋状突起の変化モデル



第 127 図　袋状突起とW字状文様

から新相（2）に伴う要素変化と理解したい。

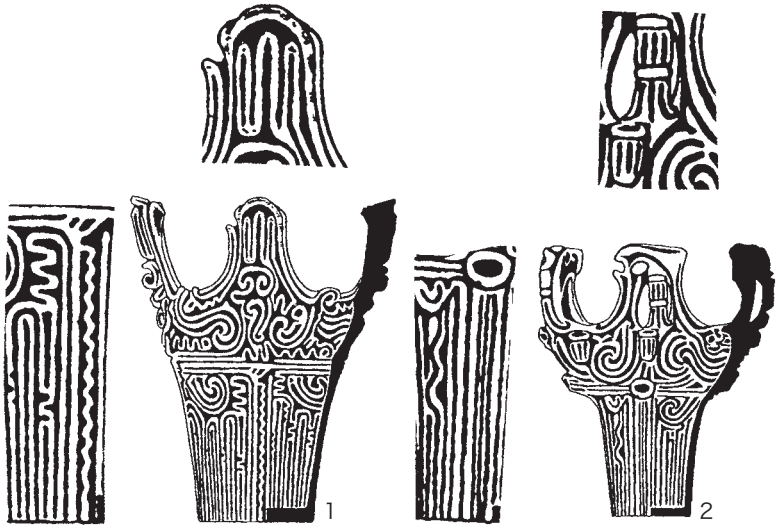
第 129 図は十日町市笹山遺跡例である。1～3の袋状突起を概観したい。1は小形袋状突起であり、三叉状というより正三角に近いネガ文様が上下交互に配される。その施文手法は三角印刻手法である。ネガ文様（A）に分類されるものである。2はネガ文様（B）による袋状突起であり、縦位パネル文にはやや崩れた鋸歯状文が観察できる。3はネガ文様（B）に分類される袋状突起であるが、その上位が環状ではなく、一端が解放する横C字状を呈する形態（2種）である（第 127 図）。胴部の縦位パネル文は、円形文と細長い三叉文で構成される玉抱き三叉文の変容文様である。この玉抱き三叉文系文様と横U字状袋状突起の併存は注目したい。

第 130 図は津南町道尻手遺跡例である。1は袋状突起が貼付文に変化しているものであり、＜ネガ文様（B）＋環状貼付文＞の構成であり、胴部縦位パネル文（R2+L1 の3点構成）はやや緩い鋸歯状文である。その施文は手法 C である。2はネガ文様（B）による袋状突起であり、細いポジ面は横位のキザミが施されている。胴部文様は円文・三叉文そして、鋸歯状文（R2+L1 の3点構成）であり、その手法は1と同様である。4はネガ文様（C）による袋状突起である。その貼付軸はやや斜めの円柱状である。上下を横位線で切る特徴は、馬高遺跡（第 128 図 2）でも認められる手法であり注目される。胴部破片が少ないことから胴部縦位パネル文は不明である。4はネガ文様（C）による袋状突起である。胴部縦位パネル文には鋸歯状文（R2+L1 の3点構成）が観察できる。

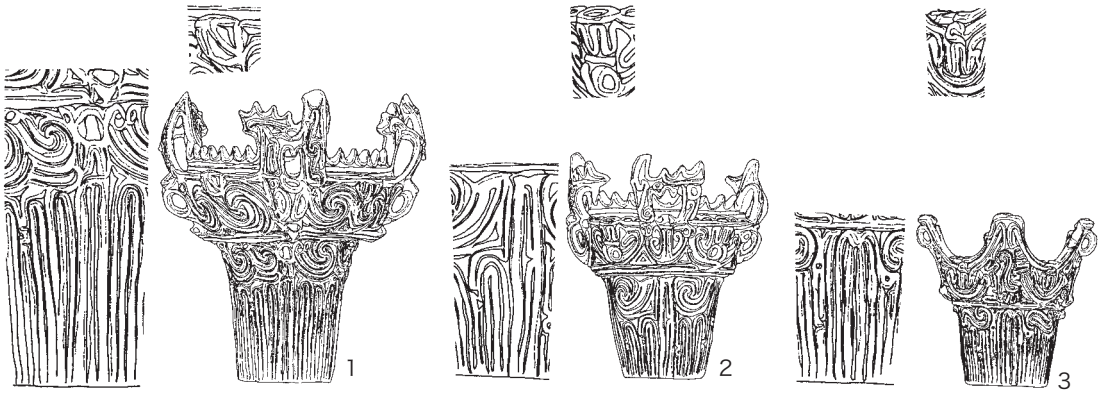
第 131 図は清水上遺跡出土の王冠類型土器である（第 131 図）。四単位波状口縁を呈し、その頂上部は狭く半転 J 字状文が貼付される。胴部区画は、頸部橋状把手連結区画隆帯を配する。その橋状部と連結する胴部区画線と意匠 J 字状文が下垂する。本資料の特徴は、胴部下位施文域幅が不安定であり、幅広い縦位パネルを沈線で描き、そのパネル内の一部に縦位の三角印刻文が観察される程度で基本的に無文である。

第 132 図は定点2として位置付けた原遺跡 004T－P4 から出土した火焔類型土器である。胴部の縦位パネル処理は、三角印刻では無く、棒状工具の一筆描きで、第 124 図C種で示した手法である。また、典型的な鋸歯状文は R1+L2 の構成を示す。袋状突起は、第 127 図で示した1種でポジ面が強調され、そこにキザミが施されている。

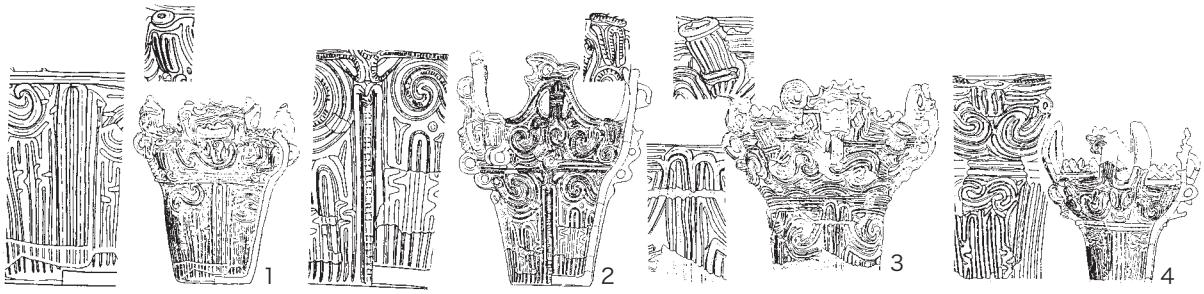
以上のように、袋状突起と胴部縦位パネル文の相関を概観したが、明瞭な時間差を把握することは現状では困難である。これらの違いは、個体差の限界幅に収まる可能性が指摘される。しかしながら、笹山遺跡事例1はネガ文様（A）と胴部縦位パネル文の鋸歯状文（R1+L2 の3点構成）であり、口縁部に配



第 128 図　馬高遺跡出土の王冠類型土器

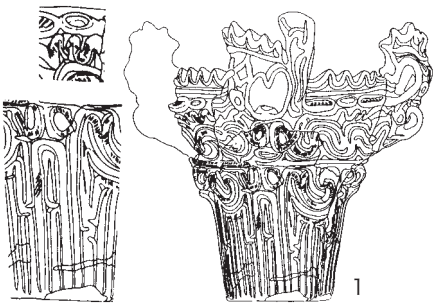


第 129 図　笹山遺跡出土の火焔類型・王冠類型土器



第 130 図　道尻手遺跡出土の火焔類型・王冠類型土器

第 131 図　清水上遺跡出土の王冠類型土器



第 132 図　原遺跡出土の火焔類型土器

される楕円状文が無いという特徴が注目される。また、同じ笹山遺跡事例３の胴部縦位パネル文の玉抱き三叉文系＋鋸歯状文（R1 の１点構成）に伴う横Ｕ字状の一端開放型の袋状突起が付く構成であり、これも注意する必要がある。さらに、道尻手遺跡で確認される袋状突起の貼付文変化事例（1）、鋸歯状文（R2+L2 の３点構成）の施文手法ネガ文様（B）とＣ種の存在がある。これらを、今後数量保障を背景に慎重に検討する必要がある。これらの違いは型式変化をより具体的に把握する第一歩になる可能性があり、その検討を課題としたい。

筆者による文様形骸化推測モデル（第 121・122・124・127 図）と遠藤の隆起線文施文のａ１手法からａ２手法へ変遷観、中野による胴部区画モデルを関連させて、変遷段階を追うことができるであろうか。

２　馬高系土器の特徴

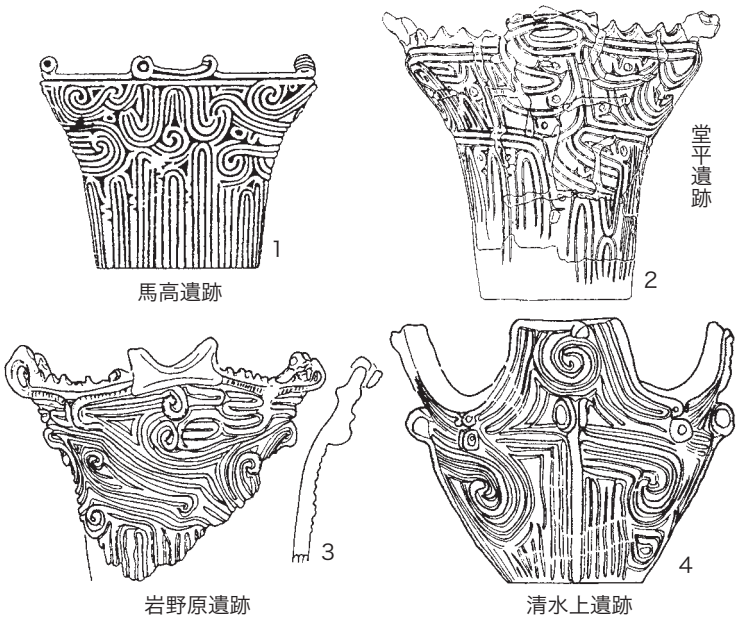
＜火焔類型土器の型式学的特徴＞

火焔類型土器の基本的変遷については、小林達雄（註 42）・金子拓男（註 43）、そして寺崎祐助（註 44）によって、その骨子が固められ、大きな変更は無いと思われる。しかしながら、その消長問題と段階区分根拠について、慎重で丁寧な議論が必要とされる。

寺崎が近年とりまとめた馬高系土器の型式学的特徴はほぼ網羅された感が強い。しかしながら、筆者としては譲れない一線がある。それは火焔類型土器の基本的認定である。火焔類型土器とは、深鉢形土器と鉢形土器があり、稀に浅鉢形土器がある。注口土器も指摘されているが鉢形土器に注口部が付されるものであり、その型式学的検討が必要である（註 45）。

その基本に深鉢形土器と鉢形土器があり、少なくとも頸部と胴部の境界区画を持ち、胴部は縦位区画が施される。すなわち基本的には「T 字状」の区画が明瞭である（第 116・117 図）。範型が固まっていない古相は、時として胴部の縦位区画にやや歪な部分がある。しかし、頸部と胴部の区画は明瞭である。

このような器形と文様区画の関係を重視する立場から、寺崎や小熊が火焔類型土器の類として認識している資料群（第 133 図）を、筆者は火焔類型土器の範疇に組み込まない。これらは、広義な曲隆起線文系土器（註 46）の範疇で括れるものであり、狭義には北陸地方の上山田・天神山土器様式が火焔類型土器との相互干渉を背景に生まれた亜種や未命名の類型土器と理解したい。



第 133 図　横位胴部区画を持たない一群

火焔類型土器の器形的特徴は平口縁のキャリパー状深鉢形土器である。それらを概観した結果、器形分類として２種に分けられる。Ａ種は火焔土器がモデルである。平口縁に鶏頭冠状把手や鋸歯状突起のデコ

レーションを付す。B種は平口縁に袋状突起を４単位付す（註 47)。

これらの変遷のうち、その起源は、現状の共伴資料から推察するならば福島県西会津地方により古相の火焔類型土器群が確かにあり、編年的に位置付ける必要がある。しかし、新潟県内に同時期、すなわち大木７ｂ式新段階併行期の土器群に祖形を探求する必要性がある。その探求から想定されるモデルが、寺崎や小熊が指摘する区画構成が崩れている土器群なのであろう。けれども、筆者は異なる視点で祖形を模索しているが、現状では系譜的な変遷が説明できない。

また、型式学的終焉は大木８ｂ式併行期に位置付けすることは、誰もが異論はないと考える。しかし、その大木８ｂ式の時間幅の中における終焉の位置に関しては、考え方に違いがある。筆者は、現状において定点３とした森上遺跡第１号住居跡資料は、加曽利Ｅ式土器に対比するならば加曽利ＥⅡ式古段階に対比されるものと判断する。そして、筆者がかつて問題とした原遺跡第 11 号住居跡資料は加曽利ＥⅡ式新段階に対比されると理解する。これらを大木８ｂ式（３段階区分）に対比するならば森上遺跡第１号住居跡は、中段階に対比される（註 48)。原遺跡 11 号住居跡は、大木８ｂ式新段階に比定される。近年、宮内信雄は「火炎土器から三十稲場式まで文様の系譜」をモデル化して発表し、それと前後する中で『幅上遺跡発掘報告書』でも関連する重要な論点をつまびらかにした（註 49)。宮内は、森上遺跡第１号住居跡資料を取り上げ、「火炎土器群」との共伴を認めている。そして、幅上 SK11・SI1 にかけての間に「火炎土器群」は終焉し、「火炎土器群と栃倉Ⅱ式は入れ替わって消長したようである」と結論付けた。宮内は、これら土器群の変遷案を広域交差しておらず、他型式との関係は不明瞭であるが「大木８ｂ式期には少なくとも３時期区分ができる可能性が示唆される」との発言から推測するならば、（森上遺跡１号住居跡＝大木８ｂ式古段階）【馬高系土器の終焉】⇒（幅上遺跡 SI1　＝大木８ｂ式中段階）⇒　（塔ケ峰式･栃倉Ⅱ式）⇒（沖ノ原式＝大木９・10 式）と理解していると推察できる。よって筆者と宮内との編年観は同じである。両者ともに大木８ｂ式の新相段階まで火焔類型土器は残らないと考えている。筆者の考え方の背景には、大木式土器と加曽利Ｅ式とが連動する変化を重視する点にある。それは口縁部文様帯幅の縮小化と、頸部無文幅の拡大化と狭小化であり、渦巻文の小形化と突出化である。また、馬高系土器の終焉という表現はするものの、文様区画や文様の系統的変化は予察であるが、それなりに継続することが判明している。この点に関しては、あらためて筆を起す所存である。

＜王冠類型土器の型式学的特徴＞

王冠類型土器の研究は、石川日出志（註 50)・品田高志（註 51)、そして小熊博史（註 52）が取り組んできており、多くを学んだ。

石川は王冠類型土器の変遷を考察し、その上限資料を山下遺跡に求め、下限資料は「大木８ａ式土器の細分案の動向を見つめながら十分な検討を加える必要がある」と指摘し、その下限が大木８ｂ式まで下らないことを強調した。

品田は、小薬一夫が王冠類型土器について「大略２タイプ」あることを指摘していることを評価し、「王冠型土器とされる土器にバラエティー」があるとして形態分類を試み、その分布と編年学的位置を検討した。形態分類は５形態 11 細分を提示し、その初現期を大木７ｂ式期末に求め、事例として山下遺跡出土土器を挙げた。その下限は大木８ｂ式古相に対比し、事例に川内遺跡を取り上げた。変遷に伴い形態

が「ＡⅠ・Ⅱ類からＡⅢ類を過渡期とし、ＡⅣ・ＡⅤ類へと変化したものと予想される」とした。そして、「ＡⅠ・ＡⅡ類が主に分布する地域、ＡⅣ・ＡⅤ類が主に分布する地域、そしてＡⅠ～ＡⅤ類の全てが分布する地域とに区分される」という注目される検討成果を披露している。

小熊は、王冠類型土器をＡ種～Ｄ種の４形態に分類し、古段階にはＡ種からＢ種に変遷し、新段階に定型化したＣ種が成立し、終末にＤ種を位置付けた（第 107 図）。その編年的位置については「総体として東北地方南部の大木８ａ式を中心とした時期が位置づけられようが、大木７ｂ式段階に遡るものや大木８ｂ式段階に相当するものも含まれる」と指摘した。王冠類型土器は、４単位波状口縁を呈するキャリパー状深鉢形土器がある（第 116 図２）。この名称にもなった４単位の短冊状の把手は、まさに王冠を形容する容姿である。この短冊状把手に注目するならば、その形態差を読み解くことが可能である。

ここに堂平遺跡に近接した道尻手遺跡で出土した王冠類型土器を提示した（第 134 図）。一括りされている王冠類型土器を概観するならば、いくつかの種に分類される。短冊状把手の表裏に文様を配するＡ種、短冊状把手の頭部に文様を持ち、表裏にも文様を持つＢ種、短冊状杷手の表面のみに文様を持ち、左右に角状の突出部位を表出するＣ種に分類される。

Ａ種（第 134 図１～４）

基本的に貫通孔を有し、裏面には貫通した円文を中心に三角印刻文が施される特徴がある。頭部は、無文の場合と細長い三角印刻文が形骸化した沈線が一条施される場合がある。特徴的な抉りは基本であるが、その抉り部は、１⇒２・３⇒４への弛みが認められる。これらは変化の方向性を示していると考える。今までの研究史を踏まえるならば、抉りの弛む４が古く、抉りが明瞭な１が新しいとされている。通常の変化はダラケ・たるみ・手抜きへの方向性があり逆である。

同種に分類される１と２を比較した場合、決定的な違いは、１隆起線へのキザミの有無、２胴部下位施文域の縦位区画内の処理、である。上記における議論を踏まえるならば、古相は１であり、２は新相といえるであろう。特に、個々で強調したいことは、新相の胴部が縦位線化していることである。

Ｂ種（第 134 図５～ 15）

概説書や基本文献で扱われる典型的な王冠類型土器は、この種である。頭部には、円文（５・６）、渦巻文（14）、剣先文（12・13・15）が施される。ここで注目される文様が 15 の剣先文である。この文様の発生は、様々な形成プロセスが想定されるが、玉抱き三叉文が古く、剣先文が新しいと理解する。細長い玉抱き三叉文を短冊状把手の狭い頭部に押し込めることで、実態として円文化する。意匠としての玉抱き三叉文の左右の三叉部分が連結し、玉部が巴ネガ面に変化すると推測したい（第 135 図）。Ｂ種もＡ種同様に、抉りの変化を追うことができる。円文（５・６）⇒剣先文（12・13・15）へと抉りが鈍化する。それに伴い環状突起が消失する（５・６）。また、袋状突起の形骸化も確認される（３⇒ 12 ～ 14）。袋状突起の形骸化を示す資料には、３のポジ面を強調した（Ａ）種、（Ｂ）種の 12・13 や（Ｃ種）の短冊状沈線文による 14 がある。この特徴は（Ａ）種から（Ｂ種）、そして（Ｃ）種へと変化したと推測されるが、この相関関係について今後数量保障を持って再検討する必要性がある。

Ｃ種（第 134 図 16 ～ 18）

本種は、道尻手遺跡のみで確認され、現状では類例が確認されていない。短冊状把手の額部が弓状に

第 134 図　道尻手遺跡出土の王冠類型土器

反り、その左右端部に角状の鰭が付される特徴がある。また、向き合うトンボ眼鏡状突起（5）が一体化することで環状突起（16・17）が生成したと考えられる。向き合うトンボ眼鏡状突起の間はおのずと緩いＴ字状の凹部となる。16 ～ 18 は、環状突起を無文化せずに、細い鋭角なＴ字状沈線を施すが、これは向き合うトンボ眼鏡状突起からの変容の系諸にある証左である。

第 135 図　玉抱き三叉文と剣先文の変化

16 の胴部を注目したい。上部施文域と下部施文域との比率が村上市高平遺跡事例などに近似し、阿賀北グループとの関係が示唆される。ここでは下部施文域の長広化に伴い縦位逆Ｕ字状文の線状化現象が認められる。より新しい傾向と理解し、小熊が指摘した岩野原遺跡２類Ｄ種の特徴に類似する（註 53)。

３　堂平遺跡出土の馬高系土器

ここで問題とする堂平遺跡出土の火焔類型土器と王冠類型土器（第 116 図）の編年的位置を考察したい。第 116 図１の火焔類型土器は幸運にも遺物集中分布域内に潰れる状態で発見された。そのまとまりを出土層位と接合関係（垂直・平面）で検討するならば、ある考古時間幅を共有する廃棄単位と理解したい。一方、第 116 図２の王冠類型土器は、不運にも時間的制約の中で進められてきた調査において、詳細な記録が残されていない。筆者の記憶では、径 30cm 程度の柱穴に倒立あるいは斜位の状態で出土した。共伴土器はない。

このように両者の出土記録に大きな違いがあり、同様な検討はできない。まず、火焔類型土器は、出土土器と共に検討する方法を取り、王冠類型土器は、個体の型式特徴から検討する方法を採用する。

＜火焔類型土器の検討＞（第 116 図１）

本資料は、発掘段階では 14 号住居跡として認識して掘り下げた遺物集中分布域から多くの土器群と共に出土した（第 136 図：図版第 373 図)。これら一群を検討するならば、同一堆積層、レベル差のほとんど無い出土状況を示す。

本資料（図版第 373 図 3537a.b）の特徴的な鶏頭冠状把手は、時計の反対周りを示す４単位構成である。その鶏頭冠状把手間に施される鋸歯状突起は（8＋ 6＋ 7＋ 8）の構成である。口縁部には袋状突起を挟み、左右に楕円状区画文が配される【（2＋袋＋ 2）＋（2＋袋＋ 2）＋（2＋袋＋ 2）＋（3＋袋＋ 2)】の構成である。鶏頭冠状把手の下にトンボ眼鏡状突起が付き、その下には斜め横位に開く筒状貼付文が施される。３本に縦位下垂隆起線が胴部を縦区画する。両脇に沈線が併走するために４本の沈線が観察できる。縦区画隆起線の中央部上に袋状突起が貼付され、胴部に４単位確認できる（註 54)。縦位隆起線は一部、H 状に連結する。胴部袋状突起は、口縁部袋状突起と同様に（A）種に分類される。胴部上位施文域は【(半転 C+S+S+J）＋（半欠 S+S+J）＋（S+J）＋（S+S+J)】の意匠文構成である（註 55)。下位胴部施文域は逆Ｕ字パネルを基本的に連結して埋め込んでいる。その構成は【(A ＋ A）＋（B ＋ A ＋ B）＋（A ＋ A）＋（A ＋ A ＋ A ＋ A)】（A ＝幅広・B ＝幅狭）である。逆Ｕ字パネル（逆Ｕ字巾割沈線）間に棘状施文Ｂ種が R2+Ll の構成で施されている。

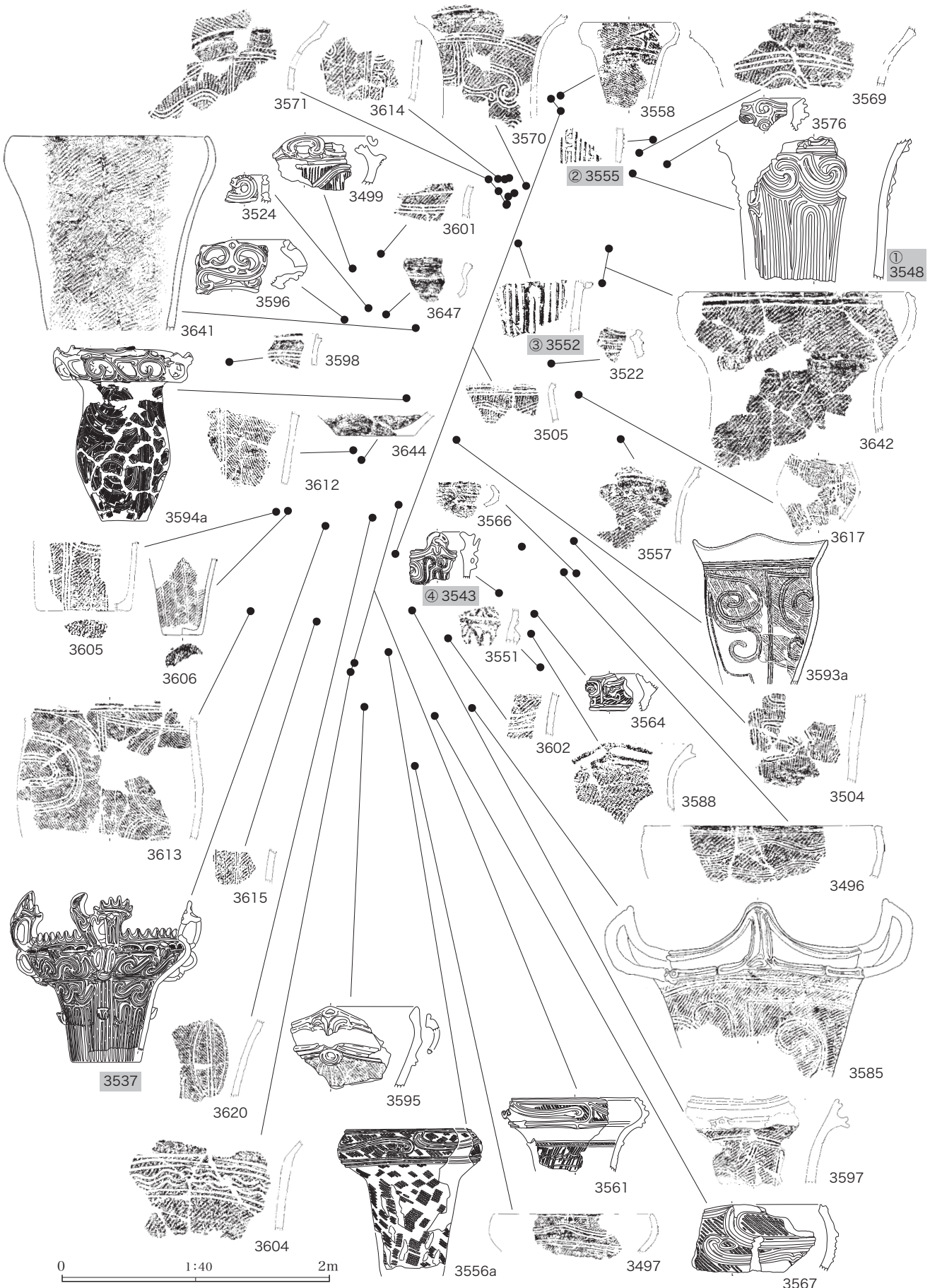
本資料（第 136 図 3537）に近接して出土した資料群の平面分布を第 136 図に掲載した。その垂直分布

は約 15 ｃｍの上下関係を保ち出土し、層位としては同一層の出土である。その全体を概観するならば大木８ａ式新相段階～８ｂ式古相段階の資料が混在している。これら一群から馬高系土器（破片であることから類型判別が難しい）を４点抽出して観察したい。①（3548）は胴部資料である。上位施文域は（半転J＋半転J)の文様モチーフであり、基隆線＋左右隆線１条の構成を２ａ手法で表現している。下位施文域は、逆Ｕ字パネルをはめ込み、左に縦位線文（ポジ文)、右に縦位三叉文（ネガ文）を充填し、鋸歯文の採用は無い。胴部パネル文全体の様相は、新しい傾向が指摘される。それらを区画する胴部縦位区画は２本の基隆線でＵ字＋逆Ｕ字を連結することでＨ状になる。その連結部は膨らむ。連結部表面は横位の三叉連結によるＨ状文（ネガ文）と理解することもできる。②（3555）は胴部資料である。縦位線文と縦位鋸歯文で構成される。縦位線文は間隔を開けて左右に２本を下垂させ、その凹線部分を再度、半截工具背面片側を当て引く２ｂ手法が採用されている。鋸歯文はＢ種のＲ1 ＋ L2 の構成である。③（3552）は胴部資料であり、①に近似する。胴部縦位区画は、Ｕ字＋逆Ｕ字連結によるＨ状を呈すると推測される。逆Ｕ字は高い基隆線で描き、その左右凹線部分を半截工具背面でナデ直す２ａ手法で行われている。区画線以外の縦位線文は２ｂ手法が採用されており、区画線と胴部パネルでの手法の使い分けが観察できる。④（3543）は小形山形状把手を有する王冠類型の亜種と理解する。捻転玉抱き三叉文が山形頂部に付され、袋状突起と連結する。袋状突起は片側が開放する２種に分類される。トンボ眼鏡状突起から伸びる隆線が主文様となる渦巻文を描く。この基隆線には細かな刻み目が部分的に観察できる。

以上のような多様な馬高系土器が、第 136 図が示すとおり大木８ａ式新相段階～８ｂ式古相段階に対比される資料と混在して出土しており、やや時間幅のある一群と理解したい。したがって馬高系土器の表出手法の多様さは、時間差を推定する鍵になると推測できる。すなわち、これら一群は、大木８ｂ式期よりも大木８ａ式期に対比されるべき特徴を有している。また、本資料と①を比べた場合、重要な点は胴部にある。１．本資料の縦位区画に付される袋状突起は、そのものを貼付する手法でありオリジン的な要素と理解したい。しかし、１は２本の基隆線によるU+ 逆Ｕの構成によるＨ接点部位に袋状の膨らみ部が表現されるが、孔部は貫通している。少ない資料からの判断は難しいが叩き台としては、Ａ）Ｈ状接点に袋状突起が貼付された、Ｂ）Ｈ状接点が形骸化して袋状に膨らみ袋状突起化した、とする２案が想定される。このＵ字＋逆Ｕ字の構成によるＨ状接点は、沖ノ原式を構成する一群にＵ字＋逆Ｕ字構成の胴部縦位区画があり、系譜的変化を推測している（註 56)。２．胴部下位施文域の縦位線化と鋸歯状文の減少化が共通することである。

この２点の特徴から、他の馬高系土器と分離し、あえて叩き台として本資料と①を大木８ｂ式古相段階に位置付けたい。大木８ｂ式期をどのように細分するかが、さらなる問題である。寺崎は、標識資料である森上遺跡１号住居跡を位置付ける場合、大木８ｂ式を前半期と後半期に分け、その前半期の新相段階に位置付けていることから２大別４細分の変遷観があると判断できる。よって筆者は、大木８ｂ式前半期の古相と新相の区分が明瞭でないことから、ここでは大木８ｂ式前半期に対比する。

しかし、袋状突起から袋状膨らみ部への変化、簡素逆Ｕ字構成から縦位線構成への変化を考慮するならば、型式学的には本資料⇒１へと変化すると考える。一方、キャリパー状深鉢形土器の頸部無文化現象をホライゾン（註 57）とした場合、森上遺跡１号住居跡を大木８ｂ式前半期新相段階に配置し、それ



第 136 図　H 2 ・ 3 区遺物集中区

を定点とした場合、共伴した大木式土器から頸部無文化現象を顕著に認められないこと、さらに未調整隆起線文様（註 58）を含むことから大木８ｂ式前半期古相段階に対比し、森上遺跡１号住居跡資料と分離する考え方もあるが、これらについては今後慎重に検討したい。

本資料は、一括性が高いと認識した廃棄ブロックから検出された（第 136 図）が、全体の検討からやや時間幅を有するまとまりからの出土と再認識される。共伴資料の特徴から大木８ｂ式を３段階に区分した場合の古相に位置付けられる。すなわち、本資料は、定点３とした森上遺跡１号住居跡資料に凡そ対比されると判断した。また、笹山遺跡資料（第 129 図１）と森上遺跡資料との比較では、胴部上位施文域の狭小化や縦位沈線化の類似性と楕円文有無の違いが指摘できるが、考古時間の棚分けでは同時期に分類することが望まれる。

＜王冠類型土器の検討＞（第 116 図 2）

本資料（図版第 392 図 3779 ａ．ｂ）は柱穴から倒立してほぼ完全な状態で出土したが、共伴資料については不明である。本資料を特徴付ける短冊状把手はＢ種に分類される。頂部は円文と剣先文を配置する。剣先文は円文＋三叉文から発生した可能性を推定している（第 135 図）。古い要素が認められる。抉り部は左上に付き、その抉りはやや浅い。表面上部にはトンボ眼鏡状突起が配され、その縁に刻みを施す隆起線が巡る。その刻み隆起線と連結する刻み隆起線はＳ字を間延びさせた緩い縦位曲線で下垂し、袋状突起と接する。袋状突起は頸部下位に位置し、胴部区画線の上位、胴部縦位区画のライン上に配されている。胴部上位施文域は【（Ｓ）＋（Ｊ＋半転Ｊ）＋（Ｓ＋Ｊ）＋（Ｊ）】の意匠文様が配されている。胴部下位施文域は幅狭い連結縦位パネルが埋め込まれ、施文手法Ｃ種による刺状文がR1+L1 あるいはR1+L2 の構成が観察できる。L2 は特徴的で同一方向に棘が出ることから鋸歯状モチーフが崩れることを意味している。胴部縦位区画は交互刺突（施文手法Ｂ種）による鋸歯状縦位区画文であり、類例は馬高遺跡（註 59）にある。同一器面に施文手法Ｂ種とＣ種が併存している。

本資料は、短冊状把手Ｂ種＋（円文＋剣先文）の抉りが浅い。刻み隆起線を有する。棘状文の観察からR1+L2 の存在から鋸歯状モチーフが崩れる方向性と剣先文祖形が観察されることから、大木８ａ式期新相の（+b）段階に整理したい。

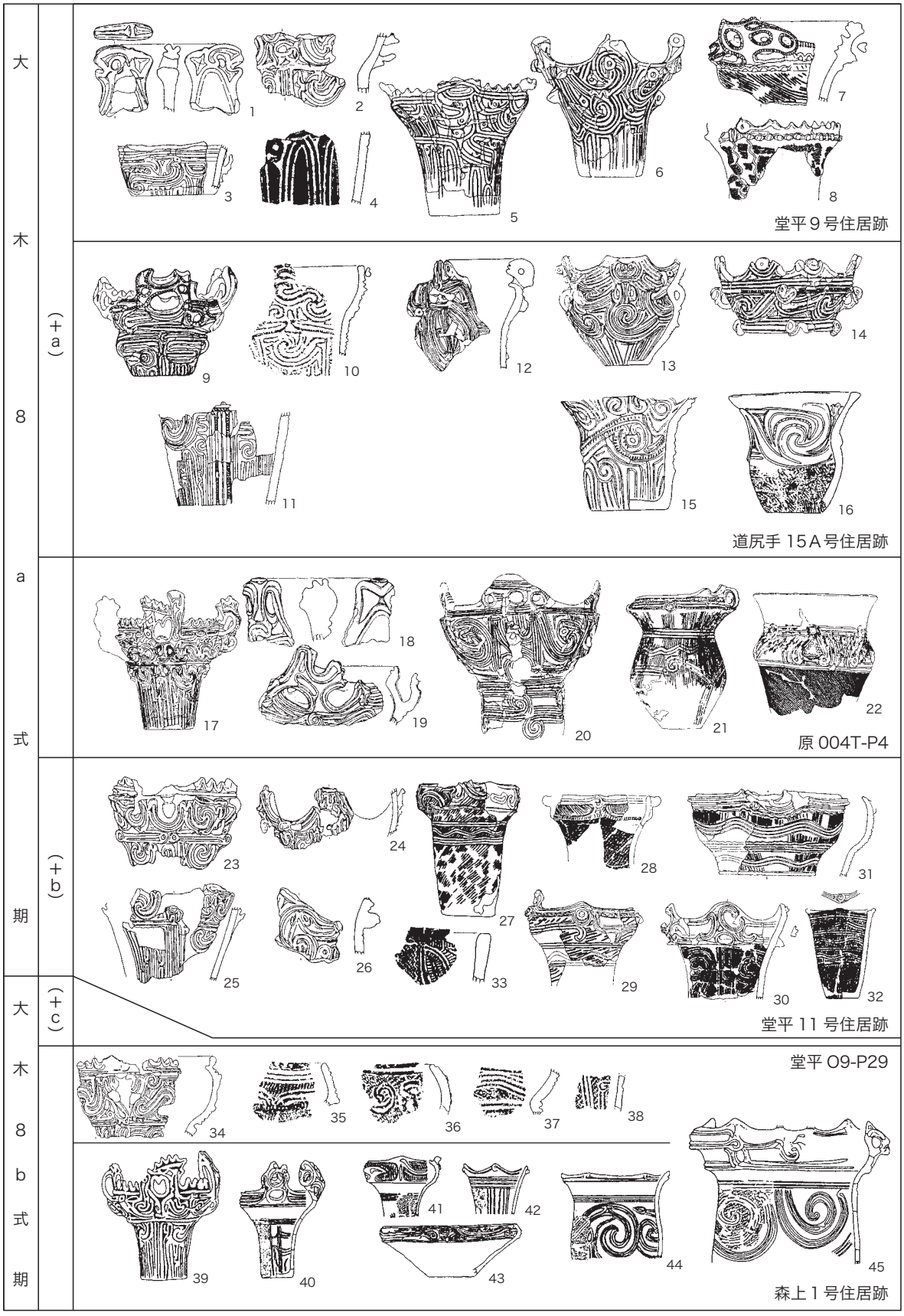
＜堂平遺跡の馬高系土器の編年的位置＞

本遺跡の総合的な検討から、【堂平１期ａ：９号住＝道尻手 15A 住】⇒【原 004T-P4】⇒【堂平１期ｂ：11 号住・王冠類型（第 116 図 - 2）】⇒【堂平２期ａ：O9 - P29・火焔類型土器（第 116 図１）＝森上１住】⇒【(+d) ＝万條寺林４住・幅上１住】⇒【２期ｃ：18 号住・H7 – P6= 道尻手９住・原遺跡 11 住】の変遷が予測される（第 137 図）。この時間幅は凡そ、大木８ａ式期～大木８ｂ式期に対比され、馬高系土器の消長問題とも深く関わる。

学史で触れたように、大木８ａ式期初頭には既に馬高系土器の安定的な組成が確認されている一方、大木８ｂ式期の時間幅における馬高系土器の消長問題につては、現在活発な検討と議論が展開されている。

すなわち、定点３とした森上遺跡１号住居跡の大木８ｂ式における細別位置の問題とそれ以降に馬高系土器が伴うかという問題がある。

第 138 図は、上記の主要遺構変遷に合わせて、その出土資料を整理したものである。筆者や小田、宮内、



第 137 図　馬高系土器などの変遷

小熊は、魚沼地方において堂平２期Ａとした大木８ｂ式前半期以降には馬高系土器が消失し、小形渦巻き文や腕骨文、矢羽根状沈線文などで構成される土器群（第 138 図）が生成したと推測される。

このたび提示した（+d）（+e）段階に研究史を踏まえ棚わけを試みたが暫定的な試案であり、叩き台である。筆者は、【(+d) = 万條寺林遺跡４号住居跡＜定点５＞】⇒【(+e) = 原遺跡 11 号住居跡＜定点７＞】の変遷を基準としたいと考えている。少なくとも（+d）（+e）段階に帰属すると理解される資料群が増加しており、詳細な検討が必要である。例えば、縄文施文の塔ケ崎類型（3～4・10 など）の変遷と矢羽状沈線文を施す前野類型（1・2・8・9 など）との関係、そして、加曽利Ｅ２式～ E3 式成立過程との連動が重要である。また、栃倉Ⅱ式土器の理解（18 ～ 20・28 ～ 30）などと唐草文系土器との関係、曽利式土器と在地変容の問題（41・46）、刺突文を施す大平類型の出現（42 ～ 45・51 ～ 54）、器台の盛行（7・40）などがある。

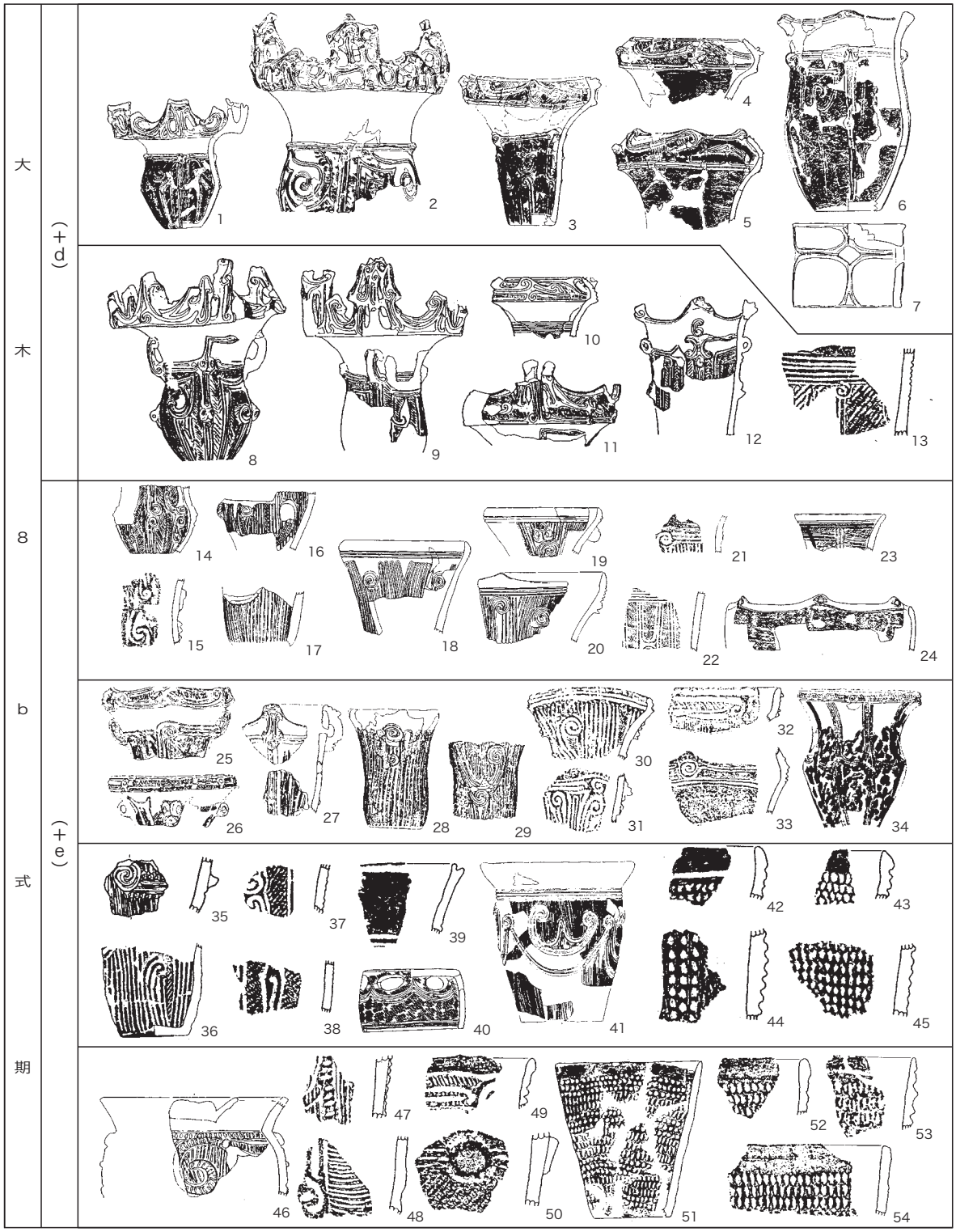
寺崎は馬高系土器の消長問題には慎重であり、いまだ発見されない資料の存在や対象としている資料評価の問題などから、長岡地域には大木８ｂ式後半期にも馬高系土器が存在していると考えている。しかしながら、馬高系土器との混在は、原遺跡 11 号住居跡に認められるが、それ以外は無いようである。これら一群は、渡辺誠が沖ノ原遺跡の報告書で「沖ノ原Ⅳ期 = 栃倉式」とした一群を含むものであり、馬高系土器の消失後の魚沼地方の土器様相として認識し、その変遷を慎重に検討したいものである。

＜馬高系土器変遷の素描＞

馬高系土器は、火焔類型土器２種類と王冠類型土器３種が具体的に認識される（第 142 図）。その変遷に伴う特徴は、火焔類型土器に比べて、王冠類型土器の方が変化を具体的に示すことができる。しかしながら、現状において馬高系土器を６段階に区分して具体的に説明することは難しく、共伴する他類型土器や他型式土器によって棚分けするしか仕方がないように思える。現状で筆者が理解する馬高系土器の変遷要素を整理した（第 114 表）。

冒頭に説明したとおり、馬高系土器の変遷は定点資料を踏まえ（+a）⇒原遺跡 004T – P4 ⇒（+b）（+c）⇒森上遺跡１号住居跡⇒（+d）⇒（+e）へと階梯変遷が想定された。このたびの総合的検討から「(+c) ⇒森上遺跡１号住居跡⇒（+d）⇒（+e)」の段階変遷は、寺崎が示した大木８ｂ式期の２大別４細分が基礎となる。しかし、大木８ｂ式期を古相⇒中相⇒新相の３段階変遷を基軸にしてきた筆者にとっては、古相段階に森上遺跡１号住居跡を配置していたことから、古相の時間幅をどのような根拠で細別し、その新段階に森上遺跡１号住居跡を配置するかについては、未検討である。よって、このたびは「(+c) ⇒森上遺跡１号住居跡」の時間幅に、O9-P24 資料や火焔類型（第 116 図１）を対比した。また、(+a) に９号住居跡と道尻手遺跡 15A 号住居跡が対比される。この小稿で扱った資料には原遺跡 004T-P4 には対比されるものは無い。(+b) とした時間幅に 11 号住居跡と王冠類型（第 116 図２）が相当すると考える。(+d) には万條寺林遺跡４号住居跡や幅上遺跡１号住居跡が配置される。(+e) には 18 号住居跡と H7-P6 が位置付けされ、定点６・７である道尻手遺跡９号住居跡と原遺跡 11 号住居跡が対比される。

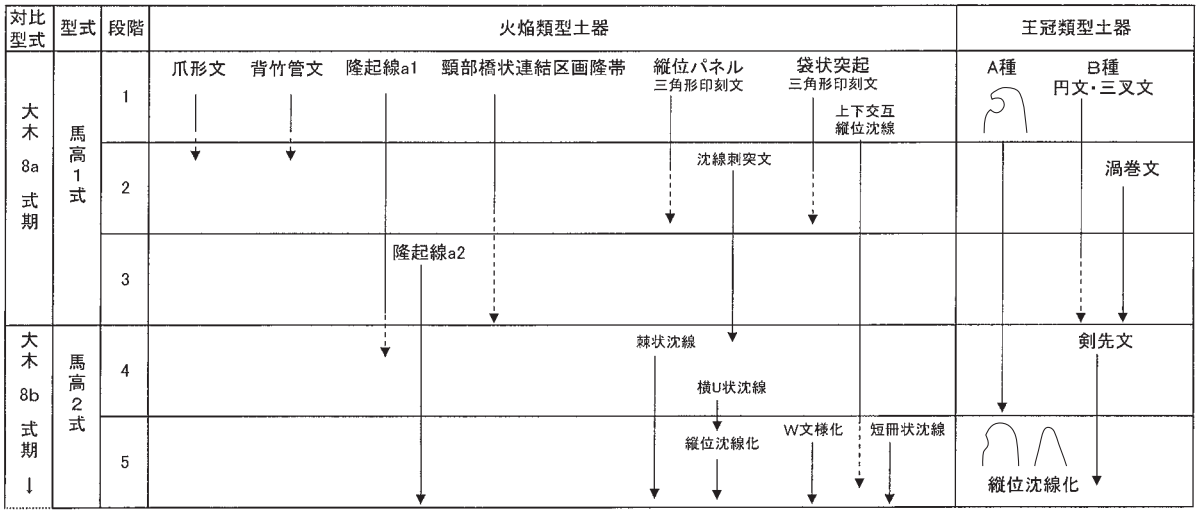
現状では、森上遺跡１号住居址よりも新しい段階である（+d）（+e）には、馬高系土器が明瞭な状態で共伴した事例が確認できない。したがって、馬高系土器の変遷は、(+a) から森上遺跡１号住居跡への５段の階梯が理解される。



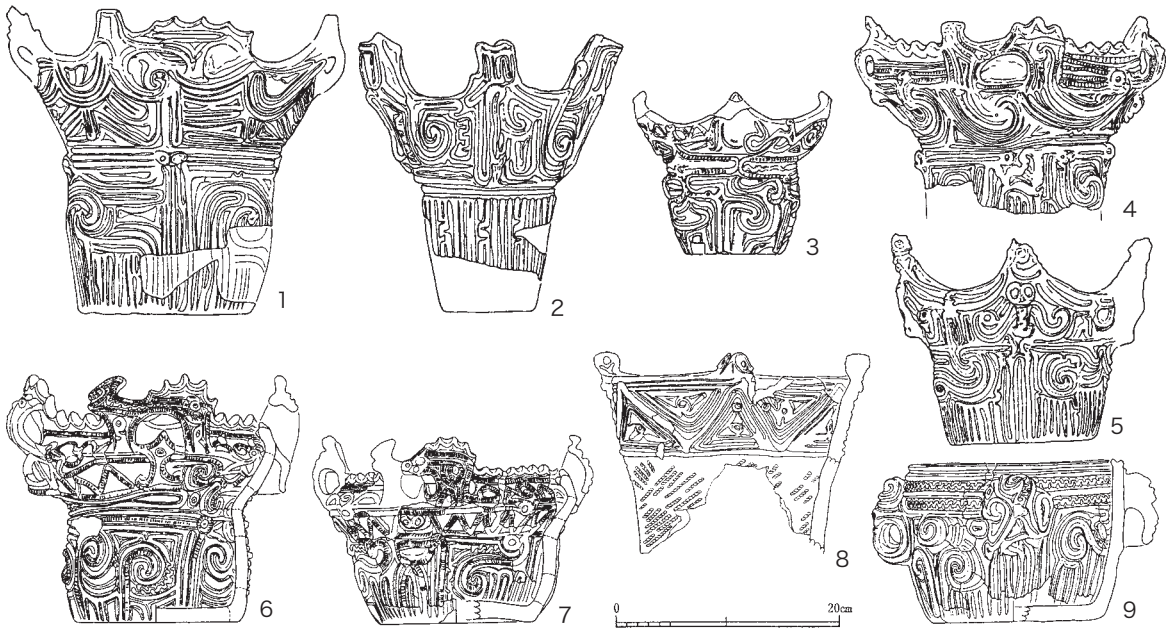
1～7．幅上遺跡１号住居跡　8～13．万城寺林遺跡４号住居跡　14～24．道尻手遺跡９号住居跡
25～34．原遺跡 11 号住居跡　35～45．堂平遺跡 18 号住居跡　46～54．堂平遺跡 H7-P6

第 138 図　大木８ｂ式期　中相～新相段階の集成

その遡源問題を踏まえるならば（+a）の前段階が用意される必要があろう。遡源期を考察する場合、岩野原遺跡土器捨て場最下層資料が注目される（第 139 図１・２・５）。１は口縁部の U+ △の構成と胴部



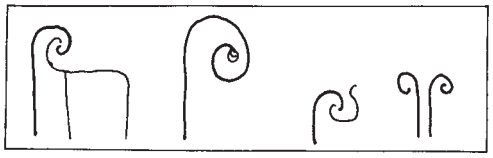
第 114 表　馬高系土器の変遷要素



第 139 図　岩野原遺跡最下層土器群とその類例

の蕨手文様が注目される。２は胴部一体の文様構成と鋸歯文Ｂ種の採用が注意される。５は山形四単位口縁とトンボ眼鏡状突起と一体化した意匠モチーフに注視したい。典型的な火焔類型や王冠類型の胴部文様には、蕨手文様は無く、Ｊ字やＳ字を基本とした渦巻文で構成される。蕨手文様を有する火焔類型土器は道尻手遺跡廃棄帯出土の事例（第 139 図６）がある。蕨手文は岩野原遺跡１- ２層出土の鉢形土器（第 139 図３）や道尻手遺跡出土の鉢形土器（第 139 図９）にも観察される。これらを含め蕨手文モチーフは管見事例で４種ある（第 140 図）。この第 139 図３を観察するならば、蕨手文と並列して鍵の手文が観察され、その描き順を替えるならば第 133 図４に類似する。また、本資料は頸部橋状把手連結区画隆帯に類似する区画帯があり、橋状化しない特徴が注目される。さらに、口縁部には弛んだ山形連結文が付されている。この山形連結文の類例が道尻手遺跡（第 139 図６・７）にあり、他に南魚沼市上ノ台Ⅱ遺跡（新潟県史資料編考古：図版 212- １）にある。上ノ台Ⅱ遺跡例は山形連結文が肥大化したものであり、三角

パネル文と呼称したほうがよい。この三角パネル文は大木７ｂ式新相段階に対比した道尻手遺跡の第Ⅱ群第３ｂ４類（第 139 図８）に存在し、大木８ａ式古相に対比される湯沢町川久保遺跡にある（註 60）。第 139 図５のトンボ眼鏡状突起と一体化した精霊を彷彿させる文様モチーフは、佐渡市長者ケ平遺跡（新潟県史資料編考古：図版 294-8）や道尻手遺跡第Ⅱ群 2b １類にある。以前にも触れたことがあるが、「三角パネル文＝山形連結文」と理解した場合、関東において三角パネル文は藤内１式～２式に顕著に認められる文様モチーフであり注目したい。さらに、第 139 図４は岩野原遺跡土器捨て場１- ２層とされる資料であるが、凹線内に背竹管文が連結する節状に施され「角押文類似施文」が観察できる。これを角押文と判断するならば、関東においては勝坂式期に広く見られるが、隆起線＋幅広角押文は後半の藤内１～２式であり、井戸尻式には極めて稀薄な施文手法である。このように岩野原遺跡土器捨て場資料には、１．蕨手文、２.三角連結文、３．角押文類似施文が観察されることから、堂平遺跡９号住居跡や道尻手遺跡 15A 号住居跡より、一段階古い資料が含まれている可能性がある。



第 140 図　蕨手文モチーフ

第 141 図　野首遺跡出土土器

十日町市野首遺跡出土土器(註61)に馬高系土器の遡源問題に関わる資料がある(第141図)。文様構成上、火焔類型の範疇に入れ込むべき資料である。円文＋三叉文、胴部パネルの祖形状態、胴部に採用される楔形刻目文が注目される。特に楔形刻目文は、北陸地方の新保・新崎式の第６段階の出現し、第７段階まで使用される文様である（註 62）。筆者は。岩野原遺跡第１土器捨て場資料の一部と本資料に馬高系土器遡源期問題を検討する扉があると理解している。

この一段階古いという時間をどのように整理するかである。現状においては、馬高系土器の発生は大木８ａ式期からと定説化しているが、佐藤光義・長尾修の異論や石川日出志・品田高志・廣井耕造による大木７ｂ式期遡源説が陰に隠れながら存在し、近年、小林達雄も会津若松付近に火焔土器発生の震源地予測を披露する中で、その時期が大木７ｂ式期の範疇に入る可能性を示唆している。

関東編年においては、勝坂式期⇒加曽利Ｅ式期へのダイナミズムな変化がある。前述で触れた岩野原遺跡土器捨て場資料に散見される要素は、勝坂式期後半に認められるものである。そして、定点１・２においては勝坂式後半の井戸尻式と対比が可能であり、その段階では誰もが認めうる安定した馬高系土器が存在し、馬高式土器の「相」が成立している。したがって、今後の論及によって、新潟県内において大木７ｂ式期末まで遡る時間単位を明確に示せる可能性があると考える。

Ｄ．おわりに

このたび一般的に火焔型土器と王冠型土器と総称される土器を「馬高系土器」として一括りとした。

それらは「火焔類型土器」と「王冠類型土器」の２類型で構成される。これら２類型は、多様な在地類型土器、あるいは搬入土器を含み、土器群としての「相」を構成している。その「相」は地理的環境を背景に信濃川流域においても地域性がある。しかしながら、考古学における時間単位として、それら馬高系土器が消長する時間単位を指し、学史を重んじて「馬高式土器」と理解したい（第 141 図）。また、広域編年との凡その対応関係を重視して、大木８ａ式土器の併行期を「馬高１式土器」とし、大木８ｂ式土器の併行期を「馬高２式土器」と呼びたい。それら馬高１式土器には３段階、馬高２式土器には２段階の区分が設定される。

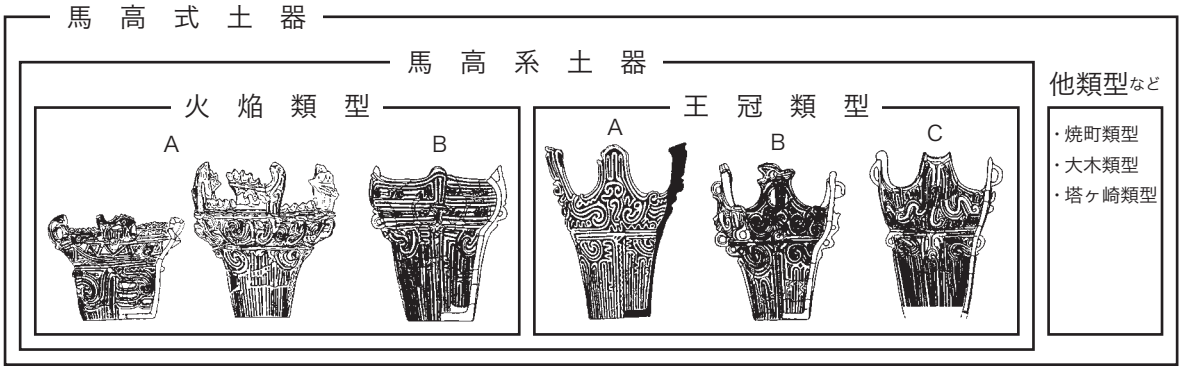
堂平遺跡出土の火焔類型土器（第 116 図１）は馬高２式の範疇と理解し、王冠類型土器（第 116 図２）は馬高１式の範疇に組み込み、（+b）に対比されるとした。

紙幅の関係から詳述できないが、品田高志や田中耕作が指摘するように相における地域性がある。興味深いのは、火焔類型土器胴部の上位施文域と下位施文域の構成比率である。高平遺跡（註 63）が示すとおり、阿賀野川以北では、上位施文域が狭い傾向が指摘される。また、田中が「王冠型土器は阿賀野川以北の土器である」（註 64）と指摘されているが、品田研究（註 65）の深化を踏まえ真摯に検討する必要があろう。

馬高系土器の消長問題がある。ひとつはその発生プロセス、すなわち遡源期をどう考え、型式の時間幅をどう理解するかである。大木７ｂ式新相段階まで遡るならば、馬高１式土器の時間幅を段階として遡らせればいいと理解する。

次に、その終焉問題である。それは大木８ｂ式土器の時間幅と馬高２式の時間幅を対比した場合の「（+d）（+e）期問題」がある。あくまでも筆者は現段階で、森上遺跡１号住居跡資料を馬高系土器の最新段階と扱う。現段階において（+d）（+e）期には、明瞭な共伴関係を示す状態で認識できる馬高系土器は無いと理解している。ここで問題は、この（+d）（+e）期を大木８ｂ式併行期であることから馬高２式の範疇で捉え、馬高系土器消失段階として理解するかである。学史的に馬高系土器のみで「馬高式」を構成しようとした廣野説（註 66）が象徴するように、馬高式＝「火焔型土器・王冠型土器」の印象が強いことから、筆者としては渡辺誠の研究を踏まえ「栃倉式」（註 67）を再定義する必要を痛感している。

すなわち、（+d）（+e）期の時間幅を「栃倉式土器」として短命型式を設定する考え方である。原典である栃倉遺跡の栃倉Ⅱ式土器を基本とした土器構成を持つ短命型式土器を構想したい。すなわち、中期後半を馬高１式土器⇒馬高２式土器⇒栃倉式土器⇒沖ノ原１式⇒沖ノ原２式とする考え方である（註 68）。



第 142 図　馬高式土器構成概念図

また、馬高１・２式土器の一翼である馬高系土器には、地文縄文は無く、逆Ｕ字パネル文が部分連結しながら、その中に棘状施文を含め縦位指向の文様が埋め込まれる。沖ノ原１式土器は地文縄文を基本とする文様構成をとる。沖ノ原１式土器と馬高２式土器の問をつなぐ栃倉式土器は、縦位密接充填文や地文縄文が認められ、馬高２式土器とは一線を画する。縦位密接充填文は、小熊の指摘した王冠類型土器（小熊分類：新段階Ｄ種）との系統関係を探る必要性がある。

すでにこの栃倉式土器とする時間幅の段階区分に関しても、宮内案（註 69）が提出されており、共伴資料ならびに沖ノ原１式土器への系統変遷を吟味しながら慎重に検討する必要がある。

筆者が 1985 年に中期土器編年を扱ってから 25 年が経過した。その中で寺崎裕助に薫陶を受け、寺崎編年を批判的に検討することで寺崎編年の有効性を痛感してきた。しかし、馬高系土器の範囲については、いささか疑問を呈し、互いに真摯に議論を重ねた結果をここに提示した。あえてここに提示した意味は、さらなる議論を重ね、改訂を恐れず、その果てに強固な地域編年の確立があると信じるからである（註 70）。

註　釈

1）新潟県の縄文時代中期研究においては、大木７ａ式並行期～７ｂ式並行期が前葉、大木８ａ式並行期～８ｂ式並行期が中葉、大木９式～後期初頭直前までを後葉と呼び慣わしてきた経緯がある。すなわち、中葉といった場合、関東編年の中期中葉とズレが発生する。

2）筆者が示す「火焔系土器」とは『馬高式土器』を構成する土器群のうち、象徴的な土器であると理解している一群である。これらは、平縁深鉢形土器である火焔類型土器と４単位波状口縁深鉢形土器の王冠類型土器に２大別され、各類型は細別されると理解する。これらは、小林達雄や小田由美子が指摘する「火炎土器様式Ａ群土器」と同じ資料を指す。
しかし、「福島・栃木など周辺の地域で作られた火焔型・王冠型に類似したデザインを持つ土器。火炎土器様式に含めることもある。」とした新潟県立歴史博物館（2009）が整理した「火炎系土器」とは異なる。あくまでも保守本流の範型に支えられた火焔のクニで作られた土器であり、火焔類型土器と王冠類型土器を括る概念として「火焔系土器」を位置付けている。
小林達雄・小田由美子　1988 「火炎土器様式」『縄文土器大観３　中期Ⅱ』 303 － 306 頁　小学館
新潟県立博物館編　2009 「火焔土器の名称について」『火焔土器の国　新潟』 ４頁　新潟日報事業社

3）千曲川流域である長野県域においては、栄村長瀬新田遺跡に分布するほか、飯山盆地に数例確認される程度である。
寺内隆夫　2003 「栄村・長瀬新田遺跡の縄文土器 (1) - 石沢厳氏所蔵資料の紹介－」『長野県考古学会誌』 第 103・104 号　35 － 58 頁　長野県考古学会
寺内隆夫　2004 「千曲川流域のおける火焔型土器および曲隆線文の系譜」『火炎土器の研究』 123 － 132 頁　同成社

4）前掲、註２を参照願う。

5）前掲、註２を参照願う。

6）小林達雄　2010 「火炎土器様式の登場」『フォーラム　火焔街道往来　2010』 ３－５頁　信濃川火焔街道連携協議会

7）八幡一郎　1928 「遺物遺跡地に基く相概念の提唱」『南佐久郡の考古学的調査』 119 － 121 頁　岡書院
中野　順　1992 「「型式」に関する一般理論とその展望」『新潟考古学談話会会報』 第９号 31 － 37 頁　新潟考古学談話会

8）寺崎裕助　1999 「中部地方　中期（馬高式）」『縄文時代　10 号　２分冊　土器型式編年研究 (2)』 37 － 46 頁　縄文文化研究会
佐藤雅一　2010 「縄文時代中期の土製耳飾について　－新潟県の様相－」『三条考古学研究会機関誌』 第４号　15 － 28 頁のうちの 28 頁　註 51 を参照願う。

9）寺崎裕助　2008 「火炎土器」『総覧　縄文土器』 458 － 465 頁　株式会社アム・プロモーション
佐藤雅一　1998 「新潟県の中期中葉から後葉の様相」『第 11 回縄文セミナー　中期中葉から後葉の諸様相』 101 － 188 頁　縄文セミナーの会

10）前掲、註８の（1999 年論文）、註９の（2008 年論文）の他は以下である。
寺崎裕助　1989 「新潟県中越地方における縄文中期後半の土器について」『新潟考古学談話会会報』 第３号　１－７頁　新潟考古学談話会
ここでは「岩野原（清水上）→森上（馬高）→栃倉→沖ノ原→大平（万條寺林）→宮下原」の編年が予想されるとしている。

寺崎裕助　1990「火炎土器様式の出現と展開」『火炎土器様式文化圏の成立と展開』　2－7頁　火炎土器研究会
寺崎裕助　1991「火炎土器様式について」『新潟考古学談話会会報』　第8号　1－19頁　新潟考古学談話会
寺崎裕助　2005「火焔土器・火焔型土器の文様パターン」『地域と文化の考古学Ⅰ』　229－253頁　六一書房

11）前掲、註9の文献を参照願う。

12）前掲、註9の文献を参照願う。

13）小熊博史　2003「岩野原遺跡出土の火焔型土器群(1)　－火焔型土器群の研究Ⅰ－」『長岡市立科学博物館研究報告』　第38号　55－70頁　長岡市立科学博物館
14）佐藤光義・長尾修　2004「南東北地域における火炎系土器の諸様相　－福島県を中心にして－」『火炎土器の研究』　177－200頁　同成社
15）品田高志　1987「『王冠型土器』考　－形態分類とその分布を中心に－」『柏崎市立博物館報』№2　91－104頁　柏崎市博物館
16）廣野耕造　1990「馬高式土器の再検討」『新潟史学』　第25号　1－30頁　新潟史学会
17）小林達雄　2010「火炎土器様式の登場」『フォーラム火焔街道往来2010』　3－5頁　信濃川火焔街道連携協議会
18）宮内信雄　2007「第Ⅴ章　まとめ　1．土器」『幅上遺跡発掘調査報告書』　56－58頁　十日町市教育委員会
19）佐藤雅一他　1998『原遺跡』　128頁　塩沢町教育委員会
20）戸田哲也　2006「縄文土器型式の分布圏」『縄紋社会をめぐるシンポジウムⅣ－土器型式をめぐる諸問題－　予稿集』　早稲田大学先史考古学研究所

21）道尻手遺跡報告書で示した「縄文中期編年対比表（暫定）」と照合した場合、若干の齟齬がある。しかし暫定編年は、当時、森幸彦による大木8ａ式編年に対比する目的で段階区分されている。よって、(＋a）は「(＋）⇒（＋）⇒清水上3・16・23住など」の3段階時間幅に、(＋b）は「(＋）⇒（＋）⇒（＋)」の3段階時間幅に、(＋d）は「万條寺林4住」に、(＋e）は「原11住」に対比される。また、(＋c）は寺崎編年との照合から生まれた段階であり、「森上1住」の時間幅においての古相に位置付けされる。

22）遠藤　佐　1987「第3章　総括　第2節2．第Ⅱ群土器」『日本国有鉄道小千谷第二発電所予定地内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書　徳右エ門山遺跡　中道遺跡　中道東遺跡』　70－72頁　小千谷市教育委員会
23）中野　純「火焔型土器の変遷　－鶏冠状突起と胴部区画文を主眼として－」『柏崎市立博物館報』№10　59－78頁　柏崎市立博物館

24）基本的には変化の方向性を示すが、それが絶対的時間差を示すとは考えていない。また、様々な要素が変化する場合、等質の時間幅で変化するものではないと理解し、極めて複雑な変化があると考える。

25）津南町教育委員会編　2007『＜津南シンポジウムⅢ＞火焔土器前夜　－資料集－』　津南町教育委員会
26）小田由美子　1991「火炎土器様式ノート」『新潟考古学談話会会誌』　第7号　1－5頁　新潟考古学談話会

27）前掲、註9の（佐藤：1998）文献を参照願う。

28）前掲、註9の（寺崎：2008）文献を参照願う。

29）前掲、註18を参照願う。

30）宮内信雄　2009「第Ⅰ部　火焔土器の国　新潟　火炎土器の後」　108－115頁　新潟日報事業社
31）吉田邦夫　2004「第Ⅱ章　火炎土器様式の年代　火炎土器に付着した炭化物の放射性炭素年代」　17－36頁　同成社
32）寺崎裕助　1996「火炎土器の成立・展開・終焉」『縄文人の技と心に迫る　－火焔土器研究の新視点－』　8－13頁　十日町市博物館

33）前掲、註13の文献を参照願う。

34）前掲、註9の（佐藤：1998）文献を参照願う。

35）小林達雄　2008「縄文土器の様式と型式と形式」『総覧縄文土器』　2－12頁　株式会社アム・プロモーション
36）鈴木素行　2004「越の旅人　自立篇　－茨城県水戸市（縞）東遺跡「火炎土器」について－」『火炎土器の研究』　160－176頁　同成社

37）前掲、註23を参照願う。

38）森　幸彦　1998「福島県内の大木8ａ式土器について」『第11回縄文セミナー　中期中葉から後葉の諸様相』　1－27頁　縄文セミナーの会
39）中野幸大　2008「大木7ａ～8ｂ式土器」『総覧縄文土器』　352－359頁　株式会社アム・プロモーション

40）前掲、註22を参照願う。

41）前掲、註23を参照願う。

42）小林達雄・小田由美子　1988「火炎土器様式」『縄文土器大観』　303－306頁　小学館
43）金子拓男　1981「火焔土器」『縄文文化の研究』　第3巻中期Ⅱ　61－71頁　雄山閣出版

44）前掲、註８・９・10・32 の寺崎文献を参照願う。
45）三条市吉野屋遺跡から出土している注口付鉢形土器があり、火焔類型土器の仲間として取りざたされているが、曲隆線文系土器の可能性がある。慎重に検討する必要性を痛感している。
46）佐藤雅一　2006 「４ - １土器」『＜ 2006 年秋季企画展示＞火焔土器の時代 - その文化を探る - 』 津南町教育委員会
47）火焔類型土器Ｂ種とした一群は、以前、筆者が王冠類型土器の一種として認識し、「王冠型土器２」と呼称したものである。ここに訂正し、以後、火焔類型土器の一員として思考することしたい。以下、文献で「王冠型土器２」としたものを「火焔類型土器Ｂ種」に変更訂正するものである。
高山茂明・佐藤雅一・阿部昭典　2005 「第Ⅵ章　まとめ　第１節　魚沼地方における道尻手遺跡出土土器の編年学的位置付け」『道尻手遺跡　本文編』 256 － 272 頁　津南町教育委員会
佐藤雅一　2006 「火焔土器の仲間たち」『火焔土器の時代－その文化を探る－』 53 － 61 頁　津南町教育委員会
48）前掲、註 47 の佐藤：2006 では、森上遺跡１号住居跡の編年学的位置は、大木８ｂ式期の前半期に当たる時間幅に配置し、後半期を２細分して万條寺林４号住居跡⇒原 11 号住居跡の変化を提示した。ここでは、加曽利Ｅ式土器の細分研究や寺崎編年を総合的に検討し、大木８ｂ式期を３細分した場合の中段階に位置すると判断した。すなわち、大木８ｂ式期の新段階の時間幅を、万條寺林４号住居跡⇒原 11 号住居跡へと２段階変遷するというのが筆者の現段階の考え方である。本文 31 頁の土器分類対比表は阿部昭典の文責によるものである。筆者と比べた場合、原 004T-P4 及び堂平 11 号住の編年的位置に考え方の違いがある。この点については今後慎重に協議検討したい。
49）前掲、註 18 を参照願う。
50）石川日出志　1981 『横峰Ａ遺跡・横峰Ｂ遺跡』 安田町教育委員会
51）前掲、註 15 を参照願う。
52）前掲、註 13 を参照願う。
53）前掲、註 13 を参照願う。
54）十日町市博物館編　2007 『十日町の縄文土器』 20 頁－ 31 に類例あり　十日町市博物館友の会
55）文様要素配列を記号化して検討する手法は、今福利恵の研究を基礎としている。
Ｓ＝今福（S)、Ｊ＝今福（D）であり、Ｃは今福（D）の直線部分が短いものを指す。
今福利恵　2004 『火炎土器の研究』「火炎土器文様からみる遺跡間関係」 78 － 110 頁　同成社
56）佐藤雅一　1989 『川久保遺跡Ⅲ』「第９図 85」湯沢町教育委員会
57）富樫雅彦他　1985 「信濃川中流域を中心とした縄文中期土器群の様相について（上)」『三条考古学研究会機関誌』 第３号　三条考古学研究会
58）前掲、註９（佐藤：1998)、註 47（高山他：2005）註 57（富樫他：1985）を参照願う。
59）中村孝三郎　1966 『長岡と先史時代の遺跡』「馬高遺跡」 98 － 113 頁　長岡市立科学博物館
60）佐藤雅一　1986 『川久保遺跡』 湯沢町教育委員会
61）前掲、註 54 の文献を参照願う。
62）加藤三千雄　2008 「新保・新崎式土器」『総覧縄文土器』450 － 457 頁　アム・プロモーション
63）塩原知人 『高平遺跡』 村上市教育委員会
64）田中耕作氏からご教示を頂いた。
65）前掲、註 15 の文献を参照願う。
66）前掲、註 16 の文献を参照願う。
67）渡辺　誠　1977 『新潟県中魚沼郡津南町沖ノ原遺跡発掘調査報告書』「第４章第１節　土器」 43 頁　津南町教育委員会
において、中期第７期に栃倉を配し、沖ノ原第Ⅳ期を対比した。渡辺によれば、「栃倉遺跡出土資料を標識とする一群である」とした。「Ⅲ期の火炎土器の退化した大形把手を持つ深鉢形土器」「胴部が膨らみ､口頸部に巾広い無文帯をもつようになる」「胴部文様帯と無文帯の境にｘ字形の貼りつけがみられる」「胴部文様帯には、ワラビ状渦巻文がみられ、間を八字状沈線で充填している」などの指摘をしている。
　筆者は、栃倉遺跡第７類Ａ・Ｂ（栃倉Ⅱ式土器）を中心として、再考再構成することで「栃倉式土器」が設定できると判断している。また、栃倉式土器は馬高系土器とは系譜を異にしている。
68）前掲、註 47 の（佐藤：2006）文献とリンクして、阿部昭典　2008 「沖ノ原式土器」『総覧縄文土器』472 － 479 頁　アム・プロモーション　における変遷案を背景にしている。
69）前掲、註 18・30 の文献を参照願う。
70）土器編年研究を指導頂いている金子拓男先生からは、常日頃から「実物観察から研究を立ち上げる必要性と発表した内容に齟齬が生じることを恐れず、その場合は真摯に訂正を行うことを恐れるな」と薫陶を頂いている。深謝するものである。

第２節　堂平遺跡遺構出土の沖ノ原式土器の編年的検討

１．はじめに

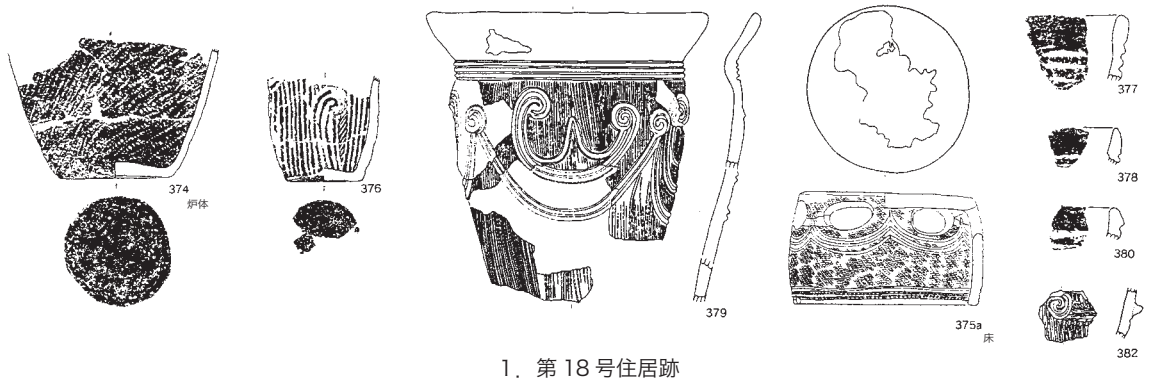
本遺跡の遺構からは、沖ノ原式土器が比較的まとまって出土している。沖ノ原式土器は、新潟県の信濃川上流域に分布する中期末葉の土器群である。本土器群は、津南町沖ノ原遺跡の報告書で「仮称沖ノ原式」として設定されたのが最初である（註１）。しかし、その後は沖ノ原式の編年研究はほとんど進展が見られなかった。1998 年に南魚沼市原遺跡や十日町市笹山遺跡、長岡市中道遺跡の報告書が刊行されたことで、当該期の資料が格段に増加した（註２）。そんななか、佐藤雅一は原遺跡などの資料を中心に、沖ノ原式土器について再検討を加えた。佐藤の一連の編年研究によって基礎的整理がなされ、「沖ノ原類型」や「万條寺林類型」などの諸類型が設定された（註３）。筆者も当該期における複式炉の編年研究のなかで、沖ノ原式土器の編年案の一端を提示した（註４）。その後、沖ノ原Ⅰ式と沖ノ原Ⅱ式の２期に分離し、それぞれ古段階と新段階に２細分する編年案の提示を行った（註５）。時期的には、前者はほぼ大木９式に対比し、後者はほぼ大木10式に並行すると結論づけた。また2007年に開催された第20回縄文セミナー「中期終末から後期初頭の諸様相」において、石坂圭介と阿部昭典によって中越と下越地方の編年案（註６）が示された。これによって、沖ノ原式土器終末から三十稲場式土器への変遷過程がより明らかになったと言える。加えて、新潟県内に分布域をもつ三十稲場式土器も、非常に地域差を持つことが分かってきている。ここでは、これまでの沖ノ原式土器の編年研究を踏まえて、堂平遺跡の良好な遺構出土資料から改めて検討を加えたい。

２．堂平遺跡の遺構出土資料

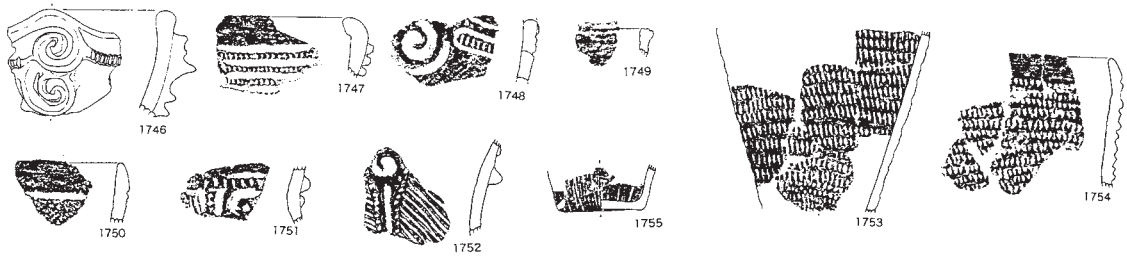
沖ノ原式土器の成立直前には、「栃倉式土器」が存在する。栃倉式は、栃倉遺跡のなかで設定された「栃倉Ⅱ式」（註７）を再検討して、佐藤雅一が改めて設定したものである（註８）。まだその範囲や並行関係に関して不確定な部分が多く、今後の研究のなかで確立されていくものと思われる。堂平遺跡では、第18 号住居跡、H7-P2、H7-P6、第 31 号住居跡などで当該期の資料がまとまって出土している（第 143 図）。栃倉式土器は、沖ノ原式土器の成立を考える上で重要であることから、これらの土器群について若干の検討を加えておきたい。

１）沖ノ原Ⅰ式成立直前段階

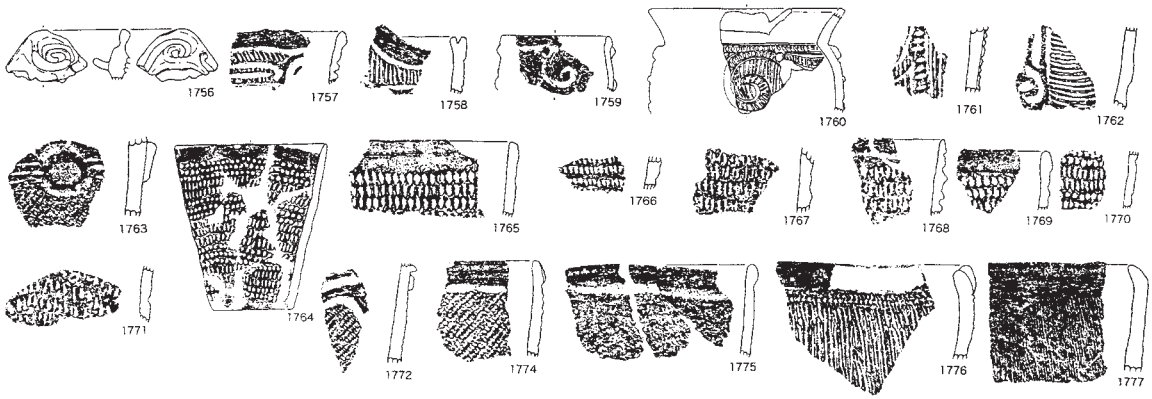
第 18 号住居跡は、すでに祖形的複式炉をもつ卵形住居跡で、炉体土器（374）は地文縄文のみであるが、この他に床面から覆土にかけて完形に近い３個体の土器が出土しており、いずれも栃倉式の範囲で捉えられる（第 143 図１）。376 は胴部のみであるが、縦位のワラビ手状懸垂文と縦位の半隆起線文といった典型的な栃倉式の破片資料と言える。379 は、頸部で「く」の字状に屈曲して口縁部が無文部になり、頸部の横位区画より下部には、双頭渦巻文が二重に展開する珍しい資料である。胴部は、縦位の条線文が施される。375 は床面出土の破片同士が接合した台形土器である。時期的には、類例が無いことから明確さを欠くが、この時期に帰属すると見て良いだろう。その他は小破片ばかりであるが、当該期の口



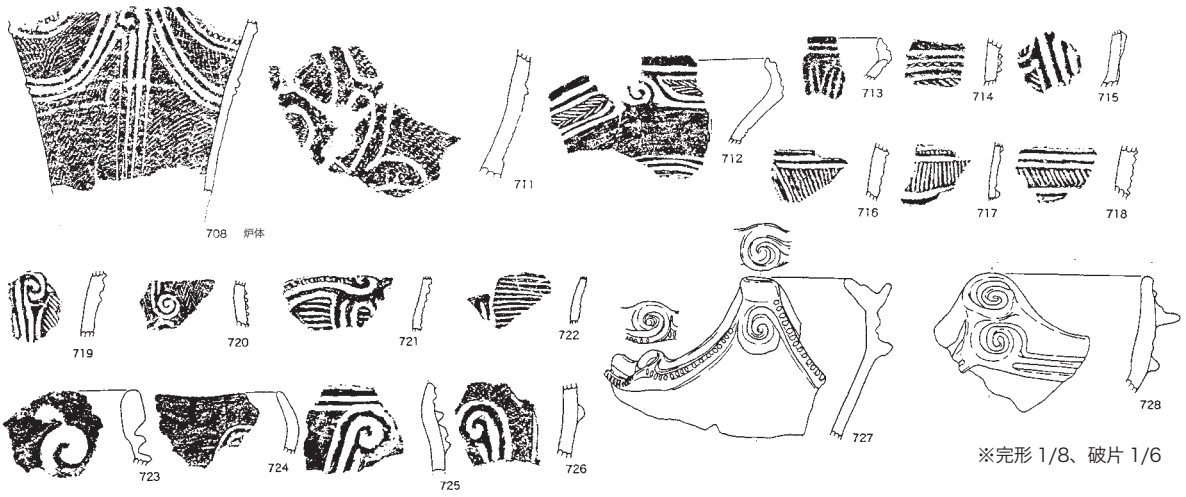
1．第 18 号住居跡



2．H7-P2（フラスコ状土坑）下層



3．H7-P6（フラスコ状土坑）下層



4．第 31 号住居跡

第 143 図　堂平遺跡遺構出土土器集成図（1）

縁部資料が認められる。

一方、H7-P2 は大形フラスコ状土坑で、遺物は底面より厚さ約 30cm の覆土中から出土している（第 143 図 2）。これらは破片資料のみであることから、一括資料としては扱いにくいが、参考資料として提示しておきたい。本資料には、典型的な栃倉式を伴わないが、1752 は栃倉式期に伴う渦巻状懸垂文間に横位もしくは斜位の沈線文を充填する一群であり、北信地域の郷土式土器（註 9）との関係性が窺われる。また 1753 と 1754 も同様に、栃倉式期に伴う胴部全面刺突文の一群である。これらは、三十稲場式土器もしくはその直前段階に位置付けられることもあったが（註 10）、共伴関係などを考慮すると栃倉式に伴うのは確実となっている。これらの刺突文は、棒状工具によるものもあるが、半截竹管状工具の内皮による２単位ずつの刺突文が多く見られる。さらに、1746 は２段の渦巻懸垂文を持つ口縁部資料であるが、大木９式土器として捉えられるものである。これらは破片資料であることから共伴資料とは積極的に言えないものの、栃倉式が大木９式の古段階まで下る可能性を残していることから、注意する必要があるだろう。

同様に、H7-P6 は大形のフラスコ状土坑で、覆土下層から栃倉式の破片資料がまとまって出土している（第 143 図 3）。1757 ～ 1762 は、懸垂文や沈線文間に縦位や横位の弧線文が充填される一群であり、栃倉式に伴うと考えられる。そのなかで 1760 は、頸部でくの字状に屈曲して無文帯となる。1764 ～ 1771 は、胴部全面刺突文の一群で、前述の H7-P2 でも出土している。これらは、ほぼ棒状工具による刺突文で、1764 は刺突文を３～４段で刺突方向を換えて施文している。1774 ～ 1777 も本段階に伴う粗製的な土器群である。典型的な栃倉式を伴わないものの、栃倉式期の範囲で捉えられる資料である。しかし、1756 は口縁部の内外に隆帯による渦巻文を持つことから、大木９式古段階と考えられる。

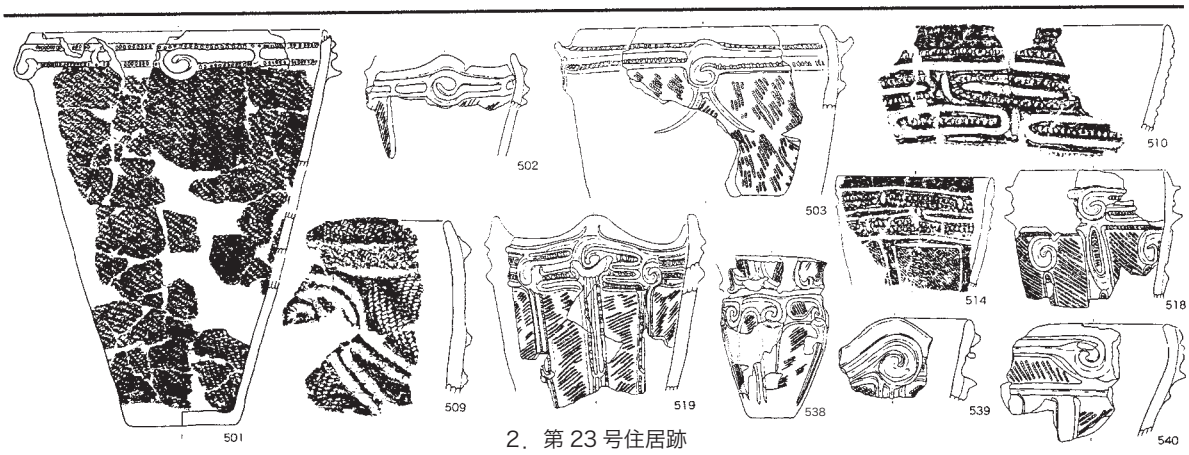
第 31 号住居跡は、祖形的複式炉を持つ栃倉式期の住居跡である。炉体土器（708）は、口縁部と底部を欠損する深鉢で、弧状の隆帯が横方向に展開しワラビ手状の懸垂文を持つことから栃倉式の範疇で捉えられると考えられる（第 143 図 4）。その他は、覆土中からの出土であり、２ｂ期（大木８ｂ式並行期中段階）から３ａ期（沖ノ原Ⅰ式）の破片資料である。712 は口縁部に渦巻文がめぐる楕円区画内に矢羽根状沈線文を充填するものである。713 は典型的な栃倉式で、714 ～ 722 は胴部の沈線区画や懸垂文間に斜位沈線文や横位沈線文、矢羽根状沈線文が施される破片資料である。723 ～ 726 は口縁部や胴部に渦巻状懸垂文や双頭渦巻文が垂下する資料で、ほぼ栃倉式期に属すると考えられる。727 と 728 は、波状口縁の波頂部に２段の渦巻文を有するもので、大木９式古段階の資料であるが、比較的覆土上層からの出土である。

本遺跡の栃倉式土器は、良好な共伴資料とは言えないものの、このような事例の積み重ねも必要である。栃倉式は、大枠では大木８ｂ式の新しい段階に位置づけられているが、大木９式古段階まで下る可能性があることは以前より指摘されている（註 11）。大木式との並行関係や範囲の問題はあるものの、少なくとも沖ノ原Ⅰ式土器成立直前段階に位置づけられることは明らかである。沖ノ原Ⅰ式土器の成立は、栃倉式をベースとして大木９式土器、加曽利ＥⅢ式土器などの要素を取り込んで成立したものと考えられるが（註 12）、沖ノ原式を構成する各土器群がどのように成立するのか今後の検討が必要であろう。

２）沖ノ原Ⅰ式土器

本遺跡における沖ノ原Ⅰ式土器の遺構出土資料は、第 38 号住居跡、第 23 号住居跡、第 50 号住居跡、

1．第 38 号住居跡



2．第 23 号住居跡

第 144 図　堂平遺跡遺構出土土器集成図（2）

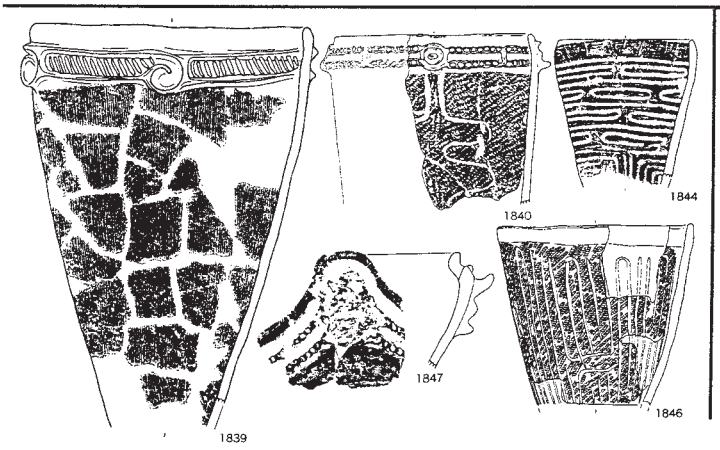
H8-P7、I1-P1、13J-P1、K8-P31 があり、当該期の資料がまとまって出土している。

第 38 号住居跡は長方形住居跡であるが、床面から覆土にかけて３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）の資料が出土している（第 144 図 1）。これらの分布は、石組炉を挟んで２ヶ所にまとまりが認められる。840・841・846 ～ 848 は口縁部に２から３本の刻目隆帯と渦巻状懸垂文がめぐる一群で、佐藤雅一により「沖ノ原類型」（註 13）と呼称されたものである。これらは渦巻文よりノの字状やハの字状懸垂文が付属するものが多く、胴部は地文のみとなる。この種の土器群は、この段階の示標とされる沖ノ原遺跡第１号住居跡でも出土している。853 ～ 866 は口縁部に横位に展開する楕円文や乙字文が描かれるもので、853 ～ 859・862 は渦巻状懸垂文を持たず、861・863 ～ 866 は渦巻状懸垂文を有する。これらの胴部には、縦位懸垂文が垂下して胴部区画が明確なものが多い。855 や 861・863 ～ 866 は、沖ノ原Ⅰ式のなかでも比較的新しい段階に位置づけられると考えられる。876・877 は栃倉式であり、双頭渦巻文の間に横位の沈線文を充填するものである。884 ～ 886 は大木９式土器で、古段階に位置づけられる資料である。また 887・888・890 は加曽利ＥⅢ式土器で、そのなかでも古段階に位置づけられる（註 14）。893 は、本地域で完形復元されるのは珍しいが、曽利Ⅲ式土器である。頸部を刻目隆帯で区画して、胴部に縦位の刻目隆帯による懸垂文が垂下する。これらは全て共伴関係にあるとは即断できないが、少なくとも大部分は沖ノ原Ⅰ式期の範囲内で捉えられる資料である。大木９式や加曽利ＥⅢ式、曽利Ⅲ式など異系統の土器群を含むことから、他地域との並行関係を検討するのに重要である。

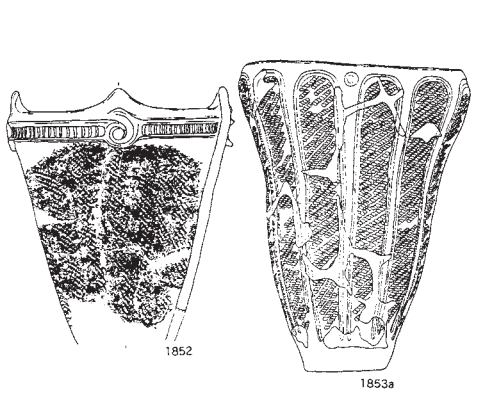
第 23 号住居跡は、複式炉を持つ円形プランの住居跡で、炉体土器や埋甕などを持たないが、比較的覆土中に３ａ期の資料がまとまって出土している（第 144 図 2）。501 ～ 503・509 は、口縁部に２本から３本の刻目隆帯がめぐる一群で、502 と 509 の隆帯上には刻目が施されない。510・514・518・519 は口縁部に横線文がめぐるもので、518 と 519 は口縁部に渦巻状懸垂文を有し、胴部には隆線による縦位懸垂文が垂下する。538・539 は大木９式古段階の資料で、口縁部や胴部に渦巻文が展開する。540 は加曽利ＥⅢ式で、古段階に位置づけられる。これらは良好な一括資料とは言えないものの、沖ノ原Ⅰ式期でまとまっており、前掲の第 38 号住居跡出土資料と類似した土器構成を示している。

第 50 号住居跡では、炉内・床面から覆土にかけて、３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）の資料が出土している（第 145 図 1）。平面的には、住居跡の範囲の中心部側にまとまって分布する傾向が見られる。1108･1109・1113 ～ 1115 は、口縁部に渦巻状懸垂文と２本から３本の刻目隆帯がめぐるもので、1116 のみは隆帯上に刻目が施されない。1113 ～ 1115 は口縁部の隆帯間に斜位沈線文を充填され、またこれらの土器群の渦巻文にはノ字状やハ字状の懸垂文が認められない。1117 と 1118 は地文に縄文を持たず、ワラビ手状懸垂文と方形の区画文を特徴とする一群で、道尻手遺跡第 22 号住居跡からも出土例が確認される（432）。1121 と 1125・1126 は沖ノ原Ⅰ式と大木９式の折衷土器で、1121 の場合は、器形と口縁部にめぐる刻目隆帯が沖ノ原式の要素で、口縁部の二段の渦巻文と隆沈線による胴部の大渦巻状懸垂文は大木９式的要素である。一方、1125 の場合は、口縁部の刻目隆帯のみが沖ノ原Ⅰ式的要素で、器形や口縁部の二段渦巻文、胴部文様は大木９式的要素であると考えられる。1128 と 1129 は大木９式古段階の土器であり、1131 と 1132 は加曽利ＥⅢ式の古段階に位置付けられると考えられる。1107 は、唐草文系土器としてが、変容が強いため北信地域のものに対比するのは難しい。また 1137 は胴部縦位磨消懸垂文と隆線に

1．第 50 号住居跡

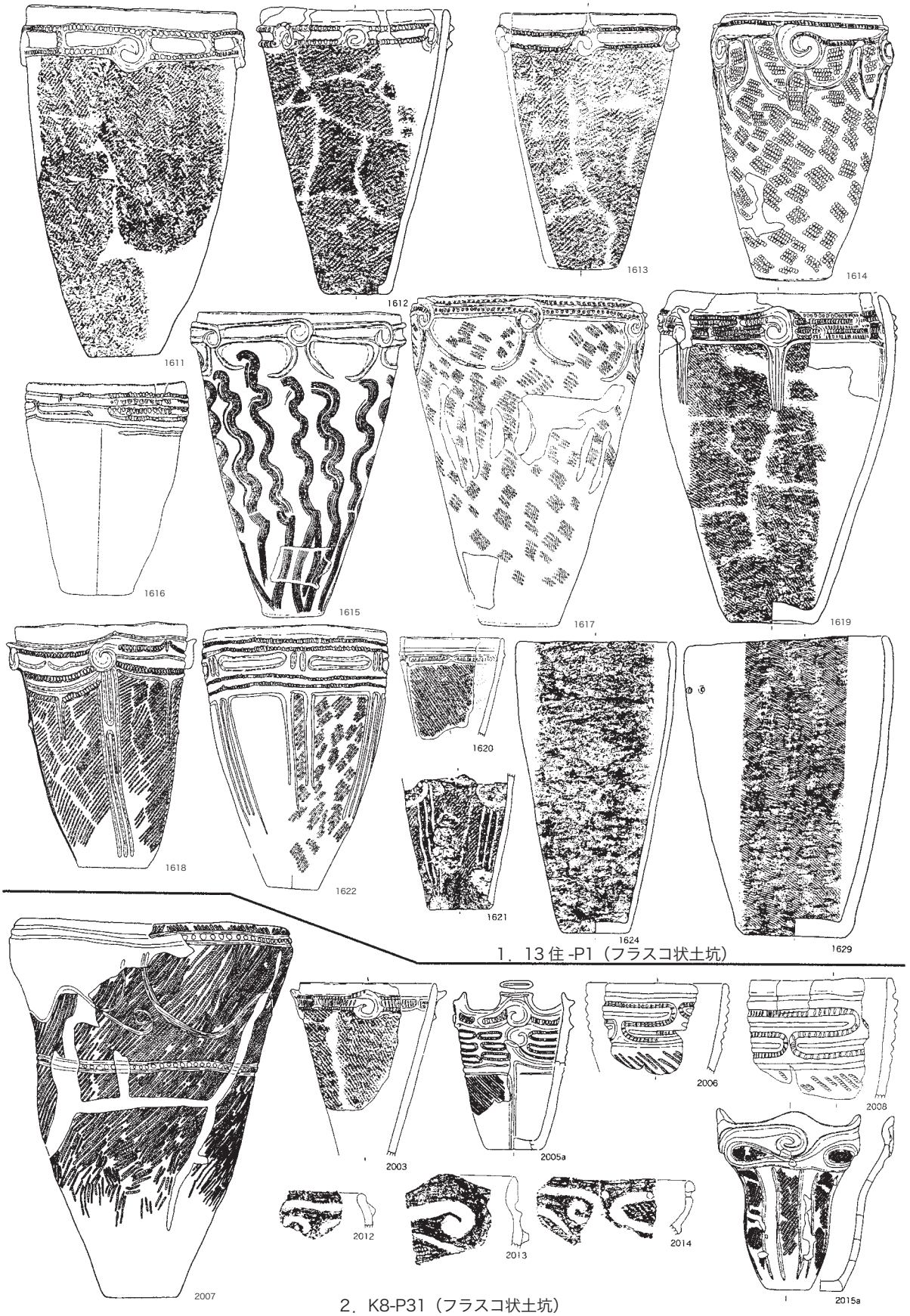


2．H8-P7（フラスコ状土坑）



3．I1-P1（フラスコ状土坑）

第 145 図　堂平遺跡遺構出土土器集成図（3）



第146図　堂平遺跡遺構出土土器集成図（4）

よる縦位の懸垂文間に矢羽根状沈線文を充填するもので、これも唐草文系土器か、不明である。1139 ～ 1142 は、この段階に伴う粗製的な土器群で、口縁部の無文帯と胴部のＪ字状やU字状などの沈線による懸垂文を特徴とする。これらは沖ノ原Ⅰ式期でも比較的古く、前半段階（古段階）に位置づけられると考えられる。

H8-P7 は、フラスコ状土坑の底面付近のみが遺存するもの、底面から厚さ約 30cm の覆土から３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）の資料が比較的まとまって出土している（第 145 図２）。1839・1840 は、口縁部に２本の隆帯がめぐり、1839 は隆帯間に斜位沈線文が充填され、1840 は隆帯上に刻目が加えられる。また 1839 は渦巻文で 1840 は円形の隆帯文が付され、胴部には沈線による波状の懸垂文が描かれる。1844 は口縁部から胴部にかけて多段に横位楕円文が描かれる。1847 は大木９式土器の古段階の口縁部資料で、渦巻部分が欠損している。1846 は当該期の粗製的土器で、胴部に縦位楕円文やＵ字状文などが沈線によって描かれる。これらは沖ノ原Ⅰ式期の古段階でまとまると言えるだろう。

I1-P1 では、小形のフラスコ状土坑から２点のほぼ完形に近い土器が出土しており、出土層位や位置は明確ではないが共伴関係にあると推測される（第 145 図３）。1852 は口縁部に２本の隆帯がめぐり、隆帯間に縦位の沈線文を充填する土器で、隆帯上には刻目は施されていない。1853 は、加曽利ＥⅢ式とも大木９式とも言いがたい資料であるが、胴部の逆Ｕ字状の磨消懸垂文から大木９式の新段階に位置づけた。

13J-P1 は、大形フラスコ状土坑で、約 20 個体の完形土器などが出土した良好な一括資料である（第 146 図１）。このフラスコ状土坑の出土資料に関しては、底面から開口部にかけて重層的に完形土器が出土していることから、一括性に疑問視する意見もあるが、現状では、何らかの理由で一括廃棄されたものとしておきたい。これらは、在地系の沖ノ原Ⅰ式と縄文だけの粗製的土器から構成され、異系統土器を全く含んでいない。これは現象面で見ると興味深いことではあるが、一括資料としては残念である。1611 ～ 1615・1617・1619 は、口縁部に２本から３本の隆帯がめぐる一群で、胴部は地文縄文や曲流条線文などが施される。1611 ～ 1613 は典型的な資料で、口縁部に渦巻状懸垂文と刻目隆帯がめぐるシンプルな一群である。1614 は、口縁部の渦巻状懸垂文が大柄であり、渦巻文からの懸垂文も渦巻文間の横位隆帯から垂下するハ字状懸垂文によって連結するなどやや変容が見られる。また 1615 は隆帯上に刻目を施さずに渦巻文にハ字状懸垂文が付加されるもので、1617 は同様に隆帯上には刻目は加えられないものの、隆帯間に円形刺突を施す。1619 は刻目隆帯間の狭い部分にも刻目が施される。1618 は、口縁部の横位沈線文間に渦巻文が付され、そこから縦位の懸垂文が垂下し、胴部中ほどが瘤状に突出する。1616 と 1623 は、口縁部に横位沈線文や楕円文などを描くもので、沈線には刺突文が付加される。また 1616 の文様は粗雑であり、半分側のみに刺突文が加えられる。1623 の胴部は、縦位懸垂文によって４単位に区画されるが、懸垂文は胴部途中で途切れる。1620 は、２本の隆帯間に刺突文を加えるものである。1621 は、事実記載でも示したが、土器焼成時に破裂したものであると考えられる資料である。この他に縄文施文のみの粗製的土器が出土しているが、全て器形は在地の沖ノ原式のものである。これらは沖ノ原Ⅰ式の古段階に位置づけられると考えられるが、1614 ～ 1617 などやや新しい様相を呈しており、今後の検討が必要である。

K8-P31 は、中形のフラスコ状土坑で、細かな出土位置は不明であるが、2003 は口縁部に渦巻文と２

本の刻目隆帯がめぐり、隆帯間に縦位沈線文が充填される（第146図2）。2005は口縁部に2本の隆帯と2段の渦巻文が垂下し、その下部に3段の横位の楕円区画が描かれる。2006・2008は口縁部に乙字状文など横方向に展開する土器で、沈線に刺突文が付加される。2012～2015は、加曽利EⅢ式土器である。そのなかで2015は完形で口縁部渦巻文や楕円区画がめぐり、胴部には磨消懸垂文が垂下し、古段階に位置づけられる。2007は、当地域でも稀な連弧文土器である。本資料は、口縁部と頸部の横位沈線区画の沈線間には刺突列がめぐり、口縁部から頸部にかけて波状文が描かれ、時期的には第3段階頃に位置づけられると考えられる（註15）。これらは沖ノ原Ⅰ式でも、古段階でまとまると考えられる。

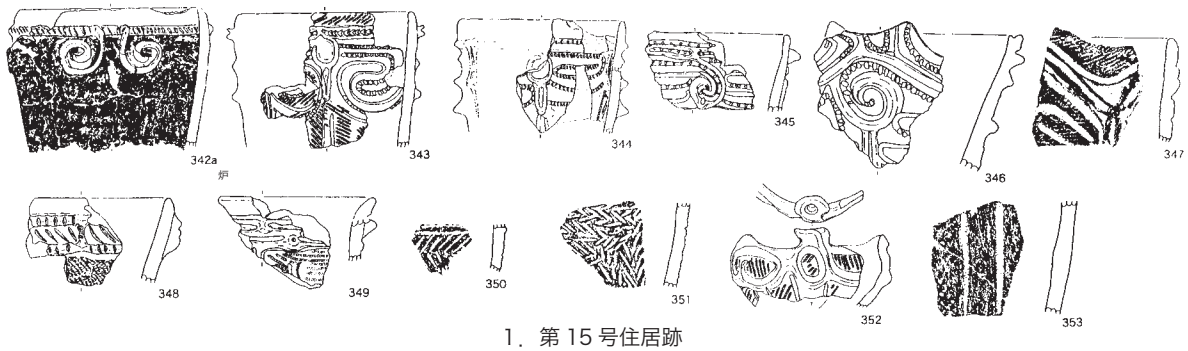
以上、沖ノ原Ⅰ式期の遺構出土資料について検討してきたが、沖ノ原Ⅰ式期を構成する土器群は明確であり、一つの段階として捉えることが可能である。また沖ノ原Ⅰ式の細分に関しては、古段階を沖ノ原遺跡第1号住居跡出土土器（註16）、新段階に万條寺林遺跡第36号住居跡出土土器（註17）などを示標とする。しかし、本遺跡の遺構出土資料においては、両者が明確に分かれて出土する事例は確認できなかった。従って、本段階の細分については、型式学的な検討とともに、新たな共伴資料から検証していく必要があるだろう。

3）沖ノ原Ⅱ式土器

沖ノ原Ⅱ式期の遺構出土資料は、第15号住居跡、第32号住居跡、第59号住居跡などがあるが、沖ノ原Ⅰ式に比べて遺構出土資料は乏しい。これは住居跡自体の数の減少もあるが、本段階になるとフラスコ状土坑が激減することも要因の一つとしてあげられる。

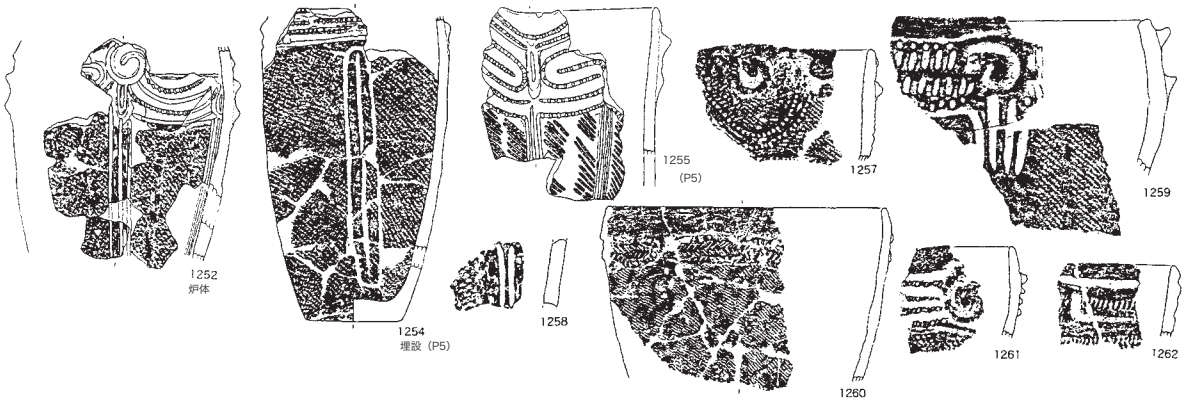
第15号住居跡は、炉体土器(342)と床面から覆土にかけて、3b期(沖ノ原Ⅱ式期)の資料が比較的まとまって出土しているが、共伴資料としては良好とは言えない（第147図1）。本段階の特色としては、口縁部が1本の隆帯によって横位に区画される点であり、342～347の隆帯区画に見られる。342は口縁部の隆帯区画から対向状の渦巻状懸垂文が垂下するもので、あまり類例は見られない。343～346は、隆帯区画からは特徴的に有尾渦巻文が垂下し、その両側に入組コ字文が描かれる。この入組コ字文は、1本から2本の沈線で描かれ、刺突文が付加されるなどやや古い要素が見られる。348と349は沖ノ原Ⅰ式であり、351は横ハ字文で、本段階よりも新しい段階のものである。352は加曽利EⅢ式のなかでも新しい段階のもので、353も加曽利E式の胴部磨消懸垂文であるが、これらが伴うかどうかは明確ではない。

第32号住居跡は、炉体土器や入口部の合わせ埋甕が良好な共伴資料であり、その他にも覆土中からではあるが、3b期（沖ノ原Ⅱ式期）の資料が出土している（第147図2）。特に、埋甕に使用された2個体は在地系の沖ノ原Ⅱ式土器と加曽利E式土器が組み合わさって出土している。758は完形で、口縁部の隆帯区画は背割沈線と瘤状突起により鎖状隆帯化しており、そこから有尾渦巻状懸垂文や棒状懸垂文が垂下する。懸垂文間には3本1組の沈線によって入組コ字文が描かれる。胴部は2本1組の沈線が垂下して胴部途中で途切れて端部が閉じられる。この胴部の懸垂文も前段階とは異なる表出方法をとる。これらの縄文は沈線施文後に施され、これは沖ノ原Ⅰ式から見られる施文手法である。759は口縁部に無文帯を有し、口縁部から胴部にかけて微隆起線文により大柄な渦巻文が4単位描かれ、胴部の無文帯を境に胴部下半には逆U字状の懸垂文が微隆起線文で描かれる。時期的には、加曽利EⅢ式とする見方もあるが、加曽利EⅣ式古段階に位置づけられると考えられる。766～772は、入組コ字文や弧状隆帯



1．第 15 号住居跡

2．第 32 号住居跡



3．第 59 号住居跡

第 147 図　堂平遺跡遺構出土土器集成図（5）

区画内に横ハ字文を充填するもので、沖ノ原Ⅱ式のなかでも新段階に位置づけられるものである。774～779・783は加曽利ＥⅣ式である。776は口縁部に無文帯を有し、胴部は上半部に縦長の波状区画文、胴下半部に逆Ｕ字状文を描くもので、胴部上半部の区画にのみ縄文が充填され、加曽利ＥⅣ式でも古段階に位置づけられる。775・779も同様な文様であり、774は先端が尖る懸垂文が描かれる。777と778は同一個体であり、微隆起線文により渦巻状の懸垂文が描かれる。782は突起部で頂部が皿状に窪み、783は微隆起線文により幅広の磨消懸垂文が垂下する。786は口縁部に隆帯区画を持つ粗製的な土器で、本段階に伴う。789もこの段階に伴う粗製的土器で、口唇部の一部が内側に窪むのが特色で、道尻手遺跡からも出土例が認められる。790は瓢箪形注口土器の胴部片と見られる。これらは大雑把に３ｂ期でまとまるが、やや前後の時間幅を有していると思われる。

第59号住居跡の出土土器は、複式炉の炉体土器（1252）、埋設土器（1254）とこの土坑（P5）に伴う破片資料1255などがある（第147図３）。これら３点は、火災住居跡に伴う炭化材と焼土層などによってパックされており、転用の問題を除けば、良好な共伴資料と理解される。またこの他に覆土の焼土層などから沖ノ原Ⅰ式やⅡ式土器が出土しているが、共伴性は低いものと考えられる。1252は炉体土器で、二次的な加熱によって脆弱になっているが、有尾渦巻状懸垂文と入組コ字文、その下部の胴部懸垂文が見られる。1254は入口部P5の埋設土器で、口縁部を欠損するが、口縁部には横位の沈線文が数条めぐり、胴部には上下独立した長楕円形になる胴部懸垂文がある。1255はP5に伴う土器片で、波状口縁に隆帯区画がめぐり、棒状懸垂文や入組コ字文（刺突文が付加される）、胴部縦位懸垂文が認められる。これらは沖ノ原Ⅱ式の古段階に位置づけられる資料である。また覆土からは、口縁部に弧線文を描く1257や沖ノ原Ⅰ式と考えられる1259・1261・1262が出土している。1260は口縁部に二本の隆帯による楕円区画を連続的に描くもので、区画内には横ハ字文が充填される。この資料の位置づけは難しいが、沖ノ原Ⅱ式の最新段階に２本の隆帯区画内に横ハ字文を充填する一群が存在することから、これに当ると考えられる。

これらの遺構出土資料は、沖ノ原Ⅱ式のなかでも古段階に位置づけられる資料であり（註18）、新段階については、包含層などから一定量確認されるものの、良好な遺構出土資料は確認できなかった。この段階の特色は、沈線の細線化と区画内への横ハ字文の充填、胴部懸垂文の消失などの特色が見られる。周辺遺跡では、道尻手遺跡の第20号住居跡や第39号住居跡などで沖ノ原Ⅱ式期新段階の資料が出土しているが、全体的に共伴資料は乏しい。一方、沖ノ原Ⅱ式古段階については、第15号住居跡と第59号出土土器（343～347、1252・1254・1255）、32号住居跡出土土器（758）は同じ文様構成であるが、入組コ字文の描出手法が異なっている。つまり、前者は１本か２本の沈線で描出し、刺突文を付加するものが多いのに対して、後者は３本１組の沈線によって表出して刺突文は沈線には加えられない。後者の特色は、より細線化が見られる沖ノ原Ⅱ式新段階と共通しており、比較的新しい要素であると言えるだろう。

３．まとめと課題

堂平遺跡の沖ノ原式土器について、遺構出土資料から従来の土器編年との比較検討を行った。当遺跡は、非常に遺構内出土土器がまとまっており、その中でも沖ノ原式期の資料は良好なものが多い。しかしながら、共伴性の高い資料から、従来の編年観における沖ノ原Ⅰ式とⅡ式の区分の妥当性が確認でき

たものの、幾つかの問題点が浮かび上がってきた。一つは、栃倉式の位置づけとも関連するが、沖ノ原Ⅰ式の２細分の問題である。これまで万條寺林遺跡 36 号住居跡出土資料を沖ノ原Ⅰ式新段階の示標としているが、本遺跡では古段階と新段階の土器群が明確に分かれて出土する遺構出土例は確認できなかった。これは今後の課題であるが、この前段階の栃倉式と大木式との並行関係と複雑に関わる問題であり、信濃川流域の大木９式土器を含めて、再検討が必要な部分である。二つ目は、沖ノ原Ⅱ式の細分の問題である。基本的には、沖ノ原Ⅱ式新段階の土器は入組コ字文の細線化や、区画内への横ハ字文が充填される資料を典型とする。また沖ノ原Ⅱ式古段階の入組コ字文には、１本の沈線で描いて刺突文を付加するものと、３本１組の沈線で描くものが存在する。後者は次段階につながる要素であり、沖ノ原Ⅱ式古段階のなかで段階差となるのかどうか、現状では明確ではない。沖ノ原Ⅱ式の細分に関しても、周辺遺跡を含めて再度検討していく必要があるだろう。

註　釈

1）江坂輝弥・渡辺誠ほか 1977『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会

2）佐藤雅一・長澤展生ほか 1998『原遺跡』塩沢町教育委員会、駒形敏朗・小熊博史ほか 1988『中道遺跡』長岡市教育委員会
菅沼　亘・石原正敏ほか 1998『笹山遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会

3）佐藤雅一 1999「原遺跡の研究（2）１．魚沼地方の縄文時代中期後半土器群の検討」『新潟考古』第 10 号
佐藤雅一 2003「沖ノ原式土器について」『第 16 回縄文セミナー中期後半期の諸問題』縄文セミナーの会

4）阿部昭典 1999「複式炉の研究」『新潟考古学談話会会報』第 20 号
阿部昭典 2000「縄文時代中期末葉～後期前葉の変動」『物質文化』第 69 号

5）阿部昭典 2008「沖ノ原式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
阿部昭典 2009「沖ノ原式土器の編年に関する一試論」『新潟県の考古学２』新潟県考古学会

6）石坂圭介 2007「新潟県中越地方の縄文中期末から後期前葉の土器様相」『第 20 回縄文セミナー中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会
阿部昭典 2007「新潟県下越地方の縄文中期終末から後期初頭の諸様相」『第 20 回縄文セミナー中期終末から後期初頭の再検討』縄文セミナーの会

7）寺村光晴 1961「第三章考察　Ⅰ土器の編年的考察」『栃倉』吉川弘文堂

8）佐藤雅一 1999「原遺跡の研究（2）１．魚沼地方の縄文時代中期後半土器群の検討」『新潟考古』第 10 号

9）綿田弘実 2003「長野県千曲川流域の縄文中期後葉土器群」『第 16 回縄文セミナー　中期後半期の諸問題』縄文セミナーの会
綿田弘実 2008「郷土式・圧痕隆帯文・大木系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

10）藪下　浩 1977「第４章遺物第１節土器」『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会
國島　聡 1991「第Ⅵ章総括１．城之腰遺跡の縄文時代中期末～後期前葉土器の編年」『関越自動車道関係発掘調査報告書　城之腰遺跡』新潟県教育委員会
田中耕作 1985「所謂「三十稲場式土器」の成立について」『信濃』第 37 巻第４号
田中耕作 1989「三十稲場式土器様式」『縄文土器大観』第４巻　小学館、ほか

11）高橋　保 1992「縄文中期後半の沈線文を多用する土器群」『新潟考古学談話会会報』第 10 号
佐藤雅一 1999「原遺跡の研究（2）１．魚沼地方の縄文時代中期後半土器群の検討」『新潟考古』第 10 号ほか

12）口縁部の渦巻文やそこから垂下する懸垂文は、大木９式土器に見られる要素で、胴部の縦位懸垂文は加曽利Ｅ式的な要素と見ることができる。

13）前掲註３文献と同じ。

14）細田　勝 2008「加曽利Ｅ式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

15）永瀬史人 2008「連弧文土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

16）前掲註１文献と同じ。

17）池田　亨・荒木勇次 1988『万條寺林遺跡』塩沢町教育委員会

18）前掲註文献５と同じ。

第３節　津南町における周辺石材環境と石器組成の変遷

はじめに

津南町では、河川での石器石材調査が多く実施されてきた。今回は、新たな調査成果も踏まえて津南町周辺における石器石材環境についてまとめていく。

そして、津南町における縄文時代の石器組成の変遷を概観しながら、縄文時代中期の拠点的な集落である堂平遺跡と道尻手遺跡の立地や周辺の石材環境や石器組成を比較する事で、本遺跡の石材利用の特徴を示す。

また、良好な遺構から出土した石器を取り上げ、時期別の様相を概観する。

１．遺跡立地と周辺の石材環境について

本遺跡は、前述通り標高約 470m の高位段丘面の米原面に位置する集落遺跡である。東側に流れる釜川との比高差は、約 130 mである。標高差はあるものの石器石材となりうる頁岩・珪質頁岩産地の近くに位置している。本遺跡と比較対象とする道尻手遺跡は同じ町内に立地し、標高約 262m の貝坂面に位置する。信濃川の河床面との比高差は約 65m である。信濃川に近く、石器石材となりうる無斑晶ガラス質安山岩や頁岩、珪質頁岩の産地の中間地点に位置している。両遺跡とも河岸段丘上の広い平坦面に集落が形成されている（第 148 図）。

両遺跡とも拠点的な集落遺跡であり、本遺跡は大木８ａ式並行期新段階から形成され、大木 8b 式期～沖ノ原式期に遺構数・遺物数が多く検出される。道尻手遺跡は、大木７ｂ式並行期から形成され、大木８ａ式並行期～沖ノ原式期に遺構数・遺物数が多く検出される（註 1）。

継続時期や活動痕跡のピークも異なり、比較対象としては、誤差が大きいと想定されるが、道尻手遺跡は詳細な分析と報告がなされており、立地差からの石材産地との距離から石材獲得による石材の選択性や石材消費の在り方が異なる事が想定されるため比較対象とする（第 149 図）。

第 148 図　遺跡周辺図および周辺石材環境

遺跡名	堂平遺跡	道尻手遺跡
大木７ｂ式期		
大木８ａ式期		
大木８ｂ式期		
沖ノ原式期		
三十稲場式期		
南三十稲場式期		
加曽利Ｂ１式期		

第 149 図　遺跡継続時期グラフ

2．津南町における周辺石材環境について

1）信濃川周辺の石材調査史

津南町周辺および信濃川周辺の石材環境については、多くの石材調査が実施されている。その始まりは、「川原の石」調査グループによる信濃川水系の石の調査であろう（註2）。理科の教員による授業のための調査で、信濃川・魚野川の川原で定量調査を行っている。岩石学上からの見地のため考古学における石器石材との比較は難しいが、自然河川の石の様相が示された事が評価される。

その後、佐藤雅一によって考古学と岩石学の河川の様相が比較された。佐藤は、権現平遺跡の旧石器時代の石材組成と遺跡周辺の魚野川流域の河床礫の組成とを比較して遺跡と河床礫の石材組成が一致しない結果から、石器製作の石材利用において選定が行われている事を示した（註3）。

その後、津南町教育委員会によって、遺跡の調査と遺跡周辺の石材調査が実施され始める。岡修司は、石材調査から安山岩が志久見川、中津川、清津川、信濃川で、頁岩が清津川および信濃川合流点、凝灰岩が中津川上流部に産出する事を示した。頁岩が清津川のみで採集されることから原産地の可能性を示し、安山岩に緻密なものと粒子が荒く円形に近いものと区別され、使用される時期や石器にも言及している（註4）。

津南町教育委員会では石材調査が継続され、山本克は、岡の調査を踏まえてさらに多くの地点の津南町周辺の信濃川と支流の石材調査を行い、石器に使用可能な石材の分布傾向を示し、清津川に頁岩、中津川に凝灰岩、志久見川に安山岩（無斑晶質安山岩）が産出する事を示した。また、珪質頁岩に近いノジュールとしての頁岩が清津川において確認した事を示した（註5）。

山本は、さらに清津川水系、中津川水系、志久見川水系の露頭調査を進め、清津川水系では、芝倉沢林道地点において珪質頁岩や頁岩がデイサイト質軽石凝灰岩の露頭内に挟在することを確認し、その外皮についても言及している。中津川水系では、長野県栄村屋敷の河床において極めて稀に良質な珪質頁岩が組成することを確認し、志久見川水系では、無斑晶ガラス質安山岩の露頭が確認されるが、石器自体に使われた石材の確認には至っていない（註6）。

その後、引き続き露頭調査を行い、芝倉沢林道で上野層上部のデイサイト質の緑色凝灰岩質砂岩から良質な珪質頁岩がレンズ状に挟在することを確認し、破間川において、チャートを調査対象として露頭調査と河川踏査を行い石器石材として使用可能と思われる良質なものを多く確認している。志久見川では、露頭採取試料と石器試料の薄片の鏡下観察を行い、両資料がほぼ同一地質帯に由来する岩石であることを示し、さらなる露頭の調査の必要性を示している（註7）。

阿部昭典と倉石広太は、20か所の信濃川とその支流において石材調査を行い、周辺で採取される石材が遺跡で用いられた石器や配石に利用されていたことを想定し、石材環境についてまとめている。石材の入手に関して道尻手を中心として同心円状の距離を想定して、在地石材1、在地石材2、遠隔石材と設定し、使用石材と石器に選択された石材についてまとめている（註8）。

また倉石は、津南町を中心とした魚沼地域の石器石材について、石材調査をもとに石器石材の分布と旧石器時代から縄文時代の石器に使用される石材の選択性についてまとめている（註9）。

2）頁岩および珪質頁岩産地の石材調査

堂平遺跡において頁岩及び珪質頁岩製の石器が多く出土している。このため、これらの石材がどのように遺跡に搬入されたかを考える上で、頁岩系の石材の確認を目的として頁岩及び珪質頁岩が採取されると想定される魚野川水系と清津川水系 10 地点の石材調査を行った（第 150・151 図）。

調査は、当教育委員会担当者２人（倉石広太・佐藤信之）とパリノ・サーヴェイ株式会社、岩石肉眼鑑定者の石岡智武とともに現地河川および露頭調査を行った。

調査方法は、河床礫が多く分布する地点を対象とし、石材の分布調査、岩質観察、写真撮影、試料採取などを行った。試料採取では、石器石材に利用可能な岩質の礫の量を定量的に把握するために３名にて河川に沿う約 20 mの範囲を 15 分間踏査した。踏査後、採集した石材を見直し、大きさ、硬さ、節理の密度、剥離の状況などを観察し、優良な石材のみを選別した。

石材の肉眼鑑定は、石岡から野外用ルーペを用いて観察し、岩石名を鑑定して頂いた。今回の調査は、肉眼鑑定のみにとどまるため、鑑定された岩石名は概査的である。

魚野川水系では、駒形川、滝沢川、小久保沢、小黒川、大野川、仁田川を調査した。清津川水系では、清津川、宇登沢川、砥沢川、小松沢にて調査を行った（第 152 ～ 154 図）。

①駒形川神立スキー場脇：駒形川は津川層相当層の白板層が広く分布する。河床には、径 40cm 以下の角礫～亜角礫状の礫が散在し、頁岩、花崗岩類、流紋岩が多く、火山礫凝灰岩を伴う。石器に利用可能な石材として径７～ 18cm 程度の緻密質で黒灰色～灰色呈する頁岩および黒灰色の珪質頁岩が採取された。頁岩、珪質頁岩の質は良質で、石器石材に富む河川である。

②滝沢川：滝沢川は、津川層相当層の清津層が分布する。河床には、径 20cm 以下の亜円礫～亜角礫が主体となって分布する。礫種は火山礫凝灰岩、デイサイト質凝灰岩が多く、頁岩、安山岩、流紋岩も確認された。径 7cm 前後の黒灰色の頁岩が採取されたが、軟質で石器石材としては、粗悪の部類に属し適さないと考えられる。

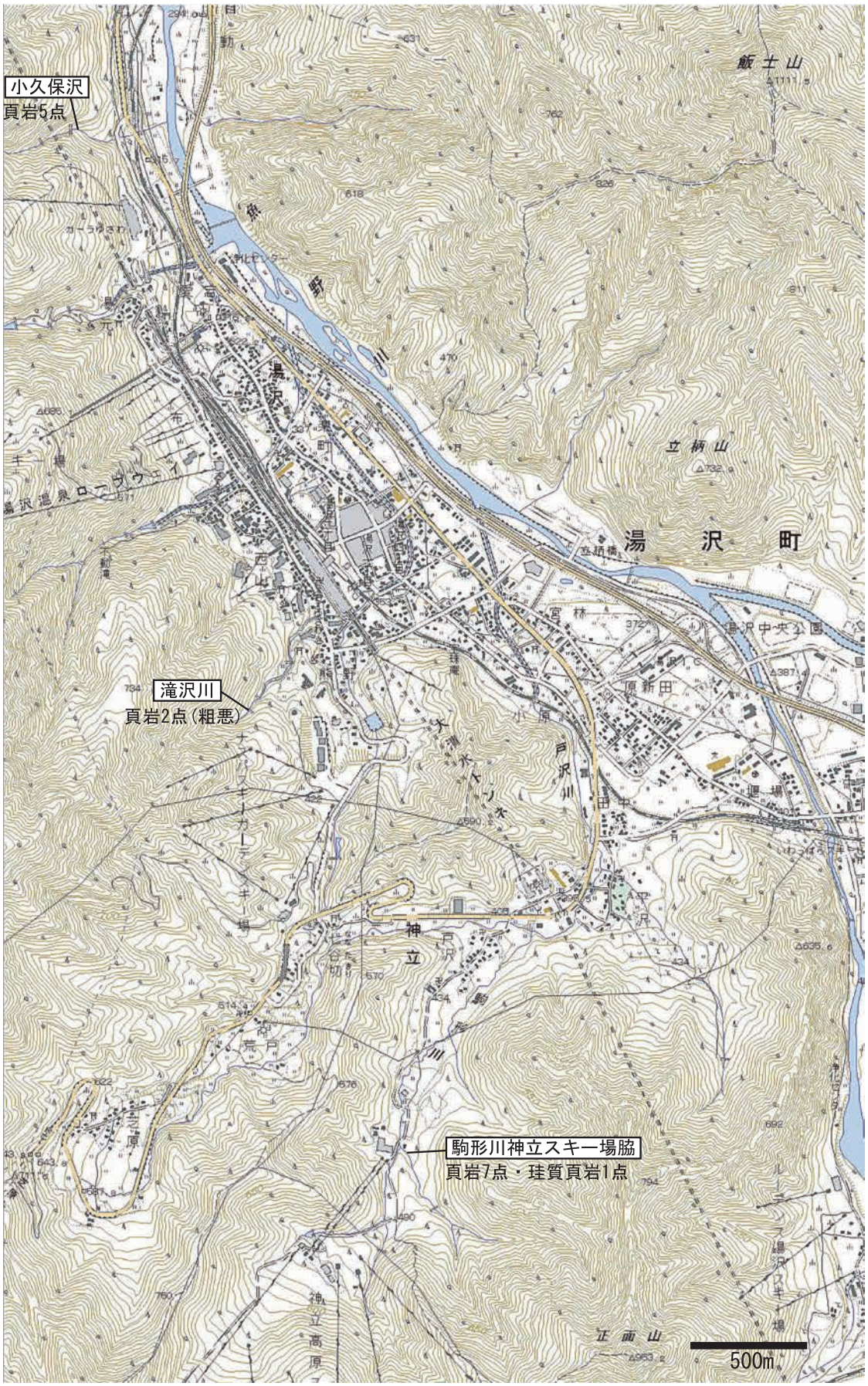
③小久保沢：小久保沢は津川層相当層の清津層が分布する。径 30 ～ 100cm 程度の亜円～亜角礫状を呈する礫が主に分布する。礫種は火山礫凝灰岩、安山岩が認められ、頁岩が僅かに伴う。径７～ 12cm 程度の緻密で黒灰色の頁岩が採取されたが、石器石材としては良質ではない。

④小黒川：小黒川は、清津層の頁岩・珪質頁岩互層が露岩している。黒灰色～灰色を呈する頁岩・珪質頁岩は比較的硬質で、石器石材として利用できる質感を有する。

⑤大野川：大野川は七谷層相当層の上野層が分布する。径 30cm 以下の角礫～亜円礫状の礫が主に分布する。礫種は安山岩、頁岩が多く、火山礫凝灰岩や緑色凝灰岩も認められる。径６～ 9cm 程度の黒灰色を呈する頁岩が採取されたが、石器石材としては質的には良質であるものの、径が小さいものが多く、利用が難しいと考えられる。

⑥仁田川:仁田川は七谷層相当層の上野層が分布する。径 40cm 以下の亜円～亜角礫状の礫が散在する。礫種は安山岩、火山礫凝灰岩、花崗閃緑岩、砂岩、デイサイト、頁岩、珪質頁岩である。径３～ 20cm 程度で淡灰色～黒灰色の頁岩が採集されるが、軟質で石器石材としては適さない。

⑦清津川：清津川は、上野層、清津層、葎沢層などが分布する。径 80cm 以下の円礫～亜円礫状の河



調査地点名の後には、20m区間の調査において採取された石材の種類・点数を示している。

第 150 図　調査地点位置図（1）

床礫が散在し、安山岩、花崗岩、火山礫凝灰岩、頁岩、凝灰岩、変質安山岩、閃緑岩などが認められる。径８～20cm 程度の淡灰色～黒灰色を呈する頁岩が採集された。この頁岩は表皮に粗粒～中粒砂の付着したマッドボール由来とみられるものも認められる。

⑧宇登沢川：宇登沢川は、椎谷層相当層の葎沢層が分布する。径 40cm 以下の角礫～亜角礫状の礫が分布し、安山岩、凝灰岩、頁岩、花崗岩が認められた。頁岩は小径で軟質粗悪な岩質であり、石器石材に適するものは採取できなかった。

⑨砥沢川：砥沢川は、七谷層相当層の上野層が分布する。径２m以下の角礫～亜角礫状の河床礫が分布する。頁岩、安山岩、凝灰岩、火山礫凝灰岩、花崗岩類が認められる。径 40cm 以下の淡灰色～灰黒色を呈する頁岩と黒灰色～褐黒色の珪質頁岩が採取された。硬質で、節理はほとんどなく、石器石材として適すると考えられる。

⑩小松沢：小松沢は七谷層相当層の上野層が分布する。径 80cm 以下の角礫～亜角礫状の礫が分布し、頁岩、安山岩、デイサイト、凝灰岩、花崗斑岩が認められる。径７～ 10cm の灰色～黒灰色を呈する頁岩が採集されるが、軟質粗悪質で石器石材として適さないものである。

調査の結果から、魚野川水系では、駒形川や小黒川で頁岩が採取できるものの、その他の河川では、軟質で、粒径も小さいことから石器に利用できるものは少ない。

清津川水系の砥沢川では頁岩、珪質頁岩が採取され、石器の利用に適していると考えられる。河床礫が頁岩で構成され、礫も亜角礫で粒径は 30cm ほどで、上流部に露頭がある可能性がある。

ただ、今回の調査は、各支流にて２日間程度の調査であり、調査時間は数時間に過ぎない。これは、当時の石材入手にかけた時間に対して微々たる時間に過ぎず、未だ見つけることが出来ない石材産地がある可能性もあり、今回の調査において石器石材が採取できない河川においても、引き続き調査が必要である。また、ほとんど全ての河川に砂防ダムが建設され、一部は護岸工事が行われており、縄文時代の石材供給の様子を示していない可能性も考えられる。

３）頁岩の外皮の特徴について

信濃川の支流である清津川では、頁岩を含有する地層が分布し、清津川やその水系である釜川、芝倉沢、砥沢川などで頁岩や珪質頁岩が河床や川原、露頭において採取可能である（註 10）。

また、清津川右岸にも大沢層があり、段丘礫層の中からマッドボール状の白色の脆い外皮に覆われ、内部は黒色の緻密で石器石材にとしても良質と考えられる石材が見つかっている（註 11）。

遺跡から出土する頁岩、珪質頁岩の外皮は、２種類に大別する事が出来る（註 12）。１つ目は、砂粒が付着し砂利などが抜けた跡があり外皮に凹凸があるものである。上述のマッドボールやノジュールによるものと考えられ、肌色もしくは黄土色を呈して凝灰岩質である（第 155 図写真１．３参照）。２つ目は、表面が平滑で光沢があり、茶色もしくはこげ茶色や褐色を呈しているものである（第 155 図写真２．４参照）。後者は、清津川の本流や支流などで採取する事が可能で、河川による摩耗や風化によって形成したと考えらえる。また、扁平でズリ状のものも出土している。

今後は、この２種類の外皮を持つ頁岩、珪質頁岩が採取可能な河川や露頭の調査が必要である。

調査地点名の後には、20m区間の調査において採取された石材の種類・点数を示している。

第 151 図　調査位置図（2）

1. 駒形川神立スキー場脇　河床礫分布状況

2. 駒形川神立スキー場脇　白板層頁岩・珪質頁岩

3. 滝沢川　河床礫分布状況

4. 滝沢川　清津層頁岩

5. 小久保沢　河床礫分布状況

6. 小久保沢　清津層頁岩

7. 小黒川　河床露頭

8. 小黒川　清津層珪質頁岩

第 152 図　現地調査（1）

9. 大野川　河床礫分布状況

10. 大野川　上野層頁岩

11. 仁田川　河床礫分布状況

12. 仁田川　上野層頁岩

13. 清津川本流　河床礫分布状況

14. 清津川本流　頁岩

15. 宇登沢川　河床礫分布状況

16. 宇登沢川　瀑沢層安山岩

第 153 図　現地調査（2）

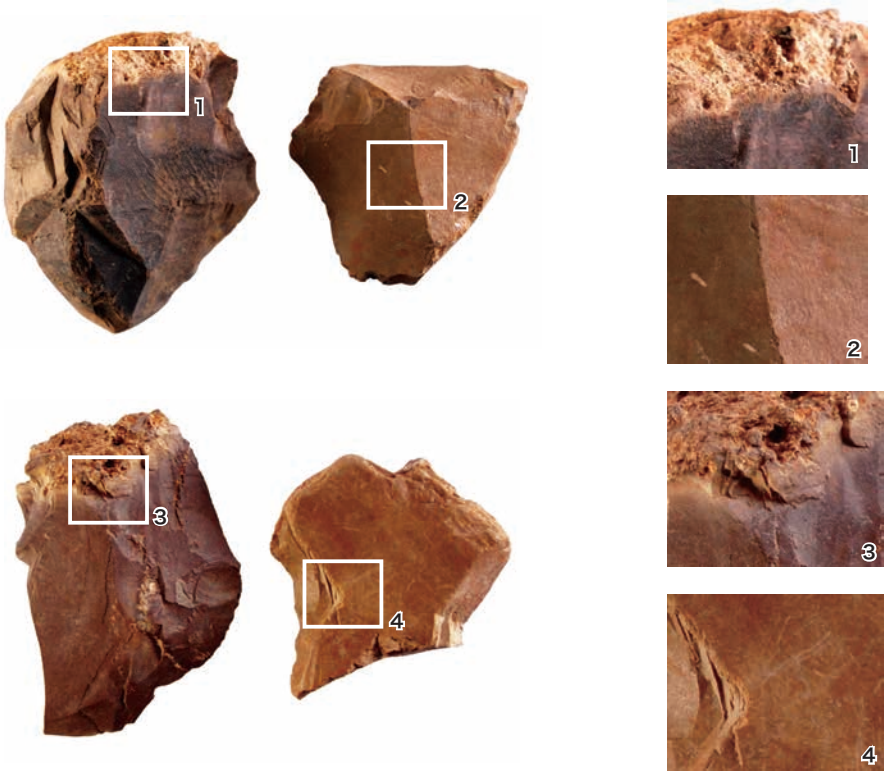
17. 砥沢川　河床礫分布状況

18. 砥沢川　上野層頁岩・珪質頁岩

19. 小松沢　河床礫分布状況

20. 小松沢　上野層頁岩

第 154 図　現地調査（3）



第 155 図　十日町市清津宮峰遺跡出土外皮を有する頁岩製剥片

4）小結

これまでの津南町周辺の石材調査をまとめ、新規に行った石材調査について述べた。その結果、清津川水系において、新たな頁岩・珪質頁岩が採取可能な河川を確認した。そして、遺跡から出土する頁岩の外皮の様相にいくつかの特徴があることが判明した。

今後は、これら遺跡から出土する石器の外皮を比較し、念頭に置きながらの石材調査が必要である。

また、津南町周辺の剥片石器素材の石材の分布調査成果は上がっているが、無斑晶ガラス質安山岩などの科学組成を示すための分析や礫石器や石製品の素材となる石器石材の在り方は不明瞭であるため、さらなる調査・分析を進めていく必要がある。

3．津南町における縄文遺跡の石器組成変遷について

津南町は、新潟県内陸山間部に位置する。すでに鈴木俊成によって、狩猟･漁労具を石鏃･尖頭器･石錘、採取・加工具を石錐・打製石斧・磨製石斧・篦状石器・三脚石器・板状石器、調理具を磨石類・石皿・石匙と前提として県内の縄文時代を通時的に分析している（註 13)。

その結果、新潟県内中央部山間地域をブロック３とし、早期では、採取・加工具の一番割合が多く、次いで調理具、狩猟・漁労具が多い「採取・加工具＞調理具＞狩猟・漁労具型」となり、前期では、「調理具＞採取・加工具＞狩猟・漁労具型」。中期中葉では、打製石斧の出土が増加し「採取・加工具＞調理具＞狩猟・漁労具型」。中期後葉になると、打製石斧の出土が減少し始め、「調理具＞採取・加工具＞狩猟・漁労具型」となる。後期になると、「調理具＞採取・加工具＞狩猟・漁労具型」、「採取・加工具＞調理具＞狩猟・漁労具型」、「狩猟・漁労具＞調理具＞採取・加工具型」など遺跡によってパターンが変化してくる。晩期では、「採取・加工具＞狩猟・漁労具＞調理具型」と「狩猟・漁労具＞調理具＞採取・加工具型」に分かれ、石鏃の出土が増加する傾向にある事を示している。津南町における石器組成の傾向も同様であることが想定される。

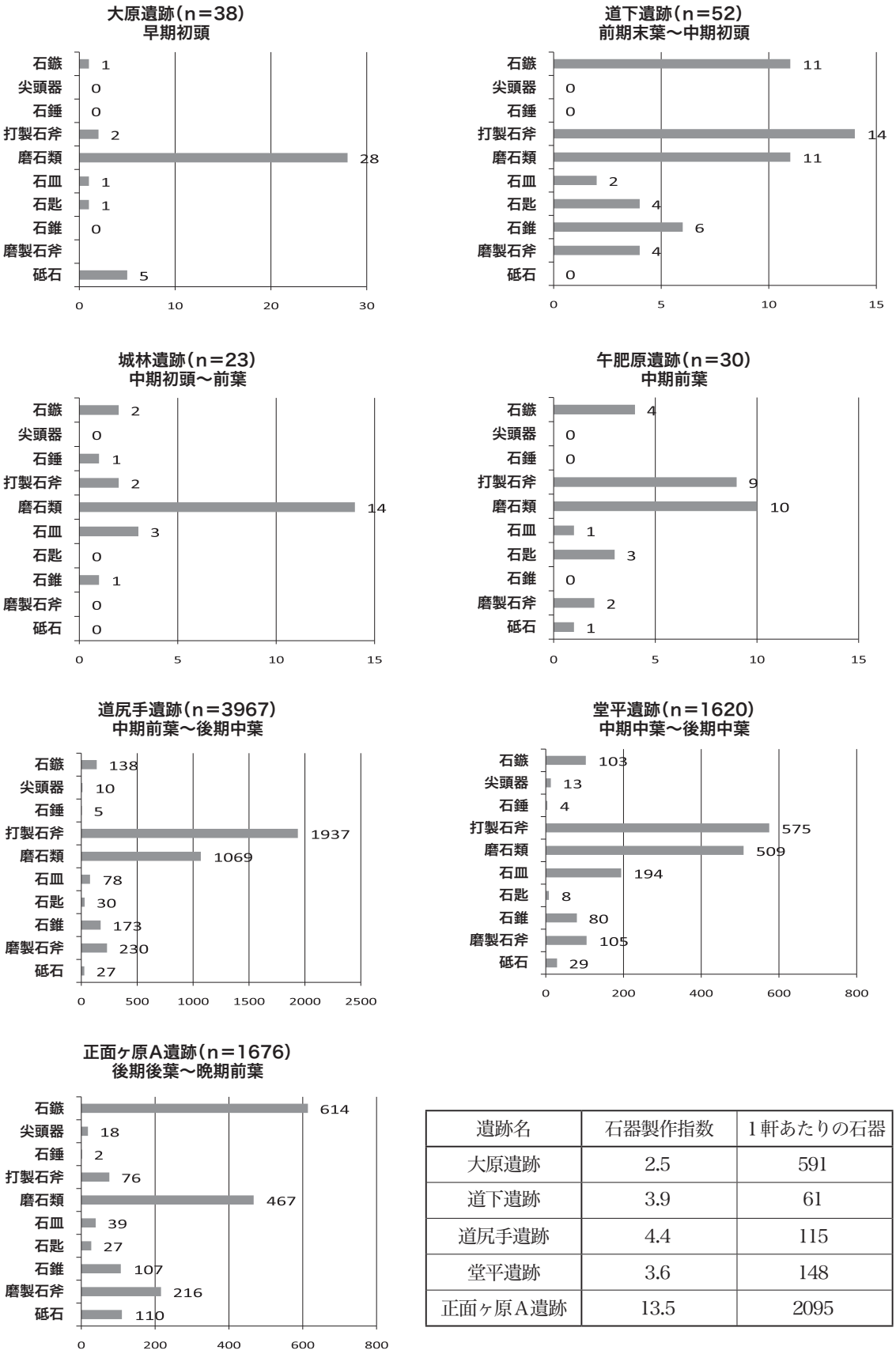
これまでの報告書をデータベースにした石器組成は分類基準の統一性がなく比較する事は難しい。同じ精度での調査と同じ分類基準で集計したデータが存在すれば、1 つの場所あるいは地域で通時的にデータを採る定点法や定時法による石器組成の比較が可能となる（註 14)。

倉石は、道尻手遺跡を中心として魚沼地域の石器組成をまとめ、地域を細分し、狩猟･漁労具、調理具、採取・加工具について大木 7b 式期から南三十稲場式期までの変遷をまとめ、大木 8b 式期以降の打製石斧の減少から組成変化、器種形状の地域差を示した（註 15)。

津南町の近年の調査による報告では、同じ精度での調査と報告データがある。これらを使って、津南町における石器組成の変遷を概観してみたい（第 156 図)。

対象とする遺跡は、大原遺跡（早期初頭)、道下遺跡（前期末葉～中期初頭)、城林遺跡（中期初頭～前葉)、午肥原遺跡（中期前葉)、道尻手遺跡（中期前葉～後期中葉)、堂平遺跡（中期中葉～後期中葉)、正面ヶ原Ａ遺跡（後期後葉～晩期前葉）の７遺跡である（註 16)。遺跡の規模や性格によって石器出土数や器種が異なるものの、共通して出土する器種の様相の傾向は伺えると考える。

組成を見てみると、磨石類の出土点数が全ての遺跡において上位３位内に入っており、磨石類を利用



遺跡名	石器製作指数	1軒あたりの石器
大原遺跡	2.5	591
道下遺跡	3.9	61
道尻手遺跡	4.4	115
堂平遺跡	3.6	148
正面ヶ原A遺跡	13.5	2095

第 156 図　津南町における主な遺跡の石器組成

する活動が、対象とする遺跡において通時的に行われていた傾向が見て取れる。

大原遺跡と城林遺跡では、磨石類が一番多く出土し、道下遺跡と午肥原遺跡では、石鏃、打製石斧、磨石類の出土量が同量で多く出土している。道下遺跡では打製石斧が多く出土しはじめ、打製石斧の出土量の増加は、前期末葉～中期初頭頃から始まったことがみてとれ、道尻手遺跡、堂平遺跡でも磨石類よりも打製石斧が多く出土している。正面ヶ原A遺跡では、打製石斧の出土が減少し、石鏃が多く出土し、次いで磨石類や磨製石斧が多く出土している。

石器製作頻度について検討を行う（註17）。石器製作指数とは、石器1点当たりの剥片類の数を示したもので、剥片＋石核＋原石÷石器の公式で出し、遺跡内外での石器製作の傾向を捉える。

住居1軒あたりの石器数は、製作＋消費の頻度を示す。数値差異は生業形態の差異と考えられる。その結果、同時期でも、道尻手遺跡では、石器製作指数は高いが1軒あたりの石器保有数は少なく、堂平遺跡では、1軒あたりの石器保有数は高いものの石器製作指数が低いことがわかる。

また、正面ヶ原A遺跡の石器製作頻度および保有数が非常に高い値となっている（第156図）。

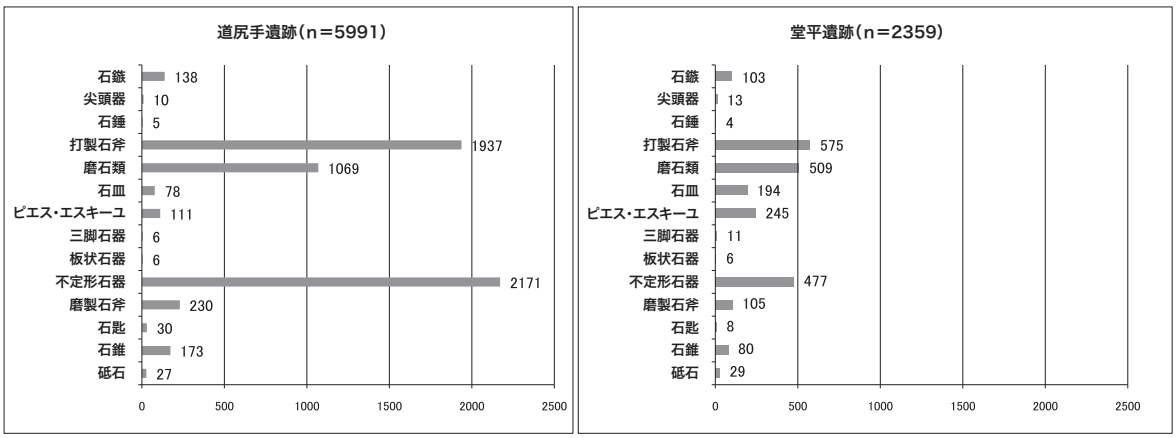
4．堂平遺跡と道尻手遺跡の比較

1）堂平遺跡と道尻手遺跡の石器組成比較

堂平遺跡（以下堂平と省略する）と道尻手遺跡（以下道尻手と省略する）の石器組成をさらに詳細に比較し、石材利用の様相や珪質頁岩製の石器の特徴、遺構から出土しある程度時期判別が可能な石器を抽出し比較することで当該期の石器の様相を明らかにする。

前述通り、時期幅の長い纏まりとなるが、両遺跡の出土した定形石器の点数はグラフの通りである（第157図）。両遺跡とも、打製石斧（堂平24%、道尻手32%）、磨石類（堂平21%、道尻手17%）、不定形石器（堂平20%、道尻手36%）が多く出土し、全体の60%以上を占めている。

両遺跡を比べて、道尻手では、打製石斧、不定形石器、石匙（堂平0.3%、道尻手0.5%）の割合が多いが、磨石類、ピエス・エスキーユ（堂平10%、道尻手1.8%）、石皿（堂平8.2%、道尻手1.3%）、石鏃（堂平4.3%、道尻手2.3%）は、堂平が道尻手より多い割合を示す。石錐（堂平3.3%、道尻手2.8%）、磨製石斧（堂平4.4%、道尻手3.8%）、三脚石器（堂平0.4%、道尻手0.1%）、板状石器（堂平0.2%、道尻手0.1%）、石錘（堂



第157図　堂平遺跡と道尻手遺跡の石器組成グラフ

平 0.1%、道尻手 0.08%)、砥石（堂平 1.2%、道尻手 0.4%）は、ほぼ同様の点数と割合から、これらの石器に関わる活動は同程度の頻度でおこなわれていた可能性がある。

両遺跡とも打製石斧と磨石類を利用する活動を中心として、道尻手の方がその活動が多く行われた可能性があり、堂平では、石鏃、ピエス・エスキーユと石皿を利用する活動は道尻手に比べ多く行われた可能性がある。両遺跡とも不定形石器、打製石斧、磨石類が遺跡出土の石器の大半を占めるが、道尻手がその他の器種の石器が少ない傾向にあり、堂平では不定形石器、打製石斧、磨石類の割合が減り、道尻手に比べ多様な器種が出土する傾向にある。

打製石斧の側縁加工の比較をすると、道尻手では、片面加工と両面加工で表裏面からの剥離がされたものが多く出土し、片面加工から両面加工への変化があるのに対して、堂平では、片面加工のものがある一定の量を保持しつつ、両面加工のものをもつ傾向にある。

両遺跡とも表裏面からの剥離から側縁を剥離する両極打撃のものへの技術変化があり、分銅形の打製石斧の出土は少なく主体とならない。

磨製石斧の形態の比較では、倉石によると短冊形は、新潟および富山県境地域に、撥形は上越地域に製作遺跡を求める事ができる（註 18)。道尻手では、大形中形では、短冊形よりも撥形が２倍以上多く出土し、小形では同数の割合で出土している。このことから、距離の近い上越地域から道尻手にもたらされたと考えられている。堂平では、長幅比が２：１となるもの、短冊形が主に出土している。けれども、刃部再生されたものの長幅比が 1.5：1 に近くなり、撥形状になる傾向ある。

２）両遺跡の石材の利用について

堂平では､在地石材である珪質頁岩Ｂ(4864 点 73458.8 ｇ)と頁岩(2891 点 91276.9 ｇ)､凝灰岩質頁岩(1141 点 38721.2 ｇ）といった頁岩系石材が多く出土している。非在地石材では、珪質頁岩Ａ（417 点 3419.5 ｇ）が最も多く出土している。もう一つの在地石材である無斑晶ガラス質安山岩（1130 点 20483.2 ｇ）に比べて頁岩類が多く使用されている（前述第 6 表石器石材組成表参照)。

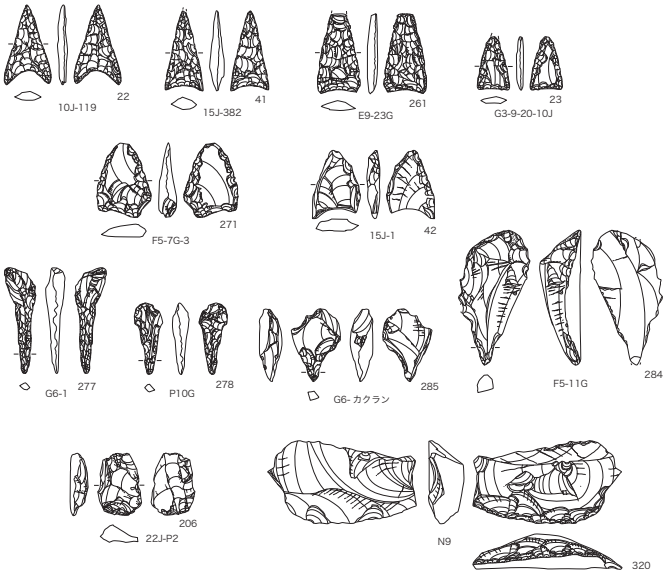
道尻手でも、頁岩が 2103 点出土と一番多く出土している。無斑晶ガラス質安山岩も 1659 点出土し、堂平に比べ頁岩と無斑晶ガラス質安山岩の利用頻度に差が少ない。

この様相の理由は、遺跡の立地に起因が想定される。堂平は、高位段丘米原面に立地しており、比高差はあるものの遺跡の段丘崖下には清津川が流れ、直線距離では非常に近く約 3km を測る。

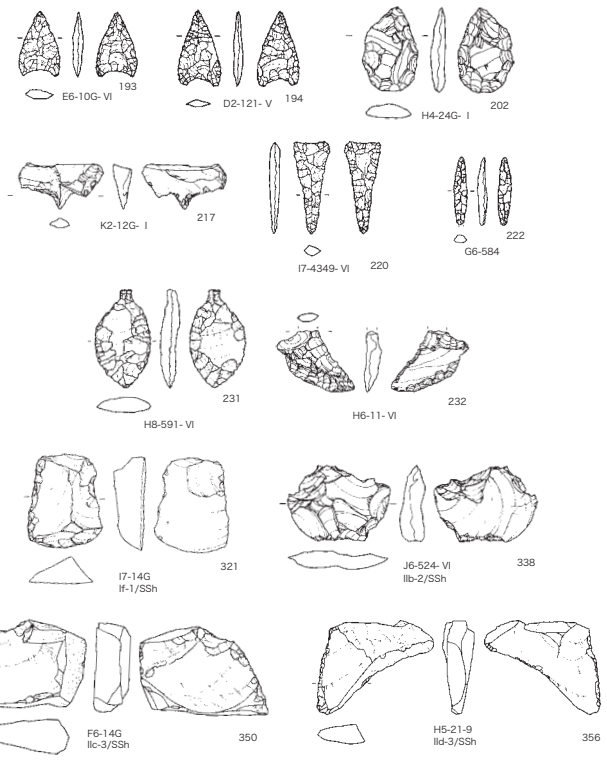
けれども、無斑晶ガラス質安山岩が採取できる志久見川からは、約 10km も離れている。それに比べ道尻手は、清津川も志久見川も同じ程度離れた場所に立地しており、頁岩と無斑晶ガラス質安山岩が採取できる河川との距離が遺跡内における石材の使用頻度に現れていると考えられる。

非在地石材である黒曜石は、堂平から 71 点 285.5 ｇ出土し、その内 16 点が石器として石鏃、石錐、不定形石器に使用され、その他は剥片や石核、チップである。原石や石核が出土していることからも黒曜石が遺跡内に製品として持ち込まれたのではなく、石器製作が行われた事を示している。71 点中５点をパリノ・サーヴェイ株式会社による原産地分析の結果、星ヶ塔産が３点、小深沢またはアゼリア地区産が２点であり、黒曜石が信州地域からもたらされた事を示している。

道尻手では、黒曜石 26 点（註 19)、珪質頁岩 176 点が出土している。これらの石材で製作される石器



第 158 図　堂平遺跡出土の珪質頁岩製石器



第 159 図　道尻手遺跡出土の珪質頁岩製石器

は堂平遺跡と同様の傾向がある。

非在地石材の珪質頁岩Aは、新発田地域や東北地方の山形県周辺から採取が可能とされる石材である。この珪質頁岩は、石鏃、石錐、ピエス・エスキーユ、不定形石器などの剥片石器に使用され、石核や剥片の出土量も多く、製品だけが遺跡内に持ち込まれただけではなく、石器製作が行われた事を示す。堂平と道尻手から出土した珪質頁岩製石器を概観する（第158・159図）。

珪質頁岩A製の石鏃は、凹基無茎である傾向が高く、珪質頁岩Bでは、凹基無茎、平基無茎など多種形態が作られる傾向があるのに対して、形態の統一性が見て取れる。石錐では、全体的には小形・中形の剥離を機能部の一部分にするものが多いのに対して、押圧剥離による機能部が作出するものが他の石材に比べて多く、石鏃同様石材による加工のしやすさから両面加工が器体全面に施されるものが多いと考えられる。ピエス・エスキーユでは、２極１対の剥離のものが４極１対に比べ圧倒的に多くこの傾向は珪質頁岩A、珪質頁岩B、頁岩、無斑晶質ガラス質安山岩と変わらない。堂平では、珪質頁岩A製石匙は出土していないが、道尻手では、周縁のみの細部調整縦形石匙と全面細部調整横形石匙が出土している。不定形石器は、その他の石材と同様な傾向であるが、ある一定数の出土が見られ、縦長剥片の片側側縁に加工が施される。横長剥片では末端部、片側縁、複合的（打面部、末端部、片側縁）に加工が施される。横長剥片製のものが多い傾向にある。

以上、両遺跡を比較から珪質頁岩が使用される器種は共通する傾向があるものの、石材によって形態差を持つ器種（石鏃、石錐）と持たない器種（ピエス・エスキーユ、不定形石器）がある。そして、どの石器の機能部においても、押圧剥離などの連続した剥離が見て取れ、石鏃では、黒曜石製のものと同様、基部の抉りが深くなる傾向あり、石材の特性に起因すると考えられよう。

３）各期の石器様相

堂平において１期～４期と分類した住居址から出土した石器を、遺構の時期に準じて抽出を行い、縄文時代中期から後期に比定される石器を概観する（第160図）。

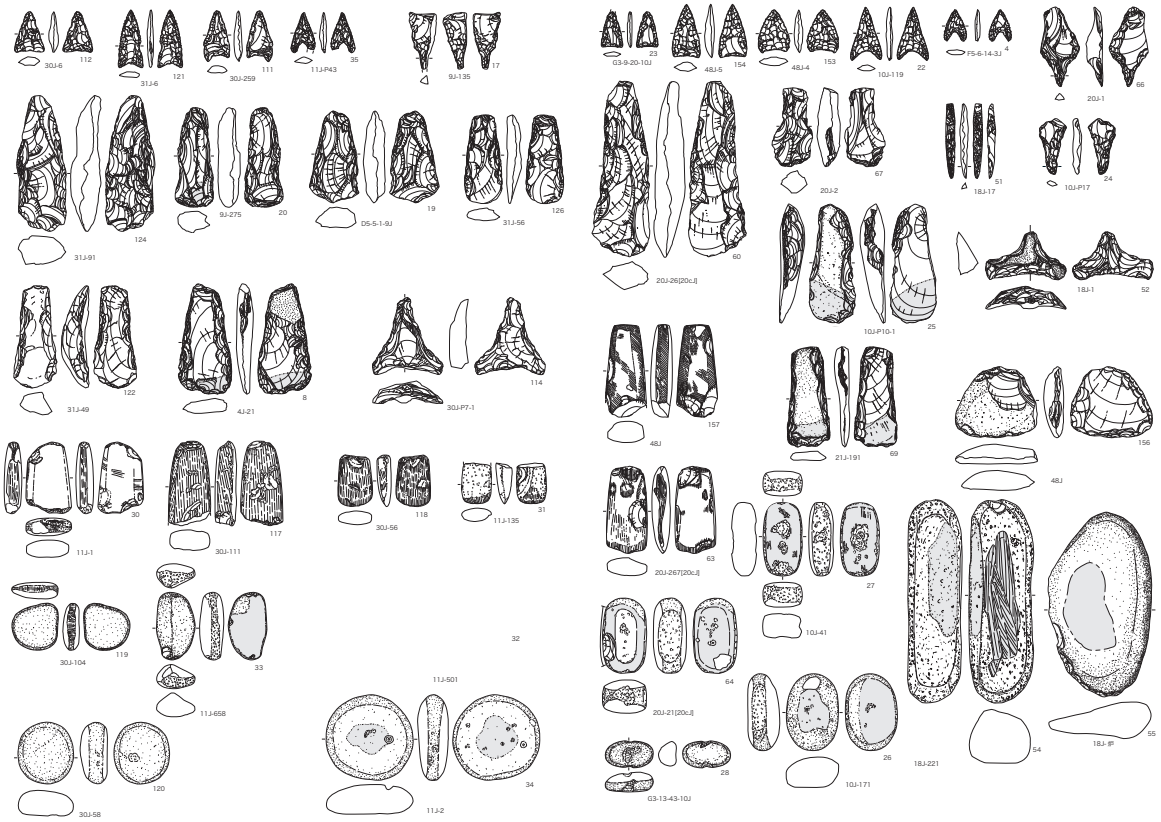
堂平の１期は、大木８ａ式並行期、２期は大木８ｂ式並行期、３期は、沖ノ原式期、４期は三十稲場式期である。道尻手では、１期をⅣ期、２期をⅤ期、３期がⅥ期、４期がⅦ期に対比される。

１期は、堂平９号住居跡（以後○住と省略する）、11住、30住、45住出土の石器から抽出した。

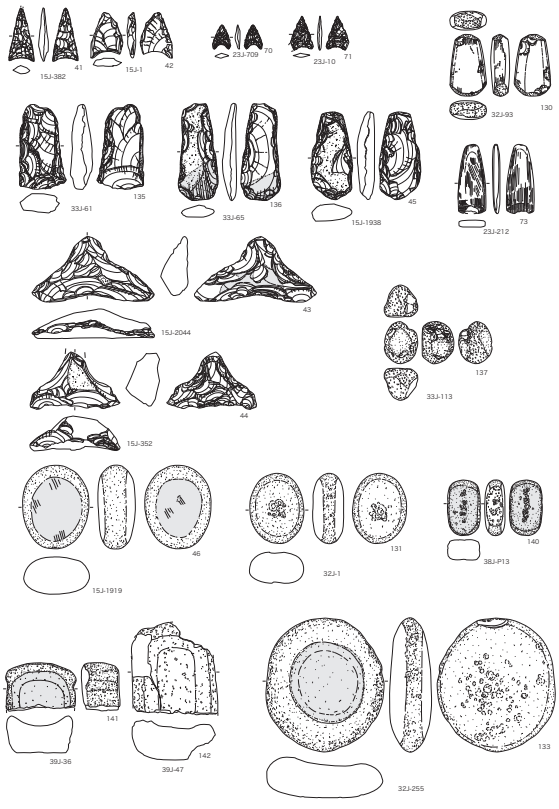
１期は石鏃、石錐、打製石斧、三脚石器、磨製石斧、磨石類が出土している。打製石斧と磨石類の２器種が多く出土する傾向にあり、これは道尻手のⅣ期と同様の傾向である。石鏃は、両面加工で平基と凹基があり、凹基では抉りが浅いものと深いものがあるが、道尻手では凹基の抉りが深いものが多く出土する。打製石斧は、断面が厚く両面加工のものと一部石材の外皮が残り主要剥離面を残し、断面が反るものが見られるのに対して、道尻手では、片面加工によって成形されたものが多い。磨製石斧は、断面形状が定角を呈する定角式磨製石斧が出土している。磨石類は、円形、楕円形を呈するものが出土、敲石や凹石も出土している。

２期は、堂平18住から出土した石器を抽出した。道尻手では、Ⅴ期に比定される。

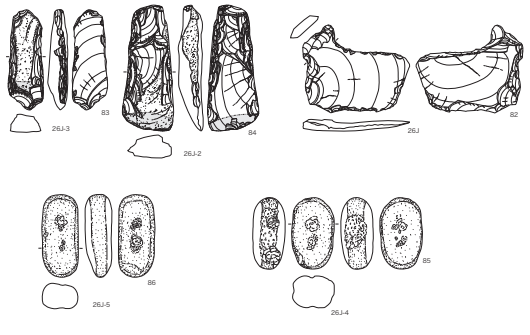
石鏃や石錐、打製石斧、三脚石器、板状石器、磨製石斧、磨石類、石皿が出土しており、器種、数量とも豊富な様相を示していることは、両遺跡に共通する。石鏃では、両遺跡とも平基や凹基の抉りが浅



1期出土石器様相　　2期出土石器様相



3期出土石器様相



4期出土石器様相

第 160 図　堂平遺跡時期別石器の様相

いものが多い傾向にあり、前時期と異なる様相を示す。石錐は形態が増え、打製石斧では両面加工と片面加工のものが両方あり、道尻手では、両面加工のものが増加傾向にあり、形態、製作の変化があったと考えられる。三脚石器や板状石器の出土が見られ、磨製石斧は定角式で変わらない様相を示し、円形、楕円形のほかに隅丸方形の磨石類や石皿も出土している。

3期は、堂平32住、38住、50住、59住から出土した石器を抽出した。道尻手では、Ⅵ期に比定される。堂平では、前時期に比べ出土数は減少傾向にあるが、石鏃、打製石斧、三脚石器、磨製石斧、磨石類、石皿と器種やその形態は多種が出土しているのに対して、道尻手では、器種は少ないものの出土数量は最も多い時期である。石鏃は凹基で抉りが浅いものが主要を占め、打製石斧は、堂平では片面加工のものが、道尻手では両面加工のものが多い傾向となり、円形と隅丸方形を呈する磨石類、多面体敲石、縁を持つ方形と円形の石皿が出土している。

4期は、堂平26住から抽出した石器である。道尻手では、Ⅶ期に比定される。両遺跡とも出土数も少なく、打製石斧と石匙、磨石類が認められるだけである。打製石斧は外皮を残す片面加工のもの、石匙は周囲を加工し摘み部と刃部を成形したものが出土している。

以上、堂平では、1期と2期において豊富な資料が出土し3期がそれに続くが4期ではほとんど見られない。道尻手においても、1期と2期において出土遺物の量、器種共に多様性が見られる。3期においては、遺構数は多いものの遺物量が減少する。4期では、堂平同様良好な資料が見られない。両遺跡とも各期の石器様相から形態については、同様な傾向が認められた。

けれども、石鏃の基部加工について道尻手では1期から2期にかけて基部形状の変化が認められるのに対して、堂平ではそのような形態変化は認められない。また、打製石斧についても堂平では両面加工のものが減少し、外皮をもつ片面加工のものが増加する傾向にあるのに対して、道尻手では片面加工のものが減少し、両面加工のものが増加して主体となり、さらに側縁加工にも変化がみられるなど、時期によって形態差などが認められた。

5．まとめ

津南町周辺の信濃川とその支流域における石材環境および石器組成の変遷、堂平遺跡と道尻手遺跡の石器組成や石材と石器の様相について比較を行った。

前述の通り、堂平では道尻手に比べ石材の様相が異なる。特に剥片石器の素材となる頁岩系石材と無斑晶ガラス質安山岩の利用頻度については、堂平では頁岩系石材が多く出土し、道尻手では、同程度の使用頻度であるという差がみられた。これは、石材調査からも堂平に近接する清津川流域において頁岩・珪質頁岩が採取されることが再確認され、この流域が石材産地として求められることからも、周辺の石材環境による石材利用の差として現れたと考えられる。

無斑晶ガラス質安山岩は信濃川でも採取することが可能である。また、頁岩も信濃川と清津川の合流点からも採取可能である。石材の粒径の問題はあるものの信濃川から入手したと考えるならば、道尻手では信濃川へ下りることのできる地点と、信濃川と清津川の合流点はどちらも2～3kmと同距離に位置しているため石材獲得コストが同等と想定され、それが、無斑晶ガラス質安山岩と頁岩の同等の使用頻

度に反映されたと考えられる。

けれども、堂平は、比高差があるものの圧倒的に清津川が近く、信濃川や無斑晶ガラス質安山岩の産地である志久見川流域からは離れている。この差が、頁岩系石材を多用する様相に現れる。両遺跡の石器組成は類似するが、遺跡の立地や周辺自然環境によって、石材の利用が変化するのである。これは、時期によっても異なる可能性もあり今後の課題としたい。

縄文時代の津南地域における石器組成の傾向は、どの遺跡も磨石類の出土量が多く、磨石類を利用した活動が想定されるが、磨石類とともに出土量の多い石器によって、その時期の様相や傾向が見て取れた。特に石鏃と打製石斧の量の増減が、組成割合に反映される傾向にある。堂平と道尻手の比較においては、両遺跡とも打製石斧と磨石類の割合が多く占めるが、道尻手に比べて堂平では打製石斧の割合が少なく、磨石類の割合が高く、石皿の割合が６倍、石鏃が２倍となるなど、この石器組成の差から、両遺跡の遺跡立地の差からも反映されて活動の差が想定される。

この点を要因として、打製石斧の製作の在り方にも差が見て取れる。１期の堂平では片面加工のものよりも両面加工が主体となるのに対して、道尻手では片面加工のものが主体となる。２期以降、堂平では片面加工のものが主体になっていくのに対して、道尻手においては両面加工が主体となる。けれども、両遺跡とも表裏面からの剥離による両面加工から側縁への両極加撃による両面加工のものへとの技術変化する点が共通する。

両極加撃による両面加工の打製石斧の製作は、薄手の素材さえ揃えば容易に製作が可能である。しかも、素材獲得の過程において外皮を残す素材も作られる（註 20)。堂平における打製石斧の石器組成の割合の低さや片面加工や側縁加工のものが多いという形態の差は、打製石斧の利用比重が道尻手に比べ低かった事が想定される。

堂平、道尻手における珪質頁岩製石器は、両遺跡とも同様の器種に使用され、形態に関しても同様な傾向がある器種があり、石鏃の基部の抉りの深さや石錐の機能部先端の剥離などにおいて珪質頁岩の特性としての押圧技術を用いる剥離など細かい剥離による製作や形態がみてとれた。

今後は、その他石材の利用との比較が必要であるが、石材の特性による形態や製作技術が想定される。課題としたい。

以上、雑駁ながら津南地域の石材環境と石器の様相についてまとめたが、不明な点は多く、今後も石材調査と石器分析を関連付けて継続的に続けていく必要があると考える。

なお、今回の石材調査および石材鑑定については、パリノ・サーヴェイ株式会社の石岡智武氏の報告書に基づいて要約および改変を行った。

註　釈

1）阿部昭典　2006「馬高式期の集落遺跡の特色」『火焔土器の時代―その文化を探る―』津南學叢書第４輯　津南町教育委員会　43 － 45 頁
阿部昭典　2008『縄文時代の社会変動論』未完成考古学叢書⑥　アム・プロモーション

2）「川原の石」調査グループ　1977「信濃川水系の石をたずねて」新潟の自然　第３集　新潟の自然刊行委員会　63 － 74 頁

3）佐藤雅一　1985「第Ⅳ章まとめ」『関越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　下倉山城跡、権現平遺跡、両新田遺跡』新潟

県教育委員会　55 － 56 頁

4）岡修司他 1988「第 3 章第 1 節D．周辺の石材環境」『堂尻遺跡群試掘調査報告書』津南町教育委員会　76 － 78 頁

5）山本　克 2000「第 1 章第 2 節 4．周辺石材環境」『下モ原 I 遺跡』津南町教育委員会　25 － 29 頁

6）山本　克 2003「Ⅲ . 周辺の石材環境」『町内遺跡試掘確認調査報告（3）＜大井平池周辺遺跡群＞』津南町教育委員会　5 － 12 頁

7）山本　克 2006「Ⅱ．貝坂桐ノ木平遺跡群とその周辺の石材環境」『貝坂桐ノ木平遺跡群＜旧石器時代編＞』津南町教育委員会　21 － 28 頁

8）阿部昭典　2005 「第 3 節　周辺の石材環境」『道尻手遺跡』津南町教育委員会　6 － 7 頁

9）倉石広太　2007 「魚沼地域の石器石材」『第 21 回東北旧石器を語る会　予稿集』 東北旧石器を語る会　58 － 65 頁

10）倉石広太　2005「第 5 節　信濃川上流域における石器群の様相について」『道尻手遺跡』 津南町教育委員会　311 － 324 頁

11）十日町市教育委員会笠井洋祐氏よりご教示頂いた。

12）参考資料として十日町市清津宮峯遺跡出土剥片提示する。清津宮峯遺跡は、清津川右岸の立地し、多数の外皮を持つ頁岩製剥片が出土しており、その外皮の外面の様相は多様である。

13）鈴木俊成 1999「早期から晩期の石器組成」『新潟県の考古学』新潟県考古学会　167-172 頁

14）大工原豊 2008『縄文石器研究序論』 六一書房

15）前掲註 10 参照のこと。

16）村山繁・佐藤雅一・長沢展生　1997『午肥原地区遺跡確認試掘調査報告書』津南町教育委員会
佐藤雅一・成田健太郎 1999『午肥原遺跡・大原遺跡』津南町教育委員会
佐藤雅一・原ひろみ　2000『道下遺跡　縄文時代編』津南町教育委員会、前掲註 7 参照のこと
佐藤信之　2010「正面ヶ原A遺跡と周辺地域の石器の在り方」『正面ヶ原A遺跡から垣間見る縄文社会 - 北信越の縄文時代後期後葉から晩期前葉 -』津南學叢書第 13 輯　津南町教育委員会　78 － 83 頁

17）前掲註 13 参照のこと

18）倉石広太 2006「馬高式期の石器」『火焔土器の時代―その文化を探る―』津南學叢書第 4 輯　津南町教育委員会　66 － 69 頁

19）中期では星ヶ塔産主体で、後期では、小深沢山の割合が増え星ヶ塔産と同数程度になる。
菅頭明日香・建石徹・二宮修治 2006「縄文時代における新潟県内遺跡出土黒曜石資料の原産地推定」『火焔土器の時代―その文化を探る―』津南學叢書第 4 輯　津南町教育委員会　84 － 86 頁

20）青梅市郷土博物館　2007　企画展図録『誰もができた石器作り　～石器製作技術展～』
伊藤博司　2007 「打製石斧の製作」『縄文時代の考古学 6　ものづくり』 同成社　15-24 頁
久保田正寿氏より、信濃川で石材を採取し、両極敲打技法による打製石斧作りをご教授頂いた。

第４節　炉形態の変遷および複式炉構築法と使用痕跡

１．はじめに

堂平遺跡から検出された炉形態は、本文中第Ⅳ章第３節で５類に分類した。信濃川流域の炉形態の変遷に関しては、以前にも詳述していることから（註１）、本遺跡の形態変遷を概略的に説明するにとどめる。ここでは、特に複式炉の研究で重要になっていくと思われる、①複式炉の構築法、②被熱範囲、③炉内出土の動物・植物遺体を中心に、その特色をまとめておきたい。

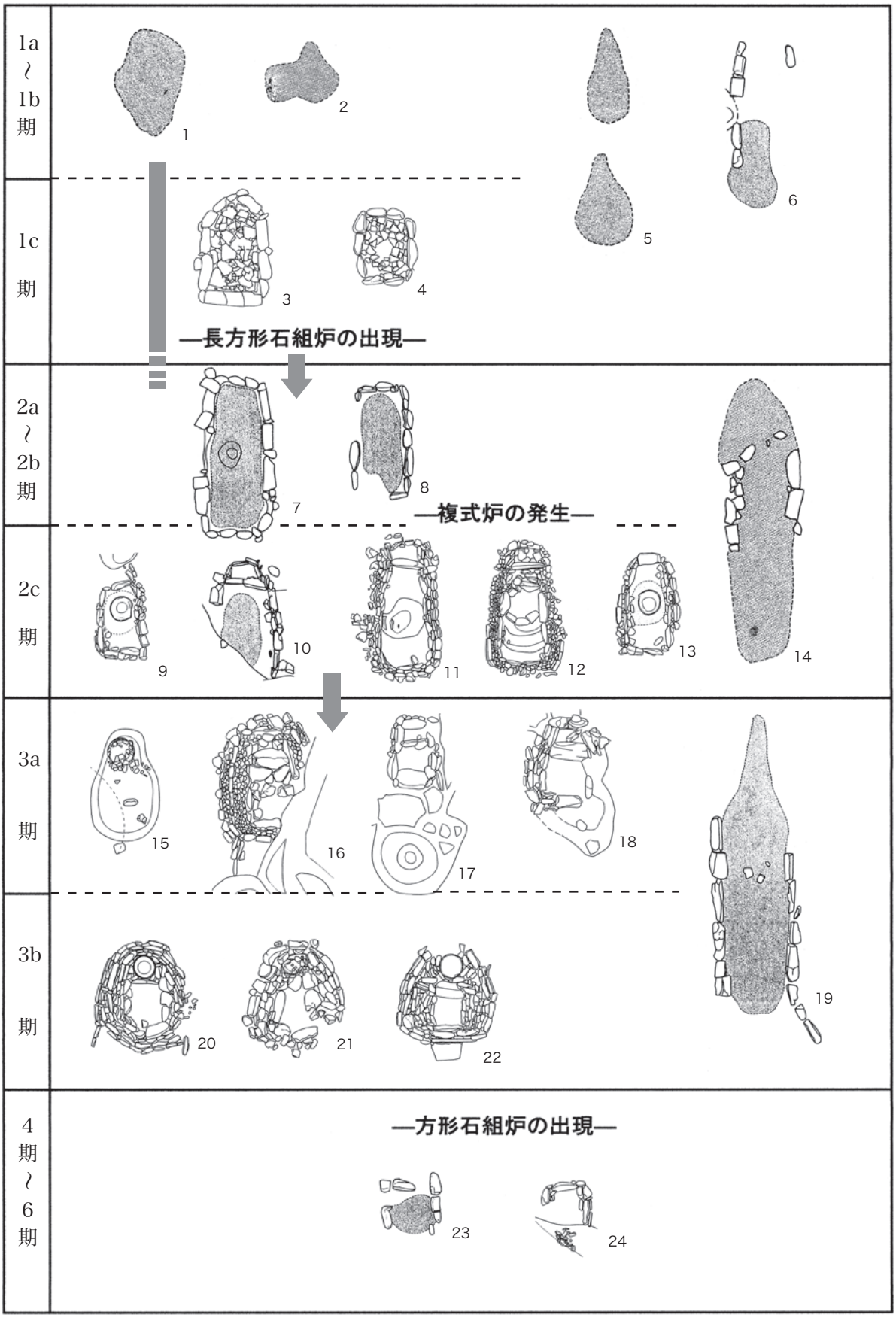
２．炉形態の変遷（第 161 図）

１期（大木８ａ式並行期）の炉跡は、卵形住居跡では地床炉と方形石組炉、長方形住居跡では地床炉と「二側縁石組炉」（註２）が確認される。まず卵形住居跡の炉形態は、１ａ～１ｂ期までは地床炉のみで、道尻手遺跡第 15 号住居跡（註３）などで検出された小形円形石組炉は、本遺跡では確認できなかった。周辺地域でも、類例はほとんど見ることができず、本地域においては非常に異質な存在と言える。１ｃ期になると、第 11 号住居跡や第 30 号住居跡のような方形石組炉が出現する（註４）。炉床面に敷かれた土器から１ｃ期であることは、確かであると考えられる。このように炉内に敷かれる土器は、直接的な転用のみならず、古い時期の廃物を拾って使用している可能性も否定できないことから、注意は必要である。この時期の長方形石組炉は、周辺地域では今のところ類例は認められない。

２ａ～２ｂ期（大木８ｂ式並行期古段階～中段階）の炉跡は、卵形住居跡では長方形石組炉が２例認められ、長さが１ｍ前後と前段階に出現する方形石組炉よりも長大化の傾向にある。長方形住居跡の炉跡は、前段階までと同様に二側縁石組炉である。この段階の長方形石組炉２例のうち中央部に炉体土器を持つものもあるが、２例ともに、前段階に見られるような土器片敷きが確認されていない。しかし、町内では、道尻手遺跡第 17 号住居跡や、周辺地域の十日町市幅上遺跡第１号住居跡（註５）、南魚沼市万條寺林遺跡４号住居跡（註６）などで確認され、本段階に顕著に見られる炉形態であると言える。

次の２ｃ期（栃倉式期）には、祖形的な複式炉が出現し、これらにも幾つかの差異が認められる（第 161 図９～ 13）。第 18 号住居跡と第 21 号住居跡の炉跡は一部壊れているが、他の３例は完形である。第 18 号・第 21 号・第１号・第 48 号住居跡は、先端部に小形の石組部を付属させるが、まだこの段階では先端部に炉体土器の埋設は認められない。第 31 号住居跡は、側面部の石組は祖形的複式炉と共通するが、小形の石組部を持たないところは前段階の構造を引き継いでいると見ることができる。また主体となる石組部は炉体土器やそれに変わるような石組・窪みが認められる。たとえば、第 18 号住居跡は炉体土器がもう一つの石組部寄りに埋設され、第 48 号住居跡も同様の場所に配石で区画される場所がある。一方で、第１号住居跡の場合は、ほぼ中央部に窪みを持ち、第 31 号住居跡もほぼ中央部に炉体土器を有する。縁石の構築法も１列の大形縁石の周囲に小形偏平礫を配するもの（18 住・21 住）と、二列の縁石の内側に小形の円礫を充填するもの「小礫充填手法」（註７）を採るもの（１住・48 住・31 住）がある。

３ａ期（沖ノ原Ⅰ式期）の炉跡は、卵形住居跡では複式炉の燃焼部の分化が確立される。第 50 号住居



第 161 図　堂平遺跡の炉形態変遷図

跡（15）のように、炉体土器と石組部相当部分が土器片敷きのみの炉形態もあるが、その多くは炉体土器を持たない石組複式炉である。第 23 号住居跡の複式炉（16）は、偏平礫を長軸方向で配列する縁石が外帯と内側の壁面に区分するようにめぐり、それぞれに小礫が充填される。第 62 号・第 55 号住居跡（17・18）の複式炉は、縁石が２列～３列ほどめぐるが、比較的簡素な作りであることから次段階の可能性もある。これらは第 62 号住居跡で前庭部らしき窪みが確認できる以外は、明確な前庭部は検出されていない。本地域では、沖ノ原Ⅰ式期新段階になると一時的に前庭部を持つ複式炉が出現するが（註８）、本遺跡ではその傾向は明確ではないようである。一方、長方形住居跡では第 38 号住居跡の炉跡があり、前段階と同様な二側縁石組炉で両側が開放する。縁石の一部が斜め方向に延びる部分が見られる。

３ｂ期（沖ノ原Ⅱ式期）の炉跡は、楕円形もしくは五角形の住居跡のみになり、この段階の長方形住居跡は確認されていない。前者は、ダルマ形の複式炉の先端部に１基の炉体土器が設置される。これらの縁石は、外側に偏平礫を長軸方向で立て並べて、石組部底面の区画する礫の間に偏平礫を長軸方向で充填する手法をとる。また第 15 号住居跡（20）では小形の裾石が両側に付属し、第 32 号住居跡（22）では主軸上に台形状の板状礫を配するなどの多様性が見られる。これらはすべて沖ノ原Ⅱ式古段階の複式炉であり、新段階のものは確認できていない。沖ノ原Ⅱ式新段階の複式炉は小形化と箱形化の傾向を示し、道尻手遺跡第 20 号住居跡（註９）や八反田遺跡第８号住居跡（註 10）などが典型例としてあげられる。

４期（三十稲場式期）以降の炉跡は、黒色土の遺存度も影響して、明確な事例はない。形態や周辺出土遺物から、第 26 号と第 34 号住居跡（23・24）が後期の方形石組炉と考えた。本地域の屋内炉は、複式炉消滅後に方形石組炉が主体となることから、本遺跡でもその傾向にあると想定される。

３．複式炉構築工程の復元

複式炉は、通常の石組炉と異なって多くの川原石から構築されている。その素材の形状も大きさも多様であり、円礫や板状礫、大きさも径５cm ほどの小形のものから径 30cm 前後の大形のものまである。本地域の場合、石材は多孔質の安山岩が多用され、花崗岩や閃緑岩や剥片石器に使用するような頁岩やガラス質安山岩などは使用されない。これは被熱によって壊れやすいなどの炉材に適している石が選択されているためであると考えられる。発掘調査では、複式炉の一部は剥ぎ取り保存のために持ち帰っているが、ほとんどの石材は調査時に廃棄された。そのため石材分析は行われておらず、写真や図面から復元する以外にない。ここでは、他の石材サンプルの計測データを元に複式炉に使用された石材の総重量を算出しておきたい（第 115 表）。

	0～5cm	5～10cm	10～15cm	15～20cm	20～25cm	25～30cm	合計（点数）	合計（重量）
第１号住居跡	40	80	30	7	0	1	158	68.3kg
第 15 号住居跡	47	62	37	18	3	3	170	117.1kg
第 18 号住居跡	15	20	3	3	4	0	45	50.5kg
第 21 号住居跡	6	4	7	7	3	0	27	33kg
第 23 号住居跡	146	81	25	8	0	6	266	125kg
第 31 号住居跡	39	27	9	5	6	0	86	52.6kg
第 32 号住居跡	43	69	27	9	6	4	158	121kg
第 48 号住居跡	183	74	16	2	5	3	283	102.8kg
第 59 号住居跡	19	29	24	12	4	3	91	94.3kg
第 62 号住居跡	8	7	6	3	1	4	29	54kg

第 115 表　複式炉の炉石数と推定重量一覧

石材サンプルの計測値から、便宜的に次のような平均値を設定し、径5cm未満は平均110g、径5cm～10cm未満は平均250g、径10cm～15cm未満は平均700g、径15cm～20cm未満は1950g、径20cm～25cm未満は平均4250g、径25cm～30cm未満は平均9265g、とした。この数値は便宜的なもので、石材の幅や厚さの差によって重量が大幅に変わる可能性があるが、今回は実測図からの算出のため、このような手法をとった。

前述の平均値をもとに、本遺跡の複式炉の石材の重量を算出した。第1号住居跡の複式炉は、約158点の礫から構成され、総重量は約68.3kgである。大形の境石以外は、径5cm～15cmの中形偏平礫を縦長に配列させる。第15号住居跡の複式炉は、約170点の礫から構成され、総重量約117.1kgである。これらの炉石は、石組部の両端部に大形偏平礫を配して、その周囲に径5cm～25cmの偏平礫を配置する。第18号住居跡の複式炉は、約45点の礫から構成され、総重量約50.5kgである。この炉は、径10cm～25cmの偏平礫を1周させるもので、その周囲に径5cm前後の小礫が散在する。第21号住居跡は、約27点の礫で構成され、総重量約33kgと最も軽量である。この炉は、径10cm～25cmの中大形礫を1周させる簡素なものである。第23号住居跡の複式炉は、約266点の礫から構成され、総重量約125kgで最も重い。これらの炉石は、縁石としいて径5cm～15cmの偏平礫を縦長に配列して、内側に径5cmほどの小礫を充填し、石組部などの床面近くに大形礫を配する傾向がある。第31号住居跡の複式炉は、約86点の礫で構成され、総重量約52.6kgである。これらの炉石は、径約10cm～20cmの偏平礫を縦長に配し、床面近くに20cm～25cmの大形礫を配し、その間に径5cm以下の小礫を充填する。第32号住居跡の複式炉は、約158点の礫から構成され、総重量約121kgである。境石など主軸上に比較的大形の礫を使用して、縁石に径15cm～25cmの偏平礫を配し、その間に径5cm～15cmの偏平礫を積み上げるように構築する。第48号住居跡の複式炉は、約283点と最多の礫から構成されるが、総重量は約102.8kgである。これらの炉石は、縁石と床面近くには比較的大形の偏平礫を配置し、その間に径5cm前後の小形礫を充填する。第59号住居跡の複式炉は、約91点の礫から構成され、総重量は約94.3kgである。これらは、径20cm～30cmの大形礫を石組部の枠に使用して、その上に径10cm～20cmの中形礫を積み上げるように構築される。第62号住居跡の複式炉は、約29点の礫から構成され、総重量は約54kgである。この炉の3辺は、大形礫を箱型に組んで構築されるが、片側のみに径10cm～20cmの中形礫が配置される。

これらは実際の重量と全く同じではないが、ある程度の複式炉構築材の数量を示していると考えられる。このような複式炉の構築には、炉石材調達などの準備など多大な労力を費やしたことが窺われる。今後は、調査時もしくは調査後において、炉石の計測や被熱範囲などの観察・記録が必要である。構築方法は、炉跡の断面観察と実際に自分で複式炉を構築した経験（註11）から以下の工程が想定される。

①最初に、複式炉の位置と大きさを決めて、竪穴住居床面に掘り方を掘削する。深さも20cm～30cmほどの深さで掘りさげる。掘削土の多くは､屋外に排出するか他の内部施設（例えば階段など）に使用すると想定される。一部は、炉石を積み上げる時に使用されたと考えられる。

②次に、炉の外形上に、縁石として偏平中形礫を縦長に配列させる。同時に、炉石組部の底面に方形もしくはコ字状の大形偏平礫を配置する。炉体土器はこの時に埋設されると推測される。

③縁石と大形礫の間に掘削時に排出された土（地山）を充填し、炉の壁面にある程度の傾斜を作り、炉体土器周辺にも安定するように土を充填する。

④充填した土の上に、小形円礫や偏平円礫などを充填していく。この時に礫の間に土を入れながら、固定していく。

⑤炉石をすべて組み上げた後に、炉石を上から叩いて締めたり、水を掛けて固めるなどの行為を行ったと推測される。

⑥完成後に、火入れとなると想定される。

以上のような工程が想定されるが、多くは想定の域を出ないものであり、発掘調査から得られた所見から検証していく必要があるだろう。また複式炉の構築については、幾つか疑問が残る。一つは、石材に関わる問題であるが、どの段階で多量の炉石を川原から持ち込んだのかである。事前に、すでに集落のどこかに貯蔵されていたのか、複式炉を構築するために適量を搬入したのか。想像以上に、炉石は多量に必要であり、構築途中で不足することも予想される。石器石材とは異なった、石材調達方法が存在したのだろう。

また複式炉構築のタイミングの問題がある。通常、竪穴住居の上屋構築に伴って複式炉も構築されると考えられるが、上屋の垂木などの骨組み組み立て時なのか、上屋が完全に建てられた後なのかである。これは照度と関わることである。このような問題は、考古学的には解明しにくい問題であるが、複式炉の研究においては検討していく必要があるだろう。

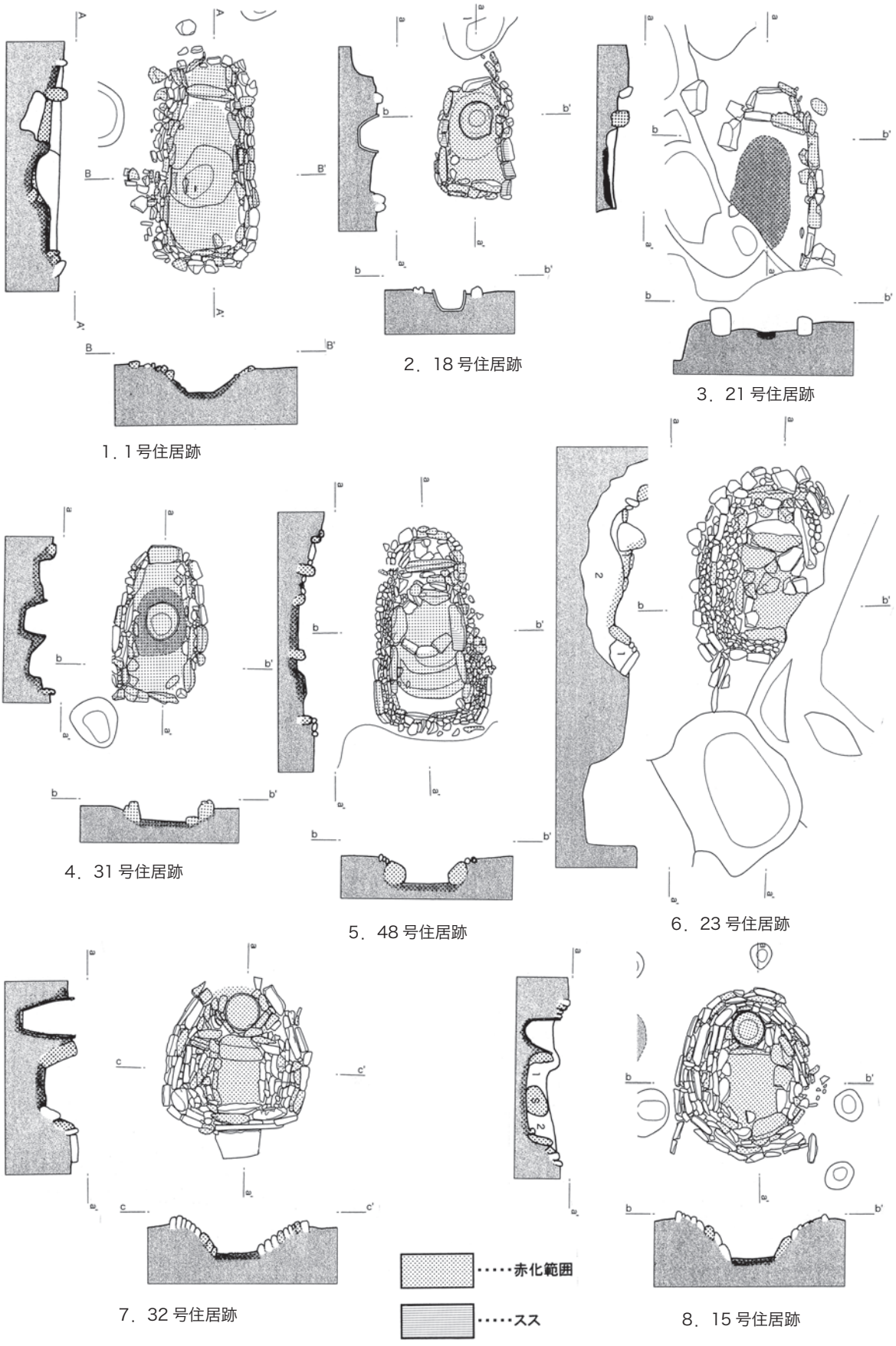
4．複式炉の被熱範囲（第 162 図）

報告書の事実記載では、焼土範囲は示したが、炉石の赤化範囲やススの付着などは表現できなかった。これらは発掘調査では観察記録されていないため、今回は記録写真を中心に被熱範囲をできるだけ復元して提示したい。これらは複式炉の使用痕であり、内部の出土遺物と同様に炉の機能・用途を考えるうえでは重要なデータであると考えられる。

最初に、栃倉式期の祖形的複式炉である、第 1 号、第 18 号、第 21 号、第 31 号、第 48 号住居跡を見ていきたい（第 162 図 1 ～ 5）。これらの多くは石組部全面が被熱によって赤化によって硬化が見られる（1・2・4・5）。第 21 号住居跡のみが、中央部分を中心に赤化が認められる。周辺の縁石も全体的に被熱によって赤化している。第 1 号住居跡や第 48 号住居跡の複式炉は、底面付近の一部に赤化が認められない部分があり、部分的にススの付着によって黒色化している部分が認められる。これらは、床面に近いほうが炎の温度が低いためか、灰に埋没していたなどの可能性が想定される。これは推測の域を出ないものであるが、興味深い点である。

沖ノ原Ⅰ式期の第 23 号住居跡は石組複式炉で、二つの石組部（燃焼部）の炉床面が被熱によって赤化しているが、周囲の壁面や縁石はあまり顕著な赤化が認められない（第 162 図 6）。部分的に赤化が見られることから、被熱していないわけではなさそうである。

次に、沖ノ原Ⅱ式期の第 32 号住居跡と第 15 号住居跡である（第 162 図 7・8）。これらはダルマ形の土器埋設複式炉で、土器埋設部と石組部の両側が燃焼によって赤化している。石組部壁面の被熱による赤化も、それほど顕著ではないが多くの礫に赤化が認められる。炉床面付近の炉石に赤化していない部分が見られ、これも前述したように、底面付近の燃焼温度が低いためか、灰に埋没していたためと想定



1．1 号住居跡　2．18 号住居跡　3．21 号住居跡

4．31 号住居跡　5．48 号住居跡　6．23 号住居跡

7．32 号住居跡　8．15 号住居跡

第 162 図　複式炉の被熱範囲

される。これらは実際に、実験によって検証する必要があり、現段階では推測の域を出ない。また石組部の中に被熱した円礫を持つものがあるが、これも廃絶後の混入ではなく、使用時に炉の中に置かれていたものと考えられる。

周辺遺跡では、複式炉を含めた石組炉の被熱赤化範囲は明確に示されていないが、炉の使用法を考える場合に、このようなデータを蓄積していく必要があるだろう。

5．新潟県内の中期後半期の炉内出土動物遺体と植物遺体

堂平遺跡では、炉内や住居跡から動物骨などが出土している。このような炉内出土遺物は、複式炉の機能・用途を研究するうえで有益な情報を提供してくれる。例えば、第1号住居跡の複式炉内からはシカの焼骨が出土している（註12）。また第30号住居跡からは哺乳類の焼骨が出土しており、第59号住居跡（火災住居跡）からは焼けた鹿角片が多数出土している。特に、炉内出土の動物や植物遺体は、炉跡の機能・用途を考える上で極めて重要であり、炉内での調理や儀礼行為のようなものに用いられたと想定される。ここでは、周辺遺跡の炉内出土の動物遺体・植物遺体を取り上げて検討しておきたい。

最初に、道尻手遺跡（註13）であるが、沖ノ原Ⅱ式期古段に位置づけられる第21号住居跡の石組炉の中から、長さ1cm前後の焼獣骨片が多数出土している。これらの多くは、イノシシもしくは中大型獣に同定されている（註14）。この炉形態は、複式炉にならずに、コ字状の石組炉に裾石が付属するものである。次に、沖ノ原遺跡の第2号住居跡（栃倉式期）の炉跡から床面にかけて、大量のクリが検出されており、火棚の存在が指摘されている（註15）。また同遺跡の第102号住居跡は沖ノ原Ⅱ式期の火災住居跡であるが、炉内からも炭化材が検出されている。これらの炭化材は、5点がクリで、10点がブナに同定されている。この他に、沖ノ原遺跡の第1号長方形大形家屋跡（沖ノ原Ⅰ式期）の覆土からは、多量のクリとクッキー状炭化物が多量に出土している（註16）。また八反田遺跡（註17）では、第9号住居跡の炉体土器からミズキ種子・アブラナ類などの種子が検出されている。

新潟県内の縄文時代中期の遺跡では、炉内出土の動物遺体や植物遺体はほとんど示されていないのが現状である。今後、屋内炉を研究するうえで、これらの確実なデータを蓄積していく必要があるだろう。東北地方の複式炉のなかで、焼けた動物骨やサケなどの魚骨が出土している例もあり（註18）、複式炉で何が行われたのか推測する手がかりになる。この時期の複式炉については、渡辺誠によって土器埋設部がトチの実のアク抜きのための灰を一時的に溜めておくためやアンボのような粉食品を焼くなどの見解が示されている（註19）。この説についての検証はほとんど進んでいないが、新潟県内でも中道遺跡（註20）などで中期末葉のトチの実の出土例が増加しており、当該期にトチの実の利用が行われていたことは明らかになってきている。従って、新潟県内を含めたトチの実利用の動態の把握と、炉内出土の植物遺体や動物遺体のデータの蓄積が必要であると考えられる。

6．おわりに

堂平遺跡の炉形態の変遷を概観するとともに、堂平遺跡の複式炉を中心として炉の構築工程と炉の被熱範囲や炉内の動物遺体や植物遺体から、製作から使用についてのデータを提示した。これらはまだま

だ不完全なものであり、今後の発掘調査や整理作業のなかでこの種のデータを蓄積していく必要があるだろう。竪穴住居跡も炉跡も、型式学的研究や編年研究も重要であるが、どのように構築されて、使用されたものかを研究する段階に入っていると思われる。

註　釈

1）阿部昭典 1999「複式炉の研究」『新潟考古学談話会会報』第 20 号
阿部昭典 2000「縄文時代中期末葉～後期前葉の変動」『物質文化』第 69 号
阿部昭典・寺崎裕助・佐藤雅一 2005「新潟県における複式炉の様相」『日本考古学研究会 2005 年度福島大会シンポジウム資料集』日本考古学協会
阿部昭典 2008「第 3 章中期末葉から後期前葉の住居形態の変異」『縄文時代の社会変動論』アム・プロモーション
2）この名称は、道尻手遺跡の報告書のなかで設定した。
阿部昭典 2005「第Ⅳ章第 2 節検出遺構」『道尻手遺跡』津南町教育委員会
3）佐藤雅一・阿部昭典ほか 2005『道尻手遺跡』津南町教育委員会
4）阿部昭典 2006「馬高式期の卵形住居跡について」『火焔土器の時代 - その文化を探る -』津南町教育委員会
5）菅沼　亘・宮内信雄ほか 2007『幅上遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会
6）池田　亨・荒木勇次 1988『万條寺林遺跡』塩沢町教育委員会
7）阿部昭典 2008「第 3 章中期末葉から後期前葉の住居形態の変異」『縄文時代の社会変動論』アム・プロモーション
8）前掲註 1 文献と同じ。
9）前掲註 3 文献と同じ。
10）渡辺誠ほか 1984『八反田遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会
11）津南町教育委員会では、農と縄文の体験学習館なじょもんの縄文広場において、平成 17 年ごろから定期的に竪穴住居の復元を行っている。筆者も、その幾つかの内部構造の設計と複式炉の製作を担当した。複式炉の製作は、佐藤雅一の指示のもと、筆者と佐藤信之の 2 人で行った。複式炉は、実際に調査されたものを元寸大で復元し、炉石は川原から採集したものを中心に使用した。
12）動物遺体に関しては、山梨県立博物館の植月学学芸員に鑑定を委託した（付編参照）。
13）前掲註 3 文献と同じ。
14）パリノ・サーヴェイ株式会社 2005「付編 4　自然科学分析（2）3. 動物遺存体の種類」『道尻手遺跡』津南町教育委員会
15）江坂輝弥・渡辺誠ほか 1977『沖ノ原遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会
16）前掲註 15 文献と同じ。
17）前掲註 10 と同じ。
18）岩手県上野平遺跡や清田台遺跡、長谷堂貝塚、福島県和台遺跡などの複式炉内からは、サケなどの魚骨やイノシシなどの哺乳類の動物骨の出土例がある。
19）渡辺誠 1984「第 6 章総括」『八反田遺跡発掘調査報告書』津南町教育委員会
20）駒形敏朗・小熊博史 1998『中道遺跡』長岡市教育委員会

第５節　堂平遺跡の環状列石の構築方法と時期

１．はじめに

縄文時代の環状列石は、1997 年の日本考古学協会の秋田大会でシンポジウム「縄文時代の集落と環状列石」（註１）が開催されて以降、多くの研究が蓄積されている。これらの環状列石は、中部高地で中期末葉（加曽利ＥⅢ式期）に出現して、新潟県を含めた東北方面に広がっていくと考えられる（註２）。特に、後期前葉（十腰内Ⅰ式期）における東北地方北部から北海道西南部での環状列石の隆盛は注目すべき現象である。これらは、中期末葉の変動期における柄鏡形敷石住居の出現と東北地方への拡散と連動した現象である（註３）。しかしながら、住居形態における広域化とは対照的に、集落構造と深く関連する環状列石の場合は、その受容のされ方は、極めて限定的であるように思われる。特に、東北地方北部～北海道西南部においては、十腰内Ⅰ式土器分布圏内で盛んに造営されるが、土器様式やその他の土製品・石製品の広がりとはやや異なる広がりを示す。

一方、堂平遺跡が位置する信濃川流域は、出現地と目される中部高地と、拡散して地域的発展を示す東北北部の間のいわゆる「中間地帯」にある。この「中間地帯」にあたる新潟県や東北地方南部は、環状列石の事例が極めて少ないため、環状列石の構築時期や集落構造など不明な部分が多く残されている。その点で、津南町内で発見された堂平遺跡と道尻手遺跡の両環状列石は、極めて重要である。道尻手遺跡については、2005 年刊行の報告書内で詳細を報告しており、両遺跡の環状列石については論考のなかで度々触れてきた（註４）。堂平遺跡に関しては、発掘調査から約 15 年が過ぎてようやく報告書刊行に至った次第である。堂平遺跡の環状列石については、事実記載のなかで詳述しているが、ここでは本遺跡を中心に「中間地帯」における環状列石の特色についてまとめておきたい。

２．構築方法と石材

堂平遺跡の環状列石は、緩やかな傾斜地を塵取り状に削平するなど多少の土地造成が認められる。これらは、竪穴住居構築と比べて、特別に大規模な土地造成とは言えないものの、削平した壁面に亜角礫を立てて配列している。環状列石には、ある程度の平坦面が必要とされたことが窺われる。隣接する群馬県や長野県の環状列石でも、一定の土地造成が認められる。例えば、安中市野村遺跡（註５）や中之条町久森遺跡（註６）でも環状列石の構築に土地造成が伴っていたことが報告されている。これは東北地方北部の環状列石に顕著に認められる特色であり、青森市小牧野遺跡（註７）や平川市太師森遺跡（註８）、北秋田市伊勢堂岱遺跡（註９）で大規模な土地造成が指摘されている。

第 163 図　関東甲信越の主要環状列石分布図（阿部 2008 から転載）

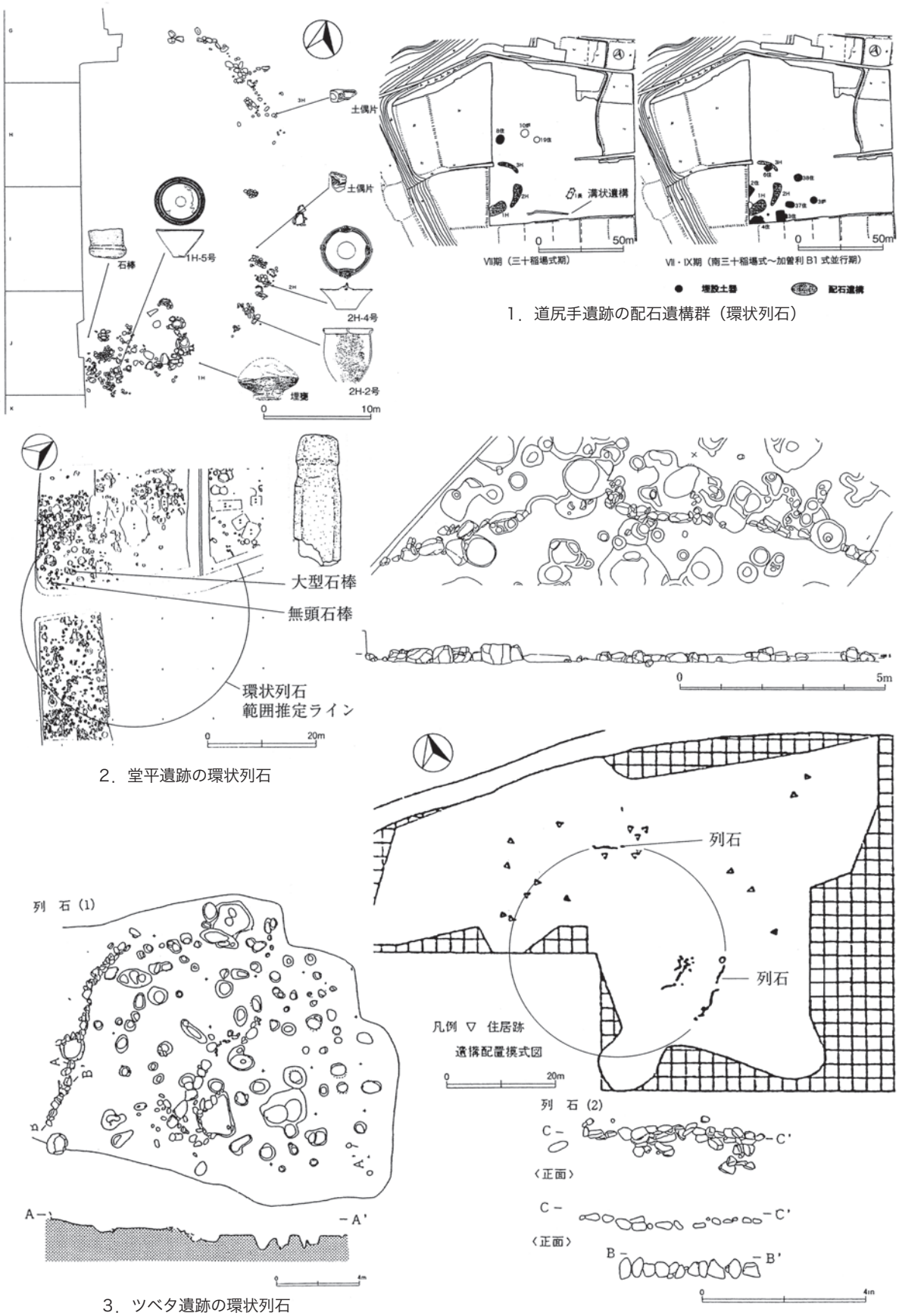
堂平遺跡の環状列石の石材は、全て安山岩であり、円礫ではなく亜角礫である。この種の石材の産出地は完全に明らかになったわけではないが、東側を流れる釜川から運ばれたものではないかと推測される。この釜川上流域には、有名な「七ッ釜」があり、安山岩の柱状節理が発達している。堂平遺跡出土の大形石棒の素材も、釜川流域から運ばれた可能性が高く、遺跡からは約1km上流に遡ったところにある。一方、道尻手遺跡の報告書では、周辺の石材調査とともに配石石材の鑑定をお願いした（註10）。その結果、道尻手遺跡の配石は、周辺河川から搬入されたものであり、少なくとも半径2.5kmの範囲に及ぶ（註11）。特に、径約30cm大の閃緑岩や花崗岩は、清津川流域でしか採取できないもので、直線距離にして約2.5km離れている。また径100cmを超える非常に大形の安山岩は、周辺河川で採取可能なものであり、約9割は安山岩で占められている。しかし、大形礫は200kg以上のものが9点存在し、最大で約613kgのものが確認されている。これらは、1人で担いで運ぶことは不可能な大きさである。これらは、近くの信濃川や中津川でも採集可能であるが、直線距離で2.0kmほど離れていることからそこから運ばれたとは考えにくい。現状では、遺跡近くの段丘崖から運ばれたものと推測しているが、それでも数10m離れた場所から約613kgの大形礫を運ぶのは容易ではなく、コロやソリのようなものを使用して運んだ可能性が想定される（註12）。無論、信濃川や中津川から運ばれた可能性は完全に否定できない。

他の配石遺構に関しても石材産出地の研究が行われている。有名な事例としては、秋田県鹿角市大湯環状列石が挙げられる。これらの環状列石を構成する花崗ヒン岩が、約7km離れた河川から搬入されたと推定されている（註13）。青森市小牧野遺跡の環状列石については、約2000個以上の礫によって構成され、台地の東側崖下を流れる荒川より持ち込まれたことが推測されている（註14）。環状列石が立地する台地と河川の比高差は、約200mである。一方、山梨県金生遺跡の配石遺構では、約6km離れた釜無川から1トンの花崗岩や花崗閃緑岩の大形礫が運ばれたと推測されている（註15）。これらの産地推定については、周辺石材環境の調査の度合いなどの点で検討の余地があるが、相当な労力を費やして構築材である礫が搬入されていることは明らかなようである。

3．環状列石の構築時期と遺物分布

本地域の環状列石の構築時期は明確ではないが、後期初頭から前葉に造営されたものと考えられる。堂平遺跡の環状列石（第164図2）は、各説でも詳述したように、後期初頭から前葉にかけて造営された可能性がある。その根拠は、列石内部の土坑の帰属時期である。1期の土坑墓も2基検出されているものの、後期前葉の土坑墓が多く見られる。遺物分布の濃淡は、後期前半期の土器も見られるが、沖ノ原Ⅰ式期とⅡ式期の土器が多量に確認される。その由来は明らかにはできなかったが、二次的な堆積の可能性も想定される。本遺跡の環状列石の構築は、後期初頭になってからであると考えられるだろう。環内部に樹立する大形石棒の帰属時期も明確ではないが、環状列石造営時のものと思われる。

一方、道尻手遺跡の場合は、配石遺構を分布のまとまりから1号配石群、2号配石群、3号配石群に区分した（第164図1）。そのなかで1号・2号配石群は配石墓を主体として構成され、それに混じって下部遺構を持たない大形礫が配置していた。配石墓の時期は、三十稲場式新段階のものも含むが、多く



第 164 図　新潟県内の環状列石

は南三十稲場式期新段階～加曽利 B1 式並行期である。これに対して、3 号配石群は下部遺構を全く持たない弧状列石（立石を伴う）であり、1 号・2 号配石群とは異なる。これらは、中期前葉から末葉の環状集落の中央広場外縁部に配列することから、環状列石であると考えられる。しかし、列石内部に後期前葉後半から中葉期の竪穴住居跡が分布していることから、少なくともこの段階には環状列石としての空間利用は無かったものと推測される。一つの可能性として、環状列石が後期初頭から前葉にかけて造営され、その後に空間利用が大きく変化したのではないかと想定した（註 16）。出土土器の濃淡図も、中期前葉から後期初頭（道尻手Ⅲ期～Ⅶ期）にかけては、中央広場と想定される区域は非常に希薄な分布を示している。

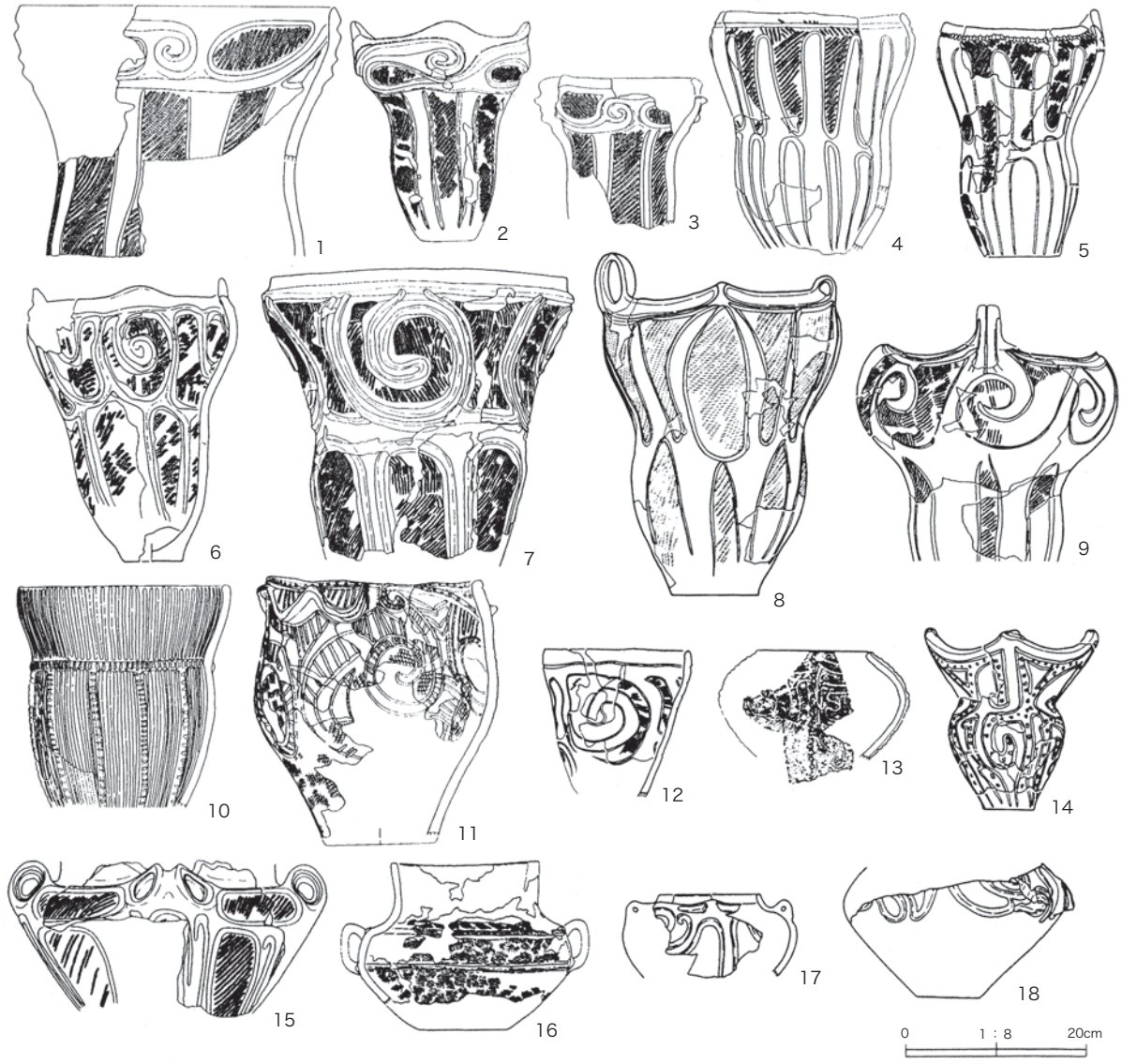
阿賀野市ツベタ遺跡（註 17）の環状列石（第 164 図 3）は、部分的に弧状列石が残存するもので、この列石のつながりから二重にめぐる環状列石と推測される（註 18）。これらも中期後半期の環状集落の中央広場に構築され、列石構築に際して土地造成を伴うものと見られる。第二区と第三区から検出された列石は、花崗岩の転石を使用しているとされる。これらは、偏平円礫の広い面を表に立てて一列に並べており、一部に二段から三段に礫を積み上げる部分も確認される。この環状列石の構築時期も、後期初頭から前葉ごろと推測される。

新潟県内の環状列石の造営時期は、中期末葉まで下ることはなく、後期初頭から前葉（三十稲場式期～南三十稲場式期）であると結論づけられる。ここで問題になるのは、山形県小林 B 遺跡（註 19）の環状列石である。この環状列石は、中期末葉の集落（多分中央広場と推測される）に構築される事例で、出土土器の新しい時期は大木 10 式新段階である。さらに、竪穴住居跡と列石の切り合い関係から、環状列石構築時期は大木 10 式古段階よりも新しい時期であると考えられる。この事例の存在を考慮すれば、信濃川流域の環状列石の構築時期も再考する必要性が出てくるかもしれない。

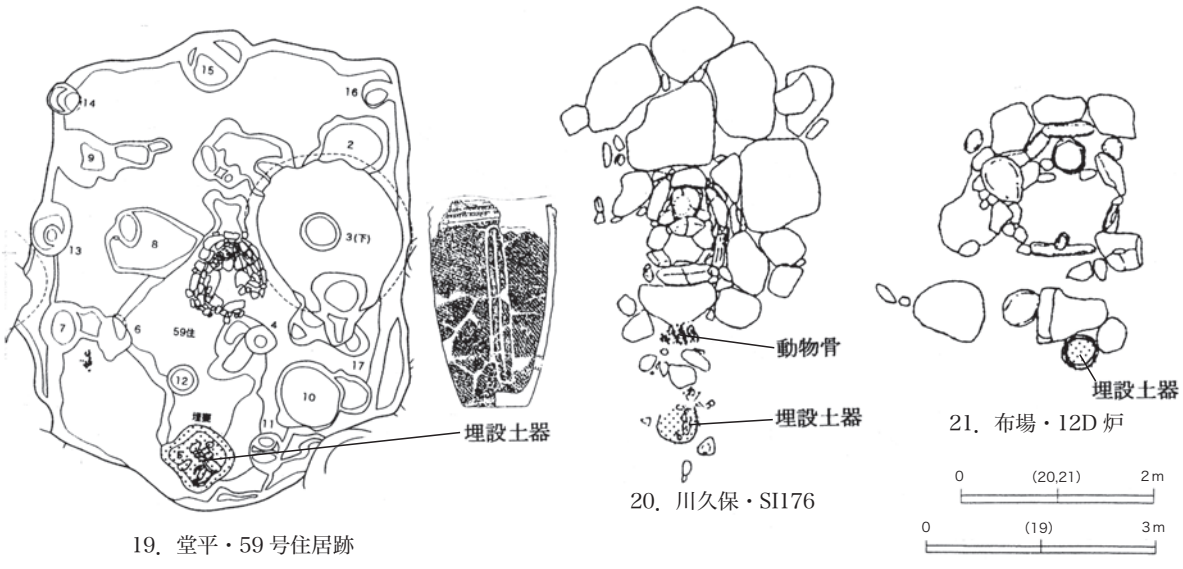
また環状列石内部と外側の出土遺物の濃淡については、以前にも言及したことがあるが、列石内部からの遺物は極めて希薄であり、これは環状集落の中央広場と共通する。このことは、道尻手遺跡の大規模配石遺構（環状列石）でも確認された現象であり、東北地方北部の環状列石でも児玉大成によって、その傾向が明らかにされている（註 20）。児玉は、青森市小牧野遺跡と稲山遺跡の環状列石において、遺物分布を詳細に分析して、列石内外での濃淡に大きな違いがあることを指摘している。堂平遺跡では、包含層の遺存度が悪いために、遺物の濃淡は明確にすることはできなかった。しかし、環状列石内の L9 区から沖ノ原式土器の出土が目立つ。この出土傾向は、環状列石造成期を考えるうえで非常に重要な意味をもつと言えるだろう。

4．「中間地帯」における環状列石の受容

前述したように、「中間地帯」の環状列石は、長期継続の集落内に構築されるため、明確な造営時期が明確ではないのが、大きな問題である。これも「中間地帯」における環状列石の特徴と言えるが、多くが中期後半期の環状集落（複式炉を造営する時期）の中央広場外縁部に構築される（註 21）。特に、新潟県内の道尻手遺跡や堂平遺跡、阿賀野市ツベタ遺跡（註 22）では、後期前半期へと集落が継続するためより複雑さを増す。信濃川上流域の中期末葉でほぼ終了する環状集落は、十日町市笹山遺跡（註 23）や



1～4・7・10・11・15：堂平、5・6：笹山、8・9・14：城之腰、12・13・16～18：道尻手



19．堂平・59 号住居跡　20．川久保・SI176　21．布場・12D 炉

第 165 図　信濃川上流域の中期末葉から後期初頭に見られる北関東・北信地域の要素

魚沼市原居平遺跡（註 24）、長岡市岩野原遺跡（註 25）などがあるが、これらの集落遺跡から環状列石は発見されていない。

以上のことを踏まえると、環状列石の受容時期は中期末葉の沖ノ原Ⅱ式期まで遡る可能性は低く、後期初頭～後期前葉（三十稲場式期～南三十稲場式期）の間に造営されたものと推測される。ただし、中期後半期の中央広場外縁部に列石がめぐることから、少なからず中期末葉の集落の空間構造を引き継いでいるのは間違いない。

環状列石の受容以前の中期末葉から後期初頭の時期にも、北信地域や北関東地方の影響が文化要素に認められる。例えば、土器では、加曽利ＥⅢ式土器や加曽利ＥⅣ式土器、称名寺Ⅰ式からⅡ式土器がある（第 165 図 1 ～ 14）。加曽利ＥⅢ式では、口縁部に渦巻文や楕円区画による文様帯を持ち、胴部は縦位の磨消懸垂文が垂下するものが多く見られる（第 165 図 1 ～ 3）。この種の土器は、信濃川上流域では広く分布し、中流域の長岡市岩野原遺跡でも確認されている。加曽利ＥⅣ式は、胴部上半部に大波状文、胴下半部に逆Ｕ字状文を描くもの（第 165 図 4 ・ 5）や、微隆起線文により胴部上半部に大柄な渦巻文、胴部下半部に逆Ｕ字状文を描くもの（第 165 図 6・7）がある。後者は、「梶山タイプ」や「胴部隆帯文土器」（註 26）などと呼称される一群である。また 8 ・ 9 のような土器群もある。この他にも、曽利Ⅲ式土器や唐草文土器、連弧文土器なども僅かに認められる（第 165 図 10・11）。称名寺Ⅱ式土器も本地域では一定量が認められる（第 165 図 12 ～ 14）。深鉢以外にも、加曽利Ｅ式系の両耳壺や有溝小把手土器、瓢箪形注口土器などが存在し（第 165 図 15・17・18）、在地系の沖ノ原式土器の深鉢とともに組成する。16 は、両耳壺であるが、文様や胎土は明らかに他の両耳壺と異なり、在地化した両耳壺と理解される。

一方、住居では、①入口部埋甕、②敷石といった要素が注目される。沖ノ原Ⅱ式期になると、複式炉付住居跡の入口部には埋設土器が高い確率で設置されるようになり、これらは複式炉に近接して埋設されるものと、入口部の壁際近くに埋設されるものが存在する。また沖ノ原Ⅱ式新段階になると、複式炉付住居の床面にも敷石を敷設するものが出現し、信濃川流域でも数例確認される。良好な例としては、湯沢町川久保遺跡の SI176（註 27）と十日町市布場遺跡 12D 炉跡（註 28）があげられる（第 165 図 20・21）。これらの敷石は、複式炉周囲に限定され、全面に敷かれるものはない。これらにも入口方向に埋設土器を有し、両要素は北関東地域や北信地域の柄鏡形敷石住居の要素が部分的に影響を及ぼしたものと理解される。石組炉でも複式炉が箱型化し、その後に方形の石組炉へと変化し、同時に敷石住居の出現も認められる。南魚沼市原遺跡（註 29）では、大形の敷石住居跡が数軒検出されており、信濃川流域の縄文後期の住居形態は柄鏡形住居系統へと変化する（註 30）。

このように、中期終末から後期初頭にかけては、北信地域や北関東地域の影響が強まる傾向を示す。このなかで、環状列石が信濃川流域へと波及するものと考えられる。環状列石の出現地域である中部高地周辺では、柄鏡形敷石住居と環状列石が同時期に出現すると見られ、両者が連動して信濃川流域に受容された可能性が高い。

5．環状列石を持たない後期前葉集落の意義

新潟県内の後期前半期の集落遺跡の多くは、環状列石を持たないものが多い。例えば、十日町市野首

遺跡（註 31）や栗ノ木田遺跡（註 32）、南魚沼市柳古新田下原 A 遺跡（註 33）、原遺跡、小千谷市城之腰遺跡（註 34）、阿賀町北野遺跡（註 35）、村上市アチヤ平遺跡（註 36）があげられるが、明確な環状列石は検出されていない。これらの集落遺跡では、敷石住居跡や列石・立石遺構、配石墓などが特徴的に見られるが、その配列からは環状列石の範疇で捉えられるものはない。

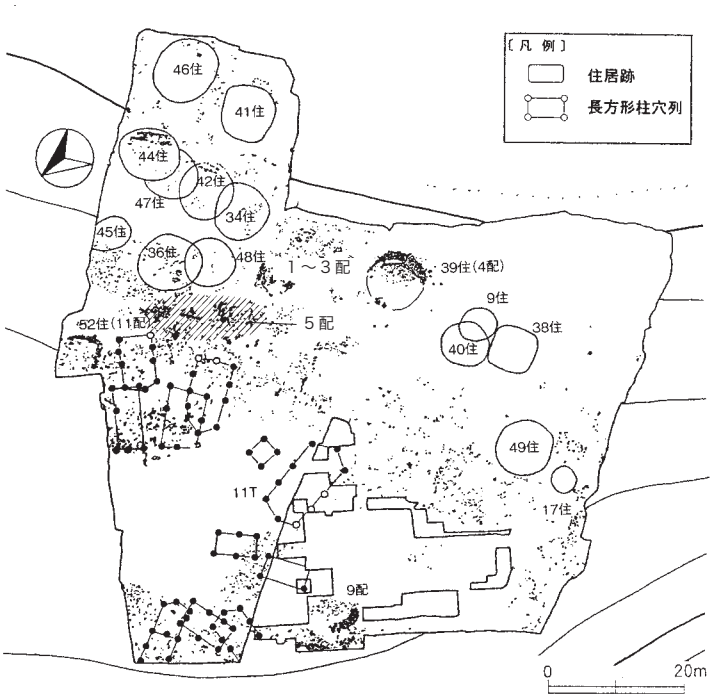
原遺跡は、中期中葉から後期中葉にかけての大規模集落であるが、後期前半期の集落は、広場の周囲に長方形柱穴列が環状に配列し、その周囲に住居跡が重複しながら配置する（第 166 図 1）。配石遺構は、遺存状態も良好ではないが、長方形柱穴列と住居跡群の間に分布している。これらの配石遺構には、立石や配石墓などが含まれる。野首遺跡は、概報で報告されただけであるため全貌は明らかではないが、弧状列石の周囲に配石や配石墓が分布し、環状列石の体裁を採らない（第 166 図 2）。同市にある栗ノ木田遺跡からも同様な配石遺構と配石墓が検出されている。これらの多くは、両端部に柱状礫を埋設するもので、「柳古新田型」配石墓（註 37）と呼称される。同様に、柳古新田下原 A 遺跡では、多数の配石墓とともに配石遺構が検出されている（第 166 図 3）。この他にも竪穴住居跡や長方形柱穴列が検出され、後期前半期の集落遺跡であるが、集落構造は明確ではない。

一方、阿賀野川以北では、アチヤ平遺跡で後期前半期の環状集落が調査されている。敷石住居跡から構成され、中央広場に相当する場所からは、環状や円形の配石遺構が検出されている（第 166 図 4）。これらは、棒状礫（立石）を伴うもので、環状列石とは異なる配石遺構と評価される。

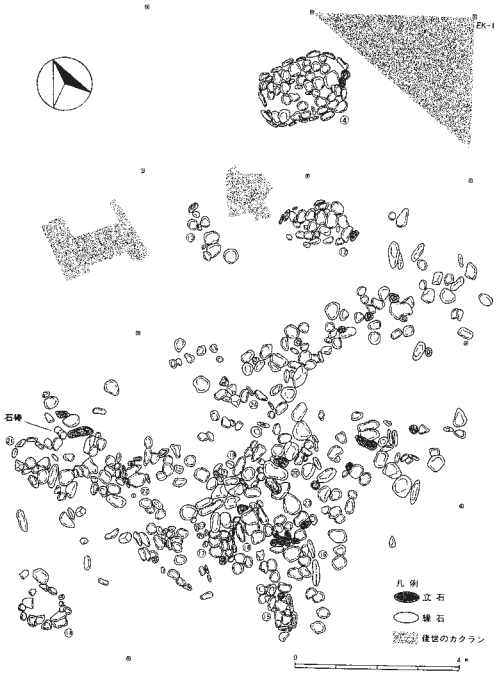
このように、同じ地域の同時期に、環状列石を持つ集落遺跡と持たない遺跡が存在する。このことをどう理解するか問題である。現状では、信濃川流域に環状列石が受容されるなかで、地域的に変容した配石遺構が普及したのではないかと推測される。

6．おわりに

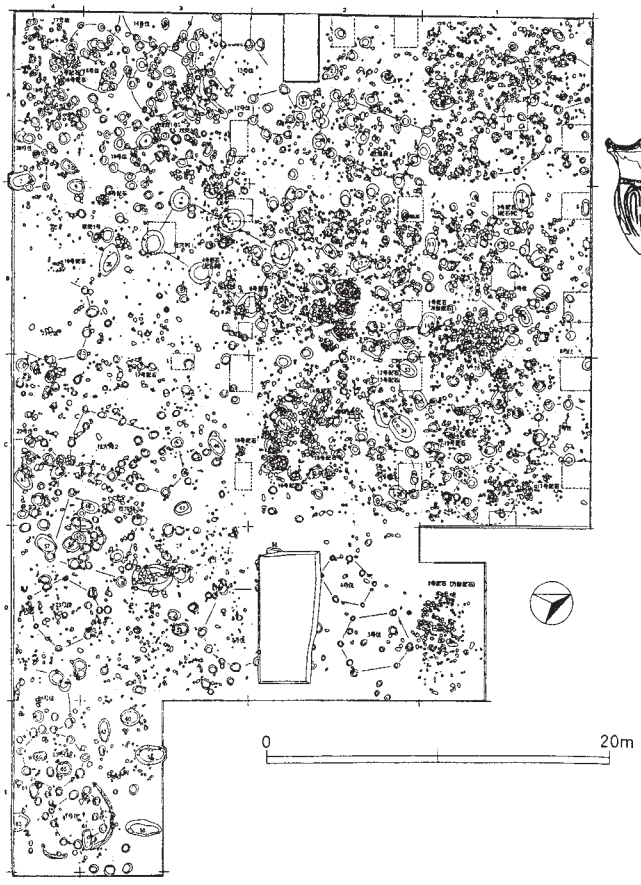
環状列石分布圏の「中間地帯」の一つに位置づけられる信濃川流域では、環状列石が受容されるものの、後期集落のなかで定着することはなかったようである。信濃川流域での環状列石造営時期は、後期初頭から前葉であると推測され、北関東や北信地域から敷石住居とともに波及してきたものと考えられる。その一方で、信濃川流域では、地域的に変容した配石遺構が次第に普及していくようである。環状列石は、本地域を経由して東北地方北部へと広がると推測されるが、そのルートは日本海側を通るものと予想される。しかし、その間の地域に環状列石がほとんど発見されていない。これと前後して、東北地方南部から北部にかけて三十稲場式土器やその要素の広がりが認められる（註 38）。東北地方北部の多くは、三十稲場式土器そのものではなく、在地系土器に胴部全面刺突文が取り込まれる折衷的な土器である。これらの三十稲場式土器の広がりは、その後の東北地方北部での環状列石の隆盛と無関係ではないと考えられる。



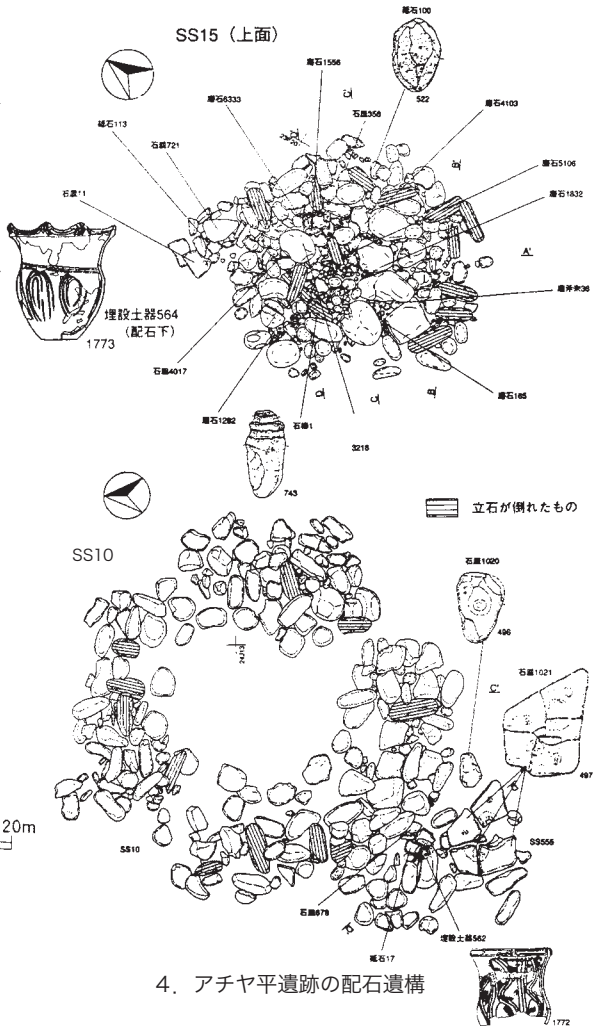
1．原遺跡の後期前半期の遺構配置図



2．野首遺跡の配石遺構



3．柳古新田下原 A 遺跡・遺構配置図



4．アチヤ平遺跡の配石遺構

第 166 図　その他の配石遺構

註　釈

1）日本考古学協会 1997 年度秋田大会実行委員会編 1997『縄文時代の集落と環状列石−シンポジウムⅠ・資料集−』
2）阿部昭典 1998「縄文時代の環状列石」『新潟考古学談話会会報』第 18 号
　阿部昭典 2000「縄文時代中期末葉〜後期前葉の変動」『物質文化』第 69 号
　阿部昭典 2008「第 6 章　縄文後期集落の形成と環状列石」『縄文時代の社会変動論』アム・プロモーション
3）阿部昭典 2000「縄文時代中期末葉〜後期前葉の変動」『物質文化』第 69 号
4）前掲註 2 文献を参照。
5）千田茂雄・小野和之 2001「野村遺跡」『安中市史』第四巻　安中市史編さん委員会
6）丸山公夫・大塚昌彦 1985『上沢渡遺跡群』中之条町教育委員会、
7）児玉大成 2006『小牧野遺跡発掘調査報告書 9』青森市教育委員会
8）滝本　学 2002『太師森遺跡』平賀町教育委員会
　滝本　学 2003『太師森遺跡』平賀町教育委員会
9）五十嵐一治 1999『伊勢堂岱遺跡』秋田県教育委員会、ほか
10）当時、十日町市理科センターの喜多孝之先生に石材鑑定頂いた。
11）阿部昭典 2005「第Ⅱ章第 2 節周辺の石材環境」『道尻手遺跡』津南町教育委員会
12）児玉大成 2007「雪と環状列石−石材運搬に関する一予察−」『青森県考古学』第 15 号
13）秋元信夫 2005『大湯環状列石　石にこめた縄文人の祈り』新泉社
14）児玉大成 2006「第 3 章　環状列石」『小牧野遺跡発掘調査報告書 9』青森市教育委員会
15）新津　健 2009「金生遺跡 1 号配石の構成と系譜」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要 25』
16）阿部昭典 2005「第Ⅵ章第 2 節集落構造について」『道尻手遺跡』津南町教育委員会
17）川上貞夫 1983『ツベタ遺跡』安田町教育委員会
18）阿部昭典 1998「縄文時代の環状列石」『新潟考古学談話会会報』第 18 号
19）佐藤鎮夫・佐藤正俊 1976『小林遺跡』山形県教育委員会
20）小野貴文・児玉大成 2004『稲山遺跡発掘調査報告書 5（分析・総括編）』青森市教育委員会
　児玉大成 2006『小牧野遺跡発掘調査報告書 9』青森市教育委員会
21）前掲註 2 文献を参照。
22）前掲註 17 文献を参照。
23）菅沼　亘・石原正敏 1998『笹山遺跡発掘調査報告書』十日町市教育委員会
24）池田　亨 1981『原・居平遺跡』堀之内町教育委員会
　梅川勝史 1998『原・居平遺跡　倉下遺跡』堀之内町教育委員会
25）駒形敏朗・寺崎裕助ほか 1981『岩野原遺跡』長岡市教育委員会
26）石坂　茂・藤巻幸男・桜岡正信 1988「加曽利 E 式土器に関する一考察」『群馬県の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団
27）阿部昭典・寺崎裕助・佐藤雅一 2005「新潟県における複式炉」『日本考古学協会 2005 年度福島大会シンポジウム資料集』日本考古学協会
28）前掲註 27 文献を参照。
29）佐藤雅一・長澤展生ほか 1998『原遺跡』塩沢町教育委員会
30）阿部昭典 2000「縄文時代中期末葉〜後期前葉の変動」『物質文化』第 69 号、ほか
31）菅沼　亘ほか 1997『野首遺跡発掘調査概要報告書』十日町市教育委員会
32）十日町市史編さん委員会 1996『十日町市史』資料編 2 考古
33）池田　亨・荒木勇次 1987『柳古新田下原 A 遺跡』大和町教育委員会
34）田辺早苗・國島　聡ほか 1991『関越自動車道関係発掘調査報告書　城之腰遺跡』新潟県教育委員会
35）高橋保雄・斎藤　準 2005『北野遺跡Ⅱ（上層）』新潟県埋蔵文化財調査事業団
36）富樫秀之・金内　元ほか 2002『奥三面関連遺跡発掘調査報告書ⅩⅢ　アチヤ平遺跡（上段）』朝日村教育委員会
37）阿部昭典 2009「新潟県における縄文時代後期前葉集落と配石遺構の隆盛」『國學院大學考古学資料館紀要』第 25 輯
38）菊池寛子 2004「三十稲場式類似土器の施文方法について」『岩手考古学』第 16 号

第６節　縄文時代中期中葉から後葉の葬制について
ー主に甕被葬と焼人骨からー

１．はじめに

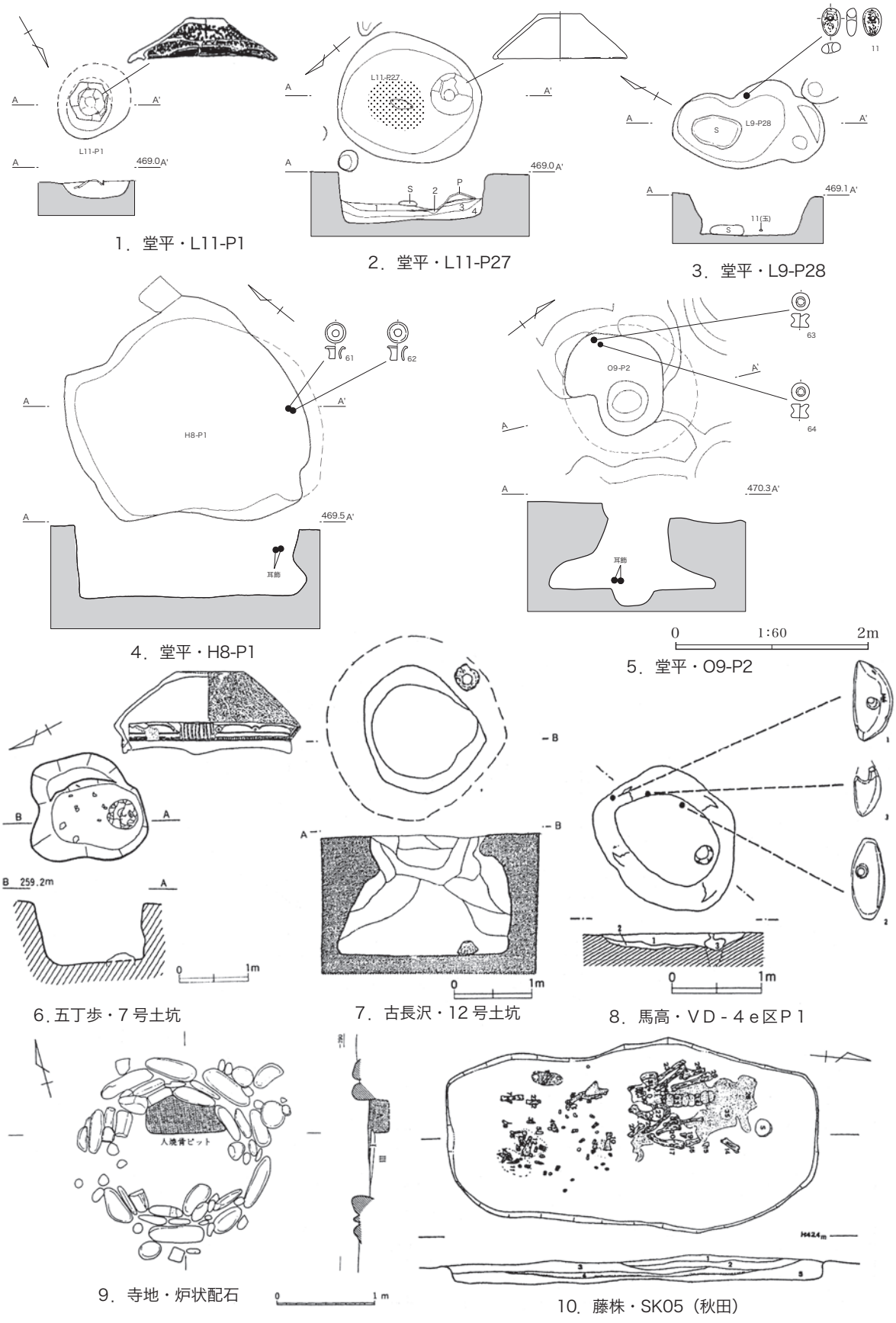
馬高式期の埋葬遺構は、土坑墓が主体であるが、立石を伴う小形土坑や甕被葬の存在することがわかってきている（註１）。南魚沼市五丁歩遺跡（註２）のように、中央広場のなかに墓域が造営されるものと、魚沼市清水上遺跡（註３）のように、明確な墓域を形成せずに居住域に散漫に分布するものなどが確認される。さらに、この時期の中央広場に小規模な弧状配石や列石が配されることも注目される。堂平遺跡からも縄文中期の埋葬遺構が検出されており、中央広場への墓域形成は確認されず、居住域に散漫な分布を示す。特に、L11-P27 は中期中葉（馬高式期前半期）の土坑墓であり、逆位の浅鉢と焼人骨（註４）が一緒に出土した点で非常に特殊な事例である。本遺跡が位置する信濃川上流域では、後期前葉から中葉にかけて配石墓とともに甕被葬が普及することが明らかになっているが（註５）、それ以前の埋葬遺構は不明な部分が多い。堂平遺跡の例は、浅い楕円形の土坑から浅鉢が逆位で出土していることから「甕被葬」の可能性が高い。加えて、浅鉢の脇から焼人骨と炭化物が出土しており、甕被葬に焼人骨が伴う例はほかに類を見ない。ここでは、堂平遺跡の土坑墓を中心として信濃川流域の中期中葉から後葉の葬制について、①甕被葬、②火葬、③装飾品に注目して様相を明らかにしておきたい。

２．「甕被葬」と推定される事例

信濃川流域の中期の埋葬施設は、明確な事例に乏しいものの、五丁歩遺跡や清水上遺跡などの事例から判断すると、土坑墓が主流であり、長幅比からほとんどが屈葬の可能性が考えられる。本地域の「甕被葬」と推定される事例は、後期前葉～中葉の事例が目立ち、関東地方から中部地方においても中期後半期～後期前半期にかけて甕被葬が展開するようである（註６）。このことから、少なからず後期前半期においては、中部地方と信濃川流域との影響関係が想定される。一方で、中期中葉の「甕被葬」の類例はほとんど知られておらず、東日本での広がりは分かっていない。中期中葉から後葉の甕被葬は、１遺跡に１例ないしは２例認められる程度で、後期前半期に比べて極めて稀な葬法と言える。

本遺跡から検出された２例は、中期中葉に帰属する浅鉢を逆位で使用している（第 167 図１・２）。L11-P1 は径 0.8 mの略円形の小形土坑であり、大きさから見て成人が埋葬されたものとは考えにくい。このことから、幼児などが埋葬された可能性を想定したい。その場合、頭部というよりは、体全体を覆うような状態だったと推測される。一方、L11-P27 は径約 1.5 m ×1.34 mの楕円形土坑で、その一端に浅鉢が逆位で置かれる。浅鉢は南側に偏って出土していることから、被葬者の頭部に被せられていた可能性が想定される。しかし、火葬であった場合、頭部に土器を被せることは不可能であり、形式的に浅鉢が配置された可能性もあるだろう。

周辺地域でも事例が非常に乏しいこともあり、縄文中期の甕被葬はほとんど注目されてこなかった。甕被葬の可能性がある例は、南魚沼市五丁歩遺跡７号土坑（註７）、魚沼市古長沢遺跡 12 号土坑（註８）



1．堂平・L11-P1

2．堂平・L11-P27

3．堂平・L9-P28

4．堂平・H8-P1

5．堂平・O9-P2

6．五丁歩・7号土坑

7．古長沢・12号土坑

8．馬高・ＶＤ－４ｅ区Ｐ１

9．寺地・炉状配石

10．藤株・SK05（秋田）

第 167 図　堂平遺跡の埋葬遺構と周辺地域の類例

があげられる。前者は、土坑の形態や分布から墓坑の可能性が高く、底面からは中期前葉（大木 7b 式並行期）の北陸系浅鉢が逆位で出土している（第 167 図 6）。一方、古長沢遺跡 12 号土坑は、フラスコ状土坑底面から浅鉢が逆位で出土する事例であり、フラスコ状土坑を転用した埋葬例の可能性がある（第 167 図 7）。このように、フラスコ状土坑を埋葬施設に転用する事例は東北地方に見られ、新潟県内でも幾つか認められる。

しかし、このような中期中葉の甕被葬の事例は少なく、次段階への連続性も乏しいことから、縄文中期の葬法として普及していたとは考えにくい。さらに、これ以前の前期後葉にも浅鉢を墓坑に入れる例が目立つが、これらが中期初頭に引き継がれている形跡がない。これらは異なる意味を持つ葬法である可能性もあるが、同じ葬法が断続的に同地域に認められる点は興味深い。土坑内から大形土器片が出土する事例もよく見られ、これらの遺物について、埋葬に伴う可能性を考慮して出土状況を記録していく必要があるだろう。

3．縄文時代の火葬人骨（焼人骨）

縄文時代の火葬（焼人骨）については、すでに石川日出志や花輪宏、設楽博巳、渡辺俊一による集成・研究があり、その特色が明らかにされている。最初に、石川日出志は、縄文・弥生時代の焼人骨の出土例を集成し、縄文時代に関して中部日本においては縄文時代中期に出現して、再葬における遺骸処理法として実施されたとしている。その中で、石川は焼けた人骨にも、「遺体を埋葬するべき墓坑内に納めたのちにこれを焼く場合と、遺体・遺骸を別の場所で焼いたのちに墓坑内に納めるなどの方法をとっている場合」があることを明らかにしている（註 9）。設楽博巳は、焼人骨葬が縄文時代中期に信濃地方で配石遺構に伴う儀礼の中から生じたことを指摘する（註 10）。渡辺俊一は、北海道・東北地方の縄文時代の焼人骨例を集成して、埋葬に際して遺体を直接火にかけるか否かは別として、何らかの形で火を用いる例は前期から認められ、縄文時代の火葬は、それぞれが多数の墓坑群にあって 1 例か数例であることから特殊な葬法とみるべきであることを指摘する（註 11）。一方、花輪宏は、「人骨の焼け具合から判断して、概ね埋葬後の骨化が進んだ段階で焼かれたもので、ほとんどが再葬の一形態であり、現代に見られるような火葬は、縄文時代には認められないと結論づける（註 12）。

これらの研究を踏まえると、堂平遺跡 L11-P27 から検出された焼人骨は、土坑内火葬なのか、他の場所で火葬されたものが土坑に埋葬されたのか、または再葬なのかどうかが問題になるだろう。本資料が、土坑内火葬である場合、土坑中央部のみから焼人骨と炭化材が検出されるのは不自然である。他の部分が半焼けの状態であったために、酸性土壌のなかで腐食してしまったとしても、もう少し広い範囲に炭化材の広がりや焼土の形成が認められるはずである。加えて、甕被葬と考えられる浅鉢が検出されていることがさらに複雑にしている。つまり、甕被葬であれば、通常は遺体頭部を土器が覆っていたと推測されるが、そう単純ではなさそうである。

一方、焼人骨が他の場所で焼かれて、本土坑に埋葬されたとすると、土坑内の炭化材の広がりと整合性がある。人骨を鑑定したパリノ・サーヴェイも焼骨が人骨であれば、極端に全体量が少なすぎるという所見を示している（註 13）。このことを加味すると、他の場所で焼かれた遺体の一部を埋葬した可能性が高い。さらに、花輪が指摘するように、再葬に伴って掘り出された遺骸を火葬した可能性も考えられ

るだろう。そうした場合、前述の浅鉢の意味が問題になる。本来、甕被葬は頭部に相当する部分に浅鉢を置いたと考えられるが、実際に頭部が無かった場合、頭部に相当する場所に象徴的意味をもって配置したのかもしれない。さらに、土坑の大きさが成人埋葬用の規模と変わらない点も浅鉢と同様に問題となる。火葬によって小さくなったとすれば、それに適する規模の土坑を掘削するのが合理的である。本資料と同様に、土坑内から火葬人骨が出土した例に、秋田県藤株遺跡 SK05（註 14）がある（第 167 図 10）。藤株の事例は、晩期前葉の事例であるが、径約 1.93 m ×0.95 mの土坑内から焼人骨が検出されており、土坑内に焼土が広がり、解剖学的位置を留めていることから土坑内火葬の典型例とされる（註 15）。この例を見ても、堂平遺跡の事例は土坑内火葬とは言いがたく、現状では他の場所で焼かれた遺体が通常の土坑に埋葬されたものと理解しておきたい。新潟県内での焼人骨の例は、青海町寺地遺跡（註 16）の縄文晩期の配石遺構に伴う事例があるが、これより遡る事例は稀である。これらは径２mほどの円形配石のなかから焼人骨が多量に検出された事例で（第 167 図９）、鑑定の結果、成人骨 11 個体と判断されている（註 17）。堂平の事例は、中期中葉に位置づけられ、新潟県内でも古い時期の良好な資料と言えるだろう。

４．副葬品 - 玉類と耳飾 -

本遺跡の L9-P28 からは、偏平礫１点とともに玉類１点が出土している。本土坑には、土器が伴わないことから帰属時期は不明であり、後期前半期に帰属する可能性もある。玉類は完形品で、径約 1.56 m ×0.86 mの「く」の字状の不整形土坑の壁面から出土している（第 167 図３）。偏平礫は、土坑底面に置かれた状態で出土しており、遺体上に抱石葬として置かれた可能性もあるが、明確ではない。周辺遺跡の縄文中期の墓坑では、玉類出土例が乏しいが、良好な事例として長岡市馬高遺跡の土坑（註 18）があげられる（第 167 図８）。この土坑からは壁際に沿って３点の玉が出土しており、装飾品として身に着けていたものとも言い切れない。他にも墓坑から玉類が１点出土しており、これらは縄文中期に比定されている。これらの玉類は、小形品であるため調査時のエラーの可能性も十分考慮されるが、これを考慮しても非常に類例は乏しく、本地域において一般的なあり方とは捉えられない。

一方、堂平遺跡の H8-P1 と O9-P2 からは、２点セットで耳飾が出土している（第 167 図４・５）。いずれもフラスコ状土坑の覆土中層から下層から出土しており、廃棄というよりはフラスコ状土坑を埋葬施設に転用した事例であると理解される。フラスコ状土坑の埋葬への転用については、岩手県上里遺跡（註 19）などの事例で以前より指摘されていることであり、本遺跡もこれに該当すると考えられる。しかし、幾つかの問題が残る。O9-P2 は、完形土器の中から耳飾２点が出土しており、土器はほぼ横位で潰れた状態で出土している。このことから、成人の埋葬とは考えにくく、幼児や胎児もしくは再葬の可能性もあるが、人骨が出ていないため明確ではない。帰属時期は、伴出土器から前者が１期（大木８ａ式並行期）で、後者が２ｂ期（大木８ｂ式並行期中段階）である。周辺遺跡においても、耳飾が墓坑から出土する事例は稀で、貴重な事例であると言えるだろう。

５．おわりに

信濃川流域の縄文時代中期中葉～後葉（馬高式期）の埋葬遺構については、五丁歩遺跡や清水上遺跡

の調査例から、土坑墓が主体であることが分かっており、墓坑規模から屈葬であると推定されている。この他にも、立石を埋設する土坑も埋葬施設の可能性が想定される（註 20)。今回の堂平遺跡の甕被葬例や火葬人骨例、耳飾出土例は、当該期の葬制を考える上で非常に重要な資料であると言える。甕被葬と考えられる事例は、堂平遺跡から２例確認されたが、焼人骨を伴うなど特殊なあり方を示していた。この火葬人骨も新潟県内ではこれまで類例が確認されておらず、非常に特殊であると言える。本事例は、土坑内で火葬されたものではなく、他の場所で火葬されたものが埋葬されたものと考えられ、花輪が指摘するような再葬の可能性が想定されるだろう。２対の耳飾出土例は、いずれもフラスコ状土坑出土であり、フラスコ状土坑の転用とともに耳飾を着装した埋葬例としても、非常に重要である。今後も当該期の葬制の解明が進展することを期待したい。

註　釈

1）阿部昭典 2006「馬高式期の埋葬遺構について」『火焔土器の時代 - その文化を探る - 』津南町教育委員会
2）高橋保・高橋保雄ほか 1992『関越自動車道関係発掘調査報告書　五丁歩遺跡・十二木遺跡』新潟県教育委員会
3）田海義正・高橋　保ほか 1990『関越自動車道関係発掘調査報告書　清水上遺跡』新潟県教育委員会
寺崎裕助・加藤正樹ほか 1996『関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書　清水上遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査事業団
4）この焼骨は、パリノ・サーヴェイに鑑定を委託した。その結果、特徴的な部位を確認することができなかったため、「ヒトを含めた哺乳類」と鑑定された（付編４参照)。
5）阿部昭典 1998「原遺跡研究：７．墓制と配石遺構」『新潟考古』第９号
阿部昭典 2005「第Ⅵ章第４節魚沼地域の配石墓の地域性」『道尻手遺跡』津南町教育委員会
阿部昭典 2009「新潟県における縄文時代後期前葉集落と配石遺構の隆盛」『國學院大學考古学資料館紀要』第 25 輯
6）山本暉久 2003「墓壙内に倒置された土器」『神奈川考古』第 39 号
加藤元康 2003「縄文時代墓制研究への視角」『史紋』第１号
中村耕作 2006「縄文時代後期前半期の土器被覆葬」『史学研究集録』第 31 号
7）前掲註１文献を参照。
8）鈴木俊成・田海義正 1990『月岡遺跡・古長沢遺跡』堀之内町教育委員会
9）石川日出志 1988「縄文・弥生時代の焼人骨」『駿台史学』第 74 号
10）設楽博巳 1993「縄文時代の再葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 49 集
11）渡辺俊一 1998「縄文時代の焼人骨・火葬墓について - 北海道・東北地方を例に - 」『北方の考古学』野村崇先生還暦記念論集刊行会
12）花輪　宏 2003「縄文時代の「火葬」について」『考古学雑誌』第 87 巻第４号
13）付編４を参照。
14）富樫泰時・高橋忠彦ほか 1981『藤株遺跡発掘調査報告書』秋田県埋蔵文化財振興会
15）人骨の鑑定は、山田聡が行っている。
16）寺村光晴・関雅之 1987『史跡寺地遺跡』青海町
17）森沢佐歳・松田健史・小片保 1987「第２章寺地遺跡（配石遺構）出土の人焼骨について」『史跡寺地遺跡』青海町
18）小熊博史 2002 『馬高遺跡・三十稲場遺跡』長岡市教育委員会
19）高橋与右衛門 1983「Ⅷ　まとめ」『上里遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター
20）前掲註１文献を参照。

第７節　総　括

地域の遺産である遺跡は、本来恒久的に現状保存し、活用することが求められる。しかしながら、やむを得ない事情から開発を容認する代わりに「記録保存」という用語で「発掘調査」が実施されるが、実質遺跡は破壊され失われる。

その遺跡を破壊する当事者が、発掘担当者であり、調査員である。その当事者は、遺跡を破壊する当事者としての認識を強く持ち、遺跡と対峙している。どれ一つ同じ遺跡あるいは遺構はなく、そのつど発掘手法を吟味し、様々な情報をどのように記録するかを、瞬時にその場で考え実行する必要がある。

さらに恒久的な記録報告書においては、客観的な事実記載と主観的にならざるを得ないが、その遺跡で展開した事象を地域史のなかで位置付けることが重要といわれている。

遺跡を記録する基盤に「考古学的記録」が横たわる。考古学の基本は、縦糸としての「時間＝編年」と横糸である「空間＝分布」である。それらを織り込むことで歴史叙述に接近することが可能となる。しかしながら、その編年学的研究の整備が近接地域と比べると遅れている。よって、地域史に遺跡を位置付ける作業において遺構や遺物の編年学的研究の整備が必要であり、その裏付けによって始めて地域史変遷の中で失われた遺跡の評価が行われると考えている。

さて、平成８年に遺跡の７割を記録保存した「堂平遺跡」の記録報告書をようやく上することができた。その 13 年に亘る地道な整理作業途上で、「火焔型土器」と「王冠型土器」が復元され、その残存率と華麗な姿が評価され、国の『重要文化財』に指定された。

このたびの報告書では遺跡を概観し、縦糸である土器の編年学的整備を「馬高式土器」と「沖ノ原式土器」を対象に実施した。縄文時代中期後半の凡その編年学的変遷をおさえる時間軸が整備された。その時間軸を頼りに、遺跡で出土した石器群と遺構について地域史における位置付けを試みた。

中津川右岸に立地する堂平遺跡と道尻手遺跡は近接する縄文集落跡であり、土器型式学的研究からもほぼ同時期に生活が営まれていたことが判明している。その遺跡から出土した石器群の比較によれば、どちらも打製石斧と磨石類の組成比が異常に高い傾向が指摘され、生業活動と深く関わりを持つと推定される。また、この傾向は内陸盆地における傾向であり、海岸平野部とは異なるものである。さらに、細かく比較するならば堂平は、道尻手に比べると調査面積に対して石鏃と石皿の出土点数が多いことが指摘される。また、周辺河川における石材調査を背景に利用石材の比較を行った。その結果、道尻手では頁岩と無斑晶ガラス質安山岩がほぼ同等に利用されている実態があるが、堂平では珪質頁岩・頁岩の使用頻度がはるかに多い特徴がある。この異質な石材利用の背景に「石材獲得地の確保」があるのではないかという疑問から周辺河川への石材分布調査を実施した。その結果、堂平の東南側に位置する芝倉沢や砥沢川に良質な頁岩が採取されることが判明した。また、在地石材でないと判断される珪質頁岩Ａで製作された石鏃や石錐などは、その搬入形態を今後検討する必要性が明確となった。

さらに打製石斧の比較検討から、その製作手法に違いが認められた。道尻手では片面加工⇒両面加工に対して、堂平では片面加工＋両面加工⇒片面加工へ変遷するようである。今後近接する同時期の集落遺跡との比較検討が数量保障を持って実施し、その違いの背景に迫る必要がある。

堂平と近接する遺跡で検出した炉跡を概観し、その変遷を捉えた。この作業は道尻手の整理作業から継続されているものであり、資料増加の裏付けから深化している作業のひとつである。

１期（大木８ａ式並行期）～３ｂ期（大木 10 式並行期）に掛けては、卵形住居跡と長方形住居跡が併存する集落構成が判明している。その異なる住居跡に付随する炉跡の変遷を信濃川流域で検討した。1 期は、卵形住居跡には地床炉と方形石組炉が一般的であり、長方形住居跡には地床炉あるいは「二側縁石組炉」が確認される。２ａ期～２ｂ期での住居跡や炉跡の形態構成に変化は無いが、長大化の傾向が指摘される。２ｃ期とした栃倉式期（大木８ｂ式新段階並行期）になると祖形的な「複式炉」が出現する。その構築手法は大形縁石の周囲に小形扁平礫を配するものと二列の縁石内側に小形円礫を充填するものがある。３ａ期（大木９式並行期）になると卵形住居跡では複式炉の明確な燃焼部の分化が確立する。また、３ａ期新段階になると信濃川流域では一時的に前庭部を持つ複式炉が出現するが、堂平ではその傾向が確認できない。３ｂ期（大木 10 式並行期）になると長方形住居跡は確認できなくなる。また、卵形住居跡が姿を消し、楕円形・五角形の平面形態の住居跡に変化する。その炉跡はダルマ形を呈する。縁石は、外側に扁平な礫（分割礫を多用する）を長軸方向に並べ、石組部底面を区画する礫の間に扁平礫を長軸方向に合わせて充填する手法が採用される。３ｂ期新段階になると、複式炉は小形化と箱形化の傾向を強める。さらに４期の三十稲場式期になると複式炉は消滅し、方形石組炉が出現すると考えられる。

これら住居平面形態と付随する炉跡の変遷は、信濃川中流域から上流域において変遷することがようやく捉えられる段階に来た。この地域は豪雪地域であることから、耐雪を前提とした住居上屋構造と暖を取る炉の燃焼面積が、これからの検討課題である。

環状列石は東日本全体で、その発生意義と拡散する背景が議論されている。これら環状列石は、中期末葉に中部高地で発生し、後期前葉において東北地方北部から北海道南西部で隆盛する縄文記念物である。これらは中期末葉の柄鏡形敷石住居の出現と東北地方への拡散現象と連動する動きと理解される。その中部高地と東北地方を結ぶルートの中間に新潟が位置するが、その実態が不明瞭である。そのような中で堂平において環状列石が発見された意義は大きい。その造営時期は、後期初頭から前葉であり、敷石住居とともに中部高地⇒千曲川流域⇒信濃川流域へと波及したものと推測される。そして、本地域を経由して、日本海沿岸を北上する可能性が推測される一方、そのルートに三十稲場式土器やその要素が広がりを見せる現象は、東北北部で環状列石が隆盛する社会的背景と無関係に無いと考えられる。

さらに L11-P27 で検出された「（炭化物＋火葬人骨の可能性）＋抱き石＋伏せた浅鉢」の意義は大きい。類例が無いことから、資料増加を待っての位置付けであるが、中期中葉に比定される事実から新潟県最古の火葬事例と判断される。また、廃屋墓やフラスコ状土坑転用墓についても議論を高める素地が整備されたと考える。さらに集落構造においてフラスコ状土坑が「環」を意識して構築された堂平の事例は、類例増加を待ち、再度社会学的に位置付けする必要性がある。

津南町で調査された堂平遺跡で記録保存された考古学的情報は、信濃川流域のみならず東日本を含めた縄文文化の形成とその社会を解明する上で極めて重要な成果である。ここにその記録を上程する。

付　編

付編１：堂平遺跡出土資料の ^{14}C 年代測定と炭素・窒素同位体分析
國木田　大　（東京大学 北海文化研究常呂実習施設）
吉田邦夫　（東京大学 総合研究博物館）

付編２：堂平遺跡から出土した動物遺体　植月　学（山梨県立博物館）

付編３：堂平遺跡から出土した炭化材・植物遺体の同定　パリノ・サーヴェイ株式会社

付編４：L11-P27 出土の焼骨の分析　パリノ・サーヴェイ株式会社

付編５：堂平遺跡出土縄文土器底部の「敷物圧痕」について　松永篤知（名古屋大学大学院文学研究科）

＜付編１＞

堂平遺跡出土資料の^{14}C 年代測定と炭素・窒素同位体分析

國木田　大（東京大学 北海文化研究常呂実習施設）
吉田邦夫　（東京大学 総合研究博物館）

１．研究目的および分析資料

本研究では、堂平遺跡出土の土器付着炭化物および木炭資料の ^{14}C 年代値を報告し、先行研究の年代値と比較検討を行う。また、土器付着炭化物の炭素・窒素同位体分析もあわせて行い、食性についても議論を進めたい。

測定資料は、第 13 号住居跡第１号土坑において、一括出土した沖ノ原Ⅰ式の土器付着物（５個体、計９点、図１）、第 59 号住居跡出土の大木 10 式の土器付着物（２点、図１）、第 59 号住居跡の炭化材資料３点である。沖ノ原式土器は、火炎土器に後続する型式で、古相段階の沖ノ原Ⅰ式が大木９式併行、新相段階の沖ノ原Ⅱ式が大木 10 式併行と考えられているが、大木 10 式とどこまで併行するかは意見がわれている（阿部昭 2008）。新潟県での縄文時代中期後半の土器付着物年代値は、火炎土器の研究（吉田 2004）を除いて、ほとんど報告されていない状況であり、本研究では、当該地域の縄文時代中期後半の土器編年を議論するために、沖ノ原Ⅰ式、大木 10 式の年代を明確にすることを主目的とした。また、今回測定を行った土器資料４個体は、土器底部内面および外面に非常に良好に付着物がついており、同一個体の内面と外面の年代値の比較も目的とした。土器付着物の炭素・窒素同位体分析は、1970 年代の骨コラーゲンの分析法を応用し、近年研究事例が増加している。分析手法や先行研究については、國木田ほか（2010）で紹介しているので本論では省略し、本研究と先行研究のデータを比較検討しながら議論を深めたい。

２．分析方法

^{14}C 年代測定における試料調製は、通常の方法にしたがって行った（参照：吉田 2004）。化学処理におけるアルカリ処理濃度は、試料が全て溶解しない程度にとどめた。試料の化学処理回収率などは表２に示した。本論での暦年較正年代値は OxCal v4.1.7（Ramsey 2010）を用いて IntCal09 で較正した。測定には、東京大学工学系研究科のタンデム加速器（MALT；Micro Analysis Laboratory, Tandem accelerator）を用いた。炭素・窒素同位体に関しては、東京大学総合研究博物館に設置された IsoPrimeEA 安定同位体比質量分析装置（Micromass, UK）を用いた。

３．測定結果

測定結果を表１に示す。炭素・窒素安定同位体比に関しては表２に示した。第 13 号住居跡第１号土坑の沖ノ原Ⅰ式土器の年代は、4265 ～ 4075BP の範囲で得られ、１点の古い年代値 4265BP を除くと 4175 ～ 4075BP と比較的まとまる。第 59 号住居跡の大木 10 式の年代値は 4295、4210BP で、炭化材の年代値 4215 ～ 4130BP と比較して、やや古い結果となっている。前述のように沖ノ原Ⅰ式が大木９

式併行であることを考慮すると、今回の年代値は土器型式とやや矛盾した結果となる。次項では、この矛盾の原因を探る上で必要な、いくつかの課題に対して考察を行いたい。

4．考察

（1）土器付着炭化物の内外面の年代差

今回測定を行った沖ノ原Ⅰ式土器4個体（P1-5, P1-8, P1-20, P1-22）については、内面と外面の年代値の比較を行った。図2に結果を示したが、程度の差はあるものの内面が全て古い結果となっている。内面付着物が古い原因として、すぐに疑われる要因は海洋リザーバー効果である。海洋リザーバー効果に関しては、後述する炭素・窒素同位体比からおおむね推定することが可能で、筆者も δ^{13}C が－25‰より高く、δ^{15}N 値も10‰より高い範囲を一つの基準として捉えてきた（國木田ほか2008, 2009a, 2009b）。この基準を適用した場合、P1-22外（δ^{13}C 値－24.6‰、δ^{15}N 値10.7‰）が該当する。年代値は4175BPであり、他の試料と比較してやや古い程度で、顕著な影響はないものと考えられる。問題は、最も年代の離れているP1-22内の4265BPであるが、δ^{13}C 値－25.0‰、δ^{15}N 値6.4‰と海洋リザーバー効果の影響は低いと考えられる。ただし、この試料は図4・5で示した通り、他の内面3点と異なる領域にプロットされ、食料残滓の内容物が大きく異なっていた可能性は高い。近年では北陸や東北地方を中心に、陸上動植物起源にプロットされる領域でも年代値が古く得られるものがある。例えば、御経塚遺跡（石川県石川郡野々市町）では、縄文時代後期の土器の内面付着炭化物の年代値が約200～600BP程度古い年代値を示しているにもかかわらず、大部分の試料で炭素同位体比が－24～－26‰と陸上起源の範囲に分布するという結果が得られている（工藤ほか2008）。同じ現象は、押出遺跡（山形県東置賜郡高畠町）の縄文時代前期の試料でも確認されている（國木田ほか2010）。今後、海洋リザーバー効果に関しては、現生の煮炊き実験のデータを検討しながら慎重に検討を行う必要があるかもしれない。いずれにせよ、本資料の内外面の年代差は、P1-22内以外は、誤差範囲をわずかに超える程度であると考えられる。

（2）先行研究の年代値

当該地域では、吉田（2004）の火炎土器の研究が著名である。今回の資料とやや時期が異なるが、沖ノ原Ⅰ式の前段階でもあるので概要を簡単にまとめてみたい。吉田（2004）では、火炎1～4様式の年代が5500～4800calBP（約4800～4200BP）の範囲で多く得られ、資料によっては4090BPや5510BPなど大きくはずれるものも報告されている。火炎土器の出現と変遷については、東北の大木式、関東や中部地域の阿玉台式・勝坂式の影響が契機になったことが指摘され、大木8a式と大木8b式に併行する考えが一般的である（寺崎2008）。大木8a式の開始年代は、詳細な検討は省略するが、小林謙（2004, 2007）と藤根・佐々木(2005)を参考にすると、約4450BPと考えてよい。この年代を考慮すると、吉田(2004)のデータで約4450BPを遡る年代は慎重に扱った方がよいかもしれない。やや恣意的ではあるが、山下遺跡、馬高遺跡、岩野原遺跡（新潟県長岡市）のデータは約4350～4300BPの年代値が多く、この範囲が火炎土器の中心的な年代と考えられる。

火炎土器の年代値は、この他に吉田・宮崎（2007）の報告がある。この報告では、土器付着炭化物の由来について、土器付着物の生成実験による炭素・窒素安定同位体の挙動について論じている。清水上遺跡、五丁歩遺跡（新潟県魚沼市）、川久保遺跡（新潟県南魚沼郡）の年代値が報告され、δ^{15}N 値が 13 ～ 15‰を示す 4885, 4905, 4850BP の３点の結果をサケ、マスなどの遡上魚の影響（海洋リザーバー効果）と結論づけている。C / N 比が 20 以上で、明らかに陸上起源の影響が強いと考えられる年代値は 4405, 4495, 4405BP であり、4500BP を遡る年代値はない。火炎土器で報告されている古い年代値の多くは、海洋起源（サケ、マス含む）に由来する食料資源の影響による可能性が高いと考えられる。しかし、前述の山下、馬高、岩野原遺跡で報告されている若い年代値（4100 ～ 4050BP）については解釈が難しい状況であり、今後の研究の進展が望まれる。

少し話が堂平遺跡から離れてしまったが、火炎土器の年代範囲を約 4500 ～ 4200BP 頃と考えると、今回の沖ノ原Ⅰ式の約 4175 ～ 4075BP は整合的であると言える。火炎土器の下限年代が明確に解明されていないので、現状でこれ以上の議論は難しい。このように考えてくると、第 59 号住居跡出土の大木 10 式の土器付着物は、4075BP より新しいと考えられるのであるが、今回の結果は大幅に古い 4295, 4210BP であった。この２点の付着物も上述の P1-22 内試料のように、原因不明で古く得られている可能性が高い。図４・５では、これら３点のプロットが非常に近いので同じ要因があるのかもしれない。プロットされる領域は前述の押出遺跡の事例とほぼ同じである。第 59 号住居跡の炭化材資料３点が大木 10 式の年代と考えると 4215 ～ 4130BP で、沖ノ原Ⅰ式とほぼ同年代になってしまう。古木効果の可能性もあるが、年輪幅の広いクリ材であったことを考慮すると、その可能性は低い。大木９式と大木 10 式の年代に関しては、以前、東北地方北部のデータ集成を行って議論したことがある（國木田ほか 2008）。この中でも、大木９式と大木 10 式はかなり重複した年代値が得られており、境界を決めるのは難しい状況であった。現状では大木 10 式の開始を 4100BP 頃、大木 10 式の終焉を 3800BP 頃と、筆者は捉えている。4000 ～ 3800BP の範囲は大部分が大木 10 式で報告されているので、この年代は大木 10 式の後半段階として評価してよさそうである。いずれにせよ、本研究のデータは沖ノ原Ⅰ式と大木 10 式がほとんど同じ年代で得られてしまう結果となってしまい、境界年代の議論を行うことはできない結果である。このような現象は後述する暦年較正曲線とも関係していると考えられる。

（３）暦年較正曲線との関係

上述してきた年代値は較正前の年代値であるため、暦年較正曲線と照らし合わせる必要がある。図３に代表的な年代値４点をプロットしている。すでに上述した通り沖ノ原Ⅰ式土器の年代と第 59 号住居跡の炭化材資料の結果は重複している。注目されるのは、この時期の暦年較正曲線の形状である。弥生開始年代で議論となった、いわゆる「縄文・弥生ミステリーゾーン」「2500 年問題」と類似した較正曲線の平坦な形状が存在する。図３では、当該期、約 4200 ～ 4050BP（約 4800 ～ 4550calBP）のほかに、約 4600 ～ 4350BP（約 5300 ～ 5000calBP）の範囲が顕著である。この点は、吉田（2004）でも指摘されている通りで、さながら「縄文時代中期の 4500 年問題」と言ってよさそうである。この二つの平坦部分に該当する土器型式は、大木８ａ式と大木８ｂ式、大木９式と大木 10 式の前半段階である。つまり、土器

編年の詳細な年代が決まる部分は、この二つの平坦部分の間、具体的には約 4350 ～ 4200BP（約 4900 ～ 4850calBP）しかないと言える。先行研究のデータ集成から、この部分は大木８ｂ式から大木９式に変遷する部分で、筆者が大木９式を約 4100BP 以降と決めているのは、そのためである。今回の沖ノ原Ⅰ式と大木 10 式の年代は、約 4200 ～ 4050BP（約 4800 ～ 4550calBP）の範囲が較正すると同じ年代になってしまうので、分けられないのかもしれない。今後は、平坦な部分が終わる約 4050BP 以降の土器型式の年代を探求していく必要がある。

（４）土器付着炭化物を用いた食性復元

土器付着炭化物の炭素・窒素同位体分析は、まだ発展途上の段階といえるが、① ^{14}C 年代測定法に付随して測定が可能な点、②土器が出土する地域や時期全てを対象とすることが可能な点において非常に有用な方法であり、人骨資料が出土しない遺跡における食性復元の手段として注目される。研究の経緯、原理や方法、先行研究は割愛し（詳細は國木田ほか 2010）、本項では沖ノ原Ⅰ式土器の内面付着物の意義について考察したい。

図４・５に示した通り、沖ノ原Ⅰ式の内面付着物３点は窒素同位体比が低く（0.5 ～ 1.5‰）、C / N 比は 23 以上で動物と C_3 植物の領域から大きくはずれ、C_3 堅果類の領域に近い。特に P1-8 内は、C / N 比が 33.0 で、堅果類の単独利用の可能性が高い。吉田（2006）の煮沸実験前後の同位体変化でも、トチは $\delta^{15}N$ 値が－ 2.7 から 0.0‰に、クリ、コナラ、ドングリなども 0‰近辺での変化に集中する。この領域は、C_3 植物の領域の外縁部にあたり、他の物質の混在は考えにくい。そのため、C / N 比がやや低い試料２点（P1-5 内: $\delta^{13}C$ 値－ 23.3‰、$\delta^{15}N$ 値 0.5‰、C / N 比 24.2、P1-20 内: $\delta^{13}C$ 値－ 23.7‰、$\delta^{15}N$ 値 0.5‰、C / N 比 23.6）も堅果類単独利用の可能性が高い。現状で、多くの縄文土器の内面付着物が測定されているが、堅果類単独の値を示した資料はほとんどない。

今回測定した土器は大型の深鉢であり、付着物が堅果類単独である場合、アク抜き処理の可能性が考えられる。特に、縄文時代中期半ばから利用が始まり、後期、晩期と継続するトチノキ利用（國木田ほか 2010）を考える上で、重要である。アク抜き技術方法は大きく二つの着眼点がある。一つは、武藤（2006）の加熱工程は必ずしも必要ではなく、水さらしと加灰処理が根幹をなしていたとする説と、和田（2008）などのように加熱処理の重要性を指摘する説とがある。堅果類の加熱処理においては、阿部芳（1996）の大型薄手の深鉢（粗製土器）の量産体制と関連付けられた指摘や、小林正（2008）の特大型（20ℓ 以上）と大型（10ℓ 台）の深鍋が「ナッツ類の灰汁抜きなどの食材加工＋日常用・大人数用の調理」という複数の機能を帯びていた可能性が高いとする指摘などがある。特に小林正は、赤山陣屋跡遺跡（埼玉県川口市）のトチ加工場出土資料の炭化物付着状態がトチのアク抜きの使用痕跡の可能性が高いことも主張している。今回測定を行った堂平遺跡出土の沖ノ原Ⅰ式土器も大型深鉢であり、小林正（2008）で分析が行われ、アク抜きとの関係が指摘されている。トチノキ利用の変遷において、加熱アク抜き技術専用の土器（普通の煮沸と併用している場合は混在した結果が予想さるため炭素・窒素安定同位体分析では特定できない）が、いつどのように成立したのかは重要な課題である。本研究の沖ノ原Ⅰ式土器の結果をアク抜き利用と断定するのは時期尚早であるが、今後、大型深鉢などの器種について分析事例を増加し、議論を深めていく必要があろう。

5．まとめ

本報告では、沖ノ原Ⅰ式および大木 10 式の年代について検討を進めた。残念ながら今回の分析では、両土器型式の境界年代を詳細に決めることはできなかった。このことは、当該期の暦年較正曲線の問題と密接に関わっており、今後、測定例が増加したとしても解明できないかもしれない。

一方で、沖ノ原Ⅰ式の内面土器付着物は、炭素・窒素同位体分析の結果、堅果類単独利用の可能性が高く、今後の食性分析にとって非常に意義深いデータを提示できた。

【参考文献】

阿部昭典．2008．沖ノ原式土器．「総覧 縄文土器」（小林達雄編），472-479．アム・プロモーション，東京．

阿部芳郎．1996．食物加工技術と縄文土器．季刊考古学 55: 21-26.

工藤雄一郎・小林謙一・山本直人・吉田　淳・中村俊夫．2008．石川県御経塚遺跡から出土した縄文時代後・晩期土器の年代学的研究．第四紀研究 47（6）：409-423.

國木田　大・吉田邦夫・辻　誠一郎．2008．東北地方北部におけるトチノキ利用の変遷．環境文化史研究 1：7-26.

國木田　大・吉田邦夫．2009a．第 1 節 放射性炭素年代測定．「青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報（2008 年度）」（高瀬克範編），19-22．江豚沢遺跡調査グループ，東京．

國木田　大・吉田邦夫・児玉大成．2009b．小牧野遺跡における土器付着炭化物の ^{14}C 年代測定．青森県考古学 17：21-26.

國木田　大・吉田邦夫・辻　誠一郎・福田正宏．2010．押出遺跡のクッキー状炭化物と大木式の年代．東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要 9：1-14.

小林謙一．2004．縄紋社会研究の新視点－炭素 14 年代測定の利用－．276pp．六一書房，東京．

小林謙一．2007．大木 9・10 式土器の年代測定事例集成－批判に対する上での覚書－．セツルメント研究 6: 117-150.

小林正史．2008．土器付着炭化物分析－ススコゲからみた縄文深鍋による調理方法－．「縄文時代の考古学 7 土器を読み取る－縄文土器の情報－」（小杉　康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編），143-156．同成社，東京．

寺崎裕助．2008．火炎土器．「総覧 縄文土器」（小林達雄編），458-465．アム・プロモーション，東京．

藤根　久・佐々木由香．2005．複式炉の年代．「日本考古学協会 2005 年度福島大会シンポジウム資料集」，23-33．日本考古学協会 2005 年度福島大会実行委員会，福島．

武藤康弘．2006．紀伊山地におけるトチノミの非加熱アクヌキ法の研究．「生業の考古学」（藤本　強編），105-128．同成社，東京．

吉田邦夫．2004．火炎土器に付着した炭化物の放射性炭素年代．「火炎土器の研究」，17-36．同成社，東京．

吉田邦夫．2006．煮炊きして出来た炭化物の同位体分析．新潟県立歴史博物館研究紀要 7：51-58.

吉田邦夫・宮崎ゆみ子．2007．煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着物の由来についての研究．「日本における稲作以前の主食植物の研究」，科学研究費補助金研究成果報告書 研究代表者：西田泰民．85-96．新潟．

吉田邦夫．2009．考古科学が探る火炎土器．「火焔土器の国 新潟」（新潟県立歴史博物館編），87-99．新潟日報事業社，東京．

和田稜三．2008．Ⅱ トチノミの食文化．「トチノキの自然史とトチノミの食文化」（谷口真吾・和田稜三著），171-269．日本林業調査会，東京．

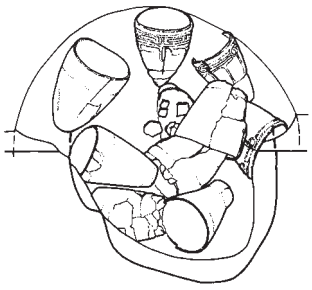
Ramsey, C.B. 2009. OxCal v4.1.7

No.	試料番号	測定試料 土器型式	^{14}C 年代 (BP)	Lab.code TKa-	δ^{13}C (‰)	暦年較正年代値（calBP） (68.2%)	 (95.4%)
1	DD-P1-5 外	土器付着物（外面） 沖ノ原Ⅰ式	4075 ± 40	14443	-24.8	4787-4764(9.5),4623-4516(49.5), 4471-4446(9.2)	4810-4757(15.1),4706-4668(6.4), 4654-4434(73.9)
2	DD-P1-5 内	土器付着物（内面） 沖ノ原Ⅰ式	4110 ± 40	14444	-24.4	4804-4761(17.4),4695-4674(7.7), 4646-4567(33.5),4559-4531(9.6)	4821-4750(23.5),4742-4736(0.6), 4729-4521(70.3),4462-4453(1.0)
3	DD-P1-7 外	土器付着物（外面） 沖ノ原Ⅰ式	4140 ± 40	14445	-23.0	4815-4781(13.5),4769-4754(5.6), 4722-4720(0.8),4711-4607(41.0), 4602-4582(7.3)	4826-4567(91.5),4558-4533(3.9)
4	DD-P1-8 外	土器付着物（外面） 沖ノ原Ⅰ式	4150 ± 35	14446	-26.9	4819-4785(14.6),4765-4752(5.7), 4727-4616(47.9)	4828-4569(95.4)
5	DD-P1-8 内	土器付着物（内面） 沖ノ原Ⅰ式	4155 ± 40	14447	-27.9	4821-4788(14.2),4763-4750(5.6), 4741-4735(2.4), 4729-4625(46.0)	4830-4570(95.4)
6	DD-P1-20 外	土器付着物（外面） 沖ノ原Ⅰ式	4100 ± 40	14448	-26.0	4799-4762(15.7),4691-4678(4.7), 4644-4635(3.1), 4629-4528(44.7)	4820-4751(22.1),4728-4517(70.6), 4467-4448(2.7)
7	DD-P1-20 内	土器付着物（内面） 沖ノ原Ⅰ式	4155 ± 40	14449	-24.9	4821-4788(14.2),4763-4750(5.6), 4741-4735(2.4), 4729-4625(46.0)	4830-4570(95.4)
8	DD-P1-22 外	土器付着物（外面） 沖ノ原Ⅰ式	4175 ± 40	14450	-27.9	4828-4800(13.9),4762-4692(36.5), 4677-4644(16.0),4634-4629(1.9)	4839-4780(21.6),4770-4580(73.8)
9	DD-P1-22 内	土器付着物（内面） 沖ノ原Ⅰ式	4265 ± 45	14451	-26.2	4869-4820(59.0),4751-4728(9.2)	4964-4805(72.6),4761-4696(18.4), 4674-4646(4.3)
10	DD-59J-120 内	土器付着物（内面） 大木 10 式	4295 ± 35	14441	-26.3	4876-4830(68.2)	4965-4826(95.4)
11	DD-59J-143 内	土器付着物（外面） 大木 10 式	4210 ± 40	14442	-27.9	4842-4808(22.5),4758-4702(36.0), 4670-4651(9.7)	4853-4784(31.0),4765-4616(64.4)
12	DD-59J-0009	炭化材	4130 ± 45	14577	-27.7	4813-4755(20.1),4708-4573(48.1)	4823-4530(95.4)
13	DD-59J-0033	炭化材	4190 ± 50	14578	-29.8	4836-4799(16.6),4762-4691(34.2), 4678-4643(15.0),4636-4629(2.4)	4850-4571(95.4)
14	DD-59J-0136・137	炭化材	4215 ± 45	14557	-23.2	4845-4809(25.5),4758-4704(34.2), 4669-4652(8.5)	4857-4784(34.1),4765-4617(61.3)

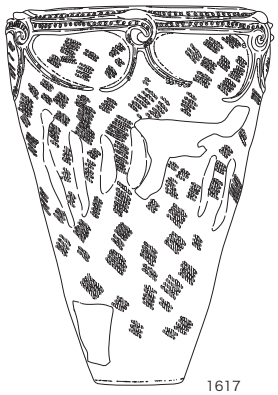
表１　測定資料の ^{14} C年代値と暦年較正年代値

No.	試料名	使用量 (mg)	AAA 処理後 (mg)	回収率 (%)	酸化量 (mg)	CO_2 生成量 (mg)	CO_2 収率 (%)	CO_2 使用量 (mg)	δ^{13}C 質量分析計 (‰)	δ^{15}N 質量分析計 (‰)	C / N
1	DD-P1-5 外	166.1	82.1	49.4	3.3	2.1	65.0	1.1	-24.8	8.5	26.4
2	DD-P1-5 内	251.8	129.5	51.4	3.5	2.3	66.5	1.2	-23.3	0.5	24.2
3	DD-P1-7 外	76.3	43.4	57.0	3.1	1.7	55.1	1.3	-25.2	10.6	20.0
4	DD-P1-8 外	37.5	23.1	61.5	2.6	1.2	46.3	1.2	-25.3	9.7	19.3
5	DD-P1-8 内	159.7	116.8	73.2	2.9	1.9	65.4	1.4	-26.3	1.5	33.0
6	DD-P1-20 外	48.2	27.7	57.5	3.1	1.9	62.1	1.4	-23.9	3.8	21.2
7	DD-P1-20 内	103.8	61.6	59.3	3.3	2.2	66.5	1.2	-23.7	0.5	23.6
8	DD-P1-22 外	15.9	9.8	61.3	2.6	1.1	41.4	1.1	-24.6	10.7	14.6
9	DD-P1-22 内	158.8	101.3	63.8	3.6	2.2	61.6	1.2	-25.0	6.4	11.1
10	DD-59J-120 内	99.4	49.0	49.3	2.8	1.6	57.3	1.2	-25.9	4.3	10.6
11	DD-59J-143 内	200.3	114.6	57.2	3.6	2.2	59.9	1.2	-26.0	6.1	11.2
12	DD-59J-0009	21.7	14.6	67.4	2.4	1.7	71.1	1.2			
13	DD-59J-0033	16.5	8.3	50.4	2.2	1.6	73.3	1.2			
14	DD-59J-0136・137	24.7	13.9	56.3	2.1	1.5	71.0	1.1			

表２　測定資料の化学処理収率



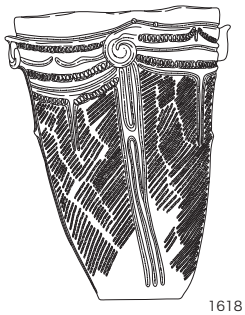
13 住 -P1



1617

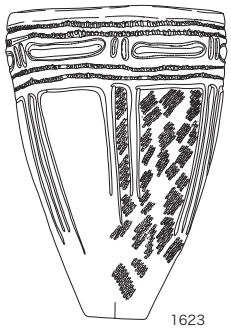
↑試料番号：DD-P1-5 外
沖ノ原Ⅰ式、口縁部外面より採取
4075±40BP

↑試料番号：DD-P1-5 内
沖ノ原Ⅰ式、底部付近内面より採取
4110±40BP



1618

↑試料番号：DD-P1-7 外
沖ノ原Ⅰ式、口縁部外面より採取
4140±40BP



1623

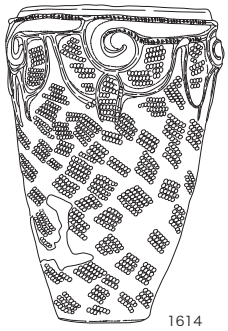
↑試料番号：DD-P1-8 外
沖ノ原Ⅰ式、胴部下半外面より採取
4150±35BP

↑試料番号：DD-P1-8 内
沖ノ原Ⅰ式、底部付近内面より採取
4155±40BP

1615

↑試料番号：DD-P1-20 外
沖ノ原Ⅰ式、口縁部外面より採取
4100±40BP

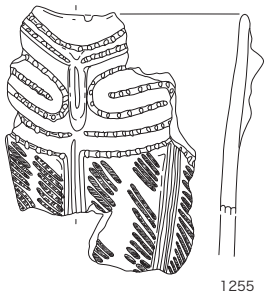
↑試料番号：DD-P1-20 内
沖ノ原Ⅰ式、底部付近内面より採取
4155±40BP



1614

↑試料番号：DD-P1-22 外
沖ノ原Ⅰ式、口縁部外面より採取
4175±40BP

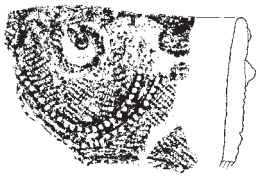
↑試料番号：DD-P1-22 内
沖ノ原Ⅰ式、底部付近内面より採取
4265±45BP



1255

←試料番号：DD-59J-120 内
大木 10 式、口縁部内面より採取
4295±35BP

→試料番号：DD-59J-143 内
大木 10 式、口縁部内面より採取
4210±40BP



1257

図 1　堂平遺跡の測定資料

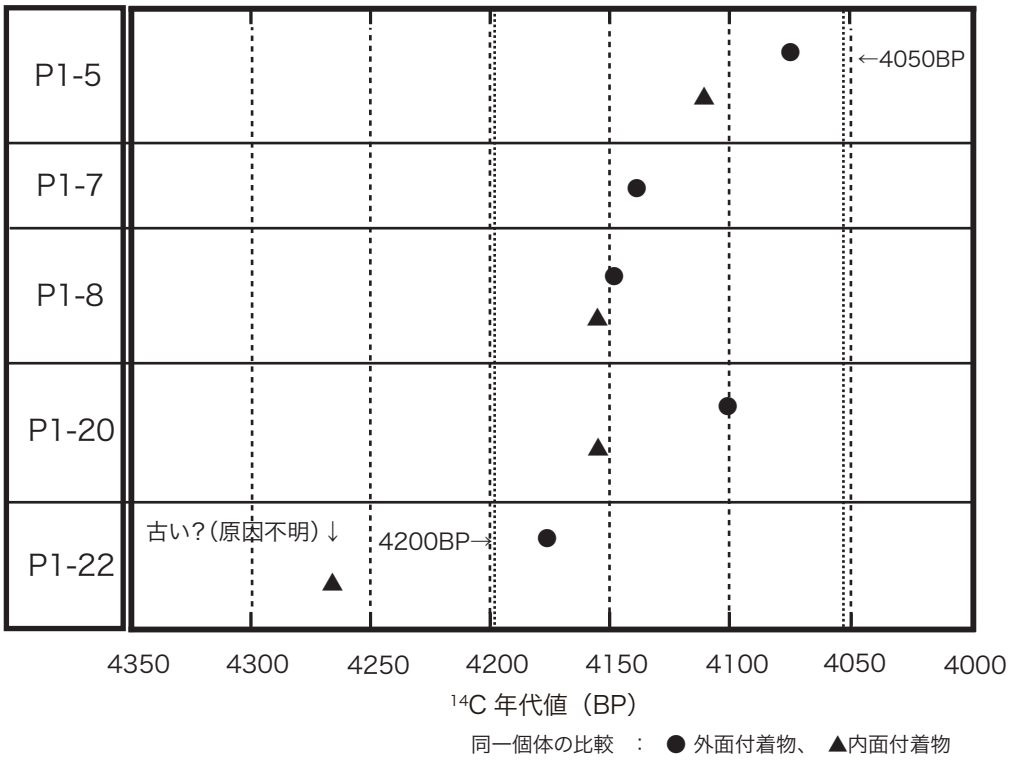


図２　堂平遺跡出土沖ノ原Ⅰ式土器の ^{14}C 年代値

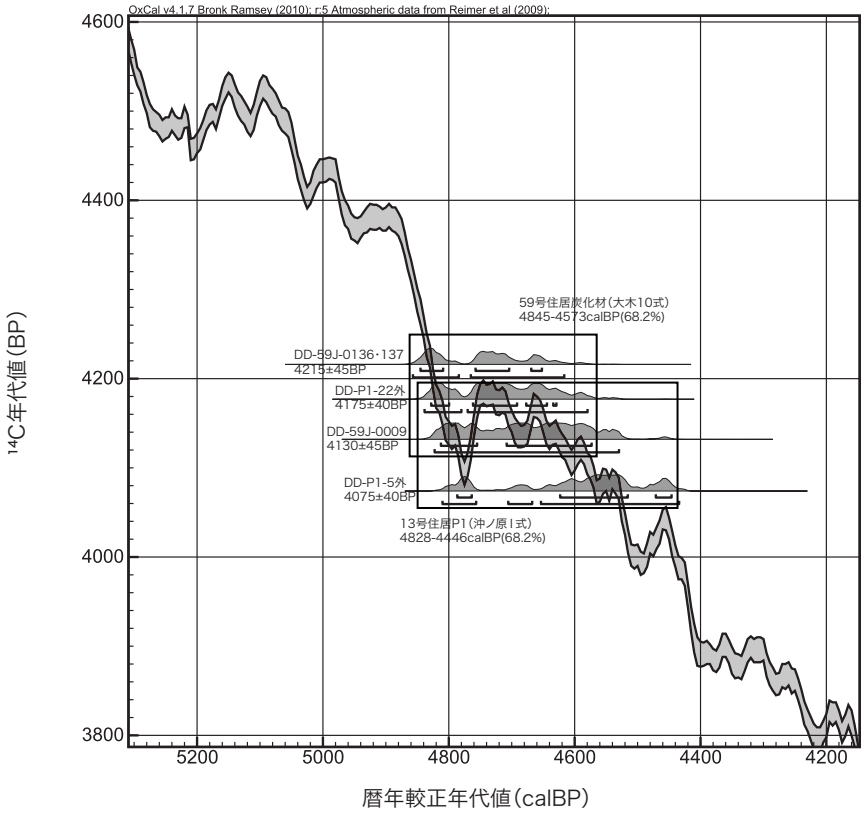


図３　測定資料の暦年較正年代値

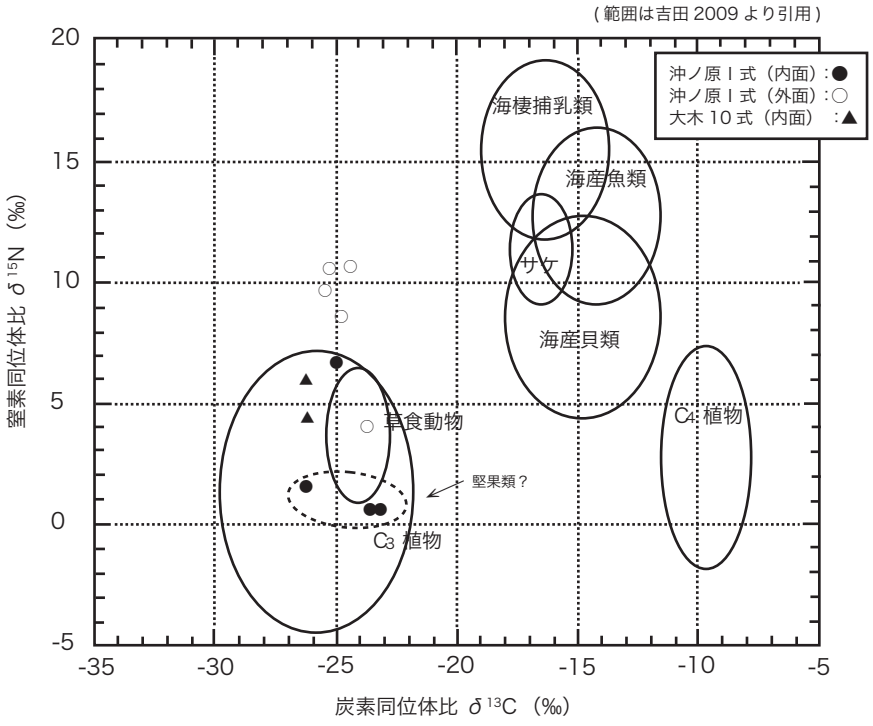


図４　堂平遺跡出土土器付着物の炭素・窒素同位体比

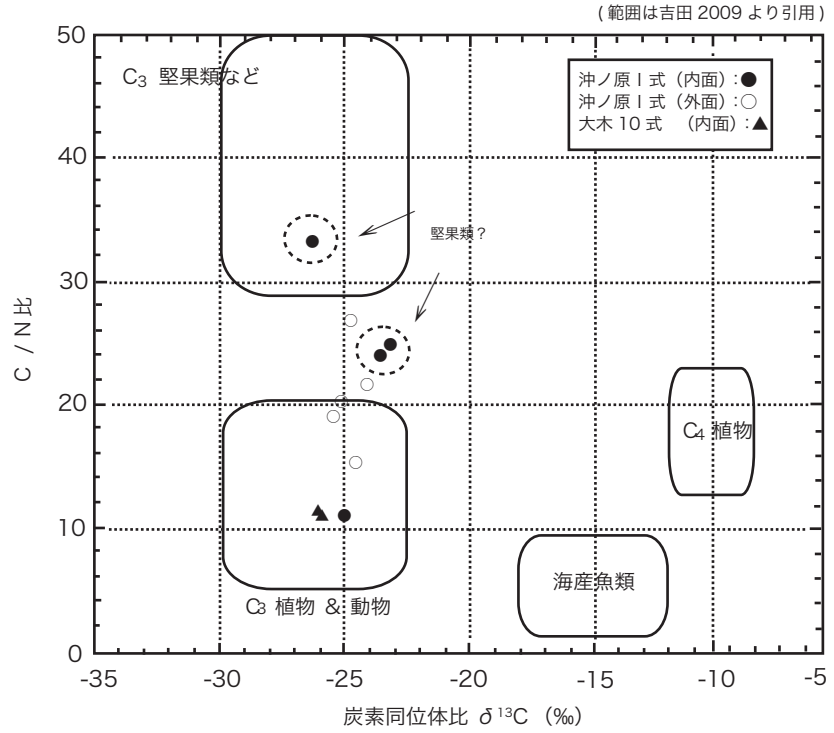


図５　堂平遺跡出土土器付着物の炭素同位体比と C / N 比

＜付編２＞

堂平遺跡から出土した動物遺体

植月　学（山梨県立博物館）

標本はいずれも強い熱を受けて白色化し、小片となっている。種まで同定できたのはシカのみであった。第 59 号住居跡（焼失住居）からは焼けて細かく破砕した鹿角片が多数出土している。第 1 号住居跡の炉からは若いシカの指の骨（中節骨）が出土した。他に中手／中足骨近位端の破片が 1 点ある。筆者が所蔵する標本の中ではツキノワグマ若獣のものにもっとも近いが、小片かつ被熱による収縮で、確実性を欠く。その他は哺乳類と推測される標本がほとんどだが、小片のため部位も同定できなかった。

多くが種の同定に至らなかったとはいえ、11 軒もの住居跡から焼けた獣骨片が出土した事は特筆される。これらは覆土を水洗選別にかけたことによるところが大きいと推測される。全遺構、あるいは遺構覆土のどの程度の割合を処理したのか不明だが、本遺跡の住居跡覆土にはかなりの確率で焼骨が含まれていたことは間違いない。これらがたまたま炉に入り込んだことによるのか、あるいは祭祀もしくは何らかの用途のために意図的に獣骨を焼いたことによるのかが問題となる。本遺跡例のみから判断するのは難しく、今後の課題としたい。

表１　堂平遺跡出土動物遺体一覧

遺構	番号など	日付	種	部位	備考
1 住	炉		シカ	中節骨	小形
15 号住	No.1196	8.8.10	哺乳類	?	
25 住		8.8.3	哺乳類	?	
26 住	P8	8.8.10	哺乳類	?	
26 住			哺乳類	?	
28 住		8.8.11	哺乳類	?	
29 住		8.8.8	ツキノワグマ?	中手／中足骨	若獣
29 住		8.8.8	哺乳類	?	
30 住		8.8.10	哺乳類	?	
30 住			哺乳類	?	
47 住		8.8.12	哺乳類	?	
48 住	P10	8.8.12	哺乳類	?	
58 住		8.8.26	哺乳類	?	
59 住		8.9.5	シカ	角　破片	多数

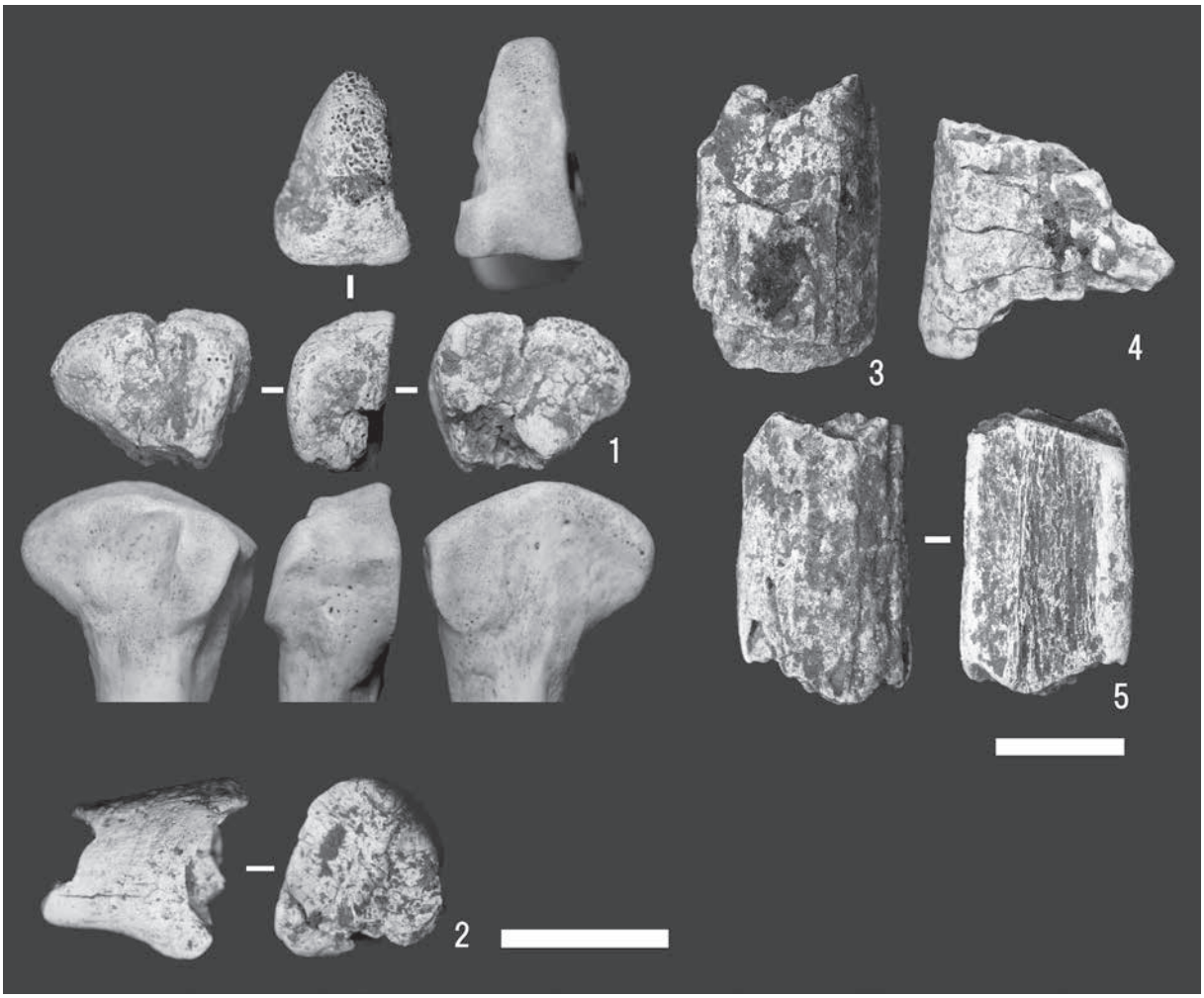


図１　動物遺体　スケールは１ｃｍ
１．ツキノワグマ？　中手／中足骨（大きい方は現生標本）　２．シカ　中節骨　３～５．シカ　角

＜付編３＞

堂平遺跡から出土した炭化材・植物遺体の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

堂平遺跡は、中津川右岸の高位段丘面（米原Ⅱ面）に立地しており、今回の発掘調査により縄文時代中期中葉～後葉を主体とする遺構が検出されている。

今回の分析調査では、住居構築材等への木材利用状況等を明らかにするため、第 59 号住居跡を中心とする住居跡・土坑から出土した炭化材の樹種同定を実施する。また、植物食糧等への植物種子の利用状況に関する資料を得るために、住居跡等から出土した種実遺体の同定を実施する。

１．炭化材の樹種

（１）試料

試料は、縄文時代中期の住居跡を中心とした遺構から出土した炭化材 30 点（試料番号 1-29,34）である。

（２）分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）および Wheeler 他（1998）を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林（1991）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

（３）結果

樹種同定結果を表 1 に示す。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana*（Maxim.）Kitamura）クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独または 2-3 個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織はほぼ同性、1-3 細胞幅、1-40 細胞高。

・ブナ属（*Fagus*） ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に 2-3 個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.） ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道

表 1.　樹種同定結果

No.	グリッド	遺構名	時期	遺物番号	樹種
1		第 5 号住居跡 P4（土坑）	大木 8a 式		クリ
2		第 11 号住居跡	大木 8a 式新～大木 8b 式古		オニグルミ
3				619	ニシキギ属
4		第 13 号住居跡 P1	沖ノ原式	15	クリ
5		第 50 号住居跡	沖ノ原式		クリ
6		第 28 号住居跡	大木 8b 式～沖ノ原式		クリ
7		第 29 号住居跡 P3	後期初頭		クリ
8		第 30 号住居跡	大木 8a 式新		クリ
9		第 32 号住居跡	沖ノ原式		ブナ属
10		第 59 号住居跡	沖ノ原式	9	クリ
11				11	クリ
12				15	クリ
13				21	クリ
14				29	クリ
15				33	クリ
16				35	クリ
17				101	クリ
18				111	クリ
19				43	クリ
20				45	クリ
21				49	クリ
22				55-59	クリ
23				97	クリ
24				99	クリ
25				113	クリ
34				136,137	クリ
26	H7	P10（フラスコ状土坑）	大木 8b 式		ブナ属
27	K5	P8（フラスコ状土坑）	不明		オニグルミ
28	M11	P39（土坑）	不明		クリ
29	M12	P8（フラスコ状土坑）	沖ノ原式		クリ

管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

・ニシキギ属（*Euonymus*）　ニシキギ科

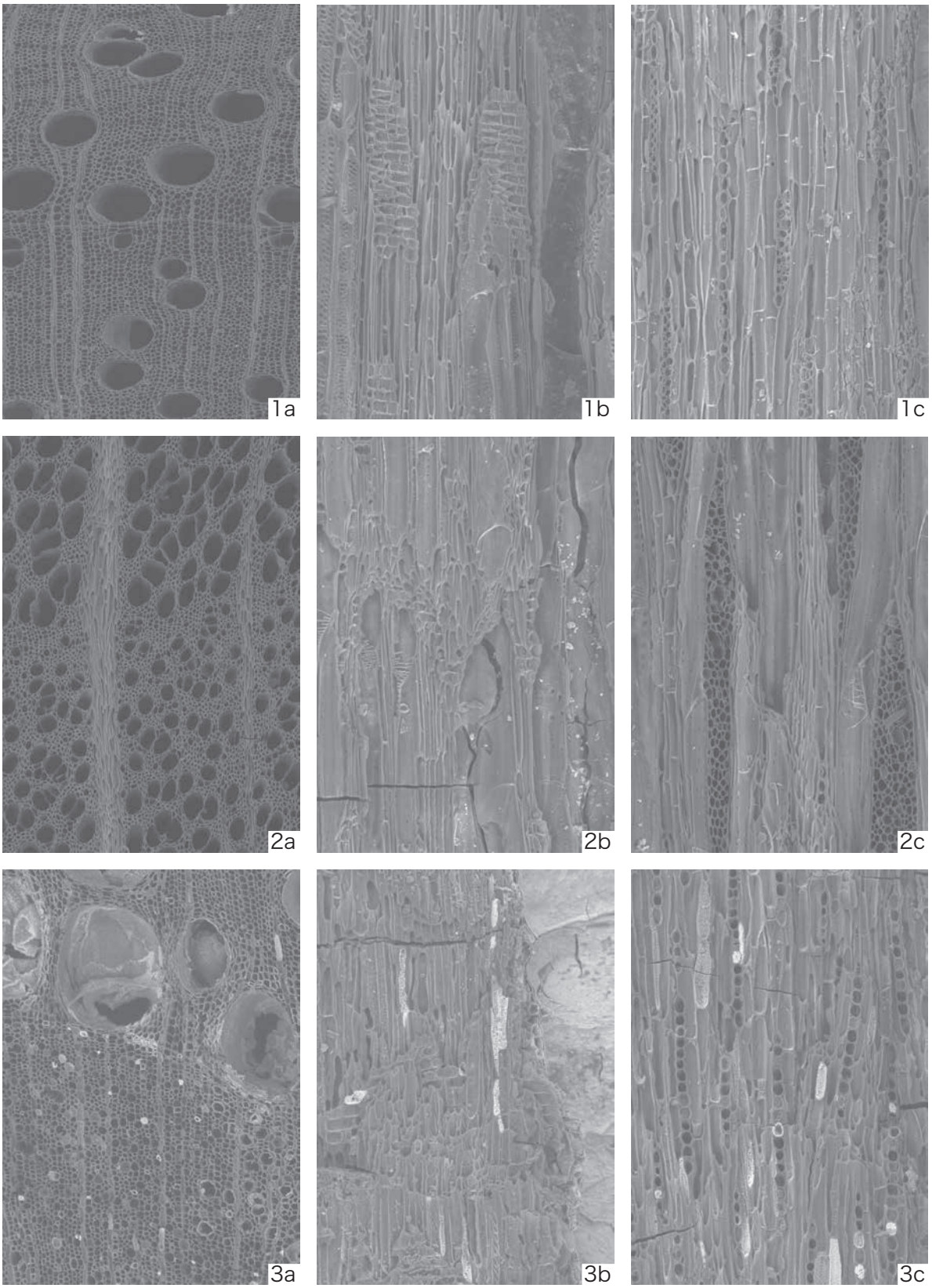
散孔材で、道管は小径、単独または 2-3 個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1-20 細胞高。

（4）考察

竪穴住居跡から出土した炭化材は、いずれも落葉広葉樹で、クリが多く、他にブナ属、オニグルミ、ニシキギ属が認められた。これらの樹種は、いずれも比較的重硬で強度が高い材質を有しており、クリについては耐朽性も高い材質を有する。このうち、オニグルミとクリは後述する種実遺体にも確認されており、本遺跡周辺に生育していた可能性がある。また、ブナ属は、現在の本地域において山地の落葉広葉樹林で主体をなす種類であり、当該期においても周辺山地に生育していたことが推定される。ニシキギ属には、落葉広葉樹林の林床に生育する種類が含まれ、共に生育していたことが推定される。

住居別にみると、試料数の多い第 59 号住居跡（沖ノ原式）はいわゆる火災住居跡であり、炭化材は住居のほぼ全面から出土している。垂木状や板状を呈する炭化材があり、住居構築材の部位による形状の違い等を示している可能性があるが、添付資料から試料との照合ができないため詳細は不明である。これらの炭化材は全てがクリであり、クリ材の選択的利用が推定される。第 59 号住居跡と同時期とされる第 13 号住居跡、第 32 号住居跡、第 50 号住居跡は、いずれも試料が 1 点のみであるが、第 13 号住居跡と第 50 号住居跡でクリが利用されており、沖ノ原式期にクリが多数利用されていたことが推定される。一方、第 32 号住居跡はブナ属が認められ、同時期の他の住居跡とは異なる樹種が利用されている。

図版 1　炭化材 (1)



1. オニグルミ（No.2）
2. ブナ属（No.9）
3. クリ（No.4）

a:木口,b:柾目,c:板目

200μm:a
200μm:b,c

沖ノ原式よりも古い段階の住居では、第 28 号住居跡（大木８ｂ式～沖ノ原式）および第 30 号住居跡（大木８式新）でクリが利用されており、沖ノ原式期と同様の木材利用が推定される。一方、第 11 号住居跡（大木８ａ式新～大木８ｂ式古）ではオニグルミとニシキギ属が認められ、クリが確認されなかった点で他の住居跡とは木材利用が異なる可能性がある。なお、沖ノ原式期よりも新しい第 29 号住居跡（後期初頭）の炭化材もクリであった。

土坑から出土した試料は、大木８ａ式、大木８ｂ式、沖ノ原式の各時期と時期不明のものとがある。これらの炭化材にはブナ属、オニグルミ、クリが認められ、重硬で強度が高い木材が利用されている点では住居の炭化材と同様である。

縄文時代中期の住居構築材の可能性がある炭化材は、沖ノ原遺跡や道尻手遺跡（共に津南町）で調査例がある（西田 ,1977; パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2005）。沖ノ原遺跡ではクリが最も多く、他にブナ属が認められている。道尻手遺跡では点数が少ないため、種類構成の詳細は不明であるが、クリとブナ属が利用されており、本遺跡の結果とも調和的である。土器形式に基づく木材利用の時期的変遷については、今後さらに資料を蓄積して検討することが望まれる。

２．種実遺体の種類

（１）試料

試料は、各遺構より出土した種実４点（試料番号 30-33）である。

（２）分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。分析後は、種類毎に容器に入れて返却する。

（３）結果

木本３分類群（オニグルミ、クリ、トチノキ）26 個の種実が同定された他、試料番号 31 より炭化材３個（8mm 角以下）が確認された（表 2）。以下に、同定された種実の形態的特徴等を記す。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura）　クルミ科クルミ属

試料番号 30 より核の破片２個が検出された。炭化しており黒色。完形ならば長さ 3-4cm、径 2.5-3cm 程度の頂部が尖る広卵体で、１本の明瞭な縦の縫合線がある。破片は最大 2cm 程度、計 1/2 個未満。核は硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る２つの大きな窪みと隔壁がある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

試料番号 31 より子葉の破片 12 個が検出された。炭化しており黒色、完形ならば径 2-3cm 程度の三角状広卵体で、一側面は偏平で反対面はわずかに丸みがある。破片は２枚からなる子葉の合わせ目の線に沿って割れており、最大 1.5cm 程度、計１個以上２個未満程度。子葉は硬く緻密で、表面には内果皮（渋皮）の圧痕の縦筋が走る。子葉の合わせ目の表面は平滑で、正中線上は僅かに窪み、頂部には小さな孔（主根）がある。

表 2.　種実同定結果

No.	試料名	時期	分類群	部位	状態		個数	備考
30	DD-25 住	大木 8a 式～沖ノ原式	オニグルミ	核	破片	炭化	2	計 1/2 個未満
31	DD-29 住 -P4	後期初頭	クリ	子葉	破片	炭化	12	計 1 個以上 2 個未満程度
			炭化材		破片	炭化	3	
32	DD-L8-P24	不明	トチノキ	種子	破片	炭化	11	計 1 個未満
33	DD-N8-P2	加曽利 B1 式	トチノキ	種子	破片	炭化	1	

・トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）　トチノキ科トチノキ属

試料番号 32･33 より種子の破片が計 12 個検出された。炭化しており黒色。完形ならば径 2.5-3.5cm 程度の偏球体。種皮は薄く（厚さ 0.5mm 程度）硬く、表面にはほぼ赤道面を蛇行して一周する特徴的なカーブを境に、流理状の微細な網目模様があり、光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。種子内に残存する胚は木質で、基部に臍がある。破片は不規則に割れているものが多く、試料番号 32 の種子破片 11 個は最大 1.2cm 程度、計 1 個未満。試料番号 33 は大きさ 2cm 程度。

（4）考察

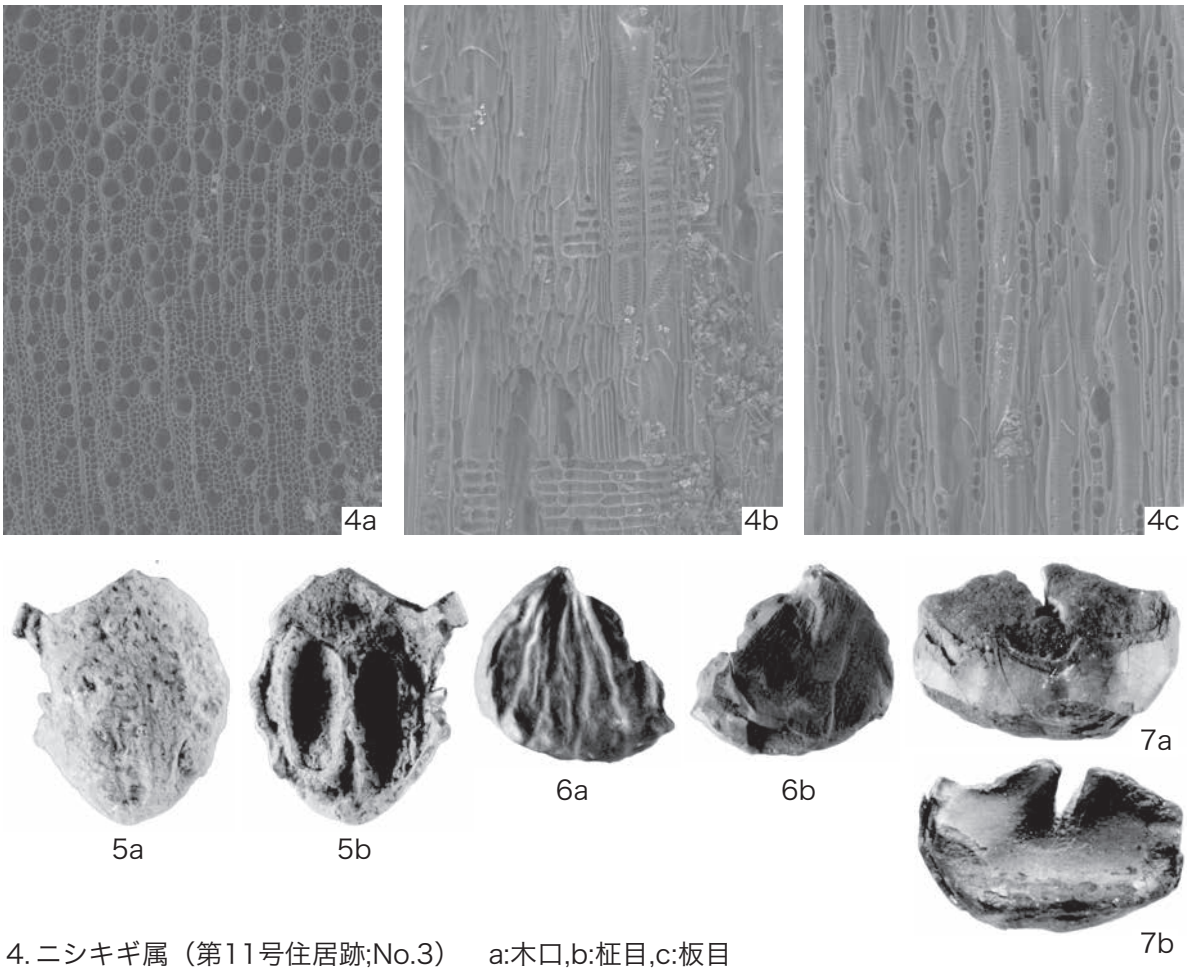
各遺構より出土した種実は、落葉高木のオニグルミの核、クリの子葉、トチノキの種子が何れも炭化した破片の状態で確認された。オニグルミ、トチノキは、川沿いなどの湿潤な肥沃地を好んで生育し、クリは山野に普通に生育する樹種である。

これらの種実遺体は、オニグルミ核内部の種子、クリが子葉を生食することが可能である。トチノキは、灰汁が強く、生食することはできないが、灰汁抜きをすることで種子を食用にすることが可能である。これらの堅果は長期保存可能で収量も多いことから、古くより植物質食糧として利用され、遺跡からの出土例も多い（渡辺 ,1975 など）。また、トチノキについては、各地でトチノキの種子を加工したと考えられる水場遺構が検出されており、灰汁抜きをした上で利用していたことが推定されているが、本遺跡ではこれまでのところ灰汁抜きのための水場遺構は検出されていない。

種実同定結果を時期別に見ると、第 25 号住居跡（大木 8 a 式～沖ノ原式）がオニグルミ、第 29 号住居跡（後期初頭）がクリ、N8-P8（加曽利 B1 式）と L8-P24（時期不明）がトチノキであり、時期・遺構によって種類が異なる。しかし、各時期の資料が少ないこと、大木 8 a 式～沖ノ原式期の住居出土炭化材にクリが認められること等を考慮すれば、少なくとも大木 8 a ～沖ノ原式の時期にはオニグルミの他にクリも利用されていたことが推定される。後期初頭については、住居跡出土炭化材もクリであり、オニグルミが確認できていないが、現在の本地域においてもオニグルミが渓谷などに生育する一般的な樹種であることを考慮すれば、後期の段階でも利用した可能性は十分ある。

いずれも火を受けて炭化しているが、オニグルミは核が出土していることから、食用などに利用した後の残渣を燃料などの一部として住居内で燃焼させた可能性がある。クリは食用部分である子葉が炭化しており、食用に適さない部分を燃料の一部に利用したことなどが考えられるが、詳細は不明である。トチノキも可食部を含めて炭化しているため、食用に利用したのかは明らかではない。トチノキの利用状況については、水場遺構の検出など考古学・自然科学両面からの資料蓄積が必要と考える。

図版 2　炭化材 (2)・植物遺体



4. ニシキギ属（第11号住居跡;No.3）　a:木口,b:柾目,c:板目
5. オニグルミ 核(No.30)
6. クリ 子葉(No.31)
7. トチノキ 種子(No.33)

200μm:4a
200μm:4b,c
1cm:5-7

引用文献

林　昭三 ,1991, 日本産木材　顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 . 東北大学出版会 ,642p.

西田正規 ,1977, 樹種同定 .「新潟県中魚沼郡津南町沖ノ原遺跡発掘調査報告書」, 津南町教育委員会 ,40-41.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2005, 自然科学分析 (2) .「道尻手遺跡」, 津南町文化財調査報告第 47 輯 , 津南町教育委員会 ,394-397.

島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

渡辺　誠 ,1975, 縄文時代の植物食 . 雄山閣出版 ,187p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　ＩＡＷＡによる光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

＜付編４＞

L11-P27 出土の焼骨の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

堂平遺跡（新潟県中魚沼郡津南町大字中深見丁 157 外）は、中津川右岸の高位段丘（米原Ⅱ面）に立地する。本遺跡では、発掘調査の結果、縄文時代中期中葉～後葉、および縄文時代後期前葉の集落であることが確認されている。

本報告では、人骨と想定される骨片が出土した遺構より採取された試料を対象として、自然科学分析調査を実施し、遺構の年代および出土骨の種類（部位）について検討する。

１．試料

試料は、人骨 P より採取された骨片および炭化物が混じる土壌（人骨 P H8.8.22）と、比較的大型の骨片（人骨 P（中心部）最大破片 98.08.22）、さらに多量の骨片と炭化材（人骨 P 骨片・炭化材 98.08.22）の 3 点である。

これらの試料うち、微細物分析および骨同定は上記した 3 試料を対象とし、炭化材（樹種）同定は「人骨 P 骨片・炭化材 98.08.22」より抽出した炭化材 6 点（仮 No.1 ～ 6）を対象とした。さらに、放射性炭素年代測定は、樹種同定試料とした炭化材 6 点のうち半径約 1cm の小径木と想定される炭化材（仮 No.1）を対象とした。

２．分析方法

（１）放射性炭素年代測定

試料は、土壌など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、ピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO_2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NECPelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に $^{13}C/^{12}C$ の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1,950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBONCALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正は、CALIB 6.0のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。暦年較正結果は、σ・2σ（σは統計的に真の値が68%、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲）の値を示す。表中の相対比は、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

（2）微細物分析ならびに骨同定

分析対象とされた3試料の観察では、試料中に含まれる骨片はいずれも脆弱であり、水洗選別法を用いた場合、溶解・消失してしまう可能性が危惧された。そのため、本分析では、比較的大型の骨片である「人骨P（中心部）最大破片98.08.22」を除く2試料について、以下の方法で微細物の抽出を試みた。

試料を観察し、大型の骨片や炭化材（物）を抽出した後、残渣を自然乾燥させる。その後、篩目2mmの篩で篩分し、篩上に残ったものを骨片、炭化物、その他に分類する。この内、その他としたものは、篩を通過したものと合わせて残渣として取り扱う。炭化物は、肉眼および実体顕微鏡などで観察し、炭化材・炭化種実に分類する。

得られた骨片、炭化物、残渣の乾燥重量を計測した後、骨片はその形態的特徴から部位の同定を行う。炭化物は、後述するように炭化種実が検出されなかったことから、炭化材6点（仮№1～6）を抽出し、樹種同定試料とした。

（3）樹種同定

試料は、自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

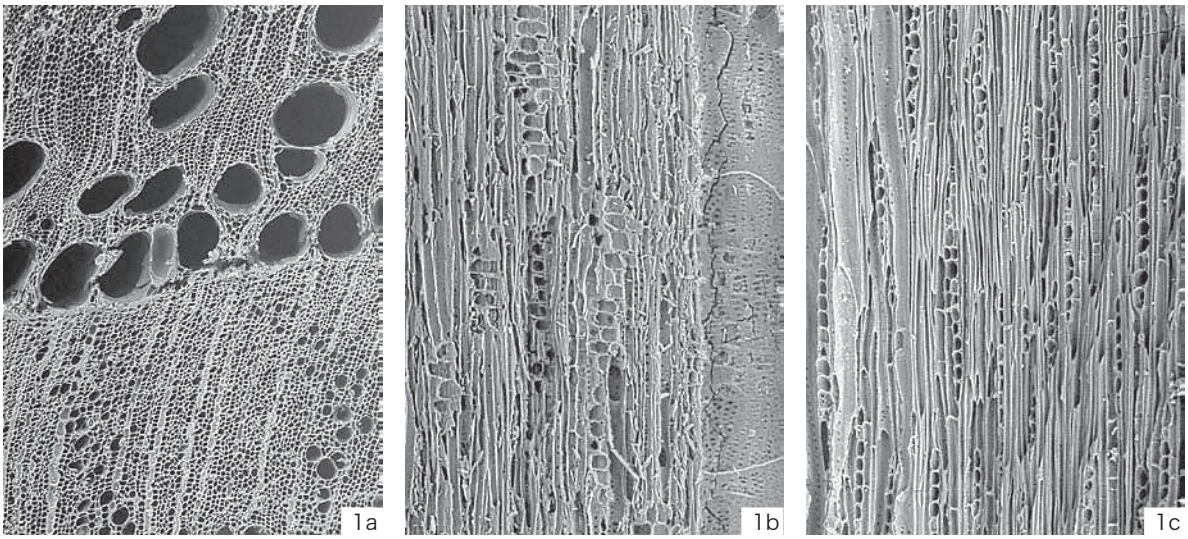
なお木材組織の名称や特徴は島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を、日本産木材の組織配列については林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を、それぞれ参考としている。

3．結果および考察

（1）放射性炭素年代測定

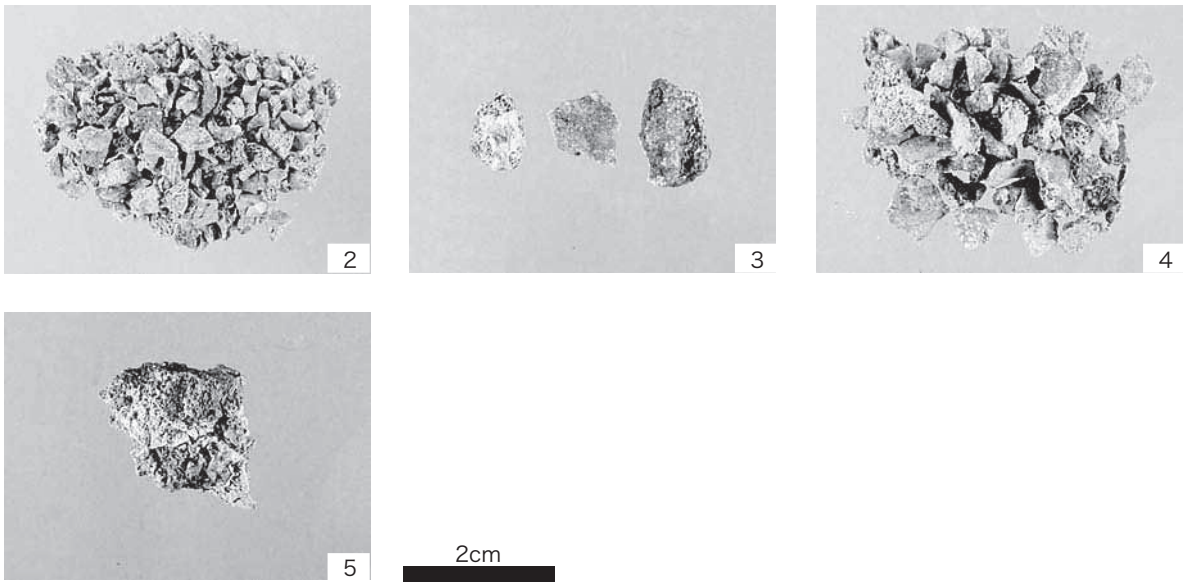
人骨P骨片・炭化材98.08.22より抽出した炭化材（仮№1；クリ（乾重0.57g））の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は4,420±30yrBPを示す。また、補正年代に基づく暦年較正結果（σ）は、calBC3,261-calBC2,943（calBP5,211 -calBP4,893）であり、小林（2008）を参考とすると、縄文時代中期中葉に相当する。

図版１　炭化材・出土骨



1.クリ(人骨P 骨片･炭化材98.08.22;仮№4)
a:木口,b:柾目,c:板目

200μm:a
200μm:b,c



2.哺乳類部位不明破片(人骨P)
3.哺乳類頭蓋?破片(人骨P;骨片・炭化材)
4.哺乳類部位不明破片(人骨P;骨片・炭化材)
5.哺乳類部位不明破片(人骨P(中心部);最大破片)

表１．放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果

試料名	補正年代 (yrBP)	δ ^{13}C (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代 (cal)		相対比	測定機関 Code No.
堂平 人骨 P 骨片・炭化物 炭化材（仮№ 1; クリ）	4,420±30	-24.97±0.54	4,420±28	σ	cal BC 3,261 - cal BC 3,255	0.031	IAAA-101136
					cal BC 3,097 - cal BC 3,011	0.854	
					cal BC 2,978 - cal BC 2,961	0.088	
					cal BC 2,949 - cal BC 2,943	0.026	
				2σ	cal BC 3,314 - cal BC 3,293	0.021	
					cal BC 3,288 - cal BC 3,274	0.014	
					cal BC 3,265 - cal BC 3,238	0.069	
					cal BC 3,168 - cal BC 3,164	0.003	
					cal BC 3,110 - cal BC 2,921	0.892	

（2）微細物分析および骨同定

結果を表２に示す。篩分けを行った２試料からは、骨片 47.6g、炭化材 17.32g が回収され、炭化種実は検出されなかった。

検出された骨片は、白～灰黒色を呈する微細な破片であり、表面に細かなひび割れがみられるなど、焼骨の特徴を示す。頭蓋骨の可能性がある破片が認められたが、破片のため断定は困難である。その他の破片はいずれも細片であり、部位を特定するに至らない。一方、人骨Ｐ（中心部）最大破片は、大きさ約 3cm×3cm 程度の土塊状を呈する。当試料は、長骨の塊、あるいは扁平骨の可能性があるが、形質をとどめておらず、種類および部位とも不明である。これらの試料は、特徴的な部位を確認することができなかったことから、ヒトを含めた哺乳類とした。

馬場ほか（1986）によると、人骨を焼いた際、600℃以下ではほとんど変化がなく、800℃付近では灰白色になり、収縮・硬化が見られ、歯のエナメル質が崩壊し歯冠が失われる等、最も激しく変化するとされている。これに基づくと、この骨は 800℃以上の熱を受けて焼かれたと考えられる。また、骨は焼かれると、細かなひび割れが生じた破片となるため物理的には脆くなるが、有機質成分が焼失し無機成分のみとなる。そのためバクテリアアタックを受けることがなく、非焼骨と比べて残存しやすいことが考えられる。なお、大型の哺乳類とみなした場合、大型の四肢骨や骨が厚い脳頭蓋などが確認されなかったことや、骨全体の重量が１個体分としては極めて少ないという特徴が指摘できる。また、多量の炭化材が共伴することや、出土骨が焼骨の特徴を有する状況から、焼かれた遺骸が土坑内に残存したと考えられる。

表２．微細物分析および骨同定結果

試料名		種類	部位	部分	重量 (g)	備考
人骨Ｐ	H8.8.22	哺乳類	不明	破片	13.85	
		哺乳類	不明	破片	2.14	土壌付着
		炭化材			7.19	
		残渣			433.70	
人骨Ｐ（中心部）　最大破片	98.08.22	哺乳類	不明	破片	6.82	土壌付着
人骨Ｐ　　骨片・炭化材	98.08.22	哺乳類	頭蓋骨？	破片	1.58	
		哺乳類	不明	破片	30.03	
		炭化材			10.13	
		残渣			35.06	

表３．樹種同定結果

試料名	性状	仮番号	形状	規模 (cm)	樹種	備考
人骨Ｐ 骨片・炭化材 98.8.22	炭化材	仮№１	芯持材 (1/4 残存)	放射面 1.0, 接線面 1.5	クリ *	
		仮№２	板状	放射面 2.0, 接線面 2.4	クリ	節部分
		仮№３	板状	放射面 0.4, 接線面 0.7	クリ	
		仮№４	芯持材 (1/3 残存)	放射面 1.2, 接線面 1.6	クリ	
		仮№５	板状	放射面 2.1, 接線面 1.3	クリ	
		仮№６	板状	放射面 1.9, 接線面 2.6	クリ	

＊放射性炭素年代測定試料

（3）樹種同定

結果を表3に示す。人骨P骨片・炭化材 98.08.22 より抽出した炭化材6点（仮№1～6）は、全て落葉広葉樹のクリに同定された。以下に解剖学的特徴等を記す。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.） ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

検出されたクリの炭化材は、横断面が 1/3 ～ 1/4 程度残存する芯持材、あるいは板状を呈し、いずれも小片であった。クリは炭化材として残りやすい性質があることを考慮しても、全点がクリに同定されたことから、選択利用が推定される。

本遺跡では、縄文時代中期の沖ノ原式期の焼失住居から出土した炭化材にクリが多く確認されている（未公表資料）。また、津南町内の沖ノ原遺跡の縄文時代中期とされる住居跡から出土した炭化材にクリとブナ属、道尻手遺跡の縄文時代中期とされる住居跡出土資料を含む炭化材などにクリ、カエデ属、ブナ属などが確認されている（西田 ,1977; パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2005）。今回の試料は、これまでに多く確認されている建築部材等とは用途が異なると考えられ、クリが様々な用途に利用されていた一例と言える。

引用文献

馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治 ,1986, 根古屋遺跡出土の人骨・動物骨 . 霊山根古屋遺跡の研究 －福島県霊山町根古屋における再葬墓群－ , 福島県霊山町教育委員会 ,93-11 3.

林 昭三 ,1991, 日本産木材 顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

小林謙一 ,2008, 縄文土器の年代（東日本）. 小林達雄編 小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器 . 株式会社アム・プロモーション ,896-903.

西田正規 ,1977, 樹種同定 .「新潟県中魚沼郡津南町沖ノ原遺跡発掘調査報告書」, 津南町教育委員会 ,40-41.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2005, 自然科学分析 (2) .「道尻手遺跡」, 津南町文化財調査報告第 47 輯 , 津南町教育委員会 ,394-397.

島地 謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p［.Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989） *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

＜付編５＞

堂平遺跡出土縄文土器底部の「敷物圧痕」について

松永篤知（名古屋大学大学院文学研究科）

１　はじめに

縄文時代中期以降の縄文土器底部には、土器製作時(特に成形時)に使用されていた敷物の圧痕(以下「敷物圧痕」）が残されているものが多い。土器の製作時に敷物を敷いて作業するという行為自体は、縄文時代草創期からおこなわれていたようであるが［可児 2005、松永 2008b］、中期に入って全国的に平底の底部形態が定着したために、敷物の痕跡が圧痕として残りやすくなったものと考えられる。

このことは、新潟県中越地域および魚沼地域に位置する津南町の縄文遺跡についても同様で、中期以降になると各種の「敷物圧痕」が認められるようになる。縄文時代中期～後期の具体例としては、道尻手遺跡が好例であるが、この遺跡では編物圧痕と葉脈圧痕が認められ、様々な編物や植物の葉が土器製作用の敷物として使用されていたことが明らかになっている［中田 2005、松永 2006］。

縄文時代中期中葉～末葉（大木８ａ式併行期～沖ノ原式期）を主体とする堂平遺跡においても、やはり多くの「敷物圧痕」が認められた。道尻手遺跡と同様に編物圧痕と葉脈圧痕から成り、原体の編み方や素材にいくつかの種類がある。おそらくそこには、当時の編物技術や植物利用のあり方が反映されていることだろう。また、土器製作時の作業痕跡である以上、圧痕の種類や残され方には当時の土器製作技術も少なからず関係しているはずである。そのほか、豊かな縄文文化が展開した津南ならではの、地域文化的な要素も内包している可能性がある。

そこで本論では、堂平遺跡出土縄文土器底部の「敷物圧痕」を対象として、土器製作技術・編物技術・地域文化の視点から分析を試みることにした。土器製作用の敷物の圧痕という間接的な資料を通じて、縄文時代中期中葉～末葉頃を中心とした当地の生活技術や文化について私なりに考えてみたい。

２　分析の方法

堂平遺跡の「敷物圧痕」を分析するにあたっては、圧痕種別の統計をとり、その数量比から特徴を抽出することにした。圧痕の種類については、筆者が以前他誌に発表した東アジア先史土器底部の「敷物

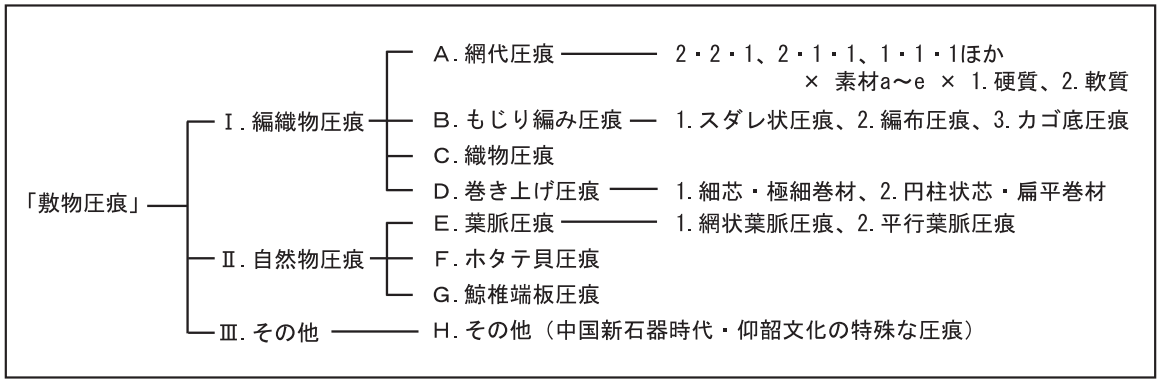


図１　東アジア先史土器の「敷物圧痕」分類概念［松永 2004］

圧痕」分類試案［松永 2004］（図 1）に基づいて、原体の違いによって分類する。分類した圧痕資料（有圧痕縄文土器底部）は、接合しないかぎり 1 破片 1 点として数える。そして各種圧痕の数量比を算出し、どのような種類の圧痕が多いのか、少数でも特殊な圧痕はないのか、周辺地域との関係はどうなのかなどを土器製作技術・編物技術・地域文化の視点を踏まえて検討する。なお、今回分析対象としたのは、筆者が実見する機会を得た、比較的残りの良い圧痕資料 71 点である。諸般の事情により、本遺跡から出土した縄文土器底部の「敷物圧痕」全てを分析することができなかったため、本論はあくまでも一部の資料を対象としたものであることを断っておく。

ところで、圧痕を有する縄文土器底部資料は、胴部以上を欠くなどして所属時期が明確でないものが多い。そこで本論の統計については、細かい時期別の検討はおこなわず、堂平遺跡の資料として一括することにした。従って、分析資料の時期は、縄文時代中期中葉～末葉を主体とし、一部後期前半を含む可能性があるものとして理解されたい（ある程度時期が分かるものは表の備考に記載）。

3　堂平遺跡の「敷物圧痕」―種類と統計―

それでは、具体的に堂平遺跡の「敷物圧痕」を見ることにしよう（表・図 2 ～ 4）。まずは本遺跡で認められた各種圧痕を列挙し、それぞれの特徴について解説する。統計によって遺跡全体の傾向を見る前に、圧痕に認められる個別の特徴も見ておきたい。その上で、数量データを提示し、本遺跡の資料を個別的および全体的に理解することにしたい。

A　圧痕の種類

堂平遺跡では、大別して網代圧痕・もじり編み圧痕・葉脈圧痕の 3 種類が認められた。各々、編み方や素材の違いからさらなる細分が可能である。以下に、各種の詳細を記す。

1）網代圧痕

条材が縦･横･斜めに単純交差する（広義の）「網代編み」による編物の圧痕である。超え･潜り･送り［坪井 1899］によって編み方を細分することができ、本遺跡においても種類が豊富である。また、原体の素材にも種類が認められ（筆者分類 a 類：経条・緯条に扁平な太材を用いるもの、c 類：経条・緯条に太材を用い、片方ないし両方の条が丸みを帯びるもの、d 類：経条・緯条に細材を用い、片方ないし両方の条が丸みを帯びるもの、e 類：経条・緯条に扁平な細材を用いるもの ※ 太材・細材の境界は幅 3mm が目安 × 1：硬質材、2：軟質材）、編み方と合わせると、実に多様な網代編みの編物が作られていたことが分かる。そのヴァリエーションを、編み方を軸に列挙すれば次のようになる。

A -2・1・1 類　2 本超え 1 本潜り 1 本送りの網代圧痕で、図 2-1 ～ 23・図 3-24 ～ 29 が該当する（図 3-26 は同種の多重痕もしくは別種の可能性あり）。ただし、民具の視点から見れば狭義の網代編みではなく、飛びゴザ目編みの一種に属する（この場合は 90°回転させて 1 本超え 2 本潜り 1 本送りにすべきである）。以前から東日本の基本的な編み方とされてきたもので［安孫子 1971、植松 1980］、縄文時代中期後半以降の東北地方南部や関東・甲信越地方に多い（ピークは後期前半）［松永 2008a］。そのため、中期後半を主体とし新潟県に所在する本遺跡においても多数類例が見られた。これらを素材によって分類すると、図 2-1

表　堂平遺跡出土縄文土器底部「敷物圧痕」一覧

No.	出土地点（注記）	圧痕種類	圧痕分類	網代の編み方	素材分類	A 類・B 類の素材幅（mm）		備　考
						経条幅	緯条幅	
1	H3-64	網代圧痕	A	2・1・1	a1	3.0	3.0	
2	I6-P1-252	網代圧痕	A	2・1・1	a1	3.5 ～ 4.0	3.5 ～ 4.0	
3	K9-P5	網代圧痕	A	2・1・1	a1	3.0 ～ 3.5	3.0 ～ 4.0	
4	L12-25	網代圧痕	A	2・1・1	a1	2.5 ～ 4.0	3.0 ～ 3.5	
5	N8-P34	網代圧痕	A	2・1・1	a1	2.5 ～ 3.5	3.5 ～ 4.0	
6	N?-6G	網代圧痕	A	2・1・1	a1	4.0 ～ 5.0	4.0 ～ 5.0	
7	O10-12G	網代圧痕	A	2・1・1	a1	3.0 ～ 4.0	3.0 ～ 4.0	
8	26J	網代圧痕	A	2・1・1	a1	3.0 ～ 4.0	3.0 ～ 4.5	
9	27T	網代圧痕	A	2・1・1	a1	3.5 ～ 4.0	3.5 ～ 4.0	
10	L11-2	網代圧痕	A	2・1・1	c1	4.0 ～ 5.0	4.5 ～ 5.0	
11	M6-P7	網代圧痕	A	2・1・1	c1	3.0 ～ 4.0	3.0 ～ 4.0	
12	O10-12G	網代圧痕	A	2・1・1	c1	3.0 ～ 3.5	2.5 ～ 3.5	
13	18T	網代圧痕	A	2・1・1	c1	3.5 ～ 4.0	3.0 ～ 4.0	
14	26J-P13	網代圧痕	A	2・1・1	c1	3.0 ～ 4.0	2.5 ～ 3.5	
15	L11-17	網代圧痕	A	2・1・1	c2	2.5 ～ 3.5	2.0 ～ 3.0	
16	N8-P28-6	網代圧痕	A	2・1・1	c2	3.5 ～ 4.0	3.0 ～ 3.5	
17	23J-397B	網代圧痕	A	2・1・1	c2	3.0	3.0	
18	L11-85	網代圧痕	A	2・1・1	d1	2.5 ～ 3.0	2.5 ～ 3.0	
19	M6-P7	網代圧痕	A	2・1・1	d1	2.0 ～ 2.5	2.0 ～ 3.0	
20	N9-2G	網代圧痕	A	2・1・1	d2	2.0 ～ 2.5	2.0 ～ 2.5	
21	F6-P6	網代圧痕	A	2・1・1	e1	1.0 ～ 2.0	不鮮明	
22	L13-19-P3	網代圧痕	A	2・1・1	e1	2.0 ～ 3.0	2.0 ～ 2.5	
23	M7-P2?P3?	網代圧痕	A	2・1・1	e1	2.0 ～ 3.0	2.0 ～ 2.5	
24	N8-P31	網代圧痕	A	2・1・1	e1	1.0	1.0	極細材、後期前半か
25	O10-13G	網代圧痕	A	2・1・1	e1	1.0 ～ 2.0	1.0 ～ 2.0	
26	17T	網代圧痕	A	2・1・1	e1	2.0 ～ 2.5	2.0 ～ 2.5	多重痕または別種の可能性あり
27	—	網代圧痕	A	2・1・1	e1	1.0 ～ 1.5	1.0 ～ 1.5	極細材、後期前半か
28	E9-2	網代圧痕＋葉脈圧痕（網状）	A + E1	2・1・1	e1	2.0 ～ 2.5	不鮮明	中期中葉、葉脈圧痕は複数・多重の可能性あり
29	O10-8G	網代圧痕＋葉脈圧痕（網状）	A + E1	2・1・1	e1	1.5 ～ 2.0	不鮮明	
30	I2-P4	網代圧痕	A	2・2・1	a1	3.0 ～ 4.0	3.0 ～ 4.0	
31	38J-P1	網代圧痕	A	2・2・1	a1	2.5 ～ 3.0	3.0 ～ 3.5	
32	56J	網代圧痕	A	2・2・1	a1	5.0 ～ 6.0	3.0 ～ 6.0	一部２本１組？（その場合は素材 e1 で経緯とも幅 2.0 ～ 3.0）
33	58J	網代圧痕	A	2・2・1	a1	3.0 ～ 3.5	3.0 ～ 3.5	34 と同一か
34	58J	網代圧痕	A	2・2・1	a1	2.5 ～ 3.5	3.0 ～ 3.5	33 と同一か
35	L11-13	網代圧痕	A	2・2・1×χ（経緯２本１組）	a1	4.0 ～ 5.0	3.0 ～ 5.0	
36	L11-P36	網代圧痕	A	2・2・1×χ（経緯２本１組）	a1	3.0 ～ 5.0	3.0 ～ 5.0	
37	45J	網代圧痕	A	2・2・1×χ（経緯３本１組）	a1	2.5 ～ 4.0	2.5 ～ 4.0	
38	15J-2073	網代圧痕	A	1・1・1	c1	不鮮明	3.0 ～ 4.0	
39	F6-P8	網代圧痕	A	1・1・1	c2	2.5 ～ 3.0	3.0 ～ 5.0	
40	27J-119	網代圧痕	A	1・1・1	c2	2.5 ～ 3.0	3.0 ～ 3.5	中期中葉
41	43J- 上層	網代圧痕	A	1・1・1	c2	5.0?	5.0 ～ 7.0	
42	E9-12	網代圧痕	A	1・1・1	d2	不鮮明	1.5 ～ 2.5	
43	E9-13	網代圧痕	A	1・1・1	d2	不鮮明	1.5 ～ 2.5	
44	27J-1	網代圧痕	A	1・1・1	d2	不鮮明	2.0 ～ 2.5	中期中葉
45	15J-1143	網代圧痕＋葉脈圧痕（網状）	A + E1	1・1・1	d2	3.0?	2.0 ～ 3.0	
46	F4-6G	網代圧痕	A	3・3・1	a1	3.0 ～ 3.5	3.0 ～ 3.5	
47	L11-22	網代圧痕	A	3・2・1	a1	3.0 ～ 4.0	3.0 ～ 4.0	
48	F5-3G	網代圧痕	A	三方（麻ノ葉崩し）	a1	＼斜条幅	／斜条幅　緯条幅	
						3.0 ～ 3.5	3.0　3.0 ～ 3.5	
49	32J	網代圧痕	A	三方（麻ノ葉崩し）	e1	＼斜条幅	／斜条幅　緯条幅	
						2.0 ～ 2.5	2.0 ～ 2.5　2.0 ～ 2.5	
50	L12-228-P35	網代圧痕	A	2・2・1/2	c1	4.5 ～ 5.0	3.5 ～ 5.0	
51	E10-17	網代圧痕	A	経緯２本１組	c1	2.5 ～ 3.5	2.5 ～ 3.0	
52	E10-18	網代圧痕	A	経緯３本１組	d1	1.5 ～ 3.0	2.0 ～ 3.0	中期中葉
53	F9-43J	網代圧痕	A	経緯５本以上１組か	e1	1.5 ～ 2.0	1.5 ～ 2.0	
54	M11-P25	網代圧痕	A	模様編み出しか	a1	2.5 ～ 4.0	4.0 ～ 5.0	
55	5J-38	網代圧痕	A	模様編み出しか	a1	2.5 ～ 4.0	3.5 ～ 5.0	
56	F8	網代圧痕	A	1・3・2か	a1	3.0	3.0 ～ 3.5	中期中葉
57	E11-23	網代圧痕	A	1・1・1 に似た縁辺部か	a1	8.0 ～ 10.0	2.0 ～ 3.0	中期中葉
58	45J	網代圧痕＋もじり編み圧痕	A+B	不明	a1	3.5 ～ 4.0	網代部分緯条不鮮明／もじり部分絡み条 1.5 ～ 2.0	中期中葉
59	O10-1G	もじり編み圧痕（スダレ状圧痕）	B-1	—	—	1.5 ～ 2.0	1.0 ～ 1.5	
60	E10-1	葉脈圧痕（網状）	E-1	—	—	—	—	
61	H4-12	葉脈圧痕（網状）	E-1	—	—	—	—	中期中葉
62	I5-28-P2	葉脈圧痕（網状）	E-1	—	—	—	—	
63	L12-9G	葉脈圧痕（網状）	E-1	—	—	—	—	
64	L12-P54	葉脈圧痕（網状）	E-1	—	—	—	—	
65	M9-17-1H	葉脈圧痕（網状）	E-1	—	—	—	—	
66	M12-P8	葉脈圧痕（網状）	E-1	—	—	—	—	
67	19J-222	葉脈圧痕（網状）	E-1	—	—	—	—	
68	H6-P7	葉脈圧痕（平行）	E-2	—	—	—	—	
69	L9-19-1H	葉脈圧痕（平行）	E-2	—	—	—	—	
70	L9-156	葉脈圧痕（平行）	E-2	—	—	—	—	
71	L10-5G	葉脈圧痕（平行）	E-2	—	—	—	—	笹葉複数

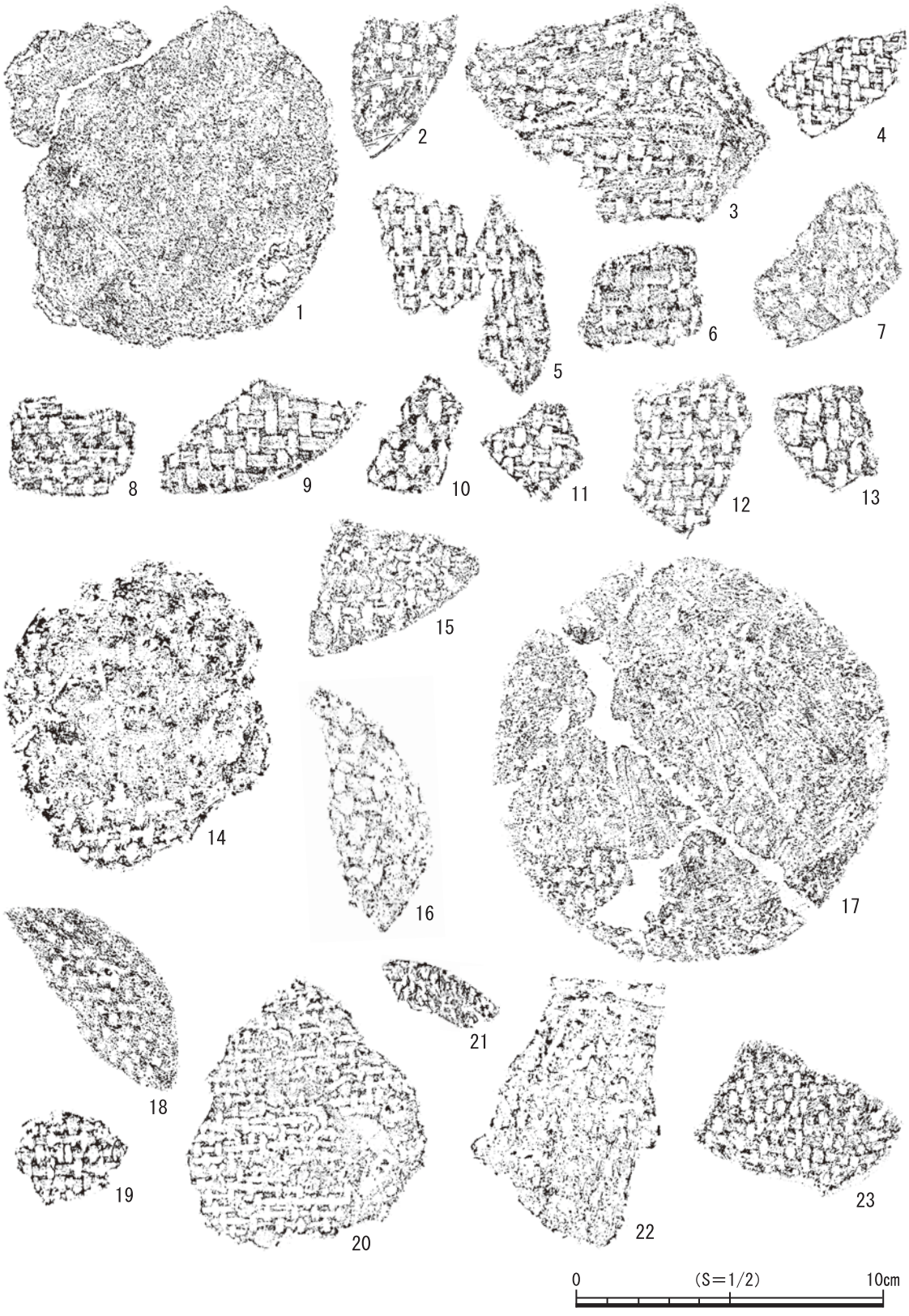


図２　堂平遺跡出土縄文土器底部の「敷物圧痕」拓影１

～9 は a^1 類、図 2-10 ～ 14 は c^1 類、図 2-15 ～ 17 は c^2 類、図 2-18・19 は d^1 類、図 2-20 は d^2 類、図 2-21 ～ 23・図 3-24 ～ 29 は e^1 類に属する（または近い）ものと見られる。なお、図 3-28・29 は A-2・1・1 類だけでなく、E-1 類の網状葉脈圧痕が重なって残された多重痕資料である。

A -2･2･1 類　2 本超え 2 本潜り 1 本送りの網代圧痕で、図 3-30 ～ 34 が該当する。狭義の網代編み（2 本飛び）に属するものであり、その構造は単純である。従来、西日本の基本的な編み方とされてきたが［安孫子 1971、植松 1980］、量の多寡や素材の種類を問わなければほぼ全国に類例が認められ、最も普遍的な網代圧痕として位置づけられる［松永 2008a］。これらを素材で分類すると、いずれも a^1 類に属するものと見られる。

A -2・2・1×χ 類　2 本超え 2 本潜り 1 本送りの一種であるが、経条・緯条ともに複数本 1 組にするもの（図 3-35 ～ 37）を本類として区別する。図 3-35・36 は経条・緯条ともに 2 本 1 組、図 3-37 は経条・緯条ともに 3 本 1 組である。いずれも、素材は a^1 類である。

A -1・1・1 類　1 本超え 1 本潜り 1 本送りの網代圧痕で、図 3-38 ～ 45 が該当する。網代圧痕としては、原体の編み方が最も単純な構造をしている。これらを素材から見れば、図 3-38 は c^1 類、図 3-39 ～ 41 は c^2 類、図 3-42 ～ 45 は d^2 類となる。これらの中で、特に注目されるのは、図 3-40・45 である。この 2 点は、質感が東北型網代圧痕［植松 1981・渡辺 1996］に属するまたは近似するものであり、マタタビのような軟質な蔓材を用いている可能性が高い。また、図 3-45 は、E-1 類の網状葉脈圧痕との多重痕資料としても注目される。

A -3･3･1 類　3 本超え 3 本潜り 1 本送りの網代圧痕で、図 4-46 が該当する。狭義の網代編み（3 本飛び）であり、A-2・2・1 類と大きな違いはない。素材は a^1 類である。

A -3・2・1 類　3 本超え 2 本潜り 1 本送りの網代圧痕で、図 4-47 が該当する。A-2・2・1 類や A-3・3・1 類に似ており、両者の中間的存在と言えよう。素材は、a^1 類である。

A - 三方類　三方向の条材を交差させた編物による網代圧痕である。すなわち概念的には「六ツ目編み」や「麻ノ葉編み」の系統が該当するが、本遺跡では「麻ノ葉崩し」の類が 2 点（図 4-48･49）認められた。素材は、図 4-48 が a^1 類、図 4-49 が e^1 類である。

A -2･2･1/2 類　図 4-50 は、2 本超え 2 本潜りで 1 本送りと 2 本送りを繰り返すもの（素材 c^1 類）である。この種の網代圧痕は、飛騨地域を中心とした岐阜県山地部の縄文時代中期後半～後期前半に多い［松永 2008a］。ただし、2 本超え 2 本潜りを応用すれば特別難しいものではなく、本資料は岐阜県山地部と直接つながるものではないと思われる。

その他　上記以外にも、網代圧痕の類に属する資料がいくつか見られた。

図 4-51 ～ 53 は、超え・潜り・送りが不明確だが、経条・緯条ともに複数本 1 組にするものと見られる資料である。これらのうち、51 は 2 本 1 組（素材 c^1 類）、52 は 3 本 1 組（素材 d^1 類）である。残る 53 は、5 本以上 1 組（素材 e^1 類）の可能性がある。

図 4-54・55 は、模様編み出しの可能性がある資料（素材 a^1 類）である。送りの方向が変わる箇所があり、何らかの模様（土器で言う文様）を形成していたことが推測される。ただし、いずれも破片資料であり、その詳細は不明である。

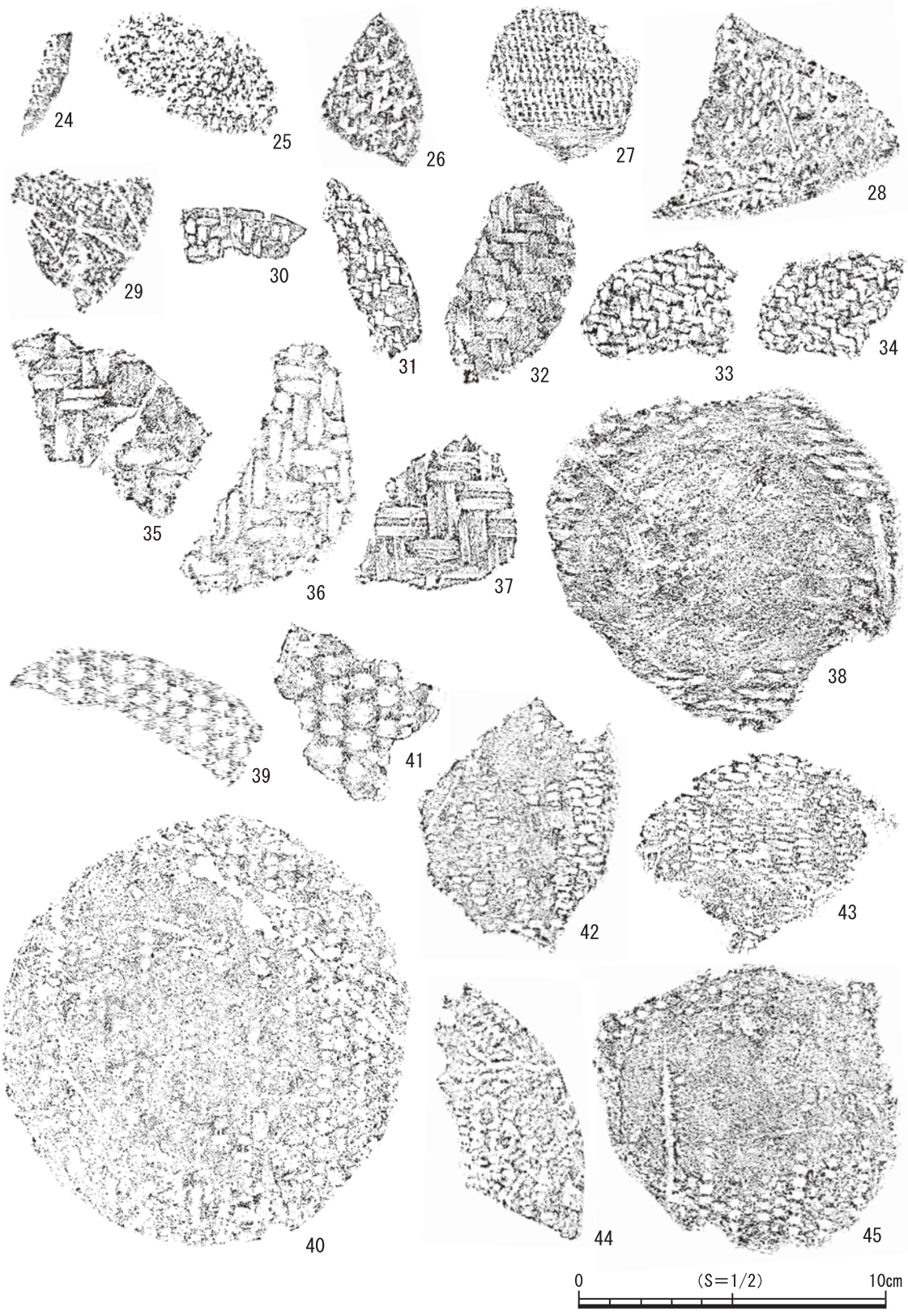


図３　堂平遺跡出土縄文土器底部の「敷物圧痕」拓影２

図 4-56 は、1 本超え 3 本潜り 2 本送りらしき資料（素材 a^1 類）である。ただし、これでは緯条に挟まれていない経条があり、構造的に編物として成り立たない。おそらく圧痕として残されていない部分で、超え・潜り・送りのいずれかを変えているものと思われる。

図 4-57 は、敷物の縁辺部の可能性がある資料である（素材は a^1 類）。拓本下半には 1 本超え 1 本潜り 1 本送りらしきものが 2 段確認できるのに対し、拓本上半を見ると経条のみで明らかに緯条が存在していない。すなわち、2 段の緯条が最後の編み部分で、それより上は条材の余剰部分の可能性があるのである。そう考えると 1 本超え 1 本潜り 1 本送りに似た部分は、敷物の平面を形成する編み方ではなく、縁辺処理の一種を示しているのかも知れない。

図 4-58 は、網代編みともじり編みの複合圧痕と見られる。拓本下半は a^1 類の素材を用いた網代編みの類と見られるが、超え・潜り・送りは不明である。一方、拓本上半は、網代編みの一方の条材をそのまま活かして別材を絡めているらしく、原体左絡み（山本直人氏［山本 1986］や野田真弓氏［野田 2005］の言う「左撚り」）のもじり編み圧痕となっている。

2）もじり編み圧痕

一方の条材に別の条材を絡め編む「もじり編み」による編物の圧痕である。主に縄文時代中期前半、東北地方から北陸地方にかけての日本海側地域によく見られる（特にスダレ状圧痕）［松永 2008a］。中期中葉以降に属する本遺跡でも、わずかながら類例の存在を確認することができた（網代編みとの複合圧痕である図 4-58 については上述したため省略）。

Ｂ -1 類　いわゆるスダレ状圧痕で、図 4-59 が該当する。細い棒状材に糸材を絡めたものを原体とし、経条（糸材）間隔 4 ～ 5mm、緯条（棒状材）間隔 2 ～ 4mm をはかる。これは、渡辺誠氏の論考［渡辺 1976］で言う A グループに相当し、スダレ状圧痕としては一般的なものである。なお、原体糸材の絡み方は、左絡みである。

3）葉脈圧痕

植物の葉を原体とする葉脈圧痕は、網状葉脈圧痕と平行葉脈圧痕の 2 種類に分類される。主に広葉樹の葉を原体とする前者は日本全国で認められるが、葉の大きな笹類を原体とする後者は多雪・寒冷地帯に分布が限られる［松永 2008a］。本遺跡は、当然のことながら多雪・寒冷地帯に位置しており、両者とも類例を確認することができた。

Ｅ -1 類　広葉樹の葉を原体とする網状葉脈圧痕であり、図 3-28･29(A-2･1･1 類との重複)、図 3-45(A-1･1･1 類との重複)、図 4-60 ～ 67 が該当する。原則として、これらの葉は 1 枚のみ確認できる（図 3-28 は複数･多重の可能性あり）。すなわち、土器底部よりも大きな葉を 1 枚敷いて作業していた（逆に言えば、木の葉 1 枚の大きさに収まる径の底部を作っていた）ことがうかがわれる。

Ｅ -2 類　笹類の葉を原体とする平行葉脈圧痕であり、図 4-68 ～ 71 が該当する。これらのうち、図 4-68 ～ 70 の 3 点は一方向の葉が確認できるのみであるが、同 71 は 2 方向の葉が直交している。木の葉(E-1 類）の場合とは異なり、笹の葉は確実に複数枚を重ねて敷くことがあったようである。

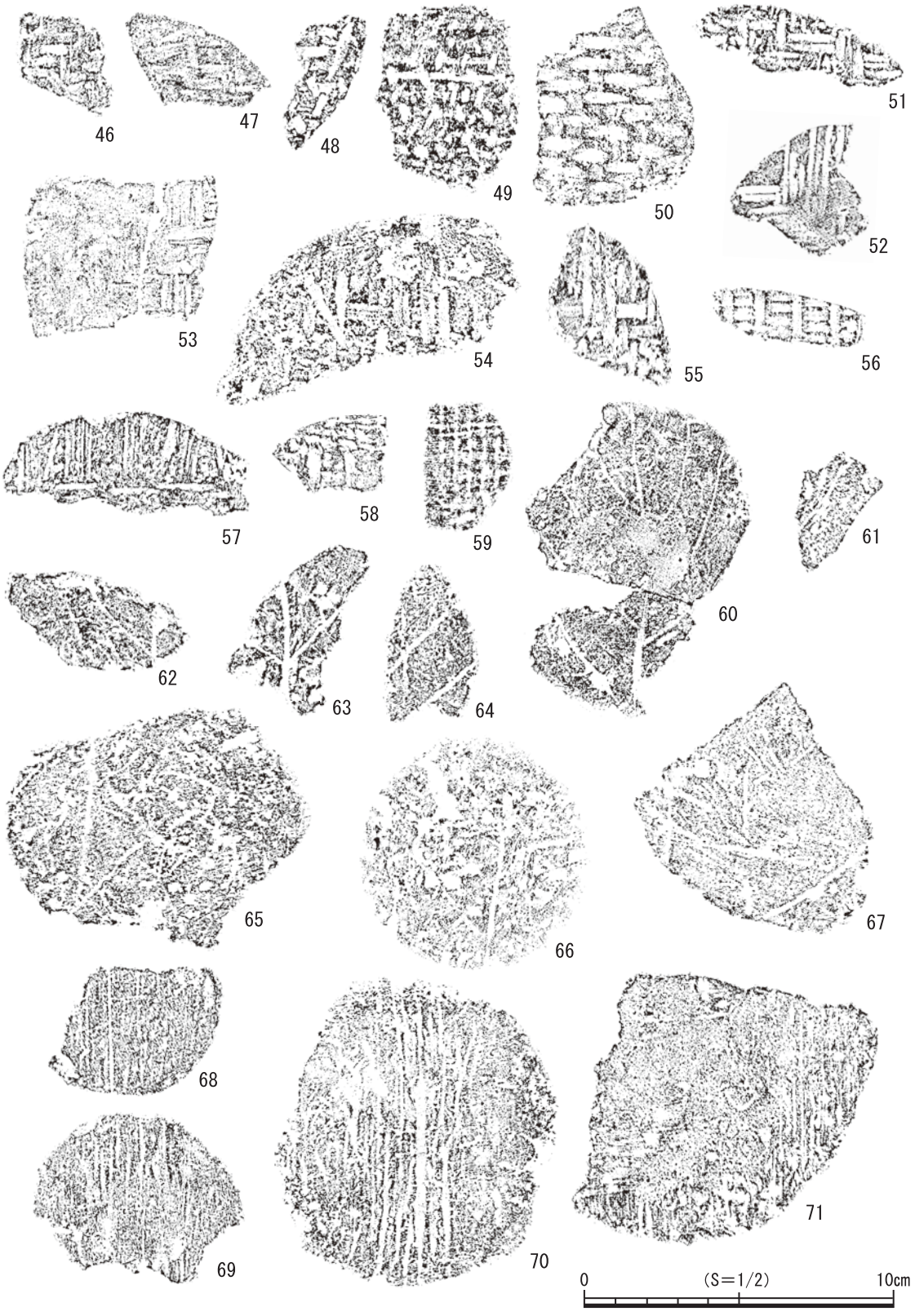


図４　堂平遺跡出土縄文土器底部の「敷物圧痕」拓影３

B　圧痕の統計

図５は、今回分析対象とした堂平遺跡出土縄文土器底部の圧痕比率と圧痕点数を円グラフで示したものである。ただし、網代編みともじり編みの複合圧痕である図 4-58 は網代圧痕（A その他）・もじり編み圧痕（A・B 複合）にそれぞれ 1 点ずつカウントし、網代圧痕と葉脈圧痕の多重痕である図 3-28・29、図 3-45 は圧痕の数を数えて資料 1 点ごとに A-2・1・1 類 1 点ないし A-1・1・1 類 1 点・E-1 類 1 点をカウントしてある（すなわち、A-2・1・1 類 2 点・A-1・1・1 類 1 点・E-1 類 3 点を計上した）。また、E-2 類のうち複数枚の笹葉を敷いた図 4-71 は、複数の敷物による多重痕ではなく、複数枚の葉で 1 枚の敷物として機能しているため、そのまま 1 点としてカウントしてある。従って、分析対象の土器片数は全部で 71 点だが、統計データの総数（分母）は 75 点となっていることを注意されたい。

具体的な数値(百分率は小数点以下第２位を四捨五入)を見ると、A 類が 58 点で 77.3%、B 類が 2 点で 2.7%、E 類が 15 点で 20.0%であった。これらのうち、最も多い A 類を細かく見ると、A-2・1・1 類が 29 点（全点中 38.7%・網代圧痕中 50.0%）、A-2・2・1 類が 5 点（全点中 6.7%・網代圧痕中 8.6%）、A-2・2・1×χ 類が 3 点（全点中 4.0%・網代圧痕中 5.2%）、A-1・1・1 類が 8 点（全点中 10.7%・網代圧痕中 13.8%）、A-3・3・1 類が 1 点（全点中 1.3%・網代圧痕中 1.7%）、A-3・2・1 類が 1 点（全点中 1.3%・網代圧痕中 1.7%）、A- 三方類が 2 点（全点中 2.7%・網代圧痕中 3.4%）、A-2・2・1/2 類が 1 点（全点中 1.3%・網代圧痕中 1.7%）、その他が 8 点（全点中 10.7%・網代圧痕中 13.8%）である。次いで多い E 類を見ると、E-1 類が 11 点（全点中 14.7%・葉脈圧痕中 73.3%）、E-2 類が 4 点（全点中 5.3%・葉脈圧痕中 26.7%）である。残る B 類は、スダレ状圧痕 1 点（全点中 1.3%・もじり編み圧痕中 50.0%）、網代編みとの複合圧痕が 1 点（全点中 1.3%・もじり編み圧痕中 50.0%）とわずかであり、本遺跡の「敷物圧痕」としてはイレギュラーな存在のようである。

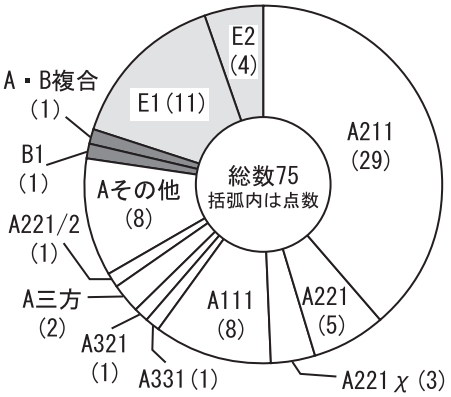


図５　堂平遺跡の「敷物圧痕」比率

4　考察

堂平遺跡における「敷物圧痕」の諸特徴は上述した通りである。ここでは、それをさらに掘り下げ、その背景について若干の考察をおこなうことにしたい。

A　堂平遺跡における土器製作用敷物

それでは、土器製作技術の視点から堂平遺跡の「敷物圧痕」を見てみよう。本遺跡では、大きく分けて A 類の網代圧痕が最も多かった（全点中 77.3%）。これは、全国的な傾向と同様で、縄文土器製作には網代編みの敷物が好まれていたことが分かる。網代編みの敷物は隙間がない上、堅くて丈夫であり、回転具の機能を有した土器製作用の敷物に最も適している。また、条材を単純に交差するだけの編物で製作が比較的平易であることから、土器製作に合わせて即時に敷物を用意することも可能である。そのため、堂平遺跡においても全国的にも、網代編みの敷物が好まれ、網代圧痕の多さにつながったものと推測さ

れる。ただし、網代編みの中では２本超え２本潜り１本送りや１本超え１本潜り１本送りが最も隙間が少なく編みやすい。しかし堂平遺跡では、それらとは異なる２本超え１本潜り１本送りが明らかに主体を占めており（網代圧痕の 50.0%）、単純に敷物としての機能を優先しているわけではなく、それを超えた一種の規範のようなものが存在した可能性がある（後述する東日本的特徴）。なお、網代圧痕の中でも１～２点程度しかない種類のものは、土器製作に合わせて用意された編物ではなく、基本的に別の用途で使われていた編物を転用したものであろう。

次いで多かったのはＥ類の葉脈圧痕であるが（全点中 20.0%）、E-1 類の網状葉脈圧痕と E-2 類の平行葉脈圧痕の両方が認められた。これは、土器製作に際して周囲に生えている木葉・笹葉を取ってきたものと見られ、この場合原則として製作する土器の底部よりも大きな葉を１枚選んで敷物とするようである（笹葉は複数枚を重ねる場合あり）。これらの葉は軟らかく回転具としては不向きな点もあるが、どの敷物よりも簡単に用意できるという利点がある。そのため、網代編みの敷物に次いで植物の葉が土器製作用の敷物に利用されたのであろう。

Ｂ類のもじり編み圧痕については、ごくわずかであり（全点中 2.7%）、本遺跡としては例外的なものと言えよう。新潟県域の中期前半はもじり編み圧痕（特にスダレ状圧痕）が主体となるが［松永 2008a］、中期後半に土器製作用敷物は２本超え１本潜り１本送りの編物を基本とするという規範が生まれ、もじり編みの敷物はほとんど廃れたのかも知れない。ただし、津南町内の道尻手遺跡［中田 2005、松永 2006］では、後期前葉堀之内式期においても 21.3%（網代圧痕・もじり編み圧痕・その他の圧痕を合わせた 169 点中 36 点）を占めており、もじり編みの敷物の利用にはある程度の波があるようである。

Ｂ　堂平遺跡における編物技術

続いて、編物技術の視点から堂平遺跡の「敷物圧痕」を見ることにしよう。本遺跡の編物圧痕資料には、Ａ類の網代圧痕とＢ類のもじり編み圧痕の両方が確認された。すなわち、網代編みの編物ともじり編みの編物がともに製作されていたことが物的証拠によって明らかである。特に、図 4-58 のような網代編みともじり編みの複合圧痕の存在は、当時（図 4-58 は、縄文時代中期中葉に位置づけられるものと見られる）の編物技術が、複数の技法を組み合わせて一つの製品を作るほどの水準に達していたことを示しており注目される。

資料の多い網代圧痕についてもう少し詳しく見ると、実に多くのヴァリエーションがあったことが分かる。比較的単純な２本超え１本潜り１本送り・2 本超え２本潜り１本送り・1 本超え１本潜り１本送り・3 本超え３本潜り１本送り・3 本超え２本潜り１本送りはもとより、2 本超え２本潜り１本送りの応用（経条・緯条ともに複数本１組にする A-2・2・1×χ 類および１本送りと２本送りを繰り返す A-2・2・1/2 類）や三方向の条材を交差させる三方編み（麻ノ葉崩し）、模様編み出しの可能性がある資料などが認められ、実に多様である。その素材も、筆者分類で言うｂ類（経条に円柱状の材、緯条に扁平な太材を用いるもの［松永 2004］）以外の各種（ａ類・ｃ類・ｄ類・ｅ類）が認められ、様々な幅・質感の硬質材・軟質材が巧みに使われていたようである。

「敷物圧痕」から得られる情報はあくまでも土器製作用敷物が残した平面的な情報にすぎないが、おそ

らくこれほどの技術があれば、立体的なカゴ類を含め、様々な編物を製作・使用することができたであろう。本遺跡で得られたものは間接資料だけでありその全容は知るべくもないが、生活の多岐に渡って編物が使用されていたことは想像に難くない。

C　堂平遺跡の「敷物圧痕」に見る地域性

最後に、地域文化の視点から堂平遺跡の「敷物圧痕」を見ることにしたい。本遺跡において地域性を示す圧痕資料としては、A-2・1・1 類および A-1・1・1 c^2 類・d^2 類（うち図 3-40・45）の網代圧痕、B-1 類のスダレ状圧痕、E-2 類の平行葉脈圧痕が挙げられる。

まず、A-2・1・1 類の網代圧痕は、縄文時代中期後半以降、東北地方南部から関東・甲信越地方にかけての東日本において多数を占める「敷物圧痕」である。甲信越地方に位置する本遺跡においても、この種の圧痕が最も多く、まさに東日本的な特徴を示している。堂平遺跡の人々は、土器製作用敷物に関して言えば、基本的に東日本的規範の下にあったようである。

また、わずかながらも見られた B-1 類のスダレ状圧痕は、中期前半の東北地方から北陸地方にかけての日本海側地域に多い資料である。中期後半を主体とする本遺跡のそれは、その名残であると同時に、日本海側地域としての地域性を示しているとも言えよう。

さらに、A-1・1・1 c^2・d^2 類の中に含まれる東北型網代圧痕および E-2 類の平行葉脈圧痕は、多雪・寒冷地帯に分布する「敷物圧痕」である。前者は民俗学的に多雪・寒冷地帯において製作されることが知られるマタタビ製編物の圧痕の可能性が高く、後者は多雪・寒冷地帯に分布する幅の広い笹葉を原体とする圧痕である。現在でも日本列島有数の豪雪地帯として知られる、津南地域らしい資料である。

以上のように、堂平遺跡の「敷物圧痕」からは東日本、日本海側地域、多雪・寒冷地帯といった地域性を読み取ることができる。これらは、津南町域における他の縄文時代遺構・遺物にもしばしば認められる属性である。さらに、三つとも現代の津南町にも通ずるものであり、ある意味先史時代以来変わらぬ地域性として評価できよう。

5　おわりに

以上、堂平遺跡出土縄文土器底部の「敷物圧痕」について考察をおこなったが、いくつかの知見が得られた。縄文土器製作にはそれに最も適した敷物を選択しようとする傾向にありながらもその構成内容は単純ではないこと、当時の編物技術が網代編み・もじり編みを用いて様々な編物を製作できるほどの水準に達していたこと、本遺跡の資料には三つの地域性が内包されていたことが、個別観察と数量分析によって浮かび上がってきた。土器製作用の敷物の圧痕という目立たない間接的資料でも、そこには当時の土器製作技術・編物技術・地域文化が確実に反映されていたのである。ただし今回は、出土地点との関係や、無文の土器底部との比較、同時期における編物の実物資料との比較など、筆者の力不足により検討できなかったことも多い。それらは、今後の研究課題としたい。

本論をまとめるにあたって、津南町教育委員会の佐藤雅一氏と國學院大學伝統文化リサーチセンターの阿部昭典氏には、貴重な資料を実見する機会を与えて頂くとともに、様々なご教示を賜った。また、

拓本作成などの実作業においては、津南町塩沢整理室の皆さんのご協力を頂いた。さらに、名古屋大学の山本直人先生からは、平素より多くのご指導を賜っている。末筆となりましたが、ここに厚く感謝申し上げます。

参考文献

安孫子昭二　1971 「網代底について」『平尾遺跡調査報告Ⅰ』 平尾遺跡調査会　172 ～ 174 頁
植松なおみ　1980 「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『物質文化』№.35　物質文化研究会　20 ～ 35 頁
植松なおみ　1981 「東北型網代圧痕について」『古代文化』第 33 巻　第 2 号　古代学協会　17 ～ 26 頁
可児通宏　2005 『縄文土器の技法』 同成社
坪井正五郎　1899 「日本石器時代の網代形編み物」『東京人類学会雑誌』第 161 号　東京人類学会　440 ～ 444 頁
中田節子　2005 「道尻手遺跡出土土器底部繊維組織圧痕についての一考察」『道尻手遺跡』 津南町教育委員会　347 ～ 374 頁
野田真弓　2005 「青谷上寺地遺跡出土のかご（第 1 節～第 8 節）」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告』1　鳥取県埋蔵文化財センター　93 ～ 138 頁
松永篤知　2004 「東アジア先史土器の「敷物圧痕」分類について」『金沢大学考古学紀要』第 27 号　金沢大学文学部考古学講座　99 ～ 108 頁
松永篤知　2006 「馬高式期の編物技術」『火焔土器の時代―その文化を探る―』津南学叢書第 4 輯　津南町教育委員会・信濃川火焔街道連携協議会　80 ～ 83 頁
松永篤知　2008a 「縄文土器底部の「敷物圧痕」について」『考古学雑誌』第 92 巻第 2 号　日本考古学会　1 ～ 48 頁
松永篤知　2008b 「縄文時代草創期の編物技術」『縄文文化の胎動―予稿集―』津南学叢書第 8 輯　信濃川火焔街道連携協議会・津南町教育委員会　73 ～ 75 頁
山本直人　1986「底部圧痕・編物・縄」『石川県能都町真脇遺跡』 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団　248 ～ 260 頁
渡辺誠　1976「スダレ状圧痕の研究」『物質文化』№.26　物質文化研究会　1 ～ 23 頁
渡辺誠　1996「マタタビ製のカゴ類」『名古屋大学古川総合研究資料館報告』№.12　名古屋大学古川総合研究資料館　83 ～ 92 頁

ふりがな	どうだいらいせき
書名	堂平遺跡
副書名	–国営農地再編整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書–
巻次	
シリーズ名	津南町文化財調査報告
シリーズ番号	第59輯
編著者名	佐藤雅一・阿部昭典・倉石広太・佐藤信之
編集機関	津南町教育委員会
所在地	〒949-8201　新潟県中魚沼郡津南町大字下船渡丁2806番地3　　TEL025-765-3134
発行年月日	西暦2011年3月31日

所収遺跡（しょしゅういせき）	所在地（しょざいち）	コード 市町村遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
堂平遺跡（どうだいらいせき）	新潟県中魚沼郡（にいがたけんなかうおぬまぐん）津南町大字中深見丁（つなんまちおおあざなかふかみてい）157番地外（ばんちがい）	40	36° 59′ 41″	138° 41′ 20″	19960507 ～ 19960906	8,960 ㎡	国営農地再編整備事業伴う遺跡確認試掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堂平遺跡	集落跡	縄文時代 中期・後期	竪穴住居跡 長方形柱穴列 環状列石 埋設土器 フラスコ状土坑 土　坑	縄文土器 土製品 石器 石製品	中期中葉から 後期中葉の 良好資料

津南町文化財調査報告書第 59 輯

堂平遺跡　本文編

–国営農地再編整備事業に伴う
遺跡発掘調査報告書–

2011 年 3 月 25 日　印刷
2011 年 3 月 31 日　発行

編　集
津南町教育委員会

執　筆
佐藤雅一・阿部昭典
倉石広太・佐藤信之

発　行
津南町教育委員会

印 刷 所
有限会社アルケーリサーチ
東京都板橋区中台 1-33-1　☎03-3931-7141